仮面ライダーＺＸ　　～十人の光の戦士達～

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＺＸ　～十人の光の戦士達～

【Ｎコード】
Ｎ４３５８Ｆ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
かつて、疾風の戦士たちがいた。大地を、空を、密林を、海を、そして人々の心に走った疾風が。今、再び、戦いのときは来た！仮面ライダーＺＸ、そしてライダー達のバダンとの戦いを書きました。
こちらにも掲載してもらっています。
ｈｔｔｐ：／／ｆｕｋｕｓｈｉｍａ．ｃｏｏｌ．ｎｅ．ｊｐ／ｕｒａｔａｎｉ／

序章その一

第一部　闇の胎動

闇がその目覚めを告げんとしている。暗き、深き淵から――。
それまで光にその存在を遮られていた邪なる者達が再び甦らんとしていた。
闇はゆっくりと登ってきた。その動きが徐々に速まってゆく。同時にその暗さと邪悪さも増していく。徐々に。徐々に。
入口が見えてきた。闇は笑った。時が来たと感じた。光を消し去り己が闇で世を全て覆う時が来たと。
淵から這い出てきた。辺りを見回す。何も無い。誰もいない。自分のほかには何者も存在しないのだ。
今まで自分を脅かしてきた九つの光も闇が出て来た事をまだ知らない。闇は己が姿形を整えはじめた。
次に闇はかって自らの手足となって働いた者達を死の国より呼び寄せた。もう一度光と戦わせる為に。
次に闇は新たなる手足を創った。更なる力を得んが為に。
闇は勝利を確信した。そして笑った。今度こそ世は覆えると思った。
だが闇は気付かなかった。新しく創った手足の中に光があった事を。
その光は闇が気付かぬうちに離れ何処かへ飛び去った。
そして十番目の光となったのだ。

序章

～死闘へのプレリュード～

かってショッカーという組織があった。世界征服をたくらみ全ての人間をショッカーの下に奴隷にせんと考えていた。その狂気の野望に賛同する者達もいた。かって名を馳せた軍人や高官、貴族、科

学者等である。とりわけショッカーに入った科学者達の能力は高く独自の高度な科学力を有するに至り、それを基にして組織の基幹戦力となる改造人間を造り上げていた。動物や植物と人間を合成させたこれ等の改造人間の能力は凄まじくショッカーは全世界で猛威を振るうようになった。日本においても着々と侵攻計画を進めその中心となる大幹部として城南大学にその名を知られる天才科学者本郷猛に目を付ける。

彼の恩師でもある緑川博士により改造人間となった彼は脳の改造手術を受ける直前に脱出、仮面ライダーとしてショッカーと闘う事になった。

仮面ライダー＝本郷猛の前にショッカーは多くの作戦を妨害され改造人間をはじめとする戦力を消耗させていった。この状況を打開する為にショッカーはライダー打倒の為武道の達人であるプロカメラマン一文字隼人を誘拐した。そして彼を第二の仮面ライダーに改造したのである。

だがここで本郷猛が乱入してきた。彼により救い出された一文字隼人は仮面ライダー二号となり共にショッカーと戦う事となった。入れ替わりに日本、そして世界で活躍するダブルライダーにより大幹部であるゾル大佐、死神博士が倒れショッカーは壊滅状態に陥った。

これに業を煮やした首領は最後の大幹部地獄大使の死を契機にショッカーに見切りをつけアフリカのゲルダム団と合併してゲルショッカーを結成した。この時に旧ショッカーの者達は粛清された。

ショッカーより更に強力な改造人間達にダブルライダーは苦戦した。だが幾多の死闘をくぐり抜けてきた彼等はその力と技で次第にゲルショッカーを消耗させていった。切り札として投入したショッカーライダーも敗れブラック将軍の自らを囮とした最後の作戦も失敗に終わり首領はライダー達の目の前で自爆を宣言して果てた。

だが首領は生きていた。新たな組織としてデストロンの設立を宣言し世界征服とダブルライダーへの宣戦を布告した。

ここでデストロンは過ちを犯した。本郷の後輩でもある城南大学の研究員風見志郎に作戦行動を見られたのである。それが為に家族を殺され自らも瀕死の重傷を負った風見はダブルライダーに改造手術を受け仮面ライダーブイスリーとして復活したのであった。

序章その二

ブイスリーそして一時生死不明となっていたダブルライダーによりデストロンの計画は頓挫してしまった。テコ入れにドクトルG，キバ男爵、ツバサ大僧正と次々に各国や結託部族から大幹部を投入するがことごとくＶ３の前に敗れ去ってしまった。

遂にモンゴルからヨロイ元帥を呼び寄せる。残忍で非道な彼ならば必ずやＶ３を倒すと思われたからであった。

だがその彼の性質がデストロンの運命を決定付ける事となった。デストロン科学グループにおいて俊英ぶりを遺憾なく発揮し、その能力と人望の高さから大幹部候補の筆頭と目されていた結城丈二が自らの地位が脅かされる事を恐れたヨロイ元帥により冤罪を着せられ抹殺されようとしたのだ。すんでのところで部下達に救出された結城は失った右腕に自らが作り上げたアタッチメントを付けライダーマンとしてヨロイ元帥、そしてデストロンに反旗を翻したのだ。

当初デストロンに愛憎半ばする感情を抱き風見と反目していたライダーマンだったがその実情を知るにしたがい真の意味での正義に目覚めブイスリーと共に戦うことになる。二人により追い詰められたヨロイ元帥はプルトンロケットにより東京を破壊しようとするがライダーマンの捨て身の行動により失敗、ブイスリーとの決戦にも敗れ首領に処刑されてしまう。首領もブイスリーに倒されデストロンも壊滅してしまう。これで首領は完全に死んだと思われた。

当時世界は冷戦の中にあり日本は複雑な立場に置かれていた。その日本を倒すべく大国同士が水面下で手を握り合い結成されたと言われる組織があった。その名はＧＯＶＥＲＭＥＮＴ　ＯＦ　ＤＡＲＫＮＥＳＳ、通称ゴッド。この組織も優れた科学力を誇り、その頂点には総司令と呼ばれる存在がいた。総司令の正体は誰も知らなかったが日本人ではないかと噂されていた。

ゴッドは優秀な科学者を集めんとしておりその中には人間工学の

権威神啓太郎博士もいた。

彼等は策略を用いて神博士を取り込もうとするが博士はこれを拒否、息子である水産大学の学生敬介と共に暗殺されてしまう。

ゴッドの怪人と工作員が立ち去った後博士も敬介もまだ息があった。博士は息子の命を救うため彼を深海開発用改造人間＝カイゾーグ、仮面ライダーエックスに改造したのである。こうして五人目の仮面ライダーが誕生した。

父を殺したゴッドへの復讐に燃えるエックスライダー＝神敬介はゴッドの改造人間達を次々と倒していく。これに危機感を覚えた総司令はゴッド第一室長として絶大な権限を持つアポロガイストを派遣した。彼は苛烈かつ非情な性質と百発百中の銃の腕前を持ち改造人間を力で抑えるとともに仮面ライダーエックスを討ち滅ぼすべく次々と作戦を発動していった。

一度はエックスライダーに敗れるが復活し死闘を繰り広げる。だが残された時間が少ない事を知った彼はエックスライダーに最後の総攻撃をかけ自らも戦死する。

次なるゴッドの大幹部は巨人キングダークであった。悪人軍団を率いる彼はＲＳ装置をめぐりエックスライダーと争った。一度はエックスライダーを倒すがブイスリーのマーキュリー回路により甦った彼は更に強化されており、完成させたＲＳ装置も破壊されキングダークの内部に侵入を許してしまう。内部でエックスライダーは総司令の正体を知る。

ゴッド総司令、それは神博士の友人であった科学者呪博士であった。彼は神博士への嫉妬、社会への不満から悪へと走りこのキングダークを動かしながらゴッドの総司令となっていたのである。

ライドルスティックに貫かれた呪博士はキングダークと共に爆発する。博士の死をもってゴッドは崩壊したのである。彼の死後判明した事であるが呪博士の後ろにもう一人首領がいた。その人物はショッカー、ゲルショッカー、デストロンを操り死んだと思われていたあの首領だったのだ。

序章その三

ゴッドが倒れてすぐに首領はアマゾンの奥地にて古代インカの秘術を守護するバゴーに目を付けた。その高い秘術の元であるギギとガガ、二つの腕輪を狙った首領はインカの戦士ゴルゴスを唆し彼に反乱を起こさせた。ガガの腕輪を奪い秘術のいくらかを身に着けた彼は十面鬼ゴルゴスと名乗り新組織ゲドンを結成した。

ゴルゴスはもう一つの腕輪であるギギの腕輪も狙っていた。だがバゴーはアマゾンでの飛行機事故から生き残り彼に育てられた日本人青年、アマゾンこと山本大介に改造手術を施し日本へ向かわせた。ゲドンも彼を追って日本へ向かった。

日本でアマゾンはまさひこという少年と出会う。彼により仮面ライダーアマゾンと名付けられた彼はこの少年の『トモダチ』となる。彼の他にも多くの友を得たアマゾンは元気付けられゲドンに果敢に立ち向かっていく。

アマゾンの野獣の如き強さに劣勢に追い込まれたゲドンは事態を打開せんとするがその悉くが失敗に終わる。やがて裏切りとアマゾンの急襲を受けゴルゴスは敗死しゲドンも滅んだ。

これでガガの腕輪はアマゾンの手に戻るかと思われたが腕輪はガランダー帝国の支配者ゼロ大帝のものとなった。

パルティア王朝の流れをくむこの帝国はゲドンの獣人よりも更に強力な怪人をもってギギの腕輪の奪取、そして世界征服を為すべく行動を開始した。

ゼロ大帝の指揮もありアマゾンとガランダー帝国はほぼ互角の死闘を繰り広げる。だが日本の三分の二を焦土としその跡地にガランダー帝国を建設せんとする計画をめぐりゼロ大帝とアマゾンが対決したいていは敗れガガの腕輪は遂にアマゾンの手に戻った。

その圧倒的な力により帝国の中心部を破壊していくアマゾンの前に謎の人物が現われる。彼こそ帝国の影の支配者にしてゲドンをも

陰で操っていた人物、真のゼロ大帝その人であった。彼もまた首領だった。

大帝はアマゾンの前に倒れた。ガランダー帝国も滅亡しアマゾンライダー＝山本大介はアマゾンへ帰っていった。

首領はまだ生きていた。人の脳に入り己が意のままに操るサタン虫を使いその長を首領とし新たな組織ブラックサタンを創った。奇械人という独自の改造人間をもって世界征服に乗り出した。ライダー達に煮え湯を飲まされ続けていた日本には地底王国の末裔である一ツ目タイタンを大幹部として派遣した。

奇械人を作るうえで失敗し死ぬ者もいた。その中に城南大学アメフト部のホープ城茂の親友もいた。復讐心に燃える彼は自らブラックサタンに志願し改造手術を受けた。そして忠誠を誓う宣誓式の場でブラックサタンに反旗を翻した。その時電波人間タックル＝岬ユリ子と知り合う。そこで彼は自らを仮面ライダーストロンガーと名乗りタックルと共にブラックサタンと戦う事を宣言した。

ストロンガーとタックルによりブラックサタン日本支部は壊滅状態に陥った。一ツ目タイタンが敗れるに及んで首領はゼネラルシャドウという男をタイタンの後の大幹部として雇った。

執拗にストロンガーの命を狙うシャドウであったがここでブラックサタンはタイタンを復活させた。百目タイタンとして甦った彼波再びストロンガーと対峙することとなった。

しかしこれが裏目に出た。タイタンとシャドウの二大幹部は最高幹部の座、そしてストロンガーの首を狙っていがみ合い、互いの作戦を妨害し合うようになった。度々窮地に陥っていたストロンガー達もこれに助けられ遂に宿敵百目タイタンを葬った。

タイタンの市により最高幹部はシャドウとなる筈であった。しかし外様の彼を嫌った首領は軍団生え抜きであるデッドライオンを最高幹部とした。これに怒ったシャドウは組織を裏切り組織の秘密をストロンガーにリーク、ブラックサタンは首領と共に滅びデッドライオンも行方不明となった。だが城茂の顔は晴れなかった。首領の

最後の言葉が気になっていた。もしや新たな組織が。

彼の危惧は的中した。ブラックサタンを裏切ったシャドウが自らの本拠地である『魔の国』から改造魔人達を呼び寄せデルザー軍団を結成したのだ。

かって人間達を恐怖のどん底に叩き込んだ伝説の魔物達の血を引く彼等改造魔人達はその強さにおいて他の組織の大幹部と比肩し得るものであった。またそれだけにそれぞれのプライドも高くまとまりには欠けていた。

そのうえシャドウがストロンガーを倒したものが組織のリーダーになる事を決めた為軍団内のまとまりは更に弱まった。

これは個々の争いを激化させ漁夫の利を得んとするシャドウの思惑もあったがそれが為に軍団内ではストロンガーの首を巡ってそれぞれが血みどろの権力争いを演ずることとなった。これが個々の力ではストロンガーを凌駕していながらも倒すには至らず一人また一人と倒されていく要因となった。

勿論ストロンガーも無事ではなかった。盟友タックルを失い自身のダメージも酷いものとなっていた。ここで元ブラックサタンの科学者により再改造手術を受けた彼は超電子の力を身に着けた。

これにより形勢は逆転した。相も変わらず権力闘争を続けるデルザーの改造魔人達をストロンガーは超電子の力でもって各個撃破していった。気が付くと残るはシャドウ一人となってしまっていた。

序章その四

そこへ遅々として進まぬ作戦に業を煮やしたデルザー最大の実力者マシーン大元帥がエジプトから日本へやって来た。そしてシャドウから指揮権を剥奪すると自身の同志達を呼び寄せ一気に日本を制圧せんとした。

だがそこに立ち上がる男達がいた。世界各国に散っていたライダー達が風雲急を告げる日本に戻って来たのである。

ブイスリー、エックス、アマゾン、ライダーマン・・・・・・。一人、また一人とやって来る。デルザーライダーの決戦の時が近付いていた。

ここで大元帥派の行動を快く思っていないシャドウが彼等の作戦をストロンガーにリークした。その責任を問われシャドウはストロンガーと最後の一騎討ちをする事となった。

シャドウは負けた。だがストロンガーも傷を負い捕らえられてしまった。しかしマシーン大元帥が伝説と一笑に付した一号、二号によりストロンガーは救出される。そして最後の決戦となった。

デルザーは敗れた。マシーン大元帥も滅んだ。だがライダー達はそれが終わりではない事を知っていた。最後に控えるあの影を。

影が出た。岩山を壊しライダー達の前に現われたのは巨大な岩石の巨人であった。巨人は言った。自分の声を知っている筈だ、と。

そう、その声の主、それこそ今までライダー達が戦ってきた全ての組織の首領の声だった。今までの黒幕こそ目の前にいる巨人だったのだ。

その体躯を利用しライダー達に襲い掛かる巨人。だがライダー達もここで倒れるわけにはいかない。力を一つにし巨人の内部へと侵入した。そこで彼等は首領の真の姿を見る。

――それは巨大な脳髄に一つの眼がある不気味な生命体であった。ライダー達は一斉に攻撃を掛けんとする。だが敗北を認めた謎

の生命体ー一大首領は自爆して果てた。ライダー達の長く苦しい戦いの日々はようやく終わったかに見えた。

世に光あらば闇もある。デルザー壊滅後名乗りをあげる新たな組織が現われた。その名はネオショッカー。最早伝説となっているショッカーの名を冠したこの組織の目的は地球の人口を三分の一まで減らし改造人間を頂点とする世界を築く事であった。

その目的に従いネオショッカーは次々と行動を起こしていった。要人暗殺、破壊工作、細菌攻撃ーーー。世界は新たな敵を迎えんとしていた。日本とて例外ではなく辣腕をもってなる大幹部ゼネラルモンスターによりその準備は着々と進められていた。

その一環として高名な科学者志度博士を拉致し利用せんとするが逃亡されてしまう。追っ手を差し向けるがその追っ手達は偶然通り掛かった青年筑波洋と遭遇する。この時彼は瀕死の重傷を負うが彼の心に打たれた博士は彼の改造を申し出る。それは認められた。手術は成功し後は脳改造を残すのみとなったが筑波は博士と共に脱出。空を駆るライダー＝スカイライダーとして生まれ変わった。

スカイライダーとネオショッカーは日本で激闘を繰り広げた。一敗地にまみれたネオショッカーはゼネラルモンスター自ら出撃しスカイライダーと雌雄を決せんとする。だが死闘の末ゼネラルモンスターも倒れた。

彼の後を受けて日本に来たのは魔神提督であった。彼は世界各地から強力な怪人達を次々と呼び寄せ打倒スカイライダーを計る。次第に追い詰められていくスカイライダーだがここで思わぬ援軍がやって来た。

世界各地に散っていた七人のライダーが窮地に陥っていたスカイライダーを助ける為日本に駆けつけて来たのだ。彼等の特訓により強化を果たしたスカイライダーは入れ替わり立ち替わり助っ人として現われるライダー達と共闘しネオショッカーをあと一歩のところまで追い詰める。魔神提督はライダーへ最後の策を仕掛けるが見破られ倒される。そして遂に首領がその謎のベールを剥がす時が来た。

ネオショッカーの首領、それはＢ２６暗黒星雲から飛来して来た巨大な宇宙怪獣にしてそれまでの全ての組織の真の首領だったのだ。ライダー達は果敢に攻撃を仕掛けるがその圧倒的な強さの前に為す術が無い。だが首領の弱点である左足の裏を攻撃し形勢は逆転する。

敗色濃厚となった首領は地球とライダー達を道連れに爆死しようとする。だが八人のライダー達は力を合わせ首領を宇宙へと送り込み葬った。これで悪の首領は完全に死んだのであった。

序章その五

この頃人類の宇宙開発はようやく第一歩を踏み出したばかりであった。宇宙での過酷な環境に対抗する為国際宇宙開発研究所は惑星開発用改造人間を生み出す事を決定した。コードネームはスーパー1．改造手術を受けたのは若き科学者沖一也であった。彼は自ら志願して恩師ヘンリー博士の手術を受けたのであった。惑星開発の為に博士は驚異的な身体能力と五つの特殊技能を持つ腕を授けた。

スーパー1は極秘に開発されたのであるがその秘密を知る者達がいた。その名はドグマ。自ら闇の王国を名乗り帝王テラーマクロを頂点とする歪んだ選民思想に基づく世界支配が目的であった。

スーパー1の力を得んが為ドグマは彼の身柄引き渡しを要求した。それを拒んだ博士をドグマは研究所もろとも抹殺した。しかし沖は博士の手により一人脱出に成功した。そしてドグマの打倒を決意するのだった。

赤心寺で赤心少林拳を身に着けた彼はドグマの改造人間達を倒していく。相次ぐ敗戦に進退極まった最高幹部メガール将軍はスーパー1に一騎討ちを挑む。そしてその時彼の正体が解かった。

彼の元の名は奥沢正人。宇宙開発に携わった科学者であり惑星開発用改造人間第一号となる筈であた人物だ。だが手術の失敗により醜い姿と成り果て人間社会に絶望、自殺寸前のところでテラーマクロに拾われたのだった。

スーパー1と将軍の一騎討ちはスーパー1の勝利に終わった。しかし沖の心には強敵を倒した喜びではなく深い哀しみが残った。

片腕メガール将軍を失ったテラーマクロは遂に自ら出陣を決意する。ドグマの神カイザークロウの血を浴び不死身となった彼は赤心寺を滅ぼしスーパー1に最後の決戦を挑む。だが弱点となっていた右肩に攻撃を受け息絶えた。スーパー1は師と仲間達の仇を取ったのだった。

その彼に次なる敵が立ちはだかったその名はジンドグマ。テラーマクロと袂を分かった悪魔元帥が支配する組織でありその下に魔女参謀、幽霊博士、鬼火司令、妖怪王女といった四人の大幹部が控えていた。

四人のそれぞれ個性の異なる幹部が立ち替わりに部下の改造人間と共に作戦行動を行なうジンドグマ独特の戦法にスーパー1も戸惑いを見せる。しかし彼は粘り強く闘い続けジンドグマの大幹部達を倒していく。

悪魔元帥も自らの剣である稲妻電光剣で貫かれ敗北する。ジンドグマもここに滅亡したのであった。後に判明した事であるが悪魔元帥とテラー、マクロはＢ２６暗黒星雲より飛来した者達でありネオショッカーまでの組織を操っていた首領と何やら関係があったのではないかと言われている。

今まで長きに渡って多くの悪の組織が名乗りをあげ世界を征服せんとその活動を行なってきた。その悪の力は強大であり邪なる知は絶大であった。しかしその度に新たなる仮面ライダーが世に現われ悪を打ち破ってきた。他のライダー達も世界のあらゆる場所で闘い邪悪なる野望を打ち砕いてきた。

いつの世でも、どの様な状況においても仮面ライダー達は現われ世界を、人々を救ってきた。何故彼等が現われるのかは解からない。だがある人がこう言い残している。

「時代が望む時、仮面ライダーは必ず甦るーーーーー」

と。

黒き森の魔狼その一

黒き森の魔狼

ドイツ南西部シュツットガルトの西に広がるシュバルツバルト＝黒の森は森の国と呼ばれるドイツでもとりわけ有名な森である。何処までも続く森はライン川や古城と共にドイツ人の心の原風景となっており多くの詩人や思想家がこの森を愛した。

森には多くの恵みがあった。家となり焚き火となる木々、腹を満たす果実や獲物、人々にとって森はかけがえの無いものであった。

森は同時に怖ろしい場所でもあった。熊や狼が潜み罪を犯した者や異端者が逃げ込み魔物や邪な妖精が木の陰から息を潜め狙っているーーー。森はこの世のものではないまつろわぬ者達が住む場所でもあったのだ。

この黒の森もそうであった。妖精や悪霊の話は多い。元々そういった人智の及ばぬ者達への関心が高い国民性もあり言い伝えや目撃談が現在に至るまで残っている。今も森の深き所にある古城とその近辺に狼男が現われるという噂がある。そしてその辺りで行方を絶つ者が続出しているのである。狼男と行方不明事件に何らかの関連があると見たインターポールはこの地へ捜査班を送る事を決定した。

「話には聞いていたけど凄い森だな。こりゃあ狼男がいても不思議じゃないぜ」

緑のジャケットにクリーム色のズボンを身に着けたアジア系の男が言った。日に焼けた顔をしておりやや細面に太い眉とちぢれ気味の髪がよく似合っている。引き締まった身体をしている。彼の名は滝和也、かって仮面ライダー一号、二号と共に悪の組織ショッカー、ゲルショッカーと戦ってきた伝説の人物である。

日系アメリカ人としてハワイに生まれた彼は大学卒業後ＦＢＩに入り捜査官となる。当時世界中で暗躍していたショッカー担当となった彼はインターポールへ出向しショッカーの動きが最も活発だっ

た日本へ赴任した。そこで二人の仮面ライダー、本郷猛および一文字隼人と出会ったのだ。そして彼等と共にショッカー、ゲルショッカーと戦った。ゲルショッカー壊滅後はＦＢＩに戻り主に対テロリスト担当の捜査官として活動した。昨年インターポールに常識では考えられない超常現象や事件を取り扱う『特別捜査課』が極秘に設立されると再び出向してその課長となった。ショッカー、ゲルショッカー及びテロリスト達を相手に戦っていた彼の実戦能力と指揮能力、そして一本気な性格は部下達からも慕われておりその評価は高かった。

「乱開発が進んでいるって聞いてたけどまだこれだけ見事な森が残っているとはね。他の奴等にも見せたかったよ」

「そうですね。何か童話に出てくるみたいな森ですしね」

部下の一人である黒人の男が同意した。黒のアーミージャケットに白いジーンズを着ている。

「これが仕事じゃなかったらな。まあぼやいても始まりませんが」

同じく部下である青っぽい服を着た白人の男がぼやいた。二人の他にも何人かいる。皆インターポール特別捜査課の者であり滝の部下だ。

「童話か、確かにな。狼が出てくるなんてまるで赤ずきんちゃんみたいだな」

「赤ずきんちゃんか。いいですね」

「だろう？さしずめ俺達は悪い狼をやっつける漁師というところだ」

「確かに鉄砲も持ってますしね」

懐に隠し持っている拳銃をポン、と叩く。

「じゃあ行くぞ。狼男はどうか判らんが熊もいるらしい。二手に分かれ一組は森を、もう一組は俺と一緒に城内を探索だ」

「了解」

滝の指示により捜査官達は二手に分かれ捜査を開始した。それを遠くから見る影があった。

「そうか、滝和也が来たか。どうやらインターポールも馬鹿ではな

いらしい」
地下の奥深く、暗い一室で立ったまま報告を聞く者がいた。
報告をしている者は黒い服に赤いプロテクターとマスクを着けている。彼が片膝を着き報告している姿から前にいる男がかなりの地位にいる者である事が分かる。
「如何致しましょう?このままでは我等のこの地での計画が奴等に気付かれてしまいますが」
「ククク、心配無用だ。滝和也といえどあの古城に隠されたものを見つけ出すことは出来ん。それよりも計画は進んでいような?」
「はっ、全て順調であります」
「ならば良い。決行の日は近い。それまでに間に合わせねばならんからな」
「はい」
「行け。後は適時俺が指示を出す」
「解かりました」
黒服の男はそう言うと姿を消した。後には報告を聞いていた謎の男が残った。
「クククククク、事は全て上手くいっているな。後は決行の日を待つばかりだ」
「そう上手くいくかな」
後ろから声がした。男が振り向くと黒いスーツを着た男が立っていた。
顔から上は影でよく見えない。だが頭部から無数の光を放っている。白手袋をしており葉巻を手にしている。
「貴様か。何の用だ」
「何、そちらの計画の進み具合を知りたくてね。どうやら順調なようだな」
「フン、当然だ。この俺を侮ってもらっては困る」
「流石は誇り高き一族の子孫、と言うべきかな」
「褒めているつもりか?貴様の口からそんな言葉がでるとは妙な事

だ。ところであの男は今どうしている？」
「あの男か？ローマで例の二人の手勢と戦っている。ドイツまでは来れんさ」
「そうか。では問題は無いな」
「フッフッフ、怖いのか？」
黒服の男はからかう様に言った。
「馬鹿な事を。俺があの男に敗れるとでも思っているのか？」
「さてな。万が一という事も有り得るからな」
「貴様」
影の男の言葉に軽く身構えた。攻撃するつもりは無い。威嚇しただけである。
「ほお。ここで我等は争っても他の奴等が得をするだけだ。それは貴様も解かっていよう」
「ふん」
構えを解いた。影の男もそれを見越していた様だ。
流石は軍団きっての軍略家。だからこそこの度の作戦を任されたのだからな」
「言うな。貴様こそアフリカは大丈夫なのだろうな」
「アフリカか。まあどうしても手柄を欲しがっている死に損ないもいるがな」
「死に損ない？ああ、あいつか」
「そうだ。プライドだけは高いがな。適当にあしらっている」
「成程な。だが良いのか？アフリカには貴様の宿敵もいるのだろう」
「宿敵！？あの男か！」
影の男の声の調子が変わった。心なしか男の声にも怒気がこもっている。

黒き森の魔狼その二

「そうだ。かって我等を倒したあの男だ。今までタイにいたらしいが我々の動きを嗅ぎつけてアフリカ入りしたらしい」
「・・・・・そうか。他にアフリカ入りした奴はいないな」
「他は知らぬ。今分かっているのはエルサレムにもう一人いるらしいという事だけだ」
「エルサレムか、確か中東は・・・・・・」
「あの単細胞が取り仕切っている」
「あの単細胞か。ここで死んでくれれば助かるのだがな」
影の男はクックックッ、と含み笑いを漏らした。
「いや、まだあの男は使える。例え知能が低くとも力だけはあるからな」
「そうだったな。連中に対抗するには手頃な駒だった」
「そういう事だ。今は少しでも駒が必要な時、使える物は取っておくに限る」
「うむ。では俺はアフリカに向かう。あの男が来たとなると安心は出来ん。この地での作戦成功を楽しみにしているぞ」
「うむ、待っているがいい」
「それではまたな」
影の男が指で葉巻の火を消すと全身が炎に包まれた。そして巨大な火球となりそのまま消え去った。
「地底王国の魔王か。その力どれ程のものかは知らぬが」
男は火の残りかすが床に落ちるのを見ながら呟いた。
「最後に笑うのはこの俺だ。誇り高き我が一族の名にかけてな」
男はそう言うと高らかに笑った。その笑い声は人のものというより獣の、それも荒れ狂う吹雪の中に木霊する肉食獣のそれであった。
その夜滝率いるインターポール特別捜査課は宿舎としているホテルに泊まった。観光客という名目でドイツ入りしている為表立って

公の施設は使えないからだ。
　滝は部下達が全員寝静まったのを確認してホテルを出た。昼に捜査した時になにやら引っ掛かるものを感じたからであった。
　こういう時は必ず何かある、そしてそれは人目を忍んでいるものだ。ショッカー、ゲルショッカーとの長きに渡った戦いで彼はそれを嫌という程己に叩き込んだ。そしてそれが二つの組織の執拗な攻撃をくぐり抜け、テロリスト達を倒してきた糧となってきたのだ。
　漆黒の空に少しばかりの雲がある。そして中空には月がある。不気味な程大きく血の様に毒々しい赤の色をした満月だ。
「嫌な月だな」
　空を見上げて少し忌々しげに漏らした。月は嫌いではない。だがこの様な毒々しい色の月は嫌いだ。
　月はやはり黄色の月がいい、滝はそう思っている。幼い頃からその色の月を見るのが好きだった。とりわけ日本で見た月は美しかった。何時終わると知れぬ死闘の日々の中ふと空を見上げると月がある。その淡い光を浴びると心まで癒されたように感じた。月は彼にとって欠かせぬ心の慰めの一つであったのだ。
「まあ贅沢言っての仕方無いか。見られるだけでもいい」
　もう言って森の中を進んでいった。人の気配は無い。獣の気配も感じられない。リスや野兎といった小動物達がカサコソ動く音がするだけである。そして遠くから狼の遠吠えが聞こえてくる。
「・・・・・・」
　狼、かと思った。だがその考えをすぐに打ち消した。何故か。何故ならばその遠吠えは古城の方から聞こえてきたからだ。
　滝はその遠吠えから確信した。あの古城には絶対に何かある、と。足の歩みを速めた。
　古城の前に来た。かってはこの辺りの領主の城の一つだったのだろう。苔むしてはいるが威風堂々とした造りである。
　扉を開けた。樫の木で造られた頑丈な扉である。扉を開けたままにして中に入った。

窓から入ってくる月明かりを頼りに中を調べる。城の中は機能性を重視した造りの為思った程広くはない。その中を一部屋ずつ丹念に調べていく。

城主の間に入った。やけに背もたれが高いベッドの他は何も無い。当時のベッドは敵に素早く対処する事が出来ることを重要視し、完全に熟睡せず、また素早く起きられるようにと座って眠る為こうした造りになったという。

ベッドを調べてみた。昼に調べてみたが何も無かった。そして今度も何も無いようだ。滝がやれやれ、と溜息をついたその時後ろから足音がした。

「誰だ！」

後ろを振り向きざまに胸の拳銃を抜く。４４マグナム。像ですら一撃で倒すと言われる銃だ。

「滝、さん・・・・・・！？」

声は女のものだった。しかもその声は聞き覚えのある声だった。

黒き森の魔狼その三

「えっ、ルリ子さん！？」

月明かりを背にしたその女性を滝は知っていた。彼女の名は緑川ルリ子。本郷猛を仮面ライダーに改造した緑川博士の一人娘でありライダーの協力者であった女性だ。

歳は二十代後半といったところか。黒い絹の様な長い髪が整った細い女性的な顔によく似合う。スラリとした身体を黒い上着とズボン、そして同じ色のブーツで包んでいる。

彼女は日本において本郷猛と行動を共にし、彼が欧州に渡るとその後を追い共にショッカーヨーロッパ支部と戦った。本郷が日本に戻ると一時行動を別にしていたがオーストラリアで合流し以後そのパートナーとして活動している。滝や立花藤兵衛等と共にその名を知られた女性であり今も尚本郷と共に活動を続けている。その事は滝の耳にも入っていた。何時か会いたいと思っていたが機会を得られずそのままとなっていたのだ。

「何故ここに？」

「気になる事があって。この城に狼男が出るとか」

「その通りだ。流石に耳が早いね」

「ええ。本郷さんが何か変だって言って。それでここへ来たの」

「本郷？あいつもここへ来てるのかい？」

「いえ・・・・・・」

ルリ子は頭を申し訳なさそうに頭を振った。

「ローマで黒服に赤のマスクとプロテクターを付けた一団に襲われて・・・。私だけ先に来たの」

「黒服に赤のマスク？デルザーの残党か何かかい！？」

「いえ、それにしては動きが素早かったわ。まるで誰かの指揮で動いてるみたいに」

「誰か、ねえ」

滝は察した。このシュバルツバルトとローマでの動きは連動していると。そして何かが動き始めようとしているのではないかと思った。

（何だ？ジンドグマも壊滅した。もう一連の組織は全て滅んだ筈だ）

ゲルショッカー壊滅後その任から離れたとはいえその後の組織の活動とライダー達との戦いを滝は全て知っていた。だからこそ疑念が沸き起こったのである。

（大首領も死んでいる。もう世界をその手に収めようという奴はいない筈だ。それなのに何故・・・・・・）

ふと滝はデストロンを思い出した。あの時首領は生きていたのではなかったか。

（もしや・・・・・・）

「滝さん、どうしたの？何考え込んでいるの？」

ルリ子の言葉に我に返った。そしてふと思い出したかのように尋ねた。

「それで本郷はどうなったの？まああいつの事だから大丈夫だろうけど」

「後で来るって言ってたわ。もう暫くしたら来ると思うけど」

「そうか。じゃあ今はこの城を調べるとしよう」

「ええ」

こうして再会した二人はすぐに古城の中を共に探索する事になった。

結局城内には何も無かった。庭に出て井戸等をもう一度調べてみることになった。

井戸の中も何も無かった。後は庭の中央に置かれている枯れた噴水だけだった。

「もうとっくに壊れちまってるな。それにしてもあの時代によくこんな物造れたな」

素材はよく判らないが高価な石材を使っている様だ。一番上の水の噴出口は狼のレリーフとなっている。

「ここでも狼か。何か妙に縁があるな」
苦笑してレリーフの口に手を入れてみた。ふざけたつもりだったが妙な感触を得た。何か掴んだ様だ。
「？」
引っ張ってみた。すると噴水の一部が急に開きだした。
「これは・・・・・・」
中へと続く階段がある。どうやら下に何かしらある様だ。
「行ってみよう」
二人は頷き合い中へ入っていった。まず滝が入りルリ子が続く。暗い階段を降りると一本の長い廊下があった。左右に扉が立ち並んでいる。
慎重に一つずつ扉を開けていく。どの部屋にも複雑な機械や資料が置かれている。
何やら薬品の調合器やその製造法を書き表わしている様だ。何かしらのＢＣ兵器を造っている様だがそれが何かまでは滝もルリ子も解からない。
ある部屋に入った。今までの部屋とは違い一際大きな部屋である。部屋の中央に数個のカプセルが並べて置かれている。
「これは・・・・・・」
カプセルは透明であった。そしてその中には人がそれぞれ一人ずつ横たえられていた。
「どうやら行方不明になっていた人達だな。まだ生きている様だ」
「滝さん、ここにスイッチがあるわ。ドイツ語で『開』って書いてあるわ」
「押してみて」
「はい」
ルリ子がスイッチを押すと全てのカプセルが開かれた。そして中の人は目を開き起き上がった。
「大丈夫ですか！？」
二人が身分を明かし優しく声を掛けると最初は驚き戸惑っていた

人々は喜びの表情で二人に寄った。そして皆助かった、有り難う、と口々に言った。

「一体どうしてこんな所に？」

滝の問いに救出された人のうちの一人が怯えた顔で答えた。

黒き森の魔狼その四

「夕方にこの辺りを歩いていたら目の前に狼男が現われたんです。そして黒服に赤いマスクとプロテクターを付けた連中に取り囲まれて・・・・・・。気が付いたら貴方達に救い出されたんです」

皆異口同音にそうだと言った。黒服と赤いマスクの一団の名がまた出てきた。滝とルリ子は顔を見合わせた。やはりこのシュバルツバルトの狼男と本郷がローマで襲われた事件は連動していたのだ。

「とにかくここをすぐに出ましょう。人の救出を優先させるべきだわ」

ルリ子の言葉に従い救出した人達を連れ二人は地下の秘密基地を後にした。

階段を上り噴水を出た。辺りを見回す。誰もいない。

「さあ行こう」

その時だった。滝達の周りを謎の一団が取り囲んだ。その手には短い槍がある。

「ムゥッ！？」

それは黒い服に赤いマスクの者達、そうルリ子をローマで襲撃し、人々をさらったあの者達だ。

「流石は歴戦の戦士達だ。褒めてやろう」

取り囲まれた滝達の前にゆっくりと歩いて来る者がいる。月明かりに白の軍服とズボンが映し出される。手にはスティックを持っている。どうやら相当の地位にある者らしい。頭部を何やら金属のユニットで覆いその頭部は人のものではなかった。

黒い狼のものであった。滝は目の前に来たその男の名を知っていた。

「デルザーの改造魔人オオカミ長官、狼男の末裔か」

かって中欧の夜を支配した魔性の者がいた。その名は狼男。漆黒の身体と狼の顔と牙を持つ魔人である。

欧州全土にその伝説は残っている。満月の夜に月の光を浴び人か

ら変化し生ある者を貪り食う夜の覇者。その変化する理由は呪いとも魔術とも血とも言われていた。

だが真の狼男は違った。彼は本来の姿が狼男なのであり人の姿が仮のものであったのだ。そういう意味で彼は真の魔物だった。呪いや魔術によるものではなく彼は本質的に人ではなかったのだ。

彼は魔界から来た。人の血や肉を求め来たのだ。そして無数の魔物達を従え夜の世界を支配した。

夜狼の遠吠えを聞くだけで人々は震え上がった。村を、町を襲い人々を貪り食った。彼の行く所食い千切られた屍と死の荒野が残された。

その彼を討たんとする騎士もいた。だが皆逆に食い殺される始末だった。彼の居城は食い殺された騎士達の髑髏で飾られていた。

その彼も滅ぶ時が来た。白銀の鎧を着た一人の騎士が彼の城にやって来たのだ。

騎士と狼男の死闘は三日三晩に渡って繰り広げられた。そして騎士の剣が彼の胸を貫いた。こうして夜の世界を支配した魔王は滅んだのである。

彼はその狼男の子孫である。夜間戦に長け奸智の持ち主である。

「そうだ。流石に俺の事は知っているな。伊達にショッカーやゲルショッカーと戦ってきたわけではないようだな」

「だが貴様は仮面ライダーストロンガーとの闘いに敗れ死んだはずだ。何故今ここにいるのだ?」

「ククク、それは貴様も解かっている筈だ」

「何!?」

「我等はこの世に悪の意志がある限り甦るのだ。幾度でもな」

「クッ・・・・・」

滝は歯軋りした。だが気負される事無くオオカミ長官に問うた。

「何故貴様等はこの人達をさらった?そして下の基地で何をしようとしていた?」

「貴様、狂犬病は知っているな」

滝を嘲笑する様に言った。
「狂犬病は人や獣を狂い死にさせる伝染病だ。それを数十倍に強めた菌を今造っているのだ」
「何ィ！？」
「それを人に植えつける。その者が世に戻ればどうなる？狂犬病で欧州全土を死の荒野に変えてやるのだ」
オオカミ長官は言葉を続ける。
「貴様達がここへ来るのは計算通りだ。貴様等も捕らえ洗脳し狂犬病のキャリアーとしてやろう」
「糞っ！」
滝はオオカミ長官に挑みかかる。だが右ストレートを掴み取られ背負い投げで叩き付けられた。
「無駄だ。貴様ではこの俺は倒せん」
黒服と赤マスクの者達、戦闘員に取り押さえられる。ルリ子も救出された人達も捕らえられていた。
「これで滝和也と緑川ルリ子は終わりだ。狂犬病により醜く狂い死にしていくのだ。さあ連れて行け」
「待て！」
その時だった。横から声がした。力強く低い男の声だった。
「な、貴様は・・・・・・」
太い眉に彫が深くそれでいて底知れぬ知性を感じさせる顔立ちに異様に多く硬い黒髪を持つ東洋人の青年がバイクに跨っていた。黒がかった紺のスーツに空色のカッター、黒と黄のネクタイを着けている。
「済まない滝、ルリ子さん。遅れてしまった」
この若者こそ本郷猛、城南大学で天才科学者、またオートレーサーとして名を馳せた人物である。その能力をショッカーに狙われ改造人間にされたが脱出。そして盟友一文字隼人と共にショッカー、ゲルショッカーと戦いこれを壊滅させる。それからは世界各地で悪の組織と戦い続けた伝説の戦士である。またの名を仮面ライダー一

号という。

黒き森の魔狼その五

「貴様、ローマで足止めを受けていたのではなかったのか」
「貴様等がいくら奸計を用いようともライダーは必ず貴様等の野望を打ち砕く！」
「おのれ、その減らず口を二度と言えぬようにしてやる。かかれ！」
オオカミ長官がスティックを振るうと戦闘員達が襲い掛かってきた。本郷はバイクから跳び降りると戦闘員達と向かい合った。
「ギィッ」
奇声をあげ戦闘員達が来る。一人目が拳を出すと本郷はそれを横から取り投げ飛ばす。そして二人目の腹に蹴りを入れ三人目をフックで倒す。その圧倒的な強さを目の当たりにし他の戦闘員達が怯んだのを見て滝とルリ子が今まで掴まれていた腕を思いきり振り動かした。そして自由になると彼等を倒し捕われていた人達を救出した。
「本郷、捕まっていた人達は全て解放したぞ」
「よし。滝、ルリ子さん、皆を安全な場所へ」
「解かった」
「了解」
二人は解放した人達を連れて後退してゆく。後には本郷とオオカミ長官が残された。
「おのれ本郷猛、よくも捕らえた人間共を」
「貴様等の計画は先程聞かせてもらった。その狂犬病のビールス、必ず叩き潰してやる。オオカミ長官、覚悟しろ」
「ククク、俺を誰だと思っている」
指差す本郷に対しオオカミ長官は不敵に笑った。
「俺はデルザーきっての知略の持ち主と言われた男、こういう時の備えは常に用意している」
「何っ！？」
「出でよ我が眷属、狼軍団よ！」

そう言うと右腕を大きく掲げた。すると手にしたスティックが白く輝き本郷の回りを取り囲む様に五つの火柱が立った。
「むぅっ！？」
その五つの火柱は全て怪人であった。ゲルショッカーの電気怪人クラゲウルフ、デストロンの吹雪怪人ユキオオカミ、ブラックサタンのガス怪人奇械人オオカミン、ネオショッカーの音波怪人オオカミジン、ドグマの刺客怪人ロンリーウルフの五体の怪人である。
「馬鹿な、復活してきたというのか」
「ハハハ、その通りよ。貴様を倒す為に地獄から甦ったのだ。そして見よ、本郷」
スティックで月を指し示す。
「我等狼一族は満月にこそその力を発揮する。如何に貴様とて適うまい」
「クッ・・・・・・」
「やれぃっ！」
オオカミ長官の号令一下五体の狼怪人達が襲って来る。本郷も応戦するが怪人が相手では分が悪い。しかも五体である。たちまち劣勢となってしまった。
「まずい、このままでは・・・・・・」
「さあ、止めだ！」
ロンリーウルフが右手に持つ剣を横に一閃させる。本郷はそれを後ろに跳びかわす。空中で後ろに大きく宙返りした。
怪人達と離れた場所に着地した。そして右手で手刀を作り左斜め上に大きく掲げた。

ライダー
ゆっくりと半月を描き旋回させる。そして右斜め上に達すると動きを止め脇にスッと引き拳にした。それと共に本郷の腰に中央に風車のあるベルトが出現した。スーツも黒いバトルボディとなり胸が緑になった。手首足首が銀の手袋とブーツに包まれる。

変っ身っ！！

身体を右に捻り左手の手刀を素早く右斜め上へと突き出す。風車が激しく回転する。それと共に本郷の顔の右半分がバッタの様なライトグリーンの紅く大きな眼を持つ仮面に覆われた。そしてそれは左半分も覆った。

風車から強い光が発される。光が消え去ると本郷猛はそこにはいなかった。仮面ライダーがそこにいた。

ライトグリーンに紅の眼をした仮面。深紅のマフラー。黒のバトルボディに緑の胸、そして銀のグローブとブーツ。仮面ライダー一号、ここに登場した。

「ぬうう、ライダーに変身したか」

「行くぞ改造人間っ、トゥッ！」

ライダーはそう言うやいなや大きく跳躍した。そして怪人達の中に降り立った。

「クゥゥーーラゲェーーーーッ」

クラゲウルフが右手の職種と爪の生えた左手を合わせ電流を放つ。ライダーはそれを左にさけ怪人の懐へ一気に入った。

黒き森の魔狼その六

左手でクラゲウルフの右肩を右手で左太腿を掴むと大きくジャンプしあ。そして頭上に怪人の身体を持ってくると駒の様に大きく回転させた。

「ライダァーーーきりもみシューートォーーーーッ！」

地面へ向けて思いきり投げ付けた。激しく回転しながら地面に叩き付けられたクラゲウルフは爆発四散した。

着地地点にはロンリーウルフがいた。空中で前転すると両足でロンリーウルフの首を絞めた。

「ガググ・・・・・」

そのまま前へ倒れた。両手で跳ね空中で回転する。

「ライダァーーーヘッドクラッシャアーーーーッ！」

ロンリーウルフの脳天を地面に叩き付けた。素早く飛び退く。ライダーの背後で怪人は爆発した。

「ウォーーーーッ」

奇械人オオカミンが吼える。そして左手をライダーへ向けて構えるとロケット弾を撃ち出した。

「ムン！」

ライダーはそれを顔の前でクロスさせガードした。ロケット弾は爆発し闇の中に光と噴煙が巻き起こる。オオカミンは勝利を確信した。だがライダーは無事であった。

「トォッ！」

ガードを解き怪人へ突進する。そして頭から体当たりをかけた。

「ヘッドクラッシャアアーーーッ！」

後ろへ吹き飛ぶ怪人。ライダーはそれに対し体当たりをかけたままの姿勢で突進を続ける。そして蹴り上げ自身もジャンプした。

その跳躍は驚異的だった。信じられぬ速さでオオカミンを飛び越すとそのまま怪人の背へ落下していく。

「ライダァーーーニーブロォーーーーック！」
膝蹴りを怪人の背に浴びせた。奇械人オオカミンは空中で大爆発を起こした。
「ムンッ！」
着地しファイティングポーズを取る。右手げ手刀を作り左斜め上に上げ身体を左へ捻る。左手は拳を作り脇に入れるポーズだ。
オオカミ長官はそう言って階段を降り基地へと後退していく。ユキオオカミトオオカミジンもそれに続く。
「待て！」
ライダーも追って階段を降りる。そして彼も基地の中へ入っていった。
ライダーは薄暗い基地の中を進む。部屋を開け機械やコンピューターを次々と破壊していく。
「ギィッツ」
廊下を進んでいくと前から戦闘員達が現われた。一蹴し更に中を進む。曲がり角に来た。前からオオカミジンが出てきた。
「ハァーーーォッ」
吼えるや否や頭部を飛ばしてきた。ライダーはそれを咄嗟に屈んでかわした。
だが頭部は反転して再び襲い掛かって来る。それを後ろ蹴りで打つ。起き上がり正拳を突き出す。
「ライダァーーーパァーーーーンチッ！」
頭部は爆発した。主を失った胴も倒れ動かなくなった。ライダーは再び足を進めた。
奥に着いた。そこは暗く何も見えなかった。
「ならば」
ライダーの眼が光った。部屋を見回す。
「これは・・・・・・」
部屋の中は何かしらの機器類で満たされていた。フラスコや試験管等実験用器具もある。

ここで何が行なわれていたか、ライダーはすぐに理解した。
「そうか、ここで狂犬病のビールスの強化、製造を行なっていたのだな」
「その通りだ、ライダーよ」
急に部屋が明るくなった。階段がありその上に二階があった。そこに声の主がいた。
「オオカミ長官！」
「ここまで来るとはな。見事だと誉めておこう。だがそれもここまでだ。我等が計画、邪魔はさせん」
「黙れっ！貴様等の邪悪な企み、この仮面ライダーが必ず阻止してやる！」
『それは不可能だ。何故なら貴様はここで死ぬからだ』
「その声はっ！？」
ライダーはその声に聞き覚えがあった。忘れる筈がない。かっての宿敵の声だった。
部屋の横にあるシャッターが左右に開いた。その奥から一人の男が二体の怪人を連れて現われた。
指揮杖を持ち金モールと数個の勲章が付いた十九世紀欧州のそれを彷彿とさせる黒と赤の軍服とヘルメットと着けた陰気な顔立ちの男である。かってゲルショッカーの大幹部として仮面ライダーを苦しめた男、ブラック将軍である。
ロシアの軍人の家に生まれた。士官学校を卒業後騎兵隊に入り武勲を重ねた。そひて何時しか猛将として知られるようになった。日露戦争においても第一次世界大戦においても活躍した。だがロシア革命が起こってしまった。彼が忠誠を尽くすロマノフ王朝は崩壊し内戦で白軍が敗れると彼はフランスに亡命した。そしてそこから当時フランスの植民地であったアルジェリアに渡った。
その地で何をするわけでもなかった。帝政ロシアはもうなく彼はそこで無為の日々を過ごしていた。その彼を誘う者がいた。首領であった。アフリカで暗躍する秘密結社ゲルダムに彼を誘ったのであ

る。

彼はそれに従った。他にする事も無くまた戦えるのならば彼に異存は無かった。その組織の最高幹部となった。そしてショッカーと合併しゲルショッカーが結成されると彼は日本支部長となり辣腕を振るった。冷酷非常な戦略家であり仮面ライダー一号、二号と死闘を繰り広げた。だが最後はダブルライダーの前に敗れ組織を讃え散っていった。その彼が今再びライダーの前に姿を現わしたのである。

黒き森の魔狼その七

「ブラック将軍、復活していたのか」
「悪ある限り我等も不滅だ。永遠にな」
そう言って口の端を歪めてみせた。
「ライダー、貴様にはここで死んでもらう。作戦成功の為にな」
将軍の後ろに控えていた二体の怪人が出てきた。ゴッド悪人軍団の吸血怪人ヒルドラキュラとジンドグマのスプレー怪人スプレーダーである。ユキオオカミも階下へ跳び下りてきた。
「ヒルドラキュラはユキオオカミと共にライダーを倒せ、スプレーダーはウィルスを全て集めよ」
オオカミ長官の指揮の下三体の怪人は動く。ライダーはスプレーダーを押さえようとするが他の二体の怪人に阻まれ思うように動けない。
「まずい、このままでは」
ユキオオカミとヒルドラキュラの連携攻撃は巧みであった。一方が攻撃し一方が阻む。その間にもスプレーダーはウィルスを集めている。
「オオカミ長官、ウィルスは全て集め終えたぞ」
ブラック将軍が言った。
「よしならば計画は無事続けられるな」
オオカミ長官は満足そうに頷いた。
「この基地は廃棄、撤収するぞ」
「待て！」
ライダーはシャッターの中へ入ろうとする長官と将軍を追おうとする。だがその前にユキオオカミとヒルドラキュラが立ちはだかる。
「くっ・・・・・・」
シャッターは完全に閉じた。その奥から二人の叶笑が聞こえてくるようだ。歯噛みするライダーに息をつかせず二体の怪人が襲い掛

ってくる。
「スノォーーーーッ」
ユキオオカミが拳を繰り出す。ライダーはそれを受け止め逆にライダーチョップを連続で浴びせる。そして地に投げ落としライダーパンチをみぞおちへ叩き込む。
ヒルドラキュラに対しては腹に連続してキックを入れた。そしてその延髄にソバットを直撃させた。
「アオーーーー」
怪人はゆっくりと前へ倒れていった。そしてそのまま動かなくなった。
「時間が無い。急ぐか」
出口へ踵を返したその時だった。何かがライダーの右足を掴んだ。
「くぅっ！」
それはユキオオカミだった。虫の息ながらも最後の力をもってライダーを離さない。
「くっ、しまった・・・・・」
ライダーが苦悶の声を出したその時だった。古城は光に包まれた。夜の沈黙を爆発が切り裂いた。
「ライダーッ！？」
それは森の中を解放した人達を連れて進む滝とルリ子からも見られた。ライダーの身を案じ表情が暗転する二人。
「フフフフフ、これで仮面ライダーは死んだ」
オオカミ長官は遠く離れた古城を見下ろす丘の上で笑っていた。
「それはどうかな。あの男の悪運の強さは尋常ではない。これしきの事で死んだとは思わぬ事だ」
ブラック将軍が口を挟む。その後ろにはスプレーダーが控えている。
「フン、あの爆発に巻き込まれ助かる奴はおらん。今頃奴は跡形も無く吹き飛んでいるわ」
「だといいがな。まあいい」

ブラック将軍はオオカミ長官達に背を向けた。
「私はこれで帰らせてもらう。やらねばならぬ事もあるしな」
「人間共の血の採集か。それにより我等の手足となる怪人達がまた地獄から甦ってくるのだな」
「そうだ。また怪人をそちらに送り込む。それまで待っているがいい」
「ククク、楽しみにしているぞ」
ブラック将軍の身体が透けていく。そしてそのまま夜の闇の中へ消えていった。
「さて、後はウィルスの最後の強化をするだけだ。そしていよいよ作戦を決行だ」
オオカミ長官が笑ったその瞬間だった。夜空に空を切り裂く風の音がした。
「ガゴォォォーーーーン！」
何かがスプレーダーを直撃した。スプレーダーは大きく陥没し丘を転げ落ちていった。そして一度起き上がるが前のめりに倒れ爆死した。
「な・・・・・・」
一瞬何が起こったのか解からなかった。だが爆音がそれを教えていた。
「ライダー!?まさか生きていたというのか!?」
スプレーダーに体当たりをかけたのはライダーの乗る新サイクロンだった。空を飛翔する事も出来るこのマシンによる特攻の威力は絶大であり今の様に怪人を葬り去る事も出来る。

黒き森の魔狼その八

「これでウィルスは全て滅んだ。後はオオカミ長官、貴様だけだ」
新サイクロンから降りオオカミ長官を指差す。最早丘の上にいるのは二人だけとなっていた。
赤く禍々しく大地を照らす満月を背にオオカミ長官は立っていた。ライダーを前にしながらその顔は自信に満ちている。
「ククク、ククククク」
「何がおかしい」
「俺はかって中欧を殺戮と恐怖で支配した狼男の子孫、その力は知っていよう」
「それがどうした」
「それだけではない。あれを見よ」
月をスティックで指し示した。
「満月に我等狼一族の力は最も強まる。かって一夜にして国を滅ぼした事もある程までにな」
「ムゥッ」
その力の凄まじさはライダーも感じ取っていた。それは彼が今まで戦ってきた数多の強敵達と比しても遜色無い程であった。
「行くぞ、歯形爆弾！」
口に手を当てる。すると巨大な牙状の歯が現われた。
その牙をライダーへ次々と投げ付ける。近くまでくると爆発した。ライダーはそれを横に跳び上に跳びかわす。
オオカミ長官が間合いを詰めてきた。拳をライダーへ叩き込んでくる。
ライダーはそれを払った。そしてみぞおちにブローを入れようとする。
長官はそれをもう一方の手で防いだ。カウンターでその手に持つスティックで突きを入れる。

突きがライダーの胸を直撃した。ライダーは思わずしゃがみ込んだ。
その後頭部へ肘を入れる。これはかなりのダメージとなった。
ライダーは倒れ込んだ。勝機を見たオオカミ長官は後ろに跳び間合いを開けた。
「喰らえっ、満月プラズマ光線！」
頭部のユニットに集められたエネルギーが光線となりライダーへ向けて放たれる。ライダーはそれを間一髪でかわす。
それまでライダーがいた場所を光線が直撃する。地が四散し巨大な穴が作られた。地面は飴の様に溶けてしまっている。
「おのれ、かわしたか」
「何という威力だ。直撃を受けていれば命は無かった」
シュウシュウと音を立てる地面を見てライダーは呟いた。
「ならば再び攻撃を掛けるまでだ。受けてみよ！」
再び満月プラズマ光線を放つ。ライダーはそれを跳躍でかわした。
（まずいな。このままではいずれこちらが追い詰められてしまう）
ライダーは空を跳びつつ考えていた。
（満月のある限り奴は絶大な力を発揮する。あの光線はその最たるものだ）
月を見る。何時になく大きい。
（あの月さえ封じれば奴の力は弱まる。そうすればこちらにも勝機はある）
だが空には雲一つ無い。丘の上では月の光を阻むものなど何一つとして無い。
（どうすればいい。どうすれば一瞬でも月の光を遮られる・・・・・・）
その時ライダーの頭にある考えが浮かんだ。しかしそれは一か八かの大きな賭けであった。
（だがやるしかない。奴に勝つ方法はそれしか無い！）
着地と同時に跳んだ。それまでより一段高いジャンプだった。

「馬鹿め、何度跳んでも同じ事だ。死ね！」
空中で一回転するライダーへ向けて光線を放とうとする。
「ムッ！？」
だが光線は出なかった。戸惑うオオカミ長官へライダーが急降下をかける。
「ライダァーーーッキィーーーーック！」
多くの怪人達を葬った伝家の宝刀が胸を直撃した。オオカミ長官は吹き飛び丘を転げ落ちていったが致命傷とはならなかった。起き上がってきた。
「何故だ、何故満月プラズマ光線が出なかった」
「それはこれのせいだ」
ライダーの右手から何かが駆けて来る。それはライダーの前まで来るとやや左に曲がって止まった。

黒き森の魔狼その九

「・・・貴様のマシンか」
白と赤の流線型のマシン、仮面ライダー一号の愛車新サイクロン号である。彼の良き理解者立花藤兵衛がサイクロンを基に設計、開発したマシンである。
「そうだ。貴様が満月プラズマ光線を放つ一瞬に新サイクロンを飛ばし満月の光を塞いだのだ。新サイクロンが遠隔操作でも動かす事が出来るのを忘れていたな」
「ぬ、抜かったわ・・・・・」
右手で胸を押さえ呻く。かろうじて立ってはいるがもう反撃する力も無い。敗北は決定的だった。
「行くぞ、止めだ！」
跳ぼうとしたライダーの左手を何かが絡め取った。それは赤い鞭だった。
「オオカミ長官を死なせるわけにはいかぬ。あ奴はこれからも働いてもらわねばならんからな」
「き、貴様は・・・・・」
ライダーの左には怪異な風貌の男がいた。
虫の様な二本の角を生やした金と銀の頭部全体を覆う巨大な兜を被りオレンジと銀の大蛇を思わせるバトルボディである。その上から緑のマントを羽織っている。特に異様なのは左手で鉄か何かしらの金属で出来ている様だ。親指以外の四本の指は一つになっており親指の先も尖っている。この人とは思えない外見の男こそショッカー大幹部の一人として悪名を馳せた地獄大使である。
地獄大使、かっては東南アジアで恐れられた勇将だったという。人々は彼を『力の魔神』と呼んだ。その勇猛にして苛烈なる指揮は周辺諸国や敵対勢力の恐怖の的だった。
だが突如として消息を絶ちショッカーの大幹部に就任した。東南

アジアにおいて暴虐の限りを尽くしその功績を認められ日本支部長となった。常に前線で指揮を執る事を好む実戦派として知られ、大虐殺やライダー自身を狙う作戦を多用しライダー一号、二号と戦った。とかく喜怒哀楽の激しい事でも知られている。

「地獄大使、貴様も甦ってきたというのか」

「そうだ。わしやブラック将軍だけではない、他の者達も貴様等ライダーを倒し世界を悪に染め上げる為に地獄から舞い戻ってきておるわ」

地獄大使はニヤリ、と笑った。

「何っ、すると・・・・・・」

「フフフ、それは言えんな。いずれ解かる事だがな、貴様の死と共に」

「クッ・・・・・・」

「オオカミ長官、今のうちだ。早く撤退するがいい」

「う、うむ。恩に着るぞ」

オオカミ長官はそう言うと消えた。どうやらテレポーテーションらしい。

「さて、オオカミ長官も無事撤退した。後は貴様との勝負だが」

残忍な笑みを浮かべた。まるで毒蛇が笑ったかの様な笑みだった。

「今日のところははその命預けておこう。いずれ貴様は我等の前に敗れることになる」

鞭を収めた。マントで全身を覆った。

「また会おう。その時こそ貴様の最後の時だ」

「待てっ、地獄大使！」

だが地獄大使はそのまま消えていった。後には高笑いだけが残った。

「そうか、あの二人も復活しているのか」

翌日爆発した古城の跡地を調査しながら滝は本郷の話を聞いていた。

「あれだけの力を持っていた奴等を甦らせたんだ。どうやらどえら

い事が起こりそうだぜ」
「ああ。次々と改造人間達が現われる。今までより遥かに過酷な戦いになる」
「過酷、ね」
本郷の言葉に滝は煙草をくわえニヤリ、と笑った。
「何時だって過酷だったさ。そんなことはどうだっていい。それより本郷、御前今すぐ行かなくちゃいけないんだろ？」
滝の言葉に本郷の隣のルリ子も微かに反応した。
「うむ、ロンドンで空を舞う怪人が出たらしい。すぐに急行する」
「空を飛ぶ奴か。ガランダーのフクロウ獣人あたりだな」
「おそらくな。奴は凶暴で獰猛な獣人だ。すぐに倒さなくてはいけない」
「相変わらず忙しいな。けど御前は一人で戦わなくちゃいけないんじゃない」
「ああ」
「ルリ子さんがいる。おやっさんも日本にいる。隼人のやつもどっかで戦っているだろう。それに・・・・・」
滝は言葉を続けた。
「俺もいる。及ばずながら力になるぜ」
「・・・・・済まない」
本郷は目と口だけで微笑んだ。
「礼はいいさ。支払い無用のツケにしといてやるからよ。また近いうちに会うだろうからよ、その時も頼むぜ」
「ああ、わかった」
「じゃあな。元気で頑張れよ」
本郷はバイクを駆り古城を後にした。ルリ子もバイクで追いかけていく。滝はそれを笑顔で見送り新しい煙草に火を点けた。
「また、始まったか」
吸った煙草が何時に無く美味く感じられた。だが彼は解かっていた。その煙草が束の間の休息に過ぎない事を。そして最後の一本に

なるかも知れない事も。

黒き森の魔狼　　完

0

2003・11・2

聖地の鉄人その一

聖地の鉄人

悠久の大陸と呼ばれ長い歴史と独特の文明を誇るインドはその中に多様な民族と文明を内包している。他の国の人々には理解し得ないものも多くそれが多くの人々を惹き付けてやまぬインドの魅力ともなっているのである。とりわけ宗教に関してはインド程多様かつ複雑な国もないであろう。

仏教がインド発祥であるのは有名であるがその他にも厳格な戒律で知られるジャイナ教やシーク教、ムスリムのジハードによりもたらされたイスラム教、ヨーロッパ人達も布教したキリスト教等大小で無数にある。

その中でも特に大きな勢力を持つのがヒンズー教である。インド古来の神々に仏教等他の宗教の要素やドラヴィダ人、アーリア人の哲学、文化を取り入れたこの宗教は将にインドそのものを表わしているといっても過言ではないであろう。

カースト制や穢れの思想、創造、調和、破壊のサークル、輪廻転生、多くの今も生きる神々、それはインドの人達の心にたゆまなく流れる大河のようなものである。

そのヒンズー教において聖地とされるのが古都ベナレスである。本来の名をヴァーラーナシィーというこの街はかってクーシー＝光の都と呼ばれた。聖なる河ガンジス河の中流に位置し多くの信者達がこの聖なる河へ沐浴しに来る。

この街はまたの名を『火葬場の街』ともいう。聖なる河に流されこの世での終わりを願う人達が集まる為この名がついたのであり、この街で死を待つ人達も集まっている。

街は大小様々な路が入り組んでおり巨大な迷路の様になっている。石炭が採れる為車がひっきりなしに大路を走っている。その脇で商人達が店を開いている。富める者も貧しい者も行き交い路で寝起き

する者もいる。犬や羊豚も路にいるがとりわけ多いのはヒンズーにおいて神の使いとされる牛である。牛は人と共に生き人と共に死ぬ。それもインドなのである。

そのベナレス近郊のある古ぼけた寺院の地下に彼等はいた。

「そうか、やはりこの地に来たか」

暗い一室でテーブルを前にして車椅子に座した老人が呟いた。

白のタキシードとズボンの上に裏が赤地の黒マントを着た白髪の一種独特のダンディズムが漂う老人である。彼の名は死神博士、かってショッカーみっての天才科学者として悪名を天下に轟かせた人物である。

スペインアンダルシアのセビリアに生まれた。幼い頃より神童と謳われ医学、化学及び工学で天才の名を欲しいままにする。だがその反面占星術やオカルトにも造詣が深くやがて錬金術にある『賢者の石』を欲するようになる。様々な試行錯誤の末その謎を解明するに至るがそこでショッカーにその才を買われ招かれる。

それまではいささか風変わりな人物として知られていながらも悪評や中傷とは全く無縁であった彼が何故ショッカーに入ったのかは誰にも解からなかった。一説には錬金術を学ぶ過程で様々な生体実験を執り行ない、それにより狂気に走ったとも言われている。

その生体実験と錬金術の研究の成果であろうか。ショッカーに入ってからは改造人間開発の権威となり大幹部に抜擢される。その過程で賢者の石への関心は人を人にあらざるものに造り変えるという背信の錬金術へとなってしまっていた。

スイスと日本でライダー一号と、日本と南米においてライダー二号とそれぞれ死闘を演じた。残忍にして冷酷、優れた改造人間をもってダブルライダーの宿敵であり続けた。

「うむ、先程俺の配下の者達から報告があった。表向きはあの街の取材ということらしいがな」

死神博士の前に山の様に大きな身体を持つ男が立っていた。下半身は黒ズボンとブーツであるが上半身は鋼鉄に覆われている。兜の

様な頭部からは二本の水牛の様な角が生え指には鋭い爪がある。両肩には二本ずつ管があり左手には鎖で繋がれた巨大な鉄球がある。彼の名を鋼鉄参謀という。

聖地の鉄人その二

北欧にある魔人の伝説がある。全身が太陽の様に眩く輝く男だ。彼は白夜に現われ雪の中を歩いていく。そして目の前にる物をその光の熱で全て焼き尽くしてしまうのだ。

彼の行く所は焦土のみである。跡には何も残らずかって人や家だった炭が残っているだけである。彼の名は黄金魔人、北欧を焼き尽くす魔王であった。

彼の正体は炎の巨人であった。世界の滅亡の時にその全てを焼き尽くすと言われている炎の国の住人であった。

やがて彼を倒さんと天界から一人の神が舞い降りた。雷の神トゥールである。

戦いは長きに渡った。そして最後は雷神が勝った。その鎚を掲げ彼は雄々しく叫んだ。

その子孫が彼である。デルザー軍団きっての猛者と言われた男である。

「我々がこの地にいる事を察しているな。相変わらずカンのいい奴だ」

「ならば話が早い。すぐに俺が出向いて奴を一撃で粉砕してやる」

「待て。事を急ぐ必要は無い」

拳を振り上げ力説する鋼鉄参謀を右手に持つ乗馬用のそれに似た鞭で制した。

「今私が再び甦らせた改造人間達が目覚めようとしている。ゾル大佐が奴等を率い貴様の手勢とで二正面作戦を仕掛ける。これならば如何に奴とて持ち応えられまい」

「奴さえ倒せば後はどうとでもなる。このインドが我等の手に落ちるのだ」

「うむ。インド征服の前祝いとしよう」

そう言うと指を鳴らした。すると戦闘員達が無言で赤ワインと二

つの銀の杯を持って来た。
コルクが抜かれ杯に酒が注がれる。紅のその色はルビーを溶かした様である。
「私の故郷の酒だ。一度飲むと病みつきになるぞ」
「有り難く頂こう。悪の勝利の為に」
「うむ。悪の繁栄を期して」
二人の大幹部は杯を交わし合った。くぐもった暗い笑いが地の底から響いてくるようであった。
昼ガンジス河で沐浴する人達の中に彼はいた。沐浴をするのではなくカメラで彼等一人一人の顔や姿を撮っている。
濃い青の半袖シャツに茶のスラックス、首に赤いスカーフを巻いている。身体はそれ程大きくはないが何かしら格闘技をやり込んでいるらしく全身の筋肉が発達している。黒い髪と瞳、独特の目鼻立ちから彼がアジア系であると解かる。陽気で人なつっこい顔立ちであり何処か都会的な洗練された趣を感じさせる。
彼の名は一文字隼人、仮面ライダー二号としてその名を知られている。
ロンドンで日本人の両親の下に生まれその地で育った。両親が亡くなると日本へ渡り親戚の下に身を寄せた。そして大学を卒業後フリーのカメラマンとなった。日本で学業と共に柔道と空手を教わり柔道は六段、空手は五段の腕前を誇るようになる。その格闘能力をショッカーに目を付けられる事になる。
当時仮面ライダー＝本郷猛の前に苦杯を嘗めさせられ続けていたショッカーはライダー打倒が緊急課題となっていた。そのライダーを倒し彼に替わる新たなショッカーの改造人間として彼は白羽の矢を立てられたのだ。そして彼はショッカーに拉致されたのであった。
改造は順調に進んだ。最後に脳改造を残すのみという段階で全てがするった。この改造計画を察知した本郷猛がライダーに変身して改造が執り行なわれている基地に侵入し彼を救出したのだ。
この直後欧州においてショッカーの動きが活発化している事を感

じ取った本郷はかの地へ渡り、一文字は彼の替わりに日本のショッカーと戦うことになる。中東から招かれたゾル大佐や欧州から派遣された死神博士との激闘を経て死神博士を追う形で強化怪人達の魔窟と化していた南米へ向かう。南米全土で死神博士率いるショッカー南米支部、そして日本のそれに比肩する凶悪な複合怪人達を擁するゲルショッカー中南米支部と戦い続けた。そして日本において本郷と共にゲルショッカーを壊滅させた。それ以後も常に世界各地で悪の組織と戦ってきた伝説の戦士である。本郷猛のライダー一号が『技の一号』と称せられるのに対し彼のライダー二号は『力の二号』と称されている。

聖地の鉄人その三

「良い写真が撮れたな」

一文字は河へと降りていく階段の一番上で笑みを浮かべた。大きな陽が光を反射する銀の河で満ち足りた表情で沐浴する人達の顔は何にも替え難く素晴らしいものである。一文字は夕陽を見ながらまた笑みを浮かべた。

「あの夕陽もいいな」

特別にフィルターをしたカメラを取り出し撮影する。赤と橙が混ざり合ったその夕陽は神が世を照らす為に創造したかの様に神々しく美しいものであった。

河と夕陽だけではない。このベナレスには古く由緒ある寺院が多数ある。そして入り組んだ雑多な街並みと様々な人々がいる。あたかも人がこの世に生まれ出た時から存在しているかの如き悠久の感覚を覚える。ベナレスはそんな街だ。

ベナレスだけでなくインドは全てがそうであった。民主的な政治が行なわれているが旧態依然とした制度も残っている。豪奢な宮殿に住み財宝と美女に囲まれている者もいれば森や路で生活し、ありのままのものを食べそれで満ち足り何不自由なく生きている者もいる。路を牛や犬が普通に歩きその隣に自動車や戦車が走る。果てしなく広がる砂漠があれば絶ゆ間無く流れる大河もある。何処までも見渡す限りの平原と天を支えるかと思われるまでにそび立つ山々がある。聖なる神と邪なる神が共存する。その聖なる神は時として全てを破壊し、邪なる神が世界を救う。秩序と混沌、創造と調和と破壊、過去と現在と未来、生と死、その全てを内包しているのがインドなのである。人々が無意識に持つ底の無い無限の世界、それこそがインドではなかろうか。

「何時来ても不思議な国だな、ここは」

一文字は夕暮れの街を歩きながら呟いた。ロンドンに生まれ日本

に渡りそれからは世界各地を転戦してきた。あらゆる国を回り最早ほとんどの国を見てきた。その中でもインドは特別だった。

何か遠い昔に忘れ去ったものがインドという国にはある。そしてインドのその悠久の時を感じ取った後母国へ帰る。すると今まで気が付かなかった母国の素晴らしさに気付くのである。

ある店に入った。あまり高くない大衆的な日本でいう食堂のようなものだ。インド商人特有の愛想良さとサービスが売りの店だ。無論味もいい。ただ油断するとすぐ値段をボッてくるので気が抜けないが。

店に入る。十程のテーブルが並べられている。手前のテーブルに着く。先客がいた。そこにいたは彼が良く知る顔だった。

「よお」

鶏と野菜のカリーを右手の三本の指を使って食べている男が挨拶をした。赤のシャツに黒のズボンを着たパーマの男は一文字のかっての戦友だった。

「滝！どうしたんだこんな所で」

「御前がここにいるって聞いたんでね。丁度この辺りで仕事があったんで立ち寄ったのさ」

カリーを食べ終えテーブルの脇に置かれている木のコップで指を洗いながら答えた。

「そうだったのか。どうだ、一緒に食べないか?」

「おいおい、今食べたばかりだぞ」

向かいのテーブルに着く一文字に困った様な笑みを浮かべて答えた。

「何言ってんだよ。それだけじゃ足りないだろ」

「ははは、まあな」

そして二人は料理を注文した。カリーやタンドリーチキン等インドの家庭料理である。二人は心ゆくまでそれ等の料理を堪能した。

その夜は別のホテルに泊まった。一文字の泊まっているホテルが満室であり滝は別のホテルにしざるをえなかったからだ。

次の日の午前に二人は市場で落ち合った。それぞれの店が開店の用意をしている。

「いいねえ、活気があって」

滝はガヤガヤと明るい喧騒の中仕度をする人達を見ながら目を細めた。

「だろ？市場のこの雰囲気は何処へ行っても変わらない。俺はこういった人の明るい活気が好きなんだ」

カバンからカメラを取り出した。

「それにいい写真が撮れるしな」

カメラを向けられた人がニコリと笑う。そこへ子供達も寄って来る。

子供達は一文字の周りに集まりヒンドゥー語で色々と語り掛けてくる。一文字も同じヒンドゥー語で返す。滝も多少ならヒンドゥー語は理解出来る。物を乞うているのではなく一文字に何やらせがんでいるようだ。どうやら一緒に遊んで欲しいと言っているようだ。

聖地の鉄人その四

「相変わらず子供に人気があるな」
「まあね。写真も撮らせてもらってるし色々と教えてもらう事もある」
「教えてもらう事？」
「ああ。子供は感受性が強いからね。それを感じ取って写真に撮っていくんだ」
「成程ねえ。俺も日本じゃ子供達にいろんな事を教えてもらったな」
滝は日本にいた時の事を思い出した。彼はその時少年ライダー隊の隊長として子供達と共にショッカー、ゲルショッカーと戦った。その時子供達に教えられ助けてもらう事が多々あった。子供の強さと賢さを実感させられていたのだ。それは滝にとって忘れえぬ思い出だった。
「子供達か。そういやライダー隊のチビ共も元気にしてるかな」
「皆元気にしてるよ。立派な若者に成長しているよ」
一文字が子供達と遊びながら答えた。
「そうか、ならいい」
滝は笑った。北東の方を見る。そこには日本がある。そこにいるかっての同志達に思いをはせるのであった。
市場の後は死と戦の女神カーリー神の寺院へ入った。破壊神シヴァの妃パールヴァティーの化身の一つであるこの女神は恐ろしい外見をしているが正義の為邪悪なる者を討ち滅ぼす荒ぶる神なのである。
昼食をとった後市内を見て回る。カルカッタやデリー等と比べるといささかのどかな街だというがそれでも路には人や牛や車が溢れかえっている。
街の外れにある空き地に来た。そので滝は一文字に尋ねた。
「なあ隼人」

「何だ？」
「御前写真を撮る為にこのベナレスへ来たって言ったよな」
「ああ」
「それも目的だが本当は別の目的で来たんだろう？」
「・・・・・・・・・」
一文字は答えなかった。だが滝は続けた。
「ここに何か人々にとって良からぬ連中がいる。それを感じ取ったから御前はこのベナレスへ来たのだろう？」
一文字はまだ黙っている。
「当たっているだろう」
その言葉に対し一文字は口と目で笑って答えた。
「やっぱり知っていたか。流石に鋭いな」
一文字は口を開きはじめた。
「その通りだ。タイでカメラマンの仕事が一段落した時インドで怪物が出たっていう噂を聞いてね。ほら、御前も新聞やニュースなんかで見た事あるだろう？」
「ん、あれか！？」
その話は滝もアメリカで聞いた事がある。インドで猿と人の合成獣の様な未確認生物が夜の街や森を徘徊して人々を襲っているという噂だ。
その時は猿人か、得体の知れぬカルト団体か何かだろうと考えておりさしあたって動かなかった。現地の警察に連絡し何か不可思議な点があったらインターポールまで連絡してくれるよう言っただけだった。すぐに話が沈静化したので結局単なる都市伝説と思い他の任務に当たった。その任務こそがドイツでの狼男騒ぎだったのだ。
「ちっ、こんな事ならこっちにも人を送っとくんだったな」
そう言って歯噛みした。自分の見解の甘さが悔やまれる。
「そういえば滝、ドイツでデルザー軍団のオオカミ長官と遭遇したらしいな」
「んっ、何だ知っていたのか」

「本郷から連絡があった。何でも地獄大使とブラック将軍まで姿を現わしたそうじゃないか」
「ああ、本郷が言ってたんだ。間違い無い。それに前の組織の改造人間や見た事の無い戦闘員もいたらしい。俺は戦闘員の方しか知らないがな」
「そうか。今までの組織と同等いや遥かに巨大な組織かもな」
「多分な。あの三人だけじゃないだろう、他にも地獄から舞い戻ってきた奴が大勢いる筈だ。隼人、今回も辛い戦いになるぞ」
「それはいつもの事さ。慣れてるよ」
一文字はそう言って滝に微笑んだ。そして一言付け加えた。
「ただな・・・・・・」
真摯な顔になった。
「ただ、な・・・・・・・？」
「何の罪の無い人達、特に子供達は巻き込みたくはない。俺はその人達を守る為に戦っているんだからな」
「隼人、御前・・・・・・」
滝は一文字のそういった性格を良く知っていた。例えどの様な状況においても自分の身より他の者の、とりわけ子供達の事を案ずる。それが一文字隼人という男なのだ。だからこそ彼は戦い続けるのであり決して屈したりはしないのだ。そんな一文字だからこそ滝も共に戦い助けてきたのである。

聖地の鉄人その五

二人は空き地を出た。ガンジス河で沐浴する人達を写真に撮り次に街外れのイギリス風の古い屋敷の前に来た。

かっては植民地時代この地を統治していたかなり身分の高いイギリス人の屋敷だったのだろう。左右対称の見事な庭園跡と煉瓦、そしてガラスで造られた邸宅がある。だが今はそのガラスもわれ庭の噴水等も壊れ壁も所々破損し往時の美しさを偲ばせるものは何も無い。

「こういうのも是非撮ってかなくちゃな。絵になるし歴史的にも意義あるものだし」

一文字がカメラを取り出そうとしたその時だった。得体の知れぬ一団が一文字達の前に現われた。

「むぅっ!?」

それは黒のスーツと赤のプロテクターの一団だった。滝と本郷がシュバルツバルトやローマで戦った者達だった。

その中心に男はいた。鋼鉄の上半身を持つ巨人、デルザー改造魔人の一人鋼鉄参謀である。

「一文字隼人だな」

魔人は一文字を指差して問うた。

「だとしたら?」

あえて名乗らなかった。

「知れた事。死んでもらう」

そう言うやいなや左手に持つ鉄球を放り投げてきた。

一文字はそれをかわした。再び鉄球を繰り出そうとする。だがそこに一文字はいなかった。

「むっ、何処だ!?」

鋼鉄参謀も戦闘員達も辺りを見回す。すると上から笑い声がした。

「そこかっ!」

屋敷の上の方を見る。そこに一文字はいた。だが彼はすでに変身を遂げていた。

深緑の仮面に赤い両眼、黒いバトルボディに緑が混ざった暗灰色の胸、そして赤い手袋とブーツ。仮面ライダー二号であった。『力の二号』とも称される正義の戦士である。

「流石はデルザーの改造魔人、派手なご挨拶だな」

「ぬかせっ、さっさと降りて来い！」

「言われなくとも降りてやろう。行くぞ！」

戦闘員達の中へ降り立った。向かい来る戦闘員達を拳と蹴りで次々と倒していく。

残るは鋼鉄参謀一人となった。鉄球を構える鋼鉄参謀に対しライダーは完全に変身する直前の拳を造ったポーズでファイティングポーズを作る。

ジリ、ジリジリ、と両者は間合いを詰める。ライダーが一歩踏み出そうとした。その時だった。

「ムッ！？」

新たな一団がライダーと滝の周りを取り囲んだ。

それは新手の戦闘員達だった。彼等だけではなかった。改造人間もいた。四体いる。

アフリカより来たショッカーの火炎怪人サイギャング、ゴッドが誇る豪力怪人ヘラクレス、このインドで生まれたネオショッカーの突進怪人サイダンプ、ゲドンの鋏怪人カニ獣人、そのいずれもがかってその豪力をもってライダー達を苦しめた猛者達であった。

「やはり出て来たな、怪人達」

「そうだ、貴様を倒す為に甦ったのだ」

輪の奥から声がした。声の主が前に出て来た。その姿を見てライダーも滝も驚愕した。

「き、貴様はっ！」

声の主は金の顎止めや帽章の付いたジャーマングレーの軍帽とそれと同じ色の軍服、白いズボンと手袋を着け黒のブーツを履いてい

る。腰のベルトには拳銃が架けられ右手には棒状の鞭がある。口髭を生やし左眼には眼帯をしている。この男の名をゾル大佐という。

ゾル大佐、ショッカーに関わった者でこの名を知らぬ者はいない。ドイツケーニヒスベルグに生まれ軍人となる。ナチス政権下で頭角を現わしナチスのユダヤ人弾圧の実行者として知られるようになる。ハイドリッヒ等と共にヒムラーの懐刀として辣腕を振るう。彼の手により多くの者がアウシュヴィッツ等で苦しみ悶え死んだ。喉を掻き毟り眼球を飛び出させて死ぬ様を彼は笑みをもって眺めていたという。

ナチス崩壊後追われる身となるがアルゼンチンに潜伏しその地でショッカーに入る。ショッカーにおいてもナチス時代そのままの辣腕を振るい世界の火薬庫とも言われる中近東の支部長に任命される。多くの諜報機関やテロリスト達が跋扈するこの地において主に少年少女やダブルスパイを以って実行した誘拐や洗脳によるテロ作戦で功績を挙げる。それによりショッカーで最大の権限を持つに至る。完璧主義者にして厳格、冷徹、一文字隼人の宿敵であった人物だ。

聖地の鉄人その六

「久し振りだな、一文字隼人。いや、仮面ライダーよ」
「やはり生き返っていたか」
「貴様をここで倒す為にな。その為に怪力を誇る怪人達を集めてきたのだ。貴様の力を凌ぐ程のな」
「くっ・・・・・・」
「そして俺もいる。ライダー二号よ、このベナレスが貴様の墓場となる」
鋼鉄参謀がそう高らかに言った時だった。
戦闘員の一人が鋼鉄参謀の下へ駆け寄り何か囁いた。
「何ィッ、それは真かっ!?」
急に鋼鉄参謀の顔色が変わった。
「ゾル大佐」
ゾル大佐の方へ顔を向けた。
「申し訳無いがこちらで緊急事態が起こった。俺は自分の基地へ引き返らせてもらう」
「どういう事だ!?」
「基地が何者かに襲撃を受けたらしい。それを収め次第再び作戦に参加させてもらう」
「むう・・・・・・」
二号の方を見る。鋼鉄参謀あってのライダー打倒作戦だったのだ。彼抜きでは作戦成功の見込みが立たないのは火を見るより明らかだった。
「止むを得ん。ここは退くぞ」
鋼鉄参謀が戦場を離脱していくのを見つつゾル大佐も決断した。
右手の鞭を振るい指示を下す。
戦闘員と怪人達がライダー達と闘いつつ順次撤退したのを見届けるとゾル大佐も退きはじめた。

「待てっ！」
ライダーと滝が追おうとするが腰に下げてあった拳銃を取り出し一発放つ事によりライダー達の動きを止めた。
「今はその命預けておこう。だが今度会う時はそうはいかん」
そう言い残しゾル大佐も戦場を離脱した。後にはライダーと滝だけが残っていた。
「どういう事だ？」
「何か基地が襲撃を受けたとか言っていたが・・・・・・」
二人は顔を見合わせた。
「他のライダーがここに来ているのか？」
「いや、他のライダー達は皆世界に散っている。インドにいるのは俺だけの筈だが」
滝の言葉に変身を解き一文字隼人に戻りながら言った。
「だとしたら・・・・・・。仲間割れでもしているのか？」
「有り得るな。デルザーの改造魔人達はその実力とプライド故に反目し合っていた。何者か鋼鉄参謀の作戦遂行の妨害をしようとしているのかも知れない」
滝と一文字は互いに思案する眼で言った。
「そうだとしたら誰が？」
「それまでは解からないな。だがこれで敵の作戦目的が俺自身の抹殺だという事がはっきりした。そして敵に隙が生じている。今のうちにこちらも対策を練ろう」
「うむ」
二人は古ぼけた洋館を後にした。そして誰もいなくなった。
鋼鉄参謀は報告に来た戦闘員を釣れ自分の基地へと帰って来た。
岩の中に巧妙に隠された階段を降り地下へと入って行く。
足早に、ガシャーン、ガシャーンと金属音を立てながら自身の基地の中を進んでいく。進むうちにおかしな事に気が付いた。
「どういう事だ、何も荒らされてはおらんではないか」
顔を顰め訝りながら進んでいく。奥にある指令室に入った時最も

合いたくない顔がいた。
「久し振りだな、鋼鉄参謀」
「貴様か、一体何をした！？」
見れば自分の配下の戦闘員達が全員拘束され床に転がされている。十名程の戦闘員達を後ろに従えた男は鷲の頭に赤地に黄の十字が入った胸当てとズボンを着、右手には斧、左手には大盾を持ち背には赤い大きな翼を生やしている。彼もまたデルザー改造魔人の一人、荒ワシ師団長である。
十一世紀勢力を伸張し続けるイスラム教徒達に対し東ローマ帝国への援軍という形で十字軍が結成された。それから約二百年間計七回に渡って派遣された十字軍は聖都エルサレムの回復という大義名分を掲げてイスラム教国と戦った。聖地の回復、といえば聞こえはいいがその実態は暴虐で残忍な侵略者以外の何者でもなかった。
十字軍を主導するローマ＝カトリック教会も兵を送る国王や領主達も己が権勢や栄華、名誉、領地等を欲しているのみであり聖地エルサレムもそこにいるキリスト教徒達もどうでも良かったのである。その証拠としてエルサレム解放の時にはキリスト教徒達もイスラム教徒達と同じ様に虐殺し、援軍を要請した同じキリスト教を信奉し同志である筈の東ローマ帝国ですら攻撃し帝都コンスタンティノープルを攻め落としその地で略奪の限りを尽くす有様であった。

聖地の鉄人その七

十字軍の行くところ殺戮と暴虐の嵐が吹き荒れ幼な子は火の中に放り込まれ喰らわれ腹を割かれた者が悶え死に腐乱した屍と粉々に砕けた白骨が砂漠に転がり風が血煙を乗せて四方をその身の毛もよだつ悪臭と瘴気で支配した。彼等は将に鮮血と屍肉に飢えた人ならざる異形の獣達であった。

そう、獣であった。心が人でなくなった時姿形も人でなくなってしまうのであろうか。

この時十字軍を指揮していた一人の領主がいた。彼はその残忍さ、非道さにおいて十字軍の他のどの者よりも怖れられ、砂漠の死神と呼ばれるようになった。だが彼も最後には英雄サラーフ＝アッディーン、すなわちサラディンの軍に破れサラディン自身の手により首を刎ねられる。

だが彼は甦った。砂の中から這い出、刎ねられた首を捜し求めたが得られずハゲワシの首を取り付けたのだ。同時にワシの能力をも身に着けた彼は空を飛翔し人を襲う魔人と化して人々を苦しめた。彼の心は完全に魔物のそれとなっており例えかっての同志達であろうが躊躇なく襲い掛かり殺戮した。彼により中東の砂漠は死の砂漠となってしまった。

その子孫が荒ワシ師団長である。祖先から空を駆る力と残忍な性質を受け継いだ彼は同時に狡猾さも併せ持っており祖先と同じく『砂漠の死神』と称せられた。その天空を支配する力を活かした奇襲攻撃と空中戦をもって知られる男である。

「別に何も。ただ貴様に急に会いたくなったのでな」

「ぬかせ、ならばこの行いは何だ！」

鋼鉄参謀は床に転がっている自分の部下達を指で示し荒ワシ師団長を責めた。

「何、少し聞き分けが悪かったのでな。少し大人しくしてもらおう

と思ってこうしたまでよ」
「ぐっ、早く解け」
「よかろう」
荒ワシ師団長は部下の戦闘員達に鋼鉄参謀の部下達の縄を解かせた。ようやく解放された彼等は鋼鉄参謀の方に集まり彼を守る様に囲んだ。
参謀はそうした部下達を手で制すると前に出た。かってデルザーで覇を競った二人の改造魔人がここに対峙する。
「それで一体何の用だ？大体貴様は今ペルーにいる筈ではなかったのか？」
「何、少し小耳に挟んだ事があってな。ここにいるのは仮面ライダー二号だそうだな」
「それがどうした」
鋼鉄参謀は一歩前へ踏み出した。
「まあ待て。相変わらず血の気の多い奴だ。今日は貴様に贈り物があるのだ」
「贈り物？俺に？」
「そうだ。いい物だぞ」
荒ワシ師団長が斧を振り上げ持って来るよう指示を出した。それに従い数名の戦闘員が子供達を引っ立てて来た。ベナレスの市場にいた子供達だ。
「この子供達は？」
「ベナレスの市場にいた子供達だ。何でも一文字隼人に懐いているらしい」
「ふむ、この子供達を使ってライダーを誘き出せ、というわけだな」
「そういう事だ。これならば有利な状況でライダーと闘えるだろう」
「うむ、そうだな。礼を言う」
「礼には及ばぬ。では俺はこれで失敬させてもらう」
「うむ」
荒ワシ師団長は配下を従え出て行った。鋼鉄参謀もそれを見届け

ると部下達に指示を出し子供達を手土産としてゾル大佐と死神博士のいる基地へと向かった。

この時彼は気が付かなかった。遠くから彼を見る白い影に。

ベナレスの人々に『青の寺院』と呼ばれるその石造りの寺は既に誰もいない廃院であった。街のすぐ外れに位置している為人も近寄らず廃墟と化していた。その地下深くに彼等はいた。

「ふむ。子供達を囮として誘き出そうというのだな」

指令室の円卓で車椅子に座す死神博士が同じく円卓に座す鋼鉄参謀に問うた。

「そうだ。俺が指定した場所に子供達を連れて行かせた。何も隠れる所の無い丘の上にな。そこで取り囲んでしまえば如何にライダーとて逃れられぬ」

鋼鉄参謀は自信に満ちた声で豪語した。ガラガラと笑い鉄の身体が大きく揺れる。

「ふむ。では俺の改造人間達ももう少ししたらその場へ動かしておくか」

二人と同じ様に円卓に座すゾル大佐が言った。

聖地の鉄人その八

「頼む。では俺は作戦の用意があるからこれで失礼させてもらう」
鋼鉄参謀はそう言うと席を立ち部屋を後にした。ガシャーン、ガシャーン、と金属音のする足音が次第に遠くなっていく。
鋼鉄参謀が去り指令室にいるのはゾル大佐と死神博士だけとなった。まず死神博士が口を開いた。
「荒ワシ師団長か何かおかしいな」
「ああ。デルザーにおいてオオカミ長官と並ぶ策謀家と言われた男だ。何か裏があるな」
ゾル大佐が言った。その隻眼が光る。
「そもそも奴と鋼鉄参謀は対立しているのではなかったのか。それなのに何故今協力を申し出てきたのだ」
大佐は更に続けた。かってデルザー内部で繰り広げられた陰惨な権力闘争は彼も知っていた。その中でも鋼鉄参謀と荒ワシ師団長の対立は有名であったのだ。
「普通に考えてみて荒ワシ師団長が動くとは考えられぬ。おそらく奴の後ろに誰かいるのだろう」
「後ろに？誰だ」
「大佐も知っている筈だ。デルザーの状況を。そしてこういう時に影の如く動く男を」
「まさか・・・・・・」
「そうだ」
死神博士はコクリと頷いた。
「ゼネ・・・・・・」
死神博士がその名を言おうとしたその時だった。非常事態を伝える警報音が響き渡った。
「何事だ！」
席を立ち叫ぶ二人の大幹部。そこへ数名の戦闘員とカニ獣人が部

屋に逃げ込む様に入ってきた。
「大変です、この基地にライダーが侵入してきました。滝和也も一緒です！」
戦闘員の一人が報告する。
「馬鹿な、ここの場所は知られていない筈だぞ！」
死神博士が僅か語気を震わせた。
「事は気球を要する、全力を以って二人を倒せ！」
「ハッ！」
ゾル大佐の命に従い彼等はナチス風の右手を斜め上に出す敬礼で答え部屋を後にした。
通路でライダーと滝はヘラクレスと彼が率いる戦闘員達と闘っていた。
「ギッ」
戦闘員の一人が奇声を発し棒をライダーに向けて振り下ろす。ライダーはそれを右手で受け止め左フックを浴びせその戦闘員を倒した。
「ガウウーーー」
ヘラクレスが棘の付いた棍棒でライダーの頭を打ち砕かんとする。ライダーはそれをかわすと蹴りを怪人へ見舞った。
だが怪人はそれを盾で防ごうとするしかし盾はライダーの蹴りにより粉々に砕かれヘラクレスの腹を直撃した。
怪人はそのまま通路の壁まで吹き飛ばされた。そして沈み込むとそのまま動かなくなった。
そこへ前からカニ獣人、後ろからサイダンプがそれぞれ手勢の戦闘員を引き連れて現われた。
「滝、戦闘員は頼む」
「解かった」
滝はそう言うと戦闘員達の方へ向かった。ライダーは前後から挟み撃ちにせんとする二体の怪人と対峙した。
「グオゥッ」

サイダンプが鉄拳を浴びせる。ダムすら一撃で決壊させる強烈な一撃でありこれにより数々の破壊作戦を成功させてきた。
その拳をライダーは掴んだ。そして怪人を両肩に担いだ。
そして思いきり地面に叩き付ける。柔道にある大技の一つ『肩車』だ。
背を叩き付けられた怪人に対し止めにエルボードロップを落とす。みぞおちに一撃を受けたサイダンプは倒れた。
「ギィーーーッ」
カニ獣人がその口から白い泡を吹き出す。
「むっ！」
それを受けたライダーの右腕が動かなくなった。この泡は人の動きを止めてしまうのだ。
そこへ両手の鋏が襲い掛かる。まるで薙刀の様に巨大な刃が対になっている。これの直撃を受ければライダーといえどもひとたまりもないだろう。
だがライダーはまず右の鋏を蹴り上げると左の鋏を動かない右腕で払った。そしてもう一方の左腕で怪人に対して連打を浴びせる。
かって多くの怪人達を葬ってきたパンチの連打を浴びさしものカニ獣人もその甲羅を破られた。カニ獣人はオレンジの体液を吹き出し床に崩れた。
「行くぞ滝」
「おう」
怪人達を倒した滝とライダーは更に奥へと進んでいく。そして最深部の一室へ辿り着いた。

聖地の鉄人その九

「来たぞ鋼鉄参謀、子供達は何処だ！」
「鋼鉄参謀？残念だがここにはおらん」
暗い部屋で誰かが言った。
「何ィ！？」
「その声は！？」
「フッフッフ、流石だな。やはり察しがいい」
青く弱い光が下から声の主を照らし出した。赤い壁を背にゆっくりとこちらへ振り向いてきたその男を二人はよく知っていた。
「死神博士！」
「やはり貴様も！」
「そうだ。貴様達を倒す為に地獄からこの世に帰って来たのだ」
光に照らし出されるその顔は不気味な笑みを浮かべていた。
「仮面ライダー一文字隼人よ、貴様にはこのベナレスで死んでもらう。我等が世界制覇の為にもな」
そう言うとゆっくりと兆手を頭上へ上げた。その手に大鎌が現われた。
「しねぇい！」
大鎌をライダーと滝へ向けて振るう。二人はそれをかわし逆に攻撃を仕掛けようとする。だが博士は不意に姿を消した。
「何処だ！」
ライダーが叫ぶ。
「ここだ」
後ろから声がした。鎌が横に薙ぎ払われる。二人はそれも跳んでかわす。ライダーはそのまま空中で後方に回転しその頭上へ踵落としを浴びせんとする。それに対し死神博士はまたもや姿を消した。
「くっ、またか！」
ライダーと滝が身構えつつ部屋を見回すが死神博士の姿は無かっ

た。気配すら完全に消え去っていた。
「ライダーよ、子供達は街の外れにあるヴァルナの丘にいる。鋼鉄参謀も一緒だ」
死神博士の声だった。
「何、本当か！」
“嘘は言わぬ。それに言ったところで貴様は丘には辿り着けぬわ”
「それはどういう意味だ？」
“ここを出れば解かる。そして貴様は苦しみ抜いて死ぬ事になろう。フハハハハハハハハ・・・・・・”
死神博士の高笑いは暫く部屋に響いていたがやがて消えていった。
「消えたか・・・・・・」
二人は基地を出ると新サイクロンとバイクで丘へ向かった。ライダーは変身を解いていない。一路ヴァルナの丘へと向かう。
広い道へ出た。左手には禿た小山がある。そこへ前からバイクの一団がやって来た。その先頭にはサイギャングがいる。
「来たな」
サイギャングとその部下の戦闘員達はライダーと滝のバイクを取り囲んだ。そして円を描きつつ狼の様に三四騎単位で襲い掛かって来る。
二人はそれをバイクを巧みに操りつつかわす。襲撃が一段落付くとこちらから反撃に転じた。
ジャンプすると戦闘員に対して急降下を仕掛ける。戦闘員はそれを避けられず押し潰された。
着地するとすぐ側にいたバイクの側面に体当たりを仕掛ける。戦闘員が吹き飛ばされる。
バイクの数は次第に減り遂にはサイギャングのバイク一台だけとなった。ライダーの新サイクロンと互いに円を描きつつ隙を探り合う。
不意にライダーがマシンを左へ捻った。そしてサイギャングのバイクを横に倒した。

サイギャングはバイクを降りた。ライダーもだ。二人は一騎打ちをはじめた。

「ケケケケケケケーーーッ」

奇声を発しつつ口から炎を出してきた。ライダーがそれをかわすと額にある角で突進してきた。

「ムゥッ」

ライダーは間一髪でそれを左手で掴むと右手で怪人の頬に拳を入れた。そして間合いを離すと天高く跳び上がった。

「ライダァーーーキィーーーーック！」

先程の基地の戦いにおいてヘラクレスをその盾ごと打ち破った蹴りがサイギャングの胸を直撃した。さしものサイギャングも断末魔の叫びと共に倒れ爆発した。

しかしライダーに勝利の余韻に浸る間は無かった。突如として謎の砲撃が二人を襲ったのだ。

「くっ！」

その砲撃をかわし二人が砲撃が飛んで来た左手の小山の方を見た。するとそこにはゾル大佐とタイホウバッファロー、そしてショッカーの怪力怪人カブトロングとゲルショッカーの発狂怪人イノカブトンといったカブト虫を基とする怪力を誇る怪人達がいた。

「よくあのサイギャングを倒した。流石だと褒めておこう」

ゾル大佐がライダーを見下ろしつつ言った。

「ゾル大佐、ここで貴様を倒してやる。来い！」

「フン、生憎私も忙しくてな。貴様の始末はこの連中に任せる事にする。もし貴様が生きていれば今度こそ貴様の命は無い」

ゾル大佐はそう言うと踵を返し戦線を離脱した。

「待てっ！」

追おうとするライダー、そして滝だがそれを阻む者達がいた。

「ギギギギギギギ」

「ウェエエオーーーー」

タイホウバッファローの援護射撃を受けつつカブトロングとイノ

カブトンが丘の上から飛び降りてきた。二体共その左手の巨大な鋏を禍々しい形をした角でライダーに襲い掛かる。

「ライダー！」

滝が助けに入ろうとする。だが戦闘員達の相手をせねばならずとても救援に入れない。二体の猛者達にライダーは取り囲まれた。

しかし今まで幾多の死闘を勝ち抜いてきたライダーである。とりわけその力は岩山すら叩き壊す程であり全ライダーでも彼に比する力の持ち主はそういなかった。その力がここでも発揮された。

イノカブトンの角を掴み地に倒すと今度はその両足首を己が両脇に入れた。そしてタイホウバッファローめがけ思いきり投げ付けた。

「ライダァーーーハンマァーーーッ！」

本来は一号の持ち技の一つだが力技を得意とする彼も会得する事が出来たのである。タイホウバッファローはかろうじてその攻撃をかわしたが頭から地に叩き付けられたイノカブトンは爆発四散した。

援護射撃が怯んだのを好機にライダーは残る怪人カブトロングへ攻勢を仕掛ける。

次々に拳が繰り出されこれにはさしものカブトロングも劣勢に追い込まれた。そこへライダーの蹴りが顔を直撃した。

聖地の鉄人その十

そして両肩を掴むとライダーは怪人の腹を再び蹴り巴投げを浴びせた。背と後頭部を叩き付けられカブトロングも爆死した。

「バーーーフーーー」

仲間を次々に打ち倒されたタイホウバッファローがライダーめがけ砲撃を再開する。最早それは照準すらろくに定めぬ乱れ撃ちであり所々で爆発が起こった。

その中でライダーは跳んだそして空中で激しく回転を続ける。

「ライダァーーー回転キィーーーーック！」

空中回転によって生じた遠心力によりその質量を増した脚部から放たれた一撃が厚い装甲で覆われた怪人の胸を突き破った。

だがそれでも立ち上がる。だがすぐに片膝を着いた。そして爆死した。

「行こう、子供達が心配だ」

滝を促し再びマシンに乗る。爆音を響かせ二台のマシンが再び走りはじめた。

「ゾル大佐め、遅いな。一体何をしているのだ」

鋼鉄参謀は丘の上で仁王立ちして顔を歪めて言った。その後ろでは配下の戦闘員達が縄で縛られた子供達を取り囲んでいる。

約束の時間はとうの昔に過ぎている。夜が明け空が白くなりはじめようとしている。流石に苛立ちを隠せない。

「何かあったとでもいうのか？」

「鋼鉄参謀、バイクが二台こちらに向かって来ています。かなり速いです」

「誰だ！？」

部下の報告を聞き双眼鏡でその二台のバイクを見る。一瞥しただけで鋼鉄参謀の顔は見る見るうちに変貌していった。

「一文字と滝だ、総員戦闘配置！」

素早く指示を出す。それに従い戦闘員達が己が持ち場に着いた。
（どういう事だ？一文字達のみここに来たという事は時間的に見ても基地が襲撃されたからか。だとすればゾル大佐の部隊は全滅している。しかし何故だ？基地の場所は一文字達にはまだ知られていなかった筈だ）
鋼鉄参謀がこの状況の原因に対し考えを巡らせているうちにライダー達が丘の上にやって来た。そしてバイクから降り鋼鉄参謀の前にやって来た。
「鋼鉄参謀、残るは貴様だけだ。子供達を返してもらおう」
鋼鉄参謀の予想は的中した。やはり基地は襲撃されていた。だとすれば考えられる原因は一つしかない。
（荒ワシ師団長め・・・・・）
内心危惧はしていた。だが実際に策にかけられはらわたが煮えくり返る思いだった。
（覚えておれ、この借りは何倍にもして必ず返してやるからな）
だが今は目の前の敵と闘う方が先だ。内心のその様な感情はおくびにも出さず一文字達に対して言った。
「フン、子供達ならすぐに返してやるわ」
「本当だな？」
「俺は嘘は言わん。貴様さえ倒す事が出来ればそれで良いのよ」
そう言うと手で合図して子供達を前に出し縄を解かせた。子供達は恐怖と不安から解放され安堵の表情で一文字達の方へ駆け寄って来た。
「滝、子供達を安全な場所へ」
「解かった」
滝はそう言って頷くと子供達は連れて後方へと退いていった。後には一文字だけが残った。
鋼鉄参謀と対峙する。一文字を戦闘員達が取り囲む。どの者も手に鎖を持ちそれを振り回している。
「行くぞ」

構えを取った。中央に赤い風車を持つベルトが現われた。

聖地の鉄人その十一

変ッ

右手を肩の位置で横に垂直に伸ばし左手をそれに並列に添わせる。そしてその両手をゆっくりと頭上で右から左へと旋回させる。それと共に手の先から下へと黒のバトルボディに包まれる。手袋とブーツが赤になる。

身ッ！！

右手は肩の位置で胸と並行させ垂直にし拳を作り、左手は上へ九十度垂直にし拳を作る。すると顔の右半分がダークグリーンに紅い眼を持つバッタの様な仮面に覆われ左半分も同じ様に包まれる。

トオッ！！

そして天高く跳び上がった。風車が白く強い光を発する。光が一文字、いやライダーを包んだ。

仮面ライダー二号が姿を現わした。それを合図に決戦が始まった。戦闘員達が一斉にその鎖をライダーに向けて放つ。ライダーはその鎖で両手両足をがんじがめにされた。

戦闘員達は鎖を引いた。ライダーを引き千切らんとする。

しかし引けなかった。戦闘員達がいくら鎖を引こうともライダーは微動だにしなかった。

「ムンッ！」

ライダーが力を入れると鎖は全て引き千切られてしまった。その力に蒼ざめる戦闘員達。

次々に襲い掛かるがもとより敵ではない。一人、また一人と倒されていく。

「やはりな、戦闘員では相手にならぬか」

鋼鉄参謀が左手に持つ巨大な鉄球を頭上で振り回しはじめた。そしてその遠心力でもってライダーにぶつける。

直撃を受ければライダーとてひとたまりもない。ライダーはそれを側転でかわした。

「ほう、やるな。だがこれはどうだ？」

返ってきた鉄球を左手で受け止めると今度はそれをヨーヨーの要領で直線の動きで繰り出す。ライダーはそれに対し攻撃を避けるだけである。

斜めから来る鉄球を跳躍でかわす。着地したところに頭上から襲い来る。後ろに跳ね返りそれもかわした。

「やりおるな。だがよけるだけでは何にもならぬぞ」

矢次早、縦横無尽に鉄球を繰り出す。ライダーはそれに対し巧みな身のこなしで避けるのみである。

前から来た鉄球をジャンプでかわす。そして伸びきった鉄球を繋ぐ鎖に手刀を加えた。

「ライダァーーーチョーーーーップ！」

手刀を横に薙ぎ払う。鎖は断ち切られ鉄球が地に落ちた。

「成程な。そうくるか」

武器を失ったにも拘わらず鋼鉄参謀は全く動じるところが無かった。左手から鎖を取り外して不敵に笑った。

「来い」

両者は互いに突進しぶつかり合った。鋼鉄参謀の鋼の拳が唸り声をあげライダーに襲い掛かる。

「ぐぅっ！？」

それを防いだライダーの腕に鈍い痛みが走る。その巨体に恥じぬ凄まじいまでの重さと力だった。

「ライダァーーーパァーーーンチッ！」

逆に鋼鉄参謀の胸へ攻撃を入れる。基地での戦いでカニ獣人を倒した強烈な右の拳の一撃だ。

だがそれも効かなかった鋼鉄の打撃音を響かせライダーの拳の方が弾かれた。

「グッ！」

ダメージを受けたのはこちらであった。右手を押さえ思わず呻き声を出した。

「ククククク」

鋼鉄参謀はそれを見て自身に満ちた笑い声を出した。

鋼鉄参謀は再び攻撃を出したライダーはバックステップでそれをかわす。そして高く跳躍した。

「ライダァーーーキィーーーーック！」

一号のそれと同じく多くの怪人達を葬ってきた必殺の一撃である。それが鋼鉄参謀の胸を直撃した。

「グァァッ！」

しかしダメージを受けたのはライダーの方であった。必殺の一撃は無残にも弾き返され地に倒れ込んだ。

「愚かな、俺を誰だと思っている」

鋼鉄参謀はグッグッグッ、と笑った。

「俺はあの黄金魔人様の子孫にして鋼鉄の身体を持つ者だ。これしきの攻撃なぞ蚊が刺した程にも感じぬわ」

「むぅっ・・・・・・」

起き上がったライダーに対し鋼鉄参謀は金属音を響かせながら近付いて来る。

「かの改造人間達と俺がこの手で鍛え上げた部下達を倒した事は褒めてやろう。せめて苦しまずに死なせてやる」

そのプレートメイルの様な巨体が迫る。そう、プレートメイルの様な。ライダーの脳裏に何かが閃いた。

ススス、と前に出た。そして鋼鉄参謀の胸に再度拳を繰り出す。

「馬鹿め、何度やっても同じ事だ」

だがそれは拳ではなく掌打であった。それが胸に打ちつけられると鋼鉄参謀の動きが止まった。

聖地の鉄人その十二

「むぅっ！？」

一見当てられただけであったが思いもよらぬ衝撃が身体に浸透した。もう一撃加えられ片膝を着いた。

「今だ！」

両手でライダーの身体を掴むと天高くジャンプした。そしてその身体を頭上で仰向けにし激しく駒の様に回転させた。

「ライダァーーーッきりもみシューートォーーーーッ！」

二号だけでなく一号も使うライダーの大技の一つであり数多くの怪人を倒してきた技だ。敵を回転させて大地に投げ付ける絶大な破壊力を誇る技であり『力の二号』の称号に相応しい技である。

大きく重い音を立てて鋼鉄参謀は背から大地にたたき付けられた。普通の怪人ならばまず即死している程のダメージであったが流石はデルザーきっての豪勇を誇った男である。足下をふらつかせながらも立ち上がってきた。

「やはりな。まだ立ち上がれるか」

「くっ、何故だ、俺の鋼鉄の身体がこれ程のダメージを受けるとは・・・・・」

立ってはいるが最早戦闘能力を奪われているのは明らかだった。指や腰等各部が破損しバチバチと音を立てていた。

「攻撃を内側に浸透させたのだ」

「浸透？」

「そうだ。確かに貴様の身体は強い。鎧そのものだ。どんな拳や蹴りも通用しないだろう。しかし広範囲に広がる衝撃には比較的脆い。鉄の鎧と同じくな」

「ぐう・・・・・・」

「だからこそライダーパンチを使わず掌底を出したのだ。掌底は内部に衝撃を伝える。これで貴様の動きを止めきりもみシュートを使

ったのだ。これならいく貴様が強靭な肉体を持っていようとも衝撃には耐えられぬ。将にその通りだったな」

「フッ、流石は伝説とまで謳われた力の二号、見事な戦いだ。俺の完敗だ」

鋼鉄参謀は敗北を認めた。

「行くぞ、止めだ！」

ファイティングポーズから攻撃に移ろうとするその時だった。ライダーの足先に何かが飛んできた。

「ムッ！？」

それはトランプのカードであった。ライダーの足下に突き刺さると不意に爆発した。

「ハッ！」

それをジャンプでかわす。着地したライダーの周りを何枚かの巨大なトランプが取り囲んだ。

『仮面ライダー二号よ』

何処からか声がした。太く低い男の声だ。

「誰だっ！？」

『いずれ解かる。その時まで敢て名乗らないでおこう』

声の主、その声からだけで相当な力量を持つ者である事がわかる。

『鋼鉄参謀は死なせるわけにはいかぬ。ここは退いてもらおう』

「黙れっ、この仮面ライダー決して悪は見逃さぬ！」

『フフフ、そうか。ならば腕ずくでも退いてもらおう』

巨大なカードが全て炎上した。そしてそのままライダーに近付いて来た。

『そのまま焼け死ぬか。それともどうにかして避けるか』

笑いながら言う。それに対し二号は後者を取った。

「くっ、サイクロン！」

カードの一枚を突き破り新サイクロンが姿を現わした。ライダーはそれに乗ると側面のカウルからサイクロンカッターを出しマシンをジャンプさせた。

「サイクロンジャンプ！」
サイクロンはライダーを乗せたまま上に大きく飛び上がり空中でとんぼ返りをした。そしてカードへそのまま急降下する。
「サイクロンカッター！」
螺旋状に急降下しそのまま燃え盛るカードを全て切り裂いた。アクセルターンをしつつサイクロンを停止させると目の前に鋼鉄参謀はいなかった。
『見事だ。ではまた会おう、仮面ライダー二号、いや一文字隼人よ』
「くっ・・・・・・」
『フフフッハハハハ』
高らかな笑い声と共を残し声の主の気配も何処かへ消え去った。それと共にベナレスにおける仮面ライダー二号、一文字隼人と滝和也の死闘も幕を降ろした。
「そうか、死神博士まで出て来やがったか。こりゃあ増々とんでもねえ事になりそうだな」
滝はニューデリー国際空港のロビーで一文字の話を聞いて言った。
「ああ、おそらく奴等は世界中で暗躍をはじめている。俺はこれから世界を回り奴等を倒しに行く」
「そうか。で今度は何処へ行くんだ？」
「ボンベイだ。あそこでも何か妙な生物が報告されている。おそらく何かしらの関係があるんだろう」
「俺は中東に行く。あそこでちょいと仕事が入っているんでな。じゃあこれで暫くの間お別れだな」
滝はそう言って手を差し出した。
「ああ、元気でな」
一文字はその手を握り返した。
「ああ、またな」
二人は逆の方向へそれぞれ歩きはじめた。戦士達は出会い、別れ、また出会い、そして暫しの別れから再び共に戦う日が来るのを感じつつ新たな戦場へ向かうのだった。

聖地の鉄人　完

2003・11・26

南海の死神その一

南洋の死神

協調を保ちながらもそれぞれが独自の文化を持ちそれぞれの発展を遂げている東南アジアであるがその扇の要となっているのがシンガポールである。

イギリスの植民地から独立したこの国は国土も狭く人口も少ない都市国家である。しかしその地の利と厳格な法治主義、人材育成により一大商業都市国家となった。その繁栄はかって植民地の寒村であった事など思いも寄らぬ程であり環太平洋地区の経済の中心地の一つと謳われる程である。高層ビルが立ち並び整然とした街にはゴミ一つ落ちていない。シンガポール政府の厳格な政治によるところも大きいがこの国の人達のモラルの高さが窺える。さながら南洋に浮かぶ真珠である。人工的と揶揄される事もあるが富と美を併せ持つ国、それがシンガポールなのである。

そのシンガポールの空の玄関口であるシンガポール国際空港に一人の青年が降り立った。鋭い切れ長の細く黒い眼と光により茶にも見える細いくせのある黒髪を持つ引き締まった身体を持つ長身の東洋人の青年である。赤のカッターは上のボタンが開けられその下から黒いシャツが見えている。黒のズボンは動き易いスラックスである。彼の名は風見志郎、世界を股にかける探偵でありまたの名を仮面ライダーブイスリーという。

かっては仮面ライダー一号こと本郷猛の後輩であり生化学研究室に籍を置き細菌の研究に従事する若き科学者であった。体操やモトクロスレースでも有名でありその将来を期待されていた。心優しい両親と自分を慕う妹に囲まれ何不自由ない幸せな日々を送っていた。だが彼はその全てを一瞬にして奪われることとなった。

ゲルショッカー壊滅後死んだと思われていた首領が新たに結成した組織『デストロン』の行動を目撃してしまった事により彼は命を

狙われる事となる。デストロンの行動は執拗であり遂には彼の両親と妹までもが彼の目の前で惨殺されてしまう。

復讐を誓った彼はダブルライダーに自分を改造人間にしてくれるよう頼み込む。だが改造人間としての苦しみ、そして哀しみを知る彼等は一度はその懇願を振り切る。

しかし二人を救うべく瀕死の重傷を負った彼を見て二人は考えを変えた。彼の命を救うべく彼を第三の仮面ライダー＝仮面ライダーブイスリーに改造したのである。一号の技、二号の力を受け継いだ彼は立花藤兵衛や珠姉弟、そしてライダーマンこと結城丈二達と出会い共に戦い遂にデストロンを滅ぼしたのだ。デストロン滅亡後彼は日本を離れ表向きは探偵として世界を回り世界各地で暗躍する悪の組織と戦い続けた。クールな中にも哀しみと熱さ、そして暖かさを秘めた男である。

その彼を見下ろす何かがいた。

それは青白く燃える人魂だった。やがてその人魂は人程の大きさになるとそのまま人間の形をとりはじめた。

右に眼帯をした髑髏の顔をしている。黒い髪が髑髏から直接生え不気味さを一層際立たせている。赤を基調とした軍服は肩等に豪奢な金モールを着けている。下は黒のズボンである。右手には大鎌がある。名をドクロ少佐という。

ドクロ少佐、その名を聞いて震え上がらぬ者はいない。かって日本には忍者という暗殺、諜報を生業とする者達がいた。影に生き影に死ぬ。闇の中に潜み狙った者は必ず葬る。彼等の使う驚異的な体術、そして手裏剣やまきびしといった独特の不思議な形状の武器、これ等を総称し人々は『忍術』と呼んだ。

彼等は戦国時代には日本を所狭しと暴れ回った。その力を恐れた織田信長は彼等の主な勢力の一つである伊賀を攻め伊賀の国において凄惨な殺戮戦を展開したのである。

安土桃山時代に入ると他の者に混ざり日本を出る者も現われた。その中の一人が当時陰謀渦巻くイタリア半島へと渡ったのである。

彼は傭兵として、刺客としてローマ＝カトリック教会やメディチ家等多くの勢力に雇われた。そして多くの仕事をやり遂げてきた。生まれてから死ぬまで彼は闇に生き生を刈り取る仕事をしてきた。彼の心は人から人ならざる者、異形の者のそれと化してしまうのも当然の成り行きであったのだろう。

現身は滅んだ。しかし魂は残った。彼は死神として甦り再び生を刈り取りはじめた。かっての生業としてではなかった。楽しみとして生を刈り取っていたのだ。その手に持つ大鎌で多くの者の魂を断った。イタリアの黒い夜を鮮血の帳で覆いローマやヴェネツィアといった美しい街を土色をした屍で覆い尽くした。彼こそはイタリアを影と闇の世界から支配し恐怖と絶望の色で塗り替えた悪夢の神であった。

その子孫がドクロ少佐である。祖先忍術に咥え自らが鍛え上げたイタリア忍者集団ＤＤＤを率いその悪名を轟かせた。

南海の死神その二

デルザー軍団一の刺客とされ彼に命を狙われ生を全うした者は一人を除いていない。

「あれが仮面ライダーブイスリー、風見志郎か」

ドクロ少佐は出口に向かう風見を見下ろしつつ言った。

「そうだ、あの男がいる限り我等の作戦は円滑に進められぬ」

ドクロ少佐の周囲が一瞬闇に包まれた闇の中にレーザーが発せられるとその中から一人の男が現われた。

蠍を模した金の兜に銀の鎧とズボンを着けその上から赤い戦抱と青のマントを羽織っている。黒い顎鬚を生やし手に斧と盾を持つこの男の名はドクトル＝ゲーという。

かってはライン川流域に昔からあった名門貴族の家の当主であった。医学者でもあり細菌研究において才を発し名を知られるようになる。このままいけば彼は細菌研究の権威としてコッホに並ぶ名声を得たかも知れない。だが時代が彼の人生を狂わせた。

第一次世界大戦の敗北と大恐慌によりかって繁栄と強勢を誇ったドイツは一転して貧困と絶望の底へと落とされた。街には孤児や浮浪者が溢れ混迷と退廃が支配した。彼自身も自分と祖国の未来に絶望し酒浸りの日々を送っていた。ある時仕事先のミュンヘンで一人の男の演説を聞いた。それがはじまりだった。

男の名はアドルフ＝ヒトラー、オーストリア出身の政治家とは思えぬ程若い男は類稀な演説の才能と政治力、そしてカリスマ性を有していた。彼の演説に心打たれたゲーは早速ナチスに入党し悪魔博士と恐れられたメンゲレ等と共に忌まわしき生体実験へと没頭していった。ここで彼の中に隠されていた冷血さと残忍さが現われた。次々と罪無き人々を細菌や化学兵器の実験材料とし、そのおぞましい結果を見て血生臭い笑みを浮かべるのであった。

ナチス崩壊後はスイス経由で中近東に渡りその地に潜伏しテロリ

ストとして暗躍した。やがてデストロンに招かれ大幹部となり北アフリカで暴れ回る。その功績を認められ日本支部長に就任する。細菌戦を得意とする冷血で残忍な人物である。

「ドクトル＝ゲーか。そちらの方の準備は出来ているか」

「安心しろ。最早九分九厘出来上がっている。あと数日で完成だ」

「そうか。ではあとは主幹戦力となる怪人だけだな」

「うむ、それだが」

「それはわしが説明しよう」

二人の後ろの床から突如として人が現われてきた。白髪と白髭の容貌魁偉な老人である。膝まである白衣と白マントを身に着けている。右手と左脚は生身であるが左手と右脚は機械となっている。ジンドグマの天才科学者幽霊博士である。

中国湖北省武漢に生まれた優秀な科学者として知られこの国において彼を知らぬ者はいなかった。多少風変わりではあったがその俊英ぶりを遺憾なく発揮していた。

だが突如として姿を消した。当時飽くなき研究意欲に捉われていた彼は次第に人の道に外れた邪な研究を望むようになっていた。そこをドグマの帝王テラーマクロに目を付けられたのだった。その招きに応じ彼はドグマに入った。そこで悪魔元帥と出合った。悪魔元帥がテラーマクロと袂を分かつと彼は悪魔元帥についた。彼の組織ジンドグマにおいては怪人の製造と細菌戦を担当し仮面ライダースーパー1を苦しめた。

「幽霊博士」

二人は同時に彼の名を呼んだ。彼はそれを聞きニタリ、と笑った。

「怪人なら既に届いている。イギリスのブラック将軍から三体」

「それでは足りぬな」

ドクトル＝ゲーの言葉に対し幽霊博士は笑った。

「それに加えてわしが再生させたものが四体。合計で七体だ」

「七体か。それだけあれば充分だな」

「うむ。二人は基地建設を進めてくれ。風見志郎は俺がやる」

ドクロ少佐が二人に言った。
＼「うむ、任せたぞ」
ドクトル＝ゲーが答えた。
「イタリア忍者集団ＤＤＤ，その強さと恐ろしさ、とくとお見せしよう。ケケケケケケケケ・・・・・・」
ドクロ少佐は不気味な笑い声をけたたましくあげるとその姿を再び燃え盛る青い人魂へと変えた。そしてそのまま中空へと消えていった。

南海の死神その三

「仮面ラーイダブイスリー、今度こそ貴様は我等に敗れることになる。この南洋の街においてな」

ドクトル＝ゲーはタクシーに乗り空港を後にする風見を上から見下ろしながら言った。その後ろには音も無く数体の影が現われていた。

シンガポールはその人口の大部分が華僑で占められ所々に中国文化の影響が見られる。だが世界でも有数の貿易都市でもあるこの都市国家は多くの国から多くの人々が来訪し生活する国際国家なのである。

ＡＰＥＣの本部も置かれ環太平洋地区の覆うの人達がいる。日本人やアメリカ人、中国人といった世界中を股にかける人達やＡＳＥＡＮ各国は無論の事アラブやヨーロッパからも人が来る。それと共に彼等が持つ文化ももたらされる。

その結晶の一つとも言えるのがシンガポールの象徴マーライオンである。『海の獅子』という意味のこの架空の生物は陸と海、中華と欧州、イスラム、そして南洋のそれぞれの文化が互いに混ざり合い影響し合う事により誕生したのである。

タクシーから降りマーライオンを一瞥した後風見は予約していたホテルに入った。

ホテルに入りフロントに挨拶し日本語新聞を買うとそのまま自分の部屋に入った。白を基調としたヨーロッパ風の落ち着いた雰囲気の部屋だ。中に入るとソファーにすわり新聞に目を通す。

経済面での日本や東南アジアの動向の他にイスラエルとパレスチナの情勢が政治面に大きく取り扱われていた。他には中国の長江流域の開発やＮＡＳＡの新型ロケット開発等が取り上げられている。

中には変わった記事もある。ドイツの古城が謎の爆発により崩壊した事件やインドでの人に似た未確認動物の噂話を扱った記事等だ。

「・・・・・・・・」

風見は表情を変えず落ち着いた様子で新聞を読んでいる。それを一通り読み終えたたんでテーブルの上へ置いた。白のカップに紅茶を注ぎ込み一口飲む。ミルクだけで砂糖は入れない。その方が茶とミルクの味を味わえるからだ。一杯飲み終えた時チャイムが鳴った。

「誰だ?」

ルームサービスは頼んでいない。ホテルのスタッフ以外に部屋は知らせていない。だとすれば何者か。ドアに手を掛け鍵を解こうとする。

鍵が解かれる直前に何者かが部屋に押し入って来た。黒のスーツに赤のプロテクターとマスクを着けている。三人いた。

「ギィッ」

彼等は部屋に入るとそのまま部屋を見回した。明らかに何か、若しくは誰かを探している。

焦った仕草で部屋中を見渡す。しかし探しているものは何処にも無い。その時上から声がした。

「俺ならここだ」

「ギッ!?」

蹴りが上の壁から来た。一人がそれを喉と顎に直接受け後ろの壁に叩き付けられる。

残った二人がギョッとして上を見上げる。そこに風見志郎はいた。刺客達が部屋に乱入する直前に跳び上がり壁に張り付いていたのだ。

スタッと二人の前に跳び下りてきた。そして右手を前に出し身構える。

「その格好ジンドグマではないな。貴様等一体何者だ?」

その問いに口で答えようとしない。無言で襲い掛かって来る。

「ギィッ」

叫び声と共に拳を繰り出す。風見はそれを右手で払いのけると左の正拳を相手のみぞおちへ叩き込んだ。そして返す刀で左にいた最後の一人の首に手刀を打ちつけた。

「見たところ単なる戦闘員のようだが」
倒れている三人のうち一人に歩み寄ろうとする。すると突如としてその一人の身体から緑色のガスの様なものが噴き出した。
「なっ！？」
それは植物の胞子のようだった。咄嗟に身の危険を感じ後ろに跳び退いた風見は無事だったが三人はそのまま胞子に包まれた。そして骨まで完全に溶けて消えてしまった。後には緑色の小さな水溜りが三つ残っていたがそれも霧消してしまった。
「どうやら奴等は俺の事を既に知っているようだな」
風見はそれを見て呟いた。部屋を出てホテルのスタッフには突然入った仕事で部屋を暫く開けるとだけ言った。そしてホテルを後にしてホテルの地下の駐車場に向かう。
駐車場に置いていたバイクに乗った。事前に日本からこのホテルに運ばせていたのだ。青を基調としたカラーリングで赤と白の線が入れられている。装飾性の無い普通のバイクだ。エンジンをかけるとそのまま駐車場を後にした。
道路に出バイクを走らす。向かうは海に面したとある公園である。

南海の死神その四

風が潮の香りを運んで来る。風見はその香りを鼻で味わいながら己のこれまでの数奇な戦いの日々に思いを馳せていた。

その始まりは偶然からであった。デストロンに殺害された人が溶解するのを目撃し珠純子という女性を保護したのが始まりだった。デストロンの改造人間ハサミジャガーに両親と妹を殺され自身もダブルライダーを救出した際に瀕死の重傷を負ってしまう。その彼の命を救う為にダブルライダーは彼に改造手術を施した。仮面ライダーブイスリーとして復活した彼はハサミジャガーを倒し、太平洋上に姿を消したダブルライダーの遺志を継ぎデストロンを倒す為に戦う決意をした。彼の前に生物と機械の合成怪人やデストロンとの結託部族等が前に立ちはだかった。だがそれに打ち勝ち遂にデストロンを滅ぼした。デストロン壊滅後は世界各地を転戦し歴代の悪の組織と戦い続けた。長い戦いの日々だった。幾度となく死線をくぐり抜けてきた。だが彼はそれをつらいとも苦しいとも思ったことはない。心の中には常に両親と妹がいる。目の前で無残に殺された者達、これ以上自分のような境遇の者を出したくない、そう思うから彼は戦い続けてきたのだ。

その彼を陰に日向に支えてきた者達がいる。彼等と会う為に彼は今この公園に来たのだ。

遠くから足音が近付いてくる。二人いる。やがてその二つの足音は風見の前に来て立ち止まった。

「お久し振りです、風見さん」

「ああ、元気そうだな」

二つの足音のうち一人は良く知っていた。インターポールの工作員である佐久間健だ。

デストロンの活動及びその野望はやがて世の人の一部に知られるようになった。それに対し危惧を覚えた各国政府の高官達により極

秘でインターポール内で任命された特別捜査官達がいた。彼等の通称をデストロンハンターといった。その名の通りデストロンとその関係者達について捜査し逮捕する。場合によってはその命を左右する権限を与えられた者達であった。

デストロンハンターは世界各地でデストロンと戦った。日本には六名のハンターが派遣されたがそのうちの一人がこの佐久間健だったのだ。そしてドクトル＝ゲーと戦ううちに仮面ライダーブイスリー＝風見志郎と知り合い彼に協力するようになった。暫くして別の任務で日本を離れその地で任務を続けるうちにデストロンは壊滅した。これで本来の部署に戻る筈だったが仮面ライダー、とりわけブイスリーとの縁を買われ特別捜査官に留まった。その任務はライダーとの共闘及びそのパイプ役であった。

この任務も彼は確実にこなしていた。そして多くの悪の組織と戦ってきた。そして今も特別捜査官の任にあり捜査を続けているのである。

「上海でのジンドグマ中国支部壊滅以来ですね。またお会い出来て嬉しいです」

「俺もだ。お互い明日はどうなるか知れない身の上だからな。ところで健」

「はい」

「シンガポールで何か起ころうとしているんだな」

「・・・・・はい。やはりご存知でしたか」

佐久間の顔が暗いものになった。

「さっき宿泊先のホテルに刺客が来た。赤いマスクと黒のスーツの連中だ。一見デルザー軍団の戦闘員に似ていた。心当たりはないか」

「赤のマスクと黒のスーツですね」

「そうか。知っているのか」

「はい。我々が今追っている連中です」

「何っ!?じゃあ奴等は・・・・・」

風見の目が光った。

「それからは私に話をさせて下さい」
それまで佐久間の横で黙って控えていた男が割って入ってきた。
「君は？そういえば名前をまだ聞いていなかったな」
見れば細面のアジア系の若者である。茶がかった髪をセンターで分けている。切れ長の一重の黒い瞳が白く端正な顔立ちによく似合っている。黒がかった濃い茶のスーツと紺のネクタイ、そして白いカッターの上から茶のトレンチコートを着ている。
「役清明（えんのきよあき）と申します」
「日本人か？」
「はい。長野県警警備課より派遣されてきました」
「ほう。長野県警から」
「はい。突然上の方から通達を受けまして。階級は警部補です」
「警部補、か」
風見は少しいぶかしむ眼をした。

南海の死神その五

「はい。インターポールでの肩書きは佐久間捜査官と同じく特別捜査官となっています。権限も同じです」
「ふうむ。で役捜査官、話の続きを聞かせて欲しいのだが」
風見の問いに役は頷き懐から一枚の写真を取り出した。
「この人物をご存知ですね」
写真に映る男を見て風見の眼の色が変わった。蠍を模した兜を被った黒髭の男、ドクトル＝ゲーであった。
デストロンの第一次日本攻勢において幾度となく死闘を演じてきた。特に四国を巡る攻防と日本全土に一斉攻撃を仕掛けた『日本全滅作戦』においては風見と日本をあと一歩のところまで追い詰めた男である。最後は捨て身の攻撃で勝利を収めたが彼を最後の最後まで苦しめ続けた宿敵であった。だが彼は死んだ。その彼の写真を今見るとは。
「ドクトル＝ゲー。死んだ筈だが」
「はい。一度は死にました。貴方が倒しました」
彼は仮面ライダーブイスリーとの激しい一騎打ちの末に三浦海岸、八景浦にて壮絶な戦死を遂げていたのであった。
「ですが彼は何者かの手により再びこの世に現われたのです」
「何っ、誰の手によって」
「それは解かりません。そして彼は今このシンガポールにいます。かってジンドグマの大幹部であった幽霊博士と共に」
「幽霊博士ーーー。ジンドグマきっての天才科学者と謳われたあの幽霊博士がか」
「はい。彼等はどうやらこの地に基地を建設しようとしているようです」
「基地？このシンガポールにか」
「はい。この国は小さいながらアジア太平洋地域の貿易、商業の中

心地として繁栄しています。ここに基地をおけばアジア太平洋一帯をその影響下に置く事が可能になります」
「馬鹿な、その様な事になれば数十億の人々が生命の危機に曝されることになる」
風見は表情を変わらせた。
「そうです。ですから今回貴方をお招きしたのです」
「・・・・・・・・・そうだったのか。もっともそんなところだろうとは思っていたが」
「はい」
その眼に真摯な、強い光を灯し呟く風見に対し役は言った。戦いを決意した彼を戦場へ誘う、そういった声だった。
「そして建設されている場所は何処なんだ？すぐに壊滅させないと大変なことになる」
「それならば見当はあらかた着いています」
佐久間が懐から地図を取り出して言った。
「む、早いな」
「はい。ここまで調べるのに苦労しましたよ」
佐久間はそう言って苦笑した。
「相変わらず隠れるのが上手い連中でしてね。かれど何とかここまで絞る事が出来ましたよ」
広げた地図に赤丸が着いた場所がある。風見はそこを指差した。
「ここだな」
「はい。間違いありません」
「だとすれば話は早い。すぐに乗り込むとしよう」
「はい。ですが敵も手強いですよ」
「やはり怪人がいるのか」
「おそらく。しかも通常の改造人間達より更に強力な者がいる事が確認されています」
役が風見に言った。
「誰だ、それは」

「はい、デルザーの改造魔人、ドク・・・・・・」
その時風見達を無数の銃弾が襲った。佐久間と役は足下に襲い来る銃弾を素早くかわした。役のその動きは相当に訓練されている者のそれであった。
「誰だっ！」
銃弾は三人の後ろにそびえる一本の大きな木からだった。
「ケケケケケ」
不気味な、闇夜に木霊する死霊の様な笑い声が聞こえてきた。見れば気の上に赤と黒の軍服を身に纏ったドクロの男がいる。
「奴だな、あんたが今言おうとしていたデルザーの改造魔人とやらは」
風見は木の上の改造魔人に顔を向けたままで役に問うた。
「はい。ドクロ少佐、デルザーの中でも特に格闘戦に秀でた男です。気を付けて下さい」
「それに隠密行動にも秀でている様だな。敵ながらやってくれる」
風見達は何時の間にか囲まれていた。先程ホテルで風見を襲った者達と同じ服装であった。
「キィーーーッ」
奇声を発し戦闘員達が襲い来る。数人が手裏剣を投げ、残る者が直接攻撃を仕掛ける。見事なまでに息の合った攻撃だ。
「くっ」
投げ付けられた手裏剣をかわし、弾き返し、襲い掛かる戦闘員達に立ち向かう風見。見れば佐久間と役も戦闘員達と闘っている。
「二人共、ここは俺に任せてくれ」
「えっ、しかし」
「どの道あいつの相手は俺しか出来ない。今のうちに次の行動の準備をしておいてくれ」
風見の口調は強く有無を言わせぬものであった。それに二人は従った。
「了解」

「解かりました」
二人はその場を離脱した。戦闘員の何人かが追おうとするが二人に倒される。
風見は素早い蹴りで二人の戦闘員を倒した。斬り掛かって来た戦闘員を横からの手刀で吹き飛ばす。右から来た一人に対し回し蹴りを入れると正面の最後の一人に正拳を入れた。
「中々やるようだな」
何時の間にか地に降り立っていたドクロ少佐が近付いて来る。対する風見も構えを取った。
「ケケケケケ」
音も無く来た。正拳三段突きが風見に襲い掛かる。
風見はそれを手でことごとく払った。次に膝蹴りが来たがそれも肘で相殺した。
今度は風見が攻撃を仕掛けた。その下顎へ向けて左アッパーを入れる。だがそれはドクロ少佐が右手で払った。逆にその右手を戻し風見の首へ横手刀を入れる。風見はそれに対し懐に飛び込みその右手を両手で掴むと百八十度旋回し背負い投げをかける。
「むんっ！」
だがその背負い投げをドクロ少佐は両足で止めた。受身ではなく地に叩き付けられる直前に着地しその足と背の力を使い踏み止まったのである。

南海の死神その六

「クッ・・・・・・！」

風見の投げを殺したドクロ少佐はその足を使い跳ねた。そして風見の背に両膝を入れる。

「ぐおっ」

もんどり打って前に倒れる風見。その機を見逃すドクロ少佐ではに。振り被った右手に大鎌が浮かび上がる。そのまま振り下ろす。

風見はその危機を本能的に察知した。前転しそれをかわす。二撃、三撃と来るがそれ等を悉くかわす。しかし劣勢は明らかでありこのままでは勝機は無い事も明らかであった。

（いかん、このままでは）

しかしドクロ少佐の攻勢は熾烈である。風見は次第に逃げられなくなってきた。

「止めだっ、死ねぃっ！」

大鎌の先を風見に向けた。すると鎌の先から火炎が噴き出した。

「受けろっ、ドクロ火焔！」

紅蓮の炎が生物の如く不気味な唸り声をあげて襲い掛かる。風見はそれを真上に跳びかわした。

その最中に身体を左へ捻った。そしてその遠心力を使いドクロ少佐の後頭部へソバットを浴びせた。

「グォッ」

この一撃にはさしものドクロ少佐も持ち堪えられなかった。地に倒れ込む。

だが左手で身体を支える。そしてまだダメージに苦しむ身体を信じ難い力で起き上がらせた。

「グググ・・・・・・」

左手で後頭部を押さえながら顔を上げる。しかし視線の中に風見はいなかった。

「おのれっ、何処だ」
辺りを捜す。
「ここだっ！」
つい先程まで少佐がいた木の方から風見の声がした。木の方を振り返る。だがそこに風見はいなかった。彼等悪の改造人間達の永遠の宿敵、仮面ライダーがそこにいた。
赤と白の仮面と緑の両眼、それはまるで蜻蛉の様である。緑を基調としたバトルボディの胸は銀と赤であり白手袋と赤いブーツを着けている。
印象的なのは白い大きな襟に二枚の白いマフラー。そして腰にある二つの風車。ダブルタイフーンである。そのダブルタイフーンこそ彼が何者であるかを指し示していた。彼こそ仮面ライダーブイスリー、一号の技と二号の力を受け継いだ第三の仮面ライダーである。
「おのれっ、変身したか」
「デルザー改造魔人の一人ドクロ少佐、この仮面ライダーブイスリーが相手をしてやる！」
「フンッ、返り討ちにしてやるわ！」
「行くぞっ！」
木の上から飛び降り急降下で鉄拳を浴びせる。
「ブイスリーパァーーーンチッ！」
「ムンッ！」
ドクロ少佐はそれを受け止めた。そして大鎌を振るう。
「トォッ！」
ブイスリーはそれをジャンプでかわす。ドクロ少佐もそれを追い跳躍する。
「させんっ！」
両者が同時にパンチを繰り出した。空中で激しい衝撃音が交差する。両者は地に降り立つと今度は間合いを取りだした。
ジリ、ジリ、と間を離す。先に動いたのはドクロ少佐だった。左手に何かを取り出すとブイスリーめがけて投げ付けた。

「ドクロマキビシ攻め！」
それはマキビシであった。本来は敵の足止めに使用する忍術の道具なのだが彼はこれを飛び道具として使用するようだ。
「無駄だっ！」
ブイスリーはそれに対し両手を顔の位置でクロスさせた。
「細胞強化！」
仮面ライダーブイスリーはダブルライダーに改造される際彼等の力と技の他に数々の特殊能力及び戦闘技能を与えられた。それは全部で二十六あり俗に『二十六の秘密』と呼ばれていた。
この細胞強化もその一つである。細胞を変質させて硬質化する能力でありこれによりブイスリーは絶体絶命の死地を脱した事もある。
「くうぅぅ・・・・・」
呪詛の声を漏らすドクロ少佐。
「ならばこれはどうだぁっ！」
大鎌を横に振り被り思いきり投げ付ける。ブイスリーはそれを横にかわす。
「甘いっ！」
何と大鎌はブーメランの様に反転してきた。回転しつつ不気味な唸り声をあげブイスリーの背へ襲い掛かる。
「これは避けられまい。死ねぇっ、仮面ライダーブイスリー！」
大鎌がブイスリーを真っ二つにするかと思われた。だがブイスリーは両足を後ろに旋回させ前転の要領でそれを蹴り飛ばした。
「ぬうう・・・・・」
「今度はこちらから行くぞ、ドクロ少佐」
ヘッドクラッシャーを浴びせた。ガハッ、と息を吐き出し怯むドクロ少佐に対し続けざまに攻撃を加える。
「トォッ！」
肩車で地に叩き付ける。少佐が起き上がるより先に天高くジャンプした。
「ブイスリーキィーーーーック！」

ブイスリーの得意技の一つである。ダブルライダーのそれと同じく敵への止めの一つとして使われてきた技でありこれにより今まで多くの怪人達を倒している。

何かが砕ける音がした。例え戦車であろうと一撃で破壊するこのキックの直撃を受けて無事で済む者はいない。いや、いない筈だった。

着地するブイスリー。ドクロ少佐は地に伏し倒れる筈だった。だが彼は立っていた。そしてブイスリーに対し不敵な笑みを浮かべている。

「なっ・・・・・・」

今度はブイスリーが驚く番だった。何と少佐は彼の蹴りを浴びても尚平然と地に立っているのだ。

「ケケケケケ、ブイスリーよ。この俺を舐めてもらっては困るな」

「何っ!?」

「俺は死神を祖に持つデルザーの改造魔人、これしきの攻撃で倒れる筈がなかろう」

「ぐっ・・・・・・」

「死神の末裔である俺の身体は普通の改造人間とは違うのだ。それを今貴様に教えてやろう」

ケケケケケッ、と笑う。その単眼が光った。すると信じ難い事が起こった。

南海の死神その七

「何ィッ！」
さしものブイスリーも声を失う。何とドクロ少佐の五体が分裂したのだ。
「受けてみよ、ドクロ分身！」
分裂した四肢がそれぞれ別々に宙を舞いブイスリーに襲い掛かる。右手を叩き落としたものの背に左足の一撃を受ける。
「グォッ！」
それが合図だった。分裂した四肢と胴体が一斉にブイスリーを打ちのめしはじめた。これにはブイスリーも耐えられなかった。たまらず片膝を付く。
「ケケケケケ、どうだドクロ少佐の秘技ドクロ分体、中々の味だろう」
空でドクロ少佐の首がカタカタと動いている。首だけは攻撃に参加せず己が身体の攻撃を見守っている。
「ググゥ・・・・・」
ブイスリーが受けたダメージは大きかった。だがそれでもなお立ち上がる。
「ほお、流石はデストロンを壊滅させただけはある。中々しぶといな」
四肢はまだ揺ら揺らと宙を舞っている。間を置き次なる攻撃を掛けて来るかと思われた。だがそうはしなかった。
「今回はこれ位にしてやろう。だがこの闘いで貴様の実力はわかった。今度会う時は必ず消してやる」
そう言うとドクロ少佐の単眼が再び光った。
「ドクロ再生！」
それまで宙を漂っていたドクロ少佐の四肢と胴がその言葉により首の下に集結した。そして元通りに復元するとまだ足下がふらつい

ているブイスリーを指差して言った。
「このシンガポールが貴様の墓となる。その時までせいぜい残り僅かな人生を楽しんでおくがよい。ケケケケケケ・・・・・・」
そう言うと顔の前に手をかざした。
「火焔隠れ！」
炎がドクロ少佐の全身を包み込む。炎が消えた時ドクロ少佐も消えていた。
「おのれっ、ドクロ少佐・・・・・・」
ブイスリーが呻く様に言葉を発した。そしてガクリと再び片膝を着いた。
「そうか、仮面ファーーーイダブイスリーに重傷を負わせたか」
指令室においてドクロ少佐から話を聞いたドクトル＝ゲーは表情を変える事無く言った。
「そうだ、これで奴の実力は判った。次に闘う時こそ奴の最後の時だ」
「そう上手くいくかな」
誇らしげに言うドクロ少佐に対して釘を刺した。
「何ッ、どういう意味だ」
激昂するドクロ少佐。
「わしはこれまであの男とは幾度となく死闘を交えてきた。そして数多くの作戦を邪魔されてきたのだ。油断してはいかんぞ」
「フン、それはこのドクロ少佐に言っているのか。死神の末裔にしてイタリア暗殺集団ＤＤＤの首領、あの程度の相手なぞ恐るるに足らぬわ」
「では確実に仮面ファーーーイダブイスリーを倒せるのだな」
「無論！卑しくもデルザー改造魔人の一人、嘘なぞ言わぬ。貴公に言われずともやってやるわ」
そう言うと火炎隠れにより姿を消した。
「フォフォフォ、流石に自信家じゃのう」
何処からか声がした。

「・・・・・来ておったか」
声の主は幽霊博士であった。スゥッ、と物陰から姿を現わしてきた。
「盗み聞きするつもりは無かったのじゃがな。フォフォフォ」
「怪人達はどうなっている？」
「無事に七体揃ったぞ。これで文句はあるまい」
「礼を言う」
「なになに、それには及ばぬよ。それでどう使うのじゃ？これからの作戦か、それとも基地の警備か？」
「いや、まずは仮面ラァーーーイダブイスリーを倒す、全てはそれからだ」
「ほほお、慎重じゃのう」
「作戦を遂行するに当たっては慎重に行なうにこした事はない。ましてやラァーーーイダブイスリーがいるのだ。最大の脅威は全力をもって取り除く。これは戦略の常道だ」
「流石はデストロンの大幹部よのう、フォフォフォ」
「見ておれ仮面ラァーーーイダブイスリー、必ず貴様を倒す」
ドクトル＝ゲーが独白する。その後ろで幽霊博士が面白そうに笑っていた。
ドクロ少佐は自らの部屋で骨のテーブルに座し一人酒を飲んでいた。部屋は骨で飾られている。異様な部屋だ。壁には自身の得物である大鎌が架けられている。
「また一人で飲んでいるのかい？」
何処からか声がした。女のものだ。
「貴様か」
壁からボゥッと人が浮き出てきた。赤い服とマントを着た女だ。首から上ははっきりとしないが何やら花の様な形をしている。この頭からこの女が人あらざる者であることが解かる。
「つれないねえ。折角あんたの勝利を祝福しに来てやったというのにさ」

「祝福？いらぬ世話だ。俺があの程度の奴に敗れる筈がない。俺が勝つ事は最初から決まっている」
「言うねえ。流石はデルザーきっての刺客と謳われただけのことはあるよ」
「戯れ言はいい。それより何の用だ？貴様が何の用も無くわざわざ中国から出向いてくるとは思えん」
「ギヒヒヒヒヒ。実はいい情報が入ってねえ。オオカミ長官と鋼鉄参謀が作戦に失敗したって話だけれど」
「何だ、そんな事か。その程度の情報なら俺もとっくの昔に知っていた」
話を聞き憮然と失望の声を漏らす。それを見て女は楽しそうに笑った。
「まあ話は最後までお聞きよ。オオカミ長官も鋼鉄参謀も作戦中ある男と会っていたんだよ」
「ある男！？誰だ」
再び顔をこちらに向けてきた。

南海の死神その八

「おやおや、急に関心が湧いてきたようだねえ」
さも楽しそうに笑う。それに対しドクロ少佐は少し腹を立ててみせた。
「ごたくはいい。続けろ」
「ヒヒヒ。まあ落ち着きなよ。まず鋼鉄参謀だがね、荒ワシ師団長と会っていたんだよ」
「あの犬猿の仲の二人がか。珍しい事もあるものだ」
「そしてオオカミ長官だがね、黒服の男と会っていたそうだよ」
「何っ!?まさか」
思わず席を立った。
「まあまあ落ち着きなって言ってるだろ。で荒ワシ師団長も師団長で別の男と会っていたんだよ。白いマントの男とね」
「奴か・・・・・・」
「そうだよ。あの二人は前にいた組織でも喧嘩ばかりしていたそうだしねえ。今度も何かと主導権争いしてるみたいだよ」
「フン、いくらあの二人が勢力争いをしようが無駄な事だ。どのみちあの男には勝てぬさ」
「まあ今のままではね。だからこそ動いているんじゃないかい?」
女は問いかける様に言った。
「このまま動きが続けばどう転ぶかわからないよ。あたし達にも何かと分け前があったり利があったりするかもね」
「・・・・・・・・ふむ」
ドクロ少佐は杯を置き思案ありげに腕を組んだ。
「まあよく考えておいで。これからどうするかね」
女は笑い声と共に消えていった。
「そうか、面白い事になるかもな」
ドクロ少佐も笑っていた。それまで発していたのとは異なる種の

妖気をその身体から発していた。
　ドクロ少佐との戦闘後風見はホテルに帰っていた。そして佐久間、役等と共にドクトル＝ゲー達が建設しようとしている秘密基地の所在が示されている地図を見ていた。
「やはりアジア太平洋地域における一大拠点にしようというだけはある。これは相当な規模だぞ」
　風見はテーブルの上に広げられたシンガポールの地図のある一点を指し示しつつ言った。その地点はシンガポール国際空港に程近いチャンギの東にあり、また地下にも深く建設可能な場所であり基地建設には最適ともいえる場所であった。
「確かにこの地点に基地を建設されると厄介ですね。それに三方が海で攻め辛い。陸の国際空港方面からしか行くしかない」
　佐久間がその日に焼けた顔に苦渋の色を漂わせ言った。
「ですがそれこそ敵の思う壺です。おそらく陸に戦力を集中させているでしょう」
　役が自身の見解を表情を変える事無く述べた。これは正しい。この事は風見も佐久間も充分承知していた。
「だとすればどうすべきか」
「空から攻める手も考えられますがこれだと下から狙い撃ちにされてしまいます。かといって海からですと所持する武器も限られますし上陸の時に甚大な被害が出る恐れがあります」
「海から？」
　佐久間の言葉に風見の脳裏にある考えが閃いた。
「二人共、俺にいい考えがある。今回の攻撃は俺に任せてくれないか」
「えっ、しかし貴方はドクロ少佐との戦闘でかなりのダメージを受けています。あまり無茶な行動は・・・・・」
「無茶は承知のうえだ。相手はあのドクトル＝ゲー達だ。普通に戦ってそうそう勝てる相手じゃない」
　佐久間が止めようとするのを風見はあえて振り払った。

「聞いてくれ。俺の考えはこうだ。まず・・・・・・」
自分の考えを二人に話しはじめた。話を全て聞き終えると二人は意を決した顔で頷いた。
「解かりました。それでいきましょう」
「風見さん、この命貴方に預けます」「・・・・・・有り難う」
三人はしかと手を握り合った。そして部屋を後にした。
風見はマシンで基地の方へ向かっていた。すぐに公道に出た。
「見ていろ。貴様らの邪悪な野望、必ずこの俺が打ち砕いてやる」
そう言うとハンドルから手を離した。

変っ身
両手をゆっくりと肩の高さで右の真横に置く。左手は肘を九十度にさせている。
そしてその両手を右から左斜め上へとゆっくりと旋回させる。すると風見の腰にベルトが現われ胸も銀と赤になっていく。服も次第に緑のバトルボディになり白の手袋と赤ブーツに包まれた。

ブィッスリャアーーーーッ!!
両手を左斜め上で止め右手を脇に入れる。顔の右半分が赤仮面に覆われる。
すぐに右手を再び左斜め上へ突き出す。そして左手を脇に入れる。顔の残る左半分も赤い仮面に覆われた。
腰のダブルタイフーンが激しい光を発しつつ回転する。これこそ仮面ライダーブイスリーの命の源なのである。

青を基調に赤と白で塗装されたマシンが空を駆る。ダブルライダーが開発したブイスリーのマシン、ハリケーンである。彼等の乗る新サイクロンが丸みを帯びた流線型なのに対しブイスリーのそれはスマートでやや鋭角的である。このハリケーンと共にブイスリーは今まで戦ってきたのだ。

「行くぞ、悪の軍団。仮面ライダーブイスリーの力見せてやる！」
空を飛翔する青いマシン。今光となり炎と共に悪の下へ飛んでいく。
チャンギにほど近い岩の海岸線、潮に打たれる複雑にいりくんだ海岸を数名の戦闘員が見回りをしている。佐久間達の調査通りここが建設途中の基地であったのだ。
「怪しい奴はおらんか」
ドクトル＝ゲーが彼等に問うた。
「ハッ、何処にも見当たりません」
「鴎の影一つありません」
戦闘員達が敬礼をし答える。
「うむ、ご苦労。だがこの基地の所在も目的も既にライダーに知られている。油断してはならんぞ」
「ハッ」
戦闘員達は敬礼をしてその場を去ろうとする。ゲーも別の場所へ行こうとする。何気無く海へ目をやる。その時ふと海面の異常に気が付いた。
「むっ！？」
海面が何やら泡立っている。その泡は信じられない速さでこちらへ向かって来る。
「カジキ！？違うぞ」
「あれは一体！？」
猛スピードで突進してくるそれが姿を現わした。そして海面を疾走して来る。それはハリケーンだった。その上にはあの男がいた。

南海の死神その九

「く・・・・・来たか！」
「まさか海中から！」
ドクトル＝ゲーと戦闘員達が絶叫するのをよそにブイスリーはハリケーンをダイブさせた。地に降り立つとアクセルターンをして停止させ地に降り立った。
「おのれっ、やれい！」
「イィーーーッ！」
ゲーの命令で戦闘員達が襲い掛かる。ゲーはその間に照明弾を打ち上げた。
「来い、怪人達よ！」
「ムッ！」
空に閃光が輝くや否や戦闘員と怪人達がその場に殺到してきた。ゲルショッカーの刺客怪人ネコヤモリ、デストロンの絞殺怪人ワナゲクワガタ、ゴッドの大鎌怪人死神クロノス、そしてブラックサタンの悪食怪人奇械人カメレオーンの四体であった。いずれも暗殺に長けた刺客達である。そしてドクトル＝ゲーも当然そこにいた。
「やはりいたか」
「フン、久し振りだな。仮面ファーーーイダブイスリー！貴様を倒す為に地獄から舞い戻って来た！」
斧でブイスリーを指し示しつつ言う。
「このシンガポールにおける我等が一大拠点を築くには貴様の存在が邪魔になる、消えてもらうぞ！」
「黙れ！このブイスリーがいる限り貴様等の好きにはさせん、その計画必ず打ち砕いてやる！」
「おのれっ、やれい！」
まず戦闘員と共にワナゲクワガタと死神クロノスが来た。
「クワーーーー」

「シューーー」
ワナゲクワガタが角から死巻と呼ばれる鉄の輪を取り出し投げ付ける。死神クロノスが得物である大鎌に炎を宿らせ振り被る。
「むっ」
それを見たブイスリーはまず左から来た戦闘員を蹴り飛ばした。死巻がその戦闘員の首に嵌り戦闘員は悶死した。
次は右から来た戦闘員の頭を掴みアイアンクローをかける。そこへ死神クロノスの大鎌が浴びせられる。その直撃を背に受けた戦闘員は即死した。
「おのれっ」
それを見たドクトル＝ゲーの呪詛の声が漏れる。そこへ跳躍したブイスリーの反撃が来た。
「ブイスリー反転キィーーーーック！」
まず死神クロノスへ一撃を浴びせた。そしてその反動を利用してもう一度空高く舞い上がり空中で向きを変えワナゲクワガタへも一撃を加えた。
二体の怪人は断末魔の叫び声をあげ爆死した。ブイスリーは左右からその爆風を浴びつつネコヤモリと対峙する。
「ウニャアアァァーーーーッ！」
猫そのものの気味の悪い鳴き声をあげネコヤモリは口から炎を吐き出した。
「無駄だっ！」
だがそれはブイスリーには通用しなかった。炎をかわすとそのまま懐に飛び込んだ。
「ブイスリーパァーーーーンチッ！」
ネコヤモリの顔面へ正拳を浴びせんとする。しかしそれはネコヤモリの計算のうちであった。
さっと身を屈めると左手の指にある吸盤をブイスリーの胸に押し付けた。このネコヤモリの吸盤は相手のエネルギーを吸収する力があるのだ。

奇声を発する。その猫の頭と家守の頭、二つの頭をもって必勝の笑みを浮かべる。だがそれはブイスリーの策である。

「甘いっ！」

その左手を掴むと思いきり投げ飛ばした。海面に叩き付けられたネコヤモリは大爆発を起こした。

「来いっ！次は誰だぁっ！」

そこへ幽霊博士が駆け付けて来た。三体の改造人間も一緒である。ガランダー帝国の毒針怪人ハチ獣人、ショッカーの鎖鎌怪人蟷螂男、ネオショッカーの食人怪人ハエジゴクジンである。いずれも戦闘用に造られた怪人達である。

「来たか」

「済まぬ。遅れてしまった」

「いい。奴を倒せられればな」

「うむ」

四体の改造人間に取り囲まれるブイスリー、四方から戦闘員と怪人達が一斉に襲い掛かって来た。

「ギェーーーーッ」

「ギギィーーーーッ」

蟷螂男の鎖鎌がブイスリーの右腕を絡め取る。そこへハエジゴクジンが左手の指から燐粉を放つ。

「オオゥッ！」

鎖鎌で絡め取られた右手を思いきり引いた。蟷螂男はその力に引っ張られ燐粉の盾にされた。

次にその身体を鎖を使って振り回した。怪人達はそれをかわす事が出来たが戦闘員達はこの攻撃により倒されてしまった。

「止めだぁっ！」

大きく上空に振り上げ地面へ叩き付ける。さしもの蟷螂男も爆死して果てた。

仲間の仇を討たんとハエジゴクジンが迫る。それに対しブイスリーは横から手刀を浴びせた。

「ブイスリーチョオーーーーップ！」
鋼鉄の柱を一撃で叩き折る一撃である。これの直撃を受けハエジゴクジンも怯んだ。そこへすかさず攻撃をかける。
「ブイスリーパァーーーーンチッ！」
ハンマーの如き一撃が顔を直撃した。ハンマーの如き一撃が顔を直撃した。ヨロヨロと後ずさると背中から倒れ込み爆発四散して果てた。
「チィーーーーーッ！」
残る二体の怪人のうち来たのはハチ獣人であった。嘴から毒針を飛ばしつつ四本の腕を振り回しブイスリーを突き殺さんとする。
まず右上の突きが来る。それを上からの手刀で叩き折る。
左下から来た。右足を振り上げこれも折った。
次は左上からだ。右手で止める。
最後の右下からの一撃は左のソバットで払う。これで四つの手は全て封じた。
それでもまだハチ獣人は諦めない。嘴に新たな毒針を出しそれでもってブイスリーを刺し殺さんとする。
ブイスリーはそれを止めた。そして後ろへ思いきり投げ飛ばした。
「ディーーーーーッ！」
断末魔の叫びと共にハチ獣人は空を舞いネコヤモリと同じく海面にて爆死して果てた。これで残るは奇械人カメレオーンのみである。

南海の死神その十

「ルロロロロロ」
奇怪な鳴き声と共にフッと姿を消す。
「ムッ、何処だ」
周りを見回すブイスリー。そこへ見えない刃が襲い掛かる。
風の音だけでそれをかわす。そこへ蹴りと思われる一撃が来る。
「グオッ」
顎を撃たれ倒れるブイスリー。そこへ再び見えない刃が来る。
「クッ」
左に転がり危機を脱した。だがその時見えない刃がかすった。血が飛ぶ。
それが決め手となった。返り血が透明となっているカメレオーンに付着した。
「そこかっ」
倒れた状態のまま蹴りを浴びせる。怯んで保護色お解いた隙に攻勢に転じた。
まず連続してパンチを仕掛ける。怯んだところで身体を空高く投げる。そして自らも跳んだ。
「ブイスリーダブルアタァーーーーック！」
落下してくるところに膝蹴りを入れた。落ちながら空中で爆発四散して果てた。
「見事だ、仮面ラァーーーイダブイスリーよ。今度はわしが相手をしてやる」
宿敵ドクトル＝ゲーが前に出て来た。右手に持つ斧が妖しく光る。
「行くぞっ！」
「オオッ！」
両者の斧と拳が撃ち合わされる。ドクトル＝ゲーの斧が不気味な唸り声と共に打ち下ろされる。

金属音が響き渡る。流石はデストロンにおいてその名を知られた男である。生身であろうとブイスリーを相手に引けを取らない。五分に渡り合っている。

「やりおるわ。あの時とは比べ物にならぬ位に強くなっておる」

「くっ、貴様こそな」

両者は間合いを取り言葉を交わす。

「だがそれもここまでだ。決着をつけさせてもらうぞ」

右手で構えを取る。何者か、別のものに変化しようとしているようだ。

「ムッ、まさか・・・・・・」

「そのまさかよ。フフフフ・・・・・・」

ニヤリ、と笑うドクトル＝ゲー。そこへ新たな男が来た。

「待てドクトル＝ゲー！それは俺の獲物だ！」

声の主はドクロ少佐だった。手勢の戦闘員達も引き連れている。

「来たか、ドクロ少佐」

「そうだブイスリー、今度こそ貴様の息の根を止めてやる。この基地の完成の前祝いとしてな」

大鎌を手に間を詰めて来る。

「基地、か」

ブイスリーは意味ありげに言った。

「そうだ、アジア太平洋地域における我等の一大拠点となる大基地だ」

自信に満ちた声で言った。

「そうか、残念だったな」

それに対しあえて不敵に言った。

「何っ！？」

「周りを見てみろ」

「フン、気でも違ったか・・・・・・・・・何ィィィィィッ！」

ドクロ少佐達の顔が凍りついた。周りを戦闘服の男達に取り囲まれていたのだ。

「残念だったな。基地は俺達が制圧させてもらったぞ」
男達の中にいた佐久間健が取り囲まれたドクロ少佐達に言った。
「風見さんの計画通りですね。まさかこんなに上手くいくとは思いませんでしたよ」
役もいた。何故か彼だけスーツである。
「おのれっ、これは一体どういう事だブイスリー！」
「貴様等が俺に気を取られて戦力を集中させているうちに潜入したのだ。インターポールの存在を軽く見ていたな！」
幽霊博士の苦虫を噛み潰した様な問いに答える。
「残るは貴様等だけだ。逃げられんぞ！」
「おのれ・・・・・・」
「最早これまでか・・・・・・」
ドクトル＝ゲーと幽霊博士が腹立たしげに漏らす。二人共手を構えた。ゲーは二度目である。何かしらの切り札があるというのか。
「待て二人共、それにはまだ及ばぬ。ここは落ち延びよ！」
その二人をドクロ少佐が制止する。
「ドクロ暗殺部隊、血路を開け。そして二人と共に安全な場所まで撤退せよ！」
「イィーーーーッ！」
主の号令一下戦闘員達が動いた。そしてインターポールの強者達へ突進していく。
「さあ二人共今のうちだ、さもないと敵の手に落ちてしまうぞ！」
大鎌で突破口を指し示し二人に叫ぶ。
「ドクロ少佐、貴公はどうするのだ！」
ゲーが退却を急かすドクロ少佐に問うた。
「知れた事、俺の任務を果たすだけ。仮面ライダーブイスリーの首を挙げてやる」
「馬鹿なっ、この状況じゃぞ！お主も来るのじゃ！」
幽霊博士が叫んだ。それまでの飄々とした彼からは想像もつかない激しい口調だった。

南海の死神その十一

「俺は暗殺を生業とする死神の末裔。狙った獲物は必ず殺る。それだけだ」
「む・・・・・・・・・」
その言葉に二人は絶句した。そして頷いた。
「解かった。仮面ラァーーーイダブイスリーは貴公に任せる」
「然る場で落ち合うのじゃ。死に急ぐでないぞ」
「ケケケ、俺の事なら心配無用だ。さあ行くがよい」
「うむ」
二人は頷くとその斧と義手を振り回し戦場を離脱した。
「クッ、待て！」
インターポールのメンバーが追撃を仕掛けるがドクロ少佐配下の戦闘員達の手裏剣を駆使した撹乱戦法に阻まれ思うように追撃出来ない。そして彼等は戦線を離脱していく。
「これで良し」
ドクロ少佐はブイスリーと対峙しつつそれを横目で見て言った。満足気である。
「後は貴様を倒すだけだ。このドクロ忍術の粋、見せてやろう！」
そう言うや否や大鎌をサッと構えた。
「ドクロ火炎！」
公園でも見せた火炎攻撃である。ブイスリーはこれに対し間合いを離した。
「ドクロ機関砲！」
ブイスリーに息をつかせる間もなく今度は機関砲を放つ。
「トォッ！」
ブイスリーはそれを後方に大きく宙返りをしてかわした。白い二枚のマフラーが宙で大きく翻る。
「褒めてやるわ。ここまで俺を楽しませてくれたのは貴様で二人目

だ」

スタッと巨大な岩石の上に降り立ったブイスリーに対し言った。

「ほう、それは光栄だな」

ブイスリーはあえて余裕を含んだ声で返した。

「だがそれもここまでだ。この俺の最大の技で苦しまずに葬ってやる。行くぞ！」

大鎌を放り投げるとパッと身構えた。

「ドクロ分体！」

上空に浮かび上がると頭部と胴体、そして四肢が分裂した。公園での戦いでブイスリーに重傷を負わせたドクロ少佐の必殺戦法だ。

あの時と同じく両手両足がブイスリーに襲い掛かる。今度は胴体も来ている。

「死ねぇっ！」

ドクロ少佐が叫ぶ。四方八方から死が迫り来る。その時だった。

「トォッ！」

空高く跳んだ。そして太陽を背に身体を丸める。そして急降下すると共に三回転した。

「ブイスリー回転フルキィーーーーック！」

回転から得られるその力と急降下により得られる力、二つの力を両足に乗せた。そしてその蹴りを渾身の力を以って宙に浮くドクロ少佐の頭部に加えた。

「グゥオッ！」

ドクロ少佐の頭部は直撃を受け弾き飛ばされる。地に叩き付けられ毬の様に三四回大きく跳ね地で回転し動きを止めた。

「グ、グググッグ・・・・・」

苦悶の声を出しながらもまだ生きていた。頭部が地に叩き付けられると同時に落ちて動かなくなった両手両足、そして胴体がピクッ、と動きジリジリと頭部のある方へと集まっていく。そして一つ、また一つと合体していく。

「ク、ククッ、ブイスリー、何故俺のこの頭を狙った・・・・・」

頭を左手で抑えつつヨロヨロと立ち上がりながらブイスリーに対し問うた。
「貴様があの技を仕掛ける時頭だけは動かなかった。それは分裂した身体の動きを頭で全てコントロールしているからだ」
「グゥッ、気付いたか」
「ならば頭を狙えばいい。そうすれば他の身体の動きも止まる。そう考えたのだ。まさかこれ程のダメージを与えるとは思わなかったがな」
「そ、そうだったのか。流石は仮面ライダーブイスリー。オ、俺の負けだ」
「止めを差してやろう。行くぞ！」
ブイスリーが再び跳び上がろうとしたその時だった。何処からか濃緑色の毒々しい液体がブイスリーへ向けて放たれた。
「ムッ！？」
ブイスリーは咄嗟に後ろへ跳びそれをかわした。
“ギヒヒヒヒヒヒ、流石だねぇ、あれをかわすなんて”
不気味な女の声がした。
「誰だっ！」
“ライダーブイスリー、それはあんたが思っている通りのことさ”
「くっ、そうかまた来たか」
声の方へ身体を向ける。そこにはマントを羽織った花の様な頭の形をした女のシルエットが立っていた。右手には頭と同じ形をした先端の奇妙な形の杖がある。

南海の死神その十二

“折角だけど今あんたとやり合うつもりは無いよ。ただ今あんたにドクロ少佐を倒されちゃあ困るんでね。その為にわざわざシンガポールまで出向いて来たんだよ」

語りながら杖を悠然と構える。

「さあ、ドクロ少佐今のうちだよ。ドクトル＝ゲー達のいるところまで落ち延びな」

「う、うむ。かたじけない」

そう言うと右手を顔の位置でゆっくりと下から上へ上げた。

「ドクロ火炎隠れ！」

炎が沸き起こる。そしてドクロ少佐の身体はその中に消えていった。

「クッ、待て！」

追おうとする。だがそのまえにシルエットの女が杖の先から例の緑の液体を吹きかけてきた。

「ムッ！」

「言っただろう、やらせはしないって」

「クッ・・・・・・・・・」

その間にドクロ少佐は完全に炎の中に消えその炎も完全に消え失せていた。

「これで良し、と」

「貴様・・・・・・」

怒るブイスリーが攻撃を仕掛けんと身体中、とりわけ両足に力を込めんとする。

「およしよ。今あんたとやるつもりは無いよ。あたしも忙しいんでね」

そう言うとマントで身体を包みその中に消えていった。

“次に会う時を楽しみにしているよ。もっともあんたがそれまで生

きていれば、の話だけれどね”
「ぬかせ！この仮面ライダーブイスリー、決して貴様等には屈さん！」
“ヒヒヒ、そうかい。なら楽しみにしているよ”
影はそう言い残すと消え去り気配も何処かへと去った。
“イヒヒヒヒヒヒヒヒ”
しかし不気味な笑いは暫くの間その場に残っていた。
やがて佐久間と役、そしてインターポールのスタッフ達が戻って来た。風見も既に変身を解いていた。
「風見さん、無事でしたか」
「ああ。残念だがドクロ少佐には逃げられてしまった。そっちは？」
「こっちもです。結局振り切られてしまいました」
「そうか。ドクトル＝ゲーとはいずれ決着を着ける時が来るな」
「はい・・・・・・」
風見は海を見た。先程までの死闘が嘘であるかのように静かで青く澄みきっている。
「おそらくドクトル＝ゲーやドクロ少佐だけじゃない。今まで俺達が戦ってきた多くの強敵が地獄の底から甦ってきている。いや、奴等だけじゃない。まだ見た事の無いとんでもない奴がいる筈だ」
「・・・・・・・・・」
皆何も語らない。それは今回の死闘で皆骨身に染みていた事なのだ。
「ドクロ少佐と戦っている時邪魔が入った。この毒液を吹き掛けて来た奴だ」
そう言って足下でケロイド状に溶けた岩を指差す。
「正体はよく解からなかったがおそらくデルザーの改造魔人の一人だろう。それもかなり腕の立つ奴だ」
岩はまだ溶けていた。シュウシュウと白い煙を出している。
「シンガポールでの奴等の計画は潰えた。だがまだ世界の何処かで奴等は暗躍している。俺はこれからそれを探し出し一つ残らずこの

手で叩き潰してやる」

「先輩・・・・・・・・・・」

「風見さん・・・・・・・・・・」

風見の強い決意に佐久間も役も言葉を失った。幾多の修羅場をくぐり抜けてきた彼等もその決意には心を打たれた。

（父さん、母さん、雪子、見ていてくれ。俺は必ずこの世の悪を全て討ち滅ぼしてやる）

風見は二人に別れを海に背を向けるとその場を後にした。海が彼の中に秘めた激しい心を鎮めるかの様に碧く優しい色をたたえていた。

南洋の死神　完

２００３・１２・５

廃墟の巨人その一

廃墟の巨人

「そうか、ドクロ少佐も敗れたか」
豪奢な椅子に座した男が戦闘員の報告を聞きながら言った。
「ハッ、シンガポールにおいて建設中であった我等の基地はインターポールの手に落ち破壊されました」
戦闘員が敬礼し引き続き報告する。
「あの基地がか。そしてドクロ少佐は今どうしている?」
何処かの地下に造られた部屋らしい。掘り抜かれた岩が露出し松明により灯がとられている。座した男の前には黒檀のテーブルがある。
「御自身の本拠地であるイタリアへ戻られました。傷を癒されていると思われます」
「そうか。それでは暫くの間動けぬな」
「ハッ、残念ながら」
「よし、御苦労。下がって良いぞ。引き続きライダー達と他の者達の諜報を怠るな」
「了解致しました」
戦闘員は敬礼し部屋を後にした。
「ドクロ少佐が生き残ったか。あの女が動いたか」
机の上に置かれたグラスに酒を注ぎ込む。赤い血の様なワインだ。
杯を手に死一気に飲み干す。ワインの香りが部屋に満ちていく。
「さて、これからどうするかだ」
杯を置いた。その手は白手袋で覆われていた。黒いスーツとマントに身を包み首には白スカーフを巻いている。暗い為かその顔はよく見えない。しかしその至る所から異様な光を発している。その光から彼が人でないことがわかる。
「ブラック将軍達も欧州での戦局建て直しに忙しい。インドは壊滅

状態だ。鋼鉄参謀も動けぬか」
　壁に掛けられている世界地図に目をやる。その中の九つの場所にマークが付けられている。そのうちの二つ、欧州とインドにはダーツが刺さっている。
「ダブルライダーが。小癪な真似を」
　忌々しげに吐き捨てる。
「そして今度はブイスリー。やはり奴等を何とかしなければいかんな」
　懐からダーツを取り出す。シンガポールに射ろうとしたその時だった。
「ムッ!?」
　彼がダーツを放つより早く何かが地図に突き刺さった。丁度シンガポールの場所だった。
　刺さっているのはトランプのカード。それもスペードのキングである。
「・・・・・貴様か」
　カードが飛んで来た方に憎々しげに顔を向ける。そこに奴はいた。白い服にマント、腰の左右には剣が吊られている。やはり首から上は見えない。しかし全身から発せられる気が彼が只者ではないことをあらわしていた。
「これは申し訳ないことをした。くつろいでいるところだったか」
　不敵さと余裕をこれ以上ない程込めて言う。その口調から自身に対する絶対の自信が感じられる。
「フン、今それは止めた。一体何の用だ」
「足した用事ではないが。聞きたい事があってな」
「聞きたい事？」
　言葉尻がピクン、と上がった。
「そうだ。この前ドイツに行っていたそうだな」
　以前オオカミ長官と密会した時の話だ。
「ドイツ？知らんな」

わざととぼけてみせる。
「それはそうと俺も貴様に聞きたい事がある」
逆にこちらから切り返した。
「何だ?」
「インドでの件だが。何故犬猿の仲のあの二人が合ったのだ?」
続けた。
「裏で仕組んだ者がいると言われているようだが」
「さて、何の事やら」
白服の男も知らぬふりをする。二人共腹の中を探り合うが互いにそれを隠し合っている。
「知らないか。ならいい。用件はそれだけか」
「もう一つある。情報を持って来た」
「情報?」
「そうだ。知りたいか」
「内容によっては高く買ってやる」
「そうか」
一枚のカードを黒服の男の前に投げた。それはダイヤのナイトだ。
「このカードは・・・・・・」
男はカードを手に取りいぶかしんだ。
「ベイルートにある男が来た」
「ある男?」
「貴様も知っている。結城丈二。またの名をライダーマンという」
「何ッ、あいつがか!」
黒服の男は思わず声をあげた。
「これが何を意味するか解かるな」
「おのれっ、感づいたか」
「既にベイルートにも情報は入っている筈だ。今頃対策が検討されているだろう」
「ぬうう、それにしても・・・・・・」
「ベイルートにも改造魔人がいるだろう。誰だ?」

「・・・・・・・・岩石男爵だ」
黒服の男は忌々しげに言った。
「ほお、あの単細胞が。これは面白い事になりそうだな」
その口調には明らかに嘲笑の色があった。
「貴様、何が楽しい」
黒服の男は白服の男を睨みつけた。
「別に。それにしても何か焦っているのか？急に機嫌が悪くなったようだが」
「フン、何でもないわ」
「そうか、これは失敬」
白服の男は表向き謝ってみせた。
「まああの男の事だ。何も考えず力のみでライダーマンを倒そうとするだろう。かってデストロンで将来を渇望されライダー達の知恵袋とも言われるあの男に力のみの攻撃で勝てるとは思えぬがな」
「むう、確かに」
これには黒服の男も納得した。岩石男爵の粗暴さと浅慮さはデルザーの時から有名であったのだ。
「では俺はこれで失礼させてもらう。こちらにもやらねばならぬ仕事があるのでな」
そう言うと何処からか数枚のカードを取り出してきた。

廃墟の巨人その二

「マントフェイド！」
パッとカードを上に投げるとその中に隠れるように消えていった。カードも地に落ちると煙の様にスウッと消えてしまい後には何も残らなかった。
「・・・・・奴め、俺と岩石男爵の関係について知っているな」
黒服の男は一人残った部屋で忌々しげに呟いた。
「それを知ったうえで情報を伝えに来たか。相変わらず腹の底の読めん奴だ」
頭部にある無数の、特に中心の巨大な光が妖しく輝く。
「だが奴の言う事は道理。岩石男爵だけではライダーマンの知略の前に敗れるのは目に見えている。・・・・・度し難い馬鹿だがあれはあれで使いようがある。手駒は大事にしなくてはな」
そう言うと男は羽織っていたマントを脱ぐとそれを上から被った。するとマントだけが地に落ち男は何処かへ消えていた。
「奴も動き始めている頃だな。まあ手駒を粗末にするわけにもいくまい」
先程の白服の男が足下に白い煙が立ちこめる真っ暗闇の部屋で赤い円卓に座していた。
「では俺も手を打たせてもらおう。いよいよとっておきのクイーンに働いてもらう時が来た」
カードを切りテーブルの上に一枚、また一枚と置いていく。その真中のカードを手に取った。
「ハートのクイーン、これでよし」
指にスナップを効かせ手首を捻っただけでカードを上に投げる。カードは放物線を描いて回転しつつ地に落ちた。
「イーーーッヒッヒッヒッヒッ」
カードが変化し不気味な笑い声と共に誰かが立ち上がって来た。

「お呼びですか？」
赤い双眼が暗闇の中に光った。
「うむ。少しばかり働いて欲しいのだ」
「お安い御用です。イヒヒヒヒヒヒ」
再び不気味な笑い声が木霊する。暫しの話し合いの後杯を重ね当てる音がし二人の姿は消え去っていた。
古来より水と地を巡りメソポタミアの血では争いが絶えなかった。ヒッタイト、アッシリア、バビロニア、ペルシア等多くの帝国が興亡した。『海の民』と呼ばれる謎の民族やフェニキア人、ミケーネ人等海洋民族もいればエジプト人やペリシテ人といった陸の民族もいた。ユダヤ人もいた。多くの民族がこの荒涼とした地において国を造り滅びそれを繰り返していた。
マケドニアのアレクサンドロス大王の遠征以後は彼の遺臣達が国を持ったがやがてローマに飲み込まれていく。そのローマも宿敵ペルシャとの終わりなき争いに入りゼノビアの台頭を招いてしまった事もある。
ローマが東西に分裂し東ローマ帝国となってもそれは変わらなかった。この地を巡ってペルシャとの争いは続いた。とりわけユスティニアヌス帝とホスロー一世の対決は有名であろう。やがてこの地に大変革が訪れる。
預言者ムハンマドがイスラム教を興し瞬く間にこの地を席巻したのである。その勢いは止まる所を知らず中央アジアや北アフリカ、そしてイベリア半島にまで広がった。さしもの東ローマ帝国も劣勢に追いやられローマ＝カトリック教会に援軍を求めた。
これに対しローマ＝カトリック教会は十字軍でもって応えた。イスラム諸国と彼等の死闘が繰り広げられそれが約二百年間続いた。モンゴル帝国や東ローマ帝国も交えこの地は混沌とした状況になった。
十字軍もモンゴルも去り東ローマ帝国も斜陽になるとオスマン＝トルコが台頭した。強さと寛容さを併せ持ったこの国は飛ぶ鳥を落

とす勢いで勢力を拡大し東ローマ帝国も滅ぼしこの地の覇者となった。この大帝国による支配は長い間メソポタミアと中東に平和と繁栄をもたらした。

多くの民族がこの地において興亡を繰り返したがユダヤ人達もそうであった。

ローマにエルサレムを追われ流浪の民となった彼等は世界各地に散った。

彼等は欧州にも散った。金融業等を営みつつ生活を送っていた。知識人や政治家となった者も多い。異教徒である彼等に対する偏見は強く事あるごとに迫害と弾圧が加えられた。

彼等に強い団結心と望郷の念が生まれたのは自然なことであった。これはやがて自らの国を持とうという思いへと変わる。いわゆるシオニズムである。長い間強勢を誇ったオスマン＝トルコも栄枯盛衰の理には逆らえず第一次大戦での敗北により崩壊は決定的となった。大戦中にイギリスと協約を取りつけていたユダヤ人達はエルサレムにおいて自分達の国を建国すべく入植を開始した。

廃墟の巨人その三

しかしイギリスの舌は二枚舌であった。この地に住むパレスチナ人達の独立も密約していたのであった。

ユダヤ人のこの地への入植が進むにつれ対立の芽が育つようになった。

ビリヤードの球の様なものであろうか。一次大戦により崩壊したドイツ帝国に魔性の独裁者が出現した。彼の名はアドルフ＝ヒトラー。何もかもが崩れ去っていたドイツを強力な全体主義国家として復活させた彼は同様にユダヤ人に対する弾圧を開始した。奇しくも同じ全体主義国家であるソ連の悪夢の独裁者ヨシフ＝スターリンも政敵トロッキーへの敵愾心からか同じ様にユダヤ人を弾圧していた。

これ等の暴風の様な迫害を避け欧州を出るユダヤ人は後を絶たなかった。多くは故郷であるカナンの地を目指した。

人類の歴史にその禍々しい名を残す全体主義国家によって多くの同胞の命を奪われ生き残った者の多くも死の恐怖に曝されたユダヤ人達はもう躊躇しなかった。二度目の大戦の後この地において自らの国、イスラエルを建国した。ユダヤ人の悲願がここに達成されたのである。だがイスラム教徒、とりわけパレスチナ人の面子は丸潰れである。アラブの全てのイスラム国家がイスラエルに対し一斉に宣戦を布告した。長きに渡る中東の戦乱がここに幕を開けた。

数的には圧倒的に優位であったイスラム諸国であったが確固たる連携も強力な指導者もおらず敗北を重ねた。次第にアラブ人の中でイスラエルの存在を既成事実として認めようという考えを持つ者が現われてきた。

エジプト、サウジアラビア、ヨルダンといったイスラム諸国でも穏健派に属する国々がイスラエルと国交を結んでいった。強硬派の国々も表向きは強硬な発言を繰り返すものの矛は収めるようになった。大々的に干戈を交える事はなくなった。

国同士の衝突こそなりを潜めたが一人一人のレベルでイスラムの大儀とイスラエル打倒の旗を掲げる者達が現われてきたのだ。

その代表とも言えるのがＰＬＯ＝パレスチナ解放機構である。彼等はカナンの地でのパレスチナ人の独立国家建設を目指しイスラエルに対しテロ行為で挑んだ。これに対しイスラエルも精鋭をもってなる正規軍と中近東にその名を馳せた諜報機関モサドをもって対抗し再び血で血を争う抗争が始まった。双方に多大な犠牲を出しようやく和平に至った。

だがこれで話は終わりではなかった。ＰＬＯが穏健路線に転じはじめると狂信的なイスラム原理主義者達が台頭してきた。

超国家的ネットワークを持つ彼等は詩すら恐れずイスラエルに無差別なテロ攻撃を行なった。対するイスラエルも徹底的な報復を行なった。やがてイスラエルでも強硬派が発言力を持つようになり一旦和平が成立したパレスチナに対しても原理主義者達との関係を理由に兵を進めるようになった。再び際限無き戦争が続くかと思われたがパレスチナ政府が決して強硬な

態度を取らずイスラエル強硬派が国際世論から完全に見放されたことにより双方は矛を収めようとしている。原理主義者達はまだ動いているが戦火は収まる方向へ動こうとしている。ここに至るまで実に多くの血が流れた。

レバノン共和国の首都であるベイルートはかって『中東の真珠』とまで謳われた美しい都市であった。しかし度重なるテロにより廃墟となってしまった。ようやく復興しつつあるとはいえ戦禍の爪跡はまだ深い。

そのベイルートに男はいた。さほど高くなく細身だがよく鍛錬されているのであろう引き締まった身体をした黒い髪の東洋人の青年である。上が紺、下が薄いブルーのスリーピースのスーツを着込みネクタイを締めている。カッターはズボンと同じ色だ。

やや頬の薄い顔はエラが無く細長い印象を与える。黒い瞳は眉とバランスが取れており知性をたたえている。全体的に知性を感じさ

せる印象であるが同時に熱さも併せ持っているようだ。この青年の名は結城丈二。ライダーマンとしてその名を知られた人物である。

日本に生まれた。幼い頃より神童と謳われる程の天才であった。だが両親を事故で失い施設に預けられる。奨学金を受け大学まで無事卒業したがその身は常に孤独であった。

才を買われある政府機関の助手となったがその優秀さが裏目に出た。あまりにも優秀すぎたが故に誰にも理解してもらえず孤立してしまったのだ。

その孤独に彼は絶望した。世を捨てようとしたその時声を掛ける者がいた。デストロンという組織の者だった。

その者は彼に言った。我々は平和で平等な理想社会の建設を目指している。その為に力を貸して欲しいと。

彼は一瞬迷った。だが承諾した。最早全てに絶望し孤独に苛まれていた。それから脱却出来るのなら構わないと。

デストロンにおいて彼はその才能を開花させた。平和利用の為の薬品開発や改造手術において名を知られるようになり科学班きっての俊英と言われるようになった。

また彼はその孤独な生い立ちからか部下にも優しく責を負う事も厭わなかった。やがてデストロン科学班のリーダーとされるまでになった。

その彼をデストロン首領は重用した。彼も自分を拾ってくれた首領に対し絶対の忠誠を近い将来のデストロン最高幹部と目されるようになった。

これを快く思わない者がいた。デストロンの大幹部の一人であり日本支部長であったヨロイ元帥であった。元々はデストロン出身でない彼は生え抜きである結城丈二とは境遇が違った。その上彼は首領の憶えめでたく部下からの信望厚い結城に嫉妬していた。そして彼が抜擢される事により自らの地位が脅かされるのを危惧した。腹は決まった。

彼は結城に反逆者の冤罪を着せ最高幹部会議にかけ死刑とした。

会議前に各幹部に根回しをしておく事も忘れなかった。報告を受けた首領は彼の才を惜しんだが刑は執行される事となった。

ヨロイ元帥は彼を処刑場へ連行すると硫酸のプールの上に彼を逆さ吊りにした。そしてゆっくりと彼を嬲り殺しにせんとしていた。まずは右腕から。彼の右腕は白い煙となり溶け落ちた。

それからじっくりと時間をかけて溶かしながら殺すつもりであったが結城の部下達が乱入してきた。彼は科学班の若きリーダーでありその敬愛を一身に集めていた。彼を救う為部下達は命を賭してその救出を行なったのである。

命からがらデストロンを脱出した彼は失った右腕を補う為に部下達の協力を得て義手としてアタッチメントを取り付けた。そしてヨロイ元帥への復讐の為彼が最も忌み嫌う存在である仮面ライダーを模したマスクを作り上げた。そして彼はライダーマンを名乗った。

右腕を失った結城だが鎧元帥が放った刺客によって部下達も殺されてしまった。以前にも増して激しい復讐の念に捉われた彼の前にかっては彼と同じ様に復讐に心を燃やす男が現われた。

男の名は風見志郎。デストロンに両親と妹を殺された男、またの名を仮面ライダーブイスリーという。復讐に燃える彼にかっての自分の姿を見た彼は共にデストロンを倒そうと共闘を呼び掛けた。

だが彼はその呼び掛けを断った。彼はヨロイ元帥を倒せればそれで良かったのだ。同時に彼の心にはまだデストロンに対する忠誠心が残っていた。

その才故に誰からも理解されず孤独となり絶望に陥っていた彼を拾ってくれ目をかけてくれたのはデストロン首領であった。

廃墟の巨人その四

その恩義を彼は忘れていなかった。彼の心は悪の中にいながらも正義を信じ純粋であった。否、彼はデストロンが悪だとも知らなかったのだ。世界平和を目指す組織だと信じて疑わなかった。それが為にデストロンを撃ち滅ぼそうとするブイスリーとは対立する事もあった。デストロンを離れても彼の心はデストロンの下にあり彷徨っていたのだ。

だがデストロンを離れヨロイ元帥の首を狙ううちに彼は次第にデストロンの実態に気付くようになる。そして不本意ながら風見と共闘するうちに彼の言う復讐よりも大きな『何か』に考えを巡らすようになっていく。

科学班きっての俊英であり将来の最高幹部結城丈二の離反はデストロンにとって大きな損失であった。その戦力の殆どを失い遂に最終作戦として東京にプルトンロケットを打ち込む作戦を発動させた。

ブイスリーと共にその作戦の阻止に向かったライダーマンはさそり谷にて宿敵ヨロイ元帥と対峙する。そして自分が首領に利用されていたに過ぎなかった事を知る。

その彼の前にプルトンロケットがあった。これが発射されれば東京は壊滅し多くの人が死んでしまう。彼はこの時理解した。復讐より大きなものとは何か、が。

彼はすぐに動いた。最早ヨロイ元帥への復讐は頭になかった。それよりも人々の命を、生活を護る方が大事だった。ブイスリーに後を託すとロケットに乗り込み空中で自爆して果てた。命を賭して多くの人の命と東京を救った彼に対しブイスリーは仮面ライダー四号の名を贈った。

この時に彼は死んだと誰もが思った。ブイスリーもデストロンもそうであった。だが彼は生きていたのだ。

デストロンの最終作戦を察知したダブルライダーはブイスリーと

共闘する為日本に向かっていた。ブイスリーに合流する直前にプルトンロケットが空を飛ぶのを見た彼等はその動きから中に誰かがいるのを察知した。そして新サイクロンで空を駆るとロケットの中へ侵入しライダーマンを救出したのだ。

一命をとりとめたライダーマンとダブルライダーがデストロンの基地へ向かった時にはデストロンは崩壊し首領もブイスリーにより倒されていた。首領はブイスリーを基地もろとも爆死させようとしたが叶わなかった。ダブルライダーは風見や立花とはあえて顔を会わさず日本を去った。結城は暫く迷っていたが風見の家に向かった。だが既に風見は日本を後にしていたのだった。

結城は次に立花藤兵衛が経営するスポーツ用品店セントラルへと向かった。そこには店を喫茶店へ改装しようとしている立花がいた。彼を認めて結城は声をかけた。

目の前に立つ結城丈二の姿を認めて彼はまず呆然とした。そして次に彼に駆け寄りその両手を強く握り締めた。そんな彼を見て結城は笑った。自分も仮面ライダーであり支えてくれ気にかけてくれる人がいるのが嬉しかったのだ。

それから暫くの間彼は立花と行動を共にした。デストロンとの戦いにおいて己が非力さを痛感した彼は更なる鍛錬を積んだ。そしてヘルメットやアタッチメントに改造を加えた。それを終えると彼も立花に別れを告げ日本を後にした。そしてダブルライダーやブイスリーと同じく世界の平和を守る為にあくの者達との戦いに身を投じたのである。

「前に来た時より復興が進んでいるな」

結城は街並を見回しながら言った。大統領官邸や議事堂等があるベイルートの中心地でありとりわけテロ活動の激しかった地域でもある。人手が足りないのである。

大トルコ宮を右に回り住宅地に入る。ここにもテロの傷跡が残る。路を歩きながら彼は何者かがつけている事に気が付いた。サッと小路に入った。

その後を追って誰かが小路に入ってきた。尋常でない速さと身のこなしで結城の後をつけて来る。

「ムッ」

結城が角を曲がるとその者も後を追い角を曲がった。角の向こうは袋小路だった。窓の無い家々の壁で囲まれ所々に鼠の穴がある。

「残念だったな。俺はここだ」

男が上を見上げると壁の上に結城丈二がいた。いや、それは結城丈二ではなかった。彼の持つもう一つの姿、ライダーマンであった。

青い中央が赤と白、緑に塗られたヘルメット、顔の下半分は露出している。黒のバトルボディの胸は赤く腹部はヘルメットと同じカラーリングである。手袋とブーツはシルバーであり大きなマフラーは黄色である。腰にあるベルトは四つの小さなタイフーンである。歴戦の四人目のライダー、ライダーマンだ。

「何者だ。ジンドグマの残党か？」

男は答えようとしない。そのかわりであろうか。着ていた黒いスーツの上着を脱ぎ捨てた。すると男の姿は不気味な怪人となっていた。

廃墟の巨人その五

「ガオーーーーン」
ドグマの火炎怪人ファイアーコングである。
「やはり改造人間か。ならば容赦はしない！」
壁から飛び降りファイアーコングの前に着地した。小路にて両者の一騎打ちが始まった。
ファイアーコングが次々と拳法の技を繰り出す。ライダーマンはそれを左手で防ぐ。
「ガオーーーッ！」
間合いが離れると怪人は炎を吹き出してきた。
「うぉっ！」
これにはライダーマンも怯んだ。しかしすぐに体勢を立て直す。そして腰から何かを取り出し右手に入れた。
「スモッグアーーム！」
右手が瓢箪形のアタッチメントと化しその先から煙幕を発した。ライダーマンはその中に隠れ見えなくなってしまった。
「ガッ！？」
視界を完全に遮られてしまった怪人は必死にライダーマンの気配を探ろうとする。だが敵の気配は全く感じられない。次第に焦燥感が募る。
「グォッ！」
何かがファイアーコングの脳天を一閃した。怪人は急所を直撃され即死した。
煙幕が晴れていく。ライダーマンは既に結城丈二の姿に戻っていた。
ファイアーコングの亡骸もあった。怪人ではなく人の姿に戻っていた。何処も変わったところのない普通の男だった。
「刺客だな。だとすれば一体誰が」

男の死骸に歩み寄ろうとする。その時上から何かが撃ち込まれてきた。

「ムッ！」

結城は咄嗟に跳びその攻撃をかわした。だがそれは結城を狙ったのではなく死骸を狙ったものだった。ファイアーコングだった男の死骸は四散してしまった。

「証拠隠滅か。これでは持ち帰っても意味がない」

骨の欠片一つ残ってはいなかった。結城は舌打ちすると小路を後にした。

その結城を上から見下ろす男がいた。黒服の男だ。その右手にはリボルバーが握られている。

「危ないところだったな。奴に我々の事を知られるわけにはいかん。しかし・・・・・」

男は顔を顰め舌打ちした。

「岩石男爵め、一体そういう作戦指揮をしているのだ」

黒服の男が岩石男爵の作戦に疑問を抱いている頃ベイルートの破壊し尽くされたビルの地下に設けられた基地で奇妙な一団が密談をしていた。

「何ッ、まさか街中で結城丈二を消すつもりだったのか？」

中央に位置する男が思わず驚きの声を挙げた。

オレンジ色のヨロイに全身を包み白いマントを羽織っている。左手には無数の棘が突き出た鉄球があり顔の口の部分以外を兜で覆っている。ヨロイの胸の部分には二匹の蠍が描かれており兜にも蠍かザリガニの如き脚が八本装飾されている。この男の名をヨロイ元帥という。デストロンにおいてその悪名を轟かせた男だ。

モンゴルの奥地に誰にもその名を知られていない謎の一族がいた。その名をヨロイ一族という。モンゴル高原に住みながら馬に乗らず重い鎧でその全身を覆っていた。その鎧はあらゆる武器をはね返し何者をも寄せ付けなかった。一説にはチンギス＝ハーンの末裔とも言われるこの一族はやがて奇怪な妖術に手を染め固い外皮や鱗を持

つ生物の力を己が身体に取り込むようになった。
その一族の長の家に生まれたのがヨロイ元帥である。彼は自身が長となる為に障壁となりそうな者を次々と抹殺し一族の長となった。そしてモンゴル中を荒らし回り多くの人達を殺していった。
その彼の残虐さと悪辣さは程無くデストロン首領の耳に入った。彼はデストロンの大幹部として迎え入れられることになった。
デストロンにおいても彼はその悪辣さを遺憾なく発揮した。嬉々として非道な作戦を執り行ない罪無き人を嬲り殺しにしてそれを見て楽しんだ。その残忍さはデストロンにおいても随一であった。
また彼は自らの地位に異様なまでに固執した。少しでも自分の地位を脅かしそうな者は次々と陥れていった。その事からも彼は組織内で非常に憎まれ恐れられていた。
「そうじゃ、それが何か悪いのか？」
左手に立つ男が平然と答えた。そのさも当然といったような口調に流石のヨロイ元帥も呆れてしまった。
「悪いも何もあるかっ、もし市民に見られでもしたらどうするつもりだ」
「簡単な事。見た者もついでに始末すればいいじゃろが」
男はまた平然と言った。その態度にヨロイ元帥は匙を投げてしまった。
（やはりこの男には何を言っても無駄か）
ヨロイ元帥がこの男、と心の中で読んだ男は人であり人でなかった。
体型は人のものであったがその上半身はしろと土色の岩石で出来ていた。白いズボンを履き黒の短めのマントを羽織っている。名を岩石男爵という。デルザー軍団改造魔人の一人である。
ギリシャ神話にスフィンクスという魔物が登場する。半ば神としての属性を持つテューポーンとエキドナの間に生まれた人の頭に獅子の身体、そして鳥の翼を持つ魔物であり路行く旅人に謎かけをし答えられぬ場合は容赦なく食い殺していった。この魔物はエディプ

スという若者にその謎を解かれると怒りと悔しさのあまり谷に身を投げ自害して果てた。邪悪でありながら誇り高い魔物であった。

廃墟の巨人その六

エジプトにもこの魔物と同じ名の魔物がいた。ただこちらには翼は無くギリシャのものより遥かに巨大であった。邪神アピスの眷属であったのだろうか。太陽神ラーを護るセトやトトといった武に秀でた神々と果て無き戦いを演じた。やがて力尽きナイルの地に座して死を迎えた。その力と潔さに魅入られた時のファラオはこの魔物を王の墓の守護者に任じた。たとえはじめは神々の敵であっても調伏されナイルの守護者となる事を期待されたのだ。この魔物はエジプトに座し続けこの地を守護し続けた。ナイルの尊き流れは今尚尽きることなくこの地の民に繁栄と豊穣を約束している。

このスフィンクスの子孫が岩石男爵である。力技や岩を使用した戦法を得意としておりデルザーでもその強力は知られている。その反面短絡且つ粗暴な事でも知られており知略の無い作戦を展開している。

「まあ奴はライダーの中でも特に弱いと言われているそうじゃないがや。なあ～～～んも心配する必要はないきに」

ガンラガンラと笑って答える。

「それじゃあわしはこれで失礼させてもらう。次に送る怪人に伝えねばならん事があるんでのう」

「待てっ、話は終わっておらんぞ」

岩石男爵はヨロイ元帥の言葉を最後まで聞こうともせずその場を後にした。

「何という愚かな奴だ。力技でライダーマンが倒せるとでも思っているのか」

扉が閉められるのを見て忌々しげに吐き捨てた。

「おそらくあの攻撃で奴は少なくともこのベイルートで何かがあると察する。そうすれば頭の切れる奴の事だ、すぐに我等の存在と計画に気付くぞ」

「あら、それはそれでいいんじゃなくて?ライダーマンをこちらの手の中に誘き寄せられるのよ」

右側から女の声がした。ヨロイ元帥は声のした方へ顔を向けた。

「妖怪王女か。何か考えがあるな」

「ええ」

暗闇の中から女がスッと現われてきた。

黒い髪と瞳を持つ小柄な女である。顔の上半分は蝶を模した桃色のマスクで覆っているがかなりの美女である。薄い桃色と金のレオタード状の服を着、腿まで隠したスカートは白く何重にも巻かれフワリとしている。彼女こそ妖怪王女。ジンドグマにおいて四幹部の一人としてその名を怖れられた女である。

ハンガリーとオーストリアの境にあるショプロン近郊に生まれた。幼い頃からその声と容姿の美しさを認められソプラノ歌手となるべく育てられた。その期待にそえ十代にしてウィーン国立歌劇場等欧州に名立たる歌劇場で歌うようになった。誰もがその将来を渇望する天才歌手であった。

このままいけばそうなったであろう。しかし時代がそれを許さなかった。世界を飛び回る彼女に目をつけたハンガリー当局が彼女をスパイとしても育成しはじめたのだ。

彼女はそちらの方面の才能もあった。それを遺憾無く発揮し諜報、破壊工作、そして暗殺と任務を次々に成功させていった。やがて世界各国の諜報機関は姿の見えぬこのスパイの存在に恐れをなすようになった。その正体が美貌のオペラ歌手であるとは誰も想像だにしなかった。

スパイ活動を続けるうちに彼女は破壊工作や暗殺に心を傾けるようになり歌への情熱は薄れていった。その時に現われたのがテラーマクロであった。

彼女はテラーマクロの誘いを受けドグマに入った。そしてメガール将軍等と共に大幹部の一人に任じられた。

しかし彼女は元々陽性の性質であり陰気なテラーマクロとはそり

が合わなかったのだろう。悪魔元帥がテラーマクロと衝突し喧嘩別れすると彼についた。そしてジンドグマ四幹部の死鳥となったのだ。スパイ時代とおなじく破壊工作や暗殺等を得意とするジンドグマきってのテロ活動の専門家である。

「あえて騒ぎを起こしてライダーマンを誘い出すのよ。多分岩石男爵の方も動いているからその戦力と合わせてライダーマンを倒すの。どう、いい作戦でしょ」

「うむ、奴が感づいているのを利用する。そして岩石男爵も知らず知らずのうちに利用する、か。面白そうだな」

「そうでしょ。ならそれで決まりね」

「うむ。ところで我等の本来の作戦はどうなっている？」

「上手くいっているわ。イスラエルもパレスチナも互いを罵り合い報復に明け暮れているわ。裏で私達が焚きつけているとも知らないで」

「そうか。それで良い」

ヨロイ元帥はその話を聞き満足げな笑みを浮かべた。

「双方が争うことにより戦火はさらに拡がる。そしてそれによる混乱が極みに達したその時こそ我等が動く時だ」

両者は互いに笑い合う。不気味な笑いが地下に木霊した。

廃墟の巨人その七

ファイアーコングを倒した結城は大トルコ宮からイスラム地区である西ベイルートへ向かっていた。ベイルートはいスラム教徒とキリスト教徒がそれぞれの地区、東西に分かれて住んでいる。

西地区のハムラシチーと呼ばれる一帯は大銀行が立ち並んでいる。この街は元々は商業都市としても有名であった。

一見この一帯はアラブ有数の商業地域であるがその陰にはよからぬ者達も潜んでいる。テロリスト達が何時その隠し持っている牙を剥くかわからないのだ。

結城も密かに気を張っていた。まるで何かを探しているように。

不意に爆発が起こった。ラスベイルートにほど近い場所だ。

「もしかすると」

爆発のした方へ向かう。炎と煙が巻き起こり人々の悲鳴が聞こえてくる。軍隊がその場へ急行する。

結城は軍より早く現場へ到着した。正確に言うと結城丈二ではなかった。ライダーマンであった。

銀行で爆破テロが行なわれたらしい。腕や脚を吹き飛ばされた遺体が散乱し瓦礫に埋もれた人々が助けを呼んでいる。ビルの下からその惨状を確認した彼は右腕にアタッチメントを装着し救助に向かおうとする。その時だった。

ビルの破片らしきコンクリートが飛んで来た。ライダーマンはそれをかわした。

破片の飛んで来たほうを見ると向かいのビルの上に妖しげな人影が立っていた。ネオショッカーの誇る野猿怪人マントコングだ。

「フォフォフォ」

まさしく野獣そのものの動きでライダーマンに襲い掛かる。渾身の一撃をなんとか受け止める。しかしその衝撃が容赦なく全身を打ちのめす。

「グッ・・・・・・」
怯んだところを息をつかせず連続して攻撃し続ける。それを遠くのビルの上から眺めほくそ笑む女がいた。
「これでいいわ。もうすぐ岩石男爵の兵が来る。それでライダーマンは終わりよ」
妖怪王女だった。マントコングは彼女の手兵だったのだ。守勢に立たされるライダーマン。しかし彼も今まで数え切れぬ程の死闘を潜り抜けてきたわけではない。一瞬の隙を見て右腕にパワーアームを装着する。これで状況が好転した。その技量もあり次第に盛り返してきた。
「何じゃあ～～～～っ、貴様わしの獲物を横取りするつもりかやぁ～～～～っ！」
そこへ岩石男爵が来た。後ろには怪人が控えている。ゴッドの合成怪人キマイラである。
「ンゲエーーーーッ」
犀のような角を振り回し吠えている。
「ライダーマンじゃな」
「貴様・・・・・・デルザーの岩石男爵か」
ライダーマンはその異様な姿を認め眼の前の敵が何者であるか即座に解した。
「ホォ、わしの名は知ってくれちょるようじゃのぉ。感心感心」
ガンラガンラと笑う。
「エジプトのスフィンクスの子孫にしてデルザー軍団でも屈指の怪力の持ち主、知らない筈がない」
「そうかそうか、嬉しいのぉ。そこまでわしの名を知ってくれて有り難いがこれでお別れじゃあ。行けぇい、キマイラ！」
キマイラが跳びかかって来る。その角をパワーアームの刃で受け止める。そこへマントコングの拳が襲い掛かる。
「グワッ！」
頭にその一撃ｗｐまともに受けた。吹き飛ばされコンクリートに

叩き付けられる。口から血が滲み出る。
「グファッ・・・・・」
だがそれでも立ち上がる。血がコンクリートに滴り落ちる。口に苦悶の色が浮かび上がる。
「流石よのぉ、それでも立ち上がれるか。だがそれもここまでじゃあ、死にさらせ！」
まだ体勢も整わないライダーマンへ二体の怪力怪人の一斉攻撃が迫る。絶体絶命の窮地だった。だがその前に一体の怪人が現われ彼等を制止した。その怪人はショッカーの耐熱怪人ゴースターであった。
「ウウォーーーーッ！」
高らかに叫んだ。
「何じゃあっ！？」
「何ッ！？」
これには岩石男爵も妖怪王女も驚かされた。思いもよらぬ乱入者だった。
「何じゃ貴様、何処から来おったぁ、わしの手柄を横取りするつもりかぁ！」
岩の棍棒を振り回し突如として現われたゴースターに対して喚き散らす。だがゴースターはそれには一切耳を傾けずライダーマンに対して向き直った。
「ウウォーーーーッ！」
叫びと共に口から炎を吹き出す。岩さえも飴の様に溶かしてしまう炎だ。だが既に体制を整えていたライダーはそれを跳躍でかわし隣のビルへ移った。
「おのれっ！」
三体の怪人がそれを追う。だがライダーマンはその動きを冷静に見ていた。右腕に別のアームを装填した。
「ネットアーーームッ！」
アタッチメントから網が射出された。その網は怪人達の上に覆い

被さった。
どうやら特殊な繊維で編まれたネットらしい。人のそれとは比較にならぬ程の怪力を誇る三体の怪人達が必死に引き裂こうとするが無駄だった。
ライダーマンはその間に右腕に別のアームを装着した。すると腕がそれまでの射出器から銃へと変化した。
「マシンガンアーーーームッ！」
左腕を右腕に添え安定させた。銃口が火を噴き薬莢が次々と飛び出す。
「グオオッ！」
弾丸が怪人達を撃った。それにより三体の怪人も爆死して果てた。
「何だ、あれはっ！」
「またテロかっ！？」
その爆発は下で救出にあたっていたり騒ぎに寄せ付けられた人々にも認められた。ザワザワと再び人だかりが形成される。
「こうなっては仕方無いわね。一先撤退して次案を練るわ」
妖怪王女はそう言うと建物の陰に隠れてスッと姿を消した。
「おのれ～～～～っ、やってくれよるのぉ、しかし次はこうはいかんぞぉ～～～～っ！」
岩石男爵は棍棒を振り回しつつ騒いでいたが人が上へ昇ってくる気配を感じると姿を消した。
ライダーマンは敵が去ったのを確かめ変身を解き結城丈二に戻った。
爆発した跡を見る。怪人達は四散して一欠片も残っていない。
薬莢を足でビルの下に蹴落とす。これで闘いの跡は残っていない。
「これでよし。テロに遭った人達の救助に向かわなくてはな」
結城も下へ降りていった。後には爆炎の残りと火薬の残り香が漂っていたがそれもすぐに消えてしまった。

廃墟の巨人その八

ビルの下での闘いの後岩石男爵は基地に帰還し自室にこもっていた。
「くそぉ、後一歩っちゅうところじゃったのに忌々しいーーーーっ！」
椅子を蹴飛ばし棍棒を振り回し荒れ狂う。
「折角二対一でライダーマンの奴を仕留められたのに何であんなのが出て来るんじゃあーーーーっ、一体誰の差し金じゃあーーーーっ！」
テーブルを叩き壊しグラスを壁に向かって投げる。最早手のつけようがない。
“そう怒るな。まだ打つ手は幾らでもあるぞ”
不意に部屋の中に声が響いた。
「ん？おんしか？」
それは男の声だった。闇の中からスッと影が現われた。例の黒服の男だ。
「どうやら邪魔が入ってライダーマンを排除しそこね頭にきているな」
フフフフフ、といわくありげに笑いながら言う。
「それがどうかしたのかや！？」
不機嫌さをあからさまに出している。
「まあ怒るな。今日は貴様に渡したいものがある」
「渡したいもの！？」
男は余裕をもって指を鳴らした。すると壁から一体の怪人が現われた。
「こいつを貸してやる」
「ほお。有り難いのう」
「だがこれだけではない」

また指を鳴らした。すると怪人は再び壁の中へ消えた。

「ライダーマンは確かに切れ者だ。しかし力は全ライダーの中で最も弱い。怪人一体を相手にするのが限度だ。三体を相手には出来ん。それを衝けば容易に倒せる筈だ」

「ぐう・・・・・・」

男はあえて三体と言った。先程のビルの上での闘いの事が岩石男爵の脳裏をよぎる。それまでも頭に入れてあえて言ったのだ。

「だが今は三体も出せない。しかしこの怪人ならライダーマンの力をかなり消耗させる事が出来る。その後貴様が奴の相手をすればいい。そうすればライダーマンの首を挙げられる」

「ほほぉ、良い案じゃのう」

満足気に頷く。

「後はライダーマンを誘き出す事が必要だがそれは俺に任せてくれ」

「そうじゃのう。わしはそういった事がどうも苦手じゃからのう」

苦手なのはそれだけではないだろう、と内心罵ったがあえて口には出さなかった。

「場所は後で連絡する。それまで鋭気を養っていればいいだろう」

「うむ、そうさせてもらうかや」

そう言うと早速ソファーに寝転がった。そして高いびきをかき眠りはじめた。

「・・・・・全く救い難い単細胞だな。奴やオオカミ長官の言う通りだ」

侮蔑の眼差しで岩石男爵を見下ろしながら言った。

「だがこれはこれで使い道がある。精々駒として動いてもらうか」

そう言うと闇の中へ消えていった。

建物の外へ出た。ビルの周りは度重なるテロの結果であろう瓦礫の山だった。

「・・・・・・・・」

男はおもむろに首のマフラーを外した。そして右の方へ向けてそれを投げた。

マフラーは火球となった。そして轟音と共にそのまま飛翔した。
火球が空中で弾け飛んだ。何かしら鞭のようなもので叩き落とされたような感じであった。
「隠れているのは判っている。さっさと姿を現わせ」
「イーーッヒッヒッヒッヒ、流石は地底王国の主。お見通しかい」
ヌウッと不気味な影が姿を現わしてきた。全身を鱗で覆われ頭からは禍々しく曲がった二本の角が生えている。唇は無く毒々しくヌラヌラと光る牙が上下から生えておりその両眼は赤く血の色をしている。その大きい胸はこの怪人が女であることを現わしている。赤いマントを羽織り右手の鞭は生きた蛇である。左腕は巨大な蛇そのものでありシュウシュウと黒い息を吹き出している。この女怪の名をヘビ女という。デルザー軍団ではある男の片腕として辣腕を振るった恐怖の改造魔人である。
インドでは古くよりナーガという半神が崇拝されていた。上半身は人、下半身は蛇という姿であり水を司る言うならば水の精であった。このナーガ達は不死性と毒を持つとされその性質はおおむね善良えあった。仏教の竜王のルーツであるとされその信仰は根強いものであった。
多くのナーガ信者達は正しく信仰していたのだが中にはその心を邪なものに転じてしまった者達もいた。
彼等はナーガの持つ不死性と毒に憧れその力をもって世を支配せんと企てた。遂には呪術でヘビの力を得たのである。残念ながら不死の力は得られなかったが毒、そして蛇に変化する術を身に着けるに至った。
彼等はこの力によって暗躍した。時の王朝の重臣達が次々と暗殺され王も幾度となく命を狙われた。やがて寵妃の一人の行動がおかしい事に気付いた王は彼女に対し密かに見張りを付けた。やがて妃が夜毎宮廷を何時の間にか出ている事がわかった。だがどうやって姿を消し何処へ行っているのかまではわからなかった。そこで王は一計を案じ兵達を宮中に潜ませたうえで妃と寝床を共にした。あえ

て死地に入ってみせたのである。
王が寝入ったとみると妃は起き上がった。そしてやにわに巨大な蛇へと変化し王に襲い掛かった。
だがそれは王の計算のうちだった。サッと目を覚ますと隠し持っていた短剣を蛇の喉に突き刺した。
蛇は獣の如き絶叫を上げ床の上でのたうち回った。そして次第に人の姿に戻るとそのまま息絶えた。
蛇の断末魔を聞き宮中へ蛇達が一斉に攻め寄せて来た。計画が漏れていた事を知り実力行使に出たのだ。
しかしそれも王の思惑通りだった。武装し、待ち構えていた兵士達にことごとく討ち倒されてしまった。こうして邪な蛇の邪教徒達は費え去ったのである。
しかし僅かながら逃げ延びた者達もいた。彼等は地下深くに潜伏し復活の時を待った。その子孫こそがこのヘビ女なのである。人の血と死を好む残虐にして奸智に長けた改造魔人である。
「貴様だと思っていたわ。ゴースターを送ったのもそうだろう」
「さあて何の事やら」
ヘビ女は男の質問に対しあえてはぐらかしてみせた。
「あいつの指示か？」
「それは言えないねえ。イーーッヒッヒ」
答えない。だがそれだけで充分であった。

廃墟の巨人その九

「フン、相変わらず喰えない女だ。だが一つ忠告しておく。邪魔をしたらただでは済まぬぞ」
ジロリ、と睨みをきかす。その様子が単なる恫喝ではない事をはっきりと表わしていた。
「おやおや物騒さねえ。けどライダーマンの相手をあんた達だけがしていいなんて誰が決めたんだい？」
「何ィ！？」
明らかな挑発だった。男も右足を半歩前へ出した。
「ヒッヒッヒ、いいのかい？どっちかが死ぬ事になるよ」
「クッ・・・・・・」
懐から何かを出そうとした男の腕が止まった。ヘビ女の言う通りだったからだ。生き残った方もただでは済まない。どちらにしても結果は明白だった。
「フン」
懐から手を離した。そして止む無く足を元に戻した。
「やっぱり切れるねえ。じゃああたしの言いたい事も判るねえ？」
「チッ、まあいいだろう。ライダーマンの首は早い者勝ちだ」
「そういう事。じゃあ失敬させてもらうよ。これからの準備があるからねぇ」
そう言うと目から光を発し蛇に変化した。そして瓦礫の中へ隠れていくようにその姿を消した。
「糞っ、蛇風情が。調子に乗るなよ」
ポケットから葉巻を取り出した。忌々しげに咥え火を着けた。そして不機嫌な足取りでその場を後にした。
テロの被害に遭った場所での救助を終えたライダーマンこと結城丈二はアメリカ大学の近くにあるカフェレストランにおいて一息ついていた。

表向きは酒を飲まないという事にしている人が一般的なイスラム教徒はコーヒーを嗜む。異教徒が飲むのも大歓迎である。本質的には現実主義をヒジュラの頃より積極的に取り入れているのがイスラム教である。商人の宗教である彼等は異教徒達に対し口喧しく言う事は無い。イスラムの戒律に従い対応するのみである。従って今ここでコーヒーを飲んでいる結城はいいお客さんなのである。むしろ気前がいいので店の人から喜ばれている程である。

コーヒーを飲み終え英字新聞に目を通しつつ結城はある事に考えを巡らせていた。終わる事を知らぬイスラエルとパレスチナの抗争に奇妙な法則があるのだ。

双方共戦乱には飽いている。双方の強硬派も発言力を持っているがその彼等でさえ何時終わるとも知れぬ争いに辟易しているのだ。

これまでの争いで双方共甚大な被害を出している。人も、その心も大きな痛手を受けた。どの大国も匙を投げようとしている。経済的な負担は最早無視出来ない。和平に至るしか道は無い。しかしそのテーブルに着くや否やテロが起こるのだ。そして抗争がまた続く。それの繰り返しである。何時終わるともしれない。

この抗争を終わらせる為国連は結城丈二に一連の抗争の裏の調査を依頼したのだ。同時に災いの元があったならばその排除をも。これは極秘任務であり彼がここにいる事は国連のごく一部の者しか知らない筈である。そう、知らない筈だ。しかし彼はベイルートに降り立って以来二度も襲撃を受けている。これは国連内に情報をリークしている者がいるか余程の情報網を持っている組織があるか。結城は後者だと確信していた。前者である可能性も無きに非ず。しかし彼を襲ったのは全て改造人間であった。彼の異形の者達を造り出し得る者、その存在を結城は一瞬たりとも忘れた事は無かった。

（もしやまた新たな組織が）

かって彼はデストロンという世界征服を企む悪の組織に所属していた。ヨロイ元帥に陥れられ無実の罪により殺されかけたが部下達に救出され以後ライダーマンとしてヨロイ元帥、そしてデストロン

と戦った。その時の記憶は今でも残っている。デストロンにいた時はデストロンこそが絶対の正義と信じ首領と組織に忠誠を誓っていた。しかしデストロンを出その実態を目の当たりにし彼は真実の正義に目覚めたのだ。だが過去にデストロンでその野望の為に働いていた事は消えない。それは彼が永劫に背負っていかねばならない十字架なのだ。償い、正義、真実。彼の心を司る神は厳格な神である。だからこそ彼は悪と戦うのだ。

彼の身体は他のライダーと比べて脆い。戦闘能力も高くない。それでも彼は己が命を賭して悪と戦い続けるのだ。

（だとしたら察しがつく。この紛争を陰で煽っている者達の正体が）

新聞を畳んだ。コーヒーを飲み干すとチップとコーヒー代を払い店を出た。

（両者の構想は共に疲弊を招く。そうすればそこに付け込む隙が出る。そうでなくとも戦乱こそ奴等の最も好むところだしな）

アメリカ大学の裏手にある公園へ向かう。緑の生い茂る美しい公園である。

森林の中へ入っていく。誰からも見られない程深い場所へ行くと足を止めた。

「出て来い、さっきから俺をつけている事は判っている」

木の陰から二人の男が現われた。

「インターポールの滝和也、そして日本の警察庁から出向して来ている役清明警部補だな」

「へえ、やっぱり凄いね。もう俺達の事を調べていたのか」

滝は人懐っこい笑みを浮かべながら言った。

「貴方達の事は風見から聞いています。俺と接触する為にこのベイルートへ向かっていると」

「流石ですね。かってその将来を渇望されただけの事はある」

役の言葉に結城は眉をピクリ、と微かに動かした。しかしその言葉尻には嫌味や悪意は感じられなかった。何か別の意志が感じられたのを彼は内心妙に思った。

「二人共ここへ来た目的は判っています。この街を根城にイスラエルとパレスチナの紛争を陰で煽動する何者かを倒す為に来ている俺に協力を申し出る事」
「その通りです。黒の森、ベナレス、そしてシンガポールでの事はご存知ですね」
「ええ。特にシンガポールの事は。ドクトル＝ゲーが指揮を執っていたとか」
「はい。ならばこの街にデルザーの岩石男爵が潜んでいるのも」
「さっき遭いましたよ。妙な奴でした」
「そうですか。では話が早い。今より我々は貴方と行動を共にさせて頂きます」
「有り難い。是非ともお願いします」
「はい」
「おお」
二人が握手をする為に結城へ歩み寄る。しかし彼は全く歩み寄ろうとしない。
「すいません。握手をする暇はないようです」
「？」
滝が不思議に思ったその時だった。木の上から何かが一斉に降り注いできた。
「これは・・・・・・」
それは蛇の群れだった。地に着くと白い煙と共に人の型へと変身した。

廃墟の巨人その十

「ヒューーーヒューーー」
それは戦闘員達だった。右手を蛇の鎌首の様にもたげて奇声を発しつつ近寄って来る。
「くっ、つけられたか」
滝が口惜しげに漏らした。
「どうやらこちらの動きも読まれているみたいですね」
役が襲い来る戦闘員の一人を鉄拳で倒しつつ言った。
「しかしこの連中は岩石男爵の部下ではない。他の幹部、いや改造魔人の手の者達ですね」
「だとしたら誰だ？」
結城と滝は戦闘員達を倒しつつ話を続ける。
「この独特の動きと雰囲気、おそらく・・・・・・」
推理を続ける結城。だがその前に何かが襲い掛かる。
「キィーーーーッ」
それは回転鋸だった。何者かが鋸を振るっているのだ。その鋸は腕だった。デストロンの女性怪人ノコギリトカゲの腕だった。
「結城！？」
「結城さん！？」
滝と役が思わず声をあげる。しかしそこに結城はいなかった。
「キィッ！？」
怪人も戦闘員達も辺りを見回す。木々に紛れ込んだのか、それとも後ろか。焦りを覚えたその時だった。
「ギッ！？」
何かがノコギリトカゲの首に巻きついた。そして上へと思いきり引っ張っていく。
「ギィーーーーーッ」
それはロープだった。木の枝から吊り上げられもがき苦しむノコ

ギリトカゲの下にはライダーマンがいた。
「ノコギリトカゲ、貴様を設計し改造したのはこの俺だ。貴様の事は俺が一番よく知っている」
ライダーマンはそこに片膝を着き座して言った。
「ギギ、ギーーーーッ」
「貴様の弱点は首、首を攻められればすぐに倒れる」
そう言うと右手を下へ引いた。
「貴様を生み出した俺の手で・・・・・滅びろ」
ガクン、と首を垂れた。ビクッ、ビクッと硬直化し遂には動かなくなってしまった。
ロープを収める。ノコギロトカゲはドサリ、と大きな音と共に地に落ちた。
「俺の過ちは俺の手で償う。・・・・・・・・・・それが俺のやらねばならない事だ」
「ライダーマン・・・・・・」
滝はここにも哀しい心を持つ男を見た。彼もまた悲哀と孤独を心に秘め戦い続けるライダーなのだと悟った。
既に戦闘員達は全員倒していた。ライダーマンが変身を解こうとした時不意に不気味な声が響いてきた。
「イーーーッヒッヒッヒッ、やっぱりライダーの一人、見事な戦い方だねえ」
地から這い出てくる影があった。ヘビ女である。
「デルザーの改造魔人・・・・・・。ヘビ女か」
変身を解くのを止め滝、役と共に取り囲んだ。
「安心おし。今はあんた達と戦うつもりは無いよ」
「何!?」
驚くライダーマン達。
「いい事を教えてあげに来たんだよ」
ヘビ女は笑いながら言った。
「・・・・・情報か。また内部で権力争いでもしているのか」

「ヒヒヒ、さてね」
ライダーマンの言葉にとぼけてみせた。
「まあ話を続けるよ。港へ行ってみな。そこであんた達が捜している事がやっているからさ」
「・・・・・武器の受け渡しか？イスラエルかパレスチナの過激派達に対する」
「それは行ってからのお楽しみだね。自分の目で確かめな」
「・・・・・ううむ」
「待てライダーマン、罠かもしれないぞ」
滝が口を挟んだ。
「そうですね、デルザーでゼネラルシャドウの懐刀として暗躍した女、油断は出来ませんよ」
役もそれに同調した。
「フン、あたしを見くびらないで欲しいもんだね」
「何！？」
「あたしはインドで怖れられたナーガの血を引く者、あんた達を倒そうと思えば何時でも出来るんだよ」
ヘビ女の目が赤く光った。
「ムッ・・・・・」
「そのナーガの血があたしの誇り。その誇りにかけて情報を伝えてやってるんだよ」
気が全身に纏われた。それはいつものドス黒い纏わりつくものではなく青い炎の様な気であった。
「・・・・・解った、信じよう」
ライダーマンは変身を解いて言った。
「よく情報をリークしてくれた。礼を言おう」
「感謝する必要は無いよ。いずれあんた達は我々の軍門に降る事になるんだからねえ」
耳まで裂けた口で笑いながら言った。
「今はあんた達の武運を祈ってやるよ。けど覚えておくんだね。今

度こそ我々悪の力が世界を支配するってことを」
　ヘビ女は不気味な笑い声を残しながら消えていった。後に残されたライダーマン達は森を後にし港へ向かった。

廃墟の巨人その十一

「何ッ、どういう事だ。それでは俺の策が全く意味をなさぬではないか」

廃墟の中にそびえ立つビルの地下で例の黒服の男が岩石男爵に詰め寄っていた。

「仕方無いじゃろう。港にライダーマン達が向かっているという報告が入ったんじゃから」

岩石男爵は何が悪いのか、とでも言いたげな顔で言った。

「そもそもライダーマンは怪人一体を相手にするのが精々だと言ったのはおんしじゃろうが。何をそんなに怒鳴る必要があるんじゃ」

「それは二体同時に攻撃をかけた場合だ、今向かわせても奴に各個撃破されるのがおちだというのが解からんか！」

「じゃあ何であいつをわしに送り届けたのじゃ？それでは意味が無いではないか」

「奴の体力を削ぐ為だ、その直後に貴様が行く為の捨て駒だと言った筈だ！」

「その捨て駒じゃ」

岩石男爵は反論した。

「わしは捨て駒という発想が納得できんのじゃあ。科学班やら後方担当やらが必死こいて集めて作った改造人間を何でそうも簡単に捨て駒に出来るんじゃ」

「それが戦争というものだ、損害や犠牲を恐れて戦争が出来るか！」

男は思わず激昂して言った。

「犠牲なんて必要無いじゃろがあ。結局わしがこの力でライダーマンをぶっ潰しゃあそれでいいんじゃろがあ」

「なっ・・・・・・」

男は絶句した。それは一見正論であった。しかしそれが出来ないからこそ今まで敗れ続けてきたのだ。それを言おうとしたが止めた。

もう何を言っても無駄だと思った。急に脱力感が彼を支配した。
「解かった、貴様に任せよう。ライダーマンの首を挙げるのを楽しみにしている」
「おう、待っちょるがいい」
能天気に答えた。最早その言葉は男の耳には入らなかった。肩を落とし部屋から消え去った。
「まさかこれ程まで愚かとはな。使い道も全く無いわ」
地に何かを投げ付け煙を発した。そしてその中に入ると煙と共に消え失せてしまった。
妖怪王女はルート港の端にある寂れた、しかし大きな倉庫に向かっていた。
「さて、今日も楽しい死の取り引きといくわよ」
いささか上機嫌である。彼女達の主な仕事はやはりイスラエルとパレスチナの抗争を悪化させる事、その為に過激派へ武器や資金を供給する事は最も的確かつ即効的に効果が見られる活動だったのだ。
「今日はハマスの中でもとりわけ過激な一派だったわね。昨日は日本赤軍の残党、その前はイスラエル軍のタカ派、どれも愚かな連中だこと。我々に煽られているとも知らずに」
楽しそうに言う。
「それも今日までだな」
ふと声がした。辺りを見回す。すると倉庫の上に声の主がいた。
「仮面ライダー四号、ライダーマン。貴様等の邪な野望を打ち砕く為ここへ来た」
「おのれ、どうしてここが・・・・・・」
「答える必要は無い。行くぞ！」
そう言い放つと倉庫の上から飛び降りてきた。
「くっ、こうなれば・・・・・・」
妖怪王女はサッと右腕を上げた。
「出でよ！」
王女の掛け声と共に戦闘員達が影から身を現わした。怪人もいた。

ブラックサタンの特攻怪人奇械人アルマジロンである。
「ブルルルルルーーーーッ」
アルマジロンが奇声を発しライダーマンに迫る。戦闘員達もそれに続こうとする。その時だった。
倉庫の上から何やら新しい影が舞い降りて来た。そして戦闘員達を次々に倒していく。
「予想通りだな。雑魚は俺達に任せといてくれ」
滝である。
「貴方は怪人の方に専念して下さい」
役もいる。
「よし、頼むぞ」
ライダーマンは構えを取り奇械人と対峙する。アルマジロンは左腕の鎌を縦横に振るうが全てライダーマンのパワーアームにより防がれる。
「ブルルルルルーーーーー」
埒が明かないと見て身体をボール状に丸め体当たりを敢行する。だがそれも何無くかわされてしまった。
「その様な攻撃、このライダーマンには通用しない！」
「ググゥ・・・・・」
その言葉を受け元の身体に戻り右腕の鞭をも駆使して攻撃する。両手を使い攻撃する事により防御に隙が生じた。それげ狙いだった。
「トォッ！」
堅い外皮に覆われていない柔らかなその腹へ蹴りを入れる。怯んだところへパワーアームを一閃させた。
「グォォォォッ！」
腹部から鮮血をほとばしらせ後ろへよろめき倒れた。そして爆死して果てた。
「おのれっ、よくも」
妖怪王女は手駒を失い呪詛の言葉を漏らした。
「ジンドグマの妖怪王女、後は貴様ただ一人だ！」

爆煙を背に言った。
「部下達の仇、こうなったらあたしの手で」
仮面に手をかける。人ではない別の何かに変化しようとする。その時だった。
「シャアアアアアアア」
何者かがフックの様なものを振り回しライダーマンに襲い掛かった。緑色の身体を持つ怪人、ジンドグマのツリボットである。
「えっ、この怪人はここにはいない筈じゃ・・・！？」
妖怪王女は驚きの色を隠せない。
「岩石男爵の指示でこちらに来ました。妖怪王女に協力してライダーマンを討つようにと」
ツリボットに同行している戦闘員が言った。
「岩石男爵から！？男爵には私達がここにいる事は・・・・・・」
王女は言葉の途中で岩石男爵の身辺に気が付いた。
（成程、そういう事ね）
やや上へ向けて視線をツリボットに戻した。
「判ったわ。協力、感謝するわ」
「有り難き御言葉」
「ここは任せるわ。すぐに援軍を率いてこの場に戻るからそれまで持ち堪えるように」
「ハッ！」
妖怪王女は戦闘員の言葉を受けると右手の平を顔の前にかざした。そしてそれを合図に姿を消した。
「フン、妖怪王女も俺やあの女の動きに気付いたか。まあ当然だな」
その状況を遠く離れた船の上からあの黒服の男が見ていた。
「気付かぬのはあの愚か者だけだ。戦力を集中させ敵を知る事こそ戦いだと知らぬ馬鹿が」
忌々しげに吐き捨てると懐から葉巻を取り出した。目の前ではライダーマンと怪人の闘いが幕を開けた。
「キィーーーキッキッキッ」

ツリボットが奇声を発し迫る。右腕のフックが妖しげな光を放つ。
ライダーマンはそのフックをパワーアームで受け止めた。銀の火花と鈍い金属音が響き渡る。

廃墟の巨人その十二

怪人の回し蹴りがくる。ライダーマンはそれを右脇に掴むと右から左へ身体を捻り投げ飛ばした。

「鉤爪アーム！」

アタッチメントを取り替えた。鉤爪アームである。

「おのれっ！」

怪人のフックが振り下ろされる。それをアタッチメントで絡め取った。そして前から後ろへ捻り破壊してしまった。

「まだだっ！」

返す刀で切り裂いた。断末魔の叫びをあげツリボットは爆死して果てた。

「やはりな。いくら他のライダー達に体力的に劣るとはいえライダーはライダーだ。それに知力ではライダー随一とも言われている。一対一で怪人がそうそう容易に勝てる相手ではない」

男は怪人の爆死を見届けつつ落ち着いた声で言った。

「奴の居場所もすぐに判るだろう。どの道ベイルートでの我々の作戦は水の泡だ。これ以上の戦いは無意味だ。だが・・・」

男の眼がギラリ、と光った。

「今はどの様なものであれ手駒は一つも失うわけにはいかぬな」

葉巻を海に投げ捨てるとスゥッと姿を消した。

その頃岩石男爵は自らの基地にて悠然と昼食に興じていた。その食材は人のそれとは全く異なり岩や砂からなっている。

「フフフフ、ツリボットの奴今頃は上手くやっておるじゃろに」

岩を手掴みで口に運び込むとバリバリと音を立てて噛み砕いた。

「まあ今は奴からの報告を楽しみにしちょこう。もうすぐライダーマンの首が見られるきにのう」

その時伝令の戦闘員が部屋に入って来た。何事かあったのだろうか。ひどく慌てており息を切らしている。

「なんじゃあ、無粋な奴じゃ。わしは今食事中じゃぞ」
「報告します、ベイルート港での戦いにおいて我々の戦力は壊滅、ツリボットは撃破されました！」
「何っ！」
「さらに捕らえられた戦闘員の一人からわれわれの基地の所在を聞きだしたようです。こちらに急行しております！」
「な・・・・・・！」
岩石男爵はその報告に唖然とした。咄嗟に席を立ってしまった為テーブルをひっくり返してしまった。岩や砂が床に散らばる。
「結城丈二の他にインターポールの者達もこちらに向かっています。岩石男爵、如何致しましょう！」
「ぬうう、決まっちょるじゃろうがあ！」
声を荒わげた。
「全力で叩き潰すんじゃあ、一人残らず表へ出るんじゃあ！」
「ハッ！」
伝令の敬礼を受け荒々しい足取りで外へ出る。戦闘員達がそれに続く。
ビルの外へ出る。そこは廃墟だ。左右に屈強な男達が並んでいる。
「岩石男爵、ここは既にインターポールが包囲した。最早逃げられんぞ！」
滝が岩石男爵を指差して言った。
「言うのう、インターポールの雑魚共が。返り討ちにしてくれるわい。やっちゃれえいっ！」
「イワ～～～～ッ！」
戦闘員達の叫び声が開戦の合図となった。インターポールと岩石男爵達との死闘が始まった。
インターポール側は桁外れの戦闘力を誇る岩石男爵は相手にせず戦闘員達に向かった。戦闘員達が岩に変化して突攻してくるとそれをさけ元に戻ったところに攻撃を仕掛ける。滝と焼くの的確な作戦指揮の下一人一人確実に倒していき隙は見せない。対する岩石男爵

側は指揮官である岩石男爵のお粗末な戦術指揮もあり序々に戦力を消耗していった。
「うおのれえ～～～っ、わしに向かって来んとは軟弱な奴等じゃ。そんなにわしが怖いのか～～～っ！」
戦場で孤立した状況になり叫ぶ岩石男爵。その前に一人のスーツの男が姿を現わした。
「貴様の相手は俺がしよう」
「おんしは！？」
「結城丈二・・・・・・ライダーマン」
岩石男爵の問いかけにその男、結城丈二はあえてゆっくりと答えた。
「ライダーマン・・・・・・。おんしがか。なら相手にとって不足はないがや。かかって来んか！」
「望むところ・・・・・・行くぞ！」
そう言うと両手を大きく天へと掲げた。

トォーーーーッ
叫び声と共に掲げられた両手にマスクが浮かび上がる。それと共に両手が銀色の手袋とブーツに包まれる。
ライダーマンッ
掛け声と共にマスクを被る。胸が赤く、腹が赤と白、そして緑の三角のカットとなり他の部分も黒いバトルボディに覆われていく。ベルトもそれと共に四つの小さな風車がバックルに配されたものへと変わっていく。

マスクを完全に被り終えると四つの風車が一斉に回りはじめる。風車が光を発すると両手首を合わせた状態でクロスさせ最後に胸の位置で拳を突き合わせる。それと共に凄まじい力が全身を駆け巡る。
「行くぞっ、岩石男爵！」
右腕のアタッチメントにパワーアームを装着させると立ち向かっ

た。対する岩石男爵も岩の棍棒を振るって突進する。
　重い棍棒を縦横無尽に振り回す。その重苦しい巨体からは信じられない程俊敏でライダーマンも攻撃をかわすだけで必死である。
「どうしたどうした、それでもライダーの一員かや！」
　攻撃を受けてはひとたまりもない。例え戦略戦術は劣っていてもやはりかって人々を震え上がらせた魔物の血を引くデルザー改造魔人の一人である。その力は絶大なものであった。
「わしの力、まだまだこんなものではぬわいぞお！」
　間合いを離すとジャンプした。そして空中で身体を丸め巨大な岩石に変身した。
「秘技、岩石落としっ！」
　激しくバウンドし地響きを立てつつライダーマンに襲い掛かる。
「くぅっ！」
　かろうじてそれをかわした。だがビルを壊しつつ跳ね返ると今度は一直線にライダーマンへ向かってきた。
「岩石弾っ！」
　速い。よけられるものではなかった。鈍い何かがひしゃげ潰れる音がした。
「ぐぶうぅっ・・・・・・！」
　胸に直撃を受けたライダーマンが口からドク黒く濁った血を吐きつつ苦痛の表情を浮かべる。岩はなおも回転し肋骨の折れる嫌な音が聞こえてくる。
　岩が弾きかえる。ライダーマンは後ろにとばされ激しく地面に叩き付けられる。
「がはあぁぁっ・・・・・・！」
　鮮血を噴き出した。マスクから露出した顔の部分だけでなく壊れたコンクリートや煉瓦で埋められた地面まで赤く染め上げた。
「どうじゃあ、岩の味は。こたえられんじゃろがあ」
　まだ口から鮮血を滴らせながらも立ち上がってきたライダーマンに対し高笑いしつつ言った。

廃墟の巨人その十三

「まぁだ立ち上がってくるとは感心な奴じゃ。しかしそれも終いじゃ。せめて苦しまんようにしてやっから安心しい」
そう言うと再びジャンプし岩へと変身した。
「止めじゃあ！」
再び地を鳴らしバウンドしてくる。
ライダーマンはバウンドしつつ迫るその巨大な岩石を直視していた。足がよろめく。身体中に鈍い激痛が走る。立っている事さえつらい。口の中は鉄の様な錆臭い味で満ちている。避ける体力は残っていない。一撃を受ければ命は無い。そういった状況だった。
「だが負けるわけにはいかない・・・・・・！」
岩が来る。ライダーマンはその岩を見ていた。
「岩・・・・・・・・・そうだ！」
ライダーマンの脳裏に閃きが生じた。
「アタッチメントチェンジ！」
パワーアームのセットを指から取り外した。そして別のセットを入れた。
「ドリルアーム！」
鋭い金属音を立てドリルが回転する。そのドリルを回転させたままライダーマンは迫り来る岩石男爵を直視していた。
「・・・・・・・・・」
「何をやろうとしちょるか知らんが無駄な事じゃああ！」
岩石男爵が余裕に満ちた声で言った。
「もう逃げられん、成仏しりゃあせ！」
「・・・・・・そこだ！」
頭上から急降下してくる岩に対してアームを構えた。そして力を溜め跳び上がった。
「止めようとしても意味無いわぁ！」

勝ち誇る。だから気が付かなかった。ライダーマンが必勝の笑みを浮かべていることに。

硬い物がぶつかり合う音がした。空中で両者は時が止まったかのように静止していた。

「あ、が、ガアアアア・・・・・・」

岩が次第に岩石男爵の姿へと戻っていく。その腹をライダーマンのドリルアームが貫いていた。

「やはりな、急所はそこだったか」

ドリルを岩石男爵の背から引き抜いた。着地したそのすぐ後ろに岩石男爵の巨体が地響きを立てて落下した。

「ど、どういう事じゃあ、わしの岩石落としが破られるとは・・・・・・」

「岩の結点を衝いたのだ」

ライダーマンは言った。

「結点!?」

「そうだ。どんなに硬い物でも分子、原子を結合させている点がある。それが結点だ。そこを衝けば例えダイヤの様に強固なものでもたちどころに壊れてしまう」

「ではおんしはわしの・・・・・・」

「そうだ。あと0コンマ一秒でも見極めが遅れていたら俺が押し潰されていた」

「フフフ、見事じゃ。わしの完敗っちゅうことじゃな」

「そうだ。悪いが止めを刺させてもらおうか」

マシンガンアームを装填したその時だった。新手の戦闘員達がライダーマンの前に立ちはだかってきた。

「ムゥッ!?」

射撃を開始しようとしたところで手を止めた。見れば滝達インターポールの捜査官も取り囲まれていた。

「クッ、まだこれだけの戦闘員がいやがったのか」

滝が口惜しげに言うとそれを待っていたかのように一人の男が現

われた。
「このベイルートに配した全ての改造人間と我等の作戦は全て水泡に帰してしまったがな。貴様等のおかげで」
「その声は・・・・・・・・・」
ライダーマンはその声を忘れたことがなかった。自らに無実の罪を着せ陥れた男。命を賭して救い出してくれた部下達を殺戮した男。ライダーマン、いや結城丈二にとって忘れ得ぬ憎んでも有り余る男だ。
「久し振りだな、ライダーマン」
目の前に現われたその姿を認めライダーマンの眼に怒りの炎がともった。
「貴様が・・・・・・。やはり生きていたのか・・・・・・・・・」
「我等が偉大なる神の御力により甦った。今一度悪をこの世に栄えさせん為にな」
「言うな、今ここで貴様を再び地獄へ送り込んでやる」
「ほお、死に損ないのその身体でか」
ヨロイ元帥はマシンガンアームを構えるライダーマンを口の両端を三日月の様に歪めてせせら笑った。
「心配するな、貴様なぞ何時でも始末出来る。だが今はベイルートから撤退せねばいかん。そこにいる岩石男爵と共にな」
横目でチラリ、と岩石男爵のほうを見た。
「このような男でも貴重な戦力でな。ある男に頼まれわざわざここまで出向いてきたのだ」
「す、済まぬ・・・・・・」
岩石男爵は戦闘員二人に両脇を担がれ戦場を離脱していった。
「グッ・・・・・・」
それを見てライダーマンも滝達も歯噛みするだけだった。
「デーストロンの時の借りもある。ライダーマン、いや結城丈二よ。貴様はカァーメンライダーブイスリー共々この俺の手で時間をかけてゆっくりと殺してやる。その時を楽しみに待っているがいい」

そう言うと高笑いと共に姿を消した。後にはライダーマンとインターポールの者達だけが残された。

「ライダーマン・・・・・・・」

役が声を掛けようとする。だが滝がそれを役の左肩に右手を置き頭を振って制止した。

「ヨロイ元帥・・・・・・。俺は負けん」

ライダーマンは呟いた。静かで落ち着いた声であったが暗く、それでいて熱く激しく燃え盛る炎を宿した声だった。

「必ず、必ず貴様を倒しこの右腕、片桐達の仇、そして人々の笑顔を取り戻してやる！」

結城は叫んだ。砂埃が辺りに舞った。

廃墟の巨人　完

２００３・１２・１８

青き江の妖花その一

青き江の妖花

生ある者にとって水はなくてはならぬものである。水あるところに生物は棲みそこを中心に生物の社会が形成される。

これは人間も同じである。むしろ人間の社会程水を必要とする社会はないのではなかろうか。

古来より人の社会は水なくしては成り立たなかった。とりわけ川というものの存在は人の社会、文明を形成したといって過言ではない。

インダス河、チグリス＝ユーフラテス河、ナイル河、そして黄河。古代文明は全て河に支えられてきた。『エジプトはナイルの賜物』と古来より謳われてきた。その言葉通り河は人々に多くの恵みをもたらしてきた。

今もそれは変わらない。ミシシッピー、アマゾン、ドナウ、ライン、ボルガ。多くの河がそれぞれの国々の生命線となっている。

その一つとして長江がある。中国南部を象徴する大河であり世界第四位の流域面積を持つ。この大河は何千年もの長きに渡って人々に豊かな恵みをもたらしてきた。北部を流れる黄河が暴れ河なのに対してその流れは比較的穏やかであり水墨画の如き幻想的な景色である。

古、東周時代の屈原の頃よりその美しく幻想的な風景は詩人達により詠われてきた。とりわけ盛唐期の詩人李白はこの風景を愛し多くの詩を残している。

青く対岸すら見えない海の様な江を多くの船が行き来している。大きな貨物船もあれば木製の小さな小舟もある。その小さな舟の中の一艘に彼はいた。名を神啓介、またの名をカイゾーグ仮面ライダーエックスという。

その大柄な身体は特に肩が発達しまるで水泳選手のようである。

その身体を水色のセーターと白いシャツ、黒のスラックスで包んでいる。

やや細く収まりの悪い髪に黒い瞳と男らしい形の眉を持っている。その瞳からは強く澄んだ光が放たれている。

城北大学教授であり人間工学及び海洋生物学の権威であった神啓太郎の子として生まれた。母は彼が幼い頃に亡くなっており男手一つで育てられた。頑固で偏屈な父であったが同時に思いやりも兼ね備えており口では互いに罵り合いながらも信頼し合う父子の関係であった。

長じて沖縄の水産大学に入った。また父の助手でもあり恋人でもあった水城涼子と婚約しその前途は揚々たるものと思われた。しかし悪の魔の手が彼の運命を狂わせた。

デストロンが潰えた後またしても仮身の姿をライダー達に倒された首領は神教授の親友にして悪魔的な天才と謳われていた仮身の姿の一つ呪博士を使い当時の超大国達を唆し新たなる組織を結成した。その名はガバメント＝オブ＝ダークネス。略してゴッド、日本征服その実世界制覇を企む第四の組織であった。

そのゴッドが神教授の頭脳に目をつけ協力を迫ったのだ。教授がそれを断るとゴッドは教授を息子である神啓介共々抹殺する事を決定した。きょうじゅの助手である水城涼子を取り込み執拗に襲撃をかけた。そして遂に神教授を息子共々暗殺する事に成功したのだ。

だがこの時止めを刺さなかった事がゴッドにとって後々の災いとなった。かろうじて一命をとりとめた教授はその最後の力を振り絞り息絶えた息子を救うべく改造手術を施した。そしてその手術を終えるととある小島に密かに建造していた秘密基地『神ステーション』に自身の意識と人格を移動させて息絶えた。目が覚めた息子神啓介は通信機からの父の声に告げられる。海と陸を自由に動く事の出来る深海用改造人間＝カイゾーグ、仮面ライダーエックスとして生まれ変わったのだと。

父の残したカイゾーグ用マシンクルーザーに乗りライドルスティ

ックを手に彼は父を殺し世界を闇に覆わんとするゴッドと戦い続けた。謎の協力者水城霧子とかっての恋人涼子の暗躍、二人の真の想いと死。ゴッド第一室長アポロガイストとの死闘、巨人キングダークとのＲＳ装置を巡る攻防、ブイスリーによるマーキュリー回路セット等を経て彼は遂にゴッドを倒した。ゴッド壊滅後彼は他のライダー達とおなじく日本を離れ表向きは水生生物学者として世界を回り悪と戦い続けた。

「武漢までどの位だい？」

神は長江の雄大な景色を眺めつつ舟を操る船頭に尋ねた。

「そうですねぇ、この分だと昼過ぎには着きますよ」

船頭が漕ぎながら答えた。小柄ながらよく締まり日に焼けた肌を持つ初老の男性だ。何処か飄々として好い印象を受ける。

「そうか、思ったより早く着くな」

「近頃江の流れが速いですからね。旦那は確か日本から来なすったんですよね。こう言っちゃ何ですけれど旦那のお国じゃあこんなにおっきな江はないでしょう」

「うん。これだけの江はねえ。やっぱり長江は凄いね」

「そうでしょう。まあこの江があるからあっし等も飯が食えるってもんです」

「ははは、そうだね」

船頭と朗らかに談笑するうちに波止場に着いた。

「楽しい旅を有り難う。ちょっと寄ってみたいところがあるんだ」

神はお金を渡しつつ船頭に言った。

「というと黄鶴楼ですかい？」

「う～～ん、それもいいけれどこの辺りの景色が気に入ってね。ちょっと見て回りたいんだ」

二人は手を振って別れを告げ途を別にする。小舟が遠く水平線に消え神の目には幻想的な景色が映し出されていた。

青く海の如き江の左右に霞を漂わせた山々が連なる。その木々は遠目からは限りなく黒に近い紫である。小舟が静かに行き来し水面

に波紋を形づくる。フゥッと吹いてきた風が水の香りを運んで来る。
神はその景色と香りに完全に魅せられている。
「噂には聞いていたけれど凄いな。水質調査の依頼できたけれど呼ばれてラッキーだったな」
古来より多くの詩人や画家にその美を謳われただけはある。そう感じた。ふと彼ののうりにある詩人の事が浮かんだ。
「この長江に浮かんでいる月を取ろうとした詩人がいたな。確か・・・・李白だったな」
「その通り。あんたもその李白と同じ様に溺れ死ぬのさ」
「何っ!?」
女の声だった。声のした方を振り向いた。そこには数名の戦闘員がいた。
「ギィッ」
棒を手に神を取り囲んだ。そして一斉に襲い掛かる。

青き江の妖花その二

「ムッ」
振り下ろされる棒をかわしそのみぞおちに拳を入れる。右から来る戦闘員の顎に蹴りを入れる。
左の戦闘員を掴みすぐ後ろの一人に投げ付ける。残る二人のうち一人を手刀で倒すと最後の一人をチャージで水の中へ突き落とした。
「ギヒヒヒヒヒ、やるねえ。ライダーの一人だけはあるよ」
先程の声が聞こえてきた。
「クッ、何処だ」
「ここだよ」
水面から鞭が飛び出してきた。そして神の左足首に絡みつくとそのまま水中へと引き擦り込んだ。
「ウワッ！」
神はそのまま水中へ引き込まれた。激しい水飛沫が立った。
「いくらライダーといえども水中でのうごきは鈍る筈さ。さあどうやって料理してやろうかねえ」
水面の上から声がした。それを合図に三体の怪人が姿を現わした。鞭の無視はネオショッカーの酒豪怪人サンショウジンだった。左右にはゲドンの人喰い怪人ワニ獣人とブラックサタンのトゲ怪人奇械人トラフグンもいる。
「こちらは水生怪人ばかり。さて、楽しませてもらおうかねえ」
サンショウジンが鞭を引き寄せようとする。だがその鞭は途中で断ち切られていた。
「何っ！？」
そこへ何者かが来た。サンショウジンと交差する。
サンショウジンの下半身が水底へ落ちていく。暫くして上半身も落ちていき水底で爆発した。
「甘く見てもらっては困る。俺はカイゾーグ、水の中での戦いは専

門分野だ」
「アゥッ！？」
「エェヒィッ！？」
先程サンショウジンを真っ二つにした何者かが残る二体の怪人達に言った。怪人達も声の方へ身体を向けた。
「ギッ！？」
「俺はエックス、仮面ライダーエックス。行くぞ！」
横に赤い線の入った銀のバトルボディに黒の手袋と赤い胸、腰のベルトは黒と銀、その中央に赤い風車がある。マフラーは黒に横の線と赤いエックスの字が入った柄であり、そのマスクは銀と黒が基調で何処か髑髏を思わせるフォルムであるがその紅の両眼と額にある黒と赤の大小のアンテナ、口の部分のパーフェクターといったものが機械的な印象を与える。第五の仮面ライダー、カイゾーグ仮面ライダーエックスである。
「アゥアゥアゥアーーーッ」
ワニ獣人がその巨大な顎を以ってエックスライダーの胴体を食い千切らんとする。しかしエックスライダーはそれを上に泳いでかわす。
「エェヒィーーン」
奇械人トラフグンが腰の棘を発射する。エックスライダーはその棘をライドルで全て叩き落とした。
後ろに回ったワニ獣人がその尾を振り回してきた。ライドルホイップが一閃する。獣人の尾は両断されてしまった。
エックスライダーは水中で後ろに宙返りした。そしてホイップをワニ獣人の眉間へ切り付けた。獣人はドス黒い血を流しつつ水底へと沈んでいった。
のおった最後の怪人であるトラフグンは両手の刃を派手に振り回しつつ迫る。当初はそれを右に左にマンタの如き優雅な動きでもってかわしていたエックスライダーだったが頃合い良しと見たのか反撃に転じた。

右から来るトラフグンの刃を両断すると返す刀で怪人の喉を刺し貫いた。

怪人の腰に蹴りを入れその力でもって引き抜く。既に息絶えていた怪人はそのまま落ちて行き四散した。

三体の怪人を倒し終えたエックスライダーは波止場に上がり敵がいないのを確かめた後変身を解いた。バトルボディが服に戻っていき仮面の左半分が顔に戻り、そして右半分も戻っていく。やがて神啓介へと戻っていた。

「先輩達から話を聞いていたがやはり中国にもいたか。だとすればここにいる大幹部は誰だ」

長江は先程の水中での死闘が嘘のように静まり返っている。戦闘員達の死骸も爆発してしまったらしく消えてしまっている。調べられ得る物がなくなってしまっている事を残念に思いつつも彼はその場を後にして武漢へ向かった。

「作戦は失敗だ。神啓介は無事武漢に到着した」

薄暗い基地の一室で一人の女がテーブルの上に置かれた水晶玉を覗き込んで言った。かのじょの言葉通り水晶にはバイクを折り現地の要人達に迎えられる神の姿が映し出されていた。

この女の名を魔女参謀という。波がかった長い黒髪に巨大な金属の襟を持つ身体にピッシリと着くレオタードの様な服で全身を包みその上から黒マントを羽織っている。レオタードの様な服で包まれた脚には銀のメタリックなブーツを履いている。その整った顔立ちは下半分をベールで覆っているとはいえ妖艶さが漂っている。ジンドグマの四幹部としてその名を知られた女である。

トルコの黒海沿岸トラブゾン近郊のある裕福な家に生まれた。彼女の家は表向きは古い血筋を誇る名家であったがその真の姿は呪術でもって人を殺していく魔術師の家であった。

彼女も幼い頃より呪術を教えられ、成人する頃には稀代の呪術師としてアラブの裏の世界に知られるようになった。

彼女に呪いをかけられ生き長らえた者はおらず多くの者が不可解

な、そして無惨な死を遂げていった。同時に彼女は悪魔的に切れる頭脳でもってテロ活動も請け負いその怖ろしさはさらに知られるようになった。

その呪術と頭脳をテラーマクロに買われドグマに入り大幹部の一人となった。だが悪魔元帥がテラーマクロとドグマの在り方を巡り衝突し袂を分かつと悪魔元帥についた。ジンドグマにおいては悪魔元帥の片腕として辣腕を振るった。冷徹にしてプライドが高く残忍な作戦を立案、指揮する事で知られている。

「それ見た事か。所詮三体程度ではエックスライダーを倒す事など出来んのだ」

側に立つ白スーツの青年が言った。ネクタイと手袋がスーツとは対照的に黒なのが印象的である。黒い髪と瞳を持つホリの深い顔はギリシア彫刻の様だがそれ以上に冷酷さと傲慢さを漂わせている。

「あいつはそうそう楽には倒せん。奴を倒すのはこの俺の仕事だ」

「言ってくれるねえ。流石はゴッド第一室長だっただけはあるよ。けどあんたの仕事はあいつの相手をすることじゃあない筈なんだけどねえ」

やけにカン高く耳に障る気味の悪い声が聞こえてきた。

「何？」

「あんたの仕事は今までどおりライダーのデータを集める事。違ったかい？」

嫌らしい笑い声と共に赤い服の女が暗闇からスーーーッ、と現われてきた。

青き江の妖花その三

赤い服の上に裏地が緑がかった黒いマントを羽織っている。頭は巨大なケイトウの花そのものでありそこに両眼がある。デルザーで最も細菌戦及び毒等を使用した作戦を得意とする改造魔人ドクターケイトである。

古来より処刑場では多くの血が流れた。その血には刑死した囚人達の様々な思いが混ざっている。

無実の罪を着せられた者、信頼していた主君や友人に裏切られた者、野望を未だ諦められぬ者、不仁不義の罪により死ぬ者、生への執着を捨ててはいない者、他の者への憎悪で燃え盛っている者ーーー。実に多くの様々な思念が刑場の血にはある。

こうした刑場の血を吸って花が咲いた。毒々しいまでの緑の蔦が伸び茂りその蔦に咲いた花であった。

その花は非常に整った姿形をしていた。しかしその色はドス黒く濁った赤であり看守達も気味悪がり近寄ろうとはしなかった。誰も近寄らなかったが花は相も変わらず咲いていた。

ある夜のことだった。その日は何時にも増して処刑された者の多い日であった。花の一つから白い肌を持つ女が現われた。その女は白い肌と紅の唇、緑の眼、黒い髪を持つ妖艶な美女であった。この世のものとは思えぬ美しさを持つこの女を見た者は男であれ女であれ忽ち虜となってしまった。まるで引き寄せられるかのように皆この女に歩み寄った。歩み寄った者は皆この世から去ってしまった。刑場の死刑囚達の最後の血を吸って生まれたこの女は人ではなく魔性の者だった。足のつま先から髪の毛の一本に至るまで毒に満たされた魔物であった。刑場に咲く妖花の化身、人々はこの女をアルラウネと呼んだ。

アルラウネが生まれたのはフランス南部であった。アルビジョワ十字軍によるフランスカタリ派への弾圧やフランス革命によるジャ

コバン派の弾圧と血生臭い惨劇が絶えなかった地である。旧教徒と新教徒の対立もあった。アルラウネはこの地に根を下ろし人々の血を吸い毒を撒き続けた。この女の行く所生ある者は皆死に絶えドス黒く変色した屍が累々と転がっていた。長きに渡ってこの地は魔物が君臨する地となった。

事態を憂慮したローマ＝カトリック教会は退魔師を送った。炎の術を得意とするバチカンでも名うての退魔師の一人だった。彼はアルラウネを追い続けボルドーに近いある十字路で遂にこの女を捕らえた。

闘いは壮絶なものであり長きに渡った。しかし遂に退魔師の炎術が妖女を捕らえ焼き払った。ここに妖女アルラウネは滅び去り南フランスは魔性の者の忌まわしきくびきから解き放たれた。

このアルラウネの子孫こそドクターケイトである。奸智に長け残忍な気象の女であり卑劣な作戦で恐れられている。

「ドクターケイトか。わざわざ持ち場を離れて御苦労なことだな」

ケイトの皮肉に対し男も皮肉で返した。

「ゲヒヒヒヒヒ、あたしの方は順調なんでねえ。あんたの顔を見に来てやったのさ」

「ほう、それは有り難い。それにしてもかなりはかどっているようだな」

「あたしを誰だと思っているんだい？あのアルラウネの子孫さよ」

「侮蔑していた人間風情に負けたあのアルラウネ、だな」

男の言葉にケイトは眉をピクリ、と動かした。

「・・・・・あたしを馬鹿にするつもりかい！？」

「馬鹿にするつもりは無い。ただ事実を述べたまでだ」

「クッ・・・・・・」

ケイトは手にした杖を向けた。先がケイトウの花になった奇妙な杖だ。

「ほう、やるつもりか？言っておくが俺は伊達にゴッド秘密警察取り仕切っていたわけではないぞ」

余裕綽々といった口調で言う。その口調がケイトの神経をさらに逆撫でした。

「止めよ、両人共」

そこへ魔女参謀が間に入った。

「今は互いに争っている場合ではない。エックスライダーを倒し中国おける我等が作戦を成功させねばならんのだ」

「ク・・・・・そうだったね。あたしが軽率だったよ」

「ふむ」

二人は構えを解いた。

「あたしは自分の持ち場へ帰るとするよ。これからの準備もあるしね。魔女参謀、エックスライダーはあんたに頼んだよ」

「うむ」

ドクターケイトはそう言うと闇の中へ消えていった。後には二人が残された。

青き江の妖花その四

「ケイトめ、帰っていったか。シンガポールへ出向いたり何かと忙しい奴だ」
「うむ。ところで貴公はどうするつもりだ？私と共にエックスライダーと戦うか？」
「それも良いな。奴の今の力を知るには刃を交えるのが一番だ。それに」
「それに？」
男が口の端だけで笑った。
「奴を倒すのはこの俺だ。この俺以外の者がエックスライダーを倒す事は許さん」
「そうか」
「だからといって作戦を妨害する気は無い。然るべき場でエックスライダーと戦いその地を奴の墓標にしてくれる」
「成程、ではその地はここでどうか？」
右手に持つキセルで壁に掛けられている地図のある地を指し示した。男はその地を見てニヤリ、と笑った。
「そこか。成程、奴と雌雄を決するにはうってつけの地だ」
男は不敵に笑った。そして暗闇の中二人はそれぞれ部屋から消えていった。
武漢に到着した神啓介はこの地の学者や役人と今後の打ち合わせをした後ホテルへ行きそおで一晩休んだ。次の日は午前に水質調査を終え昼食となった。武漢で獲れた鯉を油で揚げたものをメインに江の幸と野菜をメインにした中々豪勢なものであった。
昼食の後神は一人観光に出た。目的地はこの武漢の名物黄鶴楼である。
赤く幾層にも重ねられたこの楼は蛇山にある。優雅な庭園もありその屋根は全て見事なまでに反り返っている。遠く唐の時代よりあ

りここから見下ろす景色は実に美しい。何度も焼失しており今の楼は一九八五年に建てられたものである。幾度となく甦りその美しい威容を世の者達に見せ続けている。

神は楼の最上層に登った。そしてそこから武漢、そして長江を見下ろした。

「凄いな、わざわざ一番上まで登ったかいがあったもんだ」

思わず感嘆の声を漏らした。それ程までにここから見られる景色は素晴らしかった。

「縁があったらまた来たいな。今度は仕事抜きで」

「そう、仕事なのが生憎だよ」

「それはお互い様だろう」

後ろから日に焼けた肌のアジア系の男が出て来た。引き締まった顔と身体に白の上着、青いシャツ、黒ズボンといういでたちである。

「インターポールから派遣されてきた滝和也だ。よろしくな」

スッと右手を差し出した。

「神啓介です。こちらこそ宜しく。お話は本郷さんと一文字さんから窺っています」

そう言うと滝の右手を握り返した。

「だったら話は早いな。俺がここへ来た意味も聞いてるな」

「ええ、市長の方から内密に。俺にここへ来てもらった本当の理由と一緒ですね」

「そうだ。俺達とは別にここへ来ている連中をどうにかする為だ」

滝も神と並んで武漢と長江を見下ろせる場所に出た。

「死んだ筈の奴等が棺桶から出て来て何やらおっぱじめようとしている。あんたもそれは本郷とかから聞いているだろう」

「ええ。それに昨日会いましたし」

「何っ、もう攻撃を仕掛けてきたっていうのか!?」

滝は思わず声を上ずらせた。

「はい。怪人もいましたよ。それも三体」

「怪人までか・・・・・。どうやらここでも相当派手な事をしで

かそうと考えてるな」
「でしょうね。現に今ここにも来ていますよ」
神が上半身を後ろへ反らすとそこへ槍が突き出されてきた。神はその槍を掴むと思いきり引っ張った。槍の持ち主である戦闘員がバランスを崩しそのまま楼から落ちていった。
「岸辺の奴等の仲間かっ！？」
「どうやらあんたもこいつ等と付き合いがあるらしいな。じゃあやるか」
「こんな目立つ所で戦いたくはなかったけれど仕方ないな。どうやらどうしても相手をして欲しいらしい」
後ろから、左右から戦闘員達が現われてきた。それぞれ手に得物を持ち十重二十重に取り囲んでいる。
神は右、滝は左へ移った。そして迫り来る戦闘員達を次々と倒す。ある者は手摺りにもたれる様にして倒れある者は最初の者と同じく楼から投げ飛ばされる。
やがて全ての戦闘員が倒された時だった。辺りを警戒する神に対し何者かが吹き矢を放ってきた。
「誰だっ！」
吹き矢が飛んで来たのは楼の下からだった。そこへ目をやると十名程の戦闘員達と魔女参謀がいた。
「女の幹部か」
「その通り、ジンドグマきっての妖術の使い手魔女参謀、以後憶えてもらおう」
神と滝は魔女参謀達へ向けて飛び降りた。たちまち数人の戦闘員が襲い来る。
「そうはさせないっ！」
「行くぞっ、魔女参謀！」
剣を手に襲い来る戦闘員を肘で倒し投げ飛ばす。投げ飛ばされた戦闘員の一人が庭園の池へ落ち家鴨が逃げ飛び亀が水の中へ潜っていく。

二人は退く魔女参謀を追う。だがその前に新手の戦闘員達が得物を手に次から次へと現われて来る。

戦闘員達を倒しつつ二人は魔女参謀を追い詰めんとする。やがて二人は蛇山を出麓の誰もいない広場に出た。

「ここで戦うつもりか？」
二人はこちらへ向き直ってきた魔女参謀と対峙している。かってジンドグマでその知略を知られた者を前にしているだけに二人は紀を張り詰めている。
「さあ、どう来るつもりだ」
「怪人か罠か、それとも貴様自身が相手してくれるか」
少しずつ間合いを詰めようとする。だが魔女参謀はその二人に対し不敵に笑った。
「心配するな、私は貴様等と戦うつもりは無い」
「何っ、では何故黄鶴楼で襲撃を掛けて来たのだ」
「あれはほんの小手調べ。二人共噂に違わぬ腕前。これからが楽しみな事。特に神啓介今回はそなたに伝言を伝えに来た」
「何、伝言！？」
神はその言葉に顔を顰めた。
「そうだ。アポロガイストからな」
「アポロガイスト！？」
彼はその名を聞いて表情を一変させた。
「もうすぐそなたの前に現われるとな。その日を楽しみにしていると」
魔女参謀はそう言うとマントを翻し姿を消した。
「アポロガイストが・・・・・・」
「知っている奴のようだな」
滝は怪訝そうに聞いた。
「ええ。俺との勝負に異常なこだわりを持っている奴でしてね。おそらく正々堂々と正面から闘って勝ちたいのでしょう」
神はそう言いながらその男の姿を脳裏に思い浮かべた。
「成程な。ライバルか。じゃああんたも全力で倒さないとな」

「ええ」
滝は神の横顔を見た。そこには対決を前に一人静かに燃える男の顔があった。
暫くして二人は敵の作戦の意図を掴んだ。役から電話があったのだ。
「どうした?」
“滝さん、大変な事が解かりました”
その声は普段と変わらず冷静なものであったがその口調から深刻かつ危機的な話が語られるであろうと彼は察した。
「大変な事?一体何だ?」
滝は覚悟を決め聞いた。
話を聞くにつれ彼の顔から血の気が失せていった。瞳孔が開きだし身体が震える。
「おい、その話は本当か、他の連中が故意にリークした偽情報とかじゃないのか!?」
声まで震えている。
“残念ながら。場所と配置されている怪人達の顔触れを見る限り。それに”
「それに・・・・・・!?」
滝は今から語られる事が決定打だと確信した。
“指揮を執っているのはドクターケイトです”
「あいつか、だとすれば間違い無いな」
滝は窓を見た。長江の上流の方を。
「すぐ行く。何としてもそれだけはさせん、絶対にな」
“お願いします。今そちらで動けるのは滝さん達しかいません”
「ああ、任せろ」
携帯を切ると神を呼んだ。彼も話を聞き血相を変えた。そして二人は急いで部屋を出た。
三峡ダムは長江最大のダムである。あの地に毒を流せばその犠牲は計り知れないものとなるのは火を見るより明らかだ。

その地に彼等はいた。人目を忍ぶようにして蠢いている。
「万事抜かりは無いね」
ドクターケイトはダムの堤防の上で配下の戦闘員達に問うた。
「ハッ、全て整いました。後は作戦を決行するだけです」
先頭の戦闘員が敬礼をして答えた。
「そうかい、ならいいんだよ」
報告を受け杖を振りつつ不気味な笑いを出した。
「そして御前達がそれぞれの毒を流す。これで長江流域の生物は全て死に絶えてしまうよ」
後ろにいる怪人達を振り返って言う。ショッカーの毒花怪人ドクダリアン、デストロンの昆虫怪人ゴキブリスパイク、ゴッドの予言怪人ユリシーズ、ドグマの毒泡怪人ガニガンニーの四体である。いずれも毒や化学兵器を使う怪人達である。
「あの鬱陶しいエックスライダーが来ないうちにやるんだよ。折角頭良く生まれたんだ、上手く使わなきゃねえ。さあもうすぐ人や他の生物が悶え死ぬ姿が見れるよ。ゲヒヒヒヒヒヒ」
またもや不気味な高笑いを発する。杖を振り上げ作戦決行の合図をしようとしたその時だった。

青き江の妖花その六

「そうはさせんっ！」

堤防の上を駈けて来るクルーザー。それに乗るは仮面ライダーエックスである。

「な・・・・・。エックスライダー、どうしてここに！？」

「貴様等の企みは全て白日の下に晒される運命にあるのだ、この世に人が、ライダーがいる限り悪の栄えた例は無い。行くぞっ！」

クルーザーから跳躍して降り立つ。腰からライドルを引き抜きそれを後ろに立てて構えを取った。

「ぬうううううっ、こうなったら予定変更だ。作戦遂行の前にエックスライダー、貴様から血祭りにしてやるよ！」

ケイトの号令一下怪人と戦闘員達がエックスライダーを取り囲む。三峡ダムを、多くの人々の命を守る為ここに決死の興亡が幕を開けた。

「ガニイイイイーーーーッ！」

ガニガンニーが左手の鋏を使い次々に突きを浴びせて来る。エックスライダーはそれをライドルスティックで全て打ち払い逆に怪人の眉間に突きを入れた。

「ガギィッ」

怪人は呻き声を漏らし倒れ込む。だがその左手の鋏で足下を薙ぎ払って来た。

「させんっ！」

エックスライダーはそれをジャンプしてかわす。それと同時にライドルを振り被った。

「ライドル脳天割りっ！」

振り下ろされたライドルがガニガンニーの固い甲羅も頭脳も全て撃ち砕いた。怪人は口から泡を噴き出し爆死した。

「キヒヒヒヒヒ」

笑い声を発しながらナイフを投げて来る戦闘員、しかしそのようなものが通用する筈もなく次々とライドルで打ち倒されていく。

「スパーーーーィク」

ゴキブリスパイクが奇妙な叫び声を発しつつ右腕のスパイクを降り回して来る。

エックスライダーはライドルをスティックからホイップへと切り換えた。

振り下ろされるその右腕をきり落とした。そして返す刀でライドルを真一文字に一閃させる。怪人は中央からゆっくりと左右に分かれていきそれぞれ別に爆発した。

これで怪人は残り二体となった。僅かに残った戦闘員達と共に前後からエックスライダーを挟み撃ちにせんとする。

まず後ろのドクダリアンが襲い掛かる。だがエックスライダーの後ろ蹴りが腹を直撃し動きを止める。

時間差でユリシーズが迫る。右手に持つ剣でエックスライダーの首を断ち切らんとする。

エックスライダーはその一撃を後ろに跳びかわす。そして手近の戦闘員を投げ付け動きを止める。その間に二怪人が自分の前に来るように位置を変えた。

ようやく起き上がってきたドクダリアンが来る。しかしエックスライダーはその喉へ突きをいれライドルをロングポールへ切り換え思いきり上へ振り上げる。

「ヒィーーーーアーーーーッ」

空を飛び対岸に激突し爆死して果てた。これで残るはユリシーズのみである。

エックスライダーは一気に片をつけるべく跳躍した。そしてライドルスティックで大車輪をし更に力をつけ頂点においてその勢いを付けた身体を大きく伸ばし全身でエックスの文字を形作った。その後急降下してきた。

「エックスキィーーーーーック！」

叫び声と共にユリシーズへ急降下し蹴りを浴びせる。直撃を受けたユリシーズはそのまま吹き飛ばされた。フラフラと起き上がったが力尽き倒れ爆死した。

「おのれ、よくもあたしの可愛い部下達を・・・・・・」

「ドクターケイト、残るは貴様だけだ、行くぞ！」

ライドルスティックを後ろに構え左手の平を前に突き出す。対するケイトも巨大な杖を両手に持ち構えた。

「これでもお受け！」

ケイトが右手から数本のナイフを投げる。エックスライダーはライドルでそれを弾き返した。

ナイフが全てコンクリートに突き刺さる。するとその突き刺さった場所がシュウシュウと白い煙を出して溶けていく。

「なっ！？」

「ギヒヒヒヒヒ、これがあたしの力さ」

ケイトは気味の悪い笑い声を出した。

「このドクターケイトは妖花アルラウネの末裔、身体には血の替わりに猛毒が流れているのさ。あたしに触れたものは皆醜くただれて腐っちまうのさ」

「ムウゥ・・・・・・」

「貴様も腐らせてあげるよ、覚悟しな！」

杖の先をエックスライダーに向けた。

「死ねぇいっ！」

杖から毒々しい緑色の液体が噴き出る。エックスライダーはそれをジャンプでかわす。

「ムッ！」

液が浴びせられた場所がドス黒く醜く変色し溶けていく。

「成程ねえ、大した身のこなしだよ。けど何時までそれが続くかねえ」

「何を・・・・・・」

空中でライドルをロングポールに切り換え突きを入れる。突きが

ケイトの胸を貫いた。だがそこにケイトはいなかった。
「何っ！」
着地するエックスライダー。後ろから声がした。
「あたしはここだよ」
再び液を吹き掛ける。それを横に動きかわす。状況はケイトのペースであった。
「じゃあこれはどうだい？」
サッとマントを翻した。

青き江の妖花その七

「ケイト毒花吹雪！」
ケイトの全身から血の様に赤い花びらが巻き起こる。ケイトが再びマントを翻すと花びらが吹雪となりエックスライダーを包み込んだ。
「うおおっ！」
花びらがエックスライダーの身体に付着すると瘴気を出しつつ焼け爛れる。全身をその花びらが包んだ。
「ぐうう・・・・・・」
ガクリと膝を着く。かなりのダメージである事は明らかだった。
「どうだい、毒花吹雪の味は。一度浴びると堪えられないだろう」
残忍な、勝利を確信した声で言った。
「この花びら一枚で象さえ殺してしまうんだよ。改造人間といえど立っていられるだけでもやっとの事だろうねえ」
ナイフを取り出した。
「すぐには殺さないよ。ゆっくりと時間をかけて殺してあげるからねえ」
ナイフを放つ。だがそれはライドルによって弾かれてしまった。
「ほお」
ケイトは声を漏らした。そこには明らかに余裕があった。
「粘るねえ。けれどそれは無駄な努力ってもんだよ」
「・・・・・無駄な努力だと」
エックスライダーは両足だけで立ち上がった。
「無駄な努力などというものはこの世には存在しない。努力は必ず報われる。・・・・・そしてドクターケイト、貴様の邪な計画、この仮面ライダーエックスが必ず砕く！」
「言ってくれるねえ、満足に動かないその身体で。じゃあせいぜいあがいて死ぬがいいさ！」

杖を振りかざし襲い掛かる。エックスライダーもライドルで応戦する。激しい打ち合いがはじまった。

打ち合いは百合を超えた。体力的には明らかにケイトに分があったが基の技量と気迫に勝るライダーがかろうじて勝負を五分に持ち込んでいた。

「やってくれるねえ、ゴッドを叩き潰しただけはあるよ」

ケイトは肩で息をしながら言った。

「言った筈だ、必ず勝つと」

エックスライダーもよろめきかける身体で言葉を返した。

「じゃあもう一回これを浴びるんだね。今度こそ確実に死ぬよ」

間合いを話マントを翻した。再びあの赤い花びらが巻き起こる。

エックスライダーはそれを落ち着いて見ていた。

(奴は花の化身だ。だとすれば火には無力な筈)

ケイトの姿を見て思った。

(そこを衝けば勝てる。だがどうすれば)

ケイトがもう一度マントを翻そうとする。時間が無い。その時ふと手に持つライドルに気が付いた。

(・・・・・これだ!)

ライドルを両手に持つと胸の前で風車の様に激しく旋回させはじめた。

「フン、そんな事しても無駄だよ!」

マントが翻った。吹雪が襲い来る。

「死になぁっ!」

だがエックスライダーはそれに対しライドルを回し続ける。その速さは何時しか音を越え何やら赤いものまで見えはじめていた。

「よし、今だ!」

ライドルを放った。凄まじい唸り声をあげつつケイトへ迫る。

毒花の吹雪を吹き飛ばす。

「クッ、それが狙いかい!」

舌打ちするケイト、だがそれで終わりではなかった。

激しく旋回するライドルに炎が宿った。ライドルは燃え盛る火車と化しケイトに襲い掛かる。
「ギェエエエエエエエッ！」
この世のものとは思えぬ叫び声が沸き起こる。火車はそのままケイトの胸を直撃したのだ。
「・・・・・上手くいったな」
エックスライダーは全身を焼き尽くさんとする炎を床を転がりつつ必死に消そうとするドクターケイトを見て言った。
「ライドル火炎地獄、我ながら怖ろしい威力だな」
「クッ、ライドル火炎地獄だって・・・・・・！？」
まだくすぶり続ける炎に身を焦がさせ苦しんでいるケイトが顔を上げた。
「ライドルを旋回させその摩擦熱で火を生じさせたのだ。ケイトウの化身である貴様には炎が最も効くと思ったのでな」
「クッ・・・・・・」
「その通りだったな。最早貴様には闘う力は残っていない」
「おのれ・・・・・・」
止めを刺さんと跳躍しようとする。その時だった。
「止めろドクターケイト、貴様の負けだ」
ケイトの後ろから声がした。そこにはあの白服の男が立っていた。

青き江の妖花その八

「アポロガイスト！」
エックスライダーは彼を見て叫んだ。
「加勢でもするつもりかい！？いらぬお世話だよ。エックスライダーはあたし一人で倒してやるよ」
「その様でか？」
アポロガイストはケイトの強がりに対し冷たく言い放った。
「切り札を破られ火で重傷を負った貴様にエックスライダーを倒す力は残っていない。悪い事は言わぬ。この場は退け」
「ううう・・・・・・」
だが言い返す事は出来なかった。これ以上の戦闘が不可能である事は自分自身がよく解かっていた。
「早く撤退しろ。後は俺が引き受ける」
「クッ、じゃあそうさせてもらうよ」
ドクターケイトは忌々しそうにマントで身を包んだ。そしてその中に消えていった。
「クッ、アポロガイスト・・・・・・」
エックスライダーはライドルを手に取り宿敵と対峙せんとする。だが力が足りない。ガクッ、と片膝を着いた。
「今の貴様では俺は倒せん。万全の状態でない貴様の相手なぞするつもりは無い」
「クッ・・・・・・」
「くれてやる。これを飲み毒を癒すがいい」
そう言って一つの瓶をエックスライダーに投げ与えた。
「これは・・・・・・」
「解毒剤だ。それを飲んだなら二日後には毒が完全に癒えているだろう。洞庭湖で待っている」
そう言うと踵を返した。

「それまでその身体預けておく。傷を癒し力と技を磨いておけ」
アポロガイストは立ち去っていった。後ろから自分の名を呼ぶ滝の声が聞こえて来た。彼は別の場所で戦闘員達の別働隊と戦っていたのだ。
二日後の朝早く神啓介はマシンで武漢を発った。遠ざかりみえなくなっていくマシンを滝はホテルの自室の窓から見送っていた。
「決闘か。健闘を祈るぜ」
滝はもう見えなくなってしまった神の背に言葉を掛けた。
「ライダーってのは因果なものだな。何時でも戦いから避ける事は出来ない。そして人々の為、世界の為に死ぬ事すら許されないしな」
滝は今まで共に戦ってきた二人のライダー、そしてライダーマンに想いを馳せた。どのライダーも素晴らしい戦士達だった。改造人間としての悲しみと悪への怒りを仮面の下に秘めただ平和の為、人々の為、そして世界の為に戦い続ける。その姿をいつも見てきたのが立花藤兵衛であり彼であるのだ。
「必ず勝って帰って来いよ」
滝はそう言うと部屋を出た。そして彼の任務に向かった。
中国の長い歴史においては分裂と動乱の時代も長い。五胡十六国然り五代十国時代然り。その中でも後漢末からの三国時代は有名であり古来より小説や演劇の題材として取り扱われてきた。我が国においても小説や漫画にされる事が多い。
多くの魅力ある人物が登場するが特に有名な人物の一人として曹操がいる。中原を制圧した彼が次に江南の支配を狙って南下した時にそれを迎え撃つ孫権の軍と対峙したのがこの赤壁である。ここでの戦いは『三国志演義』において前半最大の見せ場となっておりこの戦い以後時代は三国鼎立へ大きく進む事になる。
江が横に広がり湖となっている。水は土の為か赤くなっており何処かその名を彷彿とさせる。古戦場だけあり物々しい雰囲気を漂わせている。
神啓介はその東岸を進んでいた。やがて目の前に一人の男が見え

てきた。

「よくぞ来た、神敬介」

赤く中央に銀の線が入り両脇に羽飾りを付けた仮面を被っている。胸を赤く太陽の光の様に彩った黒いバトルボディを身に纏い腰には赤と黒のベルトを巻いている。羽織っているマントは白である。右手は注射針に良く似た形状になっておりフェシング状のサーベルを中心に三つの銃口がある。左手には太陽の形を模した盾がある。縦の外側には無数の小刃が備えられている。彼こそアポロガイストの戦闘態である。

ギリシアのオリンポス山の近くに広大な所有地を持つ貴族の家の嫡男に生まれた。彼の家は代々多くの有能な軍人を輩出した名家であり彼も軍人となるべく育てられた。士官学校を優秀な成績で卒業した後に軍において華々しい武勲を挙げ続けた。戦禍により彼の家の者は皆死んでしまったが鉄の如き冷徹な心を持つよう育てられた彼は悲しむ事は無かった。その軍人としての有能さと冷徹さに注目したゴッド総司令は彼を組織に勧誘した。祖国への忠誠はもとより希薄な彼であったが素性の知れぬ組織への不安もあり当初は断っていた。しかし総司令の再三の勧誘と何よりもこれまで以上の力と戦いを得られるという事に魅せられゴッドに入った。殺人マシーンとの異名をとりゴッドにとって邪魔となる者を次々と排除し作戦を遂行していく彼はその非常な性質もあり見方からも怖れられる存在であった。

青き江の妖花その九

「アポロガイスト、二度もこの世に甦って来るとはな」
マシンから飛び降りアポロガイストの方へ歩み寄りつつ言った。
「全ては貴様をこの手で倒す事。偉大なる我等が神の力により甦ったのだ」
「俺を倒す事か・・・・・・。ならば復活したその力、どれだけ強くなっているか確かめさせてもらおう」
「それはこちらの台詞だ。さあ来い神啓介、仮面ライダーエックスとなってこの俺と闘うのだ！」
「それはこちらも望む所・・・・・・。行くぞ！」
神はヘルメットをマシンの上に投げ両腕を大きく動かしはじめた。

大変身
両腕を真上に上げそこから真横へゆっくりと動かしていく。腕の動作と共に腰に風車のベルトが現われ手首と足首が黒の手袋とブーツに覆われ身体も銀のバトルボディに覆われていく。
エーーーーックス！
掛け声と共に右手を左斜め上へ突き出し左手は拳を作り脇へ入れる。顔の右半分が仮面に覆われ左半分も覆われる。腰のベルトが強い光を発しその光が全身を覆う。

「行くぞっ、アポロガイスト！」
腰からライドルホイップを抜き前でエックスの文字を描き宣言した。
「喰らぇい！」
まず攻撃を仕掛けてきたのはアポロガイストだった。右手をエックスライダーへ向け三連発の銃を発射する。
「トォッ！」

エックスライダーはそれを跳躍でかわした。ライドルをスティックにしてその脳天を叩き割らんとする。

「甘いぞっ！」

アポロガイストはあおれをサーベルで受け止めた。そして鍔迫り合いに移る。

両者跳び退き斬撃を繰り出し合う。上に下に縦横無尽に撃ち合い火花を散らし合う。

剣撃破エックスライダーの方がやや有利だった。状況を悟ったアポロガイストは間合いを離すと左手の盾をエックスライダー目掛け思いきり投げ付けた。

「ガイストカッターーーッ！」

盾が唸り声を叫びつつエックスライダーへ向かって来る。小刃が激しく回転し乾いた地に砂埃を巻き起こさせる。

「やらせん！」

エックスライダーはそれを横にかわす。反転し後ろから背を切り裂かんとする。

そこへアポロガイストが銃口を向ける。かわしたところを狙い撃ちするつもりなのだ。

それに対しエックスライダーは一気に間合いを詰めてきた。これならばアポロガイストも射撃出来ない。止むを得ずサーベルで切り払わんとするがそれをホイップで受け止めつつ横へ滑る様に跳んだ。

エックスライダーを狙ったガイストカッターが今度は主を両断せんと迫る。激しい衝撃音が辺りに響いた。

しかしアポロガイストは死んではいなかった。盾を左手で受け止めていたのだ。

「成程な。あの頃とは比較にならぬ程腕を上げているな」

アポロガイストは盾を元の形に持ち直しつつ余裕を含んだ声で言った。

「それはこちらの台詞だ。本当に今まであの世で眠っていたのか」

エックスライダーも言葉を返した。

「地獄で亡者や悪魔共を相手に腕を磨いていたのだ。全ては貴様との決着を満足のいく形で着ける為にな」
「そうか。ならばその決着今ここで着けてやる」
「当然だ。その為にこの場に貴様を呼んだのだからな」
構えをとりつつゆっくりと時計回りに回り互いの隙を窺い合う両者。そこへ何者かの声がした。
「待てアポロガイスト、その勝負はお預けだ」
影が現われた。魔女参謀だ。
「魔女参謀か。手出しは無用だ」
アポロガイストは素っ気無く言った。
「本部からの指示だ。今すぐこの地から撤退せよとの事だ」
「・・・・・・・・本部からか」
アポロガイストは多少忌々しげに言った。その声には明らかに未練があった。
「まあいい。エックスライダーよ、この勝負は預けておく」
「・・・・・・そうか」
エックスライダーも退いた。アポロガイストは間合いを離した。だが攻撃を仕掛ける気配は無い。
「いずれこの続きをしよう。さらばだ」
そう言うとマントを上から被った。そして白いスーツの青年に戻った。
「マシーーーン！」
そして一声叫んだ。すると黒いマシンがエックスライダーの左手から姿を現わしてきた。無人であった。
マシンはアポロガイストの前で止まった。そしてアポロガイストはそれに乗った。
アポロガイストはそのままその場を去った。エックスライダーの方を振り向こうとはしなかった。ただ無言で去って行った。
「・・・・・・行ったか」
エックスライダーはその後ろ姿を見送った。彼も好敵手を後ろか

ら狙うつもりは無かった。真正面からぶつかり合い、全力を尽くして勝ちたかったからだ。

エックスライダーは変身を解いた。そして神敬介の姿に戻るとその場を後にした。

「おい、もう行くのか」

「ええ、アポロガイストとの闘いではさしてダメージを受けていませんし」

武漢のホテルの前で滝はマシンに乗る神敬介を見送っていた。

「つっても昨日闘ったばかりじゃないか。疲れもあるだろう」

「これ位何でもありませんよ、ライダーなら」

「ライダー・・・・・。そうだったな」

神がにこやかに笑って言った。滝もそれに対し笑みを返した。

滝が良く知る二人のライダーは度重なる死闘により常に傷を負っていた。しかしそれを決して人に見せる事は無く自らの命を賭して戦ってきたのだ。

「次へ行くのは上海だったな」

「はい、魔女参謀達はおそらく残った戦力を引き連れ長江を下っていると思われますので」

「あそこは厄介だぞ。何せ潜り込むにはうってつけの場所だからな」

「それでも構いませんよ。見つけ出すだけです」

「そうか。じゃあここで一先お別れだな」

そう言ってスッと右腕を差し出す。

「はい」

神も手を出した。

二人は手を固く握り合った。それは力強い戦死の握手だった。

神敬介はマシンのエンジンをかけた。爆音を立ててエンジンが動きはじめる。

滝は上海の方へ向けて駆けていくマシンをその姿が完全に見えなくなるまで見送っていた。そして一言言った。

「俺も行くか」

滝はホテルへ向かった。暫くして地下の駐車場からジープのエンジンの音が聞こえてきた。

青き江の妖花　　完

２００３・１２・２７

密林の刺客その一

密林の刺客

「まさかアマゾンが一緒に来てくれるなんて思わなかったよ」

旧ソ連製の古い航空機の中で一人の少年が隣の青年に言った。歳は十四五といったところか。黒髪でやや小柄な少年であり白いカッターと青のジーンズを着ている。

「本当、ブラジルからわざわざ来てくれるなんて」

その少年の横に座る長身の女性が同調した。淡い青の半袖のシャツに青のスラックスを穿いている。黒く長い髪を持つ美しい女性である。

「まさひこもりつ子さんもアマゾンの友達。アマゾン友達大切にする」

まさひこと呼ばれた少年の隣に座っていた耳が完全に隠れ肩にまでかかりそうな長髪の白スーツ姿の青年が答えた。細面で非常に引き締まった顔をしている。細い眉と一重の瞳は野性味と共に暖かさと優しさをも含んでいる。ジャガーやチーターといった大型のネコ科を思わせる精悍な身体つきをしている。彼の名は山本大介、通称アマゾン、仮面ライダーアマゾンその人である。

日本人の両親も元に生まれた。だが彼がまだ赤ん坊の時に彼の乗る旅客機がアマゾンの奥地に墜落し彼だけが一命を取り留めたのである。

その場に住んでいた部族に拾われた彼はジャングルの野生生物達に囲まれ生きることになる。そこで彼は常人のそれを遥かに超越した驚異的な五感と運動能力を身に着けた。

そして彼は自身を拾ってくれた部族に住んでいた。その部族であるが古代インカ帝国の秘術を受け継ぐ者達であったのだ。部族の指導者長老バゴーはその秘術を全て知る唯一の者だった。

これに目を付けたのが今まで多くの組織を陰から操ってきたあの者であった。彼はバゴーの弟子である勇猛だが残虐で粗暴な戦士ゴルゴスを唆し反乱を起こさせた。彼を通じてその技術を全て手に入れんとしたのだ。ゴルゴスは自らの身体を改造し九人の悪人の首を埋め込んだ人面岩と合体し『十面鬼ゴルゴス』と名乗り自らを首領とする『ゲドン』という組織を結成した。その目的は世界征服、その為にインカの技術を全て手中にせんとした。

ゴルゴスの襲撃を受けた部族は一瞬にして壊滅した。密林の奥地で人目を避け平和に暮らしていた彼等は野獣達から身を護る為の最低限の武器しか持っておらず次々ゲドンの凶悪な獣人達に食い殺されていった。

インカの技術の中でも最も重要なもの、それは『超エネルギー』と呼ばれるものであった。その秘密を狙うゴルゴスは秘密の鍵となっている『ガガの腕輪』を手に入れた。だが秘密は解き明かされなかった。解き明かすにはガガの腕輪と対になるもう一つの腕輪『ギギの腕輪』が必要だったのだ。

ギギの腕輪をも狙うゴルゴス、しかし腕輪は彼の手には渡らなかった。インカの技術と超エネルギーがゴルゴスの手に渡る事を恐れたバゴーはアマゾンに改造手術を施したのだ。その力はギギの腕輪を源としていた。彼にギギの腕輪を、インカの技術を、そして世界を悪の手から護ってもらう為に。改造手術の後アマゾンに自らの知人でありインカの謎を知るただ一人の男高坂教授のいる日本へ行くよう催眠暗示をかけると彼は息絶えた。

日本へ辿り着いたアマゾンだがそこへゲドンが追ってきた。ゲドンが次々と送り出して来る残忍かつ凶暴な獣人達と彼は闘い続けた。彼が闘ったのはゲドンだけではなかった。

見た事も聞いた事も無い機械、文明社会、周囲の誤解や偏見ーー。言葉も解らず唯一の理解者であった高坂教授もゲドンに殺され社会の中にたった一人となった彼はアマゾンへ帰ろうと考えた。

しかしその彼をたすける仲間達が現われた。高坂教授の甥である

純粋な少年まさひこ、最初はアマゾンを誤解していたものの彼の素朴さと優しさに触れ彼のよき理解者となったまさひこの姉リツ子。この二人によってアマゾンも心を開く事が出来た。

彼等だけではなかった。歴代のライダー達の父親代わりだった立花藤兵衛、最初はゲドンの獣人であったがアマゾンに命を救われ彼の『トモダチ』となったモグラ獣人、彼等の力を得てアマゾンはゲドンの獣人達を次々に倒していった。

次第に戦力を消耗していくゲドンを首領は見限った。そして粗暴なだけで求心力に欠ける十面鬼の替わりに古代パルティア王朝の血を引くゼロ大帝を首領とする『ガランダー帝国』を設立した。

ゲドンに内部分裂を起こさせアマゾンに滅ぼさせる事に成功したガランダーはガガの腕輪も手に入れ自らの計画に着手する。それはやはり世界征服であった。

ガランダーの力はゲドンのそれを凌いでいた。戦友モグラ獣人も倒れた。しかしそれでもガランダーに立ち向かい続けたアマゾンは捕われの身となりながらもゼロ大帝を倒し遂にガガの腕輪を取り戻した。

そのアマゾンの前に白い影が姿を現わす。影は言った。自分こそガランダー帝国の真の支配者なのだと。

その正体はゼロ大帝だった。アマゾンが倒したのは影武者に過ぎなかったのだ。彼こそが悪の根源であり十面鬼をそそのかした張本人だったのだ。

対峙する両者。しかしインカの超エネルギーを身に着けたアマゾンの敵ではなかった。ガランダー帝国もここに滅びアマゾンは故郷へ帰っていった。

「暫く会わなかったけれど元気みたいだね。どうしてたの？」

「世界を旅してた。そして悪い奴等いっぱいやっつけた」

まさひこの問いに屈託無く答えた。

「世界にいる悪い奴等を倒すのがライダーの仕事。だからアマゾン世界を旅した」

「けど連絡位入れて欲しいわ。返事が無いから諦めて二人で行こうとしたら空港で待っているんですもの」
「御免、リツ子さん」
楽しく和気藹々と談笑しながら三人は空の旅を楽しんでいた。
「そうか、アマゾンがホーチミンにいたのか」
壁に大きな世界地図が掛けられ床に魔法陣が描かれた部屋で例の黒服の男が戦闘員からの報告を受けていた。

密林の刺客その二

「ハッ、それから空よりカンボジアに入ったそうです」
戦闘員が敬礼し報告を続ける。
「カンボジアか。シンガポールの基地をブイスリーに潰され中国での作戦をエックスライダーに阻止された我々は今あの場所には一人もいない。目的は単なる観光か」
「どうやらその様です。他に連れもいる様ですし」
「だとすれば刺客を送り始末しておきたいな。ライダーは一人でも減らしておきたい」
「それでしたら既にキバ男爵と鬼火司令が行かれました。御二人共改造人間を連れておられます」
「キバ男爵と鬼火司令か」
男は戦闘員に尋ねた。
「はい」
「キバ男爵はともかく鬼火司令は頭に血が登り易い。大丈夫か」
「それですがもう一人行かれてますが」
「まだいるのか。誰だ?」
「隊長ブランクです」
「・・・・・・・・あの男か。これは望み薄かもしれぬな」
失望をあえて滲ませて言った。
「今はこの地での作戦行動に忙しい。ここには奴もいる。俺も下手には動けぬ」
「では傍観いたしますか」
「うむ。奴の身が危うくなった場合のみ行く。あの様な者でも今は大切な駒だ」
そう言うと男は部屋の隅に掛けてある黒いマントを手に取り羽織った。
「それよりも今はこの地での作戦を成功させる方が先だ。油断して

いると奴に先を越されてしまうからな」
「ハッ」
男は部屋を後にした。戦闘員がそれに続く。灯りが消され部屋は闇の中に覆われていった。
「そうか、奴は動かぬか」
足下に白い霧が立ち込める一室で赤いテーブルに白服の男は座していた。座したままで戦闘員の報告を受けていた。
「ならばこちらも動く必要は無い。ここでの行動に専念出来る」
サッとトランプのカードを一枚引いた。クローバーの7だ。
「カードは温存しておこう。いざという時の為にな。フフフ、ハハハハ」
そう言うと不敵に笑った。笑いさけが部屋の中に木霊した。
タイ、ベトナムという二つの国家に挟まれたカンボジアの歴史は動乱に揺れ動いた時期が多い。フランスの植民地から脱却し得たもののベトナム戦争に巻き込まれアメリカの傀儡政権が打ち立てられた。汚職と腐敗にまみれたこの政権が倒れると極左政権であるポル＝ポト派が政権を握る。
日本の一部のマスコミや知識人が『アジア的優しさを持つ』と賛美したこの政権の正体は狂気の殺戮集団だった。知識人や技術者、都市生活者達を『反革命的』、『共産主義に反する』という理由さけで虐殺していった。その犠牲者は一説には三百万、カンボジアの人口の約八分の三に当たる。かってこれ程の割合で自国民を虐殺した例はない。ナチスやソ連ですら及ばない空前絶後の狂気であった。
この狂気の集団による暴虐の限りが皮肉にも隣国ベトナムの軍事侵攻で幕を下ろすとアメリカや中国といった諸外国も介入し泥沼の内戦状態となった。十年以上こういった状況が続いたが遂に国連の仲介により内乱に終止符が打たれた。国連の監視の下選挙が行われる事となったがこれに反対する勢力があった。
クメール＝ルージュ、すなわちポル＝ポト派であった。
かっての悪行が裁かれる事を怖れた彼等は選挙を妨害せんとした。

その為にはテロをも辞さなかった。
しかし国民の支持を全く得られない彼等は孤立しジャングルの奥深くに逃げ込んだ。討伐の軍隊が差し向けられ指導者であるポル＝ポトも死んだ。ジャングルの中で朽ち果てようとしているのが実状である。
いまだ政情は不安定である。しかしかっての屈託のない笑顔が戻り始めている。悪夢は去ろうとしている。
そのカンボジアで最も有名なのがアンコール＝ワットである。ジャングルの奥にあるこの石造りの仏教寺院は国旗にも描かれている程でありカンボジアの象徴と言える存在である。古来より多くの人々の崇拝の対象となっている。
「こうして見ると所々壊れたままになってるね」
アンコール＝ワットを見回りながらまさひこが言った。足下には寺院の欠片や石の仏像の頭が転がり石畳の間からは草が生い茂っている。
「内乱が長かったせいね。今修繕しているらしいけれどかなり手間がかかっているそうよ」
リツ子が言った。欠片につまずき転びそうになる。

密林の刺客その三

「リツ子さん、気をつけて」
アマゾンがそれを受け止める。
「あ、有り難う」
少し顔を赤らめた。
「けれどカンボジアまで来たかいがあったね。凄い建物だよ」
「ええそうね。アマゾンはどう？」
「アマゾン石の建物好き。南米にも石の建物いっぱいある」
「そういえばそうね。マヤのピラミッドとか」
「森の中に石の建物ある。これとても神秘的。いい」
アマゾンは満足そうである。彼はジャングルの中で石の文化を持つインカの末裔達に育てられたからであろう。
「こういうの見ると落ち着く。アマゾンこの建物気に入った」
「意外ね、ふふふ」
談笑しながら三人は寺院を見て回る。政情が影響しているのか三人以外には観光客もまばらである。外れに来た時だ。
「ん！？」
不意にアマゾンが動きを止める。表情が一変しまさひことリツ子の前に飛び出た。
「！？」
「どうしたの！？アマゾン」
そこへ数本の槍が飛んで来た。アマゾンはその槍を全て叩き落した。
「フン、この程度は通用しないか」
「誰だっ！？」
森の中から戦闘員達を引き連れ一人の男が出て来た。マンモスの様な生物の骨で造られた兜を被った中年の男である。険のある顔付きが何処かしら不吉な印象を与える。

青いタイツの様な服を見に纏いその上から豹に似た柄の毛皮を着け骨のベルトで止めている。首や腕には骨のネックレスやブレスレットで飾られ何かしらの獣の皮から造られた大きな槍を手に持っている。デストロンキバ一族の長キバ男爵である。

帝政ロシアのコサックの流れをくむ貴族の家に生まれた。代々軍人として名を馳せ幼い頃より父から闘い方を教え込まれた彼は戦場で敵を倒しその血の染まる喜びを知り一日に一度は血を見ないと気が済まない残忍な人物となった。戦争があれば喜び勇んで参加し敵を屠った。それは彼の唯一の喜びであった。

帝政ロシアが崩壊し共産革命が起こるとコサックである事から白軍に参加し赤軍の将兵を殺し続けた。その為赤軍からは殺人鬼と呼ばれ怖れられた。一日で一つの村を滅ぼす事もあったという。

内乱終結直前にイギリスへ亡命する。そこで彼はアフリカの奥地に未知の邪教が存在しているという噂を聞く。

それに興味を持ちアフリカに渡った彼はその邪教徒達が潜むと言われるザイール川上流に入った。ジャングルの中を一人探し回り遂に彼はその邪教を信奉する者達と巡り会う事が出来た。

その邪教の名はドーブー教。この一帯で数百年に渡って栄え続ける生贄や黒魔術等を使う暗黒宗教であった。その頂点にいるのは魔術を極めた一人の男だった。

自身の前に現われたこの異邦人を見て魔術師はこの男の持つ唯ならぬ残忍さと魔道の才を感じ取った。そしてその場でこの男を弟子として迎え入れたのである。

魔術師の眼に狂いはなかった。男は全ての魔術を瞬く間に身に着け片腕と言える存在となった。魔術師が世を去ると彼がドーブー教の頂点に立った。そして魔術と恐怖でアフリカの奥地を支配した。

それがあの男の耳に入らない筈はなかった。ゲルショッカー崩壊後新たな組織デストロンを設立した首領は彼をデストロンへと誘った。その野望と残忍さに魅せられた彼はその誘いを了承した。彼にドーブー教の全ての者が従った。以後彼等はキバ一族と呼ばれ世界

各地を荒らし回った。血生臭い儀式を好み勇猛にして残忍な男である。

「デストロンキバ一族の長キバ男爵、この名は知っていよう」

「キバ・・・・・・男爵・・・・・・」

「そうだ。アマゾンライダー、貴様の首を貰い受けにこのジャングルまで参った。覚悟せよ！」

キバ男爵が槍を振るうと戦闘員達がアマゾン達を取り囲んだ。

「まさひこ、リツ子さん、大丈夫。アマゾンこんな奴等に負けない」

二人を後ろに庇いつつ励ます。

戦闘員達が骨の槍を手に襲い掛かる。それに対しアマゾンは引っ掻き、噛み付いて倒していく。

「やはり戦闘員では無理か。だがこの者達ではどうだ」

再び槍を振るう。後ろの密林から二体の怪人が現われた。

密林の刺客その四

ショッカーの人食い怪人イソギンチャック、ゲルショッカーの暗殺怪人クモライオン、どちらも人の血を好む残虐な怪人である。

「死ねぇいアマゾンよ、貴様の命で以って我等が組織の清めにしてくれよう！」

「組・・・・・織・・・・・・・・・・」

ガランダー帝国崩壊後もアマゾンは世界の陰で暗躍する悪の組織と闘い続けてきた。そしてその全てを操ってきた者の事は良く知っていた。もしやーーー考えが巡ろうとした時数本のナイフが飛来してきた。

「ガゥッ！！」

まさひことリツ子を抱きかかえると跳躍した。人間のものとは思えぬジャンプ力であった。そして寺院の上へと降り立った。

「誰だっ、鬼火司令かっ！！」

キバ男爵が怒鳴る。するとナイフが飛んで来た密林の方からナイフを飛ばした本人が出て来た。

「俺だ。俺以外がアマゾンライダーを倒す事は許さない」

上半身を鉄の鎧で覆った傷のある醜い鋼鉄の顔の男が現われた。下には黒いズボンをはき手には先端にナイフを付けたライフルを持っている。デルザー軍団のスナイパー、隊長ブランクである。

スイスに一人の貴族がいた。名をフランケンシュタインという。代々高名な学者を輩出した伯爵家の嫡男である。

ドイツの大学に学んだ彼は医学を身に着ける。若くしてその才を遺憾なく発揮した彼は博士号を手にする。

天才の名を欲しいままにする彼には一つの野心があった。富でも名誉でもなかった。名家の出身で何不自由なく暮らしてきた彼にとってそのようなものは興味が無かった。彼の野心はそういった世俗

的なものとは別の次元にあった。神にのみ許され為し得る事、新たなる生命の創造であった。

死者の身体を繋ぎ合わせ脳と心臓を入れた。そしてその身体に電気によるショックを与えエネルギーを送り込んだ。雷雨の夜この怪物は目を覚ました。

この世に生を受けた怪物であるが彼はつぎはぎだらけの巨大な怖ろしい容貌を持ちながらも繊細な心を持っていた。心優しい博士の妹に触れながら人の心を知り草原に咲く花や小川のせせらぎの美しさも知った。同時に鏡に映る自分の醜さも知ってしまった。

彼は悲しんだ。悲しみは憎悪へと変わりそれは自分自身を創り出した博士へと向けられた。だが殺せなかった。人間が持つ心も彼は持っていたからであった。

雪と氷に覆われた北の地で彼は博士とその妹に永遠の別れを告げ去っていった。後には後悔の念に苛まれる博士とそれを気遣う妹だけが残された。

博士達の前から姿を消した怪物は森の中へと入りそこに隠れ住んだ。その森の中で彼は動物達に囲まれ静かで優しい人生を送ったという。目覚めぬ眠りについた彼の顔はとても安らかだったという。

その彼を再び世の悪夢へと誘おうという愚かな者達がいた。ナチスと並び称され世界を全体主義の赤い血で覆わんとしていたソ連である。

怪物の眠る森の場所を探り当てた彼等は森に入り彼の骨の一部を手に入れた。そして細胞やＤＮＡを研究し政治犯達の身体を使い実験及び研究を続けた。人の心を持たぬ無敵の兵士を産み出す為に。ソ連の科学力の全てを結集して研究は続けられた。

多くの罪無き人々の犠牲の下遂に新たなる怪物が生まれた。残忍で粗暴な者の脳を持つこの怪物に洗脳を施そうとした時であった。

怪物は突如暴れ始め研究所を脱走した。そしてシベリアの荒野の中へ姿を消した。ソ連側も追っ手を差し向けたが遂に見つからなかった。この時の脱走により研究所は完全に破壊され研究員達も皆死

亡してしまった為研究は頓挫した。以後ソ連の衰退と崩壊による混乱の為その事を知る者も資料も歴史の闇の中へ消えていってしまった。最早そういった事があった事さえ知っている者はいない。唯一人を除いて。

これを知った首領がこの怪物を魔の国へと招いた。そして彼に改造手術を施し改造魔人としたのである。百発百中のライフルの腕前と怪力を誇る。

密林の刺客その五

「貴様、邪魔をするつもりか」
「黙れ、俺の獲物を横取りする事は許さんぞ」
ブランクもライフルを肩に担ぎ前に出て来た。その後ろには彼と同じくナイフを付けたライフルを手に持つ戦闘員達がいる。
「どうしてもというのならばこの俺を倒してからにしろ」
ズィッと前に出て来た。
「この愚か者が・・・。わしと争うつもりか？」
槍を強く握った。後ろの怪人と戦闘員達がそれに倣い構えを取る。
「ドーブーの魔術見せてくれようぞ」
後ろに跳び間合いを取る。頭の上で槍をゆっくりと回そうとする。その時だった。
「来い、まとめて相手する！」
「ムゥッ！」
双方共睨み合いを止め声がした塔の方を見る。その頂上に彼はいた。
鋭い牙の生えた蜥蜴の如き緑と赤の歪んだ縞の仮面、紅い両眼と胸、仮面と同じ模様の身体、白と赤のベルト、そして何よりも特徴的な鰭のある黒い手袋とブーツ。獣と見間違う様な異形の戦士、仮面ライダーアマゾンであった。
「ケケーーーーーーーッ」
奇声を発し地に飛び降りる。その降り立つ様はさながら密林のジャガーを思わせる。
「アマゾンライダー、来たか」
キバ男爵が槍の旋回を止めアマゾンへ身体を向ける。隊長ブランクも双方の部下達も同じであった。
「功はアマゾンを倒した方のものだ、行けいっ！」
「臨むところ、掛かれっ！」

「イーーーーーーーッ！」
二人の号令の下怪人と戦闘員達が一斉に襲い掛かる。
「ケーーーーーーーーーッ！！」
アマゾンが雄叫びと共に突進する。背を屈め顔を上げつつ突進するその姿は獣そのものであった。
両手の爪で戦闘員達を切り裂いていく。右に左に切り裂いていき戦闘員達が鮮血を噴き上げ倒れていく。
槍をかわしその槍を繰り出してきた戦闘員の頭を掴むとそのまま放り投げた。千切られはしなかったものの首の骨が外れる嫌な音を立てた後その戦闘員は寺院の石の壁に叩きつけられた。
「アーーーエアエアエア！」
イソギンチャックが叫び声と共に来る。間合いに入ると鞭となっている右手を振り下ろしてきた。
「ケアーーーーーーーッ」
アマゾンはそれを左手で受け止めようとする。いや受け止めるのではなかった。左手にある鰭で迎え撃たんとしていた。
アマゾンの左手が振り払われた。イソギンチャックの右手が吹き飛び地で血の海の中に蛇の様にのたうつ。
「ゲァァ・・・・・・」
血がほとばしり出るのを押さえようとする。だがそこへアマゾンの左手が再び襲い掛かる。
イソギンチャックの首が吹き飛んだ。首から間欠泉の如く血を噴出させつつ怪人は膝から倒れていった。
「クモラアアアーーーーー」
クモライオンが口から赤い糸を吐き出してきた。糸はアマゾンの首に絡みつく。そしてじわじわと絞めだした。
「グググ・・・・・」
両手で引き千切ろうとするがかなわない。徐々にアマゾンの首へくい込んでいく。
左右から戦闘員達が襲い来る。だがアマゾンの敵ではなく爪と鰭

で次々と切り倒されていく。
その間にも糸はアマゾンの首を絞めていく。アマゾンの身体が前に倒れてきた。後少しで倒せる、そう感じた時であった。
「ゲゲェーーーーーーーーッ！」
奇声を発するとアマゾンは赤い糸を両手でもって渾身の力で引き寄せた。勝利を感じようとしていたクモライオンはその思わぬ行動に体勢を崩してしまった。
糸を口で咥えるとすぐさま噛み千切った。首に絡まっていた糸を剥ぎ取ると体勢を戻したばかりのクモライオンに襲い掛かった。
「ガウゥゥーーーーーーーーッ！」
怪人の首筋に噛み付く。そして喰らいついた肉片を喰い千切った。傷口から鮮血が飛び出しアマゾンの身体を紅く染め上げた。クモライオンは手で傷口を押さえるが止まらない。ゆっくりと倒れていった。
「何という奴だ、まさか怪人に喰らいつくとは」
鮮血に染まるアマゾンを見てキバ男爵は呻く様に言った。
「最早奴に対抗出来る力は無い。忌々しいがここは撤退だ」
槍を振り上げ残った戦闘員達を集める。そして槍から白い煙を発するとその中へ消えていった。
「ふん、キバ一族といってもその程度か。やはりアマゾンを殺るのはこの俺の役目だな」
隊長ブランクがライフルを構える。それに対しアマゾンも身構える。今将にライフルが撃たれんとしたその時だった。
何かが隊長ブランクのライフルを弾き飛ばした。ライフルは空中で回転しつつ地に落ちた。
「誰だッ！」
ライフルを弾き飛ばされ隊長ブランクは檄昂した。
「私です」
若い男の声だった。寺院の陰からコートとスーツを着たアジア系の青年が出て来た。右手には拳銃が握られている。

「貴様は・・・・・・」
「役清明。インターポールより派遣されてきました。どうぞ宜しく」
ライフルを弾いたのはこの男だった。その銃でブランクを牽制しつつ前に出て来た。

密林の刺客その六

「この地にまた怪しげな連中が入って来ているとの情報があったので来たのですがその通りでしたね」
「ムゥ・・・・・・」
「アマゾンライダー、貴方に協力させて頂きます」
アマゾンの方へ顔を向け微笑んだ。
「クソッ、思わぬ邪魔が入ったわ」
ブランクは苦々しげに舌打ちした。
「ここは一先仕切り直しだ。一時撤退する！」
戦闘員達がブランクの下に集まる。そして電撃と共に姿を消した。
「意外とあっさり退いてくれましたね」
電撃の残した焼け跡を見ながら役が言った。
「インター・・・ポール？」
アマゾンが変身を解き役に尋ねた。アマゾンに安全な場所に退避させられていたまさひことリツ子も出て来た。
「はい。ここでは何ですからホテルに帰ってゆっくりとお話しましょう」
拳銃を懐に収め役はアマゾン達に言った。
「ほお、キバ男爵も隊長ブランクもアマゾンライダーを討つのに失敗しおったか」
長い恐怖政治と内乱の爪痕が未だ強く残っている国である。うち棄てられたまま朽ち果てた建物も多い。獣すら寄りつかなくなったその中の一つでその男は部下からの報告を聞いていた。
骨を模した兜と鎧、赤い服と腰までのマントを身に着けた筋骨隆々の大男である。長い金髪を生やし顔には不気味な険がある。炎を模した短い杖を持つこの男の名を鬼火司令という。
テキサスは男権が強いと言われるアメリカでも特にそれが強い地である。西部開拓史やカウボーイ等の歴史的事情がそうさせるので

あろうが現在でもそれは同じである。
この地に生まれた彼も強い男に憧れるようになった。そして長ずるとアメリカ軍の中でも特に実戦行動が多い海兵隊に入った。
海兵隊で彼は次々と戦功を挙げた。将校としての能力も高く買われ次々と階級を上げていった。
ベトナムにおいても彼は活躍した。ジャングルに潜み奇襲を仕掛けて来るベトコンに対しても臆することなく次々と倒していった。彼の行く所敵兵の屍が累々と横たわっていた。
ベトナム戦争が終結すると彼は海兵隊を退役した。常に戦場に身を置く事を欲するようになった彼は傭兵となったのである。
世界を転々として戦う彼の前に一人の老人が現われた。ドグマの帝王テラーマクロである。
テラーマクロは優秀な選ばれた者達による理想国家の建設を考えていた。その目に彼は選ばれたのである。彼はその誘いに乗った。選ばれたからではなかった。常に戦場に身を置けるという言葉に魅せられたからであった。
ドグマにおいて彼はメガール将軍と共に実戦部隊を率いた。どちらかと言えば慎重で思慮深いメガール将軍と違い彼は直情的で猛将タイプだった。その為に隠密的な行動を好む傾向があるテラーマクロと意見が衝突する事もあった。
悪魔元帥がテラーマクロと袂を分かちジンドグマを設立するとそれに従った。陰気なテラーマクロよりも陽気で豪放磊落な悪魔元帥の方が気が合ったからであった。
ジンドグマにおいて彼は四大幹部の一人として知られた。勇猛にして過激な人物として怖れられている。
「そしてアマゾンは今何処にいる?」
報告し目の前で直立不動の姿勢を取る戦闘員に尋ねた。
「はっ、アマゾンは連れの少年、及び若い女と共にプノンペンのホテルにおります。あのインターポールから来た男も一緒です」
戦闘員は敬礼し答えた。

「そうか、ホテルか」
鬼火司令は満面の笑みを浮かべた。
「すぐに行くぞ。アマゾンの首はわしのものだ」
杖を振りかざし周りの部下達に言った。部下達はそれに従い司令の後に続いて部屋を後にした。
「そうか、アマゾン狙われているか」
アマゾン達が泊まプノンペンのホテルの一室で役の話を聞き終えアマゾンは言った。
「はい。奴等の狙いは貴方の命です」
役は話を終えもう一度言った。
かってポル＝ポト派は都市を破壊し尽くした。原始共産主義にとって都市なぞ不要であったからだ。それにより文化や経済は完全に崩壊した。
首都であったプノンペンはとりわけ酷かった。娯楽も芸術も何もかもが消え失せてしまったのである。廃墟も同然であった。
その傷跡は容易には癒されない。国を立て直すべき人さえ狂気の殺戮にさらされていたのだ。復旧はそれ程進んでいないのも実情である。このホテルも他の東南アジアのホテルから見れば信じられぬ程簡素である。しかしそれでもこの国では最高のホテルの一つである。

密林の刺客その七

「東南アジアの基地は風見さんが完全に破壊しましたし中国での作戦も神敬介さんにより阻まれています。本来ならばこの国において作戦行動を取る予定は無かったのです」

「けどアマゾンがここにいるから奴等来た。アマゾンを倒す為に」

「はい、その通りです」

そう言うとアマゾンの顔を見た。細身で締まった顔つきである。

「アマゾン降りかかる火の粉は払う。悪い奴等が来るならそいつ等全部やっつける」

アマゾンは強い声で言った。その言葉に役は微笑んだ。

「そう言うと思いましたよ。流石はライダーです」

表情を戻した。真摯な顔になった。

「微力ながら協力させて頂きます。火の粉を払い悪を倒す為に」

「ありがとう。けど役さん何故アマゾンに協力する?インターポールの仕事だからか?」

「それもあります。そして・・・・・・」

言葉を続けようとしたその時だった。何者かがドアを蹴破って現われた。

「誰だッ!!」

現われたのは鬼火司令だった。

「貴様、鬼火司令か」

立ち上がる二人を見て傲然と言った。

「ほお、わしの名を知っておるとはな、殊勝な奴だ」

「ジンドグマの大幹部、その名を知らない者がいると思うか」

「ふっふっふ、その通りだ。ではわしの名をあの世でも広めてもらおうか。やれい!」

司令の号令が下されるとドアの後ろから戦闘員達が現われた。わらわらと二人を取り囲んだ。

「イイーーーーーーッ！」
叫び声を発し襲い掛かる。アマゾンと役は素手で彼等と闘い始めた。
生身であろうとアマゾンの闘い方は変わりはない。噛み付き、引っ掻く。野生のままの闘い方だ。
意外なのは役であった。拳銃だけでなく素手の格闘も得意だったのだ。それも独特の動きだった。摺り足で動き相手の懐へ当て身を入れる。攻撃を手の平で受けるか払うかし急所に攻撃を入れる。相手の力を利用し投げる。空手や柔道とはまた違った動きである。
「むう、古武術か」
日本には空手や柔道の他に独自の格闘技が存在する。それが古武術である。戦場での戦いから生まれたこの格闘技は多くの流派が存在する。素手のものだけでなく剣等武器を使用するものもある。流れるような動きをするものが多い。
「あの男は赤心少林拳だったが。つくづくわしは日本の格闘技と縁がある」
にやりと笑いつつ言った。
「この連中を連れて来て正解だったな。思う存分相手をしてやれ」
後ろから二体の怪人が現われた。ゴッドの女怪人ムカデヨウキヒとネオショッカーの毒蛇怪人コブランジンである。
「ケーーーーッ」
まずムカデヨウキヒが来る。ダーツを投げるとアマゾンに飛び掛って来た。中国の拳法の動きである。
それに対しアマゾンの闘い方は変わらない。噛み付き引っ掻く。だが流石に怪人には通用しない。
「ハッハッハ、そんなものが通用するか」
鬼火司令は笑った。怪人に指示を出した。
「変身する前に倒せ、さもないと面倒だ」
その指示にムカデヨウキヒは頷いた。アマゾンを掴むと窓へ放り投げた。

「アマゾン！」
役が叫ぶ。だがそれも空しくアマゾンは窓ガラスを割り外へ放り出された。
「ハッハッハ、これで手柄はわしのものだ」
高らかに笑う鬼火司令。だがそれには早過ぎた。
「ガゥッ！」
空中でアマゾンが叫ぶ。すんでのところで窓の縁に手を掛けた。
「アーーーーマーーーーゾーーーーンッ！！」
雄叫びの様な絶叫が響いた。叫びと共にアマゾンが部屋の中へ跳び戻った。
その姿は仮面ライダーだった。何と空中で一瞬のうちに変身したのだ。
「ケーーーーーッ！」
両手の鰭を素早く交差させる。激しい摩擦音が部屋に響き渡る。
「おのれっ、まさか一瞬で変身するとは」
鬼火司令は歯噛みした。攻撃を仕掛けた戦闘員が次々に倒されていく。

密林の刺客その八

再びムカデヨウキヒが襲い掛かる。だが攻撃をかわされてしまう。信じ難い速さだ。

「ゲッ！？」

慌ててアマゾンを探す。すぐ後ろにいた。

「ケーーーーーーーッ！！」

絶叫と共にアマゾンが右手の鰭を横に一閃させた。ムカデヨウキヒは真っ二つとなり床に落ちた。

「シャーーーーーーッ！」

コブランジンが左手のコブラの口から赤い液を発射させた。アマゾンと役は素早くそれをよけた。

椅子やテーブルに液が付着した。すると椅子もテーブルも煙を発し蒸発した。

「・・・毒液か」

コブランジンは次々に毒液を放って来る。それに対し二人はよけるだけだった。

「ガアアァァッ！」

アマゾンが飛び掛った。　また毒液を放つがそれを身を屈めてかわす。

上体を起こし下から飛び掛る形で襲い掛かった。その喉元に喰らいついた。

「ガーーーーッ！」

喉笛を食い千切った。喉から鮮血を噴き出しコブランジンも倒れた。

「クッ、何という奴だ。瞬く間に二体の怪人を倒すとは」

「この勝負わしの勝ちのようだな」

後ろから声がした。

「何ッ！？」

声の主はキバ男爵だった。鬼火司令に対し不敵な笑いを浮かべ立っていた。
「貴様は策というものを知らぬ。ただ闇雲に動けばいいというものではない」
「ほざけっ、貴様とて突き進むだけだろうが」
キバ一族は正攻法を好む事で知られていた。
「言ってくれるな。わしとて策を使わぬ訳ではない」
「何っ！？」
「こういうことだ」
槍を振りかざすと戦闘員達が出て来た。まさひことリツ子を捕らえている。
「まさひこ、リツ子さん・・・・・・」
「アマゾン・・・」
「御免なさい、部屋を急に襲われて」
二人は申し訳なさそうに言う。
「アマゾンライダーよ、二人の命が惜しければ降伏せよ。そうすれば命だけは助けてやる」
それはすなわち脳の再改造手術をされるということであった。それは正義を愛するライダーにとって死を意味する。
「・・・・・・・・・」
アマゾンは沈黙していた。動きも止めた。
「アマゾン、私達に構わないで」
「そうだよ、こんな奴等やっつけちゃってよ」
「二人共・・・・・・」
アマゾンは二人の気持ちが痛い程解かっていた。だからこそ動けなかった。時として非常にならなければならぬ時もある。
しかしそれができる程アマゾンは非常ではなかった。例え野獣の如き姿と動きをしていても彼の心は純粋で優しいものであった。
だが自分が悪の軍門に降ればどうなるか。世界はどうなるか。アマゾンは動けなかった。

「アマゾンライダー、案ずる必要はありませんよ」
誰かが言った。役だった。
「何！？」
「何かと思えばいつもの常套手段ですか。いつも破られているのに懲りない人達だ」
軽蔑を含んだ声で言った。
「貴様、わかっているのか。我々は人質を取っているのだぞ」
キバ男爵が役を睨み付けた。
「それをわかっているから言っているのですが。何時でも破る事が出来る事がね」
「貴様、この者達の命が惜しくはないのか」
槍をまさひこへ突き立てる。
「それは大事ですよ。けれどもう取り返しています」
「何っ！？」
「ほら」
左手をかざした。すると二人を捕らえていた戦闘員達がもんどり打って倒れた。
「なっ・・・・・・！？」
「アマゾンライダー、今です」
言われるまでもなくアマゾンは動いていた。素早い動きで二人を救い出していた。
「貴様、一体何をした」
「念を飛ばしたのですよ」
キバ男爵に対し役は不敵に言った。
「念！？」
「そう。古武術には念をよく使う流派もあります。中国拳法でいう“気”の様な感じでね」
人間は誰でも多かれ少なかれ念を持っている。それを武術を通じて鍛えたものである。油断している相手ならば気絶させることも可能である。

「さて、これで人質は無くなりましたね。どうします？」
「ふん、そうなれば力で潰すまでの事」
槍をアマゾンへ向けて言った。するとドアの後ろの方から不気味な叫び声が轟いてきた。
「ガルルルルルルーーーーー」
ドグマの光線怪人ライオンサンダーである。右手には剣、左手には鉄の爪がある。
剣を振り回しつつアマゾンへ襲い掛かる。まさひことリツ子を役に託すとアマゾンは怪人へ向かっていった。
剣撃をかわす。飛び掛かり喉を食い千切らんとするが鉄の爪に阻まれる。その間にキバ男爵と鬼火司令は部屋から出る。
「待てっ！」
アマゾンと役は彼等を追おうとする。しかしその前にライオンサンダーが立ち塞がる。剣と爪で二人を牽制しつつ自身も部屋を退いていく。
「くっ、逃がすか！」
二人は追う。敵は上へ上へと逃れていく。
ホテルの屋上に出た。そこでキバ男爵も鬼火司令も向き直る。新たな戦闘員達がいた。

密林の刺客その九

「誘い込んだという訳か」
「ふふふ、その通りだ」
キバ男爵は残忍な笑みを浮かべた。
「ここが貴様等の墓場になる。覚悟しろ」
戦闘員達が散る。それぞれ手に骨の槍を持っている。
「鬼火司令、そこでキバ一族の闘いをよく見ておくがいい」
「ふん、何をいまさら」
鬼火司令は忌々しげに言った。
「わしの戦力はもう無い。何故ここで貴様が手柄をたてるのを見なければいかんのだ」
「ほう、嫌と言うのか」
「この作戦わしは失敗した。戦力を立て直す為にもうこの国から撤退させてもらう」
「ふん、面白くない」
「ほざけ、ではこれで失礼する」
顔を手で下から上へ拭う様な動作をすると鬼火に変化した。そしてそのまま天へと飛んでいった。
「帰りおったか、つまらん奴だ。まあ良い、今は貴様の首が所望だ」
アマゾンへ槍を向ける。
「やれい！」
号令一下ライオンサンダーと戦闘員達が襲い掛かる。無数の槍がアマゾンと役へ突き立てられる。
だが戦闘員ではアマゾンと役を倒す事は出来ない。戦闘員達を倒しつつ二人はジリジリとキバ男爵へと近付いていく。
しかしその前にライオンサンダーが来る。役が行くが流石に怪人が相手では分が悪い。嘗掌を左手でなんなく受け止め放り投げた。
「くっ！」

役はそれを脚で受身をとった。衝撃を膝を屈め殺す。
振り向く。既にアマゾンが怪人と対峙していた。
「ガアーーーーーーーーッ」
雄叫びをあげアマゾンが威嚇する。それに対し怪人は臆するところが無い。
「ふん、ライダー如きに臆するキバ一族ではないわ」
ライオンサンダーを見てキバ男爵は自身に満ちた声で言った。
「ガォーーーーーッ」
こちらも雄叫びを出す。額から光線を発する。
それをかわす。コンクリートの床が破壊される。
剣で切りつける。たちまち両者は接近戦に入った。
接近戦においてもライオンサンダーは強かった。その爪でアマゾンを寄せ付けない。
だが隙があった。左手を大振りした時にアマゾンに手を掴まれた。
思い切り空中に投げる。天高く飛ばされコンクリートに叩き付けられた。
「ケケーーーーーッ」
アマゾンはその機を逃さなかった。天高く跳んだ。
「ケーーーーーーーッ！」
空中で激しく回転する。その動きはまるで駒の様であった。
蹴りがライオンサンダーを直撃した。アマゾンの大技の一つスピンキックである。
「グォーーッ」
これは効いた。さしものライオンサンダーも倒れた。断末魔の叫びと共に爆死した。
「おのれっ、あのライオンサンダーを倒すとは・・・」
「ガルル・・・・・」
怪人を倒したアマゾンはキバ男爵へ身体を向けてきた。
「ふん、ならばわしが相手をしてやろう」
槍をかざす。そして何やら怪しげな呪文の詠唱を始めようとする。

その時だった。
「待てキバ男爵、アマゾンライダーは俺が倒す」
声の主は隊長ブランクだった。ホテルの貯水タンクの上にいた。
「隊長ブランク・・・」
「何しに来おった、この様な奴等わし一人で充分だ」
キバ男爵は呪文の詠唱を止め隊長ブランクへ顔を向けて言った。
激しい抗議の色が含まれている。
「怪人も戦闘員もいない。その状況で勝ってもこの俺が倒してやる」
「くっ、貴様やるつもりか」
槍をタンクの上のブランクへ向けた。
「止めておけ、どちらかが死ぬことになる」
「くっ・・・・・・」
忌々しいがその通りだった。直情的なキバ男爵も槍を収めた。
「ならば貴様がアマゾンライダーを倒して見せよ、そこまで言うのならばな」
「ふん、俺の他に誰が出来るというのだ」
「ふんっ、自信だけはあるようだな」
強力な改造魔人の集まりで知られたデルザーである。彼もまた己の強さへの自信は絶大であった。
「後は貴様の好きにしろ。わしは退かせてもらう」
苦々しい声を出しつつキバ男爵は杖を振りかざした。そして瞬間移動の術で消えた。
アマゾンライダー、いずれまた会おう。その時こそ貴様の最後だ」
「くっ、待て！」
だがキバ男爵は消えていった。後には塵一つ落ちていなかった。

密林の刺客その十

「残念だったな、アマゾンライダー。だが安心しろ。貴様の相手は俺だ」

アマゾンを見下ろしつつ隊長ブランクは言った。

「グルル・・・・・・」

アマゾンが唸り声を出す。背中の背鰭が動く。

「待て、ここで勝負をするつもりは無い」

「何！？」

その言葉に役も思わず声をあげた。

「勝負は明日だ。明日の正午このプノンペン近郊のジャングルで待っている」

「ジャングル？一体どういうつもりだ！？」

アマゾンで生まれ育ったアマゾンライダーにとって密林での闘いは最も得意とするものである。その場で勝負を挑むとは正気の沙汰とは思えなかった。

「俺が言うことはそれだけだ。では明日その場所で待っているぞ」

「待てっ！」

だがその言葉に耳を貸さず隊長ブランクはタンクから飛び降りると姿を消した。

「撤退したか、外見に似合わず素早いな」

役は歯噛みしつつ言った。

「しかし勝負を挑むにしてもジャングルとはどういうつもりだ？アマゾンライダーに対して」

何か罠がるか、とも考えたが隊長ブランクは鋼鉄参謀や岩石男爵と同じくデルザー軍団の中では正攻法を好む人物として知られている。

「確かに格闘戦は奴も定評がある。だが接近戦でアマゾンに挑もうなどと・・・・・・」

ブランクの真意が読めなかった。様々な憶測が脳裏を巡る。
「そんなこと関係ない。例えどんな罠や策略があってもアマゾン負けない」
変身を解きアマゾンは言った。
「アマゾン・・・・・」
「罠や策略は絶対に破る。そして悪い奴等倒す。アマゾンがやる事はそれだけ」
「・・・そうか、そうでしたね」
その言葉に役は微笑んだ。例えどんな策を弄しようともアマゾンならば破る事が出来る、そう感じた。
「それでは部屋に戻りましょう。連中に荒らされましたがね」
「うん。役さん休む」
二人は屋上から姿を消した。それを遠く離れたビルの屋上から見る一つの影。
あの黒服の男だった。
「これでよし。後はあいつ次第だ」
ニヤリと笑った。だがここでふとある事が脳裏をよぎった。
「だがアポロガイストめ、何故アマゾンライダーの密林での戦闘のデータを欲しいなどというのだ?奴のデータならば既に揃っているというのに」
いぶかしんだがそこで考えを止めた。
「まあ良い。奴には奴の任務と考えがある。俺が気にする事ではない」
男はビルの陰に姿を消した。
翌日アマゾンと役は隊長ブランクが指定した密林に来た。そこは見渡すところ鬱葱と茂った木々ばかりであった。
「さて、と。そろそろ正午ですよ」
腕時計を眺めつつ役が言った。いつものコート姿である。密林での闘いには明らかに不向きであるがこのスタイルを崩すつもりは無いらしい。

「・・・・・・・・・」

闘いを前に気が昂ぶっているのだろうか。アマゾンは黙して語らない。ただ木々を見ている。服は白いスーツから黒地に赤い縞模様の上着と半ズボンである。かって日本でいつも着ていた服装だ。

「・・・・・・来る」

アマゾンが呟いた。すると役の腕時計の針が正午を指した。

「よく来たな、アマゾンライダー」

前から隊長ブランクが出て来た。後ろには戦闘員達がいる。皆手にライフルを持っている。

怪人もいた。デストロンの吸血怪人プロペラカブトとゲドンの滑空怪人獣人吸血コウモリである。

「ここが貴様の墓場になる。覚悟はいいか」

戦闘員からライフルを受け取りつつ言った。そのライフルにはナイフが既に装填されていた。

「・・・・・・・・・」

まだアマゾンは黙して一言も発しない。ただ敵を見ているだけである。

「俺は多くは言わぬ。行くぞ！」

その言葉と共に戦闘員と怪人達が散った。ジャングルに入っていく。役も身構えた。

「行きましょう、アマゾン」

「・・・・・・・・・」

まだアマゾンは動こうとしない。だがその気が充ちてくるのがわかる。眼に強い光が宿った。

密林の刺客その十一

アーーーーーーー
叫び始めた。指を爪の様な形にし肩の高さで両手を上げる。指から手がバトルボディに包まれていく。
マーーーーーーー
両手を胸の高さで交差させる。胸も脚もバトルボディに包まれようとしている。
ゾーーーーーーン
腕を開きもう一度広げる。顔以外は既にバトルボディに包まれていた。
両目が紅く光る。それと共に顔が白い光に包まれた。
光が消えた時顔はあの獣の仮面となっていた。

変身を終えるとアマゾンは跳躍し光もささぬ密林の中へと入っていった。そこには無数の敵が潜んでいる。
「ギ、ギ」
木の上に座す戦闘員達が狙いを定めライフルを撃とうとする。だがその前にアマゾンが現われる。
「ケケッ」
右手を一閃させる。戦闘員の首が飛び血が緑の葉を紅く染めていく。
別の戦闘員が木の陰からアマゾンを撃とうとする。アマゾンはその後ろへ跳ぶと首筋を噛み千切った。
「流石ですね。密林での闘いはお手のものか」
アマゾンの闘いぶりを見つつ役は感嘆の言葉を漏らした。
「では私もやるか」
拳銃にサイレンサーを取り付ける。遠くからナイフを撃たんとする戦闘員の額を撃ち抜いた。

次々と戦闘員を倒していくアマゾンの前に怪人が現われた。獣人吸血コウモリである。アマゾンの目の前の木の枝にぶら下がっている。

「ギィーーーーーーーッ！」

耳に残る嫌らしい声を発しアマゾンに飛び掛かる。両手の爪で引き裂かんとする。

アマゾンはそれを両手で受けた。そして後ろに投げる。

だが獣人は投げ飛ばされた方にあった木を両足で蹴った。その反動で再びアマゾンに襲い掛かる。

それに対しアマゾンも飛び掛かった。両者が空中で交差した。

アマゾンは木の上に着地した。振り返らずそのまま飛び去っていった。

獣人吸血コウモリは動かない。やがて額から血を噴き出し前へ倒れていった。

密林の中を走るアマゾンを一枚の激しく回転するプロペラが襲う。屈んでそれをかわす。

プロペラはブーメランの様な動きで飛んできた方へ戻っていく。そこにはプロペラカブトがいた。

「プーーーーローーーー」

不気味な叫び声をあげる。右手にプロペラが戻って来た。暗い密林の中その銀の身体が鈍い光を発した。

右手のプロペラが旋回を始める。今度は飛ばそうとしない。木の端や葉がそのプロペラに切られ散っていく。

回転する右手をアマゾンに叩き付ける。アマゾンはそれを右にかわした。

怪人は次々に攻撃を繰り出す。それに対しアマゾンは防戦一方である。

だがアマゾンの紅い両眼は死んではいなかった。何かを待っている眼だった。

背が大きな木に当たった。逃げ道は無い。怪人が渾身の力で右腕

を振り下ろした。
アマゾンは屈んだ。プロペラが空を切る。そして木に当たった。
「ム！？」
プロペラは木に深々と刺さった。複雑に喰い込み抜けようとしない。
それがアマゾンの狙いだった。右に逃げるとそのままの動きで左の鰭を振った。
怪人の胸が切り裂かれる。今度は右手を振った。背中からも鮮血を出し右手を気に切り込ませたまま怪人は死んだ。
二体の怪人を倒した後もアマゾンは密林の中を駆けていた。戦闘員達ももういない。自分の他に役も相当数倒したようである。

密林の刺客その十二

数本のナイフが飛んで来た。駆けたままなので当たりはしない。木に刺さっていく。

「俺の狙撃をかわすか。やはり鬼火司令やキバ男爵の攻勢を退けただけはある」

奥の方から声がした。そこからアマゾンを狙った張本人が姿を現わした。やはり隊長ブランクであった。

「そうでなければ面白くない。誇り高きフランケンシュタインの血には強き獲物こそ相応しい」

ライフルは既に構えられている。それはアマゾンの心臓を寸分違わず狙っていた。

「ガルルルルル・・・・・・」

アマゾンは背を屈めた。今にも飛び掛ろうとしている。背鰭が動く。

だが容易には動けなかった。一瞬でも隙を見せればそれで心臓が撃ち抜かれる事がわかっていたからである。

それはブランクも同じであった。下手に撃つとかわされる。それは死を意味する。

彼等の他は誰もいない。鬱葱と茂り日もささぬ密林を重苦しい静寂が支配する。

時間だけが過ぎていく。だがその過ぎた時間が一瞬なのか永遠なのかはわからない。二人には時が過ぎている事さえも関係が無かった。

先にしびれを切らしたのはブランクであった。ライフルを持つ右肩が僅かに動いた。

アマゾンはそれを見逃さなかった。上へ跳んだ。

ブランクのライフルからナイフが放たれる。だが空を飛ぶアマゾンには当たらない。

ライフルを捨てる。飛び掛って来るアマゾンへ拳を打ちつけんとする。

だがアマゾンは一撃引っ掻いただけであった。しかしブランクの鉄の鎧の前に阻まれる。それが失敗すると密林の中へ逃げ込んだ。

「おのれっ、何処だ」

左右を見渡す。だが気配すら感じられなかった。

「・・・俺を獲物に仕立てるつもりか」

自分の防御力と戦闘力には自信がある。鉄の鎧にはあの鰭さえ通用しないと確信している。先程も怪人すら倒す爪を退けた。

「来い。俺の鉄の身体の前には貴様の爪も牙も鰭も通用せぬぞ」

自信に満ちた声で言った。この密林の中の何処かに潜んでいるアマゾンを挑発し自身の力を誇示する為だった。

しかし彼は自分の同僚達が何故敗れていったのか学ぶべきであった。そうすれば油断しなかったであろう。

後ろから物音がした。不意にこちらへ襲い掛かって来る。

「そこか！」

右肩を突き出しチャージを仕掛ける。一撃で吹き飛ばすつもりであった。

「な！？」

だがそれはアマゾンではなかった。赤いボディと緑の両眼、大きな背鰭を持つ奇妙なマシン、ジャングラー。アマゾンの愛車であった。

「くっ、謀ったか」

苦しい呻き声にも似た怒りの声を出す。この時彼は自分の運命を悟った。

「ケケーーーーーッ」

頭上の木の上からアマゾンが叫び声と共に急降下して来る。右足をこちらに向けられている。

避けられなかった。受けるしかない。この場でブランクが出来る事は最も堅胸で受け止める事だけだった。

アマゾンのキックがブランクの胸を撃った。凄まじい衝撃が密林に響き渡る。
アマゾンは着地した。ブランクはまだ立っていた。だがゆらりと体勢を崩すと片膝をついた。
「グッ、衝撃までは抑えられなかったか・・・・・・・・」
急所こそ外したもののダメージは大きかった。キックの衝撃が容赦なく胸を撃ったのだ。
「今まで見なかったジャングラーを奇襲に使うとはな。戦術でも俺の負けか」
アマゾンは身体をこちらに向けてきた。
「・・・止めを刺すつもりか。いいだろう、俺の負けだ。好きにするがいい」
アマゾンは構えを取った。鰭で首を刎ねるつもりだった。脚に力を入れる。
その時だった。不意に何処からか銃弾が放たれた。アマゾンはそれを咄嗟にかわした。
「ガゥッ!?」
辺りを見回す。燃える様な気が感じられるが姿は見えない。
「あやつか。俺に逃げろと言いたいか」
銃撃を見てブランクは呟いた。
「ならばそうさせてもらおう。アマゾンライダー、この借りは必ず返す」
そう言うと密林の中へ姿を消していった。
追おうとする。だがそこへ再度銃弾が襲い掛かる。
気配を探る。だがその主も既に密林から姿を消していた。
「今あの男を失うわけにはいかんのでな」
不気味な男の声がした。それと共に気配は完全に消え去った。
役が現われた。互いに無事と健闘を讃え合う。
「アマゾン、行っちゃうんだね」
空港でまさひこは縞の服を着たアマゾンに対し残念そうに言った。

「まさひこ心配する必要無い。アマゾン悪い奴等倒しに行く。それだけ。それが終わればまた会える」
寂しそうな顔をするまさひこに微笑んで言った。
「・・・そうだね、また会えるよね」
「そう、今度は日本で会いたい」
「そうね、楽しみにしてるわ」
リツ子も声をかけた。
「今度会う時は私の手料理を御馳走するわ。腕によりをかけてね」
「手料理・・・・・熊の手か？」
その言葉に二人は思わず吹き出した。
「違うわよ、私が作った料理の事よ。こう見えても得意なんだから」
「アマゾン魚が食べたい」
「わかったわ。楽しみにしてて」
「うん。アマゾンその時を楽しみにしてる」
「じゃあ」
「またね」
二人は手を振りながら飛行機に乗った。アマゾンは二人が乗った飛行機が見えなくなるまで手を振っていた。
「行きますか」
後ろから声がした。役である。
「行く。そして悪い奴等倒す」
アマゾンはジャングラーに乗った。その後ろに止めてあったジープに役も乗った。
ジャングラーとジープが駆けて行く。やがてその姿は見えなくなり後には遠くに見える密林だけがあった。

密林の刺客　　完

1
1

2003・10・

熱砂の騎士その一

「そうか、隊長ブランクも敗れたか」
玄室の様な部屋である男の声が響いた。
「やはりあの程度の頭ではライダーを倒す事は無理か」
重く威厳のある声だった。何処か王者を思わせる。
「その後のアマゾンの動きはどうだ？」
「はっ、タイを抜けミャンマーへ向かっております。どうやらそちらへ撤退したキバ男爵達を追っているようです」
戦闘員の一人が報告した。
「そうか。これでアマゾンの能力もわかった。キバ男爵達にはすぐに本部へ帰還するよう伝えよ」
「はっ」
戦闘員の一人が姿を消した。
「今は戦力を減らすべきではない。キバ男爵にもこれからどんどん働いてもらわねばならぬしな」
ふと脇に置かれている地球儀を見た。
「ドイツ、インド、シンガポール、レバノン、中国、そしてカンボジア。これで六つの作戦が奴等に潰された。やはり例の計画を急がねばならぬな。アポロガイストはどうしている」
「アマゾンのデータを回収し本部に帰還されました」
「そうか。奴の敏捷性と野獣の如き力を得られる事は大きいな」
地球儀を回す。指で止める。丁度リビアの部分だ。
「かってカルタゴという国が栄えた地北アフリカ。ここでまた新たな闘いが始まるな」
そう言うとニヤリと笑った。
「この地にはあの連中がいたな」
「はい」

戦闘員の答えに満足気に笑った。

「わしと競おうとする身の程知らず共、精々楽しませてもらうぞ」

不敵に笑った。哄笑が玄室の中に木霊した。

北アフリカリビアの首都トリポリはローマ時代の遺跡で知られる。この地に生まれたローマ皇帝がおり彼が故郷の街を立派な街並みに造り替えた事がそのもとである。市内にはローマ皇帝マルクス＝アウレリウスの記念門もある。その他にも歴史を語る遺跡は多い。メデューサの神殿や凱旋門等である。

観光客もいるが何よりもこの街は魚が有名である。

地中海に面したこの街は市場に行けば多くの魚が並んでいる。日本人が好きな鮪もあるしスズキの仲間や海老もある。海老は養殖ものでなく天然である。

この地でとれた鮪が日本に運ばれるのだ。はるばる日本からやって来た漁船が釣り上げ運んでいく。実に面白い話である。

市場は新鮮な魚と行きかう市民達でごった返している。陽性の活気が場を支配している。

その中を一人の東洋人が歩いている。名を城茂、またの名を仮面ライダーストロンガーという。

黒い長髪に黒い瞳を持っている。眉は太めで眼は一重である。細めだが筋肉質である。背や腿の部分に薔薇の刺繍が入ったジーンズの上着とズボンを着ている。赤いＴシャツには大きくＳの文字が描かれている。

手にはめている黒い手袋は皮製である。何か機械的な印象を与える。

孤児として生まれた。孤児院で育ち城南大学に進んだ。大学ではアメフト部に所属しキャプテンとしてチームを優勝に導いた。親はいないが幼い頃より友人には恵まれていた。

その中でも大学で知り合った友人沼田五郎とは親友同士であった。心ゆくまで語り合い飲み合った。腹を割って話せる真の親友であった。

その沼田がある日突如として姿を消した。下宿も彼がよく行く店も回ったが何処にもいなかった。警察に捜査を頼んでも手掛かりは得られなかった。

ある日城の下宿に暫くの間姿を消していたその沼田が現われた。全身傷だらけで最早いくばくもない事は一目でわかった。

死ぬ間際彼は城に言い残した。

「ブラックサタン・・・・・・」

と。

ブラックサタン、それはあの首領がガランダー帝国の次に創り上げた七番目の悪の組織であった。サタン虫という奇怪な寄生虫を使い人間を操り世界征服をたくらむ組織だった。サタン虫の長を首領とし陰から操っていたのだ。

その存在は人々に知られることなく始まった。だがここにその存在を知ってしまった男がいたのだ。それが城茂だった。

親友の仇を討たんと決意した彼はブラックサタンのアジトを探した。そして自ら組織に入れてくれるよう志願した。

ブラックサタンは彼をテストした。全てにおいて優秀なデータを出した彼をブラックサタンは改造人間とした。だがそれこそが彼の狙いだった。

脳改造を行う直前組織への忠誠を宣誓する場において彼は反旗を翻した。そしてブラックサタンの打倒を宣言し基地を脱走した。

脱走の際彼は改造室にいた一人の女性を救う。彼女の名は岬ユリ子、電波人間タックルであった。

やがて立花藤兵衛とまぐり会った彼等は日本全国を回りブラックサタンの暗躍を阻止していく。この事態を重く見たブラックサタンの大幹部一つ目タイタンはストロンガー打倒へと作戦をシフトさせていく。

多くの作戦を阻止された彼は遂にストロンガーと対決する。だが敗れ去り海の中で爆死する。

次に首領が送り込んだのは謎の剣士ゼネラルシャドウだった。彼

にストロンガーを倒すよう指示するとともにタイタンを改造し百目タイタンとして復活させた。二人の大幹部によって二正面作戦を展開させようとしたのである。

だが功を焦るタイタンとシャドウは激しく対立し作戦遂行は思うようにいかなかった。百目タイタンは地底王国での決戦に破れた。

ここで首領はシャドウに全てを任せたかというとそうではなかった。所詮雇われ幹部である彼よりも生え抜きであるデッドライオンを呼び寄せたのだ。

熱砂の騎士その二

これに反発したシャドウは裏切った。ストロンガーに組織の秘密を教え何処かへ姿を消したのだ。シャドウの言うまま進んだストロンガーは首領と対峙する。首領は倒れストロンガーは友人の仇をとった。

その彼の前に新たな組織が現われる。ゼネラルシャドウが呼び寄せた改造魔人からなる組織、デルザーであった。ブラックサタンに見切りをつけた首領がその陰にいた。だがその事には組織の中心人物であるゼネラルシャドウですら気付いてはいなかった。

デルザーの改造魔人は強力であった。ストロンガーは劣勢を余儀なくされ相棒タックルも倒れる。だが元ブラックサタンの科学者正木博士と出会い彼に超電子ダイナモを埋め込まれた彼は超電子人間として生まれ変わった。

超電子の力でストロンガーはデルザーの改造魔人達を各個撃破していく。追い詰められた首領はエジプトより切り札マシーン大元帥を呼び寄せる。世界各地からライダー達が集結し決戦の火蓋が切られた。

首領も岩石の巨人となり闘いを挑む。だが巨人の内部に潜んでいた分身を発見され分身は自爆して果てた。長い闘いを終えたストロンガーは世界に残る悪を討つ為旅立った。

彼はトリポリの市場を歩いていた。誰かを探しているようである。

「おかしいな、この辺りだと聞いたんだが」

首都で最も賑わっている市場だけあって広い。人も多い。イスラム特有の口髭を生やした男達だけでなく観光に来ているヨーロッパ人や黒人もいる。

「アジア系、といっても多いな。本郷さんや一文字さんの知り合いだっていうけど一体どんな人なんだ」

後ろから気配がした。さっと振り向く。

「おいおい、勘がいいねえ」
男の声だった。そこには地肌の黒いアジア系の男がいた。
「城茂だな、話は本郷と隼人から聞いてるぜ」
男はにやりと笑って言った。
「と、いうとあなたが滝さんですね」
城もにやりと笑い返した。二人はそのままレストランへと歩いていった。
二人はレストランでクスクスを注文した。小麦を粉にしてその上からカレールーのようなソースをかける。この辺りの郷土料理の一つである。カレーとはまた違った味わいがあり美味い。
「インターポールも最近忙しいんですね」
「まあな。最近また動き出した連中がいるもんでな」
クスクスを口に入れつつ二人は話している。
「連中ってデルザーの奴等ですか？」
「察しがいいな。その通りだ。だが動き出したのはデルザーだけじゃない」
「他の組織のメンバーだった連中もですね」
「そうだ。それも一緒に行動をとっている。まあ奴等は根は一緒だからな」
滝は水を口に含んだ。
「このリビアでも奴等の影がちらほらしてきている。砂漠の辺りでな」
「砂漠・・・石油が眠る砂漠ですね」
「そうだ。リビアは産油国と世界で九番目に入る国だ。その石油に打撃を与えればどうなるか」
「世界経済には少なからず影響が出ますね」
滝は頷いた。
「そうだ。それだけは阻止しなくてはいけない。絶対にな」
滝の瞳に強い光が宿った。
「石油はこの国の主要産業だ。石油が無いと食うのにも困る人間が

いっぱいいる。奴等の企みを何としても防ぐんだ」
城は最初インターポールの腕利きが来ると聞いて嫌な感じであった。元々気ままな風来坊の彼は型にはまりがちな役人を心よく思っていない。だが目の前にいるこの腕利きはやけに直情的で熱い男だった。何処か自分に似ていると感じた。
「解かりました、やりましょう」
城は微笑んで言った。
「おう、絶対にな」
滝は拳を握り締めた。熱い思いがこちらにも伝わってくるようだった。
「やはり来たか」
床に魔法陣を描いた部屋で例の黒服の男が戦闘員からの報告を聞いていた。
「はっ、滝和也も一緒です」
「あの男もいるのか・・・。砂漠には誰が向かっている」
「デッドライオンと・・・ヨロイ騎士です」
「ヨロイ騎士か」
ヨロイ騎士に何か思うところがある様である。だが顔には出さなかった。
「あの男の一派か。行動次第では厄介な奴だな」
思案しつつ言葉をこぼした。
「如何なさいます？」
戦闘員が尋ねた。
「そうだな。さしあたっては放っておいても良い。だが奴にストロンガーは倒させん」
男は毅然として言った。
「奴を倒すのはこの俺だ。俺以外に誰が倒すというのだ」
頭から無数の光が放たれる。それは怒りで赤く燃えていた。
「フッフッフ、遂にな」
赤いテーブルの前で白服の男は不敵に笑った。

「この時が来るのをどれだけ待ち望んだか。その為に俺は甦ったのだからな」

懐からトランプを取り出した。出て来たのはスペードのエースだった。

「今までこのカードが出て俺が敗れた事は無い。このカードは俺の勝利への道標なのだ」

カードを投げる。それは壁に掛けられたストロンガーの絵の胸に突き刺さった。

「待っていろライダーストロンガー、今度こそ俺が勝つ」

男は自信に満ちた声で言った。

熱砂の騎士その三

城と滝は首都トリポリで情報収集に当たった。日本の3倍以上の面積を持つリビアのどの油田でテロを行うのか解からなかったからだ。

リビアの当局も内密に協力してくれた。その結果アマルの辺りで不審な影を見たとの報告があった。二人はその写真をトリポリのホテルの一室で見た。

「不審な影・・・・・・」

二人はすぐに直感した。写真もあるという。

二人はその写真を見た。そこには鬣とかぎ爪の様な物を持つ人のようなものが写っていた。

「やはり生きていたのか」

その姿を見て城は呟いた。

「知っているのか？」

「ええ、間違いありません。デッドライオンですよ」

「デッドライオン？ブラックサタンの最高幹部だったな」

「はい。組織壊滅後行方不明になっていましたが。やはり生き延びていたか」

城はブラックサタンとの最後の決戦の時を思い出していた。

あの時デッドライオンからペンダントを奪いそれを使って首領のところまで行ったのだ。そして首領を倒した。首領を倒されたブラックサタンはその組織と戦力をデルザーに吸収される。つまり彼がペンダントを手に入れた事がブラックサタン崩壊の引き金だったのだ。

言い換えればそれはデッドライオンの失態がそのまま組織の崩壊になったということだ。首領の信頼を一身に集め最高幹部として君臨していた彼にとっては耐え難い屈辱であっただろう。

組織崩壊と同時に彼は姿を消した。デルザー軍団の吸収の際消さ

れたとも言われたがデルザーがブラックサタンの基地に進駐を始めた時既に彼の姿はなかった。その後彼の姿を見た者は誰もいなかった。今この時まで。

「それが今になって出て来るとはな。これも腐れ縁ってやつか」

右手の人差し指と中指で写真を挟んで言った。

「しかし厄介だな。奴は御前さんへの恨みを忘れてないぞ」

滝が言う。それは充分に予想された。しかしそれに対し城は不敵に笑った。

「望むところですよ。じゃあ今度こそ完全に地獄へ叩き込んでやります」

左手を強く握り締めた。手袋が擦れる音がした。

翌日二人はトリポリを出発した。まずは空路でベンガジへ向かった。

ベンガジからは陸路でアマルへ向かう。バイクで砂漠に敷かれた道を走る。

滝のバイクは日本製であった。ホンダワルキューレ。重量感溢れる車体である。

それに対して城のバイクはごく普通のありふれたバイクであった。ワルキューレと比較するとかなり軽い印象を与える。

「カブトローじゃないのか？」

運転しながら滝は尋ねた。

「まあそれはこれからのお楽しみってね」

城はまた不敵に笑った。何やら意味ありげである。

それを遠くから見る影があった。二人を見届けると砂の中へ消えた。

「そうか、来おったか」

地下の基地の中でヨロイ騎士は報告を聞いていた。

赤い兜に黒の仮面、全身を暗い銀の鎧で覆いその上からマントを羽織っている。腰には大小二振りの剣を下げている。

イギリスは古来より騎士道を尊ぶ国であった。アーサー王と彼の

臣下である円卓の騎士達の話はとりわけ有名であるがその他にも騎士の話は多い。

そのイギリススコットランドにある騎士がいた。彼はその地の王マクベスに心身を捧げている高潔な騎士だった。

当時スコットランドは宿敵イングランドとの長きに渡る抗争だけでなく内部においても深刻な権力抗争を抱えていた。

マクベスは先代の王が死去した為その跡を継いだ。彼が先王を暗殺したとの声もあった。だがこの時代よくある話であったし彼も王家の血を引いていたので支持する者も多かった。何よりもマクベスは優れた武人であった。

だが彼の即位に不服を唱える者もいたのは事実であった。彼等は公然と、あるいは陰に潜みマクベスを倒さんとしていた。

これに対しマクベスは夫人の言葉に従い一人ずつ隙をついて倒していった。しかしその中の一人バンクォーの遺児マルコムとマクベスにより家族を殺されたマクダフがイングランドと結び反乱を起こした。彼等はバーナムの森の木を切り、その枝を手に取り進軍してきた。

それに対しマクベスもうって出た。激しい戦いとなった。騎士達もマクベスに従い戦った。戦場となった平野は朱に染まり血煙が草を染めた。

熱砂の騎士その四

マクベスは強かった。自分は女の腹から生まれ出た者には負けぬと豪語するだけはあった。だがマクダフとの一騎討ちに敗れた。彼は母の腹を蹴破り取り出された者だったのだ。

マクベスは死んだ。彼に助言を与えていた夫人も既に病により世を去っていた。一説によると心を患っていたという。以後彼の名は主君を暗殺した簒奪者の代名詞となった。歴史とは時に人を弄び残酷な役割を担わせる。それにより貶められた者も多い。

彼に仕えていた者達はある者は降りマルコムやマクダフに従った。だがある者は尚も彼等に従おうとせず抵抗を続けた。捕らえられ処刑される者もいれば森や山に逃れ続けつつ戦う者もいた。

ある騎士もそうであった。彼は森の中に逃れ主君の仇を取るべく戦い続けたのだ。

だが彼は知らなかった。主君マクベスが何故王の座に就いたかを。それは魔女の予言に基づくものだったのだ。

森には多くの者が潜む。彼のように世の目を避けなければならない者の他には獣もいた。そしてこの世に有らざる者達も。妖精が魔物、そして彼等を崇拝する者達が。マクベスに予言した魔女達もそうした者達だったのかもしれない。

森に潜むうち彼は一人の魔女と知り合った。そして彼女と交わり一人の子供を生み出した。

彼は外見は人間であった。しかしその力は人間のものではなかった。

長じて彼は親から離れ森を出た。そして漆黒の鎧を身に纏いブリテンの夜の世界に入ったのだ。

何時しか人々は夜を恐れるようになった。夜の闇の中から首の無い馬に乗った黒い騎士が現われるからだ。

その騎士は人を見ると斬った。斬られた者は首を持って行かれた

そのまま魂も地獄に持って行かれると言われた。
ある夜の話だ。ロンドン塔にて一人の兵士が詰所で番をしていた。そこへ一人の騎士が現われた。
黒い闇の様な服を着た騎士だった。彼は何かを手にしていた。
「この者の魂確かに貰い受けた」
彼はそう言うと手に持つ何かをテーブルの上に置いた。それは王妃の首だった。
暫くして王妃は王に不倫の嫌疑をかけられ処刑された。その騎士が何者か王妃の処刑を見届けた後兵士は理解した。
この騎士はやがて姿を消した。だが何処へ去ったのか誰も知らない。ある者は言う。去ってはいない、夜の闇の中から我々を狙い続けているのだと。
夜の中に消える者は多い。幾人かは彼に地獄へ連れて行かれたのだという。
その子孫がこのヨロイ騎士である。剣技に優れ冷静さと勇猛さを兼ね備えた者として知られている。
「まさか城茂が来るとはな。これも運命か」
壁に映し出される映像を見て言った。そこにはバイクに乗る城茂の姿があった。
「こちらに向かっているな。攻撃を仕掛けるか」
「はっ」
戦闘員達が敬礼した。
「怪人達を呼べ。奴が油断しているうちに仕留めてやる」
「わかりました」
戦闘員達が動く。ヨロイ騎士は壁に映る城の姿を見つつ笑った。
「見ていろ城茂、このサハラ砂漠が貴様の墓場だ」
城茂と滝はバイクで道を進んでいた。その前にも後にも砂の海があるだけだ。
「しかし遠いですねえ」
バイクを飛ばしつつ城は言った。

「しかも見渡すばかり砂漠だ。ちょっとは変化ってもんが欲しいな」
滝も言った。見渡すところ砂しかないのだから無理はない。
「日本にいた時を思い出すな。タイタンと闘ったのもこんな砂場だった」
「日本か。おやっさん元気かな」
滝がぽつりと言う。
「おやっさんですか？俺が日本にいた頃はもう嫌になる位元気でしたよ」
「そうか、だといいんだがな。おやっさんには何時までも元気でいて欲しいからな」
「心配しなくても大丈夫ですよ。おやっさんなら俺達よりずっと長生きしますよ」
「ははっ、まあおやっさんなら殺しても死なないか」
談笑しながら道を行く。そこへ何やら不穏な気配が。
前から何かが飛んで来る。それは二枚の大きな紙と数枚の布だった。
「！？」
紙と布は二人のバイクを取り囲む様に飛んで来た。そして二人を包囲する。
「イイーーーーーッ！！」
布が戦闘員に変化した。二枚の紙は怪人であった。デストロンの隠密怪人吸血カメレオンとゲドンの凶悪怪人トゲアリ獣人である。
「奴等、やはり！」
城と滝はバイクから降りた。身構える二人に刺客達が襲い掛かる。
戦闘員達が四方八方から襲い掛かる。怪人もそれに加わる。
「くっ、怪人が一緒だとやりづらいな」
戦闘員達を拳で退けつつ滝が舌打ちした。城もトゲアリ獣人を前に苦戦を強いられている。
「ここはあれが一番だな」
城が呟いた。手袋を掴んだ。

「滝さん、跳んで！」
城が叫ぶ。咄嗟の事であったが城が何かやるのだと瞬間的に察知した彼はそれに従った。
「エレクトロファイアーーーー！」
手袋を剥ぎ取り上へ放り投げる。中から白銀に光る手が現われた。

熱砂の騎士その五

その拳を地面へ叩き付ける。電流が地を走り敵を撃つ。
「イイーーーーーーーーッ！」
戦闘員達の断末魔の叫びが響き渡る。電流に全身を貫かれたのだ。
だが二体の怪人は平然としている。流石にこの程度の電撃では効果が無い様だ。
跳躍した滝が着地した。そこで彼が見たのは城茂ではなかった。
否、城茂ではあった。だがその姿は彼のものではなかった。雷のライダー、仮面ライダーストロンガーであった。
黒の仮面に緑の両眼、口は銀でカブト虫の角は赤い。黒のバトルボディにSの文字が描かれた赤く大きい胸。白い手袋とブーツ。全身には稲妻を漂わせている。
「ライダー・・・ストロンガーか」
その姿を見て彼は呟いた。FBIに戻ってからもライダーの話は聞いていた。そしてその姿や能力も知っていた。
「行くぞ、怪人共」
二体の怪人に対してストロンガーが向かって行く。滝はその後姿を見ていた。
「これはかなり強いな」
それは先程のエレクトロファイアーで戦闘員を一掃した事からもわかった。だがそれだけではない。その気が滝に彼の強さを実感させたのである。
「リィーーーーーーッ！」
トゲアリ獣人が叫び口から強酸を吐く。厚い胸からは想像出来ない速さでストロンガーはそれをかわす。アスファルトが溶けしゅうしゅうと白い煙を出す。
次に怪人は全身に生えているトゲの一本を抜いた。そしてそれをナイフの様にして投げる。

ストロンガーはそれを何と手で掴んで捕った。そして手の平に電撃を発しそれを消し炭にした。

「ギィッ！？」

怪人は驚いた。まさか自分の自慢の攻撃がこうもあっさりと退けられるとは思わなかったからだ。

「イィーーーッ！」

今度は全身で体当たりを浴びせて来る。だがそれをストロンガーは受け止めた。

「電気ストリーム！」

腕をトゲアリ獣人の腹に突き入れ電流を通す。怪人の身体を高圧電流が通る。その身体を雷が走る。

「ギィーーーーーーーーッ！」

トゲアリ獣人は断末魔の叫び声をあげた。そして焼け焦げ塵となって消えた。

「イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

吸血カメレオンは口から長い舌を出して来た。嫌らしいピンク色のヌメヌメした舌だった。

舌がストロンガーの首を絞める。それを見て怪人は嫌らしい笑みを浮かべた。

だがそれに対してストロンガーは余裕の笑みを浮かべたかに見えた。次の瞬間ストロンガーはその舌を掴むと思いきり引き千切った。

「ギャオオオーーーーーーッ！」

怪人の絶叫が砂漠に響く。引き千切られた舌はストロンガーにより砂漠の上に捨てられた。

苦しみながらも怪人は姿を消した。カメレオン特有の保護色の能力である。

それに対しストロンガーは冷静だった。構えをそのままに周囲の気配を探る。ふと砂が動いた。

「・・・そこか」

砂が動いた方へストロンガーは指を向けた。

「電気ビームッ！」
指先から高圧電流が放たれる。それはそこには見えぬ吸血カメレオンの身体を撃った。
「イギィーーーッ！」
絶叫と共に怪人が姿を現わす。高圧電流に撃たれ怪人は倒れ爆死した。
瞬く間に二体の怪人が倒された。後には戦闘員達の骸が転がっているだけだ。
「やはりな。最近よく出て来る連中だ」
変身を解き城は戦闘員達の死骸を見つつ言った。
「そっちにも来るのか？」
「ええ。怪人が出たのは初めてですが」
滝の問いに答えた。
「そうか。やはり何かでかい組織が動いているみたいだな」
「ええ。ブラックサタンやネオショッカーの様な」
見れば戦闘員達の格好はそれまでの組織の戦闘員達のものと酷似している。
「だが怪人が出て来るということは尋常じゃない。おそらくそれを指揮する大幹部が近くにいる筈だ」
「はい。若しかするとデッドライオンの他にもいるのかも」
「可能性は高い。インドでは鋼鉄参謀の他にゾル大佐と死神博士がいた」
「あの鋼鉄参謀の他にも・・・・・」
かって自分を幾度となく窮地に追い詰めた強敵の他にも別の大幹部が同時に行動している事に城は戦慄した。だがそれは滝に悟られぬよう顔には出さなかった。
（超電子の力の時間内に全て倒せるか）
自らの切り札の事に思案を巡らせる。彼の超電子の力は絶大なパワーを誇るがその時間は僅か一分間しかない。それを過ぎると彼の全身が粉々に砕け散るのだ。

（だがやらなくてはならない。悪がこの世にある限り俺は闘う）
「おい」
滝が声を掛けてきた。
「あ、はい」
ふと気が付いた。
「行こうぜ。それはともかく油田へ行って奴等を倒そう」
「はい、そうでしたね」
滝の言う事は率直だが正しかった。例え敵がどれだけ強大であろうとも立ち向かい倒すのがライダーなのだから。
二人は再びバイクに乗った。そして走り去って行った。

熱砂の騎士その六

二人の姿が見えなくなった。そこへ一枚の巨大なトランプのカードが舞い降りて来た。それはスペードのキングだった。

「クックック」

カードから誰かが出て来た。例の白服の男である。

「あの時から更に腕を上げたな。そうでなければ面白くない」

城と滝が走り去った方を見つつ笑った。

「腕を磨くがいい。貴様は俺がこの手で倒すのだからな」

男はトランプのカードを放り投げた。そしてその中に消えた。

リビアの油田のほとんどは砂漠にある。それも北東部に集中している。

その為パイプラインや施設もその地域にある。ここがリビアの生命線とも言える。

生命線を守る為警護は固い。あちこちに軍人の姿が見える。

施設は極めて近代的だ。コンピューターで制御され内部は技術者や科学者達が動き回っている。その施設の陰に隠れるようにして彼等はいた。

「感づかれるな」

ヨロイ騎士が物陰に隠れながら戦闘員達に命令する。戦闘員達の手にはそれぞれ鋭い剣がある。

「施設内に爆弾は付け終わったか」

一人の戦闘員に聞く。

「ハッ、既に全て取り付け終えました。あと一時間で設置した爆弾が全て同時に爆発します」

戦闘員は敬礼して報告する。

「よし、ライダーが来ぬうちに全てを終わらせてしまうぞ」

ヨロイ騎士が剣を振りかざしつつ言う。

「あとはコンビナートを襲撃する。我々がコンビナートを破壊しそ

れに気を取られている間にここの施設が全て爆発する。ふふふ、これは効果があるぞ」

ヨロイ騎士は高らかに笑った。

「はい、ライダーの悔しがる顔が目に浮かびます」

戦闘員の一人が同調する。

「待て、そうはさせんぞ！」

その時声がした。施設の上からだった。

「ぬうっ、その声は！」

声の主はあの男だった。施設の上で右手を上げ人差し指と中指を伸ばしファイティングポーズをとっている。その横には滝もいる。

「話は聞かせてもらった。貴様等の邪悪な企み、この俺が打ち砕いてやる！」

「ぬうう、ほざけえ、返り討ちにしてやるわ！」

ヨロイ騎士は短剣も抜いた。長剣でストロンガーを指し示し言った。

「滝さん、ここは俺に任せて爆弾の方を」

「解かった、任せてくれ」

滝は頷くと施設を降りていった。

「やらせるかあ、かかれえ！」

剣を振り下ろし言った。戦闘員達が滝の方へ向かった。

「そうはさせん！」

ストロンガーが飛び降りた。滝と戦闘員達の間に入る。

「さあ、今のうちに」

「済まない、ストロンガー」

滝は施設の中へと入っていく。それを見つつヨロイ騎士は激しい怒りを憶えながらもなんとかそれを押し殺し命令を下した。

「ならばストロンガーを倒した後この施設を破壊するまでの事、やれい！」

戦闘員達は剣を抜いた。一斉に散らばりストロンガーを取り囲む。

「まだだ、それだけではないぞ！」

ヨロイ騎士が叫ぶと後ろから三体の改造人間が姿を現わした。ショッカーの地中怪人モグラング、ゴッドの盗賊怪人ガマゴエモン、ネオショッカーの爆弾怪人カニンガージンである。
「如何に貴様であろうともこの者達には勝てまい。やれい！」
三体の怪人達が来た。だがそれに対しストロンガーは不敵に言った。
「フン、たった三体か」
「何！？」
ヨロイ騎士の声が引きつった。
「俺を倒したければ百体持って来るんだな」
「おのれ・・・その言葉地獄で言うがいい！」
剣を手にした戦闘員と怪人達が襲い掛かる。ストロンガーの両手に雷が宿る。
「電パーーンチ！」
雷を宿らせた拳で戦闘員を撃つ。拳を受けた戦闘員の胸に火花が生じる。
「電チョーーーップ！」
手刀を横に振る。打たれた戦闘員が火花と共に吹き飛ぶ。
「イィッ！」
戦闘員達が剣を振り下ろす。ストロンガーはそれを難なくかわす。だが数が多い。そこへ怪人達の攻撃も来る。
「ちいい、少しばかり厄介だな」
「フン、どうしたさっきの威勢は」
ヨロイ騎士皮肉を込めて言った。だがストロンガーの耳には入っていない。
「それではこれを使うか」
ストロンガーが両腕を胸のところでクロスさせた。
「電気マグネーーーーット！」
両腕を思い切り広げた。強烈な磁気が飛び散る。
「なっ！？」

戦闘員達の剣が宙に舞った。そしてストロンガーに吸い付けられる。

「うおおおおっ！」

ストロンガーが叫ぶ。身体中から雷を発する。その熱で身体に吸い寄せた全ての剣を溶かしてしまった。

「何っ！？」

これにはヨロイ騎士も絶句した。まさかこの様な方法を取るとは思わなかった。

「これでやりやすくなったな。行くぞ！」

全身に雷を帯びたまま敵の中へ突っ込む。戦闘員達が次々と火花の中に倒れていく。

「グィーーーッ」

カニガンガージンが左手の鋏をストロンガーの首へ突き立てる。ストロンガーはそれを左手で受けた。

熱砂の騎士その七

そこへ口から泡を吹きかける。発火性のある凶悪な泡だ。
ストロンガーは怪人の鋏を叩き割った。そして怪人の懐へ潜り込む。
「喰らえっ！」
電パンチを連打する。これにはさしものカニの甲羅も通用せず割れる。
怯んだところへ電チョップを入れる。首を直撃され怪人は倒れた。
ガマゴエモンが斧を構えている。怪人と対峙するストロンガー。
だが彼はこの時気付いていた。もう一体の怪人の姿が見えない事に。
「・・・来るな」
ボソッと呟いた。そこへ来た。
「オォオオーーーウ」
丁度ストロンガーは土の上にいた。その真下からモグラングが襲い掛かって来た。密かに地中へ潜り隙を窺っていたのだ。
右手の槍で突きを入れる。だがそれより速くストロンガーは跳んでいた。
「オォ！？」
モグラングは目が弱い。反応が遅れた。気配を察した時ストロンガーは真上にいた。
ストロンガーは空中で反転した。頭から急降下する。
拳を握る。そして雷をやどらせ突き出す。
「急降下パーーーンチ！」
拳が怪人の脳天を直撃した。地中へめり込みモグラングは死んだ。
最後はガマゴエモンである。間合いを取るストロンガー。不意に怪人が斧を投げてきた。
「ぬうっ！？」
身体を捻ってかわす。斧を放り投げたまま怪人は右手の指から火

炎を放ってきた。
「うおおっ！」
火炎がストロンガーを襲う。それをなんとかかわしたストロンガーの懐へ跳びこむ。
「ウゲーーー」
投げた。必殺技であるゴエモン投げだ。ストロンガーは空中へ投げ飛ばされた。
だがストロンガーは空中で身体を捻りその勢いを殺した。一回転し勢いを完全に消すと着地した。
「なかなかやるな。今度は俺の番だ。トォッ！」
跳んだ。空中で前へ一回転する。
「ストロンガー電キィーーーック！」
全身の電気エネルギーを右足に宿らせる。そして渾身の力で蹴りを入れる。
稲妻の蹴りが怪人を直撃した。怪人は吹き飛ばされ爆死して果てた。
「どうだ、三体では倒せなかっただろう」
「ちぃっ・・・・・・・・・」
ヨロイ騎士が舌打ちした。今度は自ら剣を構える。
「ならばわし自ら相手をしてやる」
大小二振りの剣に銀の光が宿る。
「行くぞ！」
両者ほぼ同時に動いた。雷の緑、剣の銀、二つの光が激突する。
右手の長剣、左の短剣、それぞれを巧みに使いヨロイ騎士は攻撃を仕掛けて来る。ストロンガーに電気攻撃を仕掛けさせる暇を与えない。
「フン、貴様のマグネットもわしには通用せぬぞ」
ヨロイ騎士は不敵に笑った。
「わしの剣と鎧はオリハルコンで出来ている。磁気なぞ効きはせぬ」
長剣を斜め上から振り下ろす。

「ムンッ！」
それに対しストロンガーは左手に電磁バリアーを作り受け止める。激しい火花が散る。
「ほう、そうきたか」
ヨロイ騎士は落ち着き払った声で言った。
「以前より更に腕を上げたな。そうでなくては面白くない」
「ほざけっ！」
電パンチを繰り出す。しかしそれは紙一重でかわされる。
「ふっふっふ、もっと怒るがいい。怒りこそ闘いを彩るのに最も相応しいのだ」
ストロンガーを挑発する。
「くそっ！」
それに対してストロンガーは頭に血が登ったようである。攻撃が荒くなってきた。ヨロイ騎士はそれを容易にかわす。
長剣を斜め下から一閃させた。ストロンガーは後ろにジャンプした。間合いが空いた。
「かかったなあ！」
ヨロイ騎士が頭上で二振りの剣を交差させる。剣に凄まじい熱が宿る。
「喰らえっ！！」
剣から熱線が放たれる。それは一直線にストロンガーへ向かって来る。
「むうっ！」
間一髪でそれをかわした。熱線がコンクリートの壁を粉々に打ち砕いた。
「ほう、今のをよけたか」
自信に満ちている。まるで何時でも倒せると言わんばかりだ。
「だが何時までもかわしきれるものではない。次は外さぬ」
再び剣を交差させようとする。それを見てストロンガーは胸のＳの字に両手の先を当てそこからその両手を斜め上へ上げた。

「チャーーージアーーーップ！」
Ｓの文字が高速で回転を始める。それと共に胸と角が白く光った。
胸の一部と角が銀色になった。元ブラックサタンの科学者正木博士により埋め込まれた超電子ダイナモの力だ。
「くっ、チャージアップか！」
ヨロイ騎士は思わず舌打ちした。
「ヨロイ騎士、勝負はこれからだ。行くぞ！」
一気に間合いを詰め鉄拳を繰り出す。それまでとは全く比較にならない威力だ。
「うおおっ！」
そのあまりもの威力にさしものヨロイ騎士もたじろぐ。ストロンガーは次々と攻撃を仕掛ける。
「今だ！」
ヨロイ騎士の両肩を掴んだ。そして上へ放り投げた。
「超電子ジェット投げーーーッ！！」
空中へ投げられるヨロイ騎士の両足首を掴んだ。そして地上で自分自身を中心とし駒の様に振り回す。
そして投げた。遠心力が加わり凄まじい速さで飛ばされる。
「グォッ！」
後頭部から地面へ叩き付けられた。砕ける様な衝撃が全身を襲う。
「ぐうう、何という威力だ・・・・・」
ふらつきながらも起き上がる。全身を覆う鎧が無かったならば彼とて生きてはいなかったであろう。

熱砂の騎士その八

「どうだ、これが超電子の威力だ！」
ストロンガーは言った。そして再び構えを取る。止めを刺す為に。
「くっ、これまでか・・・・・・」
最早戦闘を続ける力は無かった。立っているのがやっとであった。
ヨロイ騎士は死を覚悟した。
その時だった。不意に何処からか謎の赤い光線が飛びストロンガーを撃った。
「うぉっ！」
ストロンガーは赤いピラミッドの中に閉じ込められた。出ようとするがかなわない。
『ヨロイ騎士、今のうちに逃げるがいい』
「その声は！」
謎の声がした。その声をストロンガーは憶えていた。
「う、うむ、かたじけない！」
ヨロイ騎士はその言葉に従った。マントで身体を覆うとそのまま撤退した。
「くっ、逃げられたか！」
口惜しいと言わんばかりの声だった。だがピラミットからは容易には脱せられない。チャージアップの時間が近付いていた。超電子の力は一分間しか使えないのだ。それ以上経てばストロンガー自身の身体を粉々にくだいてしまう。
「ならばここで・・・・・・！」
超電子の力を全開にした。その蹴りでピラミッドを壊した。
「よし、間に合ったな」
かろうじて脱出する事が出来た。チャージアップを解く。
『ヨロイ騎士を退けるとはやるなストロンガーよ。更に腕を上げたな』

「・・・やはり貴様も甦っていたか」
辺りを見回す。姿は見えない。だが油断はしない。
『ふ、安心するがいい。今貴様と闘うつもりは無い』
声は言った。
「何!?」
『今はヨロイ騎士の治療を優先させねばならん。貴様との決着はいずれ着けてやる。その時を楽しみにしていろ』
「・・・・・・」
『それにリビアでの闘い、我々の勝利に終わったしな』
「それはどういう意味だ!?」
声を荒わげる。
『ふっふっふ、まだ解からんか。ここに誰がいて誰がいなかったかを』
「な・・・・・・!」
ストロンガーは愕然とした。ここにいたのはヨロイ騎士だけだった。
『やっと気付いたか。貴様はまんまとここに誘き出されたのだ』
「ぐう・・・・・・・・」
その通りだった。戦力を分け一方を陽動に使うのは兵法の基礎の基礎ではないか。それに気付かぬとは迂闊だった。
『デッドライオンは既にシドラへ向かっている。この国最大の石油集積地の一つにな』
油田ではなく集積地を狙っていたのだ。確かにそちらの方が効果がある。
『貴様が今から行っても間に合わぬ。この闘い我等の勝ちだ』
勝利の笑いを発そうとする。だが先に笑ったのはストロンガーだった。
「フフフ、間に合わない、か。俺も軽く見られたもんだ、ハハハハハ」
『何がおかしい?』

「おかしい？そうだな、貴様等の間抜けさ加減が」
『何っ！？』
今度は謎の声が荒わげた。
『ほざくな、ここからシドラまですぐに行けるものか』
「ふんっ、黙って見ていろ。カブトロー！」
愛車の名前を叫ぶ。すると紅い、前部に巨大な閃光ライトを点けたバイクが姿を現わした。
「トォッ！」
天高く跳躍する。そしてカブトローに飛び乗った。
『馬鹿め、それで間に合うと思ったか』
「それは・・・こうするのさ！エレクトロサンダー！」
空中へ高圧電流を放つ。すると空に雷雲が現われた。
雷雲が雷を落とす。それはカブトローとストロンガーを直撃した。
「行くぞ！」
雷の力を受けカブトローはその全ての力を出していた。信じ難い速さで走り出した。
『な・・・しまった！』
「カブトローの真の力・・・それを忘れていた事が貴様の誤算だ！」
雷より速く走る。そこへ爆弾の解除を全て終えた滝が出て来た。
「ストロンガー、こっちは終わった・・・ん！？」
そこには新たなる敵へ向けて駆けて行くライダーの姿があった。
「・・・生きて帰って来いよ」
その後姿を見送り滝は一言呟いた。
シドラの石油集積施設がある。世界屈指の産油国リビアでも最大とも言われる集積所だけあってその規模はかなり大きい。そこにデッドライオンはいた。戦闘員達にあれこれと指示を出している。
角の生えた獅子の顔にピラミッドの様な形の鬣を持っている。黒ズボンに上はレンガに似た色をしている。
とりわけ目を引くのが右手である。左右それぞれ二つに分かれた金属製の爪を持っている。

ブラックサタンの最高幹部として君臨していた。首領からの信任は厚く、あのタイタンすら凌ぐものであった。

それは何故か。彼はブラックサタン最初の奇械人だったからだ。南アフリカの刑務所を脱獄した凶悪犯を改造しサタン虫を寄生させたのが彼である。

常に首領の側にあり権勢を誇った。彼が動くだけで組織の行動が決定される時もあった。多くの怪人を従えていた。

だが彼と雇われ幹部であるゼネラルシャドウの関係は良好ではなかった。それが為にシャドウの離反を招いてしまう。それがストロンガーにブラックサタンを滅ぼされる一因となった。

組織崩壊後彼は姿を消した。行方はようとして知れなかった。デルザーは彼を戦力に引き込もうとしたが発見する事は出来なかった。

その後ネオショッカー、ドグマと新たな組織が結成されたがそこにも彼の姿は無かった。生存すら疑う声もあった。

しかし彼は生きていた。アフリカの奥深くに潜んでいたのだ。そこでブラックサタンを滅ぼしたストロンガーへの復讐の牙と爪を磨いでいたのだ。

熱砂の騎士その九

新たな組織が結成される時彼の下に一人の使者が訪れた。その使者は彼を新たな組織の大幹部として迎え入れたいと申し出た。彼はそれを快諾した。

この組織においても彼はストロンガーの事を忘れた日は無かった。常に組織の仇を討つ事を願っていた。

「攻撃の用意は出来たか」

彼は戦闘員に尋ねた。

「ハッ、何時でも攻撃が可能です」

戦闘員の一人が言った。

「よし、すぐに攻撃に移るぞ」

デッドライオンは指示を下した。不意に天候が怪しくなりだした。空を暗く厚い雲が覆いだした。ゴロゴロと稲妻の轟きと光が空に現われる。

「雨か。この季節には滅多に降らぬというのに」

デッドライオンは呟いた。雨が一滴、その次は数滴砂の上に落ちやがて土砂降りとなった。

「これは都合がいい。襲撃にはおあつらえ向きだ」

その時何処からか口笛げ聞こえてきた。

「!?口笛・・・・・・・・・!?」

戦闘員達が辺りを見回す。デッドライオンも耳を澄ました。

「そこかっ!」

左手にある丘の上へ右手の爪を飛ばした。

丘の上の岩が崩れる。そこに奴はいた。

「な・・・・・貴様は!」

激しい雨の中男は立っていた。その顔には満心の笑みがある。

「久し振りだな、デッドライオン。まさか生きていたとはな」

「貴様、アマルでヨロイ騎士と闘っていたのではなかったか・・・」

戻って来た右の爪で城を指しながら言った。
「カブトローの真の力を侮ってもらっては困るな。雷より速いんだからな」
「くっ・・・おのれ・・・・・・」
「今度こそ貴様を倒してやる、覚悟しろ！」
そう言うと両手の手袋を投げ捨てた。中から銀の手が現われた。

変
右手を右肩の高さで真横に垂直に上げる。左手は肘を直角にし右手に垂直に置く。
身
両手を左斜め上四十五度までゆっくりと旋回させる。胸が赤くなりそこから黒のバトルボディになる。足が白いブーツに包まれそこから上半身と同じ黒のバトルボディに覆われていく。
スト・・・ロンガー！
右手を素早く引く。一瞬で戻し左手と擦り合わせる。両手を激しい火花が覆う。
すると顔の右半分が仮面に覆われた。そして次には左半分が。凄まじい雷光が全身を包んだ。
そこには雷のライダーがいた。仮面ライダーストロンガーである。

「天が呼ぶ　地が呼ぶ　人が呼ぶ
悪を倒せと俺を呼ぶ
聞け、悪人共
俺は正義の戦士、仮面ライダーストロンガー！」
ストロンガーの全身を雷が走った。凄まじい衝撃が起こった。
「貴様等の野望、今ここで潰える。覚悟しろ！」
「ほざけ、返り討ちにしてくれるわ！」
ストロンガーが降り立った。戦闘員達がそれを取り囲む。
「フン、来たな雑魚共が」

不敵な言葉を吐いた。それにいきり立つかの様に戦闘員達が一斉に動いた。
「エレクトロチャーージッ！」
腕を交差させ全身から電流を放った。それに襲われた戦闘員達が一掃される。
「な・・・・・・」
さしものデッドライオンも思わず絶句した。
「デッドライオン、残るは貴様だけだ」
「ほざけえっ、その減らず口二度と叩けぬようにしてやるわ！」
鬣を外し投げ付ける。それはブーメランの様に旋回しつつストロンガーへ襲い掛かる。
「その程度！」
電流を放ち弾き返す。鬣は空しく主の下へ返っていった。
「今度はこちらから行くぞ！」
突進した。拳を次々と繰り出す。
デッドライオンはそれを右の爪で受け止める。そして返す刀で斬りかかる。
ストロンガーは蹴りを放つ。雨に電流が反応しバチバチと音を立てる。
だがそれをデッドライオンはバックステップでかわした。間合いが空くと爪を飛ばして来た。
ストロンガーは襲い来る爪を蹴った。その時激しい電流を流した。爪が電流により緑に光る。激しいスパークの音がし爪は塵となって地に落ちた。
「何ッ！」
これにはさしものデッドライオンも驚いた。自分の最大の武器が跡形もなく消されたのだから。
「電流は水を伝う。雨が貴様の不運だったな」
「おのれ・・・・・・」
呪詛の声を漏らす。先程は喜んだ雨が今では憎くて仕方が無い。

「これで決着を着ける。行くぞ！」
胸のSの文字が激しく回転し始めた。
「チャージアーーーップ！」
角と胸が銀色になる。それと同時にストロンガーは跳んだ。
「超電子ドリルキィーーーック！！」
右足を軸として高速回転する。そしてそのまま右足で蹴りを入れる。
「ガオォォーーーッ！」
これにはデッドライオンも耐えられなかった。凄まじい衝撃をまともに受け弾き飛ばされた。
砂の上に叩き付けられる。身体が粉々になるような痛みが全身を襲う。
「グ、グウウゥゥ・・・・・・・・・」
それでも何とか立ち上がった。だがそれが限界だった。
「み、見事だストロンガー、俺の負けだ」
最後の力を振り絞って声を出した。
「だが貴様は最後には負ける。悪の力は不滅だ」
口から血を吹き出した。もはやこれまでだった。
「地獄で貴様の最後を見届けてやる。悪に栄えあれーーーーっ！！」
そう言い残すと倒れた。大爆発を起こし死んだ。

熱砂の騎士その十

「遂に死んだか、ブラックサタンの残照もこれで完全にこの世から消え去ったな」

ストロンガーは感慨深げに呟いた。チャージアップも解いていた。

「それはどうかな」

何処からか声が響いてきた。

「誰だっ！」

ストロンガーは叫んだ。声の主は嘲るように笑った。

「俺の声を忘れたか。ならば少々手荒いもてなしをしてやらねばならんな」

声がそう言い終えると先程ストロンガーが現われた丘の上から二体の影が現われた。

「イイーーーーッ！」

ブラックサタンの地雷怪人コウモリ奇械人とジンドグマのボール怪人ドクロボールである。

「ブラックサタンの・・・・・！」

奇械人の姿を見てストロンガーは驚いた。

「迂闊だったな、ストロンガー。ブラックサタンの力も今や我等の力の一部なのだ」

声は高らかに笑った。

「やれいっ、手加減は無用だ」

その声を待つまでもなく怪人達はストロンガーに襲い掛かって来た。まずドクロボールがバスケットボールに似たボールを投げ付けてくる。

ストロンガーはそれをジャンプでかわした。だがそこへドクロボールはネットを投げ付けた。

「むうっ！」

ネットはストロンガーを捉えた。そのまま地に落ちる。

「キキィーーーッ」
コウモリ奇械人が口から赤い液を吹き出す。それは容赦なくストロンガーにふりかかった。
「うおおおおっ！」
ストロンガーの身体がしゅうしゅうと音を立て焼ける。常人ならば即死してしまう程強力な液である。ストロンガーもダメージを受けた。
だがここで怪人は一つのミスを犯した。液のせいでネットが溶けてしまったのだ。
「しめた！」
ストロンガーはネットを引き千切った。そおへ自らを巨大なボールと変化させたドクロボールが飛んで来る。
怪人は不気味に空を裂く音を立てつつ飛んで来る。ストロンガーはそれを冷静に見ている。
「今だ！」
ストロンガーは回転を始めた。コマの様に回る。衝撃が周りの砂を撒き散らす。
「ウルトラパーーーーンチッ！」
ドクロボールを撃つ瞬間に拳に電流を集中させる。ボールが今雷に覆われ緑の光に包まれた。
「ガオオオオッ！」
叫び声と共に怪人は元の姿に戻った。そして砂の中に倒れこみ爆死した。
だがまだコウモリ奇械人が残っていた。怪人はその翼を使い空へ上がろうとする。
それに対しストロンガーも跳躍した。一直線に怪人へ向かって行く。
身体を激しく回転させた。ドリルの様な動きである。
「スクリューーーキィーーーーック！」
蹴りが怪人を貫いた。ストロンガーは暫くそのまま空を飛び着地

した。その後ろでは真っ二つになった怪人が空で爆死していた。
「フフフ、そうでなくては面白くは無い」
先程の声が再び聞こえてきた。
「ならば俺が相手をしてやろう、久々にな」
そう言うと丘の上に姿を現わした。
「貴様はっ！」
ストロンガーは思わず声をあげた。そこには黒服の男がいた。
黒いスーツに白のスカーフを着けている。白手袋をはめておりダンディズムを感じさせる。
異様なのはその頭部であった。巨大な赤い光を放つ単眼がある。そして黒い頭部全体に無数の眼がある。彼の名は百目タイタン、ブラックサタンの大幹部としてストロンガーと死闘を繰り広げた男である。
イタリア、シチリアに生まれた。地底王国の王族出身である。彼等地底人の祖先はこの島に暮らしていたと言われる巨人キュクロプスである。炎の神に仕えていた誇り高い巨人の血を受け継いでいるのである。その血の為彼等は単眼であった。
彼は王家では傍流であった。だが陰謀とクーデターによりライバル達を全て除き玉座に就いた。政敵はあらゆる手段を以って消すのが彼のやり方だった。
その奸智と冷徹さを買われ彼はブラックサタンの大幹部となった。一説には彼の国は魔の国と関係があったのではないかとも言われている。何故なら彼の出自が人ではなくデルザーの改造魔人達と同じく人ならざる者であったからだ。
ブラックサタンにおいても彼はその辣腕を振るい続けた。組織の邪魔となる者は次々に消していき作戦を成功させてきた。時には味方ですら平然と使い捨てにした。
一度はストロンガーに敗れたがその力を惜しんだ首領により甦らされた。この時強化手術を受け無数の眼を持った。これが今の名の由来である。冷酷で狡猾な策士として知られている。

「タイタン、貴様また甦ってきたのか」
「悪が栄える限り俺は何度でも甦る。貴様を倒す為にな」
無数の眼でストロンガーを見下ろしつつ言った。
「リビアでの我々の作戦は失敗した。デッドライオンも死んだ。だがそんな事は俺にとってはどうでもいい。貴様さえ倒せられればな」
「望むところだ、来い！」
「言われずともこちらから行く」
ストロンガーの言葉より早くタイタンは丘の上から飛び降りた。
懐からリボルバー型の銃を取り出す。
「喰らえっ！」
銃を放つ。ストロンガーはそれをかわす。
「何時までも避けきれるものか！」
続けざまに発砲する。だがストロンガーは驚異的なスピードでそれを全てかわした。
「むっ」
弾が切れた。タイタンは銃を戻した。
「ならばこれだ！」
右手を顔にもっていく。眼球の一つをくり抜いた。そこからすぐに新しい眼球が出て来る。
「ファイアーボール！」
その眼球を放つ。眼球は火の玉となってストロンガーに襲い掛かる。
「電気ビーム！」
指から電流を放つ。吸血カメレオンを倒したあのビームだ。それで火球を相殺する。
ストロンガーは一気に間合いを詰めんとする。同時に胸のSの文字が回りだした。
「ほう、そうくるか」
それを見てタイタンは不敵に笑った。
チャージアップしたストロンガーの拳がタイタンへ繰り出される。

タイタンはそれを受け止めた。
「ぐっ・・・」
さしものタイタンもこれは効いたようである。呻き声が漏れる。
「だがやらせん！」
指から炎を放つ。

熱砂の騎士その十一

「ファイアーシュート！」
ストロンガーはそれをバク転でかわす。かわすと同時に蹴りを放つ。
「うおっ！」
顔を思いきりのけぞらせそれを紙一重でよける。手で着地したストロンガーが再び来る。
両者は激しく打ち合う。ストロンガーに分があるがタイタンも粘る。やがてストロンガーの方に焦りが見られるようになった。
「ほう、そろそろ時間か」
タイタンはいわくありげに言った。
「何っ、貴様まさか」
ストロンガーはその言葉に動揺した。
「そうとも、貴様の超電子ダイナモの事は既に研究済みだ。短時間しか使えないという事もな」
「くっ・・・・・・」
ストロンガーは舌打ちした。その通りだったのだ。既に身体は限界に近付いている。
「俺は貴様が自爆するのを待てばいいだけだ。かって俺が自分の力の許容量を超えた時のようにな」
かって地底王国の闘いにおいて敗れた時の話だ。
「チャージアップを解きたいだろう。だがそうはさせん。その暇は与えぬぞ」
攻撃を繰り出す。ストロンガーの全身がきしむ。
「くっ、もう限界か・・・」
その時両者に向けて数枚のトランプが放たれた。
「ムッ！」
二人はそれをかわした。その間にストロンガーはチャージアップ

を解いた。
「クッ、もう少しというところで・・・・・」
タイタンはトランプの飛んできた方を睨んだ。
「シャドウ、どういうつもりだ！」
そこに男はいた。あの白服の男だ。
「フフフフフ」
タイタンの問いに対し不敵に笑っている。
全身を白い中世の騎士の様な服で覆っている。マントとブーツも白だ。腰の左右には大小それぞれ一振りずつ剣が架けられている。
特に目を引くのが顔である。肌が無く肉がそのまま見える不気味な顔である。しかも不自然なまでに紅い唇は耳まで裂けている。その顔全体を透明なマスクで覆っている。彼の名はゼネラルシャドウ。ブラックサタン、デルザーにおいて勇名を馳せた一匹狼の剣客である。
欧州にはロマニと呼ばれる人々がいる。そのルーツはインドにあるとも言われているがはっきりとしない。欧州で各地を馬車等で転々としながら占いや奇術ショーを見せて暮らしている。メリメの小説『カルメン』等多くの文学作品にも登場している。独特の音楽でも有名である。
彼等は時として迫害の対象となった。特にナチス＝ドイツの虐殺は知られている。その総数ははっきりしないが欧州にいるロマニのうち約半数が殺されたとも言われている。その他にも事あるごとに彼等は迫害、虐殺の対象となっていた。
そのロマニの子として彼は生まれた。幼い頃よりトランプのカードを使い占いや奇術をして生計を立てていた。また彼は剣の腕も秀でており切れる頭脳も併せ持っていた。長じて彼は馬車を離れフランス軍外人部隊に入った。そこで彼は頭角を現わしていった。彼が入隊してすぐに第二次世界大戦が勃発した。
フランス軍はドイツ軍のアルデンヌ突破作戦により呆気無く敗れた。強大な陸軍を擁するフランス軍の敗北に世界は驚いた。パリは

無血開城し傀儡政権が樹立された。
だが陸軍の軍人であり後に大統領となるシャルル＝ド＝ゴールがビジー政権を樹立する。彼はそれに参加した。
それから彼は世界を転戦して回った。ベトナムで精鋭をもってなる日本軍と刃を交えた事もある。前線に真っ先に行かされる外人部隊だが彼は倒れる事は無かった。顔は傷だらけになり大小無数の傷を負っても彼はすぐに戦場へ戻った。最早彼にとって闘いは生きがいであった。戦場で血まみれになって立つ彼の姿を見て友軍だけでなくあの日本軍やドイツ軍ですら震え上がったという。
やがて第二次世界大戦が終結した。彼はそのまま外人部隊に残った。敵を求めてであった。
その彼を誘う者が現われた。あの首領である。首領は彼を更なる闘いと敵をもって彼を己が野望に誘ったのである。
闘い、そして敵と聞いて彼はその誘いに乗った。そして彼は闘い続けた。その戦場は人の世界ではなかった。暗い魔の国だった。やがてその場所は彼の第二の故郷となった。
闘いにより彼は更に傷を負った。その度に改造手術を受け彼は完全に人ではなくなっていた。そこにいるのは一人の改造魔人だった。
ブラックサタンに雇われた彼は仮面ライダーストロンガーの存在を知る。それ以後彼はストロンガーを倒す事に執念を燃やしていく。あえて卑劣な策を用いず正面から闘って倒す為に。そうでなければ彼の誇りが許さなかった。
後にブラックサタンに反旗を翻しデルザーを結成しその中心人物となる。誇り高い切れ者の剣客である。

熱砂の騎士その十二

「ストロンガーは今万全の状況ではない。そんな時に勝ったとしても面白くはなかろう」
シャドウはこちらへゆっくりと歩んできつつ言った。
「何を言うか、勝たなければ意味が無いのだ！」
タイタンは反論する。
「ふん、策に嵌めて倒して何がよいのだ」
「何っ、それはどういう意味だ」
「聞こえなかったか。正々堂々と闘えと言ったのだ」
「ふん、戯言を。我等は邪道こそ得手だ」
流石にタイタンも退かない。
「それで勝てるというのならばな」
「・・・面白い、やるつもりか」
タイタンの声に怒りがこもる。
「まあ待て。俺がここへ来た本来の目的は貴様に伝言がるからだ」
シャドウはそれを受け流す様に言った。
「伝言？」
「そうだ、あのお方からな」
「何っ！？」
タイタンの態度が一変した。
「今すぐナイジェリアへ向かえとの事だ。そこで北アフリカの残存勢力を集結させよとの事だ。俺もそちらへ向かう」
「むう、今すぐか」
タイタンは眼の一つでちらりとストロンガーを見た。
「ストロンガーよ、命拾いしたな。その命次に会う時まで預けておく」
そう言うと首のスカーフを取った。
「すぐにそちらへ向かう。だがシャドウ、忘れるなよ。ストロンガ

ーを倒すのはこの俺だ」
「貴様にそれができるのならな」
「ほざけ！」
スカーフを投げるとタイタンは消えていった。後にはストロンガーとシャドウが残された。
「そういう事だストロンガー、ナイジェリアで待っている」
「シャドウ・・・・・」
ストロンガーは敵の名を呼んだ。
「忘れるな、貴様を倒すのはこの俺だ」
マントを翻した。
「その時間まで腕を磨いておけ、マントフェイド！」
マントで身体を包む。そしてその中へ消えていった。
「あいつ等までいるのか。これまでになく激しい闘いになるな」
一人残ったストロンガーは呟いた。
「そうか、今度はナイジェリアか」
トリポリの空港で滝は城と共にいた。
先に空へ行くのは滝である。これから欧州へ向かいそこから空路を乗り継いでアメリカへ向かう。リビアとアメリカの関係の為かなり面倒なコースとなっている。
「滝さんはアメリカですか」
「ああ、今度はＮＡＳＡの方へ行かなくちゃならないんだ」
「何かと大変ですね」
城は笑って言った。
「おいおい、それはこっちの台詞だぞ」
今度は滝が笑った。
「あの辺りは昔からゲルダムとかキバ一族とかの勢力が近かったからな。何かと大変だと思うが頑張ってくれよ」
「ええ、奴等を今度こそぶっ潰してやります」
黒い手袋を握り締めて鳴らしつつ城は言った。
「まあ近いうちにまた会えるだろう。その時は宜しく頼むぜ」

そう言うと滝は右手を差し出した。
「ええ、こちらこそ」
城も右手を出した。熱く固い握手が握り合わされた。

熱砂の騎士　　完

２００３・１０・２１

天空の覇王その一

天空の覇王

「・・・そしてストロンガーのデータは得られたか」
暗い部屋に響く声。砂漠でストロンガーを閉じ込めたあの声である。
「はっ、超電子のデータまでも」
戦闘員らしき声が木霊する。
「一号の技、二号の力、Ｖ３のバランス、ライダーマンの頭脳、Ｘの水中能力、アマゾンの敏捷性、そしてストロンガーの瞬発力。これで七人のライダーの能力を得られたか」
声は誰に話し掛けるでもなく語った。
「あとはスカイライダーの飛翔能力とスーパー１の多様性か。それを揃えてようやく完全な存在が産まれるのだ」
後ろを見る。そこには巨大な試験管があった。
その中の液体に浮かぶもの。それは人の形をした機械であった。
「あの男が誕生した時こそ我等が悲願の達成される日。それはもうすぐだ」
「たった今キバ男爵と鬼火司令が帰られました」
別の声がした。
「ほほう、早いな」
「ミャンマーで面白いものを見つけたと言っておられます。何でもダモン大佐の墓だとか」
「ダモン？」
その名を聞いて声はにやりと笑った。
「そしてキバ男爵達はその墓をどうした」
「遺体は白骨化していたそうです。墓から骨を持って帰られました」
「骨か、それさえあれば良い。面白い事になってきたぞ」
声は不気味な笑いを出した。それは部屋全体を支配した。

ペルー。かってインカ帝国が栄えた地である。スペインのピサロの侵略により跡形のなく亡ぼされた後スペインの植民地となった。十九世紀に独立した。スペイン系だけでなくインディオや彼等の混血メスティーソも多い。これは他の中南米の国家と同じである。日系人もいる。

この国の特色は国土のかなりの部分がアンデス山脈の高山地帯にあるという事である。北東部や東部に一部はアマゾン川やその支流となっている。人口の大部分は高山地帯に集中している。首都リマはインカ帝国の帝都クスコの跡地に建てられている。

マチュビチュ等インカ帝国の遺跡も残っている。それ等が物語っているのはこの帝国が極めて高度な文明を持っていたという事である。特に天文学や数学においては当時の欧州なぞ比べ物にならない部分もあった。アマゾンは彼等の文明により改造されている。このような高地にこれ程までの高度な文明があったという事は不思議ですらある。通常文明とは河川流域の平野部に発展する場合が多いからである。これは彼等が主食としたとうもろこしに関係があるのかも知れない。他にも日本で『仙人穀』と呼ばれるアマランサスというヒエ科の穀物もある。

この国にはそうした関係からインカ帝国の伝説が多い。黄金郷エルドラドもその一つである。インカ皇帝はスペイン人に対してこう言ったという。

「ここにある黄金は今私が手に持つ皿に入っているとうもろこしのほんの一粒に過ぎない」

これが本当なのかは皇帝だけが知っている。欲望に囚われたスペイン人達はアンデスを探しアマゾンを探したが遂に発見出来なかった。今も高原の何処かにその黄金郷はあるのかも知れない。だが欲に囚われた人にそれを見る事が出来ないだけで。

目に見える遺跡で最も謎に包まれているのはナスカの地上絵であろう。

この地上絵はナスカ平原にある。陸から見ても溝にしか見えない。

その溝が奇妙な線やカーブを描いているのが確認出来るだけである。この絵は空から見てその全貌が初めてわかるのである。

空から見るとまず蛸と人を合わせた様な奇妙な絵が山に描かれている。それから猿や犬、ハチドリらしきもの。中にはイソギンチャクの様な絵や二本の手らしきものを生やした謎の生物、鷺らしき首の異様に長い鳥・・・・・・・・。誰が何の目的でこれ等の絵を描いたのか誰も知らない。一説にはこの絵は宇宙からの来訪者達への目印となっていたとも言われている。

ではその来訪者とは一体誰なのであろうか。またその来訪者達はこの高原の文明と関係があるのだろうか。この謎を解明した者はいないし解き明かされるには多くの時間が必要であろう。

その上空を一つのハングライダーが飛んでいる。地上絵の上を優雅に飛んでいる。

それに乗っているのは赤いヘルメットを被った面長の東洋人の若者だった。

黒い目は細く一重である。眉は薄く鼻が大きい。肌はよく焼けている。赤いジャケットに青のジーンズを身に着けている。彼の名は筑波洋。空翔ぶライダー、スカイライダーである。

城南大学ハングライダー部に所属していた。彼が高校生の時両親と妹が事故により死んでしまう。だが彼はそれにめげず努力し正義感の強い心優しい青年となった。

ある日彼は謎の一団に襲われている男性を助けた。だがこの時彼は重傷を負い命を落としそうになる。彼の友人達はこの一団に皆殺しにされた。

この謎の一団の名をネオショッカーという。デルザー崩壊後闇に潜んでいた首領が新たに結成した組織である。地球の増え過ぎた人々を粛清し選ばれた優秀な者達で世界を支配するという選民思想を掲げていた。要するにこれまでの首領のイデオロギーをそのまま踏襲したのである。

天空の覇王その二

筑波が救った男は志度博士、ネオショッカーの科学者だったが組織の実態を知り脱走しようと図っていたのだ。

しかし身を挺して自分を救おうとしたこの青年に博士は心を打たれた。今度は自分がこの若者を救う番だと感じた彼は組織に戻り首領に言った。この若者を改造人間にしたいと。博士と筑波が組織に必要な人物になると判断した首領はそれを了承した。かくして改造手術は執り行われた。手術の時彼は怒りを覚えていた。ネオショッカーへの、自分の友人達を殺したネオショッカーへの怒りを。

手術は成功した。彼は改造人間として甦った。博士は彼に空を飛ぶ力と正義の戦士の姿を与えた。それは仮面ライダーの姿であった。

博士は正義の心を失ってはいなかった。そして筑波も。二人はネオショッカーを脱出し彼等との闘いを始める。世界各地から七人のライダー達も入れ替わり立ち替わり駈けつけネオショッカーとの死闘が展開された。遂にその正体を現わした首領との闘いにおいて彼は仲間達の協力を得て首領を銀河に葬った。首領の死を見届けた彼は日本を去り世界にはびこる悪との闘いに参加していった。

「凄いな、まさか本当にこんな絵だったなんて」

地上絵を見下ろしながら筑波は言った。

「飽きないな、何時までも見ていたいよ」

思わず呟いた。そこへ下から声がした。

「洋はーーん、気分はどうでっかーー?」

日本語である。しかも関西弁である。声の主は大柄で愛敬のある面白い顔立ちの日本人だった。

この人物の名を矢田勘次という。黒いジャケットと青のジーンズを着ている。筑波洋と常に行動を共にしてきた好漢である。

彼は改造人間ではない。普通の人間である。高校を卒業し大工をしていた。子供好きで正義感の強い兄ちゃんとして知られていた。

女にはもてないが男と子供にはもてた。一市民として幸せに暮らしていた。

だが彼はネオショッカーの存在を知る。悪い奴や曲がった事が嫌いな彼はネオショッカーをやっつけようと決めた。彼は実家の鎧兜を引っ張り出し自分の手で作り直した。そしてそれを身に着け正義の味方『がんがんじい』となったのだ。闘ううちにスカイライダーと合った。

黒く長い法衣を着た老人である。両手の袖は無数の切り込みは入っており風にたなびいている。長い金の髪と髭を生やし黒い翼が縁取りされた赤い仮面を着けている。右手に鳥の翼をかたどった杖がある。デストロンツバサ一族の長ツバサ大僧正である。

二百年前スイスに生まれた。彼の家は代々学者を出した名門であった。大学で優秀な成績を修めカトリックの僧侶となった。名家の出身で頭が良い為出世が早かった。若くして枢機卿となり将来は法皇の座も確実と言われていた。

だが彼はここで道を踏み外した。それまで他の僧侶達のよう世俗に染まる等ということは一切無かった彼であるがある異端派と接触してしまったのだ。

当時ローマ＝カトリック教会は異端を激しく弾圧していたが彼はその急進派だったのだ。これは彼自身の潔癖性から来るものであり特に彼が血を好んだというわけではない。むしろ彼は異端審問による冤罪を事の他嫌った程である。

その為彼は自ら査問に当たった。そして次々と異端者を火刑に処した。『死の枢機卿』と呼ぶ者すらいた。それを彼は誇りに感じていた。

異端派を弾圧するうちにその異端派について知るようになる。プロテスタントの系列もあれば土着の宗教と融合したものもある。その中にカニバリズムを強く持つ宗派があった。

キリスト教にはその儀式に隠されているものがある。聖餅をキリストの身体として、葡萄酒をキリストの血として食べ、飲む。

これはすなわち人の肉と血を食する事である。

人肉食は中国の話かというとそうではない。欧州にも古くからある。

古代ギリシアでは酒の神ディオニュソスの信者達は踊り狂い狂騒状態になると人を喰らったという。神話には自分の息子を引き裂き食い殺した母親の話がある。

ギリシアだけかというとそうではない。欧州は寒冷で食料に乏しく飢饉が多発した。その為飢えを凌ぐ為人を食っていたのだ。これは童話等に隠され語り継がれている。

また人の血を強壮剤と考えていた人々もいた。中国の作家魯迅は自身の小説『薬』に人の血を付けた饅頭を出している。これと殆ど、いや全く同じ話がフランスにある。革命前の貴族達は夜毎宴を開いていた。朝になると貴族達はある場所へ馬車を走らせた。行く先は処刑場である。

処刑は朝行われる。血が流れる。ドクターケイトの祖先もそこから生まれた。その死刑囚の血を貴族達は銀の杯に入れ飲んだのである。疲れを取る為だ。当時血は強壮の基と考えられていたのである。吸血鬼の話もあながち嘘とは思えないのである。こうして実際に人の血を飲む人々がいたのだから。

枢機卿が触れたのはこうした人の血を好む一派だった。当初は邪悪な異端者として徹底的の弾圧していた彼だが次第にその教えである人の血へ興味を持つようになった。丁度人が紅い葡萄酒を好むように。その欲望は次第に高まり抑えられなくなっていた。

天空の覇王その三

ある日彼は一人の異端者を殺した。ナイフで首を掻き切ったのだ。倒れたその死骸へ近付いた。そして傷口に口を当て血を啜った。身体中に信じ難い力がみなぎってくるようだった。

それ以降彼は人を殺しその血を吸うようになった。初めはナイフや斧で殺していたがすぐにその首へ直接噛み付くようになった。彼の歯は次第に狼の様になっていった。

そうした彼を部下達は恐れるようになった。遂に部下の一人がそれを時の法皇に密告した。

その話は法皇を震え上がらせるのに充分であった。彼はすぐに動き枢機卿を捕らえた。処刑しようと考えたが彼の才とこれまでの功績を惜しみ地中海の断崖にそびえ立つ古城に幽閉した。そこで枯死させるつもりだった。かってハンガリーに君臨した血塗れの伯爵夫人エリザベート＝バートリーと同じ方法を取ったのである。

しかし彼はすぐに脱出した。既に人でなくなっていた彼は空を飛び脱出した。そして遠くチベットまで逃れたのだ。

チベットで彼は新たな宗教を開いた。その名を卍教という。異端のカニバリズムとチベットの呪術を組み合わせた独自の邪教であった。

そこで彼はこの地を陰から脅かし続けた。権力者達が弾圧しようとすればその権力者は身体に血が一滴も残っていない干乾びた屍となって発見された。誰も彼等を抑えられなかった。

その力は首領も知っていた。そしてデストロンに誘ったのだ。首領の悪の力を知った彼はそれに従った。呪術を極めた魔人である。

「ツバサ大僧正、何故・・・！」

「ふふふふふ、私の名を知っているか」

ツバサ大僧正は誇らしげに笑った。

「御前は仮面ライダーＶ３に倒された筈、それがどうして・・・」

「それは冥土で教えてやる。今御前にここにいてもらっては困るのだ」
「何っ、それはどういう意味だ」
その言葉に博士は疑問を覚えた。
「冥土で教えてやると言った筈だ、死ねい！」
ツバサ大僧正が杖を振るうと戦闘員達が襲い掛かる。博士の命は風前の灯火と思われた。その時だった。
「待てっ！」
上空から声がした。一同空を見上げた。
そこにはライダーがいた。黄緑の仮面とバトルボディ、茶の腕と胸、赤い眼、そして黒の手袋とブーツを身に着けている。ベルトの左右には空を飛ぶ為の重力低減装置が付けられている。空を飛翔する天空の守護者、スカイライダーである。
「むうう、貴様は」
「人呼んでスカイライダー、行くぞツバサ大僧正！」
空を駆りツバサ大僧正へ突き進む。それを見てツバサ大僧正は杖を振るった。
「博士は後回しだ、先にスカイライダーをやれ！」
戦闘員達が天へ上がる。みれば背中に小型のヘリを着けている。
「まだだ、それだけではないぞ！」
また杖を振るった。すると三体の怪人が飛来して来た。
いずれも空を飛ぶ改造人間である。ショッカーの邪眼怪人フクロウ男、ゴッドの催眠怪人イカルス、ガランダーの白骨怪人モモンガー獣人の三体である。
「むうう・・・」
三体の怪人はたちまちスカイライダーを取り囲んだ。
「ふふふ、如何に貴様が空を飛べようと上や下からの攻撃には分が悪かろう」
ツバサ大僧正はニヤリと笑った。
「手加減する必要は無い、やれい！」

杖が振るわれると同時に怪人と戦闘員達が一斉に襲い掛かる。スカイライダーはそのい中心にいた。

「ホホホホホ」

フクロウ男が両眼から光を放った。

「むっ」

スカイライダーは上へ飛びそれをかわした。スカイライダーに後ろから攻撃をかけようとしていた戦闘員にその光が当たった。

「ギイイーーーッ！」

光が戦闘員の全身を映す。その中の骨を映した。

光が消えた。戦闘員は白骨となり地に落ちた。

「殺人レントゲンか」

フクロウ男はもう一度それを放とうとする。スカイライダーは一気に飛んだ。

「させん！」

今将に光線を放とうとする。その顔へ蹴りを放った。

「スカイキック！」

数多くの怪人を葬ってきた技である。それがフクロウ男の眼と眼の間を直撃した。急所であった。

「グオーーーーッ！」

蹴りを受け怪人は吹き飛んだ。そして空中で爆死した。

天空の覇王その四

「トゥルアアアア」
イカルスが口から緑の液を放つ。それが溶解液である事は一目瞭然であった。
下へ飛ぶ。そこへ怪人が突進して来る。しかしそれはイカルスではなくモモンガー獣人であった。
「へェアーーー」
それは急降下だった。スカイライダーの頭上へ向かい飛行膜に備え付けている爆弾を落として来た。
「危ない！」
かわそうとする。だが身に合わない。爆発の中へ消える。
「やったか」
いや、まだだった。爆発の煙が消えた時スカイライダーは獣人の頭上にいた。
「危ないところだった。だが俺は負けない！」
「ケアーーーッ！」
今度は口から白い煙を吐こうとする。だがそれより速くスカイライダーが来た。
「スカイスクリューキィーーーック！」
螺旋状に回転しつつ蹴りを放つ。撃ち抜かれた怪人はそのまま地に落ち爆発した。
怪人の中で一体だけ残ったイカルスが来た。その翼で切りつけんとする。見れば羽の一枚一枚が刃の様になっている。
それを高速で振り回して来る。斬られればライダーといえど無事では済まない。
「うおっ！」
その翼が顔をかすめた。頬が切られる。
だが余りにも大振りだった為隙が生じた。それを逃すライダーで

はなかった。
流れる動作で懐に入る。そして身体を左へ思い切り捻る。
捻る動きで身体の動きに速さが加速される。怪人の真横につく形となる。
そこで水平に怪人の胸へチョップを入れた。一撃ではない。二撃、三撃と入れる。
四撃目を入れた。それが怪人にとって止めとなった。
「水平回転チョップ！」
怪人から離れる。断末魔の叫びと共にイカルスは爆死した。
「むうう、三体の怪人を瞬く間に倒すとは・・・」
イカルスの破片が地に落ちるのを見つつツバサ大僧正は悔しそうに言葉を出した。
「ツバサ大僧正、今度は貴様の番だ」
戦闘員達もいなくなっている。怪人達との戦闘の間に全員倒されていた。
「フフフ、言うなスカイライダー」
ツバサ大僧正は笑った。人の笑いとは思えない残忍な笑みの笑いだった。
「この私がライダーごときに遅れを取ると思ったか。ならば直々に相手をしてやろう」
両手を思い切り広げた。そして杖をゆっくりと上へ掲げようとする。
「待てっ、まだその時ではない！」
下から声がした。ハッとツバサ大僧正の動きが止まる。
「ムゥッ！」
「その声は！」
大僧正とスカイライダーがほぼ同時に叫び下を見た。そこに声の主はいた。
「御前は・・・・・・」
「筑波君、いやスカイライダーと呼ぼうか」

声の主は表情を変えず言った。
全身をカーキ色と赤の軍服で包んでいる。軍服の肩には金モールがある。その事からこの人物がかなりの高位にある人物だとわかる。手袋とブーツは黒である。帽子も軍服と同じ色である。
右手には金属製のステッキがある。左手は人のものではなく金属製の二股のカギ爪である。
端正な顔は髭で覆われている。左目には眼帯が掛けられている。それにはヤモリの刺繍がある。ネオショッカーでその才を遺憾なく発揮した男、ゼネラルモンスターである。
ドイツ南部、バイエルンに生まれた。彼の家は下級貴族の家だった。プロイセンのユンカーとは違いそれなりに財もあり地位もあった。大臣をバイエルン王国の大臣を出したこともある。
彼もそのまま官吏になっていたかも知れない。だが時は不穏な風に支配されていた。
第一次世界大戦に敗北し戦勝国の要求する莫大な賠償に苛まれていた。街には孤児達が溢れ絶望感と敗北感に支配されていた。人々は腐敗し退廃的な遊戯に溺れ明日を省みる事無く生きていた。
その中に出て来た男がいた。男の名はアドルフ＝ヒトラー。狂気の独裁者であった。
その類稀な演説とカリスマ性によりヒトラーはドイツの権力への階段を駆け上がっていた。それを見た彼は決心した。この人物に付いて行こうと。
彼は親衛隊に入った。大学で法学を修めており将校に任じられた。本来は前線に行かなくとも良かったが突撃隊の粛清で彼は軍人としても優秀な能力を持っている事が解かり猛将として名を馳せたディードリッヒの下に入れられた。そして彼の下で軍人としての素養に磨きをかけた。
戦場において彼は優秀であった。冷静で常に的確な判断を行い軍を勝利に導いた。ディードリッヒは彼を信頼し常に側に置いた。
だが戦局はドイツにとって不利なものへとなっていった。ドイツ

軍は次第に敗北を重ね四方から追い詰められていった。
一九四五年四月彼はベルリンに配属される。その頃にはソ連軍が迫っていた。
そして彼は知った。ヒトラーが自殺した事を。四月三十日の事である。

天空の覇王その五

彼はそれ以上戦おうとはしなかった。ベルリンから姿を消すとそのまま行方をくらました。それ以後ドイツで彼を見た者はいない。

彼は何処へ行ったのか。中東にいた。この地にはナチスに密かに好意を寄せる者もいて彼等の支援の下多くのナチス党員がいたのだ。彼もショッカーのゾル大佐もその一人だった。

彼はエジプトへ入った。この地ではナチスの残党を追うモサドとの抗争が頻発していた。彼もそれに遭った。激しい死闘の末彼は左目を失った。

彼はそれでも倒れなかった。そして逆にそのモサドの工作員達を全員倒してしまった。

その彼を首領は誘った。元々ナチスで選民思想に染まっていた彼はそれに従った。以後彼はネオショッカーにおいて大幹部として君臨する。

その水際立った作戦指揮は組織内においても高い評価を得ていた。やがて彼は中東の責任者として南米を取り仕切る魔神提督と並び称されるようになる。冷静にして冷酷な男である。

「ゼネラルモンスター、貴様も甦っていたのか」

「この世に再び悪の世を作り上げる為にな。そしてスカイライダー、貴様を倒す為に」

地上に降り立ったスカイライダーを見据えた。

「あの時の敗戦、忘れた訳ではない。貴様はこの私の手で必ず倒す」

「・・・・・・・・・」

両者は対峙した。

「この場は退く。だが忘れるな。貴様等は今度こそ敗れるのだ。悪の手によってな」

そう言うやいなやステッキをこちらに向けた。その先から激しい銃撃を加える。

「ウォッ！」
それを手で弾き返した。通常の弾丸では倒れない。
「このナスカが貴様の墓場となる。それまでこの世との別れを惜しんでおけ」
ゼネラルモンスターは陽炎の中に消えていった。見ればツバサ大僧正も姿を消していた。
「ゼネラルモンスター、奴まで甦っているとは」
「ライダー、これは激しい闘いになるぞ」
後ろから博士が語り掛けてきた。
「はい、覚悟のうえです」
向こうからがんがんじいがやって来る。見れば彼も怪我をしている。どうやら戦闘員達と一戦交えたらしい。ライダーは変身を解き筑波洋に戻った。三人は合流し話を始めた。
それを遠くから見る影が一つ。茶の髪をしたコートの男だった。
「あれがスカイライダー・・・・・・」
男は一言呟くとその場を立ち去った。
「そしてそのまま撤退したというわけか」
地下基地の一室で荒ワシ師団長がゼネラルモンスターとツバサ大僧正に言った。
左右には中南米の神話に登場する様な怪物達の石像が並んでいる。中央には赤い絨毯が敷かれている。その奥には三席の椅子が置かれている。
そこに彼等は座っていた。中央がゼネラルモンスター、右が大僧正、左が荒ワシ師団長である。
「そうだ、戦力を消耗し過ぎたからな」
ゼネラルモンスターは落ち着いた声で答えた。
「そうか、まあいい。次の手は打っているか？」
「奴等の居場所は偵察済みだ。既に刺客を送っている」
「流石だな、動きが速い」
「兵は神速を尊ぶ。これ位は常識だ」

荒ワシ師団長の賛辞にも心を動かされない。
「今奴等にここでの計画を知られるわけにはいかぬ。何としても消えてもらわなくてはな」
「そしてそれが我等の野望の障害を排除することにもなる」
ツバサ大僧正が言った。三人はその言葉に頷き合った。
筑波達三人はテントの中にいた。食事を作りながら話し込んでいる。
「さあ出来たぞ」
博士が鍋を持って来た。中にはジャガイモと野菜、そしてスライスした牛肉がある。
それを白い御飯にかける。ペルーの料理ロモ・サルタードである。
「本当は焼いたジャガイモじゃなくてフライドポテトなんだけどね。生憎場所も設備も無くて」
「構いませんよ、美味しいですし」
「ほんまですわ。けど博士は料理が上手いですなあ」
「ははは、やもめ暮らしが長かったからね」
博士は笑いながら言った。実際博士は若い頃から研究一筋であり結婚する暇も無かったのだ。
「おかげで料理は上手くなったかな。独身貴族も悪くないよ」
「そんなもんですかなあ。わしはやっぱり女の子がいた方がええですわ」
がんがんじいが言った。見れば鎧を着ている。
「まあそれは人それぞれ。俺は空を飛べてればそれでいいし」
「洋さんはいつもそうでんな。空を飛ぶばかり考えてはる。ちょっとは地に足着けなはれ」
「おいおい、そうしたらスカイライダーじゃないぞ」
その言葉に筑波は苦笑した。
テントの中は和気藹々としていた。
そのテントを遠くから見る影達。ジャリッと砂を踏む音がする。
「あのテントだな」

一体の怪人が戦闘員に尋ねた。ドグマの忍者怪人カメレキングである。

天空の覇王その六

「はい、間違いありません」
戦闘員は答えた。
「よし、カメバズーカに連絡しろ。すぐに砲撃を開始しろと」
「はっ」
戦闘員はトランシーバーのスイッチを入れた。
「カメバズーカへ、こちらカメレキング。攻撃目標はS地点。早速攻撃を開始されたし」
「カメレキングへ、こちらカメバズーカ。了解した」
別地点、カメレキングのグループより高い地点にカメバズーカ達はいた。デストロンの砲撃用の改造人間である。
「攻撃目標はあのテントです」
戦闘員の一人が眼下にあるテントを指差しつつカメバズーカに言った。
「あれか、よし」
カメバズーカは屈んだ。ゆっくりと狙いを定める。
「照準よし、撃て！」
背中のバズーカから砲撃する。大砲が火を噴いた。
しゅるしゅると砲弾が音を立てて落ちる。そしてテントを直撃した。
「やったか！」
爆発四散するテントを見下ろし怪人は会心の笑みを漏らした。
「スカイライダーといっても他愛無い。このカメバズーカ様の砲撃の前には全くの無力だったな」
高笑いを出す。その時だった。
「それはどうかな」
後方、カメバズーカ達より高い位置の道の方から声がした。
「何ィ！？」

カメバズーカは声のした方を見た。そこにはスカイライダーがいた。
「な、馬鹿な、何故ここに・・・！？」
「スカイターボ！」
スカイライダーは叫んだ。すると何処からか一体のマシンがやって来た。
白く六角形のマシンである。スカイライダーはそれに飛び乗るとカメバズーカ達へ向けて突進して来た。
「イィーーーッ！」
戦闘員達が襲い掛かる。だがスカイターボはその戦闘員達を次々と弾き飛ばしていく。
「やらせん！」
カメバズーカが砲撃を加える。爆風がライダーとスカイターボの至近で次々に炸裂する。しかしスカイライダーはそれに怯まず突っ込んで来る。
「ライダーブレイク！」
前輪とカウルを唸らせ突撃する。驚異的なスピードでカメバズーカへ突進した。
「ゲハアッ！」
カメバズーカは吹き飛ばされた。かろうじて立ち上げるが肋骨が完全に折れ内臓も破裂していた。
「ぐ、何故だ、貴様はテントにいた筈では・・・・・・・・・」
口から血を漏らしつつライダーに問い掛けた。
「Ｏシグナルの存在を忘れていたな」
「Ｏシグナル・・・あれの事か」
Ｏシグナルとは怪人の接近の際警告を発する装置である。全てのライダーに備わっている。
「Ｏシグナルは変身前でも作動しているのだ。それに気付かなかったとは迂闊だったな」
「グググ、確かにな、この勝負俺の負けだ・・・・・・」

カメバズーカは地に倒れ爆発した。
「さてと、急ぐか。あいつだけでは心配だ」
スカイライダーはマシンに跨り駆けた。
「ええい、どかんかい！」
その頃がんがんじいはカメレキング率いる怪人達と闘っていた。
戦闘員達にはやはり強い。次々と薙ぎ倒していく。
「怪人は何処や、怪人はあ！」
「言われなくとも目の前にいる」
カメレキングが出て来た。
「ほお、御前がこの連中の親玉かい。相手に不足は無いわ、かかって来んかい！」
拳を振りかざし突進する。だが怪人はそれを冷静に受け止めた。
「馬鹿かこいつは」
片手で放り投げる。がんがんじいは背中から地面に叩き付けられた。
「普通の人間風情が俺に勝てるとでも思っているのか。さっさと死ぬがいい」
左手首を外す。それをがんがんじいに投げ付けようとする。その怪人を爆風が襲った。
「ぬううっ！？」
咄嗟に後ろを振り向く。ライダーかと思った。だがそれはライダーではなかった。
そこにはコートを着た東洋人がいた。スカイライダーとゼネラルモンスターの対峙を見守っていたあの男だ。
「貴様は・・・誰だ？」
怪人の問いにその男はゆっくりと口を開いた。
「インターポールより派遣された特別捜査官役清明、以後知っていてもらおう」
「役清明・・・そうか、ベイルートやカンボジアで我等の邪魔をしてくれた男か」

怪人は役をじろりと睨んだ。
「ここで会ったが幸い。仲間の仇、ここで取らせてもらうか」
口から剣を取り出す。そして役に近付こうとしたその時だった。
「それは俺を倒してからにしてもらおうか」
また後ろから声がした。この声は知っていた。
「くっ、ライダーか」
その予想は当たっていた。がんがんじいを守る様にライダーが立っていた。

天空の覇王その七

「行くぞ、怪人」
ライダーは構えを取った。怪人も剣を構える。
「ふん、貴様の首、ゼネラルモンスターへの手土産にしてくれる」
怪人が剣を振るった。それをスカイライダーは屈んでかわす。
「甘いっ」
手首を捻りそのぞ上へ振り下ろす。しかしそれはライダーの読み通りだった。
「甘いのは貴様だあっ！」
その手を掴んだ。そしてそのまま全身を高速回転させた。
「竹トンボシューーーートッ！」
怪人を投げ飛ばす。そして自らも飛んだ。
「スカイキィーーーーック！」
空中で怪人を撃つ。カメレキングは空中で爆死して果てた。
着地するライダー、そこへがんがんじいと役が歩み寄って来た。
「いやあ、流石やな、ライダー」
がんがんじいが称賛の声をかける。
「それ程でもないけど」
スカイライダーは謙虚に受け止める。
「がんがんじい、この人は？」
「この人でっか？ええっとお・・・・・・」
「インターポールの役清明です。宜しく」
そうい言って身分証明書を見せた。
「インターポール・・・・・」
その証明書はライダーも今までよく見てきたから知っていた。贋物ではなかった。
「インターポールが俺達に何か御用ですか？」
そういった時はいつもとんでもない事件の協力を要請される。

「はい、先程の連中についてです」
予想は当たった。博士も合流し話は始まった。
役は三人に話をした。その内容はこのナスカにおけるゼネラルモンスター達の目的であった。
「連中はここに基地を建設するつもりなのですか」
役の話を聞いてまず筑波が声をあげた。
「どうやら。しかもかなり大規模な基地のようです」
「このナスカ・・・という事は航空機を中心にした基地ですね」
「こんなところにでっか？」
「ここは人も少ない。隠れるにはもってこいだ。それに離着陸には絶好の目印もある」
「あ・・・・・」
筑波に言われがんがんじいは納得した。筑波はあの地上絵の事を差して言っているのだ。
「それにしてもこの様な山岳地帯で離着陸可能な航空機ですか。ヘリか何かですか？」
「それは解かりません。いや、より高度なものであると予想されます」
そう言って役は一枚の写真を取り出した。
「これは・・・・・」
それは円盤型の物体であった。空を飛んでいる。俗に言われる未確認飛行物体＝ＵＦＯだ。
「前にこの辺りで目撃されたものです」
「それが今回の奴等の行動と関連があると？」
「否定は出来ません。ネオショッカーの首領、いえこれまでの組織を陰で操ってきたあの首領は宇宙より来たのですから」
筑波はあの時のネオショッカーとの最後の闘いを思い出していた。あの首領は巨大な竜だったのだ。その姿は紛れも無く地球の知的生命体ではなかった。
「よく考えて下さい。今までの組織の技術には明らかに地球のもの

とは思えないものも多くありました」
それは三人共嫌になる程解かっていた。
「かって銀河王という存在もいましたね。宇宙から来てネオショッカーと共闘した」
「はい。宇宙に脱出する際爆死しましたが」
銀河王とは身体の殆ど全てを機械に改造した宇宙からの侵略者であった。
「そういった事を踏まえるとこの飛行物体は彼等のものである可能性が高いのです。現に彼等はここに航空基地を建設しようとしていますし」
「・・・ですね。連中のやるそうな事だ」
筑波は頷いた。
「すぐに奴等の基地を見つけ出さなくちゃな。完成してからじゃ手遅れだ」
「だとすれば話は早いな。奴等の野望を阻止しなくては」
博士が言った。
「洋はん、わてらも行きまっせ。三人で奴等の悪事を防ぐんや」
がんがんじいも同調する。そこへ役が口を挟んだ。
「三人じゃありませんよ」
「えっ！？」
「私も行きます。三人より四人の方が良いでしょう」
その言葉に三人は思わず顔を向けた。
「いいんですか、役さん。相手は改造人間ですよ」
「それも何で武装しているかわからない。命の保証は無いんだよ」
「そんな事はインターポールに入ってからすぐに叩き込まれましたよ。それがインターポールだとね」
筑波達に微笑んで言葉を返した。
「それならいいです。では行きましょう」
「おう、絶対奴等の悪事阻止したりましょ！」
四人の戦士達は出撃した。

博士が特別な機器を出して地質を調査する。先程地上絵の地質を調査する時に使った機器とはまた別のものだ。
「どうですか博士、何か解かりましたか？」
「うむ・・・」
機器のメーター等を見ながら博士は言った。
「この辺りは他の所に比べて温度が高いな。この辺りは高山地帯だしそれ程高くはない筈なのだが」
そう言いながら丹念にメーター等を見る。
「それも地下に行く程温度が高くなっている。それも急激に」
「と、いう事は基地は地下か」
「相変わらず土の下が好きな奴等やな」
がんがんじいが下の土を見下ろしながら言った。
「地上絵でもこんな状況だった。地上絵とここはあまり離れていない。多分この下辺りに基地がある」
「だとすればこの辺りに入口があってもおかしくないですね」
辺りを見回す。ふと黒い影が目に入った。

天空の覇王その八

「ん？あれは」
それを認め四人は頷き合う。岩陰に隠れつつ影が見えた方へ進んでいく。
「ここか」
見たところ単なる岩である。特別変わったところは見られない。
「む！？」
岩が動きだした。四人は岩陰に身を潜めた。岩が大きく開いた。何と岩の扉だったのだ。
戦闘員達が出て来た。そっと後ろから忍び寄る。
「ギッ！？」
戦闘員達が気付いた時にはもう遅かった。彼等は瞬く間に倒されてしまった。
岩の扉から中に入る。奥は機械化された路になっていた。
「暗い路だな、相変わらず」
「ほんまですな。進歩の無い連中や」
博士とがんがんじいがこそこそ話す。四人はその暗さの中に潜り込む様にして進む。
「あそこから光が漏れるな」
一行は光が見える方向へ進む。路を出た。そうすると急に視野が広がった。
そこは巨大な格納庫だった。周りに航空機を整備する時に使用される機械が立ち並んでいる。そしてあの写真に写っていたあれが。
「円盤か。やっぱりこいつ等の物だったか」
円盤を見て筑波は言った。目の前にあるものの他にも数機ある。
「はやいとこぶっ壊してしもうた方がええでんな。こんなん置いといたら後々えらいことになりまっせ」
「矢田君の言う通りだな。しかしどうやって。見たところ外はかな

り頑丈だぞ」
「そういう事ならお任せ下さい」
役は懐から何か取り出した。
「小型の爆弾です。これならエンジン部分に入れる事が出来ます」
「そうか、どんな優れた兵器もエンジンが破壊されたら終わりだ。それでいこう」
役はそれぞれ爆弾を受け取った。そして円盤のエンジン部分へ放り込んだ。
「よし、下がれ！」
四人は安全な場所まで下がる。暫くして円盤が次々に爆発していく。
爆発は誘爆を招いた。周辺の機器も爆発に巻き込んでいく。
「成功だな、これでこの基地は使い物にならない」
廊下の隅に隠れて四人はその爆発を見守っていた。暫くしてドカドカと足音が聞こえてきた。
「これはどういう事だ！」
ゼネラルモンスターであった。後ろに戦闘員達を従えている。
「円盤が何者かにより爆破されました！周辺の機器も全て爆発に巻き込まれました！」
戦闘員の一人が報告する。
「消火活動を急げ！さもないとこの基地の機能が全て失われてしまうぞ！」
「はっ！」
ゼネラルモンスターの指示の下戦闘員達は動く。消火器等をもって次々と火を消していく。ツバサ大僧正や荒ワシ師団長も手勢を連れて現われて来た。
「そうはさせるか！」
筑波達が飛び出していく。そして戦闘員達を次々と倒していく。
「ぬうっ、貴様等は！」
ゼネラルモンスター達は上の階から燃え盛る格納庫にいる筑波達

を憤怒の表情で見下ろす。それに対し筑波達は闘志をみなぎらせた目で昂然と見上げた。
「残念だったなゼネラルモンスター、最早この基地は使い物にならないぞ」
「おのれっ、カメバズーカ達めしくじりおって・・・」
「かくなるうえは貴様等の首でもって作戦失敗の罪を清めてやるわ！」
荒ワシ師団長が斧を振るう。すると二体の怪人が姿を現わした。
「カオーーオゥ」
「ガガガガーーー」
ゲルショッカーのガス怪人ガラオックスとブラックサタンの毒燐怪人奇械人ドクガランである。
「行けっ、奴等を討ち取ってやれ！」
二体の怪人が叫び声をあげる。戦闘員達が周りを取り囲む。
四人は構えを取った。顔が炎に照らされる。
「・・・行くぞ！」
筑波が叫んだ。構えを解く。その目が光った。

スカイ・・・
両手を肘から脇の下へ入れる。腰のベルトが出て来た。右手を前に突き出す。すぐに右手を引っ込め左手の平を肩の高さで前に出す。腕と胸がオレンジになる。胴と脚が黄緑のバトルボディに包まれる。
変身！
左手を手刀にし右から左へ思い切り旋回させる。黒い手袋とブーツが装着される。
左手を脇の下に入れ右手を左斜め上へ突き出す。顔の右半分を仮面が覆う。次に左半分を。
腰のベルトが回転する。光がライダーを包んだ。

「さあ来い改造人間！」
筑波はライダーに変身した。格納庫へ飛び降りてきた二体の改造人間と対峙する。
「イイッ」
戦闘員達がライダーへ襲い掛かろうとする。だがそれをがんがんじい達が防ぐ。
「雑魚はわい等に任せてや！」
「ライダーは怪人を！」
博士も拳を振るう。意外と格闘能力も秀でている。
「有り難う、よし行くぞ！」
ライダーは怪人達へ向かって行く。
ガラオックスが角を突き出して突進して来る。ライダーはそれを受け止めた。

天空の覇王その九

「スカイチョップ！」
連続してチョップを繰り出す。怯んだところに回し蹴りを入れる。
「ガオオーーーゥゥ！」
怪人は吹き飛ばされた。そして炎上する円盤に叩き付けられる。
「ガオーーーーーッ！」
その炎に巻き込まれた。断末魔の叫びをあげ爆死する。
「ガガガガーーーーッ！」
奇械人ドクガランは叫び声と共に背中の羽根から燐粉を発してきた。普通の人間ならば数秒で死に至らしめる猛毒である。
「皆下がって！」
ライダーが叫ぶ。戦闘員達をあらかた倒し終えていた三人はそれに従った。
「トオッ！」
ライダーは飛び上がった。そして空中でエックスの字を作り高速で回転する。
「スカイフライングソーサー！」
毒の粉はライダーが作り出した風によりかき消された。狼狽する怪人に対しライダーは急降下してきた。
「スカイキーーーーック！」
高速回転で威力を増した蹴りが怪人の胸をちょくげきする。さしもの奇械人も爆死して果てた。
「さあ、残るは貴様等だけだ！」
上にいる三人の大幹部を指差す。ゼネラルモンスターが前に出た。
「面白い、今度こそ倒してやるわ」
だがそれを荒ワシ師団長が制した。
「待て、ここは俺に任せろ」
「何っ、どういう事だ」

右目で師団長をじろりと見た。
「この基地は最早使い物にならん。貴様とツバサ大僧正は残った人員を集めて撤退の指揮を執れ。ライダーは俺が食い止める」
「いいのか？」
「フン、俺はデルザー軍団で『砂漠の死神』と恐れられた男だ。悠然とライダーの首を待っているがいい」
「・・・よし、わかった」
荒ワシ師団長の言葉にゼネラルモンスターとツバサ大僧正は頷いた。
「この基地は放棄する。我々は残った人員をまとめ撤退を指揮する。後詰は貴様に任せる」
「それでいい」
師団長は満足そうに首を振った。
「だが中南米での作戦は続行する。コロンビアで落ち合おうぞ」
「分かった、コロンビアだな」
「吉報を期待する」
ゼネラルモンスターとツバサ大僧正はその場を退いた。後に僅かに残った戦闘員達が続く。
「むうっ」
ライダーは追おうとする。だがその前に荒ワシ師団長とその配下の戦闘員達がはだかる。
「貴様の相手はこの俺がしてやろう」
斧と盾を構える。その周りを戦闘員達が固める。
「デルザー改造魔人の力、とくと味わうがいい」
「何を、返り討ちにしてやる！」
斧と拳がぶつかり合う。役やがんがんじい達も闘いに加わる。
「スカイキィーーーーック！」
空中にジャンプし蹴りを繰り出す。しかし荒ワシ師団長はそれを背中の翼で飛び上がってかわした。
「何だ、その蹴りは。狙ったつもりか？」

空中で羽ばたきつつ不敵に笑った。
「そういえば貴様も空が飛べるのだったな。面白い、空を貴様の墓標にしてやる」
格納庫の奥が開いた。そこから青い空が見える。
「来い、この大空で貴様の首を叩き落としてやろう」
そう言うと空の方へ飛んでいった。
「何を、空の闘いなら俺も！」
スカイライダーも飛んだ。首の長く赤いマフラーが格納庫に入って来る突風にあおられる。
「ライダー！」
博士達が叫ぶ。戦闘員達も彼等との闘いを止め次々と空へ舞い上がる。
「くっ、後は頼んだぞ」
博士は格納庫の奥を見た。そこには空中でデルザーの改造魔人と対峙するライダーがいた。その周りを戦闘員達が舞う。
「させん！」
四方八方から襲い来る戦闘員達をはたき落とす。空を両脇の下の羽根を使って飛ぶ彼等は特に武器を持っていない。所詮ライダーの敵ではなかった。
「フン、空中でも力は落ちんか。流石だな」
荒ワシ師団長は残忍な笑みを浮かべた。
「だがその程度では俺は倒せん。死ねえぃっ！」
斧を投げ付ける。斧は激しく回転し空を切り裂く音を立てながらスカイライダーに向かう。
ライダーはそれをかわした。だが斧は弧を描いて曲がりこちらに再び向かって来る。
「まだだ、それだけではないぞ！」
腰からもう一本斧を取り出す。そしてその斧も投げ付けた。
二本の斧がライダーを襲う。それに飽き足らず荒ワシ師団長は次々と斧を投げてくる。

「くっ、これは・・・・・・」
流石にライダーもかわすだけで手が一杯である。そうしている間に敵は次々と斧を放ってくる。
「フォフォフォ、どうだ俺の斧捌きは。そうそう避けきれるものではあるまい」
「くっ・・・・・・」
その通りだった。これ以上斧の数が増えると危険だった。荒ワシ師団長はまた腰に手を持っていった。
「まだだ、まだ終わらんぞお！」
なおも斧を投げて来る。その斧がスカイライダーの肩をかすめた。
「うぉっ！」
思わず身構える。だがそこへ後ろから別の斧が来る。
「くっ！」
空中でバク転をする。この時無意識に足で数本の斧を叩き落とした。この時足が起こした風に斧が巻き込まれた。

天空の覇王その十

（んっ！？）

この時ライダーの脳裏に何かが閃いた。

「ほう、斧を落としたか。だが斧はまだまだあるぞ」

自分の技に絶対の自信があるのだろうか。荒ワシ師団長は気付いていなかった。スカイライダーは勝機を見た。

（・・・いける！）

「喰らえっ、全ての斧を叩きつけてやるわ！」

荒ワシ師団長は自分の持つ全ての斧を投げ付けて来た。空中を旋回する斧が全て四方八方から襲い来る。逃げ場所は無かった。

「死ねえい、スカイライダーよ！」

「俺は・・・死なない！」

ライダーは胸のところで両腕をクロスさせた。そして全身を高速で回転させた。

「スカイドリル！」

回転によりライダーの周りに竜巻が生じる。その威力は凄まじく全ての斧を巻き込んだ。

「おおっ！」

これには荒ワシ師団長も息を呑んだ。斧は全て竜巻に飲み込まれ破壊されてしまった。

「これどもう斧は使えまい、今度はこちらから行くぞ！」

肩から体当たりをぶつける。それに荒ワシ師団長は体勢を崩した。

「とおっ！」

蹴りを放つ。それを盾で受け止める。だが盾はその衝撃に耐えられなかった。

盾が吹き飛ばされる。そのまま地に落ちていく。

「おのれっ！」

呪詛の声を出す。しかしもう盾はその手には無い。

「でやあっ！」
空中で掴んで投げる。しかしこれは体勢を立て直される。しかしこれにより間合いが開いた。
「うおおっ！」
ライダーが吼えた。師団長へ向けて突進する。
空中で激しく回転する。まるで駒の様である。
「ちいいっ！」
しかしそれは荒ワシ師団長にかわされる。よけた、そう思った時だった。
「な、何ィッ！？」
何とライダーは空中で旋回した。先程自分が投げ続けた斧と全く同じ動きだった。
その速さ、その威力、如何に荒ワシ師団長とて避けきれるものではなかった。
「大回転・・・・・スカイキィーーーーック！」
高速回転しつつ蹴りを放つ。それは荒ワシ師団長の腹を直撃した。
「グワァーーーッ！」
荒ワシ師団長は絶叫した。そしてきりもみしつつ地に落ちていく。
下はナスカの地上絵だった。その上へ肩から落ちた。
「ぐふっ・・・・・」
嘴から血を吐いた。かなりの重傷である。だがまだ生きていた。
「大回転スカイキックを受けてまだ立てるのか、何という生命力だ」
着地してスカイライダーは言った。そしてすぐに構えを取った。
「侮るな、俺は砂漠の死神とまで呼ばれたデルザーの改造魔人、これしきで倒れる筈が無い」
しかし生きているのが不思議な位の傷だった。戦闘能力を喪失しているのは誰の目にも明らかであった。
「そうか、ならばその誇りと共に葬ってやる」
脚に力を入れる。そこへ銃弾が襲い掛かる。
横に飛びそれをかわす。ゼネラルモンスターの銃弾ではなかった。

「誰だっ！」
ライダーは叫んだ。それに対し何処からか声がした。
「荒ワシ師団長は倒させぬ」
自信に満ちた声だった。その声だけでも声の主が相当な実力者である事がわかる。
「ぐっ、その声は・・・・・・」
荒ワシ師団長にはその声の主が誰か知っているようである。
「悪いが・・・その言葉に甘えさせてもらうとするか」
懐から一つの球を出した。それは煙球であった。それを足下に投げ付け煙の中に消えていった。
「くっ・・・逃げられたか」
ライダーは忌々しそうに舌打ちした。
「フフフ、悔しがる必要は無いぞ、スカイライダーよ」
声がまた言った。
「もうすぐ我等が世界を支配する時が来る。その時に貴様等は全員我等の軍門に降る事になるのだからな」
「ほざけっ、誰が貴様等などに！」
ライダーは叫んだ。しかし声の主はそれに対して嘲笑で返した。
「それはもうすぐ解かる事だ。我等が生み出した絶対なる破壊神によってな」
「破壊神！？」
その言葉を聞いてライダーの様子が変わった。

天空の覇王その十一

「それは後のお楽しみだ、ハハハハハ」
声の主の気が遠のいていくのがわかった。
「待てっ、逃がさんぞ！」
セイリングジャンプで飛ぶ。だが眼下には誰もいなかった。
「逃げられたか・・・・・・」
悔しそうに地に降りるライダーそれを見る影が一つ。
「破壊神・・・もしや・・・・・・」
役だった。一言呟くと何も無かったように変身を解いた筑波の前へ現われた。博士とがんがんじいも出て来た。
「役さんはもう行ったか」
ナスカの近くにあるイカの空港で筑波は遠く離れ見えなくなった一機のセスナを見つつ言った。
「ああ、日本へ行くらしい。気になる事があるとかで」
筑波と同じようにそのセスナを見上げつつ博士が言った。
「ということは日本でも連中が暗躍しているのか？」
筑波は危惧を覚えた。
「その可能性もあるな。どうやらかなり大きな組織が動いている」
博士はそう言うと髭を生やした顔を暗くした。
「連中の力はここの基地程度ではない筈だ。現に役君の話ではシンガポールに基地を建設する計画も実行に移していたようだしな」
「それは聞いています。風見さんがそれを防いだそうですね」
役から聞いたシンガポールでの死闘の話を思い出していた。
「その時はデストロンの大幹部だったドクトルG達が指揮にあたっていたらしい。その他にもベイルートやカンボジアでも暗躍していた」
「あのネオショッカーをも遥かに凌駕する組織ですね」
「おそらくな。これから辛い闘いになるだろうな」

博士が深刻な顔で語った。
「けどそれはいつもの事やおまへんか」
それに対しがんがんじいが場違いな程明るい調子で言った。
「がんがんじい・・・・・・」
「矢田君、そうは言っても・・・・・・」
筑波と博士が呆れて窘めようとする。しかし彼はそれも踏まえてあえて言ったのだ。
「いくら敵が強かろうとわい等の目的は一つや。悪を倒す、そうでっしゃろ。あのドグマやジンドグマとも闘ってきたんでっせ。今更何言うてますんや、敵が強かったらその分わい等も強うなって頭も使えばええんや、闘う前から弱音言うとったら勝てるもんも勝てやしまへんで」
「・・・・・・・・・」
その言葉に二人は黙った。
「そうだな、がんがんじいの言う通りだ」
筑波が顔を上げた。
「我々は少し弱気になっていたようだ。それではいけないな、我々が闘わなくてはいけないのに」
「解かってくれはりましたか」
がんがんじいは二カッと笑った。
「ああ行こうぜ、コロンビアへ。連中がてぐすねひいて待ってくれてるぜ」
「そうでなくてはな。こちらもやりがいが無い」
「さあ行きましょか」
三人はセスナに乗り込んだ。プロペラが回りだし滑走路を走りはじめた。そして空高く舞い上がった。

天空の覇王　　完

2003.10.30

宙への港の電人その一

宙への港の電人

アメリカ・フロリダ州。この州はアメリカ南部に位置し地域性の強いアメリカにおいても独特の雰囲気を持っている。キューバからの移民が多く、とりわけマイアミはキューバ系アメリカ人達が多い事で知られている。通称リトル＝ハバナとも言われている。州都ジャクソンビルは北部にあり南北で雰囲気がかなり異なっている。

この州が世界的に有名である理由は州の丁度中央部、東海岸大西洋のすぐ側にあるケネディ宇宙センターが置かれているからである。ケープカナベラルという都市からすぐの場所にあるこのセンターはスペースシャトルの発射を行う事からＮＡＳＡの宇宙関係の施設の中でもとりわけ有名である。

このセンターに向かう一台のジープがあった。乗るのは一人のアジア系の若者。赤いシャツの上に白いジャケットを羽織り黒いズボンを履いている。滝和也である。

「しかしリビアから帰ったと思ったら早速任務とはね」

ジープを運転しながらぼやいている。

「アメリカ国内つったってフロリダ半島じゃねえか。ニューヨークからどれだけ離れてると思ってんだよ」

溜息混じりに苦笑した。

「まあ良いけどな。若い奴をあまり危険な目にあわせたくはねえ」

そうこう言っているうちにケネディ宇宙センターの正門に着いた。身分証明書を見せジープで中に入る。

中は最先端の技術とコンピューターを満載した施設で満たされていた。白衣を着た科学者や技術者、その手伝いをする者達が動き回っている。白人だけではない。アジア系や黒人も多くいる。

「流石は宇宙開発の中心地の一つだな。色んな国から優秀な人材が集まっている」

ジープお駐車場に止めある施設に入る。そこは月面開発センターであった。

入口にはガードが立っていた。警備にも細心の注意を払っているこの宇宙センターであるがこの施設はとりわけ警備が厳重である。

「よっぽど重要な研究をしているんだな」

滝はそう思った。科学者の一人に案内され中に入る。応接間に案内された。

「ようこそ、ケネディ宇宙センターへ。お待ちしていました」

そこには一人のアジア系の青年が待っていた。

耳を半ばまで隠した少し癖のある黒髪にやや長い顔、太く濃い眉に穏やかな黒い瞳。白衣とクリーム色のズボンの下からでも科学者には似つかわない鍛えられた身体が見える。彼の名は沖一也、仮面ライダースーパー1である。

国際宇宙開発研究所の科学者であった両親の下に生まれた。両親は彼が幼い頃に事故で亡くなった。身寄りの無い彼を両親の親友であったヘンリー博士が引き取った。妻も子も無い博士は彼を実の子同様に可愛がり育てた。

成長するにつれ彼は自分の両親について考えるようになった。そしてその夢を知り息子である自分がそれをかなえようと決意した。

彼は大学を卒業後アメリカ国際宇宙開発研究所に入った。そしてヘンリー博士の助手として研究を続けた。

研究を進めるうちにある計画が立案された。惑星開発用に改造人間を作ってはどうかという案であった。

その案は実行に移され何人か候補者が挙げられた。それに自ら志願したのが沖一也であった。

彼の育ての親であるヘンリー博士はそれを認めた。彼の強い決意に心打たれたからだ。改造手術の執刀は博士自ら行う事となった。

手術は成功した。彼は惑星開発用改造人間第一号、コードネーム“スーパー1”として生まれ変わった。博士は彼に未知の惑星を探索する際の諸問題に対応すべく五つの技能を備えた腕を与えた。二

人はこれからの人類の輝かしい未来と夢を担うべく固く誓い合った。
その彼を狙う者達がいた。その名はドグマ。ネオショッカー壊滅後に現われた謎の組織である。自分達を闇の王国と名乗り選ばれた優秀な者達だけによる理想郷を創ろうとしていた。彼等は守護神としてカイザークロウという存在を崇拝していたが帝王テラーマクロの出身がネオショッカーまでの組織を操っていたあの大首領と同じであり、しかもその後ろにいる存在であった為あの首領そのものではなかったか、という説もある。
彼等はスーパー1のその力に目をつけたのだ。そして国際宇宙開発研究所に尖兵を送り込んだ。スーパー1を差し出す事を要求する為に。

だがヘンリー博士はそれを断った。自分達の夢を、そして今まで我が子として育ててきた沖一也を悪の手で利用される事をどうしても許せなかったのだ。

それに対しドグマの返答は『死』だった。博士をはじめ研究所にいる者を皆殺しにした。その後で研究所を跡形もなく破壊し尽くした。彼等に逆らう者には死、あるのみだった。

沖の目の前で博士も同僚達も殺された。一人生き残った沖は為す術が無かった。スーパー1に変身する事すら出来なかったのだ。

宇宙への夢も絶たれた彼はドグマと闘う決意をする。それから半年。赤心少林拳の下で修業を積んだ彼は変身の呼吸を身に着ける。同時に赤心少林拳の技を会得しその技と博士が授けてくれた五つの腕でドグマと闘う。

彼は一人ではなかった。少林拳の玄海老師弁慶、そして谷源次郎達。彼等仲間達の協力も得てドグマと闘っていく。そして遂にドグマを滅ぼした。

だがそれで終わりではなかった。ドグマの帝王テラーマクロと袂を分かっていた悪魔元帥とその部下達が新たな組織『ジンドグマ』を結成し世界征服に向けて動き出していたのだ。その後ろにはやはりあの首領がいたとも言われている。その証拠の一つとして悪魔元帥の出身もまた大首領やテラーマクロと同じなのである。彼は気付いていなかったが彼もテラーマクロも首領の分身の一つだったかもしれない。

新たな敵と対峙するスーパー1．だが彼を助ける頼もしい助っ人が現われた。

それはジュニアライダー隊。子供達は非力ながら果敢に世を乱さんとする悪に立ち向かっていった。

ジンドグマとの闘いも熾烈なものだった。しかし悪魔元帥を倒し

ジンドグマを滅ぼした。全てを終えた彼は自分の夢を実現する為に宇宙へ旅立ったのだ。

「丁度三ヶ月前に地球へ帰って来たんですよ。それまでミールにいました」

滝にコーヒーを勧めながら語った。

「へえ、ミールか。地球は見られたかい？」

「ええ。青かったですよ、とても。おっと、これはガガーリンさんの受け売りでしたね」

沖はそう言って笑った。屈託の無い爽やかな笑いである。

「ははは、そうだったな」

それには滝もつられて笑った。

「宇宙には無限の可能性があります。人間はそこに限り無い夢があるんです」

そう語る沖の眼は澄んでいた。まるで少年の様な瞳である。

「ああ、人間が宇宙へ旅立つ時代は近付いている。それは俺も感じている。あそこには果てしない希望がある」

滝は顔を見上げた。その眼は遠い宙を見ていた。

「だからこそそれを踏み躙る事は許せません」

沖の顔が険しくなった。

「・・・もうそっちにも話はいっていたのか」

「はい、インターポールの役さんから」

「そうか、だったら話は早いな」

滝の顔からも笑みは消えた。二人は宇宙から話題を変えた。

その頃センターの施設に隠れるようにして蠢く影があった。そしてマンホールを開けると中に入った。重いマンホールが閉じられる音がした。

影は下水道を通って行く。そして壁のある部分に近付くとそこを押した。壁が開いた。

その中に入った。そして壁を閉める。

暗く狭い道だった。その闇の中に影は溶け込んでいた。

影は進んだ。そしてその暗い道の果てに辿り着くとそこの壁を押した。
壁を押すと中に入った。中は赤い光に照らされた廊下だった。
廊下を進むと広い部屋に出た。そこは作戦室だった。一人の男が立っていた。
「何か変わった事は無かったか」
銀の兜と鎧、服に身を包みその上にギリシア風の赤い服とマントを身に着けている。白いその顔には髭がたくわえられており腰には剣がある。ドグマの最高幹部であったメガール将軍である。

宙への港の電人その三

かっての名を奥沢正人という。日本人の科学者であった。沖一也と同じく宇宙開発に従事する青年であった。抜群の記憶力と理知的な思考により将来を約束される程の優れた人物であった。いずれ宇宙開発の中心人物になるとまで言われていた。

これは公にはされていなかったがスーパー1以前にも宇宙開発用の改造人間を作り出す計画はあった。そして実行されていた。その計画に自ら志願したのがこの奥沢正人であった。

彼にとって不幸であったのは改造手術を執り行なったのがヘンリー博士ではなかった事である。そして最初の改造であった為何のノウハウも無かった。結果として改造は失敗し彼の改造後の姿は二目と見られぬ醜いものになってしまった。

彼は国際宇宙開発研究所を逃げる様辞めた。そして世に絶望して自ら死を選ぼうとした。その時だった。

彼の目の前に一人の老人が現われた。その名はテラーマクロ。彼の力を認め自らの組織に誘ったのだ。

その誘いに彼は従った。もう普通の世界には住めないという事は自分自身が最も良くわかっていた。こうして彼は闇の王国に入った。

ドグマにおいて彼は大幹部の一人に列せられた。その冷静沈着な指揮と理知的な頭脳により次々に功をあげた。そしてテラーマクロの片腕とさえ言われるようになった。

テラーマクロと悪魔元帥が対立し組織が分裂した時には他の幹部達の誘いも断りドグマに残った。自らを拾ってくれたテラーマクロへの恩義の為である。

ドグマの最高幹部として彼は常に陣頭で指揮を執った。冷静で理知的な男である。

「はい、リビアより滝和也が来ました」

「そうか、やはり来たか」

その報告にメガール将軍は静かに頷いた。
「どうやら我々の存在を感づいている様だな。そうでなければここまでは来ない」
「如何なさいます？」
戦闘員が尋ねた。
「魔神提督に伝えよ。まずはスーパー1を誘き出し宇宙センターから離してくれと。それから磁石団長にも連絡してくれ」
「はい」
続けて指示を出す。
「スーパー1が宇宙センターを離れた後に襲撃をかけるようにと。それまでは自重して欲しいとな」
「わかりました」
戦闘員は敬礼し退室した。将軍は作戦室のモニターに映し出された宇宙センターとその近辺のマップを見た。
「スーパー1は手強い、周到に策を練らねばな」
そこに映されているこちらの戦力の配置も視野に入れつつ呟いた。
「今度は負けん・・・・・」
将軍はまた呟いた。暗い部屋にその全身がシルエットの様に浮かび上がっていた。
滝と沖は宇宙センターの中を見て回っていた。敵の襲来時に何処に潜みそうか、何処から来る事が予想されるか、実際に見て把握しておく為だ。
「こうして見ると広いな、ここは」
滝はジープを運転しながら言った。
「だから見学ツアーなんかはバスを利用するんです」
沖はバイクに乗っている。流石はライダーの一員である。
「そうか、アメリカならではだな。それにしても沖よお」
滝は横目で沖のバイクとちらりと見ながら言った。
「何でしょう？」
「ハーレーダビットソンとはまたえらく派手なもんに乗ってるな」

白を基調としたかなり大型のバイクである。横にもかなり大きく重量が凄そうだ。

「これですか？ハーレーじゃないですよ。Ｖマシンっていうんです」

沖は笑って言った。

「そうか？外見なんかＦＬＨ１３４０にそっくりだけれどな」

「ヘンリー博士が開発してくれたんです。俺の為にって」

微笑んでそう語った。

「ヘンリー博士？ああ、宇宙開発の権威の。確か御前さんの育ての親だったな」

「はい。宇宙開発には補助のマシンも必要だって言ってくれて。凄いんですよ、無線機やレーダーまで搭載していますから」

「おいおい、そりゃあ凄いな。まるで動く基地だな」

「宇宙には何がいるか分からないからって。俺の為に寝る間も惜しんで開発してくれたんです」

遠くを見る様な優しい目で語った。

「・・・・・そうか、いい人だったんだな」

それを見た滝の顔も優しいものになった。

「ええ。身寄りの無くなった俺を男手一つで育ててくれましたしね。あの時の暖かさは今でも憶えていますよ」
「・・・・・・・・・それはいいな。大切な思い出だろう」
「はい・・・・・・・・・・」
滝は思った。彼のその澄んだ目と夢を諦めない心は博士の慈愛によるものだと。素晴らしい人との出会いが彼の人間性を形作ったのだ。
「だからこのセンターは絶対守りますよ、命にかえても」
沖は顔を引き締めた。
「ここには博士の夢が残っているんです。人類を宇宙に旅立たせたいという博士の夢が」
「・・・・・・だな、俺もそれに微力だけど協力させてもらうぜ」
「・・・・・・はい。ん!?」
Vジェットのレーダーが反応した。その時だった。何者かが二人を迫撃して来た。
「むうっ!」
滝はジープを左右にドリフトさせそれをかわした。沖のVマシンもそれに続く。
だが敵の攻撃は執拗だった。Vマシンが爆発に巻き込まれた。
「沖ィ!」
滝が叫ぶ。だが沖もVマシンも無事だった。爆煙の中から彼は出て来た。
しかしその姿は変わっていた。Vマシンは翼を広げた様な形に変形しており沖も変身していた。
銀の黒い模様が入った仮面、赤く細めの両眼に黒いバトルボディ。仮面と同じく銀の胸と手袋、そしてブーツ。五つの腕を持つライダー、仮面ライダースーパー1である。

「あれがスーパー1か」
滝はジープを止め後ろを振り返りつつ呟いた。話には聞いていたがその目で見るのは初めてだった。
「噂に違わず格好良い奴だな。さてどんな闘い方を見せてくれるんだ？」
スーパー1は両腕をその胸の前でクロスさせた。
「チェーーーンジ、エレキハァーーーンド！」
腕が光る。腕が銀色から青く変わっていた。その青い腕は甲の部分が金色で五色のメーターが着けられていた。
「エレキ光線！」
左腕から電撃を放った。それは砲弾が飛来してきた方向へ一直線に飛んで行く。
「ギエエッ！」
戦闘員の一人が爆発に吹き飛ばされる。迫撃砲も一緒だった。
「あいつがやったのか」
それを見て滝は言った。
「そうですね、奴の他にもここに潜り込んでいるかも知れませんよ」
ジープの横にVマシンから変形したバイク、Vジェットを並べて言った。
「虱潰しに探すか？ガードにもえらく負担をかけるな」
「いえ、その必要はありません」
スーパー1は静かに言った。
「？どうするんだ？Oシグナルでもこんな広い基地全部は無理だろう？」
「これを使います」
スーパー1は再びその両腕を胸の前でクロスさせた。
「チェーーーンジ、レーダーハァーーーンド！」
今度は腕が金色に変わった。甲にレーダーが着けられミサイルが装着されている。
「行けっ！」

両腕のミサイルをそれぞれ別方向に発射した。二つのミサイルは天高く飛んでいった。
「・・・・・・・・・」
スーパー1は両手の甲のレーダーを見ている。右手のレーダーに反応があった。
「敵はこのセンターの中にはいません」
「そうか、奴はただの鉄砲玉だったか」
その言葉を受けて滝は安堵した。
「しかし敵はこのセンターの外にいます。ここから少し離れた場所です」
「そうか・・・数はどれ位だ?」
「・・・多いですね。二十は越えています。エネルギーが大きい奴も混ざってますから怪人もいる様です」
「成程、奴等正面から攻撃を仕掛けるつもりか」
その報告を聞いて滝は眼を光らせて言った。
「そうそう奴等の思い通りにさせてたまるか。こちらから出向いてやっつけてやる」
「そう言うと思いましたよ。では行きますか」
「ああ、行こうぜスーパー1」
「はい」
二人の戦士は戦場へ向けてマシンを進ませた。爆音を轟かせてセンターを後にした。

宙への港の電人その五

「さて、と。わしの仕事はスーパー1を倒す事だが」
センターから離れた荒野である男が呟いた。その周りには怪人や戦闘員達がいる。
「何かメガール将軍の思惑通り動いている気がするのう。まあ功績はわしのものになるからいいのだが」
全身を金色の鎧兜で覆っている。兜には水牛のものを模したと思われる角がある。鎧には髑髏と蛇のレリーフが彫られており鎧の下に黒い服を着ており赤の手袋とブーツ、そしてマントを身に着けている。ネオショッカーで大幹部を勤めていた男、魔神提督である。
ブラジルに生まれた。家はリオデジャネイロの日系人の漁師だった。食べるものには困らなかったが家族が多くあまり裕福と言えなかった。長じて手に職を就ける為軍に入った。海軍だった。
最初は兵士だったが上官に勧められ兵学校の試験を受けた。見事合格した。
兵学校卒業後船に乗り込み軍歴を重ねた。アマゾン川での任務において不審な船を次々と捕まえ功績を挙げた。これ等の功により若くして将官となった。
それからもアマゾン川の賊の掃討に従事していたがある時船を沈められた。他の者を助ける為最後まで船に残った。これにより船の乗員はほとんど助かったが彼は船と運命を共にした。
だがその彼を助けた者がいた。ネオショッカーの首領である。組織設立の為に優秀な人材を欲していた首領は彼の命を救った。そして組織に入るよう誘った。
当初は悩んだ彼であったが既に戦死扱いされているのと命を助けてもらった恩から組織に入る事を承諾した。後その目的を知るが野心も備えていた彼はその野望に賛同した。それが彼の運命を大きく変える事となった。

中年米を任されその全てを取り仕切った。彼の力により中南米は仮面ライダーアマゾンと互角の闘いを演じた。その後日本に渡りスカイライダーと闘う。剣や機械を得意とし様々な密謀を得意とする不死身の魔人である。

「後は磁石団長がどうやるかだが。心配だのう」

腕を組みながら一言漏らした。

「あいつは血気にはやり過ぎる。迂闊な事をせねば良いが」

顔を顰め考えを巡らす。どうももう一方が気になって仕様が無い様だ。

「あ奴だけ責を問われるなら良いがわし等にまで責が及びかねん。それでも岩石男爵よりはずっとましだが」

そうこうぶつぶつと言っている間に偵察に出していた戦闘員が戻って来た。

「魔神提督、スーパー1が来ました」

「ほう、来たか」

声をあげる。目の前から赤い砂塵が二つ上がっている。一つは滝のジープのもの、そしてもう一つは青いマシン、スーパー1のブルーバージョンだ。

「よく我々がここにいる事がわかったな、スーパー1」

「貴様等の行動、この腕により全てお見通しだ」

腕を構える。銀の腕だ。

「ふむ、噂に違わぬ切れ者よの。ではわしの名も知っておろうな」

「ネオショッカーで悪名をはせた魔神提督、知らないとでも思ったか」

「ふふふ、その通りだ。だが貴様は一つ大事な事を知らぬな」

「何？」

魔神提督はスーパー1を見て不敵に笑った。

「わしの名を聞き、姿を見た者は必ず死ぬ運命にあるのだ」

そう言いつつ腰から剣を引き抜いた。

「今からその意味を教えてやる。さあ死ぬがいい、ライダーよ！」

剣を突きつけ宣言する。彼の左右にいた怪人と戦闘員達が動き出した。

「ブルルルルルルル！」

ショッカーの冷凍怪人トドギラーが来た。まず拳を繰り出す。

「フンッ！」

スーパー1はそれを赤心少林拳の受けで防ぐ。右手の甲で弾いたのだ。

「トオッ！」

お返しとばかりに蹴りを出す。それを腹に受け怪人は一瞬怯んだ。だがすぐに体勢を整える。そして口から白いものを噴き出してきた。

「ブルーーーゥーーーーッ！」

それは冷凍ガスだった。スーパー1を氷漬けにせんとする。

「ならば！」

スーパー1は胸のところで両腕を交差させた。

「チェーーーンジ、冷熱ハァーーーーンドッ！」

緑の腕になった。これぞれ甲の部分に銀の機械が備え付けられている。右が赤、左が黒に部分々々カラーリングされている。

「これでどうだ！」

左手から白いガスを出す。トドギラーと同じ冷凍ガスだ。

両者のガスが空中で激突する。最初はその力は互角であった。

「ブルルルルル・・・・・・」

だが次第にスーパー1の方が優勢となる。トドギラーはそれに対し焦ってきた。

宙への港の電人その六

遂にトドギラーは力尽きた。息が途絶えたのだ。
そこをスーパー1の冷凍ガスが襲い掛かる。怪人は氷漬けになり砕け散った。
「アーーーブラーーーーッ！」
次はデストロンの高熱怪人ガマボイラーだ。口から高熱の熱気を出してくる。
「今度は熱か・・・・・・ならば！」
スーパー1は右手を向けてきた。その甲から紅蓮の炎を出す。
勢いが違った。ガマボイラーの熱気はたちまち押される。
炎が怪人を包む。勝負は決まった。だが怪人は最後の力を振り絞りスーパー1へ突進する。
「甘いっ！」
スーパー1はそれを跳躍でかわした。その直前に怪人は口から白い液を噴き出したがそれもかわされてしまった。炎の中で怪人は爆死した。
「おのれっ、ガマボイラーの最後の秘策もかわすとは・・・・・・」
スーパー1の見事な動きを見て魔神提督は歯軋りした。戦闘員達は滝が次々に倒している。
「だがこれで終わりではない。こいつならどうする？」
「ムゥーーーーッ」
ゴッドの豪力怪人ミノタウロスである。頭部の角を振りかざし襲い掛かってくる。
「チェーーーンジ、パワーーーハァーーーーンドッ！」
再び両腕を交差させた。今度は赤い腕だ。銀と黒の機械が備え付けられている。
突進して来るミノタウロスの角を受け止めた。そして押して来る怪人を逆に押し返している。

「グウウ・・・・・」
怪人の頭を持ち上げる。そして空中へ放り投げた。
「ムオォーーーーッ！」
怪人は天高く撥ね飛ばされた。そして地に落ち爆死した。
次に出て来たのはドラゴンキングだ。ネオショッカーの拳法の使い手である。
「貴様の得意の赤心少林拳、この怪人に利くかな？」
怪人を送り出した魔神提督はほくそ笑んでいる。
「ギャイーーーッ」
怪人は叫びをあげサイを出してきた。両手にそれを握る。
サイを突き出す。スーパー1はそれをかわす。
次々に攻撃を繰り出す。爬虫類の様な外見に似合わず素早い。
スーパー1の蹴りを右で受け止めた。そして左でサイを入れる。
だがその手をスーパー1が掴んだ。そして捻る。
「ギィッ」
サイが落ちた。そしてスーパー1に横に投げられる。怪人は体勢を崩し横に滑っていく。
「トオッ！」
ライダーは跳んだ。そして空中で型を作った。赤心少林拳の型である。
「スーパーライダァーーーー閃光キィーーーーック！」
ライダーの蹴りがドラゴンキングの胸を直撃した。怪人は吹き飛ばされ爆死した。
「おのれっ、何という強さだ」
「魔神提督、残るは貴様だけだ」
そう言うと魔神提督の前へ出た。ジリジリと対峙する両者。
「ふん、貴様と闘っても最早何の意味も無いわ」
スーパー1を侮蔑する様に言った。
「何！？」
「既にセンターには我等の別働隊が向かっている。今頃全て破壊し

ておる頃だろう」
「なっ・・・・・・」
迂闊だった。陽動作戦は兵法の初歩の初歩であった。
「気になるなら戻ってみるか？瓦礫の山が見られるぞ」
「クッ・・・・・・・・・」
その通りだった。今センターに戻っても無駄だった。スーパー1は敗北を悟った。
「おうい、センターは後回しじゃあ！」
そこに声がした。ガラガラとした何処か粗暴さが感じられる声だった。
「何！？その声は」
赤い仮面に黒いプロテクターとズボンに身を包んだ男が出て来た。両腕と仮面には磁石が取り付けられ手には磁石の杖がある。デルザー改造魔人の一人磁石団長である。
中央アジアに生まれた。祖先は首無し馬に乗る魔人だった。昼も夜もその馬を駆り草原で会った者を剣の錆にしていた。その子孫である彼も馬上で人を斬り続けた。殺した者の魂がその糧だった。
彼の進むところ死の荒野だった。首や胴が転がり胸を刺し貫かれた屍が横たわっていた。
彼はある時謎の人物に声を掛けられる。前に立つ者は全て殺す彼は当然その者にも切り掛かった。
だが彼は負けた。組み伏せられた彼は相手の名を聞いた。
その者の名はマシーン大元帥。デルザー軍団の改造魔人であった。
彼は改めて自分達の組織へ彼を誘った。
彼はその誘いに乗った。負けたからではない。マシーン大元帥の強さを知り、また彼の力量に感じ入ったからだ。
彼は自ら進んで改造手術を受けた。磁石の力を手に入れ剣の替わりに杖を持つようになった。それが彼の新たなる誕生の時だった。

宙への港の電人その七

それ以後彼はデルザーの一員として闇に暗躍した。強力と磁気を駆使する勇猛果敢な猛将である。

「磁石団長、貴様センター襲撃に向かったのではなかったのか？」

魔神提督が問い質す。

「おう、それだが途中でいい土産ができたので帰って来たのじゃ」

ガラガラと高笑いしつつ言った。

「何っ、貴様作戦を無視して・・・・・・」

怒る魔神提督に対し笑って応えた。

「これを見てもそう言えるかのう」

戦闘員達を杖で指示する。すると縛られた子供達が連れられて来た。

「ほう」

それを見て魔神提督も声をあげた。

「センター見学用のバスが通り掛かったのでな。襲撃して捕らえたのじゃ。将来の戦闘員にと思ってのう」

磁石団長は得意そうに言葉を続ける。

「土産の報告に来たら丁度貴様がスーパー1とやり合っていたんじゃ。どうも最高も土産になったみたいだの」

「うむ、その通りじゃ」

魔神提督はにやりと笑った。そしてスーパー1に向き直った。

「さあそうする、スーパー1よ。貴様が手を出せばこの子供達の命は無いぞ」

「くっ・・・・・・」

スーパー1は怯んだ。子供達を犠牲には出来なかった。それが出来る程彼は冷酷ではなかった。否、彼の心はあまりにも優し過ぎた。

スーパー1は構えを解いた。戦闘員達に両腕を拘束される。その後ろでは滝が手を上げていた。

荒野でスーパー1は変身を解かれ沖一也の姿に戻っていた。
沖は十字架に縛り付けられていた。その足下には木が堆く積まれている。
「どうだ、十字架の気分は」
磁石団長は得意げに尋ねる。だがそれに沖は答えようとしない。
「答えぬか。まあ良い。どのみち貴様等はもうすぐ処刑だ」
一体の怪人が出て来た。ゲルショッカーの火吹き怪人ムカデタイガーだ。
「この怪人が貴様の処刑を執り行なう。焼け死にあの世で我等の作戦が成就するのを見届けるがいい」
それに対しても答えようとしない。口をつぐんだままである。
「口を開くつもりは無いか。それなら死ぬまでそうしているがいい。ところで魔神提督」
隣にいる魔神提督に声をかけた。
「メガール将軍に連絡は取れたか?」
「うむ、スーパー1の捕獲を聞いても特に嬉しそうではなかったが。だがこちらへ来るとは行っていた」
「ならばいい。将軍にわし等の功を見せるいい機会だ」
「いつも憮然として面白みの無い奴だがな。まあ宿敵の死を見れば喜ぶだろうて」
二人の後ろに子供達がいた。縄で縛られている。周りには二人の戦闘員がいるだけである。
(どうするかだな・・・)
ちらりと隣を見た。滝も十字架に架けられている。その眼は死んではいなかった。激しい怒りの目で磁石団長と魔神提督を見ていた。
(良かった、まで諦めていない。これなら大丈夫だ)
沖はキッと遠くを見据えた。そこから突如として土煙が巻き起こった。
「ムゥッ!?」
それはブルーバージョンだった。沖が自分の脳波で遠隔操作して

いるのだ。
「クッ、何とかしろ！」
場は忽ち混乱に陥る。沖の目が再び光った。
「Ｖマシン、今だ！」
荒野の横からＶマシンが出て来た。一直線に沖と滝が架けられている十字架の方へ向かって来る。
Ｖマシンの後部の一部だけ変形した。翼が出て来た。
翼が沖と滝の両手を縛っていた縄を断ち切った。二人は足の縄を解き十字架から脱出した。
「しまった！」
二人は子供達の方へ向かった。そして二人の戦闘員を倒し子供達を護る様に立った。
「油断したな、俺のマシンは二つ有る」
二人の大幹部と対峙し沖は言った。
「おのれっ、それを忘れていたわ」
滝は子供達の縄をナイフで断ち切っている。
「滝さん、子供達を安全な場所へ」
「おお」
子供達の縄を全て断ち切ると滝は子供達を連れ戦場を離脱した。
「後は貴様等だけだな」
そう言うと沖はゆっくりと赤心少林拳の構えを取った。
「ほざけ、ならば貴様を力ずくで倒すだけだ」
新たに二体の怪人が現われた。ゴッドの復讐怪人サソリジェロニモとドグマのムカデ怪人ムカデリアである。
「ならば・・・行くぞ！」
スーパー１は構えを取った。さっきのものとは別の構えだ。

宙への港の電人その八

変・・・・・・
右腕を頭の高さで引いた。左腕は腰の高さで前にある。
手と足が銀の手袋とブーツに包まれる。腰にベルトが出ている。
・・・・・・身
右腕を前に出す。左腕はそれに添えている。胸も銀色になった。
両手首を合わせる。そしてそのまま前に出していく。全身が黒のバトルボディに包まれる。
両手首を時計回りに百八十度回転させた。顔の右半分が仮面に包まれすぐに左半分も包まれる。
腰のベルトが光った。全身が光に包まれる。

変身は完了した。仮面ライダースーパー1がそこにいた。
「行くぞ、魔神提督、磁石団長！」
二人へ向けて突き進む。底へ三体の怪人が立ち塞がる。
「ムヒョーーーォウ！」
ムカデタイガーが口から炎を吹き出す。スーパー1も腕を冷熱ハンドに変え右腕から炎を出して対抗する。
怪人の炎が途絶えると懐へ飛び込みその首を右手で掴むと炎を噴出させた。
「ヒョォーーーーーッ！」
怪人は忽ち炎に包まれた。そして爆死した。
次はムカデリアへ向かう。腕はエレキハンドに変わっていた。
怪人はトゲ爆弾を投げる。それがかわされるとロープを投げてきた。
スーパー1はそれを掴んだ。そして両腕に電気を込めた。
「受けろおっ！」
黄色い電流がロープを伝う。怪人はそれに撃たれた。

それをスーパー1は蹴り飛ばした。電流に包まれながら怪人は吹き飛ばされ地面に叩き付けられ爆発した。

今度はパワーハンドに変えるとサソリジェロニモの槍を掴んだ。そして奪い取り真っ二つにへし折った。

槍を折られた怪人は今度は斧を出してきた。斧が唸り声をあげてスーパー1に襲い掛かる。

その刃をかわすスーパー1。頭上へ斧が振り下ろされる。

「見切った！」

その斧を受け止めた。武道でいう真剣白刃取りだ。

刃を封じるとそれを奪った。右手で握り潰し左手でチョップを加える。

怪人が怯んだところにもう一撃、怪人の首に両手でチョップを同時に浴びせる。

「スーパーライダー諸手頚動脈打ち！」

両手の攻撃が同時にヒットした。サソリジェロニモは倒れ爆発して果てた。

「後は貴様等だけだな」

魔神提督と磁石団長を睨む。提督が剣を抜いた。

「若造が、いい気になるな」

剣を振るう。スーパー1の腕は銀のスーパーハンドに戻っている。スーパー1は間合いを空けた。腕をチェンジしようとしたその時だった。

「死ねえい！」

魔神提督が左腕を飛ばして来た。そのままスーパー1の首めがけ襲い掛かる。

だがそれより早くスーパー1は腕をチェンジさせていた。金のレーダーハンドだった。

「甘い！」

右手からミサイルを放った。ミサイルはそのまま飛び魔神提督の左腕を撃ち落した。

続けて右腕のミサイルを放つ。それは魔神提督の胸を直撃した。
「グハァッ！」
ミサイルの直撃を受けて倒れる。胸が破壊され煙が出ている。
「単なる探索用のミサイルではなかったのか・・・・・・」
「仮面ライダーの身体は全身が武器だ、貴様はそれを見落としていた」
腕は銀に戻っていた。その腕で起き上がる魔神提督を指差す。
「ぐぐっ、そうだったな。それを忘れていたわしの不覚か・・・・・・」
それでも剣を離さない。だがその前に磁石団長が出て来た。
「魔神提督、それ以上の戦闘は無理だ。後はわしに任せるがいい」
手に杖を持っている。
「何を言うか、わしがこの程度で怯むと思っているのかっ」
「無理をするなと言っとるんじゃ、まだお主を失うわけにはいかんからのう」
「むっ、ううう・・・・・・」
魔神提督は暫し考えた。そして結論を出した。
「・・・ならばこの場は主に任せる、スーパー1の首級、見事挙げてみよ」
「おお、楽しみに待っとれ」
魔神提督はマントで身体を包んだ。そしてその中に消えた。
「スーパー1よ、覚悟は良いか」
スーパー1と対峙する。その気は今までの怪人とは比較にならなかった。
「フン！」
背を屈める。背中から無数の小型磁石を打ち出す。

宙への港の電人その九

スーパー1はその磁石を弾き落とす。だが数が多い。
しかも一度地面に弾き落とされた磁石が浮き上がり再び襲い来る。
その全てを防げる筈もなく腹や脚にその直撃を受ける。
「ハハハ、どうじゃわしの磁石の味は。なかなかのもんじゃろ」
磁石団長はそれを見て高らかに笑う。
「だがのう、まだ終わりではないぞ」
手に持つ電磁棒を回転させる。爆発し粉々になっていた怪人達の破片が集まって来る。
「そおれぇい！」
それをスーパー1へ投げ付ける。トリッキーな動きをするミニ磁石に加え一直線に高速で突っ込んで来る破片が来た。
よけきれない。数個の破片がスーパー1を打った。
「ぐふううっ・・・・・・」
胸を押さえる。だがすぐに体勢を立て直し磁石を落とす。
しかしそれも限度がある。疲れとダメージから次第に動きが鈍ってくる。それにつれて防げない磁石や破片が多くなる。
（まずい、このままでは）
心の中でスーパー1は思った。
（磁石は鉄に引き寄せられる。俺の全身には鉄も多い）
しかも磁気の影響により身体の動きも妙だった。
（どうすれば良い？磁気を消すには）
ふと自分の銀の腕が目についた。
（腕・・・・・そうだ！）
後ろに跳んだ。間合いを開ける。だがすぐに磁石や破片が向かって来る。
「馬鹿め、無駄なあがきよ！」
磁石団長がそれを見てせせら笑う。しかしスーパー1は心の中で

必勝の笑みを漏らした。
「チェーーーンジ、エレキハァーーーンドッ！」
エレキハンドにチェンジさせる。すぐに高圧電流を発射した。
「ムウッ！」
磁石と破片が電流に吸い寄せられる。そしてその中で分解されていく。
「な、何いっ！」
磁石団長は思わず叫び声を出した。目の前で分解された磁石と破片が塵となって地面に落ちていくからだ。
スーパー1が電流を止めた時磁石も破片も全て塵となり風に吹かれ飛び去った。それを見届けスーパー1は腕を銀のスーパーハンドに戻した。
「・・・・・迂闊だったわ。まさか磁気まで使えようとはな」
「この五つの腕は悪を倒す為にある。たとえどの様な時にもな」
「ふん、まだ勝負は終わりではないわ。行くぞ！」
今度は電磁棒をふりかざし突き進んで来る。両者共激しい接近戦を展開した。
だが接近戦では赤心少林拳を極めたスーパー1に分がある。磁石団長は次第に追い詰められていった。
スーパー1の手刀が磁石団長の胸を打った。団長はたまらず体勢を崩す。
「今だ！」
スーパー1は跳んだ。そして空中で型を取り旋回した。
「スーパーライダァーーー月面キィーーーック！」
空中からの蹴りが磁石団長の胸を直撃した。大きく撥ね跳び地面へ叩き付けられる団長。
だがすんでのところで急所は外した。立ち上がってくる。
「勝負あったな。最早それ以上闘えまい」
「ぐぐっ・・・・・・」
その通りだった。あまりにもダメージが大き過ぎた。電磁棒を杖

にして何とか立っている状況だ。
「行くぞ、次で止めを指してやる」
再び飛び上がり蹴りを繰り出そうとする。だがそこに客が訪れた。
「待て、磁石団長を倒させはせぬ」
「ムッ、その声は・・・・・」
その声の主をスーパー1は良く知っていた。
磁石団長の前に一騎の馬が現われた。その馬上に声の主はいた。
「メガール将軍、やはり来たか」
スーパー1は構えを崩さない。メガール将軍も馬上からスーパー1を睥睨している。
「スーパー1、久しいな。再び貴様とこうして対峙する事になろうとは」
表情は崩さないがその声には様々に入り混じった心情が感じられる。
かって彼は自分の醜く変わり果てた姿に絶望した。そして美しいスーパー1に激しい憎悪を燃やしたのだ。
彼等の死闘は続いた。そして彼は奥沢正人ではなくメガール将軍として最後を遂げたのであった。
その時の事が脳裏に浮かぶ。そして今その宿敵が目の前にいるのだ。
「今回の闘い、見事だった。おかげで北米の我々での作戦は失敗に終わった」
更に言葉を続ける。
「だがこれで終わりではない。我々の真の計画はこれから始まる」
「・・・・・・・・」
スーパー1は沈黙を守っている。それに対し将軍は言葉を続ける。

宙への港の電人その十

「我々の作り出した最強の戦士により貴様も他のライダー達も滅び去る事になろう。だがスーパー1よ、貴様は違う」
キッとスーパー1を睨みつける。
「貴様は私が倒す。この手でな」
既に磁石団長は戦場を離脱している。荒野にいるのはスーパー1と将軍だけであった。
「今は勝利の美酒に酔いしれているがいい。じきに敗北の味を噛み締めながら死ぬのだからな」
そう言うと馬首を返した。ゆっくりと蜃気楼の様に消えていく。
「最強の戦士か・・・・・」
一人残ったスーパー1は呟いた。
「来るなら来い。たとえ誰が来ようとこの赤心少林拳で倒してやる」
強い決意の声だった。その時後ろから滝と彼の乗るジープの音が聞こえてきた。
「そうですか、滝さんはもう行きましたか」
闘いから数日後の朝沖は上司や同僚達の前にいた。
「ああ、今朝早くに。何でもサンフランシスコに行くとか言っていたよ」
白衣を着た上司の一人が言った。駐車場を見る。既に滝のジープの姿は無かった。
「シスコですか。またえらく離れてますね」
沖は苦笑して言った。
「おいおい、何言ってるんだ。君もそこへ行くのだろ」
上司は笑いながら言う。
「ええ、ちょっと滝さんを追っかけにね。それから何処へ行くかは解かりませんが」
沖も微笑んで言った。

「全てが終わったらまたここへ帰ってきます。それまで待っていて下さい」
「インターポールへの協力か。大変だが頑張ってくれよ」
上司が沖の肩に手を当てて言った。悪と闘うとは言っていない。インターポールへ暫く出向するという名目でセンターを後にし悪を倒す旅に出るのだ。
「有り難うございます。必ず帰って来ます」
生きて帰れるとは限らない。だがそれでも行かなくてはならないのだ。それがライダーなのだから。
「ああ、その時は派手にパーティーをして迎えてあげるよ」
「その時を楽しみにしてて」
同僚達が次々に暖かい言葉をかけてくる。沖はそれが嬉しくてたまらなかった。
だが別れの時が来た。沖はあえて明るい表情と声で言った。
「じゃあ行って来ます。お元気で」
「頑張れよ」
皆の暖かい声と見送りを受け沖はセンターを後にした。Vマシンが爆音をあげセンターから遠く離れていく。

宙への港の電人　　完

２００３・１１・４

集結、そして新たなる敵その一

集結、そして新たなる敵

世界各地で悪の策謀を阻止したライダー達。逃げる彼等を追っていた。

やがて彼等が一つの国を目指し逃げている事に気付く。

その国は日本。太平洋の島国であるその国はライダー達の生まれ故郷でもある。また歴代の悪の組織がその最後を迎えた国でもある。ライダー達にとっても悪の者達にとっても縁の深い国なのである。その日本へ敵を追ってライダー達が帰って来る。それを迎える人達もいる。

だが悪の者達もそれは知っていた。その総力を挙げ造り出した最強の戦士が今目覚めようとしていた。決戦の火蓋が再び切られ死闘が幕を開けんとしていた。

日本のある都市にその男はいた。白髪混じりの髪に日に焼けた頑固そうな顔をしている。歳は四十代後半といったところか。背はやや小柄ながら歳を感じさせない引き締まった身体をしている。服は動き易い白いシャツにブラウンの上着、そして黒のスラックスである。

男の名は立花藤兵衛。かって多くのライダー達に協力し父の様に慕われた人物である。

かってはオートレーサーであった。年齢の為現役を退いた後は喫茶店を経営していた。同時にレーサーでもある本郷猛のトレーナーもしていた。彼に自分の果たせなかった夢を託していたのである。

本郷がショッカーに拉致され仮面ライダーに改造されると快く彼を再び迎え入れた。そしてショッカーの存在を知った彼は共にショッカーと戦う決意を固めたのである。

本郷猛、そして一文字隼人にとって彼はかけがえの無い人物だった。天涯孤独であり改造人間としての悲しみを背負う彼等にとって

立花藤兵衛という人物はまさに父親そのものだった。
彼は厳しかった。あえて二人に厳しい事を言い特訓を課した。それは正義の為、世界の為、そして本郷と一文字の為だったのだ。ライダーは幾度となく絶体絶命の窮地を逃れてきたがそこに彼の果たした役割は大きかった。
ショッカー壊滅後ゲルショッカーが現われる。二人の戦いは終わらない。それでも立花は常に二人を支えてきた。そして二人はゲルショッカーと首領を倒したのだ。だがそれで終わりではなかった。
デストロン、ゴッド、ゲドン、ガランダー帝国、ブラックサタン、そしてデルザー。世界征服の野望をあくまで捨てない首領は次々に新たな組織を率い世界の平和を脅かさんとしていた。
それに立ち向かうライダー達。その傍らにはいつも彼がいた。彼なくして仮面ライダーはなかったと言っていい。
今彼は戦場を退きある喫茶店を開いている。店の名は『アミーゴ』。コーヒーが美味いと評判の店だ。
その日は定休日だった。だが彼は店を開いていた。カウンターで一人コーヒーを入れている。
それは何故か。誰か来る、彼の直感がそう教えていたからである。かって多くの死闘をライダーと共にくぐり抜けてきたカンがそう教えていた。
一人の男が入って来た。黒い髪の中年の男である。顔は優しげであり服装も水色のシャツに白いスラックスと地味である。
「あんたは」
「谷源次郎といいます」
それだけで充分だった。二人共お互いの事は風の噂でよく聞いていた。
かっては平凡だが幸福な家庭を持つ一市民であった。だがネオショッカーに妻子を殺されてから彼の人生は一変した。
スカイライダー筑波洋の大学の先輩であり志度博士の知人でもあった彼は彼等に協力した。そしてライダーやがんがんじいを陰に日

向に支えネオショッカーを壊滅させる事に成功したのである。
その後沖一也こと仮面ライダースーパー1とも巡り合った。彼をライダーに任命したのも谷だった。その姿にかっての八人のライダーの面影を見たからだ。
スーパー1とドグマ、ジンドグマの闘いもまた熾烈なものだった。だが赤心寺やジュニアライダー隊をはじめ多くの協力者達が彼を救った。その中心人物もまた谷であった。二人のライダーの良き理解者でありまた父親替わりであった。現在はオートバイ店である谷モーターショップを経営している。
彼は最初カウンターに座りコーヒーを飲んでいたが立花に頼まれカウンターに入った。見ればコーヒー豆や紅茶が揃えられシックな造りの趣味のいい店である。
続いて二人の男が入って来た。
「おやっさん、久し振り」
滝だった。役も一緒である。
「おう、元気だったか」
立花の挨拶は意外と素っ気無い。だがその声は暖かい。
「おやっさんもまだまだしゃんとしてるな」
顔を綻ばせ憎まれ口を叩く。
「ふん、まだまだ若いモンには負けねえぞ」
対する立花もニッと笑う。
「それでそっちの人は誰だい?」
「役。役清明(えんのきよあき)ってんだ。俺の同僚だよ」
「よろしく、立花さん、谷さん」
役はペコリと挨拶をした。二人もそれに返した。
暫く立花と滝はつもる話をしていた。滝が帰った後での日本の事、滝が会ったライダー達の事等を話していた。
「そうか、あいつ等元気でやっているか」
自分が共に闘ってきたライダー達の話を聞いて立花の顔は綻んでいた。

「そういうおやっさんも随分活躍したんだな」
滝も日本での立花の話を聞き嬉しそうである。
「洋も一也も頑張っているんだな。わしも気を引き締めないとな」
役からも話を聞いた谷も機嫌がいい。
「もう一人面白い方にお会いしましたよ」
役は谷に言った。
「面白い奴？ああ、あいつだな」
目元を緩めうんうん、と頷く。そこへ当の面白い奴が入って来た。

集結、そして新たなる敵その二

「おう、来たか」
谷が声をかける。がんがんじいだ。
「何かわいが来る事わかってたみたいでんなあ」
がんがんじいは困った様な顔で苦笑した。
「御前さんの行動は解かり易いからな。で、洋はどうした？」
「洋さんでっか？まだ来てまへんか？」
「影も形も見あたらねえぞ」
「おかしいでんなあ。わいより先に空港を出たんやけど」
「先にって・・・。御前さんは何してたんだよ」
「ちょっとうどん食ってました」
「また食い物かよ、進歩無えなあ、相変わらず」
「放っといて下さい」
「まあいいさ。つまり洋は日本にちゃんと着いたって事は間違い無いのか。じゃあもうすぐここに来るな」
五人は暫くコーヒーを飲むのも止め待っていた。
バイクの音がした。それは店の前で止まった。
「む・・・・・・」
五人は直感した。やがて店の扉が開いた。そこに男達の姿があった。
「・・・・・・・・来たか」
まず本郷猛が入って来た。続いて一文字隼人。そして風見志郎、結城丈二。その後ろには神敬介とアマゾンがいる。城茂、筑波洋。そして沖一也が最後に入った。
九人のライダー達が揃った。皆顔には強い決意の色がある。
「・・・猛、隼人、志郎、丈二、敬介、アマゾン、茂」
立花は自分と共に闘ってきたライダー達の名を呼んだ。
「・・・洋、一也」

谷も呼んだ。それまでの和気藹々とした感じは無かった。緊張し張り詰めた空気が支配していた。

「よく帰って来てくれた。御前達の元気な顔を見れてわしは嬉しい」

「おやっさん・・・・・・」

九人の戦士達も感慨深げだった。だがそこに感傷は無かった。

「話は聞いている。また新たな組織が動き出したようだな」

「・・・・・・・・」

ライダー達は口を開かない。それは肯定の沈黙であった。

「またつらく長い戦いが始まる。だが御前達は今までそれ以上の戦いを何度もくぐり抜けてきた。絶対に負けるんじゃないぞ」

その言葉にまず本郷が声を出した。

「当たり前ですよおやっさん、俺達は絶対に負けません」

「まだまだカメラに撮りたいものもありますしね」

「俺にも都合がありましてね。負けてやるわけにはいかない」

「右手がね、言うんですよ。悪を倒せって」

「いつもの事ですよ、奴等が出て来る時は。また倒してやるだけです」

「アマゾン、負けない。悪い奴倒す、それだけ」

「面白くなってきたじゃないですか、誰だろうがこの拳で黒焦げにしてやりますよ」

「悪と戦う心があるから・・・俺はライダーですから」

「人の夢、それを壊そうとする奴は許せません」

九人の戦士達は口々に言った。声も顔も強い決意が滲み出ている。それを見て立花と谷は満面の笑みを浮かべた。

「そうか、ならばわし等からは言う事は無い。その力の全てを以って倒して来い」

“フフフフ、果たして倒せるかな”

何処からか声がした。

「その声は！」

皆聞き覚えのある、いや忘れたくても忘れられない声だった。

“ライダー諸君、久し振りだな”
全ての悪の元凶の声だった。倒れた筈の。
「!?その声は・・・・・やっぱり生きていやがったか」
立花がその声を聞いて顔をしかめた。
“立花藤兵衛、私はこの世に悪がある限り幾度でも甦るのだ”
首領は叶笑した。
“折角全てのライダーがこの日本に集結したのだ。もてなさなければならないと思ってな”
首領の言葉は続く。
「フン、折角だが断らせてもらうぜ。どうせ貴様の事だ、罠でも仕掛けているんだろう」
風見が声のする方を睨みつけ言った。
“フフフ。風見志郎よ、あの時と変わらぬ言葉だな”
「そもそももてなしとはどういう事だ?貴様が俺達をもてなす筈が無いだろう」
“神敬介よ、それは誤解だ”
首領は笑みを含んだ声で返した。
“今日私は君達をパーティーに誘う為にここへ声をかけたのだ”
「パーティー!?」
その言葉に一同声を合わせた。

集結、そして新たなる敵その三

“そうだ、場所は相模湖畔側の奇巌山”
「何っ、奇巌山」
城が声をあげた。かって七人のライダーが岩石大首領との最後の決戦を行なった場所である。
“どうだ、君達と我々が再会を期すに相応しい場所だろう”
「・・・・・・・・・」
一同は言葉を出せなかった。おそkらく首領はそこで自分達に何かを見せるつもりなのだろう。しかしそれが何なのか、そこまでは解からなかった。そして必ず攻撃を仕掛けて来ると確信していた。
“君達が来るのを楽しみにしている。ゆめゆめ拒む事のないよう”
そう言うと首領の声は消えていった。
「待てっ！」
本郷が声をあげる。しかし声は消え気配も無くなっていた。
「・・・・・どうするつもりだ、御前達」
立花と滝は九人のライダー達に問いかけた。それに対し彼等は答えた。
「行くしかないでしょ、折角招待してくれたんだし」
一文字が言った。
「いきなり首領が出て来るとは思えませんが」
筑波も口を開いた。
「それに奇巌山をわざわざ指定してくれたんだし。あそこには特別な思い入れもあります」
結城があの決戦に想いをはせる。
「アマゾン負けない。罠があっても打ち破る」
「これで決まりですね。今から行きましょう」
「おお」
沖の言葉に他の八人のライダー達は頷いた。店を後にして行こう

とする。
「御前達・・・またここへ来いよ」
立花が背を向ける戦士達に声を掛けた。その言葉に本郷と一文字が振り向いた。
「おやっさん、その時はコーヒーを一杯お願いしますよ」
「そう、キリマンジャロがいいな」
「御前等・・・・・・」
思えばこの二人と共にショッカーと戦ったのが全ての始まりだった。それから彼の戦いの日々が幕を開けたのだ。
それまでの事が脳裏を巡る。彼の人生はライダーと共にあったのだ。
「おうわかった、とびきり上等の豆を用意しておくからな」
立花はにこりと笑った。二人はそれに微笑みで返した。九つのバイクの爆音が次第に遠ざかっていく。
「行っちまいましたね、あいつ等」
滝は次第に聞こえなくなるバイクの音を聞きながら立花に言った。
「御前も行くんだろう、滝」
カップを直しつつ滝に言った。
「えっ、解かります？」
その言葉に滝は驚いた様な顔をしてみせた。
「その手のグローブを見ればな。何で脱がないんだ」
見れば滝の両手にはグローブがある。黒い皮のグローブだ。
「そりゃあね。あいつ等だけには苦労かけさせませんよ」
彼はコーヒーを飲み終えニヤリ、と笑った。
席を立った。役も一緒である。
「おい、がんがんじいとかいったな。御前さんも行くんだろ」
隣でケーキをぱくつくがんがんじいに声をかけた。
「当然ですやん、洋さんが闘いに行くんやし」
ケーキを慌てて口に入れ指をハンカチで拭きつつ言った。
「そういう事です。じゃあ俺達も行って来ます」

三人も店を後にした。二台のバイクと車の爆音が聞こえそれが遠ざかっていった。

「行きましたね、皆」

店に残った立花に谷は言った。

「ええ、若いモンはやっぱり違いますよ」

立花はその顔を綻ばせて答えた。二人共いい笑顔をしている。人生の深みと経験がそうさせるのだろう。

「あいつ等の姿をまたこうして見られるだけでも嬉しいってのにまたああして戦いに行く姿を見れたんですからね。心配ですけど信じてますよ。あいつ等なら絶対にやってくれるって」

「そうですね、私も信じてますよ、あいつ等を」

谷も言った。店の外の道を戦士達が駆けていた。

集結、そして新たなる敵その四

奇巌山、断崖絶壁と岩山の地である。草木は無く生物もいない。かってデルザー軍団が本拠地を置きここからストロンガー打倒及び日本征服の作戦を発していた。首領もこの地に潜み岩石の巨人と化して機を窺っていた。最後の戦いで七人のライダー達の前にその姿を現わしたのもこの地であった。ライダー達にとって忘れられない場所の一つであった。

この地に今再びライダー達が来た。九人の戦士達である。

バイクから降りた。そして本郷を先頭に戦士達は進む。行く先はかって首領と闘ったあの場所である。

目の前に奇巌山本山が見える。かって大首領が眠っていたあの山だ。戦士達はその山を見据えた。

「よくぞ来てくれた、ライダーの諸君」

あの声がした。

「私の招きによく応えてくれた。心から礼を言おう」

自信に満ちた声だ。声全体から優越感が漂う。

「ただそれだけを言う為だけに俺達をここへ呼んだのではないだろう、首領」

本郷が言った。

「確かにな。貴様が俺達にそんな話し方をするのは絶対に何かある時だ」

一文字も同調した。

「フフフフ、流石だな。歴戦のダブルライダーよ」

「下らんお世辞は止めろ、一体何の為に呼んだのだ」

二人は同時に言った。

「まあそう焦る必要は無い。久し振りの再会ではないか」

「言うなっ、貴様はあの時宇宙で死んだ筈だ」

「それが今どうして俺達に話掛けている」

神と筑波が口を開いた。
「・・・・・言った筈だ。この世に悪がある限り私は何度でも甦ると。そしてその新たなる力を諸君に特別に見せてやろうというのだ」
「何っ、力!?」
風見が敏感に反応した。
「それはまさか・・・・・・」
結城が辺りを見回した。辺りを不気味な気が支配する。
「さあ、い出よ甦りし悪の僕達よ!」
「なっ!!」
戦士達は息を飲んだ。左右の丘の上に自分達を取り囲む様に今までの組織の大幹部達、デルザーの改造魔人達が立ち並んでいたのだ。
死神博士、ブラック将軍、ドクトルG，キバ男爵、アポロガイスト、百目タイタン、ゼネラルシャドウ、ゼネラルモンスター、メガール将軍・・・・・。日本で、世界各地で彼等が闘ってきた恐るべき悪の化身達であった。それが今全員彼等を見下ろす様に奇巌山に集結しているのだ。
「くっ、何時の間に・・・・・・」
城が舌打ちする。これだけの敵の気配を察知出来なかったとは迂闊であった。
「何という事だ、ショッカーからジンドグマまでの全ての組織の大幹部がいるとは・・・・・・」
沖も唖然としている。
「ガルルルルル・・・・・」
アマゾンが威嚇の咆哮を出している。
「どうだライダー諸君よ、素晴らしい戦力だろう」
首領の高笑いが響く。
「ここに私は新たな組織の名を君達に伝えよう。その組織の名は・・・・・・・バダン!」
「バダン!!」

その名を聞いて戦士達の顔に緊張が走った。バダン、初めて耳にする名だ。しかしそこにえもいわれぬ禍々しさを感じていた。

「フフフ、どうだ、良い名だろう。私が作り上げた最高の組織なのだからな」

如何にも満足そうな声が響く。

「私はここに宣言しよう。バダンは必ずや世界を征服すると」

「戯言をっ、俺達がいる限りそうはさせん！」

「そうともまた貴様の邪な野望を打ち砕いてやる！」

本郷と一文字が言った。今にも飛び掛かりそうである。

集結、そして新たなる敵その五

「それは出来んな、君達には」
「何っ!?」
戦士達がその言葉に即座に反応した。
「君達は今日この奇巌山で死ぬからだ。この山が君達九人の墓標となるのだ」
大幹部と改造人間達がジリ、と動いた。
「そうか、その為にこいつ等はここにいるのか」
「だがそう上手くいくかな?我々とてむざむざやられはしないぞ」
風見と結城が身構えた。何時でも変身出来る体勢を取った。
「それは違う。この者達は君達に最後の別れを告げに来ているのだ」
「ほう、では貴様が直々に相手をしてくれるとでもいうのか?」
「まずは御前、やっつける」
神とアマゾンが言った。彼等も既に構えを取っている。
「そういえば貴様はここで岩石の化け物になって出て来てくれたよな」
「ネオショッカーの時は巨大な竜の姿だったな」
城と筑波が次々に口を開いた。彼等は首領の巨大な姿を見てきているだけにその反応は素早い。
「それとも罠か?まさかそんな卑怯な真似をする為にわざわざ俺達を呼んだんじゃないだろう?」
沖が彼にしては珍しく皮肉を込めた。挑発し首領の反応を見たかったからだ。
「甘いな、諸君よ。君達を倒すのに私が出る必要は無い。勿論罠など用意はしていない」
「ではどうするつもりだ?」
本郷が問うた。
「君達を倒すのは・・・・・この男だ」

中央に一人の男が現われた。それは改造人間だった。
赤いマスクをしている。ライダー達のそれに酷似したそのマスクには左右に三つづつ、合計六つの溝があり両眼は緑である。口はシルバーだ。
赤いバトルボディに銀の胴、両膝と肘には十字の何かが付いている。
手袋とブーツは無い。だが手足はシルバーで胴と同じ様に輝いている。
「な・・・・・・・・・」
その姿を見てライダー達は息を飲んだ。そしてその改造人間から発せられる異様な殺気を感じていた。
「我がバダンが生み出した最強の戦士、ゼクロス。これから君達を冥府へ送る地獄からの使者だ」
首領がそう言い終えるとゼクロスは身構えた。左右にいた幹部や改造魔人達が姿を消す。
「ムッ・・・・・・・!?」
「誰も邪魔はしない。君達はこの男の前に血の海の中に倒れるのを見届けるだけだ」
首領は高らかに言った。その言葉が終わるとゼクロスは跳んだ。まるで天を飛翔するかのような高いジャンプであった。そして着地する。腰を屈め右手を上、左手を下にした獣の様な構えを取った。
「行けっ、ゼクロスよ。ライダー達を全て血の海の中に沈めるのだ!」
首領が叫んだ。それと同時にゼクロスが突進を始めた。速い、風の様な速さである。
「来るか・・・・・・」
「ならば相手をしてやる」
本郷と一文字が構えを取った。
「貴様がどんな奴か知らないが」
「負けるわけにはいかない」

風見と結城が変身の動作へ移ろうとする。
「たとえどの様な敵でも」
「倒す！」
神とアマゾンも変身の構えへ移りはじめた。
「ライダーとして生を受けた俺達」
「悪を倒すのが使命だ」
城と筑波は手袋を剥ぎ取った。
「来い！ライダーの力見せてやる！」
最後に沖が言った。それを合図に九人のライダーは同時に変身に入った。
九つの光が輝く。そして九人のライダーが一斉に跳んだ。
「行くぞ、ゼクロスとやら！」
ゼクロスの突進をかわし逆に彼を取り囲んだ。闘いの火蓋が今切られた。
「・・・・・・・・・」
ゼクロスは動かない。ライダー達もまずは隙を窺っている。

集結、そして新たなる敵その六

ジリジリと間合いを詰めようとする。しかし彼の凄まじい殺気がそれを許さない。
ゼクロスが両肩から白い煙を発した。
「毒ガス・・・・・・いや煙幕か」
「離れるな！離れれば奴の思うつぼだ！」
ライダー達は一箇所に集まった。そして煙が晴れるのを待つ。
煙が晴れた。それにライダー達は怖ろしい光景を見た。
「こんな・・・・・・馬鹿な・・・・・・」
何とゼクロスが九体いるのだ。それぞれが構えを取りライダー達を取り囲んでいる。先程とは逆の状況だ。
「奴は・・・・・・九体もいたのか・・・・・・・・・・！？」
だが気は一人のものしか感じられない。
「いや、違う。奴は一人しかいない」
スーパー1が言った。
「という事は分身の術か。メカニックな外見して古風な真似をする」
ブイスリーがそれに答えた。
「どっちにしろ同じだ。いくらいようがこれの前には通用しないぜ！」
ストロンガーが叫んだ。他のライダー達が一斉に跳んだ。
「喰らえっ、エレクトロサンダー！」
地面に拳を叩き付ける。電流が地走りとなって周囲を覆う。
ゼクロスとその分身達が雷に包まれる。
分身はホノグラフだった。電流に覆われるとすぐに消え失せた。
「どうだ、まやかしなんぞこんなもんだ！」
だが本体は残っていた。雷に包まれたのは全て分身だった。既にもう一体分身を作っていたのだ。

本体は跳んでいた。ストロンガーへ向けて蹴りを放とうとする。
「来たか、予想通りだ！」
確かにそれはストロンガーの計算通りだった。ゼクロスが跳び上がり攻撃を仕掛けて来るのは。だが彼はここで一つ致命的な計算ミスを犯していた。
その蹴りは余りにも速かった。ストロンガーの予想を遥かに超える速さだった。蹴りはストロンガーの胸を直撃した。
「ぐおっ！」
すんでのところで急所を外した。だがかなりのダメージであることに違いは無かった。
「ケケーーーッ！」
そこにストロンガーの仇とばかりアマゾンが襲い掛かる。両腕の鰭が黒く光る。
「・・・・・・・・・」
ゼクロスは無言で右手をかざした。肘の十字が浮き出る。
それは四つの刃を持つ手裏剣だった。振り向きざまに放つ。
「ケッ！」
跳びながらであるがアマゾンはそれを右の鰭で弾き返した。この時手裏剣にのみ注意を奪われていた。
ゼクロスが来た。
跳び上がり左ソバットを放つ。左手で防ごうとするが間に合わない。アマゾンのこめかみを直撃した。
吹き飛ばされるアマゾン。ゼクロスは更に攻撃を仕掛けようとする。だがその前にスーパー1が立ち塞がる。
既に両腕をパワーハンドにチェンジさせている。その力を以って捻り潰そうとする。
両者共力比べに入ろうとする。スーパー1は渾身の力を込めた。
だがそれでもゼクロスは動かない。
「何っ！？」
逆にゼクロスが動いた。スーパー1の渾身の力ももものともせず彼

をねじ伏せた、そして思いきり放り投げる。
かろうじて受身を取るスーパー1。入れ替わりにライダーマンが立ち向かう。
まずネットアームを撃ち出す。その中にゼクロスを捉えた。
「やったか！」
しかしゼクロスはそのネットを両手で引き千切った。そしてライダーマンへ向かおうとする。
「ならばっ！」
アタッチメントを変える。今度はロープアームだ。
ロープアームをゼクロスへ投げ付ける。ロープは彼の首をくくった。
「これならどうだ」
しかしそれに対してもゼクロスはその機械の如き態度を崩さない。冷静にロープを見ている。
両手でロープを掴んだ。そしてあっという間にそれを引き千切った。
「馬鹿なっ、俺のロープは怪人すら絞め殺すというのに・・・・・・」
エックスライダーがライドルを抜いた。ホイップにして切りつける。
間合いを離す。エックスライダーはそれを追うがそれより速く手裏剣を飛ばしてくる。
ライドルで叩き落す。それは予想していた。
右手の甲から何かが飛び出てきた。それはスチールワイヤーで出来たマイクロチェーンだった。
それも叩き落そうとする。だがライドルにからみついてきた。
「・・・・・」
その瞬間ゼクロスは右手から電流を発してきた。かなりの高圧電流だ。速い。エックスライダーとて避けられなかった。
「うおおっ！」

高圧電流がエックスライダーを打つ。咄嗟にライドルを離しそれ以上のダメージは避けたもののかなりの痛手だった。

ゼクロスは甲にチェーンを収めた。そして今度は左手のチェーンをエックスライダーにからませようとする。チェーンが飛ぶ。だがその先端を何かが弾いた。

集結、そして新たなる敵その七

「！？」

ゼクロスがそれが飛んできた方を見た。そこにはホッパーを飛ばしたブイスリーがいた。

「ホッパーにはこうした使い方もあるんでな」

そう言うと少しずつ間合いを詰めていくブイスリー。対するゼクロスも顔だけでなく全身を向けてきた。

「行くぞ！」

ブイスリーが大地を蹴った。ゼクロスも同時に大地を蹴った。

「ムン！」

パンチを繰り出す。ゼクロスも同時にパンチを繰り出す。

二つの影が交差した。両者はまたもや同時に着地した。

「・・・・・・・・・」

ゼクロスは相変わらず言葉を発さず振り向いた。そこにはブイスリーの背があった。

暫しブイスリーは動きを止めていた。だがすぐに片膝を着いた。

「は、速い・・・・・・」

技を出したのは同時であった。しかし技の速さは違っていたのだ。

ゼクロスのパンチはのブイスリー胸を正確に打っていた。

「地上ならともかく、空ならばどうだ！」

スカイライダーが跳んだ。セイリングジャンプで空中に浮かんだ。

「さあ来い、空中戦ならば負けはしない！」

急降下して襲い掛かる。一撃目はかわされた。

「だが・・・次はどうだ！」

左足で蹴りを繰り出す。ゼクロスはそれを右手で受け止めた。

「まだだ！」

左の蹴りの力を反動させ空中で前転した。右足で踵落としを浴びせる。今度は左手で受ける。

そしてその右手を掴んだ。空中へ放り投げる。
「その程度！」
勢いが落ちると姿勢を取り戻そうとする。だがその時ゼクロスは膝の十字から何かを出していた。
それは小型の機器だった。手に取るとスカイライダーへ向けて投げ付けた。
「まさか！」
スカイライダーは体勢を整えず慌てて飛び上がった。それまでいた場所が爆発し爆風が彼を打った。
「・・・・・・まさか小型爆弾まで持っているとは」
スカイライダーは爆風に打たれつつ呟いた。
その下では一号と二号がゼクロスと対峙していた。かって多くの強力な怪人を倒してきた無敵のダブルライダーである。
「行くぞっ！」
まず一号が動いた。素早く懐に飛び込み手刀を浴びせる。
二号はあえて動こうとはしない。だが的確に場所を変え一号のサポートに回っている。
一号はゼクロスに隙を与えようとしない。次々に攻撃を仕掛ける。流石にこれまでの幾多の死闘をくぐり抜けてきた経験が生きている。
連続してダメージは多く与えられないが隙の少ない攻撃を仕掛ける。ゼクロスに揺さぶりを仕掛けようという作戦だ。
それに対してゼクロスは防戦するだけである。そこには感情の揺れなど一切見られない。
「何という奴だ、これだけの攻撃を受けても・・・・・」
蹴りをだそうとする。この時一号は小石を踏んだ。ほんの僅かではあるがバランスが崩れた。そしてその崩れを見逃すゼクロスではなかった。咄嗟に屈んだ。
足払いを仕掛ける。一号の軸足である右足を打った。
「うわっ！」
「本郷っ！」

二号が飛び出す。一号はバランスを崩しながらも後方に宙返りをする。そして両手で着地しそれをバネにして跳ねて両足で見事に着地した。

ゼクロスはその隙を見逃そうとはしなかった。だが間に入ってきた二号に阻まれ思うように進めなかった。

間合いが離れた一号の替わりに二号がきた。多彩な技を繰り出す一号とは違いパンチ主体の攻撃である。

だがその重さが違った。その一発一発が一号のものと比べて重いのである。速さは若干一号の方が上だがその分重さが乗っておりガードの上からでも響いてくる。

二号もまた攻撃の手を緩めない。ゼクロスを押し潰す様な攻撃だ。しかしゼクロスは微動だにしない。まるで人形の様にガードし続ける。これに対しそれまでの各ライダーとの闘いで彼の強さを知る二号もまた下手に隙のある攻撃は仕掛けられない。必然的にパンチが多くなる。

「まだ立っていられるか」

パンチに更に威力を入れた。腕の筋肉に力が入った。

集結、そして新たなる敵その八

これが失敗だった。それによりスピードが僅かに殺された。二号も気付かない程の差であったがゼクロスにとってこの差は歴然たるものだった。

拳を受け止めた。そして横に払った。二号は何とか受身を取ったものの地面に叩き付けられそのダメージは思ったより大きかった。

「大丈夫か、一文字」

「ああ、戦闘には支障は無い。しかし何てえ力だ」

駆け寄って来た一号に言った。

起き上がる。その目の前では他の七人のライダーに囲まれながらもゼクロスが悠然と立っていた。

構えは取っていない。ただ立っているだけである。しかしその全身から絶大な気を発している。

「何て奴だ。これだけの数を相手に互角以上に渡り合ってやがる」

二号が舌打ち混じりに言った。

「これだけの戦闘力を持つ奴に会ったのは初めてだ。首領があれだけの自信をみせただけはある」

一号も二号の言葉に同調した。彼等だけでなく他のライダーも皆傷ついている。

「一対一では勝てないな」

「ああ、あれをやるしかない」

二人は頷き合った。そして他の七人のライダーに言った。

「皆、あれをやるぞ」

一号は言った。その言葉を聞いただけで他のライダー達の間に戦慄が走った。

「危険な賭けだ。もし失敗すればもう我々に奴を倒す方法は無い。やるしかないんだ」

二号も言った。その言葉には力強い、他の者達を説得する力があ

った。
二人の言葉に一同頷いた。そしてゼクロスとの間合いをとりはじめる。
「行くぞ、我々の最強最大の合体技・・・・・・」
一号が構えを取る。それに合わせ他のライダー達も構えを取る。
「・・・・・・・・・」
ゼクロスはライダー達の輪の中にいる。まるで機械の様に彼等の動きを見ている。
「ライダァーーーーオーールキィーーーーック!!」
ライダー達が一斉に跳んだ。そして急降下し四方八方から同時に蹴りを繰り出す。
蹴りは一直線にゼクロスを襲う。九人のライダー達の渾身の蹴りだ。如何にゼクロスとてかわしようがなかった。
蹴りがゼクロスを一斉に撃った。凄まじいダメージを受けゼクロスの身体は制止した。
ライダー達が飛び退き離れる。その間ゼクロスは微動だにしない。いや、出来なかった。
「やったか・・・・・・」
それでもゼクロスは立っていた。全身から白い煙を発しながらもまだ立っていた。
「まさかまだ・・・・・・」
いや、さしものゼクロスも全ライダーの攻撃を同時に受けては無事ではいられなかった。がくりと片膝をついた。
「・・・・・・やったか」
それを見てライダー達も力尽きた。倒れこそはしなかったが最早これ以上の戦闘は不可能だった。
「フハハハハハハ、流石だな、ライダー諸君」
そこへ首領の声がした。
「まさかゼクロスを退けるとはな。また一段と腕をあげたようだな」
「首領!」

ライダー達が叫んだ。
「今日は退くとしよう。ゼクロスも負傷していることだしな」
「何を、まだだ！」
ライダー達はふるい立った。尚も戦おうとする。
「無駄だ、最早諸君等は立っているのがやっとだ」
「くっ・・・・・・」
その通りだった。それを気力で支えているのだ。
「次に会う時を楽しみにしている。その時こそ君達の最後だ」
その声と共にゼクロスは跳んだ。そして何処かへ姿を消した。
「行ったか・・・・・・」
一号がゼクロスが去ったのを見届け呟いた。
「ああ。それにしても怖ろしい奴だった」
二号が言った。その言葉に他のライダー達は沈黙した。
後ろから滝達の声がする。助けに来たらしい。

集結、そして新たなる敵その九

「それにしても圧倒的な力だな」

大幹部と改造魔人達が暗い一室で立ったままモニターを見ている。その中の一人が呟いた。

身体の右半分は機械である。チューブが目につく。

左半分は生身の身体である。右が青、左が赤のその身体はまるで冥界の女王ヘルの様である。下半身には黒いズボンとブーツを履いている。

頭髪の無いその頭には巨大な金属の飾りがある。そしてその中央に紅い宝玉が埋め込まれている。彼の名はマシーン大元帥、デルザーの改造魔人の一人である。

エジプトの歴史は古い。それを示すものとしてピラミッド、象形文字、岩石男爵の偉大な祖先スフィンクス等がある。

その一つとしてミイラがある。これはファラオや神官達の遺体を独自の技術により保存処置を施したものだ。

かって偉大なファラオがいた。名は歴史には残っていない。だがその時代に生きた人達にとって忘れられない偉大な王であった。

法を定め河を治めた。エジプトの歴史はナイルにより築かれた。そのナイルを治めたのである。そして畑を開き皆の腹を満たした。葡萄や麦の酒で喜びを教えた。

文化を興し人としての豊かさを教えた。獣を討ち侵略者を退けエジプトの土地を広げた。名君であった。

その為彼が死んだ時民達は嘆き悲しんだ。遺体は慣例によりミイラにされ巨大なピラミッドに置かれた。そして砂漠の中に多くの宝と共に眠ることとなった。

時代は流れ彼の事は歴史の中に埋もれてしまった。人々はその名を忘れた。ただ偉大な一人の王がいたという言い伝えのみが残った。だがそれは最早伝説であった。

更に時代は流れた。墓泥棒達も知り得ない砂の奥深くに彼の墓はあった。その中には誰もおらずただ静かに眠っていた。

だがある時彼は目覚めた。ミイラとは霊魂が戻った時の為に戻るべき身体を残す為に為されるものである。そのミイラに彼は戻ってきたのだ。

彼は墓を出砂の海から出てきた。そして人の世に再び現われたのだ。

彼は自分の身体の事に気付いていた。人の王にはなれないと知った彼は夜の者達の王となった。

その彼の下に一人の異形の者がやってきた。ある者の使者だという。

王は彼と会った。彼は言った。王の力を欲しい、と。

その使者の主は欲していた。更なる力を。その為に王を自らの下へ誘っているのだ。

王はそれを承諾した。そして魔の国に入り改造魔人となったのだ。

そしてマシーン大元帥が誕生した。デルザーの中でも特に絶大な力を誇り秀でた戦略と統率力で知られている。

「全てのライダーのデータを収集して開発しただけはある。あのライダー達と互角以上に渡り合っている」

「うむ。苦労しただけはある」

アポロガイストが言った。

「流石は元ゴッド第一室長だ。見事な仕事だ」

マシーン大元帥は彼をねぎらう言葉をかけた。

「こんな事は仕事のうちに入らん。俺の仕事はエックスライダーを倒す事だ」

「そうか。では奴の首級をあげるのを楽しみにしている」

そう言うと再びモニターに視線を移した。

「これならば問題無い。我等が悲願は必ずや達成される」

「そういえばこやつの開発は貴様がしておったのだな」

地獄大使が彼に言った。

「うむ。ある者を基にしてな」
「ある者？」
ゼネラルモンスターが尋ねる。
「うむ。貴様がペルーで作戦行動中に捕らえた者のうち特に優れた者を使わせてもらった」
「あのセスナを操縦していた日本人の若者か」
「そうだ。あれだけの人材、使わぬわけにはいくまい」
マシーン大元帥はそう言うとニヤリ、と笑った。
「ところであの男には姉がいたな。新聞記者をやっていた」
荒ワシ師団長が言った。
「うむ、一緒に捕らえていた筈だが。どうしたのだ？」
「死んだ」
ゼネラルモンスターの質問にマシーン大元帥は答えた。
「正確に言うと殺された。ヤマアラシロイドによってな」
「ヤマアラシロイド・・・あの男か」
その名を聞いてアポロガイストは嫌そうな声を出した。
「ゼクロスの改造前に目の前で電気椅子に架け処刑した。バダンに肉親への愛なぞ不要と言ってな」
「そうか。さぞかしいい叫び声を出したのだろうな」
荒ワシ師団長が嬉しそうに呟いた。
「わしとしては改造人間にするつもりだったのだがな。その前に執行してしまったのだ」
「奴も怪人軍団の長。それなりの事をしなければ示しがつかんのだろう」
地獄大使が言った。
「うむ。おかげでゼクロスの感情を除去するのは上手くいったがな」
「何っ、あの男には感情が無いのか？」
メガール将軍が尋ねた。
「そうだ。それどころか痛みも感じない。奴の身体の九十九パーセントは機械となっている。能以外は全て機械だ」

「そうか。つまりわし以上の機械人間ということか」
魔神提督がその言葉を聞いて言った。

集結、そして新たなる敵その十

「そういうことになるな。しかも自己回復能力も高い。おそらく先程の戦闘の傷はもう回復している頃だ」
「なんと・・・・・・。そして奴はこれからどうなるのだ?怪人軍団に入るのか?」
地獄大使が尋ねる。
「首領のお言葉だと怪人達とは別らしい」
「それではわし等の中に入るのか?そうだとすればあ奴が最高幹部か」
「いや、最高幹部はもう決まっている」
不意に首領の声がした。
「首領・・・・・・・・・」
一同畏まる。首領はさらに言葉を続けた。
「バダンの大幹部及び改造魔人達を束ねる最高幹部、その者は・・・・・・」
モニターが消える。真っ暗闇になった部屋に一人の男が現われた。
「この男だ」
「き、貴様は・・・・・・!」
その男の姿を見て地獄大使の声が震えた。
「久し振りだな、地獄大使。いや、ダモンよ」
驚きと怒りの表情の地獄大使を前に彼をダモンと呼んだその男はニヤリ、と笑った。
「・・・信じられん。あれだけのダメージがもう回復してしまっているとは」
治療室の中で横たわるゼクロスを見ながら白衣の男が驚嘆の声を漏らした。
「最早何処にも破損はありません。全快しております」
助手の一人が報告した。

「これがバダンの最強の改造人間、ゼクロスか。怖ろしい力だ」
「これだけの回復力は今まで見たこともありません。ガランダーのキノコ獣人以上です」
「そうだろうな。おそらくこれまでのどの改造人間よりも強いだろう。・・・・・・しかし」
「しかし・・・？」
その言葉に助手は突っ込んだ。
「感情が全く見られない。改造人間とはいえこの様な者は見た事が無い」
「だからこそ最高の改造人間ではないのですか？感情があればそのぶん余計な事をしてしまうでしょうし」
「うむ、しかしまるで機械だな」
白衣の男は表情を暗いものにした。
「博士」
助手はここで表情を厳しいものにした。
「あまりその様な事は仰らない方が。何処で誰が見聞きしているかわかりませんよ」
「・・・そうか。そうだったな」
「はい。私はここで話した事は忘れますし」
「そうだな。私達はここで何も話はしなかった」
「そうです」
二人はゼクロスの検査を再開した。それが終わるとゼクロスは無言のまま部屋を後にした。
（本当に機械だな、あれでは）
博士は今度は口に出さなかった。ただ心の中で呟いただけだった。
ゼクロスはそのまま廊下を歩いていく。そしてある部屋の前に来た。
入口の側のボタンを押す。シャッターが左右に開く。ゼクロスは部屋の中に入っていった。
「お帰り、ゼクロス」

ベッドとテーブルの他は何も無い部屋だ。装飾等は一切無い。がらんとして無機質な部屋だ。

その中に一人の壮年の男性がいた。黒い髪を持ち眼鏡をかけたアジア系の男である。

ゼクロスは相変わらず一言も発しない。ただ無言で部屋の中央に歩を進める。

彼の顔が変化した。仮面が変質していく。

口が変わった。人の口になる。引き締まった口許だ。

次に頭部が変化した。黒いパーマをかけた髪が現われる。

仮面が次第に薄れていく。眼はまだ緑のままだがまず赤い部分が消えていき肌が露になっていく。

そして黒い部分も消える。アジア系の青年だった。精悍な顔立ちの青年である。

眼が緑のものから人のものになっていく。黒い瞳である。しかしその眼には感情は一切見られない。

バトルボディが消えていく。中からカーキ色の軍服が現われる。ソ連軍の軍服に似ている。引き締まり筋肉質の身体によく似合う。

「報告は聞かせてもらった。全てのライダー達を相手に見事な初陣だ」

「・・・・・・・・・」

ゼクロスは男の方を見た。無言のまま会釈する。

「首領も暗闇大使もお喜びだ。これならばライダーとて恐るるに足らず、とな」

ゼクロスはその言葉には答えない。首領や暗闇大使といった名に対しても反応しない。

「これから始まるであろう我がバダンの世界征服計画において君は重要な役割を果たす。その主な仕事はライダー達の抹殺だ」

「・・・・・・・・・」

「やがて次の作戦が下されるだろう。それまでは身体を休めておいてくれ」

ゼクロスは無言のまま席に着いた。男はそれを黙って見ていた。
（やはり感情は無いな。バダンの記憶除去、そして洗脳の技術はやはり完璧か）
男はそう思い忌々しげに顔をしかめた。
（実の姉を目の前で殺したうえで洗脳する・・・何という非道なやり方だ）
口には出せない。もし出したなら彼の命は無い。
（そして彼はその事を一切知らないままバダンの野望の駒にされていくのか。そしてその拳を血で染めていくというのか）
唇を噛んだ。血が滲み出る。だがそれには構わない。
（ライダーといえど彼には適わない。最早打つ手は無いか）
絶望が彼の心を覆っていく。暗澹たる思いだ。
「ライダー・・・・・・」
その時彼は無意識にその言葉を漏らしてしまった。それはゼクロスの耳にも入った。
「・・・ラ・・・・・・ライダー・・・・・・」
ポツリとゼクロスが言った。一言だけだが。そう、彼が言葉を発したのだ。
「何！」
男は思わず叫んだ。感情を全て消された彼が言葉を出す筈が無いからだ。
「ど、どういう事だ・・・・・・」
男は狼狽した。有り得ない事だった。
「もしかして・・・・・・・・」
男の心に希望が宿った。光が今暗闇の中から甦りそれを打ち破らんと輝きはじめた。

集結、そして新たなる敵　　完

2003・11・12

新生と復活その一

新生と復活

かろうじてゼクロスと引き分けたライダー達は滝や役に助けられ喫茶アミーゴへ戻った。そこには立花藤兵衛達が待っていた。

「そうか、バダンか。次の組織の名前は」

話を聞いて立花は呟いた。

「そしてゼクロスか。かなり厄介な奴だな」

「・・・・・・・・・」

ライダー達は一言も発しない。その通りだからだ。

谷源次郎もいる。滝や役、がんがんじい達もである。

「・・・そして御前達、まさか負けたままでいるわけじゃないだろ」

立花はライダー達に言った。その言葉に彼等は一斉に頷いた。

「・・・・・・よし、それでこそライダーだ」

立花は表情を変えずに頷いた。顔は笑っていない。だが心は違っていた。

「今から鍛え直すぞ。ビシビシ行くからな。覚悟しろよ」

長い間彼等と共にいたからこそ知っている。彼等の本当の強さはその心にあるのだと。

「おやっさん、けれどそれだけじゃあ駄目でしょう。新しいマシンも開発しないと」

滝が言った。

「任せろ、最高のマシンを作ってやる」

立花は満心の笑みで答えた。

「そしてライダー達の更なる改造も必要だ」

不意に誰かの声がした。

「その声は」

筑波とがんがんじいが店の入口の方を振り向いた。そこには二人がよく知る人物がいた。

「遅れてしまった、済まない」
優しい微笑と共に詫びる。志度博士だ。
「君達の強化改造は私に任せてくれ。知人の科学者達の協力も得られるし」
「おお、それは心強い」
谷が笑顔で言った。立花達も同じだ。
「しかし改造する場所が・・・・・・」
ふと滝が口にした。それに対し博士は扉の方を指し示した。
白髪混じりの眼鏡をかけた初老の男性が現われた。知的な顔立ちをしている。
「海堂と申します」
彼はそう名乗った。
「医者をやっている。生物工学の権威でもある。私の学生時代からの知人なんだ。彼もゲドンに家族を殺されている」
「そうですか、ゲドンに・・・・・・」
立花が顔を曇らせる。ゲドンは歴代の組織でも特に残虐な組織であった。
「だからこそ協力したいそうだ。大丈夫、腕の方は確かだ。それに」
そう言って博士は意地悪そうに笑った。
「美人の助手もいるしね」
「おいおい、志度君、ルミちゃんは僕の養子だよ、助手じゃない」
その言葉に海堂博士は困惑した。
「まあこういう人物だ。悪い奴じゃない、安心してくれ」
二人の科学者はそう言うと店の中へ入った。
「じゃあまずは強化改造か。わし等はマシンの開発に取り組むとしよう。おい滝、早速始めるぞ」
「えっ、今からですか？」
「何言ってやがる。思い立ったが吉日だって言うだろうが」
「まあそうですけど。ったくおやっさんは相変わらずせっかちだなあ」

「当たり前だ。のんびりしていられるかってんだ」
「それでしたらわしも協力させてもらいますよ。」
谷が言った。
「おいがんがんじい、御前も協力しろ」
「へえ、まあ」
パンケーキをせわしく口に入れつつ答える。
「じゃあ僕も手伝わさせて下さい」
役も協力を申し出てきた。
「あれ、あんたもバイクを扱えるのかい？」
「大学では工学部だったんです。それにいつも乗っていますので」
「おお、そりゃあ心強いね」
ふと役の目に強い光が宿る。しかしそれには誰も気付かなかった。
「ではライダー諸君は私と共に来てくれ。まずは君達のデータを見てみたい」
「はい」
海堂博士に言われライダー達は答えた。
「そして結城君・・・いやライダーマンと言った方がいいか」
博士の言葉に結城は黙って頷いた。
「データの分析及び強化改造には君の力も必要だ。協力してくれるね」
「はい」
結城は承諾した。
「悪いが君の改造は最後になると思う。だが安心してくれ。君にもとっておきのプレゼントを用意してある」
「有り難うございます」
結城はその言葉に微笑みで返した。
「さて忙しくなるぞ。今から寝ずにやるぞ！」
立花の声が響く。滝達を引っ張って店の裏のガレージへ進んでいく。
ライダー達はバイクを立花に預けると海堂博士と共に歩きはじめ

た。その先にどんな苦痛が待っていようと彼等は恐れていなかった。
正義の為、世界の為ならばたとえどの様な苦しみにも耐える、それ
がライダーなのだから。

新生と復活その二

ライダー達への宣戦布告とゼクロスの名乗りを終えたバダンは次の作戦の計画を進めていた。

「マシーン大元帥よ、その策を申してみよ」

暗い巨大な一室に首領の声が響き渡る。壁にバダンの紋章が掲げられている。声はそこから発せられている。

部屋の中に幹部達が揃っている。その足下は白い霧で包まれている。

「はい。まずはライダー達をこの日本で一人残らず倒してしまうのです」

マシーン大元帥は紋章に一礼して話しをはじめた。

「ライダー達をか」

「はい。我等の計画の最大の障壁はやはりライダーです。奴等の為にこれまで多くの計画が水泡に帰してきました」

「そうだったな。世界各地での作戦は全て奴等に阻止されている」

その言葉を聞き大元帥以外の全ての幹部達は顔を曇らせた。

「だがどうやってライダー達を倒すのだ。ゼクロスは今他の作戦に従事しているのだぞ」

「ゼクロスは必要ありません。ライダーをそれぞれ誘き出し一人ずつ始末していくのです」

「成程、各個撃破か。だがどうするつもりだ」

「日本の九つの地域でそれぞれ作戦を同時に展開します。それにライダーを誘い込むのです」

「そうか、そのそれぞれの地にライダーを倒せるだけの戦力を配しておくのだな」

首領は満足そうに言った。

「面白い。その策採用しよう」

「有り難き幸せ」

マシーン大元帥は恭しく頭を垂れた。
「そしてライダーを倒す戦力だが」
「それでしたら私にお任せを」
不意に声がした。
「ムゥッ!?」
金と銀の蛇腹の如きバトルボディにファラオの如き兜を着けた男が進み出てきた。緑のマントと黒いブーツを身に着け右手には鞭、左手は五つの鉤爪となっている。地獄大使に酷似した風貌だ。
それでいて雰囲気は地獄大使のそれとは異なる。彼に比べて落ち着き知的な印象である。
彼の姿を認め地獄大使は露骨に嫌悪感を示した。相手もそれが解かっているのであろう。地獄大使の方へ視線を移し口の端を歪めた。
「暗闇大使か」
その名を呼ばれ暗闇大使は頭を垂れた。
「申してみよ」
「ははっ」
首領の許しを得て彼は口を開いた。
「ライダーを倒す戦力ですが我がバダンの怪人軍団こそそれに相応しいかと存じます」
「何っ、今あの者達を投入するというのか」
首領は驚きの声をあげた。
「はい。ライダーを倒すにはそれだけの戦力が必要です。それを担えるのは怪人軍団をおいて他にありませぬ」
暗闇大使は言葉を続けた。
「ライダーを倒すのに戦力を惜しんではいけませぬ。切り札を投入してこそそれが成るかと存じます」
「切り札、か」
首領は思案する声を出した。
「しかし怪人軍団が倒れた場合はどうする。責任は貴様にあるのだぞ」

「その点は御心配無く」
暗闇大使は不敵に笑った。
「今我等の野望を達成させ得る最強の兵器を開発しております。これさえあればよしんば怪人軍団が倒れたとしても十二分に釣り合いが取れまする」
「それは一体どういう兵器だ？」
「それは二つあります」
暗闇大使の顔が変わった。獣、いや悪魔の如き凄みのある笑みである。
「二つもあるというのか」
「はい。一つは全てを破壊し尽くす魔神の鉄槌、そしてもう一つは・・・・・」
更に怖ろしい笑みとなる。
「私自身の中にあります」
そう言い終えるとニヤリ、と笑った。まるで地獄の奥底の魔王が笑ったかの様な顔であった。
「そうか、貴様自身がか」
その言葉を聞いて首領は満足そうに声を出した。
「面白い。それではこの日本における作戦はマシーン大元帥と暗闇大使に任せることにしよう。他の者はそれぞれの担当の地域を定めた後作戦を開始せよ」
そう言い終えると声は消えた。

新生と復活その三

会議の後百目タイタンは自室に戻っていた。そして壁に掛けられている地図を見た。他にはストロンガーの絵も掛けられている。そこには一本のダーツが刺さっている。

「この俺がストロンガーを倒す作戦を外され他の国に行くなぞ・・・・」

葉巻を口にする。だがすぐに口を離し手から出した炎で燃やした。葉巻は煙となって消えた。

「マシーン大元帥め、、忌々しい奴だ」

ダーツを手に取り投げる。それは壁に向かって飛んでいく。

筈だった。ダーツは空中で止まった。

「ムッ!?」

不意に白い影が姿を表わした。ゼネラルシャドウである。

「ご立腹の様だな」

ダーツを指で玩びつつタイタンに言った。

「・・・何の用だ、断りも無く部屋に入ってきて」

タイタンの声がさらに不機嫌なものとなる。

「何、様子を見に来ただけだ。さぞ機嫌が悪いだろうと思ってな」

「それは貴様とて同じだろう」

無数の目でシャドウを睨みつけた。それに対しシャドウはいささかも怯まない。

「そう見えるか」

「貴様とマシーン大元帥の関係、俺が知らぬと思うか」

その言葉を聞いてシャドウの態度が一変した。

「・・・・・そこまで知っていたか」

タイタンを見据えた。

「俺には百の目がある。この目に映らぬものは無い」

「成程な。だが俺も貴様とマシーン大元帥の事で面白い話を聞いて

いる」
「それは何だ?俺は知らんが」
とぼけてみせた。彼等は水面下でマシーン大元帥の一派と激しい内部抗争を行なっているのだ。
「ほう、知らぬのか」
「全くな」
タイタンはそううそぶいた。
「まあ良い。ところで面白い情報を手に入れたのだが」
「情報?何だ?」
タイタンの顔色が変わった。
「ライダー達が海堂という男と接触したそうだ」
「海堂・・・・・。医学、生物工学の権威の海堂博士か」
「そうだ。そして立花藤兵衛が何やら必死で動き回っている」
「フン、どちらにしても死に損ないの老いぼれではないか。奴等の始末はライダーの後だ」
「そうだな、そうなれば良いが」
シャドウが意味ありげに言った。
「それはどういう意味だ?」
「・・・・・・・・」
スッと一枚のカードを見せた。
「トランプか」
「そうだ。カードは言っている。強敵が現われると」
その言葉にタイタンは無数の視線を向けた。
「貴様はそれがライダー達だというのか?」
「それ以外にどう見るというのだ?」
その言葉には説得力があった。
「・・・・・いや、他には見当たらんが」
タイタンは暫し思案した後で言った。
「ただ俺も一つ気になる事がある」
「何だ?」

「このカードを見てみろ」
シャドウはそう言うと三枚のカードを出した。タイタンはそれを見た。
「どういう意味だ？」
タイタンはカードは使わない。だからそれが何を意味するのか解からなかった。
「『新たなる人物』という意味だ。それも敵のな」
「馬鹿を言え。ライダーは全て日本にいる。普通の人間が出てきたところで恐れる必要は無い」
「そう、『人間』ならな」
シャドウは意味ありげに言った。
「何が言いたい」
「いや・・・まだよくわからんがな。ともかく俺の言いたい事はこれで全てだ」
そう言うとマントを翻した。
「では失礼させてもらう。マントフェイドッ！」
シャドウはマントで全身を包んだ。そしてそれに隠れる様に姿を消した。
「フン、気の小さい奴だ。今更雑魚が出ようと大した事は無いわ」
フフフフフ、と含み笑いをする。だが一つの事に気が付いた。
「・・・・・まさかな」
だがそれを脳裏で打ち消した。そして彼も全身から炎を発しその中に消えていった。

新生と復活その四

「信じられん、まさに奇跡だ」
ゼクロスの部屋において伊藤博士は彼と向かいに座って言った。
「まさかこの様な事が起こるとは・・・・・・」
それは驚嘆の言葉であった。そして歓喜も含まれていた。
「博士・・・ナゼソンナ顔ヲスル・・・・・・」
ぎこちない、まるで機械の様な声である。しかしそこにはほんの僅かだが心の動きがあった。
「この顔か・・・ゼクロス、これは喜びというものだ」
「ヨロコビ・・・・・・」
その声には抑揚が無い。しかし何かを感じ取ろうとする意志はある。
「そうだ。嬉しい時にこういった顔になるんだ」
「嬉シイ・・・何ダソレハ・・・・・・」
「そうか、君は全ての感情と記憶を消されてしまっているのだったな」
博士は哀しそうな顔をした。
「マタ顔ガ、変ワッタ・・・・・・」
ゼクロスはまた言った。
「そう、人間は顔が変わるんだ。心というものがあるからね」
「ココロ・・・・・・」
「そう、心だ」
博士は毅然とした表情で言った。
「今から君に私が出来る限り全ての心を教える。そして自分で考えて欲しい」
「ココロ・・・考エル・・・・・・」
ゼクロスは無機質に声を出すだけである。だが博士はそこに大いなる希望を見ていた。

（そういえば）
博士は幼い頃読んだ本の事を思い出していた。
（人の世には多くの災厄があるが最後に人に残されたものがあるとあったな）
博士は心の中でその残されたものの名を読んだ。
（それは希望・・・・・・）
博士は笑った。そしてゼクロスに次々と声をかけていった。
海堂博士は城南大学の研究室にいた。そして結城と共にライダー達のデータを調べていた。
「皆随分ダメージが蓄積されているな。よくこれで今まで戦ってこれたものだ」
博士は煙草を口にくわえつつライダー達のレントゲン写真を見て言った。
「普通の人間ならそうでしょうけどね。我々ライダーは違うのですよ」
傍らにいる結城は微笑んで言った。
「そういう君もかなりダメージが蓄積されているぞ。あちこち悲鳴をあげているだろう」
「え、ええまあそれは・・・・・・」
博士に言われ結城は口ごもった。その通りだったからだ。
「だが安心し給え。これも全て治してやる」
「有り難うございます」
「ただアマゾンだけは違うな。彼は私が見ている間にも傷が見る見る回復していった」
「彼は全身のインカの技術で細胞を改造されて造られましたからね。他のライダーとは違うのですよ」
「そういえば彼はアマゾンへ戻っていったそうだね。姿が見えないと思ったら」
「なんでもガガの腕輪を取りに行くらしいです。あれを着けると本当のパワーが発揮されるらしくて」

「ふむ。では彼は改造する必要は無いということか」
「はい」
その言葉を聞き博士は暫し考え込んだ。
「彼は何時戻って来るんだい？」
「そうですね、三日前に日本を発ちましたからあと三日もすれば帰って来ると思います」
「そうか。では本格的な改造はそれからにしよう」
「えっ？すぐに始めるのではなかったのですか？」
「今は無理だ。君達の今の身体では強化改造手術を施すと命の危険がある。それでは元も子も無い」
「はい・・・・・・・・・」
結城は頷いた。その通りだった。今の自分達にはそれに耐えられるだけの余分な体力は無かった。
「今はこれまでの幾多の戦いで蓄積されたダメージを回復する。それが先だ」
「解かりました」
結城がそう言うと博士は二カッと笑った。
「まあ任せておいてくれ。悪いようにはしないから」
三日後アマゾンが帰って来た。その足で研究室に来た。
「お帰り、アマゾン」
「ただ今、博士」
笑顔で迎えた海堂博士と志度博士に対してアマゾンも笑顔で応えた。その左腕にはあの二つの腕輪がある。
「それがガガの腕輪か。インカ帝国の超エネルギーが秘められているという」
「そう。これさえあればアマゾン負けない」
アマゾンは左手で拳を作って言った。
「うん。見たところ君は大丈夫なようだ。それではわし等の作業を手伝ってもらおう」
「頼むよ、アマゾン」

志度博士も言った。結城も研究室に来た。
「さて、ライダー達のダメージも取り除けたし次はいよいよ強化改造だが」
アマゾンは他のライダー達の所へ言った。研究室にいるのは二人の博士と結城である。
「基本的な弱点を克服し長所を改造するのは勿論だが」
海堂博士は他の二人に話し掛ける。二人は席に座りそれを聞いている。
「回復力の強化にも力を入れるべきだな。今までの戦いを見てみるとダメージが大き過ぎる」
「そうだな。今度の敵は一回の作戦に多くの改造人間を投入してくる。生半可な回復力では持たない」
志度博士も言った。そして結城の方を見る。
「結城君、君にもそれは解かっている筈だ。実際に戦うのは君達なのだからな」
「はい、私もそれは痛感しました」
結城は口を開いた。
「バダンはこれまでの組織とは比較にならない程の戦力を擁しています。それに恐るべき改造人間もいます」
その時奇巌山での戦いが脳裏に甦った。ゼクロスの強さは圧倒的だった。

新生と復活その五

あの時は九人のライダー全ての力を結集してなんとか引き分けた。だが一人ならどうなるか・・・・・・。それは彼等自身が最もよく知っていた。

「ライダーの改造に回復力の強化は不可欠です。是非お願いします」

結城は大きく頷いた。

「ところでそれはどうやって改造するのです?機械による強化細胞ですか?」

「いや、実はある人物の能力を応用しようと思うんだ」

「ある人物?」

海堂博士の言葉に結城はきょとんとした。

「それは一体誰ですか?」

「アマゾンだよ」

海堂博士は微笑んでそれに答えた。

「アマゾン・・・・・・ああ成程」

その名を聞いてすぐに理解した。

「彼のあのインカの超エネルギーを応用するのですね。それなら問題は無い」

「どうだ、彼のデータを見て考えたんだ。悪くはない考えだろう」

「ええ、とても」

結城は大きく頷いた。

「さて、後はこれを彼等に承諾してもらうのだが」

「俺達なら構いませんよ」

後ろから声がする。見るとアマゾンと七人のライダー達がいた。

「君達・・・・・・」

その姿を見て二人の博士は思わず言葉を漏らした。

「今のままではバダンに勝てない事は俺達が一番よくわかっています。だからこそ・・・是非とも」

「そうですよ、古代インカのエネルギーってのも悪くないですしね」
本郷と一文字がライダー達を代表するように言った。
「いいかね？他にも君達の機械の部分もかなり改造される事になるが。かなりの大改造だぞ」
「ええ、それはもう解かっていますよ」
海堂博士に風見が答えた。
「そうでもしなけりゃあのゼクロスには敵いませんしね」
沖も同意する。
「あいつをサシで倒せないと・・・・・・。おそらくまた出てくるだろうし」
神の脳裏にあの時のゼクロスの圧倒的な強さが浮かぶ。
「あいつにはでかい借りがありましてね。この手でぶっ潰してやらないと気が済みませんよ」
城が拳を振り回す。眼には強い怒りの色が浮き出ている。
「博士、もう準備は出来ているんでしょう？早速始めましょう」
筑波が志度博士を急かす。その言葉に博士は頷いた。
「・・・・・よし、君達の心、よく解かった。それでは早速手術を始めるぞ」
「はい！」
博士と九人のライダーは手術室へ向かった。扉が閉められ中には誰も残らなかった。ただ一つ、希望が残った。
喫茶アミーゴでは裏のガレージで立花が滝達と共にライダー達のマシンを改造していた。
「おい史郎、そこもうちょっとちゃんとやれ」
立花は新サイクロンのエンジンをスパナで調整しながら細面のひょうきんな顔立ちの若者に言った。
「はい～～・・・・・・」
その若者は情けない声で答えた。
「何だその情けない声は。それで世界が救えるとでも思っているのか」

「けど俺喫茶店のバーテンですよ。そんな事出来る筈ないじゃないですかあ」
「それを気合でやるんだよ。わし等がやらなけりゃあ誰がやるんだ」
「わかりましたよお・・・・・・。来てみたら閉店だから何してるかと思えば・・・・・・。とほほ」
史郎はまた情ない声を出した。
「何か史郎も変わらないな、本当に」
それを見て滝は笑った。
「おう、また喫茶店を開こうとしたらぶらっとやって来たんだ。使って下さいってな。昔の馴染みで置いたんだ」
立花は嬉しそうに言った。
「何でも勤めていた会社でリストラに遭ったらしくてな。どうしようかと悩んでいたらわしの事を思い出したらしい」
「へえ、そうだったんですか。そういえば五郎とかナオキはどうしてます？」
「二人共大学に行ってるよ。たまにうちへ来るぞ」
「それだったらまた会えるかも知れませんね」
「おう、楽しみにしとけ」
立花はエンジンをいじりながら答えた。どうもコーヒーを入れるよりもエンジンを触っている時の方が機嫌がいい。
「それにしても凄いマシンですね」
役がクルーザーのプロペラの部分を観ながら言った。

新生と復活その六

「どれも世界で最高レベルの博士が設計したものでっからなあ。当然ですやろ」

がんがんじいが言った。彼はマシンには詳しくないので手伝いをしているだけである。

「ええ。よくこれだけのものを作る事が出来たと思いますよ。将に天才です、これ等のマシンを作った人達は」

「そう言ってくれると皆喜んでくれまっせ」

がんがんじいはスカイターボに手を置きながら言った。

「その分整備は大変だがな。おかげで人手がいるってもんだ」

谷が役と共にクルーザーの整備をしながら言った。彼も実に機嫌がいい。

「だから俺達も呼んだんですか」

「仕事が溜まってるのになあ・・・。なんでこんな時に」

チョロこと小塚政夫と自称ルポライターの飛田今太が言った。飛田の方はいささか不満そうである。

「呼んでもらえるだけ有り難いと思え。二人共ライダーに会えると聞いて大喜びで来たんだろうが」

「そりゃあそうですけど」

「まさかマシンの整備までやらされるとは思いませんでしたよ」

不満を言っている割には手が動いている。しかもかなり手馴れている。

「おいがんがんじい、そこのペンチ取ってくれ」

「はいな」

谷に言われペンチを渡す。そしてクルーザーの中の破損部分を取り除く。

「クルーザーは俺と役君でやるからお前等はそっちのジャングラーを頼む」

「はい」
「わかりました」
谷の言葉に従い二人はジャングラーの方へ移った。
「また凄い外見のマシンですね」
滝がジャングラーを見て言った。
「ああ。アマゾンが高坂教授って人から受け取った設計図を基にわしが作ったんだ」
立花が言った。
「まあわしも完成したの見た時にはびっくりしたけれどな」
彼はそう言って笑った。
「けれど動きは凄いぞ。あれもインカの技術で動いているしな」
「へえ、そうなんですか」
史郎が言った。
「何で動いてるんです？ゴゴの腕輪とか何かでですか？」
「そんなもんあるか。『太陽の石』っていう秘宝のエネルギーらしい。何でもマシンが壊れない限り永久に動く事が出来るってえ話だ」
「そりゃあ凄いですね。流石はインカ帝国の技術だ」
「おい、それをこしらえたわしへの言葉はなしか」
二人のやりとりを面白そうに眺めていた役だがふと太陽の石という言葉に反応した。
（太陽の石・・・あれか）
何か知っているようである。
（それではジャングラーの改造は容易にできるな）
何か思いついたらしい。
「谷さん、ちょっと」
そう言うと谷の耳もとへ口を寄せた。
「？」
谷は不思議に思いつつも耳を寄せた。そして役の話を聞いた。
「ああ、そういうことなら俺は構わないが」
「それではいいですね」

「おう、どんどんやりな」
谷はそう言うと二カッと笑った。白い歯がこぼれる。
「おい二人共、こっち来て手伝え」
ジャングラーの整備をしている二人を呼び寄せた。
「えっ、けれどこれはどうするんです？」
「ジャングラーは役君がやってくれるそうだ。心配は要らないから来い」
「そういう事だったら」
二人は谷の言葉に従いクルーザーの方へ来た。それと入れ替わりにジャングラーへは役が来た。
（クルーザーもまだまだ改造出来るな）
ふとクルーザーの方へ向いてそう思った。だが口には出さない。
（後でいいな）
そしてジャングラーの横に来た。
「・・・・・・・・」
黙ってジャングラーを見る。確かに奇妙な外見である。まるで魚の様だ。
スパナやドライバーを手にマシンの中を開ける。そして太陽の石を取り出した。
「そういえば南米にも行った事があったか」
ポツリと漏らした。
そして懐から何か取り出した。見た事もない器具である。
それを太陽の石に当てる。石の光が強くなった。
「これで動力はよし」
石を再びマシンへ戻す。
「後はその他の部分だ」
その危惧でマシンの各部を調べていく。
その日の夜だった。皆真夜中まで働いていたが流石に疲れ果て寝ている。アミーゴの二階のソファーで仮眠をとっている。
だが役だけは起きていた。そしてガレージにあるマシンを見てい

た。
「新サイクロンはここをこうしたらいいな」
例の器具を使って色々と見ている。
「ハリケーンはこう、クルーザーは・・・」
それは数日続いた。そしてある日の朝立花達に数枚の設計図を手渡した。
「これは・・・・・・」
それはそれぞれのマシンの改造の為の設計図だった。細部まで実に細かく書かれている。
「少しマシンを調べてみまして。どこをどう改造したらいいか考えてみました」
役はそう言うと立花に微笑んだ。
「素人の考えなのでお話にもならないと思いますが・・・・・・。どうでしょうか?」
「いや、いいぞ役君、これはいいぞ」
立花は設計図を見ながら役に言った。声が喜びで上ずっている。

新生と復活その七

「ちょっと話し合ってみる。けれどこれで大体決まりだろう」
「ええ。わしもこれに異存はありませんね」
立花の横でその設計図を見ていた谷も同意した。
「この通りにやれば新サイクロンよりもずっと凄いマシンが出来上がりますよ。おやっさん、早速取り掛かりましょう」
「おう、やるぞ」
立花達は話合う事もなく早速改造作業を行なう為ガレージへ向かった。役はそれを見送っていた。
「マシンはこれでよし」
役は一言そう呟くとにこりと微笑んだ。
「後は・・・ライダー達の技量次第だが」
そこでこれまで見てきたライダー達の雄姿が思い起こされる。
「彼等ならば問題は無いな」
そう言うと立花達の後を追った。彼等は既にスパナ等を手に改造に取り掛かっていた。
「さて、まず一号だが」
海堂博士は手術室で横たわる本郷を前に言った。
「主に力をパワーアップさせよう。そうすればより技が生かされるようになる」
「そうだな。だがそれにより技の切れが落ちやしないか」
志度博士が危惧の念を漏らす。
「それは大丈夫だ。筋肉の動きがより活発になるからな。これでパワーも切れもこれまでとは比べ物にならない程凄くなる」
海堂博士は更に続ける。
「全体的な筋力がアップするからジャンプ力も当然強まる。まるで空を飛ぶ様になるだろうな」
「おお、それは凄い」

海堂博士はここで志度博士に尋ねた。
「ところで二号は君が改造を行なうのだったな」
「うむ。君と逆になるが私は彼のスピードを中心にアップさせていく。そうすれば彼のパワーがより生かされるようになる」
志度博士は自信をもって答えた。
「そして技の切れもジャンプ力もかなりアップさせるのだな」
「その通りだ。だが君の一号と同じ様なタイプにはならないだろうな」
志度博士はそう言うと海堂博士に微笑んだ。
「それはまたどうしてだ？」
「スピードをアップさせるからといって彼の個性を殺すつもりは無い。パワーはこれまでよりも更に上げていく。今とは比較にならない程にね」
「何だ、それでは私と考えが変わらないな」
海堂博士は笑った。
「それはどういう事だい？」
志度博士はその笑みに少し驚いた。
「私も一号のスピードはよりアップさせているよ。そうでなければ技は生きないからね」
「そうか。それにしても彼等は同じライダーだというのにかなりタイプが異なるな」
「だからこそ二人が揃った時凄まじい力を発揮するのだろう」
「うむ。伝説のダブルライダーの強さはそこにあるのか」
博士達は手術を始めた。二人のライダー達が今再び生まれ変わらんとしていた。
次に手術室に入ったのはブイスリーとエックスライダーであった。
「また随分と内臓されている能力が多いな」
志度博士はブイスリーのデータを見て思わず呟いた。
「２６の秘密と言われていますから。その分多様性がありますよ」
二人の博士の助手を務める結城が言った。

「ふむ、それでは全体的な改造は勿論だがこの内蔵されている能力をアップさせていくか。これで更に多様性が強まるだろう」
「ところで結城君、逆ダブルタイフーンというのは何かね？」
海堂博士は結城に尋ねた。
「ブイスリーのダブルタイフーンを逆回転させる事により爆風を起こさせる技です。しかしそれを使用すると三時間は変身が不可能になります。彼の弱点の一つとなっています」
「そうか、それではそこを直していこう。かなり弱体化するが変身が不可能になる状況ではなくなる筈だ」
「有り難うございます」
結城は海堂博士に礼を述べた。
「ところで他にも弱点はあるのかい？確か他にもあった筈だが」
「はい、それは・・・・・・」
結城は二人の博士にそっと耳打ちをした。
「成程、その程度なら簡単に改善出来る。もう彼の四つの弱点は無いぞ」
次にエックスライダーの改造に取り掛かる。
「彼はマーキュリー回路の能力をアップさせよう。そして海中での行動能力も上昇させる。これでかなり違う」
志度博士がマーキュリー回路を手に取り言った。

新生と復活その八

「志度君、もう一つ改造すべきものがあるぞ」
「？それは何だい？」
「これだ」
海堂博士はそう言って一本のスティックを取り出した。
「ライドルか」
「そう、これも改造してはどうだろうか。何といっても彼のメイン武器はこれなのだし」
海堂博士に手渡され見る。赤い柄に四つのボタンがある。
「そうだな。まずはホイップに刃を付けよう。そうすれば切れ味が良くなる。そしてスティックやロングポールの硬度も上げるとするか。これでかなり違ってくる」
「後ロープだな。これも硬度を上げ電流をより通し易くしよう」
「そうだな、それがいい」
こうして更に二人のライダーがパワーアップした。
次に来たのはストロンガーではなくスカイライダーとスーパー１だった。ストロンガーの改造について二人は何やら思うところがあるらしい。だがそれは口には出さない。
「筑波君、いやスカイライダーは僕が改造したんだったな」
あの時の記憶が甦る。自らを改造人間した自分に感謝してくれた事を。
「悪と戦える力か。私のせいで死の淵を彷徨ったというのに」
その眼が温かくなる。この若者がいるからこそ今の自分があるのだ。
「彼は私が改造する。今よりもずっと強くしてあげるよ」
博士はそう言うとまず重力低減装置を手に取った。
「まずはこれだ。今は空を飛べるだけだがそんなものではない。自由に空を動けるようにしよう」

そして次は全身に取り掛かる。
「九十九どころじゃない。今度は千の業を使えるまでになる。悪と戦いそれに勝つ為には無限の力が必要なんだ」
スカイライダーの瞳が微かに光った。意識は無い筈である。しかし博士の心が伝わったのだろうか。
スーパー1が手術台に横たわった。
「彼は何といってもこの五つの腕だ」
海堂博士はスーパー1のファイブハンドを取り外して言った。
「彼の改造はこれの能力を上げる事があげる事が不可欠だ。これはかなり困難だがな」
「それではスーパー1の身体の改造は僕と結城君がやろう。君はファイブハンドに専念してくれ」
志度博士が提案した。
「えっ、いいのかい？」
その言葉に海堂博士は少し戸惑った。
「君はスカイライダーの改造手術を執りおこなったばかりだろう。疲れているのではないか？」
「こんなもの疲れのうちに入らないさ。結城君、いいかい？」
博士は笑った。そして結城の方を見た。
「ええ、僕は構いませんよ」
結城もそれに対し微笑みで返した。
「という事だ。なあに、まだまだ若い者には負けはしないよ」
「おいおい、君より二月程遅く生まれただけじゃないか」
海堂博士はそう言うと笑った。
スカイライダーとスーパー1も新たな力を手に入れた。
「さて、と。いよいよストロンガーだが」
横たわるストロンガーを前に博士達は腕を組んだ。
「超電子ダイナモをどうするかだな」
海堂博士が言った。結城は既に自身の手術に備えここにはいない。
「確かに絶大な力だが稼働時間が僅か一分では。これを強化するか」

「そうだな。そうでなければこれからの戦いに勝てないだろう」
志度博士も同調した。
「だが問題は手術の成功の確率だ。これは城君自身から聞いた事だが超電子ダイナモの改造手術は極めて困難なものだったらしい。成功確率は１０パーセントしかなく成功したのが奇跡だったという」
「１０パーセント・・・・・・」
その言葉に海堂博士は表情を曇らせた。
「超電子ダイナモを開発し手術を行なった正木博士もこの世にはいない。手術の成功確率は１パーセントも無いだろう」
「そうか・・・・・・」
「ちょっと待って下さい、ゼロじゃないんでしょう？」
二人の会話を聞きストロンガーが起き上がった。
「ストロンガー・・・・・・」
「俺なら構いません。どんな痛みにも耐えきってみせます。それに超電子のデータは既にご存知の筈です」
「だが・・・・・・」
二人は顔を曇らせた。
「このままじゃバダンに勝つ事が出来ないのは俺が一番よくわかっています。今は僅かな可能性があればそれに賭けるしかないんです。・・・・・・だから、お願いします」
「・・・・・・・・」
その言葉に二人は沈黙した。そして暫し考え込んでいたがやがて顔を上げた。
「解かった、改造しよう」
「君は安心して寝ていてくれ。私達が必ず成功させる」
「はい・・・・・・」
ストロンガーは再び寝た。そして彼に麻酔がかけられた。

新生と復活その九

「やるぞ」
「うむ」
二人は超電子ダイナモの改造に取り掛かった。
数時間が経った。二人は自分の全ての力を使った。そして手術は成功した。
「・・・奇跡だ。まさか成功するとは」
「ああ。だがまだ終わりじゃないぞ」
安堵の表情を浮かべる海堂博士に対し志度博士は厳しい顔で言った。
「ああ。だがいよいよ最後だ」
二人はベッドを見た。そこにはライダーマンがいる。
「彼はやはり生身であるのがネックか。今まではその頭脳で戦闘力の低さを補ってきたが」
「これからは難しいだろう。敵は複数の怪人を一気に投入して来る」
海堂博士は思案した。
「・・・・・よし、思い切って全身を改造しよう。他のライダーと同じようにな。外見はそのままにして。これで他のライダー達と同じく複数の怪人を相手にしても充分戦えるぞ」
「そうか。ところで右腕のアタッチメントはどうする?」
志度博士の問いに海堂博士は笑みで以って答えた。子供の様な笑みだった。
「それはもう考えてあるんだ。まあ見ていてくれ」
「解かった、楽しみにしているよ」
ライダーマンの手術がはじまった。
「ふう、後は彼等が目覚めるのを待つだけだな」
「ああ、予想していたとはいえ困難な手術だった」
手術を全て終え二人の博士は研究室で休んでいた。

「お疲れ様です」
そこへ一人の少女がお茶を差し出してきた。
「ありがと、ルミちゃん」
海堂博士が笑顔で礼を言った。
黒くやや丈の長いワンピースの服を着ている。その上に白いエプロンをかけている。歳は十歳程であろうか。可愛らしい顔立ちの小柄な少女である。
「おや、これは・・・・・・」
志度博士はティーカップの中の紅茶を見て顔を少し明るくさせた。
「シナモンティーか。いいね、僕はこれが好きでね。いつも飲んでいるんだ」
「おや、そうだったのかい?学生時代はいつも酒ばかり飲んでいたじゃないか」
「それは君だろう。酒は百薬の長とかいつも言って」
「あれ、そうだったっけ」
志度博士の言葉に海堂博士はとぼけてみせた。
「よく言うよ。いつも三升は飲んでた癖に」
「ちょっと待てよ、いくらなんでもそんなに飲んでないぞ」
「・・・博士、昔からそんなに飲んでいたんですね」
ルミが厳しい顔をした。
「えっ、そ、それは・・・・・・」
ルミの言葉に博士はバツが悪そうな顔をした。
「そ、そうだちょっと学校のポストへ行ってくれないか?郵便があるかも知れないし」
咄嗟にはぐらかす。
「わかりました。けど博士、そんなに飲んだら駄目ですよ」
「・・・・・・はい」
博士は暗い顔をして頷いた。ルミはそれを見ると部屋を後にした。
「何だ、今でも飲んでいるのか」
志度博士は呆れたような顔で言った。

「・・・・・ああ。幸い身体は壊してはいないしね」
それに対して海堂博士の表情は実に渋い。それも当然であるが。
「それにしても厳しい娘だな」
「ああ。生憎そういうところは父親に似なかったみたいだ」
「父親・・・・・・。一条君か」
志度博士の表情が変わった。懐かしさをいとおしむ気持ちと無念さを噛み締める気持ちが複雑に混ざり合った表情である。
「死んだと聞いたが。だから君が養子にとった」
「・・・・・ああ、殺されたよ。バダンにね」
海堂博士はそう言うと俯き視線を下へ落とした。

新生と復活その十

「・・・・・バダンか。やはりね」
「警察の捜査では強盗殺人ということになったが。間違い無い」
「ルミちゃんはその事を知っているのかい？」
「いや、彼女にはその事を伝えていない。本当の事を言っても信じられんだろうからな」
「だろうな。私も君からゲドンの話を聞いた時は信じられなかったからな」
志度博士も顔を暗くさせた。
「だが自分自身がネオショッカーに拉致され無理矢理協力させられてはじめてそれが解かった。この世界の裏で蠢き世を闇で覆おうとしている者達がいることにな」
「おそらくバダンは一条君に協力を要請したのだろう。だが彼はそれを断った」
「だろうな。彼はそんな事に首を振る奴じゃなかった。そして・・・・」
「消された。自分達の存在を知った者として」
二人は更に表情を暗くさせた。
「だからこそ彼等には戦って欲しい。これ以上私達やルミちゃんみたいな人間を出さない為にも」
海堂博士は顔を上げた。そして表情を毅然としたものにし力強く言った。
「うむ。その為に彼等を改造したのだしな」
二人は部屋を出た。そして地下の手術室のほうへ行った。
二人はガラス越しに手術室のほうを見た。その隣の部屋に置かれている八つのベッドを見る。
そこにはライダー達がいた。静かに横たわっている。
「彼等が目覚めた時、再びつらく長い戦いが幕を開けるだろう。だ

が彼等は戦っていかなくてはならない」
「我々が出来る事は彼等を改造しサポートする事だけだ。しかしそれだけしか出来なくても・・・・・彼等を死なせるわけにはいかない。彼等の為にも、世界の為にも」
今ライダー達は眠っている。だが間も無く目覚めなければならない。それは彼等自身が最もよくわかっていた。
「暗闇大使は何と仰られている？」
暗い闇の中に声が響いた。
「日本に散れ、との事だ。ライダー達を倒す為にな」
別の声がした。
「そうか。ところであの男は一体どうなった？」
「あの男？ゼクロスの事か？」
また別の声がした。どうやら闇の中に多くの者がいるらしい。
「違う。奴を助けたあの男だ」
「あの男か・・・・・。暗闇大使が改造手術を受けさせておられる」
「どういう事だ？ゼクロスならいざ知らず奴はただの人だろう」
「その人としてのとびぬけた力を気に入られたらしい。改造人間にするとの事だ」
「改造人間・・・・・。すると我等と同じか」
先程の者達とは別の声が聞こえてきた。
「うむ。だが我等の中には入らぬらしい」
「どういう事だ!?まさか奴をゼクロスと同じように・・・」
「いや、違う。ゼクロスの補佐的役割を担わせるおつもりらしい」
「ゼクロスの・・・・・。そうか」
声は急にくぐもった。
「九人のライダーのデータをもとに我がバダンの科学力の総力を結集した究極の改造人間・・・・・。ライダー達と互角に渡り合ったというが」
「そう。そして一対一では奴等を遥かに凌駕していたという」

また別の声が聞こえてきた。
「かなりの力の持ち主の様だな。だが我等が相手ではどうかな」
挑発する様な声が響いてきた。そこには余裕の笑いが含まれていた。
「それは決まっている」
その声にそこに集まっていた気が皆賛同した様だ。
「そうか、そうだったな」
叶笑が闇の中に響く。そしてそれは闇の中に消えていった。
伊藤博士はゼクロスの部屋に通い詰めていた。彼のメンテナンス担当という事もあったがそれでもかなりの時間を彼の部屋で過ごしていた。時には彼の部屋で眠る事すらあった。
「よし、随分心を取り戻してきたな」
博士はゼクロスに話し掛けつつ笑みを浮かべた。
「博士、何故俺に言葉を教えてくれる」
ゼクロスが呟いた。話し方もかなり流暢になっている。
「それは君に真実を知って貰う為だよ」
「真実」
ゼクロスはその言葉を口に出して言った。
「それは・・・・・・何だ」
「・・・・・・君がこれから知るものだ」
「俺が・・・・・・・・・」
ゼクロスは表情を変えずに呟いた。
「知りたいと思わないか、それを」
「・・・・・・・・・」
ゼクロスは暫し沈黙していた。結論は出なかった。
「まだ次の作戦まで時間がある。ゆっくり考えてくれ。話はそれからでいい」
博士はそう言うと席を立った。
「だが」
出入り口に身体を向けたところで再びゼクロスの方へ顔を向けた。

「知りたくなったら私の所に来てくれ。何時でも待っているから」
「何時でも・・・・・・」
博士は出入り口の横のボタンを押した。シャッターが左右に開いた。
博士は部屋を出た。後にはゼクロスが一人無言のまま座っていた。

新生と復活　　完

２００３・１１・２０

脱出その一

脱出

強化改造を受けたライダー達は目覚めると立花達のいるアミーゴへ向かった。そこには生まれ変わった相棒達が待っていた。
「また随分と綺麗になりましたね」
一文字が暫く振りに見た相棒を見て声を出した。
その外見は新サイクロンと変わらない。だがマシン全体が光輝いていた。
「何か別物みたいですね。ここまでやってくれるとは」
本郷も思わず声を漏らした。そこには感嘆が滲み出ていた。
「おう二人共、凄いだろう。新サイクロン改っていうんだ」
「新サイクロン改・・・・・・」
二人は立花が誇らしげに言ったマシンの名を自分達でも呟いてみた。
「速度は６００キロまで出せるようになった。ジャンプ力も装甲も今までとはケタ違いだぞ」
「それは凄い」
「性能は新サイクロンの比じゃない。思う存分に使ってくれ」
「俺のマシンも大分変わったみたいですね」
風見が青く輝く自身のマシンを撫でながら言った。
「ニューハリケーンだ。出力を大幅にアップさせている。７００キロまで出るぞ」
「ニューハリケーンですか。今のハリケーンに相応しい名前ですね」
風見はそう言うとニヤリと笑った。
「俺のはそんなに輝いていないですね」
結城は自分のマシンを見て一言言った。
「外見はな。ただエンジンを大幅に強化してある。ライダーマンマシンカスタムってとこだ」

「ライダーマンマシンカスタム・・・・・・」
結城は生まれ変わった愛車の名を呟いた。
「前より性能がグンと上がっている。怪人だって吹き飛ばせるぞ」
次に神敬介の方へ顔を向けた。
「敬介、御前のはプロペラのところを特に改造してある。これで空中や水中での移動力がかなり上がったぞ」
「それは有り難いですね。やっぱり俺はカイゾーグですから」
「そう言うと思ったぜ。そのマシンの名前はクルーザーDだ。よく覚えときな」
「はい！」
その横ではアマゾンが赤く輝くマシンに乗っている。
「違う、今までのジャングラーと違う・・・・・・」
アマゾンはマシンに跨りながら呟いている。その声と顔は喜びに満ちている。
「羽根のところを改造したんだ。これで空も飛べるしスピードも段違いに上がった」
「他には？」
アマゾンは子供の様に目を輝かせている。
「おう、森も今までよりずっと速く走り抜けられるぞ。名付けてジャングラーG、もう怖いもんなしだ」
その言葉を聞きながら楽しそうにバイクに乗るアマゾンだった。
「俺のも随分と丁寧に改造してくれたみたいですね」
城はカブトローを見ながら言った。輝きだけでなくその雰囲気も明らかに今までのカブトローとは違っていた。
「お前さんのは電気吸収能力を大幅に上げた。空も飛べるし雷を受けたら音速を超える速さで走れるぞ」
立花は自信に満ちた声で言った。
「音速をですか・・・・・・。それは凄い」
「名付けてカブトローブイだ。超電子の力にも充分釣り合うだろう」
立花は既にライダー達の改造の結果を博士達から聞いて知ってい

たのだ。
「ええ、これなら問題ありません」
「洋、お前のスカイターボもかなり改造しといたぜ。名付けてスカイターボカスタム」
谷が筑波に笑顔で言った。
「スカイターボカスタム・・・・・・」
「そうだ。ジェット噴射を強化したらマッハ１・３まで出るようになった。普通でも４００キロは出る」
「マッハ１・３ですか・・・。また凄い速さですね」
「それだけじゃないぜ。装甲も強化したし空中戦の能力も上がった。スカイターボカスタムの名前は伊達じゃねえぜ」
そう言うと二台のマシンの間に来た。
「沖、これがお前のマシンだ」
「はい」
沖はその二台のマシンを見た。
「これがブイジェットカスタム」
銀色の大きなマシンをポン、と右手で叩いた。
「そしてこっちばブルーバージョン改」
青く輝くマシンを左手で叩いた。
「ブイジェットカスタムはレーダーとか無線機を強化しといた。スピードは特にいじくっていない。元々かなりのスピードを出せるマシンだからな。それでいいだろ？」
「はい。電子系を改造してくれたのが心強いです」
沖は笑顔で頷いた。谷は更に説明を続ける。
「ブルーバージョン改は機動力を強化させた。空中や海上も移動出来るようになった」
「つまりこっちは戦闘用ですね」
「まあそうだな。元々そうだったし思いきって役割を分担させたんだ」
「成程、今まで以上に臨機応変に使う事が必要ですね」

「どうだ、出来るか？」
谷のその言葉に沖は毅然として言った。
「やるしかないでしょう」
「そうだ、その意気だ」
谷はその言葉を待っていた。それを聞いて満面の笑みをたたえた。
「おやっさん達、有り難うございます」
九人の戦士達はあらためて二人に礼を言った。だが二人はそれに対し非常に照れくさそうだった。
「いや、わし等よりもなあ」
立花はポリポリと頭を掻きながら恥ずかしそうに言う。
「あいつ等の方が頑張ったしな」
谷が右の方を指差す。ガレージの奥の部屋が空いていた。そこでは滝やがんがんじい達がソファや床に転がって寝ていた。
「滝・・・・・・」
本郷と一文字が疲れきった顔で眠っている滝を見て言った。
「がんがんじいも・・・・・・」
筑波も口を開いた。
「あいつ等がいなかったらここまで出来なかったよ。まあ散々こき使ったがな」
「特にチョロと史郎君はな。色々と使い易かったし」
二人は笑いながら言った。
「そうですか、チョロも頑張ったんですね」
沖がチョロの顔を覗きながら言った。思えば彼とも長い付き合いだ。
「それにしてもここまでよく出来ましたね。流石ですよ」
神がクルーザーをさすりつつ言う。顔に感謝と喜びの色がある。

脱出その二

「まあ今回の改造で一番凄かったのは役君だ。何しろ全てのマシンの設計を考えてくれたのだからな」
「えっ、彼が！？」
ライダー達は思わず声をあげた。皆立花が設計し、改造したものだと思っていたからだ。
「本当に彼には感謝しているよ。彼がいなかったらここまでは出来なかったな」
そこへ役が姿を現わした。
「大したことはありません。長野県警では白バイに乗っていた事もありましたし」
謙遜した様子で答える。
（だからといってここまでの改造が出来るのだろうか・・・・・・）
風見はふと思った。だがあえて口には出さなかった。
「それに前にも言いましたが大学では工学部でしたので。そこで学んだ知識を応用したのですよ」
「成程」
結城は違う、と直感したがそれを口に出さなかった。それは他のライダーも同じだった。
「さてと、休んでる暇は無いぞ。早速今から特訓開始をはじめるぞ」
「前に言った通りビシビシいくからな。皆楽しみにしろよ」
「ええ、それはもう。そしてその場所は何処なんです？」
城が尋ねた。
「場所はあの崖だ。御前等が幾多の困難を潜り抜けてきたあの崖だ」
「あの崖か・・・・・・」
本郷と一文字の顔が感慨深げになる。かって彼等はショッカー、ゲルショッカーの強力な改造人間が現われる度にその崖で立花や滝と共に特訓に励みその敵を打ち破ってきた。その事が脳裏に甦って

きたのだ。
それは他のライダーも同じであった。厳しく辛い血と汗、そしてそれ以上の懐かしさがこみ上げてきた。
「さあ、さっさと行くぞ。早く準備を済ませろ」
「そうだ。おい、御前等一体何時まで寝ているつもりなんだ」
二人はそう言って眠っている滝達を叩き起こした。
「折角これで休めると思ったのに・・・・・・」
史郎が情無い声を出した。
「馬鹿野郎、ショッカーが休んでいたか。ちょっとは進歩しろ」
立花に怒られる。
「史郎にも久々に会ったが」
「ああ。全く変わってなくてほっとするよ」
本郷と一文字が笑いながら言った。
「じゃあわし等は先に行っとくからな」
二人はそう言ってガレージの外に停めてあるジープに乗った。
「行くぞ、奴等に勝つ為の総仕上げだ」
「すぐに追いついて来い。御前達のマシンならすぐに追いつける筈だ」
二人はそう言ってジープのエンジンをかけた。黒い煙を出し駆けて行く。
「それならアマゾン達も」
アマゾンが新しいマシンのエンジンを入れた。そして駆け出す。
他のライダーもそれに続く。その後から滝達が自分達のバイクや車に乗り追いかけていく。
伊藤博士は自室で椅子に座りコーヒーを飲んでいた。わりかし広い部屋である。ゼクロスのそれとは異なり装飾もある。
ふと壁に架けられている一枚の写真を見たそこにはゼクロスと一人の女性が一緒に写っている。
そこに写るゼクロスは笑っていた。信じられない位朗らかに笑っている。

その横にいる女性も笑っている。その顔から二人が極めて親しい関係にある事がわかる。

その女性は黒く長い髪をした美しい女性である。白いセーターに青いジーンズを着ている。

「まさか君があの場所にいたなんて」

博士の顔に悲しみが浮かぶ。

「そしてあんな事になるとは・・・・・・。済まない、君を救えなかった」

コーヒーカップをテーブルのコーヒー皿の上に置いた。カチャリ、と陶器がぶつかり合う音がする。

「そして彼も・・・・・・・・」

博士は下を俯いた。その顔に悲しさだけでなく苦しみも浮かぶ。

その時部屋に来客を伝えるチャイムが鳴った。

「どうぞ」

博士は入って来るように言った。それに応えシャッターが左右に開いた。

来たのはゼクロスだった。無言のまま部屋に入って来た。

「来たか」

博士はその姿を認め呟いた。

「真実を教えてくれ」

ゼクロスはシャッターを閉めると一言だけ言った。

「いいだろう。ではそこに座ってくれ」

「解かった」

ゼクロスは博士に勧められ席に着いた。

「まず言おう。ゼクロス、君の本当の名はゼクロスではない」

「そうか」

驚きは無い。何故なら彼には感情が無いからだ。

「君の本当の名は村雨良。日本人だ」

「むらさめ・・・・・・りょう・・・・・・・・」

「そう、それが君の本当の名前、君はこの日本で生まれたんだ」

「日本人・・・・・・」
日本、その国名と位置等は知っている。作戦遂行の為必要だから教えられた。
「そして君には肉親がいた」
博士は壁に架けられているあの写真を見せた。
「この女性が君の姉。村雨しずかだ」
「俺の・・・姉・・・・・・」
どういうものかは解からない。感情というものが戻ったならば解かるのだろうか。ゼクロスはそう考えた。

脱出その三

「この人はかって私の知り合いだった。私の生徒の一人だった」
「博士の・・・・・」
「そして君の事も私は知っていた。君はかっては陽気ないい青年だった」
「そうだったのか」
だからといってどういう事も無かった。ただ話を聞いて憶えるだけである。
「彼女はもういない。死んだ、いや、殺されたのだ」
「殺された、誰に・・・・・」
それを聞いて博士は非常につらそうな顔になった。えも言えぬ悲しみが彼を襲った。
(自分の肉親の、最愛の姉の死さえもその記憶から奪い去られてしまっているのか・・・・・)
彼は思わず泣いた。顔には出さない。心で泣いた。
だがその涙をすぐに拭いた。何故なら彼より悲しむべき者が今目の前にいるからだ。
「バダンだ。君の目の前で殺された」
「俺の目の前で・・・・・」
そう言われても何も解からない。彼の記憶はゼクロスとなって目覚めたその時より始まったのだから。
「そして君は記憶と感情を奪われた。バダンの野望の為に君の記憶は不要だからな」
「だから俺には記憶も感情も無いのか」
しかし怒りも悲しみも湧かなかった。ただその話を受け止めるだけである。
「バダンにとって君は世界征服の道具でしかない。君は滑稽なマリオネットなのだ」

「マリオネット・・・・・・・・・・」
「君は操られているだけなのだ。今の君は単なる兵器だ。強力なだけのな」
「兵器・・・・・・俺が・・・・・・・」
今までゼクロスは最強の改造人間、バダンの誇りと首領や暗闇大使に言われてきた。だからといってどうという事も無かったがそれは彼が道具として、兵器として優秀だからそう呼んだだけなのだ。
「本当なら君はこのまま世界征服の最強の駒として使われ続けただろう。だがもうそれは出来ない」
博士の目が光った。
「あの九人ライダーとの闘いがおそらく君の感情を呼び起こしたのだ」
「ライダー・・・・・・・」
彼等の事はよく憶えていた。最後の総攻撃の衝撃は忘れられない。
「あの時のショックが君の封じられていた感情をほんの僅かだが呼び戻したのだ。本来の人間としてのな」
「人間として・・・・・・・・・」
「君は道具なんかじゃない、君は人間なんだ。例えその身体が機械だとしても」
「人間・・・・・・」
彼は教えられた。人間とは忌むべきものだと。だからこそ改造人間こそ素晴らしいのだと。
「真実の一つはそれだ。君はどんな身体を持っていても人間なんだ」
「真実の一つ・・・・・・・・・」
彼の心の中に何かが宿った。だが彼はそれに気付かなかった。
「人間として生きるんだ。そしてその力を正義の為に使うんだ」
「正義・・・・・・」
また新たな言葉が脳裏に刻まれる。
「バダンは悪だ。世界を征服し全てを支配しようとする悪の軍団だ」
「悪の軍団・・・・・・」

その言葉もゼクロスの脳裏に焼き付いた。何故か忘れようとしても忘れられない言葉であった。

「君の姉さんを殺し、君の心を奪い改造人間にしたバダンを倒すんだ。そして世界を救って欲しい」

「それも真実なのか。俺がバダンと戦う事が」

「そうだ、真実だ。君はバダンと戦わなくてはならない。仮面ライダー達と同じ様に」

「仮面ライダーと同じ様に・・・・・・」

その言葉を反芻した。

博士はゼクロスの変身した後の姿に思いを巡らす。そう言えばその姿は仮面ライダー達に実によく似ている。

(それも当然か。仮面ライダーを研究して開発、改造されたのだからな)

「そう、君は仮面ライダー達と共に戦うべき人間なのかも知れない」

「俺がライダーと・・・・・・。敵であるライダー達と・・・・・・」

「そうだ。さしづめ君は十人目のライダーか。仮面ライダーゼクロスだ」

「仮面ライダーゼクロス・・・・・・」

「そう、君は今から仮面ライダーゼクロスだ。正義の為に戦う十番目の光なのだ」

「光・・・・・・。俺が・・・・・・」

感情も記憶も無い。その心は深い闇の中に囚われている。その彼が光なのだ。

(希望は様々な災厄の中に埋もれているもの。彼はバダンという災厄の中に埋もれていた希望なのだ)

今その希望が放たれた。彼は確信した。

「ゼクロス、いや村雨君、すぐにバダンを出るんだ。そしてバダンと戦え」

博士は意を決して言った。これこそ彼が最も言いたかった事であ

った。
「・・・・・博士はどうする？」
「私？私は・・・・・・」
自分は罪を犯し過ぎた。最早生きてはいられないと考えていた。その罪を自らで決するつもりだった。
「博士も来てくれ。悪と戦うには多くの力が必要なのだろう」
その言葉は何気無い戦力分析から出る言葉であった。だがそれが博士の、そして世界の命運を大きく左右する言葉になったのである。
「しかし私は・・・・・・」
「俺に過去は無い。これから思い出す過去がどんなものか俺は知らない。それも教えて欲しい。俺には博士の力が必要だ」
「村雨君・・・・・・・・」
彼は思い出していた。親友の志度博士もネオショッカーに囚われていた。そして彼を救った青年筑波洋の命を助ける為彼を改造人間、スカイライダーにした。そして彼に救われネオショッカーを脱出した。それ以後はスカイライダーと共にネオショッカーと戦い続けた。
（罪は償わなくてはならない、そう言っていたか）
友の言葉を思い出す。そして今は自分が償う時だと思った。

脱出その四

「解かった。行こう。私も君と共に行こう。そしてバダンと戦おう」
「よし」
二人は頷き合った。そして席を立つ。
「まずはこの基地を脱出するんだ。道は私が教えよう」
二人は歩きはじめた。
「そしてどうやって脱出するのだ」
ゼクロス、いや村雨は横にいる博士を見下ろして言った。
「格納庫に君の愛車を置いてある。ヘルダイバー、これから君を乗せ戦場を駆け巡る君の心強い相棒だ」
「俺の相棒・・・・・・・・・・」
それがどういうものなのか彼には解からない。ただ彼は一人でない事だけがわかった。
「それでこの基地を出る。それからでないと全ては始まらない」
「全てが・・・・・・・・・」
そう、全ての運命の歯車が回り始めていた。
「行こう、村雨君。君の心と記憶を取り戻す為に。そして悪を討ち滅ぼす為に」
「ああ」
二人はシャッターを開いた。それが新たな戦いの幕開けであった。
「どうした、そんな事でバダンの奴等に勝てるとでも思っているのか！」
立花藤兵衛の罵声が木霊する。ここは特訓場に使われている崖であった。
「もう一度だ、一度出来たからといって慢心するな！」
ダブルライダーが崖を全速力で駆け登って行く。そして頂上から飛び降り蹴りを繰り出す。
「相変わらず厳しいな、おやっさんは」

ライダーマンと組み手をしつつ滝が呟いた。
「ああでなくちゃ今までの悪の組織とは戦えませんよ。流石はおやっさんです」
ライダーマンが相槌を打つ。その間にも二人は激しい打ち合いをしている。
「早く、もっと早くだ！」
谷がスーパー1を叱咤する。ファイブハンドのチェンジを素早くさせているのだ。
「いくら能力が上がったからといって使う者が駄目では話にならん、もっと使いこなせ！」
「はい！」
スーパー1は必死に五つの腕の換装を急いでいる。それと共に赤心少林拳の切れも磨いている。
「スカイライダー、御前はまだ空に飲まれている！まだ自由に空を飛んではいないぞ！」
谷は上空を飛ぶスカイライダーに眼をやる。そして怒号を飛ばす。
「陸にいる時と同じ様に自由自在に動けるようになれ、さもないと死ぬのは御前だ！」
「は、はいっ！」
スカイライダーも懸命に空を飛ぶ。彼も必死である。がんがんじいがそれを見守る。
「ぐ、ぐうううう・・・・・・」
ストロンガーがチャージアップする。そして長時間の戦闘訓練をする。横にはチョロや史郎がいる。
「か、身体が砕けそうだ・・・・・・」
超電子ダイナモはその絶大な力により身体にも多大な負担を与える。変身し、戦う時には全身を引き千切る様な痛みが走る。それに耐える事だけでも苦しいのだ。
だが今彼はそれに耐え特訓を続けている。改造により超電子の力が望む間だけ使えるようになった。それならばこの力に完全に適応

しなくてはならない。
「ストロンガーも辛そうだな。今までここぞという時だけ使っていただけだったからな」
「ああ。だが今はそんな悠長な事を言っている場合じゃない。あのバダンには超電子の力を常に使ってようやく五分と五分、といったところだからな」
ブイスリーは日本に来た佐久間ケンを相手に特訓を受けている。佐久間は上から巨大な岩を落そうとしている。
「先輩、いいですかあ？」
ブイスリーはその下にいる。岩は今にも落ちて来そうである。
「ああ、何時でもいいぞ」
テコを使い岩を落とす。それは轟音をあげブイスリーの頭上に落下して来る。
「逆ダブルタイフーン！！」
ブイスリーの腰のダブルタイフーンが唸り声をあげる。そして激しい風を巻き起こし岩を砕いた。
「次だ！」
続いて岩が落ちて来る。Ｖ３はそれに対して身構えた。
「ぐおっ！」
拳で打ち砕こうとした。だが力が足りない。咄嗟に両手で受け止め横に投げ落とす。
「まだだ、まだこんなものでは駄目だ・・・・・」
逆ダブルタイフーンの後は急激に力を消耗している。その時に生じる隙をなくす事が課題であった。
深い木々の中を走る獣の様な影。アマゾンであった。
「ケケーーーーッ！！」
雄叫びをあげ走る。そこに弓矢が襲い掛かる。
「ケーーーッ！」
それを両手の鰭で叩き落す。そして木の上から降下してくるトラップをかわす。

地に降り立つ。だがそこはブービートラップだった。中には竹槍が立っている。そこへ頭から落ちていく。

だが片手で竹槍の先を咄嗟に掴んだ。そしてその力だけで飛び上がり死地を脱する。

「流石だな。ガガの腕輪の力も完全に取り入れている」

役が木の陰からその様子を見守っている。彼がアマゾンの特訓の相手だった。

「だがまだまだ。この程度ではバダンには勝てない」

拳銃を放つ。だがアマゾンはそれを驚異的な反射神経でかわす。

脱出その五

崖の側には湖がある。その中にエックスライダーはいた。
「ムウッ！」
上から銛が放たれる。水中銃によるものだ。
エックスライダーはそれをライドルで全て落とした。前から巨大な生物が来る。何とそれは首長竜だ。
「しかし海堂君、いくら何でも機械竜を特訓に使うとは」
志度博士は船の上からエックスライダーとその竜の戦いを見ながら傍らにいる海堂博士に言った。
「出来る限りのことはしなくてはね。相手はバダンだ、おそらくこの程度ではない」
彼は表情を変えずに言った。
「しかし・・・そうか、そうだったな」
彼等の怖ろしさは志度博士自身も嫌になる程知っていた。だから納得した。
ライダー達の命懸けの特訓は続いていた。それは将に命を賭けた戦いそのものであった。
真夜中まで特訓は続いた。食べる時以外は休む事もない。眠り、起きて再び特訓を開始する。そんな日々が続いた。
だがその特訓がライダー達を鍛えていった。何時しか見違えるまでになっていた。
村雨と博士は格納庫にいた。目の前に戦闘機の様な姿の白いマシンがある。
「これが・・・・・・」
「そうだ、これが君の乗るマシン、ヘルダイバーだ」
博士は言った。村雨は既にゼクロスの姿に変身している。
「これに乗り行こう。そしてこの基地を脱出するんだ」
「わかった」

ゼクロスは膝の爆弾を取り外した。そして格納庫のシャッターへ向けて投げ付ける。

爆発がした。そしてシャッターは壊れた。そのから青い空と白い光が見える。

「光か、太陽の光・・・・・・」

博士はそれを眩しそうに見た。

「久し振りに見た。若しかしたら永劫に見られないのでは、と考えた事もあったが」

心がその光を欲していた。その光を今すぐにでも浴びたかった。だがそれを急いではならない。今は傍らにいるこの若者と共に出るのだ。悪の巣から。

「博士、ヘルダイバーのエンジンはどうして入れるのだ」

ゼクロスが尋ねる。既にマシンに乗っている。

「そうか、それは・・・・・・」

足のギアを教える。ゼクロスは躊躇無くそのギアを踏んだ。

エンジンがかかった。博士はゼクロスの後ろに乗った。

「さあ行こう、光の世界が君を待っているぞ」

ヘルダイバーは二人を乗せて走りはじめた。爆音が格納庫に響きそれはすぐに光の中へ入っていった。

二人の脱走を知った基地は大騒ぎとなった。戦闘員達が武器を手に走り回り警報音が鳴り響く。

「二人は今何処にいる」

暗闇大使は指令室で戦闘員の報告を受けていた。

「はっ、基地を脱出後富士の山麓にいる様です」

戦闘員の一人が敬礼して報告する。

「そうか、すぐに追っ手を差し向けろ。何としてもあの二人を連れ戻せ」

「伊藤博士もですか？」

戦闘員は尋ねた。必要なのはゼクロスだけだと思っていたからだ。

「そうだ。博士の頭脳は我がバダンにとって必要なのだ。何として

も生かして連れて来い」
「はっ、了解致しました」
戦闘員はその命を受領して退室した。
「博士の頭脳が無ければあれを完成させるのは困難だ。あれのな・・・・・」
暗闇大使は呟いた。ふと横の壁を見る。そこには何やら巨大な兵器の建造計画が描かれていた。
「暗闇大使、及びですか」
戦闘員と入れ替わりに声が聞こえてきた。彼の後ろに影が現われた。
「御前達か」
暗闇大使は振り向かずその声を聞いて答えた。
見れば影は一つだけではない。十人以上の影がある。
だがその影は人のものではなかった。異形の怪物のものであった。
「ゼクロスがこの基地を脱走した。博士も一緒だ」
「何と・・・・・・」
影の一つが呻く様に言った。
「追撃しろ。そして連れ戻すのだ。博士共々生きた状態でな」
「はい」
影達は答えた。
「行くがいい。朗報を期待しているぞ」
「解かりました。是非楽しみにしておいて下さい」
影達は一斉に消えた。その後には気配一つ残っていない。
いや、一つだけ残っていた。違った。残っていたのではない。彼等が部屋を去ると同時に現われたのだ。
「御前は行かぬのか」
見れば男の姿である。口に何か咥えている。煙草であろうか。煙を出している。

脱出その六

「奴が・・・逃げたか」
男はこちらを振り向く事なく言った。低くドスの効いた声である。
「組織を・・・・・バダンを裏切って・・・・・」
煙草を噛んだ。ブチッ、と音がして煙草が噛み千切られる。
床に落ちた煙草を足で踏み付けて消す。黒い皮の靴だ。
「どうした、許せぬか」
暗闇大使はいわくありげに男に言った。横目で彼を見つつ口の端で笑う。
「・・・・・・・・」
男は答えない。暗闇大使の方も振り向かない。ただ立っているだけである。
「行くがいい。そしてその憤りを晴らすがいい」
男は無言で部屋を立ち去った。暗闇大使はそれを口の端だけで笑いながら送った。
ゼクロスと博士は富士の山麓を進んでいた。周りは樹海である。
富士の樹海は一度入ると出られない事で知られている。自殺の名所でもありその土の中には多くの骨が埋もれていると言われている。
「博士、行き先はこれでいいか」
「うむ、そのまま進んでくれ」
その中を二人は進んでいる。ヘルダイバーは樹海をものともせず進んでいる。
「私はかって自衛隊の隊員と共にこの樹海へ来た事がある。その時に道は調べておいた。どんな場所でも必ず道はある。だから任せてくれ。絶対に抜けられる」
「解かった」
ゼクロスは博士の言葉に従った。
その上で何かが煌いた。そして数本のナイフが飛んで来た。

「ムッ！」
ゼクロスは肘から十字手裏剣を取り出した。そしてナイフが飛んで来た方へ向けて投げる。
重い物が落ちる音がした。戦闘員達だった。
「追手か・・・・・・」
博士は喉に手裏剣を受け倒れる戦闘員達を見て言った。
「おそらくこれからも次々と来るだろう。用心してくれ」
「解かった」
ゼクロスは振り向かずに言った。そしてただひたすら進んで行く。
多くの戦闘員達が襲い掛かって来た。だがゼクロスはそれを何事も無い様に次々と倒していく。
（何という強さだ）
博士はそれを見ながら思った。
（この力、これさえあればバダンの野望も・・・・・・）
博士は微笑んだ。ゼクロスの圧倒的な強さに希望を見出していた。
樹海を出た。周りは岩山となっていた。
「ここを超えれば東京まですぐだ。そして城南大学の海堂という人物のところまで行こう」
「海堂・・・・・。誰だそれは」
「私の古くからの友人だ。彼ならばきっと我々の力になってくれる」
「そうか」
そのまま進む二人。だがゼクロスが急にそのマシンを止めた。
「？どうした？」
ゼクロスは右上の山の方を見ている。そこに何かを感じているのだろうか。
ゼクロスはマシンを降りた。そしてその場所へ身体を向けて立った。
「ふふふふふ、流石はバダン最強の改造人間。やはり我々の気配を察しましたか」
声がした。するとその山の上から一斉に影が現われた。

「な、御前達は！」
博士も思わず声をあげた。そこには博士も良く知る者達がいた。
男もいれば女もいる。容姿も服装もその歳もまちまちだ。若い者もいれば年をとった者もいる。だが一つだけ共通するものがあった。彼等が発する気である。それは異様な殺気だった。
「お久し振りです、伊藤博士」
中央にいる男が微笑んで言った。黒い服を着た中年の白人である。
「き、貴様は・・・・・・・・・」
彼の姿を認め博士の顔が蒼ざめていく。
「我々と共にバダンへ帰りましょう。貴方方の素晴らしい力は我等の為に使われるべきなのです」
「言うな、最早貴様等の悪しき野望の力になぞならん！」
博士は激昂して言った。その言葉には怒りが滲み出ている。
「困りましたね。それでは無理にでも帰って頂かなくてはなりませんが」
男が手を上げた。すると無数の巨大な棘が地面から飛び出て二人の周りを取り囲んだ。
「これは警告です。もう一度お聞きします。我等と共に大人しくバダンへ帰って頂きますか？」
「断る？」
「そうですか。ではゼクロス、貴方は？」
「・・・・・・俺か」
「ほう、どういう事かわかりませんが喋れる様になったのですね」
ゼクロスはゆっくりと言葉を発しはじめた。
「俺は真実を知る為、そして感情と記憶を取り戻す為に行く。そして正義の為に貴様等と戦う」
「フフフ、正義ですか」
男はその言葉を聞き笑った。

脱出その七

「愚かな事を。バダンこそが正義であり真実であるというのに」
「嘘を言え、貴様等が正義の筈が無いだろう！」
博士は声をあげた。その顔が怒りで朱に染まっている。
「貴様等は彼に何をした、彼の姉を殺し、彼の記憶を心を奪い去ったではないか！」
更に言葉を続ける。
「あまつさえ彼を機械の身体にしその野望の為の道具にしようとした・・・・・・。貴様等はそれでも自分達を正義と戯言を言い続けるのか！」
「フ、フフフフ」
その男だけではない。後ろにいる者達も笑った。
「博士、もう少し落ち着かれたらいかがです？あまり腹を立てられるとお身体に障りますよ」
「なっ・・・・・・！」
そのあまりにも侮蔑と嘲笑のこもった言葉に博士は絶句した。
「考えの、視点の相違というものですな。我等の素晴らしい理想をまだ御理解して頂けていないとは」
「理想だと、自分達に従わない者は全て抹殺する事が理想か！」
「そうです。この世界には選ばれた者、優れた者だけがいれば良いのです。それ以外のゴミは除去しなくてどうするのですか」
「ゴミだと・・・・・・。平和に慎ましく生きている人達がゴミか！」
博士の怒りは収まらない。尚も言葉を叩き付ける。
「そうです。この世界は戦いにより育てられるもの。それを嫌いただ生きている者などゴミでなくて何だというのです」
男達は笑った。その口が三日月の様に禍々しい形になる。
「我がバダンは戦いと流血により全てを生み出します。ゴミ達も我

等の糧となり満足して死ねるでしょう。そう、そこにいるゼクロスの姉の様にね」

「き、貴様が殺したというのに・・・・・・・・・。貴様はそれでも人間か！」

「人間！？何ですかその貧弱で愚かな生物は」

男が手を動かした。その手の影が映る。それは人のものではなかった。

「我等は選ばれし人を超えた存在。二度とその様な下等生物などと一緒にしないで欲しいですね」

その右手から槍を浮かび上がらせた。それを博士の足下へ投げる。

「くっ・・・・・・！」

博士は男を睨み付けた。だが男はそれに怯んだり悪びれる様子もない。ただ侮蔑と嘲笑をたたえた笑みで見下ろしているだけである。それが人を超えた者の余裕であろうか。

「最後にもう一度だけお聞きします。我等と一緒にバダンへ帰って頂きますか？」

後ろの者達が降り立った。そしてゼクロスと博士の周りを取り囲む。

「・・・・・・何度聞いても無駄だ。断る！」

「俺は貴様等の言いなりにはならん」

二人は言った。博士は怒りで身体を震わせつつ、ゼクロスは感情の無い声で。

「・・・・・・それでは仕方がありませんね」

男は笑った。その気が異様に高まっていく。

「無理にでも連れて帰らせて頂きますか」

男の姿が徐々に人でないものに変わっていく。他の者も同じだ。

「待ってくれ」

その時声がした。左手の岩山の上からだ。

「むっ！？」

男達が変身を止めた。そして左の方を見上げる。

「三影・・・・・・・・・」
そこには一人の長身の男がいた。皮の黒いジャンパーと黒いズボンを身に着けた黒ずくめの男である。髪はリーゼントにしサングラスをかけている。
口には煙草を咥えている。それを指で投げ捨てると黒の革靴で踏んで消した。
一見すると昔のロックンローラーの様だが雰囲気が違う。まるで獣、それも巨大な虎や豹の様な殺気を全身から出している。
「悪いがここは俺に任せてくれ。元々俺はこいつと共に行動する予定だったしな」
「むうう・・・・・・」
男は表情を曇らせた。何か不満があるらしい。
「わかりました」
男は納得した。そしてその殺気を収めた。
「ゼクロスと博士の事は貴方にお任せしましょう。是非とも連れて帰るように」
そう言うと右手を上げた。その足下から姿が消えていく。
他の者達も同じだった。そしてその姿を完全に消した。
「帰ったか。これで邪魔者はいなくなった」
先程三影と呼ばれた男はゼクロスと博士に向き直った。
「ゼクロス、いや村雨よ久し振りだな」
「お前は・・・・・・・・・」
ゼクロスは尋ねた。
「憶えていないか。記憶を消去されているからな」
三影はそう言うとサングラスを取った。細く鋭い眼が現われた。
ただしそれは左だけである。右目は義眼であった。黒い中に白い球がある。

脱出その八

否、それは義眼ではなかった。普通の眼と同じ様に動いている。どうやら機械の眼らしい。

「あの時御前を助けた時に失くしたこの右目の事も忘れたのか」

「右目・・・・・・・・・」

ゼクロスはその冷たい光を放つ眼を見て呟いた。

「仕方が無いか。御前は最早人ではなく完全な機械なのだからな」

「機械・・・・・・俺が・・・・・・・・・」

その言葉にゼクロスは微妙に反応した。

「馬鹿を言え！彼は人間だ！」

博士が反論する。だがそれは三影の言葉により打ち消された。

「脳だけはな。だが心の無いこいつの何処が人間だというのだ」

「何っ・・・・・・」

博士は言い返そうとする。だがそれより前にゼクロスは言った。

「違う。俺は人間だ。博士の言う通り俺は人間だ」

「何っ！？」

その言葉に三影の左眉がピクリ、と動いた。

「人間だというのか。御前は自分をあの弱くて愚かな人間だと」

左眼に冷たい光が宿る。白く冷たい息を吐いた。

「そうだ。弱くて愚かかどうかは知らないが俺は人間だ」

ゼクロスは更に言った。その言葉に三影は顔を伏せた。そして再びサングラスをかけた。

「伊藤博士、余計な事を吹き込んでくれたな。そもそも感情を一切持たぬこいつが言葉を話すこと事態おかしいとは思っていたのだが」

後ろに跳んだ。そして間合いを取った。

「再び改造しなくてはならないな。それも徹底的に感情を消して」

全身を白い瘴気が包む。彼もまた人にあらざる者に変わろうとしている。

その彼を一発の銃弾が襲った。散弾銃だ。流石に変身中では耐えられず後ろに吹き飛ばされる。
「ぐふぅっ・・・・・・・・・」
それでも起き上がった。だが口から血を吐く。どうやら肋骨が数本折れているようだ。
「おのれっ、誰だ」
上の方を見回す。サングラスを外し右の機械の眼で見回す。
だが誰もいなかった。それを確認し三影は舌打ちした。
「・・・・・・ライダーではないようだな。だとすれば一体誰だ、この俺に直撃を浴びせてくれるとは」
胸を押さえつつ起き上がった。そしてゼクロスの方を見る。
「ゼクロス、いや村雨良。今は行かせてやる」
胸を鈍い激痛が襲う。それにより身を屈めるが気力で上体を起こした。
「だが忘れるな。貴様はバダンに帰る宿命なのだ。それが貴様の定められた運命だ」
三影はそう言い残すと姿を消した。
「運命・・・・・・・・・」
ゼクロスは三影が言ったその言葉を反芻した。
「気にするな。運命は自分で切り開くものだ」
博士はゼクロスに対し首を横に振りつつ言った。
「自分で切り開く・・・・・・」
「そうだ。それが人がするべき事なんだ。自分の道は自分で選んで切り開いていく事が」
「そうか・・・・・・」
「それが今君が進んでいる道だ。さあまたその道を進んでいこう」
「ああ」
ゼクロスは棘を打ち払い再びヘルダイバーに乗った。博士がその後ろに乗る。
マシンが再び走り出す。それはすぐに見えなくなった。

それを遠くから見る影が一つあった。役である。
「これで良し」
見えなくなったヘルダイバーを見送りながら彼は言った。
「全ては予定通りだ」
一言そう呟くとほくそ笑んだ。その顔はまるで何かを知っているようだった。

脱出　　完

２００３・１１・２６

影の男その一

影の男

ライダー達は特訓を終えた。そして皆下山しアミーゴに集まっていた。

「今までよくやった。もうわし等が教える事は何も無い」

立花は九人の戦士達を前にそう言った。

「後はバダンを倒すだけだ。行け、御前達なら出来る」

「はい」

戦士達は頷いた。そこには滝や役もいる。

「頑張れよ、俺も協力させてもらうからな」

滝が言った。

「私も。ところで皆さんこれからどうなさるのです？」

役が尋ねた。

「うむ、それだが」

本郷が口を開いた。

「近頃この日本各地で奇怪な人物が多く見られている。おそらくバダンの奴等だろう」

「だから俺達はまず日本国内のバダンの勢力を叩く事にした。恐らくここにはかなりの戦力があるからな」

一文字も言った。

「奇怪な人物か。確かに最近新聞にもよく載っていますね」

飛田が言った。

「あ、そういえば飛田さんってルポライターでしたな」

がんがんじいが思い出したように言った。

「一応ね。何とか喰っていける程度だけれど」

「最近わしの店の手伝いばかりしてたから完全に忘れていたぞ」

「おやっさあん、そりゃあ無いですよ」

「悪い悪い、ははは」

谷は笑いながら謝った。
「日本か。ということはここにはちょくちょく帰って来るんだな」
「ええ。おそらく。その時は宜しくお願いしますね」
「当然だ、何時でも店を開けて待ってるからな。上手いコーヒーを御馳走してやる」
立花は本郷に対し暖かい言葉を掛けた。本郷だけではない。他のライダー達にもその言葉の意味は同じだった。
「有り難い、おやっさんのコーヒーが唯で飲めるなんて」
「何言ってる、特別に半分にまけといてやるだけだ」
城に言葉を返す。
「何だ、唯じゃないのか」
神が残念そうに言った。
「当たり前だ、こっちも商売だぞ。その替わり半額で何杯でも飲んでいいからな」
「それは有り難い」
これは全ての者が言った。
「という事だ。史郎、解かったな」
「はい」
史郎は素直に答えた。彼はコーヒーを入れる事は定評がある。
「それではそろそろ。何しろ連中は四六時中動いている奴等ですし」
風見が言った。
「おう、行って来い。そして思う存分暴れて来い」
「はい！」
立花の言葉に戦士達は頷いた。そして店を出てそれぞれのマシンに乗る。
爆音が遠のいていく。立花はそれをにこやかな顔で聞いていた。
「勝って来いよ」
パイプを咥えながら言った。その目は暖かい。まるで父親の様な目である。
「楽しみですか」

その彼に谷が声をかけた。彼の目も同じであった。
「ええ。あいつ等がバダンを倒すのがね」
立花は言った。声まで暖かい。
「わしもですよ。あいつ等ならやってくれると信じています」
「確かにね。そして全てが終わったら笑顔でここに来ますよ。全員で、戦いが終わった事を伝えに」
「そしてその為にはわし等も働かなくてはいけませんな」
「勿論ですよ、なあ滝」
「ええ、おやっさん」
滝は笑って答えた。
「御前もそろそろ行くんだろう？本郷達を助けに」
「当然ですよ、その為にここにいるんですから」
そう言うと壁に架けられているヘルメットを手に取った。
「時々コーヒーをご馳走になりに帰って来ますけれどその時はよろしく。美味いのを頼みますよ」
「おい、それじゃあわしのコーヒーは普段はまずいみたいじゃないか」
少し口を尖らせて言った。口調は少し怒っているように見せているがそれだけである。顔はにこやかである。
「ははは。まあ頼みますよ」
「おう、その事は安心して言って来い」
滝も店を出た。がんがんじいや役もそれに続く。
「皆、勝って来いよ」
立花はまた呟いた。暖かさの中に僅かばかりの寂寥が混ざっていた。

影の男その二

白人の男達や三影との対峙を切り抜けたゼクロスと伊藤博士は東京へ向かっていた。行く先は城南大学である。

すでにゼクロスは変身を解いていた。ヘルダイバーも外見は普通のバイクになっていた。

「変形も出来るのか」

「ああ。普段は目立ってしょうがないだろ。だから普段は通常のバイクと変わらない外見になれるようにしておいたんだ」

博士は彼に言った。彼はバイクから降りて軽トラックを運転している。

村雨は博士の隣にいた。マシンは後ろに縛られて積まれている。

「それにしても運が良かったよ。このトラックをレンタルする事が出来たんだからな」

「運が・・・いいのか」

村雨は相変わらず抑揚の無い声で尋ねた。

「ああそりゃあね。街でバイクの二人乗りをするわけにもいかないだろう」

「そうなのか」

村雨は了承した。

「ああ。他にもやっちゃいけない事はたくさんある。まあ一つずつ憶えていけばいいさ」

博士は優しく説き聞かす様に言った。

二人はトラックを止めレストランに入った。そしてそこで食事を摂った。

「どうだ、美味しいかね」

博士はペンネマカロニのグラタンを食べながら尋ねた。

「美味しい・・・・・何だそれは」

鶏肉のステーキを前にして彼は言った。

「その食べ物の味が気に入ったかどうかだよ。まあ一口食べてみたまえ」
「ああ」
フォークとナイフを使い肉を一切れ口に入れた。肉汁とソースが絶妙に絡み合っている。
村雨はそれを噛んだ。そしてそれを喉に流し込んだ。
「どうかね、その料理の味は気に入ったかね」
「・・・・・ああ。気に入った」
彼はフォークとナイフを操る手を止めて言った。
「そうか。それが美味しい、という事だ。食べるという事はとても楽しい事なんだ」
「楽しい・・・・・・」
「他にも色々とあるけどね。まあ今のもその一つだよ」
「そうか。今のこれが楽しいという感情なのか」
村雨は表情を変えず言った。
「そう、そしてそういった時は笑うんだ」
「笑う」
「そう、こういうふうにね」
博士はそう言うとその顔に満面の笑顔を作った。
「顔の筋肉の形を変えるのか」
「・・・・・まあそうとも言うかな」
博士は少し寂しい顔になった。だがあえて笑顔に戻った。
「さあ君も笑ってみてくれ。私みたいに」
「ああ」
村雨はその頬を緩め目を細めた。そして笑顔を作ってみた。
「こうか」
その顔で博士に尋ねる。見れば実に爽やかな笑顔である。
「そうだ、その顔だよ」
博士は顔を崩して言った。
「いい顔をしているじゃないか。いいかい、今度から楽しいという

感情を持ったら笑うんだ。解かったね」
「ああ」
村雨は覚えたばかりの笑顔で博士に答えた。
その時駐車場では数人の見るからに柄の悪そうな男達がいた。辺りをキョロキョロと見回しながら何かを物色しているようである。
「何かいいやつねえのかよ」
その中の一人の茶髪の男が言った。
「ああ、今日はしけてやがんな」
野球帽を逆の向きに被った男が相槌を打った。彼等はどうも車荒らしらしい。
彼等は駐車場を見回っている。その時ふと博士と村雨の乗っている軽トラが目に入った。
「何でえ、ボロい軽トラだな。こんだけ錆だらけでよく動くよな」
「ああ。けど見てみろよ、これ」
ヘルダイバーに目がいく。
「かなりいいバイクだぜ」
茶髪がニヤつきながら言った。
「そうだな、これは高く売れるぜ」
野球帽の男もそれに頷いた。
「おい、売るのかよ。勿体無えぜ。それよりも俺達で乗ろうぜ」
二人とは別の無精髭を生やした男が言った。
「そういえば御前バイクすきだったよな」
茶髪が言った。
「気持ちはわかるがちょっと待て。今時盗んだ車使ってたらすぐに足がついちまうぜ」
「そうそう、だから何食わぬ顔で売り飛ばすのが一番なんだよ。何、これだけのバイクだ。いい値で売れるぜ」
野球帽はニヤニヤしながら言った。
「そ、そうか・・・・・・」
髭の男は渋々ながらもそれに従った。

影の男その三

「じゃあ早速かっぱらっちまおうぜ。人が来ないうちに」
「ああ、じゃあ俺が見張りをしといてやるよ」
野球帽が残り他の者がヘルダイバーに飛び付いた。
「・・・・・見れば見る程凄えマシンだな」
茶髪の男が銀に輝くボディを見ながら言った。
「ああ、何か無性に乗りたくなっちまったぜ」
髭の男が物欲しそうに言う。
「だから止めとけって。すぐにお縄にかかっちまうぜ」
彼等とは別のサングラスの男が言った。
「そうだぜ、御前もムショで臭い飯は食いたかねえだろ」
「ムショか・・・・・。それは嫌だな」
髭は思い直した。何や嫌な思い出でもあるのだろうか。
「じゃあ早速ワイヤー切って持って行こうぜ。カッター持ってるよな」
「ああ、ここに」
そしてワイヤーを切ろうとしたその時だった。後ろから不意に声がした。
「何をしている」
それは村雨だった。ヘルダイバーの側に立ち表情を変えず男達を見下ろしている。
「な、何だこいつ何時の間に・・・・・」
その上背と全身から発される妙な威圧感に男達は気圧されていた。
「何をしているのだ」
村雨は表情も変えず声にも抑揚が無い。それが男達にとっては一層不気味であった。
「野郎っ」
サングラスの男が殴り掛かる。だがそれは手の平で受けられてし

まった。
そして村雨はそれを後ろへ投げる。サングラスは背中から地面へ叩き付けられた。
「な、こいつかなり強いぜ」
男達は怯んだ。完全に怖気付いていた。
だがここで逃げるのも癪だった。茶髪の男が懐から何かを取り出した。
「じゃあこいつでどうだ」
それはナイフだった。恐怖震えそうになる手を必死で押さえている。
「ふん、逃げるならいまのうちだぜ」
茶髪は内心村雨から発される威圧感に怯えながらもやせ我慢をして言った。だがそれに対し村雨は相変わらずの無表情で言った。
「それはナイフか」
全く動じている様子は無い。ただその震えそうになっている手を見ている。
「て、てめえこれを見て怖くは無いのかよ」
「怖い・・・・・それも感情の一つなのか」
村雨は彼を見て言った。
「今の御前の状態がそうか」
村雨は素っ気無く言った。その通りであったがそれにより茶髪っは感情を爆発させた。
「てめえっ！」
ナイフを振りかざす。そしてそれを村雨に突き立てようとする。だがむらさめはそれを掴んだ。ナイフを持つその手ではない。ナイフの刀身をである。
「なっ・・・・・！」
これには一同目をむいた。ナイフの刀身を掴んだだけでなくそこから血が一滴も流れないからだ。
村雨はナイフの刀身を掴む手に力を入れた。するとそれは粉々に

砕け散った。
「な、ななな・・・・・・・・・」
砂粒の様に落ちるその銀を見て男達は驚愕した。かろうじて失禁こそしなかったものの最早恐怖は隠せなかった。
「に、逃げろ化け物だっ！」
「お、俺を置いていかないでくれよっ！」
男達は逃げ出した。先程村雨が投げ飛ばしたサングラスの男も起き上がりその後を追いかけて行く。
「あれが恐怖というものか」
村雨は男達を見送りながら言った。そこへ博士がやって来た。
「いやあ済まん、急にトイレへ行きたくなってね。あれ、どうしてそこへ上がっているんだい？」
後ろのヘルダイバーの側に立つ村雨を見て言った。
「また一つ感情を知った」
それに対し答えず村雨はそう言った。
「？何だい、その感情は」
博士はそれに対して尋ねた。
「恐怖だ」
村雨は一言だけ言った。

影の男その四

ライダー達は日本各地へ散っていた。各地にいるであろうバダンの者達を探し出しそれを倒す為だ。彼等はアミーゴにいる立花藤兵衛や他の協力者達と連絡を取りつつ行動を展開していた。

「純子、本郷からの連絡はあったか？」

立花はアミーゴの奥に設けられた無線室で無線機の前に座る一人の女性に声を掛けた。

「はい、さっき連絡がありました。予定通り長崎に到着したそうです」

その女性は澄んだ美しい声で答えた。

この女性の名を珠純子という。見た所大学生の様である。黒いストレートの長い髪に整った可愛らしい顔立ちをしている。黄色の上着に赤いズボンを身に着けている。

デストロンに襲われているところを風見志郎に助けられた。そして彼の自宅に匿われたのだがそこで風見の両親と妹はデストロンの怪人ハサミジャガーに殺された。

自分のせいで彼の家族が殺されてしまったと思った彼女は以後彼に献身的に協力するようになる。そして彼と共にデストロンと戦うようになったのである。

彼女は普通の女性であり力は無い。だが少年仮面ライダー隊の通信係として活動しブイスリーやライダー隊の行動を後方から支えたのであった。その貢献は大きかった。

デストロン崩壊後は普通の生活に戻った。そして大学に入り福祉を学んでいた。だが時々遊びに来ていたアミーゴでバダンの話を聞き再び協力を申し出たのだ。可憐で心優しいが芯の強い女性である。

「今長崎の市内にいるそうです。これから捜査を開始するとか」

「そうか、やっと着いたか」

立花はその報告を聞き嬉しそうに言った。

「隼人も九州だったよな」
「はい、鹿児島です」
「そうか、二人で九州を頼むと伝えておいてくれ」
「はい」
純子は笑顔で答えた。
「解かりました。それでは今から捜査を開始します」
純子からの声を聞いて本郷は携帯を切った。そしてそれをポケットに入れた。
「さて、ここにいると見たが」
本郷は長崎の駅前から市内を見た。その下には路面電車が走っている。
この街は江戸時代より貿易で栄えた。出島がありオランダや清の商人達が常に出入りしていた。当時から異国情緒が強い町であった。それは幕末や明治になっても変わらなかった。グラバー氏がこの街に居を構えそこに尊皇の志士や商人達が出入りした。そしてイタリアの作曲家プッチーニはこの街を舞台にしたオペラ『蝶々夫人』を作曲している。
貿易の次は造船で栄えた。だがこの街を不幸が襲った。
原爆である。本来は福岡を襲う予定であったらしいが気象の関係でこの街に投下したのだ。
長崎は地獄となった。これにより多くの人が死にそれ以上の人達がその傷跡に苦しんだ。
だが長崎は甦った。そして今は観光でも繁栄している。多くの名所と坂道で知られる美しい街である。
中華街へ入った。横浜や神戸のそれと比べると規模は小さいが長崎ならではの異国情緒がここでも味わえる。
その中のある料理店へ入った。そして料理を何品か注文する。
彼が入った後も客が次々と入って来る。食事時だけあって客足は多い。
本郷は入口に身体を向け座っている。そして客の一人一人を見て

いた。
やがて黒いスーツの女性が入って来た。下も黒いズボンである。
「お待たせ、猛さん」
その女性は本郷の側へ行き微笑んで挨拶をした。ルリ子である。
「いや、俺もちょっと前に来たばかりでね。ほら、まだ料理が来ていないだろう」
「ふふふ、そういえばそうね」
ルリ子はコップ以外何も無いテーブルの上を見て微笑んで言った。
二人は食事を済ませた後店を出た。そして中華街を後にし長崎の市街に出た。
「学生時代に一回来た事はあったけれど。本当に綺麗な街ね」
ルリ子は煉瓦で舗装された坂道を歩きながら言った。
「うん、ここへ来たのは初めてだが確かに坂が多いな」
本郷が白い煉瓦を見ながら言った。
「しかし本当に綺麗な街だな。出来る事なら何時までもここに住んでいたいものだ」
海の方を見る。一隻の船が汽笛を鳴らして出港していく。
「そうね、本当に捜査でここに来ているのが残念だわ」
ルリ子は悔しそうに言った。二人はそのまま大浦天主堂へ向かった。
かって我が国はキリスト教の布教、信仰を禁止していた。これはキリスト教の布教から侵略を行なうスペインのやり方を知り、それを恐れたからであった。これはオランダが徳川家康の耳に入れたと言われるが豊臣秀吉から始まっているのでそうともばかりは言えない。実際にスペインはそのやり方で侵略を行なっていた。
その結果切支丹狩りや踏み絵等が行なわれた。西洋の魔女狩りとは違いかなり慎重で厳密な方法が取られ、信者も処罰するより前に信仰を捨てるよう言われたがたがそれでも信仰は容易に捨てられるものではない。多くの者が殉教していった。そして信仰は巧妙に隠

され続いていった。

その歴史も終わる時が来た。それはやはり黒船がもとであった。

影の男その五

一八五七年（安政四年）、長崎で踏み絵が禁止され翌年外国人の為の聖堂建立が認められる。そして一八六五年（元治二年）、フランス人神父プチジャン神父により建立された。西坂の丘で殉教した二六人の殉教者の為に建てられたこの天主堂において神父は信者を捜した。だが彼は内心殆ど諦めていた。長きに渡った弾圧である。流石にもう信者は残っていないであろう。だがすぐに彼はその考えが早過ぎた事を知った。

まずイザベルナゆりという女性をはじめ数人男女が来た。そしてそれから次々と世を忍び信仰を続けていた切支丹達がやって来た。奇蹟だった。神父はその奇蹟に心を打たれた。何とこの長崎だけでも数万もの切支丹達が信仰を続けていたのだ。

聖堂の中は美しいステンドガラスがある。そして夜になると光で彩られる。『日本の聖母像』と呼ばれる神々しい聖母像もある。国宝にも指定されている歴史的にも文化的にも重要な建物である。

「ここで見たという人がいると聞いたが」

本郷が天主堂へ向かう階段を登りながら言った。

「この天主堂で・・・。何か妙な話ね」

ルリ子がその言葉に合わせるように言った。

「確かに。現代の魔物と言ってもいい彼等が教会に姿を現わすとは。いや、あながち間違いではないか」

かっての教会の腐敗をそこに含んでいた。教会の腐敗と暴走は欧州の歴史において重要な位置を占めている。それが為に多くの血も流れている。

天主堂の前に着いた。左手にはローマ法王ヨハネ＝パウロ二世の胸像がある。

ここまで来て彼等は妙な事に気付いた。普段は平日でも多くの観光客が訪れるこの天主堂だが今ここにいるのは彼等二人だけなので

ある。
「・・・・・おかしいと思わないか、ルリ子さん」
本郷は辺りの気配を探りながら言った。
「・・・・・ええ、確かに」
ルリ子も何かを察した様である。気を張った。そして聖堂へ入っていった。
聖堂の中は少し薄暗かった。ステンドガラスから差し込める光がその中を照らしている。
中にはやはり二人以外誰もいない。二人は身長に前へ進んでいく。中央まで来た時だった。急に後ろの扉が閉まった。
「ムゥッ!?」
本郷がルリ子を庇う様に身構えた。その周りを幾つかの影が取り囲んだ。戦闘員達だ。
「フッフッフ、よく来たな、本郷猛よ」
礼拝堂も方から声がした。
「バダンかっ!」
「フフフ、如何にも」
その声と共に影が礼拝堂の前に現われた。それはすぐに人の姿になった。赤い髪と緑の眼を持つ若い男である。黒い神父の服を着ている。その胸には何かが架けられている。
だがそれは神父が架けるべきロザリオではなかった。悪魔を現わす逆十字であった。
「貴様は・・・・・」
「バダン怪人軍団の一人、アンリ＝ド＝フォンテーヌ。またの名をカメレオロイドという」
逆十字の男は落ち着き払った声で答えた。
「バダン怪人軍団・・・・・。そんなものまであるのか」
「そうだ。我がバダンの真の選ばれし者達だ。以後覚えていてもらおう」
男は前に進みながら言った。

「もっともそれは天界での話だがな」
アンリ、いやカメレオロイドは端正な白い顔に冷酷な笑みを浮かべて言った。
「何っ！？」
本郷はその言葉に反応した。
「貴様はここで死ぬからだ。その為に私はここへ貴様を誘き出したのだからな」
舌を出す。それは人のものではなくぬめった蛙のそれに似た長い舌だった。
「せめてこの聖堂で死にすぐに神の前に行くがいい」
その言葉と共に二人を取り囲んでいた戦闘員達が動きだした。
「ギィッ」
一斉に本郷とルリ子へ向けて襲い掛かる。その手にはスピアがある。
「やらせんっ」
本郷はまず一人の戦闘員の手を打った。そっして落としたスピアを奪った。
それをルリ子に手渡す。ルリ子はそれで戦闘員達を次々と倒す。
本郷は戦闘員達をその手刀で薙ぎ払いながらカメレオロイドへ向かう。彼はそれに対して冷酷な笑みで答えていた。
「喰らえっ！」
本郷が拳を胸に打ちつける。だがそれは彼の胸を透き通った。
「何っ！？」
「フフフ、これは私の幻影だ」
彼は笑いながら言った。
「ただ貴様を消すだけでは面白くない。戦いは神聖な行いなのだからな」
「言うなっ、戦いが神聖だとっ！」
本郷はカメレオロイドの幻影を睨みつけて言った。
「ここで貴様とそれについて話すつもりは無いただこちらのこれか

らの我々の行動について教えてやろう」
カメレオロイドはその冷酷な笑みをたたえたまま言葉を続ける。
「我々はこの長崎の二つの場所に爆弾を仕掛けておいた。戦いをより神聖なものとする為にな」
「なっ！」
それには本郷もルリ子も驚かずにはいられなかった。

影の男その六

「場所も言おう。平和公園とグラバー園だ。どうだ、分かり易い場所だろう」
　カメレオロイドは二人を嘲笑する様に言った。
「今日の夕刻までにこの二つの爆弾は爆発する。それにより爆弾の半径一キロが粉々に吹き飛ぶ」
「今日の夕刻・・・・・・」
「若し貴様がそれを止めたければこの二つの場所に来い。そして爆弾の時限装置を壊すのだな」
「貴様に言われるまでもない、こちらからそうしてやる！」
「もっともそれが出来るのならばの話だがな」
「何っ！？」
　本郷はその言葉に顔をしかめた。
「この二つの場所には我がバダンの戦士達がいる。無論この私もな」
　カメレオロイドの眼が変化した。緑の人のものから虹の様な彩りの、カメレオンの眼になった。
「その者達に勝たない限り爆弾を壊す事は出来ん。そう、貴様は爆弾を取り外す事は決して出来ないのだ」
「戯言を、必ずや貴様のその言葉、後悔させてやる！」
「残念だな、私はその言葉の意味を知らない。全くな」
　そう言うとカメレオロイドの幻影はその姿を薄めていった。
「貴様の最後、楽しみにしている。自らの力が及ばず街が燃える様を見届けながら死ぬがいい」
　そう言うと彼の幻影は姿を消していった。
「バダン怪人軍団・・・・・・。ゼクロスだけでなくそんな連中までいるのか」
　カメレオロイドの幻影が消え去った後本郷は呟いた。
「猛さん、それよりも」

ルリ子が不安げな眼をする。
「ああ、解かっている。平和公園とグラバー園の爆弾だ、すぐに行こう」
「ええ」
二人はすぐさま礼拝堂を後にした。それを礼拝堂の上から見送る一つの影。
「フフフ、見事に動いてくれるな」
黒い服を着た神父、カメレオロイドであった。
「焦り、もがくがいい。そして気を乱すのだ」
笑っていた。自分より下等な生物を愚弄する笑いだった。
「私を楽しませてくれ。そうでなければ面白くはない」
カメレオロイドはそう言うと姿を消した。礼拝堂の下ほホテルの前では本郷とルリ子がバイクに乗り出発していた。
長崎平和公園は原爆投下の中心地とその北側に平和を祈願して造られた公園である。その中央には有名なブロンズ像がある。高く掲げられた右手は上から落ちて来た原爆の怖ろしさを、そして水平に伸ばされた左手は平和を示し、原爆の犠牲となった人々の冥福を祈る姿を取っている。その他にも公園内には水を求めてさまよった少女の手記が刻まれた平和の泉や世界各国から贈られた平和の像が立ち並んでいる。
爆心地のすぐ下には教会があった。だが原爆によりその全てが破壊された。同じ神を信じている筈の者達に。それが戦争なのである。これは歴史の皮肉である。その教会を建てた者も壊した者も同じ神を信ずる者達であったのだ。だが一つの奇蹟が起こった。
跡形もなく吹き飛ばされた教会だったが一つだけ残ったものがあった。鐘である。神を祝福する鐘である。それだけが無傷で残った。それを見た人々は涙した。全てが焼き尽くされ何も無くなった長崎に希望が残ったのである。
「その希望すらも、平和への気持ちすらも踏み躙るバダン・・・・・、許せん！」

本郷はマシンに乗りながら憤っていた。その顔には怒りの色が浮かんでいる。人の幸福を、平和を、希望を踏み躙る悪に対する怒りの色である。

平和公園に着いた。もう昼過ぎである。見れば何処もおかしなところはない。そこらで座りジュースを飲み談笑している人達がいる。皆平和に満ち足りた笑顔をしている。

（この笑顔の為にも・・・・・・）

本郷は進んだ。何処にあるのかまだ判らない。だが絶対に見つけるつもりだ。

「ここにはないか」

平和記念像の辺りを調べたが無かった。ラグビー場やプールにも無かった。

「ここにもないか」

ふと浦上川の方を見る。子供達が楽しそうに釣りをしている。その後ろには陸上競技場がある。今日は誰も使用していないらしく静まり返っている。

「誰もいないのか。静かなものだな」

ふと耳をすます。その時彼の脳裏にある事が煌いた。

（・・・・・そうか！）

この辺りにはラグビー、サッカー場やプールの他に野球場、テニスコートとスポーツの施設が充実している。今日は何処も使用され人がいる。だが陸上競技場にだけはいない。そこならば爆弾を仕掛ける事も容易な筈である。

「ルリ子さん、陸上競技場だ」

「えっ・・・・・・！？」

本郷の咄嗟の言葉にルリ子は面喰らった。彼のこうした発言や行動はいつもの事だがそれでも驚かされる。

競技場の中に入った。やはり人はおらずがらんとしている。

「爆弾はここにある筈だ」

本郷の言葉に従い二人は捜しはじめた。暫くしてルリ子が観客席

から何か黒くて四角いものを発見した。
「猛さん、これ」
間違いなかった。そこにはデジタル時計まであった。
「よし、これ位ならすぐに解除出来るな」
本郷はすぐに解除に取り掛かった。そして爆弾を取り外した。
「これもう心配は無い。信管も時限装置も取り外したぞ」
「ええ、後はグラバー園ね」
二人が笑い合ったその時後ろの、グラウンドの方から声がしてきた。
「見事だ。流石はライダー達のリーダーを務めるだけはある」
「その声はっ！」
二人は振り向いた。そこには黒い神父がいた。
「カメレオロイド・・・・・・」
「言った筈だ、我々がいると」
胸の逆十字をかざした。すると地の底から戦闘員達が出て来た。
「夕刻までの時間、そう簡単には過ぎさせん。せいぜいあがくがいい」
彼はそう言うと姿をグラウンドの中に消していった。
「クッ、去ったか・・・・・・・・」
この時本郷は致命的な判断ミスえお犯していた。それに気付いた時は既に遅かった。
「イィーーーッ！」
戦闘員達が向かって来る。本郷とルリ子はそれを迎え撃つ。
一刻も早く彼等を倒そうとする本郷達に対し戦闘員達は間合いを開きナイフを投げ攻撃するだけだ。明らかに時間を浪費するよう仕向けている。

影の男その七

「まずい、このままでは」
本郷が焦りだす。それを察したルリ子が懐から何かを抜いた。
それは拳銃だった。素早い動きで戦闘員の胸を撃ち抜く。
「グギィッ」
胸を撃たれた戦闘員が苦悶の声をあげ倒れる。ルリ子は次々と発砲する。
戦闘員達は次々と倒れる。見事な腕前だ。
「ここは私に任せて。猛さんはグラバー園に」
「う、うむ」
本郷はその言葉に従い急ごうとする。だがその時だった。
「きゃっ」
何かがルリ子の腕を掴んだ。そして拳銃を奪う。
「見事な腕前だ。女にしておくのは勿体無い」
不意に声がした。カメレオロイドの声だった。
「ルリ子さんっ！」
本郷が駆け寄ろうとする。だが声は言った。
「動くな。それ以上動けば女の命は無い」
「くっ・・・・・・・・・」
本郷は足を止めた。それを見届けたのかカメレオロイドは姿を現わした。
「クククック」
次第に浮き上がる様にルリ子の後ろに浮かび上がる。その顔には満面の笑みがあった。
「私が何の改造人間であるか忘れていたようだな。このカメレオロイドの」
「ぬうう・・・・・・」
そうだった。彼は保護色で身体の色を自由に変えられるカメレオ

ンの改造人間なのである。従ってその場と同じ色になり姿を消す事が可能なのである。

そういった特性を本郷も知らぬわけではなかった。否、カメレオンを母体とする改造人間とも闘ってきた彼にとってこれは痛恨の失態であった。

「ぬかったな、本郷猛よ。この女は我々の捕虜だ」

「おのれっ、卑怯な」

「何とでも言うがいい。貴様のその苦しみ、焦りこそが私にとっては喜びなのだからな」

「くっ、外道が・・・・・・・・・」

だが動けない。彼の右腕はルリ子の首に当てられているからだ。

「時間を早める。あと一時間でグラバー園を爆破する。その前に私を倒し爆弾を解除するのだな」

「クッ・・・・・・」

「もっとも貴様に私が倒せたらの話だが。私を今までの組織の改造人間達と一緒にするなよ」

その通りだった。彼から発せられる気はこれまでの改造人間達とは比較にならない。

「若し来なければ女の命は無い。拒む事の無いようにな」

そう言うと姿を消した。

「あと一時間・・・・・・・・・」

腕の時計を見る。もう立ち止まっている時間は無い。

「ルリ子さん、待っていてくれ。必ず・・・・・・！」

本郷は競技場を急いで出た。そしてマシンに飛び乗った。

「行くぞ、サイクロン！」

変身はしない。だがマシンだけを新サイクロン改に変形させる。それで全速力で駆ける。激しい衝撃が全身を襲うがそれにかまわない。

そしてその中で変身をする。腰のベルトが現われた。

サイクロンのあまりの速さに道にいる車やバイクに乗る人は見え

ない。脇を風が通り過ぎていったとしか思えなかった。
「風か？やけに強い風だな」
車に乗り窓を開けていた人が呟いた。そのマシンは人の眼には見る事が出来なかった。そう、まさに風であった。

影の男その八

ライダァーーーーッ

右手を左から右へゆっくりと旋回させる。全身が黒いバトルボディに包まれ胸が緑になる。手袋とブーツは銀、改造手術を受けたとはいえ外見は変わっていないようだ。

変っ身っ！

右手を脇に入れ手刀だった先を拳に変える。それと同時に左手を思いきり右斜め上へ突き出す。顔の右半分がライトグリーンのマスクに覆われる。そしてそれは左半分にも至る。

「トォッ！」

跳んだ。今までとは比較にならないジャンプ力だ。

グラバー園は長崎市内を見渡せる丘の上にある。我が国の近代化に功績のあったイギリスの貿易商人グラバー氏が自身で設計し日本人の大工が建てた我が国最古の木造洋式建築物であるグラバー邸をはじめリンガー邸、オルト邸等の邸宅が立ち並んでいる。これ等の邸宅はどれも美しく見る人の目や心を楽しませ歴史の持つ深い味わいを教えてくれる。邸宅だけでなくこの長崎を舞台としたオペラ『蝶々夫人』のタイトルロールを当たり役とした我が国最初の国際的オペラ歌手三浦環の像やこのオペラの作曲者プッチーニの像もある。

この園は長崎にあるから当然坂も多い。その為エスカレータや歩く道も設けられている。

今この歴史と芸術を伝える美しい園に異形の者達がいた。黒い服に赤いマスクの戦闘員達である。

「本郷猛は来たか」

カメレオロイドはグラバー邸の前で戦闘員の一人に問うた。

「いえ、まだ見えておりません」

その戦闘員は敬礼をして答えた。
「そうか。時間はもうすぐだが」
「怖気づいたのではないでしょうか」
別の戦闘員が言った。
「そんな筈が無い。こちらには人質もいるし爆弾も仕掛けられている。来ない筈がない」
カメレオロイドは表情を変えずに言った。
「そう、人質だ。奴の性格からして助けに来ない筈がないのだ」
「そうなのですか」
「そうだ」
彼は邪な笑みを浮かべた。
「仮面ライダーという者達は人間が捕らえられているならば必ず助けに来る。たとえそれが一人であっても、死地に飛び込むと解かっていてもな。それが仮面ライダーという連中なのだ」
「わかりませんな。たった一人の人間の為に死地に飛び込もうとするなど。奴等は愚か者なのですか」
「愚か者か、確かにそうだな」
戦闘員のその言葉にカメレオロイドは別の種の笑みを浮かべた。
他の者を見下した笑みだった。
「奴等は愚か者だ。我等に刃向かうな。だが一つ忘れてはならない事がある」
彼は顔から笑みを消した。
「それは？」
戦闘員が尋ねた。
「奴等により今までの全ての組織が壊滅させられている。これは事実だ」
「はっ・・・・・・・・・」
それを聞いて戦闘員達の態度が硬くなった。
「いいか、油断はするな。このグラバー園を奴の墓標とする為にな」
「はい・・・・・・」

戦闘員達は緊張した様子で答えた。
「奴は我々が倒す。そして我等が理想社会を築くのだ」
彼はそう言うと邸内に入った。戦闘員達はそれを敬礼で見送った。
ライダーはその時グラバー園の中にいた。緑の中に隠れるようにして進んでいる。
「まずは爆弾を探さなくては」
見たところ戦闘員達が槍を手に警護を固めている。その中でもオルト邸の辺りの警護が特に厳しい。
「あそこか」
緑の中からでる。そして邸の裏からそっと忍び寄る。
「ギッ」
戦闘員の一人を後ろから首を絞めて倒す。そして裏手から中に入っていく。
素早き動きで中の戦闘員達を倒していく。どの者も声を出させないようにして喉や腹を次々に撃って倒していく。
「爆弾は・・・・・・」
中を見回す。見れば奥の部屋の端にあった。
「これだ」
素早く駆け寄る。そして時限装置を外した。
「これでよし」
ライダーは爆破装置が停止したのを見て頷いた。
「後はルリ子さんだ」
策があった。彼はオルト邸を出ると再び緑の中に身を潜めた。

影の男その九

三浦環の像の前。ルリ子はそこに縛られ吊るされていた。
像の真下に吊るされていた。その下は水が流れている。
「時間だ。ライダーはまだ姿を見せないか」
カメレオロイドが現われた。配下の戦闘員達も一緒だ。
「はい。何処にも姿を見せておりませんが」
「そうか・・・・・・。逃げたとは考えられんが」
彼は考える目をした。
「まあ良い。爆弾のスイッチを入れろ」
「はっ」
彼の指示の下戦闘員の一人がリモコンのボタンを押した。
「あれっ!?」
その戦闘員が目を点にした。
「どうした!?」
カメレオロイドが思わず声をかけた。
「いえ、爆弾が作動しません」
「何っ、まさか・・・・・・・・」
カメレオロイドの目の色が一変した。
「おいっ、すぐにオルト邸の方を見に行け」
「はっ」
すぐさま戦闘員のうち何名かがオルト邸に向かった。
「もしかすると・・・・・・」
それは充分予想された。だから今も姿を現わさないのか、彼は顔に焦燥感を浮かべた。
戦闘員達が戻って来た。彼はそれを認めるとすぐに口を開いた。
「どうだった!?」
それに対する戦闘員達の答えは彼の予想通りだった。
「残念ながら・・・・・・・・」

「やられたか・・・・・・」
彼は表情を変えることなく口の中で歯噛みした。
「間違いない、奴はここにいる。すぐにこちらにも来るぞ」
彼は戦闘員達に伝えた。
「ここに全員集結しろ、一刻も早くだ」
「はっ！」
彼の指示通りグラバー園にいる全ての戦闘員達が集結した。そして三浦環の像を取り囲む様に集まっていた。
「油断するな、奴は奇襲が得意だ」
カメレオロイドはその中心で戦闘員達に警戒する口調で言った。
「どういった方法で来るかわからん。充分に警戒しろ」
「はい・・・・・・」
戦闘員達も緊張していた。最早その眼はルリ子からは離れていた。
そう、彼等の眼はルリ子を見ていなかった。
「トォッ！」
不意に後ろから声がした。そして銅像の側に着地するとルリ子を救い出した。
「ライダー！」
ルリ子が喜びの声をあげる。その声にカメレオロイドも戦闘員達も顔を一斉に後ろに向けた。
「しまった、後ろか！」
「そうだ、まんまとかかったな！」
ルリ子の縄を解いた彼は彼女を護る様にして像の横に立っていた。そして彼等を指差しながら見下ろしていた。
「俺の奇襲に警戒している間にルリ子さんから注意が離れる、それを狙ったのだ！」
「おのれ、ぬかったか！」
「約束通りルリ子さんは返してもらうぞ」
ライダーはそう言うとルリ子を抱いて高く跳んだ。そして像の後ろの壁の上に着地する。

「さあルリ子さん、今のうちに。ここは俺が引き受ける」
「え、ええ」
ライダーに促されルリ子はその場を去った。
「よくも私の策を破ってくれたな」
カメレオロイドは顔に怒りを浮かべながらこちらに上がって来た。
「貴様等がどの様な策を用いてもこのライダー、必ず打ち破ってみせると言った筈だ！」
ライダーはカメレオロイドを前にして言った。
「そうか・・・ならばその礼をしてやろう」
カメレオロイドは口の端を歪めて笑った。
「私の真の姿を以ってな」
目を閉じる。それに右手の親指と人差し指を当てる。
それを外す。目を開ける。七色に光るカメレオンの目だった。
それを合図に身体が変化していく。肌が緑色の鱗になりそれが全身を覆っていく。
両手は金属の鉤爪となった。尻尾が生え口は尖り長い舌が見える。
そこにいたのは人とカメレオンの合成獣だった。間違い無く改造人間であった。
「それが貴様の正体か」
ライダーは怪人に対して言った。
「そうだ。私の力、これまでの組織の怪人と同様に考えないことだな」
戦闘員達が襲い掛かる。ライダーとカメレオロイドの戦いの火蓋が切って落とされた。
「イィーーーッ！」
戦闘員達が槍を投げる。ライダーはそれを手刀でことごとく打ち落とす。

影の男その十

「喰らえっ！」
ライダーがそのうちの一本を掴み投げ返す。それは戦闘員の胸を貫いた。
戦闘員達は接近し槍で突き拳を繰り出して来る。だがライダーはそれを全て防ぎ逆に拳や手刀で倒していく。
「どういうことだ、これまでより戦闘力が遥かに上がっているが」
戦闘員達を次々と倒していくライダーを見てカメレオロイドは首を傾げた。
「よもや強化改造を受けたのか・・・・・・」
「そうだ。このライダー、貴様等と戦う為再び改造手術を受けたのだ！」
ライダーは怪人に対して言った。
「貴様等悪の手先と戦う為なら例えこの身がどうなろうとも我等はやる！」
そこには強い決意の色が現われていた。悪の組織に自身の身体を改造されそれから長きに渡って戦い続けた者だけが言える言葉であった。
「フン、戯言を」
それに対しカメレオロイドは冷ややかに言った。
「我等が理想社会を築く為の礎になる事を拒んだ愚か者めが。死してその罪を償うがいい！」
両手の鉤爪を伸ばして来る。ライダーはそれを蹴りで弾き返した。
それが合図だった。戦闘員達は既に全員倒されていた。ライダーと怪人の一騎打ちが始まった。
怪人は舌を鞭の様に振るう。ライダーはそれを身を屈めてかわす。
「・・・・・・どうやら運動能力が以前とは比較にならない程上昇しているな」

怪人は舌を収めて言った。
「運動能力だけではない。今までのライダーと思ったら大間違いだ！」
拳を繰り出す。一撃で右の鉤爪を叩き壊した。
「成程。パワーもかなり上昇しているな」
壊れた右腕を見下ろしつつ言う。
「ならば私も全力を出そう。貴様を葬る為にな」
その姿が徐々に消えていく。そして完全に溶け込んだ。
「・・・・・隠れたか」
ライダーはそれを見て身構えた。カメレオンの怪人の戦法は知り尽くしている。
ライダーは息を潜める。そして辺りの気を察している。
（必ずここにいる。必ず）
ライダーは知っていた。怪人の考えをそしてどう動くかも。
後ろから何か音がした。ライダーは咄嗟に動いた。
「そこだっ！」
後ろから鉤爪が来る。その姿は見えない。だが鉤爪が切った空気の感触でその動きを感じた。
後ろに宙返りした。そのまま足を思いきり蹴る。
それは怪人の後頭部を直撃した。姿は見えない。だがそこに怪人はいた。
鈍い音がした。後頭部を上からオーバーヘッドキックの要領で蹴り飛ばされた怪人は姿を現わした。そして倒れ込んだ。
「グオオオオ・・・・・・・・・」
両膝を着き呻き声をあげる。どうやらかなりのダメージのようだ。
「そうか、風の動きで私の位置を知ったのか」
怪人は立ち上がりながら言った。かなりのダメージだがそれでも立ち上がってくる。
「そうだ。姿は消せてもその動きまでは消せない」
ライダーは怪人に対して言った。

「フフフ、流石はライダー一号、見事だ。しかしな」
怪人の目が妖しく光った。
「これだけでこのカメレオロイドを、誇り高きバダンの改造人間を倒したと思わん事だ！」
その長い尻尾を絡めてきた。そして思いきり投げる。
「ウォッ！？」
何とか着地した。そこはグラバー邸の前だった。
「死ね！」
左腕を鉤爪から人形の手に変化させる。そしてそれを口の中に入れた。
舌が剣となって出て来た。それを手にライダーの前へ跳んで来た。
剣を縦横無尽に振り回しライダーに斬りつける。かなりの腕前だ。
これにはさしものライダーも次第に追い詰められていく。

影の男その十一

半歩退いたライダーはふと草に引っ掛かった。転びはしなかったがバランスを崩した。
「その首、もらったぁ！」
その機を逃すカメレオロイドではなかった。剣を横に一閃させライダーの首を刎ねようとする。
だがライダーはそれをしゃがんでかわした。そして怪人のガラ空きとなった足下を蹴りで払う。
「うわっ！」
怪人は転んだ。倒れる怪人を見てライダーは勝機を悟った。
「今だっ！」
ライダーは跳んだ。そして空中でその身体を楔状激しく回転させる。
「ライダァーーーッスクリューーーーキィーーーーック！！」
高速回転しながら蹴りを放つ。それはようやく起き上がったばかりの怪人の胸を直撃した。
「ガハァッ！」
その蹴りを受け再び倒れる。だがまた起き上がってきた。
「何ッ、あの技を受けて立ち上がるとは」
これにはライダーも驚いた。だが怪人は最早立っているのがやっとだった。
「見事だ、ライダー。よくぞこの私を倒した」
カメレオロイドは人の姿に戻りながらライダーに言った。
「この長崎での作戦は失敗だ。私は貴様に敗れたのだからな」
「カメレオロイド・・・・・」
怪人とはいえ見事な潔さであった。
「だが覚えておくがいい。最後に勝つのは我がバダンだ。そして私はいずれ甦り再び貴様等の前に現われるだろう」

そう言うと天高く跳んだ。
「その日までさらばだ。偉大なるバダンの首領に栄光あれーーーっ！」
カメレオロイドは空中で四散した。欠片がパラパラと落ちて来る。
「バダン怪人軍団・・・・・。恐ろしい奴等だ」
爆発と砕け散った強敵を見上げながらライダーは呟いた。
カメレオロイドとの決戦を終えた本郷は船の中にいた。今出港を告げる汽笛が鳴った。
「今度は沖縄ね」
傍らにいるルリ子が尋ねた。
「ああ。あの地でもバダンが何かと暗躍しているらしい。おやっさんから連絡があった」
「そう。おじさんも相変わらずお元気みたいね」
「おいおい、何を言うんだ。おやっさんはまだそんな歳じゃないぞ」
ルリ子に対して笑って言った。
「あれっ、そうだったの？もうお孫さんがいるようなお歳だと思っていたけれど」
「まあ外見はそうだけれどね。まだまだ充分にやっていけるよ」
「そうだったの。なんか大分御会いしていないから忘れちゃったわ」
「ルリ子さんは滅多に日本に帰って来れないからね。仕方ないか」
「けれどいいわ。この戦いが終わったら久し振りにアミーゴへ行くつもりだし」
ルリ子は笑って言った。
「うん、是非そうした方がいい」
本郷は微笑んで頷いた。
船が動きはじめる。二人は話を止め海の方へ顔を向けた。
目の前に青いサファイアを溶かしたような海が広がっている。二人は束の間の休息を楽しみながらその美しい海を眺めていた。そして新たな戦場に向かうのであった。

影の男　完

2003・12・3

地底からの魔手その一

地底からの魔手

本郷猛が長崎においてカメレオロイドと死闘を繰り広げていた頃一文字隼人は鹿児島にいた。この地において怪人らしき者を見たという報告があったからだ。

「ここに来るのも久し振りだな」

一文字はフェリーから市内へ降り立って一言感慨深げに呟いた。彼は日本にいた頃この九州でショッカーと戦った経験があるのだ。

「あれが本郷との初めての共同戦線だったな」

彼はそう言って目を細めた。この地において彼等は死神博士の開発した強力な改造人間を力を合わせて撃破したのである。それが伝説とまで謳われたダブルライダーのはじまりであった。

港には一人の男が立っていた。黒いジャケットを着ている。こちらに背を向け煙草を吸っている。

「よお、待ったか」

一文字は男に声をかける。

「いや、丁度今来たところだ」

男は振り返り煙草を消した。男は滝和也だった。

「じゃあまずは腹ごしらえといくか」

「ああ。何処かいい店でも知っているのか」

「ああ。ストロンガーが鹿児島にはやけに詳しくてな。色々と教えてもらった」

「ストロンガーが？意外だな」

「ブラックサタンと戦っていた頃はおやっさん達と一緒に日本全国を回っていたらしいからな。その時にここにも立ち寄ったらしいな」

「成程ね。じゃあ早速食いに行こうか」

「ああ。何がいい？」

「そうだな。黒豚のカツでも食うか」

「よし、それにしよう」
二人は頷き合いバイクに乗った。そして市内へ入っていく。
村雨はレストランを出て再び博士と共に東京へ向かっていた。夜になった。二人は邪魔にならない所にトラックを停めて休息を取っていた。
博士は身体に白衣を被せ車内で眠っている。村雨は外で一人立っていた。
もうバダンの制服は着ていない。あまりにも目立つからという理由で博士が服を買ったのだ。
緑のジャケットと白いシャツ、シャツと同じ色のスラックスを身に着けている。白いシューズを履き黒いグローブを嵌めている。その筋肉質で大きい身体が服の上からでもわかる。
組織を脱出して数日。彼は幾つかの感情を知った。
「喜び・・・・・恐れ・・・・・」
それは人として必要なものだという。だがそれが何故必要なのか彼にはまだよくわからない。戦うにあたって不要だから彼から削除されたのだと博士は言った。
「だがそれは間違いだ」
その時博士は彼に言った。そして博士は仮面ライダーというバダンと戦う戦士達について語った。
「あの男達か」
彼と戦い手傷を負わせたあの男達。思えば彼等との戦いがあったからこそ今バダンから脱出したのだ。
博士は言った。彼等は自分と同じ改造人間だと。しかし心は失っていない。人を、世界を愛し正義と温もりを知る心を。だからこそ彼等は戦えるのだと。愛と正義を知る人の心を持つからこそ彼等は戦えるのだと。
「それでは俺は戦えないのか。その正義の下には」
彼は言った。その言葉を博士は首を横に振って否定した。
「違う。君も心を、感情を取り戻したならば正義の下に彼等と共に

戦えるのだ」
博士は力強い声で彼に言った。その口調は有無を言わせぬ強いものだった。
「俺も・・・・・・正義の下に・・・・・・」
彼はその時の言葉を思い出していた。何故かその言葉が妙に心に残った。そして何か不思議な感触を味わった。
「・・・・・・これも感情の一つか」
彼は思った。そして博士に教えてもらった感情の一つを呟いた。
「喜びというのか。何かと見たり感じたりして心が浮き上がる」
彼は自分の胸を見た。
「楽しみにも似た感情だ。正義の下に戦えると思っただけでこうした感情を抱けるとは」
上を見上げた。限り無く黒に近い紫の空が広がっている。
そこには無数の星々が瞬いている。赤い星、青い星、白い星。様々な星がある。
「どこの空も同じだな。昼には青い空に白い雲と金色の太陽があり夜には紫の空と様々な色の星達と黄色い月がある」
村雨は呟いた。そして数歩歩いた。
そこへ何かが駆けて来た。彼は咄嗟に身構えた。
「バダンか・・・？」
だがそれはバダンの者ではなかった。小さい影だった。
それは子犬だった。白い巻き毛の可愛らしい犬だった。
「あ、捕まえてくださ～～～い」
その後ろから女の子の声がする。彼はその言葉に従い子犬を捕まえた。
「ワン」
子犬は一鳴きして彼の腕の中に入った。どうやらかなり人に慣れた犬らしい。
「あ、有り難うございます」
さっき声をかけてきた女の子が出て来た。黒い髪の可愛い女の子

だ。高校生位か。
「おい美由紀、駄目だろペスから目を離したら」
その後ろからもう一人駆けて来た。二十位の若い男だ。
「御免なさい、お兄ちゃん。ちょっと目を離したらすぎに走っていっちゃうんだもの」
「だから手綱を強く握ってろって。ただでさえ御前は力が弱いんだからな」
「御免なさい・・・・・・」
美由紀と呼ばれたその娘は申し訳無さそうに頭を垂れた。
「わかればいいよ。あ、ペスを捕まえて頂き有り難うございます」
若い男は村雨に頭を垂れて礼を言った。
「ペスというのか、この子犬は」
村雨は腕の中の子犬を見下ろしながら言った。表情は変わらない。
「はい。可愛いでしょ」
「可愛い・・・・・・・・・」
彼はその顔を見た。村雨を見て人なつっこそうに笑っている。

地底からの魔手その二

「俺を見て笑ってくれるのか」
それを見て彼の口元が綻んだ。
「俺は笑っているな。そうか。俺は今楽しんでいるのか。いな、この感じは少し違うな。喜んでいるのか」
村雨は言った。それは今までの抑揚の無い無表情な声ではなかった。僅かではあるが嬉しさのこもった声であった。
「ワン」
子犬は吠えた。そして飼い主達の方へ顔を向けた。
「ん」
村雨もそれに気付いた。どうやら飼い主達の方へ帰りたがっているようだ。
「そうか」
村雨はそれを察して二人に子犬を返した。子犬は嬉しそうに二人の胸へ飛び込んで行った。
「御前も嬉しいのか。飼い主達のところへ戻ることが出来て」
村雨はそれを見て呟いた。飼い主達は村雨に礼を言ってその場を去って行った。
「よかったな、美由紀。優しい人に拾ってもらって」
「うん。これからは気をつけるわ」
遠くから二人の声が聞こえてくる。それを聞きながら彼は思った。
「優しい・・・・・・優しさのことか」
彼は博士に教えてもらった感情の一つについて考えた。
「人に何かとする。いや、させてもらう事。それはその人について色々と考える事から生ずる・・・・・・・・」
彼は博士の言葉を心の中で反芻していた。
「そしてそれは人が人である為になくてはならないものだと・・・・・・・・」

子犬が来た方を見た。彼の改造された目をもってしてももう彼等は見えない。だが彼は別のものを見ようとしていた。
「俺の知らなければいけない事はまだまだあるな」
彼はそう言うと車の中に入った。そして博士の横で休息を取った。
一文字と滝は食事を済ませ市内を回っていた。そして雑誌記者とカメラマンという滝は偽りの、一文字は本当の経歴を使って情報を収集していた。
「なんか思ったより情報の入りがいいな」
市内のホテルの一室で滝は一文字に言った。
「そうか？俺はそうは思わないが」
一文字はフィルムを見ながら不満そうに言った。どうも彼はいい写真があまりなくて不満らしい。
「まあそう言うなって。どうやら桜島の辺りに目撃例が多いし。それだけでも重要な手懸かりだぜ」
「確かにな。どうやら桜島に何かするつもりらしいな」
「おおかた大噴火でも起こさせるつもりなんだろう。連中がよくやる事だ」
滝が言った。彼もショッカー、ゲルショッカーと幾多の死闘を展開しているだけあって彼等のやり口には詳しい。
「だろうな。ゾル大佐がやろうとした事もあったしな」
一文字もそれに同意した。話しながらかっての宿敵との戦いを脳裏に思い出す。
「あの時は確か核爆弾を使おうとしていたな。今回はどんなやり方で来るかな」
「まあどんなやり方で来るかはまだ判らんが絶対に奴等の作戦を防がなくちゃな。さもないと九州南部が火の海だ」
桜島は大型の火山である。これが爆発した時の被害が甚大である事は容易に想像がつく。
「ああ、勿論だ。何としても奴等の作戦を阻止するぞ」

「よし」
二人はホテルを出た。そして早速桜島へ向かった。

地底からの魔手その三

その二人をビルの上から見る影があった。影はそれを見届けるとビルの陰へその姿を消した。

「そうか、ここには一文字隼人が来たか」

それは何処にあるのであろうか。おそらく地下に設けられたその基地の指令室で一人の男が戦闘員から報告を受けていた。

男は筋骨隆々の黒人の大男である。岩石の様な顔には無数の傷まである。黒いタンクトップに白いズボンを着ている。

「やはり察しがいいな。おそらくこの地での我等の作戦も大体解かっている筈だ」

男は歩きながら言った。

「だが手をこまねいている必要はないな。奴を倒せばいいだけだ」

ニヤリ、と笑った。獰猛な、肉食獣の様な笑みだった。

「やれやれ、相変わらずですね。ジム＝コーエン。いやジゴクロイドとお呼びしたほうがいいですかね」

不意に男の声がした。ジムと呼ばれたその黒人は声がした方へ顔を向けた。

「来ていたのか」

「ええ、つい今しがた。お邪魔させてもらいますよ」

村雨に針でもって攻撃したあの白人の男だ。白い服を着ている。

「あんたが来るとは珍しいな。何かあったのか」

「いえ。ただそちらの作戦の進み具合はどうなっているのかと思いましたので」

「別に変わりはないな。かなり順調にいっている。ただやっぱりあいつ等が来やがった」

「あいつ等・・・・・・成程、仮面ライダーですか」

白服の男は意味ありげな笑みを浮かべた。

「ああ。まあ情報部の予想通りだな。今からぶっ潰しに行くつもり

だ」
「そうですか。楽しみにしていますよ」
ジゴクロイドのその言葉に男は頷いて笑った。
「ああ、楽しみにしといてくれ。この腕で全てを叩き潰すのが俺のやり方だ」
右で拳を作りながら笑う。やはり獣じみた笑みだ。
「フフフ、相変わらずですね。シカゴの暗黒街の影の支配者と言われた時から」
「フッ、『人間』だった時の話は止めてくれ。今の俺はそんなちんけなもんじゃない」
その言葉に表情を変え反応する。発言を咎めるような顔だ。
「そうでしたね。何しろ今の貴方は・・・・・」
「そう、今の俺は人間じゃねえ。選ばれたんだからな」
「そう、貴方は選ばれし者。バダンという神に選ばれし者・・・・・」
白服の男は含み笑いを漏らしながら言った。
「期待していますよ。貴方がこの九州を炎に包む日を」
「それはもうすぐだぜ」
ジゴクロイドは口の歯を見せて笑った。その全てが牙の様な歯だった。
「それは何より。フフフフ・・・・・・・・」
白服の男は消えていった。後にはジゴクロイドと戦闘員達が残った。
「相変わらず動きの速い奴だ。まあ奴には奴の考えがあるんだろうがな」
そう言うと後ろに控えている戦闘員達の方へ顔を向けた。
「オートバイ部隊のほうはどうなっている」
「ハッ、既に全員出撃用意を完了させています」
戦闘員の一人が敬礼して報告する。
「そうか。俺も出撃するぞ」

「ハッ」
戦闘員はそれに答えた。
「久し振りの『殺し』だ。腕が鳴るぜ、ククククク・・・・・・・・・」
ジゴクロイドは両手に黒いグローブを嵌めた。そしてその上から指をボキボキと鳴らして笑った。
一文字と滝は鹿児島の道をバイクで進んでいた。行く先は桜島である。右手にはその桜島が煙を噴きながら聳え立っている。見事な雄姿である。
「こうして見るとやっぱりでかいな」
滝が愛車ワルキューレを走らせながら言った。
「ああ。鹿児島の象徴と言われるだけはある」
一文字もそれを眺めながら言った。
「大きくて力があってな。鹿児島出身の奴がよく言うな。俺もああいうふうになりたいって」
「ああ。灰を出しまくるのが凄く迷惑だって話だけれどな」
この灰のせいで鹿児島は米があまり採れない。だから薩摩芋を植えたのである。
「しょっちゅう噴火しているしな。今も煙を出しているし」
「そうでなきゃ桜島じゃないっていう人もいるしな。まあ良くも悪くも鹿児島の象徴だ」
二人は談笑しながら道を駆ける。その時ふとライダーの一団が後ろからやって来た。

地底からの魔手その四

「ん？黒服のライダーの一団だ」
「随分速いな。街道レーサーか何かかな」
速い。二人は道を空けようとバイクを端に寄せた。
だがその黒いライダーの一団は二人の周りを取り囲んだ。そして二人にスピードを合わせ走る。
「一文字隼人、そして滝和也だな」
その中のリーダー格らしきバイクが二人の左横に来た。
「その通りだが・・・・・・あんたは」
一文字は横目でその男を見る。ヘルメットを被っているので顔は見えない。
「俺か？俺は・・・・・・フフフ」
その男は不気味に笑った。
ヘルメットが両脇から砕けた。中から何かで砕かれたようだ。
「バダン怪人軍団の一人ジゴクロイド。御前をぶっ潰しに来てやったぜ」
黒人の男だった。一文字へ顔を向け獣じみた笑いを浮かべる。
「へえ、そりゃどうも。じゃあこれは俺へのお誘いかな」
一文字が微笑んで言った。だがその目は強く光っている。
「そうだ、パーティだ。暗黒の地の底へのな」
ジゴクロイドの眼が光った。その姿が豹変していく。
黒いジャケットが弾け飛ぶ。そして銀の髑髏模様の胸を持つ身体が現われる。
顔が変わる。眼が四つになり頭からは蟻地獄の鋏が角の様に生えてきた。
「それが貴様の正体か」
一文字はその変身する有様を見ながら言った。
「そうだ。バダンが俺に与えてくれた最高の身体だ。これで貴様を

粉々にして地の底に沈めてやる」
右側の二つの眼を一文字に向ける。
「地の底・・・・・・」
一文字はその言葉に反応した。
「そうだ、こうして沈めてやる！」
右腕を道路へ向けて振り下ろす。すると道路が急に崩れ出した。
「何ィッ！」
滝はワルキューレを咄嗟にダイビングさせかわす。見れば他の黒服のライダー達もそうしていた。滝はそのダイビングで敵の囲みを突破した。そして彼等の前に出る。
「ほお、これをかわしたか。まあこれはほんの余興だからな。かわしてもらわないと面白くない」
ジゴクロイドは笑った。その四つの眼を細めていた。
「ん！？一文字隼人の姿が見えないが」
バイクを駆りながら辺りを見回す。
「地の底に落ちたわけでのないし何処だ？後ろにでもいるのか？」
後ろを振り向いたその時だった。上から声がした。
「俺はここだ！」
「ムッ！」
上を見上げる。一文字隼人はそこにいた。
「ほお、上に逃げていたか」
ジゴクロイドはそれを見て不敵な笑みを浮かべた。
一文字は仮面ライダーに変身していた。そして新しいマシン新サイクロン改で空を駆っていた。
空を飛翔しながら前へ進む。そしてジゴクロイド達の前へ降り立った。滝もそれへ合流する。
「行くぞ、バダンの改造人間！」
サイクロンを飛ばす。そして滝と共にジゴクロイド達へ向けて突っ込んで行く。
「ほお、この俺とカーチェイスを挑むつもりか」

突進してくるサイクロンを見ながら言った。
「面白い。じゃあその銀色のマシンごと粉々にしてやるぜ！」
四つの眼が光った。それを合図に黒いライダー達が一斉にアクセルを踏んだ。
黒いライダー達は一斉にヘルメットを脱ぎ捨てた。その下からは戦闘員達が現われた。
戦闘員達は懐からチェーンを取り出した。そしてそれをライダーと滝へ投げ付ける。
「無駄だっ！」
ライダーはそれを手で払う。滝はかわし、拳銃でそれを撃ち砕く。間合いが更に近くなった。
戦闘員達のバイクと交差する。その時戦闘員達が拳を繰り出す。ライダーはそれを受け止めた。そして引っ張り地面へ叩き付ける。
「ギィッ」
地面に叩き付けられたその戦闘員は叫び声をだしそのまま倒れる。だが他の戦闘員達はそれに構わず攻撃を続ける。

地底からの魔手その五

ライダーのバイクを取り囲む。そして周りで激しくターンを繰り返す。

二台ずつ襲い掛かる。狼の群狼戦法の要領だ。

ライダーはそれをまずはやり過ごす。そして交差するその時にラリアットを浴びせる。

「ギッ」

再び戦闘員が倒れる。それを見たジゴクロイドは再び戦法を変えてきた。

「よしっ、ならばあれで行くぞ」

「ギッ」

怪人の言葉に戦闘員達は了承の声をあげる。ライダー達から間合いを取り縦一直線に並んだ。

そして一列になってライダーへ向けて突進する。その手には鎖がある。

「成程、縦深陣か」

ライダーはそれを見て一言呟いた。

「その機動力と数を利用して押し切るつもりか」

前から向かって来る一団を見て呟く。

「ライダー、いったいどうするつもりだ?」

滝はそれを見てライダーに問うた。ライダーはそれに対し言った。

「決まってるさ。倒すだけだ」

あっさりとした口調で言った。

「いつもの事だが簡単に言ってくれるな。そう簡単にいく相手じゃないぜ」

「まあそれは見てのお楽しみさ」

ライダーはそう言うとアクセルを噴かせた。そして突っ込んでいく。

「あっ、おいライダー！」
滝の声に構わず前へ突き進む。ジゴクロイドはそれを見て勝利を確信した。
「馬鹿め、真正面からこの縦深陣に挑むつもりか！」
ジゴクロイドはその四つの眼を再び細めて笑った。
「行けぇい！」
彼の指示が下る。そしてそれと共にそれまで縦一列だった戦闘員達が左右に散った。そしてその手の鎖を構える。
「よしっ、予想通りだ！」
ライダーは叫んだ。そしてそのアクセルのスピードを速めた。
戦闘員達が鎖を投げるより速く駆け抜けた。風より速く、鉄より強く。
「サイクロンカッター！」
新サイクロン改の両脇から羽根を出す。そしてそのまま突進する。カッターが戦闘員達を切り裂いた。そして彼等を全て切りサイクロンは駆け抜けた。
「ヌウッ！」
ジゴクロイドはバイクを左へ捻りそのカッターを何とかかわした。彼が後ろを振り向いた時ライダーとサイクロンは駆け抜けこちらへ機首を向けていた。
「やってくれるな。この戦法を破ったのは貴様が初めてだ」
ジゴクロイドはそう言いながらバイクの機首をライダーへ向ける。
「だがな、これで勝ったとは思うなよ。次は必ず貴様を地の底へ引き摺り落としてやる」
そう言うと機首を反転させた。そして滝が追おうとするのを振り切りそのまま走り去っていった。
「糞っ、逃げ足も速いな」
滝は追いつけずワルキューレを止めて忌々しげに言った。
「まあいいさ。どうせまた奴とは戦う事になるからな。それに今の戦いで敵の能力も少し解かったしな」

ライダーは変身を解き一文字の姿に戻って言った。
「ああ。しかし蟻地獄の改造人間とはな。桜島を狙うにはもってこいだな」
「そうだな。奴等らしいといえばそうだが」
二人はそう言うとヘルメットを被った。
「しかし作戦も予想がつく。おそらく地下から来るぞ」
「多分な。桜島の地下を探ってみるか」
「よし、そうしよう」
二人はマシンのアクセルを踏んだ。そして桜島へ向けて再び駆けだした。
路上での襲撃の後ジゴクロイドは自分の基地に戻っていた。そして指令室で配下の戦闘員達と共にいた。
「噂以上だ。やはりかなり手強い相手だ」
人間の姿に戻っている。そしてモニターに映し出されている仮面ライダー二号の姿を見ながら言った。
「こうでなくては面白くない。ぶっ潰しがいが無いというものだ」
そう言って獣じみた笑いを浮かべる。
「こうなったら特別に派手に潰してやる。桜島の火口に放り込んで溶岩の中に溶かしてやるか」
残忍な笑みを浮かべて言う。
「そうとなれば奴を桜島まで誘き出さなくてはな。奴は今何処にいる？」
「ハッ、今福山を通過したようです」
戦闘員の一人が報告した。福山は鹿児島市から桜島へ行く途中にある町の一つである。
「そうか、福山か。ならばもう暫くしたらこの桜島へ入って来るな」
「はい」
戦闘員はそれに答えた。
「そうだな、普通にやっても面白くはない。ここは奴の裏をかこう」
ジゴクロイドはそう言って口の端を歪めた。

「裏、ですか？」
戦闘員の一人が尋ねた。
「そうだ、裏をかく。御前達にも協力してもらうぞ」
「ギッ」
戦闘員達はその言葉に敬礼した。
「ライダー、見ていろよ。貴様の驚く顔が眼に浮かんでくるようだ」
その眼が邪な光に包まれる。それは既に人のものではなく残忍な
表情の、異形の者の眼であった。

地底からの魔手その六

一文字と滝は桜島に到着した。そして早速捜査を開始した。
「さて、問題はここの何処に基地があるかだな」
一文字は桜島の麓を歩きながら言った。
「そうだな。だがこの一帯にあるのは間違い無い。すぐにでも見つかるさ」
滝はそう言いながら前を歩く。
「その為にこういったものも用意してきたしな」
懐から何かを取り出した。それは小さな機械だった。
「滝、何だその小さい機械は」
「これか？これは志度博士からもらったんだ。地質を調査する機械さ」
博士がペルーに持って来ていたあの機械のうちの一つである。
「へえ、よくそんなの持って来ていたな」
「たまたまだけれどな。捜査に役に立つだろうと思って。ほら、連中はショッカーの頃から何かと地下に基地を造りたがるだろう？」
一文字はその言葉に頷いた。
「確かにな。それは俺が初めてあの連中と戦った時から変わらないな」
「だから貰ったんだが。まさか本当に使う事になるとはな」
滝はそう言って苦笑した。
「まあとりあえず使ってみよう。奴等も俺達の動きは掴んでいるし早いとこ見つけないと厄介な事になるぞ」
「ああ、それはわかっている」
滝は機械を地面へ当てた。そしてそのメーターを見る。
「どうだ？」
一文字はしゃがみ込みその機械を操る滝を見て尋ねた。
「うん。この辺りに異常は無い」

「そうか」
少し残念そうに言った。
「だがかなり遠くに異常があるようだな。そこから何か妙に高い電波が発されている」
「電波か。妖しいな」
一文字は電波、という言葉に目を光らせた。
「ああ。あちらの方だ」
滝は左手を指差した。
「よし、行こう」
二人はそちらへ向かった。それを陰から見送る影があった。
「よし、予想通りに動いているな」
それはジゴクロイドだった。
「そのまま行くがいい。そして苦悶うちに死ぬのだ、ハハハハハ」
ジゴクロイドはそう言うと姿を消した。そしてその後には正静寂が残った。
二人はその場所へ来た。そして機械を再び地面へ当てた。
「どうだ?」
一文字は再び滝に尋ねた。
「間違いないな、ここから多量の電波が感じられる」
滝は一文字の方を振り向いて言った。
「そうか。ではこの辺りだな」
一文字は早速辺りを見回した。周りは岩山ばかりである。
「出入り口を隠すにはもってこいの場所だな。さて、何処に隠してあるか」
その時遠くに黒い服の戦闘員達が目に入った。何やら子供を追いかけている。
「あいつ等、子供でも容赦はしないか。相変わらずだな」
一文字と滝はそう言うと戦闘員達の方へ向かった。
二人の姿を見ると戦闘員達は慌てて逃げ出した。二人はそれを追うよりも子供の保護を優先した。

「怪我はないかい？」
見れば赤い服を着た可愛らしい女の子である。
「うん。けどお父さんとお母さんが」
「お父さんとお母さんがどうしたの？」
滝は子供に優しく尋ねた。一見怖そうな外見であるが彼は子供が大好きだ。
「あの怖い人達にさらわれちゃったの」
「そうか。じゃあお兄さん達がお父さん達を助け出してあげるよ」
「本当？」
「ああ、本当さ。お兄さん達は正義の味方だからね」
一文字は少女を笑顔で見下ろしながら言った。彼も子供は大好きである。
「正義の味方？じゃあの悪い奴等もやっつけてくれるの？」
「勿論さ。その為にここに来たんだからね」
「じゃああいつ等のいるところを教えてくれるかい？」
「うん」
少女に案内され二人はその場所へ向かった。
「ここか」
そこは巨大な岩のまえだった。黒い玄武岩である。
「悪い奴等はここから出入りしていたの。お父さんもお母さんもこの中に連れて行かれちゃったの」
少女はその岩を指差して言った。
「そうか、この中か」
滝は機械をその岩に当てた。
「間違いないな。電波が今までとは比べ物にならない位高くなっている」
「そうか、遂に突き止めたぞ」
一文字はそう言って前に出た。
「滝、ちょっと下がってくれ」
「わかった」

滝は少女を抱いて後ろへ下がる。一文字はその岩に手を当てた。
「ムンッ」
その岩を横へ引いた。するとその奥から下へと降りる階段が現われた。
「よし、行こう」
滝が前へ進もうとする。だが一文字はそれを手で制止した。
「いや、御前はここに残ってくれ」
「何でだ?」
滝はその言葉にいぶかしんだ。
「御前はこの子を守ってくれ。そしてこの子のご両親を助けて安全な場所へ逃がすんだ」
「そうか、解かった」
滝は一文字のその言葉に納得した。
「ここは俺ひとりで行く。そしてその子のご両親を必ず救い出してくる」
「そうか、必ず救い出して来いよ」
「ああ、必ずな」
一文字は滝にそう言って階段を降りていった。

地底からの魔手その七

一文字は階段を慎重に降りていく。中は暗く不気味な気配に満ちている。

「間違いないな、ここに奴等はいる」

一文字はそのまま進んでいく。そして暗い廊下を進んでいく。

「問題は何処にあの子のご両親が捕らえられているかだな」

その時一人の戦闘員にバッタリと会った。

「ギィッ」

戦闘員は慌てて構えを取ろうとする。だが一文字はそれより速く彼を叩きのめした。

「ギギギ・・・・・・・・・」

苦しみ床に倒れる戦闘員。一文字は彼の首を掴んだ。

「言え。捕らえた人達は何処に収容している」

「あ、あそこだ・・・・・・」

戦闘員は奥の廊下の左手を指差した。そこには廊下が続いている。

「あそこか」

一文字は戦闘員を気絶させるとそこへ向かった。その後ろで何か足音がしたのには気付かなかった。

そこは牢獄だった。捕らえられている多くの人達がいた。

「助けてくれ！」

彼等は鉄格子越しに叫ぶ。一文字はそれに答え鉄格子を次々と打ち壊していく。

人々は次々に牢獄から出る。一文字はその人達に問うた。

「この中に赤い服を着た小さい女の子のご両親はおられますか？」

「はい」

若い夫婦が手を挙げた。

「良かった、貴方達の娘さんにここまえ案内して頂いたのですよ。お父さんとお母さんを助けて欲しいって」

「そうだったんですか、あの娘が」
「ええ。娘さんがお待ちです。さあ早く行きましょう」
「はい」
しかしその時だった。
「残念だがそれは出来ん」
彼等の後ろから声がした。そしてジゴクロイドが姿を現わした。
既に怪人態をとっている。その後ろには戦闘員達がいる。
「貴様はここで死ぬからだ。貴様が助け出した人達と共にな」
そう言うと一文字の足下に小さな蟻地獄を造った。
「むっ」
それは威嚇だった。蟻地獄はすぐに消えた。だが人々を怯えさせるのには充分だった。
「俺からは逃れられんぞ」
一文字が先程来た道からも戦闘員達が来た。彼等は挟み撃ちとなった。
「さあ、これで逃げ道は無くなった」
ジゴクロイドはその四つの目を細めた。そしてその両手を巨大な鋏に変えた。
「一人ずつ切り刻んでやる。ライダー、貴様は特に念入りにな。クククク」
残忍な笑みを漏らす。だが一文字はそれに対して笑った。
「成程、確かにその鋏は見事だな」
「フン、死を前にして気が狂ったか」
「残念だが死ぬのは貴様らだ。俺はこの人達を全員救い出さなければいけないしな」
「世迷言を。その様な事が出来るとおもっているのか」
「出来るさ。ほら、向こうを見てみるんだな」
「何ィ!?」
ジゴクロイドは牢獄の向こう側を見た。そこでは戦闘員達が次々に何者かに撃ち倒されていた。

「なっ、どういう事だ！？」
「滝の存在を忘れていたな。入口であの女の子を守っていたんだが俺の危機を察して来てくれたんだ」
「隼人、助けに来たぞ！」
「おう滝、捕らえられていた人達を頼む！」
「解かった！」
人々は滝に連れられ基地を脱出していく。
「ヌウウッ、何故あの男が来ると解かった」
「長い付き合いだからな。こういう時あいつは必ず来てくれるのさ。貴様等の様に人である事を捨てた連中には解からん事だろうがな」
「おのれ・・・・・・・・・」
ジゴクロイドは怒った。両手のその鋏を思いきり振りかざす。
「来るか。ならば俺も相手をしよう」
一文字は不敵に笑った。そして腕をゆっくりと旋回させはじめた。

地底からの魔手その八

変っ

両手を手刀の形にし右手を肩の高さで横に水平にする。左手はそれに水平に肘を直角にして並べる。

そして両手をゆっくりと右から左へ旋回させる。胸がライトグリーンになり手袋とブーツが赤いそれになる。そして全身が端から黒いバトルボディに包まれる。

身

両手を左肩の位置まで持って行く。左手は垂直に上へ、右手は同じく垂直だが真横にする。両手共手は拳になっている。

顔の右半分が赤い眼をしたダークグリーンの仮面に覆われる。それはすぐに左半分も覆う。

腰の風車が旋回した。そしてそれが光を発する。

「行くぞっ！」

ライダーに変身した。そしてジゴクロイド達へ突き進んでいく。

戦闘員達が前へ出る。しかしライダーの敵ではない。次々と打ち倒されていく。

「むっ、これ以上進ませるな！」

ジゴクロイドが叫ぶ。だが戦闘員達は次々と倒されていく。

「ちいいっ！」

ジゴクロイドが蟻地獄を造る。だが狭い廊下では大きなものは作れない。しかもその動きはライダーに読まれていた。

ライダーはジャンプした。そしてジゴクロイドに蹴りを入れようとする。

しかし彼も改造人間である。戦闘員とは違う。その蹴りはかわした。

「ぬうう、ここでは不利か」

ジゴクロイドはようやく劣勢を悟った。
「退け、退け！」
ジゴクロイドは自身がライダーの前に出て鋏を振るいながら戦闘員達に撤退を指示する。彼等はそれに従いその場を退いていく。
「逃さんっ！」
ライダーは追おうとする。だがジゴクロイドが振り回す。鋏に阻まれ思うように進めない。
「そうはさせん」
「ぬうう・・・・・」
ジゴクロイドも鋏を振るいながら退いていく。ライダーはそれを追う。
ジゴクロイドと戦闘員は廊下を走っていく。ライダーはそれを追う。
「この部屋だけは通さん」
ある部屋の扉の前に来た。ジゴクロイド達はそこで止まった。
「そこに何か重要なものがあるらしいな」
彼等の様子を見てライダーは直感した。そして意地でも進もうとする。
「させん！」
戦闘員達が襲い掛かる。だがライダーはそれを退ける。
ジゴクロイドが出て来た。狭い廊下の中で鋏を振るう。
だがライダーはその手を掴んだ。そして背負い投げを掛けた。
「グオオ・・・・・」
背を思いきり打ちつけられ苦悶の声を出す。
「忘れていたな、俺は武道の心得があるのだ」
これで暫くは動けない。ライダーはその間に扉へショルダーチャージを浴びせ壊した。
中へ入る。そこはコンピュータールームだった。
「ギィッ」
そこには白服を着た戦闘員達がいた。どうやら科学班のメンバー

らしい。
「科学班の連中か。どうやらここに桜島を噴火させる装置やそれを制御するシステムがあるな」
ライダーは直感した。彼が動くより速く戦闘員達は白服を脱ぎ襲い掛かって来た。
ライダーはそれを退ける。そして辺りを見回す。
「・・・・・これか」
桜島の内部のコンピューター映像を映しているモニターを見た。その下のコンピューターを破壊する。
部屋のスイッチが消えた。モニターの桜島の映像も消えた。
ライダーは中の機械を次々と破壊していく。最早どの機械もコンピューターも使い物にならなくなっていた。
「グググ、よくもやってくれたな、ライダーよ」
ジゴクロイドが中に入って来た。その四つの目が憤怒で光っている。
「遅かったな、これどこの地の貴様等の作戦は潰えた」
ライダーは彼を指差して言った。
「ならばこれまでよ、この基地はこれで放棄する」
怪人は悔しさに満ちた声で呻く様に言った。
「そして貴様はここで死ね。この基地の中に埋もれてな！」
「何っ！？」
だがジゴクロイドは去って行った。すると天井が急に揺れだした。
「しまった、生き埋めにするつもりか！？」
ライダーは慌てて脱出しようとする。だがその頭上にコンクリートが次々と落ちて来る。

地底からの魔手その九

「見たか、それが貴様の最後だ」
ジゴクロイドは崩れ去る基地の入口を桜島の頂上に近い場所から見下ろしながら言った。周りには基地から逃げ延びた配下の戦闘員達がいる。
「作戦は失敗したがライダーは倒した。暗闇大使にもこれで顔向けが出来るな」
そう言って目を光らせた。まだ悔しさに満ちているが何とかそれを抑えている。
「よし、撤退だ。急いで戻るぞ」
戦闘員に言った。そしてその場を去ろうとする。
「悪いがそれは俺を倒してからにしてもらおうか」
上から声がした。彼等は慌てて火山の頂上を見る。
「なっ・・・・・・・・・・！」
そこには死んだ筈の男が立っていた。
「な、何故貴様がそこに・・・・・・！」
ジゴクロイドは驚いた声で彼を指差しながら言った。
「言った筈だ、貴様等がいる限りライダーは死なんと。あの程度で死んだと思ってもらっては困るな」
ライダーは不敵な声で言った。
「おのれっ、死に損ないが」
ジゴクロイドの目が再び悔しさに包まれる。そこには怒りも混ざっていた。そしてそれは顔全体に広がっていた。
「ならば燃え滾る溶岩の中に叩き落としてやる。そして今度こそ息の根を止めてやるわ！」
ライダーへ右の鋏を投げ付ける。そしてそれを合図に戦闘員達が動いた。７０
桜島の噴火口を前に最後の決戦が始まった。ジゴクロイドと戦闘

員達は足場を苦にせずライダーを取り囲む。ライダーは彼等に対しファイティングポーズを取った。

「行くぞっ！」

それが決戦の始まりを告げる声だった。ジゴクロイドと戦闘員が一斉に襲い掛かる。

戦闘員達は刀を手に襲い掛かる。ライダーは一人の横腹に回し蹴りを入れた。

戦闘員がそれを受けて吹き飛ぶ。そして火山の火口へと落ちて行く。

刀を手にする戦闘員に対しライダーは拳を主体に立ち向かう。刀を砕き、戦闘員達を吹き飛ばし火山の中へ落としていく。

「・・・・・どうやら強化改造を受けたらしいな」

その強さは彼等の予想以上だった。街道でのバイク戦では判りづらかったがこうして実際に拳を交えるとそれが解かる。

「だが俺はバダンの怪人軍団の一人、必ず勝つ！」

ジゴクロイドも鋏を振るう。ライダーはそれをかわしつつ攻撃を仕掛ける。

何時しか戦闘員達は全て倒れるか火山の中に落とされていた。残るはライダーとジゴクロイドの二人だけである。

「喰らえええっ！」

ジゴクロイドが左の鋏を投げ付ける。それはブーメランの様な動きをしてライダーに襲い掛かる。

だがライダーはそれを冷静に見ていた。そしてそれを足で叩き落とした。

「無駄だ、この鋏では俺は倒せん」

「・・・・・そうだな。それに蟻地獄も貴様には通用しないだろう」

ジゴクロイドは忌々しげにそう呟いた。

「ならばこれしかないな、貴様を倒せるのは」

そう言って両手を拳の形に戻した。

「これでぶっ潰してやる、覚悟しろよ」
そう言うと四つの目が笑った。禍々しい形に歪んだように見えた。
「面白い、来い！」
双方が拳を繰り出す。その衝撃が激しく交差した。
ジゴクロイドの拳がライダーの脇を通った。その衝撃がライダーの頬を切った。
それはジゴクロイドも同じであった。その傷口から赤い血が流れる。
「成程な、力の二号と呼ばれるだけはあるわ」
その血を指に取ってジゴクロイドはニヤリ、と笑った。
「この拳、以前から鍛えていたな」
二号も頬から流れる血を手の甲で拭き取って言った。
「流石に察しがいいな。そうだ、俺はシカゴをこの拳で支配していたのだ」
ジゴクロイドは満足気に言った。
「シカゴの暗黒街の帝王ジム＝コーエンか。ある日忽然と姿を消したと聞いていたが」
「俺は選ばれたのだ、バダンに。この拳をな」
ジゴクロイドはライダーに誇らしげに語った。
「バダンは世界を支配する。その時俺は暗黒街の帝王よりももっと偉大な者になるのだ、そう、世界を支配する選ばれし者の一員としてな」
「愚かな、人である事を捨ててか」
「人？そんな下等な連中の事を考える必要はない」
ライダーの言葉に対しジゴクロイドは嘲笑する声で言った。

地底からの魔手その十

「我等は絶対の神に仕える神々の一員、そうこの世界は俺たちによって新たに創りかえられるのだ。汚らわしい者なぞ一匹もいない素晴らしい世界にな」

「それは素晴らしいな。賞賛に値する」

ライダーは皮肉混じりに言った。

「その世界創造を邪魔するライダー、貴様等は必ず潰す。そう、我等が神、偉大なる首領の御心のままに」

そう言うと拳を再び構えた。

「死ねぇい！」

拳を繰り出してきた。右のストレートである。

おそらくこの一撃で完全にライダーを倒すつもりだろう。渾身の力が込められているのがわかる。

ライダーはそれを冷静に見ていた。拳はそのまま唸り声をあげてライダーの顔に迫る。

拳がライダーの仮面を打ち砕かんと迫る。ライダーはその拳を左手で払った。

「ムッ！？」

そして右の拳をジゴクロイドの顎に入れる。これは効いた。

「ガハッ」

それは怪人の顎を打ち砕いた。ガクリ、と膝をつく怪人。

「今だっ！」

ライダーは跳んだ。そして空中でその身体を大きく捻る。

「何ッ、あの技はっ！」

その技の名はジゴクロイドも聞いていた。だが目にするのは当然ながらはじめてであった。

「ライダァーーーー卍キィーーーーック！」

捻られた身体が唸り声をあげる。そして怪人の胸を撃った。

「グフオオオッ！」
ジゴクロイドは吹き飛んだ。ドクロの銀の胸が砕けた。
「ぬうう、俺の拳をかわし逆に攻撃を仕掛けて来るとは・・・・・・」
それでも立ち上がって来た。だが最早最後の時を迎えようとしていた。
「貴様の拳は既に見切っていた。そして次に何処を攻撃してくるかも予想していた」
ライダーは着地して言った。
「そうか、それがそれが武道の熟練の一つか」
怪人はそう言いながら変身を解いていった。口から血を吐き出す。
「そうだ。長年の戦いが俺にそれを教えてくれた」
「・・・・・流石だ。伝説の戦士と言われるだけはある」
ジゴクロイドはそう言うとまた血を噴き出した。
「いい戦いだった。次に会う時はこうはいかんぞ」
「何ッ！？」
ライダーはその言葉に疑念を覚えた。ジゴクロイドはどう見ても間も無く倒れるというのに。
「地獄から甦った時を楽しみにしていよう、それまでその腕を磨いているがいい」
そう言うと火山の噴火口の方へ向かった。
「偉大なるバダンの首領に栄光あれぇーーーっ！！」
ジゴクロイドはそう言うと火口の中へ飛び込んでいった。そしてその中に消えた。
「地獄から・・・・・。単なる負け惜しみか、いや・・・・・・」
その様な事を言う男ではないのはわかっていた。
「バダンにはまだ何かあるというのか。何かが」
ライダーは怪人が消えた火口の中を見下ろしていた。そして怪人の言葉を脳裏に浮かべ考えていた。
暫くして後ろから滝の声がしてきた。ライダーはその声に対し変

身を解き応えた。
桜島の戦いを終えた一文字は空にいた。
「一息つく暇もないな、やれやれ」
桜島は去ろうとした時携帯に立花から連絡が入った。沖縄にバダンが出たというのだ。
一文字はすぐに空港へ向かった。滝は東京へ既に沖縄へ向かった。
「しかし敵は待ってはくれない。あいつ等がいる限り俺達は戦わねくちゃいけないしな」
そう言って窓の外を見た。その下には青い海に囲まれた桜島がある。
「また来る事もあるだろう。その時はもっとゆっくりと眺めてみたいな」
桜島は次第に小さくなっていく。そしてすぐに見えなくなった。
それは新たなる戦いを告げる言葉でもあった。
「行くか。さあ今度は誰が歓迎してくれるかな」
一文字は新たなる戦いへ決意を新たにする。そこには戦士としての心があった。

地底からの魔手　　完

２００３・１２・１０

火吹き竜の島その一

火吹き竜の島

「二人共もう沖縄に着いたかしら」
アミーゴの奥の通信室で誰かが話をしている。
「そうだなあ、もうそろそろ着いている頃だろう」
立花の声だった。
「けれどあの二人が一緒になるなんて日本じゃ久し振りね」
もう一方は女の声である。純子だった。
「おいおい、何言ってるんだ。ついこの前まで全ライダーがここにいたんだぞ」
「えっ、それ本当!?」
後ろから別の女の声がした。二人いる。
「何だ、御前等も来ていたのか」
立花はその二人を見て言った。一人はジーンズを履いた黒いストレートのロングヘアーの女性、もう一人は癖のあるショートヘアーの膝までのスカートの女性である。
「あら、チコにマコじゃない。貴女達もおじさんとこに来てたの?」
純子が二人を見て言った。
「ええ、久し振りに遊びに来たんだけど店におじさんいなくて」
チコと呼ばれたロングヘアーの女性が言った。
「史郎さんに聞いたらお店の奥にいるって言われて。まさか純子もここにいるなんて思わなかったわよ」
マコと呼ばれたショートヘアーの女性がそれに続いた。
「ええ、まあ。ちょっとおじさんのお手伝いをしているの」
「お手伝いって・・・・・・。アルバイト?」
「う〜ん、まあそんなとこかな」
チコの問いに純子が考えながら言った。
「何か話を聞いていたら・・・御前等知り合いか?」

立花が三人に尋ねた。
「はい。城南大学で同じ学部に在籍しているんです」
マコが言った。
「文学部です」
純子が言った。
「文学部か。じゃあルリ子の後輩にあたるわけだな」
立花がパイプを口から離し手に持ちながら言った。
「あ、はい。そういえばそうですね」
純子が少し驚いた様子で答えた。
「本郷も志郎も茂もあそこの大学だったしなあ。どうもわしはあそこの大学と縁があるな」
立花は考える顔をして言った。
「あら、敬介さんは沖縄の水産大学でしょ」
チコとマコが言った。
「隼人さんも丈二さんも別の大学だった筈だし」
純子も相槌を打つように言った。
「まあそれはそうだけれどな。ところで御前等一体何をしにここに来たんだ?まさか単に遊びに来たわけじゃないだろう」
立花は二人にあらためて言った。
「はい。何かまたおかしな組織が出て来たらしいし」
「私達に出来る事はないかなあ、って思って」
二人は言った。
「察しがいいな。やっぱりゴッドと渡り合ってきたときの事を思い出したか」
「まあ大体は。史郎さんあたし達がお店に入ったら急に態度変わるし」
「そうそう、何かお店に一人でいるのが凄く怖いみたい。それであたし達が入って来たら凄く嬉しそうだもん」
「・・・あいつは気が小さいからなあ。悪い奴じゃねえんだが」
二人にその話を聞いて立花は苦笑した。

「まあいいや。手伝ってくれるんならよろしく頼むぜ。何しろ日本全国に散っているライダー達から連絡がひっきりなしに来ているからな」
「はい」
立花に言われ二人は通信室の席に着いた。そして純子と共にライダー達との連絡をとりはじめた。
「何か段々賑やかになってきたな」
立花はそれを見ながら目を少し細めた。
「まさひことリツ子も協力してくれるっていうし頼もしくなってきたな。谷君や志度博士のころも賑やかみたいだしわしも気合を入れないとな」
だが感慨に浸る暇は無い。
「おじさん、結城さんから連絡が入りました」
純子が声をかけた。
「おう、今どうしてるって?」
「金沢にいるそうです。ここで怪しい影を見たって人がいるらしくて」
「そうか、何かあったらすぐ知らせるように言ってくれ」
「はい」
純子はそう言うと立花の言葉をそのまま風見に伝えた。通信の向こうの風見はそれに納得したようだ。
本郷は沖縄に到着した。港から桟橋に降り立つ。
「沖縄に来たのは初めてだな」
上に広がる青い空と輝く太陽を眩しそうに見る。
「そうね。こんなに暑いなんて思わなかったわ」
傍らにいるルリ子が言った。彼女も太陽が眩しいようである。
「だが暑過ぎる程じゃないな。南洋に比べるとまだまだ涼しい」
「そうね。あそこは雨も凄いし」
二人はそう話しながら港を出た。
「よう、待っていたぜ」

港を出る二人に後ろから声をかける者がいた。二人は振り向いた。
「滝か。御前も来ていたのか」
彼の顔を見て本郷は意外そうに言った。
「あれっ、おやっさんから話はいっていないのかい？」
この言葉には滝も少し驚いた。
「何っ、じゃあ隼人がここに来る話も聞いていないのか？」
「一文字が？いや・・・・・・」
本郷もルリ子もそれには首を傾げた。
「ハハハ、三人共困っているみたいだな」
「その声は」
遠くから声がした。三人はその声に反応した。
「一文字」
本郷がその名を呼ぶ。一文字隼人が出て来た。

「何だ、もう来ていたのか」
滝が彼の姿を認めて言った。
「ああ、飛行機でね。俺の方が先に着くとは少し意外だったけどな」
「船が時化で少し遅れてな。しかし何で本郷達が俺達がここへ来るのを知らなかったんだ？」
「それか？俺がおやっさんに言ったんだよ。本郷達には知らせないでくれって」
「何っ！？」
一文字その言葉に滝は思わず声をあげた。
「二人を驚かせてやろうと思ってな。まあ成功したな」
「結局御前のいつもの悪ふざけか・・・・・」
会心の笑みを浮かべる一文字に対して滝は呆れ顔で言った。
「けれどいいんじゃない？ライダーも一人でいるより二人の方がより心強いし」
「うん、ルリ子さんの言う通りだ」
本郷はルリ子の言葉に頷いた。
「多分おやっさんも何か考えがあって俺達をここに行かせたんだろう。おそらくかなりの強敵がいる筈だ」
一文字がそれまで笑みを浮かべていた顔を引き締めた。
「ああ、そうだろうな。俺達が一緒になる時はいつもそうだからな」
本郷は言った。事実彼等が共に戦う時はいつもその前に強敵が立ちはだかってきた。
「行こうぜ、本郷。ここで話しているより捜査をした方がいい」
「ああ、一文字」
二人は港を後にした。その後ろを滝とルリ子がついて行く。
沖縄の青い海の底にそれはあった。一見難破船の残骸に見える。
しかしそれは難破船ではなかった。

船の中には階段がある。それは巧妙に隠されているがさらに深く続いていた。

それを降りていく。そうすると灯りが見えてくる。

「九州の方はどうなっている」

その基地の奥の方から声が聞こえて来る。低い男の声だ。

「はっ、今だ連絡が取れていません」

報告する声が聞こえる。それは分厚い鉄の扉の向こうから聞こえて来る。

「そうか。どうやら異変があったらしいな」

浅黒い肌を持つ縮れた黒髪の男が言った。先程九州の事を問うていた男のようだ。

赤いカッターを着ている。そして黒いスラックスと黒革靴を履いている。

手や耳にブレスレットやイアリングを着けている。それが妙に派手で目につく。

「長崎、桜島両方共音信不通です。作戦成功であれば良いのですが」

報告しているのは戦闘員である。どうやらここもバダンの基地のようだ。

そこは指令室であるらしい。潜水艦の内部のようだがそれよりは広い。鉄の管が天井に走り四方の壁に機械がある。

「本部からは何と言っている」

男が戦闘員に問うた。

「今のところ連絡はありません。こちらから連絡しても返答はありません」

「そうか・・・・・・一体どうなっているんだ」

男は口に右手を当て考え込んだ。その時部屋の扉が開いた。

「誰だ」

入ってきたのは戦闘員だった。

「御前か。一体どうしたのだ」

警護に当たっている戦闘員の一人だ。彼の部下の一人である。

「来客です」
その戦闘員は答えた。
「来客？」
男はいぶかしんで聞いた。
「はい。如何なされますか」
「通してくれ」
「はい」
戦闘員は敬礼して退室した。そして一人の男を連れて来た。
「御前は・・・・・・・・・」
黒い皮のジャケットを着たリーゼントの男である。サングラスをかけている。三影だった。
「一体何のようだ」
彼はこの男の事をあまり知らない。同じバダンにいても彼とは全く異なる系列に属しているからだ。
「暗闇大使からの伝言を伝えに来た。名は、ロベルト＝リッカルドだったか」
「トカゲロイドだ。そちらの方が通じるだろう」
男は素っ気無く言った。
「そうか、トカゲロイドか。覚えておこう」
三影はサングラスの奥の目を光らせて言った。
「ああ、よろしくな。ところで暗闇大使からの伝言は何だ」
トカゲロイドは改めて尋ねた。
「うむ、九州の事だが」
「カメレオロイドとジゴクロイドだったな。今あの連中とは通信が取れないがどうしたのだ？」
トカゲロイドはその黒い目を光らせた。
「二人共作戦に失敗した。仮面ライダーに倒された」
「何っ、それは本当か！？」
トカゲロイドは語気を荒わげた。
「俺が嘘を言って何になる。その証拠に二人とは通信が取れないだ

ろう」
「そうか、そうだったのか」
トカゲロイドは歯軋りした。
「二人を倒したのは仮面ライダー一号と二号。奴等は今この沖縄に向かっている」
「そうか、ここにか」
トカゲロイドはその言葉に反応した。その顔に凄惨な笑みが浮かぶ。
「どうした、やけに嬉しそうだな」
三影はその笑みを見て言った。
「当たり前だ。ダブルライダーといえば最早生ける伝説、その二人をこの手で始末する事が出来るのだからな」
「そうか。しかし一人で大丈夫かな」
「言ってくれるな。俺を誰だと思っている」
三影の言葉に対して不敵に笑った。
「俺はトカゲロイド、誇り高きバダンの改造人間だぞ。俺があの連中に遅れを取るとでもいうのか」
そう言いながら息を吐いた。赤い炎の息だった。
「いや、ただ一人より二人の方がいいと思ってな」
「それはどういう意味だ？」
「もう一つ伝える事がある。俺は暗闇大使にある任務を伝えられた」
「ある任務？この沖縄でか？」
「そうだ」
三影はそう言うとサングラスを外した。

「ダブルライダーを消せ、とな。あんたのこの地での作戦とは別にな」

右の機械の眼が光った。無機質でありながら殺意に燃えた眼であった。

「フン、つまり俺と御前が共闘してライダーを倒せということだろうが」

トカゲロイドはそれに対し口の端を歪めて言った。

「少し違う。あんたは今まで通りこの基地の建設を進めてくれ。俺は一人でライダーを倒す」

「自信家だな。だがその作戦は少し待った」

「どういう事だ？」

「ここは俺の縄張りだ。俺の縄張りに入った奴は俺がこの手で倒す」

「・・・・・つまり俺に帰れというのか」

三影の右目が光った。トカゲロイドの目を睨む。

「違うな。俺はそんな事は言わん」

トカゲロイドは不敵に言った。

「ではどういう事だ？」

三影は問うた。

「御前は御前で奴等の首を狙え。それについては俺は何も言わん。だがな」

トカゲロイドはここで再び凄惨な笑みを浮かべた。

「俺は俺の方で奴等を消す。先に奴等を始末させてもらう」

「・・・・・要するに早い者勝ちということか」

「そうだ。解かり易いだろう」

「わかった、その話乗ろう」

三影はそう言うとサングラスを再び架けた。

「では俺は早速行動に移らせてもらおう。何しろその為にここへ来

たのだからな」
「部屋は用意するぞ。休んでいくがいい」
「いや、いい。悪いが海の底はどうも好きになれない」
「そうか。では勝手にするがいい」
三影は踵を返し部屋を後にしようとする。トカゲロイドはその彼に尋ねた。
「一つ聞き忘れていた。奴等に敗れたカメレオロイドとジゴクロイドはどうなった？」
「本部に回収された。再び改造手術を受けるらしい」
三影は彼の方を振り向かず言った。
「そうか。ならばじきに甦ってくるな」
「ただしそれがどんな姿かは保障しないがな」
「？どういう事だ？」
「・・・・・いずれ解かる」
三影はそう言うとその場を去った。
「あの男、何が言いたいのだ」
トカゲロイドは閉じられた扉を見ながら言った。だげそれには構わず戦闘員達の方を向いた。
「早速作戦を練るぞ。カメレオロイドとジゴクロイドの敵討ちだ」
「はっ」
戦闘員達は敬礼した。そして隣の会議室へと入っていた。
夜が明けた。伊藤博士と村雨は再び車を進めた。
「生憎の雨だな」
博士は車の窓を濡らす雨をワイパーで払いながら言った。
「それにしてもワイパーの動きが悪いな。やはり中古なだけはある」
博士はそう言って苦笑した。
「いや、動きが悪いだけならまだしも音がするのは。これでは外の音も聞こえないな」
「いや、博士、それは安心してくれ」
村雨は博士に言った。

「音は俺が聞いている。例え針が落ちる音でも聞き逃さない」
博士の顔を見て言った。
「そうだったな。頼りにしているよ、村雨君」
博士は彼の顔を見て微笑んで言った。
高速道路に出た。道は雨で水浸しとなっている。
「タイヤも磨り減っているしな。ここは用心して運転しよう」
博士は周囲に気を遣いながら車を運転する。
その時その周りを十台近くのオートバイが通り過ぎていった。
「ん、何だあれは」
博士と村雨は彼等を見た。その一団は傍若無人の有様で道路を進んでいく。
「街道レーサーか。それにしてもマナーの悪い連中だ」
博士は顔を顰めて言った。
「街道レーサー？」
村雨はその言葉に反応した。
「あ、知らなかったか。じゃあ教えてあげるよ。公共の道路を勝手に占領して自分達のレースを楽しむ連中さ。まあ愚かな連中である事は間違いないね」
「そうか。愚かな連中か」
「そうだよ、幾ら自分達が楽しくても他人に迷惑をかけてはいけない。それが解からない奴は愚か者だよ」
「そうか」
村雨は博士の言葉に頷いた。
「まあそのうちわかるよ。すぐにでもね。ところでお腹が空いたね。そろそろお昼にしようか」
「ああ」
村雨はその言葉に素っ気無く答えた。

火吹き竜の島その四

パーキングエリアに着いた。二人は雨を避け走って店の中に入った。

「さてと、何処に座ろうかな」

レストランに入り席を探す。そこに先程の街道レーサー達がいた。相変わらず傍若無人である。他の客の迷惑も考えず騒いでいる。

「あの連中もいるのか。全く少しは他人の迷惑も考えたらどうだ」

博士はそう言って顔を顰めた。

「さっきの連中か」

見れば大きなテーブルを占領し大声で喋っている。テーブルは一面に並べられた料理のこぼしたもので汚れ椅子に土足で座っている。しかもテーブルに足を投げ出している者までいる。

「いい加減頭にきたな。ちょっと注意するか」

博士が眉を顰めそのテーブルへ行こうとする。村雨はそんな博士を見て心の中で何かを思った。

「博士」

村雨は彼等の方へ行こうとする博士に声をかけた。

「ん？どうした、村雨君」

博士はその声に反応して顔を彼の方へ向けた。

「ここは俺に行かせてくれ」

村雨はいつもと変わらぬ感情に乏しい声で言った。

「えっ、君が行くのかい？」

博士は意外そうな顔をした。

「ああ、行きたい」

博士は少し考えたが彼の意志を尊重しその頼みを受け入れた。

「よし、じゃあ君に任せるよ。あの馬鹿者共を大人しくさせてくれ」

「わかった」

村雨は小さく頷き彼等のいるテーブルに進んでいく。

「あ、くれぐれと手柔らかにな。彼等は生身の人間なんだし」
「ああ」
村雨は博士の方を振り向かず言った。そして彼等のテーブルへ向かう。
「で、今日は何処でレースするよ」
その傍若無人なレーサー達は相変わらず騒いでいる。その中の一人が肘をつきスパゲティをフォークに絡めながら他のメンバーに尋ねている。
「そうだなあ、あそこの山道なんかいいんじゃねえの」
別のメンバーがテーブルに足を投げ出しながらコーラを飲みつつ言う。
「おっ、いいねえあそこはカーブも凄いし」
青いレース服を着た者がそれに賛成する。
「おお、あそこならスリルもあるしな。族の奴等も来ないし」
髪を黄色に染めた男が笑いながら言った。彼等街道レーサーと暴走族は対立している事が多い。
「まあ族の奴等が来ても怖かねえけどな」
最初に何処でレースをするか聞いた男がパスタを噛みながら言う。口の中のものが見えるのも意に介していない。
「まあな。族が怖くて街道レーサーがやってられかってんだ」
「そうそう」
彼等は馬鹿騒ぎを続ける。だが彼等もその暴走族と大して変わりは無い。
「おい」
そこへ村雨が来た。彼等の席の前で立つ。
「ン？何だこのパンチの兄ちゃんは」
「一体何の用だ？」
レーサー達は彼の声に対し顔を上げた。
「静かにしろ」
村雨は低い、抑揚の無い声で彼等に言った。表情も無い。

それに対してテーブルにいる者達の反応は彼のそれとは正反対であった。
「ああん、堅苦しい事言うなよ兄さん」
「そうだよ、どうせあんたも店の人じゃないんだろう、何でそんな事言うんだよ」
「他の人の迷惑になる」
村雨は博士が言った言葉を口に出した。
「他人!?他の奴の事なんか知るかよ」
「そうそう、どうせ他の奴等も好きにやってんだからよお。大体あんた一体何の権利があって俺たちに説教垂れんだよ。うぜえからどっか行けよ」
彼等は一向に悪びれず言った。それに対して村雨は心の中にある感情を感じた。
それはさっき感じた感情だった。それを感じた村雨はテーブルの上に置かれている一本のコーラの瓶を掴んだ。
彼はそれを手に取ると軽く握った。だがそれだけでその瓶は粉々に砕けてしまった。その破片がきらきらと塵になってその拳の中から砂粒の様に落ちていく。
「なっ・・・・・・」
それを見たレーサー達は顔を青くした。そしてその凍りついた顔のまま村雨を見上げた。
「もう一度言う。他の人の迷惑になる」
相変わらず表情は無い。それが彼等を一層震え上がらせた。
「そ、そうですね」
一人が慌てふためいて言った。
「き、気をつけますです」
他の者も言った。そして姿勢を正しテーブルの上を綺麗にした。
そしてあたふたと店を出て行く。そんな彼等を今まで嫌な顔をして見ていた他の客が笑いながら見ている。

「これでいいか、博士」
村雨は博士の方に戻って尋ねた。博士は彼に対して笑顔で言った。
「ああ、見事だ」
「しかし俺はあの連中を見て何か思った。この感情は一体何なのだ」
「・・・・・それは『怒り』というものだよ」
「怒り!?」
村雨は博士に尋ねた。
「そうだ。許し難いものを何とかしたいという激しい気持ちだ。それはライダーの戦う力の源の一つでもあるんだ」
「ライダーの戦う源の一つ・・・・・・」
「そうだ。ライダー達は悪に対する怒りを常に持っている。だからこそ彼等は戦うんだ」
「そうか、そうだったのか」
「だがそれだけが彼等の力の源じゃない」
博士はその表情をさらに真摯なものにして彼に言った。
「怒りは時として人を狂わせる。それを制御する心も必要なんだ」
「怒りを制御する心・・・・・・」
村雨はそれをどうやってするのかまだ解かってはいなかった。だが口に出して呟いた。
「それはおいおいわかってくる。ライダー達もそれで皆苦労してきたからな」
「そうか、ライダー達は怒りに心を捉われていたのか」
村雨は考えるように言った。博士はその言葉に頷いた。
「そうだな。彼等の中にはそうだった者も少なくはない」
博士は村雨の目を見ながら言った。そう言いながら思った。何れ彼も怒りに包まれるのではないか、と。
それは深刻な危惧だった。彼が自分の姉の死の真相を知った時ど

うなるか、それが恐ろしかった。
だがそれも時が来たら彼に話すつもりである。今はその時でないだけだ。
「だがそれはかっての話だ。今の彼等は違う」
「違う・・・・・・。それでは今はどうなのだ」
村雨は尋ねた。
「今も怒りを持っている。だがそれよりももっと大きなものを常に心に持っている」
「それは何だ?」
「それは『愛』だ」
博士は自身に満ちた声で言った。
「愛・・・・・・」
村雨にとって初めて聞く言葉だった。彼はそれが何かよく解からなかった。
「何だそれは・・・・・・・・・」
彼は博士に尋ねた。博士はそれに対し難しい顔をした。
「難しい言葉だ。一言では言えない。だが凄く簡単に言うと・・・・・・そうだなあ」
博士は思案しながら言葉を出した。
「人を思いやる気持ち、人を大切にする気持ちかな」
「人を思いやり、大切にする気持ちか」
村雨はその言葉を繰り返した。
「まあ他にも色んな意味を持っているけれどね。だがこれだけは憶えていて欲しい。愛がなければ人ではないんだ」
博士は村雨の心に直接語りかけるように言った。
それはまだ村雨の心を動かすには至らなかった。だが彼の心に強く残った。
「愛がなければ人ではない・・・・・・・・・」
村雨は呟いた。
「そうだ、人は愛を知るから人である。例えその身がどんなもので

あろうともな」
「身体がどんなものであっても・・・・・・。それでは俺も人でいられるのだな」
「勿論だ。愛を知っているならばな」
博士は言葉を選んで言った。彼の機械の身体と感情を奪われた心を察して。
「・・・・・・そうなのか。俺も愛を心の中に持つ事が出来たら人になれるのか。今の俺は人間ではないのか」
「そうは言っていない。君は既に人間だ。たとえ機械の身体でもな」
「・・・・・・・・・」
博士の言葉の意味が理解出来なかった。彼は沈黙した。
「だが愛を知った時本当の意味での人になれる。そして悪に打ち勝てるのだ」
「悪に打ち勝つ・・・・・・。愛とはそんなに強いものなのか」
「ああ、この世で最も強く、素晴らしいものだ」
博士は言い切った。村雨は彼の眼を見た。曇りの無い眼だった。
「そうか。そうなら是非知りたい。そして本当の意味での人になりたい。・・・・・・博士、それを教えてくれ」
「ああ、勿論だ」
博士は頷いた。そして彼をテーブルへ導いた。
「それはとりあえず食べてからにしよう」
腹が鳴りだしたからであった。
「ああ」
二人はテーブルに着いた。そして食事を注文した。カレーライスだった。
本郷と一文字達は沖縄の中を捜査していた。捜すはバダンの基地である。
だが一口に沖縄といっても多くの島々からなる列島である。捜査は容易ではない。
まずは那覇市内から始めた。二手に別れ捜査をする。

「やはりそうそう容易に手懸かりは掴めないな」
「ええ。やっぱり市内にはないのかしら」
本郷とルリ子は市内の喫茶店で休憩を取りつつ話をしていた。ココナッツミルクのジュースを飲んでいる。
「那覇の辺りにはないか。場所を変えよう」
「ええ。北へ上がりましょう。名護の辺りが怪しそうだわ」
「よし、そうしよう」
本郷とルリ子は名護へ向かった。一文字と滝は一足先に宮古島へ行っていた。
「どうだ滝、何か変わったところは無かったか？」
一文字は小舟の上にいた。ダイバーの服を着ている。
「いや、何も無かった」
海から出て来た滝が残念そうに言った。彼もダイバーの服を着背中にボンベを背負っている。
「沖縄は海も多いかえあな。これはかなり大変だぞ」
「ああ。こういった仕事は敬介の専門なんだがなあ」
「ははは、そうだな」
一文字は笑い声を立てて笑った。
結局沖縄島にも宮古島にもその近辺の島にも無かった。一行は石垣島に行った。
石垣島は八重山諸島の中心地であり沖縄では沖縄本島、西表島に続き三番目に大きい島である。四方に河川が発達し湾岸、半島、岬等多様な自然環境を誇る。川平公園や玉取崎展望台等風光明媚で知られている。
「綺麗な場所だな」
一行はその美しい場所の一つ平久保崎にいた。一文字がそこを歩きながら言った。
「ああ、確かにな。だがここにバダンの基地があるのかも知れないぞ」
本郷が顔を引き締めながら言った。

「やれやれ、本郷は相変わらずだな。たまには気を楽しませる事も必要だぞ」
「それは解かっている。だがな、この美しい景色を守らなければいけないと思うとな」
本郷は緑の丘の上に立つ灯台の向こうに見える青い海を眺めながら言った。
「ふふふ、相変わらずね、あの二人」
ルリ子はその二人を後ろから見ながら言った。
「ああ、話している事はいつもちぐはぐなんだがな。戦う時は驚く位息が合っているんだよ」
滝が笑顔で言った。
「だからこそ無敵のダブルライダーなのね」
「だろうな。お互い個性が違うからあそこまでの強さを発揮出来るんだ」
二人は歴戦の戦士達を見ながら言った。周りでは牛達が草を食べている。のどかで牧歌的な光景である。

火吹き竜の島その六

やがて牛達は牛飼い達に急かされ帰って行った。後には四人だけが残った。

「牛達が帰って行くな。昼寝の時間か」

「そうかもな。もう日も高い」

本郷と一文字が話す。そして灯台を見上げた。

「この灯台も昼はお休みだな。夜になったら海を照らすが」

「ああ、夜になったら来て見てみたいな」

上の照明を見る。そこから誰かが飛び降りて来た。

「ムッ！？」

それはバダンの戦闘員達だった。急降下し二人に襲い掛かる。

「甘いっ！」

二人はそれを何なく退けた。そして他に飛び降りてきた戦闘員達に立ち向かう。

「滝、ルリ子さん、バダンだ！」

「後ろからも来るぞ、気をつけろ！」

一文字の言葉通りだった。後ろからも戦闘員達が来る。

彼等は馬に乗っていた。そしてその上からボウガンを放つ。

「危ないっ！」

二人はそれをかわした。そして馬上から襲い来る戦闘員達に反撃を仕掛ける。

「ギィッ」

ルリ子が出した棒を腹に受けた戦闘員の一人が倒れる。滝は主が落馬したその馬に飛び乗った。

「行くぞっ」

そして鞍に置かれていた鉄の棒を振るう。そして戦闘員達を叩き落していく。

ルリ子もそれに続いた。そして激しい騎馬戦を展開した。

本郷と一文字はマシンを呼んだ。そしてそれに飛び乗り戦闘に入っていく。

戦いは本郷達に有利に進んでいた。馬の扱いに慣れた感じの滝やルリ子に加え二人のマシンが加わったのである。戦闘員達は次第にその数を減らしていった。

「クッ、退け、退け！」

リーダー格の一人が命令する。そして一目散に逃げていった。

「待てっ！」

彼等は追おうとする。だが戦闘員達はマキビシを撒きそれ以上進ませなかった。そしてその姿を消してしまった。

「くそっ、逃げられたか」

一文字がマキビシの前でマシンを止め舌打ちした。

「仕方無いな、今回は諦めよう。しかしこれではっきりしたな」

本郷が戦闘員達が消えた方を見つつ言った。

「バダンの基地はここにある」

「ああ、間違い無い」

一文字もそれに頷いた。滝やルリ子もそれは同じであった。

そのライダーを遠くから見る男がいた。黒い皮のジャケットを着たサングラスの男だ。

「・・・・・成程な。噂通りの強さだ」

三影だった。冷めた目で本郷や一文字を見ていた。

「伊達にカメレオロイドやジゴクロイドを破ったわけではないな。これは容易ならざる相手だ」

サングラスを外す。そしてその機械の目で彼等を見た。

「・・・・・いや、まだ早いな」

だがそれを再び着けた。そして懐から煙草を取り出した。

「おそらくトカゲロイドの方も動きだす。その時にまた動けばいいだけだな」

三影はそう呟くと踵を返した。そして煙草に火を点けその場を立ち去った。

本郷と一文字は石垣島での捜査を本格的に開始した。宿もこの島に移した。

「成程な、この島全体で奴等を見たという話がある」

捜査を終えた本郷がホテルで石垣島の地図を広げながら言った。その地図のあちこちには赤い丸が書き込まれている。

「それだけじゃない。海でも奴等を見たという話がある」

一文字が海を指差しながら言った。

「海か。もしかすると奴等海底に基地を作っているのか」

「有り得るな。ショッカーの頃からよくあったしな」

「海か。ならば少し厄介な事になるかも知れないな」

「？どうしてだ？」

一文字は本郷の言葉に首を傾げた。

「うむ、この辺りは難破船が多いという。海の底には嵐で沈んだ船が多く眠っているという。隠れるにこれ程適した場所もないだろう」

「それを一つ一つ虱潰しに調べるとなると厄介だな。その間に体勢を整えられるし」

「そうだ。唯でさえ奴等は俺達がここに来た事を既に知っているんだ。事を急がないとこちらが不利になるばかりだ」

「そうだな。出来るだけ急がないとな」

二人はテーブルで向かい合い頷いた。一文字はその上のコーヒーを口にすると本郷に言った。

「そういえば滝とルリ子さんは何処へ行った？」

「川平公園の方へ行っている。あそこでも奴等を見たという話がある」

「そうか、川平公園か」

一文字はその名に少し反応した。川平公園は黒真珠の養殖で知られている場所である。美しい海が有名な石垣島で最も美しいと言われている場所の一つである。

「本郷、俺達もそこへ行かないか」

一文字が腰を浮かせて本郷に言った。

火吹き竜の島その七

「おい、まさか写真を撮りに行くつもりじゃないだろうな」
本郷は苦笑して言った。
「ははは、その為のカメラだろ」
一文字は苦笑する彼ににこりと笑って言った。
「しょうがない奴だな。そうだな、行くか」
「よし」
二人は席を立った。そしてホテルを後にした。
滝とルリ子は川平公園の砂地を歩いていた。白い雪のような砂である。
砂地のすぐ側は緑の森である。深い緑が目を休める。
そしてその緑と向かい合うように海が広がっている。何処までも青く、澄んだ海である。
「バダンの奴等もこんなところまで来なくてもいいのにな」
「本当、どうせなら観光で来たかったわ」
滝とルリ子は海を眺めながら言った。二人共景色に見とれてはいるが気は張っている。それが不満であるようだ。
「まあ不満を言っても始まらないな。奴等はどうせ観光なんか興味無いし。確か奴等の姿を見たって話があったのはこの辺りだったよね」
「ええと・・・・・。そうね、丁度この辺よ」
ルリ子が地図を見ながら言った。
「見た所何もおかしいものは無いけれどな」
滝が辺りを見回しながら言った。
「あの森の方で黒い影が動いているのが見えたそうよ。赤い仮面を着けた。それを見た人はキジムナーじゃないかって言っていたけれどね」
キジムナーとは沖縄に伝わる妖怪の一つである。ガジュマロの木

に住み魚の目を好んで食う。
「それは多分戦闘員だな。ひょっとするとここに基地を作っているのか？」
「それは無いんじゃない？いくら何でも目立つわよ。ここは観光客も多いし」
「だよなあ。だとすればこんなところで一体何を・・・・・・」
滝は右手を口に当てて思案した。
「今は何処かに基地を置いているけれどいずれこの島全体を基地にするつもりなんじゃないかしら。だから今は島全体を色々と調べているとか」
「そうか、だとしたら島全体で奴等の姿が見られているのも納得がいく」
滝はルリ子の言葉に頷いた。
「しかしこのい石垣島全体を基地にするつもりか・・・・・・。奴等め、派手な事を考えるな」
「沖縄は結構いい場所にあるしね。ここに基地を作ればアジア太平洋地域に大きな影響を与えられるから」
沖縄は古来貿易で栄えた。それはこの地の地政学によるところが大きい。
「だな。奴等の考えそうな事だ。シンガポールでもそうだったしな」
「そうね。バダンはどうも要地を押さえたがるから」
「それが他の組織とは違うな。今までの奴等だとテロばかりするところだが」
二艘の小舟の横を通り過ぎる。その右には数本の木が立っていた。
突如としてその木が変化した。戦闘員達が現われた。
「ムッ！？」
木だけではなかった。小舟の中からも出て来た。
「糞っ、まさか待ち伏せしていたとはっ！」
彼等は滝とルリ子を取り囲んだ。その手には鉄の棒を持っている。
「ギィッ」

戦闘員達が棒を振り下ろす。滝はその手を蹴り飛ばした。
「やらせるかっ！」
ルリ子も戦闘員の一人を手刀で倒した。そして二人は倒した戦闘員から棒を奪い取った。
そしてその棒を振るい戦闘員達を倒していく。だが彼等は仲間が数人倒されると囲むだけで攻撃を止めた。
「どうした、もう怖気づいたか？」
滝は彼等に言った。そして囲みを突破する隙を窺っている。
「それは違う。貴様等の始末はこの俺がつけてやるだけだ」
一人の男が出て来た。縮れた黒髪を持つあの男だ。
「御前は・・・・・・バダンの手の者か」
滝はその姿を見てすぐに直感した。男はそれにはすぐ答えず彼等の前に来た。
「そうだと言ったら？」
男は不敵な笑みを浮かべて言った。
舌が口から出た。それは先が二つに分かれた爬虫類の舌だった。
「俺はバダンのトカゲロイド。貴様等の予想通りバダンの改造人間よ」
「そうか、やはりな」
滝はその舌を見ながら言った。それが彼が人であらざる何よりの証だった。
「そしてこの石垣島全体をバダンの基地にする計画の責任者でもある。貴様等の予想はこの点でも当たっている。その鋭さ、褒めてやろう」
トカゲロイドは賞賛の言葉を述べた。しかしそこに賞賛の意はこもっていなかった。
「だがその鋭さは時として自分の寿命を縮める事になる」
「それはどういう事だ？」
滝は言い返した。
「それは簡単だ。貴様等は今ここで死ぬという事だ。他にどう言い

ようがある」
トカゲロイドは冷たく言った。
「焼き尽くしてやる。骨の一片の残らないようにな」
息を吐いた。それは赤い炎の息だった。
「くっ・・・・・・」
滝とルリ子も死を覚悟した。怪人を相手では明らかに分が悪かった。
トカゲロイドは静かに息を吸い込んだ。そして炎の息を彼等に吹きつけようとする。
「待てっ、そうはさせん！」
不意に二人の声がした。森の方からだ。彼等は森の方を見た。
「なっ、貴様等は！」
トカゲロイドは彼等の姿を認め思わず叫んだ。そこには彼等が最も忌み嫌う者達がいた。
「猛さん！」
「隼人！」
ルリ子と滝が彼等の名を呼んだ。そこに二人の戦士達がいた。

「まさか貴様等がここに現われるとは思わなかったがな。だがここで会ったのが貴様等の運の尽きだ」
一文字が彼等を指差して言った。
「貴様等の計画は全て聞かせてもらった。俺達がいる限り貴様等の思い通りにはさせん」
本郷も言った。そしてゆっくりと前へ進んで来る。
「行くぞっ！」
二人は同時に叫んだ。そして腰からベルトが現われた。

ライダァーーーーッ
変っ
二人はゆっくりと腕を動かしはじめた。本郷は右に手刀を作り左から右へ旋回させる。左手は拳にし脇に入れている。一文字は両手に手刀を作り肩の高さで右に水平に置く。そして右から左へ旋回させる。
二人の身体が次第に変化していく。黒いバトルボディに包まれ胸がダークグリーンになる。
だが手袋とブーツの色が違った。本郷はシルバーなのに対して一文字のそれは赤であった。

変っ身っ！
身っ！
本郷が右斜め上まで持って来た右手を脇に素早く入れた。そして同時に左手を手刀で右斜め上に突き出す。
一文字は両手を拳にした。そして左手は肘のところで垂直に上に曲げ右腕は胸のところで同じく垂直に曲げる。
二人の顔を仮面が覆った。まずは右、そして左を。本郷のそれは

ライトグリーン、一文字のそれはダークグリーンであったが同じライダーの仮面であった。紅い眼が輝き首を深紅のマフラーが覆っていた。

腰のベルトが強い光を発する。そして二人を覆った。

ダブルライダーだった。かって多くの組織の野望を打ち砕いてきた伝説の二人のライダーが今そこにいた。

「フフフ、遂に出て来たかダブルライダー」

トカゲロイドはそれを見て不敵に笑った。

「俺に相応しい相手だ。このトカゲロイドのな」

そう言うと先の割れた爬虫類の様な舌を出した。

同時に肌が鱗に覆われていく。眼がトカゲのそれになる。

頭が蜥蜴のそれになる。そして口が禍々しく伸びた牙に覆われていく。

首には大きなエリマキがあった。それはまるで盾のようである。

「行くぞ、焼き尽くしてやる」

そう言うと戦闘員達がダブルライダーを取り囲んだ。

「イィーーーーッ！」

戦闘員達が襲い掛かる。ライダー達を数人が一組になり倒さんとする。

「やらせんっ！」

「そうはいくかっ！」

二人はその戦闘員達を次々に倒していく。滝とルリ子もそれに協力する。

「ここは俺達に任せてくれっ」

「二人は奴等の基地を捜してくれ」

二人は滝とルリ子に言った。

「よし、わかった」

「ええ、ここはお願い」

二人はそれに従った。そしてその場を退いていく。

「フン、行ったか。まいい、どの道ライダーさえ倒せばあの連中など後でどうにでもなるわ」
トカゲロイドは退いていく滝達を見ながらせせら笑った。
「そう、貴様等さえ倒せばここでの作戦は成ったも同然なのだ。覚悟しろ」
トカゲロイドはライダーと対峙した。そして舌を出した。
「死ね」
息を吸い込む。そして赤い炎を噴き出した。
「ムッ！」
二人はそれをかわした。そして左右に散る。
「フフフ、今のをかわしたか。だがそれ位かわしてくれないと面白くはない」
火を噴き終えたトカゲロイドはライダー達を見回しながらニヤリ、と笑った。
「この砂場が貴様等の墓場となる。さあ死ぬがいい」
再び炎を吐く。ライダーはそれをまたかわした。
「噂通りの身のこなしだ。だがそれが何時まで続くかな」
トカゲロイドはさらに攻撃を続ける。
ライダー達はそれに対し隙を窺っていた。二号が怪人の前に、一号が斜め後ろについた。
「今だっ！」
怪人が炎を噴き終えたその瞬間に二人は動いた。そして前後から同時に襲い掛かった。
一号が羽交い絞めにする。そして二号がそこに手刀を入れる。
「どうだっ！」
だがその手刀は怪人のエリマキにより防がれていた。
「何ッ！」
そのエリマキはまさに盾だった。大きく開き二号の手刀を防いでいたのだ。
「フフフ、甘いな」

トカゲロイドは二号を見て余裕に満ちた笑みを浮かべた。
「死ねぇっ！」
そして火を吹く。二号は至近であるがその驚異的な反射神経でそれをかわした。
怪人は一号を振り払った。恐ろしい力である。
「中々考えたが残念だったん。俺のこのエリマキはある程度大きくする事が出来るのだ」
怪人は間合いを離した二人に対し言った。そして海の方を見る。
「そして俺はトカゲの改造人間である事を理解してもらおう」
「何！？」
ダブルライダーはその言葉に思わず首を傾げた。
「水は俺の力の源。この近くにいるだけで俺の力は増すのだ」
怪人は不敵に笑いながら言った。
「くっ、そうだったのか」
二人は舌打ちした。トカゲロイドはそれを見てさらに笑った。

火吹き竜の島その九

「それに気付かぬ自分達の迂闊さを呪うがいい。さて、それではそろそろ決着を着けるか」
トカゲロイドはそう言うと大きく息を吸い込んだ。
「くっ、こうなれば・・・・・・」
一号はトカゲロイドが火を噴こうとしているのを見て意を決した。
二号の方へ目をやる。
「一文字、あれをやるぞ」
一号の言葉の意味を二号はすぐに理解した。
「本郷、あれをやるつもりか」
二号は言った。
「ああ、行くぞ」
一号は強い声で言った。二号はそれに対し頷いた。
「よし」
二人はトカゲロイドに近付いた。
「馬鹿め、間合いを狭めようと同じ事だ」
トカゲロイドはそれを見て言った。そして炎を噴こうとする。
その時だった。ダブルライダーは彼の周りで大きく回りはじめた。
「な、何っ!?」
二人は凄まじい速さでトカゲロイドの周りを走る。何時しかその姿は見えなくなった。
「ど、どういうつもりだ!?」
トカゲロイドは慌てた。思わず火を噴くのを止めてしまった。
「トオッ!」
二人は跳んだ。トカゲロイドは思わず顔を上げた。
「上かっ!」
彼も跳んだ。だがそれと同時に何かに巻き込まれた。
「うおっ!?」

それは竜巻だった。彼はそれに巻き込まれ吹き飛ばされた。
「ど、どういうことだ!?」
トカゲロイドは宙を舞いながら自らの置かれている状況に考えを巡らせた。
だがそれは少し遅すぎた。彼は地面に叩きつけられた。鈍く重い音がする。
「グググ・・・・・・」
明石パラワールドの上だった。側に水辺は無い丘の上だ。痛みに堪えながら立ち上がる。その前にダブルライダーがいた。
「そうか、竜巻を起こしたのだな、貴様等が」
トカゲロイドはようやく理解した。先程の二人の動きの意味を。
「そうだ、貴様を水の近くから引き離す為にな」
一号は立ち上がった怪人に対して言った。
「かってショッカーライダーを倒す時に使った技の応用だがな。結構効いただろう」
二号が言った。彼の言葉通り竜巻によるダメージも相当なものだった。
「ライダー車輪か、あじな真似をしてくれる」
トカゲロイドは苦渋に満ちた声で言った。
「だが俺もバダンの改造人間、この程度では怯まんぞ」
構えを取る。ライダーも身構える。
「待てトカゲロイド、俺を忘れてもらっては困る」
その時声がした。ダブルライダーもトカゲロイドも声のした方を見た。
「貴様は・・・・・・」
そこには三影がいた。こちらへゆっくりと歩いて来る。
「貴様、どうしてここに・・・・・・」
トカゲロイドは彼に問うた。
「貴様一人では荷が重い。助太刀させてもらう」
三影はゆっくりと言った。

サングラスを外す。そしてダブルライダーを見た。
「そうか、貴様・・・・・」
おの右目を見て彼等はすぐに悟った。三影もまたバダンの者なのだと。
「そうだ、察しがいいな。俺の名は三影英介。このトカゲロイドと同じバダンの人間だ」
三影はダブルライダーに対し言った。
右目が動く。機械の動きそのものであった。冷たい光も放っている。
「貴様等を消す為にここへ来た。覚悟しろ」
左目が光る。そしてその全身を野獣のような気が覆っていく。
「待て三影」
トカゲロイドが彼を制止するように言った。
「何だ」
三影の全身を覆っていた気が消えた。そしてトカゲロイドの方を振り向く。
「俺を侮ってもらっては困る。ダブルライダーの相手はこの俺一人で充分だ」
「残念だがそれは断る。俺も仕事なのでな」
三影はその申し出を拒絶した。
「そういうわけにはいかん。この地域の責任者はこの俺だ。俺の言葉には従ってもらおうか」
トカゲロイドも引かない。いざとなれば一戦も辞さぬ構えだ。
「・・・・・解かった、貴様に任せよう」
三影は引いた。サングラスをかけなおした。
「それでは健闘を祈る。ダブルライダーの首級、必ず挙げてこい」
「無論だ、楽しみに待っていろ」
トカゲロイドは彼に対し不敵に言った。
「それでは俺は退かせてもらう。ダブルライダーよ、また会おう」
三影はそう言うと高く跳んだ。そして何処かへと姿を消した。

「三影英介か・・・・・・」
「一瞬だけだったが恐ろしい殺気だった。何者だ、あいつは」
ダブルライダーは三影が消えた空を見上げながら言った。彼等にも先程の男が尋常ならざる相手であると解かった。
「ダブルライダーよ、あの男に気を取られている暇は無いぞ」
その時前に立つトカゲロイドが声をかけてきた。
「貴様等の相手はこの俺だ。必ずや貴様等を倒してやる」
口から舌を出す。それは不気味に蠢いた。
「死ねぃっ！」
口から炎を噴き出す。ダブルライダーはそれを跳躍でかわした。
「甘いっ！」
トカゲロイドは跳んだ。そして一号へ向かう。

火吹き竜の島その十

空中でその爪で切り裂かんとする。だが一号はそれを蹴りで弾き返した。

「クッ！」

トカゲロイドは着地した。そしてほぼ同時に着地していた二号に襲い掛かる。

素早い動きで間合いを詰める。そして蹴りを浴びせる。

二号はそれを掴んだ。そして地面に叩き付けた。

しかしトカゲロイドはそれを受身で流した。そして同時攻撃を浴びせに来た一号を炎で離す。

「どうした、噂に聞こえたダブルライダーとはその程度か」

トカゲロイドはダブルライダーに言った。攻撃を退けられた二人は間合いを離している。

「喰らえっ！」

トカゲロイドが再び炎を噴き出した。ダブルライダーはそれを左右に散りかわす。

「何のっ！」

二人はトカゲロイドが炎を噴くさいの隙を見逃さなかった。彼が火を噴き終わったその瞬間ダブルライダーのパンチを受けた。

「グハッ！」

これにはさしものトカゲロイドもたまらない。怯んだ。

ダブルライダーはそこへ連続攻撃を仕掛ける。膝蹴りがトカゲロイドの腹を撃った。

「ガハアアッ・・・・・・！」

これにはさしものトカゲロイドも耐えられない。ガクリ、と片膝を着く。

それを見逃すダブルライダーではない。二号が言った。

「本郷、今だ！」

二号が叫ぶ。それに一号も応えた。
「おう、一文字！」
大きく頷いた。そして二人はそれを合図に天高く跳んだ。
「トオッ！」
そして空中で一回転する。蹴りの体勢に入った。
「ライダァーーーッ、ダブルキィーーーーック！！」
ダブルライダーの連携技の中での一際大きな破壊力を誇る技である。これによりどんな強力な怪人も一撃のもとに葬ってきている。
それがトカゲロイドの胸を直撃した。怪人は大きく吹き飛ばされた。
「グググ、これがライダーダブルキックか・・・・・・」
致命傷であった。だがそれでもなお立ち上がってきた。
「見事だダブルライダー、この勝負は俺の負けだ」
人間の姿に戻った。そしてダブルライダーを見据えつつ言った。
「だが俺は死なん。必ずや甦り再び貴様等の前に現われる」
倒れそうになる。だが気力を振り絞って立ち上がった。
「その時こそ我がバダンの世界制覇の日。その時を楽しみにしていろ」
そう言うと前に大きく倒れた。
「次に会う時が貴様等の最後だ！」
最後にそう叫ぶと爆発した。そして消え去った。
「やったか、本郷」
「ああ、おそらくな。だが」
一号は表情を暗くした。
「カメレオロイドの時もそうだった。奴等、甦るとはどういう事だ」
「俺も桜島で聞いた。奴等まさか不死身だともいうのか」
「解からん。だがいずれ解かるだろう」
一号は変身を解きながら言った。
「ああ、だがその時奴等が一体どういった動きをするのか・・・・・・」

二号も変身を解いた。二人は本郷猛と一文字隼人に戻った。
「バダン、底知れん組織だ」
二人はその場を去った。下には青い海が広がっていた。
その二人を遠くから見る影があった。サングラスの男、三影である。
「トカゲロイドをもってしても勝てないか」
煙草を吸いながら二人を見つつ言った。
「沖縄での作戦も失敗だな。指揮官が倒されては」
懐から何かを取り出した。携帯電話である。
「本部か。こちら三影だ。トカゲロイドは倒れた。これからその遺体を収納した後この地を撤退する。基地はどうする」
電話の向こうから何やら声がした。
「破棄か。解かった、では残った戦闘員達も全て引き揚げさせる」
三影はそう言うと携帯を切った。そしてそれを懐になおした。
「戦闘員達を集めて本部に帰るか。奴の行方も気になるしな」
そう言うとその場を立ち去った。後には静寂だけが残った。
戦いを終えた本郷達は沖縄を後にした。今は東京へと戻る空港のロビーにいる。
「滝とルリ子さんは？」
本郷は一文字に尋ねた。
「今チケットを買っている。なんでも混んでいるらしく時間がかかっているみたいだ」
「そうか。まあ離陸まで時間があるしいいか」
本郷は右腕の時計をチラリと見て言った。
そうだな。それにしても難破船の中に基地があったとはな」
一文字が意外だったような顔で言った。
「ああ。海中で爆発があったというから行ってみたら。あれではそうそう見つけられなかったな」
本郷も真摯な顔で頷いて言った。
「だが良かったな。これで沖縄での戦いは終わりだ」

「ああ。だがこれで終わりじゃない。俺達の戦いはまだ続くぞ」
「ああ。この世に悪がある限りはな」
滝とルリ子が来た。二人は彼等の方へ歩いて来た。

火吹き竜の島　完

２００３・１２・１７

雪原の花その一

雪原の花

「そうか、トカゲロイドも敗れたか」
ある基地の一室で暗闇大使は戦闘員からの報告を聞いていた。
「ハッ、遺体は既に回収された模様です」
報告をした戦闘員が敬礼をし言った。
「そうか。ならば良い。それではまだ被害は最小限で済んでる」
暗闇大使は報告を聞きながら言った。
「だが長崎、桜島、そして石垣島と三つの作戦がライダー達に阻止されるとはな。ダブルライダーの力衰えずといったところか」
「いえ、むしろ強くなっているようです」
「何っ！？」
戦闘員の言葉に顔を向けた。
「彼等の戦いの結果を分析しますとスピード、破壊力共に以前とは比較にならない程上がっています。これは何かしらの強化手術を受けた結果だと思われます」
「そうか、奴等めゼクロスとの戦いで」
暗闇大使は上のモニターを見ながら言った。そこにはゼクロスとライダー達の戦いが映し出されていた。
「カメレオロイド達とダブルライダーの戦いの資料はあるか」
「ハッ、ここに」
別の戦闘員が資料を出してきた。分厚い紙のファイルだった。
「ふむ」
暗闇大使はそれを手に取った。そして中を読みはじめた。
暫く中を読んでいた。そしてそれを閉じ戦闘員に返した。
「成程な。全体に渡ってかなりの強化改造を受けているな」
「やはり」
戦闘員がそのファイルを脇に収めて言った。

「だがそれだけではないな」
暗闇大使は右手で左手の鉤爪を握りながら言った。
「と、いいますと？」
戦闘員の一人が尋ねた。
「特別な訓練も相当受けている。さもなければあれだけの短期間で強化改造の力をここまで引き出す事は出来ん」
「成程」
戦闘員達は頷いた。
「おそらく立花藤兵衛達の指導によるものだろう。あの者達の育成能力は聞いている」
「ハッ・・・・・・」
バダンにおいても歴代ライダー達を育ててきた彼の名は知られていた。そしてかなりマークしていた。
「今は泳がせているがな。だがいずれあの者達も始末せねばならん。我等が野望の為にもな」
「ハッ」
戦闘員達はその言葉に姿勢を正した。
「ところでダブルライダーは今どうしている」
「ハッ、沖縄より東京に戻りました。今は本郷が東京、一文字が横浜にいる模様です」
「そうか。ならばあの者達は暫く放っておくか。こちらも奴等に振り向けることのできる改造人間はおらん」
「ハッ」
「あの二人はいい。他のライダー共はどうしている？」
暗闇大使は再び戦闘員達のほうへ顔を向けて問うた。
「ハッ、只今全てのライダーが日本各地に散って我等の行動をさぐっております。どの者も油断は出来ません」
「だろうな。ところで北海道には誰がいる」
「北海道ですか？バラロイドですが」
「いや、違う。戦闘員ではない」

暗闇大使は戦闘員の言葉に頭を振った。
「ライダーの方だ。誰があの地に向かってきている?」
「ライダーですか?ええっと・・・・・・」
戦闘員の一人がモニターに北海道を映した。
北海道の函館の地域に赤い光が照った。戦闘員はそこを拡大させた。
そこに小樽の街が浮かび上がる。厚い雲と白い雪に覆われた港町だ。
「確かこの辺りに・・・・・・」
小樽港の辺りを集中的に映す。そして遂に一人の男を見つけた。
「あ、いました。この男です」
「この男がか・・・・・・」
暗闇大使はモニターに映る男の姿を見上げて呟いた。そこには風見志郎がいた。

雪原の花その二

レストランでの食事を終えた伊藤博士と村雨良は店を後にした。そして再び道路に出た。

「雨も止んだな」

博士は晴れ渡り厚い雲の間から顔を覗かせる雲を見上げながら言った。

「ああ。視界が良くなった」

村雨が運転をしている。表情を変えることなくただ前を見てる。

「なあ、村雨君」

博士はそんな彼に声をかけた。

「何だ?」

村雨は少し疑問の問い掛けを込めた言葉を発した。

「この空を見てどう思う?」

「この空を・・・・・・・・・」

彼は博士に言われるまま空を見上げた。手はハンドルから離さない。その運転は正確である。

「・・・・・・・・・」

厚い雲はもう遠くへ去り白く綿の様な雲が空に浮かんでいる。その空は何処までも続くかのように青く澄んでいる。

そしてその中央には太陽がある。その下にある全てのものを輝かしい黄金色の光で照らしている。

「雲・・・・・・空・・・・・・太陽・・・・・・」

村雨はその三つを見上げて呟いた。

「そうだ。それを見てどう思う?」

博士は微笑を浮かべながら問うた。まるで親が子に何かを教えるような優しい笑みである。

「白・・・・・・青・・・・・・金・・・・・・」

村雨はその三つのものの色を呟いた。その三色が彼の目に鮮やか

に入って来る。
「・・・・・・・・・」
村雨は沈黙した。そして上を見上げたまま運転を続ける。
「おっと、そのままじゃ危ないな。そうだ、少し道を離れよう」
博士は彼に道を離れるよう言った。彼はそれに従った。
二人は車を高速道路のしたの普通の公道の脇に停めた。そこは隣に森を控える草原だった。
「よし、ここならいいな。さあ村雨君、空を思う存分見るんだ」
「・・・・・・ああ」
村雨は博士に言われるまま空を見上げた。白い雲も青い空も黄金色の太陽もその全てが彼の目に入って焼きつく。
「・・・・・・・・・」
村雨は一言も発しない。ただ空を見上げている。
「どうだ、何か感じるものはないかい？」
博士は問うた。だが村雨はその問いに対し何も発しない。
「・・・・・・・・・」
どれだけ上を見上げ続けたであろうか。彼の心に何か特別な感情が宿った。
「・・・・・・・・・なんだ、この感情は」
彼は上を見上げながら呟いた。
「喜びや優しさとも違う。それとは別な、今俺の目に入って来るこの雲と空と太陽を目に焼きつけたい、心に留めておきたい、そして大切にしたいという思いだ」
博士はその言葉を聞いて優しく微笑んだ。
「博士、この感情は一体何というのだ」
彼は顔を下ろし博士のほうを向いて問い掛けた。
「君は今美しさを知ったんだ」
博士は言った。
「美しさ！？」
村雨は少し困惑したような声で言葉を出した。

「そうだ。目に入ったものを心で感じ、それを心に留め大切にしたい気持ち。それが美しさを知るということなのだ」
「この雲が、空が、太陽が・・・・・・。そうか、これが美しいものか」
その時彼はふと前に見た夜の空を思い出した。濃い紫の帳に散りばめられた星達と月。それ等に対しても彼は今見た雲や空、太陽と同じ感情を思い浮かべた。
「・・・・・美しい、こういったものを見てそう思うのだな」
「それはその人それぞれで微妙に違うがね。まあそう思ってくれて構わないよ」
博士は彼に問い聞かせるように言った。
「村雨君、この美しいものを守りたくはないかね」
博士の顔が急に引き締まる。それまでの微笑みは消え目の光が強くなった。
「ム・・・・・・・・・」
村雨は即答しなかった。否、出来なかった。博士の方を見てただ口を閉ざし目だけを向けていた。
だがやがてその口を開いた。少しずつ、だが確実に。
「・・・・・・・・・ああ」
彼は言った。そしてそこには強い意志が見られた。
「よく言った。それでこそ本当の意味での人間だ」
博士は彼に微笑んで言った。
「・・・・・・そうなのか?」
村雨はその顔に僅かな困惑の色をう浮かべて聞いた。
「そうだ。勿論まだまだ君に必要な感情はあるがね。しかし美しさを知るというのは人間にとって重要なことなんだ」
「・・・・・・そうなのか」
村雨は顔を少し俯けて言った。
「それもすぐにわかる。そしてそれがどれだけ素晴らしい事なのかも」

「これが・・・・・素晴らしい事・・・・・・・・・」
村雨は博士の言葉の意味がまだ完全に理解出来なかった。
「それは君がバダンと戦う時にわかるだろう。そしてそれが君と彼等を分かつものになる」
「俺と奴等を分かつもの・・・・・・・・・」
村雨はその言葉を噛む様に繰り返した。
「その事はよく考えてくれ。決して無駄ではない」
「そうか、そうしよう」
村雨はその言葉に頷いた。
「それではそろそろ出発するか。それともう少し見ていか？」
「・・・・・・・・・」
村雨は少し考えた。そして顔を上へ向けた。
「もう少し見ていたい」
「そうか、じゃあ付き合おう。君が満足するまで見てくれ」
「有り難う」
村雨はそれから空を見上げ続けた。夕刻になり空が赤くなり夜の帳が降りても空を見上げ続けた。

雪原の花その三

風見志郎は小樽の街中にいた。雪の積もった道を歩いている。

この小樽は北海道の中でも有名な都市である。札幌、函館等と並ぶ北海道有数の都市である。

北海道の開拓よりこの街の歴史は始まった。運河が通された西洋風の独特の街並で知られている。

特に銀行が多いので有名である。色内町を中心に重厚な石造りの銀行が立ち並んでおり『北のウォール街』とすら呼ばれている。

その西洋風の街中を彼は歩いていた。深い雪を踏みしめ前へ進んでいく。

「さてと、この前だったな」

日本銀行小樽支店の前に来た。煉瓦の美しい建物である。今は雪化粧をしておりその美しさが一層際立っている。今は銀行としての役目を終え博物館となっている。小ドームがトレードマークとなっている。

風見はその正門の前に立った。誰かを待っているようだった。程なくしてその人物がやって来た。

「お待たせしました、先輩」

やって来たのは佐久間健だった。雪に注意しながらこちらに来る。

「いや、俺も今来たばかりだ。この雪に足を取られてな」

靴に付いた雪を指差しながら苦笑して言った。

「そうですか、けれど先輩はモスクワにいたこともあるんですよね」

「ああ。まああそこは特別だ」

風見は笑って言った。

「息を吹いたら凍るようなところだぞ。ここは流石にそこまではいかないだろう」

「ええ」

「まあ話はいい。立ったままじゃ寒い。とりあえず何か食べに行こ

う。何がいい？」
「小樽といえば寿司でしょう。早速行きましょうよ」
二人はタクシーを呼びそれに乗り込んだ。そして商店街へ向かった。
港町小樽はニシン漁で有名であるが寿司が美味いことでも知られている。何しろ寿司屋通りまである位なのだから。
二人はその中の一店に入った。そして寿司を心ゆくまで堪能した。
「いやあ、美味かったですね」
佐久間は店を出て風見に言った。実に満足気な笑みを浮かべている。
「ああ。観光地だからあまり期待はしていなかったんだがな。ネタも新鮮で良かった」
「函館もいいですけれどね。ここの寿司も最高ですよね」
「んっ、御前函館にも行った事があるのか？」
風見はその言葉にふと顔を向けた。
「ええ。前にも北海道ｓで仕事をした事がありますんで。先輩と会う前の話ですけれどね」
「そうか。実は俺もここへ来る時に通った」
風見は笑いながら言った。
「蟹がいいですよね。イクラもたっぷりと食えるし」
「おいおい、食べ物ばかりじゃないか。あそこは景色もいいぞ」
「あれっ、そうでしたっけ」
「百万ドルの夜景というだろ。俺はあれが楽しみだったんだ」
「それでどうでした？」
「ああ、最高だった。香港やニューヨークの夜景も見てきたが噂だけのことはあったよ」
風見は目を輝かせながら言った。
「それは良かったですね。じゃあ今度俺も見に行こうかな」
「今度は食うのは程々にしろよ」
「解かってますよ」

二人はそう言いながら寿司屋通りを後にした。
小樽公園に来た。市民達の憩いの場ともなっている緑豊かな公園である。
だが生憎の銀世界だ。二人はその中を歩いていた。
「これはこれでいいですね」
佐久間が言った。
「ああ。確かにな」
風見も同意した。雪を踏みしめながら公園の中を進んでいく。
「しかしこんな所に本当にバダンがいるんですかね」
佐久間は首を傾げながら呟くように言った。
「北海道なら札幌とか函館とかあるでしょうに。テロをやるにしても基地を作るにしても」
「そうだな。この街は確かに大きい街だが」
風見は佐久間の言葉に目を光らせた。
「札幌でテロを行なったならば相当の被害が出る。函館を押さえれば地理的にかなり有利になる。シンガポールや沖縄に基地を作ろうとした連中だ。奴等がこの北海道に基地を作るならば函館が一番だろう」
「けれど何で小樽にいるんですかね」
「それだ。テロでも基地建設でもないとしたら・・・・・・」
風見の顔が険しくなった。
「奴等は何かおぞましい事を考えている。俺にはそう思えてならない」
「そのおぞましい事って・・・・・・」
風見の顔が険しくなったのを見て佐久間も表情を暗くさせた。
「そこまではまだ解からない。だがここは慎重に捜査していこう」
「はい」
二人は公園の中を歩いていく。足跡が雪の上に残った。
小樽にはホテルも多い。中でも小樽の少し外れにあるとあるホテルは有名である。

そのすぐ側にとある俳優のアトラクションがあることでも有名だがその中も豪華である。欧州の一流ホテルを思わせる趣である。側のアトラクションや設備、サービス等で人気の高いホテルである。

そのホテルのスゥイートルームの扉を誰かがノックした。中からどうぞ、という声がした。

声に従い中に入る。豪奢な部屋の中に一人の女がいた。

黒い髪に瞳を持つ美しい女である。その肌は少し黒く赤いドレスを身に纏っている。小柄であるが均整の取れた身体をしている。見たところラテン系のようだ。

「モンセラート＝バレアレス様、お伝えしたい事があります」

見たところホテルのボーイのようだ。しかしそれにしては目付きが悪く気配も剣呑である。

「バラロイドでいいわ。どうせこの部屋には我々以外いないのだし」

モンセラート、いやバラロイドと呼ばれたその女は微笑んで言った。不気味な程妖艶な笑みである。

「ハッ、了解しました」

その言葉と共に部屋の隅々から多くの影が現われた。バダンの戦闘員達である。

「貴方も変身を解きなさい。それだと窮屈でしょう」

バラロイドは目の前のボーイらしき男に言った。

雪原の花その四

「はい」
男はその言葉に従い変身を解いた。見れば彼もバダンの戦闘員である。
「そして私に報告したい事とは」
バラロイドは椅子に座りながらその戦闘員に尋ねた。
「やはり仮面ライダーの事？」
「はい」
その質問に戦闘員は率直に答えた。
「仮面ライダーブイスリー、風見志郎がこの小樽に姿を現わしたそうです。先程暗闇大使の方からご連絡がありました」
「そう、暗闇大使から」
バラロイドの黒い瞳が光った。赤い光であった。
「おそらく我等がこの地にいる事を知っていると思われます。インターポールの捜査官佐久間健と合流し早速街の中を捜査して回っているようです」
「流石に動きが早いわね」
バラロイドはその報告を聞いてその整った顔を顰めた。
「はい。奴等は今小樽市内を捜査中です。しかしこのホテルにもすぐにやって来ると思われます」
「そう、このホテルにも」
それを聞いたバラロイドの顔が笑った。何か企んでいる笑みだった。
「そうだとしたらこちらにも考えがあるわ」
「それは何でしょうか？」
配下の戦闘員達が一斉に顔を向けた。
「興味があるようね」
バラロイドはそれを見て微笑んだ。

「はい。ライダーを陥れる策ですか？」
「そうね。そうとも言えるわ。じゃあ今から話すわね」
戦闘員達は耳を傾けた。
「まずは・・・・・・・・・」
バラロイドは話し始めた。それが終わった時戦闘員達は一斉に敬礼をして答えた。
「これでよし。仮面ライダーブイスリー、華麗に殺してあげるわ」
バラロイドは笑った。今度は殺意に満ちた笑いだった。
風見と佐久間は市内の捜索を続けていた。そしてホテルに戻り休息を取った。
「これといった手懸かりはありませんね」
佐久間が応接間のソファーに座って言った。
「ああ。しかし連中はここで何をしているんだ？」
風見も首を傾げて言った。
「気になるといえば行方不明者が四人ですか。怪しいといえばこれですね」
「誘拐か？それにしては数が少ないし」
「ですね。奴等のやり方だと百人位は平気でさらいますからね」
「ああ。それにしても夜一人でいる時に消えたのか。奴等のしそうな事だが」
風見は眉を顰めた。
「他にもやりそうな事は多いですけれどね。やっぱり一番気になるのはこれですね」
「そうだな。消息を絶った場所を詳しく調べていくか」
「はい」
その時だった。扉をノックする。音が聞こえた。
「どうぞ」
二人は身構えながら言った。バダンの急襲を警戒していた。
入ってきたのはホテルのボーイだった。にこやかな笑顔を見せている。

「何ですか？」
どうやら危険な相手ではないらしい。二人は警戒を解きボーイに近付いた。
「郵便です」
「郵便！？」
ボーイは一通の手紙を差し出した。風見はそれを手に取り封を切る。それは招待状だった。
「招待状・・・・・・」
「あのホテルに！？」
それはあのアトラクションが側にあるホテルへの招待状だった。二人もそのホテルの名は知っていた。
「あの、もうよろしいでしょうか」
ボーイが二人に声をかけた。二人はうっかりと忘れていた。
「あ、どうぞ」
風見は彼を帰らせた。扉が静かに閉められた。
「バイキングへの招待か」
「ええ。それに催し物があるとか」
佐久間が招待状を見ながら言った。
「フラメンコか・・・・・・」
風見は左手を口に当てて呟いた。眉間に皺が寄る。
「俺は好きですけれどね、フラメンコ。それにしても何で俺達に招待状なんか」
「誘き出そうとしているのかもな」
風見は佐久間へ顔を向けて言った。
「バダンが・・・・・・・・」
佐久間もその顔を険しくした。
「その可能性は極めて高い。だが俺はこの誘いに乗るつもりだ」
「何故ですか？」
「虎穴に入らずんば虎児を得ず、だ。折角連中が俺達の前に姿を出してくれるんだ。行かない手は無いだろう」

「成程、そうですね」
佐久間は風見の言葉に頷いた。同時に風見らしい、と思った。

雪原の花その五

「早速行くか。バダンの奴等がてぐすねひいて待っているぞ」
「ええ。行って奴等の鼻っ柱へし折ってやりましょう」
二人はホテルを後にした。そしてマシンでそのホテルへ向かった。
ホテルに入る。ボーイが二人を丁寧に出迎えた。
「風見志郎様と佐久間健様ですね」
「はい」
二人は素直に答えた。このボーイに不自然なところは無い。
「こちらです」
上の広いホールに案内される。バイキングが行なわれている。
「どうぞ。心ゆくまでお楽しみ下さい」
ボーイはそう言ってその場を後にした。二人は用意されていた席に着く。
料理は美味かった。パスタも中華料理もかなり味付けが良かった。
二人は暫く料理を堪能していた。すると催し物が始まるとのアナウンスが入った。
「おっ、いよいよか」
楽器を持った一団が入って来た。その中に赤いドレスで着飾った女がいる。
「あれがダンサーだな」
風見はその女を見た。整っているが妙な気を感じた。
女は音楽に乗り踊り始める。脚を激しく踏み鳴らして踊る。
「・・・・・・・・・」
風見はその美しさに見惚れるわけでもなくただその女を見ていた。
食事も止め席に座して見ている。
何時しか他の客は何処かへ去っていた。コックやウェイトレスも消えていた。
踊りはそれでも続く。不意に女が口に咥えていた薔薇を手に取っ

た。黒い薔薇である。
女はそれを投げた。それは一直線に風見へ飛んで来た。
風見はそれをナイフで撃ち落とした。それと同時に楽器を演奏していた者達が楽器を放り投げた。
男達は変身した。やはりバダンの戦闘員達だった。
「やはりな」
風見はそれを見て冷静に呟いた。そして席を立った。
佐久間もだ。二人はテーブルを飛び越えてこちらに来る戦闘員達に向かって行った。
戦いが始まった。戦闘員達は椅子や皿を投げ風見達に攻撃を加える。
風見達はそれに対し懐からナイフを放った。それは一発も外す事なく戦闘員達の喉を貫いた。
「ウフフフフフ、噂通り腕前ね」
女はそれを見て微笑みながら言った。
「言ってくれるな、バダンの魔人共が」
風見は接近してきた戦闘員を肘で倒しながら言った。
「あら、何故怒るの。褒めてあげたのに」
「貴様等に褒められても嬉しくはない。俺は貴様等を倒す事が全てなのだからな」
風見は女を見据えて言った。
「あら、言ってくれるわね。折角食事と催しに招待してあげたのに」
「それは俺を倒す為にだろう。違わないか」
「ウフフフフ、その通りよ」
女は目を赤く光らせて言った。
「私はバダンの改造人間の一人バラロイド。この地の作戦の責任者よ」
「バラロイドか。憶えておこう。言え、この小樽で何をしている」
「聞きたいかしら」
「無論だ。一体何が目的だ。この小樽をどうするつもりだ」

「ちょっと実験をしているの」
バラロイドは妖艶に微笑んで言った。
「実験？」
「そうよ。新たなる毒ガスのね」
「毒ガス・・・・・・」
その言葉に風見の顔色が変わった。毒ガスの恐ろしさは彼も良く知っている。
「サリンなぞ比較にならない程の素晴らしい力を持った毒ガス。それを今開発して試しているのよ」
「そうか、行方不明者は貴様等の仕業だったのか」
「そうよ。骨まで溶かしてしまう素晴らしい力なのよ」
バラロイドの顔が自信と殺意に満ちたものになった。その整った顔が地獄の魔物の様に歪んで見えた。
「このガスが完成した時我がバダンの野望はさらに前進するわ。そして愚かな人間共を全て溶かしてやるの」
「愚かか。その言葉そのまま貴様等に返してやろう」
「何ですって！？」
バラロイドはその言葉に反応した。顔がキッと歪む。
「かっては人でありながら人を見下し愚弄するその姿。愚かと言わずして何と言う」
風見はあえて余裕に満ちた笑みを浮かべて言った。
「それが貴様等に解かるとは思わんが。せめてこの俺の手で貴様等を葬ってやる」
風見はそう言うと間合いをジリジリと詰めてきた。
「・・・・・・・・」
バラロイドもそれに一歩も引かない。身じろぎもせず風見を睨みつけている。
左腕を振り上げた。薔薇の花を投げ付けて来た。
「ムッ」
風見はそれを横にかわした。薔薇はテーブルに当たった。

するとテーブルは白い煙を発して溶けていった。どうやら薔薇には恐ろしい毒か何かがあるらしい。

「よく今のをかわしたわね。当たっていればそれでお終いだったのに」

「ほざけ。これしきの事で俺が死ぬとでも言うのか」

「それはすぐに解かるわ。嫌でもね」

バラロイドはそう言うとニヤリ、と笑った。

「この場は退いてあげるわ。けれど憶えておくことね。貴方はこの薔薇に溶かされ死んでいくのだと」

バラロイドの周りを無数の花びらが取り囲んだ。

「待てっ！」

追いすがろうとする。だがバラロイドはそれより速く姿を消した。後には黒い薔薇の花びらだけが残った。

「消えたか」

風見はその花びらを見ながら言った。後ろから佐久間が来た。

「先輩、その花は」

彼はしゃがみ込みそれを手に取ろうとする。だが風見はそれを制止した。

雪原の花その六

「待て、これはかなり危険だ」
「えっ！？」
佐久間はその声に思わず指を止めた。
「さっきあの女が投げた薔薇はテーブルを溶かした。恐らく強力な毒があるのだろう」
「毒、この花に・・・・・・・」
佐久間は退いた。
「その証拠に・・・・・・見ろ」
花びらが落ちた場所を指差す。そこでは床やテーブルがドス黒く変色していた。
「そんな、花びらが・・・・・・」
「植物の改造人間には毒を持った者も多い。奴はそのうちの一人だ」
「毒を持った改造人間・・・・・・」
佐久間は戦慄を覚えた。そうした改造人間ともこれまで幾度と無く戦ってきた。何れも厄介な相手であった。
「奴等はこの小樽で毒ガスの実験をしていると言っていた。もしそれが本当ならば完成した時大変な事になる。それだけは断じて許さん」
「ええ、勿論ですよ」
二人は意を決した顔で言った。そしてそのホールを後にした。
バラロイドはこのホテルにダンサーというふれこみで滞在していたらしい。本場スペインから来た本格的なフラメンコのダンサーだったという。
「それが何故バダンに・・・・・」
「経歴を偽造したのだろう。奴等ならばたやすい事だ」
風見は佐久間に対し言った。
ホテルに確かめたところダンサー達は何処かへ去ったという。滞

在費とホールの弁償代を銀行に振り込んだ後で。
「変なところで義理堅い奴等だな」
「それが奴の流儀なのだろう。ところで銀行の振込先は何処だと言っていた？」
「それが。一切不明だそうです」
「そうか・・・・・。足は見せないつもりか」
風見と佐久間はホテルの出入り口を潜りながら話していた。
「このホテルには手懸かりは何一つとして残されてはいなかったな。部屋にも何も無かった」
「元々改造人間ですからね。指紋も髪の毛も何一つ残っていませんでしたね」
「ああ。こうした時には便利だな。そういう事を他に使う気には到底ならないようだが」
風見はバラロイドがいたというホテルのスウイートルームの窓を見上げながら言った。
「さてと、これからどうするか、ですね」
佐久間が窓から視線を外し顔を前に戻した風見に言った。
「ああ。まずは犠牲者の出た場所を調べてみるか。ひょっとしたらそこに手懸かりがあるかも知れん」
「そうですね、それが一番いいですね」
風見の言葉に佐久間も頷いた。二人はマシンに乗りその場を離れた。
モニターに映し出されたホテルでの風見とバラロイドの戦いを暗い部屋で見る一つの影があった。
「うむ、人間の姿だとあまりわからぬな」
影は暗闇大使であった。壁の上のほうに置かれたモニターを眉を顰めながら見ている。
「バラロイドからの報告はあったか」
後ろの戦闘員の一人に尋ねる。
「ハッ、先程小樽の新しい隠れ家より報告がありました」

彼は敬礼をして答えた。
「そうか。何と言っている」
「技のキレ、速さ共以前のデータに比べ上昇しているのは確かです。しかし決定的な差は確認出来ないと」
「そうか。それでは今奴と戦うのは危険か」
暗闇大使は腕を組みながら考えた。
「いや、一つ方法があるか」
ふと閃いたような顔をした。
「奴の弱みを衝こう」
「弱み、ですか？」
戦闘員達はその言葉にキョトンとした。
「そうだ。弱みだ。バラロイドに伝えよ、わしが策を授けるとな」
「ハッ！」
戦闘員達は敬礼をした。そしてモニターを切り通信を合わせはじめた。
「これでよし・・・・・・といきたいところだが」
暗闇大使は笑いかけたところで口元を締めた。
「もしかしたら奴の改造は・・・・・・・・」
一号と二号の改造は全体的な強化だった。そしてその力を格段に伸ばしていた。
ブイスリーもそれは充分考えられる。しかし果たしてそれで全ての改造なのであろうか。
「もしもの時には・・・・・・わしも考えておくか」
暗闇大使は考える目をした。そしてモニターに現われたバラロイドに顔を向けた。

雪原の花その七

風見と佐久間は夜の小樽の運河沿いにいた。ここで一人消息を絶っているのだ。

岸沿いに倉庫が立ち並ぶ小樽の運河は観光地として有名である。昼には土産屋が立ち並び夜は霧に包まれる。雪と霧に覆われた白い運河を二人は歩いていた。

「足下に気をつけろよ」

「はい。しかしかなり冷えますね」

佐久間はコートの上から身体を少し震わせながら言った。

「ああ。確かに冷えるな」

風見は息を吐いた。その息は白かった。すぐに霧の中に消える。

「だがそうも言ってはいられまい。ここに奴等の手懸かりがあるのかもしれないのだからな」

「ええ。寒いなんて言ってはいられませんね」

「そういう事だ」

二人は運河沿いを歩いていった。そしてある場所で立ち止まった。

「丁度この辺りだったな。人が消えたというのは」

「ええ、ここで間違いないですね」

佐久間は懐から一枚の地図を取り出して街灯を頼りにそれを見た。レトロな大正期を思わせる作りの街灯である。

「そうか。まずはアスファルトを調べるか」

「ええ」

二人は雪を払いその下のアスファルトを調べようとした。そこへ不意に何かが襲って来た。

「危ないっ！」

それは鞭だった。二人はそれを跳んでかわす。

「バダンか！」

二人は身構えた。それに答えるかの様に戦闘員達が姿を現わした。

「ギッ、ギッ」
戦闘員達は鞭や網を手に二人に迫ってきた。二人はそれに対し身構える。
その二人を戦闘員達は遠巻きに囲む。時々ナイフを投げて来るだけで積極的に攻撃してこようとはしない。
「どういうつもりだ」
網を持つ戦闘員がそれを風見に向けて投げ付けて来た。風見は咄嗟の事だったのでかわしきれず網の中に捉われた。
「しまった！」
戦闘員達はそこに体当たりを喰らわせた。風見はそれに耐え切れず運河に落とされた。
「先輩っ！」
佐久間が叫ぶ。風見は改造人間だ。普通の者なら瞬時に心臓麻痺で死にかねない極北の河の中でも耐えられる。しかしこのままでは沈んでしまいかねない。
佐久間は助けに飛び込もうとする。だがそれは戦闘員達が許さない。彼を素早く取り囲んだ。
「クッ・・・・・・」
歯噛みする佐久間。だがその後ろから何者かが運河から跳び出て来た。
「ブイスリー！」
佐久間はその姿を見て喜びの声をあげた。風見は運河の中でブイスリーに変身していたのだ。
「行くぞっ、バダンの手先共！」
ブイスリーは身体に残った網を剥ぎ取り戦闘員達に向かって行く。戦闘員達はそれに対しやはり積極的に向かおうとはせず間合いを取りナイフを投げるだけである。
「・・・・・どういうつもりだ」
ブイスリーはそれを不審に感じた。そこに戦闘員達が一斉に鞭を放ってきた。

「ウォッ！」
それはブイスリーの全身を絡め撮った。かなり強い。しかも身体の重要な箇所に全て撒き付いている為身体を容易に動かす事すら出来ない。
「クッ、まずったか・・・・・・」
佐久間も他の戦闘員達に防がれ助けに向かえない。ブイスリーは意を決した。
「これしかない！」
腰のダブルタイフーンが激しく逆回転する。そしてそこから暴風を発した。
暴風が戦闘員達を撃った。それにより彼等は吹き飛ばされていく。そして鞭も薙ぎ払う。彼の身体に纏わり付いていた鞭は全て外れた。
戦闘員達は皆倒れていた。佐久間も彼に向かってきた戦闘員を全て倒していた。
「夜襲を仕掛けて来るとはな」
ブイスリーは戦闘員達を見ながら言った。そして変身をゆっくりと解いていく。
「奴等も油断出来ませんね。しかも手が込んでいる」
「ああ。鞭や網を使ってくるとはな」
風見は変身を戦闘員達を見下ろしている。
「だがこれで邪魔はいなくなった。ここを調べてみるか」
「ええ」
二人はアスファルトを調べだした。そしてその変色した部分を用心深く削り取り持ち去った。
二人は夜の運河沿いを戻っていた。その前にまたもや影が現われた。
「また出て来たか」
二人は身構えた。それはやはりバダンの戦闘員達だった。
二人は戦闘員達との戦いをはじめた。戦闘員達は雪道の上とはい

え素早く安定した足取りである。
しかし二人も怯まない。その戦闘員達をも凌駕する動きで戦闘員達を倒していく。
特に風見の動きは流石であった。戦闘員達を次々に的確に倒していく。
そこへ鞭が飛んで来た。いや、それは薔薇の蔦だった。
風見はそれを跳躍でかわした。そして堤の上に飛び乗った。
「バラロイドか」
「フフフ、そうよ。察しがいいわね、やっぱり」
暗闇からあの女が姿を現わした。相変わらず口許に妖艶な笑みを浮かべている。口にはあの黒薔薇がある。
「風見志郎、ここが貴方の墓場になるわ」
バラロイドはその妖艶な笑みのまま言った。
「言ってくれるな、では倒してみろ」
風見は怪人を睨みつけながら言った。
「ええ。それじゃあそうさせてもらうわ」
バラロイドは言った。そして口の薔薇をフゥッ、と吹き飛ばした。薔薇が散った。そしてその全身を黒い花びらが舞い散りながら覆う。
その中で彼女の身体は変化していった。顔は人のものから黒薔薇のそれになり服は緑のドレスになっていく。
特に腕が変わっていく。右腕は黒い手袋だがその左腕は緑の五本の蔦であった。
その身体の至る所に黒薔薇が配されている。その眼は紅く夜の中に光っている。
「さあ風見志郎、お望み通り殺してあげるわ」
怪人はそう言うと左手を振るった。そうすると蔦が伸びた。

雪原の花その八

蔦は棘のある鞭となった。そして風見を襲う。
風見はそれを上に跳んでかわした。そして雪の道に着地した。
怪人の攻撃はそれで終わりではなかった。身体の薔薇を手に取るとそれを投げ付けて来る。
風見は横に横転しながらかわす。そして間合いを狭めようとする。
「ウフフフフ、無駄なことを」
バラロイドはそれをせせら笑った。そしてまた薔薇を投げた。
風見は再び跳んだ。そして堤防の上に移った。
「中々やるな」
バラロイドを見下ろしながら言った。
「言ってくれるわね、私を誰だと思っているの」
怪人はその赤い眼を細めて言った。
「私は誇り高きバダンの改造人間の一人、甘く見てもらっては困るわね」
「確かにな。貴様の力はよくわかった」
「人間の貴方を倒すのは訳もないこと。さあ覚悟するのね」
「人間の俺を？」
風見はその言葉に右の眉を上げ口の右端だけで笑った。
「仮面ライダーブイスリー、貴方の事を我々が知らないとでも思っているのかしら」
バラロイドは不敵に言った。
「逆ダブルハリケーンを使用した後は三時間の間変身不可能、まさか知らないとは言わせないわ」
「確かにな、そんなこともあった」
風見は怪人の言葉に対して言った。今度は彼が不敵に笑った。
「何っ、どういう事」
怪人はその余裕に満ちた態度に眉を顰めた。

「ライダーを侮ってもらっては困る。我々は常に弱点を克服しより強くなっていくのだ。貴様等のようなこの世を乱す悪を倒す為にな」
「す、すると・・・・・・」
バラロイドは愕然となった。ここにきてようやく彼の余裕の意味が解かったのだ。
「そうだ、良く見ておけ。この新しく生まれ変わった仮面ライダーブイスリーをな」
風見はそう言うとコートを脱ぎ捨てた。そして腰からベルトが出て来た。

変っ
両手を肩の辺りで左から右へゆっくりともってくる。そして右手は右肩の高さで横に水平にし左手はそれに平行に持って来る。
身体を緑のバトルボディが覆う。手袋とブーツは白になっていく。
身
両手を右から上、そして左に旋回させる。そして左斜め上で止める。
胸が白と赤になる。首を白く大きな襟と二枚の白いマフラーが覆う。
ブイ・・・・スリャアアーーーーッ！
右手を素早く脇に入れる。そしてすぐさま再び元の場所へ突き出す。それと同時に左手は脇に入れる。
顔の右半分を赤い仮面が覆う。その眼は緑である。そしてそれは左半分も覆っていく。

ダブルタイフーンから光が発せられる。そしてブイスリーの全身を包んだ。
「行くぞっ！」
バラロイドの前に降り立った。怪人は彼を前にして顔を口惜しそうに歪めた。

「そうか、強化改造で弱点を・・・・・・」
口惜しさに満ちた声で言った。
「そうだ、だが強化改造だけではないぞ！」
ブイスリーはそう言うと間合いを一気につめてきた。そして拳を繰り出す。
「ガハァッ！」
怪人はその拳を胸に受けた。思わず緑の血を吹き出す。
続けて手刀を浴びせて来る。それはバラロイドの左肩を直撃した。
「くっ、やるね・・・・・・」
怪人は肩を押さえて呻いた。咄嗟に間合いを離した。
「どうだ、だがこれで終わりではないぞ」
再び間合いを詰めようとする。だが怪人はそれより素早く間合いを離した。
「そうでなければ面白くないわね」
怪人は蔦を振るった。だがブイスリーはそれを後ろに跳びかわす。
この時ブイスリーは構えを一瞬だけ解いた。そしてその機を逃すバラロイドではなかった。
薔薇を投げる。だがそれはブイスリーに向かって飛ばず爆発するように散った。
「ムッ！？」
するとそこから緑の煙が生じた。それはブイスリーを覆わんとする。

雪原の花その九

「ウォッ！」
それは毒ガスだった。ブイスリーは思わず苦悶の声をあげる。
「フフフ、どう？薔薇の毒の味は」
バラロイドは苦悶するブイスリーを見て笑いながら言った。
「あらゆるものを溶かすこの毒ガス、我がバダンが開発した最高の毒ガスよ」
「そうか、貴様等はこのガスの実験をこの小樽で行なっていたのか」
ガスから離れ体勢を崩しながらも必死に立ち上がっている。
「そう、そしてそのガスの開発及び保持者がこの私、バラロイドなの」
バラロイドは自信に満ちた声でブイスリーに言った。
「綺麗な薔薇には毒もある。それを教えてあげるわ」
バラロイドはそう言うと薔薇を次々と投げ付けてきた。そしてそのガスはブイスリーを次々と覆っていく。
「ググ・・・・・・」
ブイスリーは苦悶の声をあげる。ガスの毒がその全身を蝕まんとする。
「フフフ、如何に改造人間といえどこれは耐えられないでしょう」
バラロイドはその姿を見て笑う。
その通りだった。ガスはブイスリーの身体を徐々に浸食していた。それに耐えられる限界に近付いていた。
「まずい、このままでは・・・・・・」
ブイスリーは危機感を覚えた。このままでは敗れる、そう直感した。
「ここは・・・・・・これだ！」
ブイスリーは咄嗟に閃いた。そして動いた。
「ブイスリーバリヤーーーッ！」

身体中から何やら特殊な絶縁膜を出した。そして毒ガスを防いだ。
「なっ・・・・・・!?」
今度はバラロイドが驚いた。そしてたじろいだ。
それを見逃すブイスリーではなかった。突進し体当たりを仕掛ける。
体勢が崩れた。それを見て大きく跳躍した。
「ブイスリースクリューーーーキィーーーーック!」
身体渦巻状に回転させた。そしてそれにより加速をつけ蹴りを入れた。
蹴りは怪人の腹を直撃した。バラロイドはその脚を掴んだ。
「グググ・・・・・・・・・・」
呻き声を漏らす。蹴りはバラロイドの腹を貫いてた。
ブイスリーが脚を抜いた。そして後ろに跳んで戻った。
腹から鮮血がほとぼしり出る。怪人はガクリ、と右膝を着いた。
「ま、まさかバリヤーを張って毒ガスのそれ以上の浸透を防ぐとは・・・・・・」
「この仮面ライダーブイスリーには逆ダブルタイフーンだけでなく多くの能力がある。それを忘れていたな」
「た、確かに・・・・・・・・・」
バラロイドは苦しい声で言った。
「毒ガスを受けた時に咄嗟に閃いたが。おかげで命拾いした」
「くっ、ぬかったわ・・・・・・」
バラロイドは人間の姿に戻った。腹からは緑の血を流し続けている。
「私の負けよ、仮面ライダーブイスリー。だけどこれだけは覚えておくのね」
最後の力を振り絞り声を発する。
「最後に笑うのはバダン。これは覆る事は無いわ」
そう言うとニヤリ、と笑った。
「また会う時を楽しみにしているわ。その時は貴方が死ぬ時だけれ

どね」
そして左手に一輪の黒薔薇を出した。
「それではその時までさようなら」
薔薇が散った。そこから無数の花びらが生じる。バラロイドはその中に消えていった。
「また会う時だと・・・・・・・・・」
ブイスリーは呟いた。闘いに勝利しても心は晴れなかった。
「・・・・・・・・・バラロイドも敗れたか」
暗闇大使はモニターを見上げつつ呟いた。
「ハッ、立派な最後でした」
戦闘員の一人が敬礼をして言った。
「うむ。死体は回収したのであろうな」
「はい。カメレオロイド、ジゴクロイド、トカゲロイドと同じく地下の改造室に保管してあります」
「そうか、ならば良い」
暗闇大使は安堵の色を込めて言った。
「またあの者達には働いてもらわねばならん。まだ死んでもらっては困るのだ」
「ハッ」
戦闘員はその言葉に対し敬礼した。

雪原の花その十

「ライダー達よ、見ておれ。いずれ我がバダンの無敵の戦士達と究極の兵器が貴様等の前に立ちはだかる。その時貴様等は苦悶と絶望の中息絶えるのだ。バダンが世界を征服するのを見ながらな」

そう言うとニヤリ、と笑った。邪な笑いがその場を支配した。

「小樽ともお別れだな」

風見は佐久間に対し駅のホームで列車を待ちながら言った。

「ええ、寒いですけれどいい街でしたね。景色も綺麗だったし」

「おっ、食べ物の事は何も言わないのか」

風見は悪戯っぽく笑って問い掛けた。

「そ、そりゃあ食べ物も良かったですよ。寿司もホテルの食べ物も美味しかったし」

佐久間は照れ臭そうに笑って答えた。

「ははは、健はそうじゃなくちゃな」

風見は笑って言った。

「からかわないで下さいよ、もう」

佐久間は困ったような顔をして言葉を返した。

「悪い悪い、しかしこれで小樽でのバダンの活動は失敗に終わったな」

風見は表情を引き締めて言った。

「ええ。まだまだ奴等の暗躍は行なわれるでしょうけど」

佐久間も顔を真摯なものにした。

「おそらくこの日本でも暗躍している奴が大勢いる筈だ。これは他のライダー達に任せるしかないが」

「やってくれますよ、皆。だってライダーですから」

「おい、それは少し楽天的だぞ。それにそんな事言ってみろ。敬介や洋みたいな真面目な奴ならともかく茂だったらすぐ頭に乗るぞ」

「ハハハ、それはちょっと心配し過ぎなんじゃないですか」

「まあな、あいつはあれで頭が切れるところがあるしな。しかし・・・・」
その時風見の脳裏にバラロイドの最後の言葉が浮かんだ。
（あの言葉・・・・・・一体どういう意味だ）
風見の表情が暗いものになった。
（また会う時か・・・・・。まさかまだ死んではいないというのか。あれだけのダメージを受けて）
「？」
佐久間はその表情の変化に気が付いた。
（いや、もしかすると再生してくるというのか。それなら充分有り得るが・・・・・）
「先輩、どうしたんですか」
佐久間が声をかけた。風見はそれに対しハッと気が付いた。
「あ、いや何でもない」
風見は慌てて佐久間の方を振り向いて言った。
「まあここでの戦いは終わったしとりあえずはホッとしときましょうよ。どうせすぐあの連中との戦いがあるんだし」
「そうだな、とりあえず今は羽根を休めるか」
「そうですよ。ほら、列車も来たし。たまには汽車の旅を楽しみましょう」
「ああ、そうするか」
風見は佐久間の言葉に従い頷いた。
二人は列車に乗った。そして列車は二人を乗せ小樽の駅を出発した。

雪原の花　　完

２００３・１２・２

7

魔虫の潜む街その一

「はい、こちら喫茶アミーゴ。あ、志郎さん」
通信を受け取った純子が朗らかな声を出した。
「あ、はいわかりました。それじゃあおじさんにはそうお伝えします」
純子はそう受け答えると通信を切った。
「ん、志郎の奴からの連絡か？」
そこに立花が入って来た。彼が部屋に入った丁度その時通信が切れたのだ。
「はい。小樽でのバダンの作戦を阻止したらしいです。今から東京に戻られると」
「そうか。これで小樽での奴等の作戦も見事叩き潰したんだな」
立花は会心の笑みを浮かべて言った。
「はい。これで九州と沖縄、北海道は救われましたね」
「ああ。けれどまだ奴等は滅んじゃいないぞ。何せゴキブリみたいにしぶとい奴等だからな」
「おじさん、幾ら何でもゴキブリだなんて」
純子はバダンをゴキブリと評した立花の言葉に笑った。
「おい、笑っちゃいかんぞ。ゴキブリは人類の宿敵と言われているからな。何しろあの連中はわし等がこの世に現われるよりずっと前からこの世にいるんだからな」
「はいはい」
純子は笑いながら受け答えた。
「まだわかっとらんな。まあいい。客商売してたら嫌でも解かるさ」
立花はしょうがないな、といった感じで言った。
「現に今もチコとマコに店の中を掃除させているところだ。そうだ純子、御前も行け。あのおっちょこちょい共だけじゃ少し心配だ」

「わかりました。それじゃあ通信お願いしますね」
「おう、わかった」
純子が部屋を出る。立花は彼女に替わって通信室の前に座った。
「全く何時まで経ってもあの怖さがわかっとらんな。あいつが出る事が店にとってどれだけ怖ろしい事か」
立花はブツブツ言いながらヘッドホンを着けた。そして通信のスイッチを入れた。
「ん、金沢からか。金沢というと・・・・・・丈二の奴か」
立花は壁に掛けてある地図を見ながら言った。
「さてと・・・何の連絡かな。怪人でも見つけたか」
立花はそう言いながら通信に出た。結城の声が聞こえて来る。
この時彼は気付かなかった。自分の足下にゴキブリがいた事を。そしてそのゴキブリが蜘蛛に捕らえられている事を。
織田信長の配下の武将の一人に前田利家という者がいた。若い頃より男伊達で武勇に優れた男であった。信長の側近である赤母衣衆の一人となり勇名を馳せた。戦にあっては敵の首級を次々と挙げる武辺者であり『槍の又左』と言われ敵味方問わずその強さを知られる猛者であった。
又彼は主の信長と同じく傾奇者として知られ義理とはいえ甥に当たる前田慶次とは同じく傾奇者としてよく衝突したという。慶次も有名な武辺者であり風流人としても知られたが利家はその慶次にも引けを取らない激しい気性と個性の持ち主であった。尚この二人は歳も近くそれでいて叔父と甥の関係にあり何かと感情的なもつれもあったようだ。
利家は信長の下で勲功を挙げていった。そして織田家筆頭家老柴田勝家の下で上杉家との戦いに参加した。そして上杉を越後の国境まで追い詰めた。丁度その時だった。
本能寺の変が起こった。腹心の一人明智光秀のあまりにも不可解なクーデターにより織田信長は炎の中に消えた。そしてその光秀も羽柴秀吉に天王山の戦いで破れ敗死した。

信長の実質的な後継者争いが始まったがここで柴田勝家と羽柴秀吉が対立した。利家は最初能登に領地を持ち勝家の下にいた事から勝家についた。だがここで彼の人間関係が影響した。

実は彼は秀吉とは若い頃より付き合いがあった。お互い貧しい頃より交流がありそれぞれの夫人達も仲が良かった。

それに加え秀吉は天下無双の人たらしであった。彼はその人たらしの才能と彼との古くからの付き合いを表に出した。その上で彼を自分の傘下に収めようとしたのである。

彼の軍と秀吉の軍が対峙した時の事であった。秀吉は自分の陣から出て来た。そして彼に自分の下へ来るよう説得したのだ。

これには彼も驚いた。そして秀吉との古くからの交流を思い出した。だが勝家との事もある。彼は迷った末秀吉についた。

それを勝家は咎めようとはしなかった。織田家きっての武の持ち主であり男気で知られる彼は黙ってそれを許したのである。これは利家と秀吉の仲を知っており最初からそれを覚悟していた事もあった。

結果として勝家は秀吉との戦いに敗れた。そして北ノ庄城で主君信長の妹であり夫人である絶世の美女お市の方と共に自害し炎の中に消えて果てた。

彼はその後秀吉の側近、いや盟友としてその側にあった。かっての豪胆さだけではなく常に算盤を持ち歩き考え込む思慮深さも備えるようになりその人望は徳川家康のそれに匹敵するものであった。事実五大老の一人となった時は天下を望もうとしていた家康と対立を深めていた。戦国、安土桃山にその名を残す武将の一人である。

魔虫の潜む街その二

その彼により開かれたのが金沢である。古くより加賀百万石の城下町として栄え武家屋敷が立ち並んでいる。その街並みは美しく整然としており見る者の心を楽しませる。北陸の地にその繁栄を偲ばせる美しい街である。

今この街に一人の男がいた。結城丈二、ライダーマンである。

結城は金沢東別院にいた。ここは東本願寺の金沢の別院でありその歴史は戦国時代にまでさかのぼる事が出来る。かっては一向一揆の拠点にもなった。加賀はかっては一向一揆に支配され織田信長と激しく争った歴史がある。

その門の天井には龍の絵が描かれている。木村杏園の描いたものである。

「見事な絵だな」

結城はその絵を見上げて呟いた。彼は科学畑を歩いてきたがこうした絵画も嫌いではない。

「それにしてもこんなところで待ち合わせとはな。一体誰なんだ」

結城は絵から顔を離し辺りを見回して言った。辺りには観光客が大勢いる。

「まあすぐにわかるか。そろそろ来る頃だろうし」

そう言って顔を再び絵の方へ向けた。そうすると門の外の方から彼を呼ぶ声がした。

「貴方は」

結城は目の前にいる男に声を掛けた。今結城を呼んだ男である。黒いジャケットにスラックスを着た細身の男である。その顔は中世的であり整っている。髪は黒くくせがある。何やらスポーツをしていたらしい。その細身の身体は引き締まりしなやかな身のこなしである。

「はじめまして。滝竜介といいます」

「滝？インターポールの滝さんのご親戚か何かで」
結城は目を少し開けて聞いた。
「はい。親戚です。といっても遠い親戚ですけれどね。日本人ですよ」
その男は微笑んで言った。
「成程、滝さんの。そして私に何か御用ですか？」
「ええ。バダンの事で」
その名を聞いて結城の目が光った。
「詳しい事は場所を変えて。店を予約してありますので」
「わかりました」
結城は固い表情で頷いた。そして二人は東別院を後にした。
二人はとある料亭に入った。そして料理を食べながら話をしていた。
「インターポールから来られたのですか」
「はい。元々はサッカー選手をしていたのですが膝を痛めましてね。丁度いい歳だったので引退したんです」
滝竜介は箸を動かしながら言った。
「そしてコーチへの誘いを受けていたんですがね。ちょっとサッカーから離れてみようと思いまして」
「ほお。何故ですか」
「今までずっとサッカーばかりの日々でしたからね。少し違った事をしてみたいと思いまして。大学の先輩に紹介されて警備会社に入ったんです。それがまたえらくハードなところでしてね。暴漢と闘ってばかりでしたよ」
「またえらく凄いところですね」
結城は苦笑して言った。
「それでそこで働いているうちにインターポールからスカウトされまして。捜査官になったのです」
「成程。しかし滝さんや役君とは違う部署のようですが」
「はい。私は本来は麻薬捜査が専門なんです。勤めていた警備会社

がそういった関係の組織と仲が悪かったので」
「麻薬ですか。我が国にも色々と入り込んでいますからね」
結城は目を光らせた。デストロン等の組織では麻薬よりも遥かに恐ろしいものを使う事がある。かってゲルショッカーで使用されていたゲルパー薬がその代表だ。
「今回は助っ人なんです。バダンが世界各地で暗躍を始めてインターポールも忙しくなって」
「そうですか。奴等世界中で活動を始めたのですか」
結城は暗い顔をした。
「まだ表立っては動いていませんがね。動くのはもう少し後だと思われますが」
「しかし油断してはいけませんよ。人々が安心した時に現われる、それが奴等なんです」
「ええ、それはわかっているつもりです。現にインターポールも各国の特殊部隊も密かに警戒態勢に入っています」
「ならいいのですが。ところでこの地のバダンについてお話を窺いたいのですが」
結城は竜にバダンについて尋ねた。彼はそれに対し無言で頷いた。
「これを御覧下さい」
彼はそう言って懐から何かを取り出した。それは数枚の写真だった。

魔虫の潜む街その三

写真は金沢市の風景のものであった。どれも実に美しい。

「・・・・・・・・・」

結城はそれ等の写真を見て眉を顰めた。その写真に隠れるようにして彼等が映っていたからだ。

「やはり気付かれましたね。バダンがこの地である物を探しているようなのです」

竜は結城を見つつ言った。

「ある物とは？」

結城は写真を卓の上に置き尋ねた。

「前田家の秘宝です」

「前田家の秘宝！？」

結城は思わず声を上げた。

「はい。前田家は百万石の権勢を誇りました。その栄華は江戸時代を通じて謳われるものでした」

「それは私も知っています。この街並みを見ただけで」

「前田家はそれだけに多くの家宝を所持していました。例えば大典太光世」

大典太光世とは平安時代の刀鍛冶光世により作られた刀である。足利将軍家、豊臣秀吉を経て前田利家に与えられた天下五剣の一つに入れられる名刀の一つである。

この刀は静御前の薙刀、宗近の短刀と並んで前田家の宝であった。その霊力により鳥を落としたとも病を治したとも言われる伝説の名刀である。

「他にも多くの家宝がありますが代々の当主のみが知っていた家宝があったのです」

「それは何ですか？」

神剣の様な伝説を残す大典太よりも秘蔵とされた宝、それは一体

何なのか。結城はゴクリ、と唾を鳴らした。
「正一位国切」
「国切！？」
結城はその名を聞いて声をあげた。そのような名の剣は聞いた事も無かった。
「ご存知無いのも無理はありません。これは歴史には出て来なかった剣なのですから」
竜は言った。
「しかし刀で正一位ですか。あの日本号でさえ三位だというのに」
日本号は天下にその名を知られた名槍である。黒田節の唄でも知られている。
「はい。ですがこの位はあくまでも公のものではありません。何故ならその力があまりにも大きいものだったからです」
竜は顔を引き締めて言った。
「この刀が何時誰によって作られたのかは誰も知りません。ですが保元の乱の頃には既にあったと思われます」
「保元の乱ですか」
「はい。その形は片刃の曲刀であると伝えられています。当時の権力者平清盛により時の帝に献上されたと伝えられています。ですが帝はそれを清盛入道にお戻しになられました。この様な素晴らしい刀を受け取るわけにはいかないとして」
「時の帝までそう仰られたのですか」
「はい。そして清盛はその刀を嫡男である重盛に渡しました。重盛は京の都に社を設けこの刀を収めました。ところがこの刀を狙う賊が現われたのです」
「どうなりました？」
「賊は皆その首を断ち切られ息絶えていました。その場には誰もいなかったというのに」
「という事は・・・・・国切が・・・・・・」
「はい。そう言われております。そして平家が滅びこの社は源氏が

管理するようになりました」
「そしてどうなりました？」
「元寇はご存知ですね」
「ええ」
元寇とは当時ユーラシアの殆どを勢力下に収めていたモンゴル帝国の東部を治める元の皇帝フビライが属国である高麗国王の言葉に従い日本を攻めた戦争である。都合二回行なわれている。
「その戦いの時です。不意に社から刀が飛び出したのです」
「あの山賊達の時と同じように」
「いえ、あの時よりも凄まじい話です。何しろ対馬まで飛んで行ったのですから」
「何と・・・・・・」
結城はその言葉を聞いて絶句した。
「そして対馬で領民達に対して悪逆の限りを働いていた元と高麗の兵士共を斬り捨てていったそうです。まるで何者かが操っているかの様に。そしてその地にいた元、高麗の兵士達を全て斬り伏せたそうです」
「そうですか・・・。対馬を救ったのですね」
「そうです。しかしそれが国切の名の由来にはなったわけではいのです」
「他にも逸話があるのですか？」
「はい。その後我が国を乗っ取らんとした妖術師が十津川に現われたのです」
「十津川ですか・・・・・・」
十津川とは奈良にある深い木々に囲まれた地である。霊験あらたかな地として古来より修験者達の修業の場であった。南北朝時代は南朝の御所があった場所でもある。

「再び国切は動きました。そしてその恐るべき妖術師を死闘の末に斬り伏せたのです。そしてそれまでの功により帝から正一位の位を贈られたのです。そして『国を脅かす者を切り伏せる』という意味からこの名となったのです」

「実に恐ろしい力ですね」

「はい。その為戦国時代もこの刀は足利将軍家に護られていました。それだけ衰えようがこの刀の守護だけは怠らなかったと言われています」

「それだけその刀の力を恐れていたのでしょうね。しかし何故その刀が前田家に？」

「それには一つの取り引きがありました。関ヶ原の時です」

竜の目が光った。

「関ヶ原の時に前田利家は徳川家康と対立していました。しかし利家は間も無く亡くなってしまいます」

「家康にとっては最大の政敵が亡くなったわけですね」

「はい。そして彼はその息子利長を己が勢力に取り込もうと考えました」

「そしてその見返りとして国切の管理権を与えたと」

「はい。当時は豊臣家が管理していましたが秀吉は既に亡くその取り引きは順調に進みました」

「そして彼は家康に就き国切の管理を任されるようになった、というわけですね」

「はい。そして今もこの金沢の何処かに密かに納められているのです」

「成程、実に興味深い話でした。それだけの刀ならバダンの者達が狙うのも無理はありませんね。しかし一つ気になる事があります」

「それは何ですか？」

結城の言葉に今度は竜が尋ねた。
「それだけの刀の管理を何故徳川家が行なわなかったのですか。皇室は清盛にお戻しになられましたからそれに倣っているのでしょうが」
「若しかするとそのあまりに強大な力を恐れたのかもしれません」
「力を恐れるとは？」
結城は声を上ずらせた。
「国切の守護を任せられた者達は何れも永くは栄えませんでした。平家も源氏も執権家も。足利家もその栄えた時は短く戦国には既に名ばかりの存在でした」
「そして信長、秀吉もその栄えた時は短かった」
「はい。徳川幕府はそれに薄々気付いていたのかもしれません。だからこそ管理を他の家に預けた」
「・・・・・それによって前田家はこの地の雄藩として江戸時代を終えた。これも国切の力でしょうか」
「そこまでは。ただこの金沢は火事の多い町でもありました。城の天守閣も燃えてしまった事もあります」
「それも刀の力だと・・・・・」
「それは解かりませんが。ただそれにより金沢藩はその対応に追われ続けたのは事実です」
「国を護る程の絶大な力を持った神刀、それだけに護る者の身にも危害を及ぼす妖刀ですか。厄介ですね」
「はい、何としてもバダンから護らなければなりません。彼等にその力を悪用されない為にも」
二人は話を終えると料亭を後にした。それを遠くから見る一つの影があった。
「そうか、この金沢には結城丈二が来たか」
赤い照明に照らされた基地の指令室で一人の壮年の男が戦闘員からの報告を受けていた。
「ハッ、既にインターポールの捜査官滝竜介と合流致しました。早

速国切の捜査を開始しているようです」
男の前に立つ戦闘員が敬礼をして報告した。
「もう動いているか。やはり噂に違わぬ切れ者のようだな」
男は顎に手を当てながら言った。
髪は黒い。浅黒い日に焼けた肌をしている。見事な口髭を生やし白い服を着ている。顔立ちから察するにどうやらアラブ系のようだ。
「だとすれば我々も早速動くか。兵を二手に分けるぞ」
「ハッ」
彼の言葉に部屋にいた戦闘員達が一斉に敬礼をした。
「まずはこれまで通り国切を捜索する部隊。だが奇数の班はこの任務を解く」
男は言葉を続けた。
「奇数の班はわしが直接指揮する。結城丈二と滝竜介の撹乱及び抹殺に当たる」
「ハッ」
戦闘員達が再び敬礼をした。
「フフフフ、相変わらず見事な作戦指揮ですね」
その時部屋の扉から声がした。そして誰かが部屋に入って来た。
部屋に入って来たのはあの白人の中年の男だった。相変わらず慇懃な物腰で穏やかな笑みを浮かべている。
「ほう、誰かと思えば貴様か。一体何の用だ」
「ちょっといい物が手に入りましてね。どうです？」
彼はそう言って何かを差し出した。それはワインのボトルであった。

魔虫の潜む街その五

「トカイの年代物です。一杯やりませんか」
だが男はそれに対し複雑な顔をした。
「気持ちは有り難いが受け取るわけにはいかないな、残念だが」
「あっ、そうでしたね。これは失礼」
そのトカイをしまおうとする。
「いや、それは戦闘員達に渡してくれ。わしはともかく戦闘員達は飲みたい者もいるだろうし」
「そうですか。それではここに置いておきますよ」
彼はそう言うとそのトカイのボトルをテーブルの上に置いた。
「的確な指揮と部下への心遣い。流石は英雄イブン＝サッドゥータです」
「その名はよしてくれ。人滅だった時の名だ」
「そうですか。それではクモロイドとお呼びしましょうか」
「そうしてくれ。今のわしにはその名しか必要無い」
その男、クモロイドは静かな声で言った。
「ところでここに来たのは単にわしと酒を飲みに来ただけではないだろう。何の用だ？」
「はい、実は貴方にお伝えしたい事がありましてね」
男の目が光った。穏やかな笑みはそのままに目だけが光った。
「バラロイドが倒れました。北海道の作戦も失敗に終わりました」
「・・・・・そうか、惜しい者を失くしたな」
クモロイドは残念そうに言った。
「まだ完全に死んだわけではありません。また改造手術を受け復活するでしょう」
「それならばいいが。今あの者の力なくして我がバダンの世界制覇はないからな」
「それは当然です。それは貴方にも言えるのですよ」

「・・・・・わしもいざという時は再び改造してもらえるというのか」
「それが我等が首領の御遺志です」
男はその言葉を聞き感慨深げに呟いた。
「有り難いな。それでこそ我等が神だ」
「残念な事にその偉大なる神に逆らい続ける愚か者達もいますが」
「わかっている。ライダーマンの首はこのわしが必ず持って帰る。国切と共にな」
「その言葉を聞いて安心しました。それではご活躍を期待していますよ」
男はそう言うとそれまで不気味に輝かせていた目を再び綻ばせた。そして右の親指と人差し指をパチン、と鳴らした。
それを合図として男は姿を消した。フッとまるで影が消える様にその姿を消した。
「我等が偉大なる首領の為に・・・・・行くぞ！」
「イイーーーーッ！」
戦闘員達が一斉に敬礼した。そして部屋を後にするクモロイドを見送った。
結城と竜は犀川の大橋の上を渡っていた。
この橋は文禄三年（一五九四年）に利家により造られたのが最初と言われている。その後洪水等で長され今の橋になった。ベンチが置かれ市民達の憩いの場所ともなっており国の重要文化財にも指定されている。
かってこの橋の上で松雄芭蕉が句を詠んだと言われている。
『あかあかと日はつれなくも秋の風』
この句は今も残っている。
「次は何処に行きますか」
結城は竜に尋ねた。
「そうですね。ひがし茶屋街に一つ怪しい蔵があります。そこへ行きましょう」

「はい」
二人は橋を後にした。
浅野川沿いにあるひがし茶屋街は夜になると町の旦那衆が集まり酒をたしなみ芸者遊びに興じていた。その為か店の気位も高く所謂一見さんお断りの店も多かった。
だが今は茶屋を改修した喫茶店等も多く、観光地としてにぎわっている。
町並みは当時の情緒を今に伝え、風流の風が漂っている。夜になると艶やかな趣を漂わせる。見る物はその風流と艶やかさに心を奪われるのだ。
「できれば夜来たかったですね」
竜は微笑みながら言った。
「今は芸者さんはいませんよ」
結城はその言葉に苦笑した。
「いえ、芸者さんではなく。こういった町は夜に行く方が味わいがあるのです」
「そんなものですか？」
結城はその言葉に眉を少し動かした。
「ええ。時代劇なんかでもそうでしょう。昼に行くのと夜に行くのとでは感じが全く異なるのです。特にこうした遊びの町ではそうした感じが特に強いのです」
「成程。確かにそれはありますね」
結城はその言葉に同意した。
「さてと、その蔵ですが」
竜は町を見回した。
「こちらです。少しわかりにくい場所にありますが」
竜に案内され結城はその蔵へと向かった。
蔵は何処かの豪商のものだったのであろうか。かなりの大きさだった。それがいくつか連なっている。
「ここの何処かにあるのですね」

結城はそれ等の蔵を見ながら言った。
「はい。大体の目星はつけていますけれどね」
竜はそう言うとそのうちの一つの扉の前に行った。
「ここです。さあ入りましょう」
竜は鍵を開けた。そして二人は蔵の中に入った。
蔵の中は暗かった。そして葛籠が積み重ねられていた。
「あれですね」
結城はその葛籠の中に大切に飾られている一振りの刀を指差した。
「はい」
二人は刀に近付いた。その時だった。
不意に後ろの蔵の扉が閉まった。そして二人の前に幾つかの謎の影が飛び降りて来た。
「ムッ!?」
それはバダンの戦闘員達だった。たちまち二人を取り囲んだ。
「国切を狙ってか!」
結城が問い詰める。だが彼等はそれに答えようとはせず刀に向かう。
「渡さん!」
竜がその戦闘員を蹴り飛ばした。そして刀の前に立ちはだかる。

魔虫の潜む街その六

戦闘員達が竜に襲い掛からんとする。だが結城がそこに入る。
戦闘員達は二人により全員倒されてしまった。刀は守られたのだ。
「危ないところでしたね」
竜は床に伏す戦闘員達を見下ろしながら言った。
「ええ。では刀を調べましょう」
竜は刀を手に取った。そしてそれを抜いた。
白い光がその場を照らす。神々しいまでの光であった。
「・・・・・違いますね」
竜はその刀を見て残念そうに呟いた。
「これは江戸時代のものですね。かなりの業物だと思いますが国切ではありません」
「そうですか」
「はい。国切は平安期に造られたもの。当時のものはもっと反りも太さもあるのです」
「あ、そうだったんですか。それは知りませんでした」
我が国の刀がああいった形になるのにもかなりの時間を要している。当初は両刃の剣もあったのだ。
「次は何処へ行きますか」
「そうですね・・・・・・」
竜は少し思案した。チラリ、と扉の方を見た。結城もそれに気付いた。
「兼六園へ向かいましょう」
「兼六園ですね」
結城もそれに頷いた。
「では行きましょう」
「はい」
二人はそう言うと蔵を出た。そしてその場を後にする。

二人が去ったその蔵の壁に誰かが浮き出てきた。バダンの戦闘員だった。

「聞いたな、奴等は兼六園へ向かう」

ある男が出て来た。クモロイドである。

「ギイッ」

その戦闘員の他にも何人かの戦闘員が出て来た。そしてクモロイドの言葉に頷く。

「すぐにあの場へ向かうぞ。そして二人を消す」

彼等はそれに頷くと姿を消した。クモロイドもそれに続いた。

兼六園は日本三名園の一つに数えられている。金沢に来た者は殆どこの園に来る事でも知られている。

その始まりは延宝四年（一六七六年）にまでさかのぼる。当時の藩主が自分の別荘を建て、その周りに庭園を作ったのが始まりであるとされている。

その中は四季とりどりの花と澄んだ池や美しい木々により彩られている。四季折々の美しさが楽しめる庭園として金沢の人々からも深く愛されている。

「噂には聞いていたが中々・・・・・・」

竜は庭園の中を歩き回りながら満足そうに呟く。

「私もここへ来たのは初めてですがいいですね。心が和みます」

結城も彼に同意した。二人は花々と緑の中を進んでいく。

「特にこの霞ヶ池がいいですね。奥に小さい庵が見えるところがまた何とも」

まるで水の上に浮かんでいるような亭がそこに見えていた。

「ええ。しかし」

竜は結城に同意したところでその表情を引き締めた。

「その美しい場所を荒らそうとする無粋な輩共がいるのが実に残念ですが」

「それは我等の事かな？」

不意に声がした。そして二人の前に髭を生やした男が現われた。

「バダンか」
結城は彼を睨みつけながら問うた。
「いかにも。バダンの改造人間の一人クモロイドだ」
彼の後ろから無数の戦闘員達が姿を現わしてきた。
「目的は御前達と同じだ。そしてその為に貴様等には消えてもらう」
その言葉に呼応するかのように戦闘員達が二人を取り囲んだ。
「ほう。そして刀を手に入れどうするつもりだ」
結城は戦闘員達に臆する事なくクモロイドを見据えて問うた。
「知れた事。その力を我等の為に使うのだ。自身で飛び回り全てを斬るその力をな」
クモロイドはニヤリと笑って彼に言った。
「そう上手くいくかな。あの刀は悪を斬る為に動く刃。貴様等では首を刎ねられるのがオチだ」
「我々の力を甘く見てもらっては困るな。刀の意思を抑える事など造作も無い事」
「そう上手くいくかな」
「残念だがそれを貴様に言うつもりは無い。何故なら貴様等はここで死ぬからな」
そう言うと戦闘員達が襲い掛かって来た。二人は左右に散った。
二人は襲い来る戦闘員達を倒していく。戦闘員の一人が吹き飛ばされ池に落ちる。
結城が拳を繰り出してきた戦闘員の腕を取った。そして地面に叩き付けた。
「ほう、情報通りだな。腕を上げている」
クモロイドはそれを見て笑った。
「だがそれが私に通用するかな。バダンの改造人間の力見せてやろう」
そう言うと目が変わった。人の目から蜘蛛の目になった。
そして口が蜘蛛の牙になる。全身が黒と黄の毛に覆われる。
両手の甲から鋭い刃が生え脇から左右二本ずつ小さい足が生えて

きた。その姿はまごうかたなく蜘蛛のものだった。
「・・・・・それが貴様の正体か」
「そうだ。最後によく見ておくがいい。この姿をな」
クモロイドはそう言うと口から何かを噴き出した。それは白い糸だった。
「なっ！」
糸は結城を包んだ。そして激しく締め付ける。
「結城さん！」
竜が叫んだ。だが結城の声は返ってこない。その代わりにギリギリと何かを締める音がする。

魔虫の潜む街その七

「そろそろだな」
クモロイドが笑った。勝利を感じた笑みだった。
だがその糸が突如として破られた。中から結城が跳び出て来た。
「ムッ！」
それは結城ではなかった。結城が変身した姿、ライダーマンであった。
「甘かったな。この程度の糸なら抜け出すのはわけない」
右手を出す。そこにはパワーアームがあった。
「そうか、アタッチメントを使ったか」
クモロイドはそれを見て冷静に言葉を発した。
「そうだ、如何に強い蜘蛛の糸でもこのパワーアームの前では無力な布と同じだ」
「ほう、私の糸を布と同じと言うか」
クモロイドは不敵に言った。
「面白い事を言ってくれる。それではこれを受けてみるがいい」
そう言うと口から再び糸を噴き出してきた。
今度は針のように小さく細い糸だ。まるでマシンガンのように糸を出す。
「ムッ」
ライダーマンはそれを横に跳びかわす。糸は池に入り機銃掃射のように水面を波立てる。
「どうだ、これでもまだ布だと言うか」
クモロイドは自信に満ちた声で言った。ライダーマンはそれに答えようとしない。無言で右手のアタッチメントを換装する。
「マシンガンアーム！」
右手をマシンガンに換えた。そしてそれでクモロイドを撃つ。
「ムッ」

クモロイドはそれを跳躍でかわした。そして後ろの木の上に着地する。凄まじいジャンプ力だ。
「成程な。噂に違わぬ強さだ。むしろデータより動きがいいな」
クモロイドは木の上に立ちながら言った。その距離ではマシンガンで狙おうにも射程が定められない。
「マシンガンアームで狙おうにも無駄だ。その距離では射程も定まらんだろう」
「クッ・・・・・」
それは怪人も予想でいていた。ライダーマンは歯噛みする。
「ここは退こう。こちらも損害を出し過ぎた。戦力を立て直す必要がある。だが覚えていてもらおう」
クモロイドはライダーマンを見下ろしながら言った。
「国切を手に入れるのは我がバダンだ。そして貴様は我等の前に膝を屈することになる」
そう言うと天高く跳躍した。
「その日を楽しみにしているがいい。ハハハハハ・・・・・」
クモロイドはそう言い残して姿を消した。見れば他の戦闘員達も既に姿を消している。
「行きましたね、連中は」
竜はライダーマンの許に駆け寄ってきた。
「ええ。それにしてかなり強力な奴ですね」
ライダーマンはまだ先程まで怪人がいた木の上を見上げている。
「バダンの怪人クモロイドか。今まで蜘蛛の改造人間は結構いましたけれど」
竜の言う通りである。ショッカーの頃より歴代の組織の多くは蜘蛛の改造人間を作っている。ライダーマン自身もデストロンにおいて蜘蛛に毒針を取り付けた怪人ドクバリグモを開発している。
「これまでのどの蜘蛛の怪人よりも強力なようですね。あの糸と跳躍力はかなりの脅威です。それに」
「それに・・・・・？」

ライダーマンは言葉を続けた。竜はそれについて尋ねた。
「蜘蛛の力はあれだけではありません。おそらくまだ隠している力がある筈です。油断は出来ませんよ」
「・・・・・・はい」
竜もそれは感じていた。これからの国切の捜索は彼等ろの命懸けの死闘になる事も覚悟した。
二人はその後大乗寺に向かった。この寺は七〇〇年以上の歴史を誇り前田家の重臣本多家の菩提寺でもあった。その為何らかの手懸かりがあると思ったからだ。
「ほう、国切の・・・・・・」
竜のインターポールの身分証明書を見せた後この寺の住職に尋ねる。すると今まで温厚そのものだった老人の顔が急に険しくなった。
「ご存知なのですね、国切の事を」
結城はすかさず尋ねた。住職はその険しくなった顔を真摯なものにし頷いた。
「はい。ですが・・・・・・」
住職は言葉を濁らせた。
「あの刀の存在をご存知とは。もしやあの刀を狙う者が出て来たのですか」
二人は答えない。だが住職はそれで全てを察した。
「あの刀は心悪しき者には扱えませぬ。ですがもし邪なる者達の手に渡ればこの日本だけでなく世界が脅かされます。是非ともあの刀を御守り下さい」
「はい」
二人は頷いた。そして住職に案内され寺の奥に案内される。
「こちらです」
そこは仏殿であった。ここは重要文化財も置かれていることで有名である。
「どうぞ」
住職は仏殿の中を見回し彼等のほかに誰もいないのを確かめると

本尊の後ろに入る。そしてそこの床を横に引いた。
「なっ」
竜が思わず声をあげた。何と床が横に開いたのだ。
そしてその奥には階段が続いている。驚く事に隠し通路が造られていたのだ。
「お気を付け下さい。暗いですから」
住職は手に持っていた電灯で足下を照らしつつ最初に中に入った。
二人はその後に続いて入っていく。
最後に入った結城が頭上で床を横に引いた。そして通路を隠した。
しかしそれを見ている者達がいた。こっそりとその隠し通路の入口へ近付いていく。
階段を降りると廊下になっていた。木で造られた古い廊下だ。
三人はやがて一つの部屋に入った。そこは倉庫だった。

魔虫の潜む街その八

「ええと、確かここに・・・・・・」
住職はつづらの中を電灯で照らしながら探している。そして一枚の古い文を取り出した。
「あ、これです」
それは絵図が描かれた文だった。どうやら城か何かの地図らしい。
「それは・・・・・・金沢城の地図ですか？」
竜がその地図を覗き込みながら問うた。住職はそれに対し頷いた。
「はい。国切は金沢城にあります。歴代の藩主は自らの手元にあの刀を置いていたのです」
住職は真摯な顔で言った。
「目を離さない為ですね。刀の持つ力を知っているが為に」
結城が言った。彼も地図に描かれた城の図面を見ている。
「はい。そして藩主が参勤交代で国にいない時は城代家老筆頭が護っておりました。国切の存在はごく一部の者達しか知りませんでした」
「随分厳重ですね。確かにそこまでしないと護る事は出来ませんが」
結城は真剣な顔で言った。
「この地図をお二人にお渡しします。どうか国切を御護り下さい」
住職は国切の所在が書かれたその地図を二人に渡そうとする。だがその時何者かが襲い掛かって来た。
「ムッ！？」
結城はその影を手刀で倒した。竜が住職からその文を受け取り慌てて懐に入れる。
結城に打たれた影が倒れる。それはやはりバダンの戦闘員であった。
「奴等、ここまで・・・・・・」
結城が舌打ちする。

「どうやら我々をつけてきたようですね。他にもまだいますよ」
役が言った。彼の言葉通り彼等が部屋に次々と入って来た。
「この地図は渡さん！」
二人は住職を護る様に戦闘員達を次々と倒していく。そして廊下へ出て階段を昇っていく。
仏殿にも戦闘員達が待ち構えていた。そして彼等に襲い掛かる。
二人はその戦闘員達に立ち向かう。一人また一人と倒してく。
「どうやらこの連中は国切の捜索隊のようですね」
結城が戦闘員の一人を蹴りで倒しながら言った。
「ええ。その証拠に指揮官であるクモロイドもいませんし。けれど油断は禁物ですよ」
竜が言った。
「ええ、それはわかってますよ」
結城が答えた。そこで意外な助っ人が現われた。
「ムンッ」
何と住職までが参戦してきた。老人とは思えぬ身のこなしで戦闘員達を拳法の技で倒していく。
「お二人だけ戦われるは不平等。わしも協力させてもらいますぞ」
「えっ、しかし・・・・・・」
住職の意外な行動と思いもよらぬその強さに二人は呆気に取られている。
「何、拳法は達磨法師の時代より禅の修練の一つ。それに悪しき心の者を調伏するのもまた御仏の教えです」
住職はそう言うと戦闘員達を次々と倒していく。彼の活躍もあり戦闘員達は容易に退けられた。
「お強いですね・・・・・・」
横たわる戦闘員達を前に二人は住職に言った。
「いえ、これしきの事。歳のせいか動きが鈍っておりました」
住職は謙遜して言う。だがその強さは本物であった。
「さてお二方」

住職は二人に向き直って言う。
「国切の事、しかと頼みましたぞ」
「はい」
二人は答えた。そして住職に別れを告げ大乗寺を後にした。
金沢城は天正一一年（一五八三年）に前田利家が金沢に入ってから本格的な築城が始まった。キリシタン大名として知られる高山右近が招かれ彼の築城技術が使われたという。城の規模が拡大されていったのもこの頃からであった。だが当時は重臣達の屋敷が城内にあり決して広い城ではなかった。
戦国後期から安土桃山時代の城の特徴として天守閣の存在があるがこの城にもそれはあった。しかし今は無い。
それは何故か。それはこの金沢の地につきまとう災厄のせいである。
前述だがこの金沢は火事が非常に多い街であった。幾度も町が焼け多くの人々が死んでいる。この城もその災厄からは逃れられなかったのだ。
慶長七年（一六〇二年）の火事で天守閣が焼け落ちた。それ以後天守閣はもうけられなかった。その代わりになったのが本丸の三層の櫓である。これは江戸城に状況がよく似ている。またこの時二の丸に藩主の為の御殿が建てられた。
この二の丸には当初家臣達の屋敷もあった。しかし寛永八年（一六三一年）の大火により城内が再び火に襲われると武家屋敷を城外に出した。そして二の丸を拡大し用水の確保も行なった。そして内堀を掘り土を盛り上げ、各曲輪を区面していった。だがそれでも火は襲って来る。
宝暦九年（一七五九年）の火災で城内の殆どが焼失してしまったのである。その後の再建では城内の実用性を重んじ本丸の焼失した櫓は再建せず二の丸を中心に整備を行なった。現存する門の一つである石川門は天明八年（一七八八年）に再建されたものである。
今の城の景観は明治十四年（一八八一年）の火災で焼失した安政

期の景観を再現したものであり当時の面影を今に伝えている。
「何かえらく火事に悩まされている城ですね」
竜はその石川門をくぐりながら言った。
「国切を持つ者はその多くが長く権勢を誇示出来ないようですが。それがもし国切の持つあまりにも強い力のせいだとすると」
結城はそれに続きながら竜に話しかけた。
「まさか。これは金沢の気候のせいでしょう。江戸がその乾燥した空気とからっ風の為に火に悩まされたように」
竜が結城の疑念を打ち消すように言った。

「そうでしょうか。まあ科学的にはそうですが・・・・・・」
何処か自分に言い聞かせるように言う。彼も科学者である。その事はわきまえている。
だが科学が万能ではない事も彼はよくわかっていた。それを彼に教えたのがこれまでの悪の組織との戦いであった。
「結城さんの仰りたい事はわかります。私だって科学的に全てが説明出来るとは考えていませんよ。それは科学者の自惚れに過ぎませんからね」
「良かった。もしここで科学で解明出来ない事なんて無い、とか言われれば困っていました」
「それは言いませんよ。あの連中を見ているとね」
彼もまたバダンとの戦いで多くの事を学んでいた。そして科学だけでは説明出来ない事があるのも実感していた。
「確かに結城さんの説は私も否定しませんよ。何せひとりでに動き回り邪なる者を切る霊刀ですからね。火を起こす事もあるかもしれません」
「はい・・・・・・・・・」
結城は竜の言葉に頷いた。そして二人は城内を進んでいく。
「国切は確か菱櫓の中にあるのでしたね」
「ええ、この地図によりますと」
竜は結城の言葉に対し懐から地図を取り出し確認した。菱櫓は金沢城の象徴とも言える建物である。平成十三年に復元されたもので菱型をしている事からこの名がついた。大手と搦手を見張る物見櫓である。
「さてと、ここですね」
二人は櫓の前に来た。城壁の側に高くそびえ立っている。天守閣とは比較にならないがそれでも威風堂々としている。

まずは辺りを見回す。周りには誰もいない。
「よし」
そして櫓の下の石垣を調べる。そしてその端の城壁との境目に一つ奇妙な形の石を見つけた。
それを押す。すると中へ入る通路が現われた。
「何か妙に隠し通路が多いですね」
結城が思わず呟いた。
「城とか寺はどうしてもそうなってしまいますね。戦乱に備えて。さあ行きましょう」
竜が言った。そして二人は中に入った。
その中は古い木造りの廊下だった。どうやらこの城が築城された頃に造られたものらしい。
「度重なる火事でも残っていたのですね」
「その様ですね。それにしても長い廊下ですね」
二人はその廊下を進んでいく。階段を降り奥へ奥へと進んでいく。その最深部には一つの玄室があった。扉には結界の札が貼られている。
「この地図の通りですね。ここに国切があります」
竜は地図を見て言った。そして懐から札を取り出した。
「住職から頂いたこの札、効くといいのですが」
その札を扉に貼り付ける。すると扉はゆっくりと開いた。
「よし」
二人は中に入った。そこに国切はあった。
「これが国切・・・・・・」
二人は思わず声を漏らした。玄室の中に刀差しにかけられ静かに保管されている。豪華な装飾が施された鞘には札が貼られ厳重な結界が施されている。
「どうやら本物のようですね」
結城がそれを見て言った。
「ええ。その証拠がこの厳重な結界です」

竜も言葉を発した。そしてその結果をまじまじと見た。
「それにしても凄い結界ですね。この刀の力がどれだけ凄いかわかる」
懐から札を再び取り出した。今度は何枚もある。そして一枚一枚貼っていき結界を少しずつ解いていく。
「これで最後だ」
遂に結界を解いた。そして国切を手に取った。
「行きましょう、奴等が来ないうちに」
「ええ。あの連中の事です。すぐに追いかけて来ますよ」
二人は玄室を出た。そして廊下を駆けていく。
「結城さん、この刀は貴方にお任せします」
竜は駆けながらそう言うと結城に国切を手渡した。
「何故ですか？」
結城は刀を受け取りながら尋ねた。
「この刀を奴等から護る事の出来る力を持っているのは貴方だけ。だからこそ貴方にお任せするのです」
竜は真摯な表情で言った。
「・・・・・そうですか。わかりました、この刀、バダンから護ってみせます」
結城は意を決して言った。
「行きましょう」
「はい」
二人は外に出た。そして出入り口を元に戻しその場を後にした。
五十間長屋のところを駆ける。その時上から何かが二人へ目掛け投げ付けられてきた。
「ムッ！？」
二人は横に跳んでそれをかわした。そして身構える。
「待っていたぞ、二人共」
城壁の上に何者かが姿を現わした。それはクモロイドであった。

魔虫の潜む街その十

既に怪人の姿を取っている。周りには戦闘員達もいる。
「それが国切が噂に違わぬ力を感じるな」
クモロイドは結城と竜を見下ろしながら言った。
「その力はこれからバダンが使わせてもらう。貴様等なぞには渡さん」
そう言うと戦闘員達が何かを投げた。それはトリモチだった。
「危ないっ！」
二人はそれを咄嗟にかわした。だが結城に対する攻撃は執拗だった。かれはそれに捉われてしまった。
「これで身動きは取れまい」
クモロイドは余裕の笑みを漏らした。
「クッ・・・・・・」
結城は歯噛みした。トリモチを引き剥がそうとする。だが容易には取れそうもない。
クモロイドはその間に口から糸を吐き出した。そしてそれで国切を奪った。
「クソッ・・・・・・」
二人は舌打ちした。だが何も出来なかった。
「フフフ、これが国切か」
クモロイドはそれを手に取りニヤリと笑った。
「これさえあれば我がバダンの力は大いに飛躍する。そしてこの世を手中に収めるのだ」
刀身を抜こうとする。だが抜けなかった。
「！？」
必死に力を入れる。だがどうにもならない。
「国切は悪を断ち切る刀、邪な者には扱う事は出来ぬ」
何処からか声がした。不意に誰かがその場に現われた。

「貴方は・・・・・・」
それは大乗寺の住職であった。その門下にある禅僧達も一緒である。
「貴様はあの寺の・・・・・・」
クモロイドは彼を見て言った。
「ほう、拙僧を知っておるか。どうやら前より色々と寺の周りをうろうろしていたのはお主達のようだな」
住職はクモロイドを見上げて言った。その顔には余裕笑みが浮かんでいる。
「今の言葉、どういう意味だ」
怪人は住職に問うた。
「邪な者には使えぬという言葉か?その通りだ」
住職は言った。
「国切は我が国を守りそれを脅かさんとする邪な者を斬り伏せる霊刀。それがこの世を支配しその為にはどの様な手段も厭わぬ貴様等に従うと思ったか」
「クッ・・・・・・」
クモロイドは住職の言葉に舌打ちした。
「その刀は抜けぬ。そこには札とはまた違った結界が張られているからのう」
「クッ、だから抜けなかったのか・・・・・・」
「安心せよ。刀が抜かれたならば国切は貴様等を討ち滅ぼすからのう」
「つまり貴様等にとってその刀は無用の長物というわけか」
結城は言った。既にトリモチは全て剥がしている。
「フン、ならば貴様等を倒すだけだ」
クモロイドは彼に対し吐き捨てる様に言った。
「望むところ、俺も今ここで貴様等を倒してやる」
結城はクモロイドを見上げて言った。そしてゆっくりと両手を上げた。

トォーーーーッ
叫んだ。するとその両手に青いマスクが現われる。結城はそれを被った。
するとと手袋とブーツが銀のものに包まれる。そこから全身が黒いばとるぼディに覆われる。
ライダーーーマンッ
胸が赤くなる。そして腰の小さな四つの風車が回転する。首が黄色のマフラーに覆われ風車の光が彼の全身を包む。

ライダーマンに変身した。そして素早く右手にアタッチメントを取り付けるとそこから何かを発射した。
「ムッ！？」
それはロープアームであった。クモロイドが手にする国切へ向けて伸びていく。
そしてその鞘に絡み付いた。クモロイドが取り戻そうとするより速くロープアームはライダーマンの手に戻っていた。
「国切、獲り返させてもらったぞ。どの道貴様達には扱えないものだ」
「クッ・・・・・・」
クモロイドは舌打ちした。例え自分達が使えなくとも奪い返されるのは不快だった。
「これを」
ライダーマンは国切を住職に手渡した。
「はい」
住職はそれを受け取った。そして背に負った。
「さて、どうするバダンの改造人間よ」
竜がクモロイドを指差しながら言った。彼はそれに対して答えた。
「こうなれば貴様等全てあの世に送ってやる。覚悟するがいい！」
それが合図だった。戦闘員達が飛び降りて来る。左右からも現わ

れた。

魔虫の潜む街その十一

「多いな」
ライダーマンは戦闘員達を見て言った。声は冷静である。
「ええ。ですがこちらには正しき心があります。悪を討ち滅ぼす正しき心が」
住職が言った。禅僧達が身構える。拳法の構えだ。見れば彼等も相当な腕の持ち主のようだ。
「そうですね。正しき心。それがある限り」
竜も構える。そして戦闘員達を睨み付ける。
「負けることはありません！」
襲い掛かって来た戦闘員を拳で打ち倒した。
「そうでしたね。正義は必ず勝つ。クモロイド、今から貴様にそれを教えてやる！」
ライダーマンはクモロイドと対峙した。その前に数名の戦闘員が立ちはだかる。
「戯言を。ならば見事打ち倒してみよ！」
それが合図であった。ライダーマン達とバダンの金沢城における決戦がはじまった。
数はバダンの方が圧倒的に優勢であった。彼等は短剣等の得物を手に数人一組で襲い掛かる。ライダーマン達はたちまち一人一人が彼等に取り囲まれてしまった。
だが個々の強さの差は歴然としていた。禅僧達はその武術で戦闘員達の囲みを次々と打ち破っていく。
特に竜と住職の強さが際立っていた。禅僧達のフォローをもしつつ戦闘員達を的確な動きで倒していく。
ライダーマンは右手のアタッチメントをパワーアームに変換した。そしてそれで戦闘員達を切り裂いていく。
戦局は瞬く間にライダーマン達の優勢に傾いていった。ライダー

マンは戦闘員を左右に切り払いクモロイドの前に出た。
「行くぞ」
構えを取る。クモロイドもそれに対して構えを取った。
「部下達の仇、取らせてもらうぞ」
そう言うと両手の爪を振り回してくる。ライダーマンはそれをパワーアームで受け止めた。
「クッ・・・・・・」
その衝撃が右手を伝う。思わず呻き声を出した。
そこへ再び爪を振り下ろす。今度はそれを払った。
「・・・・・・やるな」
リーチは向こうのほうがある。下手な間合いではこちらが不利であった。
だがアタッチメントを換装する暇は無い。クモロイドの攻撃は速く間合いを離す余裕も無かった。
パワーアームを繰り出す。怪人の顔を狙う。だがそれは牙で防がれてしまった。
「何ィッ!?」
何とパワーアームを噛み砕いてきた。三日月のアームの半分が砕け下に落ちた。
「まだだっ!」
間髪入れず毒霧を噴いて来る。ライダーマンはそれを咄嗟に左に跳びかわした。
「パワーアームを・・・・・・」
ライダーマンは砕けたパワーアームを見て驚きがこもった声で呟いた。素早くカギ爪アームに換装する。
「どうだ私の牙は。中々のものだろう」
クモロイドは後ろに跳躍し誇らしげに言った。その場所は橋爪門続櫓の門の前であった。
「確かにな。パワーアームを砕いたのは貴様がはじめてだ」
ライダーマンはそう言いながら怪人の方へ進んだ。両者は橋の上

で向かい合った。
「だがこれで終わりではない。私にはまだ糸がある」
クモロイドは自信に満ちた声で言った。
「もうパワーアームは使えない。糸を防ぐ手立てはもう無いぞ」
「それはどうかな」
ライダーマンはその言葉に対しニヤリと笑って反論した。
「戯れ言を。まあいい」
クモロイドはそう言うと口に手を当てた。
「心配は無用だ。私は他の者を嬲り殺すのは好まぬ。一気に潰してやる。苦しむ間もない程にな」
口から手を離した。その口がカッと開かれた。
「喰らえぃっ！」
糸を噴き出した。それは一直線にライダーマンに向かっていく。
ライダーマンはそれを冷静に見ていた。そしてアタッチメントを換装し右手を前に構えた。それはマシンガンアームに似ていた。
「させんっ！」
ライダーマンはそれを糸に向けて放った。それは何やら巨大な爆弾のようであった。
それは糸を直撃した。糸は四方に乱れ散った。
「なっ・・・・・・！」
クモロイドは驚愕したその様なアタッチメントがあるとは聞いていなかった。
「それで終わりではないぞっ！」
ライダーマンは素早くアタッチメントを換装した。そして今度はクモロイドへ向けてそれを放った。

魔虫の潜む街その十二

それは炸裂弾だった。クモロイドの胸を直撃し飛び散った。
「グオオッ！」
クモロイドは吹き飛んだ。そして後ろの門にその背を激しく打ちつけた。
「グググ・・・・・」
全身が血塗れであった。胸から血を噴き出し肉がぐちゃぐちゃになっている。腹からは機械の内臓が見えている。
致命傷であった。だがそれでもなお立ち上がった。
「無駄だ、最早貴様にこれ以上の戦闘は無理だ」
ライダーマンは言った。尚も右腕をクモロイドへ向けて構えている。
「確かにな。私の負けだ。だが一つ聞きたい事がある」
「何だ？」
怪人の問いにライダーマンは尋ね返した。
「今貴様が使ったアタッチメント、それは一体何だ？」
「これか・・・・・・」
ライダーマンは静かに言った。
「最初のがグレネード・アーム。そして次がショットガン・アームだ。両方共神経断裂弾を放つ。ただ弾の種類が違うだけだ」
「そうか・・・・・強化改造で新たに身に着けたものだな」
「そうだ。それで満足か？」
ライダーマンは再びショットガン・アームを放とうとする。だが怪人はそれを制した。
「待て、私はもう終わりだ。介錯は無用」
「何！？」
ライダーマンは怪人の意外な言葉に戸惑った。
「私は自分の屍を敵に晒すのは好まない。これで失礼させてもらお

う」

「何ッ！？」

その一瞬だった。怪人は天高く跳んだ。

「さらばだ、ライダーマン・・・・・・」

怪人の声は遠くへ消えていった。その気配がブツッと消えた。それが何を意味しているか彼はわかっていた。

「怪人ながら見事な奴だったな」

ライダーマンは怪人が飛んでいった方へ顔を向けながら言った。

「バダン、あれ程の男を取り組んでいるとはな。恐ろしい組織だ」

そう言いながら変身を解いた。そこへ竜や住職達がやってきた。

国切は住職の手によって金沢の然るべき場所に収められる事となった。これで神刀を巡るライダーマン達とバダンの戦いはようやく終わりを告げた。

「さあ、行きますか」

竜が結城に言った。

「ええ」

結城はそれに答える。二人は大乗寺で住職に別れを告げると金沢を後にした。二人は寺の門の下にある石造りの階段を降りその下に止めてあったマシンに乗った。そして金沢を後にした。

「ここにいたか」

金沢のとある山に黒服の男が現われた。サングラスをしている。三影であった。

彼は足下を見た。そこには人間態のクモロイドがいた。既に事切れている。

「見事な戦いだったな。敗れはしたが」

そう言うと右手の親指と人差し指を合わせて音を出した。すると彼の後ろから戦闘員達が現われた。

「だがもう一度チャンスが与えられた。あのお方に感謝するのだな」

戦闘員達はクモロイドの遺体を担ぎ上げた。三影は彼等を促しその場を後にした。

村雨と伊藤博士は高速道路を進んでいる。車の量は相変わらず多い。
「車に乗っている人間が多いな」
村雨はポツリ、と言った。
「まあね。もうすぐ東京に入るしね」
博士は口に煙草をくゆらせながら言った。
「東京・・・・・・何処だそこは」
村雨は博士に問うた。
「この日本で一番大きな都市さ。首都でもあるよ」
「首都・・・・・・」
「あ、知らなかったか、済まない。まあこの日本の中心だよ、中心。わかりやすく言うとね」
博士は顔を崩して言った。
「そうか、中心なのか。この日本の」
村雨は頷いて言った。
「そうだよ。人も大勢いてね。賑やかな街だよ」
「そうか。だとするとバダンにもよく狙われそうだな」
村雨は道の向こうに見える空を見ながら言った。その空は白い。
「まあね。そのせいでライダー達も東京でよく戦ったよ」
博士は感慨を込めて言った。
「そして今度は俺が東京へ入るのか。バダンと戦う為に」
村雨は言った。そこにはまだ感情に乏しいながらも決意の色があった。
「そうだ、村雨君。しかしそれだけではないぞ」
博士は彼の方に顔を向けて言った。その顔は真摯なものになっていた。
「君が失ったものを全て取り戻す為に。人として再び歩き出す為に東京に行くんだ。もうすぐ君の新生の時がやって来るぞ」
「新生の時・・・・・・」
村雨はその言葉を反芻するように呟いた。

「そうだ。行こう、東京へ」
「ああ」
トラックは進んだ。そして東京へ入ったことを示す看板の横を通り抜けた。

魔虫の潜む街　　完

2004・1・5

海魔泳ぐ海その一

海魔泳ぐ海

瀬戸内海は古来より我が国の海運の中心となっている。船の往来は多く港も多い。かって海軍が呉に港を置いた理由は防衛に適しているのとこの地が天然の良港の宝庫だからであった。平家もこの地の海運を利用して栄えた。平清盛が厳島神社を自らの家の守護神としていたのは有名であろう。彼はこの神社に参拝する時に出世魚を食べ出世したという言い伝えも残っている。

また漁業も盛んである。朝早く海に出ると漁に精を出す船があちらこちらで見られる。

同時にこの海は世界有数の海運上の難所でもある。小島が極めて多く海流は複雑である。また小舟も多く船乗り達はここを通過する際は細心の注意を払う。船乗り泣かせの場所でもあるのだ。

しかも昔は海賊達も多かった。藤原純友がここで暴れ回り戦国まで海賊の根城が多々あった。また土着の豪族達も独自の水軍を持ち割拠していた。平家が栄えたのはこの地の豪族達と良好な関係を保っていた事も大きかったのだ。室町期の有力な守護大名大内氏も戦国の中国の雄毛利氏も彼等を自らの勢力に取り込むことによってその勢力を磐石なものにしていた。とりわけ毛利氏は厳島の戦いにおいて村上水軍の力を利用して勝っている程である。

その瀬戸内は今でも船の往来が多い。今では我が国の船だけではなく世界各地の船が往来している。

その日の夜一隻の貨物船が航行していた。見ればアジアのとある半島籍の船である。

「しかし島や小舟の多いところだなあ」

船長は艦橋でぼやいた。痩せてエラの張った顔をしている。

「そうですね。しかしここを通らないわけにはいきませんからね」

傍らにいる若い航海士が言った。

「うむ。まあ今日は雨も降っていないし船も比較的少ないしな。いつもと比べるとかなりやり易い」
「そうですね。しかし油断は禁物ですよ。最近ここで事故が絶えませんようですし」
航海士が顔を顰めた。
「らしいな。船が急に顛覆したとか沈没したとか。今月に入っても う三件か」
船長もその表情を暗くした。
「救助された者の話では船に欠陥は無く船底が何時の間にか空いたりエンジンが急に爆発したりしたらしいですね。事故を調査した海上自衛隊や保安庁も原因解明に苦労しているようです」
「それでか。いつもは何かというと陰に隠れたがる自衛隊や保安庁の船が最近この辺りでしきりに動き回っているのは何故かといぶかしんでいたのだが」
船長はふとすぐ前にあるであろう呉の港のほうを見た。
「ここで沈んだりしたら大変ですよ。鮫も多いようですし」
「おい、鮫が怖くて船には乗っていられんぞ」
「ははは、これは失敬」
航海士は笑って謝罪した。
「まあいい。それにしても妙な話だ。我々も注意しないとな」
「はい、その通りです」
航海士がそう言った時だった。彼等の乗る船が急に傾きだした。
「なっ！？」
「まさかっ！」
そのまさかだった。船が急に傾きだしたのだ。
「船長、大変です！」
艦橋に船員の一人が駆け込んできた。調理担当の者だ。
「何が起こった！」
船長は彼に問うた。
「船底から浸水です！それも複数の箇所からです！」

「何っ！とりあえず応急処置で穴を塞ぐんだ！」
船長はすぐさま指示を下した。
「それは休息を取っておられた副長がただ今やっておられます」
「そうだった、彼がいた」
船長は副長のことを聞いて安堵した。この船を彼と共に取り仕切っている男である。彼とは長い付き合いで互いによく知る間柄である。彼に任せておけば大丈夫だと思った。
「ですが穴が次々と空いていくのです。流石の副長にも手の施しようがありません」
「なっ、次々とか・・・・・・」
船長も航海士もそれを聞いて呆然とした。普通に考えて有り得ない事だ。
「副長が私にこちらに行くよう言われたのは手遅れにならないうちに船長に総員退艦の指示を出して頂く為です。どうかご決断を」
「・・・・・・・・・」
船長はその言葉に顔を暗くした。だがそれ以外に決断は下しようがなさそうであった。船の傾きは最早まともに立ってはいられない程にまでなっていた。
「・・・・・・わかった、すぐに総員退艦に移れ」
彼は言った。そして海にボートを次々と出しそれに乗り込んでいった。
最後に船長がボートに乗り込むと同時に船は沈んでいった。艦首があっという間に海の中に没していく。
「・・・・・なんという事だ。これは夢ではないのか」
船長は自分が今まで乗っていた船が瞬く間に海の底に消えていくのを見て呆然とした顔で言った。
「残念ながら。その証拠にこの場にいある我々全員が証人ですから」
同じボートに乗る航海士が言った。彼等は岸辺に向けて力無く漕ぎだした。
それを遠くから見る影があった。海の中から彼等を見ていた。

「フフフフ」
影は笑っていた。その姿は暗闇の中でよく見えないが人のものでない事はよくわかった。
影は海の中へ消えた。そして海は暗闇の色をたたえていた。

海魔泳ぐ海その二

「そうか、瀬戸内での作戦は順調に進んでいるか」
暗闇大使は指令室で報告を聞き満足気に頷いた。
「はい、昨日も貨物船を一隻沈めたようです」
戦闘員の一人が報告した。
「貨物船か、また大物をやってくれたな」
暗闇大使はさらに機嫌をよくした。その目を細くさせる。
「奴に伝えよ、その調子で船をどんどん沈めろとな。そして瀬戸内に船が通らないようにするのだ」
「ハッ、それではそのようにお伝えします」
戦闘員の一人がそう言って敬礼した。
「瀬戸内の安全が脅かされれば日本の経済に与える影響は大きい。そして日本の経済を混乱に陥れてやるのだ」
暗闇大使は笑った。彼が目にするモニターには海に沈んでいく貨物船があった。
「おい、敬介から連絡は無いか」
立花はアミーゴの奥にある通信室でチコとマコに尋ねた。
「敬介さんならさっき連絡がありましたよ」
「船の上からでよく聞き取れませんでしたけれど」
二人は軽い調子で言った。
「それを聞くのが御前等の仕事だろ。純子みたいにちゃんとやれ」
立花は口からパイプを外して言った。
「あら、お言葉ん。これでも仕事はちゃんとやってるわよ」
「そうよ、現にこうやって通信もしてるじゃない」
二人は口を尖らせて反論した。
「全く、ああ言えばこう言うで口の減らん奴等だ。で、敬介は何って言ってるんだ?」
「所在の連絡です。今魚島の辺りにいるそうです」

「魚島か・・・・・・」
立花はチコの言葉に考え込んだ。魚島とは瀬戸内の真ん中辺りにある島である。広島県と愛媛県に挟まれる形となっており南にはヒウチ灘がある。
「あそこだよな、この前貨物船が沈んだのは」
「はい、船長さんが真っ青な顔でテレビに出てましたね。何でも船底に穴が次々と空いていったとか」
マコが言った。
「それがわかんねえんだよな。そんな事普通じゃ起こる筈が無ねえからな」
「あらっ、だから怪しいんでしょ？」
「そうよ、バダンの仕業かも知れないから敬介さんが行ったんでしょ」
二人が反論した。
「それはそうだが・・・・・・。海か。まああいつにはもってこいの場所だがな」
立花は言った。そして瀬戸内にいる神敬介に対し思いを馳せた。
(頑張って来いよ)
そして通信機の前に来た。それから二人に問うた。
「純子は今日は遅くなるみたいだからよろしく頼むぞ。後でコーヒーを差し入れてやるからな」
「ケーキも頂戴」
「あたしはチーズケーキがいいな」
「ああ、わかったわかった。真面目にやってればケーキでも何でも食べさせてやるよ」
立花はそう言うと店に戻った。店に出ると丁度四郎がコーヒーを入れていた。
その頃神敬介は魚島の辺りを船に乗り捜査していた。船はレンタルした小型のクルーザーである。
彼は船首のところにいた。そして海面を見ている。

「神さん、この辺りでいいですか？」
操縦室の方から声がした。役の声である。
「あ、はい。ここら辺でいいです」
神は言った。役はその言葉に従い船のエンジンを停止した。そして碇を下ろす。
そして船首に出て来た。その手には潜水服とアクアラングがある。
「どうぞ」
役はそれを神に手渡した。神はそれを快く受け取った。
服を脱ぐ。既に下に水着を着ている。そして潜水服を着てアクアラングを担いだ。
「私も行かなくていいですか？」
役が尋ねた。
「いいですよ。船に一人残っていないとまずいですし。それに役さんにはそこでソナーとかを見てもらいたいですしね」
神は準備を整え終えて言った。
「そうですか。ではお気をつけて」
「はい」
彼はそう答えると海に入った。そしてそのまま潜行していった。

海魔泳ぐ海その三

海の中は意外と澄んでいた。かなり下の方までよく見える。
「貨物船はあの辺りだな」
さらに潜っていく。そして貨物船を発見した。
「あれか」
見れば岩の間に挟まるように沈んでいる。外見は特に異常は無い。沈んでからまだ日が浅いこともあり何も付着していない。
「問題は船底だったな」
甲板に着く。そして中に入っていく。
中には羅針盤等がそのまま残されていた。食べ物やフライパン等もそのままであった。
「勿体無いな。しかし逃げるので精一杯だったようだから仕方無いか」
この船は三十分も経たずに沈んだという。乗員が逃げるのだけで一杯だったようだ。
貨物もそのままであった。運んでいたのは衣類だったようだ。
「どうやらポリエステルだな。こちらはまだ使えそうだ」
すぐに引き揚げられるだろう。船員も荷物も無事だったのが不幸中の幸いか。
船底に来た。そこは話通り幾つもの穴が開いていた。
「これは酷いな」
彼の予想以上だった。直系一メートル以上の穴が幾つも開いている。これでは船が沈むのも当然であった。
穴を調べる。見れば何かで切り裂かれたようである。
「かなり鋭利なもので切られているな。岩にぶつかったとかそういうのではないな」
切り口は綺麗である。鉄をも容易に切り裂く、それだけの刃を持つ者といえば一つしか思い浮かばない。

「間違いないな。バダンだ」
神は結論付けた。これまでの沈没した船は全て調べたがどれもこのように底に大きな切り口のある穴が開いていた。下から切り裂いたとしか思えないのである。
「どうやらこの瀬戸内を通る船を次々に沈めていっているようだが」
神は穴の切り口に手を当てながら考えている。
「この瀬戸内の安全を脅すつもりだろう。だがそうはさせんぞ」
彼はそう言って貨物船を後にした。それを岩陰から見る影があった。
影はその場を去ると丘へ上がった。そして目の前の岩をどかしその下にある階段を降りていった。
階段の下には扉があった。それを開き中に入る。
通路を進んでいく。左右には幾つか部屋がある。だがそれの何処にも入らず奥へと進んでいく。
奥には一つの扉があった。その横にあるスイッチを押すと扉が左右に開いた。そしてその中に入った。
そこは指令室であった。通信機やコンピューター等が置かれ複数の戦闘員達が座っている。
二階になっており二階には誰かが椅子に座っている。彼はその椅子に座っている者に対し敬礼をした。
「ご苦労、何かあったか？」
その椅子に座っている者が問うた。浅黒い肌をしたやや小柄な東南アジア系の男である。白いカッターに黒いズボンといった動き易い服装である。
「はっ、今しがたあの男の存在を確認しました」
戦闘員は言った。
「神敬介か。やはり色々と調べ回っているようだな」
男は頷いて言った。そして席を立った。
「あの男が来る事は予想していた。海ならばあの男が出て来ない筈がないからな」

階段を降りる。そしてモニターの前に来た。
「チャクリット＝サワナーン、いやカニロイドよ」
その途端モニターから映像が現われた。暗闇大使が出て来た。どうやら本部から通信を入れてきたようだ。
「おや、暗闇大使。今そちらに連絡を入れようとしたところでしたのに」
カニロイドと呼ばれたその男は軽い笑みを浮かべて言った。
「そうか。ならばわしの言いたい事もわかるな」
暗闇大使は頷いて言った。
「はい。神敬介がこの瀬戸内に姿を現わした事についてですね」
「そうだ。すぐにあの男を消すのだ」
「勿論です。このカニロイド、必ずや神敬介、いや仮面ライダーエックスを倒して御覧に入れましょう」
カニロイドは顔を引き締めてモニターの暗闇大使に言った。
「頼むぞ、既に五人の同志がライダー達に倒されているからな」
暗闇大使はそう言うと顔を険しくした。
「五人・・・・・。というとクモロイドもやはり・・・・・」
「そうだ。遺体は三影が回収したがな」
「回収出来ましたか。ならばまだ救いがありますね」
カニロイドは少し安堵した顔で言った。
「うむ。だがライダー達により被害は拡大する一方だ。この辺りで食い止めなければな」
「その役目、見事受けさせて頂きましょう」
カニロイドは暗闇大使に対して言った。
「頼むぞ、エックスライダーは水中では無類の強さを発揮するがな」
「それはこのカニロイドも同じこと」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「フフフ、そうであったな」
暗闇大使もそれを見てニヤリと笑った。
「それでは吉報を期待している。必ずやエックスライダーの首を挙

げるようにな」
「このカニロイドの名にかけて」
「うむ、頼んだぞ」
暗闇大使はそう言うとモニターから姿を消した。モニターは再び真っ黒になった。
「それでは行くか、エックスライダーを倒しに」
カニロイドは戦闘員達のほうへ顔を向けて言った。
「ハッ」
戦闘員達はそれに対して敬礼した。そしてカニロイドに続いて基地を後にした。

海魔泳ぐ海その四

神は大島にある旅館で役と共に泊まっていた。そこを拠点にして捜査しているのである。

「やはりどの船も同じですね。下から襲われています」

役がノートパソコンに映し出した船の写真を見ながら言った。どれも神が水中カメラで撮ったものだ。

「はい。しかもかなり鋭利な刃物のようなもので。これはバダンの仕業でしょうね」

神が言った。

「そうでしょうね。それ以外には考えられません」

役も同意した。パソコンに映し出されている船の切り口はそれを示しているかのように異様に鋭かった。

「しかし連中今度は海ですか。色々とやりますね」

神はそう言って苦笑した。

「それが連中のやり方です。あの手この手でその野望を達成しようとする。その為ならどんな事も厭わない。例え他の人達がどれだけ苦しもうとも」

「それはわかっています。かって俺の父も協力を断った為ゴッドに殺されましたから」

「・・・・・そうでしたね。お父上はご不幸でしたが」

「そして俺も奴等に殺されかけた。しかし親父がその最後の力を振り絞って俺を改造人間にしてくれた。カイゾーグ、仮面ライダーエックスとして」

神は感慨深げに呟くように言った。

「最初は復讐の為に戦っていました。しかし奴等と戦ううちにわかったんです。あの連中と戦わなくては世界は悪に支配されてしまうって」

「ですね。しかし彼等は幾らでも甦ってくる」

「そうしたらまた戦うだけですよ。あいつ等がこの世界を支配しようとするならば俺は必ず奴等の前に立ちはだかり討つ。奴等がこの世にいる限り俺は戦い続けます」
「・・・・・それでこそライダーです」
役は神の言葉を聞き微笑んで言った。
「ところで外に出ませんか。ちょっと暑いですし海でも見て涼みましょう」
「あ、いいですね」
神は役の誘いに乗った。そして二人は旅館を出て海に向かった。
夜の海は黒かった。昼の青と銀の海もいいがこうした静かな海もいい。二人は砂浜の上を歩いていた。
「こうした静かな海もいいですね」
役は神に対して言った。
「ええ。静かで。それでいて潮騒の音が聞こえてきますし」
波が打ちつける音が聞こえてくる。遠くには対岸の民家の光が輝いている。
「光が多いですね。案外民家があるんだな」
「あちらは呉ですか。あそこは結構大きい街ですからね」
神が役に対して言った。呉は広島県の中でもかなり大きな都市である。かっては海軍の基地があり今は海上自衛隊の基地がある。軍港の街として栄えてきた歴史がある。
「呉にも何回か行った事がありますけれどね。いい街ですよ」
神は言った。
「新米の自衛官の人がセーラー服で歩いていて。それが赤い煉瓦によく合うんですよね」
目を細めている。その光景を思い出しているのだろう。
「夜になると汽船の音がして。それを酒場で聞くんですよ。堪えられませんよ」
「ほお、それは良さそうですね」
役もその話に興味を持ったようである。

「港に行くと自衛隊の船が見えるんですよ。潜水艦もあるし」
「あそこは大きな軍港ですからね。大和が作られた程の」
「はい。よくご存知ですね」
大和は第二次大戦の時の有名な戦艦である。巨大かつ美しい姿をしていた。おそらく今までの軍艦の中で最も美しいものであっただろう。今は沖縄の海に眠っている。
「今はあんな大きな船はありませんけれどね。それでも多くの軍艦がありますよ」
神は楽しそうに言った。まるで子供の様に無邪気な顔である。
「ほう、それだけあるのか。それは沈めるのが楽しみだな」
何処からか声がした。
「何っ!?」
二人はその声に身構えた。そして辺りを見回す。
「バダンかっ!?」
「いかにも」
声がした。そして海から複数の影が現われた。
「神敬介、そして役清明か。はじめまして、と挨拶をしておこうか」
その影の中央にいる男が言った。
「バダン改造人間の一人カニロイド、貴様を倒す男の名だ」
彼は不敵に笑ってそう言った。
「ほう、カニロイドか。一連の沈没事件は貴様の仕業だな」
「その通り」
カニロイドは言った。その間にもジリジリと間合いを詰めてくる。

海魔泳ぐ海その五

「瀬戸内の安全を脅かし船の行き来を止める。そして日本の経済を破綻させる為にな」
「ほほう、考えたな。だが俺達に見つかったのが運の尽きだったな」
神も身構える。その目が油断なく光る。
「それはどうかな。俺は逆に運がいいと思っているのだ」
「何っ！？」
「貴様の首を偉大なる我等が首領に捧げる事が出来るのだからな」
彼はそう言うと両手を掲げた。するとその手が赤い鋏になった。
そして全身が変化していく。脇からも足が生え背中から巨大な鋏が生える。皮膚が甲羅になっていく。
「・・・・・それが貴様の姿か」
「そうだ、この素晴らしい姿を冥土の土産に覚えておけ」
彼はそう言うと口から泡を吐き出してきた。神と役はそれを左右に跳んでかわした。
「御前達は役をやれ。俺は神敬介を倒す」
「ハッ」
戦闘員達はそれに応えた。そしてその言葉通り役に向かっていく。
「フフフ、行くぞ神敬介よ」
彼はそう言うと間合いを詰めてくる。そして鋏を振りかざした。
「ムッ」
神はそれをかわした。次々に繰り出される四つの鋏をかわす。
だがそれにも限界がある。彼は砂浜の松の木の前にまで追い詰められた。
「どうした、もう逃げ場所は無いぞ」
カニロイドは笑った。残忍な笑みであった。
「これで終わりだ、死ねぇっ！」
背中の巨大な二つの鋏を突き立てる。それは恐ろしい唸り声をあ

げて神に襲い掛かる。
今まさに貫かれんとするその時であった。彼は右に跳んだ。
「クッ！」
鋏は松の木を打ち砕いた。木は真っ二つになって折れた。
「何処だっ、神敬介！」
辺りを見回す。だが彼の姿は見えない。
「こっちだ」
それは海の方から聞こえてきた。カニロイドはそちらへ振り向いた。
そこに彼はいた。だが彼は神敬介ではなかった。
銀の仮面を被ったカイゾーグ、仮面ライダーエックスがそこにいた。
「そうか、変身したのかエックスライダーよ」
カニロイドは岸辺に揚がってくるエックスライダーを見据えて言った。
「そうだ、貴様を倒す為にな。行くぞっ！」
彼はそう言うと腰からライドルを引き抜いた。そして前でエックスの文字を描いた。
カニロイドの背中の鋏が再び襲い掛かる。エックスライダーはそれをライドルで受け止めた。
「させんっ！」
エックスライダーは突進した。そしてカニロイドの胸へ切りつける。
だがそれは効かなかった。ライドルは鈍い音を立てて弾き返されてしまった。
「甘いな」
カニロイドはそれを見て笑った。そして両手の鋏で切りつけてきた。
「ムッ」
エックスライダーは後ろに跳んだ。間合いが再び開いた。

「俺はカニの改造人間だ。その程度の剣が通用すると思ったか」
彼はそう言って笑った。だがエックスライダーは冷静なままである。
「それはどうかな」
彼は不敵な声で言った。
「何っ！？」
その時だった。カニロイドの胸から青黒い血が噴き出てきた。
「これは・・・・・・」
「ライドルを甘く見てもらっては困るな。例え鋼であろうが両断する」
「・・・・・それに強化されているようだな」
カニロイドは冷静に言った。
「気付いたか」
「気付くも何もこの切れ味が全てを物語っている。俺も甘く見てもらっては困るのだ」
「俺の事も調べていたのか」
エックスライダーは怪人に対して問うた。
「貴様のデータはこれまでの戦いから調べてある。無論他のライダー達もな」
怪人は傷に泡を付けた。すると傷口が泡でふさがれていく。
「だが今回は俺が油断した。貴様の勝ちということにしておこう」
怪人はそう言うと間合いを離した。
「すぐに来る。その時が貴様の最後だ」
怪人はそう言うと海の中へ飛び込んだ。戦闘員達もそれに続く。
「行ったか・・・・・」
エックスライダーはそれを見送った。あえて追おうとはしなかった。
「やはりいましたね、バダンの改造人間」
役が彼のところへ来て言った。
「ええ、中々切れる奴みたいですね」

エックスライダーは怪人達が消えた海を眺めながら言った。海は怪人達の姿をその中へ消してしまっていた。

村雨と博士は東京に入った後城南大学に向かっていた。

「さて、もう少しだな」

博士は辺りを見回しながら言った。

「道に詳しいようだな」

村雨は博士に言った。

「ああ、通っていた大学だからね。それでも昔と比べて道が随分変わってしまったなあ」

博士は車を運転しながら言った。

「そうか。博士の通っていた大学なのか」

「ああ。それからイギリスに留学したりしていたけどね。やっぱり僕の母校はあの大学さ」

彼は懐かしさに浸る顔で言った。

「・・・・・嬉しそうだな」

村雨はそんな博士の横顔を見て言った。

「ああ。嬉しいさ。だって久し振りに母校に行くのだから」

「昔の事を多い出すのはそんなに嬉しいのか」

「うん。以前の楽しかった思い出だからね。勿論辛い事もあったけれど人は楽しい事のほうをよく憶えている。だからそれを思い出すのは楽しいんだ」

博士は目を細めて言った。

「そんなものか」

村雨は彼を見て言った。

「君も記憶を取り戻せばわかるよ。過去の持つ意味が」

博士は顔を真摯なものにして言った。

「過去があるから現在も未来もある。過去を知っているから人はそれを思い出し懐かしみ教訓に出来るんだ」

「そうなのか」

村雨にはその言葉の意味がよくわからなかった。彼は過去の一切

の記憶を持たないからだ。

「村雨君」
博士はここで彼に対して言った。
「過去を受け入れる事が出来るか」
「？」
彼はその言葉の意味がわからなかった。
「君の過去は他の人とは違う。あまりにも過酷な過去だ。それでも君はそれが欲しいか」
「・・・・・・・・・・」
村雨は自分の過去を知らない。だから博士が言っている意味も理解出来ない。だが博士が自分に重大で深刻な決断を迫っている事は理解出来た。
「それが君に激しい怒りや憎しみ、そして哀しみを与えようとも君は耐えられるか。そしてそれに心を奪われないでバダンと戦っていけるか」
「・・・・・・・・・・」
その言葉の意味はわかった。彼は村雨が自らの記憶を知ることによりその心を負の感情で支配される事を恐れているのだ。
「・・・・・・それはよくわからない」
村雨は答えた。
「怒りは知っている。だが憎しみも哀しみも知らない。俺はその二つの感情がどういったものなのかは知らない。だが博士の口調からするとそれはあまりいい感情ではないようだな」
「・・・・・・少なくとも憎しみはね。それに捉われていたライダー達も多かったが」
「・・・・・・そうか。ライダー達はその感情を知っているのか」
かって両親と妹を殺された風見志郎、陥れられ右腕を自分を慕う部下達を失った結城丈二、父を殺された神敬介、自分を育ててくれ

たバゴーを殺されたアマゾン、友を殺された城茂、自らの夢を壊された沖一也、誰もがそうであった。本郷猛や一文字隼人もショッカーのエゴにより自らを人でないものに変えられている。筑波洋も友を殺されている。彼等も最初は憎悪に心を支配されていたのだ。

「しかし彼等はそれを克服した。そして本当の意味での正義の戦士になったのだ」

「・・・・・・憎しみとやらに捉われては本当の意味で正義の戦士、仮面ライダーにはなれないのか」

「そう、何故なら憎しみは愛と対極にあるからね」

「愛と・・・・・・・・・・・」

村雨はその言葉に反応した。

「彼等は戦ううちに愛を知った。そしてそれを源として戦っているんだ。憎しみなんかよりもっと大きくて素晴らしい力を得てね」

「そうか。ライダーは愛で戦っているのか」

「そうだ。君もいずれわかるよ。君もまたライダーになろうとしているのだから」

「・・・・・・・・・・」

村雨は再び黙ってしまった。博士の言葉が心に残ったからであった。

「俺もライダーになろうとしているのか。この俺が」

「そうだ、もうすぐ君は十人目のライダーになる。そしてバダンの野望を防ぐんだ」

「ああ・・・・・・」

村雨は答えた。だが確かな感触は無い。博士の言う通りライダーになれるのか、それは時の女神達のみが知る事であった。

カニロイドと夜の海辺での戦いの後神敬介と役清明はさらに捜査を続けた。今度は船ではなく瀬戸内の全ての島をであった。

それは何故か。ここの何処かにあるバダンの基地を捜し当てる為である。

海辺での戦い以降バダンが起こした海難事故はなりをひそめてい

る。彼等は狙いを船から神達に変えてきていた。
「それでも襲撃は全く無いな」
「おそらく隙を窺っているのでしょう、油断は禁物です」
小型のクルーザーの上で役は神に対して言った。
「まあそうでしょうね。連中の事だ、多分この海の何処からか俺達を見張っているんでしょう。隙あらば襲わんと」
「はい。ですから旅館を引き払いこのクルーザーを拠点にしたのです」
役は毅然とした声で言った。
「しかしつらくはありませんか？」
神は役に尋ねた。
「何がです？」
役はキョトンとして答えた。
「船の暮らしがですよ。揺れるし何かと不自由はあるし。俺は元々こういうのには慣れてますけれど役さんにはつらいんじゃありませんか」
「それなら心配ご無用です」
役は笑って答えた。
「幸い船酔いしない体質でして。それにこうした生活も経験があるので」
「そうですか。それならいいです」
神は安心して言った。だが心に引っ掛かるものがあった。
「それを一体何処で経験しているのだろう」
彼は長野県警に勤めていた。しかも生まれも育ちも長野だという。それならば船の上での暮らしなぞ滅多に経験しない筈である。それがどうして。
「着きましたよ」
役が言った。目的地である小島に到着した。
「では行って来ます」
「はい」

神は島に上陸した。役が船に残る。
数時間経って彼は戻って来た。結果は、と聞かれ首を横に振った。
この島にはなかった。
彼等はこうして島を一つ一つ虱潰しに捜していった。海の底にも潜って調べた。だが手懸かりは一行に掴めない。

海魔泳ぐ海その七

「このままじゃラチがあきませんね」
夜釣った魚を刺身にして食べながら神が言った。
「確かに。瀬戸内はただでさえ小島が多いですしね」
役もその言葉に同意した。その手には缶ビールがある。
「ただ少し絞れてきました」
「？何です？」
役はその言葉に耳を傾けた。
「海底に基地は造っていないようですね」
「何故それがわかりました？」
「海流ですよ」
神は言った。
「この瀬戸内は小島が多く灘や海峡も多いです。その為海流は複雑なものになっています。その為海から出ての移動は困難なものになります。ですから海底に基地は無いでしょう」
「成程」
役はその言葉に頷いた。
「本州か四国本土にあるとは考えにくいです。両方共小島に比べて人口が比較的多いですし。発見されたら連中にとっても何かと不自由でしょう」
「確かに。すぐに我々が向かいますからね」
役は頷いた。
「そして小島にしても人のいる島は考えられません。おそらく無人島であるかと。それも規模が大きめの。そうするとかなり限られてきますよ」
「そうか、その島を一つずつ調べていけばいいのですね」
「はい。それもその基地があるであろう島は地域も限られています」
「この瀬戸内の中でも？」

「そうです。事故が起こった場所を見て下さい」
彼はそう言うと一枚の地図を取り出した。そこにはバダンが沈めた船の場所に全てバツの印が書かれていた。
「ほら、限られているでしょう」
「・・・・・確かに」
事故が起こっているのは小豆島から屋代島までであった。
「おそらく連中はこの地域に基地を置いている筈です。それも一つ。既に捜した島は消えますからこれはかなり限られてきますよ」
「そうか、それではすぐにはじめましょう」
「それは明日の朝から。今調べても夜の闇でよく見えませんよ」
「そうでしたね、ははは」
いつもの役とは少し様子が違う。どうも酒が入ると明るくなるようだ。
神の言葉通り翌日の朝から二人は捜査をはじめた。目星をつけた島を一つずつ調べていく。
「そうか、奴等絞ってきたか」
カニロイドは基地の指令室で偵察に出ていた戦闘員からの報告を受けて言った。
「如何致しましょう」
戦闘員の一人が尋ねた。
「そうだな・・・・・」
彼はその言葉を聞いて思案した。暫く部屋の中を歩き回った後言葉を発した。
「こちらから出向いて消すか」
彼はそう言うとモニターを見た。そこにはクルーザーに乗る神と役がいた。
「丁度厳島の近くか。面白い場所にいる」
彼はそう言うとモニターを切らせた。
「あの島にはこの国の海の神々が祭られていると聞くが」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。

「あの男をその生け贄にしてやろう。いや、偉大なる我等が神への生け贄か」
彼の元の国の宗教とは異なる考えをあえて言った。それは彼が最早その国の者、いや人ではないことを現わしていた。
「行くぞ、奴等を今度こそ倒す」
「ハッ」
彼等は基地を後にした。そして神敬介を倒すべく出撃した。
神と役は厳島の近くの島を捜索し終えた。そして島を離れた。
「ここでもありませんでしたね」
役はクルーザーの上で島から戻って来た神を迎えつつ言った。
「ええ、けれどこれでまた一つ絞れましたね」
神は彼に対して笑って言った。
「ええ。残るは僅かです」
「そうですね。あとは・・・・・」
神は地図を広げた。
「二つ三つです。いよいよ連中の息の根を止められますよ」
「はい、行きましょう」
二人はクルーザーのエンジンを入れた。そして海へ向かって進んでいった。
海は青い。果てしなく青い。その雄大な景色はそれだけで見る者を魅了する。
「それにしても綺麗ですね」
役はそれを見ながら目を細めて言った。
「ええ。青い海に緑の島。まるで神が描いたみたいな光景ですね」
神もそれに対して言った。
「俺が水産大学に入ったのはこの景色をずっと見たかったからなんですよ」
「ほう、そうだったんですか」
「ええ。船に乗って海を見ていたい。だからこそ入ったんです。将来は漁師にでもなるつもりでした」

「漁師ですか、神さんが」
役はおかしそうに言った。
「あれっ、変ですか？」
「ええ、まあ。どちらかというと船長のほうが向いているかな、と思いまして」
「よく言われますけどね。ただそっちのほうが海を間近で見られますし」
「成程、それで漁師ですか」
「はい。まあ今はこうやってライダーになりましたが」
「はい・・・・・・」
役はその言葉に言葉を曇らせた。
「おっと、それは別に哀しくはないですけどね。こうして海を見れるんだし。ただ戦いが無くてずっと海を見ていたいな、と」
「それはバダンを倒してからですね」
「はい」
目標とする島まであと一時間のところまできた。すると海面に何かが浮き出てきた。
「海豚？違うな」
神が覗き込んだその時だった。それは不意に船の上に飛び上がってきた。
「ムッ！」
それはバダンの戦闘員であった。次々に船の上へ飛び上がってくる。
神と役は操縦を止め戦闘員達に立ち向かった。狭い船の上で戦いが始まった。
二人は戦闘員達を次々と倒し海の中へ落としていく。対する戦闘員達は数を活かしきれず倒されていく。
「カニロイド、何処だっ！」
神は叫んだ。その彼の足首を誰かが掴んだ。
「うぉっ！？」

それは倒れていた戦闘員の手首であった。神はそれによりバランスを崩し海に落ちた。

「神さんっ！」

役が叫んだ。だがその彼も戦闘員達の相手に忙しく彼の救出には向かえない。

海魔泳ぐ海その八

海に落ちた神を刃が襲う。それはカニロイドのものであった。
「チィッ」
それはかわされた。見失った間に前から何かが切りかかってきた。
「来たな」
そこにはエックスライダーがいた。海中で二人は対峙した。
「行くぞっ」
エックスライダーはライドルを手に向かってきた。流石はカイゾーグである。水中であろうともその動きは陸上にいる時と全く変わりがない。
だがカニロイドもそれは同じである。たくみにそのライドルをかわす。
背中の鋏を繰り出す。しかしそれはエックスライダーに見切られていた。
エックスライダーはその鋏を見た。そしてその甲羅の間の節に目をやった。
「それだっ！」
節へめがけライドルを振り下ろした。鋏が切断された。
「グォッ」
鋏は傷口から青黒い血を流しつつ海の底へ落ちる。カニロイドはそれを見て形勢不利を悟った。
「勝負はお預けだっ」
彼は撤退した。戦闘員達もそれに続く。
「待てっ」
エックスライダーも追おうとする。だが間に合わない。怪人達は素早く海の中に消えた。
「さて、ここまで来れば心配は無いな」
カニロイドは丘へ上がり後ろを振り向きつつ言った。戦闘員達が

それに続く。
「だがすぐに追って来るな。すぐに迎え撃つ準備を進めるぞ」
「生憎だがその必要は無い」
何処からか声がした。
「その声はっ！」
声のしたほうを見た。左手だ。そこには大きな岩がある。声の主はその上にいた。
「神敬介、何故追い着いた・・・・・・」
カニロイドは彼を見上げて問うた。
「これの存在を忘れていたようだな」
彼は笑って言った。それに応えて一台のマシンが彼の前に走ってきた。
「そのマシンは・・・・・・」
それはクルーザーだった。エックスライダーの愛車である。
「クルーザーは改造されその速度を大幅に上昇させた。特に空中、水上での速度が大幅にな。名付けて『クルーザーD』だ」
「そうか、マシンまで改造していたのか」
「その通り、それに気付かなかったのは迂闊だったな」
「ぬうう、だがまだ敗れたわけではないぞ」
カニロイドの言葉に呼応して戦闘員達が岩を取り囲んだ。側にあった岩が開き戦闘員達が姿を現わす。
「やはり出て来たな」
神はそれを見て言った。
「ならば・・・・・・行くぞ！」
腰にベルトが現われた。そして変身ポーズをとっていく。

大変身

両手を垂直に上へ上げる。そしてそれをゆっくりと真横へ開いていく。
手首と足首を黒い手袋とブーツが包んでいく。身体は銀のバトル

ボディに包まれる。
胸が赤くなる。
エーーーーックス！
右手を左斜め前へ突き出す。左手は拳を作り脇に入れる。
顔の右半分を銀と黒、紅い瞳の仮面が覆う。そしてそれは左半分も覆った。

腰のベルトが光る。そしてそれは彼の全身を包んだ。
仮面ライダーエックスである。彼は腰からライドルを引き抜くとそれで前にエックスの文字を描いた。
「行くぞっ！」
彼は跳躍し敵の中に跳び降りた。戦いがはじまった。
「やれっ！」
戦闘員達はカニロイドの指示のもとエックスライダーに襲い掛かる。その手には銛がある。
激しい打ち合いであった。エックスライダーはライドルをホイップから太いスティックにチェンジしそれに対抗する。
やはりライドルの強さが際立っていた。戦闘員達の銛をものともしない。
戦闘員達は次々に現われるがものの数ではなかった。エックスライダーは跳躍するとライドルで大車輪をし戦闘員達に蹴りを入れる。
次第にその数を減らしていく戦闘員達。そこに彼等にとってまた厄介な相手が現われた。
「奴まで来たか・・・・・」
カニロイドは遠くから聞こえて来る波を砕きながら進んで来る音を聞いて舌打ちした。小型のクルーザーである。そしてそれには役が乗っていた。
役は船から飛び降りるとすぐさま戦闘に参加した。その古武術で戦闘員達を退けていく。
「役さん、ここは俺にまかせて基地の中へ」

「わかりました。何処ですか」
役はエックスライダーの言葉に頷いた後尋ねた。
「あの岩です。横に押せば開きます」
彼は戦闘員達が出て来た岩を指差して言った。戦闘員達が出て来るん様子も見ていたのだ。
「わかりました」
彼はすぐに了解して動いた。そして阻もうとする戦闘員達を退けて岩の中へ入って行った。
「くっ、しまった・・・・・・」
カニロイドはそれを見て再び舌打ちした。だがもう既に遅かった。
「こうなれば貴様だけでも倒してやる。行くぞっ！」
戦闘員達も既にその数を大きく減らしていた。その僅かな者達も倒された。残るはカニロイド一人だけであった。

海魔泳ぐ海その九

「来いっ！」
エックスライダーはライドルを構えた。見れば彼に先程斬られた鋏からまだ血が出ている。
だがその傷口が急に塞がってきた。そしてそこから新たな鋏が出て来た。
「ムッ」
エックスライダーはそれを見て警戒した。それに対してカニロイドは満面の笑みを浮かべた。
「フフフ、ようやく再生したようだな」
「どういう事だ」
エックスライダーは彼に対し問うた。
「俺には驚異的な再生能力があってな、手足が何度斬られてもそこから再び生えてくるのだ」
「何っ、それもバダンの力だというのか」
彼は怪人に対して問うた。
「そうだ、これも偉大なるバダンの力。さあエックスライダーよ、その力に屈するがいい！」
その背中の鋏をエックスライダーへ切りつけた。彼はそれをライドルで受け止めた。
「クッ！」
しかしその力は絶大だった。彼は吹き飛ばされ岩に叩き付けられた。
「まだだ、このカニロイドの力はこんなものではないぞ」
カニロイドは泡を噴いた。彼はそれを横に跳んでかわした。
それと同時に斜め前へ突進する。そして左手でライドルを振るった。
「喰らえっ！」

しかしカニロイドはそれを左の鋏で受け止めた。ライドルは弾け飛び回転しながら空に舞う。そして地に落ちて転がった。

「グッ・・・・・・」

「これで得物は無くなったな」

カニロイドは地に転がり動かなくなったライドルを見て笑った。怪人らしく酷く残忍な笑みであった。

優位を確信したカニロイドは攻勢の手をさらに強めた。四つの鋏でエックスライダーに襲い掛かる。

エックスライダーはそれに対して防戦一方であった。次第に追い詰められていく。

「どうした、もう後はないぞ」

背が岩に着いた。逃げ場所は無かった。

「ムウウ・・・・・・」

カニロイドは四つの鋏をゆっくりと構えた。そしてそれを全てエックスライダーに向けた。

（まずい、このままでは・・・・・・）

エックスライダーは迫り来る四つの鋏を見ながら考えていた。これをまともに受けては命が無い。

（だがどうすれば・・・・・・）

最早退けない。後ろは岩である。鋏は上と横から迫って来ている。

（上と横から・・・・・・。そうか！）

エックスライダーは鋏の動きを全て見切った。そして彼は動いた。前に跳んだ。そして怪人の身体にしがみ付いた。

「ウォッ！？」

そして身体を捻り怪人と位置を変えた。怪人が岩を背にする形となった。

「喰らえっ！」

エックスライダーは叫んだ。そして怪人を両手で掴んだまま後ろへ身体を倒した。

同時に怪人も倒れた。だが彼は頭から倒れた。脳天が地面へ叩き

付けられる。
そのまま地面を転がる。そして怪人は脳天と腰をしたたかに打ち付けられた。
エックスライダーは怪人を放り投げた。そして彼自身も跳んだ。
宙に舞う怪人へ突き進む。蹴りを繰り出した。
「大回転地獄車ーーーーッ！」
蹴りが怪人の胸を直撃した。それを受けた怪人は地面へ叩き付けられる。彼は鈍い音と共に地に落ちた。
「グググ・・・・・」
かなりのダメージだった。しかしそれでも立ち上がった。
「だ、大回転地獄車か・・・・・」
これ以上の戦いは無理であった。人間の姿へ戻りながら呻き声を出す。
「そうだ。貴様のように堅固な鎧に覆われた怪人にはおあつらえ向きの技だ」
エックスライダーは着地して言った。
「確かにな。この勝負、最後まで俺の負けだ」
カニロイドは瀕死の身体をなんとか立たせながら言った。
「だが俺にも意地がある」
カニロイドはエックスライダーを睨み付けて言った。
「俺は海に生まれ育ち海の力を得た改造人間、陸では死なぬ」
そう言うと海辺のほうへ後ろ向きに歩いていった。
「俺が死ぬ場所はただ一つ、海のみだ。この雄大なる大海原こそが俺の墓場だ！」
彼はそう言うと跳躍した。
「また会おう、エックスライダーーーーッ！」
遠くの海で大きな爆発が起こった。カニロイドはこうして倒れた。
「自らの愛する海を死に場所に選んだか。敵ながら見事な奴だ」
エックスライダーはその高く上がった水飛沫を見ながら言った。
こうして瀬戸内の戦いは終わった。

「そうですか、敵ながら潔い奴でしたね」
基地も破壊した。帰りのクルーザーの中で役は神に言った。
「ええ。その考えには俺も共感できますね」
神は言った。本心からであった。何故なら彼も海の男なのだから。
「そうですか。やはり」
役はその言葉を聞いて微笑んだ。
「では今から呉に行きましょう。そこで心ゆくまで勝利の美酒を味わうというのはどうですか」
「あ、いいですね」
神はその誘いに乗った。
「それでは」
役は舵を呉へ向けた。船はそれに従い進路を変えた。
それを遠くから見守る影があった。
「行ったか」
それは戦闘員であった。海の中から顔を出している。
「では今のうちに撤退するか」
別の戦闘員が顔を上げた。どうやらあの戦いでの生き残りのようだ。
「いや待て。カニロイド様のご遺体を回収せねば」
「それは既に別の者が向かった。もう発見している頃だろう」
「そうか。ではそちらへ向かい合流するとしよう」
「うむ。そして本部へ戻るとするか」
「ああ」
彼等は再び海の中へ沈んだ。そしてその中に消えていった。

海魔泳ぐ海　　完

2004・1・11

森に煌く刃その一

「どうだ、敬介の奴から連絡は入ったか？」
立花は店の裏のガレージでバイクの修理をしながらそこに来た純子に問うた。
「はい。瀬戸内のバダンの基地を壊滅させたそうです。今呉にいる、と仰ってました」
「おう、呉か。またえらく渋いところにいるな」
立花はその街の名前を聞いて声をあげた。
「呉って何かあるんですか？」
それに対し純子が尋ねた。
「おっ、知らないのか？呉っていえば軍港で有名だろうが」
「えっ、そうだったんですか？じゃあ横須賀みたいなところですか？」
「あそこまで垢抜けちゃいねえがな。まあ独特の風情があっていい街だぜ。純子も機会があれば行ってきたらいいんだ」
「それじゃあ機会があれば。けれどバダンを倒すほうが先ですね」
「そう、その通りだよ。やっぱり純子は違うよなあ、その真面目さをチコとマコに見せてやりたいよ」
「あら、お言葉ね」
そこにチコとマコがやって来た。
「どうせあたし達は不真面目ですよ」
二人は口を尖らせて言った。
「おいおい、そんなに怒ることはないだろ」
立花は二人を宥めるように言った。
「ふーーーんだ」
二人はツン、と拗ねている。そんな二人に立花は切り札を出した。
「わかったわかった、後でホットケーキを焼いてやるから機嫌を直

せ」
　ホットケーキを聞いて二人の耳がピクリ、と動いた。
「ホットケーキ？それはいいわね」
　まずは健啖家のチコが動いた。
「そうね、じゃあ勘弁してあげますか」
　マコも動いた。案外簡単に機嫌を直した。
「やれやれ。まあ敬介のほうも上手くいったし。後の連中はどうしている？」
「本郷さんと一文字さんは今千葉に行ってます。そこで滝さんと特訓中です」
「そうか、あいつ等らしいな」
　純子の言葉に立花は目を細めた。やはり付き合いが最も長いからこそか。
「志郎さんが今こちらにいます。丈二さんは城南大学で海堂博士達と一緒です」
「そうか、志郎がいるのか。それは心強いな。丈二もいるしもうすぐ敬介も帰って来る。また賑やかになるな」
　そして彼はまた尋ねた。
「他の奴等から連絡は入ってないか？」
「茂さんが大阪、洋さんが日本アルプス、一也さんが仙台におられます。どうやらバダンの影を確認したらしくて」
「そうか。ところでアマゾンは？」
　最後の一人の所在を問うた。
「それが・・・・・・」
　三人は急に口ごもった。彼からは一切の連絡が入って来ていないのだ。
「・・・・・あいつは機械とか苦手だからな。まあそのうち怪人をやっつけてこっちへふらりと戻って来るだろう。あいつはそういう奴だ」
　立花は苦笑して言った。

和気藹々とした喫茶アミーゴ。そこへ一両の軽トラックが近付いて来る。
「ちょっと喉が渇いたな。お茶にするか」
博士が村雨に言った。
「ああ」
村雨は素っ気無く答えた。二人は車を止め店に入った。
「いらっしゃい」
店では丁度立花がチコとマコにホットケーキを焼いていた。まさひことリツ子も遊びに来ていた。
「コーヒー二つ」
博士はカウンターの席に座るとメニューを見て注文した。
「はい」
リツ子がメニューを聞いた。そしてコーヒーが運ばれて来る。
「美味いな」
博士はコーヒーを一口飲んで言った。
「そうでしょう、おじさんのコーヒーは評判なんですから」
リツ子が目を細めて言った。
「おいおい、褒めたって何も出やしないぞ」
立花が言った。丁度ケーキを焼き終え二人に出しているところである。
「何か雰囲気のいい店だな」
博士はその光景を見て言った。
「ああ。笑いがある場所というのはいい」
村雨も言った。博士が時間をかけて飲んでいるのに対して彼はすぐに飲み干した。感覚が常人とは異なっているのだ。
立花もそれに気が付いた。そしてライダー達に似ていると思った。
（まさかな・・・・・）
だが口には出さなかった。ただ彼を見ているだけである。
「どうした？」
村雨はその視線に気付いた。そして彼に話しかけた。

「あ、何でも。それにしてもお兄さんいい体格してるね。何かスポーツでもしていたの」
「それは・・・・・・」
「あっ、彼は昔ラグビーをやっていまして。それでこんな身体になったんです」
「へえ、ラグビーですか。またえらくハードなやつですね」
立花はその話を聞いて言った。だが内心違う、と思っていた。
「さて、もうすぐ城南大学だ。これを飲んだらすぐに行くか」
博士はコーヒーを口に入れながら村雨に言った。
「ああ」
村雨はそれに対し答えた。城南大学と聞いて立花の目の色が変わった。
「城南大学へ行くんですか？」
「ええ。何かご存知で？」
博士は立花の思わぬ様子にいささか驚いた。
「いえ、誰かに会うのかと思いまして」
「ええ、実はあちらにいる海堂博士に会いたいと思いまして。実は学生の頃からの友人でして」
「そうなんですか。博士の」
立花は妙に頷いて答えた。
「はい。若い時はよく一緒に朝まで飲みましたね」
彼は笑いながら言った。
「そうですか、実は私も海堂博士とは知り合いでして。よくこの店にも来てくれるんですよ」
「ほお、そりゃあ奇遇ですね」
博士は顔を綻ばせて言った。
「じゃあ彼には伝えておきますよ。行きつけの店に入ったと。美味いコーヒーの店を持っていていいなと」
「宜しくお願いしますよ。最近忙しいのかあまり来てくれなくて」
「わかりました、それでは彼に伝えておきます」

彼はそう言うと村雨と共にお金を払って店を後にした。立花は二人の後ろ姿を見ながら思った。

（まさかとは思うが・・・・・・）

バダンの刺客かもしれない、と感じた。あの若い男の気配は只者ではなかった。

森に煌く刃その二

「おい、志郎は今何処にいる？」
彼はリツ子とまさひこに問うた。
「ちょっと待って」
まさひこが奥に入っていった。そして暫くして戻ってきた。
「今新宿のほうにいるみたい」
「そうか。すぐに城南大学へ向かってくれるよう伝えてくれ」
「はい」
まさひこは再び奥に入っていった。
「とりあえず志郎と丈二の二人がいればどんな奴が来ても安心だな。しかしあの若い男」
立花の脳裏に村雨の姿が映った。
「ライダー達と雰囲気が似ているな」
それがどうしてなのか、彼は後に知ることとなる。
奈良県南部に大台ケ原という場所がある。木々が生い茂る標高一六〇〇メートルの高地であり世界有数の多雨地帯でもある。その自然は雄大で野生動物も多い。富士の樹海と並ぶ我が国の秘境である。
アマゾンはここにいた。そこで木々の間を走り回っている。
「おおいアマゾン、待ってくれよお」
後ろから声がする。見ると赤い身体の尖った口を持つ怪人がいた。目が細く左手はスコップになっている。かってゲドンにいたモグラ獣人である。
モグラの怪人であり地中を進む能力に長けている。その能力を生かしアマゾン抹殺の任務を与えられるが果たせず任務を放棄して逃亡した。
逃亡した彼を待っていたのは処刑であった。しかしそれをアマゾンに救われる。そして次第に彼に協力していくようになる。しかしガランダー帝国のキノコ獣人の毒カビを浴び倒れる。アマゾンは彼

の墓に復讐を誓った。
アマゾンが南米に戻った時である。彼はギギとガガの二つの腕輪に導かれある大きなピラミッドに辿り着いた。それはエジプトのものではなく中南米に残る古代文明のピラミッドであった。
彼はその中に入った。そしてその奥で一つの祭壇を見つけた。
彼がそこに入った時だった。声が聞こえてきた。
『汝、志半ばに倒れた友を救いたくはないか』
不思議な声だった。若いようでそれでいて年老いた男の声だった。
「御前、誰だ?」
アマゾンはその声の主に問うた。声は再び言った。
『我はこの祭壇に祭られている神。汝と共に戦い倒れた者を再びこの世に甦らせる為に現われた』
声はそう言った。
「共に戦い・・・・・・。それは『トモダチ』か」
『そうだ、友をだ』
声はアマゾンに答えた。
「トモダチを・・・・・・」
アマゾンが失くした友。それは彼しかいなかった。
「じゃあモグラを甦らせてくれ。モグラはトモダチ、アマゾンの大切なトモダチ」
『その者で良いな』
「いい、アマゾンまたモグラと会いたい」
アマゾンは顔を上げて言った。迷いは無かった。
『そうか』
声は言った。すると部屋の中を白く強い光が包んだ。
「うっ」
それは強い光だった。アマゾンは思わず目を覆った。
光が消えた。すると祭壇の上に横たわっている者がいた。
「あ・・・・・・」
そこには彼がいた。目を閉じているが胸が動いている。息をして

いるのだ。
『これでよいか』
声は彼に問うた。
「いい。有り難う」
アマゾンは声に対し言った。
『そうか。ならばこれからも二人で力を合わせて悪と戦うがよい』
声はそう言った。気配が何処かへ消えていくのを感じた。
「待て。一つ聞きたい」
アマゾンは声を呼び止めた。
『何だ』
声はその場に留まった。

森に煌く刃その三

「御前は・・・・・誰だ?何故アマゾンのトモダチ助けた?」
声はアマゾンに対して静かに答えた。
『私はケツアルコアトル。かってこの地の神だった。そして私は正義を司っていた』
「ケツアルコアトル・・・・・・」
アマゾンもそのナは知っていた。かってアステカやインカで信仰されていた神である。
『仮面ライダーアマゾンよ、正義の為、愛の為に戦うのだ。それが汝が与えられた使命だ』
「アマゾンの使命・・・・・・」
『そうだ、期待しているぞ』
声はそう言うと気配を消した。その後に緑の羽毛を残して。
「これはケツアルコアトルの・・・・・・」
ケツアルコアトルは緑の翼を持つ白蛇の姿をしている。人の姿になる時は髭を生やした白い肌の男になるという。
アマゾンはその羽毛を取った。それは左の腕輪に着けた。そして目覚めたモグラ獣人を笑顔で迎え彼を救ってきた頼りになる男である。
「モグラ、遅い」
アマゾンは彼のほうを振り向いて言った。その顔は微笑んでいる。
「そんな事8a・@を救ってきた頼りになる男である。
「モグラ、遅い」
アマゾンは彼のほうを振り向いて言った。その顔は微笑んでいる。
「そんな事言ってもおいらは本当は土の中を進むほうが得意なんだよ、森の中じゃ動きが遅いのも当たり前じゃないか」
「だからそれ速くする。そうすればモグラもっと強くなる」
泣き言を言うモグラ獣人に対して言った。しかし声は優しい。

「トホホ。まあしょうがないか。一緒に戦う為にわざわざ南米から来たんだし」
モグラ獣人は不平を言いながらもそれに従った。
「そう、動く。それでいい。モグラ動きがかなり良くなった」
「そうかなあ。けどアマゾンはもっと動きが速くなったな」
「それはこの腕輪のおかげ」
彼はそう言うと左手を指し示した。そこにはギギとガガ、二つの腕輪がある。
「二つの腕輪を付けているのか。そりゃ速いよ」
二人はそう言いながら木々の間を進む。どうやら特訓をしているらしい。
その二人を何かが見ていた。それは一匹の小さな蟷螂であった。
その蟷螂は何処か奇妙であった。外見は普通の蟷螂だがただジッとアマゾン達を見ているだけなのである。
そしてその場から消えた。まるで煙のようにその場から消え去った。
大台ケ原のある洞穴、その奥に何者かが蠢いていた。
それは戦闘員達であった。洞穴を改造して基地を造っていた。
そこにあの蟷螂が現われた。その複眼がピカッと輝く。
「戻って来たか」
戦闘員の一人がそれを手に取った。そして中へ入っていった。
基地の壁は洞穴そのままであった。鍾乳洞が垂れ下がり苔がある。
足下は少し湿っている。戦闘員はその中を蟷螂を手にしながら進んでいた。
右へ曲がる。そこを進むと指令室であった。
「蟷螂を持って来たのね」
そこには長身の女がいた。黒く長い髪と瞳を持つ長身の女である。
肌は白く透けているようである。整ってはいるが何処か陰惨な顔立ちである。アジア系のようである。青いアオザイを着ている。ズボンも青だ。

「ハッ、こちらに」
戦闘員は片膝を着き両手で蟷螂を差し出した。蟷螂は女の手の中に入った。
「どれ、見せて御覧。御前が見てきたものを」
女はそう言って微笑んだ。すると蟷螂の複眼が再び光った。
それと呼応するように女の目も光った。
彼女はその目に何かを見ていた。そして両者の目の光が消えると蟷螂は女の肩に止まった。
「ふふふ、よくわかったわ」
女はニヤリ、と笑った。
「アマゾンが現われたわよ、この大台ケ原に」
女の言葉を聞いて周りにいた戦闘員達がどよめいた。
「落ち着いて。アマゾンは一人、恐れる必要は無いわ」
女は戦闘員達を宥める様に言った。
「かってベトコンで女戦士として恐れられフランス、アメリカ、中国の軍人達から『密林の悪夢』と言われたハ・ティム・キム。・・・・・いえ、カマキロイド。その力見せてあげるわ」
女、いやカマキロイドはそう言うとニヤリ、と笑った。それはまるで死神のような笑みであった。

森に煌く刃その四

夜になった。アマゾンとモグラ獣人は食事を採っていた。その辺りにある木の実や蛇、虫等である。

木の実は生であるが蛇や虫には火を通してある。だが二人共別に生でも構わないようだ。あまり火を通さなくともそのまま口に入れ咀嚼している。

「美味いな、アマゾン」

「ああ」

二人は食事を採りながら楽しく談笑していた。

「しかしおいらの特訓もいいけれどこんなところで油を売っていて大丈夫なのかい？立花の親父さんに連絡も入れていないみたいだけど」

「アマゾン、機械苦手」

アマゾンはそれに対してボソッと言った。

「けれど携帯ですぐに入れられるじゃないか。そもそもここにバダンがいるとは思えないけどなあ」

「それは大丈夫」

アマゾンは首を縦に振って言った。

「大丈夫って・・・・・・。連絡が？バダンが？」

「両方」

アマゾンは自信に満ちた声で言った。

「連絡はいいよ。親父さんもまあしょうがないな、で済ませてくれるだろうし。けれどバダンはどうするんだよ」

「心配ない、バダンはすぐ来る」

「えっ！？」

モグラ獣人はその言葉に対して耳を疑った。

「バダンはアマゾンの命狙って来る。アマゾン奴等の考えている事わかる。だからそれは心配しなくていい」

「そんなもんか」
モグラ獣人はその言葉に首を傾げた。だがアマゾンは常人にはない脅威的な勘がある。ここはそれを信じるしかなかった。
二人は特訓を続けた。森の中を進むだけでなく川を泳ぎ地の中を突き進む。そして組み打ちもする。
「モグラ、脇が甘いっ！」
アマゾンがモグラ獣人の脇に爪を入れる。
「わっ！」
モグラ獣人は慌てて脇を左手でガードする。
だがそれはフェイントだった。アマゾンはそれを引っ込めると空いた左肩に噛み付いてきた。
「またやられたよ・・・・・」
モグラ獣人は思わず情けない声を出してしまった。
「気をつける。敵は待ってくれない。バダンの奴等ゲドンやガランダーよりも手強い」
「それはわかってるよ。アマゾンが苦戦したっていうし」
モグラ獣人はアマゾンに対して言った。
「けれどモグラ強くなっている。ここへ来る前とは見違えた」
「えっ、そうかなあ」
モグラ獣人はその言葉に素直に喜んだ。
「だから特訓のレベルもっと高くする。そしてもっと強くなる」
「ひいいいい～～～～っ」
モグラ獣人はその言葉に思わず悲鳴を挙げた。
かくして特訓は続いた。そしてある日川を泳いでいた時だ。
「ムッ！？」
アマゾンは何者かの気配を感じた。そして後ろにいるモグラ獣人を振り返る。
「わかってるよ、アマゾン」
モグラ獣人もそれを感じていた。二人は川の中に潜んだ。
「この辺りにいた筈だが」

そこへ戦闘員達がやって来る。辺りを見回し調べている。
「気をつけろ、奴は奇襲が上手い。いきなり襲い掛かって来るぞ」
戦闘員の一人が言った。他の者もそれに頷く。
「うむ。特に木の上が危ないな」
「いや、それよりもこの川の中のほうが。見たところ中もよく見えないしな」
「そうだな。用心にこしたことはない」
戦闘員達は川辺から身を離している。彼等とて馬鹿ではない。それなりに用心をしている。
だがそれ以上にアマゾンの奇襲は見事である。常に敵の意表を衝くのが彼のやり方だ。
「ムッ!?」
戦闘員達へ目掛け突き進んで来る一つの影。
「アマゾンかっ!?」
戦闘員達はそれを見て身構えた。
「いやっ、違うぞあれは・・・・・」
それはジャングラーであった。しかし予想より速度が速い。
「ウォッ!?」
戦闘員達はそれに吹き飛ばされた。左右に散り態勢が崩れた。
「ケケーーーーッ!」
そこへ川の中からアマゾンが飛び出て来た。二重の奇襲に戦闘員達は為す術も無く倒されていく。
「相変わらず見事な手際だな、アマゾン」
モグラ獣人も出て来ていた。そして戦闘員達を倒していた。
「それにしてもジャングラーの動きが速かったな。何か改造したのかい?」
「立花さん達改造してくれた。今はジャングラーGという」
「ジャングラーGか。確かに強くなったような名前だな」
「アマゾンこのジャングラーG気に入った。これからも一緒にやっていく」

「それはこのあたしに勝ってから言って欲しいわね」
不意に何処からか声がした。
「誰だっ！」
アマゾンとモグラ獣人が辺りを見回す。すると目の前に一人の女が現われた。
青いアオザイを着た女だ。険のある目でアマゾン達を見ている。
「あら、モグラ獣人も一緒だったのね。てっきり南米にいるとおもっていたけれど」
「おいらの名前まで知っているところを見ると・・・・・・。御前バダンだな！？」
女はその問いに意対して悠然と微笑んで言った。
「そうよ。バダンの改造人間の一人カマキロイド。よく憶えておいてね」
「バダンの改造人間・・・・・・。アマゾンを倒しに来たか」
アマゾンはカマキロイドの前に出て言った。
「そうよ。このあたしの手でね」
カマキロイドはそう言うと左手を刀のように振るった。するとその手は巨大な蟷螂の手になっていた。
「なっ・・・・・・！」
アマゾンとモグラ獣人はそれを見て思わず声をあげた。
「ウフフフフフ」
カマキロイドは笑った。そしてその鎌をもう一度振るう。

森に煌く刃その五

するとアオザイが徐々に変わっていく。青緑の機械と混ざった身体に。

顔もである。まず目が黄色い複眼になる。そして顔が人のものから蟷螂のものになっていく。

「さあ、行くわよ」

そこには人でない異形のものがいた。そしてアマゾンへ突き進んで来る。

まず左手の鎌を振るってきた。だがアマゾンはそれをかわした。そして反撃に移る。

「ケケーーーーッ！」

その両手の鰭で斬り掛かる。だがカマキロイドはそれを鎌で受け止めた。

「情報通りね。パワーアップしているみたいね」

カマキロイドは余裕をもって言った。その目が笑っている。

「けれどそれは計算通り。これはどう？」

そう言うと間合いを離した。そして後ろに跳びざまに鎌を振るった。

すると鎌ィ足が起こった。アマゾンに襲い掛かる。

「ガァッ！」

アマゾンはそれを鰭を振るって打ち消した。彼も鰭を振るって鎌ィ足を起こしたようだ。

「ふん、それがガガの腕輪の力の一つなのね」

カマキロイドはそれを見て笑った。尚も余裕の笑みを漂わせている。

「面白いわね、久し振りに楽しめる相手と出会えたわ」

怪人はそう言うと足をツツツ、と左へ滑らせた。

「場所を変えるわ。さあいらっしゃい」

そして森の中へ入っていった。
「アマゾン・・・・・・」
モグラ獣人がアマゾンに声をかけた。すこし心配なようである。
「モグラ、心配する必要ない。アマゾン勝って帰って来る」
彼はモグラ獣人に対してそう言うと森の中へ入っていった。
森の中は木々が鬱蒼と茂っている。アマゾンはその中を猿のように跳びながら移動する。
木の枝々の間を跳び移る。そして怪人の気配を探る。
(近い・・・・・・)
アマゾンは近くにその気配を感じた。その時だった。
鎌ィ足が襲ってきた。アマゾンはそれを前に跳びかわす。
咄嗟に木の上へ跳ぶ。そして辺りを見回す。
「ここよ」
不意に後ろから声がした。
振り返る。そこへカマキロイドの鎌が襲う。
「その首刈り取って偉大なる我が首領への捧げ物にしてあげるわ」
だがアマゾンはそれを屈んでかわした。そして足払いを仕掛ける。
「うっ」
カマキロイドはそれをまともに受けた。そして態勢を崩す。
アマゾンはそれを追う。そして右腕の鰭を振り下ろす。
「大切断!」
しかしそれは左手の鎌に受け止められてしまう。カマキロイドは落ちながらニヤリ、と笑った。
「甘いわね」
そして蹴りを放つ。それはアマゾンの腹を直撃した。
「ガハッ」
怯む。だがそれは一瞬だけだった。しかしその一瞬が効いた。
カマキロイドは無事着地した。アマゾンとは間合いが離れた。
アマゾンも蹴りのダメージから回復し態勢を整えて着地した。しかし間合いが離れたのは致命的であった。

「ヌッ・・・・・・」
間合いを詰めようとする。だがカマキロイドの動きはそれよりも僅かに速かった。
「ウフフフフ、これは楽しめそうね」
怪人は彼を見て不気味に笑った。
「すぐ殺してはつまらないわ。じっくり楽しまないと」
彼女はそう言うと木々の中に消えていった。保護色のようだが違った。どうも身体の配色が元々森の中に隠れ易いようだ。まさに蟷螂そのものであった。
「また会いましょう。そしてその時こそその首斬り落としてあげるわ」
そう言い残して消えた。気配もすぐに遠くへ消え去っていた。
「ウフフフフフフ・・・・・・」
笑い声だけが残った。アマゾンはそれを森の中に立ち聞いていた。
「カマキロイド・・・・・バダンの改造人間」
アマゾンは消えた気配を感じながらポツリと呟いた。
「アマゾンの命を狙うならいい。アマゾン必ず勝つ」
後ろから声がした。モグラ獣人の声だった。
「モグラ、来たのか」
アマゾンは後ろを振り返り言った。
「心配になって来たんだよ。けれど無事でよかったよ」
モグラ獣人は胸を撫で下ろしながら言った。

「大丈夫、アマゾン負けない。悪い奴等この世にいる限り」
そう言いながら変身を解く。緑の身体が次第に人のものに戻っていく。
「けれどもうモグラの特訓は出来ない。バダン来たから」
「ああ、それはわかってるよ」
モグラ獣人はそれに対し真摯な声で言った。
「カマキロイドか。これはまた厄介な奴みたいだなあ」
モグラ獣人は目の前に広がる深い木々を見ながら言った。その奥で怪人がこちらを見ながら残忍な笑みを浮かべているように感じた。
村雨と博士はようやく城南大学に入った。まずはトラックを駐車場に入れる。
「場所が空いていてよかったな」
そこは来賓用であった。博士はそこにトラックを入れるとホッとした顔で村雨に微笑んだ。
「ああ。それにしてもやけに広い場所だな」
村雨は大学の中を見回しながら言った。
「そりゃあね。我が国で一番のマンモス大学だし」
博士はニコリと笑って言った。
「この大学は大抵の学部があるよ。文学部に法学部、語学部に経済学部・・・・・。特に理学系が充実していてね」
「そうか、理学が強いのか」
かってこの大学で本郷猛も風見志郎も学んだ。とりわけ医学や工学の分野では名が知られている大学である。
「うん、かくいう私もここにいたしね。さあ医学部のほうへ向かおうか。確か海堂君はそこにいる筈だ」
二人は歩いていく。ふと女の子の学生達と擦れ違った。
「ねえ、さっきの人格好良くない？」

「うん、身体も大きいし顔も格好いいし。まるでアクション俳優みたい」
その声は村雨の耳にも入っていた。
「・・・・・俺の事か？」
村雨はその話を聞きながら首を傾げた。
「そうらしいな。確かに君は女の子にもてそうだ」
博士が彼のほうを見上げて微笑んで言った。
「もてる・・・・・何だそれは」
村雨は博士に問うた。
「まあ簡単に言うと女の子に人気があるということだよ。まあ悪いことではない。むしろ喜ばしいことだろうな」
「そうか」
村雨は博士の言葉に対して静かに頷いた。だが彼にとってそれが嬉しいかというとそうではなかった。
「さて、と。もうすぐ医学部の研究室だな」
二人はとある建物に入った。
そこは大きな病院だった。どうやら研究所と兼ねているようだ。
「中々いい設備が整っているな」
村雨は病院の中を見回しながら言った。
「ああ。日本でも有数の設備と人員を誇る病院かつ研究所だからね」
博士は中を進みながら言った。二人の脇を白衣を着た医者や看護婦が通り過ぎる。
二人は受付に来た。博士がそこを覗き込んだ。
「あ、伊藤先生」
若い看護婦が彼の顔を見て思わず声をあげた。どうもこの病院でも顔を知られているらしい。
「久し振りだね、かすみちゃん。今日は海堂君に用があって来たんだ。彼はいるかい？」
「はい、ええと・・・・・」
チラリ、と名簿を見る。

「はい、丁度今研究室におられます」
「そうか、有り難う」
博士はそう言うと村雨に顔を向けた。
「行こう、四階だ」
二人はエレベーターで四階に上がった。
「彼なら大丈夫だ。必ず君の記憶を取り戻してくれるよ」
博士はエレベーターの中で村雨に言った。
「記憶・・・・・。その人はそういったものの専門家なのか？」
村雨は博士に尋ねた。
「まあ専門といえばそうかな。何分色々とやっているからねえ」
「そうか」
彼は表情の無い顔で言った。博士はそれを見て彼に言った。
「記憶が戻ることがあまり嬉しくなさそうだね」
「そういうわけじゃないが。ただどうも実感が湧かない」
村雨はポツリ、と言った。
「俺はゼクロスとしてライダー達と戦った時からの記憶しかない。今の俺はその前どんな人間だったかを一切知らない。だが不思議なことにそれが苦しいとは思わない」
「そうか、・・・・・そうだろうな」
博士はその言葉に頷いた。何処か寂しそうである。
「しかし君が人間となるには記憶を取り戻さなくてはならない。そして君がバダンと戦うライダーとなる為にも」
「そうか・・・・・」
村雨はエレベーターの扉のほうを見ながら言った。その目は何かを考えている目であった。
「その記憶がどんなに辛く苦しくとも君は耐えると言った。人間になる為に。だがこのことだけは覚えてくれ」
「・・・・・何だ」
村雨は博士のほうへ顔を向けた。
「これも前に言ったがたとえどんな記憶であっても憎しみに心を捉

われてはならない。憎しみに心を支配されたら君はライダーではなく鬼になってしまう」

「鬼に・・・・・・」

鬼、それは博士から聞かされた。角を生やした異形の怪物で怪力を誇る凶暴で残忍な化け物だ。それはまるでバダンの改造人間のようであった。少なくとも村雨はそう感じた。

「いいか、これだけは忘れないでくれよ。憎しみだけは持たないでくれ」

「・・・・・・ああ」

だが博士はそう言いながらふと考えた。今までどのライダーも最初は憎しみに心を捉われていた。

森に煌く刃その七

（彼等も最初は憎しみからはじまった。しかし・・・・・・）
彼等はそれから愛を知り真の戦いに目覚めたのだ。
（彼ももしかすると・・・・・・）
しかし博士はその考えを脳裏から打ち消した。彼も憎しみの持つ恐ろしさ、醜さをよく知っているからだ。
四階に着いた。エレベーターの扉が開いた。
「行こう」
二人はエレベーターを出た。そして左に曲がる。
そこで白衣を着た若い男と擦れ違う。結城丈二だ。丁度今海堂博士の研究室から出たばかりである。
「んっ！？」
彼は村雨と擦れ違って何かを感じた。そして後ろを振り返る。
「あの男は・・・・・・」
村雨を見た。何処かで見たような気がした。
「いや、知らないな。気のせいか」
彼は村雨から視線を外した。そしてエレベーターへ入っていく。
「そろそろ風見が来る頃だな。案内してやろう」
彼はそう言うとエレベーターのボタンを押した。そして下へ降りていく。
二人は海堂博士の研究室の前に来た。そこで村雨はポツリと言った。
「中に二人いるな」
「二人？」
一人は海堂博士だ。だがもう一人というと誰だかわからなかった。
「まあいいや。さあ行こう」
そう言うとドアをノックした。どうぞ、という声がした。
扉を開ける。そこには海堂博士がいた。

「んっ、伊藤君じゃないか」
そこには旧知の親友がいた。彼の顔を見て思わず声をあげる。
「久し振りだなあ。何処に行ってたんだい」
「それは後で・・・・・・ん！？」
ふと海堂博士の向かいに座る男が目に入った。そこにいるのも彼がよく知る男であった。
「志度君も。日本に戻って来ていたのかい？」
「ははは、ちょっと付き合いでね。しかし君が来るとはね」
志度博士も旧友の顔を見て顔をほころばせた。
「丁度お茶を飲んでいたところなんだ。君もどうだい？」
二人はそう言うと一組のティーセットと陶器のポットを出してきた。
「済まない、もう一組出してくれ」
「おやっ、連れがいるのかい？」
二人はふと顔を上げた。
「うん、彼なんだ」
伊藤博士はそう言うと村雨を部屋に入れた。
「村雨、村雨良君だ。彼の事について色々と話したい事がある」
「村雨君！？」
海堂博士はその名に反応した。
「・・・・・・・・」
志度博士は黙っている。
村雨は二人に対して無言で頷いた。
大台ケ原においてのアマゾン達とバダンの戦いは続いていた。追い、追われる獣同士の戦いであった。
どちらかが一方的に追い追われる戦いではなかった。一方に隙があればもう一方がそこに襲い掛かる、肉食獣同士が互いに命を狙い合うような戦いであった。
「ケケーーーーッ！」
アマゾンが木の上から下を進む戦闘員に襲い掛かる。その戦闘員

は首筋に喰い付かれた。
「ケケッ！」
アマゾンはその首筋を噛み千切った。鮮血がほとばしり出る。
「チュチューーーーンッ！」
モグラ獣人もそれに続き木の上から戦闘員に襲い掛かる。そして左手のスコップで殴り倒す。
戦闘員達は左右に散ろうとする。だが二人の動きはそれよりも速かった。
それぞれ別方向に跳んだ。そして戦闘員達が円陣を組むより早く攻撃を仕掛ける。
戦闘員達は手に持つ鎌を振るう暇も無かった。瞬く間に全員倒されてしまった。
「今日の戦いは上手くいったな、アマゾン」
地下の広い空間でモグラ獣人はアマゾンに言った。
モグラは地下を掘り進んで生きる。そのモグラの力を持つ彼も地下で複雑に入り組んだ道と部屋から成るエリアを造りそこに潜み住んでいたのだ。
「うん、けれどバダンの奴等手強い。きっとまだまだアマゾン達を狙って来る」
アマゾンは木の実を食べながら言った。アケビのようである。

森に煌く刃その八

「そうだろうな。連中はゲドンやガランダーよりしつこいみたいだし。ここも見つかるかも知れないな」
モグラ獣人もそのアケビを食べながら言った。
「それは無いと思う」
アマゾンは言った。
「どうしてだ？」
モグラ獣人は彼に対し問うた。
「あいつは蟷螂の怪人。蟷螂は木の上にいる。土の中にはやって来ない」
「そうか、じゃあこの地下の道を使っていくか」
「それがいいと思う。相手の裏を衝くのも戦い」
アマゾンはそう言うと頷いた。そして二人は休息に入った。
「あの連中は何処にいるのだ」
戦闘員達が夜の森の中を進みながら忌々しげに言う。
「木の上にでもいるんじゃないか」
戦闘員の一人が上に生い茂る木の枝を見上げながら言った。
「確かにな。襲撃を掛けられるのはいつも上からだ」
別の戦闘員が言った。
「しかしいつも木の上にいるのか？何時寝ているんだ？」
他の戦闘員が疑問に思った。
「その時は何処かに潜んでいるんだろう。洞窟にでも隠れて」
「そうか。それじゃあ洞窟を一つ一つ虱潰しに当たってみるか」
「よし」
かくしてバダンはアマゾン達が潜んでいそうな洞窟を一つ一つ調べていった。だがその手懸かりは全く掴めない。
「戦況はどう？」
本拠地の作戦室においてカマキロイドは戦闘員の一人に尋ねた。

「思わしくありません。アマゾンライダー達の奇襲の前に一人また一人と倒されております。戦力は既に半分以下にまで落ちています」
「そう、半分以下に・・・・・・。辛いわね」
カマキロイドはその報告に表情を暗くさせた。
「しかしこの大台ケ原にいるのは間違いありません。いずれ尻尾を出すでしょう」
戦闘員はそんな彼女を励ますように言った。
「だといいのだが。相手はあのアマゾン、やはりやり方を変える必要がありそうね」
カマキロイドは腕を組んで言った。
「やり方を変える、と言いますと」
「偵察用の小型蟷螂の量を増やすわ。そしてこの大台ケ原全体に散らばせるの。そして連中の行動を始終監視するのよ。それこそ網の目のようにね」
彼女はそう言うとニヤリ、と笑った。
「アメリカ軍がかって我々にやった作戦だけれどね」
ベトコンの奇襲に悩んだアメリカ軍はベトコンに対し彼等が潜んでいるであろうジャングルに集音器をばら撒いた。そして彼等の動きを掴もうとしたのである。
「成程、そして隠れ家を見つけ出すのですな」
「そう、そして連中が休息を取っている隙に襲い掛かる。これなら問題無いわ」
カマキロイドの目が光った。そしてニヤリ、と笑った。
「アマゾンライダー、何処に隠れているかは知らないけれど」
彼女は言葉を続けた。
「いずれ網にかかる。その時が最後よ」
彼女はそう言うと指令室の扉を開けた。そして外へと出て行った。
彼女の言葉通り蟷螂が大量に放たれた。そしてアマゾン達を探る。
「頼むぞ」
戦闘員達は地を這う蟷螂を見下ろして言った。蟷螂はそれに応え

たのか静かに草の中に消えていく。
アマゾン達はすぐに見つかると思われた。だがそうはいかなかった。
「まだ見つからないのか」
暫くして戦闘員達が仲間内で話しはじめた。アマゾンは忽然と姿を消した。それにより損害は無くなった。
だがアマゾンの姿が見えないのでは同じ事であった。彼等は次第に焦燥感を募らせていった。
「ひょっとするともうここにはいないのではないのか」
「いや、この大台ケ原の何処かで我々の隙を窺っているのだろう」
彼等は噂し合った。鬱蒼と茂る木々の陰には何もいない。それがかえって彼等を不安にさせた。
「まずいわね、焦ってきているわ」
ゲリラ戦は精神戦でもある。神経をすり減らしそれに耐え切れなくなったほうが負けだ。
それはカマキロイド自身が最もよくわかっていた。伊達にベトナムのジャングルでフランス、アメリカ、中国といった名立たる強国達の精鋭を次々と屠ってきたわけではない。
アマゾンはこれを察していたのであろうか。そして姿を何処かへ消したのではないだろうか。
(だとすれば一体何処に)
カマキロイドは考えた。アマゾンは元々木の上やジャングルにおいての戦いに強い。だとすれば隠れるのは木の上である。そう、アマゾンならば。だが彼には今もう一人の同志がいる。
モグラ獣人、モグラの能力を持っている。
(モグラ・・・・・・)
モグラである。その時彼女はハッと気がついた。
(まさか・・・・・・!)
ベトコンは山の地下の隅々に穴を掘りその奥に基地を造った。そしてそこを拠点に穴から出て敵を神出鬼没の奇襲攻撃で悩ましてい

ったのだ。
彼女もそうやって戦った。そして粘り強く戦い勝利を収めたのだ。
(考えられるわ。それならあの神出鬼没の行動も理解出来る)
しかし一つ疑問がある。食糧はどうしているか。
(いや、それは事前に保存していれば問題無いわね。数には限りがあるけれど)
そして彼等はこの大台ケ原の地下で待っているのだ。彼等が疲れきるのを。そしてその時こそーーーー。彼女はそれを思うと戦慄を感じずにはいられなかった。
「全ての戦闘員を招集して」
彼女は傍らにいる戦闘員の一人に言った。
「全ての、ですか?」
その戦闘員は思わず問い直した。
「そう、全てよ」
彼女は険しい顔でそう言った。
すぐに全ての戦闘員が基地の会議室に集められた。彼女は彼等に対して言った。
「アマゾンライダーは下にいるわ」
「下、ですか!?」
戦闘員の一人が思わず声をあげた。
「そう、下よ」
彼女は頷いて答えた。
「地下にいるわ。そしてそこに潜んで待っているのよ。我々が疲れていくのを」
その言葉に戦闘員達は騒然となった。

森に煌く刃その九

「だけどそうはさせないわ。何としてもその前に奴等を倒す。その為には」

彼女は会議室のモニターを写した。そこには複数の映像が映し出されている。全て蟷螂達が見ているものだ。

「必ず探し出す」

彼女は強い口調で言った。そして戦闘員達に言った。

「それまでは動かないわ。全員ここに待機して鋭気を養う事。いいわね」

「ハッ！」

戦闘員達は一斉に敬礼した。そしてその場を去った。

それから数日経った。やがて蟷螂のうち一匹が滝におかしな場所を見つけた。

「ここは？」

そこは滝に隠れた入口になっていた。その奥は洞窟になっている。

「もしや・・・・・・」

ここならば外からは見えない。そして滝から水に入り魚を獲る事も可能である。

「怪しいわね」

すると別の蟷螂のモニターからも映し出された。

それは一つの洞穴だった。そこもまた奥へと続いている。

そしてその洞穴には貴重なものがあった。果物の皮だ。

「これはもしかして・・・・・・」

それを見た戦闘員の一人がカマキロイドに対して言った。

「ええ、あり得るわね」

カマキロイドはその戦闘員に対して言った。食べかすではないか、と。

「しかし・・・・・・」

一つ疑問に思った。このような見つかり易い場所にわざわざ捨てるであろうか。地に掘って埋めればそれで済むというのに。

そしてアマゾン達ではなく熊や狐の可能性もある。だとしたらこちらが下手に動いてそこをアマゾンに付け込まれる可能性もある。

「どうしたものか・・・・・・」

カマキロイドは思案した。その時別の蟷螂がもう一つの映像を映した。

そこは木の根の下であった。そこに穴熊の穴らしきものがあった。そこはかなり奥深くまで続いている。穴熊の穴にしては深過ぎる。そして肝心の穴熊もよく一緒に住んでいる狸も住んではいなかった。

「ここはもしかすると・・・・・・」

カマキロイドは今度は戦闘員の言葉に大きく頷いた。

「もしかするわね。よし、遂に尻尾を掴んだわよ」

そう言うと後ろに控える戦闘員達のほうを振り向いた。

「全員出撃！半分は滝の入口から、そして残る半分は私と共にあの木の下の穴から行くわよ！」

「ハッ！」

戦闘員達は敬礼した。そしてカマキロイドも怪人の姿をとった。

「アマゾンライダー、その暗い穴を死に場所とするのね」

彼女はそう言うと凄みのある笑みを浮かべた。そして指令室を出た。

カマキロイドの言葉通りバダンは戦力を二手に分け穴に忍び込んだ。一隊は滝の穴より、そしてカマキロイドが率いるもう一隊は木の下の穴より侵入した。

「中は広いですね」

木の下の穴に潜入した戦闘員の一人が言った。入口は狭かったがそこを通り過ぎると中は広くなっていた。

人が立って歩ける程である。横は一人がかろうじて進める程か。

「流石はモグラ獣人、穴を掘るのが上手いわね」

カマキロイドは穴を見回しながら言った。その複眼が黄色く光っ

ている。
途中で道は二手に別れていた。左右共何処かに続いていそうである。
「どちらに行きますか？」
カマキロイドはそれを見て思案した。そして決断を下した。
「半分に分けるわ。半分は右手へ、そして残る半分は私と共に左手へ」
「ハッ」
彼女の言葉通り分かれた。そしてカマキロイドは左の道を進んでいく。
途中壁の横に何やら横穴があった。だが小さい。それを無視して進んだ。
「あれっ、あいつは？」
途中で一人減っている事に気付いた。
「右に行ったんじゃないのか？」
中の一人が言った。
「そうか。じゃあ問題無いな」
そしてさらに進んでいく。
また分岐点に当たった。今度は三方向である。
「つくづく迷路めいたことが好きな連中みたいですね」
戦闘員の一人が呆れて言った。
「そうね。けれどここで諦めるわけにはいかないわ」
カマキロイドは言った。そして今度は三手に分かれて進んだ。
「気をつけろよ」
戦闘員達はそう言うと別れを告げそれぞれの道へ入った。そしてさらに進んでいく。
道はかなり曲がりくねっている。複雑な道であり幅や高さもかなり違っている。
「またえらく変な道だな」
戦闘員の一人が言った。彼等はそう言いながらも前へ進んでいく。

暗くなった。もう前すら見えない。だが前へ行くしかなかった。
次第に広い道に出て来た。そして明るくなってきた。
「ここは・・・・・・」
そこは巨大な部屋だった。否、部屋ではない。どうやら自然に出来上がった空間のようだ。
上には鍾乳洞が垂れ下がっている。そして右手からは滝の音が聞こえて来る。やはり滝とアマゾン達の穴は繋がっていたようである。
彼等はその中を見回した。すると上にぶら下がっている蝙蝠達が動いた。
「ムッ」
それと同時に影が飛び出して来た。それはアマゾンであった。
「やはりここにいたか」
カマキロイドはアマゾンを見て言った。アマゾンは何も言わず硬く尖った岩山の上で彼等を凝視している。
「よく来た、ここへ」
アマゾンは言った。
「御前達の仲間、皆倒した。後は御前達だけ」
「何っ、馬鹿な事を言うな」
戦闘員の一人がそれに対して反論した。

森に煌く刃その十

「その証拠、今見せる」
アマゾンはそう言うと後ろから何かを取り出し彼等の足下へ投げた。
「ムッ！？」
それは戦闘員の生首だった。ゴロリ、と転がり空虚な目でかっての同僚達を見る。
「御前等、絶対来ると思った。だからわざと道を複雑にして少しずつ倒していった」
「クッ、ゲリラ戦の応用というわけか・・・・・・」
カマキロイドは舌打ちをして言った。
「ゲリラ戦で幾多の敵を倒してきた私が逆にやられるなんて・・・・・・」
「ゲリラ戦、何だそれは？」
アマゾンは彼女に対して言った。
「何っ！？」
「アマゾン、ジャングルでの戦いをそのままやっただけ。敵の数が多いと分断させて少しずつやっつけていく。これアマゾンがいたジャングルの獲物の狩り方でもある」
「クッ、つまりは普通に戦っているということか、貴様にとっては」
「アマゾ～～～～ン」
その時地中からアマゾンの側に出て来る者がいた。モグラ獣人である。
「もう穴は完全に塞いだぜ。これでこの連中は袋の鼠だ」
「何っ！」
これには流石のカマキロイドも驚いた。
「一体何時の間に・・・・・・」
「御前達が今日ここへ来るのわかっていた。蟷螂が滝のところにい

たから。そしてあらかじめ掘っておいた小さい穴を使って御前達を狙った。そして穴も塞いだ」

「・・・・・つまり最初から我々は貴様等の術中に陥っていたということか」

「そう。そしてアマゾンここで御前達を倒す」

アマゾンはそう言うと身構えた。

ア～～～

両手を肩の高さで横に大きく開く。手は半ば開き肘は垂直に上にしている。

身体が変わっていく。まずは緑と赤のマダラのバトルボディに包まれる。

マ～～～～

次にその両手を胸のところでクロスさせる。胸が赤くなる。そして手袋とブーツが黒くなり背中と両腕に鰭が生える。

ゾ～～～～ン！

もう一度両手を肩の高さに置く。するとその目が赤く光った。

顔が輝く。まず右半分が緑と赤の仮面に覆われそれが左半分も覆う。

光が消えた。そこには仮面ライダーアマゾンがいた。

「ケケーーーーッ！」

奇妙な叫び声をあげ背中の鰭を動かす。そして両腕を交差させ鰭で音を発した。

それが合図となった。両者は同時に跳んだ。

アマゾンの鰭とカマキロイドの鎌が交差する。激しい衝撃音が響いた。

着地する。そして再びジリ、ジリ、と間合いをとる。

モグラ獣人は戦闘員達を相手にしていた。アマゾンに特訓で鍛えられた成果が出ていた。今までよりも素早い動きで彼等を次々と倒

していく。
　これはアマゾンにとって大きかった。何しろ戦闘員達に邪魔されず怪人との闘いに専念できるのだから。
　だがどのみち今のアマゾンにとっては戦闘員なぞものの数ではなかったであろう。風のように素早い動きでカマキロイドに迫る。眼が紅く光る。
　そして引っ掻き噛み付かんとする。カマキロイドはそれを懸命にかわした。
「クッ！」
　そして左手の鎌を振るい鎌ィ足を放つ。だがアマゾンはそれを見切っていた。
「ケーーーーッ！」
　上に跳び上がる。そして上の鍾乳洞を掴んだ。
　そこから天井に張り付いた。まさに獣の動きであった。
「甘いよっ！」
　だがカマキロイドも負けてはいない。アマゾンへめがけ鎌ィ足を放つ。
　アマゾンはそれを天井を四つんばいのままかわす。首だけが下を向いている。
「おのれっ、何という奴だ・・・・・・」
　これにはさしものカマキロイドも絶句した。今まで獣とも戦ってきたがこのような相手ははじめてであった。
「けれど、それでこそ倒しがいがあるわ」
　カマキロイドはニヤッと笑った。そして鎌ィ足を放つのを止めた。
　アマゾンはそれを見て地に降り立った。そしてカマキロイドに対して構えを取る。
「この動き、見切れるかしら」
　カマキロイドはススス、と横に動いた。まるで滑るような動きだ。
「ガゥッ！？」
　アマゾンはその動きに戸惑った。そして必死に追おうとする。

だが速い。アマゾンも俊敏だがカマキロイドの動きも負けてはいなかった。まるで陽炎のような動きである。

「ウフフフフフフ」

カマキロイドはアマゾンの後ろに回り込んだ。そして切りつけた。しかしそれはアマゾンの予想通りであった。彼は振り向かずに屈んだ。

そして手の鰭で怪人の足を払わんとする。だが彼が切ったのは幻影であった。

「残念ね。私はここよ」

カマキロイドの声が上から聞こえてきた。それと同時に鎌が振り下ろされる。

アマゾンはそれを左手の鰭で受け止めた。ガキイイン、と金属音がした。

「ケケーーーーッ！」

アマゾンは上へ蹴りを放った。カマキロイドはそれを胸に受けた。

「グッ・・・・・・」

そのダメージに一瞬怯んだ。アマゾンはそこに跳び掛かった。

森に煌く刃その十一

肩を掴み首筋に噛み付かんとする。しかし怪人はそれを振り払った。

後ろへ跳ぶ。その後ろは滝であった。

「もう退けないわね」

カマキロイドは後ろに聞こえる滝の轟音を聞きながら言った。アマゾンは間合いを詰めて来る。

滝を横に両者は対峙した。そして構えを取る。

互いに隙を窺う。次の一撃で勝負が決まる。

動かない。いや、動けないのだ。先に動いたほうが負けるのだから。

アマゾンもカマキロイドも互いに相手を凝視する。先程までの激しい闘いが嘘のようである。

アマゾンが横へ跳んだ。まず壁を両足で蹴った。

「何っ！」

カマキロイドはその動きに驚いた。だが咄嗟に鎌ィ足を放った。しかしそれは当たらない。アマゾンは三角跳びの要領で滝に跳び込んだ。

「なっ！」

これにはカマキロイドも驚いた。自分から死地に跳び込むとは。

「どういうこと・・・・・・」

カマキロイドは戸惑って滝を見た。何か考えがあるというのか。

「しかし今跳び込んでも・・・・・・」

危険なのは彼女自身が最もよくわかっていた。アマゾンは水中戦にも長けている。水中での戦いは蟷螂の改造人間である彼女には不利である。

カマキロイドはそのまま滝の前で立ちすくんでいた。

後ろでは戦闘員達がモグラ獣人に倒されていっている。もうすぐ

こちらにも来るだろう。
「考えている暇は無いわね・・・・・・」
意を決して跳び込もうとした。即座に川から出て森に引き擦り込むつもりであった。
その時だった。目の前に滝から何かが跳び出て来た。
「！！」
それはアマゾンだった。既に右手を大きく振り被っている。
「ケーーーーッ！」
アマゾンはその右手を一閃させた。それはカマキロイドの額を真一文字に切り裂いた。
「なっ・・・・・・！」
カマキロイドは一瞬何が起こったのかわからなかった。だが額から噴き出る鮮血と焼けるような痛みが彼女に何が起こったのか教えていた。
「グググ、一体何をやった・・・・・・」
カマキロイドは額を押さえながらアマゾンに問うた。その傷は致命傷であった。
「滝を登ってきた」
アマゾンはそれに対し短い言葉で言った。
「御前の意表を衝くにはどうするか考えた。その時滝の事に気付いた」
「そして奇襲を仕掛けたというわけね」
彼女は人間態に戻りながらアマゾンに言った。
「そうだ」
「それにしても滝に跳び込みそこから上がって来るとは・・・・・・」
「これガガの腕輪の力。二つの腕輪アマゾンに凄い力与える」
これまでだとここまでは出来なかったであろう。だがガガの腕輪はそれをさせる絶大な力があったのだ。
「そ、そうだったわね、二つの腕輪があったのだったわ」

それ等が合わさって発揮される絶大な力のことは彼女も知っていた。だがこれ程までとは。

「それに気付かなかった私が迂闊だったわ。この戦い私の負けね」

彼女はそう言うとガクリ、と倒れた。

だが倒れ込まない。何とか踏ん張った。

「けれどこのままじゃいないわよ」

彼女はアマゾンを睨み付けて言った。

「かってベトナムのジャングルで女豹と恐れられたこの力、また見せてあげるわ。時と場所を変えてね」

そう言い終えるとゴフッ、と血を吐いた。

「その時を楽しみにしていることね」

彼女はそう言うと滝に跳び込んだ。そしてその中に姿を消した。

「また来るのか・・・・・・」

アマゾンは彼女が最後に言い残した言葉を頭の中で反芻した。

「来るなら来い。アマゾン負けない。必ずバダンの奴等皆倒してやる」

後ろではモグラ獣人が戦闘員達を全て倒し終えていた。こうして大台ケ原での戦いは幕を降ろした。

「馬鹿野郎、今まで一体何処をうろついていたんだ！」

東京に帰るとまず立花が怒鳴り声で迎えてくれた。

「いい加減携帯の使い方位覚えろ、連絡も出来ないだろうが！」

彼の怒鳴り声は続く。いつものことではあるがかなりの剣幕であった。

「おやっさん、そんなに怒らないでくれよ。アマゾンも戦っていたんだし」

アマゾンの横にいる赤褐色の肌を持つ男が言った。何処か土竜に似た尖った顔立ちの男である。

「ん、誰だあんた」

彼を見て立花は目をパチクリさせた。

「モグラだよ。アマゾンに甦らせてもらったんだよ」

「何だ、御前生きていたのか。しかも人間の姿取りやがって。それならそうと早く言え」
今度はモグラ獣人に説教をしだした。これはモグラ獣人にとってヤブヘビであった。
「ええっ、何でおいらまで!?」
「そもそも御前等は何事においても突拍子が無さすぎるんだ、大体これまでも・・・・・・」
立花は二人をさらに叱ろうとする。だがそれをまさひことリツ子が止めた。
「おじさん、まあいいじゃない。アマゾンも悪気があるわけじゃないし」
「そうよ。怪人を倒したんだからそれでいいじゃない」
「うむ、それもそうだが・・・・・・」
二人に言われ立花も怒りを鎮めた。
「二人に免じて今日はこれで勘弁してやる。今度からは連絡位は入れろよ」
これで立花の説教は終わった。
「了解」
二人は答えた。
「わかったんならいいが。じゃあまずこれ使ってみろ」
立花はそう言って携帯電話をアマゾンに手渡した。
「おやっさん、これ何だ!?」
「これが携帯電話だよ、まずは姿形から覚えなくちゃならんのか」
「御免、アマゾン機械に弱い」
「そういう問題じゃねえって言っているだろうが!」
再び立花の怒鳴り声が木霊した。かくしてアミーゴの夕暮れは過ぎていった。

森に煌く刃　　完

2004・1・21

街を覆う毒霧その一

「全くアマゾンの奴にも困ったものだ」
カウンターで立花はいささか顔を顰め首を傾げながら言った。
「あら、それでも怪人をやっつけたんだからいいと思いますけど」
それに対してリツ子が言った。
「おい、そう言うがなあ。連絡がとれないとこっちも困るんだ。何処で何やってるかさっぱりわからないからな」
「けれどそれがライダーじゃないかしら。今こっちに帰って来ている人達も殆ど連絡入れませんし」
「だな。こまめに入れて来るのは丈二だけだよ。特に隼人と志郎なんかこっちから連絡入れないと返事もして来ねえ」
立花はそう言って顔を顰めた。
「隼人の奴はいつもそうなんだ。事前に何の連絡もよこさねえでいきなりフラッと帰って来る。電話もよこさねえんだぞ」
「あら、それでも無事だからいいじゃないですか。連絡が無いのは無事だってことですし」
「・・・・・まあな。そもそもあいつ等がそう簡単にやられるとはわしも思っちゃいないが」
立花はリツ子の言葉に少し怯んだ。
「じゃあいいじゃないですか。それに丈二さんからの連絡で大体はわかりますし」
「まあそうだがな。しかし丈二の奴も本当にマメだよ」
その時立花の携帯に電話が入った。
「んっ、誰からだ?」
出た。そこには聞きなれた声があった。
「やあおやっさん、そちらはどうですか?」
それは城茂の声だった。

「おっ、茂か？珍しいな御前が電話してくるなんて」
「ははは、何言ってんですか。俺だって連絡位入れますよ」
「今はじめて連絡してきた癖に偉そうに言うな。大体通信機に入れろって言ってんだろうが」
「まあ細かいことはいいじゃないですか。こうやって連絡したんだし」
「・・・・・まあいいだろ。御前にしてはまともじゃないか」
「おやっさん、それはないでしょ。いくら何でも」
「そういうことは丈二の奴みたいにマメに入れてから言え。で、今何処にいるんだ？」
「大阪です。ここで何やら変な噂を聞いたもので」
後ろから騒がしい叫び声が聞こえて来る。
「そうか、大阪か。注意しろよ、そこは道が入り組んでいてややっこしいからな」
「了解、ところでそちらはどうですか？」
「こっちは今のところ何も無いな。まあそのうちバダンもこっちで何かやるだろうがな」
「わかりました。じゃあこっちは素早くやっつけてすぐにそっちへ戻りますよ」
「心配無用だ。こっちには今志郎とアマゾン、それに丈二がいる。御前は安心してそっちのバダンの奴等をやっつけろ」
「はい」
かくして城は電話を切った。
「城さんから？」
「ああ、一番の風来坊からの電話だよ」
立花は笑いながら言った。
「あいつが電話して来るってのも珍しいがな。そういえばあっちには誰か行ってなかったか」
「そういえばルミちゃんが行ってなかったかしら。親戚があっちにいるとか」

「そうか。後で茂に連絡入れとくか。バダンの奴等にさらわれたりしたら大変なことになる」
「はい、それがいいですね」
「そろそろ丈二の奴から連絡が入る頃だな。ちょっと行って来る」
「どうぞ」
立花は通信室に入った。丁度まさひこが通信機の前に座っている。
「どうだ、丈二から連絡はあったか？」
「今日はまだ。あっ、今来ました」
「よし、わしが出る」
立花が出た。やはり結城からの連絡であった。
「おおそうか、志郎の奴はそっちに無事辿り着いたか」
立花はその報告に顔を頷いた。
「で、そっちに来客か。・・・・・伊藤博士？」
彼はその名に眉を顰めた。
「ご存知ですか？」
結城は尋ねた。見れば大学のひっそりした人気の無い場所から電話をかけている。
「聞いたことはある。医学や工学の権威だという。最近突如として消息を聞かなかったが」
立花もその名は知っていた。
「で、何でその人が急にそっちへ現われたんだ？」
「それが・・・・・。ただやたらと大柄な若い男を連れていますが」
「大柄な若い男か・・・・・」
立花はそれを聞いてさらに眉を顰めた。
「もしかするとバダンじゃないのか」
「その線は充分にありますね。今風見が彼を見張っています」
「注意してくれ。今からわしがそっちに行く」
「了解」
立花はそう言うと通信を切った。そしてまさひこに対して言った。

「済まん、急用が出来た。ちょっと店を開けるぞ」
「はい」
立花はジープのエンジンを入れた。そして城南大学へと向かった。

街を覆う毒霧その二

大阪は古来より朝廷にとって重要な場所であった。何故なら港がありそこから渡来してくる者が多かったからである。聖徳太子もこの地に四天王寺を建立している。大化の改新の時には孝徳天皇がここに難波宮を置かれている。

室町時代には堺が栄えた。この街の商人達は明との勘合貿易で巨万の富を得ていた。

戦国時代にはここに石山本願寺が本拠地を置いた。そして織田信長とあしかけ十年に渡って死闘を繰り広げた。本願寺の勢力は信長にとって最大の脅威であり彼等との戦いは信長の天下統一を十年は遅らせたと言われる。

信長もこの地の重要性に注目していた。彼は堺の商人達との関係が深かったが何よりも天然の良港を持ち開発が進んでいるこの地の重要性をよく認識していた。

彼の後を受け継ぐ形となった羽柴秀吉はこの地に本拠地を置いた。天下の名城大阪城を築き城下町を整えた。彼のお膝元としてこの地はさらなる発展を遂げた。

だが大阪の陣で焦土となってしまう。幸い大阪の町民達は戦の前に一人残らず避難しており町が焼けただけで済んだ。だが大阪城は紅蓮の中に消えていた。

だが大阪は再び発展した。徳川幕府がここを再び整えたのである。大阪城を再建し城下町を整えた。運河を整備し橋を架けた。なお橋は後に大阪の豪商達が架ける事になったが台風の度に架けなければならずそれが負担で傾く家もありそれが『くい（杭）だおれ』の語源の一つともなった。

復活した大阪は天下の台所として発展した。徳川幕府は大阪城に大阪城代を置き西方の拠点としたが武士は殆どおらず町民の町であった。商人達が商売に精を出し町民達は生活を楽しんだ。近松門左

衛門が浄瑠璃の台本を書き竹本義太夫がそれを動かした。井原西鶴や上田秋成等の文学者を輩出した。長きに渡って商業、町民文化が栄えた。

明治時代以後もその繁栄は続くが意外な人物がこの町から出ている。明治の偉大な教育者福沢諭吉である。この人は一見堅苦しいイメージがあるが実は現実的で中々面白いざっくばらんな人物であった。彼は大阪の適塾で学んでいたのである。彼もまた大阪で育った人である。

今も大阪は我が国で屈指の大都市である。雑多な人々と独特な雰囲気で知られる魅力的な街である。

「それにしてもまたえらく変わった雰囲気だな、何時来ても」

城は難波の道頓堀を歩きながら言った。彼もこの街に何回か来ているがいまいち溶け込めない。関東の人間から見ればこの街はかなり異質なものだという。

「まあそれが面白いって言えばそうだが。とりあえずは何か腹に入れるか」

彼はまずたこ焼きを食べた。そしてお好み焼きやきつねうどんを食べた。

「食べ物は美味しいな。誇らしげに言うことはあるよ」

うどん屋から出て来た彼は満足した顔で言った。そして橋の上に着た。

ここは通称引っ掛け橋という。ナンパしようとする男達がいつもたむろしている。

「誰も引っ掛かってないな。それもそうか」

見れば声を掛ける男達も単なる暇つぶしのようである。真剣にやっているとは思えない。

しかし中には性質の悪いのがいるものである。

「まあええやん。そこでお茶でも飲もうや」

ガラの悪い兄ちゃんが女の子に声をかけている。女の子はそれに対して戸惑っている。

「さあ行こうで。別に何もせえへんからな」
こう言って何もしない奴がいた例は無い。城は彼等を咎めようとした。
「おい、そこいらで止めろ」
「あん?あんたにそんなこと言う権利・・・・・・」
そこで彼は拾った小石を握り潰した。小石は砂になった。
「失礼しましたあーーーーっ!」
兄ちゃん達はそれを見て逃げ去って行った。実にわかりやすい。
「さて、とお嬢ちゃん」
城は男達に絡まれていた少女に声をかけた。
「一人でここを歩くのは止めたほうが・・・・・・んんっ!?」
彼は少女の顔を見て驚いた。何と彼女は一条ルミであった。
「えっ、茂さん!?」
驚いたのはルミも同じであった。驚いて彼の顔を見上げる。
「そうか、親戚のところへ遊びに来ていたのか」
彼は金龍ラーメンの店でラーメンを食べながらルミの話を聞いていた。脂っこい豚骨スープのラーメンである。
「はい、丁度お休みですし」
「・・・・・そういえばそういう時期か」
城はルミの言葉に頭の中でカレンダーをめくりながら言った。
「こういう稼業やっていると月日の流れを忘れちまうな。俺達にとっちゃあ季節の移り変わりもあまり意味がないしな」
改造人間である彼等にとって暑さや寒さは問題ない。ただ景色が変わるだけである。
「まあそれが凄くいいんだけれどな。どの季節も味わいがあるし」
「茂さんはどうして大阪に?」
考えながら独り言を言う城にルミが語りかけた。
「あっ、俺!?」
城は考え込んでいる時に言葉をかけられていささか驚いた。彼女のことをすっかり忘れていたのだ。

「ええ、そうですよ」
ルミはそんな彼の顔を見て微笑んだ。おかしかったらしい。
「俺は仕事。ここにもバダンの連中がいるらしくてね」
「えっ、バダンが！？」
ルミはその言葉に顔色を暗くさせた。

「ちょっと、声が大きいよ。まさかこんなところにうろついているとは思わないけれど万が一ということがあるからな」
「は、はい・・・・・・」
ルミは城の言葉に思わず口を当てた。
「俺はこれからここでバダンの奴等を捜す。そして奴等を見つけ次第叩き潰す。ルミちゃんは危ないから親戚のところに行っているんだ」
彼はルミに対して強い口調で言った。だがルミは彼のそんな言葉に対して首を横に振った。
「何言ってるんですか。城さん一人じゃ危なっかしくて見ていられませんよ」
「えっ、俺が!?」
彼の事は立花からよく聞いていた。無鉄砲で突拍子もない行動を取る、と。
「それに一人より二人のほうがいいでしょ。泊まる場所もわたしの親戚のお家がありますし」
「しかしそれは・・・・・・」
いささか気が引けた。カプセルホテルにでも泊まりながら戦うつもりだったのだ。若しくは野宿。これは慣れていた。
「いいんですよ、わたしの親戚の叔父さん優しいし。そうと決まったらすぐ行きましょう」
「う、うん・・・・・・」
ラーメンを急いで食べ終えルミに急かされて彼は店を後にした。
そして市営地下鉄に乗り住吉区まで来た。
住吉区の名の由来はここに住吉大社があるからである。大阪で最も長い歴史を誇る神社であり祭られている神々も海の神を中心に多い。大阪人にとっては大阪城と並ぶ心の拠り所である。

ここは所謂下町である。昔からこの地に住んでいる人が多く。雑多で独特な雰囲気がある。道を行けばお好み焼きやたこ焼きの香りがしてくる。そして駄菓子屋では爺さんや婆さんが店番をしている。

「何か東京の下町みたいだな」

城はルミをバイクの後ろに乗せ辺りを見て言った。

「はい、確かに似ていますね」

ルミはそれに対して答えた。

「しかし雰囲気がまるで違うな。ここは難波からそのまま来たって感じだ。東京は一駅ごとにまるで違っているってのに」

「それが大阪なんですよ」

ルミは笑って言った。

「雑多で騒がしい雰囲気で。それが街中に拡がっているんです」

「そうだな。何か難波から来てもまるで違和感がないよ」

彼はそう言いながら道を走っていく。そしてルミの親戚の叔父さんの家に来た。

「おお、よう来たなあ。まああがりや」

その叔父さんは気さくでざっくばらんないい人であった。城も心おきなく迎えられた。

そして客室に泊めてもらった。狭い家だが部屋はちゃんとしている。

「何か変な気分だな」

布団の中で城は天井を見上げながら呟いた。

彼は天涯孤独で親戚なぞいない。立花が父親代わりだが彼やライダー達の他は親しい者もいないのだ。

「あいつもいないしな」

かって共にブラックサタンと戦ったあの戦士ももういない。彼は他のライダー達と比べても孤独な境遇であった。

彼女が倒れた後彼は他のライダー達と共にデルザーと戦った。そしてデルザー崩壊後は日本を旅立ち一人で悪と戦ってきた。

時には滝など共に戦う者もいた。だがその殆どを彼は一人で戦い

抜いてきた。そして夜の空の下で眠っていたのだ。
「こんなことははじめてだな」
人の家に泊めてもらう。今まで立花の店で寝ることはあった。だがその他は常にホテルか野宿であった。これも改造人間である彼だからこそ苦でもなかったが普通の人間ならばその負担はかなりのものであっただろう。
だが戦士としての気は鈍ってはいなかった。この地で暗躍しているであろうバダンを倒す為彼は明日以降のことについて色々と考えていた。
「カマキロイドも倒れたか」
暗闇大使は基地の一室で戦闘員からの報告を聞いていた。そこはどうやら彼の個室であるらしい。普段の蛇の様な外見ではなく深緑の軍服を着ていた。
その部屋は暗い。玉座に似た椅子の他は何も無い。だが異様に広くその四隅が何処まであるのか見当もつかない程であった。
「ハッ、ですが遺体は無事回収し終えました」
その戦闘員はそう言って敬礼した。
「うむ、それならばよい」
彼はその報告を聞いて満足気に頷いた。
「しかしライダー達のパワーアップは我々の想像を遥かに超えているな」
彼は戦闘員に対して言った。

街を覆う毒霧その四

「これで七体の怪人が倒された。それと共に七つの作戦も失敗に終わった。日本における我がバダンの計画は奴等のせいで全く進んでいない状況だ」

「残念ながら・・・・・・」

戦闘員はその言葉に顔を俯けて答えた。

「そなたが謝る必要は無い。責任は全てわしにある」

「ハッ・・・・・・」

戦闘員はその言葉に畏まった。

「だからこそわしも悔やんでいるのだ。悔やんでも仕方のないことであるがな」

彼はそう言うと右腕をゆっくりと上げた。すると一枚の日本地図が表われた。

「残る作戦は三つ、そしてゼクロス追撃もしなければならん。あの男の消息は掴めたか」

「それは今ヤマアラシロイドが行なっております」

「そうか、あ奴自らか。奴は怪人の敗北に最も憤っているそうだな」

「はい。顔には出されませんがかなりお怒りのようです」

「だろうな。あいつはそういう奴だ。決して顔には出さないがな」

彼はそう言うとニイィッ、と笑った。どうやら何か思うところがあるようだ。

「ゼクロスにはあと三影を向けよ。二体ならばそれだけ探索の網も大きくなる」

「ハッ」

「そして後は各地の作戦だが」

彼はそう言うと宙に浮かぶ地図を見た。

「おそらくそこにライダー達が向かっている筈だ。作戦を担当するそれぞれの怪人達に伝えよ、何としても奴等を退け作戦を成功させ

よ、とな」
「了解致しました」
「よし、ところで一つ聞きたいことがある」
暗闇大使はここで戦闘員に顔を向けてきた。
「世界各地に散った同志達はどうしている？」
彼の目が光った。何か考えているようである。
「世界各地の同志達、ですか？」
戦闘員は彼の目を見ながら言った。
「そうだ。特に連絡が無いところを見るとこれといって躓いてはいないようだが」
まるで何かを探るようである。戦闘員はその目に少し恐怖を覚えた。
「・・・・・今のところ何も」
「そうか、ならば良い」
その言葉に彼は姿勢を正した。
「だが注意しておけ。まだ我等の切り札は完成してはおらん。それまでは陰に潜み表立って動いてはならんからな」
「御意」
戦闘員は敬礼をして答えた。
「それに戦力はまだ整ってはいないのだ。完全にはな」
「と、いいますと？」
戦闘員はその言葉に突っ込んだ。
「それはいずれわかることだ。いずれな」
暗闇大使はそれに対して口の端を三日月の様に歪めて笑って答えた。
「だが一つだけ教えてやろう。これは『死』に関係があるのだ」
「『死』にですか？」
戦闘員は暗闇大使のその言葉に首を傾げた。
「そうだ。それがわかる時を楽しみにしているがいい」
「はあ・・・・・」

戦闘員はいぶかりながらも答えた。暗闇大使はそれを横目に見ながら一人ほくそ笑んでいた。

城とルミは朝食を食べた後早速捜査を開始した。まずは住吉大社でこれからの戦いの勝利を祈願した。

「あまり神様とかに頼るのは好きじゃないんだがなあ」

城は少し苦い顔をしながらも賽銭を入れ祈った。

「まあいいじゃないですか。戦いの前にお祈りをするのは武士のたしなみですよ」

ルミはその横で微笑んで言った。

「そりゃそうだけれどな。俺は元々神様とか仏様とかには縁が無いからな」

「あらっ、そうだったんですか？」

「ああ。孤児院で育って大学じゃ寮や下宿で暮らしていたしあまりこうしたところに来ることはなかったんだ。そしてライダーになったら余計縁が無くなってな。まあ信じないってわけじゃねえけれど」

二人はそう言いながら社の前を後にする。そして亀の池を見つつ太鼓橋の方へ向かう。

「ライダーは常に頼れるのは己の力と仲間、それだけなんだ。いや、運も大きいけれどな」

彼はこれまでの戦いを振り返りながらルミに言った。

「運、ですか？」

ルミは最後の運に反応した。

「そう、運だ。運があるのとないのとではやっぱり全然違うな。俺は今まで運のおかげで勝ったこともある」

「そうなんですか。運も大事なんですね」

「あまり当てにしちゃいけないけれどな。これを頼りにしていたら失敗する。しかしいざという時にこれがあるなしで何もかもが違うんだ。率直に言うと生きるか、死ぬか、だな」

「大事なんですね」

「まあな。けれど何時その運が回ってくるかは誰にもわからない。

気紛れなものさ」
城はそう言って皮肉げに笑った。
「大抵は土壇場にならないと運ってやつは来ない。しかしそれが回ってくると形勢が一気に逆転するんだ」
「土壇場で逆転ですか」
「そう。だけれど悪い奴等に運が回ってきたことはないな」
「えっ、それはどうしてですか！？」
ルミはその言葉に驚いた。
「日頃の行いってやつだろうな。やっぱりそういう意味で神様ってのは見ているのかな」
彼はそう言うと先程参拝した社の方を振り返った。
「きっとそうですよ」
二人はそう話をしながら太鼓橋を渡る。この橋は大きく上にアーチを描いた独特の形をしていることで有名である。その橋の頂上に来た時その時何者かが二人を取り囲んだ。黒服に黒帽子の怪しげな一団である。

街を覆う毒霧その五

「ムッ！？」
城はルミを後ろに護り彼等と対峙した。見たところチンピラなどではなさそうだ。
「バダンかっ！？」
だが彼等は答えようとしない。無言で城に襲い掛かって来た。
「そうか、問答無用ってわけか」
城は男達の一人の拳を受けながら言った。その声は笑っていた。
「じゃあ俺も手加減しないぜ」
彼は拳を繰り出した戦闘員を即座に殴り倒した。そして次に来た戦闘員を池に蹴り落とした。
「神聖な神社でこんなことをするのは気が引けるがな」
そう言いつつ黒服の一団を次々と倒していく。そして一人残らず倒してしまった。
「ルミちゃん、怪我はないかい？」
「あ、はい」
「そうか、それはよかった」
城はルミを気遣った。幸い彼女は無事であった。
「けれどこの人達一体何なんでしょう」
彼女は橋の上に倒れている男達を見ながら言った。
「さあね。まあ正体は大体予想がつくけれど」
男の一人に歩み寄りその帽子を取り外そうとする。その時だった。
「ウォッ！」
不意に男達の身体から瘴気が出て来た。そしてそれは彼等の身体を溶かしてしまった。
「何と・・・・・・」
彼等の身体は全て消えてしまった。服や帽子すら残らなかった。
「証拠隠滅というわけか」

「それにしても何という恐ろしい瘴気・・・・・・」
ルミは溶けて緑色の水溜りになった男達を見ながら呟いた。その顔は青くなっている。
「いや、これは瘴気じゃないな」
城はさらに溶け消えていくその水溜りを見ながら言った。
「これは毒だな。それもかなりの強さを持つ」
「毒、ですか？」
ルミは怖る怖る尋ねた。
「ああ。おそらくは。それも即効性の」
彼は完全に消えてなくなった水溜りの跡を見下ろしながら言った。
「バダンめ、どうやら毒を使う改造人間を送り込んできたな」
城は忌々しげに呟いた。
「その改造人間で一体何をするつもりだ・・・・・・」
彼はそう言っていぶかしむ。その後ろで彼を見る影があった。
「フフフフフ」
その影は神社の社の上にいた。そして城とルミを微笑みながら見ている。
黒い肌に長身の黒人の男である。スラリとしたモデルのような身体を漆黒のスーツで包んでいる。その髪は黒人のそれとは思えぬストレートの長い髪であり映画俳優のように整った顔立ちをしている。何処かラグクラフト等の怪奇小説に出て来る黒い男に似ている。
男は城達の姿を見届けるとその場から消えた。そして後には何も残らなかった。
大阪梅田の地下のある喫茶店。先程の黒服の男が座っていた。
コーヒーを飲んでいる。ブラックのコーヒーである。
それを口に入れる。その時側に誰かが来た。
「合席しても宜しいですか？」
ふと顔を上げる。見るとあの白人の男である。
「どうぞ」
黒人の男は微笑んでそれを承諾した。白人の男はそれに従い席に

着いた。
「メニューは何にするの？」
黒人の男は彼に尋ねた。
「貴方と同じものを」
彼は微笑んで答えた。黒人の男はそれに応えメニューを頼んだ。
暫くしてコーヒーが運ばれてきた。
彼はそれを手に取り一口口に含んだ。そして言った。
「美味しいですね」
「でしょうね。ここのコーヒーは有名ですから」
黒人の男はそれに対し微笑んで応えた。
「ところでそちらの進み具合はどうですか？」
白人は微笑を浮かべながら尋ねてきた。
「上々ですよ。丁度面白い人もやって来ましたし」
彼は優雅な仕草で返してきた。

街を覆う毒霧その六

「ほう、それは一体誰ですか？」
「仮面ライダーストロンガーです」
彼はにこりと微笑んでその名を言った。
「ほほお、彼が来たのですか。それはまた」
白人の男はその名を聞いて眉を一瞬ピクリ、と上げた。
「何、別に気にしてはいませんよ。最初から誰かが来ると思っていましたし。それにどのライダーが来ようと所詮私の相手ではありませんしね」
「いいのですか？既に七人の同志が彼等に倒されていますよ」
「ならば彼等の仇もとるまでのこと」
彼は即座に答えた。その整った目に一瞬激しい憎悪の光が宿った。
「それに彼等はもう回収されたのでしょう？」
「はい、本部に収容されました。いずれ本格的な再改造を受けるでしょう」
「なら問題はありませんね。ただ同志達が受けた敗北の辱めは晴らさねば」
「期待していますよ」
「ご安心を。必ずやこの街を死の霧で覆ってみせます」
彼はそう言うと凄みのある笑みを浮かべた。
「このンジョモ＝ガミン、いやドクガロイドの名にかけて」
「そうですか。では吉報を待っていますよ」
彼はそう言うとコーヒーを飲み終え席を立った。そして店を後にした。
「彼も色々とご苦労なことだ。リーダーにはリーダーの気苦労があるということか」
ドクガロイドは彼の後ろ姿を見送って呟いた。
「僕にはあまり関係はないが。僕がここでやることは二つしかない

しね」
彼はそう呟くとコーヒーを飲み店の外を見た。
そこは地下の商店街である。人々がショッピングを楽しんでいる。
「この街を死の街に変えること。そしてライダーを倒すことだ。けれどこれは同時に出来るか」
そう言うとコーヒーを飲み干し店を出た。そして店の出口でポツリ、と呟く。
「ライダーストロンガーか。破天荒な奴だというけれどどんな奴かな」
彼は商店街を歩いていった。そして外へと出て行った。
城茂はルミと共に梅田のオフィス街にいた。そしてバダンの手懸かりを捜していた。
「最近急に人が入ったビルとかはありませんか？」
城は交番で尋ねた。
「んっ、そこに何か用があるの？」
「はい、実は仕事の依頼をしに来たのです。丁度東京からこちらに進出する為の業務提携の為に」
城は交番にいる制服姿の警官に言った。怪しまれないようにいつもの薔薇のジーンズではなく紺の地味なスーツである。
「成程。それで肝心の場所を忘れてしまったというわけですね」
警官は微笑みながら言った。わりかし人のいい警官である。
「はい、そうです」
城は素直に答えた。勿論これは演技である。
「それでしたら・・・・・・」
警官は地図を指し示しながらその場所を一つ一つ説明した。城はそれを地図に一つずつメモした。
「有り難うございます、これで辿り着けそうです」
「いえいえ、また困ったことがあったら何時でもどうぞ」
警官は彼を笑顔で送った。別におかしいとは思ってはいないようだ。

「さて、と。これであやしい場所は、と」
城は歩きながら地図を見てチェックしている。ルミはそんな彼を変わったものを見る目で見ていた。
「んっ、どうしたんだいルミちゃん」
彼もその視線に気付いた。そして彼女に問うた。
「いえ、城さんってスーツも似合うんだなと思って」
ルミは彼を見上げながら答えた。
「おいおい、俺だってスーツは着るよ。いつもあのジーンズとシャツじゃないさ」
彼は笑って彼女に言葉を返した。
「こういった場所で調べるのはあの服装じゃ目立ってしまうからね。こうしたスーツが一番いいんだ」
「ふうん、けれどその手袋はやっぱり変ですよ」
彼女は黒い手袋を見て言った。
「・・・・・悪いがこれは外せないんだ。いざという時以外ね」
彼は顔を真剣なものにして言った。
「あっ、そうでしたね。すいません・・・・・」
ルミも彼が言った意味をすぐに理解した。そして謝罪した。
「いや、謝る必要はないよ。これは俺が望んで身に着けたものだし」
彼は自ら志願して改造人間となったのである。友の復讐の為に。そして自ら望んで超電子人間ともなっている。
それが他の多くのライダーと違うところだ。風見も家族の仇を討つ為にライダーに志願したし沖も自ら宇宙開発の為に進んで改造人間となった。確かに志願したということでは彼等と城は同じである。
しかし風見は結局それの頼みをダブルライダーに一度は拒絶されている。改造人間としての哀しみを誰よりも知る彼等はその苦しみを背負うのは自分達だけでいいと思ったからだ。彼がブイスリーとなったのはダブルライダーを守り瀕死の重傷を負った時にその命を救う為にダブルライダーが改造手術を行なった時であった。
沖は戦う為に改造手術を受けたのではない。あくまで人類の夢の

為だ。図らずも人の世を脅かさんとするドグマ、ジンドグマと戦うことになったが。

彼、城茂は最初からブラックサタンを倒す為に改造人間となった。ライダーから改造を施されたのではない。悪の組織の力によって改造人間となったのである。そしてその力をもって悪と戦っているのだ。超電子の力を授けてくれた正木博士ももとはブラックサタンにいた人物である。

「ストロンガー、私を忘れないでくれ」

ドクロ少佐の火炎攻撃を受け博士は息絶えた。彼はその直前に城にそう言い残している。彼はその言葉を忘れたことはない。

その超電子の力も今彼の銀の両腕に宿っている。博士の授けてくれた力が。

(博士の為にも俺は戦わなくちゃいけない。そしてバダンの奴等を倒すんだ)

彼は心の中で言った。手袋を強く握った。

街を覆う毒霧その七

「さ、まずはここへ行こう」
彼はルミに地図を見せて言った。
「はい」
ルミはそれに答えた。その時であった。
「捜す必要はありませんよ」
その時後ろから何者かの声がした。
「誰だっ！？」
二人は後ろを振り向いた。そこには黒人の男がいた。
「貴様、バダンの手の者か」
城は彼を睨み付けて言った。
「はい。改造人間の一人ドクガロイドと申します。以後お見知りおきを」
彼はそう言って微笑んだ。後ろから戦闘員達が現われる。
「ドクガロイドか。だとすると貴様等はこの大阪に毒か何かを流すつもりだな」
「流石は城茂。もう見抜かれたとは」
ドクガロイドはそう言うとニコリ、と微笑んだ。
「当たり前だ。住吉大社での刺客の溶け方に貴様のその名、それでわからない馬鹿が何処にいるんだ」
「フフフ、それはそうですね」
彼がそう言うとその後ろの戦闘員達が動いた。そして城とルミの周りを取り囲んだ。
「だとすれば話が早い」
彼がそう言うと戦闘員達が懐から棒を取り出した。三段になっている特殊警棒に似たものだ。
「俺をここで始末する、というわけだな」
「その通り」

彼は言った。戦闘員達がそれに応え二人へ一斉に襲い掛かった。
戦いがはじまった。戦闘員達はその棒を手に襲い掛かる。城はそれに対し素手で立ち向かう。
城は流石に強い。戦闘員達を軽くあしらっていく。しかし数が違う。
尚且つルミを庇っている状況である。さしもの城も次第に退いていく。
「まずいな、これは」
彼もその状況に気付いていた。ドクガロイドはそれを見て笑っている。
「ならばこれしかないな」
彼はルミの方を見た。そして彼女の身体を掴んだ。
「ルミちゃん、ちょっと御免よ！」
彼はそう言うとルミを上へ放り投げた。
「えっ！？」
これにはルミも驚いた。一瞬何が起こったのかわからなかった。
「今だ、喰らえっ！」
彼はそう言うと両手の手袋を取り外した。中から銀の腕が現われた。
「エレクトロファイアーーーーッ！」
その銀の腕の右手を下のアスファルトに叩き付けた。激しい電流が地を伝う。
「ギッ！」
それはたちまち戦闘員達を襲った。電流に貫かれた彼等はひとたまりもなく地に倒れた。
電流はドクガロイドも襲った。激しい電流と熱が彼の全身を撃つ。だが彼は微動だにしない。
「ほほお、これがエレクトロファイアーですか」
彼は余裕をもってそれを受けていた。
「中々心地良い威力です。噂に違わぬ力」

衝撃が伝い終わった。彼はまだ悠然と立ち微笑んでいる。
「しかし戦闘員達は倒せても僕は倒せないようですね。所詮はその程度の技ですか」
「何！？」
城はドクガロイドのその言葉と悠然とした態度に顔を顰めた。そこにルミが落ちて来た。
「おっと」
彼は胸の前で彼女を受け止めた。両腕に抱えるようにして受けた。
「えらく余裕だな。エレクトロファイアーを受けてその台詞とは」
「勿論。バダンの改造人間を甘く考えてもらっては困りますよ」
彼は言った。そしてその黒い目が妖しく光った。
「来るか」
彼はルミを降ろし身構えた。彼女はその後ろに匿った。
「いえ、今日のところは大人しく帰るとしましょう」
彼は目の光を消して言った。
「どのみち我々の勝利はゆるぎないものですし」
彼は悠然と微笑んで言った。
「それは俺の台詞だ」
城はそれに対し睨みつけながら言った。
「そうですか。まあいいでしょう、それはいずれわかることです」
ドクガロイドの足下がゆっくりと浮き上がってきた。
「ムッ！？」
城とルミはそれを見て目を見張った。
「驚く必要はありませんよ。僕は毒蛾の改造人間ですから」
彼はそんな二人に対し宥めるように言った。
「空を飛べるのは当たり前。それに今は貴方達に危害を加えるつもりはありません」
彼は宙に浮かび上がった。そして後ろに退いていく。
「またお会いするその時まで。さようなら」
彼は姿を消した。後にはその消えていった場所を凝視する城とル

ミがいた。
「さて、挨拶はあれでいいですね」
大阪の港のある倉庫の中でドクガロイドは周りを囲む部下達に言った。
「噂に違わぬ男です。油断は出来ませんね」
「ハッ」
彼の言葉に戦闘員達は敬礼で答えた。
「さて、次の我々の計画ですが」
「予定通り大阪上空から毒霧を降らせますか」
戦闘員の一人が尋ねた。
「いえ、それは後にしましょう。やはりストロンガーの動きが気になります」
「わかりました」
ドクガロイドはそれを否定した。尋ねた戦闘員は敬礼でそれに答えた。
「まずはストロンガーの打倒が先です。さもないと作戦遂行すらままなりません」
「ではどうしましょう?」
戦闘員達が尋ねた。彼はそれに対し微笑んで答えた。
「何、慌てる必要はありません彼はじきにこおへ来ますよ」
「エエッ!?」
戦闘員達はその言葉にうろたえた。
「何を驚く必要があります?敵が折角来てくれるというのに」
「いえ、しかし」
冷静なドクガロイドに対し戦闘員達は狼狽しきっている。
「おそらく彼一人で来るでしょう。既に一隊を彼のところへ向かわせています。そして彼に遭ったらすぐに退くよう伝えてあります。発信機を落としてね」
「それでは誘い込むと・・・・・・」
「その通り。そしてその間にもう一隊を・・・・・・」

彼はそう言うとニヤリ、と笑った。その眼が再び怪しく光った。
「わかりましたね」
彼は戦闘員達に対して言った。
「ハッ！」
戦闘員達は彼に敬礼で答えた。そして彼等は闇の中に消えた。

街を覆う毒霧その八

大阪は神戸と同じく港でも有名である。その始まりが港からであり天下の台所、水の都と謳われただけはありその水運の良さは歴史的にも有名である。

大阪の北から南に至るまでその港は続いている。そこは複雑に入り組みそして様々な船が停泊している。巨大な倉庫が林立している。それは繁栄の証でもある。

夜の港は独特の雰囲気がある。停泊している船や遠くの街の光が見える。そして時折船の汽笛の音が聞こえて来る。

「さて、と。ここら辺りで消えたな」

その夜の港を一台のマシンが進んでいる。立花達が新しく改造したカブトローブイである。

それに乗るのはただ一人、仮面ライダーストロンガーだけである。彼はマシンから降りると辺りを見回した。

「いちいち探し回るのも面倒だな」

彼はそう言うと仮面中央の触覚に右手の人差し指と中指を当てた。

「ライダービデオシグナル！」

するとストロンガーの眼に少し前のこの場の映像が映った。見れば戦闘員達が右へ逃げていく。

「こっちか」

ストロンガーは右へ向かった。するとそこには一つの大きな倉庫があった。

「怪しいな」

入口が少し開いている。もしかするとそこに入って行ったのかも知れない。

中へ入る。中は真っ暗闇であった。

「ここにはいないか」

ストロンガーは辺りを見回しながら言った。そして再びビデオシ

グナルを使おうとする。
「ようこそ、仮面ライダーストロンガーよ」
その時上のほうから声がした。すると倉庫の中が一斉に明るくなる。
「ムッ！」
そこに彼等はいた。既にストロンガーを取り囲んでいる。
「必ず来ると思っていましたよ。謹んで歓待いたします」
ドクガロイドが彼の前に出て来た。相変わらず悠然と微笑んでいる。
「貴方の為にとっておきの催しを用意しておきましたよ」
「それは嬉しいな。で、どんな催しだい？」
ストロンガーは余裕をもって言葉を返した。ドクガロイドはそれに対して右手を肩の高さに上げて指を鳴らした。
すると戦闘員達が一斉にナイフを投げて来た。ストロンガーはそれに対して叫んだ。
「電マグネーーーーーット！」
するとナイフがストロンガーへ引き寄せられた。そして彼の身体に付着した。
彼はそれを手に取ると戦闘員達に投げ付けた。戦闘員達は自分のナイフで次々と倒れていった。
「ほう、ナイフの腕もお見事ですね」
「生憎アウトドアライフが長かったものでね。ナイフの扱いには慣れているのさ」
ストロンガーはしれっとした態度で言い返した。ドクガロイドはそれを見て再び微笑んだ。
「成程、それでは次のイベントに移りますか」
彼はそう言うと目を再び光らせた。するとその目が人のものから昆虫の赤い複眼に変わった。
「来るかっ！？」
背中から蛾の翼が生えた。そして毒蛾の顔になり身体も毒々しい

ものに変化していく。
「それが貴様の姿か」
ストロンガーは怪人に変化した彼の姿を見て言った。
「フフフ、そうさ。どうだい、素晴らしい身体だろう」
「確かにな。禍々しい気がこの倉庫全てを包んでいるみたいだ」
「だけれどね、イベントはこれだけじゃないよ」
彼は笑った。今度は不気味な笑いであった。
その笑いを見てストロンガーは本能的に悟った。彼は何か良からぬ策を用いている、と。
「気付いたね。そうさ、イベントはこれだよ」
彼は獣の爪のように伸びた指を鳴らした。するとその後ろから数名の戦闘員達が姿を現わした。
「なっ！」
ストロンガーは彼等を見て驚愕した。何と彼等はルミを連れているのだ。
「残念だったね。彼女もこの催しに招待していたんだ」
ドクガロイドは驚愕する彼を見て勝ち誇った顔で言った。
「彼女がいたホテルまで行って招待したんだ。別れたのが裏目に出たね」
「クッ・・・・・・」
そうだった。ルミの事を考え彼女をとあるホテルに避難させ自分一人でここに来たのだ。だがそれがかえってこのようなことになろうとは。
「さて、どうするの？彼女を助けたいのなら・・・・・・わかるよね」
「・・・・・わかった」
ストロンガーは両腕を下ろした。それを戦闘員達が取り囲む。
ストロンガーは城茂の姿に戻され十字架に磔にされていた。ルミも一緒である。
「逃げ出そうとしても無駄だよ。そのロープは特殊な絶縁体のロー

プだ。決して電気や熱には負けはしない」
ドクガロイドは城を見て言った。
「それにしてもここで十字架を架けることになるとはね」
彼はそう言って笑った。そこは大阪城であった。
この城が豊臣秀吉により築城されたのはあまりにも有名である。
また彼はキリスト教を弾圧したことでも知られている。
「あれはスペインの侵略を危惧してのことらしいけれど。まあ正解と言えば正解か」
その通りであった。スペインの侵略の方法はキリスト教、ここではカトリックの神父達がその尖兵を担っていたのだ。
「さて、この天下の名城で最後を迎えることになるけれど。何か言い残す事はある？」
ドクガロイドは城の方へ向き直って尋ねた。
「・・・・・聞きたいか」
彼はそう言って笑った。
「勿論」
彼は答えた。この時彼は城の笑いは最後の痩せ我慢の笑いだと思っていた。だがそれは違っていた。
「この程度で俺を捕まえたとは思わないことだ」
「何っ！？」
その時だった。城はその絶縁体のロープを引き千切った。電気ではない。そのままの力によってだ。
「なっ！」
ドクガロイドは叫んだ。戦闘員達が彼を再び捕らえようとする。
「甘いっ！」
城はそんな彼等を何無く蹴散らす。そして右手を挙げて叫んだ。
「カブトローーーッ！」
カブトローブイが走って来た。そして救出したルミをその上に乗せた。
「行け、安全な場所までな」

カブトローブイはそれに答えなかったがルミを乗せたまま走りだした。そして何処かへ走り去って行った。

「さて、これで気兼ねなく戦えるな」

「クッ、まさかそれ程の力があったとは・・・・・」

ルミを見送り安心した顔でこちらへ顔を向けた城に対しドクガロイドは苦々しげに呻いた。

「だがそれでも数は我等が有利、そう簡単にはやらせませんよ」

今度は彼自身も襲い掛かる。そしてストロンガーを掴み取ろうとする。

街を覆う毒霧その九

「おっと」
だが戦闘員の身体を盾に彼を阻む。だが徐々に追い詰められていく。
その後ろはもう石垣の下であった。これ以上後ろに退く事は出来ない。
「さあ、もう後がありませんよ」
ドクガロイドもそれは察していた。あえて彼に声をかける。
「確かにな。じゃあ飛び降りるまでだ」
彼はニッと笑ってそう言った。そして本当に飛び降りた。
「何ッ！」
下を見る。だが姿は見えない。
「何処に行ったんだ!?」
戦闘員の一人が首を傾げて呟く。それに対しドクガロイドは言った。
「考えている暇はありません。我々も下へ行きましょう」
「ハッ」
戦闘員達はそれに従った。彼等は下へ向かった。
「確かこの辺りだが・・・・・・」
ドクガロイドと戦闘員達は城が飛び降りた場所に来た。だがそこに彼はいなかった。
「消えたか・・・・・・？」
「まさか、ついさっきここに飛び降りたばかりだぞ」
戦闘員達は互いに囁き合う。そして辺りを見回すだが彼の気配一つしない。
「とりあえず右へ行きましょう。おそらくそちらへ行った筈です」
大阪城は複雑な構造になっている。これは城内に侵入した敵兵や隠密を惑わせる為である。幾多の攻城戦を経験し城攻めの名人と言

われた秀吉の作った城だけあり見事なものであった。
その左手は門となっているあちらへ行ったとは考えにくい。それに対し右は一直線に天守閣へ続いている。そこしか考えられなかった。
「わかりました」
戦闘員達もそれは悟った。彼等はドクガロイドに従い右へ向かった。
すぐ上に天守閣が見える。石垣に囲まれた広い場所に出た。
「一体何処にいるんだ」
「まさか消えたのか・・・・・・・？」
戦闘員達が辺りを見回しながら呟いたその時だった。不意に何かが聞こえてきた。
「ムッ、これは・・・・・・・！？」
それは口笛だった。その笛の音に一同ハッとした。そう、口笛を吹く男といえば一人しかいない。
「ここかっ！」
戦闘員の一人が上の石垣の上にナイフを投げる。口笛を吹く男はそれを手で掴んだ。
「おいおい、口笛への注意にこれはいくら何でもやりすぎだろう」
城はナイフを横に捨てながら言った。
「やっと見つけましたよ、城茂。ここが貴方の死に場所です」
ドクガロイドは彼を見上げて言った。それに対し彼はニヤリ、と笑った。
「それはそっくりそのまま貴様等に返してやる。行くぞ！」
両手の黒い手袋を投げ捨てた。そして両手を大きく動かしはじめた。

変

右手を肩の高さで水平にし左手は肘を直角に曲げ右手と水平にさせる。そしてその両手を右肩の高さからゆっくりと左斜め上へ旋回

させていく。それと共に身体は黒いバトルボディに覆われ手袋とブーツが白くなる。

身

旋回させる腕が左斜め腕で止まる。胸が赤くなりそれは肩も覆っている。そしてその胸に『S』の文字が浮かび上がってくる。

スト・・・・・ロンガー！

右手を素早く引く。それは一瞬ですぐに元へ戻す。その時左手と擦り合わせる。激しい電撃が両手を覆う。

すると顔の右半分が黒と白、そして緑の眼の仮面に覆われる。そしてそれはすぐに左半分も覆う。

凄まじい雷と衝撃が全身を覆う。そしてそれが終わった時そこには雷のライダーがいた。

「天が呼ぶ　地が呼ぶ　人が呼ぶ
悪を倒せと俺を呼ぶ
聞け、悪人共　俺は正義の戦士
仮面ライダーストロンガー！」

その言葉と共に再び激しい雷が彼の全身を覆った。その光はドクガロイドと戦闘員達の顔を緑に照らした。

「フフフ、来なさい。そしてその首級見事挙げて御覧にいれましょう」

ドクガロイドは彼を見上げて笑った。まるで戦いを楽しみたいような笑いであった。

「トォッ！」

ストロンガーは飛び降りて来た。そして戦闘員達を次々と蹴散らしていく。

やはりその力は圧倒的であった。戦闘員では相手にならない。だがドクガロイドは彼を見ながら考えていた。

（確かに強くはなっているようですが）

データよりも動きがい。力も強くなっているようだ。だがそれで

もまだ充分とは思えなかった。
（この程度なら普通に特訓で上昇するレベルのように思えますね）
彼はストロンガーはあまりパワーアップしていないと感じた。そしてこれなら大丈夫だと思った。
「では私がお相手しましょう」
戦闘員達があらかた倒されると今度は彼自身が立ち向かった。そして両手の爪で引き裂かんとする。
「甘いっ」
ストロンガーはそれを手で弾いた。そして逆にパンチを入れようとする。
「貴方こそね」
ドクガロイドは逆に言葉を返した。そしてストロンガーのパンチを後ろに跳び退いてかわすと背中の羽根を羽ばたかせた。
「ムッ！」
それは燐粉であった。ドス黒い粉が辺りを覆う。
「いかんっ！」
危険を察したストロンガーは素早く後ろへ退いた。それが強烈な毒の粉であることは一目瞭然であった。
「気付かれましたか。だが何時までそうやって逃げられますかね」
ドクガロイドはそれに対し余裕の笑みで返した。そう、逃げなれないのはわかっている。

街を覆う毒霧その十

ストロンガーとて逃げるつもりはない。まず両手を胸のところでクロスさせた。

「ストロンガーバリアーーーッ！」

そして全身を青いバリアーで包んだ。まずは守りを固めた。

次に両手を前に突き出した。そしてそこから激しい風を出す。

「磁力扇風機！」

そして粉を磁力の風で全て散らした。だがそれでは被害を拡散させてしまう。

「おや、血迷われましたか？」

ドクガロイドはそれを見て笑った。だがストロンガーはさらに攻撃を続けた。

「エレクトロサンダーーーーーッ！」

空中に雷を飛ばした。すると空を暗雲が覆った。

「何とっ！」

ストロンガーとドクガロイドの間に無数の落雷が生じた。それにより粉は全て焼かれてしまった。

「落雷により毒の粉を全て焼いてしまいましたか。やりますね」

「まだだ、これで終わりだと思うなっ！」

胸に両手を合わせた。するとそのＳの字が激しく回転しはじめた。

「チャーージアーーーーップ！」

角と胸の一部が銀色に変わった。超電子ダイナモの力を使ったのだ。

「行くぞっ！」

そしてドクガロイドに立ち向かう。これまでとは比べ物にならない強さだ。

「グッ、これまでとは比較にならないパワーだ」

これまでの戦闘力がまるで子供のように見える程である。しかし

ドクガロイドはそれでもまだ余裕があった。
（しかしこの力が使えるのも僅かの間）
そう、超電子の弱点は一分間しか使えないことである。それ以上使えばストロンガーの身体はその力に耐えられず大爆発を起こしてしまう。かって百目タイタンがそれを利用し彼を追い詰めたことがある。
（さて、何処まで耐えられますかね）
彼は顔こそ必死にそれを受けていたが内心時が来るのを待っていた。そうすれば自然と勝利が手に入るのだ。
（もうそろそろ）
ストロンガーの攻撃は続く。だがそれももう少しの辛抱であった。時間だ。これ以上の超電子の力の使用は不可能である。
筈だった。しかし彼はまだ使い続けている。
（何っ！？）
彼は内心叫んだ。そんな筈はない、と思った。
そこに隙が出た。彼はパンチを受け態勢を崩した。
ストロンガーはそれを逃さなかった。すかさず跳躍した。
「超電子大車輪キィーーーーーーーック！」
空中で両手両足を大きく広げ横に激しく回転する。そしてドクガロイドへ急降下する。
激しい蹴りが怪人の胸を直撃した。それを受けた怪人は大きく後ろに吹き飛ばされた。
「ガハァッ・・・・・・」
背中から落ち数回バウンドする。口から血を噴き出す。どうやら肋骨が折れているようだ。
何とか立ち上がろうとする。だが容易ではない。折れた肋骨が内臓に突き刺さっているようだ。
「グググ・・・・・・」
人間の姿へ戻る。そして何とか立ち上がった。
「どういうことだ、超電子ダイナモは一分間しか使えない筈では・・

・・・・」
「生憎だったな。その超電子を改造したのだ」
ストロンガーは彼を指差して言った。その証拠か彼はまだ超電子の力を使ったままである。
「これまで超電子は一分間しか使えなかった。だが改造手術を受けることによって変身をとかない限り幾らでも使えるようになったのだ」
「何と、それでは・・・・・」
「そうだ、この力を無限に使えるのだ。直接変身して使えはしないがな」
ストロンガーは言った。その両腕を雷が走る。
「すると最初に接近戦を挑んだのは僕を油断させる為に」
「そうだ。最早超電子が一分間しか使えないということはタイタンやシャドウにも知られているしな。だからこそ誘い込んだのだ。これ程上手くいくとは思わなかったが」
「そうか。どうやら知略でも僕の完敗だったみたいだね」
「悪いが俺は負けるわけにはいかない。正義の為にな」
「フッ、それだけはわからないね。最後に勝つのは我等がバダンなのだし」
ドクガロイドは力を振り絞ってそう言うとニヤリ、と笑った。
「まだそんなことが言えるのか」
ストロンガーは身構えた。もしもの時の用心にだ。
「そうだ、御前はもう充分やった。これ以上の行動は今度に差し支えるぞ」
その時ふと声がした。

街を覆う毒霧その十一

「誰だっ！？」
ストロンガーは声のした方を見た。そこには黒い皮のジャケットを着たサングラスの男がいた。
「あんた・・・・・・一体何者だ？」
ストロンガーはいぶかしんで声を掛けた。男はそれに対し無言である。
「三影・・・・・・」
ドクガロイドが彼を見て言った。
「暗闇大使からの命令だ。すぐに本部へ戻れとのことだ。そして再改造手術を受けろ」
「しかし・・・・・・」
「後のことは俺に任せろ。一刻も早く戻らないと手遅れになるぞ」
三影はドクガロイドを見て言った。彼はその目を見て頷いた。
「・・・・・わかりました。それでは後のことはお任せします」
「ああ。残った連中は無事この地から撤退させる。安心しろ」
「頼みますよ」
彼はそう言うと姿を消した。後には三影とストロンガーが残った。
「貴様、バダンの者か」
ストロンガーは彼に対し言った。
「そうだ。だが安心しろ。今貴様と戦うつもりは無い」
彼は表情を変えずストロンガーに顔を向けて言った。
「俺はここの作戦の後始末に来ただけだ。貴様を始末しろとの命令は受けていない」
彼はそう言うと懐から煙草を取り出した。
「それに俺が本気になったら貴様どころかこの街全てを灰にすることも出来る。この煙草を吸い終わるまでの時間でな」
「言ってくれるな。大した余裕だ」

「余裕ではない。正しいことを言っているだけだ。もっとも俺の言葉がはったりかどうかはいずれわかるだろうがな」
「・・・・・・・・・」
ストロンガーは沈黙した。確かに彼からはとてつもない気を感じるからだ。
「また会うだろう。その時は我がバダンの圧倒的な力を貴様等に見せ付ける時だ」
彼はそう言うと煙草を手で消した。
「そう、力だ。さっき貴様は正義がどうとか言っていたな」
「それがどうした」
ストロンガーは彼を睨み付けた。
「一つ言っておこう。力こそ正義、力ある者こそ正しいのだ」
「・・・・・・・・・」
ストロンガーは何も言わなかった。三影の言葉に賛同したからではない。全く異なる考えを持っていたからだ。
力の無い正義は悪に敗れる。だが心無い力は正義に敗れるからだ。
彼はこれまでの戦いでそれを知った。
「バダンの力、見せてやる。そしてその前にひれ伏すのだな」
彼はそう言うと姿を消した。後には獣のような気が残っていた。
大阪でのバダンの作戦を阻止した城はルミと共に東京への帰路についた。
「あれ、新幹線は使わないの？」
ルミの親戚の家を発とうとした城はルミに頼みごとをされたのだ。
「うん、行きも帰りもそうだと飽きちゃうし」
ルミは城のバイクの後ろに乗りたいと言ったのだ。
「そうか、俺は構わないけれど俺の運転はかなり荒っぽいぜ。それでもいいかい？」
「はい、それも旅の楽しみの一つですし」
「そうか、じゃあこれ被りな」
彼はそう言うとバイクのシートを取り外してその中からヘルメッ

トを取り出した。
「はい」
ルミはそれを受け取った。そして頭に被った。
「少し大きいですね」
「あ、済まない。昔の連れのヘルメットなんだ。子供にはちょっと大きいかな」
「城さんのお知り合いの方ですか。立花さんですか?」
「いや、違うよ。それを被っていたのは女の人だったんだ」
彼は優しい顔をして言った。
「女の人・・・・・・・・」
「そうさ、長い間一緒にいた。もう遠いところへ行ったけれどね」
彼はそう言うと正面へ顔を向けた。そして空を見た。
「遠いところへ?」
「そうさ、とても遠いところだ。二度と会えないような」
「・・・・・・・・・」
ルミにはそこが何処か何となくわかった。だがそれはあえて口にはしなかった。
「その人のヘルメット、私なんかが使っていいですか?」
「ああ、かまわないよ。あいつも喜んでくれるだろうし」
「はい」
ルミはそのヘルメットを再び被った。そして城の後ろに乗った。
「行くか」
「はい。おじさん、また来ますね」
二人はルミの親戚達に別れを告げると。アクセルを踏んだ。エンジンがかかった。
(ルリ子、見ていてくれよ。きっと悪い怪人達のいない世の中にしてみせるからな)
城は心の中で言った。
(だから見守っていてくれ)
「あれっ、城さん何か言いました?」

声に出していたのだろうか。不意にルミが尋ねてきた。
「いや、何も」
城はそれを否定した。バイクが走りはじめた。
「じゃあ帰るか」
「はい」
バイクはルミの親戚の家を後にした。そしてすぐに車の中に入っていった。

街を覆う毒霧　　完

２００４・１・３０

氷の空に舞う翼その一

「暗闇大使よ、日本での作戦の進行状況はどうか」
暗い一室で声がする。あの首領の声だ。
「思わしくありません。ライダー達によりこれまで八つの作戦が失敗に終わりました」
「大阪での作戦も失敗に終わったか」
「ハッ、仮面ライダーストロンガーにより。残った者達は三影英介が全て撤退させました」
「そうか、ライダーのパワーアップは予想以上のようだな」
「申し訳ありません。全ては私の責任です」
暗闇大使はそう言うと頭を深く垂れた。
「そう自分を責める必要は無い。怪人達は既に再改造に入っているのだろう」
「はい。ライダー達に敗れた怪人達は全て再改造を行なっている最中です」
「うむ、彼等が再改造を終えた時を楽しみにしているぞ」
首領は嬉しそうな声で言った。
「ところであの兵器の開発はどうなっているか」
機嫌をよくした首領は暗闇大使に問うた。
「全ては順調です。もうすぐその力を世に示すことになるでしょう」
暗闇大使もそう言ってニヤリ、と笑った。
「そうか、そして甦った怪人達とあの兵器で日本は我等のものとなるな」
「日本だけではございません。この世界が我等のものとなるのです」
彼は自信に満ちた声でそう言った。
「フフフ、大した自信だな。流石にあの男と血を分けているだけはある」

暗闇大使はその言葉に眉をピクリ、と動かした。
「首領、お言葉ですが私をあの男と一緒にしないでいただけますか」
「ほほう、何故だ？」
首領は声を少し上ずらせて彼に問うた。
「あの男は昔から力押ししか知らぬ単細胞です。しかし私は常に知略で戦ってきました」
ショッカーの時より地獄大使は前線で陣頭指揮を執ることを好む反面感情的で時として作戦を急に変更したりすることが多かった。その為ダブルライダーにそこを付け込まれ敗北を喫することが度々あった。
「フフフ、そうか。では先程の言葉は取り消すとしよう」
「有り難き幸せ」
暗闇大使は首領のその言葉に頭を垂れた。
「ところでこの日本での他の作戦はどうなっている？」
首領はあらためて彼に問うた。
「ハッ、残る二つの作戦はそれぞれ別々の怪人により指揮されています」
「その一つが日本アルプスだな」
「はい、そこにはセルゲイノフ＝シュイスキー、いえタカロイドを派遣し指揮を執らせています」
「タカロイドか。あの地での行動にはおあつらえ向きだな」
「はい。あの者ならば今回の作戦を必ずや成功させましょう」
暗闇大使は自信に満ちた声と顔で言った。
「そうか、期待しているぞ」
「ハッ、お任せあれ」
暗闇大使はそう言うとその部屋を後にした。部屋を出る時入口に立つ戦闘員達が敬礼した。
「うむ」
暗闇大使もそれに対し敬礼で返す。そしてある部屋に入った。
「いるか」

そこは何かしらの研究室のようである。ところどころにフラスコや実験用の器具が置かれている。
暗闇大使はそこで誰かを呼んだ。すぐに彼の後ろに何者かが表われた。
「お呼びですか、暗闇大使」
それはあの黒服を着た白人の壮年の男であった。慇懃な態度で口元に穏やかな笑みを浮かべている。
「ゼクロスの行方はわかったか」
暗闇大使は目だけで彼を見て尋ねた。
「はい。どうやら東京にいるようです」
彼は静かな口調で言った。
「そうか。東京か」
暗闇大使はそれを聞いて目を少し光らせた。
「今あの地には誰もいなかったな」
「はい。時折戦闘員達を送り込んでおりますが」
「そうか。しかしあの地に戦闘員達だけではやはり心もとないな」
「そうですね。今関東には我等の作戦を妨害したライダー達が次々と戻って来ておりますから」
「それはわしも聞いている。ストロンガーも戻って来たそうだな」
暗闇大使は男から目を離して言った。
「ご存知でしたか」
「うむ。ドクガロイドが戻って来たしな。すぐに再改造に入らせた」
「それは私も聞いています。何でも超電子の力を長時間使えるようになっていたとか」
「あの力を長い間使えるようになるとはな。厄介だな」
「はい。しかしそれよりも東京には・・・・・・」
「わかっている。話が最初に戻るな」
暗闇大使は目を再び男へ向けた。
「ゼクロスをどうするかだ。伊藤博士はどうやら自分のかっての友人達にあの男を見せたいようだな」

「海堂博士や志度博士に、ですか」
「そうだ。だからこそ東京へ向かっているのだろう。さもないとあの場所へ行く筈がない」
「と、なれば城南大学ですか」
「おそらくな。だが気をつけたほうがいいな、あの大学には」
「そうですね。緑川博士の例もありますし」
緑川博士とは城南大学において生化学の権威であった人物である。本郷の師であり伊藤博士や海堂博士達とは先輩、後輩の間柄である。穏やかな人格者として知られていたがショッカーに脅迫されやむをえなく協力していた。そして本郷を仮面ライダーに改造した。だが良心の呵責に耐えられなくなった彼は本郷を救出し彼と共にショッカーの基地を脱出した。
しかしその途中でショッカーの刺客くも男に殺されてしまう。

氷の空に舞う翼その二

彼等以外にもこの大学はライダー達と何かと縁がある。風見志郎や城茂はこの大学にいたしライダー達がしょっちゅう出入りしている。彼等にとって鬼門の一つなのだ。

「あの大学にライダー達が集結している可能性もある。いや、おそらく少なくとも二人はいるだろう」

「二人、ですか」

男はその言葉に眉を顰めた。

「立花藤兵衛や滝和也もいる。このままではゼクロスは奴等の手に落ちてしまうだろう」

「そうなるとまずいことになりますね」

「ああ。これまでそれで多くのライダーを敵に回してるからな」

彼等悪の組織により改造されたライダーも多いのである。

「それだけは避けねばならん、行ってくれるか」

暗闇大使はようやく本題に入った。鋭い眼で彼に言った。

「了解しました」

彼はすぐにそれに答えた。

「頼むぞ。今あの地に行けるのは御前しかいない。三影もここに戻り次第すぐに向かわせる」

「いえ、彼は必要ありません」

男はそう言ってニヤリ、と笑った。

「ほほう、大した自信だな」

暗闇大使はその言葉を聞いて目をほんの少しだが細めた。

「ゼクロスのことは私一人で充分です。それに」

「それに・・・・・？」

「もしライダー達がいるのならそれはそれで好都合。同志達の仇を討てますしね」

彼はそう言うと目の光を強めた。それは憎しみで光っていた。

「そうか、流石は怪人達の長だけはあるな」
「それだけではないですがね。仲間の仇は地の底まで追い詰めて仇をとる。それが我等バダン怪人軍団の掟ですから」
「そうだったな、それを忘れていた」
「報告をお楽しみに。ゼクロスのことはお任せを」
彼はそう言うと姿を消した。後には気配一つ残ってはいなかった。
「期待しているぞ、フフフ」
暗闇大使はそれを見送って笑った。地の底から響く地獄の鬼のような笑いであった。
筑波洋は日本アルプスにいた。丁度長野県と岐阜県の境の辺りである。
「ふう、やっぱり何時来てもいいな、ここは」
彼はハングライダーに乗り下を見下ろしていた。下は雪で白く化粧された山々が連なっている。
『洋さん、そっちはどないでっか』
不意にヘルメットの通信機に声が入る。がんがんじいの声だ。
「こちらは今のところ何もないな。そっちはどうだ?」
筑波はマイク越しに彼に対して言った。
『こっちも何もないです。見渡す限り雪と山ばっかりですわ』
がんがんじいは実際に山々を見渡すような声で言った。
「わかった、暫く休憩しよう。今からそちらに向かう」
『了解』
筑波はそう言うと通信を切った。そしてハングライダーを旋回させた。
「ここにはいないか。次は槍ヶ岳の方へ行ってみるか」
彼はそう言いながらグライダーを飛ばした。そしてある山の上に着地した。
「それにしてもここはえらく寒いところでんなあ」
がんがんじいは缶詰を開けコンビーフをパクつきながら言った。
「ああ、我が国の屋根と言われているところだしな」

筑波はコーヒーを飲みながらそれに答えた。見れば食べ物を温める道具やアルコールランプ等が置かれている。
「だから防寒器具をたっぷり用意したんですな。凍えんように」
「うん、ここは下手をすると凍死しかねないようなところだからな」
筑波は顔を引き締めて言った。
「えらく怖いところでんな」
「山はね。急に自然が変わるし雪崩もある。一瞬たりとも油断は出来ないんだ」
「流石ですな。伊達にハングライダーやってたわけやありませんわ」
「おいおい、がんがんじいだって俺との付き合いは長い筈だろう。今までこういった山で何度も活動してきたじゃないか」
「あ、そういえば。ナスカも高原でしたし」
「そう、あそこも結構ややこしいところだったしな。ここも気が抜けないぞ」
「はい」
がんがんじいは乾パンを食べながら彼に答えた。そして最後に熱い紅茶を飲む。
「それにしてもバダンはここで何をするつもりですやろなあ」
「うん、それなんだが。雪崩でも起こそうとしているんじゃないかな」
「けどそれでしたらありたきりですやろ。わいはどうも連中が何かでっかいことを企んでいるような気がするんですわ」
「でっかいことって？」
「そこまでは・・・・・」
がんがんじいはここまで言うと口をくぐもらせた。
「ただ何となくそんな気がするんですわ。連中はネオショッカーの頃からそうした事をしますから」
「確かにな。色々とやってくれた」
東京全滅作戦にダムの破壊作戦。ゼネラルモンスターも魔神提督も派手な作戦をよく計画した。

氷の空に舞う翼その三

「魔神提督の作戦は何かと奇をてらったものが多かったがな。その分苦労させられた」
筑波はあの時の戦いを思い出しながら言った。その時の経験が今の彼を支えている。
「ここで何をやるかはまだわからない。だが気を抜いてはいかないな」
「はい。連中そこに付け込んで来ますからな」
二人は食事を終えると缶詰や容器を直した。そしてすぐにその場を後にした。
「あれっ、おやっさんは？」
アミーゴに戻って来た本郷猛は立花がいないことに首を傾げた。
「あらっ、城南大学に行ったけれど」
店番をしている純子が彼に話した。
「城南大学・・・・・。一体何の用だろう」
本郷はその話を聞いて考え込んだ。
「おい本郷、何言ってるんだよ。城南大学にすぐ集まってくれっておやっさんから言われてるだろう」
そこへ店の奥からある男が姿を現わしてきた。
「一文字」
「すぐに行こう、おやっさんが待っているぜ」
「ああ。しかし何故ここに」
「それは御前が来るのを待っていたのさ。一人より二人のほうがいいだろ」
「何言ってるのよ、さっきからコーヒーやケーキせびっていた癖に」
純子が口を尖らせて言った。
「おいおい、こんな時に本当の事を言うなよ」
「今言わなくて何時言うんですか。まったくデストロンと戦ってい

た時と全く変わってないんだから」
「ハハハ、一文字は相変わらずだな。まあいい、城南大学に向かうか」
「ああ」
「あっ、隼人さんコーヒー代」
「つけにしておいて・・・・・って駄目かな」
「当然です。私そういうの嫌いなんですから」
彼にとって不運だったのは今ここにいるのが純子だったことか。
彼女はチコやマコと比べてしっかりとした真面目な人間なのである。
それが立花の信頼を得た最大の理由の一つでもある。
「はいよ、じゃあこれで」
「有り難うございます」
一文字はコーヒー代を払って店を後にした。店の前では本郷が待っていた。
「行くか」
「ああ」
二人はバイクに乗るとエンジンを入れた。そして店を後にした。
「それにしても全く正反対なのに何であんなに仲が良いんだろう」
純子は走り去っていく二人を見ながら呟いた。
「正反対だから今までやっていけてるのかな。お互いを補い合うってことで」
彼女はふとそう考えた。
「それに私なんかが考えもつかない事が色々とあるんだろうな。それだけ長い間戦ってきたんだし」
その通りであった。二人は共に長きに渡って共に戦ってきた。だからこそ培われてきた絆なのである。
二人は城南大学へ進む。十字路に出た。そこで一台のバイクと合流する。
「敬介か」
「どうも。アマゾンは先に行ってますよ」

彼は二人に対して言った。そして三人となり十字路を前へ進む。
城南大学へ着いた。その正門にはアマゾンがいた。
「三人共、こっち」
アマゾンは三人を案内する。そこは休憩所だった。
そこに立花はいた。風見も一緒だった。
「おう、三人共来たか」
立花は彼等の姿を見ると声をかけた。
「おやっさん、どうしたんですかいきなり城南大学に呼んで」
「そうですよ、ここで何かあったんですか」
本郷と一文字は立花に声をかける。
「そうだ、何かあったんだよ」
立花は険しい目をして二人に言った。
「まさかバダンが!?」
神が言った。
「いや、違う。違うがかなり厄介なことになっちまっている」
「厄介な事!?」
三人は口を揃えて言った。
「そうだ、実はこの大学に伊藤博士という人が来たんだが」
「伊藤博士・・・・・・・。この大学で物理学を修めていたあの伊藤博士ですか?」
本郷が言った。
「その人なら俺も知っているぞ。物理学の世界的権威の一人で数々の賞も貰ったっていう。最近行方不明だったと聞くが」
一文字も言った。
「そう、その伊藤博士だよ。海堂博士や志度博士を訪ねて来たんだ」
「お二人に・・・・・・。何故ですか?」
神が尋ねた。
「それはこれから言う。悪いが来てくれ」
「はい」
三人は立花に従った。風見とアマゾンもそれに従う。

五人のライダーと立花は改造室へ向かう控え室へ向かった。かって自分達が再改造を受けたあの部屋の隣にある。

「まさかまたここへ来るとはな」

一文字が部屋に入って言った。

「ああ。もう来る事は無いと思っていたが」

本郷がそれに合わせるように言う。二人共何故か不思議な気分になる。

「御前達にとっちゃあ何かと考えさせられる場所だろうな」

立花は二人、いやそこにいる五人に言った。

彼等はライダーになりたくてなったのではない。少なくとも最初は。風見とて肉親の死が無ければ改造人間になろうとは思いもしなかったであろう。

しかし改造手術を受けライダーとなった。機械の身体となったのである。

その苦悩は果てしなかった。だが悪と戦う為それを心の奥底に封印しているのだ。

本心では改造手術なぞ受けたくはない。だが悪と戦いそれを討ち滅ぼす為にはどうしても必要だったのだ。

「・・・・・・・・・」

彼等は何も語らない。そんな彼等に対し立花は強い、それでいて優しい声で言った。

氷の空に舞う翼その四

「だけどな、御前達の決意があるからこそこの世界は悪に支配されずにすんでいるんだ。それだけは忘れないでくれよ」
「はい・・・・・・・・・」
彼等はその言葉に頷いた。ライダー達のことを誰よりもよく知る立花の言葉だけに心に響くものがあった。
「ところで結城さんは？」
神が尋ねた。
「海堂博士達のところへ行っている。何かの手伝いをしているらしい」
風見が言った。
「そうですか。あの人も何かと忙しいですね」
その時扉が開いた。
「ガウッ？」
アマゾンがそちらへ顔を向けた。そこには彼等が見知った男がいた。
「おやっさん、たった今戻りましたよ」
城茂であった。ルミも一緒である。
「おう、戻ったか。その分だと大阪の方はカタがついたみたいだな」
「ええ。中々手強い奴でしたけどね」
城はそう言うと部屋に入って来た。
「まさかここに来ているとはね。正直驚きましたよ」
「ああ、海堂博士達のことが気になってな」
「というと伊藤博士とも何か関係が？」
本郷が尋ねた。
「ああ。博士と一緒にいる男のことでな」
立花はそう言うと目を光らせた。
「一緒にいる男！？」

風見以外のその場にいるライダー達が思わず声をあげた。
「そうだ。実は大柄でやけにたくましい男が一緒にいるんだがな」
「その男が何か？」
神が目を光らせた。
「それについてはこっちへ来てくれ」
そこに結城が入って来た。
「結城」
風見が彼の方へ顔を向ける。他のライダー達もそれに続く。
「実は皆に見て欲しいものがある」
その顔は仮面の様に動かない。まるで見てはいけないものを見てしまったかのように。
「おい、どうしたんだ一体」
「いつもの結城さんらしくない」
一文字とアマゾンが彼の様子を変に思い言った。
「ちょっと来てくれ」
結城はそれに答えず同志である六人のライダー達に言った。
「・・・・・何か重大なことらしいな」
本郷は彼の表情と様子を見て言った。
「よし、行こう。一体何処だ」
「こちらです」
結城はライダー達を連れて外に出た。立花も一緒である。
しかしルミは残った。自分の考えで残った。何故か自分は行ってはいけないと思ったからだ。
結城が案内したのは改造室を下に見る部屋だった。そこから改造の検査や指示を行なうのだ。
「おお、皆来てくれたか」
そこには海堂博士がいた。志度博士も一緒である。
「博士、一体どうしたんですか」
一文字が尋ねた。二人はその問いに表情を暗くさせた。
「君達に会って欲しい人がいるんだ」

海堂博士はそう言うと部屋の奥の扉を手で指し示した。するとそこから一人の白衣の男性が現われた。
「貴方は・・・・・伊藤博士じゃないですか」
風見はその人物の顔を見て言った。かって城南大学で細菌研究に従事していた彼はその博士の顔を知っていたのだ。
「久し振りだね、風見君」
伊藤博士は風見の顔を認めると微笑んで言った。
「本郷君や城君もいるな。君達の活躍は聞いているよ」
「はい」
彼は本郷とも面識があった。共にある研究に従事していたこともある。
城は彼の講義を受けていたことがある。もっとも講義は寝てばかりであったようだが。
「そして貴方の事も。立花さん、またお会いしましたね」
立花に顔を向けて言った。
「ええ。あの時はまさかこんなところでお会いするとは思いませんでしたよ」
立花は彼に対して言った。
「私もですよ。二人に話を聞いて貴方があの立花藤兵衛と知った時は本当に驚きました」
「おや、そうですか。わしも有名になったもんですなあ」
立花は笑って言った。
「そう、おやっさんは確かに有名人ですからね」
一文字がそこで口を挟んだ。
「そう歴代の組織にとっては俺達ライダーの協力者として目障りな存在だったのだし」
神も言った。その言葉に一同気を張り詰めた。
「そういやそうだったな。おやっさんが命を狙われたことなんかしょっちゅうだったし」
城が言った。彼のこの言葉に一同は思い当たった。

「おやっさんの事を知っているとは。博士、貴方まさか」
風見が博士を見て言った。博士はそれに対し口を開こうとする。

氷の空に舞う翼その五

「それは私が言おう」
志度博士が口を開いた。
「伊藤君にとっても自分で話すのはあまり気分がいいものではないだろうし。伊藤君、それでいいかな」
「話してくれるか、申し訳ない」
伊藤博士は友の申し出に感謝の意を述べた。
「伊藤君は今までバダンに捉われていたんだ。彼の頭脳に目をつけた連中に拉致されてね」
「やはり。連中のやりそうなことだ」
一文字が眉を顰めた。それは他の者も同じだった。
「そしてバダンの行いに我慢出来なく遂に組織を脱出したんだ。一人の青年と共に」
「青年？それは今何処にいる？」
アマゾンがそれに対し問うた。
「そこにいるよ。見たまえ」
志度博士はそう言うと下にある改造室を指差した。
改造室はガラス越しに下を見ることが出来る。部屋には様々な機械や機具が置かれている。
そしてその中央には寝台が置かれている。ここにいるライダー達もあの寝台に横たわり改造手術を受けた。
今寝台には一人の若い男が寝かされている。逞しい上半身は裸で下半身は白いスラックスである。
男は目を閉じ眠っている。どうやら麻酔で寝かされているようだ。
「あれっ、アミーゴで博士と一緒にいた青年じゃないか」
立花は彼の姿を見て言った。
「博士と一緒？じゃああの青年は・・・・・・」
「ああ。彼もバダンにいた」

本郷に対し海堂博士が答えた。
「そうだ、村雨良という。私のかっての友人の息子さんだ」
「村雨？ひょっとして村雨教授のことですか」
「おや、知っていたか」
博士は神の言葉に目を動かした。
「はい。生物学の分野で有名な人ですからね。しかし十年以上前にドライブの最中奥さんと一緒に事故死したと聞いていますが」
「ああ。確かに彼はもうこの世にはいない。あそこにいる村雨君は彼の忘れ形見だ」
「そうだったんですか。彼があの村雨博士の」
神は下の改造室を見下ろして呟いた。
「そう、南米の大学に留学していたが今はこうして日本にいるんだ」
「その前にはバダンにいた、ですね。やはり彼も連中にさらわれたんですか？」
風見の言葉に三人の博士は顔を暗くした。
「・・・・・そうだ。そして私と共にここまで来たんだ」
伊藤博士が言った。
「それで何故あそこにいる？ここにいないほはどうしてだ？」
アマゾンが尋ねた。
「アマゾン、それは・・・・・」
結城が彼に言おうとする。
「まさか・・・・・」
皆薄々は感じていた。だが確たる判断は避けていた。それを降すのは心の奥で抵抗があったからだ。
「皆これを見てくれ」
志度博士はそう言って数枚の大きな写真を取り出した。それはレントゲン写真だった。
「な・・・・・・・・」
それを見た結城以外のライダーと立花は息を飲んだ。そこには彼等がよく知る身体が映し出されていた。

筑波とがんがんじいは日本アルプスの探索を続けていた。二人で北から南に降りながら続けていた。
「やはり何もありまへんなあ」
「ああ。もしかしたら、というような場所は多いのにな」
夜テントを張り二人はその中で話していた。
「ひょっとしたらワイ等のことに気づいてるんちゃいますか？」
がんがんじはふとその言葉を口にした。
「どうしてだい？」
筑波はそれについて尋ねた。
「いえ、連中も何かしら計画してたら当然ワイ等の事を警戒しますやろ。そうしたらやっぱり見つからんようにするやろしワイ等をどっかで監視しますやろし」
「そういえばそうだな。俺もハングライダーで上から探し回っているがあれはかなり目立つしな」
「そうでっしゃろ。ここは地道に二人で歩いて探しませんか？」
「う～～～ん、そうだなあ」
筑波はその言葉を聞いて考え込んだ。
「そうしてみるか。連中も俺達の姿が見えないと逆に俺達を捜して偵察隊とかを出して来るだろうし」
「そうそう、そしてそこを叩いて連中の情報を聞き出せばええですやん」
「よし、そうしよう」
二人はこれからの捜査のやり方を決定した。そして翌日早速それを実行に移した。
それから三日後だった。二人は辺りを探る不審な一団に気付いた。二人はそれを認めると岩陰に隠れた。
「あれでっしゃろか」
がんがんじいは筑波に尋ねた。
「多分な。やはりかなり気になっていたみたいだな」
筑波はその不審な連中を見ながら答えた。

氷の空に舞う翼その六

「がんがんじいは右に回ってくれ。俺は左に行く」
「へい」
がんがんじいは筑波の言葉通りに動いた。
「気をつけてくれよ。今は鎧を着ていないんだからな」
「はい」
彼はそう答えると右の岩山に消えた。
「この辺りの筈だが」
その男達は辺りを探りながら前へ進んでいる。一見登山者風だがその目付きが彼等がそうではないことを教えている。
彼等は二つの大きな岩の間に来た。その時だった。
「ムッ！？」
右からがんがんじい、左から筑波が現われた。そして彼等を瞬く間に倒していく。
「クッ、しまった！」
彼等も応戦しようとする。だが不意を衝かれ対応が取れない。一方的にやられていく。
「バダンだな」
筑波は残った最後の一人の後ろに回りその首を絞めながら問うた。
「グググ・・・・・」
彼は答えようとしない。だがそれはもうわかっていることだ。
「言え、この地で一体何をしようとしている」
筑波は問い詰めた。喋れるようにきつくは締めていない。
「言えば命だけは助けてやる。さあ言え」
命、という言葉に彼は反応した。
「本当か！？」
「俺達はバダンとは違う、約束は守る」
筑波は言った。

「そうか、それなら・・・・・・」
彼は言おうとした。しかしそれは出来なかった。
その時何処からか何かが飛んで来た。そして男の胸を打った。
「ガハッ・・・・・・！」
「ムッ！」
それは鳥の羽根だった。それもかなり大きいものだ。
羽根は男の胸を貫いていた。どうやら心臓を貫かれたらしい。男は即死していた。
「口封じでんな。奴等の常套手段や」
がんがんじいはそれを見て忌々しげに言った。
「ああ。これでふりだしに戻りか」
筑波は男の胸からその羽根を抜き取り舌打ちした。
「・・・・・しかし大きな羽根だな。こんな大きな羽根は見た事が無いぞ」
彼はその茶色の羽根を見ながら言った。どうやら何かしらの猛禽類の羽根らしい。
「どうやらここにいる改造人間のタイプだけはわかったみたいだな」
彼は言った。がんがんじいはその言葉について尋ねた。
「それは？」
「おそらく鳥の改造人間だな。多分空も飛べるんだろう」
「空でっか」
がんがんじいはそう言うと上を見上げた。青く澄んだ空である。
「ああ。望むところだ。空なら俺の庭場だからな」
彼も空を見上げた。そこに戦いの場を見ていた。
二人は次の日も捜査を続けた。やがて怪しげな一団を見つけた。
二人はそれを認めると身を隠した。
「またいますな」
「ああ、また俺達を探しているんだろう」
「そう、その通りだ」
その一団のうちの一人が言った。

「何っ！？」
筑波もがんがんじいもその言葉に驚いた。人には聞こえない筈の距離なのに。
「俺を甘く見るなよ。これ位の距離ならよおく聞こえるぜ」
そこにいるのは銀の髪に褐色の肌を持つ男である。整った目は黒い。青い上着に白いズボンを身に着けている。山にいるとは思えない軽装である。
「出て来な。相手をしてやるよ」
彼は筑波達の方へ顔を向けて言った。二人はその言葉に従い姿を現わした。
「感謝するぜ。俺の言葉通り出て来てくれてな」
彼はそう言って微笑んだ。
「まずは名乗ろうか。俺はマオイ＝デ＝カナム。人間だった頃はオーストラリアにいた。所謂アボリジニーってやつだ」
アボリジニーとはオーストラリアの先住民である。
「人間だった、か。今は違うというのだな」
筑波は彼を見据えて言った。
「ああ、その通りだ。今はバダンの改造人間さ」
彼はニヤリ、と笑った。
「タカロイド。それが今の俺さ」
「タカロイド・・・・・・。それでは昨日の羽根は貴様のものか」
「その通り。秘密を知られるわけにはいかなかったものでね。口封じってやつだ」
「だが生憎だったな。あの羽根でここにいる改造人間のタイプがわかった」
「それは迂闊だったな。しかしどの道あんた等はここで死ぬんだから構わないだろ。こう言っちまうとあいつを始末した意味も無くなっちまうけれどな」
彼はシニカルに笑ってそう言った。
その言葉と共に彼の周りにいる男達が服を脱ぎ捨てた。戦闘員達

が現われた。
そして筑波達を取り囲む。タカロイドはそれを見て笑っている。
「挨拶はこれ位にしておくか。死にな」
その言葉が号令となった。戦闘員達が一斉に襲い掛かる。
二人は拳を振るった。そして戦闘員達を倒していく。
筑波もがんがんじいも伊達に今まで多くの戦いを潜り抜けてきたわけではない。棒を手にする戦闘員達を寄せ付けない。
逆に棒を奪った。そしてそれで戦闘員達を打ちのめしていく。
「へえ、やっぱり強いね。じゃあこっちも本気を出すか」
タカロイドは二人を見て言った。そして両腕を胸のところでクロスさせた。
背中から翼が出た。そして顔が羽毛に覆われていく。
口が嘴となる。そして指が鋭い爪になる。
「それが貴様の本当の姿か」
筑波は彼の姿を見て言った。

氷の空に舞う翼その七

「そうさ。どうだい、格好良いだろう」
彼は自信に満ちた声で筑波に対して言った。
「姿だけじゃないぜ。俺にはこんな素晴らしい力がある」
そう言うと背中から一枚の羽根を取り出した。そしてそれを筑波へ投げ付ける。
「ムッ！？」
筑波はそれを見て危険を察した。咄嗟にがんがんじいを突き飛ばす。
「洋さんっ！？」
弾き飛ばされ尻餅をついたがんがんじいは思わず彼の方を見た。
その彼のいた場所は爆発に包まれていた。
「これで一丁あがり。楽だねえ」
タカロイドはその爆発を見て言った。顔には笑みが浮かんでいる。
「これで俺達の計画を邪魔する奴はいなくなった。安心して計画に取り組めるな」
「それはどうかな」
その時上から声がした。
「へえ、生きていたみたいだな」
タカロイドは上を見上げて言った。そこには彼がいた。
緑の空を舞うライダースカイライダー、彼がそこにいたのだ。
「じゃあ俺もそこに行かせてもらうか。折角空を飛べるんだしな」
彼はそう言うと翼を羽ばたかせた。そして空に飛び上がった。
「行くぜ」
彼はスカイライダーの高さに上がるとそう言った。そして背中の羽根を投げ付けた。
スカイライダーは横に滑った。そしてその羽根をかわす。
タカロイドは羽根を次々に投げ付けた。だがそれは全く当たらな

い。
「やるねえ、やっぱりそう簡単には当たらないか」
タカロイドはそう言ってまた笑った。そして羽根を投げるのを止めた。
「じゃあやり方を変えるか。接近戦だ」
彼は背中の翼を羽ばたかせた。そして前へ突進した。
そして両手の爪で切り掛かる。ライダーはそれを紙一重でかわした。
「むう・・・・・」
風を切る音がした。ライダーはその音を聞いて思わず声を漏らした。
「どうだ、俺の爪は。当たると怪我位じゃあ済まないぜ」
彼はそう言うと再び切りつけて来た。スカイライダーはそれに対し振り下ろして来た左腕を掴んだ。
「ムッ!?」
そして背負い投げを加える。タカロイドはバランスを崩し下へ投げ落とされる。
しかし羽ばたき姿勢を取り戻す。そして空中で体勢を元に戻しライダーの方へ向き直る。
そこへライダーが急降下する。そして膝蹴りを浴びせようとする。
「甘いな」
だがそれは受け止められた。そして今度は彼が地面へ投げ付けられる。
しかしそれより前にライダーは体勢を整えた。そして上へ上昇しパンチを食らわせる。
「グフッ」
そのパンチは腹に入った。タカロイドは思わず声を漏らした。
「効いたぜ、噂以上のパンチだ」
タカロイドはそれでもまだ余裕のある口調であった。見掛け以上の耐久力を持っているようだ。

「どうやらあんたを倒すのはそうそう簡単にはいかないようだな。今日はこれ位にしておこう」
そう言うと間合いを離し上へ飛び上がった。
「クッ、待て！」
スカイライダーはそれを追おうとする。だがタカロイドはそれを振り切るかのように上空へ飛び去った。
「速いな、何という翼の動きだ」
ライダーは怪人が消えた方を見て思わず呟いた。後には蒼い空が拡がっていた。
「逃げられたんは残念でしたな」
戦いが終わり筑波とがんがんじいはテントの中で夕食を採っていた。
「ああ。だが怪人のタイプもわかったし収穫はあったな」
筑波は乾パンを食べながら言った。
「空を飛ぶ怪人でっか。それでしたら洋さんにとっては別に苦にはなりませんな」
「そうともばかり言えない。あいつの飛翔能力はかなり高いぞ」
筑波はがんがんじいの言葉に対して首を横に振って言った。
「それに空からの奇襲はライダーになっていない時には対処が難しい。例えば今襲われたらどうだ」
「そ、それはかなり怖いでんな」
がんがんじいは筑波の言葉に顔を振るわせた。
「だろう。まして今はこんなちっぽけなテントだ。襲われたらひとたまりも無い」
「確かに。あいつ爆弾まで使いますからなあ」
「まあ夜は心配無いだろうけれど。あいつはタカの改造人間だし。いや、改造されているから一概にそうとは言えないか」
「そうでんな。バダンがそんなとこ見逃すとは思えませんし」
「これからは交代で見張りをしよう。何時奴等が来てもすぐに対処出来るように」

「はい」
こうして二人は交代で見張りをするようになった。一人がテントの外で見張りもう一人が中で休む。そうして夜の間は見張りをしていた。
「成程ねえ。考えたものだ」
それを離れた空の上から見ている者がいた。
「俺の目が改造されている事も感付いていたか。やっぱり切れる奴みたいだな」
タカロイドである。人間態で背中から翼を生やしている。
「まあこうでなくちゃあ面白くはない。楽しませてもらうとするか」
彼はそう言うとその場を飛び去った。後には風だけが残った。
翌日筑波とがんがんじいは捜査を続けた。だが手懸かりは得られなかった。
「昨日の事で警戒しているな。上手く隠れている」
夕刻になった。筑波は沈もうとする夕陽を見ながら言った。

氷の空に舞う翼その八

「ええ。それにどっかからワイ等を見ているみたいでんな」
がんがんじいは空を見上げて言った。
「多分な。だがそれは仕方無い」
筑波は夕陽から目を離して言った。
「今日はもう休むか」
「えっ、もうでっか！？」
がんがんじいは筑波の言葉に驚いた。彼はいつも夜になってもまだ捜査をしようと言うのに。
「ああ。今日はもう見つけられそうにもないしな」
「はあ、そうでっか」
呆気に取られながらもそれに従った。二人はテントを張り食事を採るとすぐに休息に入った。
「何だ、もう休んでいるのか」
指令室でタカロイドは上空に飛ばしている看視カメラ搭載の小型監視機が映し出す映像を見ながら言った。
「またえらく早いですね」
監視機を操縦する戦闘員も言った。指令室からリモコン操縦しているのだ。
「ああ。だが監視を続ける必要はあるな」
「そうですね」
夜になった。テントの外にはがんがんじいがいる。あの例の鎧を着ている。
「そろそろライダーが出て来るかな」
だがライダーは出て来なかった。がんがんじいがずっとテントの外にいる。
「？どういう事だ」
タカロイドはそれを見ていぶかしんだ。

「まさかずっと寝ているのでしょうか」
「それは無い。あの男は他人にやらせて自分だけ寝ているような男じゃない」
彼は戦闘員の言葉を否定した。
「もしかして何か企んでいるのか？」
彼はふと考えた。奇襲はどのライダーも得意戦術にしている。特に自由に空を駆るスカイライダーはそれが特に有効なライダーの一人である。
その時であった。映像が突如として消えた。
「ムッ、どうした！？」
「わかりません、操縦も全くききません」
監視機を操る戦闘員が言った。
「クッ、どうやらライダーに発見されたか」
タカロイドは舌打ちした。彼の予想はある程度的中したのだ。
「すぐに偵察隊を出せ。奴等から目を離すわけにはいかん」
「わかりました」
すぐに偵察隊が出された。彼等はハングライダーに乗りテントへ向かう。
だがそこにテントは無かった。ライダーもがんがんじいもいなかった。
「おのれっ、監視されていると察して場所を変えたか」
彼は報告を聞いて顔を顰めた。
「くまなく探せ。そして何としても見つけ出すんだ」
「わかりました」
戦闘員達はタカロイドからの指示を受け捜索を続けた。だがライダー達は一向に見つからない。やがて朝になった。
「仕方無いな。一旦戻れ」
タカロイドは彼等を基地へ帰した。戦闘員達のハングライダーは反転して戻って行く。それを見る影があった。
次にはタカロイド自らが出てライダー達を探した。だが結局彼等

は見つからなかった。
「おかしいな、一体何処に消えたんだ」
彼は基地に戻り首を傾げて言った。
「もしかするとここから去ったのではないでしょうか」
入口に入ろうとする彼に対して戦闘員の一人が言った。
「それはない。我等がここにいる限りはな」
彼はそれを否定した。
「この日本アルプスの地下で核爆発を起こし地殻変動を起こさせ日本に大地震を起こす。この作戦を知っているかどうかまではわからんがな」
「そうですね。もし奴等がこの作戦を知っていたら絶対に阻止するでしょうね」
「そこまで知っているとは思えんが。だが俺達の存在を知っているならば絶対に来る、それが奴等ライダーだ。それだけは心に留めておけ」
「わかりました」
「そして作戦の進行状況はどうなっている?」
タカロイドは話題を作戦の方へ向けた。
「ハッ、順調です。あとは時限装置を入れ爆発させるだけです」
「よし、そうなればもうここに留まる必要も無くなる。後は本部で作戦成功の祝杯を挙げるだけだな」
「はい。ライダー共の悔しがる姿が目に浮かぶようですな」
「うむ。連中を倒すのは何時でも出来る。今は作戦を成功させるのを優先させねばな。だが」
彼は上機嫌で話した後顔をキッとさせ戦闘員達に言った。
「ライダー達の監視は続けなければな。そして一刻も早く捜し出せ」
「わかりました」
戦闘員達は敬礼した。タカロイドはそれを受け基地へ入って行った。
それを岩陰から見る影があった。

「聞きましたか、今のを」
「ああ、予想通りだな。とんでもない事をかんがえているな」
影は二人いる。岩陰で話している。
「これは悠長にやっている場合じゃない。行くぞ」
「はい」
二人は岩陰に隠れながら進んだ。そして基地の入口に近寄る。
入口には戦闘員達がいる。二人は彼等を倒し中に入った。

氷の空に舞う翼その九

基地内に警報音が鳴り響く。皆その音に驚き慌てて部署に着く。
「一体何事だ!?」
タカロイドが指令室に入って来た。既に怪人態になっている。
「大変です!核爆弾の時限装置が全て破壊されました!」
戦闘員の一人が狼狽した声で報告した。
「何っ!それで爆弾はどうなった!」
「信管を全て取り外されています!最早爆発を起こす事は不可能です!」
「クッ、ライダー達の仕業か!?」
彼は一連の報告を聞き咄嗟に彼等に考えを巡らせた。
「おそらく何時の間にか基地内に侵入したものと思われます」
「しかしこの場所をどうやって・・・・・クッ、あれか」
彼は悟った。偵察隊が尾行されていたのだ。
「どうやら監視機の存在に気付きそれを破壊したら偵察隊を送る事まで考えていたようだな。やはり一筋縄ではいかん奴だ」
「爆弾は如何致しましょう?」
「最早何の意味も無い。捨てておけ。どうせライダー達が解体してしまう」
「ハッ」
「それよりももうここにいる意味は無い。本部へ撤退するぞ」
「わかりました」
タカロイドの言葉に従い戦闘員達は基地の脱出に取り掛かった。
ハングライダーで次々と飛び立つ。最後にタカロイドが出た。その翼を羽ばたかせる。
彼等は空から逃げた。空は白い。早朝だからか。
「・・・・・この空を何時か紅蓮に染めてやる」
タカロイドはその白い空を見て言った。破壊と殺戮、そして恐怖。

それがバダンの世界なのだ。
前から何かが飛んで来た。見ればハングライダーである。
「まさか・・・・・・」
戦闘員の一人がそれを見て呟いた。それに乗っていたのは彼だった。
「来たか・・・・・・」
タカロイドもその姿を見て呟いた。筑波は真っ直ぐにこちらへ飛んで来る。
ハングライダーはもうすぐ前に来た。彼はそこで飛び降りた。

スカイ・・・・・・
両腕を脇の下に引っ込めた。そしてまず右の拳を突き出す。
それはすぐに引っ込めた。左手の平をひろげて突き出しそれを手刀にした後右へ持って行く。
身体が黄緑のバトルボディに包まれる。腕と胸は赤くなり手袋とブーツが黒くなる。
変身！
左手を右から左へ旋回させる。そしてその左手を脇に入れ右手を左斜め上へ突き出させた。
顔の右半分が黄緑の仮面に覆われる。そして左半分も。その眼は深紅である。

光が全身を覆った。そしてそこには空に立つライダーがいた。
「やはりここで戦う事になったか」
タカロイドはスカイライダーを見て言った。
「この前の勝負の決着、今着けてやる！」
スカイライダーは彼を指差して言った。
「フン、望むところだ。行くぞ！」
タカロイドも言葉を返した。戦闘員達のハングライダーが前に出た。

戦いがはじまった。ライダーは自分の周りを舞うグライダーを見た。

戦闘員達はグライダーを操りながらグライダーに取り付けられているボウガンを取り出した。そしてそれをライダーへ向けて放って来た。

「トォッ！」

スカイライダーはそれを素早い飛翔でかわす。そして左右に激しく舞う。

グライダーに近寄る。そして戦闘員に拳を浴びせる。

別のグライダーの上に来た。その翼に蹴りを入れ穴を開ける。

こうして戦闘員達のグライダーを次々と落としていく。空中を自在に舞うライダーにとって小回りの利かないグライダーは敵ではなかった。

グライダーは瞬く間に全て落とされた。残るはタカロイドだけとなった。

「やってくれたな。作戦を潰してくれただけでなくこうして追って来てくれるとはな」

彼はライダーを見据えて言った。

「貴様等が例え地の底に逃げようとも追う、そして倒してやる！」

スカイライダーはその言葉に対し毅然と見据えて言った。

「地の底か、言ってくれるな。そこへ行くのはあんただけでたくさんだがな」

タカロイドは羽根を取り出した。

「この大空から叩き落としてやる、覚悟しろ！」

羽根が放たれる。ライダーはそれを横に飛びかわす。

羽根が爆発した。それはライダーを追うように次々と爆発していく。

今度は乱れ撃ちを仕掛けて来る。だがそれも悉くかわされる。

「やるな」

「この程度！」

ライダーとて負けてはいない。一気に間合いを詰めてきた。
「ならば！」
今度は爪が来た。ライダーはそれを紙一重でかわした。
爪を左右に振るう。だがその大きさのせいか大振りであり隙が大きい。
「糞っ、何てすばしっこさだ」
タカロイドは肩で息をして言った。
「空中でこの俺の攻撃をかわすだけでも信じられねえってのに」
「生憎だったな。俺は元々空を飛ぶ為に改造されたライダーだ」
ライダーは怪人を見据えて言った。
「確かにな。だがまだ勝負はこれからだぜ」
怪人はそう言うと翼を大きく広げた。
「ムッ！？」
そして羽ばたいた。そこから羽根を撒き散らしてきた。
「これはっ！？」
羽根はライダーの周りに飛んで来た。そして纏わり着いてくる。
「ウッ！？」
羽根が触れた。すると肌を切った。
「どうだ、中々切れるだろう、俺の羽根は」
タカロイドは切られたライダーの身体を見て言った。

氷の空に舞う翼その十

「俺の羽根は爆発したり手裏剣にしたりするだけじゃない。こうした使い方もあるのさ」

彼が話している間も羽根はライダーの身体に纏わり着きその身体を切っていく。

「一つ一つのダメージはそれ程大きくはないが全身を切る。全体のダメージは大きいだろう」

「クッ、確かにな」

羽根が全て地に落ちた。その時にはライダーの全身はズタズタに切られていた。

「これだけじゃねえぜ。これが爆弾の羽根だったらどうなる？」

その威力は尋常なものではないだろう。如何にライダーといえどひとたまりもないことは明らかである。

「最後に勝つのは俺だったな。名残惜しいがこれで終わりだ」

翼を再び羽ばたかせようとする。勝ち誇っているのかその動作はゆったりとしている。

「させんっ！」

しかしライダーはまだ諦めてはいなかった。間合いを離した。

「間合いを離そうが無駄だあっ！」

タカロイドは羽根を放ってきた。それはライダーに向かって行く。

ライダーはそれに対し両手両足を大きく開いた。そして激しく回転した。

「スカイフライングソーサーーーーッ！」

「何ッ！」

そのまま円盤の様に回転する。そしてそのままタカロイドめがけ突き進んで来る。

羽根はその風圧により全て吹き飛ばされてしまう。そしてライダーの周りで爆発していく。

「チイイッ、そうしたやり方もあるというのか！」
ライダーは迫る。そしてタカロイドの側まで来ると蹴りに移った。
「スカイキイーーーーック！」
蹴りがタカロイドの胸を打った。衝撃が彼を打った。
吹き飛ばされた。そして地へと落ちて行く。
背中から地面へ叩き落された。数回バウンドし倒れ込んだ。
「ガハアアア・・・・・」
人間の姿に戻った。胸は陥没している。肋骨が折れているようだ。
スカイライダーが着地してきた。彼の側に立っている。
「やってくれたな。まさかあんなやり方があるとは」
タカロイドは彼を見て言った。立つ事は出来なかった。気力を振り絞って言った。
「咄嗟の事だったがな。まさか成功するとは思わなかった」
ライダーは彼に対して答えた。
「咄嗟の事、か。それを成功させるとは流石だな」
かれはそう言うと口から血を吐いた。
「今回は俺の負けだ。だが次に会う時があったらこうはいかねえぜ」
彼はそう言うと爆発した。そしてその中に消えていった。
「・・・・・また甦ってくるつもりか」
ライダーは怪人の最後の言葉を思い出し呟いた。
「何度でも来い。その度に倒してやる」
それが彼の信条だった。例え敵が幾度甦り向かって来ようとも倒す、それがライダーだと思っていた。
「さて、と。核爆弾を処分しなくてはな」
彼は空へ飛び上がった。そして基地の方へ飛んで行った。
核爆弾の処分を終えた筑波とがんがんじいは東京へ戻った。そしてがんがんじいはアミーゴへ戻った。
「あれっ、洋さんは？」
店にいた飛田が尋ねた。
「城南大学へ行きましたで。何か呼び出しがあったらしくて」

「ふうん、そうかあ。そういえば今あそこにライダー達が集まってるそうだね」
「ライダーが？また改造手術でも受けてるんでっか？」
がんがんじいは飛田に尋ねた。
「いやあ、そこまでは知らないけどね、悪いけど」
「そうでっか。まあ居場所がわかればそれでええですわ」
彼はそう言うとガレージへ向かった。そこには立花か谷がいる筈だからだ。
「一応帰って来たら顔だけは見せんとな」
「立花のおやっさんも谷のおやっさんもいないよ。二人共城南大学へ行ったよ」
史郎が彼に言った。
「えっ、おやっさん達もでっか？」
「うん。最初は立花のおやっさんだけだったんだけどね。谷のおやっさんも呼ばれてね」
「おやっさんが二人共でっか。何かえらいことになってるんちゃいまっか」
「かもな。呼び出された時の谷のおやっさんの顔はハンパじゃなかった」
「あれっ、滝さん」
滝は深刻な表情でガレージに入って来た。
「もしかするとあそこでどえらい事ないなってるのかも知れねえぞ。さもないとおやッさん達だけでなくライダーまで全員集まるなんて事ありえねえからな」
「今うちの兄貴もあっちへ向かったよ。携帯で連絡受けた途端顔色が見る見る変わっていったけど」
そこへチョロがやって来た。かっては泥棒をしていたが改心してスーパー1の協力者になった男だ。人懐っこい表情に何処と無くひょうきんな仕草である。
「あの沖がか。一体何が起こっているんだ」

滝はチョロの言葉を聞き腕組みをして考えた。
「まさかバダンが・・・・・・」
飛田が言った。
「いえ、それはありません。もしそうなら我々にも連絡が入っている筈です」
黒い皮の服の男が入って来た。
「あんたは・・・・・・」
「滝竜介。インターポールの捜査官だ。俺や役の先輩だ」
滝が竜に替わって言った。
「そうです。バダンの報告を受けて日本にやって来ました。よろしくお願いします」
竜は微笑んで彼等に挨拶した。
「金沢では結城さんと一緒に行動させてもらいました。そしてこちらにやって来たのです」
「おいらも忘れないでくれよ。折角久し振りに日本に来たんだし」
モグラ獣人もひょっこりと姿を現わした。ライダー達を脇で支えた男達が勢揃いしたのだ。
「あれっ、健と役がいねえな」
「二人は別行動です。佐久間君はルミちゃんを迎えに行ってますよ」
ふと気付いた滝に竜が言った。
「それで役の奴は単独で捜査、か。それにしてもあいつもあれで独自行動が好きだな」
「滝君は人の事言えないですね」
そこで先輩がきつい一言を出した。
「まあそうですけどね。ただあいつは急にいなくなる事が多いんですよね」
「そういえばそうだなあ。さっきまでカウンターにいたかと思ったらすぐいなくなるし何時の間にか店にいたりするし。何処か行動が掴み所が無いんだよなあ」
史郎が首を傾げながら言った。

「まあバダンの奴やなかったらええですやん。ワイ等の仲間やのは確かやし」
がんがんじいがそんな史郎に対して言った。
「そうだな。少なくとも御前よりは落ち着いてるし」
「あっ、滝さんそりゃあ酷いですよ」
痛いところを疲れた彼は困った顔をして言い返した。彼等は和やかな雰囲気で束の間の休息を楽しんでいた。

氷の空に舞う翼その十一

その時役は新宿にいた。ビル街が入り組んだ街中を歩いていた。
彼は走っていた。まるで何かから逃れるように。
街を歩く人々はそんな彼に目もくれない。ただ何かしらの用事で急いでいるとしか思っていないのだ。
ビルの路地裏に入った。そしてその中を進む。
上から何かが跳んで来た。それを察した役は懐からサイレンサーを着けた拳銃を取り出しその何かへ向けて発砲した。
重いものが落ちる音がした。生物なら水分を多量に含んだものが落ちる音がしただろう。しかしその落ちた音は鉄の音であった。次に電気がバチバチと鳴る音がした。
それはバダンの戦闘員であった。前からも来た。
役はその戦闘員にも発砲した。戦闘員は攻撃を仕掛ける暇も無く倒れた。
右のビルの扉に入った。そして上へと続く階段を昇って行く。
屋上に出た。もう戦闘員は追って来ない。上手く振り切ったようだ。
「ここならもう大丈夫だな」
彼はそう言うと懐から何かを取り出した。それは緑の丸い石だった。
「ほう、面白いものを持っているな」
その時何処からか声がした。
「そこかっ」
役は自分が昇って来た階段の入口の上へ向けて発砲した。
だが弾丸は弾き返された。そこにいた男が素手でそれを弾いたのだ。
「インターポールは礼儀作法がなってないな。こんな挨拶がマニュアルにあるのか」

そこにいたのは三影だった。役を不敵に見下ろしながらそう言った。
「言ってくれますね。追って来たのはそちらでしょうに」
「ふ、確かにな」
彼は懐から煙草を取り出しそれに火を点けながら言った。
「それが何かは知らんが気になる。大人しく渡してもらおうか」
「生憎ですが貴方達には無用の長物ですよ」
「しかし貴様等にとってはなくてはならないものだろう。渡してもらう理由はそれで充分だ」
「随分強引な理論ですね」
「それがバダンだ。理屈なぞ要らん、力さえあればいいのだ」
彼はそう言うと下に跳び下りて来た。
「だが安心しろ。俺は他の多くの連中とは違う。約束は守る。だからそれを渡せば今日は御前の命を預けておく」
「今日は、ですか。随分と自信がおありで」
「俺はバダンの中でも選び抜かれた男、俺に適う者は一人を除いていない」
彼はそこで口調を微妙に濡らした。
「そう、一人を除いてな」
サングラスの奥の目が光ったように感じた。だが役はそれに気付きながらもあえて黙っていた。
(どうやら複雑な事情があるようですね)
三影は下に下りただけでこちらに近付いては来ない。ただ立っているだけである。
「さて、返答を聞かせてもらおうか。渡すのか、渡さないのか」
「それはもう決まっています」
「では聞かせてくれ」
「ノー、です」
彼は微笑んで言った。顔は笑っていたが声は笑ってはいなかった。
「そうか」

三影はその返答を聞くとサングラスを外した。
その左眼は普通の人間の眼であった。だが右眼は違っていた。
感情の無い機械の眼である。それが役を睨んでいた。
「消えろ」
彼は一言そう言った。すると肩から何かを発射した。
「ムッ！？」
それは砲弾だった。次々と役めがけ放ってくる。
役は跳んだ。だがそれは三影も予想していた。空中めがけ砲撃を続ける。
爆発が役の身体を包んだ。そして彼はその中に消えた。
「素直に渡していればいいものを」
三影は爆発が消え去るのを見ながら言った。そしてサングラスを再びかけようとする。その時だった。
「ムッ！？」
気配を察した。その気配は遥か遠くへ去って行く。
「逃げたか。どうやって逃れたかは知らないが」
彼はサングラスをかけず手に持ってその気配がした方を見た。その向こうあの男は行った。
「やってくれるな。どうやらライダーだけではないらしい」
踵を返した。そして階段を降りて行く。
「次はこうはいかん。手加減はしないぞ」
彼はそう言うと街の中へ消えて行った。それを遠くから見る男がいた。
「ふう、危ないところでしたね」
それは役だった。あるビルの上で何処から取り出したのか水晶から彼を見ている。
「ですがこれで失われたものが戻りますね」
彼は水晶に映る映像を消した。そしてそれを懐に納めた。
「では行きますか」
彼はビルを後にした。静かに階段を降り彼もまた人ごみの中に消

えて行った。

氷の空に舞う翼　　完

2004・2・6

拳砕ける時その一

拳砕ける時

「それにしてもどうやら大変な事になりそうだな」

沖一也はブイマシンを駆りながらふと呟いた。

「何があったかは知らないが谷のおやっさんのあの様子・・・・・・。只事じゃないぞ」

携帯から聞こえて来る谷の声は明らかに狼狽していた。多くの戦いを経てきた彼があんな声を出すのは珍しかった。

「それにしても仙台から帰ってきたらすぐにこれか。チョロの奴もアミーゴに戻ってすぐ何かやってるみたいだし大変だな」

彼はそう言って微笑んだ。

「それにしても仙台での戦いも凄かったな」

彼は仙台での戦いを思い出した。

仙台は東北最大の大都市である。独眼流と言われた戦国大名伊達政宗が開いた街である。

政宗は奥州の名家伊達家の嫡男として生まれた。それだけで将来を約束されたように見えるが実際は違っていた。病により幼い頃に片目を失った母に嫌われ弟と家督を争っている。そしてその結果彼を切腹に追いやっている。

その母もまた伊達家の宿敵最上家の人間でありその実家との争いもあった。その上佐竹家という強大な敵もあった。多くの戦いの最中父も殺されている。この時まだ若い彼は父を連れ逃げようとする男が脅迫するにも関わらず発砲を命じている。その結果父は殺されたがその男もまた殺された。

かくして伊達家の主となった彼は幾多の戦いを経て奥州の覇権を握った。彼が率いる鉄砲騎馬隊は恐ろしいまでの強さであった。しかし時代が悪かった。

戦国の世は終わろうとしていた。織田信長の後を受けた豊臣秀吉

が天下統一の最終段階に入っていたのである。
佐竹氏が豊臣に従った今彼は逆賊となる。戦っても豊臣の圧倒的な力の前には勝てる筈もない。彼は面子を捨てて小田原を攻める秀吉の前で膝を屈した。
この時死に装束で着た彼を見て秀吉は内心驚いた。そして彼を認めたのである。
だが彼の能力と野心もよく知っていた。彼を仙台に移し目付けとして合津に蒲生氏郷、その後は上杉景勝や直江兼続を置いた。これは如何に秀吉が彼を恐れていたかに他ならなかった。
徳川家康もそれは同じであった。常に彼を警戒していた。だがそれを察していた彼は表向きは妙な行動を避けた。そして領地経営に専念し仙台藩の基礎を築いた。以後仙台藩はお家騒動もあったが江戸時代を通じて大藩であり続けた。
その伊達家の本拠地がこの仙台である。『森の都』として知られ美しい街並を誇っている。
「寒いと思ってましたけどそれ程でもないですね」
街中を歩きながらチョロが言った。
「ああ。意外と暖かいな」
沖もそれに同意した。
「ただ単にさっき食べたばかりだからそう言えるのかも知れないけれどな」
彼はそう言って微笑んだ。
「牛タン美味しかったですね」
「ああ。噂には聞いていたがあんなに美味しいとは思わなかったな」
「今度はホヤ食べましょうよ。俺あれが大好きなんですよ」
「俺はホヤはちょっとなあ。匂いがきついし」
「そんなの一度食べたら気にならなくなりますよ。かえってその匂いがたまらなくなる程で」
「そうか、そんなに言うんなら食べてみるか」
「ええ、お勧めしますよ」

二人はそう言いながら仙台の街を歩いて行く。そして喫茶店に入った。
「あれ、喫茶店にホヤはありませんよ」
「そんなことはわかってるよ。ホヤは夕食だ」
沖はチョロを窘めてテーブルに着いた。そして懐から一枚の地図を取り出した。
「さて、と。仙台の街だが」
「意外と横に長いですね」
「ああ。それに従って事件も横に伸びているな」
沖は地図に書かれたバツの字を指し示しながら言った。
「武道家の連続誘拐事件。もう数十件にもなっている」
「何か噂によると勝負を挑まれてそれに敗れると連れさらわれるらしいですね」
「ああ。仮面を被った男らしいな」
今この仙台では格闘技を嗜む人物が次々と姿を消す事件が起きている。そしてそれは謎の男が勝負を挑み負けると何処かへ連れ去ると言われているのだ。
「何かおとぎ話めいているが多分バダンだな」
「そうでしょうね。だからここへ来たんですし」
さらわれた武道家の格闘ジャンルは多岐に渡る。柔道や空手もあればボクシングやマーシャルアーツ、八極拳もある。中には剣道等武器を使うものもある。
「武器を使う人までさらわれているな。相手は素手ではないかも知れないぞ」
「怪人もいるんでしょうかね」
「多分いるだろう。どんな奴かまではわからないが」
「そうですか。何か俺達が行くところって絶対怪人が出るなあ」
チョロはそう言って溜息をついた。
「おい、何言ってるんだ。怪人を倒すのが俺達の仕事の一つだろ」
沖はそんな彼に苦笑して言った。

「安心しろ、怪人の相手は俺がする。チョロは俺のサポートをしてくれ」
「わかりました」
二人は話を終えると店を後にした。そして再び街中に出た。

拳砕ける時その二

「計画は進んでいるか」
地下に置かれた基地のモニターに暗闇大使の顔が映っている。
「ハッ、順調に集まっております」
その前に一人の痩せた男がいる。髪を短く刈り込んだアジア系の若い男だ。中国の拳法義を着ている。
「そうか。それは何よりだ」
暗闇大使はその言葉を聞いて満足気に笑った。
「我等の尖兵となるべき人材・・・・・。多いにこしたことはありませんからな」
「そうだ。優れた格闘家はそれだけでも充分我等の力になる。だが改造すればさらに良い」
「新たな我等の同志、ですな」
男はそう言うとニヤリ、と笑った。
「そうだ。改造人間にすべき人材となるのだ」
「そしてその生まれ変わった彼等が我がバダンの新たな力になる」
「その為にはより多くの人材が必要だ。わかっているな」
「それはもう。おかげでこの拳が休まる暇がありません」
男はそう言うと右手を掲げてみせた。細く、それでいて引き締まった手である。
「だがそれが貴様の本望ではないか？かって中国で伝説の闘神と呼ばれた貴様にとっては」
暗闇大使はそう言うと男を見てニヤリ、と笑った。
「そうですかな。まあ確かにこの拳が今は満足していると言ってますよ」
男はそれに対しとぼける様に言った。
「満足しているか。だがまだまだ物足りないのではないか？」
「確かに。しかしいずれライダーを倒すのですからな。今からその

事を思うと楽しみではありますが物足りなくはないですな」
「ライダーを、か。そちらも期待しているぞ」
「お任せ下さい。いずれライダーもこの拳で屠ってやりますゆえ」
「ハハハ、上手くやれ」
暗闇大使はそう言うとモニターから消えた。男は黒くなったモニターの画面を見てニヤリ、と笑った。
「ライダー、か。そのライダーかは知らんが」
男は笑いながら言う。
「この俺の前に来るその時が最後だ。伝説の拳を見せてあの世に送ってやる」
男はそう言うと暗闇の中に消えた。後には殺気だけが残っていた。
「さて、どうするかだな」
沖はホテルの一室でチョロに対して言った。
「どうやらその男は夜にしか出ないみたいですね。そして夜道で勝負を挑むとか」
「夜、か」
沖はふと窓を見た。もう真夜中である。
「その方が何かと便利だからな。だがそれはそれでやり易いな」
「やり易い、って何か考えてるんですか？」
「ああ、ちょっと耳を貸してくれ」
「はい。何ですか？」
チョロはそう言うと沖の話を聞いた。聞いて彼は頷いた。
「それがいいですね。ありふれたやり方ですけど」
「ああ。ならやるか」
二人は頷き合った。そして街へ出た。
仙台のある大きなボクシングジム。その近くの道を歩く一人の男がいた。帽子を目深に被りジャケットを着ている。
「神崎信雄か」
ふと彼を呼び止める声がした。
「だとしたらどうする？」

男はその声に答えた。すると道の陰から一人の男が姿を現わした。拳法義を着ている。そしてその顔には中国の京劇で使われる面を被っている。赤と黒の魔物の面である。

「その身体貰い受ける」

男はそう言うと構えを取った。中国拳法の一つ蟷螂拳の構えである。

「・・・・・・・・・」

神埼と呼ばれたその男も構えを取った。だがそれはボクシングの構えではなかった。

「何っ!?」

それは拳法の構えであった。

「馬鹿な、貴様神崎信雄ではないのか!?」

男は何も答えない。その代わりに拳を突き出してきた。

「ムッ」

仮面の男はそれを受け止めた。速かった。

「素人ではないようだな。かなりの腕前だ」

仮面の男は拳を受け止めて言った。そして帽子の男を見る。

「中国拳法か。しかも小林拳だな」

突きや蹴りをかわし、受け止めつつ言う。受け止めながら冷静に分析している。

「それもかなり独自性が強いな。・・・・・これはかなり名のある流派か」

仮面の男はそう言いながら発頸を繰り出した。だがそれは逆に彼の発頸に返される。

拳砕ける時その三

「ほほお、発頸の威力もあるな。精神修養にも力を入れているか」
帽子の男は回し蹴りを浴びせて来た。仮面の男はそれを後ろにステップしてかわした。
「この蹴りは・・・・・赤心小林拳か」
仮面の男はそれを見て言った。
「だがあの流派はテラーマクロによって壊滅させられている。師範達も死んでいる筈だ。ただ一人だけ最強の使い手が残っているがな」
「・・・・・・・・・」
帽子の男はそれに答えようとしない。無言で手刀を出した。
「そう、その使い手の名は沖一也、またの名を仮面ライダースーパー1という」
仮面の男はその名を呼んだ瞬間高く跳躍した。
帽子の男もそれを追って跳躍する。二人の蹴りが交差した。
双方位置を入れ替えて着地した。男の仮面が割れた。帽子が千切れとんだ。
帽子の男の正体は予想通りであった。沖一也であった。
「うむ。噂に違わぬキレだな」
その中からあの男が姿を現わした。
「なっ、貴様は・・・・・・」
沖はこちらに振り向いてきた男の顔を見て思わず声を出した。そこには彼も名と顔を知る男がいた。
「現代中国拳法の最高の使い手リー＝ホワンロン。何故ここに・・・・・」
「ふ、生憎だが今の俺の名は違う」
リーと呼ばれたその男は不敵に笑って言った。
「今の俺の名はアメンバロイドという。誇り高きバダンの改造人間の一人だ」

「クッ、貴様バダンに入ったのか」
「そうだ。永遠に戦いこの拳を磨く為にな。まるで俺の為にあるような組織だ」
「貴様バダンが何を目的としているのか知っているのか！？」
「フ、勿論知っているさ」
リー＝ホワンロン、いやアメンバロイドは沖の問いに対し皮肉っぽく笑って言った。
「世界征服か。実に素晴らしい思想だ」
「何っ」
沖はその言葉に眉を顰めた。
「強い者、選ばれた者が支配する世界。それこそ理想の世界ではないか」
うそぶく様に言う。
「支配する者とされる者、人はその二つしかない。ならば支配する者になるべきなのだ」
アメンバロイドは沖を見据えて笑った。
「俺はその支配する者なのだ。その俺にとってバダンはあまりにも魅力的な組織だ。それで充分だろう」
「クッ、その為に多くの弱い力を持たない人達が犠牲になってもか」
「そうだ。弱い者など生きる価値も無い。何故なら弱いという事はそれだけで罪なのだからな」
アメンバロイドは自分の言葉が無謬無きものであると確信していた。それは最早信仰であった。
「弱き者は支配される運命にある。そして強き者の糧となるのだ。それが唯一つ奴等が為し得る貢献だ」
「貴様っ！」
沖はその言葉に激昂した。そして拳を繰り出す。
「フン、真実を言われて怒るか。みっともない奴だ」
アメンバロイドはそれを受け止めた。受け止めたその手が黒くなる。

「所詮貴様も弱き者か。まあ良い。その首暗闇大使への手土産としよう」

目が紅くなる。そして胸が銀色に変わった。

怪人に変化した。そしてその手で沖を突き殺さんとする。

拳砕ける時その四

「ハッ！」
沖はその拳をかわした。そして後ろに跳び間合いを離した。
「さあ、どうする弱き者よ」
アメンバロイドの左右に戦闘員達が現われた。そして沖を取り囲む。
「ここで戦闘員達に倒されて死ぬか、俺に倒されて死ぬか、好きなのを選べ」
戦闘員達のサイが一斉に投げ付けられる。中国に伝わる武器の一つだ。
沖はそれを上に跳んでかわした。そして何処かへ姿を消した。
「ムッ、何処へ行った?」
アメンバロイド達は彼の姿を探した。その時声がした。
「俺はここだ」
アメンバロイドは声がした方を見た。そして彼の姿を見てニヤリ、と笑った。
「ほほう、その姿になったか」
そこには満月を背に壁の上に立つライダーがいた。銀の腕を持つライダー、仮面ライダースーパー1である。
「行くぞっ」
スーパー1は下に舞い降りた。そしてアメンバロイド達と対峙する。
「さて、貴様の本当の腕を見せてもらおうか」
戦闘員達が取り囲む。スーパー1はそれに対して構えを取った。
今度はトンファーを手に襲い掛かる戦闘員達。だがスーパー1はその武器を叩き潰しぎゃくにねじ伏せる。
「無駄だ、俺に武器は通用しない」
戦闘員達はすぐに全員倒されてしまった。アメンバロイドはそれ

を冷静に見ている。
「ふむ、どうやら噂通りの強さはあるようだな」
戦闘員を倒し終えたスーパー1はこちらに顔を向けて来た。
「だがそれだけではこの俺には勝てない。今からそれを教えてやる」
アメンバロイドはそう言うと構えを取った。今度は八極拳だ。そしてスーパー1と対峙する。
二人は同時に前に跳んだ。そして拳を出した。
拳は激しい衝撃を出して空中で激突した。辺りをその衝撃で破壊する。
両者は次に手刀を繰り出す。それも激しくぶつかり合った。
「・・・・・先程の言葉は訂正しよう」
アメンバロイドは手刀の衝撃を顔に受けながら言った。
「噂以上の力だ。そして貴様は弱き者ではない」
「・・・・・・・・・」
スーパー1はその言葉に対し何も返答しなかった。別にどうとも思わなかったからだ。
「これ程の使い手と遭ったのは久し振りだ。ならば俺も本気を出そう」
彼はそう言うと間合いを離した。そして気をためた。
「バダン随一の拳の持ち主の技、今見せてやろう」
脇の四本の腕が伸びた。それはサーベルの様にスーパー1を襲った。
「ムッ」
スーパー1はそれを横に跳びかわした。アメンバロイドはそこへ突進して来た。
「させんっ」
スーパー1はそれを受け止める。そして上へ投げ飛ばした。
アメンバロイドはそれに対し空中で回転した。そして衝撃を殺し壁の上に着地した。
「うむ、実に楽しませてくれる」

アメンバロイドは壁の上で腕を組んで言った。
「こうでなくては面白くない。どうやら貴様は俺が全力をもって倒す価値のある相手のようだ」
「それは光栄だな」
スーパー1はアメンバロイドを見上げて言った。
「この様な場所で闘うのは無粋だな。場所を変えて闘いたいものだ」
「ほう、何処でだ？」
スーパー1はその言葉に対し問うた。
「いい場所がある。この街のとある草原だ。街の端のな」
「何処にあるかわからないが」
「場所はここだ。確認しろ」
彼はそう言うと一枚の地図を彼に投げた。そこには街の左端にある草原に印が書かれていた。
「勝負は三日後、夜の十二時だ。立会人はそちらで選んでくれ」
「そうか」
「俺は一人で来る。そこで貴様を倒してやる」
「果し合いか、面白い。その勝負受けて立とう」
「そう言うと思っていた。流石は仮面ライダースーパー1だ」
アメンバロイドはその言葉を聞いてニヤリ、と笑った。

拳砕ける時その五

「三日後を楽しみにしている。精々首を洗って待っていろ」
アメンバロイドはそう言うと姿を消した。後には高笑いだけが残っていた。
「えっ、果し合いですか！？」
チョロはホテルで沖の話を聞き思わず声をあげた。
「ああ、向こうから言って来た」
沖はそれに対して答えた。
「止めた方がいいですよ」
「何故だい？」
「そりゃあ・・・・・。バダンですよ。ドグマとかジンドグマの連中と一緒なんでしょ」
「ああ。メガール将軍や四幹部もいるしな」
「あの連中までいるんですか！」
チョロはそれを聞いて叫んだ。
「ああ。言ってなかったか？」
沖はそれを聞いて驚いた。彼は言った記憶がある。
「すいません、すっかり忘れてました」
「こんな大事な事忘れるなよな、全く。まあいいや。実際アメリカで将軍にも会ったしな」
「本当に生きてるんですね」
「ああ、首領の宣戦布告の時にもいたしな。いずれあいつとも戦う事になるだろうな」
そう言って窓の外を見た。そこには仙台の繁華街の夜景が広がっている。
「また将軍とですか。厄介ですね。けれど」
チョロはそこで言葉を詰まらせた。
「おい、落ち着けよ。果し合いの事を言いたいんだろ」

沖はそんな彼を見てクスッ、と微笑んだ。
「はい、そうそう果し合いですよね」
「まさかと思いますけれど・・・・・・受けるんですか？」
「そのつもりだけど」
沖は毅然とした顔で頷いて言った。チョロはその様子に溜息をついた。
「もう一度言いますけれど絶対に止めた方がいいですよ」
「不意打ちを仕掛けて来るからかい？」
「ええ。連中はドグマの頃から手段を選びませんから」
「確かにな。俺もそれでかなり苦しめられた」
「でしょう！？だったら何で受けようなんて思うんですか」
「・・・・・俺が拳法家だからと言ったら駄目かな」
「それは・・・・・・」
チョロはこの時大切な事を忘れていた。彼はライダーであると共に拳法家であったのだ。
国際宇宙開発研究所を破壊された後彼は赤心小林拳を学び再び立ち上がったのだ。そしてそれから人としての在り方、戦士としての心、そして愛を知ったのだ。
「奴は拳法家として俺に勝負を申し込んできた。ならば俺も拳法家としてその申し出を受けたい。そして闘いたいんだ」
「・・・・・・・・」
チョロは沖の目を見た。強い決意の色が宿っている。
それを見て彼も決めた。もう止めなかった。
「わかりました、一也さんの好きなようにして下さい。俺はもう止めません」
「有り難う」
沖はその言葉を聞いて微笑んだ。
「ところで一つ頼みたい事があるんだけれど」
「？何ですか」
「果し合いの立会人はこっちで選んでくれ、って言われてるんだ。

悪いけれど来てくれないかな」
「ええ～～～～っ！」
その話に再び驚くチョロであった。
「何っ、決闘だと！？」
暗闇大使は基地のモニター越しに報告を聞き思わず声をあげた。
「はい。一対一の」
アメンバロイドはそれとは正反対に落ち着き払った声で言った。
「馬鹿な、一体何を考えておるのだ」
「至って冷静ですが」
「そんな事を言っているのではない、何故ライダーを策に陥れようとせんのだ！」
「策ですか？必要ならば使いますが」
彼はそう言うと不敵に笑った。
「今は必要ありません故。ただ倒すだけですから」
「ほほう、またえらく自信がありそうだな」
暗闇大使はそんな彼を見ていささか皮肉を交えて言った。
「当然です。私を誰だと思っているのですか」
彼はその皮肉を受け流して言った。
「ふむ・・・・・」
暗闇大使もそんな彼の様子を見て考えを変えた。
「それではそなたに任せるか。良かろう、スーパー1の首、見事挙げて来るがいい」
「ハッ」
「よいな、必ず倒してくるのだぞ」
「それは御心配無く」
暗闇大使はモニターから姿を消した。アメンバロイドはそれを自信に満ちた顔で見送った。

拳砕ける時その六

「相変わらずいささか落ち着きが足らぬ方だな。それさえなければ完璧だが」

彼はそう言うと微かに微笑んだ。

「まあそれがかえって良いのだが。あの方の魅力と言うべきか」

苦笑して言った。

「そういうところはそっくりだな。まあ従兄弟同士だから当然か」

彼は指令室を後にした。そして一人基地を後にした。

決闘の日となった。沖はチョロと共に相手が指定した草原に来た。

「そいつ来ますかね」

空には黄色い三日月がある。チョロが風に震えながら言った。

「来る、絶対にね」

沖は正面を見据えて言った。彼は空手着を着ている。

「今何時だい？」

「もうすぐ十二時ですね」

「そうか。もう来る頃だな」

彼がそう言うと前から一人の男が現われた。拳法着を着ている。

あの男だ。

「来たか」

沖は彼の姿を見て呟いた。向こうもこちらの姿は確認した。

「よく俺の申し出を受けてくれた」

アメンバロイドは低い声で言った。

「ああ、拳法家としてな」

沖は彼の目を見て言った。

「そうか、拳法家か」

彼は口の端を歪めて笑った。

「それはかってはな俺もそうだった。かってはな」

チョロはその言葉に眉を顰めた。

「一也さん、やっぱり」
「チョロ、静かにしてて。立会人なんだから」
沖はそんな彼を嗜めた。
「俺は今はバダンの改造人間だ。誇り高きな」
彼はそう言うと口元の歪みを消した。
「その誇りにかけて言おう、沖一也、いや仮面ライダースーパー1よ貴様をここで倒す！俺の拳でな！」
「一対一というわけだな」
「そうだ、そして貴様が勝ったら今まで捉えた格闘家達を解放しよう。どうだ、悪い話ではあるまい」
「ああ、その申し出改めて受けよう」
「よくぞ言った。行くぞ！」
彼はそう言うと怪人の姿になった。
「ならば俺も！」
沖も変身の構えに入った。

変・・・・・・
まず右腕を肩の高さで引いた。そして左腕は腰の高さに置き前にある。
体が黒いバトルボディに覆われる。胸が銀色になると手袋とブーツも銀色になる。
・・・・・・身
右腕を前に出す。左腕もそれに添えて出す。
手首のところで合わせた両手をゆっくりと前に出す。そして両手首を時計回りに一八〇度回転させた。
顔の右ォ半分が紅い眼を持つ銀の仮面に覆われる。そしてそれはすぐに左半分も覆う。

光が消えた。そこには銀のライダーがいた。
「さて、ではそろそろ時間か」

アメンバロイドはそう言うと立会人のチョロを見た。
「あ、は、はい」
チョロもそれに気付いた。慌てて時計を見る。
「十二時です」
「そうか、でははじめるか」
「おお」
二人は構えを取った。
ジリジリと間合いを詰める。そして双方前へ跳んだ。
拳が交差する。そして衝撃が辺りを包んだ。
「ムウウ・・・・・」
衝撃を受けた二人が声を漏らした。
「トォッ！」
今度は蹴りを繰り出す。再び衝撃が二人を打つ。
「まだまだっ！」
二人は次々と技を繰り出す。だがそれは互いに撃ち合い衝撃を辺りに撒き散らすだけだる。
実力は伯仲していた。その為二人は互いに相手へダメージを与えられない。
「な、何て奴だ、スーパー1と全く互角の腕だなんて」
チョロはアメンバロイドの拳を見て思わず呟いた。
「こんな強い奴は玄海老師か弁慶さん位だ。こんな奴がいたなんて・・・・・」
アメンバロイドの拳はスーパー1のそれに対して全くひけをとらない。スーパー1と互角に戦っている。

拳砕ける時その七

「どうした、ファイブハンドは使わないのか？」
彼はスーパー1に対して言った。
「五つの腕、あれを使えば俺との闘いも有利に進められるのではないのか？」
「・・・・・今は使わん」
スーパー1はその言葉に対して言った。
「ほほお、何故だ？」
アメンバロイドはその言葉に対して問うた。
「俺は拳法家としての果し合いを受けた、ならばこの銀の腕だけで闘わなければならないからだ」
スーパー1はそれに対して答えた。その言葉には彼の心があった。
「・・・・・そうか」
アメンバロイドはそれを聞いて言った。
「あくまで拳法家として闘うのか。その為に不利になるかも知れんというのに」
彼は意味ありげに言った。
「不利にはならない、俺のこの拳には正義が宿っているからな」
「正義が宿っているかどうかは知らんが」
彼はそう言うと間合いを離した。
「貴様があくまで拳法家として闘うのなら俺もそれなりの闘い方がある」
「何っ！？」
スーパー1は彼の眼が光ったのを見た。
「まさか・・・・・」
チョロはそれを見てビクッ、とした。やはり汚い策を使ってくるのではないかと思った。
だがそれは杞憂だった。アメンバロイドは自分で脇の下にある四

本の脚を引き千切ったのだ。
「なっ・・・・・・！」
これにはスーパー1もチョロも驚いた。その脚は彼にとって重要な武器だというのに。
「貴様が拳法家として闘うというのなら俺も拳法家として闘おう。それが拳法家の闘いだ」
「アメンバロイド、貴様・・・・・・」
「何を驚く。俺はこの拳だけで貴様を倒せるのだ。他の武器など邪魔なだけだ。それは貴様とて同じだろう」
「ああ・・・・・・」
スーパー1は声を漏らした。あくまで拳法家として闘おうという彼の心に思うところあったからだ。
「行くぞスーパー1、この拳で貴様を打ち砕いてやる！」
「それはこちらの台詞だ、来いっ！」
両者は再び激突した。そして激しく拳を繰り出す。
それは阿修羅の闘いであった。両者引くところはなく互いに拳を、蹴りを繰り出し合う。
アメンバロイドが右の拳を突き出す。スーパー1はそこに左の手刀を出す。
「ムッ！」
手刀が勝った。アメンバロイドの拳は右に払われた。
「ならばっ！」
すぐに左の拳を繰り出す。だがそれをスーパー1の右拳が襲った。二つの拳が正面からぶつかり合った。衝撃が巻き起こる。
敗れたのはアメンバロイドであった。彼の左拳は砕かれてしまった。
「この程度！」
しかしそのダメージに全く怯みところはない。すかさず左の回し蹴りを出す。
スーパー1はそれを後ろに跳んでかわした。着地と同時に彼は上

へ大きく跳んだ。
「スーパーライダァーーーーー旋風キィーーーーーーック！」
空中で型を取りながら蹴りを出す。それは赤心小林拳の型であった。
速い、その蹴りはあまりにも速かった。それはさしものアメンバロイドにも見切れるものではなかった。
蹴りが胸を直撃した。そして彼は吹き飛ばされた。
「グググ・・・・・」
それでも彼は立ち上がった。恐るべき執念である。
「怖ろしい速さだな。この俺が見切れぬとは」
彼は人間の姿に戻りながら言った。口から赤い血が零れ出る。
「だが急所はほんの僅かに外したようだな。心臓を狙ったというのに」
スーパー1は彼に対して言った。
「それでも致命傷を受けてしまった。この勝負は俺の負けだ」
彼は潔く敗北を認めた。
「素晴らしい拳だった。貴様の名は忘れん」
「フフフ、それは光栄だな」
彼はその言葉を聞いて満足気に笑った。
「だが俺はここで死ぬわけではない。いずれまた貴様の前に現われる。その時を楽しみにしておけ」
そう言うと姿を消した。
「格闘家達は青葉城にいる。そこに解放しておこう」
遠くから声がしてきた。
「また会おう、スーパー1」
気配は消え去った。こうして仙台での戦いは幕を下ろした。

拳砕ける時その八

青葉城は伊達政宗が建てた城である。本当の名を仙台城というが緑が美しいことから青葉城と呼ばれる。

この城には伊達政宗の像がある。鎧兜に身を包み馬に乗っている。

「政宗公も事件の解決を喜んでくれてますかね」

格闘家達を救い出した後チョロは伊達政宗の像を見上げて言った。

「さあな。けれど自分が開いた街に平和が戻ってホッとしているのは事実だろうな」

沖はそんな彼に対して言った。

「何かアッという間に終わっちゃいましたね」

「おいおい、俺にとっちゃあかなり長くて辛い戦いだったぞ」

沖はそんなチョロに対して苦笑して言った。

「あのアメンバロイドって奴もかなり手強かったしな。一歩間違えれば俺のほうがやられてたし」

「そうでしたね、確かにあいつは強かった」

「だけど今回は俺が勝った。けれど油断したら次にやられるのは俺かもしれない」

沖はそう言うと深刻な顔になった。

「一也さん、そんな事考えちゃ駄目ですよ」

チョロはそんな彼を窘めた。

「ライダーは絶対に負けちゃいけない、いつもそう言っているのは一也さんじゃないですか。そんな事言ってたら本当に負けちゃいますよ」

「そうか、そうだったね」

彼はそれを聞いて笑みを取り戻した。

「バダンとの戦いはまだまだ続くしな。暗くなってる暇はないな」

「そうですよ。とりあえず東京に帰って次の戦いに備えましょう」

「ああ、そうだな」

「けどその前に牛タンをもう一度」
「おいおい、またそれか」
こうして二人は仙台を後にした。
東京に戻った彼はすぐに城南大学に呼び出された。校門をくぐり改造室の控え室に入った。
「おやっさん、一体どうしたんですか？」
沖は部屋に入ると谷を見つけて声をかけた。
「立花のおやっさんや先輩達まで。皆揃うなんてどうしたんですか？」
見ればどの者の顔も強張っている。まるで見てはいけないものを見てしまったかのように。
「一也、これを見てくれ」
谷は奥にかけられている数枚の紙を指差して言った。
それはレントゲン写真だった。だが普通のレントゲン写真ではなかった。
「これは・・・・・」
そこに映っていたのは人の身体ではあったが人のものではなかった。骨格は人のものではなかったのだ。
そこに映る骨格は機械であった。内臓も全てが機械であった。
「俺達のうちの誰かも写真ですか？」
沖はそれを見て谷に問うた。
「沖もそう思ったか」
筑波が言った。
「ええ。他に誰がいるというんです？」
沖は不思議そうな顔をして言った。
「・・・・・沖、あれを見てくれ」
本郷が改造室が見える窓を手で指し示して言った。
「あれ、あそこにいるのは・・・・・」
そこには一人の筋肉質の青年が横たえられていた。上半身は裸で下は白いスラックスである。

「見た事のない青年ですね。一体誰ですか？」
「・・・・・この写真の被写体だよ」
谷は顔を俯けて言った。
「えっ、じゃあ・・・・・・」
沖はその言葉に声を失った。
「そうだ、彼もまた改造人間だ」
本郷は沖に問いきかす様な口調で言った。
「改造人間！？しかし一体誰が・・・・・・」
「それは私が説明しよう」
その時部屋に一人の男が入って来た。
「貴方は・・・・・・」
そこには眼鏡をかけた壮年の男がいた。白衣を着ている。
「伊藤博士。私の古くからの友人だ」
海堂博士が入って来た。志度博士も一緒である」
「沖君も聞いた事がある筈だ」
「ええ、確か物理学の権威でしたよね。他にも多くの分野で業績を残している」
沖は海堂博士の言葉に対して答えた。
「そうだ。そして暫く消息を絶っていたのも知っているね」
「はい、南米で飛行機事故に遭ったと。今ここにおられるので正直驚いているのですが」
「その詳細についてこれから話したいんだが」
伊藤博士は静かな声で言った。
「皆、いいかね？」
「はい」
ライダーと立花、谷達はその言葉に頷いた。伊藤博士は静かに語りはじめた。

拳砕ける時　　完

2004・2・12

失われた記憶その一

失われた記憶

「私は確かに飛行機事故に遭った。だがそれだけではなかったのだ」

伊藤博士は言った。

「あの事故は元々単なる事故ではなかった。私を狙う者達が仕組んだ事だったのだ」

「バダンか」

一文字がその話を聞いて言った。

「そうだ。バダンは私を拉致する為にわざと飛行機のエンジンに細工をしたのだ」

博士はそれに答えた。

「飛行機はアマゾンの奥地に不時着した。程無く救援を要請する通信が発せられたがそれが来るまでには数日かかるとのことだった。私は他の乗客達と同じくそれを待っていた」

「その時にさらわれたのですね」

神が問うた。

「ああ。私が一人になった時を見計らい彼等は来た。そして私をバダンの基地に拉致したのだ」

「それはペルーにあった基地ですか？」

筑波が尋ねた。

「いや、私が連れて行かれたのはギアナ高原の奥地の基地だ。暗闇大使がいたな」

「ギアナにも基地があったのか。これは意外ですね」

「ああ、他にも多くの基地がありそうだな」

筑波は話を聞いて城と話した。

「私は基地に入ると暗闇大使の前に連れて行かれた。そしてバダンへの協力を要請されたのだ」

「緑川博士の時と同じか。そして断れば命は無い」

本郷はその話を聞いて呟いた。
「そうだった。そして私は止むを得ず彼等に協力した。そして彼の改造手術を依頼されたのだ」
そう言って改造室に横たわる村雨を見た。
「彼は村雨良。かってはバダンの幹部候補生だった」
「かっては・・・・・・？」
風見はその言葉に疑念を抱いた。
「そうだ。彼は訓練中に致命傷を負い改造手術を受ける事になったのだ」
「そして改造手術を受けて改造人間になったのですね」
「ああ。その時彼を庇ったもう一人の者も改造手術を受けたようだがそれは私がやったのではないのでよくは知らない」
結城に答えるように言った。
「その手術は誰が？」
アマゾンが尋ねた。
「死神博士や幽霊博士、ドクトル＝ゲー達が関わっていたようだが。他にも恐ろしい人物が執り行なったと聞いている」
「死神博士にドクトル＝ゲーか。こりゃあとんでもない改造人間になってるぞ」彼は
立花はその話を聞いて吐き捨てる様に言った。
「私はアポロガイストが収集した君達九人のライダーのデータを基に改造手術を行なった。そして独自に隠密的行動が可能なように改造したのだ」
「俺達の！？ということは・・・・・・」
沖はそれを聞いて眉を顰めた。
「そうだ。彼がゼクロスだ。奇巌山で君達と戦った」
「あのゼクロスが・・・・・」
「まさかここにいるとは・・・・・・」
ライダー達はそれを聞いて村雨の方を見た。彼は目を閉じ静かに眠っている。

「彼は改造手術を受ける際全ての記憶及び感情を消去された。完璧な兵器となる為にな」
「人を兵器にする、か。それは幾ら組織が変わっても変わらないな」
谷はそれを聞いて忌々しげに言った。
「そうだ。それが彼等の本質なんだ」
志度博士は深刻な表情で言った。
「人を兵器に作り変え自らの野心に利用する。ショッカーの時からそれは変わっていない」
伊藤博士は暗い顔のまま唇を噛み締める様に言った。
「彼はバダンの最強の兵器として作られたライダーを倒す為のな」
「俺達を・・・・・」
「そうだ。それはバダン結成の時から考えられていたのだ。そのボディとなったのが彼なのだ」
伊藤博士はゼクロス、いや村雨に顔を向けた。
「元々彼を改造する予定だったらしいが事故に遭いそれが早まった。そして私が改造手術を行なったのだ」
「そして俺達の前に現われた」
「俺達のデータを生かして。だからあんなに強かったのか」
ライダー達はゼクロスを見て言った。
「その時君達に受けたダメージが思わぬ方向へ向かったのだ。彼はそのショックでほんの僅かだが感情を取り戻した」
彼は暗い表情を消して真摯なものにして言った。
「私はそれにかけた。彼と共に基地を脱出した。これ以上バダンに手を貸すのは耐えられなかったのだ」
彼は言葉を続けた。
「そして・・・・・」
一呼吸置いて言った。
「彼の消された心と記憶を取り戻す為に。私はここまで来たんだ」
彼は言葉を続ける。
「バダンの改造人間達に取り囲まれもした。そしてここに来るまで

色々とあった。彼の消えた感情を再び取り戻しながらな」
その目にふと温かい光が宿った。
「彼を改造したのは私だ。その罪はわかっている。だからこそ彼の心と記憶を取り戻したいんだ。そして・・・・・・」
一瞬言葉を詰まらせた。
「彼が正義を知りその為に戦うならば私は喜んでそれに協力したい」
そう言って村雨を再び見た。
村雨はまだ眠っている。博士達が何を話しているのか知らない。だが博士は話を続ける。
「記憶を取り戻した時彼はそれにより絶望したり憎悪に震えたりするだろう。しかしそれを乗り越えて欲しい。かって君達がそうであったように」
そう言ってライダー達を見た。彼等はそれに対して頷いた。
「つまり貴方はバダンと戦うつもりなんですね」
風見が彼に問うた。
「ああ、そのつもりだ。彼等を放っておいては世界は恐ろしい事になる」
博士は真摯な顔で言った。

「彼だけじゃない。他にも恐ろしいものを作ろうとしている様だしな」

「恐ろしいもの・・・・・・！？」

一同それを聞いて眉を動かした。

「それは一体何ですか？」

本郷が尋ねた。博士はそれに対して首を横に振った。

「残念だがそれは私にもわからない。だが暗闇大使が私に語った事があるんだ。バダンは究極の兵器を生み出す、とな」

「究極の兵器・・・・・・」

皆それを聞き考え込んだ。

「核兵器や細菌兵器より恐ろしいものか？だとしたら何だ？」

「ゼクロスと同じ改造人間じゃないのか？それが何かまではわからないが」

彼等は自分の考えを出してみた。だが結論は出ない。

「どちらにしろ絶対に開発を許してはいけないものなのは確かだ。それに彼等には強力な改造人間達がいる」

九人のライダー達はそれに対し頷いた。事実彼等は日本各地で彼等と戦っていたからだ。

「しかも連中は再び生き返るとか言っていたな。再生してくるみたいだな」

一文字が言った。

「それもかなりの技術があるみたいですね。今までを見ていると」

結城が言った。事実彼等は世界各地でこれまでの組織の怪人達を相手にしているのだ。

「今までの組織よりも遥かに高度な技術を持ち強大な戦力を持っている・・・・・・。ゼクロスもその一つに過ぎなかったというのか・・・・・・」

筑波は村雨を見て言った。
「俺達が相手をしたのは連中の戦力のほんの一部だけのようだな」
城が顔を暗くさせて言った。それは普段の彼からは想像で出来ないものだった。
「そうだ。彼等は今までの組織の大幹部や改造魔人達を蘇らせている程だ。おそらく彼等もすぐに行動を移す。恐ろしい事になるぞ」
「あの連中が・・・・・・。厄介だな」
神が表情を険しくさせて言った。
「ええ。一人でも一筋縄じゃいかない連中だというのに」
沖はメガール将軍を思い出して言った。アメリカでの彼の言葉が脳裏から離れない。
「そして今は彼をどうするかという問題もあるな」
志度博士は村雨を見下ろして言った。
「そうだな。それは彼が目を覚ましてから話し合おう」
海堂博士もそれに同意した。ライダーも立花達もそれに頷く。場は深刻な空気に支配され続けていた。
その城南大学のある建物の屋上である。ここに一人の男が立っていた。
「ようやく見つけましたよ」
あの黒衣の男だ。ライダー達がいる建物を見下ろし微笑んでいる。
「丁度ライダー達も揃っているようですし」
口の両端を吊り上げる。耳まで裂けた。
「同志達の仇、取らせてもらいますか」
眼の色が変わった。赤く変色した。
「待て、ジェライント＝ブリックよ」
後ろから声がした。
「暗闇大使、今の私の名はヤマアラシロイドですよ。怪人軍団のリーダーのね」
男は後ろを振り返らずに言った。
「そうだったな、これは申し訳ない」

暗闇大使が現われた。軍服に身を包んでいる。
「いえ、謝れることはありません。人であった時の名もそれなりに気に入っておりますので」
彼はそう言うと後ろへ向き直った。
「ただ今はヤマアラシロイドが私の名ですので。それは覚えておいて下さい」
「わかった。ところでヤマアラシロイドよ」
「ハッ」
ヤマアラシロイドは改めて畏まった。
「今は攻撃は控えよ。いずれ時が来るまで待て」
「おや、まさか私がライダー達に遅れを取るとでも？」
彼はそう言って微笑んだ。
「今彼等は一箇所に集まっております。一網打尽にする絶好の機会かと」
「それはそうだがそれではゼクロスまで傷付けてしまう。わしはあの男の身体が欲しいのだ」
「つまりバダンに連れ戻すと」
「そうだ。そして今もう一人呼んである。攻撃を仕掛けるのはその男と合流してからでも遅くあるまい」
「あの男ですか」
ヤマアラシロイドの顔が一瞬ピクッ、と引き攣った。
「そうだ。それならば作戦はよりやり易くなるだろう」
「ええ」
彼はあの男を快く思ってはいなかった。その為内心では不満があるのだ。
「不服か？」
それは暗闇大使も察していた。
「いえ」
彼はそれを否定した。だがそれは本心を隠しただけで不満を否定したものではなかった。

「安心しろ。作戦の指揮はそなたに委ねる。あの男にもそれは伝えてある」
「それならば」
一応承諾してみせた。だがまだしこりは残っている。
「では良いな。ゼクロスの件はそなたとあの男に任せる」
「ハッ」
暗闇大使は姿を消した。ヤマアラシロイドはそれを見届けると頭を上げた。
「あの男か・・・・・・」
彼はふと呟いた。
「腹の読めない男です。一体何を考えているか」
そう言うと彼も姿を消した。そして後には何も残らなかった。

失われた記憶その三

村雨は目を覚ました。そして改造室を出て海堂博士達のいる研究室へ入った。

そこには三人の博士達がいた。ライダーや立花達は席を外している。

「村雨君、君の身体だが」

伊藤博士が口を開いた。

「俺の身体？」

村雨は尋ねた。

「そうだ。この写真を見てくれ」

彼はそう言うと先程ライダー達に見せたレントゲン写真を今度は本人に見せた。

「これが君の身体だ」

博士はそう言うと彼の顔を見た。

「そうか」

村雨は表情を変えずそれに答えた。

「驚かないのだな」

海堂博士が言った。

「ああ。改造手術を受けたことはもう伊藤博士から聞いている。今更驚きはしない」

「そうか」

海堂博士はそれを聞くと再び尋ねた。

「私の事は覚えてないかな」

「貴方は・・・・・海堂博士だな。確か伊藤博士の友人の」

彼は答えた。

「そうか。やはり記憶は完全に消されているな」

彼は悲しさを込めた声で言った。

「覚えていないか。君のお父さんの友人だったのだが」

「俺の・・・・・父？俺にも家族がいたのか！？」
村雨は逆に彼に尋ねた。
「そうだ。君のご両親は早くに亡くなっている。そして君はお姉さんと一緒に暮らしていた」
「姉さん・・・・・俺には姉がいたのか」
「そうだ。それは次第に思い出していけばいい」
海堂博士は彼に言った。
「しかし全てを思い出しても決して悲しみや怒りに心を奪われないでくれ」
ここで伊藤博士が言った。
「悲しみ、怒り・・・・・。伊藤博士、何故だ！？何故俺に記憶の話をする時いつもその言葉を出す！？」
彼は尋ねた。
「それはいずれわかるよ。いずれ、ね」
伊藤博士は悲しい顔で言った。
「けれどこれだけは覚えてくれ」
そう言うと言葉を続ける
「前にも言ったがライダー達は皆最初は憎しみを心に抱いて戦ってきた。しかしそれを乗り越えて本当の意味での正義の為、人々の為に戦う戦士になったんだ」
「本当の意味、でか」
「そう、それもわかるだろう。君はそれを理解する宿命なんだ」
「宿命・・・・・俺の宿命・・・・・」
「宿命からは決して逃げられない。いや、君は逃げる事を許されていないんだ」
「それは俺が改造人間だからか。ゼクロスだからか」
「・・・・・そうだ」
伊藤博士は顔を下に向けながらも毅然とした声で言った。
「君はバダンに兵器として改造された。そしてそのバダンから脱出してここまで来た。それも宿命なんだ」

「ここに来ているのもか」
「そうだ、辛い事を言っているのはわかっている。だがそれが君の歩むべき道なんだ」
博士は顔を上げた。
「バダンと戦う事がか。それが俺の宿命だというのか」
村雨の表情は変わらない。だがその声は次第に重くなっていく。
「残念だが。そして君が望まなくとも彼等は必ずやって来るだろう。君を連れ戻しに」
「俺を・・・・・・」
「もう一度兵器となるか、人間になるか。もし君が兵器となりたいのなら彼等に従えばいい」
「おい、伊藤君・・・・・・」
海堂博士と志度博士はその発言を咎めようとした。
「だがそれが是が非かは君自身が最もよくわかっている筈だ。私とここまで来た旅で」
「・・・・・・・・・」
村雨はそれを聞いて沈黙した。確かにここまでの道で多くの事があった。そして多くの事を知った。
「もしそれが惜しくないというのならそうしたまえ。だがそれがどういうことか君はもうわかっている」
「・・・・・・ああ」
村雨はそれに対し答えた。

失われた記憶その四

「ならば君は自分がどうすべきかわかっているな。ゼクロス、いや村雨良」

博士は彼の名を呼んだ。

「バダンと戦うんだ。そして世界をその魔の手から救ってくれ、ライダー達と共に」

「・・・・・・・・・わかった」

ゼクロスは静かに言った。

「そうか、そう言ってくれると思ったよ」

三人の博士はその言葉を聞いて微笑んだ。

「だが一つだけ条件がある」

彼は博士達を見据えて言った。

「俺に記憶を戻してくれ。俺は自分が何者かも知らないのだ。貴方達が俺を知っていると言っても正直実感が湧かない。記憶を取り戻してくれるのなら俺は喜んでバダンと戦う」

「・・・・・・・・・いいのだね」

伊藤博士は彼に対して言った。

「ああ。出来るのか？」

「序々にね。少しずつだが」

「一度には出来ないのか」

「私はその技術を持ってはいない。無論彼等もライダー達も」

伊藤博士は二人の友人の方を見て言った。彼等もそれに対して頷いた。

「あの技術はバダンしか持ってはいない。あれは悪魔の技術だ」

伊藤博士はそう言って顔を曇らせた。

「人を人でなくする。そして君は一度は兵器になったのだ」

「そうか・・・・・・」

村雨は頷いた。そこに抵抗や反発は無かった。

「記憶は必ず取り戻す。だが少しずつだ。そして君は一歩ずつ人間になっていくのだ」
「これまで通りか」
「そうだ、これまで通り。君は既に人間だ。しかし本当の意味でまだ人間ではないんだ」
「愛を知らないからか」
「そうだ」
博士はその言葉に頷いた。
「ライダー達は愛を知っている。だからこそ本当の意味での戦士なんだ。彼等はどんな身体であろうとも人間だ。人間は身体や姿じゃないんだ。心を、慈しむ心を知っているからこそ人間なんだ」
「俺はまだ完全にそれを持ってはいないということか」
「残念だが。それを少しずつ手に入れていけばいい。記憶と共にな。それでいいかな」
「ああ。俺に異存は無い」
村雨はそう言うと頷いた。
「よし、ならば私と共に行こう。そしてバダンと戦おう」
「ああ」
村雨と博士はそう言うと立ち上がった。そして研究室を後にした。
「行って来るよ」
博士は部屋を出る時二人に対して言った。
「ああ、何かあったらすぐに連絡してくれ」
二人はそれに対し答えた。そして村雨と博士は新たに旅立った。
二人は湘南にやって来た。そして海辺の洋館に辿り着いた。
「ここは」
村雨は博士に問うた。
「かって君が住んでいた家だ。今は誰もいないが」
中は誰もいなかった。だが綺麗に掃除され塵一つ無かった。
「事前に業者に掃除を頼んでおいたんだよ。すぐにここに暮らせるようにね」

「そうか、有り難う」
彼は博士に対して言った。
「記憶を取り戻すには昔の家に住むのが一番いいと思ってね。ここにいると少しずつ思い出すだろう」
村雨は屋敷の中を見た。何処かで見たような気がした。
「不思議だな。全く知らない場所なのに」
村雨はポツリと言った。
「それはそうさ、前に住んでいた家なんだから」
博士は微笑んで言った。
「暫くここに住んでいるといい。そうすれば記憶を取り戻して来る筈だ」
「そうか」
「君の部屋は上にある。一番いい部屋にしておいたよ」
「どんな部屋だ?」
「行ってみるといい」
「わかった」
博士に促され村雨は二階へ上がった。そしてその部屋に入った。
そこは海が見える広い部屋だった。広いベッドやソファーが置かれ下には絨毯が敷かれている。テレビもある。
「いい部屋だな」
その時博士がやって来た。
「そう言うと思ったよ。もっとも君が以前使っていた部屋だが」
「そうか、俺はこの部屋にいたのか」
「うん、それも思い出していけばいいよ」
博士は彼に対して言った。
「とりあえず私の連絡先を教えておこうか」
彼はそう言うと携帯を取り出した。
「これだ。覚えておいてくれ」
「わかった」
村雨は彼の番号を自分の携帯に記憶させた。

失われた記憶その五

「よし。では私はこれで。また何かあったら連絡してくれ」
「ああ」
博士は屋敷を後にした。後には村雨一人が残った。
「中を見回ってみるか」
彼はふと部屋を出た。そして屋敷の中を見回った。
古風ながら上品な造りの屋敷である。装飾品は無いが住むのに必要なものは全て揃っている。
「中々いい家だな」
彼は屋敷の中を見終わり言った。そして応接間のソファーに腰を落とした。
そして紅茶を入れる。口をつけ飲む。
「・・・・・何処かでこんなことがあったかな」
ふと脳裏に何かが浮かんだ。彼はその時も紅茶を飲んでいた。
だがその時は一人ではなかった。その茶も自分ではない別の誰かが入れてくれたのだ。
「誰だったかな」
それは女性だった気がする。それも自分と親しい者だ。だがそれが誰かまではわからない。
ティーカップを見る。見ればそれと同じものが棚に入っている。
「二つ、か」
それは二人で使っていた。それも同じ女性だった筈だ。
「俺には姉さんがいたというが」
村雨はふと考えた。
「その人なのか」
名前はしずかというらしい。それは覚えた。
懐から一枚の写真を取り出した。博士達から貰った写真だ。
そこに自分と姉が写っている。二人共笑顔で写っている。

黒い髪の美しい女性だ。自分と並んで立っている。
「これが俺の姉さんか」
それはわかった。だが実感が無い。
「わからない。俺は本当にこの人と一緒にいたのか」
写真を見ながら呟いた。感覚が湧かない。
「姉さんか」
一体どういう人だったのかさえもわからない。それが残念だとも思わなかった。
「それも俺の感情がまだ完全ではないせいか」
村雨はふと思った。
「姉さん、貴女はどういう人だったんだ」
再び写真の中の姉を見る。彼女は何も語らずただ微笑んでいるだけである。
「あそこか」
その村雨がいる洋館を一人の男が遠く離れた崖の上から見ていた。
「かってはあいつの家だったらしいが」
黒いジャケットの男である。三影だった。
「記憶を取り戻そうとしているようだな。無駄な事を」
そう言うとサングラスを取り外した。そして機械の右目でその屋敷を見る。
機械の目は何かを合わせていた。冷たい光がそこに宿る。
「いっそ一思いに・・・・・」
心の無い右目とは対照的に左目に憤怒の光が宿った。その時だった。
「お待ちなさい」
後ろから誰かがやって来た。
「あんたか」
三影は後ろを振り返って言った。そこにはヤマアラシロイドがいた。
「暗闇大使からのご命令は生かして連れ戻せ、とのことです。無闇

に攻撃をしてはいけませんよ」
「ほう、であんたは俺にそれを命令する権限があるのか？生憎俺はあんたの仲間じゃないぜ」
三影は右目で彼を見て言った。
「今回の作戦は私が責任者です。そして貴方は私の指揮下に入ることとなりました」
「それは暗闇大使からの指示か？」
「はい。何なら直接確かめますか？」
ヤマアラシロイドは三影に微笑みながら言った。
「いや、いい。ならばそれに従おう」
彼はそれに対し素直に従った。
「その方が作戦もスムーズにいくしな」
「感謝します、素直に従って頂いて」
「フン、だからといって俺があんたを嫌っていないというわけではないがな」
そう言ってサングラスを再びかけた。
「おやおや、それはそれは」
だがヤマアラシロイドはそれを笑って聞き流した。
「そして俺は何をすればいいんだ。別働隊を率いるのかそれともあんたを支援するのか」
「いえ、貴方はまずは待機しておいて下さい」
ヤマアラシロイドは彼の顔を見て言った。
「何、どういう事だ！？」
これには三影も眉を顰めた。
「ゼクロスの相手は私一人で大丈夫だからです」
「大した自信だな。九人のライダー達もこの近くにいるというのに」
「ライダー？それがどうしたというのです？」
彼はそう言うと口を開けて笑った。尖った歯が見えた。
「バダン怪人軍団のリーダーであるこの私が彼等に遅れをとるとでも。口は慎んで頂きたいですね」

彼は口を閉じた。
「それに」
そして再び語りはじめた。
「彼等には既に手を打ってあります。当分動けないでしょうね」
「一体何をした!?」
三影はそれに対して問うた。

失われた記憶その六

「いや何、城南大学にいる海堂博士達に戦闘員達を送り込んだのですよ。陽動にね」
「そしてライダー達の目をそちらに向けさせたのか」
「はい。数だけは大量に送り込みましたからね。おそらくそちらに気を取られこちらには当分来ないでしょう」
「だが戦闘員なぞ精々数日も引き付けられれば上出来だぞ。そんなものが通用するのか」
「数日あれば充分ですよ」
彼は笑って言った。
「そう、数日あればね。その間にゼクロスは我が手に落ちます」
「そうか、ではその作戦を高見の見物とさせてもらおうか」
「どうぞ。私は止めませんよ」
ヤマアラシロイドはそう言うとその場から姿を消した。三影はそれを無言で見送った。
「数日でか」
そう言うと煙草を取り出しそれに火を点けた。そして煙をくゆらせながら屋敷を見る。
「どうするつもりか知らんが拝見させてもらうか。怪人軍団長の戦い方をな」
彼も煙草を吸い終わるとその場から消え去った。後には誰もいなかった。
村雨はベッドから起きた。見ると海から朝日が昇ろうとしている。
「朝か」
彼はベッドから出た。そしてトランクスの上にジーンズを履き上にシャツを着た。
下に降りキッチンに入る。そしてパンを取り出しそれにマーガリンを塗って口に入れる。

ゆで卵があった。それも食べた。
そして最後に紅茶を飲む。あのティーカップでだ。
「これからどうするかだな」
紅茶を飲み終え彼は考えた。とりあえず屋敷から出た。
庭を歩き回った後ガレージに入る。特に何かがあってのことではない。気が向いたからである。
そこにはヘルダイバーが置かれていた。どうやら伊藤博士が運び入れてくれていたらしい。
「相変わらず気の利く人だな」
無論変身前であるからその形状は普通のバイクと変わらない。村雨はガレージを開けるとそれに乗った。
「少し外に出るか」
ヘルメットを被りエンジンを入れた。そして走りはじめた。
道はまだ誰もいない。しずかな朝の道に彼のバイクだけがある。
左手には海が見える。朝日に青い海が照らされている。
「綺麗だな」
村雨はそれを見てふと呟いた。そこに見える海がとても美しく思えた。
街に出る。人々は活動を今はじめようとしている。
海には漁船がある。店ではおじさんやおばちゃんが品物を出している。その側を新聞配達の兄ちゃんが自転車で走り抜けていく。
そして学生やジョギングをするおじさん、犬を連れる老人がいる。皆それぞれの表情で街の中を歩いている。
「・・・・・・・・」
村雨はそれを黙って見ていた。見ていると何故か心が和んだ。
「不思議だな」
村雨はポツリ、と呟いた。
「この人達を見ていると穏やかな気持ちになれる。丁度子犬を抱いた時もそうだったかな」
ふとあの時のことを思い出す。

「こうした風景を見るのはいいものだな。また明日もここに来るか」
そう言ってバイクのエンジンを入れた。
道を一台のバイクと擦れ違う。その時乗っている者が手で挨拶をしてきた。
「？あ、ああ」
村雨もそれに返した。これも悪い気はしなかった。
「これから朝はこうして街に出てみるか」
家に帰るとそう思った。そしてバイクをガレージに入れると屋敷に入った。
「？」
中に入って妙な気を感じた。中に誰かいるのだ。
「博士か！？」
違った。博士にしては気が禍々しい。何処か刺す様な気だ。
「お邪魔していますよ」
そこへ一人の男が出て来た。
「御前は・・・・・・」
見覚えがあった。博士と共にバダンを脱出する時に二人を取り囲んだ一団の中心人物である。
「お久し振りですね。あの時以来ですか」
それは向こうもわかっている。穏やかな笑みを浮かべ彼に話しかけてきた。
「ヤマアラシロイド。これが今の私の名です」
そう言うと一礼した。
「・・・・・・バダンの改造人間か」
「ええ。貴方に用件があってこちらに参りました」
「・・・・・・何だ」
彼はヤマアラシロイドから視線を反らさずに問うた。
「単刀直入に言いましょうか。バダンに帰られませんか」
ヤマアラシロイドは村雨に視線を返して言った。
「何故だ」

村雨は再び問うた。
「貴方の力を必要としております故」
彼は答えた。

失われた記憶その七

「バダンはその崇高な理想の為に貴方の力を必要としているのです。戻って来て下さい。そして共に理想社会を築こうではありませんか」
美辞麗句をもって言う。だが村雨はそれに対し簡潔に答えた。
「道具としてか」
だがヤマアラシロイドはそれに対しても顔色を変えない。
「それは違いますね。誰に吹き込まれたのかは知りませんが」
「では俺はバダンにとって何なのだ?」
「同志です」
彼は一言で言った。
「我がバダンにおいて偉大なる首領の下理想を実現する為に働く同志です。それ以上でもそれ以外でもありません」
「つまりバダンの歯車か」
村雨はそれを聞いて言った。
「それは貴方の勘違いです。我々は自分の意思でバダンの為に活動しているのです」
「ならば何故俺の記憶を消した?」
村雨はヤマアラシロイドを見る目の光を強めて言った。
「不用だからです」
「不用!?」
「そうです。そんなものが必要なのですか?」
ヤマアラシロイドはそう言うと口の片端を吊り上らせた。
「人でなくなるのですから。人などという愚かなものを超越している我々には人の持つものなど一切不用なのです」
彼は言葉を続けた。
「人は弱く愚かなものです。そしてその為に憎しみ合い奪い合い殺し合う・・・・・。そんなものが持っていたものなど必要があると思うのですか?」

「・・・・・・・・」
村雨はその言葉に沈黙した。その時先程見たあの街の姿が脳裏に浮かんだ。
それを見た彼は彼等を別に弱いおのだとも愚かだとも思わなかった。それは今までの旅でもわかっていた。人間には多くの感情がある。それは確かに良くない部分もある。しかしそれ以上に素晴らしいものがあった。
彼は自分の見たものを信じていた。そして博士の言葉も。だからこそヤマアラシロイドに対して言った。
「それは違う。御前は間違っている」
「・・・・何ですと」
彼はそれを聞いて片目をピクリ、と動かした。
「俺はここに来るまでに多くの人に会い多くのものを見てきた。人間は確かに愚かな部分もあるだろう。しかしそれは一部分に過ぎない。御前は一部分だけを見てそう言っているだけだ」
「・・・・・・ほお」
ヤマアラシロイドの目の光が冷たくなった。
「俺は人間を信じる。そして俺もまた人間になりたい。御前の誘いを受けるわけにはいかない」
「ではバダンには戻られないのですね？」
「そうだ。そして俺は記憶を取り戻し人間になる」
「・・・・・・そうですか」
ヤマアラシロイドはそれを聞いて目をゆっくりと閉じた。そして再び開いた。
「ムッ」
その目は真っ赤になっていた。その目で村雨を見る。
「なら仕方ありませんね。バダンに仇をなす者は消えてもらわねばなりません」
全身を邪悪な気が包む。それは刺す様な刺々しい気であった。
村雨も身構える。闘いがはじまろうとしていた。

だがヤマアラシロイドはその気を急に鎮めた。そして目も元の色に戻った。
「・・・・・ここでは止めておきましょう」
彼は微笑みを顔に浮かべて言った。
「どういう事だ?」
村雨は彼に対して問うた。
「貴方と戦うにはより相応しい場所があるからです」
彼は静かに言った。
「相応しい場所!?」
「ええ。貴方のその薄っぺらい人への思いがすぐに剥がれる場所がね」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「剥がれる場所・・・・・」
「そうです。まあそれはすぐにわかりますよ」
彼はそう言うと踵を返した。そして屋敷の出口へ向かった。
「すぐにまたお会いすることになるでしょう。その時を楽しみにしておいて下さい」
屋敷を出た。そして姿を消した。
「行ったか」
村雨は気配が遠くへ去って行くのを感じた。今からでは負い付く事は無理だろう。
「それにしても俺の思いが剥がれる場所か」
ヤマアラシロイドが言った言葉を思い出した。
「一体どういう意味だ。そして何を考えているのだ」
彼は怪人が去った屋敷の出口の方へ顔を向けた。そこからは太陽の淡い黄金色の光が差し込めていた。

失われた記憶　　完

2004・2・16

記憶の欠片その一

記憶の欠片

村雨がヤマアラシロイドと会い数日が経った。その間バダンの目立った動きは無く立花やライダー達は彼等の情報を収集し捜査をしているだけであった。

村雨も動いてはいなかった。ヤマアラシロイドと会った事を伊藤博士には伝えたがそれで終わりであった。

この数日彼は毎日外で出ていた。バイクで近所を回り日が暮れると家に戻り休む。それの繰り返しであった。

彼は屋敷に戻るといつも考えた。自分の姉と記憶のことを。

「博士は何も言おうとしないな」

シャワーを浴びベッドに入って考える。そしてあのヤマアラシロイドの言葉を思い出した。

「一体どういうつもりなんだ」

だがそれはわからない。ただの脅しかも知れない。

しかしそうでないことは彼が一番よくわかっていた。必ず何かしてくるだろうと確信していた。

「何をしてくるつもりだ」

ふと窓の方を見た。青がかった澄んだ黒の空に黄金色の月が浮かんでいた。

月は何も語らない。だが黙って村雨の部屋を、そして夜の世界を照らしていた。

翌日も彼はバイクで外に出ていた。何処へ行くかは気の向くままである。

道を走る。丁度横須賀の方へ向かっていた。

横須賀は港町である。かって日本海軍の軍港があり今は海上自衛隊及びアメリカ海軍の港がある。防衛大学もあり独特の雰囲気が漂う街である。

その街を彼は歩いていた。そして商店街を見回っていた。
「色々とあるな」
彼は店を一つ一つ見回りながら言った。そしてふと眼鏡屋に入った。
「何かいいものはないか」
目に問題があるわけではない。改造手術の為人のそれとは比べ物にならないものになっている。ただ道を行く若者がかけているサングラスに興味を持っただけであった。
「サングラスはないか」
店員に尋ねた。気のいい若い男の店員は喜んで数品出してきた。
「どれが宜しいですか？」
店員は尋ねた。村雨はそれ等のサングラスを見た。
「そうだな」
ふと赤いサングラスを手に取ろうとする。そこで後ろから声がした。
「それは止めておいた方がいいな」
後ろを振り向く。そこにはあの男がいた。
「御前は・・・・・」
あの時一人で現われた男だ。
「久し振りだな」
三影は村雨に対しニヤリ、と不敵に笑って言った。
「サングラスには五月蝿くてな。赤いのは駄目だ」
彼は前に出て村雨に対して言った。
「ではどれがいいのだ」
「それは決まっている」
そう言うと自分のかけているサングラスを指し示した。
「これだ。黒、それもレイバンだ」
かってマッカーサーがかけていたものと同じだ。
「おい、レイバンはあるか」
店員に尋ねた。

「はい、こちらに」
店員はそれを差し出してきた。村雨はそれを買った。
「どうだ」
店を出てレイバンをかける村雨に対して尋ねた。
「悪くないな」
村雨は素っ気無く答えた。
「そうか、ならいい」
三影はそれを聞いて満足そうに笑った。
「ところでここに何をしに来ている」
村雨はサングラスを外すと三影に対して問うた。
「聞きたいか」
彼は再びニヤリ、と笑った。
「まあいい。どのみち話すつもりだったしな」
二人はアメリカ軍のベースの前を右に曲がった。そしてそこから歩き人気の無い海岸まで行った。
「ここならいいな」
三影は村雨のほうを振り向いて言った。
「闘うつもりか？」
村雨は彼を見据えて言った。
「闘いか。それもいいな」
彼はニヤリ、と笑って言った。
「・・・・・・・・・」
村雨は構えを取った。全身に緊張が走る。
「安心しろ。今は御前と闘うつもりは無い」
彼は不敵な笑みを浮かべたまま言った。
「それよりも御前に尋ねたい事がある。今日はその為に来た」
「俺に・・・・・・！？」
村雨はその言葉にキョトンとした。
「そうだ。俺の事を憶えているか」
彼は口元から笑みを消して尋ねてきた。

「いや、思い出してか、と聞いた方がいいな」
そう言うと彼はサングラスを取り外した。
「この右目のことだがな」
彼はその機械の目を見せて言った。
「その眼は・・・・・・」
感情の無い銀色の眼。その眼が村雨を見ていた。

記憶の欠片その二

「思い出しているか、そうでないのか。どちらだ？」
彼は尋ねてきた。
「それは・・・・・・・・・」
村雨は答えられなかった。脳裏に何も浮かんで来ないのだ。
「そうか。まだ思い出してはいないのか」
彼は舌打ち気味にそう言うと再びサングラスをかけた。
「それでは仕方がない。この眼はな、訓練の時に失ったのだ。御前と一緒の訓練の時にな」
「俺と・・・・・・」
「そうだ。あれは御前がバダンにいた時だった」
彼は煙草を取り出した。そしてそれに火を点けながら言った。
「俺と御前はバダンの幹部候補生だった。そして共に訓練を受けていたのだ」
「バダンの・・・・・・」
その時脳裏に何かが浮かんで来た。
「あ・・・・・・・・・」
それを見て村雨は呻いた。
「何か思い出したか？」
「これは・・・・・・・・・」
それは荒地だった。そこで彼は軍服を着た者達と共に激しい訓練を受けていた。
爆発が起こり銃弾が飛び交う。それはまるで戦場であった。
その横に彼がいた。彼もまた軍服であった。
「御前あの時の・・・・・」
村雨は三影の顔を見て言った。
「そうだ。俺はあの時御前と共に訓練を受けていた」
彼は煙草から口を離して言った。

「あの時御前は爆発に巻き込まれた。俺はそれを助けようとしてこの右眼を失ったのだ」
彼はサングラスの右に手を当てて言った。
「御前は一命をとりとめたが瀕死の重傷で身体の殆どが傷ついていた。バダンはその御前に改造手術を施したのだ」
「そうだったのか。だから俺はゼクロスに・・・・・・」
「そして俺も同時に手術を受けた」
彼は静かに言った。
「そうか、だから御前の右眼は機械なのか」
「右眼だけではいない。今の俺は全身が機械だ。脳以外はな」
彼は言葉を続けた。
「今の御前と同じようにな。俺と御前は同じなんだ」
「同じ・・・・・・・・・」
「そうだ、だからこそ聞くんだ。記憶が戻っているのかどうかな」
「・・・・・・・・聞いてどうする」
「わかっている筈だが」
彼はニヒルに笑って言った。
「即答しろとは言わない。だが俺と共に来い。そして理想の世界を築くんだ」
「強い者が支配する世界か」
「そうだ、力こそが絶対だ。それこそが正義だ。弱いものはそれだけで悪なのだ。生きている価値すらないものなのだ」
彼は煙草を消し再びサングラスを取り外して言った。
「同じ者として聞く。バダンに帰る気は無いか?」
「・・・・・・・・戻ったらどうなる。また兵器になるのではないのか」
「それがどうした?俺達は理想の為になら喜んでこの身体と命を捧げると誓ったのではないのか?」
彼は人間の形のままの左眼で村雨を見て言った。
「それを思い出せ。それこそが御前が取り戻すべき記憶なのだ」

「俺が取り戻すべき・・・・・・」
村雨は呟く様に言った。
「そうだ、伊藤博士が何を言っているのかは大体予想がつく。だがそんなものはまやかしに過ぎぬ。御前はバダンでバダンの為に戦う為に生まれたのだからな」
「・・・・・では俺の姉さんは何なのだ」
彼は反論するでもなくポツリ、と問う様に言った。
「姉!?ああ、あの女か」
彼は口の端を歪めて言った。
「知っているのか!?」
村雨は問うた。
「当然だ。この目で見たのだからな」
彼は笑みを浮かべ続けている。
「その目で見た・・・・・。ならば俺の姉さんはどういう人なのだ!?そして今どうしているのだ!?」
彼は表情は変わらないが語気を少し荒立たせて問うた。
「・・・・・知ってどうする」
三影は冷たい声で言った。
「俺の只一人の家族だったという、姉さんの事が俺の記憶の最も大切なものかも知れないんだ」
「・・・・・そうか」
彼はそれを聞くとサングラスを再びかけた。
「知っているんだな!?」
「・・・・・ああ」
彼は答えた。
「では答えてくれ」
「・・・・・いいのだな」
三影は彼に対し念を押す様に言った。
「何!?」
村雨はそれを聞いて少し驚いた。

「本当に知っていいのだな、と言っているんだ」
彼は再び念を押す様に言った。

記憶の欠片その三

「当然だ」
村雨は答えた。
「・・・・・よし、では一つだけ教えてやろう」
彼は村雨を見て言った。
「・・・・・死んだ、もうこの世にはいない」
「何っ!?」
村雨はその言葉に驚愕した。
「聞こえなかったのか。死んだと言ってるんだ」
「死んでいるのか・・・・・・」
「そうだ、残念だがな」
彼は村雨を冷たい目で見て言った。
「これでいいか」
彼は立ち去ろうとする。
「次に会う時には返答を帰聞こう」
「待ってくれ」
村雨は三影を呼び止めた。
「何だ!?」
三影はそれに反応した。
「聞きたい、俺の姉さんは何処でどうして死んだんだ!?」
彼は三影に訪ねた。
「・・・・・それは自分で調べるんだな。伊藤博士にでも聞いて」
彼はそう言うと踵を返した。
「待てっ、答えろ!」
「・・・・・そこまで教える程俺はお人よしじゃない」
彼はそう言ってその場を立ち去った。後には呆然とする村雨だけが残された。
伊藤博士はこの時城南大学にいた。海堂博士や志度博士と共にラ

イダーの身体やマシンについての研究を行なっていた。
その時彼の携帯に電話が入った。
「おや良君からか」
彼は海堂博士の研究室から出ると携帯に出た。
「良君、どうしたんだい？」
彼は村雨に尋ねた。
「博士、聞きたい事がある」
彼は言った。
「今自宅に戻ったところだ。俺の姉さんについて聞きたい」
「・・・・・・わかった」
博士は答えた。何があったのか大体察しはついた。すぐに大学を後にして村雨の家へ向かった。
屋敷に着いた。中に入る。村雨はそこにいた。
「・・・・・何かあったようだね」
博士は村雨の様子を見て言った。
「今日横須賀へ行って来た」
彼は抑揚の無い声で言った。
「そしてそこで何かがあったというのだね」
博士は彼の顔を見ながら尋ねた。
「ああ。三影に会った」
「そうか、彼にか」
博士はその名を聞いて言った。
「彼は君に何を言ったんだ？」
「まず俺に自分の右目を見せた。この目は俺を助けた時に失くしたものだと」
「そうだ。訓練の時にな」
「それも聞いた。俺はバダンの幹部候補生だったと聞いた」
「そうだ。君は記憶と感情を消されバダンで訓練を受けていたのだ。兵器となるべくな」
「それもだ。そしてあの男は俺にバダンに戻れと誘った」

「それでどうしたのだね!?」
博士はそんな彼を見ながら尋ねた。
「俺がバダンへの忠誠を誓ったのを思い出せと言われた。だが俺はそれも知らない。答えようがなかった」
「そうか、あの男その事までも・・・・・」
博士はそれを聞いて顔を暗くさせた。
「俺は本当にそんな事をしたのか?」
「・・・・・・・・そうだ」
博士は顔を俯けて答えた。
「君は記憶と感情を消された後その誓いをさせられたのだ。そしてバダンに所属させられたのだ」
「あの軍服を着てか」
彼はふとあの軍服を思い出した。

記憶の欠片その四

「そうだ。だがそれは君が本来の心を持っていない状態でだ。気にすることはない」
「そうか。では俺はこれまで通りここで記憶を取り戻していけばいいのだな」
「そうだ。それが君の今為すべきことなんだ」
「そうか。ならいい」
村雨はその言葉に頷いた。
「では力こそ正義というのも気にしなくていいのか」
「あの男、まだそんな事を言っているのか・・・・・・」
博士はそれを聞くと顔を顰めた。
「そうだ、あの男は自らの権力欲や選民思想を性悪論や力への信仰で理論武装しているに過ぎないのだ。あの男は自分が思っているような偉大な人物ではないのだ」
彼は忌々しげに言った。
「どんなに自分が素晴らしいと思っていても所詮は何かにすがりそれをたてに他の者を見下しているに過ぎないのだ。それがわからない、いやわかろうともしない愚か者なのだ。あの男の実態はそうした薄っぺらなものでしかないのだ」
「薄っぺらなのものか」
村雨はそれを聞いてその言葉を口に出した。
「そうだ、あの男の考えはそんなものだ。君もすぐにわかる。あの男の愚かさ、根拠の無さが。君はあのようにはならないでくれ、いや君の運命はそうした者を倒すものなのだ」
「そうか。それもいずれわかるのか」
「そうだ、その時ライダーの事を考えるんだ。あの男と彼等の違いを」
「・・・・・・わかった」

村雨はその言葉に答えた。博士はそれを見て表情をほんの少しだけ明るくさせた。
「だがもう一つ聞きたい事がある」
村雨は博士を見たまま言った。
「あの男は俺の姉さんについて言った」
「・・・・・・・・・」
博士はそれを聞くと顔をさらに暗くさせた。
「あの男は姉さんをもう死んだと言った。それは本当なのか?」
「・・・・・・・・・」
博士はそれに答えようとしない。顔を再び俯けてしまった。
「どうしたのだ、知らないのか?」
村雨はそんな彼に対し問うた。
「・・・・・知っている」
博士は振絞る様な声で言った。
「そうか。なら教えてくれないか」
「・・・・・あの男からは聞いていないのか?」
「?何も。死んだとだけしか聞いていないが」
「そうか。あの男が何を考えているのかまではわからないが」
博士は暗い顔のまま言った。
「済まない。私にも今は言う事が出来ない」
博士は村雨から視線を逸らして言った。
「何故だ!?」
村雨はそんな彼に対して問うた。
「・・・・・・・・それも何れわかることだとだけしか言えない」
博士は言った。
「またか。どうやら何か重要な秘密があるようだな」
村雨はそれを見て言った。
「・・・・・そうだ。君がそれを知った時が怖いのだ」
「怖い!?」
村雨はその言葉に突っ込んだ。

「そうだ。何度も言ったが君が憎悪の心に捉われるのが。それにより狂うのが」
彼はこの時自分が何を言ったのか悟ってはいなかった。何が起こったのかを言ってしまったのだ。
だが村雨はそれに今の時点では気付かなかった。記憶を持たない彼にはわからなかったのだ。
「・・・・・・また憎悪か」
彼はその言葉を聞くと言った。
「憎しみは俺も知っている。だが何故それにこだわる!?人ならば誰もが持っている嫌悪の一つではないのか」
「・・・・・・そう考えているのならそうでいて欲しい。何時までもな」
博士は忌むような声で言葉を出した。
「どのライダーも乗り越えられた。それは記憶と感情が充分にあったからだ。しかし今の君では・・・・・・」
「それに支配だれる、というわけか」
「・・・・・・・・・」
「それに支配された時俺はどうなるのだ?まさか兵器に戻るのか!?」
「いや、それはない」
「それでは問題無いのではないのか」
「・・・・・・兵器などより怖ろしい、『鬼』になってしまうのだ」
「『鬼』!?」
村雨はそれを聞いて声をあげた。
「鬼というのは童話なんかに出て来るあれか?人を襲い悪事を働く」
「・・・・・・違う、私が言うのは憎しみのままに拳を振るう心を失くした戦士のことなのだ」
博士は俯きながらも遠くに何かを見つめる目で言った。
「そうなった時、君は正義の戦士ではなくなる。君はライダーでなくなるのだ」

「しかしどのライダー達も憎悪に心を捉われていたのではなかったのか？」

村雨は問うた。

「そうだ。そういう意味でも君と彼等は同じなのだ」

博士はそう言うと顔を上げた。そして遠くを見る。

「彼等もそれを乗り越える為に苦しんだ。苦しみ抜いた。・・・・・・その苦しみはおそらく私にはその百分の一もわかってはいないだろうがな」

彼はそう言うと哀しい目をした。

「君にはあの苦しみを経験して欲しくはないのだ。あまりにも孤独で辛い苦しみなのだから」

「・・・・・そうか。それは俺の事を思ってのことなのか」

「そうだ。君は焦ってはいけない。少しずつ記憶を取り戻してくれ。そして機が来たならば全てを話そう。君の姉さんの事を」

「わかった」

村雨は頷いた。そして二人は屋敷を後にした。博士が食事に誘ったのだ。

記憶の欠片その五

三影は湘南で村雨との話を終えると基地に戻った。
無言で指令室に向かう。そこにはヤマアラシロイドがいた。
「何処に行っていたのです！？」
彼は顔を顰めて詰問した。
「ゼクロスと会ってきた」
彼は言い逃れも嘘も言わなかった。
「どういうつもりですか！？」
それを聞いたヤマアラシロイドは彼を睨んだ。目の光が赤くなる。
「・・・・・別に。戦ったわけでもない。ただ単にかっての知り合いだということを教えただけだ」
「姉の事もですか！？」
その言葉を聞いた三影は視線を上げて彼を見た。
「知っていたのか」
「当然です。今回の作戦は私が総括しているのですからね」
「そうか。そして俺もその下にいる」
「その通りです。ならば何故勝手な行動を・・・・・」
「待機、か。だが別に作戦行動に支障がなければ構わないだろう。俺とてじっとしているだけでは身体がなまる」
「クッ・・・・・」
ヤマアラシロイドはその言葉に歯軋りした。
「まあ俺はこれからは自分の部屋でゆっくりさせてもらう。後は御前が好きにすればいい」
そう言うと踵を返した。
「お待ちなさい」
ヤマアラシロイドは彼を呼び止めた。
「何だ？」
三影は振り向いた。

「記憶の事を言ったのですか！？」
彼は三影を睨み付けて問うた。
「少しだけな」
彼は答えた。
「俺のこととあいつの姉が死んだことだけだ。安心しろ、記憶を戻してはいない」
「それは何より」
彼はそれを聞いて口の両端を吊り上げて笑った。
「あれは私の切り札ですからね。そうおいそれと使ってもらっては困ります」
「切り札か。また何か企んでいるようだな」
「企んでいる！？それは言葉が悪い」
彼は三影の言葉に対してうそぶいた。
「策です。作戦を成功させる為のね」
「そうか」
彼はそれを聞くと再び踵を返した。
「見ていなさい、私のやり方を」
ヤマアラシロイドは三影の背に対して言葉をかけた。
「そうさせてもらうか」
彼はそれに対し振り向かず答えた。
「だが油断するなよ。策は一つでも漏れがあるならばそこから崩れ落ちる」
「それはご心配なく。私に限ってはね」
ヤマアラシロイドはその禍々しい笑みをったえたまま言った。
「ではそうさせてもらうか」
三影はそう言うと指令室を後にした。ヤマアラシロイドはそれを赤い眼で見送っていた。
「大分感情のほうは豊かになっているな」
食事から帰り屋敷に入った伊藤博士は村雨に対して言った。
「そうか？」

村雨はまだ実感がないようである。
「うん。君が心を取り戻しはじめた時と比べるとな」
博士はそんな彼に対して笑顔で答えた。
「思えばあの時ライダー達の攻撃を受けたのが全ての始まりか。本当にわからないものだな」
彼は感慨深そうに言った。
「実はね、私はその直前まで絶望していたんだ」
「絶望!?」
「そうだ、世界がこのままバダンにより滅ぼされてしまうのではないかとね」
「滅ぼされるのか」
「そうだ、滅ぼされるのだ」
博士は強い口調で言った。
「彼等が世界を征服したらその全てが彼等のものになる。彼等は自分達に従わない者や好ましくない者を次々に粛清していくだろう。それは暗黒の世界なのだ」
「暗黒の・・・・・・」
「あの男が言った力が支配する世界とはそれなのだ。バダンとそれに従う者達だけが生きる世界なのだ」
博士は三影の事を脳裏に浮かべながら村雨に対して言った。
「そうなっては何もかもが滅びるのだ。街も人も自然もな」
「街も人も・・・・・・」
それを聞いて村雨は朝に見た街を歩く人達を思い出した。
「そうだ、その全てが破壊されるだろう。そしてその後にバダンの者達がその野心を築くのだ」
「野心か。それにより築かれるものは何だ」
「地獄だ」
博士は簡潔に、だが忌々しげに言った。
「ショッカーからそうだった。力ある者だけが生き、そうでない者は力ある者の糧となる。それはまさに地獄だ」

「地獄なのか」
「そうだ、それは人の世ではない。悪夢の世界だ。わかるだろう、君が何故戦わなくてはならないかを」
「ああ」
村雨はその言葉に頷いた。
「やれやれ、我等の同志にその様な戯言を吹き込まれては困りますな」
不意に声がした。
「その声はっ」
村雨はその声の主を覚えていた。屋敷の中を見回す。窓のところだった。黒いシルエットが浮かんでいる。
「貴様は」
その影は答えようとしない。指でもってガラスを切った。ガラスは下に落ちた。音を立てて割れる。
「暫くぶりですね、ゼクロス」
彼は窓のところに立っていた。村雨と博士を見下ろして微笑んでいる。
「貴様、一体何をしに来た」
博士は彼を見て言った。
「決まっていますよ、彼を迎えに来たのです」
下に飛び降りて来た。片膝を着き着地し立ち上がると博士の方を見て言った。
「バダンの理想世界を築く為にね」
そう言うと口の両端を吊り上げた。その口が耳まで裂ける。
「言うなっ、この世に破滅をもたらそうとする輩が！」
博士は彼に対して叫んだ。しかし彼は一向に怯まない。
「所詮貴方はその程度なのです。人に留まっていればそれでいいというね」
彼は皮肉を言った。
「貴様等の様に心まで人でなくなる位なら今のままの方がどれだけ

マシか・・・・・・」
博士は歯を噛み締めて言った。
「聞き分けの無い方だ。しかしそれはいい」
彼はそう言うと左手を下へ向けて振った。すると博士の足下に一本の槍が突き刺さった。
「グッ・・・・・・」
それはトゲであった。ヤマアラシの背にあるトゲの巨大なものだ。
「私は貴方には何の興味も無いのですからね。いずれ弱き者として無様に死んでいく運命なのだし」
そう言うとゼクロスへ顔を向けた。
「私が用があるのは貴方なのですし」
ニヤリ、と笑った。
「前にお話したことへの返答を聞きに来ました。どう為されます？」
「・・・・・・・・・」
ゼクロスはヤマアラシロイドを見た。表情は無表情のままである。
「イエスかノーか。勿論どう答えればいいかはご存知ですね」
「・・・・・・ああ」
村雨は無表情のまま答えた。
「ならば話が早い。バダンへ戻りますか」
「・・・・・・ノーだ」
村雨は静かに言った。
「今何と！？」
ヤマアラシロイドはその言葉に対して眉をピクリ、と上げた。

記憶の欠片その六

「聞こえなかったか。ノー、と言ったのだ」
村雨は再び言った。
「俺は今まで人を見てきてわかった。人は確かに問題も多くあるがそれ以上に素晴らしいものを持っている。俺が今持っていないものを持っている。俺はそれを守りたい」
「・・・・・・・・・」
ヤマアラシロイドは動かない。黙してその話を聞いている。
「俺はその為に戦う。そして貴様等がそれを脅かそうとするのなら俺は貴様等と戦う」
「・・・・・・・・・そうですか」
話を聞き終えるとヤマアラシロイドは静かに俯いた。
「ならば再改造が必要ですね。二度と感情というつまらないものが戻って来ないような」
その目が赤くなった。髪が逆立ち銀色のトゲとなる。顔が獣のものになるその全身が黒と緑に覆われる。
「このヤマアラシロイドがそれを奪って差し上げましょう。そして貴方を我等の兵器に戻してあげます」
怪人となった。それは禍々しいトゲの男であった。
「ムウ・・・・・・」
村雨はそれを見て身構えた。その周りを戦闘員達が取り囲む。
「クソッ、何時の間に・・・・・・」
博士はそれを見て呻いた。
「博士は放っておきなさい」
ヤマアラシロイドは戦闘員達に命令した。
「かねてからの作戦通りいきますよ、いいですね」
戦闘員達はそれに頷いた。そして槍やロープを手に村雨を取り囲んだ。

「さて、ゼクロス」
ヤマアラシロイドは背中から一本のトゲを引き抜いた。
「これから貴方にいいものを差し上げます」
そう言うとトゲをかざした。それは鋭い槍に変化した。
「何だ、それは」
村雨は身構えながら問うた。
「貴方が望んでいたものですよ」
そう言うとニイイ、と笑った。牙の如き歯が見える。
「遠慮なく受け取って下さい」
博士はその言葉を聞いてハッとした。
「ま、まさか・・・・・・」
顔が急激に蒼ざめていく。
「おや、どうなされました」
ヤマアラシロイドはその博士を見て笑った。
「まさか貴様・・・・・・」
声が震えていた。
「そのまさかですよ」
彼は口を耳まで裂けさせて笑いつつ言った。
「止めろ！彼を何だと思っている！」
博士は彼を睨み付けて叫んだ。
「同志ですよ」
ヤマアラシロイドは馬鹿にしたような声で言った。
「心の無い、ね」
それが全てであった。彼等にとって村雨は所詮そうでしかないのだ。
「やはり貴様等は・・・・・・」
博士は激しい怒りと憎悪の目を向ける。だがヤマアラシロイドはそれには動じない。
「少し騒音がしますね」
そう言うと戦闘員の二三人に目配せをした。

「音を小さくして下さい」
戦闘員達はその言葉に従った。すぐに博士を取り押さえた。
「離せ、離すんだ！」
博士は必死に振り解こうとする。だが出来なかった。
「暫く大人しくしていて下さい」
ヤマアラシロイドはその場に不似合いな程落ち着いた声で言った。
「そしてこれから起こる奇跡の観客になって下さい」
彼は目を細めて言った。笑っている。だがその目には残忍な光が輝いていた。
戦闘員達が一斉にロープを放った。村雨を捉えようとする。
「ムッ」
村雨はそれに対し上に跳んだ。そして何なくかわした。
「無駄ですよ」
ヤマアラシロイドはそれを見上げて言った。そこに数本のロープが襲い掛かる。
それが村雨を捉えた。彼は為す術もなく捉えられた。
そして地に落ちる。彼はがんじがらめに縛られた。
「それでは始めますか」
ヤマアラシロイドは槍を右手にかかげながら村雨の方へ歩み寄って来た。
「奇跡を起こしましょう」
彼はそう言うと槍を大きく上げた。
「博士ならご存知ですね。人間の脳というのは多くの謎があると」
彼は村雨に顔を向けたまま言った。
「それがどうした」
博士は忌々しげに言った。
「その機能の殆どが使われていない。それでいて人間の動きの中で最も重要な役割を果たしているのです」
彼は無機質な声で語った。
「ですがバダンは違う」

彼はそこで言葉に笑みを含ませた。
「その機能を完全に引き出す術を知っているのです」
彼はそう言うと顔も笑わせた。
「それが貴様等の優位性を示しているとでもいうつもりか」
村雨はヤマアラシロイドを見ながら言った。
「まさか。それはバダンの力のほんの一部に過ぎませんよ」
ヤマアラシロイドの声には嘲笑も含まれていた。
「ですが今はそれを使います。貴方をバダンに戻す為に」
そう言うと槍を村雨の頭に向けた。
「まさか・・・・・・」
博士はそれを見て全てを悟った。
「止めろ、彼は頭脳は人間のままなんだ！」
彼は叫んだ。
「わかってますよ」
ヤマアラシロイドはそれを聞きながら哂った。
「だからこそするのです」
彼はそう言うと槍をゆっくりと動かし始めた。
「さあ、いいですか」
彼は村雨を見下ろして言った。
「今から貴方の望みを叶えて差し上げましょう」
槍が村雨の頭に突き刺さった。
「痛くはありませんよ。痛覚が無い部分ですからね」
槍はゆっくりと入っていく。
「そして次第に甦っていきます」
槍は脳に達した。
「記憶が」
彼はそう言うとゾッとする化け物のような笑みを浮かべた。

記憶の欠片その七

村雨の脳の中を槍が侵していく。彼はそれを妙な気分で受けていた。

「あ・・・・・・・・・」

脳裏に何かが浮かんできた。

それは幼い日の自分の姿であった。この屋敷で両親や姉と遊ぶ自分。

ある日両親が事故でこの世を去った。葬儀の後姉が自分に言った。黒く長い髪の美しい姉であった。

「これからは二人で生きていきましょう」

彼女はまだ小さい村雨を見下ろして言った。

「私が貴方を守っていくからね」

彼女は微笑んで言った。

「ううん、それは違うよ」

幼い村雨は姉に対して言った。

「僕が姉さんを守ってあげるんだ」

姉はそれを聞くと微笑んだ。それからは二人で生きてきた。

両親の残した遺産がある為生活には困らなかった。それは大きな救いであった。

姉は大学を出て新聞記者となった。彼はブラジルの大学に留学した。

彼はそこでパイロットの技術を身に着けた。それは後々大いに役に立った。

ブラジルに取材に来た姉をセスナに乗せた。彼女は南米に現われるという未確認飛行物体についての取材に来たのだ。

「ＵＦＯ！？そんなもの幾らでも見られるよ」

村雨は彼女に対して言った。航空自衛隊のパイロット達の間でもこうした未確認飛行物体の目撃例は案外多い。特にこのブラジルは

UFOの目撃例が極めて多い事でも知られている。
「それが尋常じゃないのよ。ここ最近特に多いし」
彼女は真剣な表情で言った。
「そうかなあ。そうは思えないけれど」
彼もパイロットの端くれである。そうした話はよく聞く。
「まあ折角久し振りに会ったし。僕も協力させてもらうよ」
「有り難う。持つべきものは出来のいい弟ね」
彼女は微笑んで言った。
「ははは、お世辞はいらないよ。シェラスコを奢ってくれるだけでね」
彼は冗談で返した。そして二人はセスナに乗り込んだ。
「場所は？」
彼は上空にあがると尋ねた。
「ギアナ高地の辺りで。あそこが特に多いっていうから」
「ギアナ高地、か」
ギアナ高地は標高二千メートルを越す極めて高い高原である。その為秘境とも呼ばれ独自の進化を遂げた動物や植物もいる。シャーロック＝ホームズで知られるイギリスの作家コナン＝ドイルが『ロスト＝ワールド』という作品の舞台にしたことでも有名である。
「あそこは雲が多いしねえ。セスナじゃ厳しいなあ」
「少し行ってくれるだけでいいの。他にも怪しい場所はあるし今回はさわりだけでも」
「それならいいけれど。今度はもっとでかいので行くか」
彼はそう言うとセスナをギアナ高地へ向けた。
ギアナ高地は厚い靄に覆われていた。最早何も見えない。
「これは駄目だな」
村雨はセスナを操りながら言った。
「姉さん、この中を飛ぶのは自殺行為だ。引き返そう」
彼は隣にいる姉に対し言った。
「そうね。仕方ないわ」

二人の乗るセスナは引き返そうとした。その時だった。
「あらっ！？」
しずかが何かに気付いたのだ。
「良、あそこに何か見えなかった？」
彼女は靄の中のある部分を指差して言った。
「何処！？」
彼は尋ねた。
「あっちよ」
彼女は左の方を指し示した。
「僕には何も見えなかったけれどなあ」
「私の気のせいかしら」
彼女は首を傾げて言った。
「きっとそうだよ」
村雨はそんな姉に微笑んで言った。
（そうだ、あの時だった）
村雨の脳裏に記憶が甦ってきた。
「フフフ、徐々に思い出してきたようですね」
ヤマアラシロイドは槍を握りながら言った。
「脳のある部分を刺激すれば記憶など簡単に戻ります。それもすぐにね」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「それは貴方もご存知の筈ですがねえ」
そう言って伊藤博士の方へ顔を向けた。
「・・・・・だがそれにより彼が受ける心の傷を考えたことがあるのか」
「心の傷、ですか」
彼は嘲笑するように笑った。
「そのような脆弱なものバダンには不要ですね」
彼は言葉を続けた。
「それこそ脆弱な人間の象徴なのですから」

「黙れっ、化け物が」
博士はそんな彼に対し怒声を浴びせた。
「おや、その様な事を言われて宜しいのですか？」
ヤマアラシロイドはそんな彼に対して言った。
「私の手がほんの一ミリでも狂えば彼は死んでしまうというのに」
「クッ・・・・・・」
博士はその恫喝の前に沈黙してしまった。
「そこで静かに御覧になって下さい。観客としてね」
彼はそう言うと槍を更に深く入れた。
「あっちへ行ってっくれる？」
しずかは弟に対して言った。
「けれど・・・・・危ないよ」
彼はそれに対し反対した。
「この視界じゃ例え前に何があっても見えないし。それに見間違いかもしれないし」
「そうかあ・・・・・・」
彼女はその言葉を聞いて考え込んだ。
「なら仕方無いわね。今日は引き返しましょう」
「うん。今度は晴れた時にもっとでかいので来ようよ」
村雨はそう言うとセスナを上昇させた。そして靄の中を抜け帰ろうとした。だがその時だった。

記憶の欠片その八

何か激しい衝撃がセスナを襲った。そして目の前が暗転した。
全身を何かが激しく打った。それが彼が薄れ行く意識の中で感じた最後のものだった。
「姉さん・・・・・・！」
咄嗟に彼は叫んだ。だがそれが果たして声になったかは彼にはわからなかった。
何かが彼を呼んだ。そんな気がした。
「・・・・・・う。良・・・・・・」
それは姉の声であった。彼はそれを聞いて目を覚ました。
「姉、さん・・・・・・？」
目を開ける。その前に姉がいた。
「よかった、気が付いたのね」
彼女は彼の顔を覗きこんで言った。どうやら床か何処かに寝転がっているらしい。
「ここは・・・・・・！？」
ゆっくりと起き上がる。そして周りを見回した。
そこは灰色の壁に囲まれた狭い部屋であった。
「牢獄・・・・・・！？」
「どうやらそうみたいね」
しずかは答えた。
「おかしいな。確か僕達はセスナに乗っていた筈なのに」
「そして急に衝撃を受けて・・・・・・」
どうやらあの衝撃は現実であったようだ。
「そして今どうしてここにいるんだろう」
村雨は首を傾げた。
「それは私にも。ただ何か尋常な雰囲気じゃないわね」
「うん」

二人は顔を顰めて言った。
暫く二人はその時の状況について話していた。やがて扉が開いた。
「出ろ」
黒い服に赤いマスクの男が入って来た。そして二人を部屋から出した。
そして追い立てるように連れて行く。二人は廊下を進んでいった。
「ここは・・・・・・」
廊下は白い金属のような床であった。壁も床と同じものであった。まるで地下に築かれた基地のようである。二人はその中を進んでいった。
ある扉の前に来た。その黒い服の男がボタンを押すとその扉が左右に開いた。
「入れ」
中から声がした。男はそれに対し敬礼をすると二人を連れて中に入った。
「只今連れて来ました」
男は部屋の中央に置かれている椅子に対して敬礼をした。
「うむ、ご苦労であった」
椅子には誰もいない。だがその上に影が現われた。
「ムッ!?」
見れば影は急激に人の形をとった。そしてそれは奇怪な男になった。
そこにいたのは右が人間、左が機械の異様な男であった。明らかに人ではなかった。
「な、何者だあんたは・・・・・・」
彼の姿を見て村雨もしずかも肝を失った。村雨はかろうじて震える声で問うた。
「どうやら何も知らぬようだな。ではいい、教えてやろう」
男はそれを見てニヤリと笑って言った。
「マシーン大元帥。かって古代エジプトを支配した偉大なるファラ

オの子孫だ」
彼は二人を見据えながら言った。その威厳に満ちた声から彼がかなりの地位と実力を持つ者であるとわかる。
「マシーン大元帥・・・・・・」
二人はその名を口に出した。
「まあ覚えておくがいい。これから嫌という程口にし聞く名だ」
その男、マシーン大元帥は自信に満ちた笑みを浮かべながら言った。
「さて、と村雨しずかとその弟村雨良だったな」
彼は二人の名を呼んだ。
「何故俺達の名を・・・・・・」
村雨は名を呼ばれて驚いた。
「御前達の事は調べさせてもらった。いや、聞いたといった方が良いな」
彼はそう言うと再び笑った。
「脳に直接な」
「脳に・・・・・・」
「それは知らなくとも良い。どの道御前達には関係は無い」
そう言うと席を立った。椅子が消えた。
「それにしてもこの様なことで最高の人材が手に入るとは」
マシーン大元帥は村雨を見て笑った。
「村雨良、貴様は選ばれた者だ」
「選ばれた者・・・・・・！？」
村雨はその言葉を聞き眉を顰めた。マシーン大元帥は彼を見て笑っていた。

記憶の欠片　　完

2004・2・24

甦りし記憶その一

甦りし記憶

マシーン大元帥は二人の方へ歩いてきた。そして村雨の方へ顔を向けた。

「村雨良、貴様は自分についてどう考えている」

「・・・・・それはどういう意味だ!?」

村雨はその言葉に対して問うた。

「そのまま一介の人間として終わってよいのか。自分に相応しい力が欲しくはないか」

「力、だと!?」

「そうだ」

マシーン大元帥は再び笑った。

「貴様は我等の同志となるのに相応しい力の持ち主だ。貴様はその力を我等が理想の為に捧げるがいい」

「待て、勝手に決めるな」

彼はその言葉に対し反発した。

「俺は自分の事は自分で決める主義だ。あんた達が何を言おうとな。それに」

一呼吸置いて言った。

「あんた達にとやかく言われる筋合いは無いぞ」

だがマシーン大元帥はそれを一笑に付した。

「フフフ、生憎だが貴様の考えはどうでもよい」

彼は右手を挙げた。

「我々は貴様のその能力だけが欲しいのだからな」

闇の中から戦闘員達が姿を現わした。そして村雨としずかを取り囲んだ。

「嫌だというのなら強制させるまでだ。記憶と感情を消してな」

「お待ち下さい、マシーン大元帥」

その時闇の中から一人の男が現われた。
「ほう、お主か」
壮年の白人の男であった。ヤマアラシロイドである。
「それでしたら私にお任せを。記憶を消すのならば私しかおりますまい」
「そうであったな」
マシーン大元帥は彼を横目で見て口の端を歪めて笑った。
「ではお主に任せるか。この男の事は」
そう言って姿を消そうとする。
「お待ち下さい」
ヤマアラシロイドはそんな彼に対し声を掛けて来た。
「何だ？」
彼は姿を消そうとするところで戻って来た。
「この女は如何致しましょう」
ヤマアラシロイドはしずかの方を見て言った。
「ふむ、そうだな」
マシーン大元帥は顎に手を当てて考えた。
「お主に任せるとしよう。好きにするがいい」
「わかりました」
マシーン大元帥は言葉を終えると姿を消した。後にはヤマアラシロイドと黒い男達が残った。
「さて、と」
ヤマアラシロイドは二人の方を見て言った。
「では行きますか」
彼はそう言って笑った。それは獣の様な笑いであった。
二人はある部屋に移された。それは暗く何も無い密室であった。
「俺達をどうするつもりだ」
村雨はヤマアラシロイドを見据えて言った。
「それは決まっていますよ」
彼は村雨を見て笑った。

「貴方の記憶と感情を消すのですよ」
その笑みは悪魔の笑みであった。
「記憶と感情をだと。そんな事が簡単に出来るものか」
「我々を侮ってもらっては困りますね」
ヤマアラシロイドはそんな彼に対して言った。嘲笑する声であった。
「この全知全能の力を持つ我々を」
彼はそう言うと指を鳴らした。すると椅子が現われた。
「そこへ置きなさい」
村雨を捕らえていた黒い男の一人は彼をその椅子に座らせた。
「宜しい。では始めましょうか」
彼は再び指を鳴らした。すると部屋の中央に黒い鉄の椅子が現われた。
「その女をそこへ」
彼はしずかを捕らえている男に対して言った。
「ハッ」
男は答え彼女をそこに座らせた。
しずかは椅子に座らせられる。すると椅子が急に変形した。
「何っ!?」
椅子から鉄の輪が出て来た。それで彼女の両手と両足を固定した。
「これは・・・・・」
しずかはあまりのことに狼狽した。ヤマアラシロイドはそれを見て残忍な笑みを浮かべた。
「それだけではありませんよ」
彼は言った。すると彼女の頭と全身を鋭い針が突き刺した。
「ああっ!」
しずかは呻き声を出した。
「姉さんっ!」
村雨は姉のその姿を見て思わず叫んだ。彼女の全身から血が流れる。

「フフフ、どうです？目の前で大切なものが傷付くのを見るのは」
ヤマアラシロイドはしずかの横に立ち村雨に対して言った。
「貴様、それでも人間か・・・・・・」
村雨は椅子に縛り付けられ動けない状況でも彼を睨み付けた。
「人間！？」
ヤマアラシロイドはその言葉に対して笑った。
「私を人間だと仰いましたね」
彼は村雨の言葉を噛み締める様に言った。
「そうでなければ何だというんだ！」
村雨は激昂して言った。
「今お話しても無駄でしょうね」
彼は済ました声で言った。村雨を嘲笑する様に。
「貴方が人間である限りは」
そう言うと三度指を鳴らした。するとしずかの身体に突き刺さる針に何かが宿った。
それは電流であった。ゆっくりと彼女へ向かっていく。
「ま、まさか・・・・・・」
村雨はそれを見て顔面蒼白になった。
「そのまさかですよ」
ヤマアラシロイドは楽しそうに言った。
「りょ、良・・・・・・」
しずかは村雨の顔を見て彼の名を呼んだ。
「姉さん・・・・・・」
村雨もである。だがその間にも電流は少しずつ彼女に近付いていっている。まるで二人を嘲笑うかのように。

甦りし記憶その二

電流がしずかの全身を襲った。彼女は身体を思いきりのけぞらせた。

しずかは電流に覆われた。そしてそれが荒れ狂う中身体をよじらせる。

「姉さんっ！」

村雨はそれを見て絶叫した。だが彼女は死の苦しみにのたうち回り彼に答えられない。

「そろそろいいですかね」

ヤマアラシロイドはそう言うとまた指を鳴らした。すると電流は止まった。

しずかは身体をのけぞらせるのを止めた後首を元に戻した。そしてその首を前にガクッ、と落とした。

「姉さ～～～～～んっ！」

村雨は黒コゲになった姉に対して必死に叫んだ。だが返答は無かった。

「無駄ですよ、死んでいます」

ヤマアラシロイドは冷酷な声で言い放った。

「そして貴方の心もね」

彼は村雨を見下ろして言った。

「あ、あ、あ・・・・・・」

その通りだった。彼は両目から涙を流し激しく打ち震えている。

「うおおおおおおおおおおっっっっっっっっ！」

彼は絶叫した。そしてそのまま意識を失った。

「成功ですね」

ヤマアラシロイドは彼を見下ろしてほくそ笑んだ。

「記憶と感情を消し去るにはまずその心を壊す事。いつもながらよく利きます」

彼は笑みを浮かべたままそう言った。
「連れて行きなさい。後は脳に少し細工をするだけです」
黒い男達は敬礼した。そして村雨を引き摺り何処かへ消えていった。

それからであった。彼はバダンの幹部候補生として訓練を受けた。
軍服に身を包み生死を賭した訓練を続けた。
「御前が村雨良か」
ある日彼に語り掛けて来る男がやって来た。
「誰だ御前は」
訓練の合間の束の間の休息をとる彼はふと顔を上げた。
「三影。三影英介という。御前と同じバダンの幹部候補生だ」
そこにいたのは彼と同じ軍服に身を包んだリーゼントのアジア系の若者であった。
「そうか。何処かで見たと思ったが」
村雨は彼の顔を見て言った。
「御前の訓練のパートナーに選ばれた。よろしくな」
三影はそう言って右手を差し出した。
「こういう場合はどうするのだ」
村雨はその右手を見て言った。
「そうか。御前はあれだったな」
三影も彼のことは聞いていた。微笑んでその右手を引っ込めた。
「これから宜しくな」
彼は挨拶するだけに留めた。
「ああ」
それが二人の出会いであった。それから二人は共に訓練を受けた。
ある日だった。野戦の訓練を受けている時であった。
砲撃が村雨を次々と襲う。彼はそれを巧みにかわしていく。
「うむ、見事な動きだ」
訓練を総括するマシーン大元帥がそれを見て言った。

「このタイホウバッファローの砲撃を全てかわすとはな。元々はこの怪人をインドへ送る前のテストも兼ねてのことだったが」
そう言って後ろで砲撃を続ける怪人の方を振り返った。
「まだ物足りないようだな。カメバズーカも加えるか」
そう言うと右手を挙げた。後ろにカメバズーカが現われた。
砲撃は倍になった。だが村雨はそれもすべてかわしていく。
訓練は終了した。マシーン大元帥は村雨と二体の怪人を下がらせた。
「よし、次は三影の番だな」
バズーカ砲を手にした戦闘員達が後ろに現われた。そして砲撃を開始する。
その時村雨は待機場所に戻ろうとしていた。そこへ戦闘員の一人が間違って砲撃を加えてしまった。
「しまった！」
戦闘員は叫んだ。だが遅かった。砲弾は真直ぐに村雨は向かっていく。
「ムッ！？」
彼はそれに気付いた。だが遅かった。間に合わなかった。

甦りし記憶その三

しかしその側に三影がいた。彼は咄嗟に村雨を庇った。
「逃げろ！」
爆発が二人を襲った。爆風が去った時二人はその場に倒れ伏していた。
「馬鹿者が！」
怒り狂ったマシーン大元帥はその戦闘員を額のビームで貫いた。
そして村雨達の方を見る。
二人は動かない。その身体は明らかに致命傷を受けていた。
その時村雨はまだかろうじて意識があった。だが薄れいく意識の中で何かを叫ぶ声を聞いたのが最後の記憶であった。
「ア、ア、ア・・・・・・」
槍を脳に突き立てられた村雨は呻き続けている。そして何かを必死に叫ぼうとしていた。
「フフフ、どうやら戻ってきたようですね」
その槍を手にするヤマアラシロイドはそれを見てニヤリ、と笑った。
「記憶が一度に戻るとどうなるか。それは激しいショックです」
彼は笑ったまま言った。
「そのショックにより自我が崩壊する。そうなれば再び我等が許に戻ってきます」
「悪魔め・・・・・・」
伊藤博士は彼を睨み付けて呻く様に言った。
「悪魔！？それは違いますね」
彼はその言葉に対してうそぶいた。
「我々は神の使徒なのですよ。世界を新たに統べる偉大な神のね」
「言うな、人の命を弄んでいておいて何が神だ」
伊藤博士は反論した。

「おや、何もご存知ないようで」
ヤマアラシロイドは博士へ顔を向けて言った。
「神とは本来そうしたものではないのですか？」
血の凍る様な冷たい笑みを浮かべて言った。
「かって洪水を起こし人間達を滅ぼしたあの神も雷を落とす神も。神とは人を超越した力で人を支配するものなのです」
「それは貴様が勝手にそう思い込んでいるだけだ」
「やれやれ、その言葉は貴方にお返し致しましょう。甘いお考えだ」
彼はそう言うと村雨へ顔を戻した。
「もういいでしょう」
槍を抜いた。
槍には血糊も脳漿も付いてはいなかった。ただ豆腐か何かから引き抜く様に抜けた。
村雨は何も語らない。ただその場にうずくまっている。
束縛が解かれた。ヤマアラシロイドは彼に語り掛けた。
「さて、ゼクロスよ」
答えはない。
「我等が同志よ」
それでも語り掛ける。
「立ちなさい。そして我等と共に来るのです」
彼は立ち上がった。顔は俯けまるで操り人形の様な動きであった。
「村雨君・・・・・・」
博士はそれを見て絶望の声を出した。
「貴方は我がバダンに選ばれた者。我等の理想の為にその力を捧げるのです」
「・・・・・・・・・」
彼は無言で前に出た。そしてヤマアラシロイドの方へゆっくりと歩いていく。
「来なさい、同志よ。我等の下へ」
村雨はその言葉に従うかのように歩いていく。そしてヤマアラシ

ロイドの前に来た。
「よくぞ戻って来ました、歓迎しますよ」
ヤマアラシロイドは彼に対し微笑んだ。それは獣の様な笑みであった。
村雨は右手をゆっくりと上げる。彼はそれを微笑みながら見ていた。
だがその微笑みはすぐに凍りついた。右手が彼の喉を掴んだのだ。
「ナッ！？」
彼は予想もしなかったその動きに狼狽した。村雨が顔を上げた。
「記憶を取り戻す事が出来た。感謝するぞ」
彼の顔を見て言った。
「クッ、精神が崩壊したのではなかったのか・・・・・」
ヤマアラシロイドは苦悶の表情で彼を見下ろして言った。
「生憎な。俺の精神はそれ程ヤワじゃないらしい。一度崩壊してかなり強くなったようだ」
右手に力を入れる。それは人の力ではなかった。
それに掴むヤマアラシロイドを思いきり投げ飛ばした。怪人は壁に叩き付けられた。
「ガハッ・・・・・」
口から血を吐いた。しかしそれでも立ち上がる。
「何もかも思い出した。俺の姉さんのこともな」
村雨はその彼を怒りに満ちた目で見ていた。
「姉さんを殺し俺をこんな身体にしたバダン・・・・・・」
彼はゆっくりと身構えた。
「許せん！必ず叩き潰してやる！」
そう言うと両手を動かしはじめた。

甦りし記憶その四

変・・・・・・
右手を真横にしそこから四十五度上げた。そして左手はそれと水平に右脇のところで置く。両手は共に伸ばしている。
身体を赤と銀のバトルボディが包んだ。手袋とブーツが銀色のものになる。
・・・・・・身
右手をそのまま右脇の方へ持って行き左手は逆に左斜め上へ持って行く。
それから左手はすぐに左脇に入れ右手を左斜め上へ突き出す。すると腰にベルトが現われた。
顔の右半分を赤いマスクが覆う。そして左半分も覆われる。ベルトが光った。

光が全身を覆う。そこにはゼクロスがいた。
「貴様だけは許さん！」
そう叫びヤマアラシロイドへ突き進んで行く。
「クッ！」
起き上がった怪人はそれを受け止めた。激しい衝撃音がその場に響き渡る。
「変身するとは・・・・・・」
「思い出したのだ。貴様のおかげでな」
村雨、いやゼクロスは怒りに満ちた声で言った。
「貴様だけは許さん・・・・・・」
その両肩を掴むと天高く放り投げた。
「許す！？」
ヤマアラシロイドはその言葉に対し冷笑でもって答えた。そして天井を掴んだ。

「それは奇妙な言葉だ」
彼はそこに逆さに立ちゼクロスを見下ろして言った。
「それはどういう意味だ」
ゼクロスはそれに対して問うた。
「許すなどという言葉はバダンにはありませんからねえ」
彼は口を耳まで裂けさせて笑った。
「少なくとも同志以外には」
「言った筈だ。俺は貴様等の同志ではないと」
彼は毅然とした声で言い返した。
「そうですか、あくまでそう言われるのですね」
ヤマアラシロイドは背中から一本の槍を引き抜きながら言った。
「そうだ、俺は貴様等をこの世から消し去ってやる。姉さんの仇をな」
彼はその緑の目を憎しみで燃え上がらせていた。
「フフフ、そうですか」
ヤマアラシロイドは笑いを止め天井から離れた。そして床に着地した。
「ならば仕方ありませんね。貴方にはここで死んでもらいましょう」
彼はその槍を構えた。戦闘員達がその左右に散る。
「そしてその身体だけ持ち帰ります。脳は完全に破壊して差し上げます」
「そうはさせん」
ゼクロスも構えを取った。両者は激しく睨み合った。
ヤマアラシロイドが槍を投げた。ゼクロスはそれを上に跳んでかわす。
「甘いですよ」
攻撃はそれだけではなかった。槍は次々と放たれる。
「この程度っ！」
ゼクロスはそれをことごとくかわす。だがそれも限度がある。次第に追い詰められていった。

「さあ、どうします！？」
ヤマアラシロイドは両手に槍を構えて彼に問うた。
「もう後がありませんよ」
それはまるで狩りを楽しんでいるような声だった。
「・・・・・・・・・」
ゼクロスはそれに対して答えない。それどころか構えさえ解いた。
「フフフ、観念しましたか」
ヤマアラシロイドはそれを見て再び残忍な笑みを浮かべた。
「ならばせめて苦しまずに死なせてあげましょう」
両手の槍をゆっくりと振り上げた。
「ゼクロス、逃げろ！」
伊藤博士が叫ぶ。だが彼は動こうとしない。
槍が放たれた。ゼクロスはそれを黙って見ている。
槍が貫いた。その瞬間ヤマアラシロイドは勝ち誇った笑みを浮かべた。
「これでよし」
彼は言った。博士の顔は絶望に覆われた。
だがそれは一瞬であった。槍に貫かれたゼクロスの身体からは血も流れず破損もなかった。
「なっ！？」
ヤマアラシロイドはそれを見て驚愕した。その直後ゼクロスの身体は急にかすんでいった。
「しまった、ホノグラフィか！」
ヤマアラシロイドは思わず叫んだ。そして辺りを見回す。
「無駄だ」
ゼクロスの声がした。
「そこかっ！」
槍を引き抜き投げる。だがそこにはいなかった。
「俺はここだ」
再び声がした。それは前だった。

「ちいっ！」
槍を手に取り振るった。そこにゼクロスの姿が浮かび上がってきた。
だがそのゼクロスもまた幻影であった。彼の姿は闇の中に掻き消えた。
「おのれっ、何処だ！」
彼は必死に屋敷の中を見回す。だがゼクロスの姿は何処にも無い。
不意に前に複数の影が現われた。それは全てゼクロスであった。
それは横にも後ろにも現われた。
「分身の術か」
ヤマアラシロイドはそれを見て悟った。戦闘員達が四方に散る。
「安心しなさい。一つを除いて全て偽者です」
彼は部下達を落ち着かせるように言った。
そのゼクロス達が動いた。それぞれが全く異なった動きをする。

甦りし記憶その五

戦闘員達が向かう。そして戦いがはじまった。
「本当のゼクロスは・・・・・・」
ヤマアラシロイドはそのゼクロス達を見ている。そしてある一体の影に目をやった。
「そこだっ！」
戦闘員に対し左腿のナイフを取り出し闘うゼクロスに対し槍を突きつけた。槍はゼクロスの身体を貫いた。
「やったか！」
だがそれも幻影であった。うっすらと闇の中へと消えていく。
「くっ、これでもないのか・・・・・・」
次第に戦闘員はその数を減らしていく。そして彼等を倒したゼクロスの幻影達は彼を取り囲んだ。
「やってくれましたね」
ヤマアラシロイドはその幻影達を睨んで言った。
「俺の力を侮った貴様の失態だ」
ゼクロスは落ち着いた声で言った。幻影が消えていく。そして一体のゼクロスが中央に残った。
「俺がどんな能力を持っているのかは知っていた筈だ。それを考慮に入れなかった貴様のな」
「確かに」
ヤマアラシロイドは歯噛みして言った。
「ですが勝負がこれで決まったとは思わないことです」
そう言うと再び槍を取り出した。
「バダン怪人軍団のリーダー、その強さを今御覧に入れましょう」
「望むところだ。貴様は姉さんの仇、この手で倒してやる」
両者は同時に前に跳んだ。槍と拳がぶつかり合う。
激しい攻防が続いた。ヤマアラシロイドの槍に対してゼクロスは

ナイフを抜いた。
「トゥッ！」
そしてそのナイフで切りつける。だがそれは槍により阻まれる。
「その程度のナイフでっ！」
ヤマアラシロイドは槍の長さを利用しゼクロスを寄せ付けない。
ゼクロスもそれに対し防戦に回っている。
「確かに槍は長い」
ゼクロスは槍をかわしながら言った。
「だがこれはどうかな」
そう言うと横に身体を捻りかわした槍をその手に持つナイフで上から切った。
「ムッ！？」
槍は二つに切断された。ゼクロスはその切られた槍を手に取った。
そしてその槍でヤマアラシロイドを突く。怪人は左腕を貫かれた。
「グッ、よくも・・・・・・」
怪人はその槍を引き抜きながら呻き声を漏らした。
「ですがこれで終わりではありませんよ」
怪人はそう言うと横に跳んだ。そして屋敷から出た。
「待てっ！」
ゼクロスはそれを追う。二人は屋敷の外に出た。
屋敷のすぐ側にある林の中に入った。そして激しく攻撃を繰り出し合う。
ゼクロスは肘から手裏剣を取り出した。そしてそれを投げ付ける。
「これしきっ！」
ヤマアラシロイドはそれを槍で弾き返す。両者は林の中を跳び回り攻撃を応酬し合う。
ゼクロスは今度は左手を突き出した。そこからチェーンが飛び出す。
「ムッ！？」
そのチェーンはヤマアラシロイドの槍に絡みついた。

「喰らえっ！」
ゼクロスは叫んだ。するとチェーンに電流が走った。
「そうはさせませんよっ！」
ヤマアラシロイドは槍をゼクロスに向けて投げた。そして新たな槍を引き抜く。
ゼクロスはその電流が走る槍を受け止めた。そして二つにへし折った。
その槍を投げた。二つに折れた槍は電流を撒き散らしながらヤマアラシロイドへ向かって突き進む。
だがヤマアラシロイドはその槍を自身が手に持つ槍で叩き落とす。
ゼクロスはそこに手裏剣を投げる。
「グッ！」
それは怪人の手首に突き刺さった。彼は思わず声を出した。手に持つ槍が落ちる。
「今だっ！」
ゼクロスは続けて手裏剣を投げ続ける。だがヤマアラシロイドはそれを斜め上に跳んでかわした。
この時ゼクロスは手裏剣とは別にあるものを投げていた。
それは手裏剣ではなかったが形は少し似ていた。動きもほぼ同じであったのでヤマアラシロイドも気がつかなかった。
怪人の右脇に着いた。だが彼はそれには気付かなかった。
「フフフ、手裏剣ですか」
手裏剣をかわした怪人は木の枝の上に片膝を着いて笑っていた。
「流石はバダンの科学力を結集して作られた改造人間、まるで忍者です」
「言うな、俺は望んで改造人間になったのではない」
ゼクロスは声を荒わげて言った。
「俺は普通の人間として生きたかったのだ、それを貴様等が俺の心を奪い改造人間にしたのだ！」
「・・・・・それがどうしたというのです？」

ヤマアラシロイドはそれに対し冷たい声で返した。
「むしろ感謝するべきではないのですか?」
「感謝だと!?」
ゼクロスの声は荒いままである。
「そうです。折角素晴らしい力を授けられ人などという下らないものを超越出来たというのに。それの何処が不満だというのですか?」
「・・・・・・貴様、姉さんを殺しておいてよくもそんな・・・・・・」
「わかりませんね。人一人の命でそこまで取り乱すとは」
ヤマアラシロイドは理解に苦しむ、といった態度で答えた。
「人なぞ我々の奴隷、もしくは糧にしかならぬもの。言わば消耗品です。消耗品の為に何をそこまで感情的になるのです?それこそ貴方が記憶と感情を消された理由だというのに」
「奴隷だと・・・・・・!」
ゼクロスは思わず叫んだ。
「そうです、奴隷です」
ヤマアラシロイドは迷わず答えた。

甦りし記憶その六

「愚かで弱い存在でしかないというのにそれ以外の使い道があるというのですか?貴方のその怒りこそ我々にとっては全く理解出来ないものです」

彼は言葉を続けた。

「我等が理想社会には弱いものは不要です。選ばれた真に強いものこそが支配し君臨する世界なのですからね」

「では俺の姉さんは不要だったというのか!」

「何度も申し上げていますが。人は奴隷でしかないと」

彼は澄ました声で返した。

「貴様・・・・・・!」

ゼクロスは怒りを爆発させた。そして念じた。

「爆発しろ!」

すると先程怪人に向けて投げ付けたものが不意に爆発した。

「ウォッ!?」

それは怪人の右半分に付着していたものだった。ヤマアラシロイドは爆発に巻き込まれた。

「グググ・・・・・・」

だがそれでも致命傷にはならなかった。大怪我を負いながらもまだ立っていた。

「手裏剣だけではなかったのですね」

「衝撃集中爆弾だ。これの存在を忘れていたな」

ゼクロスはヤマアラシロイドを睨んで言った。

「俺が念じた時に爆発するようになっている。貴様とてこの衝撃には耐えられまい」

「フッ、それはどうですかね」

怪人は傷付きながらも背中から槍を引き抜いた。

「誇り高きバダン怪人軍団、そのリーダーである私を甘く見てもら

っては困ります」
そう言うと槍を構えた。
「そうか」
ゼクロスはそれを見ると先程とはうって変わった落ち着いた声で言った。
「ならば俺も甘くは見ない。貴様を完全に破壊する」
そう言うと構えを取った。
「フフフ、出来るのですか貴方に」
ヤマアラシロイドは槍を構えて下に降りて来た。両者は林の中で対峙する。
互いに隙を窺う。下手に動いた方が負けである。
先に動いたのはゼクロスであった。手裏剣を次々と投げる。
「最早その程度！」
ヤマアラシロイドは手裏剣の動きを見切っていた。上に跳んでかわす。
しかしそれはゼクロスの計算通りであった。怪人の動きに合わせ右手を構える。
「喰らえっ！」
右手からレーザーを発射した。それは赤い光となり怪人に襲い掛かった。
それはさしものヤマアラシロイドもかわせなかった。光線は一直線に怪人の腹を貫いた。
「ガハッ！」
腹を貫かれたヤマアラシロイドは地に落ちた。そしてそのまま血を噴いた。
「ま、まさかレーザーまで装備しているとは・・・・・」
人間の姿に戻った。そして呻き声を漏らしながら立ち上がる。
「俺の身体は全身に武器が装備されている。それを考慮に入れなかった貴様の責任だ」
ゼクロスは起き上がってきたヤマアラシロイドに対して言った。

「グッ、確かに・・・・・・」
彼は死の苦しみに苛まれながらも答えた。
「覚悟はいいな?姉さんの仇、今とらせてもらう」
ゼクロスはそう言うと身構えた。
「フッ、私が貴方に倒されるということですか!?」
彼はそれに対して皮肉っぽく笑った。
「そうだ。せめて苦しまずに死なせてやる」
ゼクロスはレーザーを放とうとする。だが怪人はまだ皮肉を込めた笑みを浮かべている。
「生憎ですね。私は誰にも倒されるつもりはありませんよ」
「何!?」
「誇り高き怪人軍団長、敵に倒される位なら自分でカタをつけます」
そう言うとニヤリ、と笑った。
「またお会いしましょう」
彼はそう言うと自爆した。爆風がゼクロスの頬を打った。
「死んだというのか」
ゼクロスは不意にそう言った。だがすぐに思い直した。
「違うな」
また会うだろう、と思った。そしてその時こそ完全に倒してやる、と決意した。
彼は人間の姿に戻った。そして屋敷に帰ってきた。
「おお、帰って来たか」
後ろから声がする。伊藤博士だ。
「何処へ行ったかと思ったよ。辺りを探していたんだが」
「林の方にいました」
彼は素直に答えた。
「そうか、では私が探していたのは逆の方だったようだね」
博士は少し落胆した声で言った。
「そうですね。けれど安心して下さい。あいつは俺が倒しました」
「そうか。それは何よりだ」

「はい」
彼はそう答えるとそのまま歩いて行った。そしてガレージに入った。
「何処かに行くのかい？」
博士はそんな彼に対し尋ねた。
「奇巌山に」
村雨は静かな声で答えた。
「何っ、奇巌山だと！？」
かってデルザー軍団の基地があり七人のライダーと首領が戦った地。そこへ行こうというのだ。

甦りし記憶その七

「しかしあの場所は・・・・・・」
博士は口籠もる。何か知っているようだ。
「そうだ、だからこそ行くつもりだ」
村雨は意を決した顔で言葉を返した。
「俺はバダンを倒す。この手で完全に叩き潰してやる」
彼は怒りに燃える声で言った。その表情は今までの人形のようなものとは全く異なっていた。
「村雨君、待ってくれ」
博士は彼に対し呼び止めるように言った。
「すぐに戻って来る。バダンを叩き潰してな」
彼はそう言うとバイクに乗った。
「じゃあ」
彼はエンジンを入れた。そして屋敷を後にした。
「行ってしまったか・・・・・・」
博士はすぐに見えなくなってしまったその後ろ姿を見つつ呟いた。
「私が恐れていた通りになってしまった」
先程の村雨の顔を思い出しながら呟く。
「憎悪に心を奪われてはならないと何度も言ったのに・・・・・・」
しかしそれが適わないことも彼はわかっていた。何故なら村雨は人としての心を取り戻したのだから。
「怒りや憎悪も人の持つ心だ。ならばそれを乗り越えなくてはならないというのか」
彼は村雨が消えた道を見つめていた。
「おい、あいつは奇巌山へ行ったみたいだぞ」
立花は通信室から店に入りカウンターにいる九人のライダー達に対して言った。
「奇巌山ですか！？」

本郷が眉を顰めて問うた。
「またあそこか」
風見はその目を光らせた。
「ああ。さっき伊藤博士から連絡があってな。どうやらあそこに何かあるらしい」
「奇巌山か。迂闊だったな」
結城が顔を少し下に向けて言った。
「ああ。あそこが一番怪しいというのにな」
一文字も口惜しそうに言った。彼等の脳裏にあの時の戦いの記憶が甦る。
「しかし伊藤博士は何故今までその事を黙っていたんです？」
沖が問うた。
「どうもまだあそこにいるとは思わなかったらしい。ゼクロスがあそこへ向かうまではな」
「そうか、ゼクロスはバダンに改造されたからな」
筑波が顎に手を当て思案しながら言った。
「何か感じるものがあるのでしょうね。だから連中が何処にいるのかもわかる」
神が言った。
「アマゾンそれわかる。野生の勘に似てる」
「アマゾンの言う通りかもな。多分バダンの本拠地は奇巌山にあるぞ」
店の奥にいた谷が言った。
「たとすれば決まりだな。御前等全員行くんだろう」
「当たり前ですよ、おやっさん」
城は立花の言葉に対し笑顔で答えた。
「俺達ライダーは悪のあるところに行く。そして悪を討ち滅ぼすのが使命」
「その為なら火の中水の中」
本郷と一文字が言った。他のライダー達はそれに従うように立ち

上がった。
「行こう」
九人のライダー達は店を出た。そして一斉に出撃した。
爆音が遠くへ消えて行く。立花と谷はそれを店の中で黙して聞いていた。
「・・・・・元気な顔で帰って来いよ」
爆音が消えた時二人は言った。戦士達は再び戦場へ向かった。
「そうか、あいつが来るか」
三影は地下の奥深くで戦闘員からの報告を受けていた。
「ハッ、こちらへ一直線に向かって来ております」
戦闘員は敬礼をして答えた。
「そうか。残念だが遅かったな」
彼はその報告を聞きニヤリ、と笑った。
「暗闇大使はもう行かれたな」
彼は戦闘員に背を向けて問うた。
「ハッ、今ソウルにおられるとのことです」
「ソウルか。思ったより速いな」
彼はそれを聞き背を向けたまま言った。
「ところでヤマアラシロイドはどうなった」
「回収いたしました。他の改造人間と同じく再改造が為されるとのことです」
「そうか。なら問題はない。これで全員揃った」
彼はそう言うとサングラスを取り外し不敵な笑みを浮かべた。
「撤退は順調に進んでいるな」
「はい」
「ならば良い。御前達もすぐにこの日本を離れろ」
「えっ、しかし・・・・・」
戦闘員はその言葉に口籠もった。
「心配する必要は無い。ゼクロスはこの俺が必ず仕留める」
三影は不敵な笑みを浮かべたまま戦闘員に対して言った。

「俺の力、今こそ見せてやろう」
彼はそう言うとその地下の洞窟を後にした。
光る苔があった。それが彼の姿を照らす。
陰も映し出された。その影は猛獣のものであった。

甦りし記憶　　完

２００４・３・１

十番目の光その一

十番目の光

村雨は一言も語らずバイクを走らせていた。

「・・・・・・・・・」

彼はただ前を見ている。そして雨が横殴りに降り注ぐ夜の道を突き進んでいる。

谷を幾つ抜けただろうあか。彼は奇巌山に辿り着いた。

「バダン、今日が貴様等の最後の日だ」

彼はバイクから降りた。そして山を登り入口を見つけた。

そしてその中へ入って行く。その手には何も無い。ただ拳だけがあった。

ゼクロスに変身し中を進む。基地の中には何も無い。

「何処にいるのだ」

彼は気配がしないことを不思議に思った。だがそれでも先へ進んでいった。

「ギィッ」

後ろから声がした。手裏剣を投げる。

だがそこにいたのは唯の機械の人形であった。手裏剣を受けたそれは後ろに倒れた。

「練習用の機械か」

ゼクロスはそれを見て呟いた。そして再び足を基地の奥へと進めて行く。

やがて指令室まで来た。

「ここに来るまで誰もいないとはな」

ゼクロスは流石に妙に感じていた。だが警戒は怠らない。

身を隠しつつ基地の扉を開ける。そしてその中に爆弾を投げ込んだ。

「行け」

そう言うと念じた。爆弾は指令室の中で爆発した。
爆発が終わったのを確かめてナイフを手に中に入る。指令室の中は廃墟と化していた。
「何っ！？」
だがその中にも誰もいなかった。ただ爆発で四散した機器が散乱しているだけであった。
「ここにもいないというのか・・・・・・」
ゼクロスはいぶかしみながら部屋の中を見回した。その時であった。
「そうだ、残念だがこの基地にはもう誰もいない」
「その声はっ！？」
聞き覚えがあった。声のした方を振り向いた。
そこにあったのはモニターであった。モニターにはあの男が映っていた。
「惜しかったな。もう少し早ければバダンの中枢を破壊出来たというのにな」
三影はニヤリと笑いながら言った。
「貴様っ、まさか俺が来ることを・・・・・・」
「いや、そんなことは夢にも思わなかったがな」
彼はそう言うと言葉を続けた。
「我がバダンが日本だけにいると思っていることが貴様のミスだ。我等は世界征服を考えているのだぞ」
「クッ、そうだった・・・・・・」
ゼクロスはその言葉を聞き歯噛みした。
「その我等が日本だけに関わると思うか。ここは一時撤退するだけだ」
彼はそう言うと口の端を歪めた。
「しかしな」
サングラスの奥の目が光った。
「ゼクロス、貴様はこの手で倒す。この俺の手でな」

目の光が禍々しいものになっていく。
「望むところだ」
ゼクロスも身構えた。
「だがここで戦うつもりは無い」
三影は言った。
「どういうつもりだ？」
「俺が貴様を倒すに相応しい場所はここではない。より相応しい場所で勝負をしてやる」
「そこは何処だ！？」
「それは貴様が生き残ってならば話そう」
そう言うと後ろへ跳んだ。
「ムッ」
ゼクロスはそれを追おうとする。しかし村雨はそれより早く動いていた。
「無駄だ」
彼は指令室へ入る扉の向こうにいた。そしてその扉を閉めた。
「クッ」
ゼクロスはそれを打ち抜こうとする。だが適わなかった。
「その扉は特殊な金属で出来ている。如何に貴様といえど一撃で打ち抜くことは出来ない」
遠くで三影の声がした。
「もうすぐこの貴地は爆破される。それから逃れられた時俺は貴様の相手をしてやろう」
その声には明らかに挑発の色が込められていた。
「来い、貴様ならばその程度のことは何でもない筈だ」
声はそう言うと消えた。
「爆発か・・・・・・」
ゼクロスは呟いた。
「そしてこの扉は容易には打ち抜く事は出来ない」
扉を見て言った。

「ならば・・・・・・」
彼は念じた。それに呼応して何かが向かっていた。

十番目の光その二

奇巌山は爆発した。火山の様に煙と炎を噴き出す。
三影はそれを遠く離れた岩山の上から見ていた。
「時間通りか」
時計を見て呟く。そして煙草を取り出した。
「あの程度で死ぬ奴じゃない。おそらくすぐにでもやって来るだろう」
そう言って煙草を口にした。火を点ける。
「その前に一服とするか」
煙草から口を離し煙を吐く。白い煙が息吹となり吐き出される。
一本吸い終えた。彼はそれを下に捨て足で踏んで火を消した。
黙って下に降りる。そこは岩山に囲まれた盆地となっていた。
「そろそろだな」
彼はそう言うと前に顔を向けた。
爆音が轟いてきた。前から一台のマシンが姿を現わした。
それはヘルダイバーであった。ゼクロスの愛車である。
「来たな」
彼はその上に乗っていた。そして彼の前に降り立った。
「約束通り来たぞ」
彼は三影に対して言った。
「ああ、思っていた時間通りだ」
三影は落ち着いた声で言った。
「戦う前に言う事がある」
ゼクロスは三影を見据えて言った。
「何だ!?」
彼は問うた。
「訓練の時のことは礼を言おう」
「・・・・・・・・・」

三影はそれに対して沈黙している。
「俺の危機に来てくれてな。そのことは感謝している」
「・・・・・別にそんなこと気にしてもいなかったがな」
三影は落ち着いた声で答えた。
「同志を助けるのは当然だ。それがバダンの鉄の掟の基となっているのだからな」
「・・・・・・・・・」
今度はゼクロスが沈黙した。
「選ばれし我等が同志達は何があろうと救う、それがバダンの鉄の規律の最も重要なものの一つだ。そして・・・・・・」
彼は言葉を続けた。
「あと二つある。まずは首領への絶対の忠誠、そして最後に・・・・・」
三影の目が光った。
「裏切り者は決して許さず何処までも追い詰め消す」
彼はゼクロスを睨み付けて言った。
「暗闇大使は俺とヤマアラシロイドに貴様を連れ戻すよう言った。そしてヤマアラシロイドはそれに従った。だがな」
彼はその目の光を強くさせた。
「俺は違う。裏切り者は必要無い。バダンに裏切り者はいらん」
そう言うとサングラスを取り外した。
「貴様は裏切り者だ。バダンに仇なす者を俺は決して許さん」
身体が黄色と黒の毛に覆われる。顔が変形し獣のものになる。
背に砲身が現われた。それはまるで星を射抜く様に天に向けて聳え立っている。
「バダンの改造人間タイガーロイド、これが俺の真の姿だ」
彼は変身を終えるとゼクロスに対し語った。
「俺がこの真の姿を見せる時は二つしかない」
彼は静かに言った。
「一つは首領の御前、そしてもう一つは・・・・・」

彼はさらに言った。
「敵を倒す時だけだ」
「・・・・・・・・・」
ゼクロスはやはりその言葉を沈黙して聞いていた。
「俺のこの姿を見て生きている者はいない。首領以外にはな。こう言えばわかるだろう」
「ああ」
ここでゼクロスはようやく答えた。
「貴様はここで死ぬ。覚悟はいいな」
彼はそう言うと構えを取った。
「・・・・・・残念だが」
ゼクロスもそう言うと構えを取った。
「俺は負けん。決してな」
そう言うと間合いを取りはじめた。
両者は足を横に動かした。そして互いの隙を窺う。
まずはタイガーロイドが攻撃を仕掛けてきた。両脇に備えている機関砲を放った。
ゼクロスはそれを右斜め上に跳びかわした。そして肘に備えている手裏剣を手に取った。
それを投げ付ける。手裏剣は風を切りながら怪人に向かう。
「甘いな」
タイガーロイドはそれを見てニヤリ、と笑った。左手を手裏剣に向けた。
指が放たれる。それはゼクロスの手裏剣を全て射抜き地面に叩き落とした。
「指の手裏剣か」
着地したゼクロスはそれを見て言った。
「そうだ。貴様の手裏剣とは少し違うがな」
タイガーロイドはその不敵な笑みを浮かべたままゼクロスに対して言った。

「俺は全身が武器となっている。バダンは俺を素晴らしい兵器に改造してくれたのだ」
「兵器、か」
ゼクロスはこの言葉に仮面の下で眉を顰めた。
「そうだ、バダン最強の兵器にな。俺はバダンの誇る最強の兵器でもあるのだ」
「・・・・・・愚かな」
ゼクロスは彼に侮蔑を込めて言った。
「？それはどういう意味だ」
タイガーロイドはその言葉に対して問うた。

十番目の光その三

「愚かだと言ったのだ。人であることを捨て兵器となり喜ぶとはな」
「フン、バダンを裏切った貴様に何がわかる」
タイガーロイドは毅然とした声で言った。
「我がバダンの崇高な理念に殉じることが出来るのならばそれで本望だろうが。それを知りながらも戻ろうともせず今こうして反旗を翻す貴様にそれがわかるものか」
「わからんな」
ゼクロスは即答した。
「俺は人間だからな」
「フン、人間か」
今度は彼が侮蔑を込めた笑みを浮かべた。彼はそれを笑みに込めたのだ。
「あの様な愚かで弱いもののことを持ち出すとはな」
「貴様も人だ」
ゼクロスは反論した。
「戯言を。俺は最早人ではない」
タイガーロイドは嘲笑した。
「俺は人を超えたのだ。この素晴らしい身体こそがその証」
彼はそう言うと背中の大砲を伸ばした。大砲はまるで生き物の様に巨大化した。
「人は所詮脆いもの。この力の前には為す術も無い」
砲身をゼクロスに向ける。
「これからは我等があの愚かな生き物を支配するのだ。この絶大な力をもってしてな」
そう言うと砲撃を開始した。
「ムッ！」
それはゼクロスに向けられていた。ゼクロスは咄嗟に右に跳んだ。

砲撃はそれを追うように続けられる。ゼクロスはそれを横に跳びかわす。
「どうだ、この力」
タイガーロイドは砲撃を続けながら満足そうに言った。
「人にこの力は無い。俺はバダンにこの力を授けられた」
半ば恍惚としている。
「俺はこの力を授けられるべき選ばれた者なのだ。貴様に死ぬ前に教えてやろう」
そう言うと砲撃を一旦止めた。
「この最大出力の砲撃でもってな」
不敵に笑った。
「死ね、ゼクロス。あの世で自分の愚かさを悔やむんだな」
「・・・・・愚かだな」
ゼクロスは静かに言った。
「何っ!?」
さしものタイガーロイドもその言葉に動きを止めた。
「愚かだと言ったのだ」
ゼクロスはその静かな声のまま再び言った。
「貴様は力を得ただけで人間を超えたと思っているからだ」
彼の声はその場を冷たく支配した。
「それ程力が素晴らしいか」
彼はそう言うと構えを解いた。
「ならばその力とやらを見せてみろ」
彼はタイガーロイドに対して言った。
「・・・・・何を企んでいる」
タイガーロイドは警戒しつつ言った。
「何も企んではいない。その力とやらを見せてみろと言っているんだ」
彼は構えを解いたままである。
「・・・・・記憶を取り戻した副作用か。気が狂ったらしいな」

彼は侮蔑の色を込めて言った。
「ならば俺の真の力を見せてやろう」
彼は再びゼクロスに照準を合わせた。
「そしてそれを冥土の土産にするがいい」
砲身が赤くなる。今砲弾が放たれようとする。
「・・・・・来い」
ゼクロスは構えを取らない。仁王立ちしてその砲撃を見ている。
「死ねっ、ゼクロス！」
砲弾が放たれた。その衝撃は今までのとは比べものにならない。
その衝撃で砲弾を放ったタイガーロイド自身も後ろに飛んだ。
「来たか」
砲弾が迫る。ゼクロスはそれを冷静に見ている。
「・・・・・今だ」
右手を前に出した。そしてその手の平を広げた。
「フフフ、何をするかと思えば」
タイガーロイドはそれを見て笑った。
「バリアーなぞ張っても無駄だあっ！」
だがゼクロスはバリアーを張ろうとはしなかった。その替わりに
何かを出した。

十番目の光その四

「ムッ！？」
それは超音波であった。普通の人間の目には見えないが彼等にはその音の振動が目に映る。
音波が砲弾を撃った。そして信管がそれに反応した。
信管が作動した。そして爆発を起こした。
「な・・・・・・まさか音波を使って砲弾を破壊するとは・・・・・・」
タイガーロイドは目の前で爆発した砲弾を見て呆然となった。
「音波砲だ。俺にはこういった力もある」
ゼクロスの声がした。
「ムッ！？」
爆風が消え去った。だがそこに彼の姿は無い。
「クッ、何処だっ！？」
辺りを必死に見回す。
「ここだ」
後ろから声がした。
「おのれっ！」
タイガーロイドは振り向きざまに拳を繰り出した。
拳はゼクロスの頭を打った。かに見えた。
しかしゼクロスの姿は消えた。それはホノグラティーであった。
「残念だな。俺はここだ」
今度は前から声がした。
「糞っ、小癪な真似を・・・・・・」
タイガーロイドは彼を睨み付けた。先程の余裕に満ちた様子は何処にもない。
「貴様は今いらついているな」
「それがどうしたっ！」

彼はその言葉に益々感情を露にした。
「貴様には感情がある。それこそが貴様が人である証なのだ」
「ふざけるな、それがどうして俺が人だという根拠になるっ！」
「人間は多くの感情を持っている」
ゼクロスは言った。
「その中には素晴らしいものが多くある。しかしな」
彼は言葉を続けた。
「それと同じ位醜い感情もある」
「醜い・・・・・それこそが人間だろうが」
「偏見、傲慢、不遜、差別・・・・・。実に多くある」
ゼクロスは怪人の言葉に構わず言葉を続けた。
「だが俺はその中でも最も醜いものを今知った」
「それは何だ！？」
タイガーロイドは問うた。
「それを自分で正当化し覆い隠そうとする卑劣さだ。今の貴様のようにな」
「戯言を・・・・・」
タイガーロイドはそれを笑い飛ばした。
「戯言ではない。貴様は自分のことに気付いていないのだ」
ゼクロスは言った。
「貴様は自分が思っているような者ではない。貴様も所詮は軽蔑し見下す人間なのだ」
「ふざけるな。それでは俺もあの愚かな者と一緒だというのか」
「悪い意味でな。貴様は自分の思い上がった選民思想や権力欲を性悪論や力への信仰で理論武装しているに過ぎないのだ」
「・・・・・いい加減にしろ、それ以上言うとただでは殺さんぞ」
「その残忍さこそそうだ。貴様は人間の醜い心の持ち主だ」
「おのれっ！」
タイガーロイドは怒りを爆発させた。そしてゼクロスに襲い掛かる。

「・・・・・・・・・」
タイガーロイドの顔が迫る。ゼクロスはそれを黙って見ていた。
「・・・・・・醜いな」
「ほざけっ！」
それは単に彼の顔を見て言ったのではなかった。彼の顔に映し出される彼の顔を見て言ったのだ。
「・・・・・・俺もこの男の事は言えないな」
ゼクロスはふと呟いた。
「憎しみに捉われていてはな」
彼はつい先程までの憎しみに捉われていた己が心を思い出した。
「おそらく俺もあんな顔だったのだろう」
タイガーロイドの怒りに満ちた顔を見ながら呟く。
「ならば今その憎しみを消し去ろう」
彼はそう言って身構えた。
「行くぞっ、三影英介、いやタイガーロイドよ！」
彼はそう叫び前へ突進した。
二つの拳が交差した。激しい衝撃が辺りを覆う。
「グッ・・・・・」
タイガーロイドの右の拳が砕けていた。腕は潰れ機械の骨が剥き出しになっている。
「それが貴様の機械の身体か」
ゼクロスはその砕けた拳を見て言った。
「たとえ身体が違えど貴様の驕りは変わらん」
「まだ言うかっ！」
タイガーロイドは左の拳を繰り出そうとする。思いきり振り被りゼクロスの顔へ向けて振り下ろす。
しかし遅かった。彼は怒りのあまり感情をその拳に込めてしまった。余計な力が入ってしまっていた。
ゼクロスはその拳を冷静に見ていた。そして己が右手を動かした。拳が受け止められた。ゼクロスはそれを握り締める。

「グオオッ！」
タイガーロイドが叫んだ。ゼクロスは彼の拳を握り潰したのだ。
「生憎だが接近戦は苦手なようだな」
「何を・・・・・・」
「貴様はその背にある砲こそが最大の武器。だがそれに頼るあまり近距離戦を疎かにしていた」
「クッ・・・・・・」
その通りであった。彼は自身の背にある砲の力を過信するあまり接近戦を軽視していたのだ。
「驕りたかぶる者は必ずその驕りによって滅ぶ。人がそうであったようにな」
「糞っ・・・・・・」
反論出来なかった。だが彼の言葉を認めたわけではない。
「それを知るんだ」
ゼクロスはそう言うと彼を上空へ放り投げた。

十番目の光その五

「喰らえっ！」
彼も跳んだ。そしてその背に蹴りを放つ。
「ゼクロスキィーーーーック！」
その全身が赤く光った。そして全身に凄まじい力がみなぎる。
その力を右足に集中させた。そして渾身の蹴りをタイガーロイドの背に放った。
「グハッ！」
怪人はその蹴りを受けて絶叫した。口から血を噴き出す。
背の砲身がミシミシと音を立てる。破損していた。
ゼクロスが蹴りの衝撃をもって跳び退いた。タイガーロイドは地に落ちた。
「グググ・・・・・・」
次第に三影の姿に戻っていく。
「この俺を倒すとはな・・・・・・」
全身を激しい痛みが襲う。だが彼はそれでも立ち上がった。
「迂闊だった、接近戦のことを考えていなかったとはな」
着地したゼクロスは彼と向かい合っていた。
「今日は俺の負けだ」
彼は口から血を漏らしながら言った。
「だがこれだけは覚えておけ」
彼は言葉を続ける。
「最後に勝つのはバダンだ。そして貴様も最後にはこの俺に敗れることになる」
「まだわからないようだな」
ゼクロスはそれを聞いて言った。
「わかる？何をだ？」
彼はそれに対して口の端を歪めて答えた。

「貴様の戯言など誰が聞くというのだ。勘違いしてもらっては困るな」
彼は全身を襲う痛みに耐えながら言っていた。
「人の根は悪だ。悪こそ人の本質だ」
まだ言葉を続ける。
「その悪を俺は超越し支配するのだ。それがバダンの理想だからな」
「それが理論武装に過ぎないというのがわからないのか」
「理論武装か。その言葉は貴様にそのまま返してやろう」
彼は反論した。
「貴様は偽善者だ。貴様も多くの者を殺めてきたというのにな」
「・・・・・・・・・」
その通りであった。彼は訓練において多くの者をその手にかけてきたのだ。
その罪は消えない。だが彼はそれを償おうと考えている。
「言っておく。罪は消えない。決してな。人は罪そのものだ」
彼はそう言うと口の端を再び歪めた。
「貴様がその罪ある人間共につくというのならつくがいい。そして裏切られるがいい」
彼は嘲笑した。
「そして絶望の底に沈み死んでいくのだ」
「・・・・・言う事はそれだけか」
ゼクロスは言った。
「何っ!?」
「貴様の言葉が正しいかどうかは最早言うまでもない。貴様は負けたのだからな」
ゼクロスは冷たい声で言った。
「強い者が正しいのならば俺が正しい。貴様は敗れたのだ」
「グッ・・・・・・」
三影は言い返そうとする。だが言葉が無い。
「言うか、ならば」

再び変身しようとする。だが出来なかった。
「無駄だ、今の貴様は立っているだけでやっとなのだからな」
ゼクロスはそれを見て言った。
「最早残された時間も少ない。潔くしたらどうか」
「クッ、言うな・・・・・・」
それでも変身しようとする。身体が黄色と黒の毛に覆われようとする。その時だった。
「もう良い、そなたは充分闘った」
不意に何処からか声がした。
「その声はっ!?」
ゼクロスも三影もその声を覚えていた。
「三影、いやタイガーロイドよ」
二人の前に金と銀に輝く身体を持つ男が現われた。
「暗闇大使・・・・・」
二人はその姿を見て言った。
「何故ここに、撤退したのではなかったのか」
「そなたが心配になってな。戻ってきて良かったようだな」
暗闇大使は三影に対して微笑んで言った。
「・・・・・・・」
だが三影は彼から顔を逸らした。
「フフフ、申し訳ないとでも思っているのか」
暗闇大使は宥めるような笑いをとった。

十番目の光その六

「貴様も同じバダンの一員だ。ならば身を以って助けるのが掟であろう。わしはその掟に従ったまでだ」
「そうか」
「ここは退くがいい。そして再び改造を受けその傷を癒すがいい」
「・・・・・・わかった」
三影は頷くと姿を消した。
「・・・・・・行ったか」
ゼクロスはそれを見て呟いた。
「さてゼクロスよ」
暗闇大使は彼に顔を向けた。
「バダンに戻るつもりは無いようだが」
彼は静かな顔で語り掛けてきた。
「ああ。俺は貴様等を倒す」
彼は毅然として答えた。
「俺は世界の人達を護る為に貴様等と戦う。そして叩き潰してやる」
「フフフ、そうか」
暗闇大使はそれを聞き不敵に笑った。
「元気がいい。まるでライダー達のようだな」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「しかしな」
彼は言葉を続けた。
「我がバダンを侮ってもらっては困るな」
「何っ！？」
ゼクロスはその言葉に対し身構えた。
「我がバダンの力をもってすれば世界征服も貴様を抹殺することも赤子の手を捻るようなものなのだ」
彼は自信に満ちた声で言った。

「我等の手には神の力がある。これで我がバダンはその理想を実現するのだ」
「まだそのような戯言を」
ゼクロスはそれを否定しようとした。
「わしが戯言を言うと思うか！？」
暗闇大使はその奇怪な左腕を掲げて言った。
「何なら貴様をその神の力で始末しても良いのだぞ。我がバダンの栄えある首領の生け贄としてな」
「・・・・・・・・・」
ゼクロスは間合いを取った。そして二人は対峙した。
「今始末しても良いな。そうすれば手間が省ける」
暗闇大使は笑みのまま対峙する。両者は技を繰り出そうとする。
その時だった。その場に何者かの声がした。
「生憎だな。その言葉貴様に返そう」
一号の声だった。見れば九人のライダー達がそこにいる。
「やはり来たか」
暗闇大使は彼等を見据えて言った。
「我等に歯向かう愚か者共よ」
「フン、愚か者か。言ってくれるな」
二号がその言葉に対しシニカルな声で返した。
「二度甦っても一向に心を改めない貴様よりましだがな」
「二度目！？」
暗闇大使はその言葉に対し唇の端を歪めた。
「今二度甦ったと言ったな、このわしが」
「そうだ、ふざけるのもいい加減にしろ」
今度は一号が口を開いた。
「地獄大使、ドイツでの決着今着けてやる」
「地獄大使か、ククククク」
彼はその名を聞いて笑い声を出した。地の底から聞こえるような不気味な笑い声であった。

「何がおかしい」
ダブルライダーは問うた。
「クククククク、これが笑わずにいられようか」
暗闇大使はまだ笑い続けている。
「このわしをあの男と一緒にしてくれるとはな」
「何っ!?」
これにはダブルライダーだけでなく他のライダー達も驚いた。地獄大使の名は彼等にとって不倶戴天の敵の一人であるからだ。かってのショッカーの大幹部としてでなく今バダンの大幹部の一人としての敵であるからだ。
「教えてやろう、わしの名は暗闇大使という」
暗闇大使はライダー達に対して言った。
「あの男の従兄弟だ。かっては共にいた」
彼はそこまえ言うと表情を変えた。その顔は怒りと恨みを含ませたものであった。
「あの様な男と一緒にされてもらっては困るな」
彼の顔には怒気が浮き上がっていた。
「わしはあの男とは違う。いずれそれを死をもって教えてやろう」
そう言うと右手から鞭を出した。そしてそれを振るう。すると風が起こった。

十番目の光その七

「また会おう。そしてその時こそ貴様等が我がバダンの前にひれ伏す時だ」
彼は風の中にその姿を消した。
「行ったか・・・・・・」
ゼクロスはそれを見送って呟いた。
「また会うことになるだろうがな」
彼はそう言うとライダー達へ顔を向けた。
「・・・・・・・・」
ゼクロスは黙って彼等を見ている。
「また会ったな」
ゼクロスは静かな声で言った。
「ああ、それもこの奇巌山でな」
二号が少し皮肉っぽく言った。
「あの時はかなりやられたものだ。しかしそれが今の俺達のもとになったからな」
ブイスリーが感慨を込めて言う。
「かってここでデルザー軍団を滅ぼしたが今はバダンの連中がいたとはな。本当に皮肉な話だぜ」
ストロンガーはかって大首領がいた山の方を見ている。
「あの首領が生きていたというだけでも信じられないというのにエックスも同じである。
「そして今君がここにいるわけだ」
スーパー1はゼクロスに対して語り掛けた。
「君のことは聞いている。バダンに改造されていたそうだな」
ライダーマンはゼクロスの顔を見て問うた。
「ああ。だがそれからは解放された」
ゼクロスは答えた。

「そうか。俺達と一緒だな」
スカイライダーはそれを聞いて言った。
「皆そうだ。最初は悪の牙に捉われていたんだ」
一号は感慨を込めた口調で言った。彼もショッカーに改造されたのだ。
「そして怒りと憎しみばかり思っていた」
アマゾンが言った。ライダーは皆かっては怒りと憎しみに支配されていたのだ。
「しかし今は違う」
二号が言った。
「かっては怒りに支配されていたんだ、ここにいるライダー達は全てな」
ブイスリーはゼクロスに対し語り掛けるように言った。
「けれどそれから抜け出たんだ」
エックスが言葉を続けた。彼は父を殺されている。
「そうだったのか・・・・・・」
ゼクロスはそれを聞いて心に何かを感じた。まるで何かが剥がれたかのようであった。
「俺も君と同じだった。いや、君よりもっと酷い憎しみに心を支配されていたな」
ライダーマンはゼクロスを見たまま微笑んで言った。彼はこの時宿敵ヨロイ元帥のことを思い出した。無論決着を着けようと考えている。しかしそれ以上に大切なものもわかっているのだ。
「今はそんなものよりもずっと素晴らしいものの為に戦っているのさ」
スーパー1が言った。
「それは・・・・・・」
「君はもうそれがわかっていると思うけれどね」
「あ・・・・・・」
ゼクロスはスカイライダーの言葉にハッとした。

町を歩く人々の笑顔。平和な世界。そして豊かな自然。それは全て彼にとってかけがえのないものであった。

記憶を求めて漂ううちに彼は知ったのだ。人の持つ素晴らしさを。確かに醜い部分もあるがそれ以上に素晴らしいものを多く持っていることを。

「人々に必要とされる限り戦う。今の俺達はそれだけだ」

ストロンガーが言った。

「悪を倒す。それがライダーの仕事」

アマゾンも言った。ライダーの心は皆持っているのだ。

「君の心にも俺達と同じものがある。正義を、人々を、平和を愛する心が」

「・・・・・・・・」

ゼクロスは一号の言葉に再び沈黙した。

「君もライダーだ。その心がある限り君もライダーなんだ」

「俺が、ライダーに・・・・・・」

彼は一号の言葉に反応した。

「そうだ。君の心は人間のものだ。熱い人間のものだ。それこそがライダーの証なんだ」

「ライダーの・・・・・・」

「そうだ、ゼクロス、君も今日からライダーだ」

「俺がライダーに・・・・・・」

伊藤博士に言われてきたことがそのまま心に入ってきた。彼はそれを痛い程噛み締めていた。

「君は仮面ライダーゼクロス。仮面ライダー十号だ」

「仮面ライダーゼクロスか。いい名だな」

「そうだ、正義の戦士の名だ」

一号はそう言うとゼクロスの手を取った。他のライダー達がそれに自らの手を重ね合わせる。

「行こう、正義の為に。そしてバダンを倒し世界に平和を取り戻すんだ」

「・・・・・ああ」
ゼクロスは泣かなかった。だが心は打ち震えていた。
（俺は憎しみや怒りを乗り越えられたんだ）
それだけではなかった。
（俺は人間だ。身体はどうであれ心は人間なんだ）
それは何よりも強い支えであった。
（俺は一人じゃない。共に戦う仲間達もいる）
顔を上げる。そこには九人の戦士達がいる。
（バダンを倒す、そして世界に平和を取り戻す！）
ゼクロスは決意した。身体に熱い力がみなぎる。

十番目の光その八

その時だった。不意に山の方から声がした。
「フフフフ、どうやら皆揃っているようだな」
「その声はっ！」
ライダー達は一斉に山の方へ顔を向けた。
「諸君、暫く振りだな」
それはあの首領の声であった。
「首領、一体何の用だ！」
二号が叫んだ。
「用！？まあ大したものではないが」
首領は余裕に満ちた声で言った。
「挨拶をしておこうと思ってな」
彼は笑いを含ませつつ言った。
「もっとも私が君達にこうして挨拶をするのはこれで何度目かはもう忘れてしまったが」
「言うなっ、貴様は死んだ筈だっ！」
スカイライダーが叫んだ。
「そうだ、あの時宇宙で死んだのではなかったのか！」
ブイスリーがそれに続いた。
「私が死んだ、と」
首領はそれを聞いてまた笑った。
「前にも言った筈だ。この世に邪悪なるものがある限り私は甦ると。そして必ず世界を征服してやると」
「クッ、諦めの悪い奴だ」
ストロンガーが歯噛みして言った。
「フフフ、ライダーストロンガーよそれはお互い様だ。私も君達のしぶとさには今まで手を焼いてきているのだからな」
「フン、貴様がこの世にいる限り俺達は死ぬわけにはいかないのだ

！」

「そうだ、貴様を倒すことこそが我々の宿命だ！」

エックスとスーパー1が叫んだ。

「この身体がどうなろうとも世界は守る！」

ライダーマンもだ。かって首領に拾われ絶対の忠誠を誓っていた彼もその真の姿を知り正義に目覚めたのだ。今彼は正義の戦士の一人であった。

「ガルルルル・・・・・・」

アマゾンも吠える。

「首領、今度こそ貴様を倒す！」

最後に一号が言った。九人のライダー達は一斉に身構えた。

「・・・・・・これがライダーか」

ゼクロスはそれを見て呟いた。そして彼もそれに続いて身構えた。

「そこにいるのはゼクロスか」

首領は彼の姿を認めて言った。

「惜しい男だが。しかし替わりは幾らでもいる」

「・・・・・・それが貴様の、バダンの本心か」

ゼクロスはそれを聞いて言った。

「どうした？何か不服でもあるというのか？」

「やはり貴様は邪悪な者のようだな」

「フフフ、今更何を言っている」

首領はゼクロスの言葉に対し嘲笑で返した。

「貴様は俺が倒す。そしてこの世に平和を取り戻す」

「フフフ、貴様に出来るかな」

「出来る、だと！？」

ゼクロスはその言葉に対して反応した。目をピクリ、と動かす。

「俺はバダンを滅ぼす為に人間となった。この俺が貴様等を倒さずして誰が倒すというのだ」

「ほう、闘志だけは凄いな」

首領は相変わらず余裕に満ちた声で言った。

「だがそれが何時まで続くかな」
その時空を暗雲が覆った。
「我がバダンの真の力、それはまだ欠片程も見せてはいないというのに」
暗雲が髑髏の形になっていく。
「貴様にはその闘志に敬意を表し一つ褒美を与えることを約束しよう」
髑髏が無気味に笑った。
「この世で最もおぞましい死、をだ」
「・・・・・それがどうしたというのだ」
ゼクロスはそれを聞き流した。
「俺は死など怖れはしない。そして死ぬ筈もない」
彼は言葉を続けた。
「俺はバダンを滅ぼすまでは死ぬことはない。それだけはよく覚えておけ！」
彼は上の髑髏を指差して叫んだ。
「フフフフ、まだ言うとはな」
首領はそれでもまだ笑った。やはり彼は悪であった。その心の奥底にあるものは悪しかなかった。何処までも自らの心の奥底にある邪なものを覆い隠そうとはしなかった。
「どうやらこれからは益々面白くなりそうだな」
そう言うと彼は一旦言葉を切った。
「我がバダンは日本から一旦撤退する。だがこれは終わりではない」
髑髏が更に大きくなった。それは天空を覆わんばかりであった。
「今から我等は世界各地で攻勢を開始する。そして世界を手中に収める」
「何っ！」
これには全てのライダーが思わず叫んだ。
「我が手足である側近達がその指揮を執る。君達にこれが防げるかな」

「何度も戯言を。そんなものは全て打ち砕いてやる！」
ライダー達は叫んだ。
「貴様等の野望は必ず潰える運命にあるのだ！」
「そうか、ならばやってみるがいい」
首領は彼等に対し言った。
「バダンの力、それを死をもって教えてやる」
そう言うと首領は言葉を止めた。
「ライダー諸君、それではまた会おう」
首領はその気配を消していった。
「フハハハハハハハハ・・・・・・」
暗雲が消えていく。そして上空の髑髏は何処かへ掻き消えていた。
これが新たな戦いの幕開けであった。ライダー達は再び世界に散った。そしてバダンとの何時終わるとも知れない死闘の新たな幕が開いたのであった。

十番目の光　　完

２００４・３・７

摩天楼の悪魔その一

摩天楼の悪魔

遂に十番目の光が目覚めた。心を取り戻した光は悪を打ち払うと誓った。

しかし闇はそれに対して言った。光は必ず消える、と。

光はそれに対し輝きを増して対抗した。彼は自分の中にある正義を信じていた。

悪は怯まなかった。彼もまた己が力を信じていたからだ。

光と闇は激しく戦う。そして光はその輝きを一層増していった。

光は一つではない。十あった。その全てが今激しく輝いた。

全ての光が合わさった。それは太陽になった。そして闇を消し去ろうと羽ばたいた。

「そうか、もう行っちまうのか」

立花はアミーゴから出て行こうとする住人の戦士達を見て言った。

「ええ、敵は待ってはくれませんからね」

本郷が彼に対して言った。

「わしも後で行くからな。御前達だけ戦わせはしないぞ」

「俺もだ。準備が出来次第すぐに駆け付けてやるからな」

側にいた滝が言った。

「私もですよ。及ばずながら力になります」

役が微笑みをたたえて言った。

「俺も」

「私も」

佐久間と竜も言った。

「そういうことだ。皆御前達の力になりたがっている。そして一緒に戦いたいんだ」

「・・・・・・有り難う」

一文字は帽子を深く被り直して言った。

「ということだ。史郎、純子、その間店は頼んだぞ」
「はい」
「わかりました」
二人は笑顔で答えた。
「史郎の奴はともかく純子がいるからな。店のほうはまあ大丈夫だろう」
「おやっさん、そりゃないですよお」
史郎はそれを聞いて情けない声を出した。
「何言ってやがる、そんな声出すからそう言われるんだろうが」
立花はそんな彼に対し言った。
「私達も行くからな、もしもの時は連絡してくれ」
志度博士達もいた。彼等もまた戦士であった。
「・・・・・・すいません」
ライダー達は博士達に対して言った。彼等なくして今のライダー達はなかった。
「・・・・・・村雨君」
その中には伊藤博士もいた。
「私も行くよ。そして君達と共に戦いたい」
彼は村雨に対して言った。
「・・・・・・有り難う」
村雨はそれを聞いて言った。本心から感謝した。
ライダー達は店を出た。そしてマシンに乗った。
一人、また一人と別れていく。そして彼等は戦場へ向かって行った。
「勝とうぜ」
立花達はそれを見送りながら言った。そして自らも戦場へ旅立つ準備をはじめた。
「フフフフ、遂に奴等も旅立ったか」
首領は笑いながら言った。
暗く広い部屋である。下には白い煙が立ちこめ壁は見えない。た

だ闇が広がっている。
「ハッ、既に全員日本を発ったようです」
アポロガイストが報告した。彼の他にも幹部や改造魔人達が揃っている。
「うむ、いよいよはじまるな」
首領の声はやはり自信に満ちている。
「皆の者、用意はいいであろうな」
「ハッ」
彼等は首領の声に跪いた。
「只今より我がバダンの世界征服を開始する。そしてそれと並行してライダー達を倒せ」
「わかりました」
「ライダーを倒せば世界はおのずと我等がものとなる。それはわかっていような」
「勿論でございます」
「うむ、それならばよい」
首領は彼等の声を聞き満足気に言った。
「ならば行くがよい。そしてライダー達の首級を挙げよ！」
「ハッ！」
彼等はそれに賛同の声をあげると一斉に姿を消した。後には沈黙が残った。
「さあ、そしてあの兵器が完成したならば」
首領は闇の中でまだ一人呟いていた。
「遂に我が悲願が完成する」
彼は闇の中で笑った。それは何時までもその場に響いていた。

摩天楼の悪魔その二

「フフフ、この街の栄華もこれが最後だ」
聳え立つ高層ビルを見下ろしつつ何者かが笑った。
「デェーーストロンで果たせなかった我が望み、今ここで果たしてやろうぞ」
ヨロイ元帥であった。そのオレンジの鎧と白いマントを夕陽に輝かせている。
「おそらくあの男もこの街に来るだろう」
そう言うとニヤリ、と笑った。
「決着を着けてやろう」
彼は風の中に姿を消した。そして摩天楼は夕闇に包まれていった。
ニューヨークはアメリカのみならず世界の経済の中心地として知られている。高層ビルが立ち並びスーツを着たビジネスマンが街を行き来している。
それだけではない。この街は多様な顔も併せ持っている。
ビジネスマンが行き来するウォール街や国連の本部の他にはかってスラム街と呼ばれ恐れられたサウスブロンクス、高級住宅街やニューヨークヤンキースの本拠地ヤンキースタジアムもある。俗にニューヨーカーというが文化の発信地でもある。
この街に一人の青年が来ていた。結城丈二、ライダーマンである。
「おそらくこの街にもバダンは暗躍しているだろう」
彼はその鋭い洞察力で彼等の行動を予測していた。
「問題は誰が何をするかだ」
彼はかってツインタワーがあった場所を見上げて言った。世界貿易センターはタリバンの飛行機を使ったテロにより完全に破壊された。多くの犠牲者を出した忌むべき事件であった。
「テロを仕掛けて来る可能性が高いな。連中がよくやることだ。しかし・・・・・・」

彼はそこで思案を巡らせる速度を速めた。
「タリバンと同じことはしないだろう。それでは何をしてくるかだ」
彼はそう言うとヤンキースタジアムへ向かった。
ニューヨークには二つの球団がある。メッツとこのヤンキースである。両方共日本人プレイヤーにより日本においても有名な球団であるが特にこのヤンキースは古い歴史を持ち熱狂的なファンで知られる。
結城はそのスタジアムの三塁側に座った。彼は特にアメリカの野球に詳しいわけでも興味があるわけでもない。ただここである人物と待ち合わせをしているのである。
「おう、待ったか」
日本語で誰かが声を掛けてきた。壮年の男の声である。
「いえ、今来たところですよ」
彼は声のした方を振り向いて微笑んだ。
「そうか、ならいいんだが」
声の主は立花であった。
「じゃあ行くか」
「はい」
スタジアムに着いてすぐだが二人はすぐにスタジアムを後にした。
「まずは何か食うか」
「はい。じゃああそこに入りましょう」
二人はハンバーガーショップに入った。ありふれた話であるがマクドナルドである。
「やっぱり日本のやつとは味が違うな」
立花はハンバーガーを頬張って言った。
「そうですね。アメリカのハンバーガーの方が大味に思います」
結城も一口食べつつ言った。
「まあボリュームがあるからいいか。しかしアメリカ人ってのはよく食うよな」
彼は店の中で食べるニューヨーカー達を見ながら言った。

「まあ身体の大きさも違いますしね。それに日本人は結構少食らしいですよ」
「ああ、それは聞いたことがある。わしはそうでもないがな」
立花は笑って答えた。
「おやっさんは少し食べ過ぎじゃないんですか」
彼は苦笑して言った。
「何言ってる、悪い奴等と戦う為には体力が必要だろうが」
立花はそう言って反論した。
「ですね。それじゃあ行きますか」
結城はハンバーガーの最後の一片を口に入れ終え言った。
「おい、わしはまだ食べてるぞ」
立花はデザートのアップルパイを頬張りながら言った。
店を出た二人は街を歩いていた。高いビルが連なっている。
「連中はここで何をするだろうな」
立花はビルを見上げながら言った。
「そうですね、まあタリバンの二番煎じはないでしょうが」
結城は先程見た貿易センタービルの跡地を思い出しながら言った。
「だろうな。しかしもっととんでもないことを考えてそうだな」
立花は口をへの字に曲げて言った。
「このニューヨークはビルも人も多いですからね。テロをやるには最適ですよ」
「おいおい、あまり物騒なことは言うなよ」
見れば警官達もパトロールしている。
「疑われたら厄介だからな」
「大丈夫ですよ、ＦＢＩやインターポールには話がいってますから」
結城は微笑んで答えた。
「といってもしょっぴかれればそれだけ時間食うだろ。その間が命取りになるぞ」
「心配性だなあ、おやっさんは」
「生憎伊達に歳をとってるわけじゃないんでな」

その時遠くから何か騒ぎが聞こえてきた。
「何だあれは」
「何かのパフォーマンス・・・・・とかじゃないですね」
結城はその騒ぎ声が歓声ではなく絶叫であることを聞いて言った。
「行ってみよう」
「はい」
二人はすぐに現場に向かった。

摩天楼の悪魔その三

現場では爆発事故が起こっていた。
「マンホールが爆発したようだな」
立花は事故現場を見て言った。
「はい。そうみたいですね」
結城も現場を見て言った。
「おい丈二、これはかなり匂うぞ」
立花は結城に顔を近付けて言った。
「はい。怪しいですね」
ここで一文字や城ならば冗談の一つでも言うところだろうが結城は違った。素直に頷いた。
「行くぞ」
立花は顔を引き締めて言った。
「はい」
結城はそれに頷いた。二人は姿を消した。
二人は別のマンホールをこじ開けて中に入った。そして下水道を進む。
ニューヨークの下水道は複雑に入り組んでいる。それはまるでラビリンスのようであった。
入り組んでいるだけではない。危険も多い。豊富な栄養で大きくなった鼠や捨てられた鰐等もいるのだ。
二人は暗いその危険に満ちた地下迷宮を進んでいた。結城は既にライダーマンに変身している。
「気をつけろよ」
立花はライダーマンに対して言った。
「はい。何があるかわかりませんからね」
ライダーマンは答えた。そして事故現場へ向かった。
あと数分で辿り着こうというその時だった。不意に水路から何か

が現われた。
「やはりっ！」
出て来たのはショッカーの毒ガス怪人トリカブトである。
「ガガガッ」
怪人は奇声を発しながら右手を伸ばして来た。
「成程、右手が伸びるのか」
ライダーマンは立花を後ろに下がらせそれをかわした。
「ならばこちらも右手を使おう」
彼は腰からアタッチメントを取り出しそれを右手に装着した。
「パワーアーム！」
彼は右手にパワーアームを着け怪人に向かった。トリカブトはその長い右腕を振ってきた。
「確かに長い武器は有利だ」
彼は横から来るその右腕を見ながら言った。
「だが長いぶん防御が手薄になる場合がある」
彼はそう言うとパワーアームを上から下へ一閃させた。
「ガガッ！」
パワーアームは怪人の右腕の蔦を切断した。怪人は思わず叫び声をあげた。
しかしトリカブトの武器はそれだけではなかった。今度は口から緑色の液体を噴き出した。
「危ないっ！」
ライダーマンはそれを上に跳びかわした。そして上にあったパイプにしがみ付き下を見る。
「植物の怪人は溶解液を備えているものが多い」
彼は落ち着いた声で言った。
「かって俺が改造した多くのデストロンの怪人達もそうだった」
彼がデストロンの科学者として開発した多くの兵器と怪人達。そのことは彼にとって忘れられない原罪となっている。
「だからこそその戦法や戦闘力についても熟知している」

彼はそう言うと下へ向けて跳び降りた。
「そしてその弱点もな」
パワーアームを再び一閃させた。そして怪人の頭を切った。
怪人は水路へ落ちようとする。だがライダーマンはアタッチメントを換えた。
「そこへ落とすわけにはいかない」
彼は大型のアームを装着して言った。
「グレネードアーム！」
それで怪人を撃った。怪人は四散し煙となって消えた。
「それが新しいアームの一つか」
立花は消え去った怪人とその初めて見るアームを見て言った。
「はい、海堂博士達に新しく取り付けて頂いたものです」
ライダーマンはアタッチメントを直しつつ立花に対して言った。
「またすげえ威力だな、おい」
「はい、正直俺も驚いてます」
彼は顔を引き締めて言った。

摩天楼の悪魔その四

「しかしバダンを相手にするにはこれ位じゃないと。他のライダー達もかなりパワーアップしましたしね」
「ああ。そういう御前も全身を改造したんだろう？」
「・・・・・・はい」
彼は少し暗い顔をして答えた。彼は今まで右腕の多くの部分は人間であった。だが今回の強化改造でその全身を改造したのだ。
「バダンに勝つ為に。さもないと世界は闇に覆われてしまいますから」
「そうか」
立花はそれ以上言わなかった。悪ある限り戦う、そう宿命付けられたライダー達の苦しみと悲しみは誰よりも知っているからだ。
「行きましょう、怪人が出て来たってことはおそらく大きな作戦を考えていますよ」
「そうだな。それが奴等のやり方だ」
二人は再び事故現場へ向かった。そして現場に到着した。
「これは・・・・・・」
事故現場は煙に包まれていた。どうやら爆破されたらしい。所々崩れ落ち火が点いている。
「爆弾テロか。よりによって」
ライダーマンは怒気を含んだ声で言った。あの事件以降ニューヨーク市民達はテロに対して極めて敏感になっていることを知ってのことだとわかったからだ。
「ここまで残忍なことをする奴といえば・・・・・・」
何人か考えた。地獄大使に百目タイタン、ドクロ少佐等か。だが彼等ではないと思った。
（もしかすると・・・・・・）
ある人物が脳裏に浮かぼうとする。その時だった。

「イィーーーーーッ！」
煙の中から戦闘員達が現われた。そしてライダーマン達に襲い掛かる。
「やはりいたかっ！」
ライダーマンは彼等を倒した。そしてアタッチメントを装着する。
「ドリルアームッ！」
怪人がいると予想していた。そしてそれがどういうタイプの怪人かも。
やはり怪人が現われた。ジンドグマの火焔怪人火焔ウォッチである。
「ウォーーーーーッチ！」
怪人はライダーマンの前に出ると絶叫した。
「やはりな。爆弾を操る機械怪人だったか」
ライダーマンはその怪人を見て言った。
「ならば話が早い。行くぞっ！」
ライダーマンはドリルアームを手に突進する。火焔ウォッチも動いた。
両手を針時計に変えてきた。そしてそれでライダーマンを打とうとする。
しかしライダーマンはそれを素早い動きでかわした。そして怪人の懐に潜り込んだ。
「喰らえっ！」
怪人の胸にドリルを突き立てた。丁度左胸の時計を刺し貫く。
「ギギイイイイッ！」
怪人は絶叫した。そして後ろに倒れた。
ライダーマンはドリアルアームを引き抜いた。そして後ろに跳び退いた。
「決まったな」
怪人は爆発した。ライダーマンはそれをクールな様子で見守っていた。

「やったな、おい」
立花が戦闘員の最後の一人を倒し終え言った。
「ええ。おやっさんも腕は鈍っていませんね」
「当たり前だ、この日の為にずっと鍛えていたんだ」
彼は拳を振って言った。
「それは有り難いですね。頼りにしてますよ」
「おい、任せとけ」
そう言った時だった。目の前の煙の中から声がした。
「フフフ、だが所詮は我等の前に無残に死ぬことになる」
「何っ！」
立花はその声に振り向いた。
「やはりな・・・・・」
ライダーマンはその声を聞いて呟いた。彼はその声の主を片時たりとも忘れたことはなかった。
「フッフッフ、久し振りだな、立花藤兵衛よ」
ヨロイ元帥が白い煙の中から姿を現わした。
「ヨロイ元帥、この爆発は御前の仕業かっ！」
「フッフッフ、いかにも」
ヨロイ元帥は立花の言葉に不敵に笑うながら答えた。
「丁度いい再会の場の演出になったようだな」
「何言ってやがる、二度と会いたくないわ！」
「やれやれ、相変わらず威勢だけはいいな」
彼はそう言うと立花から視線を外した。
「貴様とは再会ではないのが残念だがな」
「フン、これが最後の出会いにしてやる」
ライダーマンはヨロイ元帥を激しい視線で睨んで言った。
「来い、この場所が貴様の墓場だ」
「まあ待て。ここでは戦っても面白くはない」
ヨロイ元帥はライダーマンを嘲笑、いや宥めるように言った。
「このニューヨークはそれに相応しい場所が多くあるというのにな」

「ほざけ、貴様は今すぐ倒してやる」
ライダーマンは激しい憎悪の光でもって彼を見る。ヨロイ元帥はそれを楽しんでいる。
「フフフ、相変わらず熱くなるときりがない奴だな」
「言うなっ！」
ライダーマンは叫んだ。
「貴様だけはこの手で倒す、それが今の俺の望みだ」
「フフフ、いい顔だ」
ヨロイ元帥は彼の顔を見て言った。
「何！？」
「憎悪に歪んだいい顔だ」
「クッ・・・・・・」
ライダーマンはそれを聞いて狼狽した。かって憎悪に燃え復讐鬼に過ぎなかったあの時を思い出した。
痛む右腕。自分の為に死んだ部下達。そしてヨロイ元帥に対する飽くなき憎悪。彼にとっては忌まわしい思い出である。
「俺は貴様のその憎悪こそが生きがいなのだ。憎め、もっと憎むがいい」
ヨロイ元帥はさらに続けた。
「そして心を憎しみに捉われるがいい。そして暗き世界に戻るのだ」
「何を・・・・・・！」
ライダーマンは激昂した。右腕にマシンガンアームを装填し射撃する。
「おっと」
ヨロイ元帥はそれに対しマントで身体を覆った。マントが銃弾を撥ね返す。

摩天楼の悪魔その五

「これからが楽しみだ。このニューヨークを貴様の墓場に出来るのだからな」
「何をっ！」
ライダーマンの怒りは一向に収まらない。
「この街はもうすぐ死の街となる。そして俺の輝かしい武勲がまた一つ増えることになる」
そう言うとライダーマンを嘲笑しつつ顔を向けた。
「貴様にかって脅かされた武勲がな」
「まだ言うかっ！」
ライダーマンは跳びかかろうとする。だが立花がそれを制止した。
「待てライダーマン、落ち着けっ！」
彼はライダーマンの前に出てその動きを止めた。
「今の御前は頭に血が登り過ぎている。そんなことでは勝てはしないぞ」
「おやっさん・・・・・・」
ライダーマンは彼の言葉を聞き次第に落ち着きを取り戻してきた。
「フフフ、立花に救われたな」
ヨロイ元帥はその間に間合いを離していた。
「今日のところはこれでさらばだ。だがすぐに会うことになる」
そう言うと彼の足元から白い煙が現われた。
「その時が貴様の最後だ。楽しみにしているがいい」
彼はその煙の中に消えていった。
「行ったか・・・・・・」
立花はそれを見送って言った。そしてライダーマンに顔を戻した。
「心配するな、御前にはわしがついている」
「はい・・・・・・」
ライダーマンは落ち着きを完全に取り戻した声で頷いた。煙は消

えそこは廃墟に戻っていた。
ヨロイ元帥はニューヨークの下水道の奥深くに設けた基地に戻っていた。そして自室でくつろいでいた。
「フフフ、デーーーストロンの時とは違うぞ」
彼は豪奢な椅子に座り一人ほくそ笑んでいた。
見れば装飾も何も無い部屋である。暗闇の壁があり床にはバダンの紋章が描かれている。
「ライダーを倒せばバダンでの俺の地位は確固たるものになる。そうすれば大幹部筆頭になるのも時間の問題だ」
彼はニヤリ、と笑って言った。
「あの暗闇大使とかいう新参者にも吠え面をかかせてやる。精々あの瓜二つの従兄弟と仲良くやっていろ」
「どうやらいいことがあったようだな」
その時部屋に何者かの声がした。
「・・・・・貴様か」
ヨロイ元帥はその声を聞くと憮然とした声で言った。
「貴様か、とは失礼だな。私にもちゃんとした名前はある」
それはブラック将軍であった。扉を開け中に入ってきた。
「フン、一体何の用だ」
「怪人を届けに来てやったのだ。そう邪険にするな」
「べつに邪険にはしていないが。それで注文通りの怪人だろうな」
彼は立ち上がって言った。
「当然だ。約束通りのものだ」
「そうか。ならいい」
彼はそう言うと歩き出しブラック将軍に背を向けて言った。
「このニューヨークでの作戦は何としても成功させねばならんからな」
「貴様の栄華の為にか？」
ブラック将軍は皮肉を込めて言った。
「・・・・・否定するつもりはない」

彼は後ろを振り向いて言った。
「デーーストロンもバダンもそれは同じ。強い者が生き残る世界だ」
彼は言葉を続けた。
「だからこそ失敗は許されんのだ。たとえどのような手段を使おうとな」
「フム、それには異論はない」
ブラック将軍はそれを聞いて言った。
「私もゲルショッカーで辣腕を振るった男。所詮世界は選ばれし者だけが生き栄えればよいのだ」
彼はそこで一旦言葉を切った。
「しかしな」
ここで口調が変わった。
「貴様とは少しやり方が異なる」
「フン、他人のやり方にまで口は挟まん」
ヨロイ元帥はそれに対して言った。
「俺には俺のやり方がある。俺は結果さえ良ければそれでいいのだ」
「・・・・・そうか。貴様らしいな」
ブラック将軍はそれを聞いて言った。
「それでは私は帰らせてもらおう。約束通り怪人は届けたしな」
そう言うと踵を返した。
「待て」
ヨロイ元帥は彼を呼び止めた。
「何だ?」
将軍はその声に対し振り向いて尋ねた。
「怪人達はどのようにして復活させたのだ」
「何だ、そんなことか」
ブラック将軍は表情を変えずに言った。
「私のやり方でだ。そう言えばわかるだろう」
「・・・・・うむ」

ヨロイ元帥はその言葉を聞いて頷いた。
「それでは吉報を期待する。私は本来の任務があるからな」
「ああ。わざわざ届けてくれて感謝する」
「礼には及ばん。それではな」
「うむ」
こうしてブラック将軍は基地を後にした。
「・・・・・・元ゲルショッカーの最高幹部たる自信か。堂々たるものだ」
ヨロイ元帥は彼が去った扉を横目で見つつ呟いた。

摩天楼の悪魔その六

「だがそれだけではこの先生き残れん」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「世界は頭のいい者が生き残るように出来ているのだ。奴もいずれそのことを思い知るだろう」
そして床に描かれたバダンの紋章を見た。
「このバダンで最高の実力者になる日ももうすぐだ。俺の時代はすぐそこまで来ている」
彼はそう言うと再び笑った。そして闇の中に消えていった。
「フム、ヨロイ元帥が動いたな」
マシーン大元帥は自分の基地で椅子に座りながらモニターを見ながら言った。
「ハッ、既に手元にある全ての怪人達を出撃させたようです」
側に控える戦闘員の一人が報告した。
「あの男らしいな。戦力が揃ったらすぐに動く」
そう言いながらモニターを眺める。
「それも陰に隠れて狡猾にな」
そう言うと戦闘員へ顔を向けた。
「例の二人は動いていないか」
「ハッ、今のところ動きはないようです」
別の戦闘員が言った。
「そうか。今は様子を見ているというところか」
そう言うと椅子から立ち上がった。
「だが連中から片時も目を離すでないぞ。何か動きがあったらすぐに伝えろ」
「わかりました」
「動くなら動けばいい。しかし圧倒的な力の前には小細工など全く無意味なものだ」

彼はそう言うとモニターに目を戻した。そしてそれに映るヨロイ元帥の姿を見ていた。

ブラック将軍は自身の基地に戻った。そして配下の戦闘員達の挨拶を受け自室に戻った。

「どうだった、ニューヨークは」

そこへ何者かがやって来た。

「別に。これといっておかしなところはない」

将軍は声の方に振り向くこともなく壁に掛けられている地図を見た。全体的にロシア風の装飾が施された部屋である。

やはり彼の故郷であるロシアを思ってのことだろうか。

「そうか。てっきりあの男も動くと思ったのだが」

声の主が部屋の中に入って来た。一枚の巨大なスペードのエースのカードが部屋の中に現われそこから浮き出てきた。

「ならば俺も動く必要は無いな」

ゼネラルシャドウであった。彼は将軍の言葉を聞き満足気に笑った。

「あの男というのは誰だ」

ブラック将軍はそこではじめてシャドウに顔を向けた。

「言わずともわかっていると思うが」

「確かにな」

将軍はその言葉に対し頷いた。

「あの男は今オーストラリアにいる筈だ。わざわざニューヨークの作戦にまで介入するとは思えんが」

「普通に考えればな」

シャドウはトランプのカードを玩びながら言った。

「しかしあの男は伊達に改造魔人で最強の座にいたわけではない」

シャドウの声が脅威を覚えるようなものに変わった。

「貴様がそのようなことを言うとはな」

ブラック将軍はそれを聞いて目を光らせた。

「俺とて自分の力量はわきまえているつもりだ。あの男の力は尋常

ではない」
「そうか」
「うむ。聞けばタイタンの奴も水面下であの男と色々と綱引きをしているそうだが」
「それは初耳だな」
ブラック将軍はそれを聞いて言った。
「死神博士とよく会っているというのは聞いたが」
「何っ、死神博士とか！？」
それを聞いてシャドウの顔色が変わった。普段の取り澄ました様子とは違っていた。
「そうだ。あの男のことだ。何か思惑があってのことだろう」
「ううむ・・・・・・」
シャドウはそれを聞き思案を巡らせた。
「あの男、一体何を考えているのだ・・・・・・」
彼はそれを聞き考え込んだ。
「私はそこまでは知らん。ただ二人が会っているという話だけは聞いた」
「そうか」
彼はそう言うとトランプを懐に直した。
「どうやら俺も動かなければならんようだな」
地図を見て言った。
「礼を言う。いいことを聞いた」
「何、礼には及ばん」
将軍はシャドウに対し言った。
「この程度は情報のうちにも入らん」
「貴様がそう思うならそれでいいが」
彼はマントを翻した。
「何はともあれこれで失敬させてもらおう」
そしてマントで全身を包んだ。
「マントフェイド！」

ゼネラルシャドウは何処かへ消えていった。ブラック将軍はそれを黙って見ていた。

「改造魔人の方も色々と動きがあるようだな」

彼はシャドウの消えた後を見ながら言った。

「私も作戦の準備を進めるとしよう」

そう言うと部屋を後にした。

摩天楼の悪魔その七

結城丈二は立花と共にニューヨークを所々歩き回っていた。その目的はヨロイ元帥を探し出し倒すことだった。

「おやっさん、そっちはどうでした」

結城はハーレムの路上で立花に対し問うた。

「駄目だ、ここには何も無いようだな」

立花は首を振って答えた。

「そうですか。ハーレムには連中はいないようですね」

結城はそれを聞いて顔を曇らせて言った。

「ああ。サウスブロンクスにもなかったしな」

「ここは色々とありますからね。隠れるにはもってこいなんですが」

よく知られた話であるがハーレムやサウスブロンクスはかってはスラム街で知られた街である。今は治安が良くなったがつい最近までは犯罪都市とまで言われたニューヨークでもとりわけ危険とされた地域であった。

「別のところに行こう」

「そうですね、今度は五番街に行きますか」

その時だった。後ろから声がした。

「おい、そこの東洋人の二人」

二人はその声に振り返った。見ればアフリカ系の若い男三人組である。

「見ねえ顔だが何者だ？中国人か日本人か」

その真ん中にいるリーダー格と思われる男が尋ねてきた。

「？日本人だが」

結城は率直に答えた。

「日本人か。本当だろうな」

彼はまだ問うてきた。

「おいおい、嘘をついてどうなるんだ？何ならパスポートでも見せ

ようか？」
結城は苦笑して言った。
「何だ、本当に日本人なのか」
彼はそれを聞いて言った。
「だったらいいんだ。悪いが疑っちまった」
彼は微笑んで言った。白い歯が口から漏れる。
「ちょっと東洋人で頭にくるこがあったんでな。日本人や中国人なら別になんともないんだが」
「何かあったらしいな」
立花はそれを聞いて結城に対して言った。
「ロスと同じことじゃないですかね」
結城はそれを聞いて立花に囁いた。
「ところであんた達何か探しているのかい？」
その若者はあらためて聞いてきた。
「いや、別に何もないけれど」
結城は答えをはぐらかした。
「おいおい、何もなくてこのハーレムを色々と探し回るわけないだろ。逃げた女でも捜してんのか？」
「女じゃなくて男なんだが」
「男、ねえ」
彼は結城の言葉を聞いて少し考え込んだ。
「そういえばこの前変な男を見かけたな」
「変な！？」
結城はその言葉に反応した。
「ああ。仕事帰りに一杯ひっかけて帰ってたらな。変な奴がマンホールを開けてたんだ」
「マンホール！？」
結城と立花はマンホールという言葉に眉を動かした。
「おう。黒づくめの奴でな。そして下水道に入って行ったんだ」
「おい、黒づくめっていやあ」

「間違いありませんね」
立花と結城はそれを聞いて互いに頷き合った。
「まあ変な男だったな。それ以来見てねえが」
「成程、そしてそのマンホールは！？」
結城は尋ねた。
「ん！？あっちの方だけどよ」
彼はそう言って道路の向こう側を指差した。
「幾らニューヨークが変わり者が多いっても下水道に住む奴はいないよな」
「ああ。俺だったら絶対嫌だな」
男達は口々に言った。
「とりあえず俺が見たのはそれ位だな。まあ後はこの街じゃ普通にあることしかないな」
「そうか、有り難う」
「いや、いいってことよ。それじゃあな」
彼等は結城達に別れを告げるとその場を後にした。
「おやっさん」
結城は立花に顔を向けて言った。
「ああ、行こう」
立花はそれに対して頷いた。そして二人はそのマンホールに向かった。
マンホールを開け中に入る。そしてその中を進んで行く。
「何か折角ニューヨークに来たのに下水道ばかり入ってるな」
立花は残念そうな声で言った。
「仕方ありませんよ。連中は何処にいるかわかりませんからね」
結城は立花を宥めるように言った。
「奴等は暗いところが好きですからね。まあ一種の習性でしょうか」
「そういえばそうだな。ひょっとすると首領の好みかもな」
「かもしれませんね。宇宙人だというのに変なことだ」
結城はその言葉に苦笑して言った。

中を進む。するとそこに黒服の戦闘員がいた。
「おい、いたぞ」
立花は曲がり角に身を隠して言った。

摩天楼の悪魔その八

「はい。どうやら当たりだったみたいですね」
結城も同じ場所に身を隠しながら言った。
「やるか」
立花は結城の方を向いて言った。
「いえ、今はやり過ごしましょう」
結城はその言葉に対し首を横に振った。
「後をつけましょう。そうすれば基地の場所がわかるかも知れません」
「そうだな。そっちの方がいいな」
立花はその言葉に頷いた。こうして二人はその戦闘員の後をつけた。
戦闘員はそのまま歩いていく。二人は身を隠しながらそれを追う。
「随分深いところまで歩いて行くな」
立花は尾行しながらポツリと言った。
「はい。あの男らしいと言えばそうですが」
結城も言った。そして後をつけていく。
やがて戦闘員は辺りを見回しだした。
「おい」
二人は再び身を隠した。そして物陰からその様子を見る。
戦闘員は目の前の壁を押した。すると壁が左右に開いた。
「隠し扉か」
結城はそれを見て言った。戦闘員はその中に入って行った。
「行くぞ」
立花は戦闘員が姿を消したのを見て物陰から出て言った。
「はい」
結城はそれに対し頷いた。そして二人は扉の前に来た。
そして戦闘員がしたように壁を押す。そして中に入って行った。

その中はやはり基地だった。彼等は下水道の奥深くに基地を建造していたのだ。

「ヨロイ元帥らしいな」

立花は暗い基地の中を進みながら言った。

「はい。やはり復活しても考えることは同じですね」

結城は既にライダーマンに変身している。そして二人で基地の中を進んで行った。

「ギッ！？」

目の前に戦闘員が出て来た。ライダーマンは彼に跳び掛かりその首を後ろから羽交い絞めにした。

「言え、ヨロイ元帥は何処だ」

ライダーマンは彼の首を絞めながら問うた。

「こ、この奥の指令室に・・・・・・」

戦闘員は指で廊下の奥を指差しながら言った。

「そうか」

ライダーマンはその戦闘員の首の付け根を手刀で叩いた。戦闘員は気を失ってその場に倒れ込んだ。

「おやっさん、行きましょう」

「ああ」

二人はその奥へ進んで行った。

指令室の前に来た。ライダーマンはスウィングアームを装着した。

「ムンッ！」

そしてそれで扉を叩き壊した。その中に入った。

「ヨロイ元帥、来てやったぞ！」

ライダーマンと立花は咄嗟に動こうとした戦闘員達を倒しつつ部屋の中を進んだ。

辺りを見回す。だがヨロイ元帥はここにはいない。

「フッフッフ、私はここだ」

上から声がした。見れば階段の上の階にあの男がいた。

「ロープアーム！」

ライダーマンはアタッチメントを換填しヨロイ元帥へ向けて投げ付けた。それは彼の首を捕らえた。
「ムンッ！」
そして思いきり引っ張る。するとヨロイ元帥は下に叩き付けられた。
「おい、もう終わりか！？」
ヨロイ元帥は倒れた。それを見て立花は拍子抜けしたように言った。
「いえ、こんな簡単にやられるような奴じゃ・・・・・・」
ライダーマンもそれを見て少し意外そうに言った。そこに後ろから声がした。
「ハッハッハ、残念だな。ヨロイ元帥はもうここにはおられぬ」
見れば一体の怪人が立っていた。ゴッドの神話怪人ネプチューンである。
「どういうことだ！？」
ライダーマンは彼の方に向き身構えつつ問うた。
「ヨロイ元帥は既に作戦を発動されている。もうこの基地に用は無いのだ」
「作戦か。今度は何を企んでいる」
「そうだな。どうせ今から行っても間に合わぬ。折角だから教えてやろう」
ネプチューンは笑いながら言った。
「空から強化した炭素菌を撒くのだ。それも民間用に偽装した飛行船でな」
「飛行船か。確かにそれなら警戒は薄いな」
航空機と違い飛行船は空をゆっくりと飛ぶ。かっては戦争も使われたが今これを警戒する者は少ないであろう。
「ヨロイ元帥はその飛行船に搭乗される。もうこの基地を出発されたのだ」
「そうか。そして何時撒くつもりだ！？」

「そうだな。あと二時間といったところか」
ネプチューンは余裕を含んで言った。
「ニューヨーク中をくまなく回ってな。そしてニューヨークを死の街にしてやる」
「成程な。相変わらず細菌を使うのが好きなようだな」
「フン、よくそんなことを言う余裕があるものだな」
怪人はライダーマンの言葉を聞いて嘲り笑った。
「貴様はここで死ぬというのに」
そう言うと手に持つ三叉の槍を突き出して来た。
「俺が死ぬだと!?」
ライダーマンはその槍を見ながら言った。
「残念だが一度は死んだ身。そうそう何度も死ぬわけにはいかない」
ロープアームでその槍を絡め取った。そして槍を奪い取った。
「貴様等がこの世にいる限り俺は死なん。そのことはよく覚えておけ」
そう言うとネプチューンへ向けて槍を投げ付けた。
「グフッ・・・・・」
槍は怪人の胸を貫いた。そして壁に縫い付けた。
「おやっさん、急ぎましょう」
ライダーマンはそれを見届けると指令室を後にした。

摩天楼の悪魔その九

「あ、ああ」
立花は焦っていた。しかしあくまで冷静な彼の様子に驚いていたのだ。
二人は基地を出た。程無くして基地は爆発した。怪人が爆死したのだ。
ニューヨークの象徴の一つ自由の女神。アメリカ独立百年を記念してフランスから送られた像である。
この像はそのままアメリカの象徴と言ってもいい。自由の国アメリカを守護する女神の像なのだ。
しかし今この像の上を不吉な悪魔が飛んでいた。
「よし、そろそろ作戦を開始するぞ」
ヨロイ元帥は飛行船の中で言った。
「ハッ、準備は既に整っております」
戦闘員の一人が敬礼して言った。
「うむ。ライダーマンもこの街もろとも苦しみ悶え死ぬのだ」
彼は下に拡がる街を見て満足そうに笑って言った。
「そして俺はバダンの最高幹部としてその力を思うがままに振るうことになるのだ」
そして高笑いした。飛行船は今女神像の上を通り過ぎた。だがその動きを阻止せんとする男がいた。
ウォール街。その高層ビル群の中でも一際高いそのビルの屋上に彼はいた。
「来たか」
それは結城丈二だった。マシンに乗りその飛行船を見ている。
「おやっさん、じゃあ行って来ます」
彼は傍らにいる立花の方を降り向いて言った。
「おう、行って来い」

立花は彼に答えた。結城はそれに対し微笑んで返した。
「よしっ！」
結城は構えをとった。そしてライダーマンへ変身のポーズを取る。

トォーーーーーッ
両手を上に掲げる。そこにライダーマンのマスクが現われる。
身体が黒いバトルボディに覆われ胸が赤くなる。そして腹が三色になる。
手袋とブーツが銀色になる。
ライダーーーーマンッ
マスクを被る。腰のベルトの四つの風車が回る。そして眩い光が全身を包んだ。

「行くぞっ、マシン！」
ライダーマンは己がマシンに飛び乗った。そして天高く飛んだ。
「頼むぞ、ライダーマン」
立花はそれを見送って言った。その声と顔はまさしく父親のものであった。
「ん！？」
飛行船に乗る戦闘員の一人が下から来る影に気付いた。
「どうした？」
同僚の戦闘員がそれに対し声をかけた。
「あれは何だ？」
見ればこちらに飛んでくる。
「あれは・・・・・・」
彼等はその姿を認めて表情を一変させた。
「ヨロイ元帥、大変です！」
彼等は大声でヨロイ元帥を呼んだ。
「馬鹿者、そんなに騒ぐな」
ヨロイ元帥はそれに対して不機嫌そうに答えた。

「あ、あれを！」
戦闘員達は不機嫌になった上司を見てもまだ落ち着きを取り戻さない。必死に窓の方を指差す。
「フン、こちらに突っ込んで来る飛行機でもあるのか？」
彼等を横目にジロリ、と睨みながら言った。そして窓の方に目をやった。
「何・・・・・・」
ヨロイ元帥はそれを見て絶句した。マシンに乗るライダーマンがこちらに突っ込んで来ているのだ。
「馬鹿な、あのマシンが空を飛べるとは聞いておらんぞ！」
ヨロイ元帥は思わず叫んだ。
「いや・・・・・・」
だがそこで考えを巡らせた。
「改造されたか。他のライダー達のマシンも強化されていると聞いたしな」
そして窓の外のライダーマンを再び見た。
「案ずることはない。もしもの時の用意はしておる」
そう言うとマイクを取り出した。
「モモンガー獣人よ」
『ハッ』
マイクに返事が返って来た。
「奴が来た。すぐに始末するのだ」
『わかりました』
「よし、頼むぞ」
そしてマイクを元に戻した。
「これでよし。所詮空中ではその力も充分に出せまい」
「それでは進路はこのままで」
舵を取る戦闘員が尋ねた。
「当然だ。蚊の一匹程度で作戦を変更するつもりは無い」
ヨロイ元帥はそう言うと指揮官の席に戻った。余裕である。しか

しその余裕が仇となったのだ。
「来たな」
ライダーマンは前にやって来た怪人を見て言った。ガランダーの怪人モモンガー獣人だ。
「モガァーーーーッ」
怪人は奇声を発しながらこちらにやって来る。ライダーマンはアタッチメントを装着した。
「それはこちらも予想している」
パワーアームを装着した。そして向かって来る怪人に対抗する。怪人の牙をそのアームで受け止めた。そして一旦は退ける。怪人は再びこちらに向かって来る。ライダーマンはそれより速くアタッチメントを換装していた。
「マシンガンアームッ！」
マシンガンを斉射した。怪人の身体を無数の銃弾が襲った。
「グガッ！」
それは怪人の全身を襲った。そして飛行膜の内側にある爆弾を撃った。

摩天楼の悪魔その十

それは次々に爆発した。そしてモモンガー獣人は空中で爆死した。
「これで邪魔者はいないな」
ライダーマンはそう呟くとマシンのアクセルを踏んだ。
そしてそのまま突進する。窓から飛行船の中に乱入した。
「おのれっ、ここまで来るとは」
ヨロイ元帥は乱入してきたライダーマンを見て顔を歪めて言った。
「言った筈だ、貴様だけはこの俺の手で倒すと！」
ライダーマンはマシンから飛び降りて彼に対して言った。
「ここが貴様の墓場だっ！」
そして右手で彼を指差して言った。あの右手で。
「フン、そう簡単にいくかな」
ヨロイ元帥はライダーマンを睨み付けて言った。
「逆にここを貴様の墓場にしてやる」
その声を合図として左右から戦闘員が姿を現わした。そしてライダーマンを取り囲む。
怪人も出て来た。デストロンのテロ怪人スプレーネズミとネオショッカーの刺客怪人アオカビジンである。
「成程な、細菌を使う怪人ばかりか」
ライダーマンは二体の怪人を見て言った。
「そうだ、この街に炭素菌をばら撒く為にな」
ヨロイ元帥は笑いながら言った。
「だが少し予定が変わった」
彼はそこで表情を引き締めた。
「ライダーマン、まずは貴様を倒す」
怪人と戦闘員達が左右に動いた。
「そして俺はバダンの最高幹部となるのだ」
「そうか」

ライダーマンはそれを聞いて呟いた。
「変わらんな。デストロンにいた頃と」
スプレーネズミと正対しながら言った。
「貴様のその醜い心、一度は死んでもそう消えるものではないらしい」
「醜い？心地良い褒め言葉だな」
ヨロイ元帥はライダーマンの言葉に返した。
「そうだろうな、かって俺の右腕と俺を助けてくれた部下達を殺した貴様にとってはな」
左右から戦闘員が来る。ライダーマンはそれを一瞬で倒した。
「俺もかってはその貴様と同じだった」
彼はアタッチメントを装着しながら言った。
「憎しみと復讐に燃えそればかり考えていた」
スモッグアームだ。
「だが今は違う。人々の為に戦うライダーの一員としてヨロイ元帥、貴様を倒す！」
そう言うと煙幕を発射した。
「落ち着け！単なる目くらましだ！」
ヨロイ元帥は叫んだ。その通りだった。
しかしライダーマンは動いた。まずはアオカビジンの前に来た。
「カビィーーーーッ！」
怪人はライダーマンが来ることを予想していたようである。その拳を振るってきた。
「カビの怪人か」
ライダーマンはその拳を受け止めて言った。
「カビの弱点は・・・・・・」
間合いを離しアタッチメントを装着した。
「炎だっ！」
パワーアームを激しく動かした。そしてその摩擦熱で炎を起こした。

そしてそれで斬りつけた。怪人の身体をその炎が襲う。
「グギィーーーーッ！」
怪人はその炎を浴びて絶叫した。そして燃え死んだ。
その炎は白い煙幕の中からも見えた。戦闘員達はそこに殺到した。
だがいない。ライダーマンはスプレーネズミの後ろに来ていた。
「ギッ！？」
怪人は後ろに何者かが来たのを察した。そして右手を振るった。
「キーーーーラーーーーーッ！」
ライダーマンはそれを見切っていた。上に跳んだ。
「デストロンの怪人ならば俺もよく知っている」
ライダーマンは怪人の頭を掴んで言った。
「スプレーネズミ、貴様の弱点は・・・・・・」
カギ爪アームを装着した。
「その右胸だあっ！」
そのカギ爪で怪人の胸を撃った。そして二本のパイプを引き千切った。
「グギャーーーーーッ！」
怪人は絶叫した。そして爆死して滅んだ。
煙幕が去った。そこにはライダーマンと彼を取り囲む戦闘員達がいた。
その戦闘員達も次々と倒されていく。遂に全員倒れた。
「ヨロイ元帥、残るは貴様だけだ」
ライダーマンはヨロイ元帥を指差して言った。
「フン、貴様ごときがわしを倒すつもりか」
彼はライダーマンを睨み付けて言った。
「モンゴルの偉大なる覇王、チンギス＝ハーンの末裔でありヨロイ族の長であるこのヨロイ元帥を」
彼は左手に持つ鉄球をライダーマンを指しながら言った。
「そうだ、今こそ決着を着けてやる」
「戯言を」

ヨロイ元帥は後ろに跳んだ。
「ならば今この場で始末してくれるわ」
その目が光った。そしてそのヨロイが甲殻に変わっていく。
顔も変わった。それはザリガニの顔であった。
全身をオレンジの甲殻に包んだ怪人であった。左手は鋏となっており背中には甲羅がある。
「やはり正体は変わらぬか」
ライダーマンはそれを見て言った。
「俺の正体を見た者は生かしてはおけん」
ヨロイ元帥の正体であるその怪人ザリガーナは言った。
「死ね、ライダーマン！」
口から泡を飛ばしてきた。ライダーマンはそれを横に跳んでかわした。
「甘いっ！」
腰からアタッチメントを取り出す。そして装着した。
「マシンガンアームッ！」
銃弾を放つ。それはザリガーナの全身を撃った。
「フフフ、無駄だ」
ザリガーナはそれに対し余裕の笑みで返した。

摩天楼の悪魔その十一

「俺のこの身体を貫き通すものはこの世には存在しない。例えライダーキックでもな」
「クッ・・・・・・」
「あの時はカァーーーメンライダーブイスリーに敗れたが今は違う。俺もまた再改造を受けているのだ」
そう言うと左手の鋏を飛ばしてきた。それはライダーマンの首を挟んだ。
「そしてこういうことも出来るようになった」
「グググ・・・・・・」
ライダーマンはその鋏を取り外そうとする。だが出来ない。
「そしてもう一つ言っておこう」
ザリガーナの左手がゴボゴボと動く。鋏が再生してきているのだ。
「その鋏は爆弾にもなっている。もうすぐ爆発する」
「何っ！」
ライダーマンはその言葉に顔を驚愕させた。その口が歪む。
「フフフ、貴様はこの飛行船と共に爆死するのだ」
ザリガーナは邪な笑い声を立てながら言った。
「俺はこれで失敬させてもらうがな」
そう言って飛行船の窓を鋏で壊し出ようとする。
「クッ、待て！」
追おうとする。しかし鋏が首を絞め思うように動けない。
「フフフ、さらばだ」
ザリガーナはそう言うと飛行船から飛び降りた。すると飛行船が爆発した。
「ライダーーマンッ！」
それを遠くのビルから見ていた立花は絶叫した。
「よし、これで奴は死んだ」

ザリガーナは着地したビルの屋上で飛行船が爆発四散するのを見ながら言った。
「炭素菌はまた作ればいい。ライダーがいなくなれば作戦はどのみち成功したも同じだ」
飛行船は空の中に消えていく。それを見たニューヨークの市民達の驚く声がする。
「これで俺の地位を脅かすものは無い。デーストロン以来の俺の夢が叶うのだ」
そう言い高笑いした時だった。
「それはどうかな」
後ろから声がした。
「その声はっ！」
ザリガーナはその声にハッとして振り向いた。そこにはあの男がいた。
「残念だったな。俺はまだ生きている」
ライダーマンはビルの貯水タンクの上に立って腕を組んでいた。
「おのれっ、あの爆発から逃れるとは・・・・・・」
「新しく生まれ変わったマシンのおかげだ。俺がどうして飛行船にやって来たか忘れていたようだな」
「クッ、そうだった・・・・・・」
ザリガーナはそれを聞いて歯噛みした。
「俺もそう簡単に死ぬわけにはいかない。そして貴様を今ここで倒す」
「フン、貴様に出来るのか!?」
ザリガーナは鋏を振りかざして言った。
「出来なければこんなことは言わん。行くぞ！」
ライダーマンは右腕にパワーアームを装着した。おして下に飛び降りた。
「トォッ！」
両者は打ち合った。銀の火花が飛び散る。

「おのれっ、アタッチメントも強化されているな」
ザリガーナはパワーアームを受けて言った。
「当然だ。バダンを倒す為ならな」
二人はその腕を激しく振るった。そして互いに譲らない。
「だがその程度では俺は倒せん」
ザリガーナは間合いを離した。そして口から泡を吐いた。
「この程度っ！」
ライダーマンは上に跳んだ。そしてアタッチメントを換装する。
「スウィングアームッ！」
分銅の付いた腕に換えた。そしてそれを叩き付ける。
「ウッ！」
それを受けたザリガーナの腕に衝撃が走る。
「どうやら衝撃には弱いらしいな」
ライダーマンはそれを見て言った。
「二号ライダーもそうだったという。全身が鋼で出来た鋼鉄参謀をどうして倒したか」
彼はアームを振るいながら言った。
「内部に衝撃を加えていったのだ。如何に全身を厚い鎧で覆おうとも衝撃までは抑えられない」
ライダーマンは尚も攻撃を続ける。
「そしてそれは貴様にもそっくりそのまま言えることだ」
分銅がザリガーナの鋏を打ち砕いた。
「確かに貴様の身体は厚い甲羅に覆われている」
鋏が再生する。しかしライダーマンのスウィングアームの前に分が悪い。
「如何なる刃でもその鎧を貫き通すことは出来はしまい」
攻撃を続けながら言う。
「しかしその反面衝撃に対しては無力だ」
その通りだった。ダメージのせいか動きが次第に鈍くなってきている。

「衝撃は確実に内部に伝わる。そしてそれは次第に蓄積されていく」
ライダーマンは鈍くなったザリガーナの動きを見つつ言った。

摩天楼の悪魔その十二

「ザリガーナ、いやヨロイ元帥」
再び鋏を砕いた。そして一気に攻撃のスピードを速める。
「今こそ貴様を倒す！」
ライダーマンはザリガーナの身体を掴んだ。そしてそのまま跳び上がる。
「ライダーマン高速回転投げーーーーーっ！」
ザリガーナを掴んだまま空中で駒の様に激しく回転する。そしてビルの床めがけ投げ飛ばした。
「うおおおおーーーーーっ！」
ザリガーナは絶叫した。そしてそれまでいたビルの床に叩き付けられた。
床が壊れた。コンクリートの破片が飛び散る。
怪人の身体は大きくバウンドした。そして二度三度と跳ね返る。
「勝負あったな」
投げ終えたライダーマンは着地して言った。
「グググ、まさか衝撃を伝える攻撃で来るとは・・・・・」
ザリガーナは立ち上がった。そしてヨロイ元帥に戻って行く。
「迂闊だったわ。このヨロイ元帥ともあろう者が」
ヨロヨロとよろめきながら言う。足元がふらついている。
「まだ立てるか」
ライダーマンはそれを見て言った。
「フン、この俺を誰だと思っている」
ヨロイ元帥はそれに対し吐く様に言った。
「かってのデーストロンの大幹部だ。一人では死なん」
そう言うとライダーマンを睨み付けた。
「貴様も道連れだあっ！」
ライダーマンへ向けて突進した。

だがライダーマンはそれを冷静に見ていた。そして静かに動いた。
「やはりな。最後の最後までそうか」
彼は跳んだ。そして空中で一回転した。
「ライダーマンキィーーーーーック！」
突進してくるヨロイ元帥の胸を撃った。それを受けたヨロイ元帥は後ろに吹き飛ばされた。
「おのれーーーーっ！」
ヨロイ元帥は断末魔の叫びを挙げながらビルから落ちていった。
そして空中で爆発四散して果てた。
「片桐、皆、これで仇は取ったぞ」
ライダーマンはその爆発を見下ろしながら言った。
「俺の右手もこれで泣かなくて済む」
彼は右手を見た。今右手は静かにそこにあった。
「そうか、遂にあいつを倒したか」
立花は戻って来た結城から話を聞き満面に笑みを浮かべた。
「ええ。長かったですけれどね」
結城は感慨深かげに言った。
「色々ありましたけれどね」
これまでの戦いを思い出しながら言った。
謀略に陥れられ硫酸のプールで右腕を焼かれ部下達に救出され組織を脱出した。そしてライダーマンとなり復讐の為に生きてきた。
やがて正義に目覚め身を呈してロケットを止めた。そしてその時四人目のライダーとなった。
ダブルライダーに救われ以後悪と戦ってきた。そして今地獄から甦ってきた仇敵を遂に葬ったのだ。
「だがまだ終わりじゃないぞ」
立花は顔を引き締めて言った。
「バダンは滅んだわけじゃない」
「ええ、それはわかっています」
結城も真剣な顔で答えた。

「悪はまだこの世界を覆わんとしていますから」
「そうだ。じゃあ行くか」
「はい、行きましょう」
二人は摩天楼を後にした。その二人の上を太陽が明るく照らしていた。

摩天楼の悪魔　　完

２００４・３・１８

死霊舞う森その一

アマゾン川流域はジャングルとして有名である。ここは密林と多くの野生動物でも知られている。

「どうですかアマゾン、久し振りの故郷は」

アマゾン川を行く船の上に二人の男がいた。筑波洋とアマゾンである。

「うん、やっぱりいい」

アマゾンは笑顔で答えた。

「アマゾン自然が好き。緑を見ると心が落ち着く」

「そうですか、それは良かった」

筑波はそれを聞いて微笑んだ。

「けれどこれが戦いじゃなかったらもっと良かった」

アマゾンは残念そうな顔で言った。

「ですね」

筑波もそれを見て表情を暗くした。粗野に思われがちだがアマゾンはライダー達の中でも特に繊細で心優しいライダーなのである。

「けれど悪い奴と戦うのがライダーの仕事、アマゾンあいつ等がいる限り戦う」

「はい」

筑波はその言葉に頷いた。そして船はアマゾンの濁った大河の中を進んで行く。

「そうか、ヨロイ元帥が死んだか」

暗い部屋で一人の男が言った。

「惜しい男だったが」

見れば鬼火司令である。表情を曇らせている。

「あら、やけに優しいのね」

向かい側にいる誰かが囁し立てる様に言った。妖怪王女だ。
「わしは素直に死を悼んでいるのだが」
「あら、そうだったの。そうは見えなかったけれど」
妖怪王女は面白そうに言った。
「妖怪王女、お主はそういうところがいかん。もう少し真面目な態度をだな」
鬼火司令はそれを見て口を尖らせる。
「あらあら、お説教？悪いけれど私お説教は聞かない主義なの」
彼女はおどけて言った。
「だからそういう不真面目なところがいかんと」
司令は更に口を尖らせた。
「二人共」
その奥から誰かが不機嫌そうな声で二人に対して言った。
「もう少し静かにしてもらえないか」
見ればツバサ大僧正である。二人を嫌そうに見て言う。
「あ、いたのツバサ大僧正」
妖怪王女はふと気付いたように言った。
「いたのではない。ここはわしの基地だぞ」
彼は顔を顰めて言った。
「そういえばそうであった。余りにも居心地が良いので忘れておった」
鬼火司令は高笑いをして言った。
「迷惑なことだ」
ツバサ大僧正はポツリと呟いた。
「そもそも二人共何をしに来たのだ？生憎わしは怪人の方は間に合っているが」
「いい情報が入ったのよ」
妖怪王女は微笑んで言った。
「わし等が特別に仕入れた情報だ」
鬼火司令も笑顔で言った。

「フン、どうせいつもの噂話であろう。大体そなた達ジンドグマの者はどうしてそう緊張感が無いのだ」
「さっきも言ったでしょ。お説教は嫌いだって」
「そうじゃ、折角情報を持って来てやったというのに」
鬼火司令も不満を口にした。
「では聞いてやる。言ってみよ」
ツバサ大僧正は不機嫌さと隠しもせず言った。
「こっちにライダーが来ているんだけれど」
「それはもう知っている」
大僧正は仮面の下の顔を顰めて言った。
「アマゾンライダーであろう。今アマゾン川を上っている」
「甘いわね」
妖怪王女はそれを聞いて笑った。
「それじゃあ情報は半分しか知らないわね」
「半分だと？」
「そう、もう一人来ているのだ」
鬼火司令が言った。
「もう一人・・・・・それは誰だ？」
「空と言えばわかるかしら」
「あの男か」
その時部屋の扉が開いた。そしてある男が入って来た。
「ナスカでの借り、返す時が来たな」
それは荒ワシ師団長であった。
「ここにいる改造魔人はお主だったか」
鬼火司令は彼を見て言った。
「うむ、まあ色々とあってな」
彼は少し不機嫌そうに言った。
「俺は本当は本拠地である中東に行きたかったのだが」
「今あそこにはマシーン大元帥がいるんじゃなかったっけ」
妖怪王女が言った。

「そういえば奴はエジプト出身だったな」
鬼火司令がそれを聞いて言った。
「それはもういい。あの男がここに来たというのは本当だろうな」
「嘘は言わないわよ」
「言っても仕方がない」
二人は澄ました顔で言った。
「そうか」
荒ワシ師団長は考える顔をした。
「最初にここに来た時は落胆したものだが」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「こういうことが起こるとはな。わからんものだ」
「塞翁が馬というからな」
それを聞いたツバサ大僧正が言った。
「うむ、その通りだ」
師団長はさらに上機嫌になった。
「こうなれば何としてもあの男をこの手で始末してやる。ツバサ大僧正、悪いがアマゾンは任せた」
「うむ」
ツバサ大僧正は答えた。別に深く考えたわけではない。だがこの決定が後々にまで響く。

死霊舞う森その二

「悪いがそうとなれば早速作戦を練らせてもらう。一刻も早く奴を倒さなくてはな」

荒ワシ師団長はその場を去った。後には三人が残った。

「あら、案外せっかちなのね。策士だって聞いていたけれど」

妖怪王女はそれを見て可笑しそうに言った。

「普段冷静な者程いざとなるとああなるものだ」

鬼火司令は彼が去った扉の向こうに目をやりながら言った。

「鬼火司令とは大違いね」

「何を言う、わしは何時でも冷静だぞ」

「電話機のボックスを叩き壊したのは誰だったかしら」

「あれは海兵隊式だ、役に立たん機械はいらん」

二人は再び口喧嘩を始めた。

「ええい、止めぬか」

ツバサ大僧正はそんな二人の間に入った。

「二人共わしへ情報を伝えることは終わったのであろう。ならばすぐに持ち場に戻るがいい」

「そうね」

「山の様な仕事が待っておるしな」

二人はその言葉に対し頷いた。

「では早く戻られよ。もうライダー達が既に向かっているかも知れぬぞ」

「それは楽しみだわ」

「一体誰が来るのかのう」

二人は笑みを浮かべた。

「じゃあ私はこれで。ツバサ大僧正御機嫌よう」

「次に会う時を楽しみにしているぞ」

妖怪王女は蝶に変身して、鬼火司令は火の玉に変身してその場を

去った。ツバサ大僧正はそれを黙って見送った。
「仮面ライダーアマゾンか」
彼はアマゾンの名を言った。
「この地での戦いはいささか不利だな」
このアマゾンは彼にとっては遊び場である。空からの攻撃を得手とする彼にとって密林での戦いは未知のことである。
「荒ワシ師団長には悪いが戦場を選ばせてもらうか」
彼は壁に掛けられている地図を見ながら言った。
「無駄に戦力を消耗するわけにもいかぬからな」
ツバサ大僧正も部屋を後にした。そして部屋は闇の中に消えていった。
「全員準備は出来たな」
密林の中で何者かの声がする。
「ハッ、既に全員準備を終えております」
戦闘員の一人が敬礼して答えた。その背には小型のプロペラがある。
「ならば良い。早速行くぞ」
「ハッ」
荒ワシ師団長であった。配下の戦闘員達に取り囲まれている。
「怪人達には伝えておろうな」
「それはもう。上空で合流する手筈となっております」
「これで良し。スカイライダーの首を始末しに行くぞ」
その時声がした。
「フフフフ、案外性急なことだな」
そして火の玉が姿を現わした。
「・・・・・貴様か」
荒ワシ師団長はその火球を睨み付けて言った。
「貴様かは無いだろう。折角顔を見せに来てやったというのに」
火球から一人の黒いスーツの男が現われた。百目タイタンである。
「フン、貴様がただ顔を見せに来るだけで済ますような奴か」

「邪険だな。俺は貴様とは何の因果も無い筈だがな」
タイタンは無数の眼で彼を見ながら言った。
「それはそうだがな。しかし一体何の用だ？」
「うむ。貴様に頼みたいことがあってな」
タイタンは葉巻を取り出しながら言った。
「頼みたい事！？」
「そうだ。どうやらスカイライダーの命を狙っているそうだが」
「隠しはせん」
「あの男の重力低減装置を欲しいのだ」
「・・・・・何に使うつもりだ？」
荒ワシ師団長はその言葉を聞いて顔を顰めた。
「うむ。ちょっとな」
タイタンは葉巻を口にして言った。
「俺は構わんがな。どのみち自分の力で空を飛べる俺にとっては無用の長物だ」
彼はタイタンが死神博士と接触していることを知らなかった。

死霊舞う森その三

「しかしそれは貴様とて同じであろう。貴様は元々地底出身ではなかったのか」
「確かにな」
タイタンは不敵に笑った。
「だが興味を持ってはいけないというわけでもなかろう」
「・・・・・それはそうだが」
どうも腑に落ちない、荒ワシ師団長は心の中に疑念を抱いていた。
「ならば頼んだぞ。重力低減装置のデータを俺に渡してくれ」
「解った。それではそろそろ作戦を開始するので帰ってくれないか」
「うむ。では健闘を祈る」
タイタンは炎の中に消えた。荒ワシ師団長はそれを見送って言った。
「フン、何を考えているのかは知らんが」
その顔にはあからさまな嫌悪が滲んでいる。
「精々今のうちに威張っているがいい。地底の王といってもこの砂漠の覇王に勝てるとでも思っているのか」
彼は戦闘員達の方へ顔を向けた。
「行くぞ。そしてスカイライダーを討つ」
「ハッ」
戦闘員達はその言葉に対し敬礼した。
荒ワシ師団長は飛び立った。そして戦闘員達もそれに続く。
「それにしても凄い川ですね」
筑波は船の上から川を見ながら言った。
「対岸が見えない。まるで海だ」
「それ日本の川が小さいだけ。アマゾンではそれが普通」
アマゾンは笑顔で言った。
「だからといって日本の川が悪いわけじゃないけど」

「まあ大きけりゃいいってもんじゃないですしね」
「それでもアマゾンこの川が一番好き。やっぱり心が落ち着く」
彼はこの川の水で生まれ育ってきた。だからこそこの川を深く愛しているのだ。
「この川たくさんの生き物いる。そして多くの話ある」
「話、ですか？」
筑波はその言葉に興味を持った。
「そう。巨大なアナコンダや人を飲み込むナマズの話とか」
「それは俺も聞いたことがありますよ。けれど本当ですか？」
「本当。アマゾン実際に戦ったことある」
アマゾンは笑顔で答えた。
「バゴーと一緒に船に乗っていた時に大蛇がやって来た。二十メートルはあった」
「二十メートルですか」
筑波はそれを聞いて驚いた。彼が今まで見た最も大きな蛇は十メートルのものが精々であったからだ。
「アマゾン川に飛び込んでそいつと戦った。そして追っ払った」
アマゾンは目を輝かしている。どうやら本当らしい。
「ナマズもそうだった。危うく飲み込まれそうになったが何とかやっつけた」
「人間を・・・・・・。ここのでかい魚はピラルクだけじゃないんですね」
「ピラルク大人しい。この川には鮫や鰐もいる」
「鰐は知っていますけど鮫までいるんですか！？」
「うん。たまに川を上って来る。だから気をつけた方がいい」
「そうなんですか・・・・・・」
筑波は川を覗き込んで呟いた。
「だとしたら結構厄介ですね」
「厄介？何が？」
「いえ、バダンの他にも危険が多そうですし」

「それは心配無い」
アマゾンは微笑んで言った。
「普段はどの生き物も大人しい。アナコンダもアマゾンが追っ払ったらそれで帰って行った」
「そうなんですか！？」
筑波は疑問符を付けて言った。
「うん。ここは食べ物が豊富にある。だから飢えてない」
「そうなんですか」
「そう。アマゾンは食べ物一杯ある。だからアマゾンも食べるのに困ったことない」
獣達との戦いはあったようだが食べるのには困ったことがないようだ。
「けれど筑波がこの川の水をそのまま飲んだり魚を生で食べることは良くない」
「でしょうね」
それはよくわかった。
「よく火をとおす。さもないと飲んだり食べたりしたら駄目」
その理由はよくわかった。
「わかりました」
筑波は答えた。そして川を進んで行く。
やがて川の色が変わってきた。茶色から緑になる。
「川の色が変わりましたね」
これは筑波にとって初めて見る光景だった。
「うん。これもアマゾン。日本では絶対に見られない」
アマゾンは最早ガイドの様である。

死霊舞う森その四

「川の色も色々とある。そしてそれが合わさる」
「凄いですね」
そこに何かが飛び上がってきた。
「・・・・・イルカですか？」
筑波はそれを見て言った。
「そう」
アマゾンは答えた。
「これがアマゾンのイルカですか。話には聞いてましたが」
「アマゾン海にイルカいるって聞いて最初驚いた」
彼にとってはイルカは川にいるものであったのだ。
「けれどイルカは海にいるのが本当らしい。これ凄く不思議」
「いや、それは不思議じゃないですよ」
筑波はそれに対して言った。
「元々鯨の仲間なんですから」
「そう。アマゾンそれ知らなかった」
イルカ達は暫くピンク色のその身体を見せていたがやがて川の中に消えていった。
暫くして別のものが川から出て来た。
「ん！？」
それは金色の魚であった。
「・・・・・何ですか、あの魚は」
筑波はその金色の魚を見て言った。
「ドラード。あれを見れた筑波とても運がいい」
「そうなんですか！？」
「うん。よく釣りに来る人いるがそうそう釣れない。物凄く気の強い魚」
「気が強いんですか」

「そう、大きいし力も強い。だから糸なんか簡単に引き千切られてしまう」
「それは厄介ですね」
「筑波は釣りには興味あるか？」
「いえ、あまり」
筑波はそれを否定した。
「やっぱり俺は空を飛ぶのが一番好きですね」
「そう言うと思った」
アマゾンはそれを聞いて微笑んで言った。
「それが筑波らしい」
「それはどうも」
筑波はそれを聞いてはにかんで答えた。
ドラードも川の中に消えた。今度は岸の森がざわめきだした。
「今度は何だ？」
筑波はふとそちらを見た。
「ジャガーか！？」
だが違った。それは空に出て来た。
「ムッ！」
バダンの戦闘員たちであった。空に現われボウガンを放ってきた。
「危ないっ！」
二人はそれを跳んでかわした。そして川の中に飛び込んだ。
「糞っ、川の中に飛び込んだか」
荒ワシ師団長がやって来た。そして上から主がいなくなった船を見下ろす。
「だが安心しろ。奴等は絶対に川から出て来る」
彼はそう言ってニヤリ、と笑った。
「カイゾーグでなかったのを不運に思うのだな」
そう言って右手を上げる。戦闘員達が下に向けてボウガンを構える。
「慌てる必要は無いぞ。よく狙え」

そして二人が上がって来るのをまつ。しかし。
「・・・・・おかしいな」
二人は上がって来なかった。柔分経っても上がって来ない。
「おかしいな。まさかピラニアに喰われる連中でもあるまい」
荒ワシ師団長はいぶかしんだ。
「だが焦る必要は無い。ゆっくり待つのだ」
戦闘員達にはそう言った。彼は水の中での戦いはあまり得意ではない。
「我々には切り札があるしな」
そう言って上を見上げる。
三十分経った。流石に痺れを切らした。
「何人か下へ行け」
調べてみるよう言った。その言葉に従い戦闘員が何人か降りる。
船に降りた。そして川の中を見る。
「何か変わったところはあるか？」
荒ワシ師団長は上から問うた。
「あまり・・・・・」
戦闘員の一人が答えた。その時だった。
何かが川から飛び出て来た。そして船の上にいた戦闘員達を蹴散らす。
「ムッ！」
それはジャングラーGであった。戦闘員達を蹴散らすと再び川の中に消えた。
「油断するな、すぐにこっちにも来るぞ！」
荒ワシ師団長はそれを見て言った。
「ケーーーーッ！」
彼の予想は当たった。ジャングラーGは再び川から出て来た。
「今だ、狙えっ！」
荒ワシ師団長は斧を持った右腕を振り下ろした。戦闘員達がボウガンを発射する。

だがアマゾンはマシンから跳んだ。弓矢は空しく宙を切った。そして空中で一回転し戦闘員の一人に襲い掛かった。

「ケケーーーーッ！」

鰭でその戦闘員を切り裂く。川に落ちる戦闘員を踏み台に再び跳び上がる。

そして別の戦闘員に襲い掛かる。こうして次々と戦闘員達を倒していく。

「クッ、何という奴だ」

荒ワシ師団長はそれを見て舌打ちした。

「だがこちらにはこういう時の為の決戦兵力がある」

そう言って再び上を見上げた。

「行けっ！」

上から二体の怪人が姿を現わした。

死霊舞う森その五

「クワァーーーーーッ！」
「キキキキキーーーーーッ！」
ブラックサタンの猛禽怪人奇械人ハゲタカンとショッカーの吸血怪人蝙蝠男である。怪人達はアマゾンに向けて急降下して来る。
「如何に貴様といえどその足場で二体の怪人を同時に相手には出来まい、どうだ！」
「甘いっ！」
その時左手から叫び声がした。
「その声はっ！」
荒ワシ師団長は左を振り向いた。そこにあの男がいた。
「来たか・・・・・」
彼はその男を見て言った。スカイライダーはそちらへ一直線に飛んで来ている。
「アマゾンは後回しだ」
師団長は怪人達に対して言った。
「先にスカイライダーをやれ！」
怪人達はそれに従った。そしてスカイライダーの方へ飛んで行く。
「来たな」
スカイライダーは怪人達を見て呟いた。
「相手にとって不足はない」
そして二体の怪人と向かい合った。
「キキーーーーーッ！」
まずは蝙蝠男が来た。翼を広げ迫り来る。
爪を剥いた。そしてスカイライダーを切り裂かんとする。
「甘いな」
ライダーはそれを何なくかわした。
だが蝙蝠男は足を絡めてきた。

「ムッ」
そしてしがみ付く。牙を剥く。
「そうはさせんっ！」
ライダーはそれを両手で止めた。怪人の顔を掴み引き剥がそうとする。
引き剥がした。そして遠くへ向けて放り投げた。
スカイライダーは間合いを一気に詰めた。怪人の真横に来た。
「水平回転チョーーーーーーップ！」
怪人の胸に手刀を入れる。たて続けに四つ入れた。
「グキィーーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びをあげた。そして爆発四散した。
「クワーーーーーッ！」
今度はハゲタカンが来た。小型バズーカで砲撃して来る。
「ムッ」
スカイライダーはそれをかわした。そして懐に飛び込みパンチを入れる。
「ウオッ！」
だが叫びをあげたのはライダーであった。思わず拳を押さえる。
見れば怪人の身体は厚い装甲に覆われている。パンチが効かないのも当然であった。
ハゲタカンは体当たりを敢行してきた。それはスカイライダーの胸を打った。
「まずいな」
中々の威力であった。それを受けたスカイライダーは思わず呟いた。
「だがこの程度では」
ライダーは怪人から目を離さなかった。そしてその動きをよく見る。
怪人は一度間合いを離した。そして再び体当たりを仕掛けようとする。

「もう一度仕掛けるつもりか」
それを見て呟いた。
来た。頭から突っ込んで来る。
「頭から来たか」
それを冷静に見ている。
脳天をこちらにぶつけるつもりのようだ。それを見てライダーは閃いた。
「これだ！」
怪人が迫る。ライダーはそれに対し右足を大きく振り上げた。
「ライダァーーーー踵落としっ！」
それは怪人の後頭部を直撃した。その動きが一瞬止まった。
「ガガガ・・・・・・」
怪人は呻き声を出した。そしてゆっくりと顔を下に向ける。
そのまま落ちて行く。そして川に落ち爆発した。
「おのれ、あの怪人達を倒すとは」
荒ワシ師団長はその爆発を見ながら呻く様に言った。
「荒ワシ師団長、残るは貴様だけだ」
スカイライダーが彼を指差して言った。
見れば戦闘員達もいない。全てアマゾンの驚異的な戦いの前に倒されていた。
「おのれ・・・・・・」
斧を振るおうとする。だが二人のライダーが相手では如何に空にいようと分が悪い。アマゾンはジャングラーGに乗りこちらに向かって来ている。
「勝負はお預けだ。今日は貴様等に勝ちを譲ってやろう」
そう言うと踵を返した。
「だがこれだけは覚えておけ。スカイライダーよ、貴様を倒すのはこの俺だ」
そう言い残すと空の彼方へ飛び去って行った。
「行ったか」

そこへアマゾンがやって来た。
「ええ。今のところは」
スカイライダーは答えた。目は師団長が消えた空の彼方を見ていた。
「何っ、このアマゾンから撤退するだと!?」
基地に帰った荒ワシ師団長はツバサ大僧正の言葉を聞いて激昂した。
「そうだ。このアマゾンで戦うのは我等にとって不利だからだ」
ツバサ大僧正は落ち着いた声で答えた。
「言っている意味がわからん。どうしてここで戦うことが不利なのだ」
「ここはアマゾンだ」
「それはわかっておるわ。それがどうしたというのだ」
「仮面ライダーアマゾンの生まれ育った地だ」
「それがどうしたっ!」
荒ワシ師団長はさらに語気を荒いものにする。
「我々はこの地での戦いに慣れてはおらん。空と密林では戦い方が違う」
ツバサ大僧正は彼を宥める様に言った。
「何故密林で戦う必要がある」
荒ワシ師団長は顔を顰めて言った。
「空で戦うのが一番であろう。奴等のうちで空を飛べるのはスカイライダー一人なのだしな」
「アマゾンに戦闘員達を全滅させられたのは誰だ」
「グッ・・・・・・」
その言葉にさしもの荒ワシ師団長も沈黙した。

死霊舞う森その六

「アマゾンライダーの空中戦における能力も無視出来ない。あのマシンは空も飛べるのだしな」
彼は言葉を続けた。
「そして密林の中に誘い込まれたら我等には為す術は無い。我々はあの中では将に翼を?がれた鳥だ」
「フン、臆病者が」
反論は出来なかった。だが苛立ちを抑える事が出来ずに吐き捨てる様に言った。
「臆病ではない」
ツバサ大僧正は彼を睨み付けて言った。
「有利な場所で戦うのも戦略だ。必ず勝てる場合以外は迂闊に動かぬことだ」
「そうだ、俺は必ず勝つのだ」
師団長は拳を振り回して力説した。
「この俺があの男に負ける筈がない。誇り高き中東の空の覇王がな」
「・・・・・・そうか」
大僧正はそれ以上反論しようとはしなかった。
「ならばこのアマゾンはそなたに任せよう。私はギアナ高地にでも退かせてもらう」
「フン、勝手にしろ。あの地で俺の勝利を聞き歯噛みするがいい」
「・・・・・・それを楽しみにしている」
彼はそう言うと荒ワシ師団長に背を向けた。そしてその部屋を後にした。
「腰抜けが。よくあれでツバサ一族の長が務まるな」
彼は顔を顰めて言った。そして部下達を呼び寄せた。
その光景を水晶から見ている者がいた。
「愚かな。あの状況で勝てると思っているのか」

白い煙が立ち込める暗闇の中に浮かび上がる赤いテーブルの上に置かれたその水晶から見ていた。
「どうやらプライドだけは相変わらず高いようだが。進歩の無い男だ」
その男は水晶の荒ワシ師団長を見ながら笑っていた。
「シャドウ様、所詮その男はその程度でございます」
そこへ一人の改造魔人が姿を現わした。
「フフフ、貴様か」
ゼネラルシャドウはその改造魔人ヘビ女を見て笑った。
「思ったより早いな。調査は順調のようだな」
「はい。やはりタイタンが動きました」
「ほう、あの男が」
シャドウは目を光らせた。
「はい。どうやらスカイライダーの重力低減装置を欲しがっているようです」
「重力低減装置を？」
「はい。そして死神博士とも最近よく会っているとか」
「死神博士か。成程な」
シャドウはそれを聞いて頷いた。
「何かおわかりになられたようですね」
ヘビ女はそれを見て笑って言った。
「うむ、よくわかった。それにしても面白い交換材料だな」
「交換材料ですか」
「そうだ」
シャドウは答えた。
「どうやらタイタンはかなり強くなっているようだな」
「といいますと？」
「それはやがてわかることだ」
シャドウはそれに対して言った。
「少なくともあの時のようにパワーが限界に達することはあるまい」

彼はブラックサタンにいた時のことを思い出して笑った。
「思えば不思議なことだ」
シャドウは笑みをたたえたまま笑った。
「奴とはブラックサタンで会ってから今までいがみ合っている」
「シャドウ様の地位を脅かさんとしている為でしょう」
「いや、違うな」
シャドウはヘビ女に対し言った。
「俺と奴は確かにブラックサタンで最高幹部の地位を争った。そして今も勢力圏争いをしている」
彼は言葉を続けた。
「だがそれはあくまで副次的なものなのだ」
「といいますと？」
「俺も奴も一人の男の首が欲しいのだ。そういう意味で俺と奴はよく似ている」
「あの様な男とシャドウ様がですか！？それは悪い冗談です」
「いや、冗談などではない。俺はジョークは言わん主義だ」
彼はカードを玩びながら言った。
「やり方は違えど俺も奴も欲しいのはあいつの首だけだ。俺も所詮は戦いが好きなのだ」
カードを引いた。スペードのエースだ。
「地位などどうでもいいのだ。戦いさえあればな」
シャドウは笑った。そしてカードを壁に投げた。
「待っていろ、貴様を倒すのはこの俺だ」
壁にはストロンガーの写真があった。カードはその心臓のところに突き刺さった。
「フフフッ、ハハハハ」
シャドウの笑い声が木霊する。それは地の底から響いていた。

死霊舞う森その七

アマゾンと筑波は川を上り続けていた。そしてバダンの基地を探していた。
「ありませんね」
「落ち着いて探す。さもないと駄目」
アマゾンは少し苛立ちを感じ出していた筑波に対して言った。
「奴等はもうすぐ来る、その時後をつければいい」
「まあいつものやり方ですけれどね」
筑波はそれを聞いて言った。
「しかしそう言ってもう一週間ですよ。ひょっとしてもうこの地域から撤退したんじゃないでしょうか」
「それはあるかも」
アマゾンはそれを聞いて言った。
「でしょう？かといってここから離れるわけにはいかないし」
「そう、全部が撤退したとは思えない」
アマゾンは緑の岸を見ながら言った。
「このアマゾンは隠れる場所一杯ある。全部逃げたとは思えない」
それは彼の動物的な勘が教えていた。
「ですね。では撤退したとすればその連中は一体何処に・・・・・・」
「多分ギアナ高地」
アマゾンは言った。
「あそこですか」
筑波はそれを聞いて真摯な顔で言った。
「そう。あそこは人はそう簡単には行けない。だから基地を作るのにはもってこい」
「そうですね。それにこのアマゾンは何と言ってもアマゾンの故郷、戦うにしても不利ですし」

筑波はアマゾンの能力を頭に入れながら話した。
「アマゾンここで戦い限り絶対に負けない」
それは一週間前の荒ワシ師団長との戦いでよくわかっていた。彼は密林や複雑な地形での戦いにおいてその力を最も発揮するのだ。
「空を飛ぶ怪人は密林での戦いには不向き。それだけでバダンにとっては不利」
「しかしギアナ高地は違う」
「はい」
筑波はその言葉に対し頷いた。
「ギアナ高地にはこんな密林はありませんしね。そして空での戦いも思う存分挑める」
「そう、その時は筑波の出番。アマゾンは休んでいられる」
アマゾンは悪戯っぽく笑って言った。
「ちょっと、アマゾンも戦って下さいよ」
「これは冗談、アマゾンも戦う。心配しなくていい」
そして二人は航路を変えることにした。
「ネグロ川からブランコ川に向かいますか」
「うん、それがいい」
こうして二人は航路を北に転じた。
「そうか、ネグロ川に向かったか」
荒ワシ師団長は基地で偵察に出ていた戦闘員の報告を受けていた。
「では我等も行くか」
戦闘員達はその言葉に対し敬礼した。
「今度こそスカイライダーを倒す。全員死兵となるつもりで行くぞ！」
「ハッ！」
彼等は基地を去った。そして最後の一人が出撃した時基地は跡形も無く爆発した。
「・・・・・この近くで謎の爆発があったらしいですよ」
ある朝休息に入った港で筑波はアマゾンに対して言った。

「跡形もなく吹き飛んでいて何があったのか一切わからないそうですけれど」
彼は新聞を持っていた。現地のポルトガル語の新聞である。
「それかなり怪しい」
アマゾンは岸辺で歯を磨いていた。口をゆすいだ後でそう言った。
「やっぱりそう思いますか」
筑波は彼がそう言ったのを聞いて言った。
「うん。多分奴等はもうすぐこっちに来る」
「来ますね」
それは筑波も感じていた。
「ではここにいたら迷惑がかかりますね。すぐに出ますか」
「それがいい。けれど川には行かない方がいい」
「といいますと」
「アマゾンに任せて。いい考えある」
アマゾンはニカッと笑って筑波に対して言った。そして話しはじめた。
「あの二人は何処にいる」
荒ワシ師団長は空を駆りながら戦闘員の一人に問うた。
「ハッ、この下の辺りのようです」
背のプロペラで空を駆るその戦闘員は探知機を見ながら言った。
「そうか、この下か」
荒ワシ師団長はそれを聞き下を見下ろした。鬱蒼と茂った密林である。
「降りるぞ」
彼は戦闘員達に対し言った。
「えっ、しかし・・・・・」
空で戦いを挑むと思っていた彼等はそれを聞いて顔を見合わせた。
「心配するな、俺は必ずライダーの首をとる」
そう言って自ら降りて行った。
「怪人達にも伝えよ、すぐに来いとな」

「ハ・・・・・・」
戦闘員達は力無く答礼した。そして連絡した後彼に続く。
「出て来い、ライダー達！」
荒ワシ師団長は密林に入り叫んだ。
「この荒ワシ師団長が貴様等の首を貰いに来てやったぞ！」
その周りを戦闘員達が取り囲む。ようやく追いついたのだ。
「荒ワシ師団長、迂闊に叫ぶのはあまり・・・・・・」
戦闘員の一人が諫めようとする。
「貴様等は黙っておれ！」
しかし彼はそれを一喝した。
「貴様等は俺の言う通りに動いておればよいのだ！」
普段は戦闘員達の言葉もよく聞くが今は違っていた。スカイライダーに敗れたことによる屈辱からであろう。彼は明らかに冷静さを失っていた。

死霊舞う森その八

（これはまずいな・・・・・・）
戦闘員達はそう思った。だがそれを口に出すことは出来なかった。
これ以上の諫言はかえって自分達の禍となる。彼等は口を噤むことにした。
「言われなくてもここにいる」
その前に二人の戦士が姿を現わした。
「出てきおったか」
荒ワシ師団長は彼等の姿を見て舌なめずりするように笑った。
「そうだ、貴様を倒す為にな」
筑波は彼を指差して言った。
「フン、戯言を」
師団長は筑波を見下すように見て笑った。
「貴様はこの俺が倒すと何度も言っているというのに」
「じゃあやってみろ」
筑波は珍しく強い声で言った。
「最初からそうしてやるつもりだ」
それが返事であった。
「よし、行くぞ！」
筑波は構えを取った。アマゾンもそれに続く。

スカイ・・・・・
右手の平を前に突き出す。そしてそれをすぐに懐に入れる。
左手も平を作りる。右に持って行きすぐに手刀にする。
そしてそれを上から左へ旋回させる。
身体が黄緑のバトルボディィに覆われる。胸はオレンジになり手袋とブーツは黒くなる。
変身！

身体を捻り左脇に入れる。そして右手を左斜めに突き出す。
顔の右半分が緑の仮面に覆われる。その眼は真紅だ。そして左半分も。
光が放たれた。

アーーーーー
両手を爪の様にして肩の高さで上げる。肘は直角に上に向けている。

マーーーーー
その両手を胸のところでクロスさせる。身体が深緑に赤い縞の入ったバトルボディに覆われる。手袋とブーツは鰭のある黒いものだ。
ゾーーーーーン！
両手を戻す。その眼が赤く光った。
顔の右がマダラの仮面に覆われる。そして左も。光が包んだ。

「行くぞ！」
変身を終えた二人のライダーは荒ワシ師団長達に向かって行った。
「フン、変身したか」
彼はそれを見ながらまだ笑っていた。
「出でよ、出番だ」
その声に従い怪人達が姿を現わした。
「チュウウウウウーーーーーッ！」
怪人のうち一体が叫んだ。
ゲルショッカーのペット怪人ネズコンドルである。その他にもいる。
ジンドグマの雨傘怪人アマガサンダーだ。彼等は左右に散りライダー達に迫る。
「来たか」
スカイライダーは二体の怪人を見て呟いた。
「ならば」

拳を握る。戦うつもりだ。だがアマゾンが前に出た。
「ムッ！？」
アマゾンは怪人達の前に出た。
「ここはアマゾンに任せる！」
彼はスカイライダーを降り向いて言った。
「しかしそれは・・・・・・」
やはり気が引けた。
「スカイライダーは荒ワシ師団長倒す、それでいい！」
そう言うと怪人達と対峙した。
「そうですか」
スカイライダーは彼の心遣いに感謝した。
「ならばそうさせてもらいます！」
彼はアマゾンの左肩を飛び越えて言った。
「アマゾン期待している！」
「はい！」
スカイライダーは振り返らずに頷いた。顔はそのまま荒ワシ師団長を見ていた。
「来おったな」
彼はそれを見てまたもや笑った。
「まずは改めて挨拶といこうか」
彼はそう言うと斧を投げ付けてきた。
「甘いな」
スカイライダーはそれを屈んでかわした。
なおも走り続ける。間合いが迫る。
戦闘員達が左右から来た。その手には斧がある。
「どけっ！」
ライダーは拳で彼等を退けた。戦闘員達が左右に吹き飛ぶ。
その後ろではアマゾンが二体の怪人を相手に戦っていた。
「カァサァーーーーーッ！」
アマガサンダーが叫ぶ。そして左手に持つ傘をアマゾンに向けて

きた。
そこからロケットが放たれる。アマゾンはそれをかわした。
「ケーーーーーーッ！」
かわしたアマゾンは斜めに跳んでいた。空中で宙返りし両足で木を蹴る。

死霊舞う森その九

そこに怪人のミサイルが再び迫る。今度は頭頂部から放ってきた。だがそれは当たらなかった。アマゾンの動きの方が速かったのだ。

「ケケケーーーーーッ！」

アマゾンが右手を一閃させた。アマガサンダーは左肩から右脇まで両断された。

今度はネズコンドルが来た。両腕のカッターで切りかかる。

アマゾンはそれを両手の鰭で受け止めた。怪人はさらに嘴で突こうとする。

しかしそれも効かなかった。アマゾンはその嘴を両手で掴んだ。

そして後ろに投げる。怪人は木に叩き付けられた。

アマゾンはそこに襲い掛かった。そして牙で噛み付いた。

喉を引き千切った。怪人の血が噴き出した。

二体の怪人は爆発した。そして密林の中に消えていった。

その爆発を見るアマゾン。その後ろでも戦いが行なわれている。

「喰らえっ！」

荒ワシ師団長が斧を振り下ろす。スカイライダーはそれをかわした。

「トォッ！」

そして蹴りを放つ。師団長は楯でそれを受け止める。

「やるおるな」

師団長はその蹴りの衝撃を見て言った。

「蹴りもやはり以前より強くなっておる」

「それもこれもバダンを倒す為だ」

スカイライダーはそれに対して言った。

「それに攻撃はこれで終わりじゃないぞ！」

さらに攻撃を続ける。蹴りをさらに出す。

「フンッ！」

それを楯で受け止める。流石に楯の裁きも見事だ。
しかしそれよりもスカイライダーの蹴りの衝撃が勝った。楯はその衝撃に次第に勝てなくなっていた。
割れた。楯は粉々に砕け散ってしまった。
「な・・・・・」
荒ワシ師団長はそれを見て呆然とした。その隙を逃すスカイライダーではなかった。
「喰らえっ！」
パンチが胸を撃った。後ろに吹き飛ばされる。
「グググ・・・・・」
だがそれでも立った。斧を握り直す。
「まだ立てるか」
スカイライダーはそれを見て言った。
「流石はデルザーの改造魔人といったところか」
「そうだ、甘く見てもらっては困るな」
荒ワシ師団長はその言葉に対して返した。
「エルサレムで勇名を馳せ砂漠を支配した我が祖先の名誉にかけて俺は勝つのだ」
「名誉か」
スカイライダーはそれを聞いて呟いた。
「確かにそれは貴様にとって何よりも大事なものなのだろうな」
「そうだ、俺はその為なら何でもする」
「だがそれに気を取られ策に陥ったな」
「何！？」
彼はその言葉に眉を顰めた。
「貴様は本来空での戦いを得意とする。その翼を使ってな」
「それがどうした！」
荒ワシ師団長は侮辱されていると感じ激昂した。
「それは俺も同じだ。この空を駆るスカイライダーにとってはな」
「何が言いたいのだ・・・・・！？」

師団長はスカイライダーの真意を計りかねていた。
「だが俺は空を駆るだけではない。多くの場所での戦いの経験がある」
彼は言葉を続けた。
「だが貴様にはそれは無い、貴様はこの場所に誘い込まれたのだ！」
「何ィッ！」
彼はその言葉に驚愕した。そして今ようやく己が罠にかかったことを悟った。
「行くぞっ！」
上に飛び去ろうとする荒ワシ師団長に襲い掛かった。そして地面に投げ付ける。
「グワッ！」
だが立ち上がる。そして斧を投げ付ける。
「甘いっ！」
スカイライダーはそれをかわした。そして荒ワシ師団長にさらに突進した。
「受けてみろ！」
彼は跳んだ。そして激しく前転する。
「スカイキィーーーーック！」
キックを放った。それは一直線に師団長に向かっていく。
蹴りはその胸を直撃した。衝撃で大きく後ろに吹き飛んだ。
「ガハァァッ！」
木に背をぶつけた。その木は衝撃で折れた。
「ヌヌヌ、まだまだ・・・・・」
荒ワシ師団長はそれでも立ち上がってきた。
「無駄だ、最早立っていることすら出来ないだろう」
スカイライダーは彼を見て言った。
「フン、この俺を誰だと思っている」
彼はその言葉に対して言った。
「俺は荒ワシ師団長だ、デルザーの空の支配者だ」

「・・・・・・・・」
スカイライダーはそれを聞いて沈黙した。
「この俺は森の中では死なん、俺が死ぬ場所は決まっているのだ」
そう言うと背中から翼を出した。
「俺は大空で死ぬ。スカイライダーよ、この俺の死に様よく見ておれ！」
そう言うと大きく羽ばたいた。そして密林を出た。
「バダンに栄光あれーーーーーっ！」
そう言うと空中で爆発四散した。後には破片一つ残らなかった。
「卑劣な男だと聞いていたが」
スカイライダーはその爆発を見上げながら呟いた。
「最後は見事だったな」
その足下には彼が先程砕いた楯があった。バダンの紋章の一片がそこに描かれていた。
「これでバダンの強い奴が一人いなくなった」
戦いが終わりアマゾンは変身を解いて言った。
「ええ、しかし敵はまだまだいますよ」
筑波は彼と共に密林の中を歩きながら答えた。
「うん、けれど一人ずつやっつけていく。それが一番いい」
「ですね。敵の戦力を少しずつ削いでいきましょう」
朝いた港に出た。
「筑波、じゃあ行こう。バダンはこうしている間にも動いている」
「そうですね、今度はギアナ高地ですか」
彼は次の戦場に思いを馳せた。
「ツバサ大僧正と・・・・・他にも来るでしょうね」
「うん、ここよりも激しい戦いになる」
「だからといって逃げるわけにはいきませんからね」
二人は船に飛び乗った。エンジンをかける。
「そう、悪い奴がいる限り戦う。それがライダーの仕事」
エンジンがかかった。泊めてあるロープを解いた。

「アマゾンも筑波もそれは同じ。だけどそれ少しも怖いことじゃない」
「はい、武者震いがしてきましたよ」
その通りだった。彼はこれからの戦いに思いを馳せると身体が奮ってきた。
「バダンを倒せるというのなら」
「それでいい」
アマゾンはそれを見て微笑んだ。
船は出発した。そしてギアナ高地へ向かって旅立った。

死霊舞う森　　完

２００４・３・２５

白夜の魔神その一

「これがオーロラか」
一文字隼人は空に浮かぶ幻想的な光景を見て思わず感嘆の声を漏らした。
「写真に撮っておくか」
彼は早速カメラを取り出した。
「そういえば一文字さんはカメラマンでしたよね」
隣にいる役が言った。
「ああ、おやっさんまで忘れてくれたことがあったがな」
彼はそう言って微笑んだ。
そして写真を撮る。緑のカーテンがカメラに収められた。
「前から一度写真に撮りたいと思ってたんだ。やっと願いが叶ったよ」
「良かったですね」
「ああ。じゃあ行こうか」
二人は白夜の街を後にした。
ここはノルウェー。北欧の湖の国である。
その歴史は古い。北欧神話の発祥の地でもあり湖とフィヨルド、そして森とこのオーロラで知られている。
かって隣国スウェーデンに併合されていたが二十世紀はじめに独立した。二次大戦でドイツに併合されたこともあったが今はこうして独立国となっている。
一文字隼人はこのノルウェーに役清明と共に着ていた。その目的は当然決まっていた。
「それにしてもこんなところまでバダンがいるとはな」
二人は街の外れのレストランで鰯料理を食べながら話をしている。

「それが連中です。世界征服には当然この国も含まれているんですから」
役が言った。
「そうだったな。それにしても凄い寒さだな」
「おや、ライダーでも寒いと感じるのですか」
役はそれを聞いて微笑んで言った。
「当たり前だよ。まあ常人よりはずっと寒さには強いけれどな」
「でしょうね。期待していますよ、戦いの時には」
「ああ、任せておいてくれ。雪山で戦ったこともあるしな」
「ベアーコンガーとですね」
「あ、ああ」
一文字はその言葉に少し戸惑いながら答えた。
「よく知ってるな、そんな昔の話」
「ええ、研究しましたから」
役は笑顔で返した。
二人は店を出た。そして車に乗り氷の支配する雪原に向かった。
それを遠くから見る者がいた。双眼鏡で彼等を見ている。
「そちらへ向かいました」
それは戦闘員であった。携帯で連絡を入れる。
「そうか、わかった」
携帯からは了承する返事が返ってきた。
「貴様は下がれ。後は別の者の監視を付ける」
「了解」
戦闘員はその場を去った。後には白夜を照らす太陽だけが残った。
「よし、準備はいいな」
基地の指令室で誰かが戦闘員達に対し問うた。
「既に全部整っております」
戦闘員の一人がそう言って敬礼した。
「うむ、ならばよい」
彼はそれを聞いて満足そうに頷いた。

「この国に基地を建設する前にライダーだけは倒しておきたいからな」
声の主は鋼鉄参謀であった。腕を組んで言った。
「しかも来たのが二号か。これは都合がいい」
彼はインドでのことを思い出していた。
「あの時は遅れをとったが今度はそうはいかん。借りを返させてもらうぞ」
そしてフッフッフ、と笑う。
「それは頼もしいな」
そこへ何者かがやって来た。
「お主か」
見ればマシーン大元帥である。ミイラの棺が現われその中から出て来た。
「だが二号は強敵だ、俺も以前手を合わせたから知っているが」
彼はデルザー軍団の時の戦いを思い起こしながら言った。
「それは俺もわかっている」
彼はマシーン大元帥に顔を向けて言った。
「あの時はシャドウに助けてもらったしな」
そういう彼の顔が屈辱に歪む。どうあやらそれを恥としているようだ。
「どうやら油断はしていないようだな」
「当然だ、あのきりもみシュートの味は忘れん」
「ならば良いが」
まだ何か言いたそうであったが言わなかった。
「ところで新しい情報が入ったのだが」
「何だ!?」
「荒ワシ師団長が死んだ、アマゾンでな」
「何っ、あの男がか!?」
彼はそれを聞いて思わず声をあげた。
「そうだ、スカイライダーに敗れてな」

「あの男がか・・・・・・」
彼はそれを聞いて顔を下に落とした。
「どうやら何か思うところがあるようだな」
マシーン大元帥はそれを見て言った。
「うむ、色々とあったとはいえ長い付き合いだったしな」
鋼鉄参謀の声はいささか沈んでいた。
「だが死んだものは仕方がないな。失った戦力の穴埋めもあるしな」
「そうだ。これを機に動く連中もいるしな」
「・・・・・あいつ等か」
鋼鉄参謀はふと脳裏に二人の男を思い浮かべた。
黒い男と白い男。共に影に動くのを得意とする者達だ。
「だが俺には関係のないことだ」
鋼鉄参謀はそう言ってマシーン大元帥から視線を外した。
「俺は二号ライダーを倒す方が先決だしな」
「フフフ、その気性は変わらぬな」
マシーン大元帥は彼のその態度を見て笑みを浮かべた。

「あくまで正攻法のみというわけか」
「そうだ、俺にはこの鋼の身体がある。下手な小細工など必要とはせぬ」
マシーン大元帥に己が鋼の肉体を見せて言う。
「ではそれを見せてもらおうか」
大元帥はその言葉を聞いてニヤリ、と笑った。
「おお、楽しみに待っておれ」
「そうさせてもらうか」
マシーン大元帥はそう言うと棺の中に入った。そして何処かへ消え去った。
「行ったか。何かと忙しいようだな」
彼はそれを見て呟いた。
「まあ良い、俺は謀りごとや裏のことには興味はない」
そして部屋を後にした。その後を機械が響く音が続いていた。
廊下を進む。そこへメガール将軍がやって来た。
「何だ、お主も来ていたのか」
彼は将軍の姿を認めて言った。
「何だ、ではないだろう」
将軍はその言葉を聞いて顔を少し歪めた。
「この北欧における基地の建設計画について相談に来たというのに」
「それは予定変更しなくてはならんぞ」
「何故だ!?」
彼はそれを聞いて再び顔を歪めた。
「ここに仮面ライダー二号がやって来たのだ」
「何だ、そんなことか」
将軍はそれを聞いて少し溜息をまじえた声で言った。
「それならば怪人達を差し向ければ良かろう」

「いや、俺が行く」
鋼鉄参謀は顔を横に振った後で言った。
「おい、馬鹿なことを言うな。ライダーは引き付けておけば問題ない」
「事はそう簡単ではない」
鋼鉄参謀はその話に対して反論した。
「ライダーがいては基地建設も思うように出来まい。だからこそ先に叩いておくのだ」
「いや、まずは防御だ。本拠地を築きそれからライダーを攻撃してからでも遅くはない」
将軍も引かない。話は平行線になった。
「ともかく俺は行かせてもらう。奴にはインドでの借りがあるしな」
「待て、待つのだ！」
しかし鋼鉄参謀は行ってしまった。あとにはメガール将軍だけが残った。
「ああだと何を言っても無駄だな」
彼はその後ろ姿を見送りながら呟いた。
そして自分の基地に帰った。そして指令室に行き戦闘員達に問う。
「基地の建設状況はどうなっている？」
「ハッ、今のところ予定通りです」
戦闘員の一人がそれに対して敬礼で答えた。
「そうか。ならば良いが」
将軍はそれを聞いて安堵の声を漏らした。
「だが鋼鉄参謀の部隊が抜けるとなるときついな。どうしたものか」
「困っているようね」
そこに魔女参謀が入って来た。
「生憎な。しかしそちらの受け持ちの地域も大丈夫なのか？」
「ええ。こちらはまだライダーも来ていないし」
「そうか。こちらは二号が来た。鋼鉄参謀は奴を倒しに出て行ってしまった」

「それは大変ね」
「うむ。だからといって余分な兵はいないしな」
「何なら貸してあげましょうか？昔のよしみで」
彼女はそう言うとベールの向こうで微笑んだ。
「いいのか！？」
「ええ。こちらはまた新しい怪人を甦らせたし」
「そうか。こちらも切り札はあるにはあるのだがな」
「しかしまだ使う時ではないと」
「うむ。あの男を倒す為のものだ。そうおいそれとは出せぬ」
そう言う将軍の眼に強い光が宿る。
「そうね。貴方もあの男のことは色々と思い入れがあるようね」
「それはお主には関係のないことだ」
彼は魔女参謀を睨んで言った。
「私には私の考えがある。それには立ち入らないでもらおうか」
「相変わらずね。もう少し柔軟になったら？」
「ドグマの時から何度も言っているだろう。私には私のやり方があるのだ」
「いいわ。じゃあもうこれ以上は言わないわ」
魔女参謀は左手の平を上に向けて言った。
「けれど怪人は貸してあげるわ。それは安心してね」
「申し訳ない」
彼はそれに対しては礼を言った。
「お礼はいいのよ。私にも私の考えがあってね」
彼女はそう言って笑った。
「お礼を言われたりするのは嫌なの。これはわかってくれるかしら」
「ああ」
将軍は答えた。
「わかってくれたらいいわ。じゃあ怪人達はここに置いていくから」
そう言うと右手をサッと上げた。すると後ろから怪人達が姿を現わした。

「思う存分使ってね。武勲を期待するわ」
「うむ」
「じゃあ私はこれで。そろそろ時間だから」
魔女参謀はそう言って姿を消した。
「行ったか」
マントで全身を覆うとそのまま消えていった彼女を見ながら言った。

白夜の魔神その三

「見たところ数は多いな」
メガール将軍は怪人達を見ながら呟いた。
「相手が二号ライダーならあの男といえど分が悪い」
二号の戦巧者は彼もよく知っていた。
「このうちの何体かは奴に送っておくか」
そう言ってその中の数体に対して何かを言った。すると彼等はそのまま部屋を後にした。
「用心しすぎるということはないからな」
彼はそう言うと部屋を後にした。そして指令室に向かい戦闘員達に指示を出した。
一文字と役は雪原を進んでいた。下は半ば氷であり雪も降ってきている。
「そのマシンは氷の上でも進めるんですね」
役が一文字に対して言った。彼はスノーボードに乗っている。
「ああ。何せ空だろうが海だろうが進めるからな」
一文字は答えた。
「あんたもよくこんなの開発したよな。正直驚いてるんだ」
「確かに設計したのは僕ですけれどここまで凄い能力には出来ませんでしたよ」
「じゃあこれはおやっさん達がやったのか」
「そうみたいですね。立花さんマシンに付きっ切りでしたから」
役はマシンを見ながら言った。
「おやっさんが新サイクロンを開発したからな。このマシンはそれの弟みたいなもんだからなあ」
一文字は自身が乗るマシンを見ながら言った。
「それにしてもよくあんな凄いマシンを開発出来ましたね」
「サイクロンのデータがもとになってるんだけれどな。あと本郷も

協力したし」
本郷猛は科学者でもありその頭脳はつとに知られている。
「それでも凄いですよ、あんなマシンを作れるなんて」
「いや、それでも」
それ以上のマシンを何なく設計した役を一文字は見て思った。
（しかしこの男は工学をやっていたにしろここまでのものを作るとは。一体何者なんだ）
そうだった。インターポールの一捜査官にしては彼の能力は異様であったのだ。
（とりあえずは俺達の味方のようだが）
信用は出来た。しかし。
（何故皆素性を知らないのだろう）
脳裏を疑念がよぎる。その時だった。
二人を突如として砲撃が襲った。
「来たかっ！」
役はスノーボードから飛び降りた。スノーボードは砲撃を受け爆発する。
一文字はマシンで空に跳んだ。砲撃はその彼も狙う。
「よし、外すなよ」
鋼鉄参謀は傍らでバズーカによる砲撃を続ける戦闘員達に対して言った。
しかし一文字の乗るマシンは速かった。たちまち見えなくなってしまった。
「ムッ、何処へ行った！？」
それを見て戦闘員達は周りを見回した。
「案ずるな、奴はすぐに姿を現わす」
鋼鉄参謀は落ち着いた声で部下達に対して言った。
「そう、すぐにな」
ニヤリ、と笑った。その時爆音が聞こえてきた。
「来たな」

目の前にライダーが現われた。新サイクロン改に乗りこちらに向かって来る。
「よし、行くがいい怪人達よ！」
鋼鉄参謀がそう叫ぶとその左右から怪人達が現われた。ショッカーの兄弟怪人であるシードラゴン三兄弟だ。
「イイーーーーーチッ！」
まずは一世が来た。二号ライダーはそれをマシンの上から見ていた。
「来たか」
彼は怪人を見ながら呟いた。
怪人は跳んだ。そして右手の二又の鞭を振るわんとする。
「フンッ！」
二号はその鞭を掴んだ。そして横に投げた。
マシンの機首を動かす。そして倒れ込む怪人に向かって突撃する。
怪人は今起き上がってきたばかりだった。だがすぐにその手の鞭を振るわんとする。
しかしライダーの方が速かった。新サイクロン改で体当たりを敢行した。
「イイーーーーーーッ！」
怪人は大きく後ろに吹き飛ばされた。そして雪原に叩き付けられ爆死した。
「トォッ！」
ライダーはマシンから跳び降りた。そして空中で後ろに宙返りしつつ着地した。
「ニィーーーーーチッ！」
シードラゴン二世が来た。左手の銛をライダーに突き刺さんとする。
しかしライダーはそれを横にかわした。そして怪人の懐に飛び込んだ。
そしてパンチを連打する。最後には大きく投げ飛ばした。

「ニィーーーーーッ！」
こうして彼も爆死した。残った三世が二号と対峙する。
「さあ来い、怪人！」
二号は身構えつつ怪人に対して叫んだ。
「ターーーーーーツッ！」
怪人は奇声を発するとそのまま突進した。そして左手の鋏でライダーの首を断ち切らんとする。
「そう来るか」
二号ライダーはそれを見て言った。そして右の鞭も振るう。
「見切った！」
ライダーはその鞭をかわした。そして怪人の後ろに回り込んだ。
「タッ！？」
怪人は慌てて後ろを振り向こうとする。だが間に合わなかった。

白夜の魔神その四

「遅いっ！」
ライダーは振り向いたその首に手刀を出した。
「ライダァーーーーチョーーーーーーップ！」
それは怪人の首を直撃した。鈍い音がした。首の骨を叩き折られた怪人はその場に倒れ爆発した。
「ライダー、そこにたんですか」
そこへ役もやって来た。
「怪人は僕がやります。貴方は鋼鉄参謀を！」
「わかった！」
役はその場に駆け込むとライダーに襲い掛からんとしている戦闘員達に対して拳を振るった。ライダーはその間に鋼鉄参謀のところに行く。
「来たな、仮面ライダー二号よ」
彼はライダーが目の前に来たのを認めて言った。
「ああ、インド以来だな」
ライダーも彼の前に来て言った。
「あの時の借り、一日たりとも忘れたことはない」
彼は右手に巨大な鉄球を掲げながら言った。
「そうか。こちらも貴様のことを忘れたことはない」
二号は身構えて言葉を返した。
「ならば話は早い。あの時の借り今ここで返してやろう」
そう言うと鉄球を投げ付けた。
「フンッ！」
ライダーは上に跳びその鉄球をかわす。そして懐に飛び込んだ。
「なんのっ！」
鋼鉄参謀は鉄球から手を離した。そしてその鋼の拳で殴りかかって来る。

「クッ！」
二号はその拳を手の甲で振り払う。そして逆に掌底を浴びせようとする。
「フフフ、またそれで来るつもりか」
鋼鉄参謀はそれを見て笑った。侮蔑した笑みであった。
掌底が直撃した。次々と胸を撃つ。だが彼は一向に苦にしない。
「甘いな」
彼は余裕の笑みで笑った。
「そうか、衝撃に対しても耐えられるようになったな」
二号はそれを見て言った。
「そうだ。再改造を受けたのは何も貴様等だけではない」
彼は高笑いをしつつそう言った。
「あの時の敗戦から俺も学んだのだ、全ては貴様を倒す為にな」
「そうか」
二号はその拳をかわしながら言った。
「あの時は貴様に遅れをとった。だが今度はそうはいかん」
そう言うと鉄球を引き戻した。
「死ねいっ！」
そしてその鉄球を再び二号に対し投げ付ける。
「トゥッ！」
二号は上に跳んでかわす。そして上から鋼鉄参謀に襲い掛かる。
「ムンッ！」
鋼鉄参謀は二号の膝蹴りを受け止めた。そして空中に投げ返す。
「止めだあっ！」
そしてそこに再度鉄球を投げ付ける。それは唸り声をあげ二号に襲い掛かる。
「させんっ！」
二号はそれを蹴った。鉄球はその衝撃で主に対し襲い掛かる。
鋼鉄参謀はそれを右手で受け止めた。そしてその衝撃を見事受けきった。

「俺を誰だと思っている。この程度の衝撃など何ともないわ」
彼は受け止めた鉄球を下に下ろして言った。
「だが二号ライダーよ、今日のところはこれで終わりにしてやる」
彼は二号に対して言った。
「何っ、どういうことだ」
二号は鋼鉄参謀に対して問うた。
「そうか、どうやら戦いに気を取られ周りに気付かなかったようだな」
「周り!?」
彼は辺りを見回した。
「ム・・・・・」
見れば周りは雪に覆われている。激しい吹雪が彼等の間に舞う。
「この状況ではお互い満足には戦えまい。俺は双方に不利の無い万全な状況で戦いたいのだ」
「何故だ!?」
二号はその言葉に対して問うた。
「俺は貴様に敗れた。その借りは戦って勝つことで返してやる」
彼は二号を睨み付けて言った。
「だがそれは万全の状態である貴様を倒してこそ意味があるのだ。そうでなければこの鋼鉄参謀の名折れだ」
「誇りというわけか」
「そうだ、俺は誇り高き黄金魔人の子孫、偉大な先祖の名にかけて卑劣な所業はせん」
彼は先祖の名を言う時微かに胸を震わせた。
「また会おう。そしてその時こそ貴様を倒す」
鋼鉄参謀はそう言うとその場をあとにした。後には二号が残った。
「去りましたね」
そこに役がやって来た。どうやら戦闘員は皆倒してしまったらしい。
「ああ、今のところはな」

二号は鋼鉄参謀が立ち去った方を見て言った。

白夜の魔神その五

「だが次に会う時はこうはいかない。おそらく互いに命をかえkた決戦になるだろうな」
「はい」
二人は吹雪舞う雪原の中次の戦いに思いを馳せていた。
「そうか、次で決めるつもりか」
鋼鉄参謀の基地に来たメガール将軍は彼の話を聞き頷いた。
「そうだ、今度こそ二号ライダーを倒す」
彼は胸を張ってそう豪語した。
「そうか、期待しているぞ」
将軍はそれを聞いて頷いて言った。
「うむ。しかし」
参謀はその言葉に機嫌をよくした後で尋ねた。
「どうした？」
将軍はそれに対して問うた。
「どうしたのだ、お主は今日はえらく親切ではないか」
「そうか」
メガール将軍は少ししらばっくれるような態度で言った。
「私は普段とは変わらぬ。だがお主のその考えはわからぬでもないのだ」
「そうか。お主もスーパー1と決着をつけねばならぬのだったな」
「・・・・・・・・」
将軍はその言葉に対しては答えなかった。
「済まん、気を悪くしたか」
鋼鉄参謀はそれに気付き謝罪した。
「いや、そうではない。私もあの男と決着をつけねばならないのは本当だしな」
彼はまなじりを決した表情で言った。

「だからこそお主のその考えもわかるのだ。だが油断はするな」
「うむ、必ずあの男を倒す」
彼は再びそう言った。
「出撃は明後日だ。それまでは英気を養っておく」
「そうだな。次の戦いに備えておくのもよかろう」
将軍はそう言うと一息置いた。
「それではお主の武運を祈り私から送りたいものがある」
「贈り物？何だ」
彼はそれに対して問うた。
「これだ」
メガール将軍はそう言うと右手をスウッと上げた。すると後ろから怪人達が現われた。
「その者達か」
鋼鉄参謀は彼等を見ると言った。
「うむ。是非役立ててくれ」
将軍は彼等の方に顔を向けて言った。
「・・・・・・済まぬな。有り難く使わせてもらう」
彼はメガール将軍に対して礼を述べた。
「礼には及ばん。だが必ず勝つのだ。私が言いたいことはそれだけだ」
彼はその低い声で言った。
「わかった。今度会う時には二号の首を見せようぞ」
「うむ、期待しているぞ」
メガール将軍はそう言うとその場を後にした。鋼鉄参謀も怪人達を引き連れ部屋を後にした。
明後日一文字と役はとある湖のほとりにやって来た。
「鋼鉄参謀、いるか」
一文字は叫んだ。
「おう」
すると鋼鉄参謀が姿を現わした。

「果たし状のあった通りここに来たぞ」
一文字は彼を見据えて言った。
「うむ、よくぞ我が申し出に応じてくれた。感謝するぞ」
彼はそう言うと右手を上げた。すると怪人と戦闘員達が姿を現わした。
怪人は三体いた。ゲルショッカーのヘドロ怪人ウツボガメスとデストロンの軟体怪人ハンマークラゲ、そしてネオショッカーの胞子怪人キノコジンである。
「メガール将軍、有り難く使わせてもらうぞ」
彼は怪人達の方を見てそう呟いた。
「一文字隼人、いや仮面ライダー二号よ」
彼は一文字に向き直り言った。
「今日こそ貴様を倒す、この誇り高き鋼の身体にかけてな」
「面白い、その言葉喜んで受けよう」
彼は一歩前に出て言った。
「俺も敗れるわけにはいかない。この世に悪がある限りな」
そう言うと変身の構えをとりだした。

白夜の魔神その六

変・・・・・・
右手を肩の高さで横に伸ばす。そして左手は肘を直角に曲げ右手に水平にする。
そしてそれを右から左に大きく旋回させる。
身体が黒いバトルボディに覆われる。胸は緑になり手袋とブーツは赤くなる。
・・・・・・身
両手を左に持って来た。左手は肩の高さで肘を直角に上げる。右手の肘も直角にし胸と水平にする。その両拳は固く握り締めている。
顔の右半分がダークグリーンの仮面に覆われる。そして左も。全身を光が覆った。

「トォッ！」
そして天高く跳んだ。鋼鉄参謀達の前に着地した。
「行くぞ、鋼鉄参謀！」
二号はそう言うと突進する。
「おお、望むところだ！」
鋼鉄参謀もだ。そして湖のほとりでの戦いがはじまった。
戦闘員達に対しては役が向かった。二号は怪人達と対峙する。
「さあ、来い！」
彼は怪人達に対して言った。
「ファァァァーーーーッ！」
ウツボガメスが叫んだ。その左手の爪を振るってくる。
二号はそれをかわした。そして間合いをとる。
しかし怪人はそれを見てニヤリ、と笑った。何とそのウツボの首を身体から分離させたのだ。
「何っ！？」

首が飛んで来た。そして二号の喉笛に襲い掛かる。
「させんっ！」
だが二号はそれを拳で弾き返した。怪人の首はその胴に戻って行く。
今度は身体を丸めてきた。そして高速で突進してくる。
「カメの能力か。伊達にゲルショッカーの改造人間であるわけではないな」
二号はそれを見て呟いた。
「だが俺もゲルショッカーとの死闘を潜り抜けてきた。本郷と共にな」
彼はあの死闘を思い出していた。ショッカー壊滅後ゲルショッカーが現われた。彼は南米でゲルショッカーの怪人達と戦い続けた。
そして南米のゲルショッカーを壊滅させると日本に戻った。最早ゲルショッカーで機能しているのはブラック将軍が率いる日本支部だけだったからである。
そこにはショッカーライダー達がいた。彼は本郷と力を合わせこの難敵を打ち破った。
そして彼は日本各地を転戦した。ゲルショッカーの戦力は壊滅状態となり最後にはブラック将軍自ら作戦にあたった。
吸血怪人ヒルカメレオン。ブラック将軍の正体であるこの怪人はその卓越した知略により本郷を絶体絶命の窮地に陥れる。
その危機に彼は現われた。関西のゲルショッカーを壊滅させた彼は関東に戻っていたのだ。
そして本郷を救い出しブラック将軍を倒した。そして遂に首領の最後を見届けたのだ。
その彼にとってゲルショッカーの怪人もまた戦い慣れた相手であった。彼は迫り来る怪人に対して身構えた。
「来いっ！」
ウツボガメスは突進して来る。二号は跳んだ。
だが速い。怪人はまだ来てはいなかった。

「ファァァァァーーーーーッ！」
怪人は笑っていた。そのまま反転し着地したライダーの背を狙うつもりであった。
しかしライダーは彼の予想を超えていた。速かったのだ。
「喰らえっ！」
二号は空中で回転した。そして真下に急降下する。
「ライダァーーーーキィーーーーック！」
怪人はその真下にいた。その蹴りが甲羅を打ち砕いた。
怪人は爆死した。二号はそれから逃れ着地する。
そこに別の怪人が来た。キノコジンである。
「キュゥルルルルルルッ！」
叫び声をあげる。そして口から胞子の霧を吐き出した。
二号は後ろに跳んだ。だが怪人はそこに体当たりを敢行する。
「さっきのやつと似たような戦法だな」
彼はそれを見て言った。
「だが少し違うようだな」
どうやら体当たりを浴びせるだけではないようだ。それから接近戦に持ち込むつもりらしい。
「ならば望むところだ」
彼は身構えた。そしてその体当たりを受け止める。
怪人は予想通り拳を振るってきた。二号はそれを的確に防ぐ。
拳を大きく振り被った。どうやら一気に決めるつもりらしい。だが大振りになったところで隙が生じた。
「今だっ！」
二号はその拳をかわした。そして懐に飛び込み投げ飛ばした。

白夜の魔神その七

怪人は地面に叩き付けられる。ライダーはそこに拳を加えた。
「ライダァーーーーパァーーーーンチッ！」
それは怪人の胸を直撃した。キノコジンは息絶え爆発した。
残るはハンマークラゲだけである。怪人は右手のハンマーを分銅にして振り回している。
そしてそれを二号に打ちつけんとする。しかし二号も速い。その身のこなしをもってかわす。
懐に飛び込む。そして拳を浴びせる。
しかし効いていないようだ。怪人は怯むことなく襲い掛かって来る。
「そうか。どうやらこいつには生半可な攻撃は通用しないな」
彼の身体は特殊であった。柔らかい身体がダメージを吸収するのだ。
ライダーは考えた。こういう時にはどうすべきかを。
「ならばっ！」
彼は跳んだ。そして楔状に高速回転した。
「ライダァーーースクリューーーーキィーーーーーック！」
本来は一号の技である。だが再改造と特訓により新たに身に着けたのだ。回転しながら蹴りを放った。それは怪人の胸を直撃し刺し貫いた。
「クラァーーーーーーーッ！」
怪人は断末魔の絶叫をあげた。そして先の二体の怪人と同じく炎の中に消えた。
「やはりな。普通の怪人ではライダーを倒せぬか」
鋼鉄参謀はその爆発を見ながら言った。
「鋼鉄参謀、残るは貴様だけだ！」
彼は爆発を背に身構えて言った。

「面白い、望むところだっ！」
鋼鉄参謀も身構えた。白夜の湖のほとりで今両者の最後の闘いがはじまった。
まずは鋼鉄参謀が拳を振りかざす。二号はそれを横にかわす。拳は続けざまに来る。だが二号はそれをその抜群の動きでかわす。鋼鉄参謀は二号を掴もうとする。だが彼はその手を逆に取った。そして背負い投げで投げる。投げ飛ばされた怪人は受身を取り衝撃を無効化する。
「ライダー・・・・・・」
そこに役がやって来た。戦闘員達はあらかた倒してしまった。彼の援護に来たのだ。
しかし彼はその闘いを見て動きを止めた。彼が間に入るにはあまりにも激しく凄まじい闘いであったからだ。
鋼鉄参謀はそのパワーで力押しにかかる。二号はスピードで対抗する。
両者の手がぶつかった。そして力比べが始まった。
「グググ・・・・・・」
双方共引かない。鋼鉄参謀が力自慢なのに対して二号もまた『力の二号』と呼ばれている。その力と力が今ぶつかり合っているのだ。
それは続いた。両者共その持てる力を出し合った。
二人は一歩も引かない。互いを睨みつつ力をぶつけ合う。
先に力が緩んだのは鋼鉄参謀であった。僅かに膝が緩みそこで姿勢を崩した。
二号は一気に力を入れた。鋼鉄参謀はその身体を大きく崩した。
「今だっ！」
二号は彼を押さえ付けた。そしてそのまま天高く跳んだ。
「ライダァーーーースクリューーーーブロッオオックゥーーーーーーーッ！」
鋼鉄参謀の手を取り駒状に高速回転する。そしてそのまま投げ飛ばした。

これもまた一号の技である。改造と特訓が彼に一号に匹敵する技を与えていたのだ。
参謀は地面に叩き付けられた。激しい衝撃が地面に走る。
「グハアアアア・・・・・・」
彼は呻き声をあげた。身体の各部分から煙が生じる。
「やりおるな。これ程の衝撃を受けてはさしもの俺も持ち堪える事は出来ん」
彼は起き上がりながら言った。
「これは本来一号の技だった。だが俺はこの技を再改造と特訓で身に着けたのだ」
二号は彼に対して言った。
「フフフ、そうか。道理で前のきりもみシュートよりも威力があった筈だ」
鋼鉄参謀は不敵に笑って言った。
「二号ライダーよ、俺の負けだ。見事な技だった」
「そうか」
二号はその言葉をそのまま受け止めた。
「この俺を倒したことは褒めてやる。貴様は見事な戦士だ」
「有り難う。貴様も見事だった」
二号は言葉を返した。
「見事か。フフフ、最高の褒め言葉だな」
鋼鉄参謀はそれを聞いて言った。
「これで心おきなく死ねる。力を出し尽くしたしな」
煙がさらに噴き出した。彼はもう限界に達していた。
「さらばだ。ライダーよ。今度会う時は地獄だ」
そう言うと倒れた。そして大爆発が起こった。
「終わりましたね」
それを見届けた役は二号の側に駆け寄って来た。そして彼に対して言った。
「ああ。敵ながら見事だった」

二号はその爆発が消えていくのを見ながら言った。そして戦いは終わった。

「そうか、死んだか」

メガール将軍は鋼鉄参謀の戦死の報を自身の基地の中で聞いていた。

「ハッ、立派な最後であったそうです」

報告に来た戦闘員の一人が言った。

「そうか、なら良い。あの男も本望であろう」

彼はそれを聞いて呟いた。

「最後の最後まで真っ向から戦いそして死んだのだからな」

そして彼のことに思いを馳せた。

「私もいずれはあの男と雌雄を決せねばならん。あの男の心がわかるような気がする」

「・・・・・ですか」

戦闘員はそれを聞いて答えた。

「うむ、私とてドグマで兵を預かっていた男だ、それに・・・・・・」

彼はそこで言葉を止めた。

「私もまたあの男に勝たねばならんのだ」

そう言うと話すのを止めた。

「左様ですか」

戦闘員はそれ以上聞こうとしなかった。そして将軍はその部屋を後にした。

白夜の魔神　　完

２００４・３・３１

長城の髑髏その一

長城の髑髏

世界各地でライダーとバダンの戦いが行なわれていた。風見志郎こと仮面ライダーブイスリーも例外ではなく彼もまた戦場に身を置いていた。

「滝さん、それにしてもここは凄く長いですね」

彼は傍らにいる滝に対して声をかけた。

「ああ。いつも思うがよくもこれだけのものを作ったよ」

滝が賞賛を込めた声で言った。二人は今北京郊外万里の長城の上にいた。

この長城は古来より中国が北方の異民族に対する防御として建築されていた。

よく秦の始皇帝が作ったと言われるがそれは少し違う。確かに彼も作るよう言ったがそれ以前より戦国時代の国家であった趙や燕等異民族と国境を接する国が作っていた。彼はそれを繋ぎ合わせ本格的なものにしたのだ。これは司馬遷の『史記』にも詳しい。

この史記においては始皇帝は無慈悲で冷たい心を持つ暴君として書かれている。一面においてはそうであろう。だが彼が傑出した人物であったことは事実なのだ。

彼は北に秦でも特に優れた将と精鋭、そして自身の嫡子を送った。これは息子が自分に従わないからだと後の世にまで言われた。だが違っていた。これは彼の能力を知っておりそして名将の補佐を得て彼を自身の後継者として育てる目的であったのだ。

彼等の防衛の下長城は建造された。膨大な金と多くの人材が必要であった。そして作られていったのだ。確かに労役に駆り出される方としてはかなわなかっただろう。だがそれ程までに北の異民族である騎馬民族は脅威であったのだ。その証拠に始皇帝が倒れ秦が滅びその後に漢を建国した劉邦もまた彼等には苦しめられた。元々農

耕民族である彼等にとって馬を自由に操る彼等はこれ以上はないという程の難敵であったのだ。

彼等は匈奴と言われた。ここには漢民族の彼等に対する怖れが見られる。彼等に対して積極的に兵を出し打ち破った漢の武帝にしろ多くの犠牲を払っている。

それ以後も彼等の脅威は続く。我が国でも有名な三国時代の後中国を統一した晋はその内乱の後疲弊したところを攻め込まれ南に逃れている。以後黄河流域は彼等が支配した。なおこの時中国の人口が激減したと言われることがあるがこれは単に戸籍が崩壊しただけである。中国の戦乱の時にはよく人口が激減しまた急に増加するがこれは戦乱により戸籍の資料が失われるからである。従って再び戸籍を調査すると人口はそんなに減ってはいないのである。この時代は戸籍はかなりいい加減になっていた。これは戦乱と貴族の土地に人々が逃れていたからである。南朝には大貴族達が多く秦以来の中央集権制はかなり崩壊していた。北方の遊牧民の系列の北朝は北朝で戦乱に明け暮れていた。従って戸籍がいい加減なのである。

それも隋の登場により終わった。久方振りに中国を統一したこの王朝は北にありその出自は異民族であった。だが皇室も自分達を漢民族だと思っているふしがあった。これはすなわち異民族とは関係が良くないということでもある。

隋もやはり北の異民族とは対立した。ここで長城を修復したのだ。その後の唐も同じである。北の異民族との対立は続いた。唐の後中国を統一した宋になると事態は更に深刻なものとなっていた。

北の異民族の国家遼はあまりにも強大であった。何と長城を越えていたのだ。これはこの長城をもって境とする漢民族には耐えられるものではなかった。

当然衝突がある。しかし軍の力を抑える為文治主義を採っていた宋が勝てる筈もない。結局毎年貢物を送る羽目になった。遼の後の金になるとさらに酷くなった。外交の失態から金を激怒させた宋は北半分を取られる。そして再び南北朝のようになってしまった。

宋はモンゴル帝国の元に滅ぼされる。そして明が起こる。

明は長城を重要視した。北にはまだモンゴルがいたからである。長城を当時の技術の粋を集め再建築した。これが今の長城である。モンゴルの後の女真族の清もこれには苦戦した。だが明が農民反乱で崩壊し内応者が出て越えることが出来た。こうして清は中国を征服した。

だが彼等も皇族がその本来の言語を忘れてしまう程漢化してしまった。漢民族の文化と同化してしまっていたのだ。ここに新たな北の勢力がやって来た。ロシアである。

帝国主義時代にはロシアは南下してきた。だが長城のところで止まった。漢民族にとってはその地は領土ではないので彼等は騒がなかったのだ。もっとも満州人にとってみればたまったものではなかっただろうが。

清が滅び中華民国になる。丁度その時満州は空き地であり日本がやって来た。そういう時代であった。朝鮮半島を日本としていた彼等にとっては満州は防衛上の要地であった。しかも資源が期待できた。資源の無い我が国にとっては生命線となっていた。

長城の闇懐その二

彼等は清の最後の皇帝溥儀を皇帝に迎え満州国を建国した。これは溥儀の強い要望もあった。

ここで中華民国はあまり騒がなかった。それ以前も満州でのことに対して彼等は無関心であった。何故なら自分達の領土ではないからだ。日中戦争はそれを読み違えていた。長城を越えなければ彼等にとってはどうでもいい話なのである。

これは今でも言える。彼等にとって境は長城である。従って北にある勢力を特に警戒する。中国人が最も嫌う国は実は日本でもアメリカでもインドでもない。韓国とロシア、とりわけロシアだという。何故か、北にあるからだ。ソ連時代に彼等は激しく対立した。一時同盟関係にあったが彼等にとって北の勢力は無視出来るものではなかった。

今もそれは変わらない。ロシアが少しでも力をつければ彼等にとっては最大の脅威となる。そうなると台湾や尖閣などとは言っては言られなくなるのだ。

「そう思うと本当に歴史的に意義があるんですね、この長城は」

風見は北を見ながら言った。

「そうだな、境の象徴だからな」

滝も中国の歴史はある程度知っているつもりである。

「だからここでは多くの血が流れている」

「・・・・・・はい」

風見はその言葉に頷いた。

「多くの戦いがありましたからね」

長城にある多くの櫓や城壁がそれを物語っている。

「歴史というのは戦いの歴史でもある。俺達がこれからもずっと戦争を続けていくんだろうな」

「・・・・・・でしょうね。それは人間の悲しい一面です」

風見は暗い顔をして言った。そして二人は長城を降りていった。
「ケケケケケ、戦いか」
二人が去った後その後ろに青白い鬼火が現われた。
「それこそが我等の無上の喜び」
その中からドクロ少佐が姿を現わした。
「そしてそこに流れる血こそ我等が最も美味とするもの」
彼はその空洞の目に残忍な光を宿して言った。
「俺もそれは同じ、いやこのドクロ少佐は人の血を浴びて生きている」
見れば彼の赤い軍服は人の血のその色であった。
「風見志郎、いや仮面ライダーブイスリーよ」
風見達が消えた方を見て呟いた。
「今度は貴様の血で俺の軍服を染め直してやる。シンガポールでの借りを含めてな」
そう言うと再び鬼火となった。そしてその場から消えていった。
「鋼鉄参謀もやられたか」
地下の奥深くから聞こえて来る。見ればそこにある部屋で誰かが話をしている。
「そうじゃ、見事な最後だったという」
見れば魔神提督と幽霊博士である。
「惜しい男じゃったが」
魔神提督は口惜しそうに言った。
「だが死んでしまった者を嘆いていても仕方はない。荒ワシ師団長やヨロイ元帥ももいないのだしな」
「そうじゃな。だがこれはすぐに我等にかかってくる言葉になるかも知れん」
幽霊博士は暗い声で言った。
「おい、驚かすでないぞ、縁起でもない」
魔神提督は顔を顰めて言った。
「ホッホッホ、冗談じゃ。そんなに驚くでない」

博士はそんな魔神提督の顔を見て笑って言った。
「お主も人が悪いのう。だがライダーは十人いる」
「そう、ゼクロスが向こうにいったからのう」
「わしの時は八人だった。その八人にネオショッカーは完全に破壊されたが」
「何を言う、わし等の時は九人じゃぞ、甘い甘い」
「・・・・・そういう問題でもなかろう」
魔神提督は呆れたような顔で言った。
「まあそうじゃがな。ところでお主は何か用意をしておるのか？」
幽霊博士は彼に倒して問うた。
「一応はな。わしとて作戦がある」
「ならば良いが。それだけで良いのかのう」
彼はそこで意味ありげに笑った。
「何が言いたいのじゃ！？」
魔神提督はその言葉に眉を顰めた。
「お主自身じゃ。果たしてライダー達に対しても戦えるのかと思うてな」
「何だ、そのことか」
魔神提督はその言葉を聞くとニヤリ、と笑った。

長城の闇襲その三

「それは心配無用じゃ。わしもネオショッカーの大幹部だった男じゃぞ」
「おっと、そうであったな」
幽霊博士はその言葉の意味を察した。
「ではわしからは何も言うことはないな。それでは楽しみにしておくか」
「うむ、世界征服の折には二人で飲もうぞ」
魔神提督はそう言ってニヤリ、と笑った。
「楽しみにしておるぞ、フォフォフォ」
幽霊博士は足の下から白い煙を発した。そしてその中に姿を消していった。
「面白い奴じゃ、ジンドグマの者とは妙に馬が合うのう」
彼は上機嫌な様子で言った。
「では楽しく飲む為の準備に取り掛かるとするか。さて、連中を呼ぶか」
彼は部屋の片隅に置かれていた鈴を鳴らした。
「お呼びでしょうか」
すぐに戦闘員達がやって来た。
「うむ、かねてよりの計画だが」
彼はニンマリと笑いながら言った。
「唯今より開始するぞ」
「ハッ！」
戦闘員達はその言葉に対し敬礼した。そしてその場をあとにした。
風見と滝は食事を終え再び長城に向かった。
「北京の料理は案外脂っこいですね」
風見は滝に対して言った。
「そうだったな、羊を使ったものが多いし」

滝もそれに同意した。
「北京は北に近いからな。羊を使ったものも多くなるとは思っていたが」
「それに寒いからでしょうかね」
「だろうな。ここは冬になると特に寒いらしいし」
滝は乾いた風を頬に受けながら言った。
「その分脂っこいものを食わなきゃやってられないのだろう。俺は何とも無かったが御前さんには少し辛かったかな」
「ええ、まあ。俺はどちらかというと広東の料理のほうが好きですね」
「敬介の奴は上海の料理が好きだと言ってたな。日本人はやっぱり魚介類か」
実は滝は日系アメリカンである。
「はい。シンガポールの料理は口に合いましたし」
「ううむ、俺は最初あの刺身や寿司を見た時はえらく驚いたがなあ。生で魚を食うなんて信じられなかったよ」
「ははは、外国人は皆そう言いますね。けれど美味いでしょう」
「ああ、今じゃ日本に行くとあれを食いたくてしょうがなくなるよ」
滝は笑いながら言った。
「何だかんだ言って俺のルーツは日本だからな。あの味を何処かで覚えていたんだろうな」
「実は刺身はこの国が発祥なんですけれどね」
「えっ、そうなのか！？」
滝は風見の言葉に驚いた。
「はい。水滸伝なんかにも出て来ますよ」
風見はニコリとした顔で言った。
「それは意外だな。中華料理は全部火を通すものだと思っていた」
「一概には言えないみたいですね。和食にだって脂っこいものがありますから」
「そうだな。イギリスでも美味いものが食える時があるし」

「滝さん、それは少し違いますよ」
「そうだな、ハハハ」
二人は談笑しながら長城を歩いていた。その時だった。
不意に遥か目の前の長城が爆発した。
「ムッ！」
二人はそれに反応した。そしてバイクで現場に急行する。
「どうしたっ！」
数十分後滝はインターポールの身分証明書を見せながら現場にやって来た。風見も一緒だ。見れば中国の公安警察の警官達が現場で捜査に当っている。
「インターポールの方ですか。これは都合がいい」
制服姿の警官達が滝を迎えた。
「都合がいいって・・・・・。何かあるのか！？」
滝はそれを聞いて彼等に対して問うた。

長城の闇襲その四

「はい。実はこうしたことが以前より起こっているのですよ。数ヶ月前から」
「数ヶ月前から・・・・・・」
「そうなんです。一体何処のテロ組織がやったのか皆目見当がついていない状況でして」
中国にも多くの民族問題がある。そして中国政府に反発する者も多い。
「そうか、しかしこれは・・・・・・」
見ればかなり威力のある爆弾を使ったらしい。長城は広範囲に渡って破壊され死傷者も多い。大怪我をして担架で運び込まれている者が次々と現場から救急車に入れられている。
「いつもこんな爆発なんですか!?」
風見は警官の一人に問うた。
「はい。物凄い威力でしょ。正直私達もこれ程威力のある爆弾は見たことがありません」
その警官は困った顔で言った。
「犠牲者も後を絶ちませんし・・・・・・。我々も警戒して四六時中警戒に当っているのですが効果は上がってはいない状況なんです」
「上層部に話したら最初はすぐ捕まるだろう、と楽観視していたのですが今は何かに怯えているように動かないんです」
「そうか、何かおかしいな」
滝はその話を聞いて首を傾げた。
「何かに怯えている、か。どうやら何かあったようだな」
「そのようですね」
風見もそれを聞いて答えた。
「良かったら俺も捜査に協力させてくれ。俺の名は滝和也、インターポールの捜査官だ」

「そして俺は風見志郎。上の方にはこの二人の名前だけ出しておけばいい」
「わかりました」
その場にいた警官達はその言葉にいささか変に思いながらも頷いた。
こうして風見と滝は捜査に協力うることとなった。いや、何と中国政府の上層部からの直々の命令で公安警察はこの事件の捜査から外された。そしてこの二人が捜査をすることとなった。
「滝さん」
風見は長城の脇をマシンで走りながら傍らをワルキューレで走る滝に対して話しかけた。
「何だ」
滝はこちらに振り向いて声を返した。
「公安の上層部の怯えといい政府から直々に捜査をしてくれるよう言われたところを見ると」
「間違いないだろうな。この事件の黒幕はバダンだ」
滝は眉を決した顔で言った。
「それにあんな威力を持っている爆弾を作れるのは連中以外には考えられないしな」
彼は長城での爆発事故を思い出しながら言った。
「テロですか。相変わらず非道な奴等だ」
風見は顔を顰めて言った。
「連中の行動は変わらないな。これだけは組織の名前が幾ら変わろうとな」
「ですね。あの首領ですから」
彼はデストロンの、デルザーの、そしてネオショッカーの首領を思い出しながら言った。
「しかし妙だな。前から思っていたんだが首領は御前さん達に宇宙に送り込まれて死んだんだろう？」
「ええ。デルザーの首領も自爆しています」

風見は答えた。
「だったら何であの首領なんだ?そう考えても死んでいるだろう」
「しかしゲルショッカー崩壊後も生きていましたからね」
「それだよ、実は俺はあの首領は本当に死んだと思っているんだ」
滝は言った。
「じゃあデストロンの首領は?」
「それだ。デルザーの首領は御前さん達に自分の声に聞き覚えがあるだろう、って問うてきたというじゃないか」
「はい」
「あの首領が今までの組織の黒幕だということはわかっている。ドグマやジンドグマにしてもな。だが組織崩壊の度に首領は死んでいる」
「はい、俺もこの手で倒しましたから」
風見は答えた。彼は白骨の化け物であるあの首領をこの手で倒したことは今でも覚えている。
「若しかして今までの首領はあの首領の分身の一つじゃないか?それだと今まで何度も死んでいてもすぐに別の組織を作り上げ復活してくるというのも理解出来る」
「・・・・・・・・・」
風見は滝の話に考え込んだ。
「これは俺の仮定だがな。しかしそれだと説明がつくだろう。ネオショッカー崩壊で死んだ筈の首領が今いまたこうして俺達の前にその声を現わしていることが」
「だとすればあの首領は・・・・・・」
その時だった。不意に二人の周りが爆発した。
「ウォッ!」
二人はマシンから跳んだ。そして長城の上に着地する。
「ケケケケケ、油断している暇はないぞ」
無気味な笑い声がした。ドクロ少佐である。何と櫓の上に立っている。

長城の闘懐その五

「貴様、ドクロ少佐か」
滝は彼の姿を見て言った。
「そうだ。滝和也よ、貴様と会うのは初めてだったな」
「フン、出来ればずっと会いたくなかったな」
彼は吐き捨てるように言った。
「そうだな。だが安心しろ、会うのはこれが最後になる」
「それはどういう意味だ！？」
「貴様がここで死ぬからだ」
そう言うとその右手に持つ大鎌を滝に向けた。
「喰らえっ、ドクロ火焔！」
「うわっ！」
滝は咄嗟に後ろに跳び退いた。そして何とかその火焔をかわした。
「ほう、やはりショッカー、ゲルショッカーと最後まで戦っただけはある。中々見事な身のこなしだ」
ドクロ少佐は滝の身のこなしを見て言った。
「だがそれだけでは勝てん」
彼の下に戦闘員達が姿を現わした。長城の上にヌッと出て来た。
「やれっ、滝の相手は貴様等がしろ」
「ギッ」
戦闘員達はそれに従い動いた。忽ち滝は取り囲まれる。
「さて、風見志郎よ」
ドクロ少佐は滝と部下達の戦いを上から眺めながら言った。
「いや、仮面ライダーブイスリーと言った方がよいな」
彼はそう言うと後ろを振り返った。そこに彼はいた。長城の上に立っていた。
「貴様の相手はこの俺がしてやろう」
そう言うと下に跳び降りた。そしてブイスリーと対峙する。

「行くぞっ！」
前に突進する。そして大鎌を振るう。
ブイスリーはそれを首を屈めてかわした。そして拳を出す。
だがドクロ少佐はそれをかわした。上に跳ぶとさっきまでいた櫓の上に立った。
「ケケケ、奇厳山以来だな」
彼はブイスリーを見下ろして言った。
「あの時は貴様を倒したくて仕方がなかったぞ」
彼は無気味な笑い声を出しながら言った。
「ほざけっ、その減らず口二度と立てなくしてくれる」
ブイスリーは彼を指差して言った。
「ケケケケケ、出来るものならな」
彼はそう言うと右手を上げた。するとブイスリーの周りに三体の怪人が現われた。
「ムウ・・・・・・」
ショッカーの地獄怪人地獄サンダー、ブラックサタンの怪力怪人奇械人メカゴリラ、ドグマの拳闘怪人アリギサンダーである。彼等はブイスリーを取り囲み身構えた。
「ほう、見たところ何かを壊そうという顔触れだな」
ブイスリーは怪人達を見て言った。
「そうだ、この長城を破壊する為のな」
ドクロ少佐はブイスリーを見下ろしながら言った。
「そうか、ではあの爆発事故も貴様等の仕業か」
「その通り」
ドクロ少佐は答えた。
「テロは我がバダンの作戦の中でも主幹の一つとなるもの。特にこうした人の集まる観光場所で行なうのは最適なのだ」
彼は笑いつつ言った。
「それだけ多くの血が流れるからな」
「フンッ、貴様等らしいな」

ブイスリーはそれを聞き言葉を吐き捨てた。
「有り難い、褒め言葉として受け取ろう」
少佐はそれを涼しい顔で受けた。
「では貴様にはここで死んでもらおう。立派な墓を築いてやるから安心しろ」
その声が終わると共に怪人達が一斉に動きだした。
「アリリリリリリーーーーーッ！」
まずはアリギサンダーが来た。その右拳の鉄球でジャブを放つ。

長城の闘艨その六

「ムッ」
ブイスリーはそれを上体を動かしてかわす。そして反撃の手刀を放った。
怪人はそれを左手で受け止めた。そして右ストレートを繰り出す。
「見切った！」
ブイスリーはそこにチョップを放った。それで右拳を砕いた。
そしてその身体を掴んだ。上へ思いきり放り投げた。
「ブイスリーボディアターーーーーーーック！」
そこへ跳び上がり体当たりを仕掛けた。怪人は遠くに吹き飛ばされ空中で爆死した。
下へ降りるブイスリー。だがそこに地獄サンダーが待ち構えていた。
ブイスリーの着地地点は長城から少し外れていた。怪人はそこに蟻地獄を作っていたのだ。
「ケケケケケケケケッ！」
怪人は奇声を発した。ブイスリーをその中に引きずり込まんとする。
「成程な、そうくるか」
ブイスリーはそれを見下ろしながら呟いた。そして空中で反転した。
「ブイスリードリルアターーーーーーーック！」
ブイスリーはそこにドリル状に回転して急降下する。そして地獄サンダーを直撃した。
怪人は自らの蟻地獄の中に沈んだ。そして土の中で爆発が起こった。
「ムッ、ブイスリーは何処だっ！？」
ドクロ少佐が叫んだ。ブイスリーもまた土の中に消えていた。奇

械人メカゴリラが長城の下に跳び下りていった。
「ギィッ」
怪人は辺りを探る。だが気配は無い。
「ここだっ！」
不意に後ろから声がした。ブイスリーが後ろから襲い掛かって来たのだ。
「ギィーーーーッ！」
怪人はその左手のアンカーをハンマーに変形させブイスリーの頭部に振り下ろした。だがブイスリーはそれを何なくかわした。
そしてその腹に蹴りを入れる。怯んだところに拳を入れた。
「喰らえっ！」
ブイスリーは上に跳躍した。そして蹴りを放つ。
「ブイスリー反転キィーーーーーック！」
そして反転してもう一撃蹴りを放った。これにより怪人は爆死した。
「ドクロ少佐、残るは貴様だけだっ！」
長城の上に戻ってドクロ少佐を指差す。少佐は不敵に笑った。
「ケケケケケ、望むところだ」
下に跳び降りて来た。そして再びブイスリーと対峙する。
「今度こそ負けはせぬ。この大鎌で切り刻んでやる」
そう言うと振り被った。そしてブイスリーの首を狙う。
しかしブイスリーはそれを蹴りで弾き返した。大鎌は回転しながら宙を舞った。
「ほほう、考えたな。俺の武器をまず外させるとは」
彼はそれでも尚不敵に笑った。
「だがそれだけで勝てるとは貴様も思ってはいないだろう」
ブイスリーは答えない。ただ身構えている。それが答えであった。
「ならばこれはどうだっ！」
今度はマキビシを放ってきた。ブイスリーはそれをかわした。
「まだだ、それだけではないぞっ！」

右の拳をブイスリーに向ける。そしてそれを放って来た。
「何っ！」
これにはさしものブイスリーも驚いた。左手で弾こうとするが間に合わない。顔に受けた。
「ガハッ・・・・・・」
思わず蹲る。右拳を戻したドクロ少佐はそれを見て満足げに笑った。
「どうだ、これも中々の味だろう」
彼は蹲るブイスリーを見下ろして言った。
「どうかな、それ程聞いてはいないがな」
ブイスリーはそう言うと立ち上がって来た。
「フン、相変わらず痩せ我慢も見事だな」
彼はそれを見て嘲笑する声を出した。
「だが口ではそう言っても結構ダメージを受けているのは確かなようだな」
ブイスリーの脚を見て言った。見れば少しふらついている。
「俺の拳を受けてそうそう無事な者はいない。それは貴様とてわかっていよう」
彼は戻ってきた大鎌を左手に取って言った。
「だが俺も貴様のことはよく知っている。手加減するつもりは毛頭ない」
そう言うと大鎌を再び構えた。
「今度こそ貴様を仕留める」
「望むところだ」
ブイスリーもダメージから立ち直り身構えた。そして両者は互いの隙を窺った。
「ドクロ少佐、大変です！」
そこに一人の戦闘員がやって来た。
「どうした！？」
彼はその戦闘員に対して問うた。

「すぐに基地にお戻り下さい、何者かの襲撃を受けております！」
「何っ、他にライダーがいたのか！？」
ドクロ少佐はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「いえ、それが・・・・・・」
その戦闘員は今一つ口篭もっている。
「どうした、言えぬ事情でもあるというのか」
「ハッ・・・・・・」
戦闘員は沈んだ声で答えた。
「よし、では戻るぞ。ブイスリーよ、勝負はお預けだ！」
ドクロ少佐は青白い炎に姿を変えて消えた。戦闘員も姿を消した。
「何があったというのだ？」
ブイスリーはドクロ少佐が変化した炎を見ながら言った。
「ブイスリー、大丈夫か」
そこに滝がやって来た。
「ええ、ドクロ少佐が急に撤退しましたし」
ブイスリーは滝に顔を向けて答えた。
「そうか。連中も中で色々とあるようだな」
「ええ。特に奴はデルザー軍団でしたからね」
デルザー軍団の内部対立の激しさは彼等もよく知っていた。
「だがこれで時間が出来たな」
「はい、今のうちに奴等の作戦に対する対策を練りましょう」
こうして二人は長城をあとにした。
その基地は張家口の地下にあった。炎がそこに入って来た。
「誰かいるかっ！」
炎から戻ったドクロ少佐は辺りを見回しながら叫んだ。
「ハッ、何でしょうか」
早速戦闘員が一人出て来た。
「他の者は無事かっ！？」
少佐はその戦闘員に対して強い口調で問うた。
「はい。如何なされたのですか、そんなに慌てられて」

「馬鹿者、基地が襲撃されて慌てぬ者がいるかっ！」
彼はそれを聞いて戦闘員を一喝した。
「・・・・・慌てるも何も襲撃などされてはいませんが」
戦闘員はキョトンとした顔で答えた。
「何っ、それはまことか！？」
ドクロ少佐はその言葉に面食らって言った。
「はい、よろしければ基地の中をお調べ下さい」
「ううむ・・・・・」
見れば基地の中はいつもと変わりがない。皆それぞれの持ち場で普通に働いている。そこへさっき長城にやって来た戦闘員が戻って来た。
「おいっ、貴様」
ドクロ少佐はその戦闘員の姿を認めると詰問した。

長城の闇襲その七

「一体これはどういうことだ、事と次第によってはただではおかんぞ」
「おやおや、相変わらず戦い方の割に気が短いねえ」
その戦闘員は無気味で嫌らしい女の声で言った。
「その声はっ！」
ドクロ少佐はその声の主を知っていた。戦闘員の身体を白い煙が包んだ。
「イーーーッヒッヒッヒッヒッヒ」
その戦闘員の正体はヘビ女であった。彼女は本来の姿に戻ると気色の悪い笑い声を出した。
「・・・・・やはり貴様か。一体何のつもりだ」
ドクロ少佐は彼女を睨み付けて問うた。
「何、あんたにちょっといい話があってねえ」
彼女はその口を耳まで裂けさせたまま言った。
「いい話！？」
少佐は訝しげに問うた。
「そうだよ。あんたは今一人でいるねえ」
「・・・・・それはこの張家口でのことか。それとも組織でのことか」
彼は問うた。
「両方だよ。それだとあんたも何かと不便だろう」
ヘビ女はそう言うとニヤリ、と笑った。
「どうだい、あたし達と手を組むつもりはないかい？」
彼女は笑みを浮かべたままドクロ少佐ににじり寄る様に顔を近付けた。
「つまりシャドウと手を組め、ということか」
「そうだよ、あんたもタイタンやマシーン大元帥を快く思ってはい

ないだろう。それに一人じゃ何かとやりにくいだろうし。どうだい、悪い話じゃないだろう?」

彼女はまるで蛇の穴に誘い込む様な顔で彼の耳元で囁いた。

「・・・・・・・・・・」

ドクロ少佐はそれを黙って聞いていた。

「さあどうだい?これからは仲良くやっていこうじゃないか」

「・・・・・・確かに悪くはないな」

ドクロ少佐はようやくその重い口を開いた。

「そうだろう、流石に切れるねえ」

「だが一つ聞きたいことがある」

少佐はヘビ女に顔を向けて言った。

「それはシャドウからの話なのか?」

そう言うとヘビ女の目を見た。まるでその心を探る様に。

「何でそんなことを聞くんだい!?」

だがヘビ女も流石である。その真意を決して見せようとはしない。

「俺を誰だと思っている、DDD団のボスだぞ。そうそう易々と動くと思ったか」

「それは一体そういう意味だい?」

彼女は顔を少し離して問うた。

「シャドウに伝えておけ。話があるなら直接来いとな。俺はあの男が頭を下げぬ限り手を組むつもりは無い」

「ほお言ってくれるねえ。シャドウ様に頭を下げろっていうのかい」

ヘビ女は怒気を込めた声で言った。

「そうだ、俺は別に一人でも一向に構わんからな」

彼はヘビ女を睨み返して言った。

「偉いねえ、そこまで強気だと逆にこっちが惚れ惚れしちまうよ」

彼女は皮肉をふんだんに込めて言った。

「言うな。俺は今までも一人でやってきた。そしてこれからも変わりはないということだ」

彼はそう言うと彼女から離れた。

「協力を申し出るというのなら断るつもりはない。だが俺はシャドウの軍門に降るつもりも手を組むつもりもないということだ。ただそれだけだ」
「チッ、そうかい、わかったよ」
ヘビ女は舌打ちをしつつ言った。
「わかったか。ならば帰ってもらおうか。俺はこれ以上話すつもりはない」
「フン、後悔するでないよ」
彼女はそう言うと一匹の蛇に変化した。そしてその場を立ち去った。
「奴も相変わらず何かと動き回っているようだな」
ドクロ少佐はヘビ女の気配が消えたのを確かめてからそう呟いた。
「だがそう上手くいくかな。タイタンもマシーン大元帥もその目は節穴ではないぞ」
彼はそう言うとその場を後にした。
「そうか、やはりドクロ少佐は首を縦には振らなかったか」
ゼネラルシャドウは己の基地でその報告を戦闘員から聞いて言った。
「それはそれでいい。敵になる者と味方になる者がはっきりわかるからな」
彼は真紅のテーブルに座しながら呟いた。
「さて、と今後の連中の動きだが」
彼は懐からトランプのカードを取り出した。
「一つ久し振りに占ってみるか」
そして彼はトランプを切りはじめた。そしてカードを一枚一枚床に置いていった。

長城の闇襲その八

「これがあの爆弾ですか」
風見と滝は公安の警官達に自分達が取り出してきたバダンの爆弾を見せていた。
「えらく大きいですね」
「それに構造もかなり複雑な様です」
彼等は口々にそう言った。
「これは解体するのは骨が折れそうですね」
彼等は難しい顔をして言った。
「いや、それが案外そうでもないみたいなんです」
風見は彼等に対して言った。
「実はここをこうやると・・・・・・」
彼は実際にその場で解体をはじめた。
「ちょ、ちょっと風見さん・・・・・・」
警官達は風見がここでいきなり解体をはじめたので思わず顔を青くさせた。
「ほら」
だが彼はすぐにそれを解体してしまった。
「外部は確かに複雑ですが単なる見掛け倒しです。こういうふうに素人の俺でも簡単に解体出来るんですから」
「何と・・・・・・」
素人というのは嘘だったが解体が案外楽なのは事実だった。警官達はそれを見て少し安堵した。
「まあ解体は爆発物取扱班に任せれば問題ないでしょう。問題はどうやって探すかです」
警官達の長である人物が言った。
「これを発見するのがまたかなり困難でして」
彼は苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「それも問題ありませんよ」
風見は答えた。
「既におおよその場所は掴んでいますから」
彼はブイスリーの能力の一つであるOシグナルを使用したのだ。
「えっ、本当ですか!?」
警官達はそれを聞き流石に驚きの声をあげた。
「はい。この地図に書き込んでおきました」
彼は懐から一枚の地図を取り出した。そこには所々にバツ印が書き込まれている。
「このバツ印のところにあります。これ探し出すのはズッと簡単になったでしょう」
「有り難うございます・・・・・」
彼等はその地図を見ながら風見達に感謝の言葉を述べた。
「いえいえ、それもこれも連中の野望を挫く為ですから」
「連中!?」
彼等はその言葉に問うた。
「いえ、こちらのことです。お気になさらずに」
「そうですか」
彼等は何かあると思ったがそれ以上は聞かなかった。一度は政府上層部から直々に声がかかったような者達である。彼等が相手にするような連中などどのような危険なものかわかったものではないからだ。これは彼等の生存本能が聞いてはいけない、と教えていたのだ。
そして彼等は爆弾の捜索及び処理を開始した。そして的確に一つずつ爆弾を取り除いていった。
「これで問題ありませんね」
風見は山海関のところでその処理を見守りながら滝に対して言った。ここはかって長城の防衛の要であった。清朝もここを抜くことが中々出来ず苦労した。
「ああ。爆弾はな」

滝もれを見ながら言った。
「だがここではまだやることは残っているぞ」
「はい。じゃあ行きますか」
「おお」
二人は頷き合いマシンに乗った。
そしてそのまま走って行く。やがて誰もいないところまで来た。
そこにあるのは果てしない荒野と何処までも連なる長城だけであった。
二人の周りを爆発が起こる。風見はそれをマシンをダッシュさせることでかわした。滝もそれに倣った。
「来たな！」
風見はマシンのハンドルから手を離した。そして両手をゆっくりと旋回させ始めた。

変身
右腕を肩の高さで真横に置く。左腕は肘を直角にしそれに水平にする。両手の平は手刀となっている。
そしてそれを右から左にゆっくりと旋回させる。身体が緑のバトルボディに覆われ胸が白と赤になる。手袋は白、ブーツは赤である。
ブイ・・・・・スリャアアーーーーーーーッ！
両手を左斜め上に持っていったところで右腕を脇に入れる。そしてそれをすぐに戻すと同時に左腕を脇に入れる。
顔の右半分が赤い仮面に覆われる。その眼は緑となる。そしてそれはすぎに左半分も覆った。
腰にあるバブルタイフーンが激しく回転する。そして全身が光に包まれそのマシンがニューハリケーンになる。
「ギエーーーーーッ！」
そこに奇声と共に怪人が姿を現わした。ゴッド悪人軍団の一人コウモリフランケンである。

「どうやらさっきの砲撃はこいつの仕業だな」
ブイスリーはその怪人の姿を認めて言った。
怪人は空に飛んだ。ブイスリーもニューハリケーンを飛ばした。
「行くぞっ！」
怪人はそのまま突っ込んで来る。砲撃も仕掛けて来るが当たらない。
「にゅーハリケーーーンアターーーーーック！」
そしてそのまま体当たりを敢行する。ニューハリケーンのボディが怪人の胸を直撃した。
「ギエエエエーーーーーーーッ！」
コウモリフランケンは大きく後ろに弾き飛ばされた。そして地面に叩きつけられ爆死した。
「トォッ！」
ブイスリーはマシンから飛び降りた。そこには新たな敵が待ち構えていた。
「キリーーーーーッ！」
デストロンの双頭怪人カマキリメランだ。怪人はブイスリーめがけブーメランを放ってきた。
「来たな」
ブイスリーはそのブーメランを空中で身体を捻ってかわした。だがブーメランは反転しブイスリーの背中を狙って来た。

長城の闘襲その九

ブーメランが迫る。ブイスリーは耳でその音を聞いていた。
「それは予想通りだっ！」
彼は上体を思い切り屈めた。ブーメランはそのまま飛び去っていってしまった。
「今度はこっちの番だっ！」
ブイスリーはそう叫ぶと屈めたその力でもってそのまま前転した。そして空中で激しく回転しつつ怪人めがけ急降下する。
「ブイスリー回転フルキィーーーーーーーック！」
空中でそのまま三回転し両足で怪人の胸を蹴った。カマキリメランはその衝撃に耐えられず爆死した。
「今度は誰だっ！」
着地したブイスリーは叫んだ。そこに新たな敵が現われた。
「グルルルルアーーーーーッ！」
ブラックサタンの奇械人ゴロンガメであった。怪人は姿を現わすと同時に口から粘液を放って来た。
「危ないっ！」
ブイスリーはそれを跳躍でかわした。怪人はそれを認めると両手両足を身体の中に入れた。
「グルルルルルルルーーーーーッ！」
首も入れた。そしてブイスリーめがけ突っ込んで来る。
「させんっ！」
だがブイスリーはそれを両手で受け止めた。そして怪人を投げる。怪人は両手両足を出し着地した。そして身構えた。
そして再び口から粘液を放ってきた。
「そんなものっ！」
ブイスリーは再び上に跳躍した。そしてそこにニューハリケーンが飛んできた。

「トォッ！」
それを踏み台に再び跳躍する。怪人の頭上にきた。
「ここだっ！」
そしてそこで急降下する。眼下にあるのは怪人の頭頂部だ。
「ブイスリーパァーーーンチッ！」
その脳天に拳を浴びせた。さしもの奇械人もこれには耐えられず爆死した。
「これで三体か」
ブイスリーは怪人の爆発を見ながら呟いた。
「そろそろ出て来たらどうだ」
そしてその爆発を見たまま言った。
「怪人達ももう残ってはいまい。今度こそ決着を着けてやる」
「ケケケケケ、俺もそう思っていたところだ」
不意に後ろから声がした。
「仮面ライダーブイスリーよ」
ブイスリーは後ろを振り返った。そこに無数の人魂が浮かび上がっていた。
「今度こそ決着を着けてやる」
中央の一際大きな人魂がドクロ少佐となった。そしてその周りに戦闘員達が現われた。
彼等が姿を現わした時滝がこちらにやって来た。
「ブイスリー、遅れて済まない」
「いえ、かまいません」
ブイスリーは滝に対して言った。
「戦闘員達は俺がやる。御前さんはドクロ少佐をやってくれ」
「わかりました」
滝は降りて来る戦闘員達に向かって行った。そして彼等を相手に拳を振るう。
「行くぞ、ドクロ少佐」
ブイスリーはそう言うと跳んだ。そしてドクロ少佐の前に着地し

た。
「ケケケ、望むところだ」
彼は無気味な笑い声を浮かべてそう言った。
「シンガポールでの借り、今こそ返してやる」
そしてマキビシを放ってきた。ブイスリーはそれを横にかわす。
「さて、と」
ドクロ少佐はそれを見ながら大鎌を空中に浮かび上がらせた。そしてそれを手に取る。
「覚悟は出来ているだろうな」
その鎌を投げ付けてきた。ブイスリーはそれを上に跳びかわした。その後ろに迫る。ブイスリーは前転しその蹴りで鎌を弾き返した。
「やはりこの程度では効かぬか」
ドクロ少佐はそれを見て言った。
「ならばこれしかあるまい」
彼は右腕をブイスリーに向けた。
「喰らえっ！」
そしてそれをブイスリーに向けて放ってきた。
「来たな」
ブイスリーはそれを見て言った。冷静にそれを見ている。
右に動いた。腕はこちらに軌道を変えてやってくる。
「無駄だ、この腕は俺が操作しているのだ」
ドクロ少佐はそれを見て笑いながら言った。
「ドクロ分体では頭がガラ空きになる。だがこれではそうはならない」
彼は今度は左腕を飛ばしてきた。
「逃げられぬぞブイスリー。潔く覚悟を決めるがいい」
「生憎だがな」
ブイスリーはそれに対して言った。
「俺は敗れるわけにはいかない。そしてドクロ少佐よ」
彼はドクロ少佐の両腕を見据えながら言った。

「俺には一度受けた技は通用しないということを忘れていたな」
「何っ！？」
ドクロ少佐はそれを聞いて思わず声をあげた。
「貴様の動き・・・・・・既に見切っているということだっ！」
そう言うと前に突っ込んだ。そして飛んでくる両腕を左右の手で払った。
「ムッ！」
ドクロ少佐はそれを見て思わず声をあげた。ブイスリーはそのまま突っ込んで来る。
「喰らえっ！」
全身の筋肉を硬化させた。特殊強化筋肉である。
そしてそのまま体当たりを敢行する。ドクロ少佐は後ろに吹き飛んだ。
「まだだっ！」
ブイスリーは跳んだ。そして空中で激しくきりもみ回転する。

長城の闘襲その十

「ブイスリー必殺きりもみキィーーーーック！」
態勢を整えようとするドクロ少佐の胸を蹴った。ドクロ少佐はそれにより大きく吹き飛んだ。
「ガハァッ・・・・・・」
致命傷であった。だがそれでも立ち上がって来た。
「見事だブイスリー、よくぞ俺の攻撃を二度目で見切った」
彼はブイスリーを見据えて言った。
「この俺を倒したのはストロンガーと貴様だけだ。褒めてやる」
ブイスリーはそれに対して答えなかった。ただ思わぬ行動に対して構えをとっている。
両腕が戻って来た。それはすぐにドクロ少佐の腕に収まった。
「これでよし」
ドクロ少佐はその腕を見て笑った。
「俺は去るとしよう。誇り高きＤＤＤ団の長としてな」
そう言うと長城から身を投げた。
「見よ、これが死神の最後だ！」
そして長城の下で爆死した。彼は爆発の中に消えていった。
「死んだか」
ブイスリーはその爆発を見て呟いた。
「しかも長城の向こう側でか」
古来より中国では長城を境としていた。長城より向こうを『化外の地』と呼んでいたのだ。
そこに住む者は化け物とすらみなされることがあった。彼はその化外の地で死んだのだ。
「魔人の最後ではあるな」
彼はそう言うと変身を解いた。そこに滝がやって来た。
「ドクロ少佐まで死んだか」

地獄大使はその報告を自身の指令室において聞いていた。
「ハッ、立派な最後だったと言われています」
「そうか、ならよい」
彼はそれを聞いて言った。
「奴もそうでなければ気が済まなかったであろうしな」
そう言うとモニターを見た。
「わしも奴との勝負が控えておるしな」
「ほう、何時になく殊勝な言葉だな」
そこに誰かの声がした。地獄大使のそれと全く同じ声であった。
「貴様・・・・・・」
地獄大使はそれを聞くと表情を一変させた。そして声がした方に顔を向けた。
「どうした、この世でただ一人の従兄弟に対しその顔はないだろう」
暗闇大使は地獄大使に対し皮肉に満ちた笑みを浮かべながら言った。
「こうして会いに来てやったというのに」
「呼んだ覚えはないぞ」
地獄大使は顔を顰めたまま言った。
「聞こえなかったのか。来てやったと言ったのだ。わざわざな」
「くっ・・・・・・」
地獄大使はその言葉に対しさらに顔を顰めさせた。
「そして一体何の用だ。わしをからかいに来たのならこちらにも考えがあるぞ」
彼は右手に持つ鞭を突き付けて言った。
「だからそう怒るなというのだ。その短気さは幼い頃から変わらぬな」
「過去に何の意味があるのだ！」
彼は遂に激昂した。
「意味か！？」
暗闇大使はその言葉に対し口の端を歪めた。

「わしにはあるぞ。思い出したくもないことが山程な」
そう言うと地獄大使を憎悪の目で睨んだ。
「面白い。ならば言ってみよ」
地獄大使も怯まない。従兄弟を睨み返してきた。
「フン、まあいい」
暗闇大使はその憎悪を押し殺して言った。
「今は貴様とやりあうつもりはないからな」
そして表情を戻した。
「貴様は黒魔術にも通じておったな」
「一応はな」
地獄大使は答えた。実際にそれにより怪人達を甦らせたこともある。

長城の闇襲その十一

「ならば頼みがある。わしにその黒魔術について教えて欲しいのだ」
「？何故だ」
地獄大使はそれを聞いて眉を顰めた。
「少し必要になってな。残念なことにわしは黒魔術には疎いのだ」
「そうだったな。だがわしも詳しくは知らぬ。ネクロノミコンで学んだことだけだ」
ネクロノミコンとはラグクラフトの小説等に出て来る謎の書物である。発狂したアラビア人が書いたとも言われている魔道書だとされている。だがそれを実際に見た者は誰もいない。
「それで充分だ。ではネクロノミコンを貸してくれないか」
「それ位なら良いがな。ついて参れ」
彼は従兄弟を自室に連れて行った。
「これじゃ」
漆黒の表紙である。絹か何かで作られている。文字は古いアラビア文字であり魔法陣も描かれている。見ただけで邪な瘴気が漂っていることがわかる。
「これか。噂には聞いていたが手にするのははじめてだ」
暗闇大使はそれを手に取って言った。
「そしてどうするつもりじゃ。何か考えがあるのだろうが」
「それはおいおいわかる。その時を楽しみにしておれ」
彼はそう言うと不敵に笑った。
「フン、終わったらすぐに返すようにな」
地獄大使はその笑みを見て不機嫌になった。
「わかっておる。心配は無用じゃ」
暗闇大使はそう言うとネクロノミコンを懐に収めた。
「それではな。吉報を期待しておれ」
彼はそう言うと部屋を後にした。そして基地からも立ち去ってい

った。
「また何か企んでいるようだな」
地獄大使はそんな従兄弟を見ながら顔を顰めて言った。そして彼も闇の中に戻っていった。
「・・・・・ふむ、ドクロ少佐は死んだか」
ゼネラルシャドウはカードの結果を見て言った。
「こうなるとは思っていたがな」
彼はそれを見てニヤリと笑った。
「ほう、またトランプで占いか」
そこで後ろから何者かの声がした。
「貴様か」
シャドウは声がした方を振り向いて言った。そこには百目タイタンがいた。
「ドクロ少佐が死んだようだな」
「貴様も知っていたか」
「当然だ。万里の長城で仮面ライダーブイスリーとの戦いに敗れたそうだな」
「そうだ。今カードが俺に教えてくれた」
「フン、カードか」
タイタンはそれを聞くと嘲笑するような声を出した。
「俺は情報収集で知ったのだがな。貴様は相変わらず全てをカードに頼るか」
「心配無用だ。俺はカード以外でも情報を集めている」
シャドウはタイタンに対し不敵な笑みを浮かべて反論した。
「貴様も何かと忙しいようだな。アマゾンで荒ワシ師団長に会っていたようだし」
「知っていたか」
彼はそれを聞くと悪びれもせずに言った。
「当然だ。貴様が今誰と関係を深めているのかも知っている」
「詳しいな。ではあの男のことも知っているな」

「当然だ」
シャドウは言った。
「あの男の存在が目障りなのは俺も貴様も同じだ。だがな」
シャドウはそこで言葉を一旦切った。
「俺は貴様と手を組もうなどとは全く思わんぞ」
「心配するな。俺もそれだけはせん」
タイタンはシャドウをその無数の眼で見ながら言った。
「俺はあの男も貴様も嫌いだ。貴様とはいずれ決着を着けてやる」
「望むところだ。だが今は止めておこう」
「そうだ。貴様との決着はストロンガーとの戦いの後だ」
タイタンは急に態度を引き締めて言った。
「そしてその為に今あの男と結託しているのか」
シャドウはタイタンを見上げて言った。
「さてな」
だが彼はそこでとぼけてみせた。
「だがこれだけは覚えておけ。シャドウ、ストロンガーを倒すのは俺だ。そしてその後で貴様との決着を着ける」
「面白い。だがストロンガーは俺も狙っているということを忘れるな」
シャドウは不敵に笑って言った。
「当然だ。これも勝負のうちだ」
「フ、面白い。ではどちらが先に奴を倒すか賭けるか」
「その必要はない。勝つのは俺だからな」
「ならば貴様の戦いをよく見せてもらおうか」
「フン、いずれな」
タイタンはそう言うとその場から消え去った。火の球となりその場から消えた。
「行ったか」
シャドウはそれを席に座し頬杖をついたまま見送った。後ろに影が現われた。

「シャドウ様、よろしいのですか」
その影はヘビ女であった。
「何なら私があの男を始末しますが」
彼女はタイタンの消えた方を嫌悪の眼差しで見ながら言った。
「よい、あの男は俺が相手をする」
シャドウは彼女を制止するように言った。
「奴のことは俺が最もよく知っている。それに奴も俺が行かなくては相手にはしないだろう」
「そうなのですか」
「そうだ。奴はああ見えてもプライドが高い。そして手強いぞ」
「そうは思えませんが」
「それもおいおいわかる。下手に動いてはこちらが危険だ」
シャドウはそこではじめてヘビ女の方に顔を向けた。
「それよりも貴様にはこれからも情報収集を頼むぞ。俺には貴様の力が必要なのだ」
「シャドウ様の頼みとあれば」
ヘビ女はそれを聞きニンマリと笑った。その無気味な哄笑が部屋に木霊した。

長城の髑髏　　完

２００４・４・７

草原の赤き花その一

草原の赤き花

神敬介はモンゴルに来ていた。彼は今大草原の中にいる。

「いつも川や海でばかり戦っていたからな」

彼はカイゾーグということもあり水中戦が多い。だがこうした場所にいるのも嫌いではない。

「こうした草原も悪くはないな」

彼は元々自然がすきである。そしてそれを守る為に戦っているのだ。

「敬介さん、そこにいたんですか」

そこに馬に乗った佐久間がやって来た。

「ええ、ちょっとこの草原を見たくなりまして」

「それだったらいいんですけれどね、気をつけて下さいよ。バダンの奴等は時と場所を選びませんから」

「はい」

彼は佐久間に従いその場所をあとにした。彼もまた馬に乗った。

それを遠くから見る影があった。

「ギヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

それはドクターケイトであった。

「まさか仮面ライダーエックスがここにやって来るなんてねえ。少し意外だったわ」

彼女は無気味な笑い声を出して笑った。

「相手にとって不足はないね、いやむしろ中国での借りを返すいい機会だよ」

彼女は長江での作戦失敗の恨みをまだ忘れてはいなかった。

その周りに数人の戦闘員が姿を現わした。

「来たね」

彼女は彼等の姿を認めて言った。

「ここでの作戦はわかっているね」
「ギィ」
戦闘員達はそれに対して頷いた。
「なら問題はないよ。じゃあこの大草原を死の荒野に変えてやるよ」
彼女はそう言うとその場から消え去った。だがそれを見る影がもう一つあった。
「フン、どうせまだ毒を使うつもりだろう」
それは白いスーツに身を包んだ青年であった。
「芸のない女だ。所詮はその程度か」
彼はドクターケイトの消えた方を侮蔑の眼差しで見ながら言った。
「エックスライダーはこの俺が倒す。他の誰でもない」
彼は強い口調で言った。
「貴様などではない。それだけはよくわきまえておくのだな」
そして彼もその場から消え去った。
神と佐久間はこのモンゴルでバダンの行方を捜していた。この地に怪しげな影を見たとの話があったからだ。
「といってもモンゴルは広いですねえ」
二人は馬に乗っていた。佐久間がふと神に対して言った。
「広いとは聞いていたけれどまさかこんなにだだっ広いとは」
「それがモンゴルですよ」
神は遠くに見える地平線を眺めながら言った。
「この広大な草原こそがモンゴルです。何処までも続く青い空とこの草原がね」
「そうなんですか」
佐久間はそれを聞いて神に顔を向けた。
「神さんってここに来たことはあるんですか？」
「ええ、一回だけ」
神は答えた。
「といってもシベリアに行く時に横切っただけですが。ここで戦ったことはありません」

「そうですか。けれど何かここでは戦いたくはないですね」
佐久間は草原を見下ろしながら言った。
「あまりにも綺麗な草が広がってますから」
「それは何処でもそうですよ」
神は言った。
「誰でも戦いたくはないんです。ましてやそれで多くの人達の血が流れ命が失われるのなら尚更」
「そうですね」
それは佐久間もよくわかっていた。彼は仲間達をデストロンとの戦いで失っているのだ。
「しかし自分達の野心の為に戦いを行なう者達もいるのです。幾ら倒されようと」
「・・・・・・・・・」
それが誰か、言うまでもない。
「だけれどそんな奴等の野心を成就させたら大変なことになるでしょう？だから俺達も戦わなくちゃならないんです。戦える力があるから奴等の野望を打ち砕く、それが俺達の仕事です」
それがライダーであった。
佐久間はそれ以上何も語らなかった。二人は無言で草原の海を進んでいた。
ふと馬が脚を止めた。神はそれに不穏な気配を感じた。
「馬が脚を止めたか」
馬は繊細な生き物である。感覚も鋭く人が感じられないものを感じることが出来るのである。
「来るな」
神はふと呟くように言った。すると馬蹄の響きが聞こえてきた。
「イィーーーーッ！」
バダンの戦闘員達が姿を現わした。皆馬に乗っている。
「神敬介、今日こそ貴様の命を貰い受ける！」
その先頭には怪人がいた。ショッカーのテレパシー怪人ジャガー

マンである。
彼等は馬に乗ったまま突進してきた。そして鞍から剣を取り出した。
「ムッ」
神と佐久間はそれをかわした。そして戦闘員達の手から剣を奪った。

草原の赤き花その二

それで斬り合いをはじめる。二人は馬上で剣を振るった。
二人は戦闘員達を次々と斬り伏せる。だが戦闘員達は次々に現われる。
「ジャガーマン、助太刀に来たぞ！」
そこに新たな怪人が現われた。ドグマの竜頭怪人ヤッタラダマスである。
「死ねえっ！」
ヤッタラダマスは口から火を吐いてきた。神はそれを上に跳びかわした。
「無駄なことだ！」
今度は上に火を吐く。だがそれは弾き返された。
「ムウッ！」
そこにはエックスライダーがいた。彼は空中で変身していたのだ。
エックスライダーは馬の鞍の戻った。そして腰からライドルを引き抜いていた。
「行くぞっ！」
ライドルはホイップにチェンジした。そしてそれで戦闘員達を斬り伏せる。
「ならばっ！」
それを見たジャガーマンがやって来た。彼はその手にある爪でエックスライダーを切り裂かんとする。
だがエックスライダーの動きの方が速かった。ライダーは怪人の馬の横を駆け抜けた。
「トォッ！」
そしてライドルを一閃させた。怪人は胸を斬られた。
「ヒョーーーーーーオゥッ！」
怪人は断末魔の叫びをあげ落馬した。そして草原の上で爆死した。

二体の怪人は倒した。戦闘員達も佐久間が既に倒していた。
「やっぱりいましたね」
佐久間がこちらに馬を進めてきた。
「はい。残念なことに」
エックスライダーは自分達の考えが的中したことに苦々しさを覚えていた。彼は変身を解いても渋い顔のままであった。
「そうかい、ジャガーマンとヤッタラダマスは死んでしまったかい」
ドクターケイトはパオの中で戦闘員達の報告を聞いていた。
遊牧民であるモンゴル民族は家を持たない。このパオという羊の皮から作られたテントに似たもので生活しているのだ。
その中は質素なものである。羊を追い草原を進む彼等にとって無駄な財産など不要だからだ。
この生活は何千年も前から変わらない。彼等は長きに渡ってこの草原でこうして生きてきているのだ。
「残念だねえ。しかし死んでしまったものはしょうがないよ」
彼女は口惜しそうに言った。
「今あたし達がしなけりゃならないことはこの草原を死の荒野に変えることだ。エックスライダーも大事だがね」
「とするととりあえずは無視しますか」
「そうだね。あの二人でやっつけられなかったからね。ここはあの男に見つからないようにすればいいだけだし」
「愚かだな。神敬介はそれを見過ごす程迂闊な男ではない」
そこで誰かの声がした。
「・・・・・またあんたかい」
ケイトはその声を聞き顔を顰めた。
「そうだ。仮面ライダーエックスがここに来ていると聞いたのでな。わざわざギリシアから出向いてきたのだ」
先程の白いスーツの青年である。アポロガイストだ。
「あんたも暇だねえ。あんなところからやって来るなんて」
「俺の望みはあの男との決着をつけること。他には何もない」

彼はドクターケイトの皮肉を聞き流してそう言った。
「そもそも貴様は一度エックスライダーに作戦を破られているではないか。よくそれでそんな余裕が言えるな」
「余裕じゃないよ、自信ってやつだ」
ケイトはそう言い返した。
「ほう」
アポロガイストはその言葉に眉を動かしてみせた。
「あたしも誇り高き妖花アルラウネの末裔、この身体にはあらゆる生物を殺せる毒があるんだよ」
「そうだったな。その毒で貴様はこれまで多くの功績をあげてきた」
「知ってるじゃないか。じゃあ文句はないね」
「確かにな。それで炎に強ければどんなに良かったか」
アポロガイストは彼女を挑発するように言った。ケイトの顔色がサッと変わった。
「喧嘩を売ってるのかい!?」
彼女は立ち上がった。そして側に立ててあった杖を手に取りそれを向けた。
「別に。ただ本当のことを言ったまでだが」
アポロガイストは悪びれない。相変わらず彼女を挑発するような口調である。
「グギギ・・・・・」
ケイトは歯噛みした。だが彼と戦っても何の利もないことはわかっている。無益な戦いをする程彼女は愚かではない。
「フン、まあいいよ」
彼女は杖を収めた。
「それであんたはエックスライダーをやっつけるつもりなのかい?」
「当然だ。その為に来たのだからな」
アポロガイストは不敵に笑ってそう言った。
「ドクターケイト、ここでの作戦に口出しするつもりはない。好きにするがいい」

「フン、当然だよ」
ケイトは不満を露わにして言った。

草原の赤き花その三

「俺はエックスライダーをやる。あの男のことは考えなくていいぞ」
「じゃあそうさせてもらうかい」
「そうするがいい。俺は俺、貴様は貴様だ」
そう言うと踵を返した。
「俺が言いたいのはそれだけだ。では作戦の成功を祈る」
そして彼はパオを後にした。
「チッ、何時会っても腹の立つ男だねえ」
ドクターケイトはアポロガイストの気配が去ったのを見計らって口を尖らせた。
「あれで岩石男爵や隊長ブランクみたいだったら何とでもなるんだけれどね。生憎頭まで切れるときた」
「ゴッドでは第一室長だったのでしたね」
戦闘員の一人がケイトに対して言った。
「ああ。かなり辣腕を振るっていたらしいね。エックスライダーでも時には遅れをとる程」
「それは尋常ではないですね」
「そうだよ。だから今は下手に手出しは出来ない」
彼女はそう言うとそこで表情を変えた。
「・・・・・今はね」
そして酷薄な笑みを浮かべた。
「いずれ思い知らせてやるよ。このドクターケイトを馬鹿にした奴がどうなるかを。その時に何て言うかねえ」
彼女の目は燃えていた。暗い憎悪の念に燃えていたのである。
神と佐久間はモンゴルでバダンの影を探し続けていた。彼等は相変わらず馬に乗っている。
「しかしこの馬ってのはいいものですね」
神は佐久間に対して言った。

「いつもはマシンに乗っていてわからなかったんですけれど」
青い空の下で彼は明るい顔で佐久間に声をかけている。
「何か世界が違って見えますよ」
「本当ですね」
佐久間もそれに対し相槌を打った。見れば彼の顔も明るい。
「いつもより高いところから世界が広く見えますね。まあ馬の高さのせいですけれど」
「それに速いし。日本でも乗っていたいですね」
「神さん、それは無理ですよ」
「わかってますよ、ははは」
彼等は草原の中で朗らかに笑っている。そして夕方になり二人は休息をとった。
「美味しいですね」
火を囲んで座っている。佐久間が白いものを口にして言った。彼等は馬の乳から作ったチーズを食べている。
「ええ」
神は赤いものを口にしちえる。これは羊の干し肉だ。
「馬の乳ってどんなものかかなり不安だったんですけれどこれは中々」
「牛のものと比べると少し癖がありますけれどね」
神もそれを口にした。モンゴルでは乳製品が主食である。
「明日はどっちへ行きます？」
食事を終え佐久間は寝袋に入りながら問うた。
「東に行きましょう」
神は磁石を覗き込みながら言った。そして二人は眠りに入った。
翌日二人は馬に乗り東に向かった。陽が次第に高くなっていく。
「それにしても雲ひとつない空ですね」
その高くなっていく陽を見ながら佐久間が言った。
「ええ。けれどこうした日が続くのはあまり多くないそうですよ」
神は言った。

「そうなんですか？」
「ええ。モンゴルは冬がものすごく長いですしね。一年の大半は雪に覆われるんです」
「そうなんですか」
「モンゴルの冬は凄いらしいですよ。寒さで牛の頭が割れるくらいだそうですから」
「そういえばここのすぐ北はシベリアでしたね」
「はい」
「だとしたら寒いのも当然ですね。それにここは高原にあるんだし」
「そうです。そして内陸地ですからね。あまり住むのにいい場所ではないでしょう」
「そんなところにモンゴルの人達はずっと生きているんですか。大変ですね」
「ところがモンゴルの人達はここが一番素晴らしいと言いますよ。畑を耕すよりこの草原で羊をと一緒に生きているほうがずっといいって言います」
「それだけこの草原に愛着があるのですかね」
「そりゃそうでしょう。あの人達はこの草原で生まれ育ち、そして草原に帰るのですから」
　それはモンゴル人の宿命であった。かって世界を席巻したモンゴル帝国の偉大なる創始者チンギス＝ハーンもまたその一生の最後をこの草原で終えている。

草原の赤き花その四

「俺達も日本って国に愛着心があるでしょう？」
「それは当然です」
佐久間は答えた。彼は日本から長い間離れているがそれでも祖国を愛している。
「それと一緒です。モンゴルの人達もこの草原が好きなんです」
「そう言われるとよくわかりますね」
彼は外国にいてはじめて自分の国の素晴らしさがわかった。愛国心を持たぬ者は馬鹿にされるということもわかった。彼はそれを嫌という程よくわかっていた。だから悪行の限りを尽くすテロ国家を擁護し祖国を貶めるような輩はバダンの次に嫌いであった。
しかし今はそれを心の中に留めておいた。今はバダンを倒すことだけを考えることにした。
昼食をとった。そしてさらに進んだ。
「何か感じましたか？」
佐久間は神に対し尋ねた。
「はい、来ますよ」
神の顔は真剣なものであった。そこへ砲弾が飛んで来た。
「危ないっ！」
彼等は馬を走らせる。つい先程までいた場所を爆風が襲う。そしてその爆風は彼等を追う様に連なってくる。
「佐久間さん、馬達を安全な場所に！」
神は馬から飛び降りた。そして佐久間に馬を預けた。
「わかりました！」
佐久間はそれに答えた。そして彼は自分の乗る馬と神が乗っていた馬を連れて何処かへ去った。
「来い、バダン！」
彼は草原の上に身構えて叫んだ。

「俺はここだ、逃げも隠れもしない、来るなら来い！」
その彼の周囲を爆風が包んだ。
「フフフ、いい心掛けだ」
少し丘陵になっている高い場所に彼等が現われた。
そこにはアポロガイストがいた。隣にゴッドのナパーム怪人プロメテスを引き連れている。
「そうでなくては倒しがいがないというものよ。俺の生涯の宿敵としてな」
彼は既に変身していた。そして右手のサーベルで爆風を指し示した。
「神敬介、いやエックスライダーよ」
神の生死は不明である。彼の姿は爆風の中に消えている。だが彼は言葉を続けた。
「貴様を倒す為にこのモンゴルまで来てやったぞ」
「それは何よりだな」
爆風の中から声がした。
「それも貴様がこの地にいるからだ。俺は貴様との勝負を決する為なら例え地の底でもやって来る」
「そして俺の首を取るということか」
神の声は爆風の中から聞こえてくる。どうやら無事であるらしい。
「その通り、このモンゴルを貴様の墓標にしてくれる！」
「面白い、ならば今日こそ決着をつけてやる！」
風が吹いた。爆風が消え去る。エックスライダーがその中から姿を現わした。
「クルーザー！」
彼はマシンの名を呼んだ。銀色の輝くマシンが何処からか姿を現わした。
「トォッ！」
彼はそれに飛び乗った。そして丘陵に向かう。
「フフフ、来たな」

アポロガイストは宿敵のその姿を見て笑った。
「行け、怪人達！」
彼は叫んだ。ミサイルヤモリが身構える。そして遠くからもう一体の怪人がマシンに乗りやって来た。
「ムッ！」
それは牙の形をしたマシンであった。そこに乗るのはデストロンキバ一族の偉大な祖先原始タイガーである。
「それだけではないぞっ！」
アポロガイストは叫んだ。そして右手を挙げた。すると黒いマシンがやって来た。
「トゥッ！」
彼は大きく跳んだ。そしてその黒いマシンに飛び乗った。
「エックスライダー、俺の攻撃に耐えられるかっ！？」
マシンに乗った戦闘員達もやって来た。彼等はエックスライダーを取り囲んだ。
「ルルルーーーーーッ」
プロメテスの砲撃は続く。そしてそれをかいくぐる様にして原始タイガーと戦闘員、そしてアポロガイストが襲い掛かってきた。
「ヌホーーーーンッ！」
原始タイガーは咆哮した。そして戦闘員達を引き連れエックスライダーに突進する。
「来たかっ！」
エックスライダーは腰からライドルを引き抜いた。そして身構える。
怪人は口から火を吐く。ライダーはそれをマシンを捻ってかわす。間合いが離れる。咄嗟にライドルを換装する。
「ライドルローープッ！」
そのロープで戦闘員達を叩く。ロープは鞭のようにしなり戦闘員達をマシンから叩き落とす。

草原の赤き花その五

そして怪人の首に絡みついた。エックスライダーはそのまま思いきり放り投げた。

「ウオオオーーーーーーンッ！」

怪人は絶叫しつつ天に舞い上がった。そして地面に叩きつけられ爆死した。

「やりおったな」

アポロガイストはその爆発を見て言った。主を失くした牙のマシンも戦闘員達のマシンも倒れ爆発して草原の塵となっていく。

「これだけではないぞっ！」

エックスライダーは叫んだ。そしてクルーザーDを大きく跳躍させた。

「ムッ！」

それはアポロガイストの頭上を越えた。そしてプロメテスに一直線に向かう。

「ルルーーーーッ！」

怪人はそれを避けようとする。だが間に合わない。彼はマシンの直撃を受けて吹き飛ばされた。遠くで爆発が起こった。

「これで援護射撃もなくなったぞ、アポロガイスト！」

「そんなものは必要ないっ！」

彼は下でエックスライダーを見上げて叫んだ。

「俺にはこれがあるっ！」

そう言って右手を向けてきた。

「アポロマグナムッ！」

その右腕から三連で銃弾が放たれる。そしてエックスライダーの周りで爆発した。

「ウォッ！」

ライダーはそれを何とかかわした。しかしアポロガイストの攻撃

は続く。
「ガイストカッターーーーッ！」
今度は楯を投げてきた。それは唸り声をあげ激しく回転しながらエックスライダーに迫る。
「させんっ！」
それに対してライドルを構える。そして換装した。
「ロングポーーーールッ！」
ライドルを思いきり長く伸ばした。そしてそれでガイストカッターを叩き落とした。
「今度はこちらから行くぞっ！」
丘陵を降りてきた。走りながらライドルをホイップに換える。
「望むところだっ！」
アポロガイストもそれを見てマシンを走らせた。右腕のサーベルを構える。
「死ねっ、エックスライダーーーッ！」
ライドルとサーベルが打ち合った。鋭い衝撃音と銀の火花が散る。両者が交差した。そして機首を転じ再び向かい合う。そして激突する。
また火花が散った。そして斬り合う。何時しかその打ち合いは百合を超えた。
だが両者は疲れを見せない。草原の上で睨み合い斬り合っている。
「噂通りだな。さらに強くなっている」
「貴様こそな」
二人は白銀の光が舞い散る中言った。
「面白い、それではドクターケイトに倒されることもないな」
アポロガイストは間合いを離して言った。
「どういうことだ！？」
エックスライダーは不意に間合いを離した彼に対して問うた。
「俺はここで退く。後はケイトと戦え、ということだ」
「どういうことだ、俺をここで倒すつもりではなかったのか！？」

「気が変わった。貴様と決着をつけるにはよりよい場所があるしな」
「よりよい場所！？」
「そうだ。貴様はいずれそこに来ることになる」
アポロガイストは不敵に笑ってそう言った。
「その時までその命は預けておこう。それまで精々腕を磨いておくがいい」
彼はそう言うと去って行った。こうしてアポロガイストとエックスライダーのモンゴルでの戦いは終わった。
そしてドクターケイトの基地の捜索は続いた。だが中々見つからない。
「弱りましたねえ」
佐久間は思わず顔を顰めた。このモンゴルにはパオが散見するだけで目立つようなものは何もないのだ。
「見渡すところ草原ですからね。これでは探しようがないですよ」
「確かにそうですね。まさかこんなに探しにくい場所だったとは」
神もその言葉に頷いた。これは彼の予想以上であった。
「草の他にあるものといえば」
彼は草原を見渡していた。
「花位ですね」
ふと見ると足下に優しい赤い色をした花が咲いていた。
「それは目印とかにはなりませんね」
佐久間はその花を見て苦笑した。
「まあそれはそうですが」
神はそれにつられて同じように苦笑した。その時だった。
「いや・・・・・・」
彼はそこであることに気付いた。
「そういうわけではないかも知れませんよ」
「といいますと！？」
佐久間はその言葉に顔色を変えた。
「ドクターケイトですよ。あいつは何の改造魔人ですか！？」

「花、それもケイトウの」
「それです、あいつは赤い花の化身ですよね、ということは」
「あいつのいる場所には赤い花が多量にある、ということですか！？」
「そうです、これは仮面ライダーストロンガーに聞いたことですが」
ドクターケイトは人をケイトウの花に変える。その為彼女の基地の周りには多くの赤いケイトウの花が咲いているのだという。
「成程、それではその花を探せばいいんですね」
「はい、おそらくそこにドクターケイトは潜んでいる筈です。それを見つけましょう」
「はい！」
こうして二人は赤い花の集まっている場所を探した。途中に出会う人々に聞きそれを探し回った。

草原の赤き花その六

それはすぐに見つかった。この高原の辺境にその赤い花の咲く場所があった。

「ここだ、間違いない」

二人は目の前に広がる赤い花の絨毯を見て言った。

「予想した通りだ。ケイトウの花だ」

それは毒々しい、まるで血の様な色のケイトウであった。

「あとは何処に入口があるかですね」

佐久間は辺りを見回した。

「ムッ」

見れば一人の戦闘員が馬に乗りこちらにやって来る。

「貴様等はっ！」

彼のほうでもそれに気付いた。馬を飛ばしてこちらに向かって来る。

神と佐久間はその戦闘員に向かった。そして忽ち羽交い絞めにする。

「グググ・・・・・」

戦闘員は腕を押さえられ呻き声をあげる。

「言え、基地への入口は何処だ」

神は戦闘員に対して問う。

「クッ、一体誰が貴様等なぞに・・・・・」

彼は口を割ろうとしない。だがそれに対し神はさらに手を締めた。

「ウオッ・・・・・」

「さあ言え」

彼はそうしたうえで再び問い詰めた。

「わ、わかった」

戦闘員は止むを得なく口を割ろうとする。その時だった。

緑の液がその戦闘員を襲った。

「ムッ！？」
神と佐久間は慌てて彼から身を離した。液は戦闘員にかかり彼を瞬く間に溶かしてしまった。
「ギヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」
草原に無気味な笑い声が木霊した。
「その声はっ！」
二人は声のした方を振り向いた。そこにはあの女がいた。
「よくあたしがここにいるってわかったねえ、大したものだよ」
ドクターケイトは今戦闘員を溶かした液を発した杖を二人に向けながら言った。
「その花が教えてくれたのさ」
「成程、花かい」
ケイトは神の言葉に反応し顔を花に向けた。
「かって仮面ライダーストロンガーが言っていた。貴様は自分の周りにケイトウの花を置いているとな」
「そうだよ。ケイトウはあたしの分身みたいなものさ」
彼女はその言葉に対し目を細めて言った。
「だけれどねえ、何で花が一杯あるか知っているかい！？」
「当然だ」
神はケイトの言葉に対して身構えた。彼女は人をケイトウの花に変えてしまう力があるのだ。
「この花は毒の塊だよ。これから毒ガスを作りモンゴルを死の荒野に変えてやるつもりなのさ」
「だがそれは俺がいる限り絶対に許さん！」
神は彼女を指差して叫んだ。
「ほお、出来るのかい！？」
ケイトは彼を侮蔑した声と顔で見下した。
「長江では遅れをとったが今度はそうはいかないよ」
彼女の周りに戦闘員達が姿を現わした。怪人達もいる。ネオショッカーの亡霊怪人クチユウレイとブラックサタンの植物怪人奇械人

モウセンゴケである。
「さあ、あんたも毒の花に変えてやろうか」
彼女は左右に戦闘員達を従えて言った。
「倒れるのは貴様だ、ドクターケイト」
神は言った。そして変身の構えをとった。

大変身・・・・・・
彼は両手を垂直に上げた。そして左右にゆっくりと開いていく。
身体が白いバトルボディに包まれる。胸が赤くなり手袋とブーツが黒くなる。
エーーーーーックス！
左腕を脇に入れる。その手は拳となっている。
右手は左斜め上に突き出している。その手は手刀である。
顔の右半分が銀の仮面に覆われる。下半分は黒く、目は血の色である。そして左半分も。

全身が銀色の光に包まれた。神敬介は仮面ライダーエックスとなったのである。
「変身したねえ、エックスライダーに」
ドクターケイトはそれを見下ろしながら言った。
「遂にあの時の借りを返す時が来たよ。者共やっちまいな！」
「イイーーーーーーッ！」
戦闘員達が叫ぶ。そして丘陵を降りエックスライダーに立ち向かう。怪人達もいた。

草原の赤き花その七

「来たな」
「エックスライダー、雑魚は俺に任せて下さいっ！」
佐久間が前に出て来た。そして戦闘員達に立ち向かう。
「お願いしますっ！」
「了解っ！」
戦士達は二手に分かれた。エックスライダーは二体の怪人の前に行った。
「ギュアッヒャッヒャッヒャッヒャッ」
奇械人モウセンゴケは右手の食虫植物の鋏を手にエックスライダーに立ち向かう。エックスライダーはそれに対してライドルを引き抜いた。
「その棒には気をつけるんだよっ！」
ケイトがそれを見て叫ぶ。怪人はそれを受け間合いを離してきた。そして右腕から毒液を放つ。しかしライダーはそれをかわした。
「無駄だっ！」
そして跳躍した。
「トォーーーーーッ！」
ライドルはスティックとなっている。それを奇械人の脳天へ向けて振り下ろす。
「ライドル脳天割りーーーーっ！」
ライドルは怪人の脳天を叩き割った。怪人は毒液を撒き散らしつつ地に倒れ爆発した。
「カビィーーーーッ！」
今度はアオカビジンが向かってきた。全身のカビを燐粉のようにして撒き散らしてくる。
「ムウゥッ」
エックスライダーはそれを見て思わず呻いた。

「さあ、これはどうやって対処するんだい！？」
ドクターケイトはそれを見ながらエックスライダーを嘲笑した。
彼の敗北を確信しているようだ。
「・・・・・・・・・」
エックスライダーは沈黙している。ただその燐粉の動きから目を離さない。
「これでどうだっ！」
彼は急に叫んだ。そしてライドルを自分の胸の前で風車のように高速回転させた。
「そ、その技はっ！」
ドクターケイトはそれを見て思わず叫び声を出した。
「そうだドクターケイトよ、貴様もこの技は知っているだろう！」
彼は叫ぶようにして言った。ライドルに炎が宿っていく。
「喰らえ・・・・・・」
そしてそのライドルを怪人めがけ投げた。
「ライドル火炎地獄っ！」
ライドルは炎を宿らせたまま飛ぶ。燐粉を燃やし怪人に突き進んでいく。
「ガビーーーーーッ！」
怪人はライドルを受け叫んだ。そして忽ち炎に包まれ爆死した。
「ドクターケイト」
エックスライダーはそのライドルを手に取って彼女に顔を向けた。
「来いっ！」
「フンッ、望むところだよっ！」
彼女はそう言うと下に飛び降りてきた。そしてエックスライダーの前に着地する。
「その身体、毒で全部溶かしてやるよ」
そう言うと杖で殴り掛かってきた。エックスライダーはそれをかわした。
エックスライダーもライドルを繰り出す。そしてその杖を受け止

めた。
「ギヒヒヒヒヒヒ」
ケイトはまたもや笑った。そして身体から毒の霧を発する。
「ムッ」
エックスライダーはそれから身をかわした。ケイトはそれに対しナイフを投げてきた。
しかしそれはライドルで叩き落とす。だが毒霧の為近付くことは出来ない。
「おやおや、さっきまでの威勢はどうしたい!?」
それはケイト自身が最もよくわかっている。エックスライダーが近寄れないのを見て得意気に笑っている。
「また火を使うつもりかい?けれどいい加減見切らせてもらってるよ」
「クッ・・・・・」
彼女もデルザーの改造魔人である。一度どころか二度も見た攻撃が通用するとは到底思えなかった。
「さっきも言ったけれどあんたにゃあ借りがあるからねえ」
彼女は無気味な声で言った。
「ゆっくりと苦しんで死んでもらうよ」
その残忍な目が光った。
毒霧は辺りを覆っていく。草を枯らし空気を汚していく。そしてエックスライダーにジワリ、ジワリと近付いてくる。

草原の赤き花その八

「一体どうすれば・・・・・・」
エックスライダーはそれを見ながら考え込んだ。その間にも毒霧は迫る。
「待てよ」
ここで彼はあることに気付いた。
「そうだ、この手があった！」
彼はそう叫ぶとライドルのスイッチを入れた。
「エレクトリックパワーーーーッ！」
ライドルの電流が走る。そしてそれは霧に向かってビームのように放たれた。
「フン、なにをするかと思えば」
ケイトはそれを見て嘲笑った。
「生憎だけれどあたしは電流は何ともないのさ！」
「確かに電流にはそうだろう」
しかしエックスライダーはそれに対し落ち着いた声で応えた。
「だがそれから発するものはどうかな？」
「何！？」
ケイトは思わず首をかしげた。その時だった。
霧の中に電流が入った。それは霧の水分に反応し伝わった。
忽ち霧全体を電流が走る。そして激しい音が鳴った。
「こ、これはっ！？」
ドクターケイトはその真っ只中にいた。そしてその電流に目を見張った。
「電気は水を伝う。そのことを知らないわけではあるまい」
エックスライダーはそれを見てケイトに対して言った。
「そして電気が動くことによって何が生じるかも」
「まさか・・・・・・」

ここに至りドクターケイトはようやく自らの置かれた状況を察した。その顔が驚愕に覆われる。
「そうだ、ドクターケイト、貴様はこれで死ぬのだ！」
電流の熱がケイトを襲う。彼女はその熱により全身を激しく痛めつけられた。
「ギヤアアアアッ！」
人のものとは到底思えぬ異形の者の叫び声が木霊した。ドクターケイトはその電流の渦の中で絶叫していた。
「これで決まりだな」
エックスライダーはそれを見て呟いた。霧は消えケイトは全身を痛めつけられた状態で片膝を折った。
「グググ・・・・・」
それでも彼女は立ち上がろうとする。顔をエックスライダーに向けた。
「よくもやってくれたね・・・・・」
その顔から闘争心はいまだ消えてはいなかった。
「だけれどねえ、あたしも一人で死ぬわけにはいかないんだよ」
そう言うとふらつく足取りで立ち上がった。
「あんただけは道連れにしてやるよ、覚悟するんだね」
そして前に進む。
「ウオオオオオオオッ！」
エックスライダーに向けて突進した。だがライダーはその動きを冷静に見ていた。
「無駄だ」
ライドルをホイップに変える。そしてそれでケイトの胸を断ち切った。
「お、おのれ・・・・・」
これで動きが止まった。ケイトはそれでもまだ足を進めようとする。
「エ、エックスライダーだけは・・・・・」

だがそれが限界であった。彼女は地に伏すとそのまま爆発と共に消え失せた。

「改造魔人ドクターケイトの最期か」

エックスライダーはその爆発と正対しながら呟いた。

「敵ながら恐るべき執念だった」

彼は消えゆくデルザーで猛威を奮った改造魔人の最期を見送りながら呟いた。

こうしてモンゴルでの戦いは終わった。ケイトウに変えられていた人々はドクターケイトの死と共に元に戻りエックスライダーと佐久間は彼等を保護した。基地は破壊されこれでモンゴルでのバダンの作戦は阻止されたのである。

「見事だ。流石は俺の生涯の宿敵」

モンゴルの草原を馬で進む二人を見ながら白いスーツの青年は呟いた。

「そうでなくては面白くはない」

アポロガイストはその冷徹そのものの表情で神を見下ろしている。

「俺もこれを出せないしな」

彼は右手をサッと上げた。するとそこに一体の巨人が姿を現わした。

「貴様との決戦の時にはこれを使わせてもらおう。決戦に相応しくな」

彼はそう言いながら不敵に笑っている。

「そして貴様は血の海の倒れるのだ。この俺の手でな」

そう言うと踵を返した。

「その時まで腕を磨いておけ。俺を失望させない為にもな」

アポロガイストは草原から去った。巨人も何処かへ姿を消していた。

草原の赤き花　　完

2004・4・23

失われた地の翼人その一

失われた地の翼人

アマゾンと別れた筑波洋は予定通りギアナ高地にやって来た。ツバサ大僧正がここにいると聞いたからである。

「今度は一人か」

彼は高原に足を踏み入れて呟いた。

ここギアナ高地は秘境と呼ばれる。テプイと呼ばれる多くのテーブルマウンテンがありそこに生息する生物は独自の進化を遂げている。密林に覆われたこの地はかってコナン＝ドイルが『ロスト＝ワールド』で小説にしている。流石に恐竜まではいないがここは不思議な生物が見られるということでも知られている。

「まさかそればバダンだったとはな」

筑波はエンジェルの滝を見上げた。この滝は標高一千メートルに近いところから垂直に落ちる滝でありあのナイアガラすらも凌駕している。

「あらためてこの目で見ると余計凄いな」

彼は感嘆の言葉を漏らした。そして目を輝かせた。

「この戦いが終わったら一度飛びながら見てみるか。これは綺麗だ」

「ほんまでんなあ。こういう時は洋さんが本当に羨ましいですわ」

「ん！？この声は」

筑波は声がした方に顔を向けた。

「やっぱりな。がんがんじい、どうしてここにいるんだよ」

「どうしてと言われましても」

がんがんじいは筑波の言葉に愛想笑いで返した。

「役さんにこっちに向かってくれって言われまして。わいはそれに従っただけですわ」

「役さんに！？」

「はい。ここに洋さんが来るって言われまして。まさかこんなに簡

単にお会いできるとは思いませんでしたけど」
「ふうん、役さんからか」
筑波はふとどうしてわかったんだろう、と思ったがそれは口には出さなかった。
「だけどいいや。正直一人でいるより二人のほうがいい。がんがんじい、よろしく頼むぜ」
「はいな」
こうして二人はこの地の何処かに潜むバダンに対して挑むことを誓ったのである。
この時ツバサ大僧正は高地に新たに築いた基地にいた。
「ふむ、遂に来たか」
彼は指令室で部下の戦闘員から報告を受けていた。
「ハッ、がんがんじいも一緒です」
「またか」
彼はそれを聞いて思わず呟くように言った。
「あの二人はよく一緒にいるな。ネオショッカーと戦っていた頃からのようだが」
「その通りです。魔神提督も手を焼かれたようで」
「まああの男なら手を焼くだろうな」
彼は頷いてそう言った。
「おい、ツバサ大僧正よ、いくら何でもそれはないぞ」
その時指令室のモニターに魔神提督が姿を現わした。
「おお、一体何の用だ」
「何の用もあるか。お主はわしに協力を要請したのではなかったのか」
彼はツバサ大僧正の意を得ぬ言葉に少し苛立ちを感じた。
「協力!?ああ、あれか」
彼はふとこの基地に来る前にギアナ高地に戦力の補充を要請したことを思い出した。
「だかあｒといってお主が来るとは思わなかったがな」

「何を言っておる。ここはわしの本拠地だぞ」
彼はブラジル出身である。そしてネオショッカー中南米支部長を務めていたのである。
「このわしが来ずして一体誰が来るというのだ」
「そうかそうか、では早くここに来るがいい」
ツバサ大僧正はしれっとした態度で彼に対して来るように言った。
そして魔神提督は指令室に入ってきた。まだ憮然としている。
「まあ機嫌をなおしてこれでも飲め」
ツバサ大僧正はそう言うと一杯の赤い飲み物を差し出した。
「ワインか」
「そうじゃ。お主も嫌いではあるまい」
「まあな」
彼はそれを受け取った。そして一口口に含んだ。
「人の血を入れておるな」
「うむ。こうすれば味が良くなるのでな」
「成程な、考えたものだ」
彼は人の血は飲まずとも生きていける。だが嫌いではない。
「美味いな」
「そうじゃろう。おかわりはいるか」
「いや、いい。今は酔いたくはないのでな」
彼はもう一杯勧めようとするのを断った。
「さて、と。では本題に家鴨としよう」
「うむ」
ツバサ大僧正も杯を空けた。そして話をはじめた。
「ここでの作戦だが」
魔神提督の顔は真剣なものになっていた。

失われた地の翼人その二

「ここにＵＦＯを離着陸させる基地を建設すると聞いているが」
「その通りだ」
ツバサ大僧正は答えた。
「ここはＵＦＯの基地を作るには最適だからな」
「確かにな。高地だし人も殆ど来ん、しかしな」
「スカイライダーがやって来ているな」
「そうだ、まずはあの男を始末しなくてはならん」
魔神提督はそう言うとモニターのスイッチを入れた。
「もう知っているとは思うがな」
そこにはスカイライダーの姿が映し出された。
「奴の戦闘だ」
見ればネオショッカーと戦う彼の姿が映されている。
「どうじゃ、かなりのものだろう」
魔神提督はモニターを見ながらツバサ大僧正に声をかけた。
「うむ。この頃からかなりの強さだったのだな」
「今はこれ以上だ。もっともそれは知っているのだろう」
「当然じゃ。ナスカで戦っておるしな」
「そうだな。では策も考えているな」
「当然だ、だからこそこの地に来たのだ」
彼は自信に満ちた声で言った。
「そうか、既に考えてあるか」
「その通り。お主はここで見ているだけでもいいぞ」
「そういうわけにはいかんがな」
魔神提督は苦笑した。
「それではわしはサポートに回ることにしよう、期待しておるぞ」
二人は闇の中での密談を続けていた。
「洋さん元気にしているかしら」

アミーゴのカウンターに座る一人の少女がふと呟いた。
「えっと、君誰だったっけ？」
史郎は彼女の顔を覗きながら尋ねた。
「史郎さん、さっき聞いたじゃない」
隣にいるルミが顔を顰めて彼に言った。
「御免、俺あんまり記憶力なくて」
史郎はそれに対してバツが悪そうな顔をした。
「野崎です。野崎ユミ。洋さんの知り合いなの」
その少女はニコリと笑って答えた。
黒い髪を肩のところで切り揃えている。赤いセーターに黄色いジーンズを身に着けているやや小柄な少女である。
彼女は志度博士のハングライダークラブの一員であった。その関係でネオショッカーと戦うことになった。負傷しながらも復帰して彼等と戦った闘志の持ち主である。
「えっと、洋君だよね。今何処にいるか知ってる？」
史郎はルミに尋ねた。
「今南米だそうですよ。何でもアマゾンからギアナ高地に入ったとか」
「アマゾンからギアナ高地か。また凄いところを回ってるなあ」
史郎はそれを聞いて感慨深そうに言った。
「史郎さん、旅行に行ってるんじゃないでよ」
ルミが再び咎めた。
「そうですよ、洋さんは戦いに行ってるんですから」
ユミもそれに続いた。
「ちょ、ちょっと待ってくれよ二人共、そんなに言わなくてもいいじゃないか」
史郎は女の子二人に責められ狼狽した声をあげた。
「俺だってそれ位わかってるよ。ただえらく凄い場所で戦ってるんだなあ、って」
「そんなに凄い場所なんですか？」

二人はその言葉に表情をあらためて尋ねた。
「ああ。アマゾンは知ってるだろう」
「ええ」
アマゾンは通称『緑の地獄』と呼ばれる。鬱蒼と茂った密林の中には猛獣や毒蛇が身を潜めている。川の中には鰐やピラニアが棲む。中には人の血を吸う魚までいる。
「ギアナ高地も凄いところなんだよな」
「どんなところなんですか！？」
ユミはさらに尋ねた。

失われた地の翼人その三

「あそこは人類最後の秘境とも呼ばれるんだ。何しろ標高二千メートルもあるテーブルマウンテンが無数にあってね。あ、二人共テーブルマウンテンは知ってるよね」

「はい」

二人は答えた。テーブルマウンテンとは頂上が平らになり台地になっている山のことである。

「そしてその間が断崖絶壁になっているんだよ。それも密林の中にね」

「凄いですね」

「それだけじゃないよ。風も空気も複雑に動くし。アマゾンに勝るとも劣らない危険な場所なんだ」

「洋さん大丈夫かしら」

ユミはそれを聞いて表情を暗くさせた。

「大丈夫だと思うよ、根拠はないけれど」

史郎はそんな彼女に対し笑顔で答えた。

「どうしてそう言えるんですか？」

ルミが尋ねた。

「いやね、ライダーって今まで信じられない位の死闘を潜ってきているじゃない。今更その程度の場所で戦ってもね」

彼は微笑を浮かべていた。

「ライダーを信じようよ。彼等は何時だって絶体絶命の状況を乗り越えて勝ってきたじゃないか。だから今回も絶対に勝つよ、心配しなくていい」

「優しいんですね、史郎さんって」

ルミはそんな彼に微笑んだ。

「おいおい、褒めたって何も出ないよ」

史郎はそんな彼女に苦笑しながら言った。

「うふふ」
ルミはそんな彼に再び笑みを返した。ユミも二人の会話に笑顔を取り戻していた。
筑波とがんがんじいはテーブルマウンテンの一つに登っていた。
「ふう、やっと着いたな」
筑波はスカイライダーに変身しがんがんじいを持って上に飛んでいったのである。
「洋さん、すんまへん」
がんがんじいは筑波が変身したスカイライダーに対し礼を述べた。
「いいよ、どうせライダーになったらこんなのどうってことないし」
ライダーに変身すると力が驚異的に上がるのである。普通の時でも彼等は常人とはかけ離れた力を持っている。だがこれは彼等にとっては喜ばしいものではない時もある。
そのあまりにも強過ぎる力は触れたものを壊してしまうのである。意識せずともドアを壊し握り締めた鉄を粉々に砕いてしまう。そして愛する者を抱き締めることができなのである。彼等の力は苦悩と表裏一体でもあるのだ。
「それよりも」
スカイライダーはがんがんじが立ち上がったのを見て言った。
「噂に聞いていたけれど凄い場所だな」
山の上にもジャングルが生い茂っていた。そして滝が数段に渡って流れている。森の緑と滝の青に覆われた世界であった。
「はい、こうして見るとまるで絵みたいなところですなあ」
がんがんじいはその美しく幻想的な景色に見惚れていた。
「確かにな。こんな綺麗な景色は今まで見たことがない」
スカイライダーも彼の言葉に同意した。
「ただこれが戦いに来たんじゃなければもっといいんだがな」
彼は言葉を濁した。丁度その時額のオーシグナルが点滅した。
「そら、早速来たぞ」
「無粋な奴等でんなあ、いつもいつも」

「だから世界を征服しようといつも企んでいるのさ」
二人は構えをとった。やがてすぐに怪人と戦闘員達が出てきた。
「来たな」
怪人は四体いた。デストロンの変身怪人カメラモスキート、ゴッド悪人軍団の一人カブトムシルパン、ネオショッカーの毒ガス怪人コウモリジン、そしてショッカーの電撃怪人エイキングである。
「四体か、また随分多いな」
スカイライダーは迫り来る怪人達を見ながら言った。
「だが負けるわけにはいかない。来い！」
そして前へ突き進んだ。
まずは戦闘員達が来た。ボウガンを放ってくる。
「こんなものっ！」
スカイライダーは手でその弓を叩き落とした。そして戦闘員達の懐に飛び込み当て身を喰らわせる。
「ギィッ！」
戦闘員は叫び声をあげて吹き飛ぶ。ライダーは動きを止めずそのまま前へ出る。
まずはカメラモスキートがやって来た。
「ブルルルルルルルルッ！」
怪人は奇声を発し迫り来る。左眼となっているカメラでスカイライダーを写し取ろうとする。

失われた地の翼人その四

だがスカイライダーの動きはそれよりも速かった。彼は怪人の懐に飛び込んだ。

「スカイパァーーーンチッ！」

そして怪人のカメラを撃った。忽ちカメラが破壊される。

それで決まりであった。怪人は後ろに倒れ爆死した。

「ルパルパルパッ！」

カブトムシルパンが頭のシルクハットを飛ばしてきた。スカイライダーはそれをかがんでかわす。

しかし今度は後ろから飛んできた。怪人はそれに動きを合わせサーベルで突かんとする。

「トォッ！」

スカイライダーはそれに対し跳んだ。そしてサーベルの上に着地した。

シルクハットはサーベルに突き刺さった。ライダーは攻撃を封じられた怪人の脳天にチョップを振り下ろした。

「スカイチョーーーーップ！」

手刀が怪人の脳天を直撃する。急所を撃たれた怪人はそのまま倒れ爆発した。

スカイライダーはそれをさけて上に飛んだ。そこに残る二体の怪人が襲い掛かる。

「キィーーーーッ！」

まずはコウモリジンが来た。怪人は一直線にライダーに向かってくる。

口から緑色の毒液を放ってきた。それはライダーの腰を狙っていた。

「ムッ」

ライダーはそれを横に動きかわした。そして迫り来る怪人と取っ

組み合いを開始した。
怪人は口の牙でライダーの喉笛を裂かんとする。しかしスカイライダーはそれを両手で防いでいた。
「ムムム・・・・・・」
両者は互いに引かない。やがて怪人は埒が明かないと見たか間合いを離そうとした。しかしそれを見逃すライダーではなかった。
「させんっ！」
スカイライダーは飛んだ。そしてまず体当たりを仕掛けた。
「キキィッ！」
怪人は叫び声と共に吹き飛ばされる。ライダーはそこに追い撃ちを仕掛けた。
「スカイドリルッ！」
身体をきりもみ回転させる。そして脚からコウモリジンの腹を撃った。
決まりだった。怪人は爆発の中に消えていった。
「残るは一人か」
爆発から身を離したスカイライダーはエイキングを見た。
「ウハウゥーーーーッ」
怪人は叫び声をあげるとこちらに向けて飛んできた。
左手の鞭を振るう。それはライダーの身体をかすめた。
「おっと」
ライダーはそれをかわした。やはり腰を狙ってきている。
「どういうことだ・・・・・・！？」
先のコウモリジンもそうだった。怪人達は何故かライダーの腰を狙っている。
「だがそんなことはどうでもいい」
ライダーはとりあえず目の前にいる怪人を倒すことを優先させた。
蹴りを鉈の様に振り下ろす。
怪人はそれを横にかわした。そして再びスカイライダーの腰を狙った。

「甘いっ」
だがそれもかわした。そして怪人に拳を加える。怪人は怯んだ。
そこに連続して拳を加えていく。
「スカイ連続パァーーーーンチッ！」
そして怪人の顔を集中的に打った。怪人はこれで倒れた。
だがその前に最後の一撃を放った。何と左手の鞭を引き千切りそれをライダーめがけて投げ付けたのだ。
「何ィッ！」
これのはさしものライダーも思いもしなかった。それでも何とかかわそうとする。だが鞭はライダーの腰をかすめた。
「ウッ」
身体にダメージは受けなかった。だが重力低減装置にダメージを受けた。
「まずいな」
ライダーは止むを得なく下に降りた。そしてがんがんじいのところに戻った。
「やりましたな、スカイライダー」
がんがんじいは戦いを終えた彼をねぎらった。
「ああ」
しかしそれに対するスカイライダーの声は晴れてはいなかった。

失われた地の翼人その五

「どうしましたん！？」
「ちょっとな・・・・・・」
彼は浮かない顔のまま変身を解いた。そして腰の辺りを見た。
スカイライダーの様子を遠くから見る影があった。
「どうだ、これで奴は満足に空を飛べなくなったぞ」
その影の一つツバサ大僧正は消沈した顔をしている筑波を杖で指し示しながら言った。
「ふむ、考えたな」
もう一つの影魔神提督はそれに対して顎に手を当てて頷いた。
「最早奴は文字通り翼をもがれた鳥よ。後はどうとでもなる」
大僧正は勝ち誇った顔で言った。
「確かにな。これで奴は満足に自分では飛べなくなった」
魔神提督は顎から手を離した。
「しかしな」
彼は言葉を続けた。
「まだ爪も牙もあるぞ」
「それがどうした」
ツバサ大僧正はまだ勝ち誇っている。
「爪や牙ならば我等も持っておる」
「ならばよいがな」
彼はまだ何か言いたそうであるがあえて言わなかった。
「ではここはお主に任せてよいかな。実は首領より新たな任務を授けられたのだ」
「ほう、そうなのか」
「うむ、奴との決着を着けられぬのは残念だがそれはまたの機会にさせてもらおう」
「残念だな、あの男はわしが倒す」

「おっと、そうだったな」
魔神提督はその言葉を聞き顔を崩した。だが腹の中では別のことを考えていた。
（さしものツバサ一族でもそうそう上手くいくかな。あ奴とてライダーなのじゃぞ）
そして顔を元に戻すと踵を返した。
「それではな」
「うむ、また飲もうぞ」
こうして二人は別れた。
「スカイライダー、このギアナが貴様の死に場所となるのだ。このツバサ大僧正によってな」
ツバサ大僧正はそう言うと無気味に笑った。そこに映る影は人のものではなく蝙蝠に近いものであった。
筑波とがんがんじいはギアナ高地を探し回った。筑波はスカイライダーに変身してもあまり空を飛ぼうとはしなかった。
「スカイライダー、どうしたんでっか!?」
がんがんじいは不思議に思い彼に声をかける。
「あ、いやちょっとな」
スカイライダーはそれに対して言葉を濁して誤魔化した。誰にも気付かれるわけにはいかなかったからだ。
（もしこれがバダンに知られれば・・・・・）
その時は彼に危機が迫るからだ。
一週間後二人はとある山の上に舞う一つの影を見つけた。
「洋さん、あれ」
がんがんじいはその影を下から指差した。
「ああ」
筑波もそれを見て頷いた。間違いなく怪人のものであった。
二人はその山の上に登った。そして辺りを探った。
「ここだな」
やがて一つの怪しげな穴を見つけ出した。二人はその中に入ろう

とする。
「待て、筑波洋よ」
その時後ろから呼び止める声がした。
「その声はっ！」
筑波とがんがんじいは後ろを振り向いた。予想通り彼等がいた。
「やはり貴様か、ツバサ大僧正」
筑波はツバサ大僧正を指差した。
「そうだ、貴様に引導を渡しに来てやったぞ」
ツバサ大僧正はカラカラと笑いながら筑波に対して言った。
「フン、戯れ言を」
筑波とがんがんじいはそう言うと間合いを取った。
「ナスカでの決着、今ここで着けてやる」
「望むところだ」
ツバサ大僧正も言い返した。それを合図に筑波は変身を開始した。

失われた地の翼人その六

スカイ・・・・・・

両腕を脇の下に入れた。そしてまずは右の拳を突き出した。

そしてすぐに引っ込める。左手を突き出す。それは広げている。

その左手を手刀にした後右に持っていく。

身体は黄緑のバトルボディに覆われる。胸は赤くなり手袋とブーツは黒である。

変身！

左手を右から左にゆっくりと旋回させる。左手を脇に入れた後右手を左斜め上に突き出した。

顔の右半分が真紅の眼の黄緑の仮面に覆われる。そして左半分も。

全身が光に覆われる。そして黄緑の身体のライダーが姿を現わした。

「ツバサ大僧正、勝負だっ！」

スカイライダーは叫ぶ。それと共に二体の怪人が姿を現わした。

デストロンツバサ一族の怪人木霊ムササビとガランダーの黒羽怪人フクロウ獣人である。二体の怪人は空からスカイライダーに向けて襲い掛かってきた。

「・・・・・・・・・」

それに対しスカイライダーは飛ぼうとしない。下から怪人の動きを見ている。

「ライダー、どないしたんや！？」

がんがんじいはそんなライダーに対し言葉を浴びせる。

「飛ばな勝負になりませんで！」

「無駄だ、そこの大きいの」

ツバサ大僧正はカラカラと笑いながらがんがんじいに対して言った。

「今スカイライダーは空を上手く飛ぶことは出来ぬ」
「何やて！」
がんがんじいは思わず叫んだ。
「前の攻撃の時に腰の重力低減装置を叩いておいた。これにより上手く空を飛ぶことは出来ないのだ」
「そんなアホなことあるかい！」
がんがんじいはそう言ってスカイライダーに目をやった。
「ライダー、飛べますやろ！」
「・・・・・・・・・」
ライダーは答えない。がんがんじいは蒼くなった。
「そんな・・・・・・」
だがその時であった。
「トォッ！」
スカイライダーは怪人に向けて地を蹴った。
飛んだ。不安定であるが彼は空に舞った。
「ライダー！」
がんがんじいは喜びの声をあげた。スカイライダーはそれに応えるように上空を旋回した。
「フフフフ、無駄なことを」
ツバサ大僧正はそれを見てほくそ笑んだ。
「動きがぎこちないではないか。それで我々に勝てると思ったか」
彼はそう言うと杖を振るった。怪人達がそれに合わせ空に上がった。
「来たな」
スカイライダーはそれを見ていた。そして空中で身構えた。
「来いっ！」
そして戦いが開始される。二体の怪人は左右からライダーを包囲した。
「ホッホーーーーャ！」
フクロウ獣人が叫び声をあげライダーに襲い掛かる。まずは黒い

羽根を投げてきた。
「ムッ」
スカイライダーはそれをかわした。そして迫り来る怪人の爪をかわした。
怪人は今度は腕を飛ばしてきた。だがスカイライダーはそれもかわした。
爪が迫る。ライダーは上に飛び怪人の後ろに回り込んだ。
「スカイハンドドリルッ！」
そして腕を激しく回転させる。それで怪人の背を貫いた。
「ホホーーーーーッ！」
それは怪人の心臓を撃ち抜いた。怪人は断末魔の叫びと共に地に落ちていった。
次には木霊ムササビが来た。手首からミサイルを放つ。
ライダーはそれをかわそうとする。だが重力低減装置の調子が悪くなった。
「ウワッ！」
ミサイルは何とかかわした。だがこれ以上の飛行は満足に出来そうにない。
それを見逃す木霊ムササビではなかった。勝負を着けんと迫り来る。
「こうなったら・・・・・」
スカイライダーは意を決した。そして何かを呼んだ。
「スカイターボッ！」
彼はマシンの名を叫んだ。すると白いマシンが姿を現わした。
スカイターボはそのまま天に飛んでくる。ライダーはそれに飛び乗った。
「喰らえっ！」
マシンに乗ると一直線に飛ぶ。そして怪人に体当たりを敢行した。
「ライダァーーーーブレイクッ！」
マシンの直撃を受けた怪人は大きく噴き飛んだ。そして空中で爆

死した。
ライダーはマシンに乗ったまま着地した。ツバサ大僧正はそれを黙って見ていた。
「ふむ、最早満足に飛べなくなったようだな」
スカイライダーは答えない。敵に弱味を見せるわけにはいかないからだ。
「それではわしが相手になろう。今の貴様を倒すことなど造作もないこと」
彼はそう言うと両手で顔の前を覆った。服の袖が翼に変化し色も黒から赤褐色になる。

失われた地の翼人その七

顔が人のものから蝙蝠のものに変化する。耳は異様に大きく口には牙が生え揃っている。

「これがわしの正体だ」

「デストロンツバサ一族の長死人コウモリか」

スカイライダーはその怪人の姿を見て言った。

「そうだ、我が力今こそ見せてやろう！」

ツバサ大僧正の正体である死人コウモリはそう言うと天高く舞い上がった。

「スカイライダー死ぬがいい！」

死人コウモリは空中から高速回転しつつスカイライダーに襲い掛かる。ライダーはそれを何とかかわした。

しかし怪人の攻撃は執拗である。一度かわしてもすぐに上に上がりまた攻撃を仕掛けてくる。一撃離脱で急降下を仕掛けてくるのだ。その威力は凄まじかった。さしものスカイライダーも上からの攻撃である防戦一方であった。

「ライダーーーッ！」

がんがんじいが助けに来ようとする。だがスカイライダーはそれを手で制止した。

「大丈夫だ」

彼はあえて強い声で言った。

「俺は絶対に勝つ」

「そやけど・・・・・・」

がんがんじいはそれでも心配そうである。だがスカイライダーはそんな彼の心配を打ち消すように言った。

「ライダーは何時如何なる時でも絶対に負けない。それは知っているだろう」

「・・・・・・・・・」

がんがんじいはその言葉に沈黙した。
「今それを見せる。よく見てくれ」
そう言うとスカイターボを呼んだ。
「これがライダーの戦いだっ！」
彼はスカイターボを踏み台に空を飛んだ。そして死人コウモリに向かう。
「ほう、考えたな」
怪人はそれを見て言った。
「だがそれでこのわしを倒せるかな」
怪人は翼を大きく広げた。そしてライダーの突進をかわした。
「さあ、あとは地に落ちるだけじゃな」
怪人はライダーを見送ってほくそ笑んだ。だがライダーは地に落ちなかった。
そこにはスカイターボがあった。ライダーはそこに足をつけた。
ガッ
マシンの前輪を踏んで再び飛ぶ。今度は高速回転をしている。
「フフフフ、駒の様じゃのう」
怪人はそれを余裕の笑みで見ていた。
「じゃがそれも通用せん！」
そして彼も高速回転する。スカイライダーの高速回転に対抗する為だ。
二つの駒が撃ち合った。空中に鋭い音が木霊する。
「ライダーーーーッ！」
下からその闘いを見守るがんがんじいはそれを見て思わず叫んだ。
死人コウモリは退いた。その回転は止まっていた。
「ヌウウ・・・・・」
怯んだが体勢を立て直す。そしてライダーに目をやる。
ライダーの動きは止まってはいなかった。そのまま回転し空中を飛んでいた。
弧を描きこちらにやって来る。その速さは今までよりもずっと速

かった。
「ムウウッ！」
死人コウモリはそれを見て思わず唸った。見事な動きであった。
「スカイ・・・・・・」
スカイライダーは回転しながら技を繰り出そうとする。
「フライングソーーーサァーーーーッ！」
そして蹴りを放つ。それは怪人の胸に襲い掛かった。
蹴りが怪人の胸を直撃した。そして大きく吹き飛ばした。
「ガハアッ！」
怪人は地に叩き付けられた。そしてツバサ大僧正の姿に戻っていく。

失われた地の翼人その八

「見事だスカイライダーよ、わしの技を破るとは」
彼は立ち上がりながら言った。
「そちらこそな。こっちもスカイターボがなければどうなっていたかわからん」
スカイライダーは怪人を見据えて言った。
「それにあの高速回転には悩まされた。やはりツバサ一族の長だけはある」
「フフフフ、褒め言葉か」
彼はそれを聞いて笑った。
「敵に賛辞を受けるのがこれ程嬉しいとはな」
「賛辞ではない。本当のことだ」
「そうか、どうやらわしの長い戦いもこれで終わりだな」
彼はガクリ、と片膝をついた。
「ツバサ一族はわしの死によって幕を降ろす。その幕引きに一人の素晴らしい敵と出会えたことは誇りに思おう」
「ツバサ大僧正・・・・・・」
「ツバサ一族の火よ消えよ。バダンバンザァーーーーイッ！」
彼はそう言うと前に倒れた。そして爆発の中に消えていった。
「これでまた一人バダンの大幹部が倒れたな」
「ええ。せやけど敵ながら天晴れな奴でしたわ」
スカイライダーとがんがんじいはそれを見守りながら言った。
こうしてギアナ高地での戦いは終わった。二人は誰もいなくなった基地を破壊しその場を後にした。
「ここを降りるのは怖いでんなあ」
がんがんじいはロープを伝いながら震える声で言った。
「仕方ないな、重力低減装置が壊れてしまったんだし」
筑波はそんな彼に対し苦笑して言った。

「そやけどこんな高い場所をロープ一本で降りるっちゅうんは」
「まあそう言わないでくれよ。ほら、神様は勝利のご褒美に凄いものを見せてくれてるし」
「ご褒美!?」
「見ろよ」
筑波が指差した方に一つの巨大な滝があった。エンジェル滝である。
この滝は一千メートル近い場所を直角に落ちる滝である。その景色はこの秘境においてもとりわけ不思議なものである。
「・・・・・凄いでんなあ」
がんがんじいはそれを見て思わず感嘆の言葉を漏らした。
「だろう、これも勝ったから見れるものだ」
筑波はがんがんじいの方を見下ろして言った。
「こんな素晴らしい場所がこの世界にはまだまだ沢山あるんだ。それを守らないとな」
「そうでんな」
彼は声の震えを収めた。そして二人は降り終えギアナを後にした。
「これでツバサ大僧正も死んだ」
死神博士は暗闇の中で水晶玉を覗き込んで言った。
「ライダー達め、やはり腕を上げているな」
彼はその沈んだ声で呟く様に言葉を発する。
「我々も油断するわけにはいかない。これ以上の敗北は許されないだろう」
彼はそう言うと左に顔を向けた。
「こちらもより強力な戦力を用意しておかねばなるまい」
そこには無数の巨大なカプセルがあった。そこにはそれぞれ怪人達が眠っている。
「ではその連中を解き放つ時が来たのだな」
そこで一人の男が入って来た。
「貴様か」

それはゼネラルモンスターであった。
「うむ。少し貴様と話がしたくてな」
彼はその冷たい目を光らせながら言った。
「話、か」
「そうだ。私の身体のことだが」
「そのことか」
博士はそれを聞くと無気味に笑った。
「任せておけ。貴様もあの男に勝る力を手に入れることだろう」
「そうか。ならば早速頼もう」
二人は扉の向こうに消えていった。そして後には沈黙だけが残った。
闇は何も語らない。だが無気味に笑うだけであった。

失われた地の翼人　　完

２００４・４・１８

樹林の獣人その一

樹林の獣人

「こうして我等四人が揃うのも久し振りだのう」
鬼火司令は他の三人を見回しながら言った。
「そうね。今まで何かと飛び回ってばかりだったし」
妖怪王女が悪戯っぽく笑って言った。
「全くじゃ。この老骨には少し堪えるわい」
幽霊博士はその髭に手を入れながら可笑しそうに笑う。
「それはそれだけ私達が首領に信頼されてることだからいいのだけれど」
魔女参謀は妖怪王女と幽霊博士の言葉に突っ込みを入れるように言った。
「やっぱりメガール将軍は来ていないのね」
「奴は今北欧で二号ライダー達の攻勢に備えておるらしいぞ」
「まあそうでなくても来るとは思えないけれど」
鬼火司令と妖怪王女が言った。王女は相変わらず悪戯っぽく笑っている。
「全くあいつは変わらんのお。ああやっていつも堅苦しいことばかり好みよる」
「本当だな。少しはハメを外さねば息が続かんぞ」
「そういう鬼火司令は外し過ぎだけれどね」
「おい、お主には言われたくはないな」
二人は口論を始めた。
「まあそれはいいわ。将軍がいないのは少し残念だけれど」
魔女参謀はそんな二人を制しながら言った。
「アマゾンの方はどうなっているの？」
「アマゾンか」
幽霊博士が彼女の言葉に対し反応した。

「アマゾンとスカイライダーは別行動をとっておるようだの」
「幽霊博士、それは本当!?」
妖怪王女が問うた。
「本当じゃ。嘘を言って何になるというのじゃ」
「博士ってよくぼけるから」
「そうそう、歳だからのう」
「鬼火司令、お主までそんなことを言うか。わしはまだぼけてはおらんぞ」
幽霊博士は彼等の言葉に対し顔をむくれさせた。
「博士、それはいいから」
魔女参謀はそんな彼を嗜めた。
「おお、済まん済まん。つい熱くなってしまったわ」
幽霊博士は頭を掻きながら彼女に対し謝罪した。
「それは本当じゃ。スカイライダーはギアナ高地に向かったようじゃがな」
「そしてアマゾンは!?」
「そのままアマゾンに残っておるぞ」
彼は魔女参謀の問いに対して答えた。
「どうやらアマゾンに新たな改造魔人が送り込まれたらしい」
「誰だ、それは」
鬼火司令が問うた。
「隊長ブランクじゃ」
「へえ、あの男が」
妖怪王女はそれを聞いて以外そうに声をあげた。
「妖怪王女、意外というわけでもないぞ。何しろ一度あ奴はアマゾンライダーに敗れておるからのう」
「あっ、そうだったわね」
「どちらにろ面白くなりそうね。一体どうなることか」
魔女参謀はそれを聞いてほくそ笑んだ。
「そうだな。楽しませてもらうか」

鬼火司令が大きな口を開けて笑った。そして他の二人も笑った。
筑波洋と別れたアマゾンは相変わらずアマゾン川流域を船で移動していた。
「アマゾン、やっぱりここが一番いいよなあ」
その隣には人間態のモグラ獣人がいる。ここで合流したのだ。
「うん、ここアマゾンとモグラの故郷。やっぱりアマゾンもここが一番好き」
アマゾンは笑顔で答えた。彼は本来日本生まれだがここで育ったので故郷と考えているのだ。
「ところで何でここに残ったんだい!?俺らまで呼んで」
「それはすぐにわかる」
アマゾンは顔を引き締めて言った。
「ここに新しい悪い奴が来ているから」
その頃隊長ブランクは自身の基地の中にいた。
「今度こそ仕留める」
彼は自分のライフルを手入れしながら言った。
「気合がはは入っているようだな」
そこに百目タイタンがやって来た。
「貴様か」
彼はタイタンの姿を認めて言った。
「うむ。作戦の進行状況はどうかと思ってな。このアマゾン川流域制圧作戦だが」
「順調にはかどっている」
隊長は答えた。
「それならばいいがな」
タイタンはそれを聞いて満足したように言った。
「だが一つ障害がある」
「アマゾンライダーだな」
タイタンはそれを聞いて言った。
「そうだ。どうやら俺がここに来たのも知っている」

「だろうな。奴の勘はずば抜けている」
タイタンは顎に手を当てて言った。
「しかし攻めるのは俺だ。この密林を使ってな」
「そうだな」
だがこのアマゾンは彼にとっては遊び場である。タイタンはそれを隊長に言おうとしがた止めた。
「では健闘を期待する」
「うむ、今度こそあの男を倒す」
タイタンはそれを聞くとその場を後にした。
隊長ブランクは指令室に行きモニターを見上げた。
「アマゾンライダーを映せ」
「ハッ」
戦闘員は彼の命令に対し敬礼してモニターのスイッチを入れた。
そこには川を船で進むアマゾンとモグラ獣人が映し出されていた。
「行くぞ」
彼はその姿を見ると部下達に対して言った。そして指令室を出て行った。
「イィッ」
戦闘員達もそれに従った。そして彼等は密林に出た。

樹林の獣人その二

アマゾンはモグラ獣人と共にアマゾン川を進んでいた。
「なあアマゾン」
モグラはアマゾンに対して話しかけた。
「どうした、モグラ」
「アマゾンは巨大なアナコンダに会ったことはあるかい？」
アマゾンにはアナコンダという大蛇がいる。半水棲の巨大なボア科の蛇であり性質は比較的大人しい。しかし問題はその巨大さであり大きいものでは十メートルを越えるものまでいるという。中には二十メートルを越えるものまでいるという。アマゾンを象徴する生物の一つであり巨大なアナコンダの存在はよく話題になる。
「アナコンダ？」
アマゾンはその言葉に対し顔を上げた。
「ああ。俺らは土の中いいることが多いからよくは知らないんだけれど本当にいるのかなあ」
「いるぞ」
アマゾンは微笑みながら頷いて答えた。
「何度か会ったことがある。確かに物凄く大きかった」
「本当にいるのかよ」
モグラ獣人はそれを聞いて思わず身震いした。
「だが安心していい。アナコンダは大人しい。少なくともこの川にいるのは餌もたっぷりあるから飢えていない」
「そうなんだ。俺らはてっきり貪欲に何でも貪るのかと思ってたよ」
「それはモグラが考え過ぎ。アナコンダはアマゾンの友達。だからアマゾンアナコンダ怖くない」
「アナコンダとも友達なのかよ」
モグラ獣人はそれを聞いて思わず呟いた。
「アマゾンの生き物は皆アマゾンの友達。アマゾン友達は大事にす

る」
彼はこの密林に育てられた。だから彼はここに住む全てのものを深く愛しているのだ。
「けれどあいつ等は別」
アマゾンはそこで険しい顔をして言った。
「バダンは何でも貪り食う。そして罪の無い人まで殺す。そんな奴等は絶対に許さない」
彼はゲドンに師であり親代わりであったバゴーを殺されたことをまだ覚えていた。
「アマゾンバダンの奴等倒す。この川を絶対に奴等には渡さない」
彼は強い表情でそう言った。そして川を進んでいった。
夕方になった。二人は川辺にある小さな村に入った。そしてそこの近くで野宿した。
「ここにいたか」
アマゾンはモグラ獣人の掘った穴の中に入っていた。雨露を凌ぐ為だ。そしてその入口に何者かがやって来た。
「どうやら完全に眠っているようだな」
ゴッド悪人軍団の一人カメレオンファントマである。怪人は穴の中を慎重に窺いながら言った。
「これは好都合だ。早速中に入り始末するぞ」
そして引き連れている戦闘員達と共に中に入って行く。
中は真っ暗闇であった。だが彼等はそれに構わず進んで行く。
「広いな」
中は思ったより広い空間であった。人が立って歩ける程である。
「流石はモグラ獣人か。こうした穴を掘ることにかけては他の者の追随を許さないな」
「穴を掘るのだけが俺らの特技じゃないぞ」
不意に下から声がした。
「何っ!?」
土の下から何者かが襲い掛かって来た。

「ケケーーーーーッ！」
それはアマゾンとモグラ獣人であった。彼等は土の中に潜み彼等が来るのを待っていたのだ。
戦闘員達はアマゾンとモグラ獣人により瞬く間に倒されていく。残るはカメレオンファントマ一人となった。
「おのれっ！」
怪人は舌を伸ばしてきた。だがそれはアマゾンの鰭により断ち切られてしまった。
「くっ！」
怪人は今度は姿を消した。アマゾンは闇の中で怪人を探した。
「どこだっ！？」
闇の中に紅い両眼が輝く。彼はその後ろに何かを察した。
「そこだっ！」
アマゾンは後ろに向けて蹴りを放った。

樹林の獣人その三

それは姿を消していた怪人の身体をかすった。だがそれだけで怪人の右脇から血が噴き出た。彼は脚にも鰭があるのだ。

「グォッ！」

カメレオンファントマは思わず叫び声をあげた。そしてたまらず姿を現わした。

「もう一撃っ！」

アマゾンは回し蹴りを浴びせた。鰭を怪人に向けている。

蹴りが怪人を一閃した。そしてカメレオンファントマは横に両断された。

二人は穴を出た。その瞬間入口が爆発した。

そこにナイフが飛んで来た。二人はそれを咄嗟にかわした。

「ギリギリギリギリ！」

ナイフの主は怪人であった。デストロンの硬質怪人ナイフファルマジロである。

怪人は右腕の巨大なナイフを振るって来た。アマゾンはそれを身を屈めてかわす。

そして脚を払った。鰭により怪人の両脚を断ち切った。

そして倒れた怪人に覆い被さる。そしてその喉笛を喰い千切った。

「ギャオオオーーーッ！」

怪人は断末魔の叫びと共に爆発した。アマゾンはそれを避け上に飛び上がる。

そして木の枝に着地した。その後ろにも敵がいた。

ネオショッカーの俊足怪人ジャガーバンであった。怪人はその刀でアマゾンの首を断ち切らんとした。

アマゾンはそれより速く怪人の腕を掴んだ。そして怪人と力比べを開始する。

「ヒャオーーーーゥ」

怪人は唸り声をあげた。そしてアマゾンを捻じ伏せんとする。
しかし二つの腕輪の力を身に着けているアマゾンの敵ではなかった。彼は力負けし木の下に投げ飛ばされた。
アマゾンはそこに急降下した。そして左手の鰭を一閃させた。
怪人の首と胴が分かれた。そして別々に爆発した。
「瞬く間に三体の怪人が倒されたか」
それを遠くから見る影があった。
「心配になり戻ってみればやはりな。アマゾンライダーとジャングルで戦うのは止めた方がよい」
それは百目タイタンであった。
「しかしそれならば何処で戦えばよいのだ」
傍らにいる隊長ブランクは彼に対し問うた。
「貴様はこの密林が何により支えられているかわかっておらんのか」
タイタンは彼に顔を向けその無数の眼で見た。
「この密林を支えているのは川だ。川の中ならば奴もあれ程は動けまい」
「そうか、そうだったな」
隊長はそれを聞いて思わず大きな声を漏らした。
「声が大きいぞ。アマゾンに知られる」
タイタンはそんな彼を嗜めた。
「済まぬ」
「わかればいい。それでは水の中で戦える怪人も必要だな」
「それなら問題ない。丁度おあつらえ向きのを用意してある」
「そうだったのか。ではそれを見せてもらおうか」
「うむ」
二人はその場から消えた。アマゾンも人の姿に戻りモグラ獣人と合流していた。
「そうか、タイタンはアマゾンで隊長ブランクと共にいるのか」
マシーン大元帥は自分の基地の会議室で席に座りそれを聞いていた。

「そうだ。そしてあの男に何かと策を授けているらしい」
同席しているヨロイ騎士が言った。
「この前には死神博士と会っていたな」
磁石団長もいた。この二人はマシーン大元帥の同士達である。
「どうやらまた色々とコソコソ動き回っているようだな」
大元帥はそれを聞いて呟いた。
「あの男は汚い策を好むからな。またライダーを陥れようとしているのだろう」
ヨロイ騎士は正攻法を好む。従ってタイタンのやり方は好きではない。
「だが有効ではあるな。あの男は実際にそれまでそのやり方でかなりの戦果を挙げている」
マシーン大元帥はタイタンのやり方を批判したヨロイ騎士に対して言った。彼もまたどちらかというと正攻法を好むがタイタンのやり方を否定するつもりはなかった。
「マシーン大元帥の言う通りだな。タイタンはあのシャドウですら認めているからな」
磁石団長が言った。その通りであった。ゼネラルシャドウと百目タイタンはブラックサタンにおいてその勢力を二分しながらも互いの力は知っていたのである。
「どのみち今は我等には関係はないがな。奴が隊長ブランクと共に何をしようが我々に対して向けられるものではないのだしな」
マシーン大元帥は考える目をしている。
「しかしタイタンと組む者の中には危険な男もいる」
「・・・・・あの男か」
ヨロイ騎士と磁石団長はそれを聞いて同時に言った。
「そうだ。あの男の動きには注意しろ。奴はタイタンに勝るとも劣らぬ策謀家だ。我々の隙も狙っているぞ」
「そうだな。あの男は危険だ」
磁石団長はそれを聞いて言った。

「タイタンやシャドウも危険だがあの男からも目を離してはなるまい」

ヨロイ騎士も考える目をしていた。

「我等の敵はライダー達だけではない。それだけはよく知っておかねばな」

マシーン大元帥の言葉が響いた。それは三人の心に深く刻み込まれた。

樹林の獣人その四

アマゾンは再び川の中に入った。見れば漁師達が何かを釣ろうとしている。

「電気ウナギをとろうとしているな」

アマゾンはそれを見て言った。見れば皆その手にゴム手袋をしている。

「電気ウナギって食えるのか！？」

モグラ獣人は彼に対して問うた。

「食べたことはある。けれどアマゾンは美味しいとは思わない」

アマゾンは苦笑して答えた。デンキウナギはよく知られているとおり身体の中に発電装置を持っている。これで周囲の小魚や蛙等を感電させてショック死させて食べるのである。尚デンキウナギはウナギの仲間ではなく独自の科である。

「そうなんだ。けれどそんな危なっかしい魚をよく捕る気になれるなあ」

モグラ獣人は漁師達の横を通り過ぎながら言った。

「ここには学者さんが来ることも多い。だから捕まえるのを頼まれること多い」

アマゾンには多くの生物が生息している。その生態は実に多様でしかも複雑である。その為興味を持つ学者も実に多いのである。

「そうなんだ。俺らはあんなおっかない魚捕まえるなんてまっぴら御免だな」

もう漁師達の姿は見えなくなっている。彼はその後ろを見ながら言った。

「まあモグラはそう言うと思った。けれどデンキウナギは見ていて面白い」

アマゾンはモグラに対し微笑んでそう言った。

「電気出す魚なんてあまりいない。アマゾンあの魚の味は好きじゃ

ないけどあの魚は好き」
「そんなもんかね」
「そうだ、電気を出す魚というのは素晴らしいものだ」
その時不意に何処からか声がした。
「ムッ！？」
アマゾンとモグラ獣人はその声を聞き不意に身構えた。
「死ね、アマゾンライダー！」
川の中から鞭のようなものが飛び出してきた。そしてアマゾンの足を掴んだ。
「ガッ！」
アマゾンは川の中に引き摺り込まれていった。
「アマゾン！」
モグラ獣人は怪人態に変身し川の中に飛び込もうとする。だが船の上に無数の影が現われた。
「貴様の相手は俺達だ！」
見ればバダンの戦闘員達である。彼等は銛を手にモグラ獣人に襲い掛かった
アマゾンは川の中に引き摺り込まれながらも変身していた。そして襲撃に備えていたのだ。
「喰らえっ！」
アマゾンの足に絡み付いていたその鞭のようなものに緑の光が宿った。
「ウワッ！」
その辺りを凄まじい電圧が襲った。アマゾンはそれを受け思わずのけぞった。
「アレアレアレアレアレアレアレッ！」
怪人の叫び声が聞こえてくる。ショッカーの放電怪人ナマズギラーであった。
「どうだ俺の電撃は、かなり効いただろう」
怪人はアマゾンに対して言った。

「この電流を受けてまともにいられる奴は存在しない。さあ死ぬがいい！」

そして再び電撃を放とうとする。だがアマゾンはそれより前に動いた。

「そうはさせないっ！」

アマゾンは動いた。水中とは思えない程の速さである。

そしてその右腕を振り下ろした。ナマズギラーは一撃で両断されてしまった。

真っ二つになった怪人はそのまま下に落ちていく。そして川の底で爆発した。

怪人はまだいた。今度はゲドンの洗脳怪人ヘビ獣人である。

「ヒュルルルルルーーーーーッ！」

ヘビ獣人は奇声を発し襲い掛かって来る。そしてその長い尻尾をアマゾンに振るってきた。

「ムッ！」

アマゾンは上にそれをかわした。そして前へ向けて泳ぐ。

そこに獣人の牙が来た。アマゾンを一飲みにせんとする。

「クッ！」

アマゾンは怪人の顎を両手で掴んだ。そしてその動きを止めた。

怪人はそれでも顎を下ろさんとする。そしてアマゾンを飲み込まんとする。

しかしアマゾンの力が勝った。怪人の顎は次第に広げられていく。

そのまま顎を引き裂かんとする。だが怪人はそれを顎を外してかわした。

今度は頭から体当たりを仕掛ける。アマゾンはそこで身体を右に思いきり捻り蹴りを怪人の顔に浴びせた。

その蹴りは怪人の右目を直撃した。目を潰された怪人は怯んだ。

それを見逃すアマゾンではなかった。即座に身体を今度は左に捻り右腕から大切断を放った。

鰭が怪人の額を断ち切った。怪人は眉間から鮮血をほとばしらせ

ながら川の底に沈み爆発した。
次に来たのはドグマの食人怪人ジョーズワニであった。怪人はアマゾンの首に食い付かんと牙を向けてきた。
アマゾンはその顔を蹴り飛ばした。だが怪人は一向に怯まない。
「キシャシャシャシャーーーーーッ！」
アマゾンはなおも拳と蹴りを浴びせる。しかしそれは一向に効果が見られない。

樹林の獣人その五

むしろ逆であった。怪人の動きは攻撃を受ければ受ける程速くなっているのであった。

「これはどういうことだ・・・・・・！？」

アマゾンはそれを見て不思議に思った。そして攻撃を一旦止めた。

「まさかアマゾンの攻撃を吸収するのか！？」

かってそういう怪人がいたということも聞いている。ならばこちらにも考えがあった。

「ケケーーーーッ！」

アマゾンは奇声を発し怪人に襲い掛かった。そして左腕を大きく振り被った。

「これならどうだっ！」

そしてその腕を一閃させた。大切断であった。

怪人は唐竹割りにされた。これは吸収できるものではなかった。ジョーズワニも底に沈み爆発した。

「他にはいないな」

最早川の中には何者の気配もしなくなっていた。アマゾンはそれを確かめると水の上へ上がった。

「よおアマゾン、心配したぜ」

船の上にはモグラ獣人がいた。彼は既に戦いを終えていた。

「モグラの方も終わったみたいだな」

アマゾンは船の上に上がると彼の他に誰もいないのを確かめて言った。

「ああ。やっつけた奴等を川に捨てるのがえらく疲れたけれどな」

モグラは首を捻って笑いながら言った。

「多分また来る。けれど今度はアマゾンにも考えがある」

「考えって！？」

モグラ獣人はそれに対して問うた。

「すぐにわかる」
アマゾンは微笑んだ。そして夕暮れとなり夜となった。
三日後アマゾンはある街に入った。今までの小さな村ではなく少し大きめの都市であった。アマゾンの中にも都市はあるのだ。もっとも川沿いだけであるが。
二人は船を港に泊め街の中に入った。そしてホテルに泊まった。
「アマゾンが街に泊まるなんて珍しいな」
モグラ獣人は部屋に入って言った。
「うん。アマゾンこうした部屋はあまり好きじゃない」
アマゾンは答えた。
「じゃあどうして泊まることにしたんだい！？」
彼は不思議そうな顔をして問うた。
「すぐにわかる。夜になったら外に出よう」
「ああ」
こうして二人は暫し休養をとった。そして夜になるとアマゾンの言葉に従い街に出た。
夜の街には誰もいなかった。深夜であり吸血蝙蝠等物騒な生き物が出て来る為である。
「誰もいないな」
二人はその静かな夜の街を進んでいた。モグラ獣人がふと言った。
「すぐ来る。心配いらない」
アマゾンは彼に言った。そして夜の街を慎重に進んでいった。
この時百目タイタンは自分の基地に戻っていた。
「さて、あの男がアマゾンライダーを上手くやればいいが」
彼は洞窟をくりぬいて作った地下の基地にいた。壁は硬い岩石である。そしてそこにある自室で彼は席に座し葉巻を口にしながら言った。
「あとはあいつ次第だな。ここは任せておくか」
そこに戦闘員が一人入って来た。
「どうした」

タイタンはその戦闘員に対し問うた。
「お客人です」
その戦闘員は答えた。
「客！？一体誰だ」
「ゾル大佐です」
「何っ、ゾル大佐がか！？」
彼はそれを聞き思わず声をあげた。彼はゾル大佐とは特に何の関係もないからだ。
「如何されますか。今すぐお会いしたいと申し出ておられますが」
「わかった、すぐ行く」
彼はそう言うとすぐに席を立った。そしてゾル大佐がいる場所に向かった。
「久し振りだな、百目タイタンよ」
ゾル大佐は彼の姿を認めると声を掛けてきた。その声も顔も普段と何ら変わらない。
だが何処か違う。何かを探っているようだ。
「一体どうしたのだ、こんなところにわざわざ来るとは」
彼は今中近東にいる筈である。それなのに自分の基地に来るとは思いもよらぬことであった。
「うむ、実は貴様に聞きたいことがあってな」
「聞きたいこと！？」
タイタンはそれを聞いて思わず声をあげた。
「そうだ。岩石男爵のことだが」
彼が岩石男爵と結託していることはバダンにいる者なら誰でも知っていることであった。
「あの男がどうかしたか」
彼は今中近東にいる。ゾル大佐と共に中近東での作戦行動にあたっている。
（また何かやらかしたのか）
彼は心の中でそう思った。だがそれは仮面の下に隠しゾル大佐に

顔を向けた。

樹林の獣人その六

「ここにはいないようだな」
大佐は周囲の気配を探りながら言った。
「当然だ、あの男は今中近東にいるではないか。貴公と共にな」
「・・・・・どうやらお主は何も知らぬようだな」
大佐はその左眼で彼を見据えて言った。まるで鉄を射抜くような目である。
「知らぬ!?俺がか!?」
「そうだ。実はあの男の姿が見えないのだ」
「潜伏しているのではないか?作戦に備えて」
だがタイタンはそう言いながらそんな筈はない、と考えていた。そんな器用なことが出来る男ではない。
「違う。中近東から姿を消したのだ。忽然とな」
「何っ!?」
タイタンはそれを聞いて思わず声をあげた。
「作戦を放り出してか!?そんな筈なかろう」
そう言いながらも奴なら有り得る、と思った。
「本当だ。俺も手を尽くして探したが一向に見つからんのだ。ここにいるのではないかと思い来てみたのだが」
彼は口元を顰めてバツが悪そうに言った。
「生憎だがこの地には俺しかおらん。そして他の者が来たならばすぐにわかる」
タイタンはそんなゾル大佐に対して言った。
(しかしあの男、何処へ行ったのだ)
タイタンはゾル大佐と話をしながら考えはじめた。
(また何か愚かなことをしていなければよいのだが)
その時だった。戦闘員が一人やって来た。
「百目タイタン、我等が同志がアマゾンライダーと遭遇しました」

「おお、隊長ブランクめ、思ったより早いな」
タイタンはそれを聞いて顔をそちらに向けて言った。
「いえ、それが・・・・・・」
戦闘員は隊長ブランクの名を聞いて顔を俯けた。
「どうしたのだ!?」
タイタンはそれを見て妙だと思った。そして問うた。
「遭遇したのは岩石男爵です」
「何っ、それは本当か!」
普段は冷徹で知られる彼が思わず声をあげた。
「はい、本当です。指令室にいらして下さい」
タイタンに肩を掴まれ問われた戦闘員は狼狽しながらもそう言った。
タイタンは指令室に半ば駆けながら向かった。ゾル大佐もそれに続く。
「モニターをつけろ。アマゾンに合わせてな」
タイタンは敬礼に対する挨拶もそぞろに戦闘員達に対して言った。
すぐにモニターのスイッチが入れられる。
そこにはアマゾンが映っていた。まだ変身はしていない。
そして彼と対峙する人物。そこにいたのは紛れもなく彼であった。
「あの男、一体何を考えているのだ・・・・・・」
タイタンは彼の姿を認めて怒りで身体を震わせた。
「おいっ」
そして戦闘員達に対して顔を向けた。
「ここは暫く任せる。少し行って来るぞ」
そう言うとマントで全身を包んだ。そしてその中に消えていった。
「早いな」
ゾル大佐はそれを見て言った。
「だが今更行ってもどうなるものではあるまい。言って聞くよな男でもない」
大佐はモニターを見ながら言った。

「どのみち中近東は俺一人でどうにでもなる。ここはアマゾンの戦い方を見せてもらうとしよう」
彼は岩石男爵の所在を確かめられればそれでよかった。彼は粗暴な男爵を戦力とは考えていなかったのだ。だが所在が掴めていなくては首領に責任を問われる。そうすれば他の者に付け込まれる。それを避けたかっただけなのである。
彼は落ち着いた顔でモニターに映る戦いを観戦しはじめた。
「フッフッフ、アマゾンよここで会ったが百年目じゃあ～～～～～」
岩石男爵は夜の街の道路で右手に持つ棍棒を振り回しながらアマゾンに対して言った。
「貴様を倒すのはわしじゃあ。覚悟するんじゃの～～～～～」
彼は自信満々である。だがそれに対するアマゾンは何処かキョトンとしている。
「・・・・・モグラ」
彼は隣にいるモグラ獣人に顔を向けた。
「こいつ誰だ!?」
そして呆気に取られた顔で問うた。
「デルザーの改造魔人だった岩石男爵だよ。アマゾン、そんなこと忘れるなよ」
モグラ獣人はいささか呆れた様子で言った。
「何じゃあ御前等わしを知らんのかあ!」
岩石男爵はそれを聞いて怒りの声をあげた。
「知ってるも知らないも何でここにいきなり出て来るんだよ」
モグラは彼に顔を向けて言った。
「そう、アマゾン御前じゃなくて隊長ブランクが来ると思った」
「フン、どいつもこいつもわしを軽く見おって。わしはなあ、神出鬼没だということを知らんのかあっ!」
「そんなことはどうでもいいっ!」
そこで怒りに満ちた声がした。
「こんなところで何をやっているのだっ!」

百目タイタンが岩石男爵の側に姿を現わした。
「おお、タイタンか。悪いが助けはいらぬぞ」
「誰が助太刀なぞするか。貴様は持ち場を離れて何をやっている！」
彼は激昂した声で彼を怒鳴りつけた。
「・・・・・一体何をそんなに怒っておるのじゃ！？」
岩石男爵は彼が何故怒っているのか理解出来なかった。
「これが怒らずにいられるか、貴様のその勝手な行動が一体どのようなことになるか考えられぬのか！」
「アマゾンライダーを倒すことか？」
彼は何もわかってはいなかった。
「な・・・・・・」
この言葉にさしものタイタンも絶句した。
(隊長ブランクに倒させる計画はこれで失敗か)
タイタンは自分の計画が失敗に終わることを悟った。
(だがこの男がアマゾンを倒せればどのみち変わりはないな。ここは退いても構わぬか)
彼は計算を終えた。そして男爵に対して言った。
「わかった。ではアマゾンライダーは貴様に任せよう」
「ほう、わかってくれたか」
岩石男爵はそれを聞いて思わず嬉しそうな声をあげた。

樹林の獣人その七

「うむ。好きにするがいい。アマゾンライダーは貴様に任せるとしよう」
「流石はタイタンじゃのう。話がわかるわい」
(勝手に言っていろ。貴様はどうせ捨て駒だ)
タイタンは心の中でそう毒づいたがあえて口にはしなかった。
「それでは期待するぞ。俺はこれで帰らせてもらう」
彼はマントで全身を包んだ。
(隊長ブランクとかち合ったら面倒なことになるしな。ここは高見の見物としよう)
彼は姿を消した。岩石男爵はあらためてアマゾンと対峙した。
「さてと、アマゾンよ」
彼はアマゾンに顔を戻した。
「御前をぶったおすのはわしじゃあ。覚悟は出来とるんじゃろうなあ」
右手に持つ棍棒で彼を指し示して言った。
「さあ行くぞ。わしは気が短いからのう」
アマゾンはそれには答えなかった。ただ黙って身構えた。

アーーーーー
両手の指を半ば曲げて広げる。そしてその手を肩の高さで真横に大きく広げる。手は肘のところで直角に上に向けられている。身体が緑と赤のまだらのバトルボディに包まれる。
マーーーーー
その手を胸のところでクロスさせる。胸がオレンジになる。手袋とブーツが黒くなる。
ゾーーーーーン!
そしてその手を元に戻した。

アマゾンの両目が赤く光った。すると彼の全身を光が包んだ。
顔の右半分がまだらの仮面に覆われる。そして左も。その瞳は血の色である。

光が消えた。アマゾンは仮面ライダーアマゾンとなっていた。
「ケケーーーーッ！」
そして奇声を発し岩石男爵に襲い掛かる。男爵は棍棒を振るってそれに対抗する。
「死ねっしゃあ！」
その棍棒でアマゾンの胸を打たんとする。しかしアマゾンの動きは速い。それを上に跳びかわした。
「ケーーーーーッ！」
アマゾンは鰭で切り裂かんとする。だがそれは彼の岩の身体の前に防がれた。
「ケッ！？」
アマゾンはそれを見て思わず声を発した。そこに棍棒が再び襲い掛かる。
それを横にかわす。そして間合いを離した。
「ふん、無駄じゃ無駄じゃ」
岩石男爵はアマゾンに対して高笑いを浮かべて言った。
「わしの身体は石で出来ておるのじゃぞ。そんなちゃちなもんが通用すると思うてか」
「ガッ」
彼はそれを聞いて再び声を漏らした。
「きさんは所詮引っ掻いたりするしか脳がない奴じゃ。そんなもんでわしに敵うとでも思うちょるんかい」
彼は今度は空に跳んだ。
「今度はわしの番じゃのう。これ喰らってあの世に行きんしゃい！」
そう言うと巨大な岩石に変身した。
「岩石落としっ！」

そしてアマゾンに向けて急降下する。それは彼の全身を砕かんばかりの勢いであった。

だがアマゾンはそれをかわした。そして体勢を整えようとする。

しかし岩石男爵はその隙を与えようとはしない。次々に攻撃を仕掛けて来る。

アマゾンはそれを持ち前の素早さでかわす。岩石男爵は執拗に攻撃を仕掛け続けてきたがやがて疲れたのか間合いを離し変身を解いた。

「どうじゃわしの攻撃は。かなり堪えるじゃろう」

彼は自慢げにそう言った。

「これだけではないぞ。わしの恐ろしさはまだまだこの程度ではないからのう」

そして今度は体当たりを仕掛けんとする。

「喰らうっしゃあ！」

しかしアマゾンはそれを全身で受け止めた。

「ほう、なかなか力持ちじゃのう」

男爵はアマゾンのその力を感じて笑った。

「だがのう、このわしに力で挑もうというその考えが愚かじゃ。わしは力では誰にも負けんからのう」

そして力でアマゾンを押し潰そうとする。しかし彼はアマゾンの力を侮っていた。

アマゾンは全身に力を込めた。そして岩石男爵を次第に押し返していく。

「ぬわにっ！？」

岩石男爵はその予想外の力に驚いた。彼は自分の考えが浅かったと悔やんだだろうか。だが例え悔やんだとしてもこの時には既に手遅れであった。

「クケーーーーーッ！」

アマゾンは絶叫した。そして岩石男爵の全身を掴んだ。

そして空に跳んだ。空中で激しく回転し岩石男爵を頭上に持って

いった。
それはまるでダブルライダーの使うライダーきりもみシュートであった。だがその回転数が明らかに違っていた。

樹林の獣人その八

どれだけ回したであろうか。アマゾンは岩石男爵を地面に投げ飛ばした。

「グオオオオオーーーーーッ！」

彼は叫び声をあげた。そして地面に叩き付けられた。

「グハアアアアアッ！」

アスファルトを砕いた。そしてそのまま大きくバウンドし幾度となく叩き付けられる。勝負はあった。

「成程のう、投げ飛ばしてくるとはな」

岩石男爵は片膝を付いて起き上がり言った。

「どうやらわしの予想以上に知恵のある奴だったようじゃな。これはわしの負けじゃ」

側に着地して身構えるアマゾンに対して言った。

「負けたもんに用はないじゃろ。下がるがいい」

彼はそれでもアマゾンに対して言った。

「さらばじゃ。どのみち一度死んどるんじゃ。二回死のうが同じことじゃ」

彼は最後にそう言うと爆発した。そして彼はこの世を去った。

「やったな、アマゾン」

モグラ獣人が彼の許に駆け寄ってきた。

「いやモグラ、安心するにはまだ早い」

「どうしてだい！？もうやっつけたじゃないか」

モグラ獣人はアマゾンの言葉にキョトンとした。

「アマゾンにはわかる。すぐに別の奴がやって来る」

そう言った瞬間だった。不意にナイフが飛んで来た。

「ムッ！」

二人は左右に跳んでそれをかわした。そしてナイフの飛んで来た方を見た。

「よくも岩石男爵を倒してくれたな」
隊長ブランクが姿を現わした。
「敵討ちだ。死ねいっ！」
そう叫ぶとライフルを構えた。そしてナイフを次々に放ってくる。
「ケッ！」
だがアマゾンはそれを鰭で弾き返す。業を煮やした隊長はライフルを捨て素手で挑みかかってきた。
「死ねえっ！」
アマゾンの爪と隊長ブランクの拳が撃ち合った。彼もまた鉄の身体を持つ。鰭や爪は期待できそうにない。アマゾンはそれを見て攻撃の仕方を考えていた。
（カンボジアでは蹴りでやっつけた）
しかし相手もデルザーの改造魔人である。同じ攻撃が二度も通用するとは思えない。
（ではどうするか）
アマゾンは思案した。そこに拳が来た。
アマゾンはそれを手で払った。その瞬間隊長の首筋が見えた。
（ムッ！？）
そこも鉄に覆われている。だが他の部分に比べて防御が弱い。これは稼動部分だからであろう。
（ここだっ！）
アマゾンは心の中で叫んだ。そしてその喉に喰らい付いた。
「ケケーーーーッ！」
奇声を発した。そして喉を食い千切った。
「グオッ！」
隊長ブランクは首筋を手で押さえた。だが鮮血は止まらなかった。
「グオオオ・・・・・」
血は止まらない。彼は片膝をついた。その足下は既に血の海となっている。
「まさか鉄で覆われた俺の首筋を食い破るとは」

彼は顔を見上げアマゾンを見て言った。
「御前の首筋確かに鉄に覆われていた。だが他の部分に比べ弱かった」
アマゾンは鮮血に濡れた口で言った。
「だから食い破れた。他の部分では無理だった」
「そうだろうな。それでも俺の鉄の身体を食い破ることが出来るとはな」
彼は死相を浮かべながらも言った。
「これでは俺が勝てる筈もないな」
彼はそう言うと最後の力を振り絞り立ち上がった。
「それでは俺は去るとしよう。偉大なる先祖フランケンシュタイン様の許にな。幸いこの地は森に覆われている。あの方が眠られている場所とは違うがな」
彼はそう言うと不敵に笑った。
「それでは俺は戻る、あの森へ。さらばだアマゾンライダー！」
そう叫ぶと姿を消した。暫くして遠くの森で爆発が起こった。
「隊長ブランク・・・・・・敵ながら見事な最後」
こうしてアマゾンでの戦いは終わった。
二人の改造魔人が敗れたとの報告はすぐにバダン全体に伝わった。
「・・・・・あの馬鹿者共が」
タイタンはそれを自分の基地の中で聞いていた。
「これで手駒を二つも失ったことになる」
彼は右手の上に作った炎をいらだたしげに握り潰した。
「まあそう怒るな。あの二人の替わりはいくらでもいるではないか」
そこに一人の男がやって来た。
「・・・・・貴様か」
そこにいたのはオオカミ長官であった。
「どのみちあの二人はシャドウやマシーン大元帥への捨石にするつもりだったのであろう。ならば替わりの石を使えば良いだけだ」
「簡単に言ってくれるな。あの二人以上の力の持ち主などそうはい

ないぞ」
「そんなものすぐに見つかる。あの二人は力だけだったしな」
「頭も回る奴か」
「そうだ。そうならば幾らでもいるだろう」
「・・・・・そうだな」
タイタンはその言葉でようやく機嫌をよくした。
「だがそれでも不安がある。やはりマシーン大元帥もかなり切れる男だしな。シャドウは最早言うまでもない」
「だが奴の両腕はどうだ！？」
「両腕！？」
タイタンはそう言ったところで気がついた。
「あの二人か」
「そうだ、あの二人は幾らでもつけいることが出来るだろう」
「確かにな。あの二人ならば与しやすい」
そうであった。彼は思わぬとおろに活路を見出した。
「礼を言う。おかげで面白いことを思いついた」
「礼などはいらん。貴様の成功が俺の成功に繋がるのだからな」
「フ、確かに」
二人は闇の中に姿を消した。こうして悪の胎動は人知れぬところで続いていた。

樹林の獣人　　完

２００４・４・１４

古都の鬼神その一

古都の鬼神

東南アジアにおいて古い歴史を誇るタイ王国は山田長政の話でもわかるとおり我が国との交流が古い。二次大戦の時にも日本に対しては好意的と言ってもよかった。日本人も彼等の主権を尊重した。その精強さで知られた日本軍も非戦闘員、とりわけ子供達に対しては温厚であった。ただし軍事訓練は恐ろしい程厳格であり押し付けがましく融通が利かないとよく言われた。当時の帝国軍人の悪い癖であった。

だが彼等は真面目であった。タイ人達もそれはわかっていた。そして二次大戦が終わった後東南アジアに進出してきた日本の企業もタイに好んでやって来た。タイ人もそれを歓迎してくれた。そしてそれがタイの経済発展へと繋がっていくのである。

よく『日本の経済侵略』といった全くの的外れな批判が日本の知識人と自称する輩から聞こえてきた。だがこれは完全に筋違いであった。この連中は経済のいろはさえ何一つ理解していなかったのだ。経済はマルクス主義を金科玉条に念仏の様に唱えるだけでは動かない。こうした連中はその程度のことすら理解出来ない知識人であったのだ。今ではそこいらの女子高生ですらわかることだ。だがそれすらも理解出来ないのである。それが戦後の我が国の経済学の実態であった。まことに笑うべきことである。

こうした輩の正体はどうかというと何のことはない。革命を主張しとある凶悪かつ陰険、悪辣な国家と結託していた。こうした連中こそ悪であると言ってよい。とある料理漫画の原作者なぞは自分は決して謝罪などしないが他人には厳しく言う。その卑しい性根をこそ謝罪すべきではないのではなかろうか。

テレビのキャスターと称する輩もである。所詮他人の謝罪や責任

を強制する人間は自分は決して責任をとったり謝罪なぞしない。そうして世の中に害毒を撒き散らしていく。世の中の悪はバダンだけではない。こうした連中もそうだと言ってよいであろう。

「日本では何かバダンと結託していた市民団体が見つかったそうですね」

「ええ、それは村雨君が壊滅させましたよ」

タイの首都バンコクを流れるメナム川の船の上で沖一也と滝竜介は話していた。

「バダンはとある過激派を名乗っていて市民団体はそれに気付いていなかったそうですが」

「ちょっと待って下さいよ、市民団体が過激派と結託しようとしていたんですか！？」

沖は竜の言葉に眉を顰めた。

「そうか、沖さんは日本を離れていたからご存知ないのですね」

竜はそれに対し表情を暗くさせた。

「日本ではよくあることなんです。市民団体を主導する者や後援者が過激派であるということが」

「とんでもない話ですね」

「ええ。しかしこれは残念なことに本当の話です」

竜の表情は暗いままである。

「口では平和を唱えながらもその裏では全く別の事を画策する。そうした団体にはチェックが行き届きにくいのが現状です」

「呆れた話ですね」

「ですが最近はそうでもなくなってきていますよ。ネットでそうした団体のチェックが行なわれるようになりましたから」

「公安がですか？」

「いえ、我が国の公安にそんなことは出来ませんよ。一般の人が調べているのです」

「よくそんなことが出来ますね」

「ああした連中の世界は狭いですからね。関係を洗えばすぐに尻尾

を掴めるのです」
「そうなのですか」
実際にとある戦争の後で武装勢力がいる場所に極めて不自然な状況で向かい捕まり株価にして何兆もの損害を出した連中の交際等まで瞬く間に掴まれたことがある。驚くことにこの三人は出発前から奇妙なことが多くありそしてその映像等も不自然なものであった。交際はそうした団体を中心にしたものであった。実に奇妙な一致であると皆噂したものだ。
「今までは彼等に同調するマスコミや自称知識人もいましたがね」
「彼等もその力を失っているということですか」
「そうです。まあいずれはそうなる運命でしたけれどね」
竜はシニカルな笑いを浮かべて言った。
「悪貨は良貨を駆逐する、と言いますがね。それは一時的なものに過ぎないのです」
彼は言葉を続けた。
「邪道は邪道、正道には勝てません。悪の組織がそうであるように」
「はい」
沖はその言葉に対し頷いた。そして二人は船を降り街の中に入って行った。

古都の鬼神その二

魔神提督はバンコクの地下深くに設けた基地の奥深くにいた。
「フフフフ、どうやら計画は順調に進んでいるな」
彼は工事現場を自ら視察しながらほくそ笑んでいた。
「これでシンガポールでの失敗は取り戻せるな」
彼はかって仮面ライダーブイスリーにより阻止されたシンガポールでの基地建設について考えていた。
「あれでこの東南アジアでの我々の足掛かりは費えたが今度はそうはいかん」
顔を引き締めた。
「この基地が完成した暁には東南アジアは我等がものとなる。そしてここからアジア太平洋地域を支配するのだ！」
「ハッ！」
側に控える手の空いた戦闘員達がその言葉に対し敬礼する。魔神提督はそれを見てさらに機嫌をよくした。
「フフフ、期待しているぞ」
彼は目を細めた。
「そなた達に全てがかかっているからな。この作戦を成功させれば昇進も思いのままだぞ」
「はい！」
戦闘員達はその言葉に声を明るくさせた。
「上手くやるがいい。無理をせずにな」
彼はそう言うとその場をあとにした。そして自室へと戻った。
「こうして下の者の士気も鼓舞しなくてはな。働かなくなっては終いだ」
彼は黒い木製の椅子に座りそう言った。
「戦闘員あってのものだしな。わしもあの者達の育成には力を注いだものだ」

彼はネオショッカー時代にアリコマンドの養成機関の長官を務めていたことがある。
「戦闘員も組織に欠かせぬ人材だ。大事にしなくてはな」
「所詮は消耗品だというのにか」
そこで誰かが部屋に入って来た。
「貴様か」
魔神提督はその者も姿を認めて椅子に座ったまま彼を見上げた。
「そうだ。こちらの様子が気になり来てみたが」
それはゼネラルモンスターであった。彼等は共にネオショッカーの大幹部であった。
「進んでいるようだな」
「当たり前だ、わしを誰だと思っている」
魔神提督は彼の言葉に対し顔を顰めた。
「ふむ、自信はあるようだな」
ゼネラルモンスターはそんな彼を一瞥して言った。
「伊達にネオショッカーで大幹部をしていたわけではないぞ」
「それは私も同じだ」
ゼネラルモンスターは言い返した。
「もっともスカイライダーの始末は貴様に邪魔されたがな」
彼はスカイライダーとの最後の戦いにおいて彼を道連れに自爆しようとしたのだ。だがそこで魔神提督は彼に雷を放ち彼を殺している。
「あの時の借り、何時返してもいいのだぞ」
「あれは介錯をしてやったのだ」
魔神提督は悪びれることなく言った。
「介錯だと」
「そうだ、貴様もハウスホーファー閣下の下にいたことがあるのなら知っていよう」
ハウスホーファーとは第二次大戦時にヒトラーのブレーンの一人である。ミュンヘンに生まれ地理学者、及び軍人としてその名を知

られた。地政学を唱えたことでも知られている。

彼の特徴の一つとしてオカルトに深く傾倒していたことである。彼は当時かなりの親日家として知られ日本を訪れたこともある。高野山に登ったこともありそこで我が国の神秘主義にも深い関心を示していたようだ。

それがどうやらヒトラーとの結び付きになったようである。ヒトラーはオカルトにも造詣が深かった。どの様な難解な書でも読破し一度聞いたことは決して忘れず、そして多くの言語を操るというやはり知性においては傑出していた彼の私生活は極めて質素なものであった。

まず極端な菜食主義であった。肉も魚も食べずラードも使わなかった。酒も飲まない。とりわけ煙草は嫌った。総統官邸においては誰も煙草を吸うことが出来なかった。

そして女性関係もなかった。エバ＝ブラウンのことは側近の将軍ですら知らなかった。ごく一部の者だけが知ることであった。蓄財にも一切関心がなかった。服装も何もかも極めて質素であった。夜明けまで仕事をし明け方には起きる。そうした生活であった。

まるで修道僧の様な生活である。彼はその卓越した演説と人をひきつけるカリスマ性で知られていたがそれにはどうやらこうした生活と無縁ではないようだ。彼は生活にあるものを科していたようだ。

それは宗教性であろうか。ナチスは国家社会主義である。ソ連と同じ全体主義国家でありその体制は自らこそ唯一にして絶対なものとする。宗教も敵の一つである。

では何を信仰するのか。ナチス党員はよく『私は生涯どの宗教も信じなかった』と言った。彼等は宗教を信じてはいなかったのだ。その替わりがナチスの教義であった。

これを果たして教義と呼んでいいのだろうか。ソ連のそれと同じく自らを絶対的な正義とし他者は悪と定義し抹殺していく。彼等はユダヤ人や資本家だけを殺すのではない。知識人も貴族も宗教家もポーランド人もロマニーもロシア人も殺した。そしてあらゆるものを消した。二十世紀を支配した狂ったイデオロギー、それは全体主義であった。いまだに人類はその狂った教義に苦しめられている。

この教義の中心、法皇こそヒトラーであった。彼はこの世のものだけではなく人の心までも完全に支配しようと考えていたのである。これはスターリンも同じであった。やはり彼の私生活も質素で孤独なものであった。

人の心を司る者は神秘性がなくてはならない、欲を極めた生活を送る者に神秘性など備わらない。彼はそう考え私生活を質素なものにしたと言われている。これは宣伝省であり彼の知恵袋であったゲッペルスの提案もあったというが他にも副総統のヘスの意見もあったらしい。

このヘスもまた私生活はヒトラーのそれと似て質素であった。やはり菜食主義者であった。彼に影響を与えたのはローゼンベルクという怪しげな男であった。彼はオカルトの専門家であったのだ。

彼はハウスホーファーとも交遊があったという。その縁でヒトラーとハウスホーファーは知り合ったのだ。そして彼の地政学とオカルトはヒトラーに大きな影響を与える。ソ連との戦いのもとになった東方植民はドイツに昔からある東方十字軍の影響もあるが彼の地政学の影響が大きいことは否定できない。彼はヒトラーのオカルトのブレーンの一人ともなっていたのだ。

彼は前述した通り日本について深い関心を寄せていた。そしてそれは生涯変わることはなかった。ヒトラー、そしてナチスは極端な人種主義で知られているが彼は日本を忘れたことはなかった。そう、

最期まで。
彼はその生涯を自らで幕を降ろしている。ナチスは敗れ彼も裁判にて処刑されることが確実な身分であったのだ。
ここで彼は実に奇妙な自殺を遂げている。本来ドイツ軍人はプロイセンの慣習に習い自殺には拳銃を使う。ナチスでは多くはカプセルだ。ヒムラーは自殺を蔑視しており部下の親衛隊員達にそれを禁じていたが彼自身もカプセルで自殺しているのはまことに皮肉なものである。ゲーリングも同じくカプセルで自殺している。なおヒトラーは拳銃を使っている。ハウスホーファーは拳銃もカプセルも使わなかった。
彼は日本刀で割腹自殺を遂げた。切腹である。何と彼はドイツの流儀にもナチスのそれにも従わず切腹したのだ。そして彼はこの世を去った。それを聞いた連合軍の高官達は皆首を傾げたという。何故日本のもので死んだのか、それは誰にもわからなかった。
ゼネラルモンスターは彼の下にいたことがある。そして彼の思想に影響を受けてもいた。
「ハウスホーファー閣下か。懐かしいな」
彼はナチス時代を思い出しながら言った。
「だが今の私にそんなものは関係ない。関係があるのは貴様のあの時の行いだけだ」
彼はその右目で魔神提督を睨み付けた。
「フン、生き返ってもそのことは忘れんか」
「そうだ、私が生き返るのはこれで三度目だがな」
彼はネオショッカー時代二度甦っている。スカイライダー、そして他の七人のライダーとの戦いにおいてだ。だがいずれもライダー達の前に敗れている。
「それは貴様とて同じだろう」
魔神提督は心臓が残っている限り幾度でも甦るのだ。
「確かにな」
彼はその言葉に対して不敵に笑った。

「一度貴様とは決着をつけたいと考えている」
ゼネラルモンスターは右手に持つ杖を向けて言った。
「それはわしとて同じこと。わしも一度貴様に殺されているしな」
この二人の因縁は相当深いものであるらしい。魔神提督も剣に手をかけた。
「だがそれは全てライダー達を倒してからのことだ」
魔神提督の言葉にゼネラルモンスターも杖を収めた。
「確かにな。あの者達を倒すことが先決だ。特にあの男は」
そこでスカイライダーの姿が脳裏に浮かんだ。
「ここは矛を収めよう。だが忘れるなよ」
ゼネラルモンスターは左手の鉤爪を鳴らしながら言った。
「貴様とは必ず決着を着けるということを」
「望むところだ」
ゼネラルモンスターは姿を消した。魔神提督はそれを嫌悪に満ちた眼差しで見送っていた。

古都の鬼神その四

沖と竜はバダンの捜索を行なっていた。バンコク市内をくまなく探し回る。しかしやはり容易には見つからない。

このバンコクはタイ王国の首都であり政治、経済の中心地である。何百万もの人口を擁する東南アジアでも有数の大都市である。その街においては多くの人々が雑居している。

その中には良からぬ者も多い。そうした輩が自らの領域に誰かが入るのを好まないのはどの国でも同じである。彼等が沖と竜に対し牙を剥くのは当然の成り行きであった。だが所詮彼等は普通の人間である。特別な訓練を受けた竜や改造人間である沖に適う筈もなかった。

「つ、強え・・・・・」

彼等は道に伏していた。沖と竜はそんな彼等を見下ろしている。

「どうやらただのチンピラみたいですね」

沖は彼等を見て言った。

「はい、手加減して正解でしたね」

竜もそれに同意した。

「痛てて、それにしてもあんた達強いなあ」

「全くだよ。一体何処から来たんだよ」

彼等は起き上がりながら二人に尋ねてきた。

「？日本だが」

竜が答えた。

「日本人！？じゃあ早く言ってくれよ」

「そうだよ、俺達は別に日本人に恨みがあるわけじゃないし」

「そっちからつっかかって来た癖に」

沖はその言葉に顔を顰めた。どうやら彼等は何処かの国の人間と勘違いしたらしい。

彼等はどうやらこのバンコクで屋台をやっているらしい。つでに

副業であまり好ましくない仕事もしているという。
「まあそれは聞かないでくれよ」
彼等が開く屋台でタイ料理を食べながら話をしている。中々美味い。
「この料理だけで充分だと思うけれどな」
沖はタイ風チャーハンを食べながら言った。
「まあ見たところ良からぬ仕事といってもそんなに顔を顰めるようなものでもないようだな」
竜は彼等の顔を見て言った。どうせモグリの食品販売とかだろう、彼等のさほど悪くはない人相を見ながらそう思った。
「金が欲しくてね。今はこの屋台だけれどいずれもっと大きくするのが夢なんだ」
彼は白い歯を見せて笑った。笑顔もいい。
「だったら地道に働けばいいんじゃないか」
沖はチャーハンを食べ終えて彼に対し言った。
「そうだな。この味があれば問題ないと思うが」
竜も同じ意見である。
「すぐに大きくしたいんだよ。一攫千金」
「そういう考えだから変な仕事もするんだろ」
「いいんだよ、別に人を殺したり迷惑をかけているわけじゃないんだし」
「だからといって裏の仕事を持つのはどうかと思うぜ」
沖の性格からしてこういったことは認められないのだ。
「マイペンライ、警官も黙認しているから」
「そういう問題じゃなくてな」
おおらかな国である。裏といっても警官が文句を言わなければそれでいいのである。
「俺達の夢はこの屋台をでっかいレストランにするのが夢なんだ。その夢の為にこうして頑張っているんだよ」
「せめて変な仕事を止めてから言ってくれ」

やはり沖はこうしたことが許せないようだ。
「沖さん、まあいいじゃありませんか」
竜は融通の利かない彼を窘めて言った。まだ彼の方が世の中を知っている。
「じゃあその裏の仕事で聞きたいことがあるんだけれど」
「おっと、そうそう口は割らねえよ」
「そうだそうだ、さっきあんた達にはのされてるしな」
「それはあんた達が悪いんだろうに」
沖は仕様が無いな、といった顔で彼等を見て言った。
「じゃあこうしよう。ここにあるメニュー全部頼もう。そして今この辺りにいる人達全員におごろう」
「えっ、いいのかい!?」
屋台の店員達だけではなかった。その場を通り掛かっていたバンコクの老若男女が竜の側に集まってきた。
「ああ、それなら文句はないだろう」
「あんた話がわかるねえ。日本人っていうのは親切だけれどどうもせこいところがあるもんだけれどね」
「せこいのは余計だろ。否定はしないけれど」
沖の声は渋いままである。だが竜の言葉が決め手となった。沖もこの屋台の料理を堪能し運の良いバンコクの人達にも御馳走した後情報を聞いた。
「最近のあそこで変な噂をよく聞くね」
「ああ、何でも黒い影が夜になるとウロウロしているとか」
「黒い影・・・・・・」
その言葉に沖と竜は顔を見合わせた。

古都の鬼神その五

「ではそちらに行くか」
「それでは。料理は美味かったぞ」
「ありがとよ。何かあったらまた来てくれよ」
こうして彼等は屋台を後にして彼等が言ったその場所に向かった。
先程も書いたがバンコクは清濁併せ呑む街である。あまり治安の良くない場所もある。二人はそこへ足を踏み入れた。
そこには怪しげな店が多くあった。ポン引きや薬の密売人が昼からもう道でたむろしている。
「お兄さん、可愛い女の子いるよ」
「コカインどう、コカイン」
彼等はそう言って二人に声をかける。彼等はそれを適当にあしらいつつその中を進んでいく。
「何かこうした場所は大きな街だと何処にでもありますね」
「人間というのはそうしたものですから」
竜は答えた。彼の方がやはり世の中をよく知っているようだ。
「さて、と」
竜は立ち止まって辺りを見回した。
「とりあえずは姿を隠しましょう」
二人は店で服を買った。そしてそれに着替え現地人の中に紛れ込んだ。そして夜を待った。
夜になっても人は減らない。それどころか益々増え、怪しげな人物のその数を増やしていた。
「それでも連中の姿は見えませんね」
現地人の中に紛れた沖は隣にいる竜に対して声をかけた。
「いや、そうでもないか」
沖はあることに気付いた。
「見ればチラホラいるな」

彼は屋台や建物の上を見た。すると黒い影が時折見える。
二人は道から姿を消した。
戦闘員達は建物の上を走り回っていた。そして何かを探っている。
「いないな」
「ああ、何処にもいない」
彼等は誰かを探しているようである。
「ここに来たと言われたんだがな」
「偽情報だったか」
どうやら誰かの指示でここで探っているらしい。
「仕方ない、基地に戻るか」
「ああ、そうしよう」
そこに何かが飛んできた。
「ムッ！？」
それは一本のナイフであった。
「残念だったな、基地に戻る必要はない」
戦闘員達はナイフが飛んで来た方に顔を向けた。そこには竜がいた。
「貴様等が探していたのは私達だろう？」
「クッ、滝竜介か」
戦闘員達は彼の姿を月夜の下に認めた。
「そうだ、探しているのでこちらから出向いた。覚悟するがいい」
「望むところだ、今ここで貴様だけでも倒してやる」
「そして魔神提督様への手土産にしてやる！」
戦闘員達はそう言って竜に向かって行った。竜はそれに対してナイフと格闘術で対抗する。彼は流石に強く戦闘員を寄せ付けない。
「クッ、こうなったら」
数人が倒されたところで戦闘員達は間合いを離した。
「怪人を呼ぶんだ！」
忽ち二体の怪人が姿を現わした。
「ゾォーーーリイィィィーーーッ」

「コォーーーーウ」
ゲルショッカーのガス怪人サソリトカゲスとガランダーの分身怪人ゲンゴロウ獣人である。二体の怪人は無気味な叫び声と共に竜のところへやって来た。
「来たな」
竜は怪人達の姿を認めて呟いた。
「ライダー、出番だ。すぐに来て下さい！」
「了解！」
竜が呼ぶと共にライダーはその場に姿を現わした。下から跳んで来たのだ。
「行くぞっ、怪人達！」
銀の仮面と拳が月夜の下に映える。ライダーは身構えると二体の怪人に向かって行った。
まずはゲンゴロウ獣人が来た。怪人はその槍の様な両腕でスーパー1を突き刺そうとする。
「甘いっ！」
だがスーパー1にそれは通用しなかった。彼はそれを手の甲で払い胸に蹴りを入れた。
怪人は後ろに身体をのけぞらせた。その隙にライダーは腕を替えた。
「チェーーーンジ、冷熱ハァーーーーンドッ！」
そして左手から冷気を発した。昆虫型怪人である彼にとってこれは効果があった。
ゲンゴロウ獣人は忽ちのうちに凍りついた。そしてそのまま砕け散り爆発した。

古都の鬼神その六

今度はサソリトカゲスが来た。怪人は左手の鋏でライダーの首を断ち切らんとする。

しかしライダーはそれをかわす。そしてその左脇に回し蹴りを入れた。

「まだだっ！」

そして更に背中へ回り込んだ。右腕をその背に叩きつける。

「喰らえっ！」

そこから炎を発する。それで怪人の背を焼いた。

これが決め手であった。怪人は炎に焼かれそのまま爆発して消えた。こうしてスーパー1は二体の怪人を倒した。

「フフフフ、やはりメガール将軍が警戒するだけのことはある」

ここで何者かの声がした。

「誰だっ！」

戦いを終えていたスーパー1と竜はその声に対し身構えた。そこには黄金色の鎧に全身を包んだ男が立っていた。

「スーパー1よ、久し振りだな。アメリカ以来か」

「貴様、魔神提督か！」

スーパー1は彼の姿を見て叫んだ。

「一体何故ここに」

「それを言う必要はない」

彼はそう言うと剣を抜いた。そしてスーパー1に斬りかかってきた。

「ムッ」

スーパー1はそれをかわした。そこに二撃目が来る。

しかし彼はそれもかわした。そして反撃した。

蹴りを出す。それは魔神提督の腹を打った。

「グッ」

提督は一瞬怯んだ。だがそれは一瞬だった。すぐに攻撃に移る。
スーパー1は剣をかわす。そして腕を変えようとする。
「チャーーーンジ、エレキハァーーーンドッ！」
青い腕に変わった。それを見て魔神提督は間合いを離した。
「出でよ！」
彼は叫んだ。すると一体の怪人が姿を現わした。
「エーーーーィッ！」
それはブラックサタンの電気怪人奇械人電気エイであった。怪人は右腕の鞭を振り回しスーパー1に襲い掛かる。
「ブラックサタンの怪人か」
彼はブラックサタンの怪人について多少知っていた。ストロンガーから聞いていたのだ。
「ならば好都合だな」
彼はエレキハンドを見て言った。そしてその腕を怪人に向けた。
「喰らえっ！」
両腕から電撃を放った。そして怪人をその電撃で撃った。
「フフフフ」
魔神提督はそれを見て笑っている。まるで何かを期待するように。
「無駄だ、スーパー1よ」
彼はスーパー1に対して言った。
「その怪人に電気は通用せぬ」
「どういうことだ！？」
スーパー1はその言葉に対し顔を向けた。
「その奇械人は普通の奇械人とは違う。そ奴の胸を見るがいい」
「胸！？」
「そうだ」
見れば胸は何かのゲージになっている。それは急に上へ上がっていく。
「その怪人は電気エネルギーを吸収するのだ。そして自分のパワーにしてしまう」

「何っ！？」
「迂闊だったな。ストロンガーからそれは聞いていなかったのか」
「クッ・・・・・・」
見れば怪人の力が満ちている。スーパー1は自らの迂闊さに舌打ちした。
怪人は満ち足りたその力でスーパー1を打たんとする。だがその動きを急に止めた。
「！？」
そして全身から煙を発する。ガクリ、と片膝を着いた。
そのまま倒れ込み爆死した。どうやらスーパー1のエネルギーを全て吸収出来なかったようである。
「何と、これ程までの力とは・・・・・・」
さしもの魔神提督もそれを見て絶句した。
「まさかパワーアップしたエレキハンドがこれ程までの力を持っているとはな」
スーパー1は自身の両腕を見て呟くように言った。
「魔神提督、今度は貴様の番だ！」
そして魔神提督に顔を向け指差して叫んだ。
「ウヌヌ・・・・・・」
彼は呻いた。そして踵を返した。
「待て、逃げるか！」
スーパー1は追おうとする。だが魔神提督はそこに右腕を飛ばしてきた。
「ムッ！」
スーパー1はそれを電撃で撃ち落とした。右腕は爆発して消えた。
「スーパー1よ、この勝負はお預けだ」
魔神提督はその間に何処かへ姿を消していた。

古都の鬼神その七

「だが覚えておくがいい。貴様はこのタイで死ぬのだ」
彼の声だけが闇夜の中に響く。
「その事を決して忘れるでない」
そして気配を消した。後にはスーパー1と竜だけが残っていた。
「迂闊だったわ、まさかあれ程までの力を持っているとは」
基地に帰った魔神提督は一人自室で酒を飲みながら呟いていた。
「奇械人電気エイ、あ奴をもってしてもエネルギーを吸収出来ぬとはな」
彼は何時に無く深刻な顔をしていた。無理もあるまい。
「だがこれで終わりではない」
そこで彼は顔を上げた。
「まだ手駒はある。幾らでも挽回してやる。幾らでもな」
「そういう楽天的なところは見習うべきかな」
そこで何者かの声がした。
「今度は誰じゃ！？」
魔神提督はその声に対して顔を上げた。
「私だ」
見れば死神博士である。部屋の中に瞬間移動で入って来たのである。
「死神博士か。一体何用じゃ」
「うむ。そなたの様子を見たくてな」
彼はいつもの無気味な様子で彼に対して言った。
「わしのか。笑いにでも来たのか」
「生憎だが私にそのような趣味はない。少し気になることがあってな」
「気になること！？」
「そうだ、ここには仮面ライダースーパー1が来ているそうだな」

「情報が速いのう。今しがた三体の怪人を倒されてきたところじゃ」
「三体か」
「そうじゃ。まさかあれ程までの力を持っているとはな」
「あの男はヘンリー博士の最高傑作だ。強いのも道理だな」
「ヘンリー博士のことを知っておるのか」
「多少はな。あれ程の男になると」
彼は頷いて答えた。
「流石と言うべきだろうな。あの五つの腕は私でもそうそう容易には作れぬ」
「敵を褒めている場合か」
魔神提督は死神博士のその余裕に満ちた態度に対し苛立ちを覚えた。
「そうイライラするな。お主はどうもそういうところが地獄大使に似ておるな」
「わしはそうは思わんがな」
「まあそれはいい。だがお主は今自分がスーパー1に勝てると思うか」
「わからんな」
彼は顔を横に向けてふてくされた態度で言った。
「正直に言おう。今んままでは難しいと思っているだろう」
「・・・・・・・・」
彼は死神博士の問いに答えようとしなかった。図星だったのだ。
「しかしこれを使えばお主はあの男以上の力を手に入れることが出来る」
死神博士はそう言うと懐から何かを取り出した。
「それは・・・・・」
それは一つの小さな機械であった。バッテリーのようである。
「これを身体の中に埋め込むがいい。そうすればお主の力は今までとは格段に違うだろう」
「まことか!?」

「ただし数分だけだがな」
「超電子ダイナモのようなものか」
「うむ。あれからヒントを得た。だが違うのは長時間使用しても問題はないということだ」
「凄いのう」
「その分開発には苦労した。だがそれだけの介はあったと自負している」
死神博士はその鋭い眼を光らせて言った。
「では有り難く使わせてもらおう。感謝するぞ」
「うむ」
魔神提督はそれを死神博士から受け取った。
「ところで何故わしにそのようなものをくれるのだ?何か見返りでも要求するのか!?」
「それはない」
死神博士は静かに答えた。
「ただそれを使ってもらいたいのだ」
「わしを実験にしてか」
魔神提督は死神博士の顔を見ながら言った。
「そうだ」
彼は臆面もなく答えた。
「この装置はいずれ大いに役に立つだろう。それをまずテストとして見たいのだ」
「フン、むしがいいのう」
魔神提督はそれを聞いて言った。
「だが良い」
しかしその声は不服そうであったが了承したものであった。
「わしは今はスーパー1さえ倒せればそれでいい。これで倒せるのならな」
「そうだろう」
彼はそれを聞いて頷いた。

「心配する必要はない。それさえあれば仮面ライダースーパー1は必ず倒せる」
「そうであればいいがな」
「私を信じるのだ」
彼は疑念の言葉に対し鋭い声で答えた。
「私の作ったものに欠けているものなどない」
彼は自信に満ちた声で言った。
「私の腕を信じるのだ。そうでなければ最初から使わなければよい」
「大した自信だな」
魔神提督はそれを見て言った。
「では聞こう。私の怪人達より優れた怪人がいるか」
死神博士の言葉は続いた。
「私の開発した兵器より優れた兵器があるか」
彼の言葉は自信よりも何か信仰めいたものがあった。

古都の鬼神その八

「私は首領よりこの才を認められたのだ。そしてショッカーの大幹部となった」

彼はそれまでは学会では異端とも言える存在であった。科学や医学だけでなく占星術や錬金術にまで手を出していたのだから無理もないことではあるが。

「その私の作りしものに文句をつけるというのなら構わん」

彼は右手に持つ鞭で魔神提督を指し示した。

「ならば使うな。それだけだ」

「誰が使わんと言った」

魔神提督はそれに対して口の端で苦笑いを浮かべて言った。

「有り難く使わせてもらうと言ったのだ。わしとてお主の実力はよく知っているつもりだ」

「ならば良い」

死神博士はそれを聞いて頷いた。だがその表情はまだ硬いままである。

何かあったのか、と魔神提督はふと思った。しかしそれは口にも顔にも出さなかった。

「それではこれはどうして使うのだ」

「超電子ダイナモと同じだ。それをお主の身体に埋め込むのだ」

「そうか。それでは早速手術を頼む」

「うむ」

こうして二人は部屋を後にして手術室に向かった。そして魔神提督は恐るべき力を手に入れた。

「やっぱり昨日のことは話題になっていますね」

沖は例の屋台で朝食をとりながら現地の新聞を読んでいる。そして麺をすすった後竜に対して言った。

「そりゃ三回も爆発が起これば。しかも夜の街で原因不明のものが

ですよ」
竜がそれに答えた。彼も沖と同じ麺を食べている。
「あんた達また何かやったのかい？」
店の兄ちゃんが麺をさばきながら尋ねてきた。
「いや、そういうわけじゃないけれど」
沖はそれを誤魔化そうとした。だが根が正直な彼である。すぐにそれがばれた。
「そしたらそんなに新聞を熱心に読むかい？普通新聞といったら興味あるところをちょこちょこと読んであとは食い物を包んだりとかに使うものだろう」
もう一人が鶏肉に包丁を入れながら言った。
「まあ何をしていたかとかは聞かないけれどな。ほら、おかわりだ」
麺が飛ぶ。沖はそれを受け止めた。
「有り難う」
そしてそれを食べる。辛いがそれがまた食欲をそそる。
「あんた達のやってることに首を突っ込んだら冗談抜きにこっちの命がいくらあっても足りなさそうだからな。俺達がこれからレストランで大儲けする為にはそんなやばいことには関わらないことが肝心なんだ」
鶏をさばいていく。見れば野菜や魚介類と食材はかなり豊富である。
「だったらモグリの仕事も止めた方がいいだろう」
竜は沖と同じく麺のおかわりを食べながら突っ込みを入れた。
「あっちは命がかかってないからな」
「そうそう、警察も黙認してくれてるし」
「黙認すればいいというものでもないだろうに」
「そうだ、悪いことをしているのだとは思わないのか？」
二人はいささか日本人特有の善悪の判断で二人を嗜めた。だが二人はそれに対して反論した。
「別にな。人を殺したり傷つけたりするわけじゃないし」

「そうそう、それに俺達はこう見えても家族の面倒はちゃんとみて朝からしっかり働いているぜ」
「お坊さんにも礼儀正しくするようにしてるしな」
タイ人と日本人では法律に対する考え方が少し異なっている。法についてタイ人はわりかし柔軟に考える。その反面警官が賄賂を要求したりするのは困りものであるが。
「まあそれはいいさ。こうしたことはあちこちであるし」
沖は彼等に対してこれについて言うことを止めた。
「ご馳走様、美味しかったよ」
二人はそう言って金を置き席を立った。
「有り難う」
兄ちゃん二人はそれに対し笑顔で答えた。こうした微笑みが実にいいのがタイ人のいいところだ。
「あの笑顔見るとまた来たくなりますね」
「はい、それに味もいいですし」
二人はそんな話をしながらその場をあとにした。そしてまたあの場所に向かった。

古都の鬼神その九

やはり今は夜のような雰囲気ではない。昼と夜で街は顔を変えるものだがこうした場所は特にそうしたことが顕著である。だが今は趣きが異なる。

「当然といえば当然ですが警官が多いですね」

「はい」

二人は道を行きながら監察していた。昨日の夜の爆発のせいだ。色々と捜査にあたっている。

だからといってあまり店の中には入らない。ただ現場で捜査をしているだけだ。

「ただの警官ではないですね」

見れば軍人も一緒にいる。

「タイ政府も何か掴んでいるのかも」

彼等はそんなことを考えながら道を進んでいた。だがここには手懸かりはなかった。

「引き払ったかな」

「まさか。そう簡単に諦めるような連中じゃありませんよ」

沖はここで考えた。そしてあることに気付いた。

「じゃあこれを使いましょう」

彼は早速一台のバイクを呼び寄せた。

それはブイマシンであった。それを見たバンコクの市民達が好奇心に満ちた目で見る。

「おい、ハーレーかよ」

「また派手なバイクに乗ってる兄ちゃんだな」

「ちょっと見せてくれよ」

皆わらわらと寄って来る。

「ちょ、ちょっと待って」

沖は苦笑いをしながら彼等に帰ってもらおうとする。だが彼等は

細かいことは気にするな、と言わんばかりである。
「マイペンライ、マイペンライ」
大体においておおらかなタイ人である。沖があまり強く言わないこともあり彼等はブイマシンを興味深げに見ている。
「いいよなあ、俺も何時かこんなのに乗ってみたいな」
「ああ、五〇ＣＣじゃなくてな」
そんな話をはじめた。だが飽きたのかやがて去って行った。
「参ったなあ、ハーレーじゃないのに」
沖は彼等が去った後も暫く苦笑したままであった。
「何はともあれ始めますか」
竜はそれに対して落ち着いたものである。そして沖にブイマシンを使うよう促した。
「はい」
彼はレーダーのスイッチを入れた。ブイマシンの特徴は索敵能力の高さにある。
沖は暫くの間レーダーを見ていた。そしてある地点に反応を見た。
「成程」
彼は顔を見上げある建物を見た。そこはこの地域によくある平凡なものであった。
「あれです」
彼はその建物を指差した。二人は早速その建物に向かった。
建物の中に入る。そこは一見ただの廃屋であった。
二人はその中を探る。やがて竜が床に何かを見つけた。
「そこですね」
開けてみる。その下は階段が何処までも続いていた。
そこを降りていく。やがて鉄の扉の前に来た。
沖は怪力でそれをこじ開ける。忽ち警報が鳴り響いた。
「まさか！」
戦闘員達はそれに対し一斉に動き出した。すぐに入口へ向かう。
「いたぞ、スーパー１だ！」

彼は既に変身していた。そして向かって来る戦闘員達を竜と共に次々と倒していく。

「これ以上はやらせん！」

やがて怪人が姿を現わした。

「フニャオーーーーーッ！」

ゲドンの毒爪怪人黒ネコ獣人である。怪人はその爪でライダーを切り裂かんとする。

だがスーパー1はそれを蹴りで弾き飛ばした。そして身構えた。赤心少林拳の構えである。

「行くぞっ！」

そして怯んでいる怪人に向けて突進した。その両手を振るった。

「スーパーライダァーーーー諸手頚動脈打ちっ！」

それで黒ネコ獣人の首を撃った。首の骨を叩き折られた怪人はそれで倒れ爆発した。

二人はそのまま進む。向かって来る戦闘員達は倒していく。

またもや怪人が現われた。ゴッド悪人軍団の一人トカゲバイキングである。

「グルルルルルルルルッ！」

怪人は無気味な唸り声を挙げスーパー1に向かって来る。その手には鋭い斧が握られている。

古都の鬼神その十

スーパー1は落ち着いて腕を替えた。銀の腕、スーパーハンドである。

「行くぞっ！」

そしてその腕を構え立ち向かう。トカゲバイキングはそれに対し斧を振り下ろした。

斧は唸り声をあげて襲い掛かる。スーパー1は斧ではなくそれを持つ手を打った。

「グエエッ！」

怪人が呻き声を漏らす。彼は肘を打ったのだ。

動きが止まったところに掌底を入れる。それは腹に入り怪人は後ろにのけぞった。

「まだだっ！」

さらに追い打ちをかける。斧を蹴り飛ばしその腕を掴んだ。

「喰らえっ！」

そして投げる。怪人は床に叩き付けられた。

さらにそこに肘を入れる。それは喉に決まり怪人の息の根を止めた。

トカゲバイキングも爆死した。スーパー1はその爆風を後ろに受けつつさらに進んだ。

「おのれっ、来るとは思っていたが」

魔神提督は戦闘員達を引き連れスーパー1がいる方へ向かっていた。

「これ程早く来るとはな」

彼の索敵能力を甘く見ていた。彼はその迂闊さを呪った。

「ですが今からでも対処は可能です」

それに対し側にいる戦闘員の一人が言った。

「スーパー1を倒せばいいのですから」

「そうだったな」
魔神提督はその言葉を聞き微笑んだ。そして落ち着きを取り戻してきた。
「そこか、魔神提督！」
前からスーパー1の声がした。竜も一緒である。
「おう、貴様を成敗する為に来てやったぞ！」
彼は剣を抜きそれでスーパー1を指し示しながら言った。
「望むところだ、来いっ！」
スーパー1も来た。二人は狭い廊下で互いにぶつかり合った。
スーパー1は銀の拳で立ち向かう。魔神提督はそれに対し剣を振るう。
一見魔神提督の方が有利であった。しかしスーパー1はその素早い身のこなしと拳法の腕で彼を寄せ付けなかった。
「クッ、やはり手強いのう」
提督は剣でスーパー1の攻撃をしのぎながら言った。
「魔神提督、ここが貴様の墓場だっ！」
スーパー1の攻撃は続く。彼は次第に押されてきた。
「だがのう」
しかし彼はまだ余裕があった。
「あしにも切り札があるのじゃ」
彼はそう言うと間合いを離し胸に手を当てた。
「行くぞっ！」
そう叫ぶと全身が光った。鎧の光がさらに強くなった。
「ムッ！？」
スーパー1はそれを見て思わず声を漏らした。今までとは雰囲気が異なると感じた。
「行くぞ、スーパー1」
魔神提督は再び剣を構えた。そしてスーパー1に切りかかってきた。
「ウォッ！」

スーパー1はその剣裁きを見て思わず唸った。先程までとは全く違っていた。
速かった。それだけではない。力も相当なものであった。
「フフフ」
魔神提督は笑っていた。まるでその力を楽しんでいるようだ。
「どうじゃ、この剣は」
そして次々と剣撃を繰り出す。スーパー1はそれに対して防戦一方であった。
「馬鹿な、先程までとは動きが違い過ぎる」
「わしもパワーアップしたのだ。貴様の知らぬうちにな」
彼は自信に満ちた笑いを浮かべながら言った。
「パワーアップ!?」
「そうじゃ、今それを味あわせて死なせてやるぞ!」
そう言うと剣を振り下ろした。
スーパー1は後ろに跳び退きそれをかわそうとする。だが一瞬遅れた。剣が胸を掠めた。
「グッ・・・・・」
致命傷ではなかったが傷を受けた。思わず怯む。
「ライダーーッ!」
竜が救援に向かおうとする。だがそこに魔神提督は左腕を飛ばしてきた。
「うわっ!」
その腕に掴まれた。竜は壁に押さえ付けられ動けなくなった。
「フフフフ」
魔神提督は左腕を再生させた。そして今度はその腕をスーパー1に向けて放った。
「クッ・・・・・」
スーパー1も壁に押さえ付けられた。身動きがとれなかった。
「その腕は時限爆弾になっておる」
魔神提督は動けない二人をせせら笑いながら言った。

「そこで基地と共に滅ぶがいい。貴様等が捜し求めていた基地と共にな」

そう言うと踵を返した。

「クッ、待て！」

「これで貴様は終わりだ。今更待つ馬鹿が何処にいる」

彼はそう言うと姿を消した。戦闘員達も後に続く。

古都の鬼神その十一

「まずい、ライダー、このままでは・・・・・・」
竜はスーパー1に顔を向けて言った。
「大丈夫です」
見れば彼はパワーハンドに変えている。そしてそれで自分を押さえ付ける腕を引き剥がした。
「竜さんのも」
彼を押さえ付ける腕も剥がした。
「行きましょう」
「はい」
彼はその時スーパー1の五つの腕の力を実感した。そのおかげで助かったのだから。
基地を脱出した魔神提督はゴンドラ型の船でメナム川を降っていた。
「もう爆発した頃か」
夜になっていた。黄金色の満月が川に映っている。
「はい」
同じ船に乗る戦闘員が時計を見て答えた。
「そうか。これでスーパー1も最後だな。バンコクが奴の墓場となったのだ」
彼はそれを聞き満足したように笑った。
メナム川は本来の名をチャオプラヤ川という。穀倉地帯であるタイを支える豊かな川だ。この川なくしてタイはないと言っても過言ではない。
「基地は惜しいが仕方ない。ライダー一人と引き換えならば諦めがつく」
彼は基地のあった方を振り返って言った。
「次の基地の場所を決めなくてはな。何処がいいかだ」

「その心配はない！」
そこで何者かの声がした。
「その声はっ！？」
魔神提督は声がした方を見た。
右の岸である。そこに彼はいた。
青いマシン、ブルーバージョンに乗っている。彼はその上から魔神提督達を見ていた。
「沖一也、生きておったか」
「何度でも言おう、貴様等がいる限りライダーは不滅だっ！」
そして彼はマシンの上から変身の構えを取った。

変・・・・・・
右腕を上から後ろに持っていく。その平は半ば開き指は獣のように立てている。左腕は腰の下で前にある。手の平は右手と同じ形である。
右腕を前に出す。左手をされに添える。
身体が黒いバトルボディに覆われる。胸や手袋、ブーツは銀である。
・・・・・・身
両手を手首のところで付けゆっくりと前に出す。そしてそれを時計回りに百八十度回転させる。
すると顔の右半分が銀の仮面に覆われる。左半分も。その目は真紅である。

光がマシンを包んだ。そして宇宙を駆るライダーがそこに現われた。
「トォッ！」
スーパー1は跳んだ。そして魔神提督の船に跳び乗ってきた。
「クッ、しぶとい奴だ！」
魔神提督は戦闘員達を差し向ける。怪人もその中にいる。

「アウォーーーーッ！」
デストロンの射撃怪人ウォーターガントドである。怪人はスーパー1に向けて左腕の水中銃を放ってきた。
「フンッ！」
スーパー1はそれを身を捻ってかわした。そして戦闘員達を蹴散らし川の中に落としながら腕を替えた。
「チェーーーンジ、レーーダーーハァーーーーンドッ！」
金色の腕に変わった。スーパー1はその腕を怪人に向けた。
「喰らえっ！」
そしてその腕からミサイルを放った。
スーパー1のレーダーハンドに装着されているミサイルは武器にもなるかってこれにより怪人を倒したことがある。今またそれをおこなったのだ。
ミサイルは怪人の顔を直撃した。急所であった。
「グウオオオッ！」
ウォーターガントドは叫び声をあげ川の中に落ちた。そしてそのまま水中で爆発した。
「やりおったな」
魔神提督はその爆発に顔を向けたがスーパー1に顔を戻して言った。
「魔神提督、ここで決着を着けてやる！」
戦闘員達を全て倒したスーパー1は腕を銀のスーパーハンドに戻して言った。
「フン、墓場が基地から川に変わっただけだ」
魔神提督はそう言うと腰から剣を引き抜いた。
「今度こそその首落としてくれるっ！」
剣を構え間合いを詰める。スーパー1も巧みな足裁きをしつつジリジリと間合いを詰める。
スーパー1が拳を繰り出した。魔神提督はそれをかわした。
「ムンッ！」

気合と共に剣を横に一閃させる。スーパー1はそれを上に跳びかわした。
「トォッ！」
魔神提督の上を跳び宙返りする。そして船の縁に着地した。見事な身のこなしである。
「今のをかわすとはな」
「知っている筈だ、ライダーに一度見せた技は通用しないと」
「言うのう、ではこれはどうじゃっ！」
剣を収め右手首を外す。そしてそこから機銃で掃射をかける。
「ムッ！」
それは船の縁やスーパー1の周りを撃った。水面を銃弾が走る。
「これだけではないぞ」
今度は口から牙を出した。そしてそれをスーパー1に投げ付ける。
「ウォッ！」
それは爆弾であった。スーパー1は危ないところで上に跳び難を逃れた。
「まさかこれ程多彩な攻撃を持っているとは」
スーパー1は着地して構えを取り直しつつ言った。

古都の鬼神その十二

「わしが改造人間を正体に持たぬから甘く見ておったか」
魔神提督はスーパー1に対し不敵な声で言った。
「わしはこの姿しかない。だがのう」
そしてニヤリ、と笑った。
「この姿が改造人間と同じ力を持っておるのだ」
「クッ・・・・・・」
「わしはこの身体のほぼ全てが機械となっておる。そう、改造人間なのじゃよ」
彼は心臓と頭脳以外は機械なのである。
「姿形だけで判断は出来ん。それを死んで理解するがいい」
そう言うと再び機銃を放ってきた。
「死ねィ、スーパー1！」
だがスーパー1はそれをかわした。そして水面へ向かう。
「水中か。ならばこれを受けよ！」
そして再び牙を取り出す。その時だった。
「ムッ！」
魔神提督は投げようとしたところで動きを止めた。スーパー1は水中には向かわなかったのである。
彼は水面にいた。何とその上に立っていたのだ。
「これはどういうことだ・・・・・・」
魔神提督はそれを見て思わず呆然となった。
「マシンにも乗っておらぬというのに」
「魔神提督、貴様は重大なことを忘れていた」
水面に立つスーパー1は彼を指差して言った。
「俺は重力を調節することが出来る。だから水面に立つことも可能なのだ」
「クッ、そうであった。五つの腕と赤心少林拳だけではなかったの

だったな」
「そしてこれはもう一つ俺に素晴らしい力を与えてくれている。今からそれを見せてやる！」
彼はそう言うと跳んだ。
高い何処までも登っていく。まるでスカイライダーのセイリングジャンプのようだ。
「まさか・・・・・・」
魔神提督は上を見上げて呟いた。
「そのまさかだ！」
スーパー1は上空で叫んだ。その高さは最早雲を掴まんばかりであった。
「喰らえ・・・・・・」
そこから急降下する。風を切り凄まじい唸り声が響く。
「スーパーライダァーーーー」
空中で型をとる。赤心少林拳の型だ。
「月面宙返りキィーーーーック！」
そして蹴りを放つ。それは魔神提督の胸を直撃した。
「グフウゥッ・・・・・・」
それでも彼は立っていた。だが全身から煙を噴き出していた。かなりのダメージを受けていることは明らかだった。
「恐ろしいまでの威力だ。まさかパワーアップしたわしまで倒すとはな」
「魔神提督、確かに貴様は強かった」
船に着地したスーパー1は彼に対し言った。
「だが俺が重力を操れることを忘れていた。そしてそれから何を出すのかも」
「確かにな・・・・・・」
彼は口から煙を出しながら言った。
「わしの負けだな。最早心臓もズタズタにされてしまった」
見れば左胸が破損している。先程の蹴りで心臓を潰されたらしい。

「最後位は大人しく死んでやろう。生き返ることも出来ぬしな」
彼はそう言うとスーパー1から間合いを離した。
「筑波洋に伝えておけ。貴様を倒せなかったのが心残りだったとな」
「わかった」
スーパー1はその申し出を受け入れた。
「ならばよい。ではわしも去るとしよう」
そして川の中に身を躍らせた。
「偉大なるバダンの首領に栄光あれーーーーっ！」
そして彼は川の中に消えた。暫くしてその中で大爆発が起こった。
「ネオショッカーを支えた大幹部の最後か」
スーパー1はその爆発を船の上から見ていた。やがて水面は落ち着きを取り戻し戦いの幕が降りたことを告げた。

古都の鬼神その十三

タイでの戦いは終わった。沖と竜はそれを例の屋台で祝っていた。
「お兄さん達機嫌いいね」
それを見た兄ちゃんの一人が言った。
「うん、ちょっとね」
沖はそれに対し笑顔で答えた。
「機嫌いいならどしどし注文してくれよ」
もう一人が言った。
「わかってるよ、じゃんじゃん持って来てくれよ」
沖はそれに対してそう言った。待つまでもなく料理が山のように運ばれて来る。
二人はそれを食べる。ビールも注文する。
「これでこの料理ともお別れだと思うとなあ」
沖はタイ風カレーを食べながら言った。
「少し残念ですね」
竜もそれに同意した。彼は魚料理を口にしている。
「まあ心配いらないって。俺達すぐにでっかい店持つからさ」
「そうそう、それを楽しみにしてくれよ」
店の兄ちゃん達はそんな彼等に対し笑顔でそう言った。
「だったらいいけれどな」
「ついでにモグリの仕事からも足を洗ってくれれば」
二人は言葉を返した。
「マイペンライ、マイペンライ」
だがそれに対する彼等の返事はいつもこれである。
「店が立ったら止めるよ。そして店を大きくするんだ」
「何時かでっかいレストランを建ててやるよ」
「期待しているよ」
二人は微笑んでそう言った。後に本当に大きな店になる。世の中

とはわからないものである。
死神博士は魔神提督が敗れたという話をスペインで聞いていた。
「そうか」
彼はその時バルセロナの闘牛場にいた。
「その強さはどうであった」
彼はスーツに身を包んだサングラスの男に対して問うた。
「かなりのものだったとか。一度はスーパー1を退けたらしいです」
そのサングラスの男は小声で彼の耳に囁きかけた。
「成程な」
彼はそれを聞き頷いた。
「とりあえずは成功だったと見てよいな」
「はい」
サングラスの男はそう答えた。
「フフフ」
死神博士はそれを聞くと不敵に笑った。
「どうやら私の腕はまだまだ衰えてはおらぬらしい」
そう言うと席を立った。
「面白い。気が乗ってきた。すぐに戻るとするか」
「どちらにですか」
「決まっている。研究室だ。すぐに強化に移るぞ」
「ハッ」
死神博士はサングラスの男を引き連れ闘牛場をあとにした。
「あの若造共に敗れるわけにはいかぬ。私の力をもってすればどのようなものでも作れる」
彼はその不敵に自信に満ちた笑みを浮かべたままであった。
「バダンの若き天才達か。どのような者達かは知らぬが私を越えられるかな」
そして彼はバルセロナから消えた。スペインの空は何処までも晴れ渡り赤い太陽が照らしていたが彼のその笑みは陰惨なものであった。

古都の鬼神　　完

2004・5・2

宮殿の人狼その一

宮殿の人狼

ゼネラルモンスターはその時シリアゴラン高原にいた。
この地はイスラエルとシリアの激戦地であった。この地を巡りシオンの民と『シリアの獅子』と謳われたアサドは死闘を繰り返した。
いまだにこの地は緊張がくすぶっている。停戦を監視する為国連からＰＫＯが派遣されている。この中には我が国の自衛隊も含まれている。
「あの者達までいるとはな」
彼は眼下でせっせと働く青いベレー帽の者達を見ながら呟いた。
「どうした、何か思い入れでもあるのか」
そこに誰かがやって来た。
「お主か」
それはゾル大佐であった。
「俺もお主もこの地には何かと縁があるからな。あの者達もいることだし」
大佐はそう言うと右手に持つ鞭で高原の遠くを指差した。
自衛官達とは反対側のその場所にはイスラエル軍がいた。独特の形をした戦車が走り回っている。
「今はあの連中にこれといった感情はないが」
二人はかってナチスの将校であった。戦犯として追われたこともある。
「中東にいた時はあの連中とも渡り合ったな」
「うむ」
ゾル大佐はショッカーで、ゼネラルモンスターはネオショッカーでそれぞれ中近東支部長を務めていた。そしてこの地で数多くの功績をあげている。

「モサドの者達をよく返り討ちにしたものよ」
「私はむしろ原理主義者達との戦いが多かったがな」
大佐とゼネラルモンスターは口に笑みを浮かべて語り合っている。
彼等にとっては誇らしい戦績なのである。
「残念だが俺はイギリスに向かう。後のことは頼んだぞ」
ゾル大佐は言った。
「うむ、任せておけ」
ゼネラルモンスターはそれに対して頷いた。
「この中東は私が戦乱の渦に落としてやる」
「フフフ、期待しているぞ」
大佐は満面に笑みをたたえた。まるで血に餓えた肉食獣の様な笑みである。
「ところでだ」
大佐はここで表情を戻した。
「魔神提督の話は聞いているな」
「ああ」
ゼネラルモンスターは答えた。
「タイで仮面ライダースーパー1に敗れたらしいな」
「うむ、タイでの基地建設は失敗に終わった。シンガポールに続きあの場所での基地建設は再び失敗した」
「そうか」
ゼネラルモンスターはそれを聞き目に何かを宿らせた。
「あの男も死んだか。長い因縁があったが」
彼と魔神提督はネオショッカーで宿敵関係にあったのだ。
「借りを返すことは出来なかったか」
「だがお主には一人倒さねばならん男がいる」
「わかっている」
ゼネラルモンスターはゾル大佐のその言葉に頷いた。
「それは俺にも言えることだがな」
「お主はどちらを倒すつもりだ」

「それは決まっている、と言いたいところだが」
ゾル大佐はここで言葉を切った。
「両方倒さねばならん。どちらを倒すという問題ではない」
「そうか」
「俺にとっては仮面ライダーはどちらも宿敵だ。両方共倒さねばならない敵だ」
その目には炎が宿っていた。
「ではな。俺はロンドンでお主の活躍を見守るとしよう」
「うむ、達者でな」
ゾル大佐はそこで姿を消した。あとにはゼネラルモンスターだけが残った。
「あの者は既に行っているか」
ふともう一人の男のことを考えた。
「フランスでの戦いだというが。さてどのようなことをしてくれるか」
彼はそう言うとゴラン高原から姿を消した。そして自らの基地へ戻っていった。
フランス、欧州の指導的な役割をドイツやイギリスと共に長い間果たしてきた国である。欧州屈指の農業国でありその産業は多くの分野で世界に知られている。
特に文化は彼等の自慢するところである。バロックやロココといった貴族文化だけでなく文学や哲学等でも欧州の文化の中心となってきた。
芸術でもそうである。絵画や彫刻等その粋がルーブル美術館に収められている。ヒトラーがここに来れたことは一生で最も嬉しいことだと言ったこの美術館は全てを見回るだけで四日かかると言われている。
「けれどそれだけじゃないのよね、フランスの誇る文化は」
ルリ子はパリオペラ座から出てきて言った。
「オペラとか音楽でも有名なのよ」

彼女は文学部出身でありこうしたことには詳しい。とりわけ音楽には造詣が深い。

「しかし」

隣にいる本郷猛は少し首を捻った。

「フランスのオペラはイタリアやドイツのもの程あまり知られてはいないと思うのだけれど」

「そういえばそうね」

ルリ子は本郷の言葉に相槌を打った。

「ビゼーとかオッフェンバック位かしら」

「だろう、カルメンはどの国でも上演されるけれど」

カルメンはビゼーの代表作である。メリメの小説を題材にしたこの作品は初演の時こそ不評であったが今では最も名の知られているオペラの一つである。

「長い間フランスは見る方だったしね。何処かで作るものじゃないって意識があるのかしら」

「俺はマイアベーアが好きだけれどあれは何かと言われてるしな」

「グランドオペラは最近見直されてきているわよ」

「ううむ・・・・・」

二人はそんな話をしながらオペラ座を後にした。彼等は今パリにいる。ここにバダンの影があるとインターポールからの情報が入ったのだ。

宮殿の人狼その二

この街は多くの人々がいる。住んでいる市民達だけでなく観光客や留学生。フランス政府もここにいある。他には欧州にその名を知られたロスチャイルド家のパリ分家もいる。あらゆる分野で欧州の中心の一つなのだ。

この地で若し何かあれば・・・・・。欧州は忽ち大混乱に陥るだろう。だからこそ本郷とルリ子はここに来たのだ。

「そういえば猛さんパリには何度も来ているのよね」

「ショッカーとの戦いの時からね」

彼は欧州で死神博士と死闘を繰り返していたのだ。

「その後も何度か来たな。いつも戦ってばかりだったが」

彼はそこで腕を組んだ。

「たまには戦い以外で来たいものだ」

「それはバダンを倒してから言いましょ」

「うん。ルリ子さんはしっかりしているな」

「猛さんが浮世離れし過ぎているのよ」

ルリ子はそんな本郷に対し微笑んだ。そして二人はそのままセーヌ河の方へ向かった。

セーヌ河はパリを流れる河である。古くからこの街に美しい景観だけでなく水運により多くのものをもたらしてきた。フランス革命の原因は寒波によりこの河が凍結し穀物が運べなくなったことであった。

今二人はその石橋の上を歩いていた。その両端には枯れた木々が立ち並んでいる。

「詩的な風景ね」

「そうかな」

本郷はルリ子の言葉に首をかしげた。

「もうっ、猛さんってこうしたことには鈍感なのね」

「俺はどちらかというと日本の景色の方が好きなんだけれど」
「好みの問題じゃあしょうがないかな」
「すまない、こればかりはどうしようもない」
本郷はルリ子に口を尖らされながら橋の上を歩いていた。そこへ誰かが来た。
「本郷猛と緑川ルリ子だな」
それは黒服に身を包み帽子を目深に被った男だった。
「そうですが」
本郷はその男の怪しげな様子に警戒しつつ答えた。
「そうか。ならば問題ない」
男はくぐもった声でそう言った。
「死ね」
そう言うと服を脱いだ。そして何かを投げて来た。
「ムッ！」
本郷はそれをジャンプでかわした。橋の手摺りの上に着地した。
「バダンか！」
「いかにも」
男の正体は怪人であった。ショッカーのオーロラ怪人カメストーンである。
「貴様の命、貰いに来た」
「何をっ！」
「そして来たのは俺だけではない」
「何っ！？」
その時だった。橋の下から何かが跳んで来た。
「ウォッ！」
それは何か黒いものであった。本郷の首を掴むとそのまま河の中に引き摺り込んだ。
「猛さんっ！」
ルリ子は驚いて本郷を助けようとする。だがそれは間に合わず本郷はそのまま河の中へ消えていった。

「エエエエエ」
カメストーンは無気味な笑い声を出しながらルリ子に近付いて来る。
「無駄だ、本郷猛は助からぬ」
彼は笑い声に劣らぬ無気味な声でルリ子に対して言った。
「あの者の髪の毛から逃れた者はおらん」
河の中から一体の怪人が飛び出てきた。
「ヒッ・・・・・・」
怪人のその醜悪な姿を見てルリ子は思わず引いた。ネオショッカーの鬼火怪人クチユウレイであった。
「クァーーーー」
怪人は無気味な叫び声を出しながらルリ子に近寄って来る。彼女は前後から怪人に取り囲まれた。
「緑川ルリ子よ」
そこで後ろから声がした。
「こうして会うのははじめてかな」
左右に戦闘員達を従えたその男は言った。
「オオカミ長官・・・・・・！」
「いかにも」
オオカミ長官はルリ子に名を呼ばれ悠然とした態度で答えた。
「流石に俺のことは知っているか。誇り高き狼男の末裔を」
「知らないとでも思っているの！？」
ルリ子は左右を怪人達に取り囲まれながらも毅然と彼を睨みつけて言った。
「貴方のことは色々と聞いているわよ」
「ふむ、それはこちらとて同じことだ」
オオカミ長官は右手に持つステッキを弄びながら言った。
「ショッカーの時から我々に対し刃向かってきた女、それを忘れたことなどない」
そう言うと目に残忍な光を宿らせた。

「生け贄には丁度いい。我が力をより強くする為にな」
「クッ・・・・・・」
ルリ子は左右から怪人達に押さえられた。

宮殿の人狼その三

「さて、と覚悟はいいな」
長官はなおも彼女に対し言葉を続ける。
「今ここで偉大なる祖先に捧げてもよいが風情に欠ける。生け贄を捧げるにはより素晴らしい場所がある」
彼はそう言うとパリの南西の方角に目をやった。
「そこで貴様を生け贄としよう。美しい女はそれだけで価値がある」
「待てっ！」
そこで橋の下から声がした。
「生きていたか」
オオカミ長官はそれを聞いて顔をそちらに向けた。
「この程度で死ぬとは全く思っていなかったがな」
そこには仮面ライダー一号がいた。
「だがそうでなくては面白くはない」
オオカミ長官は彼を睨みつける一号に対し悠然とした態度を崩さない。
「女はとりあえずは放っておけ」
彼は怪人達に対し命令した。
「まずはライダーからだ」
「ハッ」
怪人達はそれに従い左右に散った。ライダーも橋の上に降りて来た。
「かかれっ、まずはライダーから先だっ！」
オオカミ長官がステッキを振るう。それに従い怪人と戦闘員達が一斉に動いた。
「エエエエエーーーーッ！」
まずはカメストーンが来た。怪人は左手からオーロラを放つ。
「トォッ！」

ライダーはそれを上に跳躍してかわす。そこにクチユウレイが襲い掛かる。怪人は歯を投げ付けながら空中でライダーに迫る。
「ムッ」
ライダーはその動きを冷静に見ていた。そして歯をかわしつつ怪人の動きを冷静に見ていた。
「来るな」
爪で切り裂かんとしてきた。ライダーはその爪をかわし逆にその手を取った。
「ライダァーーーきりもみシューーーートォッ！」
そして頭上で激しく回転させ投げ飛ばす。怪人は地面に叩き付けられ爆死した。
「今度は貴様だっ！」
そしてカメストーンと対峙する。その周りを戦闘員達が取り囲む。
「ライダー、戦闘員は私に任せてっ！」
ルリ子がその脇に来た。そしてライダーに迫る戦闘員達を次々と倒していく。
「頼むっ！」
ライダーは彼女のサポートを受けつつ怪人に迫る。怪人はその右手にサーベルを握っている。
「エエエエエ」
そして奇妙な叫び声を再び発する。次第に間合いを詰めていく。
斬りかかった。ライダーはそれを後ろにのけぞってかわした。
「ムンッ！」
その力を利用して空中で後転する。足の先でそのサーベルを蹴った。
「エッ！？」
怪人の手からサーベルが飛んだ。それは空中で回転し地面に突き刺さった。
「今度はこちらの番だ」
ライダーはそう言うと間合いを一気に詰めた。武器を失い狼狽し

た怪人はそれに対処できなかった。
「トォッ！」
まずはチョップを繰り出した。それは怪人の喉を撃った。
ライダーの攻撃は終わらない。さらに拳を繰り出し膝で蹴る。これで怪人の姿勢は完全に崩れた。そこに一気に畳み掛ける。
「ライダァーーーーパァーーーーンチッ！」
拳を連続で繰り出した。そしてそれで怪人を激しく撃った。これで決まりであった。
怪人は倒れた。そしてカメストーンも爆死した。
「力もかなり上がっているようだな」
オオカミ長官は今しがた怪人をしとめたライダーの拳を見て言った。
「当然だ、何時までも同じところに留まっているライダーではない」
ライダーは彼を指差してそう言った。
「ふむ、確かにな」
彼はステッキを相変わらず弄びながらそう言った。
「だが今見ただけでは断定は出来ん」
そう言うとライダーと正対した。
「俺も一度手合わせしておこうか」
「望むところだ」
こうして両者の闘いがはじまった。
まずはオオカミ長官が牙を出してきた。
「喰らえっ！」
おしてその牙を投げ付けて来た。
「ムッ！」
ライダーは横に動いた。それまでいた場所が爆発に包まれる。
「ルリ子さん、安全な場所に」
「はい」
ライダーは彼女を避難させた。そして改めて長官と対峙する。

宮殿の人狼その四

「今のはほんの小手調べ」
長官は余裕を保ったまま言う。
「これはどうかな」
今度はステッキを手にライダーに挑みかかって来た。
「ムッ」
ライダーはステッキを防いだ。そして拳を繰り出す。
「甘いな」
だが長官は慌てない。冷静にその拳をステッキで防ぎ逆に膝蹴りを放つ。
ライダーはそれを己の膝で相殺した。そして手刀を繰り出した。
「やはりそうきたか」
長官は後ろにステップしてそれをかわした。そして間合いを離した。
「これ位でいいだろう」
彼は不敵な笑みと共に言った。
「貴様の腕前はあらためてよくわかった」
「ここで決着をつけるのではないのか！？」
「残念だったな。俺は場所を選ぶのだ」
彼はクールな声で言った。
「貴様との決着をつけるべき場所はここではない。そこで貴様を倒してやる」
「そうか」
「もっともそれは貴様が俺の作戦を阻止できたらの話だがな」
「作戦！？」
「いずれわかることだ」
オオカミ長官はそれに対して言葉を返した。
「このパリで死ぬか俺に倒されるか。どのみち貴様はフランスを墓

場とすることになる」
「そうはさせんっ！」
「そうやって強気でいられるのも今のうちだな」
彼は余裕の声で反論した。
「教会にでも行っておけ。この世に別れを告げる為にな」
彼はそう言うと姿を消した。
「偉大なる狼男の恐ろしさを味わいながらな」
オオカミ長官の気配が消えた。ライダーは変身を解きそれを見守っていた。
「倒れるのはオオカミ長官、貴様の方だ」
本郷は毅然とした声で言った。その目には強い光が宿っていた。
「フフフフ、それでは作戦の最終準備をはじめるとするか」
基地に戻ったオオカミ長官は指令室に入ると部下達の敬礼を受けながら言った。
「怪人達の準備はいいか」
「ハッ、既に長官のご指示を待つだけです」
戦闘員の一人が敬礼して答えた。
「そうか。すぐに全員指令室に呼べ」
「わかりました」
彼はそれに従いマイクの前に向かった。そして怪人達を呼び寄せた。
「花の都か」
彼はモニターに映るパリ市内を見ながら言った。
「もうすぐこの街が血により美しく塗られることになる」
「あの時のようにですな」
ここで戦闘員の一人が言った。
「あの時といっても色々あるがな」
オオカミ長官は機嫌がよかった。彼は戦闘員の言葉に対し上機嫌で返した。
「サン＝バルテルミーの時もそうだった」

ヴァロア朝末期新教と旧教の対立が引き金となった。事件である。彼等の対立が遂に爆発し旧教徒達が新教徒達を虐殺した事件である。

「フランス革命の時も」

この時はフランス全土が血に覆われた。百万人以上が死んだと言われる。とりわけジャコバン派の粛清は酸鼻を極めた。狂信的な彼等により銃弾、そしてギロチンの前に死した者は数えられない。

「コミューンやその他の革命騒ぎもあったな。この街はその外観とは異なり血により塗られた街なのだ」

それは歴史がよく物語っていた。パリもまた人間達の血生臭い抗争の舞台の一つであったのだ。

「だがその中で俺が最も気に入っている話は」

オオカミ長官の目が喜びに満ちる。

「クルトーに攻められた時だな」

クルトーとはかって冬のパリを何年にも渡って脅かした巨大な魔王である。彼は人ではなく狼であった。その群れを率いパリを攻めていたのだ。

宮殿の人狼その五

「一人の騎士と相討ちになったというがそれまでこの街を血と恐怖で覆い尽したのだ。人間共をその牙で支配したのだ」
「誇り高い話ですな」
クルトーの正体は普通の狼ではなかった。彼は魔界より抜け出てきた魔性の者だったのだ。言わばオオカミ長官の眷属である。
「そうだ。誇りある我等狼男の一族の中でも特に知られた英雄の一人だ」
彼の声は誇らしげなものであった。
「そうですな、我々は今またパリを攻めようとしております」
「今度はあの時の比ではないぞ。何しろ何百万の人間共の血が流れるのだからな」
「はい、真に楽しみです」
「フム、何百万の人間共の血か」
そこで誰かの声がした。
「貴様か」
オオカミ長官は声がした方に顔を向けた。
「うむ、折角だから観戦に来てやったのだ」
指令室の中に火の玉が現われた。その中から百目タイタンが現われた。
「久し振りだな」
「ウム、お互い元気そうで何よりだ」
両者は心にない挨拶をした。
「パリを血で覆うと言ったが」
「今からな」
「そうか。美しいこの街が紅く彩られるか」
タイタンはその無数の眼でモニターに映る市街を眺めながら言った。

「実に楽しみなことだ。しかし」
タイタンはここで言葉をつけ加えた。
「俺の好みとしては全てを焼き尽くすのだがな」
「そして人間共が炎の中で苦しむのを楽しむということか」
「そういうことだ。やはり赤といえば炎だからな」
「それは貴様の好みだがな」
オオカミ長官は言葉に僅かの皮肉を込めて言った。
「俺は血で染める。狼にとって血は月と同じく力の源だ」
「そうか。月はないがな」
「月は切り札だ」
彼は言った。
「ライダーを倒すのは月の下でだ。その時まで俺は動かん」
「それまでは他の怪人達に任せるのか」
「そういうことだ」
「成程な」
彼は何かを言葉の中に含んでいた。
「どちらにしろ今はここにいさせてもらうとするか。貴様の戦いぶりをとくと見せてもらおう」
「何なら席を用意しておくが」
「いい。立っているのも気分がいい」
「そうか」
タイタンは懐から葉巻を取り出した。そして指から火を出しそれを点ける。
「俺はこれさえあれば他には何もいらんしな」
「その嗜好も相変わらずだな」
「美味いぞ。一本どうだ？」
「俺はいい」
「そうか」
そこで指令室のシャッターが開いた。そこから怪人達が入って来た。

「来たか」
数体の怪人達が中に入る。そしてオオカミ長官に敬礼した。
「よく来てくれた」
彼は怪人達に対して言った。
「かねてからの計画通り頼むぞ、いいな」
怪人達は無言で頷いた。
「ならば行くがいい。そしてパリを血の海に変えるのだ」
怪人達は敬礼し指令室を後にした。そこにいた戦闘員達のうち数人がそれに続く。
「おれも用意をしておくか」
オオカミ長官もそう言うと指令室を後にしようとする。
「何処へ行くつもりだ？」
タイタンは彼に対して問うた。
「ライダーを倒すのに相応しい場所だ」
彼は不敵な声でこそう答えた。
「そうか」
タイタンは深く尋ねようとしなかった。
「では俺はここでずっと見せてもらうことにしよう。貴様の戦いぶりを」
「うむ。期待しているがいい」
オオカミ長官はそう言うとその場を後にした。見れば部屋にはタイタンだけが残っている。
「さてと」
彼はモニターを複数つけた。
「ここで一部始終をしっかりと見せてもらうか」
無数の目が光る。彼はその目でパリをしかと見ていた。

宮殿の人狼その六

「猛さん」
その時ルリ子はモンマルトルのカフェで本郷と共にいた。
「さっきインターポールから情報が入ったんだけれど」
「何て！？」
本郷はその言葉にすぐに反応した。コーヒーから口を離す。
「オオカミ長官のことなんだけれど」
「うん」
本郷は思わず身を乗り出した。
「どうやらパリに総攻撃を仕掛けるつもりらしいわ」
「総攻撃か。一体どうやって」
「何でも怪人達を使って。かなりの戦力が動員されるみたいよ」
「そうか。これは厄介なことになったな」
本郷は眉を歪めて言った。
「インターポールからも援軍がやって来ているわ。ヨーロッパ中から腕利きばかり呼んでいるみたいよ」
「そうか、それは一体何時のことなんだい！？」
「そこまではけれど既にかなりの数のバダンの連中が潜り込んでいるらしいわ」
「まずいな。一刻の猶予も許されない」
本郷の顔は完全に悪と戦う戦士のそれとなっていた。
「ルリ子さん、こうしてはいられない、すぐに動こう」
「ええ。けれどどうやって！？」
ルリ子は本郷の何時にない性急な様子に戸惑っていた。
「俺には怪人の居場所が大体わかるんだ」
「あ・・・・・」
彼女はOシグナルのことを思い出した。
「それだけじゃない。奴等の動きも大体わかる。ここは任せてくれ」

「ええ」
そして本郷の頭脳も思い出した。彼を支えるのは何もその技と力だけではない。かってその天才的な頭脳をショッカーに狙われたことからもわかる通り彼はライダー達の中でも特に頭の回転が速かった。そして勘も長きに渡る悪との戦いで鍛えられていた。
「ルリ子さんはインターポールに協力してくれ。俺は独自にバダンの連中を各個撃破していく」
彼はそう言うと席を立った。
「じゃあ」
そして停めてあるバイクに向かう。
「猛さん」
ルリ子は彼の背中に声をかけた。
「何だい！？」
本郷は振り向いた。
「・・・・・いえ仮面ライダー」
彼女は言い直した。彼の心は既にライダーとなっていたのだから。
「勝ってね」
「有り難う」
本郷、いや仮面ライダー一号はそう言うとバイクに乗った。そして戦場へ向かった。
「頼んだわよ、ライダー」
彼は疾風となりその場を去った。ルリ子はその後ろ姿を見送っていた。
パリの数多い名物の中にエッフェル塔がある。これは一八八九年に開かれた第四回パリの万国博覧会に際してギュスタフ＝エッフェルにより建てられた。建設当初は景観を損ねる等といった多くの批判があったが電波通信塔として有効なことがわかり市民達に受け入れられた。今ではパリの象徴の一つである。
その下にも観光客達が集まっている。だが今はどうしたことか誰もいない。

「これは一体どういうことだ！？」
そこにやって来た黒服の男達が思わず声をあげた。
「インターポールとフランス政府が退避勧告を出したのだ。テロがあるという理由でな」
そこで塔の上から声がした。
「その声はっ！」
彼等はその声を嫌という程よく知っていた。
「そうだ、貴様等のあるところライダーは必ずやって来る！」
塔の鉄筋の上に両足をかけた仮面ライダー一号がそこにいた。
「ぬうう、仮面ライダー！」
男達は彼の姿を認めて呻く様に叫んだ。
「正体を現わせ、バダンの怪人達よ！」
「望むところだ！」
彼等は服を脱ぎ捨てた。戦闘員達と一体の怪人が現われた。
「パフォーーーーーッ！」
ゴッドの発狂怪人パニックであった。彼は角を振りかざし吠えた。
「行くぞっ！」
ライダーは下に飛び降りた。そして戦いがはじまった。
戦闘員達がサーベルを振るう。ライダーはそのうちの一人からサーベルを奪いそれで彼等を斬り伏せていく。
「今度は貴様だっ！」
そして怪人に向かっていく。パニックは角からミサイルを発射した。
「ムンッ！」
それはサーベルで斬り落とした。そしてそれを投げる。
怪人はそれをマントで防いだ。ライダーはその間に上に跳んでいた。
「喰らえっ！」
ライダーはいきなり技を放ってきた。
「ライダァーーーー月面キィーーーーーーック！」

そして空中で宙返りをし蹴りを放つ。それはパニックの額を直撃した。

「ウオオオーーーーーッ！」

怪人は断末魔の叫び声をあげエッフェル塔の下に倒れ爆死した。

ライダーはそれを見て背を向けた。

「サイクロン！」

そして彼はマシンを呼んだ。何処からか銀色のマシン新サイクロン改が姿を現わした。

「トォッ！」

ライダーはそれに跳び乗った。そして次の戦場へ向かった。

宮殿の人狼その七

モンマルトルの丘は栄華にもよく出る場所である。その観光の中心はサクレ＝クール寺院である。

これは一八七〇年に普仏戦争の後カトリック教徒達により建てられたものである。昔からフランスはカトリックの勢力が強かった。それに対してプロイセンはプロテスタントである。彼等にとっては宗教においても負けたも同然だったのだ。

彼等は信仰とフランスの未来を願いこの寺院を建てた。『キリストの聖心』という意味の名はそこからきている。

白い寺院の中はモザイクで飾られている。だが今その前で激しい戦いが行なわれていた。

「ザーーーーキーーーーー」

その中心にはやはり怪人がいた。デストロンの電流怪人クサリガマテントウである。

「まさか怪人まで出て来るとは・・・・・」

それに対するのはインタポールの捜査官達である。彼等は皆手に得物を持ち怪人や戦闘員達と対峙していた。だが怪人が相手では流石に分が悪く苦戦を強いられていた。

「フフフフフ、我等の存在を忘れていたとでもいうのか」

クサリガマテントウはインターポールの捜査官達を蹴散らしつつ笑った。

「バダンの基幹戦力である怪人達を忘れているとはインターポールも相当迂闊だな」

そこに白い服の男が姿を現わした。

「貴様はっ！」

捜査官達はその男を見て凍りついた。

「だが俺のことは知っているか。少しは見所があるな」

ゼネラルシャドウは彼等の顔を見て機嫌をよくした。

「ゼネラルシャドウ」
だが怪人も戦闘員達も彼の姿を見て驚いていた。
「何故貴方がここに・・・・・・」
彼等はオオカミ長官の部下達である。彼とは別系統に所属している。
「何、ただ諸君等の戦いぶりを見に来ただけだ」
ゼネラルシャドウは不敵に笑った。
「あいつも来たか」
それは基地の指令室から作戦を観戦するタイタンからも確認された。
「作戦の妨害をするつもりはない。安心するがいい」
「しかし」
「俺はすぐに消える。それよりもだ」
彼は寺院の下をサーベルで指し示した。
「御前達を追ってやって来たぞ」
見ればライダーがマシンの乗りこちらにやって来ている。
「健闘を祈る。精々頑張るがいい」
そう言うと自分のマントで身体を包んだ。
「マントフェイドッ！」
彼はマントの中に消えた。丁度その時にライダーが寺院の前にやって来た。
「ゼネラルシャドウは消えたか」
ライダーはマシンから跳び降りて言った。
「だが今はそれはどうでもいい、バダンの改造人間よ、覚悟しろっ！」
そしてクサリガマテントウに向かっていく。
「来たかっ！」
怪人はそれを認めて身構えた。
「貴様はこの俺は倒すっ！」
そして右手からチェーンを出してきた。

「おっと」
ライダーはそれを右にかわした。そこへ左手の鎌が襲い掛かる。
ライダーはその手を掴んだ。そして上に投げ飛ばした。
「トォッ！」
そして自らも跳んだ。そしてその背に攻撃を仕掛ける。
「ライダァーーーニーーーブロォーーーーック！」
膝蹴りを浴びせた。怪人はさらに上空に吹き飛ばされ爆死した。
着地する。そこにはマシンがあった。
「行くぞっ！」
そしてその体当たりで戦闘員達を一掃した。彼は次なる戦場へ向かった。
「やはりな、怪人一体だけでは話にもならんな」
シャドウは寺院の上からそれを見ていた。
「オオカミ長官も戦いがわかっていないと見える」
彼は嘲りを込めた声でそう言った。
「各個撃破。まあ奴の策はこれだけではないと思うが」
彼は姿を消した。ライダーはそれには気付かずマシンで次の戦場に向かっていた。
バスチーユ広場。かってはここに監獄があった。
バスチーユ監獄。絶対王政の象徴と言われた要塞でもあった。
この牢獄は最初は百年戦争の時に宮殿を守る為の砦であった。だが時代が経るにつれ牢獄としても使われた。これはよくあることであった。ローマの聖天使城等もそうである。
ここには主に政治犯が収容された。サディズムの語源となったマルキ＝ド＝サド侯爵もここにいた。生きては帰れぬというのは誤りで貴族が収容されることが多かったせいでもあるが囚人の待遇は悪くはなかった。だが発禁処分を受けた本やサド侯爵の様な思想的に快く思われていない人物が入れられていた為専制政治の象徴とされていたのだ。
革命当時は囚人は数える程しかいなかった。だがその巨大な壁と

大砲を誇示している為パリ市民を威圧していた。
革命における襲撃の話はよく劇的に言われ芸術作品に使われるが実像は違う。政治犯の釈放よりも大砲を退けて欲しかったのだ。
当時のこの監獄の責任者は事態を重くは考えていなかった。最初に話を持って来られた時はもう夜遅いから明日にしてくれと言った。
朝になった。会談の要請が市民側から来た時彼は朝食を摂っていた。食事中だから後にしてくれと言った。彼は別に市民達を敵と思っていなかったし彼等が攻めて来ているとも思っていなかった。実際にそうであった。
そして朝食が終わった。彼は市民側の代表と会った。まあお茶でも飲みながら、ということで穏やかに会談の席に着いた。
代表から話を聞いた時彼はそんなことか、と思った。大砲をどけること位何でもなかった。既にバスチーユは少数の罪人しかなく大砲も旧式なものである。彼は快諾し大砲をしまうように命令した。彼はこんな些細なことで二日越しになるというのもおかしなことだと思った。
だが大砲がしまわれる時市民達はその真下にいたのだ。大砲が後ろに退くのは砲撃する前に砲弾を詰める時である。市民達の誰かが騒ぎだした。
「砲撃して来るぞ！」
それが決め手であった。恐慌状態に陥った市民達は監獄の中に突撃した。そして監獄は陥落し責任者は虐殺されその首は晒しものとなった。これがフランス革命の導火線となるのである。元々は寒波による食糧危機にはじまった革命であるがその実像からは遥かにかけ離れて美化されそして多くの血を流している。
今その監獄はない。広場になり七月革命の記念碑が置かれている。
そこに怪人達がいた。逃げ惑う市民達に襲い掛かっている。
「殺せ、殺せっ！」
その中央にいる怪人が指示を出している。ジンドグマの石鹸怪人シャボヌルンである。

「ここにいる人間共は皆殺しだ、それこそがこのバスチーユに相応しい！」

多くの血が流れた革命の発端である。彼は興奮して戦闘員達に虐殺を督励している。

「待て！」

そこにライダーがやって来た。市民達に襲い掛かろうとする戦闘員達をサイクロンカッターで一掃する。

「イィーーーーーーッ！」

戦闘員達は倒れた。ライダーはマシンから降りると怪人の前に来た。

宮殿の人狼その八

「罪無き人々を殺めることは許さん！」
「ボフォフォフォフォフォフォ」
怪人は彼のその姿を見て嘲笑った。
「これは有り難い、わざわざそちらから死にに来てくれたか」
「どういう意味だ」
「それは・・・・・・」
怪人は右腕をライダーに向けた。
「こういうことだっ！」
そしてそこからシャボンを放って来た。
「ムッ！」
ライダーはそれをかわした。そして間合いを離して身構えた。
「どうだ、俺の攻撃は」
シャボヌルンは誇らしげに言った。
「今度は外さんぞ」
そして再び放とうとする。
「また来るか」
ライダーはそれを見て身構えた。
「ならばっ！」
放たれたシャボンを跳躍でかわした。そして怪人の頭上に襲い掛かる。
「これでどうだっ！」
怪人の頭を両足で掴んだ。そしてそのまま前に倒れる」
「ライダァーーーーヘッドクラッシャアアーーーーーッ！」
一度怪人の頭をコンクリートに打ちつける。そしてその力で再び上にあがりもう一度叩きつける。それで決まりだった。
「ウオオオーーーーーッ！」
怪人は頭を押さえ倒れた。そしてそのまま爆発した。

ライダーはそれを見届けるとその場を風のように去った。そして次なる戦場に向かった。

凱旋門。シャルル＝ド＝ゴール広場にあるこの門はナポレオンが作らせたものである。彼は自身の栄光と勝利を讃える為に作らせたのである。

この門からシャンゼリゼ通りをはじめパリの十二の通りがはじまっている。そしてその門には多くの美しいレリーフが飾られている。

「カオーーーーオゥ」

ゲルショッカーの水素怪人ガラオックスである。彼は凱旋門の上で車の群れを見下ろしていた。

「さて、今こそはじめる時か」

彼はその角に力を込めようとしていた。

「そしてこのパリの交通を破壊してやる」

彼の角から白いガスが放たれようとしたその時であった。

「そうはさせないぞっ！」

そこにライダーが現われた。そしてガラオックスと対峙する。

「クッ、もう来たかライダー！」

怪人はガスを放つことをやめた。そしてライダーと対峙した。

「行くぞっ！」

凱旋門の上で戦いがはじまった。ライダーは怪人にパンチを浴びせた。

「フンッ！」

だが怪人はそれをかわした。そして上空に飛び上がった。

「フフフ、おしかったな」

彼は翼を羽ばたかせながらライダーを見下ろしていた。

「今度はこちらの番だ」

そして彼は指からミサイルを放ってきた。

「ムッ」

ライダーはそれを跳んでかわした。

「そうか、空に留まるつもりか」

彼は怪人を見上げてそう言った。
「ならばこちらにも考えがある」
そして右手を挙げた。
「サイクロンッ！」
シャンゼリゼ通りを銀色のマシンが駆けて来る。ライダーの愛車新サイクロン改だ。
マシンは跳んだ。ライダーはそれに動きを合わせる。
「トォッ！」
そして跳躍した。空中でマシンに飛び乗る。
「サイクロンアターーーーック！」
体当たりを敢行した。それは怪人を直撃した。
ガラオックスは致命傷を受け地に落ちていった。そして空中で爆死した。
ライダーを乗せたマシンはそのまま大空を飛んでいった。そして何処かへ消えていった。
それで終わりであった。バダンのパリ総攻撃はライダーの前に失敗に終わった。
「これで終わりね」
ルリ子はインターポールパリ本部に帰って来た本郷を笑顔で出迎えた。
「いや、まだだ」
しかし本郷の顔は暗かった。
「えっ、もうパリにバダンは残っていないわよ」
彼女はそれを聞いて怪訝そうな顔をした。
「一人残っている、あの男が」
彼は厳しい顔のままそう言った。その時インターポールの事務員が入って来た。
「本郷猛さんですね」
「はい」
本郷は答えた。

「お手紙です」
「俺にですか」
「はい」
手紙を受け取った。そして封を切り中身を読む。
「これは・・・・・・」
それは果たし状であった。差出人はオオカミ長官である。
「どうしたの！？」
ルリ子が尋ねる。
「・・・・・オオカミ長官が今夜決闘を申し込んできた」
「本当！？」
「ああ。場所はベルサイユ宮殿だ」
「ベルサイユ・・・・・・」
太陽王ルイ十四世が建てさせた巨大な宮殿である。パリの南東にある。

宮殿の人狼その九

「そこで待っているそうだ。一人で来いと言っている」
「あのオオカミ長官が・・・・・・」
彼が策謀家であることは彼女もよく知っていた。
「猛さん、やっぱりこれは・・・・・・」
「罠なんじゃないか、と言いたいのだろう」
「ええ」
ルリ子はそれを否定しなかった。かってはあのゼネラルシャドウを陥れようと企んだこともある男である。
「心配はいらない。俺は必ず勝つ」
本郷は心配する彼女を勇気付けるようにして言った。
「けれど・・・・・・」
「大丈夫だ、明日の朝ベルサイユに来ればそれがわかるから」
「信じていいのね」
「勿論だ、俺が嘘を言ったことがあるか」
「いえ」
本郷は決して嘘は言わない。そして約束を破ったこともない。
「明日の朝だ、いいね」
「はい」
ルリ子は頷いた。本郷はそれを見て優しい笑みを浮かべた。
その日の夜本郷はベルサイユ宮殿にやって来た。
この宮殿はルイ十四世が建てさせたものであるがあまりの巨大さの為彼の生きているうちには完成しなかった。完成したのは十九世紀ルイ＝フィリップのオルレアン朝の時代である。その間にフランス革命が起こりブルボン王家も一旦断絶している。ナポレオンが皇帝になり失脚している。この宮殿はそれを栄華の中に見ていた。
第一次世界大戦の終了の場もこの宮殿で設けられた。ドイツはこの宮殿において連合国と講和し多くの領土を失い多額の賠償金を支

払うこととなった。その時の怨みがナチス＝ドイツを誕生させる遠因の一つとなったのだ。

宮殿の中は豪華絢爛な総飾で飾られている。金や銀で目も眩まんばかりであり幾何学の模様や宗教画と共にこの宮殿を彩っている。その中でも最も有名なのが鏡の間である。ルイ十四世の居室であった場所でありここでベルサイユ条約も調印されている。

庭園に面したこの部屋は一七の鏡と窓がある細長い部屋である。天井画はル＝ブランの手によるルイ十四世の生涯を古代風に描いたものである。

本郷猛はその部屋にいた。そして前に進んで行く。

「よく来てくれた、礼を言うぞ」

前から声がした。

「ここにいたか」

本郷はその声を聞き前を見据えて言った。

「フフフ、貴様との闘いに相応しい場所だと思ってな」

オオカミ長官が姿を現わした。

「この宮殿の中でも最も美しい部屋、貴様の死に場所にはもってこいだろうな」

「それはどうかな」

本郷はそれに対して言い返した。

「俺は負けるわけにはいかない」

そして身構えた。

「そうか、ライダーとしての意地か」

「だとしたらどうする」

「来い」

オオカミ長官は一言で言った。

「そんなものが何の役にも立たんということを俺が教えてやる」

「そうか」

本郷はオオカミ長官を見据えた。

「ならば行くぞッ！」

構えを取った。腰からベルトが現われた。

ライダァーーーー・・・・・・

右手を左斜め上からゆっくりと旋回させる。その手刀の手は弧を描いている。

それと共に身体が黒いバトルボディに包まれていく。胸は緑となり手袋とブーツが銀色になる。

変身っ！

右手を拳にし脇に入れる。左手を手刀にし右斜め上に突き出す。

顔がライトグリーンの仮面に覆われる。右から左へと。目が紅くなった。

光が彼の全身を包んだ。そして彼は本郷猛から仮面ライダーとなった。

「行くぞっ！」

ライダーは変身を終えるとすぐにオオカミ長官に立ち向かった。

「フフフ、来たな」

彼は自らに向かって突き進んで来るライダーを余裕の表情で見ていた。

「喰らえっ！」

ライダーはチョップを繰り出した。長官はそれを身をのけぞらしてかわした。

「甘いな」

そして彼は蹴りを出した。

ライダーも蹴りを出す。両者の右脚が激しくぶつかり合った。

「ムウウ・・・・・・」

ライダーはその衝撃を受けて思わず呻いた。だが怯んでいる暇はなかった。

オオカミ長官はステッキを突き出してきた。ライダーはそれをかわし左手で掴んだ。

「ムムム」
両者はステッキで力比べをはじめた。力はライダーの方がやや上であった。そして長官はステッキを離した。
「それは貴様にくれてやろう」
彼は後ろに跳んだ。
「そのかわり本気を出させてもらおう」
彼はそう言うと顔の前で両腕をクロスさせた。
「受けてみよ」
その頭部を覆うユニットに光が宿っていく。
「満月プラズマ光線っ！」
そしてその光をライダーに向けて放ってきた。
「何っ！」
ライダーはその光を見て驚愕した。それは今までの満月プラズマ光線とは比較にならぬものだったのだ。
ライダーは紙一重でそれをかわした。つい先程までいた床が完全に破壊される。
「な・・・・・・」
ライダーはその床を見て驚愕した。何と飴の様に溶けているのだ。
「どうだ、今までのプラズマ光線とは全く違うぞ」
オオカミ長官は高らかに笑いながら言った。
「確かに・・・・・・」
ライダーもそれは認めた。
「しかし何故だ」
「フフフ、知りたいか」
オオカミ長官は自信に満ちた笑みを漏らした。

宮殿の人狼その十

「どうせ貴様はここで死ぬ身、教えてやろう」
そして窓を指差した。
「あの月は一つだけではないのだ」
「どういう意味だ！？」
「鏡を見よ」
彼は今度は鏡を指差した。
「この鏡が月の光を反射する。そして俺に月の光を普通に浴びるより多く与えてくれるのだ」
「クッ、そうだったのか・・・・・・」
「それにより今までとは比較にならぬ程の満月プラズマパワーを手に入れたのだ。最早貴様など相手にもならぬ程にな」
彼は全身にみなぎるその力を感じながら言った。
「仮面ライダー一号よ」
彼はその勝利を確信しためでライダーを見据えて言った。
「貴様はこの俺の栄華の前祝いにここで滅ぼしてやる、感謝するがいい」
彼はそう言うと力をためた。
「最早誰も俺には適わん。俺こそが最強なのだ」
ユニットだけではなかった。全身をその光が覆った。
「喰らえ、満月プラズマ光線っ！」
オオカミ長官の全身が光った。それは凄まじい光の帯となりライダーに襲い掛かる。
「来たか」
ライダーはそれを見ていた。
「フフフ、観念したようだな」
オオカミ長官は彼がさけようともしないのを見て勝利をさらに確信した。

「仮面ライダーよ、砕け散り死ぬがいいっ！」
だがその時であった。ライダーは手に鏡を取った。
「何っ！？」
それは鏡の間に多くある鏡の一つであった。それで光線を受けようというのである。
「馬鹿め、それで俺の満月プラズマ光線が防げるかっ！」
「それはどうかなっ！」
一号は叫んだ。光線はその鏡を直撃した。
「ウォッ！」
凄まじい衝撃がライダーを襲う。だが彼はそれを受け止めた。
「ムンッ！」
そしてその鏡にエネルギーを伝える。鏡がさらに光った。
「何とっ！」
オオカミ長官はそれを見て思わず叫んだ。何と鏡が光を反射したのだ。その衝撃も。
そしてそれを弾き返した。逆にオオカミ長官の足下を狙って来た。
「クッ！」
オオカミ長官はそれを跳躍でかわした。そして空中で身構えた。
「来たか、やはりっ！」
ライダーも跳んでいた。そして空中で拳を繰り出す。
二つの拳が空中で激突した。夜の闇に包まれた宮殿に鈍い衝撃音が響く。
両者は交差して着地した。そして互いに振り向く。
「グッ・・・・・」
だがオオカミ長官はその時一瞬足が揺らいだ。満月プラズマ光線を全力で放出した疲れが出たのだ。
「今だっ！」
それを見過ごすライダーではない。素早く上に跳んだ。
「喰らえっ！」
彼は斜めに跳んでいた。そして部屋の壁を蹴った。

「ライダァーーーーー」
彼はそのままオオカミ長官に向けて弾丸の様に跳んで行く。
「稲妻キィーーーーーック！」
そして蹴りを繰り出した。疾風の様な速さである。
それはオオカミ長官の腹を直撃した。蹴りを入れたライダーはその反動を利用して後ろに跳んだ。
「グウウ・・・・・」
キックを腹にまともに受けた長官は呻き声を出した。そしてガクリ、と片膝を着いた。
「まさかあのような防ぎ方があるとはな」
オオカミ長官は口から血を出しながら言った。
「鏡が貴様の力を反射させ大きくさせると聞いたからな。咄嗟にそれに思いついたのだ」
「フン、貴様に話してしまった俺の迂闊か」
彼は一号の頭脳を侮っていたのだ。
「だが月の力を浴びた俺を倒したことは褒めてやろう」
彼はよろめきながら言った。
「そこまでできたのは貴様がはじめてだ。俺は月の力を浴びれば誰にも負けなかったからな」
「だがそこに慢心が生じたようだな」
「クッ、確かに。だがな」
彼は言葉を続けた。
「それでも俺を破ったことは事実だ。それは褒めてやろう」
そしてニヤリ、と獣の笑みを浮かべた。
「偉大なる狼男の血を引くこの俺をな」
そう言うと立ち上がった。最後の力を振り絞った。
「偉大なる魔界の支配者よ、今こそ貴方のもとへ！」
そう言うと後ろに倒れた。そしてそのまま爆死した。
「欧州の夜の世界の君主もこれで死んだか」
一号はその爆発を見届けて言った。彼の死をもってパリでの仮面

ライダーとバダンの戦いは幕を降ろした。

宮殿の人狼その十一

「フム、敗れたか」
タイタンはその戦いの一部始終をモニターを通して見ていた。
「惜しい男だったがな。自らの力と血脈を過信し過ぎたな」
「そう言っていられる状況なのかな」
そこに誰かが入って来た。
「やはりここにも来たか」
タイタンはその男の姿を認めて言った。
「貴様も暇なことだな。あちこちを飛び回って」
「それはお互い様だ」
ゼネラルシャドウは皮肉に怯むことなくそう言い返した。
「フン、貴様とは目的は違うがな」
「同じだと思うが」
シャドウはあえて挑発する言葉を出した。
「何っ」
そしてタイタンはそれに乗ろうとした。しかし。
「・・・・・フン」
それに乗るのを止めた。
「今貴様を倒しても何の利益もない」
「そうだな。貴様はこれで全ての手駒を失くしてしまったのだし」
「いずれは切り捨てるつもりだった。その手間が省けただけのことだ」
彼はそう言うと懐から葉巻を取り出した。そして指で火を点けた。
「惜しくもない」
「そうか。だがあの男に対抗するには苦しいようだな」
「別にな。機が来ればこちらから出向いて倒してやろうと思っている」
「貴様にそれが出来るかな!?」

シャドウは冷静さを保とうとする彼をさらに挑発した。
「・・・・・さっきから何が言いたい」
タイタンの言葉に怒気が含まれた。
「まあそう怒るな」
彼はそう言うとグラスを取り出した。
「折角だ。一杯やらんか」
「生憎だが俺の飲む酒は決まっていてな。安物は口に合わんのだ」
「残念だな。これは魔界で摂れた銘酒なのだが」
彼はそう言うとグラスにその紅い酒を注ぎ込み口に含んだ。口が血を飲んだように紅くなる。
「そして何の用でここに来た!?」
タイタンはシャドウが酒を飲み終えるのを見てから問うた。
「何、一つ情報が入ってな」
「何だ」
「城茂のことだ」
「あの男か」
タイタンはその無数の眼を光らせた。
「今はインドネシアにいるらしい」
「インドネシア、バリ島にでもいるのか」
「そうだ、そこに二人の同志が向かった」
「二人、か。誰だ」
「磁石団長とヨロイ騎士だ」
「あの二人か」
タイタンはそれを聞いて暫し考え込んだ。
「大方その後ろにはあの男がいるのだろう」
「ほう、察しがいいな」
「それ位馬鹿でもわかる。だがあの男が自分の仲間を二人共送るとは珍しいな。バリ島に何かあるのか?」
「もう一人ライダーがいる。スーパー1だ」
「成程な。だからこそ二人を送ったのか」

納得がいった。タイタンは大きく頷いた。
「二人でライダー二人を一気に始末してしまおうということか」
「そのようだな。あの男らしい」
「バリ島での作戦も考えているのだろうな。奴のことだ、ただでの島に行くとは思えん」
バリ島は観光地として有名である。
「それはこれからのお楽しみだ。どちらにしろ我々が動くわけにはいくまい」
「それはそうだが。貴様にしてはやけに大人しいな」
「フッ、それはどうかな」
「・・・・・・・・・」
タイタンはそれを見て妙だと思った。今のシャドウの言葉は何処か強がりがある。常に自らをクールに見せる彼だが今はそこに虚勢がある。
(そういえば最近ヘビ女の行動を聞かないな)
ふとそう思ったが口には出さなかった。
(まあ良い、あの女が消えてくれたならば俺にも好都合だ)
タイタンは言葉を出した。
「そしてバリ島は今どうなっている」
「既に二人はライダーを狙って行動しているようだ」
「そうか、流石に速いな」
タイタンは頷いた。
「しかしそう上手くいくかな」
「それはわからんな。ただ」
シャドウはその虚勢を覆って言った。
「この戦いの結果が俺達に大きく影響することは確かだ」
「それはわかっている」
タイタンは言った。
「ストロンガーが勝っても負けてもな。だが」
彼は一旦言葉をとぎらせた。

「あの二人が倒せるとは思わんが」
「貴様が倒すつもりだな」
「それは貴様とて同じことだと思うが」
タイタンは無数の眼でシャドウを見据えながら言った。
「確かにな」
シャドウはその言葉に対して不敵に返した。
「奴を倒すのは俺だと決まっているのだ。カードがそう教えている」
「ほう、俺は貴様ではないと確信しているが」
「何なら争うか？奴の首を」
「当然だ。力こそが我がバダンの最大の法であることは知っていよう」
「・・・・・フン」
シャドウはそこでタイタンに横を向けた。
「面白い。ではバリ島での戦いの結果を見てそうしようか」
「望むところだ」
二人はそう言うとその場から消えた。そしてそれぞれの基地へと戻っていった。

宮殿の人狼　　完

２００４・５・１２

麗わしの島の戦いその一

麗わしの島の戦い

バリ島、インドネシアにあるこの島は独特の文化を持っていることで知られている。

インドネシアは一億五千万以上の人口を持つ東南アジア最大の国であるが同時に多様な文化も併せ持っている。スカルノやスハルトといった強権政治家達もそのことはよく認識しその文化を保護してきた。否、それを否定してはインドネシアという国は成り立たないのである。

そうした難しい国であり民族問題も抱えている。東ティモールはその最たるものであったが他にも色々と民族問題はある。だが国民は全体的におおらかで平和を愛している。そして外交にも長けておりアメリカや中国、日本といった大国にも臆するところはない。

この国で最も勢力の強い宗教はイスラム教である。だがアラブのイスラムとはいささか違う。

「ここの人達は思ったよりおおらかですね」

沖一也はバリの街中を歩きながら隣にいる城茂に言った。

「確かにな。俺もアラブは行ったことがあるけれどここことは比較にならない位厳しかったぞ」

城はインドネシアの雰囲気に驚きながら言った。

「リビアなんかは凄かったな。もう何から何まで怒られっぱなしだった。街の爺さんの厳しいこと厳しいこと」

「まあ城さんでしたらそうでしょうね」

「おい、そりゃあどういう意味だ」

彼はその言葉に対し口を尖らせた。

「いえ、ただ普通に思っただけで」

「確かに俺は堅苦しいことも決まりごとも好きじゃないが」

「それがまずいんじゃないですか？」
「最後まで聞け。だからといって現地の習慣を破ったりはしないぞ」
「滝さんが言ってましたよ。牛肉が食べたいと盛んに言ってったって」
「イスラムは牛肉は食べてはいいんだぞ。それに豚肉も傷みやすいから食べないんだ」
「そうだったんですか」
「そうだ、イスラム教ってのは案外現実的でよく考えられた宗教なんだ」
　その通りである。例えば犬の唾を不浄としているのは狂犬病を恐れてのことである。実際には酒を飲む人も多かったりする。酒に関しては時代により解釈が異なる。当然人によっても。トルコの国父ケマル＝アタチュルクは酒好きとして有名であった。
「それはわかっているつもりですが」
「だからアラブと東南アジアでは変わるものさ。マレーシアでもシンガポールでもムスリムは多いけれどアラブのそれとは雰囲気が全く違うし」
「そういえばここには占い師も多いですね」
　イスラムは建前上占いはするなという。だが実際にはイスラムにおいて占いはかなりの発展を遂げている。ちなみにキリスト教では異端とされ徹底的に弾圧された錬金術はイスラムにおいては奨励されそれが科学の発展に繋がっている。
「これもインドネシアの特色かな。確かに他のアラブ諸国に比べると多いな」
「ですね。まあここはバリ島ですが」
　バリ島はヒンズー教の勢力圏である。
「しかしムスリムもいるからな。そうした多くの宗教や文化が雑多に暮らしているというのは俺は案外嫌いじゃない」
「城さんに合っていますしね」
「おい、それじゃあ俺がガサツみたいに聞こえるじゃないか」

「あれ、違うんですか？」
「違う、すぐに訂正しろ」
二人はこんな話をしながらバリ島の中を歩いていた。わりかしインドネシアの雰囲気とその風土が気に入っているようである。そこに一人の男がやって来た。
「さて、茂も一也も元気かな」
それは一人の小柄な東洋人であった。彼はサングラスをして空港に降り立った。
城と沖はバロン＝ダンスを見ていた。バリ島名物の一つである。この島特有の伝説にバロンとランダの伝説がある。これはインドにもインドネシアの他の島にもない独特の伝説である。
バロンは善を象徴としランダは悪を象徴する。聖獣バロンと鬼女ランダは互いに永遠に争い善と悪の戦いを続けるのである。これはインドネシアの他の島にもない独特の伝説である。だがランダにも良心はあり話は複雑である。しかもランダは死しても甦りバロンも同様である。これはインドの輪廻転生の思想に根拠がある。
「善と悪の対立ですか」
沖はそれを見ながら呟いた。
「俺達に似てると思ってるな」
城はそれを聞いて尋ねた。
「ええ。俺達もこうして悪の組織と何度も戦っていますしね」
「そうだな。思えば俺も多くの組織と戦ってきた」
城の目が感慨に耽ったものになる。ブラックサタン、デルザー、ネオショッカー、ドグマ、ジンドグマ・・・・・。沖もそれは同じである。彼等はライダーとなってから実に多くの組織と戦ってきた。
一つの組織が崩壊すれば首領はすぐに新たな組織を起こす。幾度彼は死のうとも甦る。そしてライダー達は彼の野心を阻止する為に戦うのだ。
「かってあの奇巌山で葬ってやったがな」
城はデルザーとの最後の戦いを思い出していた。

「だがすぐにネオショッカーを立ち上げた。それが潰れてもドグマ、ジンドグマだ。御前さんはドグマとの戦いがはじめてだったな」
「はい、彼等に国際宇宙開発センターを破壊されたのがはじまりでした」
彼の声は少し沈んだものとなった。

麗わしの島の戦いその二

「それから日本に渡りドグマと戦いました。その時に先輩達とお会いしたのでしたね」
「ああ、懐かしいな」
地獄谷五人衆との戦いであった。赤心少林拳も交えた総力戦であった。メガール将軍が手ずから鍛え上げた精鋭達との死闘であった。
「あの時に俺の他にもライダーがいたんだって知りましたよ。俺は一人じゃなんだって」
「皆俺達はネオショッカー首領との戦いで死んだと思っていたけれどな」
城は苦笑して言った。
「あ、そうだったんですか」
「そうだよ。って知らなかったのかよ」
「ええ、初耳です」
「・・・・・仕方ないな。まあおやっさんだけは信じていたみたいだけれどな」
「立花さんですね」
「ああ。あの人にだけはかなわないな」
彼は急に温かい表情になった。
「俺達はあの人に育てられたからな。ブラックサタンやデルザーとの戦いでどれだけ助けられたか」
「俺もですよ。谷のおやっさんに」
「そうした人達がいるから俺達も戦える。それだけは忘れたくないな」
「ええ、同感です」
バロン＝ダンスは終わった。そこに新たに誰かが姿を現わした。
「ムッ！？」
二人はそれを見て目を見張った。それはバダンの戦闘員達であっ

た。
「バダンか！」
二人は彼等の姿を認めると彼等の中に飛び込んだ。そして彼等との戦いをはじめた。
「クッ、城茂と沖一也か！」
彼等は二人から間合いを離して叫んだ。
「バリ島に来ているとは知っていたがまさかここにいるとはな！」
そして二人を取り囲む。二人は背中を向け合って彼等に対峙している。
「生憎だったな、たまたまダンスを見ていたんだ」
城は不敵な表情で彼等に対して言った。
「貴様等に会ったのは軍善だったが」
沖は赤心少林拳の構えを取っている。
「ここで会ったが百年目だ、相手をしてやるぞ！」
二人は同時に叫んだ。
「クッ！」
彼等はその気迫に押された。やむおえなく退こうとする。
「待て、それには及ばん！」
そこに二体の怪人が姿を現わした。
「来たな」
二人は怪人達を見て呟いた。観客達はそれを楽しげに見ている。
「おいおい、面白い見世物だな」
「ああ、日本の番組みたいだ」
日本のテレビ番組はインドネシアでも人気である。彼等はこの戦いを何かの見世物だと思っている。
怪人はショッカーの人食い怪人サラセニアンとネオショッカーの甲羅怪人オカッパ法師である。二体の怪人は二人に挑みかかって来た。
「ムッ」
二人は森の中に投げ飛ばされた。観客達は思わず息を飲む。

「おいおい、いきなりやっつけちまったよ」
「何言ってるんだ、凄いのはこれからだよ」
二人は素早く森から飛び出て来た。その時には既に変身していた。
「おおーーーーっ！」
皆その姿を見て拍手喝采である。彼等はそれを気にもとめず怪人達と対峙する。
「行くぞっ！」
そして拳を振るって立ち向かう。怪人達も武器を手にして向かって来た。
「エケエケエケエケ」
サラセニアンはストロンガーにその鞭で攻撃を仕掛けてきた。その右腕を掴み取った。
「ムムム」
ストロンガーはそれを引いた。だが怪人の力も思ったより強く力比べは均衡していた。
ストロンガーは鞭に左手を添えた。そして叫んだ。
「電ショック！」
高圧電流が鞭を伝わった。そしてサラセニアンを激しく撃つ。
「エケエケーーーーーッ！」
怪人は叫び声をあげた。ストロンガーは怪人の力が怯んだのを見て反撃に移った。
「トォッ！」
空中に跳んだ。そして一回転した。
「電キィーーーーック！」
電気を帯びた蹴りが炸裂する。怪人は後ろに吹き飛び爆死した。
「おお、凄いリアルだな！」
「おお、まるで映画みたいだ！」
観客は誰もそれが本当なのだとわからない。戦いはそれに構わず続いている。
「カッパーーーー」

オカッパ法師は奇妙な叫び声をあげると頭の皿をスーパー1に投げて来た。
「ムッ！」
スーパー1はそれを銀の腕で弾き返した。地に落ちた皿は忽ちその場所を溶かしていく。
「ケッ」
今度は黒い布を投げてきた。スーパー1はそれを避けようとしたが避けきれず捕まってしまった。
「しまった！」
「ケケケケケ」
オカッパ法師はそれを見て笑っている。逃れられないと確信していたのだ。
だがスーパー1には切り札があった。そして彼はそれを今使うことをためらわなかった。

麗わしの島の戦いその三

「チェーーーンジ、パワーーーーーーハァーーーーーーンドッ！」
彼は腕を換えた。忽ち銀であった腕が真紅のものになる。
「おいおい、今度は手の色が変わっちまったぞ！」
皆それを見て大騒ぎする。しかし当のスーパー1はそれどころではない。
「ウオオッ！」
その黒い布を掴む。そして左右に思いきり引きそれを千切ろうとする。
やがて力が勝った。布は引き裂かれた。
「今度はこちらの番だっ！」
スーパー1は身構えた。そして再び腕を換えた。
「オカッパ法師、河童の改造人間である貴様の弱点は・・・・・・」
赤い腕が光った。そして青いものになった。
「水だ、河童は多量の水分がなくては生きていけない！」
そして腕をエレキハンドに換えた。
「チェーーーーンジ、エレキハァーーーーーンドッ！」
換装するとすぐにそれを怪人に向けた。
「喰らえっ！」
そして電撃を放った。
「ギャアオオオオッ！」
これにはさしものオカッパ法師もたまらなかった。普通の怪人よりもかなり多くの水分を必要とする彼はそれだけ電気を通し易かったのである。そして彼はそれに打ちのめされた。
それが決め手であった。怪人は倒れ爆発した。
「おお、やけに強いなあ」
「正義の味方はこうでなくちゃな。上映される日を楽しみにしておくか」

「気楽なものだな」
「ま俺達やバダンのことを知らないだけまだいいですよ」
そんな観客達の声を二人のライダーは苦笑して聞いていた。
前哨戦はライダー達の勝利に終わった。二人の改造魔人はそれをモニターで見ていた。
「やはりあの怪人達では駄目か」
ヨロイ騎士はモニターから目を離して言った。
「だがあの二体の怪人が駄目では実際にライダー達を倒せる怪人はおらんぞ」
磁石団長はそんなヨロイ騎士に対して言った。
「それはわかっている。だが怪人はまた送られて来る」
「ライダーを倒せればよいのだがな」
「それが出来る怪人がおらんのだ。相手も手強いことだしな」
「やはり我々が出向くのが一番か」
ヨロイ騎士が意を決した顔で言ったその時だった。
「まあ待てヨロイ騎士よ、それにはまだ早いのではないか」
不意に部屋に一体の古代エジプトの棺が現われた。
「来たか」
二人はその棺を見て言った。
「うむ、お主達のことが心配になってな」
その棺の中からマシーン大元帥が姿を現わした。
「よく来てくれたな、マシーン大元帥」
二人は彼の姿を認めると急に表情を明るくさせた。
「何を水臭い、我等は常に一緒ではないか」
彼は二人に対して言った。
「堅苦しいことは抜きだ、早速本題に入ろう」
「うむ」
三人はそこにあるテーブルに着いた。
「どうやらストロンガーとスーパー1に苦戦しておるようだな」
「うむ、先程襲撃をかけさせたが」

「サラセニアンとオカッパ法師がやられてしまった」
二人は口惜しさを滲ませて言った。
「そうか、あの二体の怪人がのう」
大元帥はそれを聞いて顎に手を当てた。
「うむ、やはりあの二人は手強かった」
「おかげでライダーに対抗できる怪人がいなくなってしまった」
「怪人なら任せておけ」
マシーン大元帥は二人の話を聞き終えて言った。

麗わしの島の戦いその四

「わしがすぐに送ってやろう。そのことは心配無用だ」
「まことか！？」
磁石団長が思わず声をあげた。
「うむ。ライダーにも対抗出来るような怪人なら何体か持っている。それもこのバリ島の気候に合ったものをな」
「おお、それは有り難い。これであの二人を倒せるぞ」
ヨロイ騎士も声を出した。
「だがそれだけではライダー達は倒せん」
マシーン大元帥はここで声を厳しくさせた。
「的確な作戦がなくてはな」
「うむ」
二人はその言葉に表情を引き締めた。
「ここは二手に分かれて動くべきだと思うが」
「今までと同じようにか」
「そうだ。まずはヨロイ騎士が陽動部隊を率いる」
「うむ」
ヨロイ騎士はそれに対して頷いた。
「そして磁石団長が主力部隊を率いる」
「挟み撃ちにするつもりだな」
「その通りだ」
マシーン大元帥は磁石団長の言葉に頷いた。
「まずヨロイ騎士がライダー達を誘き出す。そしてその背後から磁石団長が襲い掛かる。そして奴等を一網打尽にするのだ。幸いこのバリ島は陽動を仕掛けるにはもって来いの場所だしな」
観光地だけあってテロにも悩まされているのである。
「相変わらず見事な作戦だな」
「フフフ、世辞はいらぬぞ」

マシーン大元帥は二人の言葉に対して不敵な笑みを浮かべた。
「それよりもこちらのこてゃ頼んだぞ」
「任せておけ」
二人は胸を張って答えた。
「必ずやライダー達を始末してくれよう」
「期待しておるぞ」
三人は杯を取り出しそれを打ちつけ合った。こうして彼等の作戦は決定された。
マシーン大元帥は自身の基地に戻った。入口で戦闘員が敬礼した。
「何か変わったところはないか」
「暗闇大使が来られています」
その戦闘員は答えた。
「暗闇大使がか。今何処にいる」
「客室に案内致しましたが」
「そうか、会おう」
彼はそれを聞いて基地の中の客室に向かった。
「おお、戻ったか」
彼は椅子に座っていたがそこから立ち上がった。部屋の中はコンクリートの壁と赤い絨毯がある。そして椅子とテーブルが中央にある。見れば簡素な部屋である。
「うむ、よく来てくれた」
彼は暗闇大使に挨拶した。そして彼に再び席に着くように勧め自らも座った。
「ところで何の用だ」
彼は問うた。
「わざわざ本部からこのようなところにまで来てくれるとは」
「うむ、一つ頼みたいことがあってな」
暗闇大使の目が光った。
「頼みたいこと!?」
大元帥もその言葉に眉を動かした。

「そうだ、ゼクロスのことでな」
「今あの男は日本にいるのではなかったのか！？」
「何を言っておる、バダン日本本部は今壊滅状態じゃ。あの男も世界を動き回っておる。我々を捜してな」
「そうであったな。日本支部は全ての改造人間を倒されてしまったしな」
「そうじゃ。これはわしの失態だがな。だが今それをここで言っても何にもならぬ」
「うむ」
姿形は酷似していてもやはり地獄大使とは違っていた。従兄弟は激情家だが彼は常に冷静である。そうしたところが二人の不和を助長しているのかも知れない、とマシーン大元帥は思った。

麗わしの島の戦いその五

（だがそれは口に出しては言えぬな）

そのことを口にしたならば暗闇大使も激怒してしまうのだ。彼等はそれ程までにお互いを嫌悪し憎み合っているのだ。

「それで頼みだが」

暗闇大使は再び言葉をかけてきた。

「頼めるだろうか」

「内容によるな」

彼は言った。

「そうか。ではあの男と戦う時になった場合だが」

「それなら構わないぞ」

捕らえろ、というものならば首領から直々のものでない場合以外は断るつもりであった。

「そうか。ならば少しテストして欲しいものがある」

「テスト！？兵器か何かか」

「そうだ。実は今開発中の兵器があってな」

「それは興味深いな」

「それをあの男との戦いに際して使ってもらいたい。頼めるか」

「こちらとしても有り難い話だ。新兵器がどのようなものか興味があるしな」

彼はそれを快諾した。

「そうか、有り難い。では宜しく頼むぞ」

「そしてその兵器は何時こちらに届くのだ？」

「すぐに送る。楽しみにしておいてくれ」

彼は言った。そして基地を後にした。

「兵器か。そういえばあまり使ったことはないな」

デルザーの主戦力はあくまで改造魔人であった。他の組織の大幹部達と同等の戦闘力及び位を持つ彼等はそれ自体が最大の戦力であ

ったのだ。
「だが面白いな。果たしてどのような兵器か」
彼はほくそ笑んだ。
「あのゼクロスを葬り去れればそれでよし。それでわしの名もさらに上がるというものよ」
彼は笑ってその部屋を後にした。部屋は闇の中に消えていった。
城と沖はバリ島においてバダンの捜索を続けていた。そしてライステラスに謎の一隊が向かっているとの情報を掴んだ。
「臭いな」
道をバイクで進みながら城は言った。
「はい、レーダーの反応が普通のものとは明らかに違いますし」
沖はブイマシンのレーダーを見ながら答えた。
「すぐに行きましょう」
「ああ、そこにいる奴は大体察しがつくがな」
二人はそう言ってライステラスに向かった。
「よし、準備はいいな」
ヨロイ騎士は緑の棚田の中で戦闘員達に対して指示を出していた。
このライステラスはウプド郊外にある。標高は八〇〇メートルであり中々涼しい。その緑の田園地帯はのどかで優雅ですらある。
だが今ここにバダンの悪の戦士達がいた。彼等は周囲に散りこの田園地帯を次々と占拠していった。
「よし、作戦は順調なようだな」
ヨロイ騎士は戦闘員達の動きを見ながら言った。
「ライダー達が来る前にここを我等の陣地とするのだ」
その指揮は的確である。やはり古から騎士だっただけはある。
「待てっ！」
だがそこに声がした。
「来おったな」
ヨロイ騎士はその声がした方に振り向いた。
そこは棚田の上の方であった。そこに二人の戦士達がいた。

「城茂、そして沖一也よ」
ヨロイ騎士はその二人の戦士の名を呼んだ。
「今ここで倒してくれる」
「貴様にそれができるかな」
城は彼を挑発するように言った。
「ほざくな、かかれっ！」
それに対してヨロイ騎士は剣を振るった。散っていた戦闘員達が集まり二人に襲い掛かる。
「来たな」
二人は身構えた。変身することなく戦闘員達を倒していく。
「絡め取れっ！」
ヨロイ騎士が指示を出す。戦闘員達が二人の左右に回り鎖を投げる。
「ムッ」
それは二人の両腕、及び両足をとった。
「さあ、どうする」
ヨロイ騎士は二人を見上げて言った。
「このままでは力尽きるぞ」
まるで何かを待っているかのような口調であった。
「この程度でっ！」
沖が叫んだ。そしてその鎖を引き千切った。城もそれに続いた。

麗わしの島の戦いその六

ヨロイ騎士はそれでも攻撃を止めない。執拗に鎖を投げさせ二人を絡め取ろうとする。まるでその体力を徐々に奪っていくように。

「フフフフ」

彼はその様子を眺めながらほくそ笑んでいた。そこに何かがやって来た。

「ヨロイ騎士よ、待たせたな！」

「来たか！」

城と沖の後ろにその影は現われた。そして二人を取り囲んだ。

「磁石団長か！」

「そうだ、貴様等を倒す為にやって来たぞ！」

彼は自信に満ちた声で二人に言った。

「見たところヨロイ騎士の部隊との戦いで相当に体力を消耗しておるな」

「あの鎖はそれが目的だったのか」

「そうだ、流石にそれは見抜いたか」

ヨロイ騎士は上の方に向かって歩きながら言った。

「あの鎖は貴様等の体力を奪うのが目的だったのだ」

その後ろに怪人達が現われた。

「そして疲れたところに磁石団長の一団が到着して一気に倒す。素晴らしい戦術だろう」

「確かにな」

沖はそれを聞いて無表情で答えた。

「成功したならな」

城は不敵な声で言った。

「フフフフフ、今それが成功したのだ」

磁石団長とヨロイ騎士は並んでその言葉を言った。

「さあ、観念するがいい。貴様等は最早変身する力も残ってはおる

まい」
「それはどうかな」
二人は言った。
「俺は電気がその力の源」
「俺は赤心少林拳の修業により気から力を取り入れることが出来るのだ」
二人は彼等と正対して不敵に言った。
「それがどうしたというのだ。スーパー1はともかくストロンガーは変身できまい」
「そうじゃそうじゃ、例え変身したとしてもその体力ではチャージアップできまい」
ヨロイ騎士と磁石団長は勝ち誇った態度を崩さない。
「・・・・・ならば見せてやろう」
城は不敵な態度を崩さない。
「ライダーの力を合わせた技を」
沖も言った。そして二人は構えをとった。

変身
城は手袋を取ると両腕を肩の高さで右に垂直にした。右腕は伸ばし左腕は肘のところで直角にし右腕と並行にする。そしてそれを上にゆっくりと旋回させる。
身体が黒くなっていく。胸は赤くなりブーツが白になる。
スト・・・・・・ロンガーーーーッ!
銀の両手を合わせる。するとそこに電撃が走る。
その両手が白い手袋に覆われる。顔の右半分が黒と白の仮面に覆われる。眼は巨大で緑である。そしてそれが左半分も覆っていく。

変・・・・・・
沖は両手を爪の様にした。そしてまず右腕を頭の高さで後ろに引き左腕は腰のところで前に置く。

右腕を前に出す。掌は上を向いている。そしてそれはすぐに引き込む。

身体が黒と銀になっていく。手袋とブーツは銀である。

・・・・・・身！

手首のところで両手を合わせそれを前に出す。そして時計回りに百八十度回転させる。

顔が銀の仮面に覆われる。左半分も。眼が赤く光った。

二人は光に包まれた。そして二人のライダーが現われた。

「フフフ、変身したな」

ヨロイ騎士は彼等を見てまだ笑っていた。

「一体どうするつもりなのかのう」

磁石団長もそれは同じである。やはり笑っていた。

「見るがいい」

スーパー1はそれに対して言った。

「チェーーーンジ、エレキハァーーーーンドッ！」

スーパー1は腕をエレキハンドに換えた。そしてそれでストロンガーを掴んだ。

麗わしの島の戦いその七

「ムッ！」
何とそれでストロンガーに対して渾身の力で電撃を放った。ストロンガーの全身が緑に輝く。
「何とっ！」
二人の改造魔人はそれを見て驚愕した。彼はその電気の力を瞬く間に吸収したのだ。
「よし、これで充分だ」
ストロンガーは電気を吸収し終え満足した声で言った。
「わかりました」
スーパー1はそれを聞くと電撃を止めた。そして腕をスーパーハンドに戻した。
「どうだ、ファイブハンドにはこうした使い方もあるのだ」
「ぬうう、ぬかったわ」
ヨロイ騎士はスーパー1の言葉を聞き歯軋りした。
「俺は元々は惑星開発の為に改造されたのだ。人々を助ける為にな」
彼の声には何処かやりきれぬ思いが込められていた。
「貴様等バダンがいる限り俺達の戦いは終わらない」
ストロンガーは二人を指差して言った。
「小癪な・・・・・」
磁石団長はそれに対して呪詛の言葉を漏らした。
「だが貴様等を倒してもう一度夢を掴む、行くぞっ！」
ストロンガーの夢、それはかって共に戦ったあの戦士との約束を果たすことであった。だが彼はそれを誰にも言おうとはしない。自分の心の中に留めているだけであった。
その前に怪人達が出て来た。そしてストロンガーとスーパー1を取り囲む。
「来たな」

二人のライダーは背中合わせになり取り囲む怪人達と対峙した。
四体いた。ゲルショッカーの酸欠怪人サソリトカゲス、デストロンヨロイ一族の一人カマクビガメ、ゴッドの木人怪人アルセイデス、ドグマの忍者怪人カメレキングであった。
「どうだ、この怪人達は」
磁石団長は怪人達の輪の中にいるライダー達に対して余裕を含んだ声で問いかけた。
「打ち破れるものなら破ってみよ」
磁石団長も同じである。まるでライダーの敗北を確信しているようだ。
「大した余裕だな、二人共」
それを聞いたストロンガーが言った。
「まだ勝負ははじまってはいないというのに」
「勝負とは常にはじまる前から決まっておるのだ」
「そうだ、現に貴様等は既に取り囲まれているではないか」
二人はストロンガーに対し反論した。
「スーパー1」
ストロンガーはそれを聞いてスーパー1に声をかけた。
「わかっていますよ」
彼が何を言いたいのかスーパー1はわかっていた。そう言って頷くだけで充分だった。
「ならば見せてやる、俺の技を」
スーパー1は身構えると腕をゆっくりと動かした。
「ちょこざいな、やれい！」
二人の指示が同時に下った。そして二体の怪人がスーパー1に襲い掛かった。
「ソオーーーーーリィーーーーーーーーーーッ！」
「フシューーーーーーーーーーウッ！」
サソリトカゲスとカメレキングが来た。鋏と剣がライダーを襲う。
「ムンッ！」

スーパー1は彼等の腕を蹴り飛ばしてその攻撃をかわした。そして跳び上がった。
「スーーーパーーーーライダァーーーーー」
空中で叫ぶ。
「天空連続キィーーーーーーック！」
そしてまずはカメレキングを蹴った。間髪入れずサソリトカゲスも蹴った。
彼等の後ろに着地した。二体の怪人はその背の向こうで爆死した。
「今度は俺だっ！」
ストロンガーは自分から残る二体の怪人に向かって行った。
アルセイデスは蔦の鞭を放ってきた。カマクビガメは自身の首を伸ばしてきた。
ストロンガーは首をかわした。そして蔦の鞭は手で掴んだ。
「無駄だっ！」
そしてそこから電撃を放った。
「グオオッ！」
怪人は苦悶の声をあげる。カマクビガメの首も戻るまでには時間があった。
「今だっ！」
それを逃すストロンガーではなかった。すぐに彼は跳んだ。
「ストロンガーーーーー・・・・・」
上空を跳びながら叫ぶ。
「ダブルキィーーーーーック！」
まずはアルセイデスを蹴った。続いてようやく首が戻ったカマクビガメを。
そしてスーパー1と同じように怪人達の後ろに着地した。怪人達は先の二体の同僚達と同じくライダーの背で爆発した。
「どうした、もう終わりかっ！」
ストロンガーはヨロイ騎士と磁石団長を見据えて言った。

麗わしの島の戦いその八

「ヌウウ、マシーン大元帥が送ってくれた精鋭達をこうも簡単に倒すとは・・・・・・」

彼等は思わぬ展開に舌打ちした。

「今度は貴様等の番だっ！」

スーパー1はストロンガーの横に来て言った。

「ムムム・・・・・・」

改造魔人達は怯んだ。だがそれは一瞬であった。

「こうなれば我等で倒してくれる」

「そうじゃ、最初からこうすれば問題なかったのじゃ」

ヨロイ騎士は二振りの剣を、磁石団長は磁石の杖を取り出した。

それを手にして身構える。

「行くぞっ！」

「望むところだっ！」

かくして二組の戦いがはじまった。ストロンガーはヨロイ騎士と、スーパー1は磁石団長と戦いをはじめた。

「喰らえっ！」

磁石団長は前に屈んだ。そして背中から何かを発射してきた。

「ミニ磁石っ！」

無数の磁石がスーパー1に襲い掛かって来た。

「来たな」

スーパー1はそれを見て身構えた。

「どうじゃ、この磁石の嵐、よけられるかっ！」

磁石団長はスーパー1を前に豪語した。

「それはこれを見てから言うのだな」

彼はすぐに腕を換えた。

「チェーーーンジ、冷熱ハァーーーーンドッ！」

そして腕を緑のものに換えた。

まずは炎を放った。忽ち磁石が紅く染まる。
「フン、何をするかと思えば」
磁石団長はそれを見て笑った。
「そのようなものでわしの磁石を止められると思うてかあっ！」
だがスーパー1は答えない。すぐに炎を収めた。
「次はこれだっ！」
そして今度は冷気を出した。
それまで炎で激しく熱されていた磁石が今度は冷気に曝される。
これによりまず磁石の一つが割れた。
「ムッ！？」
そしてそれは全ての磁石に渡った。粉々に砕け散り床に落ちた。
「熱したあとで急に冷やすとどういうことになるか・・・・・。わかるな」
「おのれ・・・・・」
磁石団長は悔しさと怒りで歯噛みした。だがそれを続けている暇はなく磁石の杖を振るってスーパー1に向かった。
「もう飛び道具は止めじゃあっ！」
「望むところだっ！」
そして二人は今度は接近戦を開始した。
ヨロイ騎士は両手に長短二振りの剣を持っていた。それでストロンガーに斬り掛かる。
「ムンッ！」
だがストロンガーはそれをかわした。間合いが離れた。
「間合いなぞわしには関係ないわっ！」
彼はそう叫ぶと頭上で剣を交差させた。
「高圧熱線っ！」
交差された剣から熱線が放たれる。それはストロンガーに襲い掛かる。
「ストロンガーバリアーーーーッ！」
ストロンガーは叫んだ。すると彼の身体が青く光った。

そして自身の前に電磁の壁を作った。それで熱線を防いだ。
壁と熱線は相殺された。ストロンガーはそれを確認すると身体の色を元に戻した。
「まだだっ！」
そして今度は胸のSの文字のところに両手を合わせた。
「チャーーーージアーーーーーーップ！」
叫んだ。そしてエスの文字が激しく回転をはじめた。
ストロンガーの角と胸の中央が銀色になった。超電子の力を発動したのだ。
「おのれ、本気を出してきおったな」
「そうだ、勝負はこれからだっ！」
今度は自分から突進した。剣と拳がぶつかり合う。
四人は激しい戦いを続けていた。相変わらずストロンガーはヨロイ騎士と、スーパー1は磁石団長と戦いを続けている。
状況は次第にライダー達の方に傾いてきていた。さしもの二人もチャージアップしたストロンガーと五つの腕を自由自在に操るスーパー1が相手では分が悪かった。
「今だっ！」
「はいっ！」
二人は彼等の一瞬の隙を逃さなかった。そして頷き合うと一斉に跳んだ。

麗わしの島の戦いその九

「行くぞっ！」
彼等は同時に空中で一回転した。
「超電・・・・・・」
「スーパーライダァーーーー・・・・・・」
二人は技の名を同時に叫んだ。
「スクリューーーーキィーーーーック！」
「閃光キィーーーーック！」
そして蹴りを放った。二人の蹴りが同時に二体の改造魔人の胸を撃った。
二人は後ろに大きく吹き飛ばされた。ライダー達は着地しながらそれを見守った。
「グオオオオオ・・・・・・」
二人は地面に叩き付けられながらも立ち上がった。そしてライダー達の方へ顔を上げた。
「見事な蹴りだ。我等にここまでのダメージを与えるとはな」
ヨロイ騎士は足をふらつかせながらもまだ前に進もうとする。
「わし等の負けじゃ。バリ島での作戦は失敗だ」
磁石団長も同じである。彼等の目の前には死が口を開いていた。
「やりおるわ、ライダー達よ」
それでも彼等は膝をつこうとはしなかった。
「褒めてやろう、復活した我等をまたしても破るとは」
そして誇りも忘れてはいなかった。
「貴様等を倒しこのバリ島を死の島に変えてやるつもりだったが。こうなっては致し方あるまい」
「あとはマシーン大元帥に任せるとしよう」
二人はよろめきながらも踏ん張ってそう言った。
「だがのう」

二人は目を見開いた。
「デルザー軍団改造魔人は死ぬまでその偉大な祖先の名を汚すことはないのじゃ。今からそれを見せてやろう」
「とくとな」
二人はそう言うとその場に座り込んだ。
「死ぬその時も堂々とし威厳を忘れぬ、それをしかと見よ！」
「地獄で待っておるぞ！」
彼等はそう言うと爆発した。二つの爆発がライダー達の目に映った。
「死んだか」
ストロンガーはそれを見て呟いた。
「ええ。流石は誇り高き魔物達の子孫です。見事な最後です」
スーパー1もそれに同意した。こうしてバリ島の戦いは終わった。
「何だ、もう終わっていたのか」
立花は二人と合流して言った。
「折角わしが来てやったというのに」
あからさまに残念で仕方がないといったふうである。
「おやっさんが来ていたなんて聞いていませんよ」
「そうですよ。アメリカにいたんじゃなかったんですか」
二人は残念で仕方なさそうな彼を宥めるようにして言う。
「フン、どうせわしはいてもいなくても一緒だ」
彼はヘソを曲げた。
「おやっさんも強情だなあ。戦いはまだまだこれからだってのに」
「そうそう、バダンの奴等は次から次に来ますよ」
「それはわかってはいるが。しかしわしがやることはどうせ足手まといにしかならんだろう」
「それは違いますよ」
二人は表情を引き締めて答えた。
「おやっさんがいなかったら俺達は今こんなにくつろいだりできませんよ」

「そうですよ、俺達ライダーを理解して常に側にいてくれる人の存在がどれだけ有り難いか」
「お前達・・・・・・」
立花はその言葉にじんときた。
彼等は皆孤独である。家族はない。早くにうしなったか殺されてしまったか。そして普通の人間ではない。心は人間であっても身体はそのほぼ全てが改造されている。彼等の他には誰もいない。孤独な戦士達なのだ。
その彼等を常に父親のように支えてきたのが立花である。ライダー達にとって彼の存在がどれだけ有り難かったか、それは言うまでもなかった。
彼等が苦しみ、悩んでいる時も常に側にいた。時には厳しく、時には優しく。彼なくしてライダー達は悪の組織を破ることは出来なかったであろう。
「だからおやっさんはむくれる必要はないんですよ」
「そうですよ、ここは勝利を祝って乾杯しましょうよ」
「そう言ってくれるか」
涙は流さない。笑顔で言った。
「ええ、飲みましょうよ今日は！」
「そして次の戦いに英気を養いましょう！」
「よし、わしのおごりだ、今日はじゃんじゃん飲むぞ！」
「はい！」
こうして三人は酒場に向かった。束の間の勝利の喜びを味わう為に。
勝者はそうして勝利の美酒を味わう。だが敗者は苦い憎しみを味わう。マシーン大元帥がそうであった。
「死んでしまったか・・・・・・」
彼は円卓に一人座しそう呟いた。
「かっては常に共にあったというのに・・・・・・」
残る二つの席には誰もいない。杯も空である。

一人杯に酒を入れる。そしてそれを飲む。
「お主達の仇は必ずこのわしがとってやる」
その声は沈んでいたが怒りに満ちていたものであった。
「だから悲しむでないぞ」
そして再び酒を口にした。
「えらく辛気臭いな」
そこに誰かがやって来た。
「お主か。悪いが今は一人にしてくれ」
彼は後ろを振り返らずに言った。
「お主!?誰かと勘違いしているのではないかな」
「!?」
マシーン大元帥はその声に対し後ろを振り向いた。見ればそこには彼がいた。

「いや、違うか」
暗闇大使に瓜二つではあるが違っていた。身体から発せられる気は彼の方が獰猛であった。
（あの男の気はもっと狡猾なものだ。それに対しこの男のは・・・・・）
心の中でそう思った。
「どうやらあいつを間違えたらしいな」
地獄大使はどうやら怒っているらしい。
「だがいい。今はそれ程気分は悪くない」
そしてマシーン大元帥と向い合った。
「ところで聞きたいことがあるのだが」
「バリ島での戦いならば他の者に聞くがいい」
マシーン大元帥の声は不機嫌そのものであった。
「フフフ、まあそう怒るな」
地獄大使は気の短い自身のことはさておき彼をたしなめた。
「わしが聞きたいのはそれではない」
「では何だ!?」
「ここにあの男がよく来るそうだな」
「あの男!?・・・・・ああ、奴のことか」
マシーン大元帥は最初は誰のことかよくわからなかったがすぐに誰のことか察した。
「確かにな。しかしそれがお主と一体どういう関係があるというのだ?」
「言わずともわかることだと思うが」
地獄大使の声は少し不機嫌なものになった。
（本当に感情の起伏の激しい奴だ）
マシーン大元帥は心の中で呟いた。

「それで何が聞きたいのだ？」
「うむ。あの男を見つけたのはそなただったな」
「うむ。ラオスの奥でな」
「そうか。確か死んでいたと聞いたが」
「それはお主が最もよく知っていると思うが」
「・・・・・そうだが」
彼等は従兄弟同士であった。だが極めて仲が悪かった。
その理由は誰も知らない。マシーン大元帥も不思議に思っていたのだ。
「聞いていいか」
マシーン大元帥は逆に尋ねてみることにした。
「何じゃ！？」
地獄大使はそれに対し何か身構えるようであった。
「お主とあの男はかっては共に戦ったのではなかったのか！？」
「・・・・・そうだが」
地獄大使は憮然とした表情で答えた。
「だがそなたは急にショッカーに入った。あの男はそのまま東南アジアに留まっていたのか！？」
「・・・・・わしがショッカー東南アジア支部にいた頃には既にいなかったがな」
大元帥はそれを聞いて彼を注意深く見た。
（嘘ではないようだな）
こうした組織にいてはどうしても洞察力が求められる。彼は地獄大使の顔をよく見てそう思った。
「では彼は一体何処にいたのだ！？」
「・・・・・それは知らぬ。わしもな」
「そうか」
どうも暗闇大使も首領に以前仕えていたことがあるらしい。それは物腰等でわかる。
（どうやらショッカーの頃らしいが）

確証はない。暗闇大使本人もそれは決して言わないであろう。
「まあ何はともあれだ」
彼はここで尋ねることを少し変えた。
「お主達は東南アジアでかっては共に戦っていたのだな」
「そうじゃ。勇将と言われていたのは知っていよう」
「うむ」
「それに対してあ奴は知将と言われておった」
「対照的だな」
「あの時からそう言われておったわ」
「そうか」
そう言う地獄大使の顔は誇りと蔑みが同時に見られた。こんなところにも従兄弟に対する憎悪が見てとれる。
「一つ言っておく。あの男の知は奸智じゃ。それはよく覚えておけ」
「わかった」
マシーン大元帥は素っ気なく答えた。奸智はバダンの常である。百目タイタンなどはそのいい例だ。特に警戒するまでもない。最初から念頭に入れていることだ。
「で、わしに対して他に何か聞きたいことはあるか!?」
地獄大使は不機嫌そのものの声で問うてきた。
「いや」
マシーン大元帥は首を横に振った。
「わしはまだ聞きたいことがあるがな」
「何だ」
「あの男の所在だ。何か知っているか?」
「・・・・・いや、これといってはないが」
「そうか」
「どうしたのだ!?焦っているように見えるが」
「・・・・・何でもない。どうもあの男の影が最近また出て来てな」
「何処にだ!?」

「ヘビ女が姿を消したのは聞いているな」
「らしいな」
「他のライダー達の所在は掴んでいる。だがゼクロスだけは掴めていない」
「こちらもだ。果たして何処にいるのやら」
そうだった。ゼクロスの所在は今誰も知らないのだ。それがバダンにとって最大の捜査対象の一つであった。
「わしも捜しているが。まだ何もわかっておらんのだ」
「こちらもだ」
地獄大使に対し大元帥も答えた。
「早く捜し出さねばな。さもないといきなり本部に襲撃をかけられる怖れがある」
「そうだな。まさかとは思うがあの男なら有り得る」
彼等もゼクロスの力をよく知っていた。九人のライダーが一斉に立ち向かってようやく相手になる程の力の持ち主である。それは当然であった。
「一体何処にいるのか、それさえわかればな」
「うむ・・・・・」
彼等もまた捜すものがあった。だがその影すらも見つけることができないでいた。

麗わしの島の戦い　　完

２００４・５・１７

港町の毒蛇その一

ゼクロスの所在、それはバダンがその総力を挙げて捜しているものであった。皆血眼になりその影を追う。

だがそれは何処にもなかった。次第に焦りが生じだしていた。

「まだ見つけられないのかい！？」

ヘビ女も彼を捜していた。

「はい、残念だがら・・・・・・」

戦闘員達は申し訳なさそうに頭を垂れた。

「そうかい、本当に隠れるのが上手い奴だね」

彼女は忌々しげにそう吐き捨てた。

「このままではシャドウ様に合わせる顔がないよ、折角啖呵切ったんだしね」

彼女はゼネラルシャドウにゼクロスを捜し出しその首を献上すると言ったのだ。

「日本にいないのは確かなんだ。だけど世界中を捜し回るのも馬鹿なことだしね」

彼女は地球儀を回しながら呟いた。

「こうなったら誘き出してやろうか」

「あの男をですか！？」

「そうだよ。例えばね」

ヘビ女はここで残忍な笑みを浮かべた。

「あの男の大切な人を人質にするとかねえ」

それはまさに悪魔の笑みであった。地球儀を弄ぶその顔が嫌らしく歪んだ。

「それでしたら最適の人物がおりますが」

「あの男の姉は死んでいるよ」

「村雨しずかではありません。一条ルミです」
「一条ルミ!?あの小娘かい」
ヘビ女も彼女のことは少し知っていた。
「しかしあの娘も今何処にいるかわからないよ」
「日本にいたという情報がありましたが」
「何時の情報だい、もうとっくの昔に何処かに消えちまったよ」
「そうだったのですか」
戦闘員はヘビ女の言葉にうなだれた。
「今は地道に捜すことだな。もっとも連中はあたし達の影を見たら自分達から出向いて来てくれるけれど」
ヘビ女はそう言ったところでハッとした。
「待てよ」
彼女は再び嫌らしい笑みを浮かべた。
「何も捜し出すことはないよ。ちょいと目立つことをしてやるだけでいいんだよ」
「といいますと」
「わからないのかい、鈍いねえ」
「すいません」
「まあいいさ。今から教えてやるよ」
ヘビ女は戦闘員達に対して話しはじめた。
「どうだい、いい考えだろう」
彼女は話し終えると戦闘員達を見た。
「はい、それが一番だと思います」
「御前達もそう思うかい。じゃあ早速はじめるとしよう」
彼等は闇の中に消えた。そしてその中で無気味な蛇の鳴き声が聞こえてきた。
村雨良はシアトルにいた。アメリカの北西部にある港町だ。
ここは日本人にもよく知られた街である。理由はとあるスポーツ選手のせいなのであるが。
それを抜いてもこの街は日本と関係が深い。ボーイング社の拠点

でもあるこの街は日本と盛んに貿易を行なっているのである。
「良さんはシアトルははじめて！？」
「うん、話には聞いていたけれど」
その街を行く人組の男女がいた。
男女といってもまるで兄妹のようであった。村雨良と一条ルミである。
「よくテレビでマリナーズとかいうチームのことはやっていたな。俺は大リーグにはあまり興味がないけれど」
「イチローがいるからね」
「イチロー！？オリックスにいたんじゃなかったのか」
「何言ってるのよ、大リーグに行ったじゃない」
「そうだったのか。どうもそうしたことには弱いなあ」
村雨は困った顔をして言った。
「それは仕方ありませんよ」
ルミはそんな彼を慰めるように言った。
「良さんは色々ありましたから」
「・・・・・有り難う」
気遣うその言葉が有り難かった。村雨はルミの言葉に癒された。
「じゃあ試合見に行きますか？」
「今やってるの？」
「ええ。丁度イチローが出ますよ」
「そうか。じゃあ一度見てみるか」
二人はこうして球場に向かった。

港町の毒蛇その二

丁度試合がはじまった時だった。イチローはライトにいた。
「ポジションは日本にいた頃と変わらないな」
「イチローといえばライトですからね」
ルミはニコニコとしながら言った。
丁度打球が飛んできた。かなり深い打球だったがイチローはそれを何なくキャッチした。
「守備も相変わらずだな。足も反応もいい」
「肩も凄いですよ」
そんな話をしているうちにその回は終わった。今度はマリナーズの攻撃である。
イチローは難しい変化球を流し打ちした。そして盗塁を決めた。
「バッティングはさらに進歩しているな。あの時でかなりのものだったが」
村雨はオリックス時代の彼のことを思い出しながら呟いた。
「正直ここまでの選手は見たことがない。一体何処まで進化していくのか」
試合はマリナーズの勝利に終わった。イチローは攻守にわたり活躍した。
「面白かったですね」
「ああ、イチローも久し振りに見たがやはり凄いな」
彼は満足した顔でそう言った。
「やはり彼は凄いな。わざわざ見たかいがあった」
「次は何処に行きます？」
「そうだなあ」
彼は考えた。
「とりあえずは腹ごしらえをしよう。もう夕方だしね」
「はい」

二人はレストランに入った。そしてステーキを食べた。
それから二人はホテルに入った。ルミはベッドに入るとすぐに眠りについた。
「よし、気持ちよく眠っているな」
村雨はその寝顔を覗き込んで確かめた。見ればあどけなく可愛らしい寝顔である。
「これでよし」
彼は彼女から顔を離すと窓の外を見た。もうすっかり陽は落ち夜となっている。
村雨は部屋を出た。そして夜のシアトルに向かった。
シアトルはアジア系の多い街である。アジア太平洋地域への玄関口の一つであるからそれは当然であった。ボーイング社の最初の技術責任者も中国系であった。
元々アメリカはアジアを目指していた。彼等のモンロー主義も門戸開放宣言もそうした戦略が背景にあった。
そして多くの拠点を設けアジアと関わろうとする。太平洋戦争もベトナム戦争もその一環であった。ＡＰＥＣはその戦略の集大成的な存在である。元々はオーストラリアと日本が打ち出した構想であったが。
そのシアトルのアジア寄りの象徴とも言えるのがチャイナタウンであった。ニューヨークやサンフランシスコにもあるがこのシアトルのものも有名である。
真夜中なので道には誰もいない。華やかな街も今は暗闇に包まれている。
村雨は一人その中を歩いていた。まるで何かを探るように。
その彼に向けて何かが投げられた。村雨はそれを咄嗟に叩き落とした。
「これは！？」
それはナイフであった。そこへ次々と投げられてくる。
「ムッ！」

村雨は上に跳んだ。そして建物の上に着地した。
「バダンかっ！？」
彼は既にゼクロスに変身していた。そして左右を見回す。
彼の周りを戦闘員達が取り囲んでいる。皆その手にナイフを持っている。
「やはりな」
ゼクロスはそう言うと肘の手裏剣を取り出した。
そして投げる。一つを投げるとまた一つ投げる。
「ギッ」
戦闘員達はそれを受け倒れる。ゼクロスは投げながら建物の上を跳ぶ。
そこに新手が来た。デストロンの光線怪人ピッケルシャークである。
「来たか」
彼は建物の上を跳び回りながら怪人を見た。怪人はゼクロスの方に跳んで来る。
「ヒルーーーヒルーーーー」
そして右手のピッケルを振り下ろす。ゼクロスはそれをかわした。
移動を止める。そして怪人と向かい合う。
左腿から電磁ナイフを取り出した。それで斬り掛かる。
怪人はそれをピッケルで受け止めた。ゼクロスはそこに蹴りを入れる。
腹を蹴られ怯む。その後頭部にナイフを突き立てた。
「ヒルーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫び声を出して倒れた。そして爆発と共に消えた。
ゼクロスは下に降りた。そこに新たな敵がやって来た。
今度は下からだ。ゲドンの甲殻怪人獣人カタツムリである。
「ゲォゲォゲォゲォゲォゲォゲォ」
彼は奇声を発しながらやって来た。そして口から泡を吐き出す。
ゼクロスは横に身を捻りかわした。そして手の甲から何かを取り

出した。
それはマイクロチェーンだった。彼はそれを怪人に向けて投げ付けた。
チェーンが怪人の首に巻き付く。ゼクロスはそれを引いた。
「ゲォ!?」
怪人は抵抗する。だがゼクロスはそこで電撃を流した。
「ゲォーーーーッ!」
カタツムリは水分が多い。その為電流をよく通す。怪人は忽ち悶死して爆発した。
「これで終わりではないな」
ゼクロスは咄嗟に新手の気配を察した。やはりもう一体やって来た。
「ギリギリギリギリギリ」
何と両眼が髑髏になっている不気味な怪人が姿をあらわした。ブラックサタンの音波怪人カマキリ奇械人である。
「やはり来たか」
「ギリギリギリ」
怪人は右腕に巨大な鎌を出した。そしてそれをゼクロスに向かって投げ付けた。
「ムッ」
ゼクロスはそれを左にかわした。だがその背に鎌が戻って来る。

港町の毒蛇その三

「ブーメランか」
彼はそれを屈んでかわした。怪人はそれを受け取ると今度はそれで斬りかかって来た。
「おそらくそれだけではないな」
その予想は当たった。怪人は左腕に鎖鉄球を出してきた。
それをぶつけて来る。ゼクロスはそれを受け止めた。
「ムン！」
そして投げる。怪人は受身をとり着地した。
着すると同時に再び鎌を放ってくる。鎌はゼクロスを両断した。
かに見えた。しかしそれは幻影であった。
「生憎だったな。俺は幻影を作り出すこともできるのだ」
怪人の後ろから声がした。それはゼクロスのものであった。
「死ね」
彼は言った。そして怪人の背に何かを取り付けた。
それは衝撃集中爆弾であった。ゼクロスはそれを怪人の背に取り付けると上に跳んだ。
怪人は爆死した。ゼクロスは再び建物の上に着地した。
その後ろから何者かが襲い掛かってきた。
「また来たか」
ネオショッカーのミイラ怪人ヒカラビーノであった。怪人は両手から包帯を放ってきた。
「今度はミイラ男か」
ゼクロスは感情を込めずに呟いた。
「ならば戦い方ははっきりしている」
彼はまず両肩から煙幕を放った。そしてその中に消えた。
「ガビッ！？」
怪人は煙の中でゼクロスを探した。だが何処にもいない。

包帯を放つ。四方八方にばら撒くように。だがゼクロスは何処にもいない。
「俺はここだ」
不意にその煙幕の中から声がした。
「ガビーーーノッ！」
怪人は奇声を発しそこへ攻撃を仕掛けた。だがゼクロスはそこにはいなかった。
「残念だったな」
ゼクロスは怪人の真横にいた。そして腕から何かを放ってきた。
それは超音波であった。彼は音波砲も装備しているのだ。
「ミイラ男なら乾燥している。衝撃には弱い筈だ」
その通りであった。怪人は音波攻撃を受けもがき苦しんでいる。
「ガビーーーーッ！」
それに耐えることは出来なかった。怪人は崩れ落ち爆死して果てた。
「もういないか」
ゼクロスは気配が全て消えたのを察して呟いた。
「それにしても一度に四体もの怪人を送り込んで来るとはな」
彼は道路に着地し変身を解きながら呟いた。
「やはりバダンはこの地で何かを企んでいるのか」
彼はマシンを呼んだ。やがてヘルダイバーが前に停まった。
「少し調べる必要があるな。一体誰がいて何をするつもりなのか」
村雨は夜のシアトルを回った。そしてバダンの影を捜し求めた。
だがその日は何も見つけることが出来なかった。朝が近くなり彼は仕方なくホテルに戻った。
「只今」
彼はそう言うとそのままベッドに入ろうとした。だがそこで異変に気付いた。
「ルミちゃん！？」
ルミの気配がしないのだ。寝息も聞こえない。

彼は驚いて灯りを点けた。ルミが眠っていたベッドはもぬけのからであった。

「まさか・・・・・・」

窓は割られている。そこから吹き込む風がカーテンを揺らしていた。

そしてルミがいたベッドには手紙がナイフで縫われていた。村雨はそれを手にとった。

『村雨良よ』

その手紙の序文にはまずそう書かれていた。

『一条ルミは預かった。貴様の居ぬ間にな』

「そうか、あの怪人達は俺を貼り付けておく為だったのか」

後悔の念で歯噛みした。だがそれはあまりにも遅かった。

『返して欲しくば今日の昼ウォーターフロントに来るがいい。ヘビ女』

「ウォーターフロントか」

シアトルの観光名所の一つである。かっては漁船の波止場であったが今は水族館やレストランで賑わっている。

「ならば行ってやる。そしてルミちゃんを救い出す」

村雨はすぐにその場をあとにした。あとには風だけが残っていた。

港町の毒蛇その四

「こうして四人揃うのも久し振りね」
ある基地の宴の場でジンドグマの四人の幹部達が集まっていた。
彼等はテーブルに座っていた。
「メガール将軍は呼ばなかったのか？」
鬼火司令は上機嫌でワインを飲み干す妖怪王女に対して尋ねた。
「一応声はかけたわよ。けれど堅物だからねえ」
「断ったのじゃな」
「そうなのよ。何であんなに頭が固いのかしら」
妖怪王女は幽霊博士の言葉に答えた。
「あ奴の糞真面目さはドグマにいた頃から変わらんのう。困ったことじゃ」
「鬼火司令が不真面目過ぎるのではないかしら」
魔女参謀はサラダを口にしながら言った。
「おいおい、わしはいつも真面目だぞ」
「怒って電話ボックスを壊す程ね」
「妖怪王女、その話はいい加減止めてくれ」
「うふふ」
口喧嘩をしながらも雰囲気はいい。彼等はどうも他の幹部達のように緊張した関係にはない。
「ドグマの頃からね。メガール将軍のああした性格は」
魔女参謀は呟くようにして言った。
「仕方ないがのう。あの者は我等と境遇が異なり過ぎる」
幽霊博士はもそもそと魚を食べながら言った。彼等はテラーマクロにスカウトされてドグマに入った。そして自ら進んで改造手術を受けた。
だがメガール将軍は違っていた。彼は改造手術の失敗で醜い姿になってしまったことに絶望し自殺しようとしていたところをテラー

マクロに拾われたのだ。
「何度も言っておるのだが。そのようなことは気にするなと」
鬼火司令は顔を顰めさせた。
「けれどそれが忘れられないのでしょうね。元々真面目だから。私なんかと違って」
「王女、そなたはまた不真面目過ぎる」
「魔女参謀もあまり変わらぬがのう」
彼等は口々に言う。だが話している口調は敵意のあるものではない。
「全く、何が哀しくてテラーマクロの下にいたのやら」
幽霊博士はフォークとナイフを置いて言った。
「本当ね。あんな陰気な爺さんなんか」
「わし等より親衛隊が偉いときた。戦うのはわし等だぞ」
妖怪王女と鬼火司令もそれに同意する。彼等はドグマにいた頃からテラーマクロと衝突が絶えなかった。陰気な様子のドグマの空気が合わなかったのだ。
「悪魔元帥がドグマを出て行った時はしめたと思ったわね、本当に」
魔女参謀が言った。彼女もテラーマクロが嫌いであった。
「将軍もわし等の誘いについていればのう」
「変わっていたでしょうね。そう思うと残念だわ」
鬼火司令と妖怪王女は残念そうに言った。
「しかしそれがあの男の選んだ道じゃ」
「私達にそれをとやかく言うことはではしないわ」
幽霊博士と魔女参謀はそこで結論を出した。結局将軍はドグマにおいてスーパー1と最後まで戦った。彼等はジンドグマで戦った。そして今再び共にいる。
「惜しいのう、下らぬしがらみさえ忘れられればより素晴らしい男なのに」
「それが出来ないのよね」
彼等はメガール将軍が嫌いではなかった。だからこそ残念だった

のだ。
　四人は宴が終わるとその場から一人ずつ消えた。そしてそれぞれの場所に戻っていった。
　ウォーターフロントの水族館は水中ドームで有名である。その中にはシアトル湾に生息する蟹や魚達がいる。
　その前に彼等はいた。バダンの戦闘員達である。やがて一体の怪人がやって来た。
「一条ルミはいるか」
　ショッカーの泡蟹怪人カニバブラーである。怪人はその後ろに数人の戦闘員達を引き連れていた。
「ハッ、こちらに」
　戦闘員の一人が縛られたルミを引き立ててきた。
「ならばよい」
　カニバブラーはそれを見て頷いた。
「大切な人質だからな。ゼクロスを誘き寄せる為の」
「果たして来るでしょうか」
「間違いなくね」
　ここでヘビ女が姿を現わした。
「これはようこそ」
「うん、よくやってくれているみたいだねえ」
　彼女は戦闘員と怪人から敬礼を受けながら満足気に笑った。
「イヒヒヒヒヒ、見れば見る程可愛い娘だよ」
　ルミの顔を嘗め回す様に見る。ルミはそれに対し嫌な顔をした。

港町の毒蛇その五

「ゼクロスを始末したら食べてしまうかい。女の子の肉は柔らかくて美味しいんだよねえ」
「その時は我等もご相伴に預からせて下さい」
カニバブラーは嬉しそうに言った。
「そうだねえ、ゼクロスを倒したら宴会といこうかい。シャドウ様もお呼びしてね」
「それは楽しみです」
「だろう、早くゼクロスが来てくれるといんだがねえ」
彼女は上機嫌であった。そして右手に持つ蛇の鞭をしごきながら言った。
「この娘は連れて行くよ。何しろゼクロスをここに招き寄せる為の大切な撒き餌だからねえ」
「わかりました」
ヘビ女はルミをその手にとった。
「さあ、来るんだよ」
そして彼女はそのままその場をあとにした。カニバブラー達が残された。
「さて、と村雨良だが」
怪人は戦闘員達に顔を向けた。
「果たして何時来るかな」
「もう来ているぞ」
戦闘員の一人がそれに対して言った。
「何っ！？」
皆その言葉に振り向いた。その戦闘員はそれより早く他の戦闘員達を倒していった。
「何者だっ！」
怪人と戦闘員達が彼を取り囲んだ。

「言わずともわかっているだろうっ！」
その戦闘員は黒い服を脱ぎ捨てた。中からゼクロスが姿を現わした。
「くっ、ゼクロス！」
「まさか我等の中に紛れ込んでいたとはっ！」
彼等は鞭を手にゼクロスに襲い掛かる。だがゼクロスはそれより早く戦闘員達を倒す。
「残るは貴様だけだっ！」
そしてカニバブラーと対峙する。
「イイイイイイイイイイッ」
怪人は奇声を発しながらゼクロスを睨みつける。
左手の鋏で切り掛かる。だがゼクロスはそれをかわした。
「ムンッ！」
そして拳を繰り出す。だがそれは怪人の固い甲羅の前に防がれてしまう。
「ヌウ」
ゼクロスはそれを見て呻いた。対する怪人は不敵に笑った。
「どうだ、俺の甲羅は」
「クッ・・・・・」
その自信に満ちた態度に歯軋りする。
「そう簡単には破れぬぞ。如何にライダーの力が強かろうとな」
「力か」
ゼクロスはその言葉に気付いた。
「ならば力を使わなければよいのだ」
「フン、馬鹿なことをそれでどうやって俺を倒すつもりだ」
「手段はいくらでもある」
彼はそう言うと左手の人差し指を突き出した。
「喰らえっ！」
そしてそこからレーザーを繰り出した。
「ウォッ！」

それは怪人の心臓を貫いた。
「力を使わずとも俺にはこうした力がある。それを忘れていたな」
「む、無念・・・・・・」
怪人はその場に倒れ爆死した。
「おのれ。カニバブラーをこうも容易に倒すとは」
そこに新たな敵がやって来た。ゲルショッカーの幽霊怪人ガニコウモルである。
「次は貴様が相手か」
ゼクロスは怪人の方を振り向いた。
「ならば相手になろう」
そう言うと両肩から煙幕を出した。
「またその手か！」
怪人はそれに対して飛び上がった。
「空にまで煙幕が届くかな！」
「確かにそれは無理だ」
後ろから声がした。ゼクロスが垂直に跳び上がったのだ。
「だがそれならそれで戦い方がある」
その後ろにヘルダイバーが飛んで来ていた。
ゼクロスは下に落ちる。その真下にヘルダイバーがやって来て乗った。
「行くぞっ！」
そしてガニコウモルに向かった。怪人はそれに対して空中戦を挑んできた。
「ギイッ、イィーーーーーーッ！」
怪人は奇声を叫びながらライダーに突攻する。ゼクロスはそれに対して手裏剣を投げる。
それに怯むとゼクロスはマシンの機首を転じた。そして怪人に突撃する。
「ヘルダイバーーーーアターーーーック！」
怪人の腹を直撃した。ガニコウモルは空中に鞠の様に弾き飛ばさ

れ爆死して果てた。
「急がねばな。ルミちゃんを早く解放しないと」
彼はそのままヘビ女を探しに向かった。

港町の毒蛇その六

ヘビ女は埠頭にいた。そこでは貨物船が行き交い汽笛が鳴っている。

「いい光景だねえ」

彼女はその船達を見ながら目を細めた。

「叩き潰すにはもってこいだよ」

その後ろにはルミがいる。彼女は手を縛られ戦闘員達に抑え付けられている。

「さて、ゼクロスはやって来るかねえ」

そう言うとルミに顔を向けた。

「まあ来ない筈はないか。何しろこっちには人質がいるんだからねえ」

「その前に怪人に倒されているかも知れませんね」

戦闘員の一人が言った。

「そんな・・・・・・！」

ルミはそれを聞いて思わず顔を上げた。

「いや、それはないよ。残念だけれど」

ヘビ女はその戦闘員に対して言った。

「ゼクロスはそうそう簡単にはやられはしない。これはどのライダーにも言えることだけれどね」

彼女は考える顔をして言った。

「あいつを倒せるのは結局あたししかいないだろうね。怪人達には済まないけれど捨石にしちまった」

「それは・・・・・・」

ヘビ女の申し訳まさそうな声を聞き戦闘員達は慰めようとした。

「だけれど仇はとってやるからね。ゼクロス、楽しみにしておいで」

そこへ遠くから一台のバイクがやって来た。

「あれは・・・・・・！」

だがそれには誰も乗ってはいなかった。
「どういうことだい！？」
ゼクロスが乗っていると思ったが違った。それを見たヘビ女達は驚いた。
バイクはそのまま突っ込んで来る。ヘビ女に一直線に。
「チィッ！」
彼女はそれを横にかわした。バイクはそのまま戦闘員達を蹴散らしルミを上に乗せた。まるで何者かが乗っているようであった。
「しまった！」
戦闘員達が起き上がった時はもう手遅れであった。ヘビ女もルミを捉えようと鞭を繰り出すが間に合わなかった。
バイクはそのまま海面を進んでいく。ルミはそのまま安全な場所にまで連れて行かれ見えなくなってしまった。
「人質はそれでよし」
そこで左手の倉庫の上から声がした。
「その声はっ！」
彼等はそちらに顔を向けた。そこには彼がいた。
「クウウ、やはり」
ヘビ女は村雨の顔を認め呻いた。
「貴様等のやることは全てお見通しだ」
村雨は彼等を見下ろして言った。
「俺は姉さんを貴様等に殺された、これ以上貴様等に誰も殺させはしない」
「言ってくれるねえ、あんたも」
ヘビ女は皮肉めいた笑いを浮かべて村雨を見上げた。
「そう言うあんたもバダンに生み出された癖に」
「違う」
彼は昂然として言い返した。
「俺を生み出したのは運命だ、貴様等と戦うという運命が俺を改造人間にしたのだ」

だが本来はこの身体は望んだものではなかったのだ。多くのライダーがそうであるように。
しかしそれは心の奥底に封じ込める。バダンと戦う為にだ。
「この身体、この力、人のものではない」
彼は言葉を続けた。
「あえていうならば鬼、鬼神のものだ」
邪悪を討ち滅ぼす鬼神である。ゼクロスの赤い色は降魔の焔の色であった。
「貴様等を倒す為に・・・・・・。俺はあえて鬼となる！」
そう言うと身構えた。

変
右腕を肩と垂直に右斜め上に出す。左腕はそれと並行に右斜め下に出す。
そして右手をそのまま九十度下ろす。左腕はそれに添うように左斜め上に出す。
身体が赤と銀のバトルボディに覆われる。手袋とブーツも銀である。
身！
左腕を脇に入れる。右腕を左斜め上に突き出す。
顔が赤い仮面に覆われる。そして左も目が緑になりベルトが光った。

その光が全身を包む。ここに村雨良はゼクロスとなった。
「行くぞっ！」
掛け声と共に飛び降りる。そしてヘビ女達に立ち向かう。
「フン、来たね」
彼女の周りを戦闘員達が護る。そしてゼクロスに襲い掛かる。
ゼクロスはナイフを取り出した。そしてそれで戦闘員達を斬り倒していく。

そこへヘビ女の蛇の鞭がきた。そしてゼクロスのナイフを叩き落とす。
「ムッ」
ナイフを落とされたゼクロスはあらためて構えをとった。
「今度はあたしが相手をしてやるよ」
彼女はそう言うと今度はマントを投げてきた。
ゼクロスはそれをよけきれなかった。頭から被ってしまう。
「さて、あたしのマントは特別でねえ」
ヘビ女は無気味に笑いながら言った。
「エネルギーを吸い取ってしまうんだよ。あんたのエネルギーも吸い取ってやるからね」
彼女はマントの中でもがき苦しむゼクロスを見てほくそ笑んだ。

港町の毒蛇その七

マントが落ちた。ゼクロスはその中に消えた。
「ンッ！？」
ヘビ女はそれを見て不思議に思った。
「おかしいねえ、全部吸い取る筈なんてないのに」
いぶかりながらマントを取ろうとする。その時だった。
手裏剣が飛んで来た。数個マントに突き刺さる。
「危ないっ！」
ヘビ女は咄嗟に後ろに跳んだ。足下に手裏剣が突き刺さっていく。
「流石にそれはかわしたか」
再び倉庫の上から声がした。
「クッ、変わり身の術かい」
彼女は倉庫の上に顔を向けて忌々しげに言った。
「そうだ、俺の能力を忘れていたな。俺は自身の幻影を作り出すことができる」
「フン、何で鬱陶しい奴だろね」
「そしてこういった術も使える」
彼はそう言うと左右に分身した。五体のゼクロスが姿を現わした。
「行くぞ」
そして彼等はヘビ女を取り囲んだ。
「ヌウウ・・・・・」
五体のゼクロスが彼女を包囲する。そして身構えた。
「一つは本物、あとは全部偽者かい」
彼女はゼクロス達を凝視して言った。
「見たところ全部本物に見えるけれどね」
どれも影まである。厄介なことに。
「だけどこうしてやりゃあすぐにでもわかるね」
そう言うと鞭を繰り出した。そして五人のうちの一人を打つ。

消えた。どうやら偽者だったらしい。
「さあ、本物はそれだい！？」
そして鞭を手当たり次第に振り回した。忽ちゼクロス達が打ち据えられる。
だが途中で鞭が切られた。どうやら手裏剣を使ったらしい。
「そこかい！」
ヘビ女はそこに左手を向けた。それは蛇の頭である。
蛇の牙がゼクロスを襲う。そしてその喉に喰らいついた。
かに見えた。だがそれもまた幻影であった。
「チッ・・・・・・」
ヘビ女は舌打ちした。全てが幻影だったのだ。
「どうやらあたしを相当舐めてくれているね」
ゼクロスは少し離れた場所に立っていた。そしてそこから手裏剣を投げていたのだ。
「それは違うな」
ゼクロスはいきり立つ彼女に対して言った。
「俺は貴様の力をよくわかっているつもりだ。だからこそこうして術を使うのだ」
「へえ、そりゃ有り難いねえ」
「俺は勝つ為に最も有効な戦い方をとる。それだけだ」
彼の口調はあくまで機械的であった。そこに感情はない。
突進した。そして拳を出す。
「甘いね」
しかしそれはヘビ女の左の蛇により防がれた。
「今度はあたしの番だよ」
そしてその蛇で食い殺さんとする。
ゼクロスはそれをかわした。そして蹴りを入れた。
「ガハッ」
蹴りはヘビ女の腹に入った。彼女は思わず怯んだ。
そこへ拳がきた。顎を打たれのけぞる。

「よし、今だ」
彼は間合いを離すと大きく跳んだ。
「ゼクロス・・・・・」
その全身が赤く光った。
「キィーーーーック！」
その赤い光が炎のようになった。そしてヘビ女の胸を撃った。
後ろに跳ね返り着地する。目の前ではヘビ女が片膝をついていた。

港町の毒蛇その八

「フン、見事なもんだねえ」
ヘビ女はゼクロスに顔を向けて呻くように言った。
「このあたしをここまで倒してくれたのはこれで二人目だよ」
「そうか」
彼はまだ油断せずに身構えている。
「あたしはこれでお終いだよ。幾ら何でもここまでダメージを受けてしまってはね」
そう言うと最後の力を振り絞り立ち上がった。そして左手を右の手刀で断ち切った。するとその左手は蛇となった。
蛇はそのまま這って行った。海に入りそのまま何処かへ去って行く。
「これでシャドウ様にはお伝えできるね」
彼女は蛇が無事海に入ったのを見届けると満足気に言った。
「それじゃあゼクロス」
彼女は最後にゼクロスに顔を向けた。
「あんたはいい男だったよ、シャドウ様の次にね」
それが最後の言葉だった。彼女はそのまま爆発した。
「手強い女だった」
彼はその爆発を見送りながら言った。
シャドウは自身の基地でトランプのカードを切っていた。そこに一匹の蛇がやって来た。
「御前は・・・・・・」
彼はその蛇を見てハッとした。蛇は彼の足下に辿り着くとそこで力尽きた。
「そうか、逝ったか・・・・・・」
彼は泡となり消えていく蛇の亡骸を見下ろしながら苦渋と無念に満ちた声を漏らした。

「ヘビ女・・・・・・」
彼の声は明らかに落胆したものであった。
「俺より先に旅立ったか」
彼とヘビ女の関係は深いものであった。魔の国にいた頃から常に彼を助けてくれたのだ。
「その貴様を死なせてしまうとはな」
それだけに落胆振りは凄いものがあった。
「どうした、えらく落ち込んでいるが」
そこへ誰かがやって来た。
「・・・・・・やはり貴様か」
シャドウは顔を上げて客の顔を見て言った。
「今情報を仕入れたのだが」
「知っている」
「そうか、ヘビ女が死んだぞ、シアトルでな」
「・・・・・・・・・」
シャドウは答えようとはしなかった。
(どうやらかなりの痛手のようだな)
タイタンは彼の顔を覗き見ながら思った。
「相手はゼクロスだ」
「・・・・・・そうか」
それを聞いて怒り狂うかと思った。だが違っていた。当てが外れてタイタンはつまらなく思った。
「飲むか」
彼は懐から一本のワインを取り出した。
「モーゼルだ。ドクトル＝ゲーから貰ったものだ」
「ドクトル＝ゲーからか」
彼はドイツ出身なのでその地の酒には精通していた。
「そうだ、かなりの上物らしいぞ」
「ではいただこう。貴様も席に着くがいい」
彼はそう言うとタイタンに向かいの席を勧めた。

「うむ」
タイタンは席に着いた。そしてワインを開けると二つのグラスを取り出した。
白い酒がグラスに注ぎ込まれる。二人はそれを手に取ると杯を当てて飲みはじめた。
「美味いな」
シャドウはその酒を一口飲んで言った。
「そうだな、俺はいつもはイタリアのものをよく飲むのだが」
タイタンは口の中でその味を堪能しながら言った。
「ドイツのものもいい。今度はこれも飲むか」
「そうだな、俺もそうするとしよう」
二人は瞬く間にワインを空けた。
「さて、と」
タイタンはシャドウの気持ちが落ち着いたのを見計らい声をかけた。

港町の毒蛇その九

「今後どうするつもりだ」
「今後か」
二人は酔ってはいなかった。だがシャドウは酒により気を鎮めていた。
「まずはストロンガーを倒す。そして」
「そして!?」
「あの男を倒す。そして仇をとる」
「そうか」
見ればその眼は燃えていた。復讐を誓う激しい炎で燃えていた。
「さて、とルミちゃんも無事だったみたいだな」
村雨は戦いを終えルミと共に再び野球観戦を楽しんでいた。
「ええ、良さんのおかげで」
ルミはそれに対して笑顔で答えた。
「そうか、無事で何よりだよ」
彼はそれを聞いて笑った。にこやかで優しい笑顔である。
「・・・・・・・・・」
ルミはその笑顔を見て自身も笑った。
「どうしたんだい!?」
村雨はルミが笑顔を見せたのを不思議に思った。
「イチローがまた打ったの?」
違った。今はマリナーズの守りの時である。イチローはライトを守っていた。
ライトに打球が飛んだ。イチローはそれを素早い動きでキャッチした。
三塁にいたランナーがそれを見て走った。イチローがホームへ向けて矢の様な送球を返した。
速い。そして正確であった。キャッチャーのミットに寸分の狂い

もなくボールは収まりホームに突入を敢行したランナーは憤死した。
「肩も相変わらずだな」
彼はそれを見て感嘆の声を漏らした。
顔を戻す。見ればルミはやはり笑っていた。
「イチローのプレイに微笑んだんだね」
「違いますよ」
ルミはそんな村雨に対しやはり微笑んで答えた。
「良さんに笑ったんですよ」
「俺に！？」
村雨はそれを聞いて大いに驚いた。
「俺の顔に何かついてるかな」
そして両手で慌てて顔をさすったり軽く叩いたりした。
「だから違うんです」
ルミはそんな彼の様子がおかしくてたまらなかった。だがそれに対して笑ったのでは当然なかった。
「良さんって自分のことはあまりわかってないんですね」
「そ、そうかな」
彼はそれを聞いて今度は狼狽した。不思議な程狼狽している。
「けれどいいですよ。そうしたところも良さんの持ち味ですから」
「それはあまり嬉しい言葉じゃないなあ」
彼は不満そうであった。
「どうしてですか？」
「だってほら、何か馬鹿にされているみたいで」
「馬鹿になんかしていませんよ」
「本当に！？」
彼は顔を少し尖らせて尋ねた。
「ええ。むしろ良さんの別の一面が見られましたし。見直しているんですよ」
「そうかなあ。俺にはそうは思えないけれど」
今度は首を傾げた。やはり彼にはよくわかっていないようである。

試合観戦後二人はシアトルを後にすることにした。そして次の戦場へ旅立つ為に空港へ向かった。

「行こうか」

「はい」

こうして二人は次の戦場に向かった。二人を乗せた銀の翼がワルキューレの槍の様に輝いた。

港町の毒蛇　　完

２００４・５・２２

知の戦士その一

「またしても戦死者が出たというのか」
ドクトル＝ゲーは北欧にいるメガール将軍と会っていた。そして幽霊博士と魔女参謀の戦死の報告を聞いて思わず声を漏らした。
「そうだ、中国でな」
将軍は顔を俯けて答えた。彼にとっては袂を分かったとはいえかっての仲間であった。
「惜しい者達をなくしたな。相手は誰だ？」
「仮面ライダーブイスリーと仮面ライダーエックスだ」
「ほう、奴だったか」
ゲーはそれを聞いてその暗い目に光を宿した。
「やはりそうそう簡単には倒れぬか」
笑みを浮かべた。ゾッとする笑みだった。
「楽しそうだな」
将軍は彼のそんな様子を見て言った。
「うむ、そうでなくては張り合いがない」
どうやら彼と戦う事を楽しみにしているようだ。
「仮面ラァーーーイダブイスリーを倒すことは我が悲願だ。私がデストロンにいた時からな」
彼は凄みのある笑みに変えた。
「この斧が叫んでおる。奴の血を飲ませろと」
「それはお主自身の心ではないのか？」
メガール将軍はそんな彼を見て言った。
「そうかも知れぬな。だがそれでもよい」
彼はその陰惨な笑みを崩さない。
「私はあの男を倒すことだけで今までこのバダンにいるのだからな」

「そうか。それは私と似ているな」
彼はそれを聞いて顔に陰を作った。
「スーパー1とか」
「うむ」
小さな声を出して頷いた。
「その為に今もこの姿でいる」
彼の声は沈んだものになっていった。
「そうか」
ゲーもそれ以上は聞こうとしなかった。そして踵を返した。
「帰るのか」
「うむ、こちらも何かとあってな」
彼は振り向いて答えた。
「あの男と戦う時が近付いているしな」
「そうか、期待しているぞ」
「お主もな、必ずやあの男を倒すがいい」
「わかった」
ドクトル＝ゲーは言葉を送ってその場をあとにした。そして彼等はそれぞれの作戦行動に入った。
城茂はインドネシアでの戦いのあとオーストラリアに来ていた。そして今中央部をバイクで走っていた。
「凄いところだな。見渡す限りの草原か」
そしてその中を羊達が歩いている。のどかな光景であった。
「そういえば最近は砂漠とかバリ島とかで戦っていてこうしたところとは無縁だったな。たまにはこんな所でのんびりとしたいもんだ」
「だがそうは上手くいかないぞ」
ここで後ろから声がした。
「？」
城はその声に対し振り向いた。そこには彼と同じ戦士がいた。
「あれ、結城さんもここに来たんですか！？」

彼は結城の姿を認めて言った。
「ああ、アメリカからな。あの地には村雨君がいるし彼に任せることにした」
「へえ、アメリカにはあいつがいるんですか」
彼はそれを聞いて意外そうな顔をした。
「ああ、シアトルで早速デルザーの改造魔人を倒したそうだ」
「デルザーの？どいつですか？」
「ヘビ女らしいぞ」
「ヘビ女ですか。それはやりましたね」
彼はヘビ女には苦戦させられてきたのだ。
「嫌らしい奴でしたよ。マントを使ったり催眠術を使ったり」
「彼もルミちゃんを人質にとられたりして苦戦したそうだけれどね」
「あいつのやりそうなことですね。いや、まだ奴にしては正攻法ですよ」
「そうだな。しかしそれも彼は打ち破った」
結城はそう言うと伝え聞いたシアトルでのゼクロスの戦いぶりを城に話した。
「何か忍者みたいですね」
聞き終えた彼の最初の言葉はそれであった。
「ああ、俺もそう思った」
結城もそれに同意した。
「分身に煙幕に手裏剣だからな。実際に隠密行動も得意だし」
「そういえばそうしたライダーって今までいませんでしたね」
「ああ。何だかんだ言って皆派手だからな」
「俺は地味ですけれどね」
「何言ってるんだ、君が一番派手だよ、普段のその服も」
そう言って城のSの字が入ったシャツや薔薇の刺繍が入ったジーンズを指差した。
「そうですかねえ。俺はもっと目立つ格好をしたいんですけれど」
「それ以上目立ってどうするんだ」

二人はそんな会話をしながら西へと向かっていた。
　オーストラリア中央部。ここは荒地となっている。アボリジニー達にとっては聖地と言われる場所も多い。
その中の岩山の一つ。そこに今バダンの者達がいた。
「異常はないな」
戦闘員が同僚に対して問うた。
「ああ、今のところは」
問われた戦闘員が答えた。
「そうか。じゃあ交代だ」
「よし」
彼等はそう言うと敬礼し合い歩哨を代わった。
警戒はかなり厳重である。それをモニターから見る男は満足そうに笑った。
「フッフッフ、皆気合が入っておるな」
鬼火司令であった。彼はそれを見て満足気である。
「機嫌がいいようね」
そこに妖怪王女がやって来た。
「当然だ。ここまで厳重な守りはそうそうないぞ」
「そうかしら。そんなこと言っていつもライダー達に遅れをとっているのは何処の誰かしら」
「・・・・・それはお互い様じゃろうが」
彼は急に顔を不機嫌にさせて言った。
「だが今回はそれは許されんぞ」
「・・・・・わかっているわ」
妖怪王女は頷いた。その表情にはいつもの笑みはない。
「二人の仇をとる為にな。必ずやあの男を倒さなければならん」
「ええ」
二人はそう言うとモニターのスイッチをＶＴＲに変えた。
そこにはライダーマンが映っていた。今までの戦いの映像である。
「やはり戦闘力自体は大したことはないな」

鬼火司令はデストロンとの戦いを見て言った。
「そうね、それは今も変わらないみたい」
妖怪王女も言った。確かに怪人には分が悪いようである。

知の戦士その二

「これでよく今まで勝てたものだ。アタッチメントのせいか」
「そうね、おそらくこれがなければとっくの昔に倒されていたわ」
彼等はそう分析した。
「それでは戦い方は決まったな」
「ええ、まずはアタッチメントを潰しましょう。私達が出るのはそれから」
「うむ」
こうして二人は映像を切った。そしてその場をあとにした。
城と結城は相変わらずオーストラリアの真ん中を進んでいた。今は休息をとる為通り掛かった小さな村に入ろうとしていた。
「しかしこんなに大きいのに人はあまりいませんね、オーストラリアって」
二人はバイクを止め村の中に入っていた。城がヘルメットを置きバイクから降りて結城に言った。
「ああ、アメリカとはかなり違うな」
結城もそれに同意した。彼は今までアメリカにいただけありその比較がよくできた。
「同じ英語の国でも事情もかなり違っているしな、どちらかというとこの国はのんびりしている」
「そうですね。ここに来るまでよくのどかに羊と一緒に寝ている人を見ましたよ」
オーストラリアは農業も盛んである。特に牧畜は有名である。羊はオーストラリアの人々にとって切っても切れないものである。
「この村もそうみたいだな。周りに牧場が多い」
「ええ。何か俺達ここ何日か人より羊の方をよく見てますよ」
「そう言うと何だかモンゴルみたいだな」

「ははは、敬介さんと場所が変わったみたいですね」
「おお、そういえばそうだな。けれどモンゴルというにはここは暑過ぎるな」
「荒野も多いですし」
「おいおい、それはもうちょっと先の方だぞ」
二人はそうした話をしながら村の中を進んだ。そして一つの小さなレストランに入った。木で造られた何処か西部劇に出て来るようなレストランである。
「いらっしゃい」
中には白い口髭を生やした体格のいい男がいた。ジーンズにウエスタンハットを身に着けている。
「お、アジアから来たのかい」
彼は二人の顔を見て言った。
「ええ」
二人は頷いた。どうも悪感情はないようでそれは安心した。
「日本人かい、それとも中国人かい？」
「日本人ですけれど」
結城が答えた。それを聞いて男は少し考える顔をした。
「そうか、日本人か」
彼は少し残念そうな顔をした。
「どうかしたんですか？」
城が彼に問うた。
「いや、うちはレストランなんだがな」
「ええ、それはわかります」
変な話をする、結城はそう思った。
「肉料理は羊のものしかないぜ、何しろそれだけには困らないから」
どうやら羊料理のレストランのようだ。
「あ、そうなんですか」
「それでいいかい？羊が駄目ってのなら悪いが他の店をあたってくれ」

「構いませんよ、別に」
城が答えた。
「俺達は羊も大好きですから」
「へえ、そりゃ珍しいね」
男はそれを聞いてふと目を広げた。
「日本人ってのはあまり羊は好きじゃないから。匂いが駄目だそうだが」
「まあ独特の匂いですね」
結城はそれを聞いて言った。肉食文化が入って日が浅いせいか日本人は羊に馴染みが薄い。そして匂いが駄目だという人が多い。思えば残念なことである。
「わしにとっちゃあ魚の匂いのほうが駄目なんだが。まあ人の好みってやつがあるからな」
「俺はあの匂いがたまらないんですけれどね。じゃあ早速いただけますか？」
「おお、ちょっと待ってな」
彼はそう言うと店の奥に入った。そしてサラダの山を持って来た。
「まずはこれでも食って腹を落ち着かせてくれ」
「はい」
レタスと豆、そしてトマトのサラダである。キーウィも入っている。
それを食べていると男はカウンターのところで肉を焼いていた。その音と香りが二人の席の方にまでやってくる。
「いい匂いですね」
「ああ、焼きあがるのが楽しみだ」
やがて肉が運ばれてきた。マトンのステーキだ。かなり分厚い。
「お待ちどうさん、腹一杯食ってくれ」
男は二人の前にそのステーキを置いた。二人は早速ナイフを入れて口に含んだ。

知の戦士その三

「お、美味いや」
まず城が言った。
「本当だ、柔らかいし。かなり上等の肉だな」
結城も同じだった。二人はソースもかけずに塩と胡椒の味付けもままその肉を味わっている。
「美味いだろう、何せこの村の羊だからな」
男はニンマリと笑って言った。どうやら美味しいと言われたのが余程嬉しいらしい。
「この村の羊は特別でな、毛もたっぷりととれるし肉も最高なんだ。何しろいつも賞をとっている位だからな」
「羊毛もですか」
「そうだ、他のとこの羊の毛と比べても全然違うぜ」
彼は益々機嫌をよくした。
「わしも今までオーストラリア中を歩き回ってきたがここの羊に勝ってるのは見たことがない。それ程ここの羊は素晴らしいのさ」
かなり羊に思いいれがあるようだ。彼の機嫌はさらによくなっていく。
「今日は気分もいい。どんどん焼いてやるよ」
「えっ、本当ですか!?」
「ああ、オーストラリアの男ってのは気前がいいんだ、それをたっぷりと教えてやるよ」
そう言うとカウンターに戻った。
「ビールもたんまりあるぜ。良かったら飲んでくれ」
「はい!」
こうして二人は羊とビールを心ゆくまで堪能した。そして店を後にした。
「お金も安かったですね」

「そうだな、あれだけ食べてあの程度ですむとは思わなかったよ」
二人はビールで赤くなった顔を向け合いながら話した。息もビール臭い。
「オーストラリアってのは食べ物は安いと聞いていたけれどこれ程とは思いませんでしたね」
「ああ、何か得した気分だ。ところで今バイクの乗るのはまずいな」
「ええ。流石に」
城も苦笑した。
「少し酔いを醒ましに行くか」
「了解」
こうして二人は牧場に向かった。
牧場では羊達がのどかに草を食べていた。二人はその中を歩いている。
「たまにはこうしたところを歩くのもいいですね」
「うん、戦いばかりでは疲れてしまうしな」
二人は気分よく草原を歩いている。
「戦いが終わったらこうしたところでのどかに暮らすのもいいですね」
「そうだな、これまでのことを全部忘れて」
二人はまだ来ぬ平和を夢見ていた。その為には勝たなくてはならない、それもよくわかっていた。
そしてその場に腰を下ろした。そこへ何者かが襲い掛かって来た。
「ムッ！」
二人は咄嗟に左右に跳んだ。敵は下から来た。
「フェフェフェフェフェフェ」
ショッカーの蟻酸怪人アリキメデスであった。怪人は地中から襲い掛かって来たのだ。
「こんなところにまで来るとはな」
二人は既に変身を終えていた。そして地中から這い出て来た怪人と対峙した。

「俺もいるぞ！」
そこに上から声がした。
「ウワッ！」
二人に向けてミサイルが放たれた。二人は慌てて跳びそれをかわした。
「上からもかっ！」
デストロンツバサ一族の木霊ムササビであった。怪人は上空を舞っている。
見れば戦闘員達もやって来た。そして二人を取り囲んだ。
「木霊ムササビは俺が！」
ストロンガーは急降下してきた木霊ムササビを掴んで地に引き摺り落とした。
「わかった、ではアリキメデスは俺がやる！」
ライダーマンはそれを受けてアリキメデスへ向かった。その前を戦闘員達が立ちはだかる。
「行くぞっ！」
ライダーマンはアタッチメントを装填した。パワーアームである。それで戦闘員達を切り裂いていく。そして彼等を退け怪人の前に来た。
「来たか」
怪人はそれを見ると頭を前に突き出した。そして触覚から赤い液体を出した。
「ムッ！」
それはライダーマンに向けて放たれた。だがライダーマンはそれを斜め前に跳びかわした。
着地と同時にアリキメデスに向けて跳ぶ。そして跳びながらアタッチメントを換装した。
「アリは硬い甲殻に守られている」
彼はアリの身体のことを考えながらアタッチメントを換えていた。
「ならばこれが有効だっ！」

そう言うと分銅を取り付けた。
「スウィングアーームッ！」
打撃用のアームである。そしてそれで怪人の頭部を打ち付けた。
「ギャッ！」
怪人は思わず叫び声をあげた。どうやらライダーマンの分析は正しかったようだ。

知の戦士その四

ライダーマンはそのまま攻撃を続ける。最初の攻撃で怯んだ怪人はそのまま打たれるがままだった。

最後の一撃が頭を打った。怪人はこれで倒れた。

ライダーマンは後ろへ飛び退いた。怪人は爆死して果てた。

その時ストロンガーは木霊ムササビと死闘を繰り広げていた。

怪人が再びミサイルを放ってきた。ストロンガーはそれに対し両手を身体の前に突き出した。

「磁力扇風機っ！」

そしてそれでミサイルを巻き込む。ミサイルはあえなく爆発した。

「アアアア」

怪人はそれを見て驚愕の色を浮かべた。だがすぐに気を取り戻し襲い掛かった。

だが接近戦ならストロンガーの方が分がある。彼は怪人に攻撃を加えダメージを与えた。

「トォッ！」

そして空中に投げた。怪人はそれに対し必死でバランスを取ろうとする。

しかしストロンガーの方が動きが速かった。彼は空中に跳んでいた。

「スクリューーーーキィーーーーック！」

身体を回転させて蹴りを放った。空中でそれを受けた怪人は遠くまで吹き飛ばされ爆発四散した。

「やはりここにいたか」

ストロンガーは着地して怪人の爆炎を見上げながら呟いた。

「ああ。予想通りだな」

ライダーマンがそこにやって来た。既に戦闘員達も皆地に伏している。

「このオーストラリアで何を企んでいるかは知らんが」
ライダーマンは強い口調で言った。
「俺達がいる限り好きにはさせないっ！」
ストロンガーも同じく強い声で言った。そして二人の戦士は牧場をあとにした。
場所は変わる。イギリス、ロンドンである。
この霧の都にはロンドン塔というものがある。かってはここで多くの者が首を刎ねられている。
その血生臭い塔に今二人の男がいた。
「そうか、あの二人がここに向かっているか」
ブラック将軍である。彼は塔の断頭台を見ながら傍らにいる男の話を聞いていた。
「うむ、先程俺の手の者が確認した。カレーで合流しこちらへ来る船に乗り込んだそうだ」
傍らにいる男はゾル大佐である。かってショッカー、ゲルショッカーにおいてその悪名を欲しいままにした伝説的な魔人達である。
「カレーか。ならばこのロンドンに来るのもすぐだな」
「既に俺の手の者には全て警戒態勢をとらせている。貴様もすぐにそうした方がいい」
「それはわかっている。すぐにそうさせてもらおう」
彼はそう言うと側に控える戦闘員の方を振り向いた。
「話は聞いたな。すぐにこのロンドンにいる者全員に伝えよ」
「ハッ」
戦闘員は敬礼した。そしてその場からすぐに立ち去った。
「これでいいな」
彼はゾル大佐の方を向き直って問うた。
「ああ、流石だ」
大佐はそれを見て素直に賛辞を送った。
「だがそれだけでは足りぬな」
「というと？」

「奴等が我々のこの地での作戦を勘付いているならば」
大佐は言葉を続けた。
「我々も直接出向かなければなるまい」
「我々がか」
将軍はそれを聞いて呟いた。
「面白いではないか。ようやく積年の宿根を晴らす時が来たのだ」
「積年の宿根か、確かにな」
大佐はそれを聞き呟いた。
「あの時の恨み、忘れられるものではないな」
ここで彼はかって仮面ライダー二号と戦い敗れたことを思い出した。
「一度は偉大なる首領の御力で甦らせて頂いたが」
「だがそれもほんの僅かのことであった」
ブラック将軍もそれは同じであった。彼等はデストロンの時に一度甦っている。だがあえなく倒れたのである。
「貴様とて覚えていよう。あの屈辱を」
大佐は言葉こそ通常であったがその声は激昂していた。
「当然だ。それを晴らせるとなれば迷うことはない」
将軍もそれは同じであった。
「待っておれ、ライダー達よ」
そして眼下のロンドンの市街を見下ろした。
「この霧の都を貴様等の墓場にしてくれる」
そう言うとその場から立ち去った。そしてあとには霧だけが残った。

知の戦士その五

結城と城は荒野をバイクで進んでいた。何時しか牧場もなくなりそこは無人の荒野となっていた。

「オーストラリアってのもバラエティにとんだ国ですね」

城が結城の隣にきて言った。

「その言葉はちよっと違うと思うがな」

結城は彼の言葉に少し首を傾げた。

「しかし様々な地形があるというのは事実だな」

「はい、海はあるし大草原はあるしこうした荒野はあるし。見ていて飽きませんね」

「確かに。ここまで進んで風景に飽きたことはないな」

彼は頷きながら言った。

「アメリカも色んな場所があるがこの国もそうだな。面白い国だ」

「そうですね。けれど毒蛇が多いのは困りものですが」

「それは何処にでもいるだろう。御前さんがこの前いた東南アジアでも結構いるだろうに」

「そりゃそうですけれど」

東南アジアは確かに毒蛇の種類が豊富である。だがオーストラリアもかなりの多さである。意外にもあまり知られていないがこの地域は毒蛇が多いのである。有袋類だけがオーストラリアではないのである。

「こんなに多ければバダンの奴等に利用されそうで嫌ですね」

「まあ連中は毒も得意だからな。それで何度やられたか」

これもショッカーからである。バダンも毒を使うことを得意としている。

「ムッ！？」

その時であった。急に二人の前を数枚のカードが取り囲んだ。

「これはっ！？」

「シャドウか！？」
だがそれはゼネラルシャドウではなかった。その証拠にトランプのカードではなかった。黒い普通のカードであった。
それでも敵のものであることに変わりはなかった。そこから戦闘員達が姿を現わしたのである。
「クソッ、待ち伏せかっ！」
二人はバイクで彼等を振り切ろうとする。だがそれに対しロープをかけてきた。
「ウオッ！」
ロープは二人を絡めた。そしてそれで動きを封じようとする。
しかし二人の力がそれに勝った。二人は上に跳ぶとそのロープを渾身の力で引き千切った。
「今度はこちらの番だっ！」
二人は変身していた。そしてそのまま戦闘員達へ急降下した。
戦闘員達を拳で次々と倒していく。そこへ怪人達が姿をあらわした。
「イーーーーッ！」
ゴッド悪人軍団の一人アリカポネである。だが彼だけではなかった。
「ギュルギュルギュル！」
「キーーーーーーッ！」
ブラックサタンの地中怪人奇械人アリジゴクとジンドグマの鍵爪怪人キーマンジョーもいた。ストロンガーが彼等の前に出た。
「ライダーマン、この連中の相手は俺がっ！」
ストロンガーは迷うことなくその三体の怪人に向かった。
「済まない！」
ライダーマンは既に戦闘員達に取り囲まれていた。彼はそれを見て怪人達に向かったのだ。
「エレクトロサンダーーーーーッ！」
ストロンガーは早速攻撃を仕掛けた。まずは奇械人アリジゴクが

それを受けた。
「ギュルーーーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びをあげるとその場に爆死した。だがストロンガーは息をつく暇もなく残る二体の怪人の相手をはじめた。
ストロンガーは怪人達と戦っていた。ライダーマンはそれに対して戦闘員達を相手にしている。
「イィーーーーーーッ！」
怪人達は奇声を発し襲い掛かる。ライダーマンはそれを一人一人確実に仕留めていく。
そこに新手が来た。ネオショッカーの化石怪人ザンヨウジョーである。
「やはり怪人も！」
「ジュラーーーーーーッ！」
怪人は答えるかわりに奇声を発し襲い掛かって来た。ライダーマンは戦闘員達を全て退けると怪人に向かって行った。
アタッチメントを装填する。ネットアームだ。
「喰らえっ！」
そしてネットを発射する。怪人はその中に捉われてしまった。
だがすぐにそれを引き千切り中から出て来た。だがライダーマンはそれより前に既に間合いを詰めていた。
アタッチメントを再び換える。今度はドリルアームだ。
「これでどうだっ！」
そしてそれで突きを入れる。ドリルが怪人の胸を刺し貫いた。
「ジュラッ！」
怪人は苦悶の声をあげる。ライダーマンはその声を聞き勝利を確信した。
だがそれは誤りであった。怪人はまだ最後の力が残っていたのだ。
ザンヨウジョーは爆発する直前に口から化石ガスを吐いた。それはライダーマンの右腕を狙っていた。
「ムッ！」

ライダーマンは不覚をとった。右腕にそのガスを受けてしまったのだ。
右腕に痛みがはしる。だがそれでも爆発をさけ後ろに跳び退いた。
「ライダーマンッ！」
ストロンガーが心配し声をかけようとする。だがそこに怪人達が襲い掛かる。
「クッ！」
ストロンガーは止むを得ず後ろを振り向く。そして攻撃を放った。
「電パァーーーンチッ！」
それでアリカポネを退けた。続けて上に跳んだ。
「トォッ！」
そして空中で一回転した。
「ストロンガー電キィーーーーーーック！」
そして蹴りを放った。キーマンジョーはその直撃を受け吹き飛んだ。

知の戦士その六

二体の怪人はそれで爆死した。ストロンガーはそれを見届けることはせずライダーマンの方へ駆け寄った。
「大丈夫ですかっ！？」
そして右腕を押さえ蹲る彼を気遣った。
「ああ、何とか」
彼の身体は無事であった。だが肝心のアタッチメントが損傷していた。
「これはまずいですね」
「・・・・・ああ」
それはライダーマン自身が最もよくわかっていることであった。彼の戦力はこのアタッチメントがほぼ全てなのだから。
「とりあえずは修理する必要がある」
彼は化石化した腕を見ながら言った。
「だが数日はかかるな」
「数日、ですか」
ストロンガーはそれを聞いて表情を暗くさせた。その数日が命取りになるかも知れないからだ。
「上手くいったな」
それをモニターから見る者達がいた。
「これでライダーマンは翼をもがれたも同様だ」
それは鬼火司令であった。
「あとはストロンガーを引き離せばいいだけ。本当に楽ね」
妖怪王女もいた。彼等はモニターに映るライダーマン達を見て笑っていた。
「奴等はここへ向かっているのだな」
「ええ」
妖怪王女は答えた。

「ならば問題はない。ここへ来たところを倒すとしよう」
「そうね、まずはストロンガーを引き離さないと」
「何か策はあるか」
「それは任せて」
妖怪王女はそう言うと笑った。
「こうしたことは得意だから」
「そうか、ならば期待しておるぞ」
鬼火司令はそれを聞いて顔を崩した。
「それでは行くとするか」
「ええ。ライダーマンの首を獲りに」
二人は顔を向けて頷き合うとその場をあとにした。そして戦場へ向かった。
結城と城はそのままオーストラリアの奥深くを進んでいた。そしてある岩山を見つけた。
「どう思います？」
城はその岩山を指差して結城に尋ねた。
「そうだな」
結城もその岩山を見た。一見普通の岩山だが何処か妙な雰囲気だ。
「調べてみよう。何かあるかも知れない」
「わかりました」
二人は頷き合うとバイクを降りた。そしてその岩山を登った。
そして表面を調べ回った。やがて戦闘員を発見した。
「やはり」
咄嗟に物陰に隠れる。そしてその戦闘員の動きを見張った。
戦闘員は穴の中へ入って行く。どうやらそこが入口らしい。
「行きましょう」
「ああ」
二人はその穴の中に入った。そこは薄暗い洞窟だった。
「気をつけていこう」
「はい」

二人は前後左右を警戒しつつ進んで行く。城はその時ふと尋ねた。
「右腕の様子はどうですか」
「あまり思わしくはないな」
結城は深刻な声で答えた。
「普通に動かすことはできるがアタッチメントとなると無理だ。装填できるまでにはまだかかる」
「そうですか。じゃあ今回は俺が奴等を叩きますよ」
「いや、その必要はない」
結城はその申し出に対し首を横に振った。
「俺も戦わせてもらうよ」
「しかしその腕じゃあ・・・・・・」
「大丈夫さ、俺の武器はこの右腕だけじゃない」
彼は微笑んで言った。
「それを見せてあげるよ」
「そうですか・・・・・・」
だが城は不安であった。強化されたとはいえライダーマンの戦闘力は他のライダー達と比べると見劣りする。そしてアタッチメントがなくてはそれはさらに落ちるのだ。
二人はそのまま進んだ。そして道を曲がった時だった。
「ムッ！」
突如落とし穴が開いた。結城はその中に落ちた。
「結城さんっ！」
城は驚いて手を差し伸べようとする。だが間に合わなかった。彼はそのまま奈落へと落ちて行った。

知の戦士その七

どれだけ落ちたであろうか。結城は足で受け身をとり着地した。
そして周りを見回す。
「ここは・・・・・・」
そこは巨大な空洞の一室であった。見たところ何もない。
「てっきり罠でも仕掛けてあると思ったが」
やはり何もなかった。彼はすぐに道を見つけた。そしてそこを進んでいく。やけに曲がりくねり長い道であった。
どれだけ歩いただろうか。やがて前に光が見えてきた。
結城はそちらへ向かった。するとそこから外に出ることが出来た。
「ここは・・・・・・」
そこは何度かテレビや本で見たことのある場所であった。オーストラリアで最も名の知られた場所の一つである。
先住民であるアボリジニー達の聖地でもある。巨大な岩石のテーブルである。結城は今その上にいたのだ。
「まさかこんな場所に出るとはな」
結城は周りを眺めながら思わず呟いた。
「噂には聞いていたが凄い場所だ。見渡す限り赤い絨毯だ」
「そう、確かに赤い絨毯だな」
そこで何者かの声がした。
「・・・・・やはり来たか」
結城はその声に対し振り向いた。そこには二人の敵がいた。
「今は岩の絨毯だが」
一人は鬼火司令である。
「もうすぐ貴方の赤い血で染まることになるのよ」
もう一人は妖怪王女である。二人は既に勝ち誇った笑みを浮かべている。
「それは俺を倒すという意味だな」

「当然」
二人は同時に言った。
「幽霊博士と魔女参謀の仇をとる為にも」
「貴方のアタッチメントをいただくわ」
二人は左右に散りそれぞれ身構えた。
「そうか、その為に俺を落とし穴に落としここまで来させたのだな」
結城は全てを察した。
「そうだ、仮面ライダーストロンガーと引き離す為にな」
「貴方一人を倒す為に」
二人に抜かりはなかった。そしてライダーマンを左右から取り囲んだ。
「では見せよう、我等の真の姿を」
「とくと御覧あれ」
そう言うと鬼火司令は左手から炎を出しそれを地面に打ち付けた。
妖怪王女はその仮面を取った。
炎が彼の全身を包む。やがてそれが消えた時顔が髑髏になり右腕は大砲になっていた。胸も赤く変形し背にも大砲があった。
妖怪王女のスカートが伸びた。足全体を覆い服が厚くなる。そしてその髪が伸びた。
「それが貴様等の正体か」
結城はそれを見て言った。
「そうだ、これがわしの真の姿、オニビビンバだ」
「同じくサタンドール」
二人はそれぞれ名乗った。
「さあ結城丈二、いやライダーマンよ」
オニビビンバは結城に対して言った。
「貴方も変身するがいいわ。そうでなくては面白くとも何ともないわ」
サタンドールが続けた。そして間合いを離す。
「そうか、ならば」

結城はそれを聞いて身構えた。
「見せてやろう、ライダーマンの力を！」
そう言うと変身に入った。

トォーーーーーーーッ！
両手を大きく上に掲げる。するとそこにヘルメットが現われた。
それを下に持っていく。身体が黒いバトルボディに覆われ手袋とブーツが銀になる胸も赤く変わった。その腹は白と緑である。
ライダーーーーマンッ！
そしてそれを被る。両手を胸のところでクロスさせ拳を打ちつけ合う。
ベルトの四つの風車が回転した。そしてそこから光を放つ。

「行くぞっ！」
そして変身を終えた。そこには四人目のライダー、ライダーマンがいた。
「フフフ、変身したな」
オニビビンバとサタンドールはその姿を見て顔を動かして笑った。
「そうじゃないと面白くないわ。早速相手をしてあげる」
まずサタンドールが姿を消した。そしてライダーマンの後ろに姿をあらわした。
「ムッ！」
ライダーマンは咄嗟に気配を感じ後ろを振り向いた。そして振り向きざまに攻撃を仕掛ける。
「無駄よ」
しかしそこにサタンドールはいなかった。彼女は前に移動しそこからライダーマンに手刀を放った。
「グワッ」
ライダーマンは怯んだ。だがすぐに態勢を立て直し反撃に移る。

知の戦士その八

しかしそこにサタンドールはいなかった。オニビビンバの側に移っていた。

「今度はわしの番じゃっ！」

オニビビンバはそう叫ぶと身体を前屈みにさせた。そして背中の大砲をライダーマンに向けて来た。

「ヌッ！」

ライダーマンは咄嗟に左に走った。それを砲撃が追いかけて来る。

「速いな」

ライダーマンは思った。だが彼も負けてはいられない。すぐに間合いを狭めようとした。

だがそうはいかなかった。

「それはさせないわ」

サタンドールの目が光った。不意にライダーマンの動きが止まった。

「何、どうしたことだっ！」

動けない。何やら得体の知れない力で動きを封じられたようだ。

「オニビビンバ、今よ！」

サタンドールはそれを見てオニビビンバに対して言った。

「うむ！」

オニビビンバは頷くとその手に大鎌を出した。そしてそれをライダーマンに投げ付けた。

大鎌は凄まじい唸り声をあげライダーマンに襲い掛かる。それは彼の首筋を狙っていた。

「クッ、このままでは・・・・・・」

かわそうにもかわせない。動くことができないのだから。

「おそらく・・・・・・」

原因はわかっていた。サタンドールの術によるものだろう。おそ

らくその名が示すように妖しげな術に長けているのだ。
そう考えている間にも鎌は近付いて来る。もう少しでライダーマンの首が切断される、その時だった。
不意に鎌が吹き飛んだ。そして地面に叩き落とされそこで回転する。
「誰だっ！」
オニビビンバとサタンドールはそれを見て辺りを見回した。そこで口笛が聞こえてきた。
「口笛っ！？まさか」
彼等も口笛のことは聞いていた。咄嗟にあの男のことが脳裏に浮かんだ。
「ハッハッハッハッハッハ、どうやらジンドグマも俺のことはご存知だったようだな」
そこで声の主が姿を現わした。
「おのれ、城茂・・・・・・」
「先程のは貴様の仕業か」
「如何にも。俺のこの力を使ったのさ」
そう言って両手を見せる。既に手袋を脱いでいた。
「電撃は何も感電させたりするだけじゃない。こうして衝撃を送ることもできるんだ」
「クッ・・・・・・」
「残念だったな。俺にはビデオシグナルというものがある」
過去のその場の映像を映し出すものである。これにより索敵も可能だ。
「それで貴様等がここにいることを掴んだのだ。これで形勢逆転だな」
「クッ・・・・・・」
彼等は歯軋りした。だが今更どうにもなるものではない。
「ではいくぞ、このストロンガーの力見せてやる！」
彼はそう言うと変身に入った。

変身

右腕を肩の高さで横に垂直にする。そして左腕は肘を直角に折り右腕と水平にする。

そしてそれをゆっくりと右から左へ旋回させる。それと共に身体が黒くなり胸が厚く赤いものになる。白い手袋とブーツがあらわれる。

スト・・・・・ロンガーーーーーーッ！

両腕が左斜め上にきたところで両手を合わせる。そこに雷が宿る。

右腕を引いた。雷は宿ったままである。

顔の右半分は緑の眼を持つ黒い仮面に覆われる。中央には角がある。そして左半分も。

胸にエスの文字が浮かぶ。そこで電撃が全身を覆った。

「天が呼ぶ　地が呼ぶ　人が呼ぶ　悪を倒せと俺を呼ぶ
聞け、悪人共。　俺は正義の戦士
仮面ライダーストロンガーーーーーッ！」

名乗りが終わった。彼は雷を全身に包んだまま叫んだ。

「ぬうう、変身しおったか」

二人はそれを見て舌打ちした。

「トォッ！」

ストロンガーはエレクトロサンダーを放った。だがそれは怪人達に向けて放ったのではなかった。

それはライダーマンを撃った。そして彼の身を捉えていた呪縛を解いた。

「これは・・・・・・」

「金縛りは往々にして衝撃で解けるもの、精神的なものだから」

「そうか、だからか」

ライダーマンはストロンガーの話を聞き納得した。

「さあてと」

ストロンガーは二体の怪人の方へ顔を向けた。
「これで形勢が変わったな。どうする？何なら俺が二人共相手をしてもいいが」
「ぬうう、小癪な」
オニビビンバとサタンドールはストロンガーの言葉に顔を歪めさせた。
「待て」
だがここでライダーマンが言葉をかけた。
「これは俺の戦いだ。悪いが今回はそこで見ていてもらおう」
「しかしライダーマン、貴方は右腕が・・・・・・」
「心配無用だ、俺の武器はアタッチメントだけじゃない」
「しかし・・・・・・」
「ストロンガー、俺を信じてくれ」
ストロンガーはライダーマンの声を聞いた。そしてその仮面の下半分に現われている顔を見た。そこからは強い決意が感じられた。

知の戦士その九

「わかりました、ここは任せます」
彼はそう言うと後方へ跳んだ。
「ここで最後まで見せてもらいましょう、ライダーマンの戦いを」
「有り難う」
彼は礼を言った。そしてあらためてオニビビンバとサタンドールに顔を向けた。
「そういうことだ、貴様等の相手はこの俺だ」
「フン、その身体でか」
オニビビンバは彼の顔を見て嘲笑を浴びせた。
「笑わせてくれるわね。アタッチメントも使えなくてどう闘うつもりなの？」
サタンドールも同じであった。二人はジリジリと間合いを詰めてきた。
「それを今から見せてやる」
ライダーマンは二人に気圧されることなく言い放った。
「行くぞっ！」
そう叫ぶと前にダッシュした。そしてオニビビンバへ向けて突進する。
「フン、遅いな」
怪人はそれを余裕の顔で見ていた。やはり他のライダーに比べて動きが遅い。
右腕を上げた。そして炎を放とうとする。
しかしライダーマンは次の瞬間にはそこにいなかった。彼はオニビビンバの視界から消えていた。
「ムッ、何処だっ！」
「上よっ！」
咄嗟にサタンドールが彼をフォローして叫んだ。オニビビンバは

慌てて上を見上げる。
やはりそこにいた。そしてそこから急降下してくる。
「そうはさせないわっ！」
サタンドールが跳んでいた。そしてライダーマンにその爪で襲い掛かる。
「甘いっ！」
だがライダーマンは跳んできた彼女に攻撃を浴びせた。蹴りがその肩に入った。
「クッ！」
サタンドールはその肩を押さえた。やはり空中戦では上を制しえいる方が有利であった。
ライダーマンはそのまま急降下を続ける。そして背中から砲撃を仕掛けようとするオニビビンバに浴びせ蹴りを加えた。
「グオオッ！」
それは後頭部を直撃した。オニビビンバは思わず前屈みになった。
ライダーマンは着地した。そして蹲るオニビビンバに向かった。
「そうはさせないわっ！」
だがその前にサタンドールが立ち塞がる。そしてその眼を光らせた。
「それはもう通用しないっ！」
その瞬間にライダーマンは己が左脚に手刀を入れた。それは深く突き刺さり鮮血が流れた。
「何と・・・・・・」
これにはさしもの怪人達も呆然とした。
「ライダーに一度見せた術は通用しない、それは知っている筈だ」
「ク・・・・・・」
「俺もライダーの一人、それを忘れてもらっては困るな」
「クッ・・・・・・」
そうであった。ライダーマンもまたライダーなのであった。その正義を愛しその為に全てをかける男なのであった。

「行くぞ、俺の真の力見せてやるっ！」
そう言うと今までにない速さで走りはじめた。そして怪人達を取り囲んだ。
「なっ！」
彼等は眼を疑った。何とライダーマンが増えたのだ。
「馬鹿な、ゼクロスと同じか！？」
「オニビビンバ、それは違うわ」
サタンドールがまず気付いた。
「素早い動きで分身しているように見えるだけ。本当は一人よ」
「成程、そうか。幻影だな」
「ええ」
オニビビンバもそれを聞いて納得した。
「落ち着いて見れば問題はないわ。そして疲れたところを叩けばいいだけ」
「そうだな、こうした動きが何時までも続けられる筈がない」
「それはどうかな？」
ライダーマンはオニビビンバの言葉に対して不敵に笑った。
「何もこれは分身が目的ではない」
「何っ、どういうことだ！？」
「それは・・・・・・」
彼は口元を歪めた。
「こういうことだっ！」
そして飛び上がった。急に竜巻が生じた。
「ウオッ！」
二人はその中に巻き込まれた。そして大きく吹き飛ばされる。
ライダーマンもその中にいた。だが彼はその竜巻の中を上手く泳いでいた。
「今だっ！」
そして風の力を使い二人に向かう。そして攻撃を放った。
「ライダーマンキィーーーーーック！」

まずはサタンドールを撃った。怪人はそのまま竜巻の外へ弾き出される。

知の戦士その十

続けてオニビビンバに向かう。さしもの彼も竜巻の中では思うように動けない。

だがライダーマンは違っていた。彼は風の動きを読んでいた。そしてそれに乗って動いていた。

「喰らえ」

そしてそこで身体をドリル状にした。

「ライダーマンドリルアターーーーーーック！」

ブイスリーのブイスリードリルアタックを模倣した技だった。彼はブイスリーと同じように身体をきりもみ回転させながら怪人に体当たりを敢行した。

それは怪人の胸を直撃した。オニビビンバもまた竜巻から落ちた。竜巻は消えた。二体の怪人はその下に蹲っていた。

「グググ・・・・・・」

何とか立ち上がる。だが既に致命傷を受けていた。

怪人態から人間の姿に戻る。そして着地したライダーマンを見上げた。

「勝負あったな」

ライダーマンは立ち上がった彼等に対して言った。

「まだだ、これしきの傷で・・・・・・」

鬼火司令はまだ前に進もうとする。だがそれはできなかった。

「ク・・・・・・」

ガクリ、と膝をついた。それを妖怪王女が助け起こす。

「済まん・・・・・・」

礼を言う。だが妖怪王女もそれ以上は無理だった。

それでも二人はかろうじて立っていた。それは意地であった。

「まさか竜巻を起こしてその中で攻撃を仕掛けるとは・・・・・・」

「大した戦巧者ね」

「俺の武器はアタッチメントだけではないと言った筈だ」
ライダーマンはそれに対して言った。
「俺は確かに他のライダーに比べてパワーは劣る。だがパワーを使わずとも戦うことはできる」
「頭脳か」
「そうだ、ならば頭脳を使うしかない」
彼はかってその頭脳を買われてデストロンに入った。それだけあってその知力はライダー達の中でも群を抜いていた。あの本郷をすら上回るとさえ言われているのだ。
「それを忘れたのは迂闊だったな。戦いは力と技だけでするものじゃない。貴様達はそれを忘れていた」
「クッ、確かに・・・・・・」
その通りであった。彼等はライダーマンのパワーが他のライダー達に比べて見劣りしアタッチメントさえ封じてしまえばいいとたかをくくっていたのだ。それが命取りとなった。
「わし等の完敗だな、貴様の最大の武器を忘れておった」
「戦いはパワーだけでするものじゃない、そんなことを忘れていたなんて」
二人はガクリ、と膝をついた。
「だがな」
それでも立ち上がった。やはり彼等にも意地があった。
「我々に勝ったとしえもまだ戦いは終わりではない。それだけは忘れるな」
「そう、いずれ貴方達は我々の前に屈することになる。それだけは覚えてらっしゃい」
「貴様等、まだそんな減らず口を」
ライダーマンの横に来ていたストロンガーが前に出ようとする。
しかしライダーマンはそれを制した。
「いい」
「しかし・・・・・・」

「これが最後だ、最後まで言わせてやれ」
「わかりました」
ストロンガーはライダーマンの言葉に引き下がった。
「わし等を倒したことは褒めてやろう。それだけはな」
「この妖怪王女を出し抜くとは。流石はライダーきっての頭脳派」
二人は残された時間が少ないと悟ったのかライダーマンに賛辞を与えた。
「それだけ言えばもうよい。我等は去るとしよう」
「バダンに栄光あれーーーーっ！」
そう言うと二人はその場に倒れ伏した。そして爆死して果てた。
「・・・・・これで終わりですね」
ストロンガーはその爆発を見届けてライダーマンに声をかけた。
「ああ、今までで最も苦労した戦いだった」
ライダーマンは答えた。そして二人はエアーズロックをあとにした。
オーストラリアの戦いは終わった。この地における指揮官鬼火司令と妖怪王女は戦死しオーストラリアのバダンは壊滅した。そしてジンドグマの四幹部は全滅した。
「・・・・・そうか」
メガール将軍はそれを北欧の街で聞いた。
「惜しい者達だったが」
彼は変装し背広を着ている。どうやらこの地で何かを探っているようだ。

知の戦士その十一

その街は明るい。時計台の時計を見ると真夜中であるにもかかわらず、だ。白夜であった。

「あの時は衝突もしたものだが」

彼はここでドグマの頃を思い出した。

その時ドグマはテラーマクロの下最高幹部である悪魔元帥を筆頭に彼とあの四人の幹部がいた。テラーマクロと悪魔元帥は宇宙より来た者であったが他の五人は違った。もとは皆人間であった。

だがそれでも対立があった。感情的なものであった。

生真面目な性質でありその暗く沈んだ経歴を持つ彼はやはり明るくはなれなかった。次第にテラーマクロに従うようになる。だが他の四人は違った。

四人は将軍程暗い生い立ちではなかった。そして元々の性質も明るいものであった。その為彼等とはうまくいかなかったのだ。彼等はよく悪魔元帥と共にあった。

「だがそれは大した問題ではなかった」

それでも互いに認め合っていた。分裂するなど考えもしなかったのだ。

だがテラーマクロと悪魔元帥は違った。その対立は日を追うごとに激しくなり遂には彼等は袂を分かった。これでドグマの分裂は決定的となった。

彼も悪魔元帥や四人の同志達に誘われた。しかし彼はテラーマクロに従った。

「ならばよい。そなたの好きにするがいい」

それを聞いた悪魔元帥は静かにそう言った。彼は将軍の能力を高く買っていた。だがそれと共にその暗く絶望に満ちた心も知っていた。

「だが忘れるな」

元帥はドグマを出て行く時に彼に対して言った。
「そなたの力を買っている者がいる。そしてその全てを知っている者もいるということをな」
それはスカウトの言葉だったのだろうか。だが将軍はドグマに残った。そしてテラーマクロと共に仮面ライダースーパー1と戦い散った。そして今甦りこの地にいる。
「私の生涯は絶望に満ちている」
彼は呟いた。
「だが一人ではない。そしてこれからも」
無意識にその首にあるペンダントを握った。
「スーパー1、貴様という敵もいる」
そして今度は仮面ライダースーパー1のことを脳裏に浮かべた。
「今度こそ貴様を倒す。そしてあの力を世界に示す」
彼はそう言うとその場をあとにした。
「この白夜も終わる」
ふと白い空を見上げた。
「永遠にな。あとは絶望が支配するだけだ」
そして何処かへ消えた。あとには影も残らなかった。
「まさか二人共倒すとは思いませんでしたよ」
シドニーである。オーストラリア第一の都市と言われる。面白い形をしたオペラハウスもある港町である。
「俺もライダーだ。必要とあれば戦うさ」
結城は城に対して答えた。
「竜巻を作ってその中で戦うとは。あれは何処から考え付いたんですか？」
「ああ、あれか」
結城はそれを聞かれ顔を向けた。
「ショッカライダーの話は知っているだろう？」
「ゲルショッカーが一号と二号をコピーして開発した六人のライダー達ですね」

その時ライダー達の活躍により劣勢に追い込まれていたゲルショッカーが発動した作戦である。これによりライダー達とアンチショッカー同盟を壊滅させるつもりだったのだ。

「かなり苦戦したと聞いていますけれど」

その通りであった。日本に集結したダブルライダーも流石に六人のライダーを前に苦戦した。彼等は自分達と同程度の力だけでなく怪人の能力も備えていたのだ。しかも怪人の援護もあった。

アンチショッカー同盟はゲルショッカーにより壊滅させられた。だがダブルライダーは屈しなかった。立花藤兵衛の特訓を受け一つの技をあみだしたのだ。

「それがライダー車輪だ」

結城は言った。

それは大掛かりな技であった。ダブルライダーはショッカーライダー達の周りを全力で走りそこに竜巻を作る。そして跳ぶ。それを追ったショッカーライダー達は竜巻に巻き込まれそこで互いに衝突して爆死した。そして彼等はその圧倒的な劣勢をものともせずショッカーライダーに勝利を収めたのだ。

「あれは見事な勝利だった。俺はそれを応用したんだ」

「そうだったんですか」

城はそれを聞いて大きく頷いた。

「そして奴等を竜巻に巻き込んだ。一か八かだったが上手くいったよ」

「結城さんもいざという時は思い切ったことをやるんですね。ちょっと意外ですよ」

「俺も勝つ為にはこの身をかけるさ。そうでもしなければバダンには勝てない」

「・・・・・はい」

城にもそれはわかっていた。事実彼も何度も賭けを行なっている。

「そして俺は勝った。けれど少し代償が高くついたな」

「どうかしたんですか？」

「いや、右腕がね」
彼はそう言って自分の右腕を見せた。アタッチメントのある腕である。
「竜巻の衝撃でアタッチメントの調子が回復しない。やはり一人で竜巻を作るのは無理があったようだ」
「アタッチメントが・・・・・・」
「暫くの間戦列を離れる。日本に戻っておやっさん達と一緒にじっくりと直させてもらうよ」
「そうですか」
「すぐ戻る、安心してくれ」
結城はここで微笑んで城に対して言った。
「そしてその時また戦おう。バダンを倒す為にな」
「ええ、お願いしますよ」
城はそう言うと左腕を差し出した。彼の右腕を見てのことだ。
「バダンを倒すには結城さんの力が必要です。万全の調子にして戻って下さい」
「ああ、わかっている」
結城はそう言って左腕を出した。
「俺は必ず戻って来る」
「楽しみにしていますよ」
二人はそう言うと固く握り合った。
「じゃあまた会おう。戦場で」
「はい、頼りにしていますよ」
二人はそう言うとその場で別れた。城はシドニーに残った。この地に残っているかも知れないバダンの残党を掃討する為である。
結城は空港へ向かった。当然日本へ帰る為である。
「シンガポール経由東京行き」
アナウンスが響き渡っている。
「あれか」
結城はそのアナウンスが伝える方へ向かった。

そして彼は空港から姿を消した。やがて日本へ向かう便が空へ飛び立った。

知の戦士　　完

２００４・６・８

竹林の戦いその一

竹林の戦い

「さて、中国だが」
幽霊博士が口を開いた。ジンドグマの四幹部はまた集まっていた。
「今は誰もいなかったな」
「ええ、ドクロ少佐が仮面ライダーブイスリーに敗れたしね」
妖怪王女が答えた。
「うむ、惜しい男であった」
鬼火司令がそれを聞いて腕組みをしながら言った。彼は元軍人であったので彼に対して共感する部分も多かったのだ。
「それだけではないわ。ドクターケイトもモンゴルで仮面ライダーエックスに敗れている」
魔女参謀は付け足すように言った。
「日本支部はあの有様。今東アジアに我がバダンの勢力はない有様じゃな」
幽霊博士はそれを聞いて顔を顰めた。
「東南アジアも同じ状況ね。北米も中南米もかなりの痛手を受けているわよ」
妖怪王女の情報網は健在であった。彼女は常に的確な情報を手に入れていた。
「まずいのう。このままではアジア太平洋地域の我等の活動が崩壊してしまう」
「鬼火司令、そう考えるのは早いのではないかしら」
魔女参謀は彼に対して言った。
「そうは言うが現実ではこうじゃ。それをどうするかが問題だが」
「わしに考えがあるぞ」
ここで幽霊博士が他の三人の顔を見回しながら言った。

「お主がか？どうせろくな考えではあるまい」
「そうよね。幽霊博士っていつもとぼけてるんだもの」
鬼火司令と妖怪王女が馬鹿にしたように笑った。
「そんな言い方はないじゃろ」
「あら、じゃあどういう考えなの？」
妖怪王女は尚も態度を変えない。
「わしが中国に向かう。そしてここでの活動を再び行なう」
彼は珍しく強い声で言った。
「おういえばお主は中国出身だったな」
鬼火司令が思い出したように言った。
「そうじゃ。思えば懐かしいのう」
彼は懐かしげに笑った。
「その故国に戻るのも何かの縁じゃ。思う存分暴れてやるわ」
「では私も同行していいかしら」
ここで魔女参謀が口を開いた。
「お主がか？」
博士は一瞬不思議な顔をした。
「そうよ。いけないかしら」
「い、いや」
彼は首を横に振った。
「大歓迎じゃ。助っ人に来てくれるのならこれ程心強いものはない」
彼は笑みを浮かべて言った。
「ではこれで決まりね」
魔女参謀もニヤリと笑った。
「うむ、では早速行くとしよう」
「ええ」
二人は席を立った。
「気をつけてな」
「私達もすぐに動くわ」
残る二人も声をかけた。

「うむ、期待しておれ」
「そちらも頼んだわよ」
こうして彼等は二手に分かれた。そして部屋をあとにした。
白帝城は日本人もよく知っている場所の一つである。唐代の詩人李白が謡い三国志の主人公の一人劉備がこの世を去った場所でもある。険しい四川省の中でも特に険しい場所にある。
「ここまで来るのは一苦労だったな」
そこに彼はいた。風見志郎である。彼はドクロ少佐との戦いの後中国各地を回っていた。
「確かに中国は広いな。何度回っても飽きない」
彼は世界中を回って戦ってきた。その為中国でも戦ってきていた。
「しかしこの城に来たのははじめてだったな」
だが戦いがない時はこれといって来る理由がない。従って行っていない場所もある。
今彼は珍しく観光で来ている。こうして戦いがない時の旅もいいものだと思った。
「まあ束の間の休息だな」
そうであった。バダンはまだ世界各地で暗躍している。彼の戦いはバダンがこの世から消え去るまで続くのだ。
だが今は旅を楽しみたい。戦士にもそうした心の余裕は必要であった。
城の中には多くの像が置かれている。全て三国志の英雄達である。
「そういえば学生の頃に読んだな」
ふと彼は学生の頃を思い出した。
その像を見て回る。その時像の一つがピクリ、と動いた。
「ムッ!?」
次の瞬間全ての像が動き出した。そして風見を取り囲んだ。
「バダンか!?」
像は何も言わない。ただ風見に襲い掛かって来た。
風見はその像達を倒していく。倒された像は次々と戦闘員の姿に

なり横たわる。
「やはりな」
部屋を出る。戦闘員達は最早像にすら化けずそのまま追って来た。
「ギッ！？」
彼等は風見を見失ってしまった。慌てて周囲を見回す。

竹林の戦いその二

「俺はここだ！」
上の方から声がした。慌てて顔を上げる。
彼は壁の上に立っていた。赤い仮面の戦士がそこにいた。
「トゥッ！」
掛け声と共に跳び降りた。その周りを戦闘員達が取り囲む。
だが彼等はやはり敵ではなかった。忽ちブイスリーに倒されていく。
「チャカァーーーーー」
そこに怪人が出て来た。デストロンの熱線怪人レンズアリである。
「やはり来たか」
ブイスリーも怪人が出て来ることは予想していた。すぐに身構える。
怪人は目から熱線を放ってきた。ブイスリーはそれを上に跳びかわした。
「どうした、俺はここだぞ」
そして壁の上から挑発する」
怪人はそれに対し感情を露わにした。そして熱線を乱射する。
「フンッ！」
だがそれは当たらない。ブイスリーは上に跳び今度は怪人の背中についた。
「喰らえっ！」
そして怪人の背中を掴んだ。
「ブイスリー回転投げーーーーっ！」
そして空中に舞い上がり激しく回転する。その遠心力を利用して思いきり投げた。
「チャカーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びをあげた。そして地面に叩き付けられ爆死し

た。
そこにもう一体来た。ショッカーの毒液怪人毒トカゲ男である。
「ゥオオオオオーーーーッ！」
怪人は叫び声をあげながらこちらにやって来た。
「また来たな」
ブイスリーは着地して身構えた。怪人はそこを狙って赤い毒液を放ってきた。
「おっと」
それを横に身を捻りかわす。怪人はそこに今度は舌を放ってきた。
しかしそれもブイスリーはかわした。そして一気に間合いを詰めた。
拳が繰り出される。二つの拳が撃ち合った。
だがそれはブイスリーの勝利に終わった。怪人は拳を押さえ怯んだ。
「今だっ！」
ブイスリーは跳んだ。そして怪人を今度は天高く放り投げた。
「トゥッ！」
そして自身も跳んだ。急降下し毒トカゲ男の背中に向かう。
「ブイスリーダブルアターーーーーーック！」
蹴りが怪人の背を撃った。毒トカゲ男は空中で爆死した。
「あとはいないか」
Ｏシグナルにも反応はなかった。ブイスリーは変身を解いた。
「こんなところにも姿を現わすとはな。どうやら俺には片時の休息も許されないらしい」
彼は顔を顰めてそう言った。そして白帝城を出るとそのまま長江を登っていった。
神敬介はこの時成都にいた。四川省でもかなり大きな都市である。
「ここが成都か」
やはりここも三国志ゆかりの地である。それだけでなく長い間この地域の中心都市でもあった。

「一度来てみたいと思っていたけれど」
街の中は人でごったがえしていた。今は三国時代の面影は流石に少ないがそのかわり人の活気で満ちている。
動物園に行った。そこでは中国の珍獣であるパンダがいた。
「そういえばこの四川省にいるんだったな」
よく竹を食べると言われるがその他のものも食べたりする。そして大柄で怒らせると怖い。
「見れば爪も牙もあるや」
そうなのである。中国語で大熊猫という。可愛らしい外見に惑わされては怪我をする怖れもある。
「パパ、意外と怖そうだね」
「ああ、ああ見えてもとっても強いんだぞ」
後ろでは親子連れがそんな話をしている。神はそれを見てクスリと笑った。
その時彼は何かを感じた。
「！？」
殺気だった。彼はそれを確認すると黙って動物園をあとにした。
そして彼は街中を出た。街の外れに向かった。
「ここら辺りでいいだろ」
彼は人気のない場所に着くと言った。するとそこに黒服の男達が姿を現わした。
「わかっている。さっさとその服をとれ」
「そうか、流石は神敬介だな」
彼等はそう言うと服を剥ぎ取った。中から怪人と戦闘員達が姿を現わした。
「アワワワワワワ」
ゴッド悪人軍団の一人サソリジェロニモであった。怪人は服を剥ぎ取ると同時に斧を投げてきた。

竹林の戦いその三

「ムッ！」
神はそれをかわした。そしてそのすぐ側の竹薮に飛び込んだ。
「追えっ！」
怪人はすぐに戦闘員達に命令を下した。だがそれには及ばなかった。
「その必要はないっ！」
神の声と共に彼が姿を現わした。銀の仮面を持つカイゾーグ、仮面ライダーエックスである。
「俺はここにいる」
彼は怪人達を一瞥してそう言った。
「さあ、何処からでも来いっ！」
「望むところだ！」
サソリジェロニモの声が響いた。戦闘員達が斧を手に一斉に襲い掛かる。
「斧か」
エックスライダーは戦闘員達の手に光るそれを落ち着いて見ていた。
「ならば俺も武器を出そう」
そう言うと腰からライドルを引き抜いた。
「行くぞっ！」
そしてそのライドルで打ちかかった。
左右から襲い来る戦闘員達を次々に薙ぎ倒す。ライドルが風車の様に回転する。
戦闘員達は忽ち蹴散らされた。怪人はそれを見て今度は自分が向かった。
「俺が相手だっ！」
「来い、返り討ちにしてやる！」

ライドルと斧がぶつかり合った。銀の火花が辺りに飛び散る。
「ムムム」
両者は鍔迫り合いをはじめた。最初は互角であった。
だが次第にエックスライダーの力が勝ってきた。サソリジェロニモは押されてきていた。
「そうはさせんっ！」
怪人は反撃に出た。間合いを離し斧を投げ付けて来た。
「トゥッ！」
エックスライダーは跳躍してそれをかわした。そして空中で一回転した。
「ライドル脳天割りーーーーーっ！」
そしてそのライドルを怪人の頭部に振り下ろした。それは見事に決まった。
「ウオオオオオ・・・・・」
サソリジェロニモは呻いた。頭蓋骨だけでなく脳まで潰された。
怪人は脳天から鮮血をほとばしらせながら倒れた。
そして爆死した。エックスライダーは着地してその爆発を見送った。
だが勝利の余韻に浸っている暇はなかった。そこに新たなる怪人が襲い掛かって来た。
「グルゥゥゥゥーーーーーーーーッ！」
ゲドンの針怪人獣人ヤマアラシである。怪人は全身の針を揺らせつつエックスライダーに向かって来た。
「今度はゲドンの獣人か」
エックスライダーは怪人の姿を認めて身構えた。
怪人はいきなり身体を丸めた。そして飛んで来た。
「ムッ！」
エックスライダーはそれを横にかわした。怪人は今度はバウンドして向かって来た。
「今度は跳ねてきたか」

今度の攻撃もかわした。しかし怪人は執拗に攻撃を繰り返す。
「まずな、このままでは」
エックスライダーは呟いた。
「だからといってこちらから攻撃を仕掛けることは・・・・・・」
見れば全身が針の山である。おいそれと攻撃を仕掛けられそうもない。
しかし。エックスライダーはあることを閃いた。
「そうだ、俺にはこれがある！」
手に持つライドルのスイッチを入れた。そこに怪人ば襲い掛かって来る。真正面からとんで来た。
「ロングポールッ！」
そしてライドルを思いきり引き伸ばした。それで怪人を突いた。
「ウオォッ！」
動きが止まった。そして奇声を発しながら元の姿に戻った。
「今だっ！」
エックスライダーは勝機を見た。そしてライドルのスイッチを入れ前に突進した。
「これでも食らえっ！」
それはライドルホイップだった。怪人の柔らかな胸を切り裂いた。
「ウオオオオオオーーーーーッ！」
怪人は胸から鮮血をほとぼしらせながら叫んだ。そして前から倒れ伏し爆死して果てた。
「もういないようだな」
エックスライダーは回りを見回して確認した。そして変身を解いた。
爆炎が消え去った。そしてそこには何も残らなかった。神敬介は一人成都へと戻って行った。
「ブイスリーとエックスライダーへの襲撃は失敗したわ」
重慶の地下に設けられた基地の中で魔女参謀は幽霊博士に対して言った。

指令室であった。赤い光が点滅し辺りにはコンピューター等が置かれている。そして戦闘員達が動き回っていた。

「そうか、やはりのう」

幽霊博士は顎鬚をしごきながらそれを聞いていた。

竹林の戦いその四

「怪人ではライダー達を倒せぬか」
「そう言っている余裕なんてあるの？」
魔女参謀は彼があまりにも暢気な口調なので少し口を尖らせた。
「焦っても仕方あるまい。結局はライダー打倒はここでは主な作戦ではない」
「それはそうだけれど」
「のう」
ここで彼は傍らにいる戦闘員に対して問うた。
「準備は進んでおろうな」
「ハッ、既に特別チームを編成しております」
戦闘員は敬礼をして答えた。
「ならばよい」
彼はそれを聞くと顔を崩して笑った。
「簡単な作戦じゃがそれが案外効果のあるものなのじゃ」
「それはそうだけれど」
魔女参謀はまだ口を尖らせている。
「だけれどこんなことをしていてもらちが明かないわよ」
「魔女参謀、お主は少し派手過ぎる」
博士はそんな魔女参謀に対して窘めるように言った。
「線路を破壊するのは充分な破壊工作になるのじゃ。そしてこれにより多くの人が死に交通が麻痺する。経済も混乱する」
「それはそうだけれど」
「考えてもみよ。鉄道が人々の生活にどれだけ必要か」
それは言うまでもなかった。この中国においても鉄道は極めて重要な交通手段であった。
「そんなことはわかっているわ。けれど」
だが彼女はまだ不満であった。

「案ずることはない。地道な作戦も時には必要じゃ」
「確かにな。幽霊博士の言うことにも一理ある」
ここで何者かが入って来た。
「ム」
魔女参謀は彼の姿を見て目を光らせた。
「ホッホッホ、お主も賛成してくれるか」
そこには白スーツの青年がいた。アポロガイストである。
「かってゲルショッカーもラッシュ時に破壊工作を仕掛けようとしたことがある。鉄道を狙うのは非常に効果があるものだ」
クラゲウルフが新宿を狙ったことを言っているのである。
「俺も機会があればやってみたいな。期待しているぞ」
「その言葉謹んで受けよう」
「だがな」
アポロガイストはここで目を光らせた。
「エックスライダーを倒すのは俺に譲って欲しい」
「何故じゃ！？」
「俺とあの男の関係を知っていれば話すまでもないと思うが」
彼のその目の光はまるで猛禽のようであった。
「確かに。けれど私達も今回の作戦を失敗させるあけにはいかないわ」
「そう、そして彼奴がその課程で死ぬようなことがあっても」
「責任は持てないと言いたいのか」
「そういうことになるわね」
魔女参謀は突き放すようにして言った。
「そうか。では俺が独自で倒しても問題はないな」
「うむ。それは好きにするがいい」
幽霊博士はそれを認めた。
「しかしお主は今ギリシアで何か作戦行動があるのではなかったのか？」
「そういえば。何か作っているようね」

「・・・・・そのことについてはいずれ話そう。今は話すことはできない」
彼はニヤリともせずそう言った。明らかに何か隠している。
「だがそれなら話が早い。早速動かさせてもらうか」
「うむ、好きにするがいい」
「ではな」
アポロガイストはそう言うと踵を返した。そして指令室をあとにした。
「何かと口うるさい男ね」
「ゴッドの第一室長だったからのう」
彼等はアポロガイストがいなくなったのを見計らって話をはじめた。
「だけれどこれでライダー達の相手はしなくていいわね」
「うむ。心置きなくやらせてもらおう」
二人はそう言うと会議室に向かった。それを一匹の虫が聞いていた。
「ふむ、そういうことか」
その虫は虫ではなかった。虫に姿を似せた盗聴器であった。その先にはアポロガイストがいた。

竹林の戦いその五

彼は黒いマシンに乗っていた。そして耳にその盗聴器を当てて聴いていた。

「いい考えだ。若しもの時はこちらも考えがあったが」

彼にはあまり仲間意識というものがない。ゴッドにいた時でも怪人達を挑発したりすることが多かった。彼は怪人を監督し必要とあらば総司令に意見を具申したり怪人を処刑したいする権限まで与えられていたので怪人達には怖れ嫌われていたのだ。

「それでは早速やらせてもらおう」

彼はそう言うとマシンのスピードを速めた。

マシンは風になった。そして姿が見えなくなった。

同時にアポロガイストも変身していた。白いスーツの青年から赤い仮面を被った姿に変身していた。

「見ていろエックスライダー、この四川省が貴様の墓場だ」

彼はそう言うと重慶に向かってマシンを走らせた。

重慶で神敬介は一人市場を回っていた。

「ここは辛い料理で有名だけれど」

中華料理といっても色々ある。四川料理は辛い味付けで知られている。

「何を食べようかな。そういえば四川料理は本格的に食べたことはなかったな」

彼は商店街に向かった。そこでは一つ大きなレストランが目立っていた。

「百酒飯店か」

店の看板はかなり巨大なものであった。そして文字が筆で書かれている。

「どれ、ここにしようか」

そして彼はその店に入って行った。

暫くして神は店から出て来た。その顔は満ち足りたものであった。
「ふう、美味かったな」
彼は満足した顔でそう言った。
「思ったより辛くないな。唐辛子のせいかな」
実は日本の唐辛子と四川省の唐辛子は違う。日本のものはかなり辛めなのだ。
「俺は日本の唐辛子の方がいいなあ。けれど四川料理には確かにこの唐辛子が合っているや」
料理とはその地域の風土と密着している。従って素材もその地域のものが一番合うのだ。
「さて、と。市場に戻るか」
彼は市場に戻って行った。
その時風見志郎も重慶にいた。
「ようやく着いたか」
彼は重慶駅から降り立ってまずは口を開いた。
「途中で線路が破壊されているとはな。誰がやったかは知らないが」
彼は考えながら道を進む。
「この辺りで不穏な動きは聞かないな。やはりバダンか」
駅のすぐ側は市場である。ふとそこが目に入った。
「市場で情報を仕入れるか。何かわかるかも知れない」
そしてふらりと市場に向かおうとした。その時であった。
「おのれ、バダン！」
市場が突如喧騒に包まれた。そして誰かが前に出て来た。
「あれは・・・・・」
風見は彼の姿を認めて目を見張った。
エックスライダーはライドルを手にしていた。そして戦闘員達を相手に戦っている。
「ここにまでいるとはなっ！」
ライドルを振るい戦闘員達を倒していく。そこに怪人が姿を現わした。

無気味な赤い怪人である。ブラックサタンの憑依怪人サソリ奇械人である。

「ショエーーーーーッ！」

怪人は奇声と共にエックスライダーに向かって来た。

「やはり来たかっ！」

エックスライダーはライドルを手に怪人に向かって行く。だがそこにもう一体来た。ネオショッカーの剣豪怪人マダラカジンであった。

「クッ、もう一体いたのか・・・・・・」

前後から挟み撃ちを受けた。それは何とかかわした。だが怪人達はジリジリと追い詰めてきた。

「ムムム・・・・・・」

エックスライダーはライドルをホイップに変えた。そして斬り合いに持ち込もうとする。その時だった。

「待てっ、加勢するぞっ！」

そこに赤い仮面の男が現われた。

「ブイスリー！」

「エックスライダー、助けに来たぞっ！」

ブイスリーはそう言うとエックスライダーの前に出た。そしてサソリ奇械人の前に向かった。

「こいつは俺に任せろっ！」

「はい！」

エックスライダーはそれに対して頷くとマダラカジンに向かっていった。

二人のライダーは駅前でそれぞれ怪人達を相手に戦いをはじめた。やはり一対一ではライダー達に分があった。

「トォッ！」

ブイスリーが拳を振るった。それによりサソリ奇械人の顎が砕けた。

ブイスリーの攻撃は終わらない。続けて蹴りが入る。そして次に

は跳躍した。
「ブイスリードリルアターーーーーック！」
そして頭から回転しながら急降下する。それは怪人の腹を直撃した。
「ショエエエエエーーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びをあげた。そして地に倒れ伏しその場で爆発した。
しかし戦いはまだ終わってはいない。エックスライダーとマダラカジンの死闘が続いていた。
「マダラーーーーッ！」
怪人は右腕のサーベルを振るう。エックスライダーはそれをライドルホイップで受け流す。
「どうした、その程度かっ！」
そのサーベルがライドルにより叩き割られた。怪人はそれを見て間合いを離した。
「チィッ！」
そして今度は口からマシンガンを放ってきた。しかしそれは見切られていた。
「無駄だっ！」
エックスライダーは空中に跳んだ。そして空中で身体全体でエックスの文字を作った。

竹林の戦いその六

「エックスキィーーーーーーック！」
そして蹴りを放った。それは怪人の胸を撃った。
「ガオオオオーーーーーーッ！」
マダラカジンも倒れた。そして彼もまた爆死した。
「見事だな、相変わらず」
ブイスリーは鮮やかな勝利を収めたエックスライダーに対し声をかけた。
「いえ、ブイスリーのおかげですよ」
彼はそれに対し謙遜して答えた。二人の戦士は歩み寄ると手を握り合った。
それを遠くの丘の上から苦々しく見る男がいた。
「ぬうう、ブイスリーもここに来たか」
アポロガイストであった。彼は二人が手を握り合うのを顔を顰めて見ていた。
「ライダーが二人いると厄介だな」
彼は考え込んだ。そして後ろを見た。
「あれを使うか」
その時だった。不意に戦闘員がやって来た。
「アポロガイスト様」
「どうした！？」
彼は不機嫌そのものの声で戦闘員の方を振り向いた。
「ギリシアにブラック将軍が来ておられますが」
「帰ってもらえ」
彼は吐き捨てるように言った。
「それが・・・・・。何か火急の用件があると言われるのですが」
「火急の用件！？」
「はい。何でもアポロガイスト様が今開発中の怪人のことでお話が

あるとか」
「開発中!?俺は怪人は・・・・・・」
彼はここまで言ったところでハッとした。
「まさか・・・・・・」
心当たりは一つしかなかった。
「如何なさいますか?」
「・・・・・・すぐに行こう」
彼は口調を変えた。
「すぐに全員ギリシアに戻るぞ。エックスライダーを倒すのは次の機会だ」
「わかりました」
戦闘員は敬礼した。そしてその場をあとにする。
アポロガイストも踵を返した。そして後ろを振り返った。
「エックスライダーよ」
彼は眼下にいるエックスライダーを見た。
「貴様は俺が必ず倒す。その時を楽しみにしておれ」
彼はそう言い残すとその場をあとにした。
敵を退けた風見と神は再会を懐かしむ間もなくホテルの一室で話し合いの場を持った。話の内容は決まっていた。
「そうですか、ここに来るまでにそんなことが」
「ああ、まさか像に化けているとは思わなかったがな」
風見は白帝城での戦いのことを神に話した。
「俺も同じですよ。成都で奴等と一戦交えました」
「そうか、やはりな」
それを聞いた風見の目が光った。
「だとするとバダンは間違いなくこの地で例によって何かを企んでいるな」
「でしょうね。そうでなくては怪人までは出て来ません」
「ああ。奴等の今までの行動からしてな」
「けれどここで何を企んでいるかが問題ですね」

神はここで考える目をした。
「俺達を狙っているんでしょうか」
「それも充分考えられるが」
風見は直感でそうではないと思っていた。
「何か他に策を企んでいるかも知れないぞ」
「では何を」
「そうだな」
彼は考えた。そしてあることが脳裏に浮かんだ。
「実は俺は重慶には鉄道で来たんだが」
「鉄道でですか」
「ああ。その時事故でかなり遅れた。何でも線路が爆破されていたらしい」
「線路が・・・・・・」
それを聞いて神も感づいた。
「流石だな。敬介も察したか」
「ええ。おそらくそれはバダンの仕業ですね」
経験がそれを二人に伝えていた。歴代の組織と戦ってきた彼等はその潜り抜けてきた修羅場によりその直感を身に着けていたのだ。
「連中にしてはえらく地味な作戦に思えますけれどね」
「地味だからこそ効果があるものもあるしな。とくに鉄道は線路を潰せばいいだけだから楽だ」
「はい」
「それに交通や経済に及ぼす影響も大きい。死傷者も多い」
「ですね」
「奴等にとってはやり易い作戦だ。おそらくこの四川省の経済を完全に破壊するつもりだ」
四川省の人口は約一億人、それなりの経済規模がある。特にこの重慶は中国でも屈指の重工業都市である。それを狙ってのことであろう。
「敬介、こうしている時間はない。すぐに奴等の計画を阻止しよう」

「はい、まずは何処から行きますか？」
「奴等が狙う場所はわかっている」
風見は答えた。
「今までは地道に小さな線路を潰してきている。おそらく今度は大物を狙ってくるだろう」
「というと・・・・・・」
「そうだ、ここと成都を結ぶ線だ」
風見は顔を引き締めて言った。
「おそらく既にそこへ向かっているだろう、一刻の猶予もない」
「ですね、行きましょう」
神も決断は早い。二人は同時に席を立った。
「行くぞ、ここでこの地の奴等を倒す」
「ええ、そしてこの地に平和を」
二人はホテルを出た。やがて遠くからマシンの音が聞こえてきた。

竹林の戦いその七

幽霊博士と魔女参謀はその時風見の予想通り重慶と成都の間の線にいた。そして線路の側に何かを埋め込もうとしていた。
「急ぐのじゃぞ。さもないと電車が来てしまうからの」
幽霊博士は作業にあたる戦闘員達に指示を出していた。
「魔女参謀、怪しい者は来てはおらんな」
そしてその護衛と見張りにあたる魔女参謀に対して問うた。
「ええ、今の所は」
魔女参謀は答えた。左右は竹林である。あまり見晴らしがいいとは言えない。その為は戦闘員はいつもより多いようだ。
「気をつけてくれよ。今ライダー達に来られては元も子もないからのう」
「残念だがその心配は無用だ」
そこで竹薮から一人の男が姿を現わした。
「貴様は・・・・・・！」
それは風見志郎であった。
「生憎だったな、貴様等の計画は全てお見通しだ」
「クッ、何故ここがわかった」
「愚問だな」
風見はそれに対し口の両端で自信に満ちた笑みをとった。
「貴様等の考えることがわからないと思ったか。貴様等のいるところライダーは必ず現われるのだ」
「クッ、こうなったら・・・・・・」
幽霊博士と魔女参謀はすぐに手を振り下した。戦闘員達が風見の周りを取り囲む。
「フッ、俺だけだと思うか！？」
ここで彼は身構えながら笑った。
「まさか・・・・・・」

魔女参謀はこの言葉を聞き辺りを見回した。
「そうだ、もう一人いるということを忘れるな！」
ここで線路から一台のマシンがやって来た。
その上には彼がいた。神敬介がいた。
「ぬうう、奴も・・・・・・」
幽霊博士は神の姿を見て歯軋りした。
「役者は揃ったな。行くぞっ！」
風見のその言葉が合図となった。二人は同時に変身に入った。

変・・・・・身
風見は両手を肩の高さで右に垂直に置いた。そしてその両手を右から左斜め上にゆっくりと旋回させる。
それと共に身体が変わっていく。緑の身体に白い手袋、赤いブーツ。胸は銀と赤である。
ブイ・・・・・スリャアアーーーーーーーッ！
右手を拳にし一瞬右脇に入れる。そしてそれをすぐに突き出し逆に左腕を拳にし左脇に入れる。
顔の右半分が赤い仮面に覆われる。すぐに左半分も。

大変身
神はマシンの上で両腕を垂直に上に突き出した。そしてそれをゆっくりと開いていく。
身体が白くなっていく。胸が赤くなり手袋とブーツが黒くなる。
エーーーーックス！
左手を脇に入れる。右手を左斜め上に突き出す。
銀の仮面が顔の右半分を覆いすぐに左半分も覆う。

二つの光がその場を支配した。そしてその中から二人のライダーが姿を現わした。
「トォッ！」

エックスライダーはマシンから跳んだ。ブイスリーも跳躍した。
そして同時に着地する。二人は並んで立った。
「さあ来い、バダン！」
二人は身構えた。戦闘員達を前に臆するところはない。
「ヌウウ、変身しおったな、やはり」
幽霊博士はそれを見て悔しさで顔を歪めさせた。
「さあ来い、幽霊博士、魔女参謀！」
ブイスリーが叫んだ。
「怪人達は何処だっ！」
エックスライダーもそれに続く。
「怪人だと！？」
魔女参謀はここで口の端を歪め嘲笑した。
「愚かな、貴様等の目は節穴か」
「何！？」
二人のライダーはそれを聞いて少しいきり立った。
「そうよのう、今までの我等との戦いから何も学んでおらんと見える」
幽霊博士も笑いながら前に出て来た。
「まさか・・・・・・」
ライダー達はその只ならぬ気配に何かを悟った。
「やっと思い出したようね。そう、私達もまた」
魔女参謀はベールを剥ぎ取った。そこで巨大なピンク色の蝶が飛んで来た。
「来たわね」
魔女参謀は跳んだ。そしてその蝶と合体した。
「何！」
「見よ、これが私の正体だ！」
するとその顔が見る見るうちに変わっていった。まるで蛾の様な顔になり髪はピンクになったかと思うと蝶の羽根のように変化した。
「ヌウウ、その姿は・・・・・・」

「フフフフ、どうかしら。美しいでしょう」
魔女参謀の声だった。その怪人はその蛾に似た顔でライダー達を見た。

竹林の戦いその八

「ほう、本当の姿をあらわしおったな」
幽霊博士は正体をあらわした同僚を横目に見て目を細めた。
「ええ。やっぱりこのマジョリンガの姿を方が落ち着くわね」
「そうじゃろそうじゃろ。やはりわし等はその姿が一番似合っておるからのう」
「ということは幽霊博士、貴様も・・・・・・」
ブイスリーは彼を指差した。
「当然じゃ。まさか知らぬわけでもあるまい」
「・・・・・・・・」
知らない筈がなかった。何故ならそれはもうわかっていることなのだから。
「ショッカーの時以来わし等の正体は決まっておる。そう、このようにな」
そう言うと背中のマントを被った。服が白から黒に変わっていく。
「ムッ！」
マントを元に戻すとそこには別の者がいた。
「やはりな。それが貴様の正体か」
「フォフォフォ」
彼は得意気に笑った。その顔は黄金色に輝く機械の髑髏であった。
「その通り、これがわしの真の姿じゃ」
彼はその剥き出しの歯でカラカラと笑った。
「ゴールドゴースト、よく覚えておくがいい」
「ゴールドゴースト・・・・・・」
「ただしじゃ」
ゴールドゴーストはここで口調を陰惨なものに変えた。
「この姿を見て生きている者はそうはおらぬがのう」
「それはこのマジョリンガについても言えるわね」

マジョリンガも前に出て来た。
「さあ行くぞライダー達よ、せめて苦しまずに死なせてやろうぞ！」
「何を、倒れるのは貴様の方だっ！」
エックスライダーのその言葉が角笛となった。彼等は互いに前に突進した。
「行くぞっ！」
ブイスリーはゴールドゴーストに、エックスライダーはマジョリンガに向かって行った。そして互いに撃ち合った。
彼等は竹林に飛び込んだ。そしてそこで戦いを開始した。
「さあ、何処から来る！？」
竹林に入ったブイスリーはゴールドゴーストの隙を窺う。そこにロケット弾が飛んで来た。
「ムッ！」
ブイスリーは身を捻ってそれをかわした。見れば前の竹の陰からゴールドゴーストが右手から煙を放っていた。
「よくぞかわした」
「生憎今は褒められても嬉しくはないな」
彼は少し皮肉を込めて言った。
「言ってくれるのう、その口は相変わらずか」
ゴールドゴーストは笑いながら言うと再びロケット弾を放ってきた。
「そう二度三度と同じ手をくらうかっ！」
ブイスリーはそれを見事な身のこなしでかわした。そして竹に隠れるようにして間合いを詰めていく。
ロケット弾は休むことなく放たれる。しかしブイスリーはそれを何なくかわす。
「どうした、その程度かっ！」
「まだまだ青いのう」
ゴールドゴーストはブイスリーのその言葉を聞いてせせら笑った。
「笑うか、ならばこれでどうだっ！」

間合いを一気に詰めた。そして拳を繰り出した。
「それが甘いというのじゃ」
怪人は左手でそれを受けた。機械の三本指の腕である。
「クッ！」
そしてブイスリーの拳を握り潰そうとする。しかしブイスリーはその左手に右の拳を入れ何とかそれから逃れた。
「ならばっ！」
今度は左の蹴りを入れる。しかしそれも彼の左手に防がれる。
「その程度の動きならばどうということはない」
彼は余裕をもってそう言った。
「この俺の攻撃をこうも見事にかわすとは・・・・・・」
流石にブイスリーも動揺を禁じ得なかった。
「さて、今度はこちらから行くぞ」
彼はそう言うとその左腕を振るってきた。
「危ないっ！」
慌ててその腕をかわす。竹がまるで空気の様に両断されていく。
「何と・・・・・・」
竹が音を立てて倒れていく。ブイスリーは後ろに跳びそれをかわした。
「フォフォフォ、まだまだこれからじゃ」
彼は無気味な笑い声を出した。そしてまたその腕を振るった。
エックスライダーはマジョリンガと対峙していた。彼等もまた竹林の中にいた。
「さあ来い、マジョリンガ！」
彼はライドルを抜いていた。竹を切り易いようにだろうか。ホイップである。
「言われなくとも殺してあげるわ」
彼女はそう言うと両手をゆっくりと上げた。
「ム！？」
その両手には何かしらの力が宿っていた。そしてそこからその何

かを放った。
そしてエックスライダーの周りにある倒れた竹林が一斉に動きだした。
「何っ、これは!?」
エックスライダーは咄嗟に身構えた。そこに竹が一斉に襲い掛かって来た。
「クッ!」
彼はライドルでそれを切った。だが竹は切ったそのすぐ側から再び襲い掛かって来る。
「無駄よ。切れば切る程竹は増えるわ」
「クッ・・・・・・」
その通りであった。そして切られた竹の先が槍となり彼を襲う。
彼はすぐにライドルをスティックに変えた。

竹林の戦いその九

「考えたわね」
マジョリンガはそれを見て言った。
「けれど何処までそれが続くかしら」
必死にライドルで竹を叩き潰す彼を嘲笑していた。エックスライダーはマジョリンガを攻撃するどころではなかった。迫り来る無数の竹の相手をするだけで必死であった。
「クッ、このままでは・・・・・・」
潰しても潰してもきりがなかった。竹は次から次に抜かれ襲い掛かって来る。エックスライダーは次第に疲れてきた。
「マジョリンガを倒さなければ・・・・・・」
だが隙がなかった。彼女は自身の周りにも竹を旋回させていたのだ。
「竹さえなければ・・・・・・」
そう考えている間にも竹が襲って来る。エックスライダーはライドルでそれを叩き潰した。
「このままでは拉致があかない。一体どうすれば・・・・・・」
ライドルを振るう。竹が落ちる。その時ライドルの先が目に入った。
「ムッ！？」
高速で振り回した結果であろう。ライドルに炎が宿っていた。
「ドクターケイトの時と同じか」
彼はそれを見て長江流域でのドクターケイトとの戦いを思い出した。あの時はライドルに炎を宿らせ炎に弱い彼女を退けたのだ。
「待てよ」
彼はここで気付いた。
「ドクターケイトはケイトウの花の化身だった、そして竹は・・・・・・」

そう、同じ植物だ。
「そうか、ならばやり方がある！」
彼は目の前に迫る竹を全て叩き落とすとライドルを身体の前で風車のように大きく旋回させはじめた。
「ムッ、エックスライダーよ血迷ったか！」
「それは地獄で言うんだな！」
ライドルに炎が宿っていく。そしてそれから手を離す直前彼はライドルのスイッチを入れた。
「ロングポールッ！」
放たれたライドルは空中で大きく回転しつつ伸びた。そして大きく回転しながらマジョリンガに向かって行った。
「ムッ！」
それは竹などものともしなかった。燃え盛るライドルは竹を全て燃やしていく。そしてマジョリンガの周りを護る竹も燃え落ちていく。
「クッ！」
彼女はたまらず上に跳んだ。だがエックスライダーもそれに動きを合わせていた。
「そこだっ！」
エックスライダーは思わず叫んだ。そしてマジョリンガを見据えた。
「受けてみろ」
そう言うと手を伸ばした。そこにライドルが戻って来る。
そしてそれで大車輪をする。まるで風車の様に回転をはじめた。
「エックスキィーーーーック！」
そして跳ぶとそこでエックスの文字を作った。そしてそこから蹴りを放つ。
「グオオッ！」
蹴りはマジョリンガの胸を直撃した。怪人は思わず叫び声をあげた。

「マジョリンガッ！」
それを見たゴールドゴーストは思わず叫んだ。そこに一瞬隙が生じた。
「もらった！」
ブイスリーはそこに絶好の機会を見た。ゴールドゴーストを掴み投げ飛ばした。
「ウオッ！」
怪人は思わず叫んだ。だがかろうじて受け身をとりダメージを最小限に抑えた。
「やるな、だがっ！」
それはブイスリーの計算通りであった。そして空中に跳んだ。
「ブイスリー・・・・・・」
空中で反転する。そして加速をつけた。
「スカイキィーーーーーック！」
そこから両足で蹴りを放った。蹴りはゴールドゴーストの腹を撃った。
「グウオオオオオッ！」
ゴールドゴーストは叫び声をあげ後ろに吹き飛ばされた。そしてそこにマジョリンガも落ちてきた。
「勝負あったな」
ブイスリーはその倒れた二体の怪人を見て言った。そこにエックスライダーも着地してきた。
「ウグッ・・・・・」
彼等はそれでも立ち上がった。そして変身を解き人間態に戻った。
「見事じゃ、我等を破るとはな」
「これで中国での作戦は失敗ね」
二人共口から血を流している。だがそれでも言葉を続ける。
「最初から貴様等を始末するべきであった。戦力を分散させたのが失敗だったか」
幽霊博士は身体を震わせながら言った。

「今言っても仕方がないことだけれどね」
魔女参謀もであった。彼等は死期が迫っていようともまだその目は光っていた。
「これでわし等は終いじゃ。だがな」
そして最後の力を振り絞って目を光らせた。
「私達の仲間はこうはいかないわよ」
魔女参謀もであった。
「わしはただ消えいくのみじゃ。バダンの心は永遠に残る」
「そう、バダンに栄光あれーーーーっ！」
彼等はそう言うとその場にタ倒れ伏した。そしてそのまま爆死した。
「・・・・・これでまた二人バダンの最高幹部が倒れた」
「はい、いつもながら敵とはいえ見事な連中です」
二人のライダーはその爆発を見届けながら言った。それは敵への礼儀であった。

竹林の戦いその十

「・・・・・あの二人が死んだか」
鬼火指令はそれを自身の基地内で聞いていた。
「ハッ、お二人共見事な最後だったそうです」
戦闘員が敬礼して報告した。
「・・・・・ならば良いがな」
彼は苦渋に満ちた声でそう言った。
「・・・・・下がれ」
そして戦闘員に対して言った。
「わかりました」
戦闘員はそう答えるとその部屋をあとにした。
「・・・・・逝ってしまったか、遂に」
彼は一人になると沈んだ声でそう呟いた。
「色々とあったがの。思えば長い付き合いだった」
彼等は口では何かと言い争っていた。だがそれは仲間内のことであり互いにドグマ、そしてジンドグマの者として信頼し合っていたのだ。
そこに来客が来た。あの女である。
「鬼火指令、話は聞いているかしら」
妖怪王女であった。彼女は仮面の下からでもわかる険しい表情で彼に尋ねてきた。
「無論だ」
彼は憮然とした顔で答えた。
「ならわかっているわね。ジンドグマの掟を」
「ああ」
ジンドグマは独特の憲法があった。破壊と殺戮を奨励するのがその根幹であったがそれと共にもう一つジンドグマをジンドグマたらしめているものがあった。

「仲間を倒した者は最後まで追い詰め仇をとる」
妖怪王女は凄みのある声でそう言った。
「わかっておる、早速行くとするか」
「何処へ！？」
「オーストラリアじゃ。そこにライダーマンがいるという」
「ライダーマン！？何を言っているのよ」
妖怪王女はそれを聞いて言葉を荒くした。
「私達の仇は仮面ライダーブイスリーと仮面ライダーエックスよ」
「その二人を倒す前にまず奴だ」
彼は怒りを必死に抑えて言った。彼とて仲間を討たれその心中は穏やかではない。
「あの男のアタッチメントを奪う。そしてそれを使わせてもらう」
「あの二人を倒す為に・・・・・・」
「そうだ、それなら話はわかるだろう」
「ええ」
彼女は険しい顔をとどめたままだが頷いた。
「ライダー達は残らず倒す、ジンドグマの絆に従ってな」
「そうね、私達の手で」
二人は頷き合った。
「ならば行くぞ、そして手始めにライダーマンを血祭りにあげる」
「わかったわ」
二人はそう言うと部屋をあとにした。そして皆その基地から出撃していった。
戦いを終えた風見と神は四川省をあとにしていた。そして今は西安にいた。
ここはかって漢、そして唐の都であった。特に唐代は世界の中心地の一つであり百万の人口を擁し栄華を極めていた。
「そういえば風見さんは万里の長城で戦っていたんですよね」
「ああ、ドクロ少佐とな」
彼等はその古い街並みを見渡しながら歩いていた。

「手強い奴だったがな。それでも何とか倒した」
「俺はドクターケイトとですよ。長江で戦って次はモンゴルで思いの他手強い奴でした」
「そうだろうな。デルザーの改造魔人も手強い」
風見は頷きながら言った。
「ここまで戦って勝ってこれたのが不思議な位だ」
彼もまたドクロ少佐とはシンガポール、そして万里の長城において幾度となく死闘を繰り返したのだ。
「よくストロンガーは勝ってこれたと思う。それは尊敬に値するよ」
「それを本人に言ったらまた図に乗りますけれどね」
神は口の両端と目元を細めた。
「そうだがな。まああいつも超電子を身に着けてから優位に立ったそうだが」
「逆に言えば超電子がなければ危なかったということでしょうか」
「それはどうかな、と思うが。奴の勝利にかける執念は凄まじい」
風見はストロンガーの戦いを思い出しながら言った。
「ところで奴は今何処にいる!?」
「茂ですか?」
「ああ。確かインドネシアに一也と一緒にいた筈だが」
「何でもオーストラリアにいるそうですよ」
「オーストラリアか」
風見はそれを聞いてまた考える顔をした。
「確か今あそこには結城もいたな。奴に迷惑をかけなければいいが」
彼は結城の生真面目な性格を知っていた。だから城が一緒にいると気苦労が絶えないのではないか、と危惧した。
「あいつはガサツですからね」
それは神もわかっているようだ。
「けれど大丈夫だとおもいますよ」
「何でだ?」
「風見さんと付き合ってこれたんですから」

「おい、そりゃどういう意味だ」
風見は苦笑して抗議した。
「いえ、冗談なんですけれどね」
「そうは聞こえないが」
風見は少しを目を剣呑なものにしていた。
「まあまあ落ち着いて」
神はそんな風見をあしらった。
「ううむ」
風見はまだ不満そうである。だが次第にその目も元に戻した。
「まあいいか。ところでだ」
「何ですか？」
「御前さんは今度は何処へ向かうんだ？俺はまだ決めていないが」
「そうですね」
彼はふと宿敵のことを思い出した。
「ギリシアにも行ってみます。あそこで気にあることがありますので」
「そうか、気をつけろよ」
「はい」
二人の戦士はそれで違う道に進んだ。そして次の戦場に向かうのであった。オーストラリアでのライダーマンと仮面ライダーストロンガーの戦いの直前の話であった。

竹林の戦い　　完

２００４・５・３０

霧の中の断頭台その一

霧の中の断頭台

ロンドン、言わずと知れた英国の首都である。古代ケルト語であるこの名に見られるとおりイギリスには幻想的な話が多い。それはイギリス人の無意識にまで浸透している。

イギリス文学といえばまず第一に挙げられるのがシェークスピアであろう。あの独特のくすんだ世界もまたケルトにそのルーツがある。

真夏の夜の夢に出てくる妖精達だけではない。マクベスの三人の魔女達の正体は人々に忘れられてしまったケルトの女神達であるという人もいる。何故なら彼女達は森にいるからである。

ケルトの民にとって森は神聖なものであった。彼女達はその中で魔術を操っていた。そしてマクベスに運命を告げたのである。そのマクベスは森が動いた時に死んだ。彼は森に殺されたのだ。

森は欧州の全てを覆っていた。そしてその中に神々はいたのである。

嵐の神ヴォータンに仕える女オルトルートは森に潜みブラバンテの姫エルザに罠をかけた。タンホイザーは森の中にあるヴェーヌスベルクで快楽に耽った。

トリスタンとイゾルデは夜の森の中で互いの愛を確かめ合った。ジークフリートは森の奥深くに潜む龍を倒し呪われた指輪を手に入れた。森は聖なるものがいると同時に邪なるものも潜んでいるのである。

今その森は大きく減った。だが人々の心にはその森はある。そしてその中に神々も龍も、魔女も、そして妖精達も棲んでいるのである。

そうした精神風土は欧州全体にある。その中でもこのイギリスは色濃いだろう。

トランプを構成するスペード、クラブ、ダイア、そしてハート。これはケルトの神々の宝がもとになっているのである。

騎士。キリストの教えが伝わる前からあった。ク＝ホリンやフィン＝マックールが有名である。今もイギリスの貴族達は騎士道精神を尊ぶ。それはこのケルトの騎士達の心なのだ。

そうした多くのものがこのイギリスの中に息づいている。ロンドンの名が示すように。

「しかしこう雨が多いと嫌になるな」

本郷猛はそのロンドンの中を歩いていた。

「そうか？俺は別に何とも思わないが」

一文字隼人はその隣にいた。二人は傘をさして霧雨の降るロンドンを歩いている。

「御前は慣れているからだろう。子供の頃はここに住んでいたからな」

「ああ、何か懐かしい気持ちだな」

一文字は本郷の言葉を聞いて答えた。

「子供の頃はこうやって親父とお袋に連れられて霧雨の中を歩いたな」

「そうか」

「ああ、ロンドンってのは煉瓦造りの街だろ？外見はまり変わらないんだ。だから子供の頃の記憶がそっくりそのまま甦ってくる」

「楽しそうだな」

「勿論さ。これが戦いでなかったらもっといい」

「そういうわけにはいかないのが辛いな」

「ああ」

一文字は本郷の言葉に対し答えた。それまで緩んでいた頬を引き締めた。

「俺達の宿命だな。奴等をこの世から消し去るのが」

「そうだ、その為に俺達はいるんだからな」

望んだことではなかった。彼等はショッカーに捕われ改造手術を

施行されたのだ。そして洗脳される直前に逃れた。それからである。悪と戦い続けているのは。

彼等もまた騎士である。だがその持つものはあまりにも哀しく孤独なものである。しかし彼等はそれをおもてに出すことなく戦い続けている。

「そうか、あの二人が来たか」

ロンドン郊外の地下にある基地でゾル大佐は戦闘員からの報告を受けていた。

「やはり気付いたか。ＩＲＡに偽装したつもりだったが」

ＩＲＡとはアイルランド解放戦線のことである。彼等の存在は根が深い。

イギリスの正式名称はグレートブリテン及び北部アイルランド連合王国という。かってはイングランド、スコットランド、ウェールズ、そしてアイルランドに別れそれぞれ別の国であった。とりわけイングランドとスコットランドは国力が高かった。

マクベスはスコットランドの史実での出来事でありその頃からイングランドとは抗争があった。シェークスピアの時代には二人の女王が争った。スコットランドの女王メアリー＝スチュワートとイングランドの女王エリザベス一世である。

よくこの時代はイギリスの黄金時代の一つと言われるが実際はそうではなかった。まだイギリスはイングランドでしかなく内政にも外交にも多くの問題を抱えていた。内部では慢性的な財政難であり旧教と新教の対立が激しかった。外部にはフランスやスペインといった強敵が存在した。実際にはイングランド、チューダー家はハプスブルク家の神聖ローマ及びスペインやヴァロワ家のフランスと比べると大きく見劣りしていた。

そうした中でこの二人の女王は争っていた。エリザベスはメアリーを軟禁状態に置いたが中々判断を下せなかった。周りの者はしきりに死刑を勧めるが彼女は首を縦に振らなかった。

エリザベス一世を評して冷酷という人も多い。だがこれも間違い

である。彼女は父ヘンリー八世に母アン＝ブーリンを殺されている。ヘンリー八世は好色であり多くの愛人がいた。そして妻さえも邪魔だと見ればすぐに殺すような非情な男だったのである。

腹違いの姉メアリは狂信的なカトリックであった。その為多くの新教徒達を火刑台に送っている。その凄まじさは夫であったスペイン王太子フェリペ二世が窘める程であった。

霧の中の断頭台その二

よく歴史というものは誤解される。エリザベス一世もそうであるがこのフェリペ二世もよく誤解されている。確かに彼はカトリックの擁護者ハプスブルク家の者で熱心な教徒であったが理性的な人物であった。国王は国家の第一の下僕として考えその生活も質素であった。そして過度な弾圧は決して好まなかったのだ。

そうした姉に彼女も目をつけられていた。そしてロンドン塔へ送られたこともある。ロンドン塔、かって彼女の母もここで死んだ。生きては出られないと言われた死の監獄である。

だが彼女は助かった。そうして彼女は幼い頃より幾度もそうした惨事を目にしてきたのだ。

そのせいか彼女は死刑を好まなかった。最後の最後までメアリーの死刑にサインをするのをためらった。そして彼女を見棄てたメアリーの息子であるスコットランド王を軽蔑した。

しかし彼は後にイングランド王にもなる。このことからもわかるとおりイングランドとスコットランドは元々は別々の国であったのである。

それはアイルランドもそうである。度々イングランドの侵攻を受けていながらもである。

エリザベス一世の時代には総督府が置かれていたがその統治は上手くはいってはいなかった。元々カトリックの多い国であり統治には困難が伴っていた。

だが清教徒革命の時に事態は急変する。国王と協力関係にあると思われたアイルランドはクロムウェルの侵略を受けたのである。

オリバー＝クロムウェル。狂信的な男であった。彼は熱烈な清教徒であり強烈なカリスマ性を持っていたが他人に対する寛容さのない男であった。

彼の統治は極めて厳格なものであった。そこには妥協は微塵もな

かった。生活のことまで厳しく規制され人々は閉口したものである。清教徒に対してもそうなのだから旧教徒に対しては言うまでもなかった。

『アイルランド植民地法』を制定した。そしてアイルランド全土をイギリスのものとした。アイルランド人は小作人となってしまいイングランド人との差は歴然となった。日本の台湾や韓半島の統治などという甘いものではない。当然大学を建てたり文化を保護したりインフラを整備したりといったことはしない。植民地だったのである。彼にとって旧教徒は敵であったのだ。これがアイルランド問題のはじまりである。

それからアイルランド人はイギリスとしてその歴史を歩む。ユニオン＝ジャックがある。イギリスの国旗であるがこれは四つの国の国旗を合わせたものである。そこには当然アイルランドもある。ちなみにワーテルローでナポレオンを破ったウェリントンはアイルランド出身である。また作家のオスカー＝ワイルドもそうである。

彼等が活躍した十九世紀は大英帝国の極盛期であった。だがこの時アイルランドを悲劇が襲った。

当時アイルランドの小作人達はジャガイモを食べていた。麦は食べていなかった。全てイギリスの地主達にとられていた。これが搾取というものである。

そう、ジャガイモである。彼等の命はこのジャガイモが支えていた。

だがそれがなくなったら。結果は目に見えている。そしてそれは起こった。

ジャガイモに病気が流行ったのである。次々と枯れていった。アイルランド最大の悲劇とも言われる『ジャガイモ飢饉』である。

これに対しイギリス政府は何も手を打たなかった。それどころかアイルランドの多過ぎる人口を調整するにはいい機会だとさえ言う者もいた。それでいて麦は収めさせた。彼等に麦を食べさせようとは微塵にも思わなかった。

結果多くの者が餓死した。人口の半分がアメリカへ移った。アメリカで大きな勢力を持つアイルランド系アメリカ人はその前からいたがこれにより大きな発言力を持つようになった。

強いアメリカを主張したロナルド＝レーガンはアイルランド系である。一代の梟雄リチャード＝ニクソンも彼と争った若き大統領ケネディもである。そしてビル＝クリントンも。アイルランド系には独特の名がある。姓の頭に『マク』や『オー』がつくことが多いのだ。マックイーンやオーウェン等がそれである。なお進駐軍の司令官であったマッカーサーはケルト系であるがスコットランドをルーツに持つ。彼は自分のルーツに非常に誇りを持っていたという。傲岸不遜であり気位の高い男であったがその反面人種差別はしない人物であった。

そうしたこともありアイルランド人達も立ち上がるようになる。アイルランド問題は次第にイギリスの闇として人々に知られるようになる。

そして自由党のグラッドストン等を中心にアイルランド問題の解決が計られるようになる。アイルランド土地法等が成立し一次大戦前にはアイルランド自治法が成立する。そして一次大戦後独立運動を経て遂に独立を達成した。

だがここでまた問題が生じた。北アイルランドである。

この地域はアイルランドの中では比較的豊かでありイングランドから移住する者が多かった。その為イギリスに残ったのである。

だがイングランド系、言い替えるならば新教徒の割合が六割である。旧教徒、アイルランド系が四割だ。この割合が問題となる。

その四割の中の過激派が問題を起こす。北アイルランドの独立及びアイルランドとの合流を主張し武装したのだ。そしてイギリス各地、とりわけ首都ロンドンでテロを起こす。これがＩＲＡである。

今ではこうした組織の常として内部で対立があり複雑に分裂している。そしてアイルランドの政治家にも彼等と関係がある者もいるという。日本赤軍や核マル派と関係があると噂される自称人権派の

政治家が我が国にいるが彼等とはまた違う。だが民族主義とはいえテロは悪である。その為彼等の行動は許されるものではない。
「やはりあの二人は鋭いな。その程度は見破っていたか」
ゾル大佐は一文字隼人と日本で死闘を繰り広げた。その為彼等、そう本郷猛のこともよく知っているのだ。
「どうしますか？」
戦闘員は彼に尋ねた。
「そうだな」
ゾル大佐はそれを聞き考え込んだ。暫くして顔を上げた。
「ブラック将軍と連絡をとれ」
「ハッ」
ブラック将軍もイギリスにいた。ただし作戦は別である。
「相手が相手だ。ここは奴とも話し合わなければな」
作戦が違うといっても、である。そう言っている状況ではないことが彼にはよくわかった。
だがそれには及ばなかった。
「既に来ているが」
声がした。大佐はそちらを振り向いた。
「来ていたのか」
「うむ、丁度私の方も話をしたいと思ってな」
ブラック将軍は左手のサーベルで右手の平をポンポンと叩きながら部屋に入って来た。
「本郷猛と一文字隼人がこのロンドンに来ている」
「そうだ、それに対しどうするかだ」
将軍は大佐の話を聞きながらその暗い目を光らせた。
「どうするかは決まっているがな。排除するだけだ」
「うむ。では怪人を出すとしよう」
将軍は話がわかっているのかどうかすら疑う程冷静であった。

霧の中の断頭台その三

「丁度私の作戦がそれだったしな」
「有り難いな。俺の怪人達だけではあの二人に勝つのは難しいからな」
「冷静だな。地獄大使とは違い」
「俺をあのようなおっちょこちょいと一緒にしてくれては困るな」
彼はそう言うと口の左端を歪めた。地獄大使の感情の起伏の激しさはショッカーの頃から有名であった。彼は自ら前線に出て指揮を執ることを好むが反面一つのことに没頭する癖もあったのだ。
「そういえば最近あの男は何かと焦っているようだな」
「そのようだな。どうも従兄弟に対し何かと含むところがあるようだ」
地獄大使と暗闇大使、かっては東南アジアで共に戦った血を分けた従兄弟同士であった。外見はまるで双子の様であったがその気性はまるで違っていた。そして近親憎悪であろうか。それとも前に何かあったのだろうか。彼等ははたから見てもわかる程激しく憎み合っていた。普段は冷静な暗闇大使も従兄弟に対してはその感情を露わにしていた。
「だがそれはどうでもいいことだ」
大佐は言った。
「今はダブルライダーを倒さなくてな。そしてどういう怪人達を向けるつもりなのだ」
「フン」
ブラック将軍は一瞬口の右端を歪めた。そして答えた。
「既に何体かここに連れて来ている」
「流石だな。動きが速い」
大佐はそれを聞いて表情を変えることなく言った。
「ではその怪人達を見せてもらおうか」

「うむ」
ブラック将軍は右手をゆっくりと上げた。すると後ろのドアが左右に開いた。
「ほお」
ゾル大佐はその怪人達を見て思わず声を漏らした。
「これでどうだ」
ブラック将軍は怪人達に顔を向けたあとゾル大佐の方に顔を戻して問うた。
「これなら期待できるな。例えあの二人だとしても。それにこの怪人達でも駄目な時は」
「その時は決まっている」
ここで将軍は目を光らせた。
「我々が出るだけだ」
「うむ」
こうして二人の会談は終わった。ロンドンの白い霧が赤黒くなろうとしていた。
霧の都ロンドン。イギリスの栄枯盛衰と共にあったこの街にかって一人の魔物が君臨していた。
切り裂きジャック。ロンドンっ子なら誰でも、いや世界でも知らぬ者はいない程の悪名高き魔人である。
十九世紀産業革命を経て円熟期にあった大英帝国。資本家と貴族達が繁栄を謳歌する中で植民地の者達は塗炭の苦しみを味わっていた。
当時イギリスはインドから搾取し中国に阿片売りつけていた。今この国が麻薬に悩まされているのはその報いなのだろうか。もっともこれは欧州全体の悩みであるが。
そうした苦しみは国内にもあった。労働者達は絶望的な貧困の中にあったのだ。
穴子の巣の様な家に住み朝も昼も夜も働いた。賃金の高い男は家で、賃金の安い女や子供が働いた。スモッグと泥、埃が支配しその

下を鼠が走り回る。寝ても起きてもそうした中にいた。太陽は見えず空は煙に覆われていた。そして彼等はその中で生きていたのだ。

そうした中に人が長く生きられる筈もなかった。結核等の病気も蔓延し痩せ衰えた労働者達は次々に倒れて言った。こうした中で社会主義という思想が出るのも当然であった。マルクスという男がろくに働いたこともなく親の遺産で本ばかり読んで暮らし現実というものを知らずその知識も曖昧でその思想の根本にどれだけの危険が潜んでいるのかは別として。

そうした中で娼婦達も生きていた。我が国では吉原があるがロンドンの夜の女達の生活も酷いものであった。その平均寿命は三十にも達しなかった。娼婦の生きていられる時は少ない。まるで夜に咲く花の命が短いように。病気やその生きる糧を得る為の手段が彼女達の身体を蝕んでいくのだ。

そうした娼婦達を狙い次々に惨殺していったのが切り裂きジャックであった。手術用のメスの様な鋭い刃物を使い女達を切り刻んでいく。そして誰にもその姿を見られないのだ。

何人もその刃の前に切り刻まれた。そして彼は忽然と姿を消した。その正体については今だに多くの議論がある。医者だったとも王室に連なる者だったとも言われている。だがその正体はまだわからない。もしかすると彼は人ではなく魔界の者だったかも知れない。

そうした事件を知っているからこそロンドンっ子達は怪奇話に耳が速い。今もこの街ではそうした話が流れている。

「まあロンドン塔があるしな」

一文字は頭上にある塔を見上げて言った。ロンドンの名物の一つロンドン塔である。

「そういえばこの塔は幽霊話のメッカだったな」

本郷もその塔を見上げていた。エリザベス一世の母アン＝ブーリンを筆頭としてこの塔には多くの歴史上の人物の亡霊が姿を現わす。さながらイギリス史を見せるように。

「ああ、この国はそうした話には事欠かない」

流石にイギリスにいただけはあった。彼はイギリス人の幽霊好きをよく知っていた。
「元々妖精とかの話も多いしな。幽霊も多いんだ」
「切り裂きジャックとは少し違う気もするがな」
「そうか？俺は同じようなものだと思うけれどな」
「切り裂きジャックは幽霊とは違う気がする。そうだな、例えると」
本郷は暫し考えたあとで口を開いた。
「バダンに近い。あの男は奴等と同じようなものだと思うが」
「言われてみればそうだな」
一文字はその言葉を聞き頷いた。
「幽霊も妖精もイギリス人は親近感があるが切り裂きジャックは違う。あれは魔物だ」
「そう思うだろう。バダンがそうであるように」
本郷の分析は鋭かった。彼はこうした話においてもその鋭い頭脳の冴えを発揮した。
「そうか。ジャックはバダンだったか」
「そう考えるとわかりやすいだろう。今ここで起こっている事件も」
「ああ」
一文字は頷いた。そしてたまたま横を通った売店の新聞を見た。

霧の中の断頭台その四

当然英語である。あまり品のよくない大衆紙である。そこの一面にこう書かれていた。

『悪魔がまたさらった』

と。今ロンドンでは行方不明事件が頻発しているのだ。

「テロの方も奴等だろうな」

「ああ、それはおそらくゾル大佐だ」

「ゾル大佐か。そういえば中東からイギリスに移ったらしいな。役君から聞いたよ」

今役はインターポールの中央に戻ってバダンの情報を収集していた。そしてその情報をライダー達に伝えていたのだ。

「俺もだ。そしてここにはブラック将軍もいるそうだな」

「ああ。それにしてもショッカーとゲルショッカーの大幹部が二人もか。またえらく豪華だな」

「二人はおそらく別々の作戦を立てて動いている。おそらくこの失踪事件はブラック将軍の手によるものだ」

「それで何をしているかだな、さらった人で」

「ああ、奴のことだ、おそらくとんでもないことなのだろうがな」

二人はそうした話をしながらピカデリー通りへ向かった。ロンドンの繁華街の一つである。

そこに着いた。早速爆発事件が起こった。

「ＩＲＡだ！」

「すぐに警察を呼べ！」

人々の悲鳴が木霊する。皆これはＩＲＡの仕業だと思った。

だが二人は違った。直感でバダンの仕業だと見抜いた。

「本郷、行くぞ！」

「おお、一文字！」

二人は頷くとすぐに動いた。そして爆発現場に向かった。

そこは地獄であった。炎と煙が支配し傷付いた人々が倒れていた。
「フフフ、上手くいったな」
それを遠く離れた場所で見る男がいた。
「こうしたことならお手のものだ」
彼は人ではなかった。怪人である。ショッカーの爆弾怪人サボテグロンだ。
「流石だな、メキシコを死の荒野に変えただけはある」
もう一体怪人がいた。ネオショッカーの風車怪人カマギリジンである。
「よせ、もう昔のことだ」
サボテグロンは賛辞に対し首を横に振った。
「俺のメキシコでの栄光は消えた。あのライダーによってな」
「そうは思わないがな。俺は貴様の活躍をどれだけ参考にさせてもらったか」
「俺なぞを参考にするよりは貴様自身の力を磨いた方がよいと思うがな」
「いや、それは違うな」
今度はカマギリジンが首を横に振った。
「研究しそれを生かす。そうでなくては駄目だ」
「それはそうだが」
「俺は貴様の作戦を研究したのだ。俺自身の活躍の為にな。それならばいいだろう」
「確かに」
二体の怪人はそう話していた。
「だがな」
サボテグロンはここで辺りを見回しながら言った。
「それを生かすのも全てはあの二人を倒してからだ」
「うむ」
二人の前にダブルライダーが姿を現わした。
「いたな、バダンの改造人間！」

「今の爆発は貴様等の仕業だな！」
ダブルライダーは二人のいるビルの上に立っていた。そして怪人達を指差して問うた。
「フフフ、その通りだ」
サボテグロンは不敵に笑って答えた。
「それが俺達の作戦だからな」
カマギリジンが続いた。そしてそれぞれ武器を取り出し身構えた。
「そして貴様等を倒すのもな」
怪人達はそう言うと前に出た。その周りに戦闘員達が姿を現わす。
「そしてここにいる怪人は俺達だけではない」
サボテグロンがそう言うと新たに二体の怪人が姿を現わした。
「ムッ！」
ダブルライダーはそれを見て再び身構えた。ドグマの電気怪人エレキバスとゲドンの溶解怪人獣人ヘビトンボである。
「エレーーーーーーーーッ！」
「ジャーーーーーーーーッ！」
怪人達は奇声を発した。そしてライダー達を取り囲む。
「四体か。一度にこれだけ投入してくるとはな」
「ロンドンにはかなりの戦力が集結しているようだな」
「ヒヒヒヒヒヒヒヒ」
サボテグロンはダブルライダーに答えず笑い声を出した。
「それは地獄で知るのだな！」
そしてそう言った。それが戦いの合図であった。
まずはカマギリジンと獣人ヘビトンボが向かって来た。ダブルライダーも突進した。
「キシャーーーーーーーッ！」
カマギリジンは両手に鎌を持った。それで一号に切り掛かる。
「甘いっ！」
だが一号はそれを見切っていた。そして手刀を出す。
だが敵もさるものであった。カマギリジンはそれをかわした。

獣人ヘビトンボは空へ舞い上がった。そしてそこから二号へ向けて急降下する。
「トォッ！」
二号はそれを後ろに跳んでかわした。そして着地し身構える。向かって来る怪人に対し拳を繰り出した。それで怪人の動きを止めた。
続けて膝蹴りを出す。だが怪人はそれにも耐えた。
口から緑色の液体を出す。しかし二号はそれを見切っていた。
「させんっ！」
そして一気に間合いを詰め拳を繰り出す。怯んだところで斜めに跳んだ。
「ムッ！」
戦闘員達も怪人達もその動きに目を見張った。二号は貯水槽を蹴って三角跳びをした。
「ライダァーーーー反転キィーーーーーック！」
本来は一号の技である。だが再改造と特訓により二号も身に着けたのであった。
その蹴りが怪人の胸を直撃した。獣人ヘビトンボは大きく吹き飛ばされビルから落ちた。そして空中で爆死した。
「キシャッ！？」
これにカマギリジンは思わず顔を向けた。そこに一瞬の隙ができた。
「今だっ！」
一号はその隙を衝いた。一気に間合いを詰めた。
そしてその首を両足で掴んだ。そのまま上に跳ぶ。
「ライダァーーーーヘッドクラッシャーーーーーーッ！」
そして怪人の頭をコンクリートに打ちつけた。素早く跳び怪人から離れる。

霧の中の断頭台その五

怪人は動かなかった。そして倒れたまま爆死した。
「さあ来いっ！」
ダブルライダーは残る二体の怪人に顔を向けて叫んだ。
「エレキバス、ここは俺が引き受ける」
サボテグロンは傍らにいるエレキバスに対して言った。
「貴様はタワーブリッジに向かえ。そして予定通りあの橋を破壊しろ」
「わかった」
エレキバスは頷くと後方へ退いた。そしてビルから飛び降りた。
「ムッ、待て！」
ダブルライダーはそれを追おうとする。だがサボテグロンがその前に立ち塞がった。
「ここは通さん」
そして右手に持つサボテンの剣を振るってきた。
「ムムム」
ダブルライダーはそれに怯んだかに見えた。だがすぐに態勢を立て直した。
「本郷、ここは俺に任せろ」
二号は一号に対して言った。
「御前はエレキバスを追え」
「わかった、一文字！」
一号は頷くと跳んだ。そこに銀のマシンがやって来た。
「しまった、マシンがあったか！」
サボテグロンはそれを見上げて叫んだ。だが何もできなかった。
一号は新サイクロン改に飛び乗った。そしてそのまま着地し道路を走って行った。
「ならば二号ライダー、貴様を倒すだけだ。あの時の借り今こそ返

してやる！」
彼はかって日本で自らの作戦を二号により粉砕されている。そのことをまだ覚えていたのだ。
「死ねいっ！」
そして剣を振るった。
「死ぬのは貴様の方だっ！」
二号も負けてはいない。態勢を建て直し怪人に蹴りを入れた。
「この程度っ！」
だが怪人も怯まない。果敢にライダーに向かって来る。
剣を振り回す。二号はその腕を蹴った。
「ウォッ！」
怪人はたまらず剣を落としてしまった。二号は攻撃の手を緩めない。その顔へ回し蹴りを入れた。
「まだだっ！」
そして怪人を掴んだ。そのまま上へ跳ぶ。
「ライダー投げーーーーっ！」
怪人を下に叩き付けた。やはり力の二号というだけはある。こうした技は得意だ。
「ウオオオオーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びを上げその場に倒れた。そして爆死した。
「本郷、あとは頼んだぞ」
二号はその爆発を見たあとタワーブリッジの方を見て言った。
その時エレキバスはロンドン名物である赤い二階建てバスの上にいた。そしてそれでタワーブリッジに向かっていた。
「ヒヒヒ、上手くいきそうだな」
怪人はライダーが追って来ないのを確かめて笑った。
「サボテグロンには感謝しないとな」
そして自分をここに向けてくれた仲間に対して感謝した。
「それに報いる為に」
前を見た。橋が見えてきた。

「あの橋は必ず破壊してやろうぞ」
そう誓ったその時だった。
「待てっ！」
後ろからあの声がした。
「おのれ、来たかっ！」
怪人は声がした方を振り向いて叫んだ。そこに彼がいた。
「この仮面ライダーがいる限り貴様等の好きにはさせんっ！」
一号はマシンを駆ってこちらに風の如き速さで向かって来ていた。
「ぬうう、しつこい奴だ」
怪人はその姿を見ながら呻いた。ライダーはそれに構わずマシンから跳んだ。
「トォッ！」
そしてバスの上に着地した。怪人と対峙する。
「こなっては仕方ない、まずはライダー、貴様を倒す！」
「来いっ！」
まずは怪人が攻撃を仕掛けた。両手から電撃を放つ。
「ムッ！」
一号はその蛸の手を掴んだ。そしてその電撃を身体に受ける。
「愚かな、貴様に俺の電撃が受けられるかっ！」
怪人はそれを見てせせら笑った。だが一号の顔には余裕があった。
「それはどうかな」
「何っ！？」
怪人はその声に一瞬戸惑った。だがそれでも電撃を流し続ける。
「これ位でいいな」
一号はそう言うとその手を離した。そして空中に跳んだ。
「放電攻撃っ！」
全身に帯びた電撃を放った。それは力を出し尽くしていたエレキバスを撃った。
「ウオオオオッ！」
自らの電撃を返された怪人は思わず呻き声をあげた。そして片膝

を着いた。
「まさか自分の電撃でやられるとはな」
それが最後の言葉であった。怪人はバスの上に倒れるとそのまま転げ落ちた。そしてテームズ川に落ちそのまま爆死した。
「これでタワーブリッジは救ったか」
一号はバスの上から橋を見た。だがそれは甘かった。
見れば橋の上が騒がしい。車が立ち往生している。
「何かあったか!?」
ライダーはすぐに橋へ向かった。そこでは怪人達が暴れていた。
「シシャーーーーーッ!」
「ビカァーーーーーッ!」
二体の怪人がいた。デストロンの機銃怪人マシンガンスネークとジンドグマの混乱怪人レッドデンジャーである。
「クッ、バダンめ、既にここにいたというのかっ!」
一号は舌打ちしながら橋の上に来た。そして怪人達と対峙する。

霧の中の断頭台その六

「来たな、ライダー」
怪人達は一号の姿を認めるとその前に来た。戦闘員達がライダーの周りを取り囲む。
「エレキバス達の仇はとらせてもらう。この橋が貴様の墓標だ」
「クッ・・・・・」
先程の放電攻撃の疲れがあった。敵の攻撃を受けそれを自らの力に変換するのは想像以上にエネルギーを消耗するのだ。今二体の怪人を相手にするのは分が悪かった。
だがそこに思わぬ援軍がやって来た。
「待てっ、俺もいるということを忘れるなっ！」
「おおっ！」
一号は声のした方を見て思わず叫んだ。仮面ライダー二号がマシンを駆ってこちらに向かって来ていた。
そしてそのまま橋に突入する。一号を取り囲む戦闘員達の間に突っ込みサイクロンカッターで切り倒す。
「トゥッ！」
そして跳躍した。一号の反対側、二体の怪人を取り囲む位置に着地した。
「残念だったな、本郷だけじゃなくて」
「クッ、何という速さだ」
彼等は二号の思いもよらぬ参戦に唇を噛んだ。
「では行くぞ、この橋は渡さんっ！」
こうして橋を巡る戦いがはじまった。一号はレッドデンジャーと、二号はマシンガンスネークと戦いをはじめた。
「シシャーーーーーーッ！」
マシンガンスネークは叫び声をあげると右腕のマシンガンを放った。それは二号の足下を襲った。

「ムッ！」
だが二号は低く跳びそれをかわした。そしてそのまま体当たりを仕掛ける。
「グオッ！」
それを受けた怪人は怯んだ。二号は着地しさらに攻撃を続ける。怪人はそれに対し牙で喰らいつかんとする。だが二号はそれを許さなかった。
「無駄だっ！」
二号は怪人の頬を殴った。そして怯んだところにもう一撃加えた。怪人を掴んだ。そして空中へ思いきり放り投げた。
「行くぞっ！」
ライダーは跳んだ。そして怪人の背へ襲い掛かる。
「ライダァーーーニーーーブローーーーーック！」
これも本来は一号の技である。それを怪人の背へ放った。
マシンガンスネークは上へ大きく吹き飛ばされた。そして空中で爆死して果てた。
もう一方では一号とレッドデンジャーの戦いが行なわれていた。
「ビカァーーーーーーッ！」
怪人は奇声を発すると両手に炎のリングを出した。そしてそれを一号へ投げ付けた。
「ムンッ！」
一号はそれを蹴りで叩き落とした。そして一気に間合いを詰めた。だが怪人は拳でそれに立ち向かう。そして一号を打った。かに見えた。
「俺はここだっ！」
一号は素早いフットワークでそれをかわしていた。武道でいう『見切り』であった。
そして怪人の横に現われその首に手刀を入れた。そして怪人を掴んだ。
「ウオオオオオオッ！」

一号は吠えた。そして怪人の足を掴むと自らを軸として駒の様に回転しはじめた。
「ライダァーーーーーハンマァーーーーーッ！」
幾度回転したであろうか。勢いが頂点に達したその時だった。一号は怪人を空中に放った。
「グオオオオオーーーーーーッ！」
怪人は飛びながら断末魔の叫び声をあげた。そして空中で爆死した。
「やったな、本郷」
「おお、一文字」
二人は拳を見せ合って互いの勝利を確認した。そこへあの声がした。
「フフフフ、流石だと褒めておこう」
橋の上へゾル大佐が現われた。
「ゾル大佐っ！」
「やはり貴様が！」
二人は彼を認めると再び身構えた。だがそこにいるのは彼一人ではなかった。
「残念だったな、私もいる」
「クッ！」
二人はその声にも聞き覚えがあった。その声の主も姿を現わした。
「奇厳山以来だな。元気そうで何よりだ」
それはブラック将軍であった。彼は冷酷な眼差しを二人に向けたままこちらにやって来る。
「どうやらその表情を見る限り二人共この地での我々の目的をある程度は知っているな」
ゾル大佐は彼等に対して言った。
「それがどうしたっ！」
ダブルライダーは言い返した。
「貴様等の野望を阻止するのが我々の任務だっ！」

「フン」
だが彼等はその叫びを冷笑した。
「では阻止してもらいたいものだな」
「この我々を倒してな」
ゾル大佐とブラック将軍はそう言って再び不敵に笑った。
「やるつもりか」
「ならば容赦はしないぞ」
ダブルライダーはその声に唯ならぬものを感じ身構えた。だが二人は戦いの素振りは見せなかった。
「安心しろ、貴様等と今ここで戦うつもりはない」
大佐は右手に持つ鞭で左手の平をポンポンと叩きながら言った。
「我々は貴様等に伝言をする為にここへ来たのだ」
「伝言！？」
ダブルライダーはブラック将軍の言葉に首を傾げた。
「そうだ、このロンドンでこれから起こることをな」
ゾル大佐は二人に語った。
「我がバダンはロンドンに大攻勢を仕掛ける。この俺の手でな」
「貴様が・・・・・！」
ゾル大佐の手腕はよく知っていた。二号は彼と死闘を繰り広げてきたのだ。
「私もいるということを忘れるな」
そしてブラック将軍もいた。彼はゲルショッカーにおいてその辣腕を思う存分見せ付けてきた。
「我々の攻勢を耐えられるか」
「見せてもらおう」
二人はこう言うと姿を消した。あとには何も残らなかった。

霧の中の断頭台その七

「ゾル大佐とブラック将軍か」
「相手にとって不足はないな」
一号は深刻な言葉を口にするところであった。だが二号はその前に言った。
「そうだな」
一号はその言葉を聞いて頷いた。そして察したのだ。
例え相手がどのように強大であっても引くわけにはいかない。それがライダーなのだ。
気持ちで引いたならばその時点で敗北である。それだけは許してはならない。自分自身に対して。
ライダーは悪と戦うのが運命だ。だがそれには何事にも負けない心が必要なのである。そう、心が。
それは自分達が最もよくわかっている筈のことであった。ショッカーとの戦いをくぐり抜けてきた自分達が。
ならば弱い言葉を言うわけにはいかなかった。戦い、そして勝つ為に。
「このロンドンを守る為だ、本郷、行くぞ」
「ああ、わかった」
一号は二号の言葉にあらためて頷いた。そして霧の中へと消えていった。
「どうやらあの男はカナダにいるようですね」
役はインターポールの一室でノートパソコンを叩いていた。そして何かを調べていた。
「何を企んでいるのかは知りませんが」
いつもの表情とは違う。何か見下したような目をしている。
「世の摂理に逆らう者達。その摂理の下す裁きに従ってもらいましょう」

その声も普段とは違っていた。あくまで冷徹で機械的なものであった。

彼は席を立った。ノートパソコンを収めるとすぐに姿を消した。気付いた時彼はインターポール本部のビルの外にいた。まるで煙の様に消えそこに蜃気楼の様に姿を現わした。

「バダン、この世界の摂理を乱す者」

彼はカナダの方を向いて呟いた。

「裁きを与えましょう。そして永劫にその炎で焼いて差し上げます」

彼を知る者が聞いたら驚くであろう。それは彼の言葉とは思えなかった。まるで人々を冥界へ誘う死神の言葉の様に冷たかった。

彼は歩き去って行った。その影は人の姿であった。

だが何かが違っていた。それは人のものにしては妙であった。

形は役のものである。だがその影は太陽の光に反射しているのではなかった。

影は太陽に向いていた。そちらに頭を向けていたのだ。

「おや」

彼はその影に気付いた。

「いけないいけない、ちゃんとなおしておかねば」

そう言うとその影は動いた。そして普通の影の位置についた。

「どうも別の次元を移動したあとは影の位置が曖昧になってしまいます」

彼は苦笑してそう呟いた。

「こちらの次元、こちらの世界に合わせなければ。最も私のことを知る者はこの世界では僅かでしょうが」

そして彼は誰に聞かせるとでもなく呟き続けた。

「赤い服を着る時にでもなければね」

そう言って消えて行った。赤い服という言葉を残して。

ショッカーはあの首領が最初に作った組織であった。世界各地で暗躍しその悪名を轟かせた。だがそれも終わる時が来た。

城南大学きっての天才科学者であった本郷猛を拉致、改造したの

がその暗転のはじまりであった。彼は能改造手術を受ける直前で師であり彼を改造した緑川博士は良心の呵責に耐え切れず彼を救い出した。これによりショッカーと仮面ライダーの戦いがはじまったのである。

本郷は頭脳だけではなかった。その身体能力も常人とは隔絶していた。それが改造手術によりさらに強化されたのである。その戦闘力は凄まじかった。

業を煮やしたショッカーは彼を倒すべきもう一人のライダーを作り上げることにした。それが一文字隼人であった。柔道、空手の達人であり優れた頭脳も併せ持つ彼ならば仮面ライダーを倒すことが出来ると判断したからである。

しかしこれも失敗した。改造手術を終え洗脳を施そうとしたその時にライダーが基地に乱入してきた。そして彼は救い出されもう一人の仮面ライダーが誕生したのだ。

ダブルライダーの存在はショッカーにとって最大の脅威であった。日本で、そして世界各地で彼等はショッカーと戦いこれに打ち勝ってきたのだ。

ここで首領はショッカーに見切りをつけ再編成に踏み切った。アフリカのゲルダム団と合併し新たな組織、ゲルショッカーを設立したのである。

ゾル大佐は元々ショッカーの人間でありブラック将軍はゲルダムの人間である。そして大佐はドイツ出身であった。将軍はロシアである。両者の出自はあまりにも違っていた。

「だがそれはどうでもいい」

基地に戻ったブラック将軍は作戦室でゾル大佐に対して言った。

「我々はただ首領に忠誠を誓うのにだ」

「うむ」

大佐はその言葉に頷いた。

「かっては我々はそれぞれ異なるものに対して忠誠を誓っていたが」

ゾル大佐はナチス、そして総統でありヒトラーに、ブラック将軍

はロシア、そして皇帝に忠誠を誓っていた。人間であった頃の話である。
「今は同じだ。ショッカーもバダンも根幹に流れるものは同じだ」
「うむ」
将軍は大佐の言葉を聞き今度は彼が頷いた。
「あの時と同じ失態を繰り返してはならん」
かって彼等は一度甦っている。デストロンが日本に一大攻勢を仕掛けた時だ。
その時は仮面ライダーブイスリーを圧倒する戦力を誇りながらも彼等は敗北し自滅した。
敗因はわかっていた。彼等はそのプライド故に互いに対立しそのせいで協力体制が整っていなかったからである。
そして彼等は爆死した。生き残ったドクトル＝ゲーはその後でブイスリーに対し決戦を挑み敗れ去っている。
「だが今度は違う。我々の力が合わさるのだからな」
将軍は言葉を続けた。
「そうだな、ダブルライダーを倒す為に」
大佐の声も冷静であった。
「その為の戦力は用意しておいてくれたな」
「当然だ」
彼は言い切った。

霧の中の断頭台その八

「安心していろ。私がこれまで以上の戦力を復活させた」
「そうか、それは有り難い」
彼等はテロとは別の作戦も執り行なっているのだ。
「ニ正面作戦といこう、奴等に対抗してな」
「うむ、我等の勝利の為に」
彼等は杯をあけなかった。そしてすぐに戦場に向かった。
本郷と一文字は分かれて行動することにした。その方が敵を探し易いからであった。
「その為に俺達を呼んだのか」
滝はテームズ川を進むボートの上で向かいにいる男に対して言った。
「ああ、相手はゾル大佐と死神博士だ。油断はできない」
本郷は引き締まった表情で言った。
「確かに手強いな。だがこうやって俺もいる。それに」
彼はここで上の橋を見上げた。
「おやっさんもいるぜ」
そこには立花がいた。彼は一文字と共にいた。
「おーーーい本郷、滝！」
彼は橋の上から二人に声をかけた。
「テームズ川は頼んだぞ、わしと隼人はウィンブルドンの方へ行くからなあーーーーっ！」
「了解」
「おやっさんも気をつけて下さいよおーーーーーっ！」
「おお、わかった！」
彼はそう言うと一文字に顔を向けた。
「おう隼人、行くぞ」
「あいよ」

一文字は頷くと立花と共にウィンブルドンの方へ向かった。立花は黄色いジープに乗っている。
「それにしてもまさかロンドンでこの顔触れが集まるとは思わなかったな」
本郷は二人が去った橋を見上げて言った。
「ああ、けれどそれだけ重要な戦いだぞ、これは」
滝も橋を見上げていた。二人の顔は深刻なものである。
「あのゾル大佐とブラック将軍だ。バダンもよくあの二人を同時に投入してきたものだ」
「それだけのことをこのロンドンでしようというのだろうな」
「ああ、だろうな」
滝はテームズ川の水面へ視線を移した。
「しかし本郷」
滝はここで本郷に顔を戻した。
「御前は全く怯んではいないだろう」
「当然だ」
本郷はその野太い声で答えた。
「何があろうと俺は戦わなくちゃいけない。それはもうあの時に決意したんだ」
彼は改造を受けた時悩み苦しんだ。幾度死のうと思ったかわからない。だが死ななかった。悪を滅ぼす為に彼は戦い続けたのである。
「俺はバダンを倒す。そしてこのロンドンを、世界の平和を守る」
「そう言うと思ったぜ」
滝はそれを聞いて微笑んだ。
「俺も同じだ。ショッカーやゲルショッカーと戦ってきたからな。御前や隼人と一緒に」
「滝・・・・・」
本郷は滝に顔を向けた。
「最初に御前や隼人と会った時は正直何だこいつ、と思ったよ。けれど今じゃ違う」

彼は言葉を続けた。
「俺と御前達二人は戦友だ。共に悪と戦うな」
「戦友か」
本郷は最初は孤独な戦いを強いられていた。只一人でショッカーと戦ってきた。
しかしそこに立花がやって来た。ルリ子も彼と共に戦う決意をした。滝が参戦しそして一文字が加わった。彼は一人ではなくなったのである。特に同じ改造人間である一文字の存在は大きかった。
「なあ本郷」
滝は本郷に優しい笑顔を向けた。
「御前は今まで多くの戦いを潜り抜けてきた。隼人もな。時には自らを犠牲にして人々を守ってきた」
「ああ」
それはいつものことであった。時には体内に核爆弾を持つ怪人を一文字と共に海の上へ飛ばし爆発させたこともあった。
その時は誰もが死んだと思った。
しかし彼等は生きていた。それは何故だろうか。
「御前達は仏なんだよ。人々を救う仏だ」
「俺達が仏か」
本郷はそう言われて違和感を覚えた。
「そうだ、仏なんだよ」
滝は言った。
「仏といっても色々あるだろう。御前達は明王なんだ」
「明王か」
明王とは憤怒の相をした戦う仏である。その多くは複数の眼や顔、腕を持ち様々な武器で武装している。そしてこの世を乱す悪を討ち滅ぼすのだ。その姿は異形であるが心は正しきものなのである。
「御前達は悪を討ち滅ぼす明王だ。それがライダーなんだ」
「よしてくれ、滝」
本郷は照れ臭そうに言った。

「俺達は神でも仏でもない。ただの改造人間なんだ」
「本郷・・・・・・」
本郷は滝の言葉に構わず言葉を続けた。
「俺達は確かに悪と戦うのが宿命だ。おそらく永遠にな」
そうであった。彼等の戦いは悪がこの世にある限り続くのだ。
「しかし俺達はそれを受け入れている。人間として」
彼等の身体は確かに改造されている。だがその心は違っていた。
「俺達は心までは改造されてはいない。今まで色々と考えてきたが俺達の心は人間のままだ。今こうして考えていられるのも俺達が人間だからだ」
「人間だからか」
「そうだ、俺達は人間だ」
その言葉に全てがあった。そう、彼は神にも仏にもなりたくはなかったのである。
彼がなりたくて、そしてそのままでいたいと思うもの、それは一つしかなかった。
「滝、人間とは何だと思う」
本郷は逆に彼に問うた。

霧の中の断頭台その九

「それは・・・・・・」
あまりにも難解な質問であった。彼も咄嗟には答えられなかった。
「俺は心がそれを示すのだと思う」
本郷は静かな声で言った。
「心か」
「ああ。例えどのような身体を持っていても心が人のものであったならばそれは人間なんだ。俺はそう考える」
「そうか、そうだったな」
滝はそれを聞いて頷いた。
「俺もこう考えるようになるまで悩んださ。俺はもう人間じゃないんだとどれだけ苦しんだか」
その苦悩は滝もよくわかっていた。
「だが戦ううちにわかってきた。人を人としているのは心なんだって」
おそらくショッカーの非道さを見てきてそれがわかったのであろう。その悪辣さは最早人間のものではなかった。
「人間は確かに愚かな一面もある。だがそれが全てじゃない」
彼は言った。
「それと同じ位、いやそれ以上に素晴らしいものを持っている。人間は決して悪じゃない。そう断言するのはあまりにも愚かなことだ」
そのことは滝もよくわかっていた。多くの戦いで彼は人間の愚かさを見てきた。しかしそれ以上に人間の心が持つ素晴らしさも知るようになったのだ。
「俺はその人の心を信じる。そしてその為に戦う。人間としてな」
「そうか、人間としてか」
「そうだ、俺は人間だ。それ以上でもそれ以外でもない」
話はそれで終わった。彼等はそのままボートで川を進んでいった。

このテームズ川はかってはヘドロの海であった。産業廃水が流れ最早生物はいない有様であった。しかしロンドン市民の懸命の浄化によりその美しさを取り戻し今ではかっての美しさを取り戻している。

二人はその川を進んでいた。何かを探していた。

「ムッ」

やがて本郷は水面に何かを見つけた。

「いたか」

「ああ」

二人は頷くとそこへ水中銃を放った。

「ウニイーーーーーーッ！」

すると叫び声と共に怪人が姿を現わした。ショッカーの虐殺怪人ウニドグマである。

「やはりそこにいたかバダンの改造人間」

本郷は既に変身を終えていた。そして怪人に対して言った。

「フン、よく俺がいるとわかったな」

怪人はボートに跳び乗って来るとふてぶてしい口調で言った。

「俺にはOシグナルがある。それを知らないわけではあるまい」

ライダーは言葉を返した。

「フン、確かに」

怪人は言った。

「ではまだいることもわかっているだろう」

ウニドグマがそう言うと後ろから水柱が上がった。

「ムッ！？」

そしてそこから一体の怪人が姿を現わした。

「ピリピリピリピリピリピリーーーーーーーッ！」

ブラックサタンの電気怪人奇械人エレキイカであった。怪人はボートの上に跳び乗って来た。

「死ね、ライダーッ！」

そしてライダーに襲い掛かって来た。

「来たな」
水面から戦闘員達も次々に跳び上がって来る。こうしてボートの上での戦いがはじまった。
戦闘員達はいつも通り滝が相手をする。そしてライダーは怪人達と対峙する。
「ライダー、このテームズ川が貴様の墓場だ！」
まずは奇械人エレキイカが来た。怪人は右手の鞭を振るって来た。
「トゥッ！」
ライダーはそれを跳躍でかわした。そしてボートの縁の上に着地する。
「どうした、その程度か」
そして怪人を挑発した。
「ヌヌヌ、ではこれでどうだ！」
怪人は全身の鞭を振るって来た。そしてそれでライダーを打たんとする。
「まだだっ！」
だがライダーはそれもかわした。そして怪人の頭上に来た。
「こんどはこちらの番だっ！」
そう言うと怪人を掴んだ。そして再び空中に跳んだ。
「喰らえっ！」
怪人を頭上に持って来るとそれを駒の様に回転させた。
「ライダァーーーーきりもみシューーーーーートォッ！」
ライダーの持つ大技の一つである。怪人を頭上で回転させ放り投げる技だ。これにより多くの怪人達を葬ってきている。
「ウオオオオオォォォォォォーーーーーーッ！」
キ械人エレキイカは叫び声をあげながら吹き飛んでいった。そして水面に叩きつけられ爆死した。
「次は貴様だっ！」
ライダーは着地すると息をつかせぬ程の素早い動きでウニドグマの前に出た。

「フン、俺を馬鹿にするな！」
怪人はそう言うと口から炎を噴いた。
「ムッ」
ライダーは後ろに退いた。怪人はそれを見て次第に間合いを詰めてきた。
「フフフフ」
怪人は自身が優位にあると感じていた。そして今度は左手で殴り掛かってきた。
「来たかっ！」
ライダーはそれを受け止めた。彼は怪人が格闘戦を挑んでくるのを待っていたのだ。
「これでどうだっ！」
ライダーは怪人を空中に放り投げた。そしてすぐに自らも跳んだ。
「トォッ！」
そのまま怪人へ向けて一直線に向かって行く。腕を顔の前で交差させ手刀を作った。
「ライダァーーーーフライングチョーーーーーーーップ！」
その手刀をもって体当たりをした。怪人はその直撃を受け空中で爆死した。
「これで終わりか」
ライダーは着地してそう呟いた。
「ああ、戦闘員達も俺が全て倒した」
滝は着地したライダー達に対して言った。
「それにしてもこのテームズ川を狙うとはな。やはり油断のならない奴等だ」
「そうだな。おそらくここに毒でも流すつもりだったのだろう」
ライダーは変身を解きながら答えた。
「毒か。ゾル大佐のやりそうなことだな」
「ああ。おそらく一文字とおやっさんも今頃奴等と戦っているだろう」

「だろうな。問題は何処で戦っているかだ」
二人は二人の戦友のことを思った。

霧の中の断頭台その十

二人の心配は当たった。二人はこの時ロンドン空港のロビーでバダンと死闘を演じていた。

「やっぱりここにいやがったか！」

立花は迫り来る戦闘員達を倒しながら叫んだ。

「おやっさん、雑魚は頼みます」

「おう、わかった」

一文字は既にライダーに変身していた。そして滑走路の方に向かった。

「隼人、頼んだぞ！」

「任せて下さい！」

二号は立花に答えると窓ガラスに跳んだ。そしてそれを打ち破り滑走路に出た。

滑走路でも騒動が起こっていた。航空機は止まり戦闘員達が暴れ回っていた。

「貴様等の好きにはさせんっ！」

二号は彼等の中に踊り込んだ。そして戦闘員達を次々と薙ぎ倒していった。

「言え、怪人達は何処だっ！」

そして最後に残った戦闘員の首を後ろから絞め問い詰める。

「そ、それは・・・・・・」

戦闘員は言おうとした。そこへ何かが飛んで来た。

「グッ」

それは針であった。怪人はそれに喉を撃たれ即死した。

「毒針か」

二号はそれを見てすぐに察した。そして毒針の飛んで来た方を見た。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

ショッカーの毒燐怪人ギリーラであった。怪人は旅客機の上にいた。
「貴様か」
二号は怪人を見上げ指差した。
「あたしだけとお思いかい？」
怪人は二号を侮蔑した笑いで見下ろしながら言った。
「何っ！？」
「後ろを見てごらん」
「ムッ」
二号は後ろを見た。そこにはゴッドの火炎怪人ジンギスカンコンドルがいた。
彼だけではなかった。怪人はその左腕にもう一人掴んでいた。
「おやっさん！」
二号は彼の姿を見て叫んだ。
「そうよ、貴方がこちらに向かっている間に捕まえたのよ。迂闊だったわね」
「ガガガガガガガガ」
怪人達はそう言って二号を嘲笑した。
「ヌウウ」
二号はそれを聞き悔しさで歯噛みした。
「ライダー、わしに構うな、早く怪人達をやっつけろ！」
立花は動けなくなったライダーに対して叫んだ。
「黙れ」
だがジンギスカンコンドルはそんな立花に対し槍を突きつけた。
「さあ、どうするの！？」
ギリーラは二号に対し問うた。
「降伏すればそれで良し、歯向かうのならば・・・・・・わかるわね」
「・・・・・・クッ」
それは二号にもよくわかっていた。敵を倒さなくてはならない。

だが彼には立花を見捨てることは出来なかった。
「わかった・・・・・・」
膝を屈しようとしたその時だった。何かが跳んで来た。
「ムッ！？」
それは銃弾であった。銃弾はジンギスカンコンドルの腕を撃った。
「ガッ！？」
無論その程度で傷付く怪人ではない。だがその衝撃で立花を捕らえていた腕が離れた。
「今だっ！」
二号は跳んだ。そして怪人に体当たりを浴びせると立花を取り戻した。
「チッ！」
それを見たギリーラは素早く毒針を放った。だがそれは当たらず二号の足先を追うだけであった。
「これでよし」
二号は怪人達から間合いを離すとそう言った。
「済まん、ライダー」
「いいですよ、おやっさんさえ無事なら」
二号は立花に対し優しい声でそう言った。
「さあ、早く安全な場所へ」
「わかった」
こうして立花は後方へ退いた。
「ヌウウ、一体何処から・・・・・・」
ギリーラは立花が退いたのを見て今度は彼女が歯噛みした。
「だが今はそんなことはどうでもいいわ」
彼女はすぐに冷静さを取り戻しライダーに顔を向けた。
「死ね、仮面ライダー二号！」
そう叫ぶと再び口から毒針を放った。二号はそれを横に跳びかわした。
「ガーーーーーーッ！」

そこへジンギスカンコンドルが襲い掛かる。槍を繰り出してきた。
「ムンッ」
二号はそれをかわし脇で捉えた。そして思いきり力を入れた。
槍は折れた。それを見た怪人は一瞬怯んだ。
「もらった！」
その隙を見逃すライダーではなかった。前にダッシュするとまずは怪人の顔に拳を入れた。
「グッ！」
怪人はそれを受け怯んだ。二号はそこへさらに攻撃を加えた。
「これでどうだっ！」
怪人の肩に乗った。そして脚でその首を掴んだ。
「ライダァーーーヘッドクラッシャアアアアーーーーッ！」
上に跳ぶと怪人の頭を打ちつけた。怪人は頭を砕かれ爆死した。
「今度は貴様だっ！」
そしてギリーラの方へ跳んだ。
「フンッ！」
怪人はライダーの最初の一撃をかわした。そして機の後ろの方へ位置を移した。
二人はその航空機の上で睨み合った。まずはギリーラが攻撃を仕掛けた。
「死ねっ！」
予想通り口から毒針を放って来た。二号は上に跳躍してそれをかわす。
しかしギリーラも跳んでいた。両者は空中で拳を交えた。
「ライダァーーーーパァーーーーーンチッ！」
両者は互いに背を向けて着地した。まずはライダーが振り向いた。
続いてギリーラも。だが彼女は振り向けなかった。
「グググ・・・・・」
今のパンチが効いていたのである。崩れ落ちるとそのまま航空機の下へ転げ落ちた。

そして爆死した。二体の怪人はこうしてライダーに倒された。
「危ないところだったな」
二号は航空機から飛び降りて言った。
「それにしても」
そして変身を解きながら空港を見渡した。
「何処から誰が銃を撃ったのだろう。見たところ誰もそうした怪しい者は見当たらないが」
そこへ立花が戻って来た。

霧の中の断頭台その十一

「隼人、済まんな。おかげで助かった」
「いえ、いいですよ」
一文字は立花の感謝の言葉に微笑みで返した。
(どうやらおやっさんは俺が助け出したと思っているようだな)
実際はそうではない。だがそれは立花には言わなかった。
「じゃあホテルに戻るか。本郷達とも連絡をとりたいしな」
「ええ、じゃあ戻りますか」
一文字はそれに従った。そして二人はその場をあとにした。
「危ないところだったな」
その二人を遠くから見る男がいた。
「ふとロンドンを見に来たらこれだ。目を離せない」
男は役であった。その手には大型のライフルがある。
「だがこれで助かった。安心してカナダへ向かえますね」
彼はそう呟くと煙の様に姿を消した。そしてその後には誰もいなかった。
「そうか、怪人を狙撃したのか」
一文字はホテルに戻ると早速本郷に話した。彼等はテーブルに向かいになって座って話をしている。
「ああ、そうなんだ。何処から撃ってきたのか、誰なのかは全くわからないが」
一文字は腕を組み考え込む本郷に対し言った。
「今イギリスにいるライダーは俺達だけだったな」
「ああ、それは間違いない」
「それとおやっさんと滝だけだったな」
「ああ。ルリ子さんは今何処だ?」
「パリに残ってもらっている。まだバダンの戦闘員が残っているようだからな」

「そうか。ルリ子さんなら大丈夫だろう。じゃあここにいるのは俺達を含めて四人だけか」
「そうだな。他には・・・・・・待て、役君はどうしていた!?」
本郷はここで役のことを思い出した。流石に勘がよかった。
「役君ならインターポールの本部にいるが。何なら連絡するか!?」
「いや、いい。彼に迷惑をかけるわけにもいかない」
本郷はそれを拒絶した。
「結局誰かはわからないみたいだな」
「そうだな。だが俺達の敵でもないようだな。怪人を狙撃しておやっさんを助けてくれたところを見ると」
「ああ。それだけでもわかればいいか」
二人はそう話していた。そこへ立花と滝がやって来た。
「おお二人共ここにいたか」
「ええ、ちょっと話したいことがあって」
本郷は二人の方へ顔を上げて答えた。
「丁度二人揃ってるな。今役君から連絡があったんだよ」
滝が言った。
「役君から!?」
一文字はそれを聞いて思わず声をあげた。
「どうした、何かあったか!?」
立花は一文字だけでなく本郷まで驚いた顔をしたのを見て思わず問うた。
「いえ、何も」
だが二人はそれをすぐに打ち消した。そして立花達に対して尋ねた。
「それで役君からは何と」
「ああ、ゾル大佐とブラック将軍のことでな」
「あの二人か」
二人はその名を聞いて目を光らせた。
「何でも奴等は夜になると姿を決まった場所に現わすらしいんだ」

「それは何処ですか！？」
「ロンドン塔だ」
「あそこか」
二人もその塔のことはよく知っていた。
「どうする！？と言っても行くに決まってるか」
滝が言いかけながら口の端だけで苦笑した。
「ああ、当然だ」
「奴等がそこにいるのならな」
二人は答えた。その表情には強い決意があった。
「じゃあ行って来い。そして奴等を再び地獄へ落とすんだ」
「容赦はするなよ。絶対に勝って来い」
「おう、わかった」
「おやっさん、明日の朝にはシャンパンを用意しておいて下さいね」
「おいおい、朝からシャンパンか」
立花は一文字の言葉に思わず笑ってしまった。
「いいぞ、それでも何ならスコッチも用意しておくか」
「おやっさん、それはウイスキーですよ」
滝が突っ込みを入れる。
「それ位わかっとるわ。わしはウイスキーつったらそれしか知らないんだからな」
「ははは」
三人はその言葉に笑った。そして戦いの前の束の間の笑いを楽しんだ。

霧の中の断頭台その十二

その夜本郷と一文字はロンドン塔の前にいた。夜の塔は濃紫の夜の帳の中青白い月夜に照らされ浮かんでいた。まるで魔界に浮かぶ魔王の宮殿のようだ。

二人はその塔の前に並んで立っている。そしてその幻想的でありながら妖気を漂わせる塔を見上げていた。

「ここに来るとはな。ガキの頃はこの塔を見るのが怖くてたまらなかった」

「何故だ!?」

本郷は少し感慨深げに呟いた一文字に対して問うた。

「幽霊が出るからな。この塔はそうした話がやけに多い。殆どシェークスピアの世界だ」

「そうか。そういえばその話は俺も何かの本で読んだことがある」

「そうだろうな。ここは幽霊のメッカだからな」

「そんなに多いのか。

「ああ、怪人よりも多いかもな」

「おい、それは冗談だろう」

「いや、冗談じゃない。だが怪人とは違うことがある」

「それは何だ!?」

「ここの幽霊は人には何もしない。バダンの奴等と違ってな」

ロンドン塔の幽霊は実に多い。だが生きている者には危害を加えないのである。ただ自分の死や無念を伝えるだけなのである。

「だが今ここには幽霊の他にもその怪人共がいる」

「そうだな、そしてゾル大佐と死神博士が」

二人の顔が引き締まった。

「準備はいいな。遂にあの二人との決着だ」

「ああ」

本郷は一文字の言葉に頷いた。

「では行くぞ、本郷」
「おお、一文字」
「よし」
二人は身構えた。そして同時に変身に入った。

ライダァーーーーー
両手で手刀を作り右から左へとゆっくりと旋回させる。そして左斜め上で止めた。
身体が黒いバトルボディに覆われ胸が緑になる。手袋とブーツが銀になっていく。
変身！
右腕を拳にし脇に入れる。そしてそれを手刀にし突き出すと今度は左腕を入れた。その手もやはり拳である。
顔の右半分がライトグリーンの仮面に覆われる。左も。その眼が紅くなった。

変・・・・・・
両手を手刀にし右から左に旋回させる。
身体が黒いバトルボディとなる。そして赤い手袋とブーツが現われた。
・・・・・・身！
両手を拳にし左で止める。左手は直角に上に、右手は肘を直角にし身体と並行させる。
ダークグリーンの仮面が右から、そして左から顔を覆う。やはりその眼が紅くなる。

光が二人を包んだ。そして彼等はライダーに変身した。
「行くぞ」
「おお」
二人は頷き合った。そして塔の中に入って行った。

この塔は実は宝物殿でもある。しかしそれよりもやはりその血塗られた歴史の方が知られている。牢獄や処刑場であっただけではない。王宮としても様々な権謀術数が行なわれていた。そしてその犠牲者や敗者は容赦なく血の中に消えていったのだ。

そうした血の歴史の中をダブルライダーは進む。そこへ戦闘員達が左右から襲い掛かる。

「イィッ」

その手には斧や大鎌がある。まるで死刑執行人のようだ。彼等はそれを手にライダー達に切り掛かる。

「ムッ」

だがライダー達にそうした武器は通用しない。彼等は襲い掛かる戦闘員達を退け中を進む。

石畳の廊下を走る。その前に怪人が姿を現わした。

「ギーーーーローーーーーーッ！」

デストロンの処刑怪人ギロチンサウルスであった。怪人はその右手にある刃を振り回しながらやって来る。

「やはり来たかっ！」

ダブルライダーはすぐに構えをとった。だが後ろからもう一体の怪人が現われた。

「シュルーーーーーッ！」

ネオショッカーの細胞怪人ナメクジンであった。怪人達はダブルライダーを前後から挟み撃ちにしてきた。

「かなりの戦力がいるようだな」

「ああ、どうやら失踪事件はこれで謎が解けたようだな」

ダブルライダーは互いに背中合わせになりながら言った。

「これはブラック将軍の作戦だ。将軍は誘拐した人々の血を使って怪人達を復活させている」

「そう、そしてそれでもって俺達にあたらせている。どうやらここにいる奴等を始末するにはあの将軍を倒さないと駄目なようだな」

「そうだな。だがそれにはやらねばならないことがある」

「ああ、わかっているぜ」
ダブルライダーはそう言うとそれぞれ前後に跳んだ。一号はナメクジンに、二号はギロチンサウルスに向かった。
「シュルシュルシュルッ！」
ナメクジンは右腕から白い溶解液を放って来た。そしてそれでライダーを溶かそうとする。
「クッ！」
ライダーは上に跳んだ。つい先程までいた足下が溶け白い煙を放っている。
ライダーは壁を掴んだ。そしてそこから急降下した。
「グギッ！」
怪人を撃った。怪人は堪えきれずその場に倒れた。
だがそれで終わりではなかった。怪人はまだ諦めず溶解液を放ってきた。
「まだ攻撃できるかっ！」
しかし一号はそれも紙一重でかわした。そして倒れている怪人に近寄りその身体を掴んだ。
「させんっ！」
底へチョップを連続で浴びせる。パンチよりも威力は劣るがその分スピードがあった。
そのスピードで怪人を撃った。軟体であるナメクジンもその衝撃には耐えられなかった。そしてたまらず絶命し爆死した。
隣では二号とギロチンサウルスが死闘を繰り広げていた。怪人は口から炎をはきつつライダーに迫る。
「さあ来いっ！」
だが二号はそれに怯むところはなかった。臆することなく前にダッシュした。
「ギッ！？」
流石にそれにはさしものギロチンサウルスも絶句した。思わずその炎を止めた。

霧の中の断頭台その十三

「やはり止めたかっ！」

何とそれが二号の狙いであった。彼は意表を衝く行動で怪人を動揺させることを狙ったのだ。

そしてそれは的中した。二号は怪人を掴むとまずはその右腕に拳を浴びせた。

「ギっ！」

怪人は思わず叫び声をあげた。何と右腕のギロチンが砕けてしまったのだ。

「これでもう切り札はないぞっ！」

二号はさらに攻撃を続けた。何発か拳を浴びせると怪人を掴んだ。そして石の床に叩き付ける。柔道でいう肩車である。

怪人は動けなかった。そしてそのまま息絶え爆死した。

「行こう」

「おお」

二人は頷くとその場をあとにした。そして今度は牢獄に来た。

やはりここでも怪人達が姿を現わした。ショッカーの毒花怪人ドクダリアンとゴッドの豪腕怪人鉄腕アトラスである。

「ヒィーーーーア、ヒアッ！」

「グオーーーーーーッ！」

怪人達は牢獄の中から襲い掛かって来た。鉄格子を破壊してライダー達に跳び掛かる。

「こんなところにもっ！」

「面白い、牢獄じゃなく地獄に送ってやる！」

ダブルライダーはそれをかわすと反撃に転じた。まずは二号がドクダリアンに向かった。

怪人は鞭を放つ。それは二号の右腕に絡みついた。

「ムムム」

二号はそれを受け呻いた。だが怯んではいなかった。
その鞭を引いた。怪人も反射的に引き返す。こうして力比べがはじまった。
力比べは暫くの間続いた。だが勝負が着いた。
やはり力の二号と言われるだけはあった。二号はその力を最大限に発揮し引くと怪人は体勢を崩した。そして隙を作ってしまった。
「もらった！」
二号はそれを見て一気に突っ込んだ。肩を前面に出し体当たりを仕掛ける。
「ライダァーーーーショルダーーーーチャーーーーーージッ！」
そして怪人にその身体を叩き付けた。ドクダリアンはその衝撃に耐えられず吹き飛び壁に叩き付けられた。
そして倒れた。怪人は起き上がることも出来ず息絶えその場で爆発した。
小さな爆風が巻き起こる。一号はそれを背に受けながら鉄腕アトラスと対峙している。
「グオッ！」
怪人は一声そう叫ぶとその手に持つ巨大な砲丸を放り投げてきた。
「来たな」
ライダーはそれを見て身構えた。そしてその砲丸をまんじりと見た。
それは激しく回転しながらこちらに向かって来る。ライダーはそれから目を離すことがない。
「そこだっ！」
一号はそう叫ぶとその砲丸の一点に拳を入れた。
砲丸は動きを止めた。ライダーの拳がその動きを止めたのだ。
それだけではなかった。ライダーの拳は砲丸のある一点をも撃っていたのだ。
「な・・・・・・」
砲丸にヒビが入っていく。そしてそれは砲丸全体に伝わっていっ

た。
　砲丸が粉々に砕けた。ライダーはその動体視力でもって砲丸の点を見極めていたのだ。
「まだだっ！」
　ライダーは崩れ落ちる砲丸の破片をかいくぐるようにして突進した。そしてそのまま跳んだ。
「トォッ！」
　空中で前転した。そしてそのまま突っ込み蹴りを放つ。
「ライダァーーーーキィーーーーーーック！」
　蹴りが怪人の胸を撃った。それは怪人の厚い胸を撃ち抜きそのまま後ろに吹き飛ばした。
　怪人はほぼ即死であった。そしてそのまま爆死した。
「これでここの怪人は全て倒したな」
　一号は着地してその衝撃を膝で殺しながら言った。
「ああ、どうやらそのようだな」
　二号は爆炎が消え去り辺りに自分達の他に何の気配もないことを確かめながら答えた。
「じゃあ先を行こう。あの二人は必ずこの塔の何処かにいる」
　一号は立ち上がりそう言った。
「ああ、わかった」
　二号は頷いた。そして牢獄を出て先へ進んだ。
　先を進む。途中に落ちて来る天井や戦闘員達があったがダブルライダーはそれ等をものともせず先へ進んだ。
　やがて屋上に出た。そこはあの処刑台が置かれていた場所であった。
　かってアン＝ブーリンはここで死んだ。その他にも多くの者がここで最後を遂げている。
　だが今そこに処刑台はなかった。そのかわりに断頭台が置かれていた。
「どういうことだ！？ここには断頭台なんてない筈だが」

二号がその断頭台に近付きながら呟いた。その時咄嗟に刃が動いた。
「一文字、気をつけろ！」
それを見た一号が咄嗟に言葉をかけた。
「おっとと」
二号はそれに気付き後ろにステップした。刃は空しく空を切った。
「今のはほんの挨拶だ」
そこで何処からか声がした。
「その声はっ！」
ダブルライダーはその声がした方を振り向いた。
「フフフフフフ」
それはゾル大佐であった。彼はゆっくりと二人の前に姿を現わした。
「よくぞここまで来たな、流石と褒めておこう」
「生憎だな、貴様に褒められようが嬉しくとも何ともない」
「そうだ、貴様を倒す為にここへ来たのだからな」
ダブルライダーは彼を指差して言った。
「フッ、相変わらずだな」
大佐は余裕のある態度を崩さない。
「一文字隼人、いや仮面ライダー二号よ」
そして二号に対し言った。
「貴様にはじめて言った言葉を覚えているか」
「はじめて言った言葉！？」
「そうだ、私の名を聞き姿を見た者はどうなるかということはな」
「忘れたな、そんな昔のことは」
二号はそれに対し言った。

霧の中の断頭台その十四

「フッ、そうか。ならばもう一度言おう」
彼はそう言うとゆっくりと言った。
「必ず死ぬ、どうだ思い出したか」
「知らないな」
だが二号はとぼけてみせた。ここで引けをとるわけにはいかなかったからである。
「相変わらずだな。ふてぶてしいものだ」
「だがそうでなくては面白くはない」
ここで別の声がした。
「その声は・・・・・・」
ダブルライダーはその声にも聞き覚えがあった。声の主はゾル大佐の横に姿を現わした。
「よくぞ来た、ダブルライダーよ」
ライダー達の予想は当たっていた。ブラック将軍も姿を現わした。
「ブラック将軍よ」
今度は一号が彼に対し問うた。
「何だ？」
「このロンドンでの失踪事件は貴様の仕業か」
「だとしたらどうする」
それは肯定の言葉であった。
「そしてその誘拐した人々の血で怪人達を復活させていたな。違うか！？」
「その通りだ」
そしてそれを完全に認めた。
「だからこそ我々は今まで多量の怪人を一度の作戦に送り込むことができたのだ。このロンドンにおいては特には」
「クッ・・・・・・」

一号だけではなかった。二号もそれを聞いて歯噛みした。
「何を怒る!?私は以前にもこの作戦を執り行なっている」
将軍はダブルライダーを見下した目で見ながら言った。
「ゲルショッカーにおける最後の作戦でな」
「貴様、では・・・・・・」
そうであった。かってゲルショッカーは日本への攻勢の為ブラック将軍自ら陣頭指揮を執り人の血から怪人達を再生させた。そしてその怪人達を以ってダブルライダーに攻撃を仕掛けたのだ。
その時ブラック将軍は将軍であって将軍ではなかった。別の姿になっていたのだ。
「それは貴様等が最もよくわかっている筈だが」
「そう、そしてこの俺のこともな」
ゾル大佐も言った。そして二人はニヤリ、と笑った。
「偉大なる首領にお仕えする大幹部の正体・・・・・・」
「それが何であるかな」
「面白い」
それを聞いた二号が言った。
「ならばその姿もう一度我等に見せてみろ!また打ち倒してやる」
「そうだ!今度こそ二度と甦れないようにしてやる!」
一号も言った。それが最後の宣戦布告になった。
「言われずともそうしてやる」
「さあ、とくと見るがいい。我等の真の姿をな」
二人はそう言うとゆっくりと身構えた。ゾル大佐は顔の前で鞭を持つ右腕をゆっくりと振った。ブラック将軍は右手に持つサーベルを左斜めから右斜め下に思いきり振った。それと共に二人の姿が変わった。
ゾル大佐の身体が金色に変わる。厚い毛に覆われたその身体は明らかに人のものではなかった。
顔もであった。牙を生やしたそれは狼のものであった。
ブラック将軍の上半身が緑の皮に覆われる。両腕も変化し身体の

あちこちに管が生える。その顔もカメレオンが管を生やした無気味なものであった。

「さあダブルライダーよ行くぞ！」

ゾル大佐の正体である黄金狼男が言った。

「この断頭台の前が貴様等の死に場所だ！」

ブラック将軍の正体ヒルカメレオンが叫んだ。そして二人に襲い掛かる。

「行くぞ一文字！」

「わかった本郷！」

二人も同時に突進をはじめた。そしてここにロンドンでの最後の戦いがはじまった。

「喰らえっ！」

黄金狼男は一号に向けて指からミサイルを放ってきた。だがそれは一号の拳により撃ち砕かれた。

「この程度っ！」

一号はそのまま黄金狼男に向かって行く。そして格闘戦に入った。

ヒルカメレオンは二号に右腕の管から攻撃を放ってきた。

「ムッ！」

二号は斜め前に跳びそれをかわした。そして前転しヒルカメレオンに攻撃を仕掛ける。

「フフフフフ」

だがヒルカメレオンはそれを見ながら不敵に笑った。そして姿を消した。

「ムッ！？」

二号は攻撃を中断した。そして辺りの気配を探る。

「一文字！」

一号が黄金狼男と闘いをしながら言葉をかけた。

「大丈夫だ本郷」

二号は一号に対し言った。

「ヒルカメレオンは俺がやる。御前は黄金狼男を頼む！」

「わかった！」
一号は頷くとそのまま黄金狼男との闘いを続けた。二号はその場に留まり気配を探る。
「必ずこの近くにいる」
そして地面を見る。
空には月がある。その光が影を映し出すのを二号は見ていた。
「ム・・・・・・」
だが影は見えない。土煙一つ立たない。

霧の中の断頭台その十五

「何処にいるのだ」
二号は呟いた。そこに拳が来た。
「ウォッ！」
それは二号の顎を打った。彼の前にヒルカメレオンが姿を現わした。
「フフフ、残念だったな」
「貴様、そうしてここに・・・・・・」
「私の影を探していたのだろう。だが生憎だったな」
ヒルカメレオンは二号を嘲笑うようにして言った。
「私の身体は光をも透き通らせる。だから影も映らないのだ」
「クッ、そうだったのか」
「貴様等がパワーアップされているように私もまた強化されているのだ。それに気付かなかったのが迂闊よ」
「クッ・・・・・・」
ヒルカメレオンはそう言うと再び姿を消した。
「こうして姿の見えぬ敵に怯えるがいい。そして死ぬのだ。フフフフフ」
後方から溶解液が来た。二号はそれをかわすのだけで手一杯であった。
一号もまた苦戦していた。黄金狼男のパワーの前に押されていたのだ。
「どうした、伝説のライダーとはその程度か」
「クッ・・・・・・」
黄金狼男の拳を受け一号は吹き飛ばされた。そして床に叩き付けられる。
「パワーアップしたと聞いたが聞き間違いのようだな。これでは戦闘員の方がまだ歯ごたえがある」

「何というパワーだ・・・・・・」
一号はよろめきながらも立ち上がった。
「俺を侮ってもらっては困るな。この力は我が偉大なる首領より再び授けられたものだ」
「あの首領にか」
「そうだ。その力で貴様を倒してやろう。さあ覚悟を決めるがいい」
「誰がっ！」
一号にも意地があった。体勢を立て直すと黄金狼男に再び向かって行った。
闘いは死闘そのものであった。大幹部達がそのパワーと術でライダー達に攻撃を仕掛ける。だがダブルライダーはそれを歴戦の勘でもってかろうじて凌いでいた。
だが形勢は明らかにライダー達に不利であった。そして大幹部達は攻撃の手を緩めない。
「クッ、このままでは・・・・・・」
ダブルライダーはそれぞれ片膝を着き敵を見た。敵は最早自らの優勢を確かなものにしていた。
「どうした、その程度か！？」
黄金狼男は一号に対して言った。
「何を！」
ライダーは立ち上がった。そして黄金狼男を睨みつけた。
「フフフ、そうでなくては面白くない」
彼は不敵な声でそう言った。
「宿敵仮面ライダー、この手で完膚なきにまで叩き潰さねばな」
「そう、そうでなくては我等のプライドが癒されぬ」
ヒルカメレオンも言った。
「さあ来いライダーよ。そして死ぬがいい」
「我等の手によってな」
ヒルカメレオンはそう言うと再び姿を消した。黄金狼男腕を構えた。

「死ね」
まずは黄金狼男が弾丸を放った。それは一号に一直線に向かって行く。
「来たか」
一号はそれを見て呟いた。
「予想通りだな」
冷静な声だった。だがそれは黄金狼男の耳には入っていなかった。
「そう来れば俺にもやり方がある」
そう言うと脚に力を込めた。
「これでどうだっ！」
そして大きく跳躍した。
「何っ！」
弾丸は今まで一号がいたその場所を通り去った。一号は上に跳んでいた。
黄金狼男は上を見上げた。ライダーはそこにいた。
「これで決まりだ、黄金狼男、いや」
彼は既に身構えていた。
「ゾル大佐！」
そして攻撃態勢に入った。
「ヌウウ、小癪なっ！」
黄金狼男は上に向けて弾丸を放とうとする。だが一号の動きはそれより速かった。
「ライダァーーーーーー・・・・・」
技の名を叫びながら空中で回転する。
「月面キィーーーーーーーーック！」
そして蹴りを放った。一号の得意技ライダーキックのパワーアップの一つである。
それが黄金狼男の胸を直撃した。彼はダメージに耐え切れずその場に倒れた。
二号はヒルカメレオンの気配を探っていた。だが掴むことはでき

ずただその攻撃をかわすだけであった。
「フフフフ」
月夜にヒルカメレオンの声だけが響く。二号はその中にいた。
「どこにいるというのだ」
姿は見えない。影すらない。
「しかしここにいるのは間違いない」
そして辺りを見回した。
だが気配も何処にも感じない。攻撃だけがこちらに加えられてくる。
「待てよ」
二号はここで気付いた。
「目や他の器官に頼るからよくないんだ。ここは他のものを使おう」
彼はそう言うとその場で止まった。
「ムッ!?」
それを見たヒルカメレオンは思わず声を出した。
「何をするつもりかは知らんが」
彼は一度姿を現わして二号に対して言った。

霧の中の断頭台その十六

「私に小細工は通じぬ。諦めるのだな」
そう言うと姿を消した。
「消えたか」
二号はそれを見ようとしなかった。そして目を閉じ耳からの音を絶った。
「これでいい」
そして辺りに気を張り巡らせた。
それは目には見えない。だが確実に二号を中心に四方八方に伸びていた。
「どこにいるかだ」
二号はその気を探った。そしてその中の一つに当たった。
「そこだっ！」
二号は目を開いた。耳を開けた。そして跳んだ。
「トォッ！」
そして空中で後ろに宙返りする。
「まさかっ！」
ヒルカメレオンは自らの技が見破られたことを悟った。慌てて姿を現わす。
「こうなれば！」
そして攻撃を仕掛ける。空中に溶解液を飛ばす。
だがそれは当たらない。二号の動きはそれよりも速かった。
しかし攻撃を続ける。遂に二号をとらえた。
「無駄だっ！」
彼はそれに対して言った。
「行くぞヒルカメレオン、いやブラック将軍！」
そして技に入った。
「ライダァーーーーーーー・・・・・」

身体に思いきり捻りを加える。そしてそのまま激しく回転する。
「卍キィーーーーーーーーック！」
二号の大技の一つだ。回転により絶大な力を発揮する。
それがヒルカメレオンの胸を直撃した。二号は大きく後ろに跳んだ。
そして着地した。ヒルカメレオンはガクリ、と両膝を着いた。
「やったか」
二号はそれを見て言った。横に一号が来た。
「そっちも終わったか、一文字」
「ああ、何とかな」
二号は盟友に対して答えた。
「ウグッ・・・・・・」
だがヒルカメレオンは立ち上がって来た。黄金狼男もである。
「なっ！」
それを見た二人は再び身構えた。しかし彼等はそれに対して言った。
「安心しろ、最早戦うことはできぬ」
「この勝負、貴様等の勝ちだ」
そしてゾル大佐とブラック将軍の姿に戻っていく。
「見事だダブルライダーよ、作戦を阻止し我等まで倒すとはな」
「まさかまたしても敗れるとはな。しかし見事な攻撃だった」
二人はふらつきながらも言った。
「褒めてやる」
「・・・・・・・・・」
ダブルライダーはそれを聞いても無言であった。何と言っていいかわからなかったのだ。
「フフフ、どうした？我等に勝って嬉しくはないのか」
「そうだ、よくぞこの私を倒した。胸を張るがいい」
「・・・・・・ああ」
ゾル大佐とブラック将軍に言われ二人は応えた。

「だがこれで貴様等はバダンに勝ったわけではない」
ゾル大佐は不敵に笑ってそう言った。
「まだ我等が偉大なる首領がおられる」
ブラック将軍もである。顔には死相が出ていたがその目の光は強かった。
「首領の前に貴様等は血の海に染まるだろう」
「いや、その前に倒れるかも知れぬがな、フフフ」
「何、それはどういうことだ」
「答えろ」
ダブルライダーはブラック将軍の言葉に対し問うた。
「残念だがそれを言う程私はお人好しではない」
「そうだ、だがそれはいずれわかることだ」
「どういうことだ」
今度はゾル大佐に対し問うた。だが大佐も答えなかった。
「それは地獄で知ることになる」
「そう、そしてその時こそ我がバダンの悲願が達成される時、世界征服のな」
「クッ・・・・・」
二人は歯噛みした。だがどうすることもできなかった。
「ではさらばだ、ダブルライダーよ」
「地獄で待っているぞ」
二人はそう言うとゆっくりと前に倒れていった。
「バダンバンザーーーーーーイッ！」
そう叫ぶと爆発して果てた。ショッカー、ゲルショッカーを代表する二人の大幹部がこのロンドンで最後を遂げたのである。
「やはり手強い奴等だったな」
「ああ、あの時よりもさらに手強かった」
ダブルライダーはその二つの爆発を見ながら言った。ロンドンを巡る攻防はこうして幕を降ろした。

「ゾル大佐とブラック将軍が死んだか」
死神博士と地獄大使はスペインにある基地の地下で円卓を囲んでロンドンでの話をしていた。
「うむ。ダブルライダーとの死闘の末にな」
地獄大使は目の前に置かれた紅い葡萄酒を一口飲んでから言った。
「ダブルライダーか。やはりな」
死神博士はそれを聞いて言った。
「あの二人を倒せるのは連中しかおらぬ。他のライダーでは無理だ」
「何故だ？」
地獄大使はその言葉に対し問うた。
「あの二人はただ強いだけではない。そこには熟練の技があった。それを破ることのできる熟練の持ち主はダブルライダーしかおらぬということだ」
「成程な。ではあの二人を倒すことができるのは」
「我等しかおるまい」
「フフフフ」
二人はそこで葡萄酒を飲み干した。
「では存分にやるとしよう。場所はまずこのスペインだな」
「そうだな。それは確実だ」
死神博士はここでグラスに酒を注ぎ込んだ。
「美味いか」
そして地獄大使に対して問うた。
「うむ。スペインの酒か」
「そうだ。よくフランスやドイツのものと比べると下に見る者もいるがそんなに悪くはないだろう」
「そうだな。わしはあまり葡萄酒は飲まんがこれはなかなかいける」
「そうだろう、では飲むがいい」
「すまんな」
地獄大使は死神博士に酒を注いでもらった。
「ダブルライダーもこのスペインに来るだろう。酒の香りと味に惹

かれてな」
「面白い。ではこの酒は二人を呼び寄せる撒き餌ということか」
「違うな。二人が流す酒だ。死ぬ時にな」
「ほう、洒落た表現だな」
「私の故郷であるこのスペインに伝わる言葉だ」
死神博士はそう断ったうえで話をはじめた。

霧の中の断頭台その十七

「紅い葡萄酒は人の血なのだ。騎士はその日残した葡萄酒の分だけ血を流す。だからこの国では騎士は酒を残さない」
「そうなのか」
地獄大使はそれを聞き考える顔をした。
「そうした話はわしの国にはないな。スペインにだけある話か」
「さあな。欧州全体にあるらしいが」
死神博士はそう言うと葡萄酒を飲み干した。
「では今日は楽しもう。あの二人の弔いと。そして」
「ダブルライダーの死を願って」
「うむ」
二人はそう言うと杯を打ち付け合った。そして心ゆくまで酒を楽しんだ。
「かなり飲んだな」
地獄大使は自身の基地に上機嫌で帰って来た。足取りは確かだがその顔は真っ赤であった。
「美味い酒だったな」
彼はあまり酒は強くない。だが嫌いかというとそうではない。酒は大好きである。そして飲むと普段にも増して感情の起伏が激しくなる。だが部下に暴力を振るったりはしない。
「相変わらず酒に溺れているな」
自室に戻った彼に対し誰かが侮蔑の言葉を浴びせかけた。
「何、わしが何時酒に溺れたと・・・・・」
その声の方へ顔を向けた。すると地獄大使はその表情を見る見るうちに変えた。
「貴様か」
「そうだ。少し教えてやりたいことがあってな」
そこには暗闇大使がいた。

「何だ。生憎わしは貴様と話をするつもりは毛頭ない」
「こちらも来たくはない。貴様の顔なぞ見るだけで吐き気をもよおす」
「では何故来たのだ」
「首領からのご指示だ」
「首領から！？」
それを聞いて地獄大使は態度をあらためた。
「一体それはどういう了見でだ」
「聞きたいか」
暗闇大使はそれを落ち着いた様子で見ながら問うた。
「もったいぶるな、早く言え」
「フン、相変わらず気が短いな」
暗闇大使は従兄弟をせせら笑いながら言った。
「言うな、何なら首領から直接お聞きしてもいいのだぞ」
地獄大使は鞭を突きつけながら言った。
「わかった、わかった。まあそう怒るな」
頭に血が昇っている地獄大使に反比例し暗闇大使のそれは至って冷静なままである。静かな口調で話しはじめた。
「では言おう」
彼はそんな従兄弟をあえて挑発するようにゆっくりと口を開いた。
「早く言え」
地獄大使はそんな彼を急かした。
「貴様に新しい任務が下った」
「任務か」
それを聞いた地獄大使の目が光った。
「そうだ。近いうちに新型の兵器が送られてくる」
「それは何だ！？」
「それはわしにもわからん」
暗闇大使は口ではそう言った。だがそれは嘘であった。彼は実はそれが何であるか知っていたのだ。

「それを使って作戦担当地域を破壊せよ、とのことだ」
「核兵器のようなものか」
「さあな。だがそれは今残っている全ての大幹部達に送られるそうだ」
「そこまで計画が進んでいたのか」
「うむ。何時の間にかな」
それの中心となっていたのは他ならぬ彼である。だが彼はそのことは伏せていた。
「我がバダンの計画は新しい段階に入った。最早一刻の猶予もならん」
「それはわかっている」
「大幹部や改造魔人達もその数を大きく減らした」
数多くのバダンの大幹部や改造魔人達の最後は彼等もよく知っていた。
「そして実力者であるゾル大佐とブラック将軍が倒れたのを知り首領は断を下されたのだ」
「それが今回の新兵器か」
「そうだ。わしもこれを日本で使用するつもりだ」
「日本でか。だがあの地のバダンは既に壊滅しているのではないのか」
「再び上陸した。そして今橋頭堡を築いている」
「そうか」
「うむ。そして日本を死の国に変えてやるつもりだ」
暗闇大使は無気味に笑ってそう言った。
「死の国に、か。ではわしも死の国を二つ三つ作ろうか」
「貴様に出来るのか」
「言うな」
地獄大使は従兄弟を睨みつけた。
「貴様ごときに言われる筋合いはないわ」
「どうかな。あの時はわしの力がなくては何も出来なかったではな

いか」
暗闇大使も負けていない。地獄大使を睨みかえし反論した。
「ほう、言ってくれるのう」
地獄大使はその言葉を聞き再び顔を赤くさせた。今度は怒りで、である。
「貴様こそわしの陰に隠れてばかりだったではないか。参謀といっても所詮は日陰者よ」
「日陰者だとっ！」
それを聞いた暗闇大使が激昂した。普段の冷静な様子からは信じられない程激しい口調であった。
「貴様がわしを利用していただけではないかっ！貴様はいつもわしを囮に自分だけ利を得ようとしていたのだ。フランス軍との時もアメリカ軍との時も・・・・・」
「そして人民解放軍との時もだな」
地獄大使は従兄弟が激昂したのが余程嬉しいのだろうか。ニタニタと笑いながらその顔を見ている。
「それは貴様が悪いのだ」
「何っ！」
「利用し、されるのがこの世界だ。何を甘いことを言っておる」
「貴様ァッ！」
暗闇大使は鞭を振るおうとする。だが地獄大使もそれに対して身構えた。
「やるつもりか」
そして不敵に笑った。
「わしは構わんが。だがどちらか死ぬことになるぞ」
「望むところだ。どのみち貴様とはいずれ決着をつけるつもりだからな」
「ほう、面白い。ではここでつけるとするか」
二人は身構えて睨み合った。そして互いの隙を窺う。その時だった。

「待つがよい、二人共」
不意にあの声がした。
「首領！」
二人はその声を聞くと睨み合いをやめた。そして声のした方に身体を向けた。
「御前達は二人共私の大事な腹心だ。互いに争って何になるというのだ」
「これは失礼致しました」
「何とぞご容赦を」
二人はその場に平伏した。

霧の中の断頭台その十八

「わかればよい」
首領はそれを許した。
「さあ立て。話がある」
そして二人を立たせ話をはじめた。
「今回の作戦には我がバダンの浮沈がかかっている」
「ハッ」
二人は立ちながらも頭を垂れてそれを聞いていた。
「それだけに御前達には期待している。何としても作戦を成功させるようにな」
「わかりました」
「そして仮面ライダーだが」
首領はここでライダー達に話を向けた。
「おそらくその作戦を妨害にでるだろう。しかしそれは何としても排除せよ」
「わかりました」
「ライダーの打倒と合わせて作戦を進めるのだ。その為に犠牲がいくらかかろうが構わん」
「はい」
その犠牲にはこの二人も入っている。だが首領はそれは口には出さなかった。
「頼むぞ。ライダーを倒した者には最高幹部の位を与えることを約束しよう」
「ハハァッ！」
首領はそこまで言うとその場から気配を消した。そして何処かへと去って行った。
「最高幹部はわしのものだ」
地獄大使は従兄弟に対して言った。

「何を言う、わしに決まっておる」
暗闇大使も負けていない。両者はまた睨み合ったがすぐに視線を元に戻した。
「それはライダー達を先に倒した方のものだな」
「フン」
二人は顔をそむけあうとその場を後にした。地獄大使は自室から別の部屋に移りながらこう呟いた。
「今に見ているがいい。ライダーは貴様ごときには倒せん」
それは負け惜しみではなかった。確信をもって言っていた。
「ライダー達を倒すのはこのわしだ。わし以外に誰がいるというのだ」
そして彼は部屋に入った。
「その時に精々歯噛みするがいい。そしてわしの後塵をきすのだ」
そう言うと中に消えて行った。後には妖気だけが残っていた。
本郷と一文字はロンドン塔を出ていた。そして立花と滝のところにいた。
「そうか、あの二人を倒したか」
立花はそれを聞いて感慨深げに頷いた。
「手強い奴等だがな。よく倒した」
「流石に苦労しましたよ」
一文字はそれに対し微笑んで言った。
「確かに。以前よりずっと強くなってましたね」
「以前よりもか」
滝はそれを聞いて目を光らせた。
「鋼鉄参謀やオオカミ長官もそうだったようだな」
「よく知ってるな、滝」
二人はそれを聞いて思わず言った。
「おいおい、俺だって馬鹿じゃない。それ位は勉強しているぜ」
彼はそれを聞いて苦笑して言った。
「他のライダー達も皆苦労して世界各地のバダンと戦っている。そ

れはよくわかっているつもりだ」
滝自身もバダンと死闘を繰り返している。その為よくわかっていたのだ。
「中国でもそうだった。あのドクロ少佐の強さは以前とはケタ外れだった」
「ドクロ少佐か。あいつも厄介な奴だったな」
立花もドクロ少佐のことはよく知っていた。
「忍術を使うだけじゃないからな。ストロンガーも超電子の力でやっと倒したような奴だ」
「ええ。実際に志郎の奴もかなり苦戦しましたよ。何とか倒すことはできましたが」
「だがその勝利は大きかったな」
本郷はそれを聞いて言った。
「万里の長城が救われたんだからな。多くの命と共に」
一文字が言った。
「ああ。そして御前達の今回の勝利も大きいぞ」
立花と滝は二人に対して言った。
「実力者の二人を倒したんだ。これでバダンの戦力は大きく削がれた筈だ」
「ああ。いよいよバダンを叩き潰せる時が来たんだ。それも御前達のおかげだ」
滝は右腕で拳を作りそれを振りながら言った。
「いや」
だが二人はそれに対して首を横に振った。
「まだそう考えるには早いぜ、滝」
まずは一文字が言った。
「そうだ、奴等のことだ。まだまだ戦力はあるだろう。それに」
「それに・・・・・・！？」
滝は本郷の言葉を聞き思わず尋ねた。
「まだまだ手強い奴は残っている。油断はできない」

「そうか、そうだったな」
滝はそれを聞き表情を引き締めた。
「やはり最後まで油断はできないか」
「ああ。ショッカーやゲルショッカーの時もそうだっただろ。奴等は追い詰められても絶対に諦めない。必ず何かをやってくる連中だ」
「そうだな。ショッカーでは地獄大使が自らを処刑台に送ってまでわし等を罠に陥れた」
立花はパイプをくわえながらその時のことを思い出して言った。
「あの時でもかなり驚いたが」
彼は話を続けた。
「ゲルショッカーの時はもっと凄いことをやってくれたな」
「ええ、ブラック将軍ですね」
「まさか自分を囮にするとは。あれには驚きましたよ」
本郷と一文字はあの時の激戦を思い出していた。あの時は本郷もあわやというところであった。
「ましてや今はそのショッカーやゲルショッカーとは比較にならない程強大なバダンだ。おそらくこれ位じゃへこたれないだろうな」
「また何かやって来ると」
「当然だろうな」
立花は滝の問いに答えた。
「まだ何をしてくるかはわからん」
そう前ふりをしたうえで言う。
「だが確実にやってくる。この世界を崩壊させかねんようなことをな」
「ええ」
本郷と一文字はその言葉に対して頷いた。
「絶対に阻止しなくちゃならん。さもないと世界はあの連中の思うがままにされちまう」
そう言うと二人に顔を向けた。
「本郷、隼人」

「はい」
「はい」
二人は名を呼ばれそれに答えた。
「絶対にそれを防ぐんだ。それが出来るのは御前達ライダーしかいない」
「はい」
二人は強い身振りで頷いた。
「頼むぞ、世界は御前達にかかっている」
「ええ、それは」
「わかっていますよ」
二人は答えた。そこで霧が出て来た。
「霧か」
ロンドンの霧は最早この街の象徴ですらある。
「御前達がこの霧を守ったんだな」
立花は最後にそう言った。そして戦士達は次の戦場に向かうのであった。

霧の中の断頭台　　完

２００４・６・２２

十三人の自分その一

十三人の自分

「フン、随分と数が減ったものだな」
ドクトル＝ゲーはゾル大佐とブラック将軍の死を自身の基地で聞いていた。
「これで残ったのは何人だ。最早数える程しかおらんではないか」
「はい、まことに残念ですが・・・・・・」
報告した戦闘員は無念そうに頭を垂れた。
「私は仮面ラァーーーイダブイスリーを倒せればそれでよいがな。しかし」
彼はここで言葉を一旦区切った。
「戦力の消耗がな。ましてやブラック将軍が死んだとなると大きい」
ブラック将軍は人の血から改造人間を復活させることができた。
バダンの戦力は彼の力によるところも大きかったのである。
「そちらはまだ何とかなるようです。我がバダンの科学陣が総力を挙げて復活させておりますから」
「ならばよいがな。実際に我々の主戦力は怪人なのだしな」
「はい」
「あと新兵器が開発されているそうだな」
「ええ、それで今度の作戦を執り行なえと首領からご指示がありました」
「新兵器か」
ドクトル＝ゲーはそれを聞いて考える顔をした。
「それがどういうものかは知らないが」
彼はそう前置きしたうえで言った。
「存分に使わせてもらいたいな。バダンの為には」
「はい」

戦闘員はその言葉に対し頷いた。
「だがそれだけとは思えぬ」
「といいますと!?」
「うむ。さっきも言ったな。我等の主戦力は改造人間だと」
「はい」
「その改造人間がなくして我等は動かぬ。それを考えるとまた何かしらの改造人間も開発しているのではないか」
「まさか」
「だがな。暗闇大使のあの余裕を見るとそうではないか、とつい勘ぐってしまう」
今のバダンの最高幹部は暗闇大使である。暫定的ではあるが首領が直接任命したものだ。
「その彼が何かしていたらとしたら。これは充分有り得るぞ」
「そうでしょうか。しかしもしそうだとしたら」
「わからん。だが彼も今は直属の部下はいない」
バダンの改造人間達は皆日本各地でのライダー達との戦いで戦死していた。すくなくとも彼はそう聞いている。
「だがそれは新たに造ればいいだけだ」
「それはそうですが」
「その話も聞かないが。これはどういうことだと思う?」
「私に言われましても・・・・・・」
戦闘員の知ることができることなぞほんの僅かである。大幹部が知らないことを知っている筈がなかった。ゲーも話していてそれに気付いた。
「済まん、貴様に尋ねても仕方のないことだった」
「はあ」
「それにしても何か妙な感じがするのだ」
ドクトル＝ゲーにはある疑念があった。
「何かある、暗闇大使は絶対に何かを企んでいる」
彼も伊達にデストロンにおいて大幹部を勤めていたわけではない。

その勘は鋭いものがあった。
「だが暫くは様子見だな」
彼は腕を組んで言った。
「それも近いうちにわかるだろう」
彼には予感があった。
「動くのはそれからでもいい。そしてそれよりも」
ここで彼の目が光った。
「仮面ラァーーーイダブイスリーとの戦いの準備をしておかなくてはな」
彼は仇敵との対決に思いを馳せた。そしてその場から消えた。
ヘビ女との戦いを終えた村雨良はそのまま北上しカナダに入った。
カナダはアメリカの北にある。だがアメリカとは違い何処か影の薄い印象がある。
「そういえばカナダに来たのははじめてだったな」
村雨はトロントに到着してそう呟いた。
カナダはイギリス連邦に属している。その国土は広いが人口は少ない。そしてその国民性も比較的穏やかである。
街並みにもそれはあらわれている。何処か物静かである。そして人々の服もアメリカに比べるとかなり地味である。
「気候も関係あるのかな」
村雨はふとそう思った。カナダは冷帯及び寒帯に属する。北の方は北極圏にある。
北の方では多くの島々がある。だがそこに人は殆どいない。北極圏は人が住むにはあまりに過酷であった。イヌイット達が吹雪の中で暮らしているだけであった。
だがこのトロントはまだ比較的温厚な気候である。人口も比較的多く五〇〇万に達する。そして移民も多い。
移民といえばアメリカであるがこのカナダも移民の国である。中国系等アジア系が多いことでも知られている。街中を見ればそこにはうどん屋等日本料理店の店もある。

「うどんか。そういえば長い間食べていないな」

村雨は腹が空いていることに気付いた。そしてその店に入った。うどんは有り難いことに本格的な和風のうどんであった。よく海外に見られる変に甘かったりダシがコンソメやトリガラのものではなかった。そして麺もしっかりとしていた。

「美味かったな」

食べた村雨の感想は率直であった。彼も祖国の味を忘れたわけではなかった。

腹ごしらえを終えた彼はそのまま街中を歩いた。見ればかなりバラエティに富んだ街である。

中華街があればイタリアンタウンもある。ネイティブ＝カナディアン、すなわちインディアンの街もあった。カナダではインディアン達は主に森林地帯に住んでいたこともありそれ程弾圧はされなかったのである。アメリカのように虐殺などされはしなかったし天然痘菌が着いた毛布を渡されることもなかった。

残念ながらこうしたことは人類の歴史においてはよくあることである。西部劇では白人の騎兵隊やガンマン達が悪辣で野蛮なインディアン達を倒しているその騎兵隊やガンマン達こそ侵略者であった。彼等は次々と西へ、西へと進みインディアン達を殺戮しその土地を奪っていった。丁度中国の歴代王朝が北方の遊牧民族達を野蛮人と罵りながら彼等の土地を開墾し北へ、北へと追いやったように。こういう意味でアメリカと中国はその根は同じであろう。

十三人の自分その二

白人と書いたがここには黒人も入る。彼等は確かに奴隷でありそうした意味で虐げられていただろう。しかし奴隷は当時非常に高価なものであった。むげには扱えなかった。ましてやアンクル＝トムの小屋の様に虐待なぞできるものではなかったのである。確かに奴隷であり人権を無視したものであっても。奴隷制が廃止された後は彼等も企業を持つことができたし様々な文化活動が自由であった。差別はあった、にしろだ。

そして彼等もまたアメリカ人であった。そう、今彼等は自らのことをアフリカ系アメリカ人と言う。その言葉は正しいだろう。彼等はアフリカにルーツを持つアメリカ人なのだから。アメリカにやって来た理由はどうであれ彼等もまた新大陸以外にそのルーツを持つアメリカ人なのだ。

これは複雑な意味を持つ。彼等もまたインディアン達から見れば余所者であり侵略者であったのだ。

実際にアフリカ系で構成された騎兵隊もあった。肌の黒いガンマンも大勢いた。カウボーイの三人に一人は黒人であった。そして彼等はインディアンの土地を侵略し彼等を殺戮しバッファローを撃ち殺していった。これも歴史である。差別されている者が差別をしないという道理はない。被害者が加害者になるケースも多いのだ。

そうしたことをライダー達が知らない筈がない。彼等はそのうえで人間を、そしてこの地球を愛しているのだ。

「確かに人は多くの罪を犯してきた。しかし」

そのインディアン達を救った多くの人達がいた。そしてそうした人達は今も大勢いる。人は決してその中に悪だけを持っているのではない。善も持っている。だからこそ今もこうして世界があるのだ。

それがわからぬライダー達ではない。何故なら彼等こそその善を受けて戦う戦士達なのだから。

村雨は街中を歩き回った。そして夕方になるとホテルへ帰った。そして休息をとった。

村雨がトロントにいるという情報はバダンの上層部にも伝わっていた。

「そうか、村雨良はトロントにいるか」

地下の全てが暗黒に包まれた部屋である。首領はそこで暗闇大使を前に話していた。

見れば暗黒の中にバダンのエムブレムだけが浮かんでいる。声はそこから発せられている。

「はい、どうやらまた我等のことを探っているようです」

暗闇大使は暗闇の中に立っていた。そして首領の声がするエムブレムを見上げていた。

「ふむ、そうか。あの街には何もないというのにな」

首領は馬鹿にしたような声で言った。

「そういうわけではありません。丁度今五大湖周辺で作戦行動の準備をしている者がおります」

「ほほう、誰だ!?」

首領はそれを聞いて意外そうに尋ねた。

「マシーン大元帥です」

暗闇大使は答えた。

「そうか、マシーン大元帥がか」

首領はそれを聞くと楽しそうに笑った。

「暫く見ないと思ったがそのようなところにいたのか」

「はい、五大湖工業地帯を狙っていたと思われます」

「あの男らしいな。あそこを狙うとは」

五大湖工業地帯は北米で最大の工業地帯である。ドイツのルール工業地帯をも凌駕する世界最大の工業地帯の一つである。

「だがその作戦を一旦中止せよ、と伝えよ」

「ゼクロスに向かわせるのですね」

暗闇大使は問うた。

「そうだ、あの男ならゼクロスとも互角に渡り合えるからな」
「ですが今の彼は」
暗闇大使はここで口篭もった。
「どうした!?何かあるのか!?」
首領はそれに対して問うた。
「はい。今の彼はヨロイ騎士と磁石団長を失っております。万全の力は出せない怖れがあります」
「それなら心配はない」
首領は大使の危惧を一笑に付した。
「奴の力はデルザー随一だ。あの二人がいなくとも問題はない」
「そうでしょうか」
「フフフ、心配症だな、暗闇大使は」
首領はそうした暗闇大使の様子を見て笑った。
「いや、慎重と言った方がよいか。確かにそれが貴様のよいところだ」
「お褒めに預かり光栄です」
暗闇大使はその言葉に頭を垂れた。
「だがな、時として大胆にやるのも悪くはない。そう、貴様の従兄弟のようにな」
「・・・・・わかりました」
地獄大使のことを出せば彼は怒る、それを見越した上での言葉だった。
「フフフフフ」
そして首領は含み笑いを出した。
「貴様にはこれから思う存分暴れてもらう。そしてこの世界をバダンのものとするのだ」
「ハッ」
暗闇大使は頭を垂れた。
「その為には多くのものを学べ。そしてそれを己が力にするのだ」
首領はそう言うと気配を消した。あとには暗闇大使だけが闇の中

に残った。
「偉大なる首領に栄光あれ」
彼もそう言うとその場をあとにした。そして消えていった。
村雨はトロントの競馬場の中にいた。彼はギャンブルはしないがこうしたレースを見ることは好きだ。
「いい馬が揃ってるな」
彼は馬達を見て思わず呟いた。
「俺もああした馬に乗りたいもんだ」
そう話しているうちに馬達がスタートした。レースがはじまったのだ。
まずは一頭出て来た。だがすぐに別の馬が出て来る。
「ん!?面白くなってきそうだな」
レースは白熱していた。騎手達は身を屈め馬を走らせる。
コーナーを曲がった。レースはより一層白熱していく。
「どれが勝つ!?これは見ごたえがあるぞ」
一周目を終えた。そしてまた村雨の前に来た。
「あの黒い馬が特にいいな」
彼は先頭を走る黒い馬を見て言った。その時だった。
不意にその黒い馬に乗る騎手が立ち上がった。そして鞍から何かを取り出した。

十三人の自分その三

「ムッ！？」
それは小型のグレネードランチャーであった。それで村雨のいる席の方に攻撃を仕掛けて来たのだ。
「何ッ！？」
村雨は咄嗟に腕から手裏剣を出した。そしてその手裏剣を投げ付けグレネードを空中で爆発させた。
「何だ、何が起こった！？」
観客達は一斉に騒ぎ出す。そこへ無気味な叫び声を聞こえて来た。
「イィーーーーーーッ！」
バダンの戦闘員達が観客席から次々に姿を現わす。そして村雨がいた場所に殺到する。
「探せ、あの程度で死ぬような奴じゃない！」
それを指揮する怪人が叫んだ。ゲルショッカーの切断怪人ワシカマギリである。
「しかし何処にも見当たりませんっ！」
「よく探せっ！」
怪人の叱咤が飛ぶ。
「残念だったな」
ここで村雨の声がした。
「そこかっ！」
怪人と戦闘員達は声がした方へ顔を向けた。
彼は観客席の最上段にいた。そして怪人達を見下ろしていた。
「仮面ライダーゼクロス・・・・・・」
「そうだ、貴様等の探していたのは俺だな」
ゼクロスは怪人に対して答えた。
「フン、その通りだ」
ワシガマギリは言った。

「貴様のその首、貰い受けに来た！」
怪人はそう叫ぶと左手の鎌を放り投げて来た。
「ムッ！」
ゼクロスはそれをかわした。そして右腕にナイフを持った。
そしてそれで鎌を弾き返した。怪人は横に動き鎌をとった。
「電磁ナイフか。面白いものを持っている」
そう言うと再び身構えた。
「ではこれはどうだ」
そして今度は羽根を飛ばしてきた。
「ギィーーーーラァーーーーー」
それは羽根の形をした爆弾であった。ゼクロスはそれを見て身構えた。
ゼクロスは両肩から煙幕を出した。そしてその中に消えた。爆弾は全てかわされてしまった。
「今度は煙幕かっ！」
すでに観客は皆逃げている。その戦闘員と怪人しかいない客席を煙が覆っていく。
「散るな、一箇所に集まれ！」
それを見たワシカマギリは戦闘員達に指示を下した。そして戦闘員達が彼の周りに集まる。
だがそこにゼクロスの攻撃がきた。衝撃集中爆弾である。
「しまった！」
これにより戦闘員達は吹き飛んだ。そして煙幕が晴れた。
「我々が一箇所に集まることを狙っていたか」
ワシカマギリは何とか立っていた。だが既に致命傷を受けていた。
「怖ろしい奴だ、そこまで考えていたとはな」
そう言うと前に倒れた。そして爆死した。
「他にもいるな」
ゼクロスは周りを探った。見れば下ではまだ馬達が走り回っている。

その馬上には先程とは別の戦闘員達がいた。そしてボウガンから矢を放って来る。

「ムッ」

ゼクロスは跳躍でそれをかわした。見れば怪人もいる。

「ギギーーーーーーッ！」

ネオショッカーの拳法怪人ドラゴンキングであった。怪人は奇声を発しながらゼクロスに顔を向けた。

「来い、仮面ライダーゼクロス！」

そこへ一頭の馬が前に出て来た。鞍には誰も乗っていない。

「来いということか」

ゼクロスはその馬を見て言った。

「ならば行ってやる、行くぞバダンの改造人間！」

そして跳躍した。馬に飛び乗った。

「来たかっ！」

それを見た戦闘員達がボウガンを捨て剣を抜く。そして一斉に切りかかる。

「ムンッ！」

ゼクロスはそれに対しナイフで対抗する。剣の方がリーチがあったがそれを寄せ付けない。見事なナイフ捌きであった。

戦闘員達は逆に次々と倒されていく。ゼクロスは馬を駆りながら周囲に群がる戦闘員達を倒していく。

「やはり戦闘員達では無理か」

それを見たドラゴンキングが言った。

「ならば俺がやろう」

そして馬を飛ばしゼクロスの横に来た。

「死ねぇっ！」

両手に持つサイで攻撃を仕掛ける。ゼクロスはそれをナイフで受けた。

「フフフ、見事だ。俺のサイを受けるとはな」

ドラゴンキングはそれを見てニヤリ、と笑った。

「貴様のサイなぞ」
ゼクロスは冷たい口調で言った。
「どうということはない」
「言ってくれるな」
ドラゴンキングは内心憤ったがそれで我を忘れることはなかった。
再び攻撃に移る。両手でサイを繰り出し続ける。
「フン」
ゼクロスは一本のナイフでそれを受け続ける。そして隙を窺う。
さしものドラゴンキングにも疲れがでてきた。それを見逃すゼクロスではない。
「今だな」
そして攻撃を繰り出した。ナイフをそのまま投げてきたのだ。
「ウワッ！」
それは怪人の喉を貫いた。ドラゴンキングはそれを受けて落馬した。そしてそのまま爆死した。
「やったか」
馬はその間にも駆けている。ゼクロスはそれを見送り呟いた。
「やりおるな。瞬く間に二体の怪人を倒すとは」
そこで男の声がした。
「貴様か」
ゼクロスはその声がした方を振り向いた。
見ればそこには赤い馬に跨る男がいた。それはマシーン大元帥であった。
「マシーン大元帥、カナダには貴様がいたのか」
「そうだ。別の作戦でここに来ていたのだがな」
マシーン大元帥はこちらに馬を進めながら言った。
「だが予定が変わった」
「何故だ！？」
「仮面ライダーゼクロス、貴様を倒す為だ」
彼は低い声でそう言った。

十三人の自分その四

「俺をか」
ゼクロスはそれに対して言った。
「そうだ。貴様がいては作戦を実行出来ぬからな」
「それは有り難いな」
ゼクロスはそれを聞いて言った。
「俺の任務は貴様等の野望を阻止すること、まさかここにいるだけでそれが出来るとはな」
「だがそれもここまでだ」
マシーン大元帥は彼に対して言った。
「貴様はこの私が倒す」
「出来るかな、貴様に」
「私を侮らんことだ」
彼はそう言うと額からビームを放って来た。
「ムッ」
だがゼクロスはそれを身体を捻ってかわした。
「あれをかわしたか」
大元帥はそれを見て言った。
「だがこれはどうだ!?」
そして今度は鞍からマシンガンを出して来た。
「喰らえ」
マシンガンを放つ。だがその時には既にゼクロスはそこにはいなかった。
「何処だ!?」
「ここだ」
彼は上にいた。そしてそこから攻撃を仕掛けるべく急降下をかけて来た。
「ムムム」

見ればゼクロスは五人いる。分身を使っているようだ。
「これが貴様によけられるか」
五人のゼクロスはそれぞれ攻撃を繰り出して来た。しかしマシーン大元帥はそれを全てかわした。
「何ッ！？」
何と彼はミイラの棺に全身を覆ってそれを防いだのだ。
「生憎だったな。私にはこういった楯もある」
「クッ・・・・・・」
ゼクロスは着地して歯噛みした。五人の彼は一人に戻っていた。
「どうやら貴様は倒しがいのある男のようだ」
彼は棺の中から言った。
「仮面ライダーストロンガーと同じくな。ならば私も全力で相手をしてやろう」
「言うな、この魔人がっ！」
ゼクロスは珍しく感情を露わにして叫んだ。
「貴様のせいで姉さんは死んだ。それを忘れたか！」
「姉！？フフフ、村雨しずかのことか」
彼はそれを聞くと笑って言った。
「それがどうしたというのだ。我がバダンが人間のことなどに意を払うと思っているのか」
「何ッ！」
彼はさらに激昂した。そして棺に手裏剣を投げ付けた。
「無駄だ」
だがマシーン大元帥にそれは全く効きめがなかった。
「また会おう、ゼクロスよ」
彼はそう言うと棺ごと姿を消した。
「待てっ！」
ゼクロスはさらに攻撃を続けようとする。だが棺はその前に消えていった。
「心配するな。貴様はもうすぐ倒れることになる。このオタワでな」

彼の声だけが競馬場に響く。
「その時まで名残を惜しんでおけ。もうすぐだからな」
「言うな、それは貴様のことだっ！」
ゼクロスは叫んだ。だがその声はマシーン大元帥には届かなかった。彼はその前に姿を消してしまっていた。
あとには誰もいなかった。馬達とゼクロスだけがいた。
「マシーン大元帥、いやバダン」
彼はマシーン大元帥が消えた方を怒りに震えながら見ていた。
「姉さんの仇・・・・・。必ず忘れない」
そして言った。
「貴様等だけは必ず倒す、そして姉さんの仇をとる、そして世界に平和を取り戻してやる！」
彼の声が競馬場に響いた。それは雷神の怒りを呼びその場に雨をもたらした。そしてゼクロスは雷が降り注ぐ中その場を去って行った。
「どうやらゼクロスが勝ったようだな」
暗闇大使は競馬場での戦いの報告を聞いて頷いた。
「はい。マシーン大元帥とも一戦あったようです」
報告をした戦闘員が答えた。
「ふむ。マシーン大元帥自ら前哨戦に出て来るとはな」
「それだけあの男を警戒しているということでしょうか」
「おそらくな。口ではどう言ってもやはり油断のならない相手だからな、ゼクロスは」
「はい。我がバダンの総力を挙げて作り上げただけはあります。惜しむらくはそれが今敵に回っているということです」
「うむ。だがその技術をコピーしておいて正解だったな」
暗闇大使はそれを聞いて言った。
「おかげで新たな戦士達が甦った」
そう言うと右に顔を向けた。そこは改造室であった。
そこで何人かの改造人間が横たえられている。そのシルエットは

何かに酷似していた。
「遂にこの者達が姿を現わす時が来たな」
「はい、ここまでやるのには骨が折れました」
その戦闘員は苦労を思い出すようにして言った。
「フフフ、だがその介があったというものだ」
暗闇大使はそれに対してねぎらいをかけるようにして言った。
「この者達がバダンの第二の切り札となるのだからな」
「はい、あの兵器と並ぶ我等の切り札ですな」
「そうだ、今までの作戦はほんの序章に過ぎん」
暗闇大使はその改造人間達を目を細めて見ながら言った。

十三人の自分その五

「これから起こることに比べればな」
「はい。これで世界は我がバダンのものとなりましょう」
「そうだ、この世界が偉大なる我が首領のものとなるのだ」
「そして全てが闇に覆われる」
「恐怖と絶望が支配する世界が訪れる」
「フフフ・・・・・・」
「ハハハハハハハ・・・・・・」
彼等は暗黒に包まれた。そしてその中で無気味な笑いが何時までも響いていた。
競馬場での戦いを終えたゼクロスは村雨に戻った。そしてオンタリオ湖を眺めていた。
「綺麗な湖だな」
彼はそれを見て感慨に耽っていた。
「戦いが終わればこうした場所に住みたい」
そしてそう呟いた。
「何時になるかはわからないがな」
そうであった。彼等の戦いは何時終わるかわからない。それは彼等自身が最もよくわかっていた。
「しかし何時かは終わりますよ」
そこで誰かの声がした。
「そうだといいのですが」
村雨は振り返らずその声に対し答えた。
「役さんはどうお考えですか」
そして横にやって来た役に尋ねた。
「そうですね」
どうやら彼は村雨がこのカナダに来ることを前から知っていたようである。

「あのショッカーのことをご存知ですか」
「はい」
村雨は答えた。
「本郷さんと一文字さんが戦った組織ですね。あの首領がはじめて作った組織らしいですが」
「はい。その戦力は強大でした。そしてこちらは最初は本郷さん一人でした」
本郷は一人であった。そして最初は孤独な戦いを強いられていたのだ。
「ですが次第に仲間が増え一文字さんも加わりました。そしてショッカーも倒れたのです」
「しかしすぐにゲルショッカーができた」
「はい」
役は頷いた。
「ゲルショッカーの改造人間達はショッカーのそれよりも強力でした」
彼等は二種類の動物を使って改造人間を作り上げた。その戦闘能力はショッカーの改造人間達を遥かに凌駕していたのである。
「しかし彼等もダブルライダーの前に倒れました。悪の組織はそれからも次々に姿を現わしました。しかし」
役はここで言葉を切った。
「彼等はことごとく崩壊しています」
「ですね。悪の組織は最後は必ず崩壊しています」
「バダンもそれは同じ」
役はここでこう言った。
「村雨さん、バダンといえど無敵ではありません」
彼は村雨を諭すように、励ますようにして言った。
「必ず戦力には限りがありそして弱点も必ずあるのです」
「弱点・・・・・・」

村雨はそれを聞いて考える目をした。
「弱点と言いましょうか」
彼はここでまた考える顔をした。
「天敵です」
「天敵、ですか」
益々話が読めなくなった。彼は少し困ったような顔をした。
「わかりやすく言いましょうか」
役はここで微笑んでみせた。
「お願いします」
村雨は苦笑してそれを望んだ。
「はい、全ての悪の組織はライダー達によって滅ぼされています」
「ライダー達によって」
「そうです、ライダー達はどれ程強大な組織が相手でも勝利を収めてきました。そして世界を守ってきたのです」
役は話を続けた。
「あの首領の野望はライダー達によって全て阻止されてきました」
「どれだけ悪知恵を働かせても」
「そうです。それこそライダー達が彼等にとって最大の脅威である証なのです」
役の声はこれまでとは少し違い力が入っていた。
「そして村雨さん」
彼はここで村雨に強い視線を浴びせた。
「貴方もまたそのライダーの一人なのです」
「俺も・・・・・」
そう言われた彼の顔が引き締まった。
「はい、貴方はそのことをよく知って下さい」
彼の声は強いままであった。
「貴方はバダンを滅ぼし、世界を救うことのできる男なのです」
「俺が、ですか」
彼はここで少し自嘲気味の声を出した。

「姉さん一人救えなかった男が」
「はい」
話を聞いているのか、いないのか役は彼に対して言った。
「貴方の力が今必要なのですよ」
「役さん・・・・・・」
彼は意外に思った。今まで役はクールで感情を表に出さない男であった。だが今はどうだ。
こうして強い声で自分に語りかけてくる。そしてその声は村雨の心を激しく打ってくる。
「皆そうでした」
役は言った。
「どのライダー達も。皆大切なものを彼等に奪われています」
「・・・・・・・・・」
それは知っているつもりであった。彼等の多くは恩師や親友、家族を悪の組織により殺されている。そしてその憎しみの為に立ち上がったのだ。

十三人の自分その六

風見志郎も神敬介も肉親を殺されている。結城丈二は右腕と自分を慕う部下達をヨロイ元帥の追手により殺された。あの城茂も親友をブラックサタンに殺された。そしてデルザー軍団との死闘でかけがえのないものを失ったという。

「かけがいのないものか・・・・・」

それが何なのか、はたまた誰なのか、彼も他のライダー達も知らない。知っているのは城と立花だけである。だが彼等はそのことになると決して口を開こうとはしない。

アマゾンも筑波洋も沖一也もだ。彼等も恩師や友人を殺されている。その憎しみ、哀しみが彼等を戦いに駆り立てたのだ。

「しかしそれだけではありませんでした」

役は言った。

「それだけで悪と戦えるものではありません。憎しみからは何も生まれません」

「はい」

それは村雨にもようやくわかってきた。ライダー達を見ているうちに。

「人としての心、愛を知ってこそ世界を救えるのです。そう、貴方が今知ろうとしているものです」

「そうでしょうか」

そう言われても実感がない。

「はい、貴方は今その心もライダーになろうとしています」

「心も、ですか」

「おそらくこのカナダでそれを掴むことになるでしょう。そしてその時こそ」

彼はここでまた村雨に強く熱い視線を浴びせた。

「貴方が世界を救える人になる時です」

彼はそこまで言うとその場をあとにした。
「世界を、か」
村雨はその言葉を口の中で繰り返した。
「俺にできるのだろうか」
だがやらなければならない、ということはわかっていた。彼は戦えるのだ。ならば悩む前にやらなければならないことがある。そう、バダンと戦うことだ。
「行くか」
彼は立った。そして戦場に向かう決意を固めた。
それから数日経った。バダンはその間姿を見せなかった。
「だからといって油断はできませんね」
二人はイタリアン＝レストランでスパゲティを食べながら打ち合わせをしていた。
「はい、おそらく今頃は隙を窺っているのでしょう」
村雨はパスタを口に入れて言った。
「こうしている間にも」
「そうでしょうね」
役がそれに相槌を打った。
「それにしても」
彼はここで微笑んだ。
「どうしました?」
村雨は突如として表情を変えた彼を見てキョトンとした。
「ここのスパゲティは美味しいですね」
「そんなことですか」
それを聞いた村雨は苦笑した。
「いえ、笑い事ではないのです、これが」
役は左手で彼を制しながら言った。
「何故ならカナダのスパゲティ程まずいものはそうそうありませんから」
「そうなのですか?」

それは少し信じられなかった。
「今食べているこれは美味しいですよ」
ごくありふれたミートソースである。イタリア人がシェフをしているだけあって程よい湯で加減だ。
「それが珍しいのです」
役はあくまでそう言った。
「いえ、カナダに最初来た時まずレストランでスパゲティを食べたのですけれどね」
「どんなものだったのですか？」
「もう食べられたものではありません」
彼は苦い顔をして言った。
「パスタが完全にふやけているんです。もうコシも何もあったものではあるません」
「それはまずそうですね」
「お勧めはしませんよ。けれど土産話にはいいかも知れませんね」
「いえ、遠慮します」
村雨は苦笑して答えた。
二人は食事を終えると再びトロントの街を歩き回った。そしてロイヤル＝オンタリオ美術館に入った。
ここはカナダ最大の美術館である。一九一四年に建てられた美術館でありその規模大きい。
「そういえばこの国はイギリス連邦の一員でしたね」
「ええ」
役は答えた。カナダの国家元首はイギリス国王となっている。だが行政は首相が執り行なっている。こうしたイギリス連邦に属する国として他にオーストラリアやニュージーランドがある。
「だから博物館や美術館に凝るんですね」
「そういえばそうですね」
役はそれを聞いて笑って答えた。
「それには気付きませんでした」

「俺も今ふと思ったことですけれどね」
村雨は答えた。
ここには色々な展示物がある。本物と見まごうばかりの蝙蝠の洞窟にエジプトのミイラ、恐竜のギャラリー等がある。その他には中国の仏教絵画や仏像等もある。
「わりかしバラエティに富んでいますね」
「そうですね。カナダというとネイティブのものばかりかな、と思ったのですが」
二人は展示物を眺めながら中を歩いていた。そして恐竜のギャラリーに入った。
そこは恐竜の骨格標本や化石等が置かれていた。どれもかなり巨大である。
「大昔はこんなのが地上を歩き回っていたんですよね」
村雨はティラノザウルスの骨格を見上げて言った。
「ええ。今思うと信じられない話ですね」
役がそれに対し相槌をうった。見れば他にエラスモサウルスやトリケラトプスの骨格もある。
「こうした恐竜達が今生きていたらどうなっていたでしょうね」
「そうですね」
役はそれを聞いてふと考えた。
「我々人類が恐竜と共存していたら、ですね」
「ええ」
「そうですね」
役はそれを聞いて考え込んだ。

十三人の自分その七

「それはそれで面白い世界になっていたでしょうね。トリケラトプスの背中に乗ったりして」
「面白そうですね」
「海に行けばイクチオサウルスがいて。いや、そうした世界もなかなかいいかも」
「ティラノサウルスやエラスモサウルスがいますけれどね」
「まあライオンや虎もいますから、現実に」
「ははは、確かに」
かっては虎やライオンは今とは比較にならない程怖れられていた。銃が人々を守るようになるまでは彼等もまた人間にとって脅威であったのだ。
「それにしても本当に大きい」
村雨は感嘆を込めてそのティラノサウルスの骨格を見上げた。
「この巨体で世界を支配していたのかもな。暴君竜とはよく言ったものだ」
ティラノサウルスは恐竜達の中でも最も大型で強い力を持っていたと言われている。実際にその骨格を見るとそれも頷ける。
「今この世界にいたらどうなっていたかな。そういうことを考えるのも悪くないな」
村雨はそうやって想像することを楽しんでいた。
「骨格だけでも動いたら面白いんだけれどな」
その時だった。その骨格がピクリ、と動いた。
「ムッ！？」
「何ッ！？」
村雨と役はそれを見て一瞬身構えた。
恐竜の骨格が一斉に動き出した。そしてそれは村雨と役に向かって襲い掛かって来た。

「くっ、まさか本当に動くとは！」
村雨はティラノサウルスの骨の尻尾を上に跳びかわした。そして天井を掴んだ。
空中でゼクロスに変身していた。そしてすぐに急降下する。
「喰らえっ！」
その拳でティラノサウルスの脳天を撃つ。それを受けた暴君の骨は粉々に砕け散った。
「銃は通用しないか」
役はエラスモサウルスの牙をかわしながら言った。
「ここは俺に任せて！」
そこにゼクロスがやって来る。そしてエラスモサウルスを倒した。
だが恐竜達は次々と襲い掛かって来る。ガチガチと骨が鳴る音がする。
ゼクロスはそれを迎え撃とうとする。役は他の客を安全な場所に避難さようとする。
だが一人逃げ遅れていた。小さな黒人の女の子だ。
そこへ恐竜が襲い掛かる。トリケラトプスだ。
「しまった！」
役が向かおうとする。だが他の客達を避難させるのだけで手が一杯だ。彼がいなくてはこの客達が危ない。
「ここは俺がっ！」
そこでゼクロスが跳んだ。彼は恐竜達をその拳で退けるとトリケラトプスと少女の間に跳んだ。
トリケラトプスの角が少女に迫る。だがその前にゼクロスがやって来た。
「させんっ！」
そしてその角を受け止めた。角はゼクロスの腹を貫いた。
「グオッ・・・・・・！」
思わず呻き声が出る。床に血が滴る。
「役さん・・・・・・」

だが彼はそれに怯むことなく役の方を振り向いた。
「は、はい」
そのあまりもの光景に役も絶句していた。だが彼に声をかけられ役も我を取り戻した。
「その娘を早く安全な場所へ」
「わかりました」
他の客はようやく避難していた。役はその少女の元へ素早く駆け寄ると彼女を抱いた。
そしてその少女を安全な場所へ連れて行った。そして彼はゼクロスの元へ戻った。
「大丈夫ですか」
「え、ええ」
既にトリケラトプスは退けていた。だが腹からはまだ血が零れ落ちている。
「その傷で大丈夫もなかろう」
そこで何者かの声がした。
「バダンかっ！」
「いかにも」
そこで何者かの声がした。
「ァアーーーーーーッ」
ショッカーの翼竜怪人プラノドンであった。彼はゼクロスの前に飛んで来た。
「この恐竜は貴様の仕業か」
ゼクロスは怪人を指差して問い詰めた。
「だとしたらどうする？」
怪人は不敵に笑って言った。それは肯定の言葉であった。
「許さん」
ゼクロスは手裏剣を抜いた。そしてそれを投げ付けた。
「フン、無駄なことを」
怪人は口からロケット弾を発射した。そしてそれで手裏剣を撃ち

落とした。
「無駄だと思うか」
後ろから声がした。ゼクロスのその間に怪人の後ろに回っていたのだ。
「なっ！」
怪人は慌てて後ろに攻撃を仕掛けようとする。だが遅かった。
ゼクロスは既にナイフを抜いていた。そしてそれで怪人の首を掻き切った。
「ケアッ！」
怪人は首から鮮血をほとばしらせながら床に倒れた。そしてそのまま爆死した。
「まだいるなっ！」
ゼクロスはまだ気を緩めてはいなかった。そして後ろを振り向くとそこへ手裏剣を投げた。
「いかにも」
手裏剣は何者かによって叩き落とされてしまった。
「この俺がいることに気付くとはな」
また怪人が姿を現わした。ネオショッカーの採血怪人コウモルジンである。
「キキキキキキキ」
怪人は無気味な声を出しつつ天井に逆さに貼り付いた。
「仮面ライダーゼクロスよ」
怪人はゼクロスを見下ろしながら言った。
「美味そうな血を流しているな」
舌なめずりをしている。まるで御馳走を見た時のように。
「生憎だがな」
ゼクロスはそれに対して言った。
「貴様等にやるものは一切ない。そして俺が求めるのは」
そう言うと同時に跳んだ。
「貴様等の命だけだ」

彼はその首にナイフを突き立てんとした。

十三人の自分その八

「フン」
コウモルジンはそれを何なくかわした。
「プラノドンにやったことが俺にも通用すると思ったか」
そしてその場から飛び去った。
「だがプラノドンの仇はとらせてもらう」
「何を」
怪人は空中戦を挑んできた。ゼクロスは着地して上から来る怪人に対して身構えた。
「来るな」
怪人は空中での旋回を止め来た。ゼクロスはそれに対して煙幕を張った。
「またそれか、だがな」
コウモルジンはニヤリ、と笑った。
「俺には通用せん」
彼は蝙蝠の改造人間である。口から超音波を発して行動する。その為煙幕は通用しないのである。
「それはわかっている」
そこでゼクロスの声がした。
「ではこれはどうだ」
目の前にゼクロスが姿を現わした。
「わざわざ死にに来たかあっ！」
怪人は爪で切り裂かんとした。だがそれは幻影だった。
「しまった！超音波を使えば・・・・・・！」
モウモルジンは悔やんだ。だが後悔先に立たず、である。
すぐにゼクロスが攻撃を仕掛けて来るであろう。怪人は場所を移した。
「おのれ、何処だ」

怪人は超音波を発しゼクロスを探す。だが何処にもいない。
「ムムウ、しかしここにいるのは間違いない」
「その通りだ」
そこで崩れ落ちた恐竜の化石の残骸の中から声がした。
「そこかあっ！」
怪人は口から毒液を発した。それは化石を溶かした。しかしその中にゼクロスはいなかった。
「そこでもないか・・・・・・」
「そうだ、俺はここにいる」
今度は上から声がした。
「今度は上かっ！」
上へ向けて攻撃を仕掛ける。しかしそこに彼はいなかった。
「おのれっ、またしても・・・・・・」
怪人は再び焦りはじめた。それがゼクロスの狙いだろうか、再び声がした。
「残念だったな。折角俺がここにいるのに」
「言うなっ！」
今度は破れかぶれに毒液を飛ばしてきた。だがそのようなものが当たる筈もない。ただ美術館の床や化石を溶かしていくだけであった。
「死ね」
そこで声がした。ゼクロスが真横からマイクロチェーンを放って来たのである。
「ウググ・・・・・」
それは怪人の首を絞めた。ゼクロスはそのまま上に跳んだ。だが怪人もまだ諦めない。その翼で飛翔した。
「そうくるか。ならば」
ゼクロスはそれに電撃を走らせた。それは瞬く間に怪人の全身を襲った。
「キキィーーーーーーッ！」

怪人は断末魔の声をあげた。そして無残に焼け焦げ爆死した。
「これで終わりか」
着地したゼクロスはその爆発を見て呟いた。その時だった。
「・・・・・・くっ」
腹を押さえ方膝を着いた。彼は今になりようやく傷のことを思い出したのだ。
「お見事です、その傷で怪人達をよく倒されました」
そこへ役が出て来た。
「いや、見事も何も」
村雨に戻った彼は苦笑しながらそれに応えた。
「こんな無様な傷を負いましたし」
「いえ、それは無様な傷などではありませんよ」
役は微笑んでそれに対して言った。
「立派な勲章ですよ」
「勲章!?」
村雨はその言葉に思わず顔をあげた。
「はい、少女を守る為におった名誉の負傷です。それを勲章と言わずして何と言いましょう」
「またそんな」
村雨は立ち上がった。だが苦笑はまだ崩していない。
「他のライダー達もそうですよ。皆数々の勲章を背負っています。目に見えない勲章を」
「それがこの傷ですか」
「はい。ライダー達はその恐るべき回復能力で傷跡も消してしまいます。しかし」
彼はここで表情を引き締めた。
「その勲章は残ります。ただ彼等はそれを誇りにしないだけで」
「誇りにしないのですか」
「そうです、彼等にとってそれは当然のことなのですか」
「ライダーとしてですか?」

「いえ」
役はその言葉には首を横に振った。
「人間としてです」
「人間として、ですか」
「はい。人間であるからこそ他の者を助ける、それだけです。それが彼等の行動原理なのです」
「心は人間だから、ですね」
彼は役の言いたいことがわかった。だからこそ役が言う前に言ったのだ。
「そうです。人間だからこそ同じ人間を愛し、慈しむ。それ以外に何の理由があるのでしょう」
「そう言われてみると凄く単純なものなのですね」
「そうですね。しかし正義も悪も本来そうしたものなのです」
「というと!?」
村雨は意外に思った。彼はライダーの行動原理もバダンの野心ももっと複雑なものだと思っていたからだ。
「人を助け、愛することが善、人に危害を及ぼすのが悪ではないでしょうか」
役は言った。
「あくまで私個人の考えですが」
そう断ったうえで。

十三人の自分その九

「けれど案外そうしたものかも知れませんよ。ライダーによってはそんなに深く考えないで戦っていた人もいるようですから。今はどうかわかりませんが」

アマゾンや城のことを言っているのであろうか。

「難しく考えるとかえって駄目な場合もあります。時にはこうやって簡単に考えるのもいいですよ」

「そうしたものですか」

「ええ。人の歩く道なんて一つではないですし。ライダーもそれぞれの戦い方、考え方があります」

それはよくわかっていた。彼自身も今までそうして独自の戦い方を貫いてきたのだから。

しかし正義とは何か、漠然としかわかってはいなかった。バダンを倒し世界に平和を取り戻すことが正義なのだと思っていたのだ。

「それも正義ですよ」

役はまた言った。

「間違いではありません。正義派一つではありません」

「そうなのですか」

「しかし悪もまた一つではない」

「悪も・・・・・・」

「はい。だからこそ首領の下にこれ程までに闇の者達が集まってくるのです」

「彼等それぞれにもそれぞれの悪があるということですか」

「そうですね。今まで大幹部も改造魔人もそれぞれの戦い方や考え方があったでしょう」

「はい」

二人は美術館を出ていた。歩きながら話をしていたのだ。

「それはライダーと同じです。ライダーがそれぞれの正義を背負っ

ているように彼等もまたそれぞれの悪を信じているのです」
「それぞれの・・・・・・」
「しかし正義も悪も根は一つです」
役は美術館の出口をくぐったところでこう言った。
「それぞれ一つの大きな幹から枝分かれしているに過ぎないのです」
「そうなのですか」
「はい。ですから信じるものは同じです」
「戦う目的も同じ」
「そういうことです。そして貴方も今それをご自身の心の内に留められました」
「えっ、まさか・・・・・・」
村雨はそれはお世辞だと思った。だが役はそれに対して言った。
「その傷が何よりの証です」
そう言うとその腹部の傷を指し示した。
「その勲章が」
「勲章ですか」
「はい、それこそが貴方が正義の為に戦う戦士である証です。それは忘れないで下さい」
「わかりました」
村雨は笑顔で頷いた。そして二人はその場をあとにした。
マシーン大元帥は美術館での戦いの報告を自身の基地の指令室で聞いていた。
「そうか、やはりそう簡単にはいかぬか」
彼は戦いの結果をある程度予想していたようである。まるで最初からわかっていたように頷いた。
「やはり私が出向かねばならないようだな、直々に」
「しかしそれは・・・・・・」
マシーン大元帥自身を危険にさらすことになる、配下の戦闘員達はそれを制止しようとした。だが大元帥はかえって彼等を手で制した。

「心配無用だ。私の力は知っていよう」
「しかし・・・・・・」
「わかったな」
「・・・・・・はい」
その言葉には有無を言わせぬ重みがあった。彼等はそれに従った。
「ところで美術館の戦いだが」
彼はその戦闘員達に対して尋ねた。
「どうやら役清明が来ているようだな」
「はい、ゼクロスの後方支援を務めていたようです」
戦闘員の一人が言った。
「そうか。一条ルミはいないのだな」
「どうもシアトルでの戦いの後日本に先に帰らせたようです。おそらく巻き添えになるのを心配したのでしょう」
「そうか。村雨という男頭も回るようだな」
「そのようですね。それは奴の戦い方を見てもわかります」
「うむ。どうやら相当手強い男のようだな。まあ当然か。最高の人材に最高の改造手術を施したのだからな」
彼はそう言ってニヤリと笑った。ゼクロス開発の責任者であっただけにそれはよくわかっていた。
「思えばこうなる運命だったか」
彼は感慨を込めてそう言った。
「奴は私が見出した。そして今こうして対峙するようになるとはな」
来るべき戦いに胸を躍らせているようであった。
「面白い。それではとっておきの場所に奴を案内してやろう」
「それは何処ですか？」
「フフフフ」
彼は戦闘員の問いかけに対し不敵に笑った。
「すぐにわかる。すぐにな」
彼はそう言うと指令室を出た。そして自室に向かった。
「ヨロイ騎士、磁石団長よ」

彼は死んだ同志達の名を呟いた。
「貴様等の仇をとる前に弔いの生け贄を捧げてやるぞ」
そう言うと自室に入った。そしてその扉が硬く閉じられた。
「ふむ、自ら戦いに赴くつもりか」
ゼネラルシャドウは赤い円卓の上でトランプ占いに興じていた。
そして占いの結果を見てそう呟いた。
「フン、また占いをしているのか」
そこに百目タイタンが姿を現わした。
「無駄なことを。占いで何がわかるというのだ」
「未来がわかる」
シャドウはタイタンに顔を向けて言った。
「未来か。そんなものは奪い取るものだ」
タイタンはそれに対して反論した。
「この力でな」
そして掌に火の玉を浮き上がらせた。
「それもいいだろう」
シャドウはそれに対して落ち着き払った態度で返した。
「だがあらかじめ知っていれば何かと対策を講じられる」
「そんなものか。俺は常に幾通りも事前に用意しておきがな」
「その為に死神博士に協力を要請したのだな」
「そうだ。あの男を倒す為にだ」
彼はその無数の目を光らせて言った。
「それは貴様とて同じ考えだろう。あの男も」
「そうだな。ところでその男だが」
ゼネラルシャドウはそこでトランプのカードをタイタンに見せた。
「どうやらこれから戦いに向かうらしい」
「ストロンガーとか!?」
「いや、違う。ゼクロスとだ」
シャドウはタイタンに対して言った。
「フム、そういえばあ奴は今カナダにいたのだったな」

「そうだ、トロントだ」
「トロントか。また洒落た街に」
タイタンはシニカルな声で言った。

十三人の自分その十

「市街で戦うつもりか？いや、あの男は市街戦は好まないか」
タイタンも彼のことはよく知っていた。いずれ決着をつけるつもりだったのだ。
「それはこれからのお楽しみだな」
シャドウは面白そうに言った。
「余裕だな。結果がわかっているのか？」
「いや。そこまでは占っておらん。観戦は結果がわかっていては面白くない」
「そうだな。それは貴様に同意する」
タイタンはそう言って頷いた。
「じっくり見せてもらうか。あの男とゼクロスの戦いを」
そう言うと踵を返した。
「待て。ここでは観ないのか？」
見れば暗闇の上にモニターが浮かんでいた。だがタイタンはそれに対して首を横に振った。
「悪いが俺は一人で酒を飲みながら観るのが好きなのだ。シチリア産のワインでな」
「残念だな。俺もワインを用意していたが」
「貴様の酒は口に合わん。折角だが遠慮する」
「ふむ、ならばいい」
シャドウはそれ以上引き留めなかった。彼としても社交辞令として言っただけであり特に強く言うつもりはなかったのだ。それに彼等は互いを激しく嫌悪していた。
「では俺も一人で観ることにしよう」
そう言うと指を鳴らした。戦闘員が酒と杯を持って来た。その戦闘員はワインのコルクを抜くとそれを杯に注いだ。白ワインであった。

「ご苦労」
シャドウは戦闘員に対し礼を言い彼を下がらせた。そして杯の中の酒を飲んだ。
「さてと」
彼はモニターに顔を向けた。
「見せてもらおうか、マシーン大元帥よ。そして」
彼はここでニヤリと笑った。
「仮面ライダーゼクロスよ」
その笑みにはえも言われぬ凄みがあった。彼は杯を手にしながら戦いを待った。
その頃ゼクロスはトロントのホテルにいた。そして役と二人で話し込んでいた。
「怪人を四体も倒したんだ、マシーン大元帥もそろそろ本気でくるでしょうね」
「そうでしょうね」
役はそれに対して頷いた。
「おそらくそろそろ自らの出撃を考えているでしょうね。彼のの性格からすると」
「自らですか」
「はい。彼は誇り高い性格。敗北は決して許さない男です」
「そうなのですか。かなりの力を持っているとは聞いていますが」
「だからこそです」
役は言った。
「その実力が彼の誇りのもとなのです。おそらく戦い方も正攻法でくるでしょう」
「正攻法ですか」
「はい、マシーン大元帥はデルザーの改造魔人の中でも特に強大な力を誇っております」
「それは知っています。あのゼネラルシャドウすら寄せ付けず百目タイタンも正面から渡り合おうとはしない程の」

ストロンガーを最後まで苦しめた二人の男をも凌駕する程の者である。その強さは推して知るべし、である。
「だからこそ姑息な手段を好みません。ストロンガーやブイスリーとの戦いにおいてもそうでした」
彼は常に正面からライダー達と渡り合った。そして互角、若しくはそれ以上に渡り合ってきたのだ。
「そして演出家でもあります」
「演出家、ですか」
「はい」
役は答えた。
「大幹部や改造魔人は大抵そうですが」
彼等は己の力に絶大な自信がある。だからこそそうしたことを好むのだ。
「自身が戦うのならばそれに見合った場所を選びます」
「そういえばそうですね」
彼もヘビ女と戦った時は後ろに海が見える港であった。無意識にそうした場所を選ぶらしい。
「だとすれば次の戦場も絞れてくる」
「はい」
役は頷いた。
「この辺りですとおそらく」
彼は考える目をした。
「ナイアガラなんかが考えられますね」
「ナイアガラですか」
村雨はそれを聞いて思わず顔を上げた。
ナイアガラ、新婚旅行等で有名な滝である。カナダとアメリカにありその壮大な光景が見る者の心を惹きつけてやまない。
「あの場所ならマシーン大元帥も文句はないでしょう」
「ですね」
村雨は頷いた。

「ですが今は身体を休めるべきです。怪我もしておりますし」
「ええ」
村雨の腹部の傷は癒えてきた。だがまだ完治には程遠い。
「そしてそれから戦えばいいです。万全な状況でないとあの男に勝のは難しい」
マシーン大元帥の実力はよく知られていた。役もそれを警戒しちえたのだ。
「わかりました。それでは」
村雨はゆっくりと立ち上がった。
「暫くはこの傷を回復させることに専念します。その間トロントはお任せします」
「わかりました」
村雨はそう言うとその場を立ち去った。そしてそのまま自らが泊まっているホテルに向かった。
それから数日後村雨の傷がようやく癒えたその時であった。
「村雨さん」
彼の部屋に役がやって来た。
「はい」
村雨は部屋の扉を開け彼を出迎えた。
「これを」
彼は一通の手紙を手に持っていた。それにはあのマークがあった。
「バダン・・・・・・」
「はい」
役は頷いて答えた。
村雨は無言で封を切った。そして手紙を読んだ。そこにはナイアガラにて待つ、と書かれていた。
「ナイアガラか」
村雨はそれを読んで思わず呟いた。
「役さんの予想があたりましたね」
「はい」

村雨は手紙を捨てた。そして言った。

十三人の自分その十一

「すぐに行って来ます」
「私も行きましょう」
「しかし・・・・・・」
相手はあのマシーン大元帥である。勝てるかどうかわからない。
その戦いに彼を連れて行くのは不安があった。
「私でも戦闘員位は相手にできますよ。それにこちらには策があります」
「そうですか」
村雨は役の微笑みを信頼することにした。
「では行きましょう。おそらくここでの最後の戦いになります」
「わかりました」
二人は部屋を出た。そして戦場に向かって行った。
ナイアガラの滝の入口に浮島が置かれていた。そこにバダンの者達がいた。
「準備はいいか」
怪人は二体いた。そのうちの一体が戦闘員の一人に対して問うた。
ガランダーの大顎怪人ハンミョウ獣人である。
「はい」
その戦闘員は答えた。ハンミョウ獣人はそれを聞いて満足そうに頷いた。
「よし、そちらはどうだ」
そしてもう一体の怪人に声をかけた。ドグマの拳法怪人ライギョンである。
「こちらは全て整っている」
ライギョンは答えた。
「あとはあの男が来るだけだ」
「よし」

ハンミョウ獣人はそれを聞いてまた頷いた。
「マシーン大元帥が来られるまでもない。我等だけでゼクロスを倒すぞ」
「うむ」
ライギョンはその牙をガチガチと鳴らして言った。
「久し振りに腕が鳴るわ」
彼はその口を耳まで裂けさせて言った。
「こっちもだ」
ハンミョウ獣人はその目を細めた。
「ライダーを倒せば褒美は思いのままだ」
「そうだな、大幹部になるのは間違いない」
彼等はそう言いながら来るべきライダーとの戦いに備えていた。
やがて上流の方から何かが聞こえてきた。
「ムッ!?」
それはマシンの爆音であった。
「来たかっ!」
怪人と戦闘員達は一斉に身構えた。
彼等の予想は当たった。すぐにバイクにまたがる村雨が川の上を走って来た。
「来たな、村雨良!」
やがてあと少しのところまで来た。村雨は口を閉ざしたまま構えに入った。

変・・・・・
右手を真横にしそこから斜め上四五度に上げる。そして左手はそれと垂直にさせる。
次に左手をそこから正反対の左斜め上に持って行く。右手はそれと一直線に置く。
身体が銀色になっていく。両手呂足が赤くなる。手袋とブーツは銀色だ。

・・・・・身！
左手で拳を作りそれを脇に入れる。右手を斜め上に突き出す。
顔を赤い仮面が覆う。右から、左から。眼が緑色に光った。

そして光が彼とマシンを包んだ。そしてそれが消えた時仮面ライダーゼクロスが姿を現わした。
「行くぞっ！」
ゼクロスはそのまま突っ込んで来た。ハンミョウ獣人がまず攻撃を仕掛ける。
「喰らえっ！」
口からその大顎を飛ばす。それはブーメランの様な動きでゼクロスに襲い掛かる。
「無駄だっ！」
ゼクロスはヘルダイバーの機首の部分でそれを受けた。大顎はそれで弾き返された。
「トォッ！」
そしてそのままダイブする。そしてハンミョウ獣人に突撃する。
「ヘルダイバーーーーアターーーーーーーーック！」
それは怪人を直撃した。口から鮮血がほとばしり出る。
「ルゥリリィーーーーーーーッ！」
ハンミョウ獣人は断末魔の叫び声をあげながら谷底へ落ちていく。
そして後ろから水飛沫が上がった。
「おのれ、よくもっ！」
目の前で仲間を倒されたライギョンが怒りに震えマシンから降り立ったゼクロスに襲い掛かる。
「ムンッ！」
だがゼクロスはそれを受け止めた。巨大な牙を両手で上下から受けている。
「まだだっ！」
そしてその腹を蹴った。怯んだところにまた攻撃を仕掛ける。

「受けろっ！」
それは衝撃集中爆弾であった。口の中に入る。
「ギョギョーーーーーーーーッ！」
そして爆発した。内部を破壊されたライギョンはその場に崩れ落ち爆死した。
「残っているのは戦闘員だけか」
その戦闘員達がゼクロスを取り囲んだ。その時だった。
銃声がした。上からだった。忽ち一人の戦闘員が倒れる。
「来たか」
ゼクロスは上を見上げて言った。そこには一機のヘリが飛んでいた。
「ゼクロス、戦闘員は任せて下さい！」
役がヘリの中から叫ぶ。先程の銃声は彼の手によるものだ。
「お願いします」
ゼクロスは言った。役はそれに従い戦闘員達を上空から次々と倒していく。
戦闘員があらかた倒された時だった。不意に何者かの気配がした。
「仮面ライダーゼクロスよ」
中空から声がした。
「よく私の招待に応じ来てくれた。礼を言うぞ」
見れば棺が中空に浮いている。
「マシーン大元帥か」
彼はその棺を見て言った。
「フフフ、その通り」
「やはり貴様自身が来たか」
「そうだ、貴様を倒す為にな」
棺の中からあの声が聞こえてくる。マシーン大元帥の声だ。
「この私の手にかかって死ぬのだ。光栄に思え」
棺はゆっくりと下に降りて来る。そして島に降り立った。
「戯れ言を」

ゼクロスは言い返した。
「死ぬのは俺ではない。そう、死ぬのは」
そう言いながら棺を指差した。
「貴様だ」
そしてこう言った。
「フン、流石に大した自信だな」
棺がゆっくりと開いた。中から白い煙が出る。

十三人の自分その十二

「もっともそれだけの実力があるからこそ言えるのだが。そうでない奴など倒しても面白くはない」
そしてマシーン大元帥が姿を現わした。
「ライダー」
そこに役が来た。手に銃を持っている。
「役さん、大丈夫です」
だがゼクロスは彼を引き下がらせた。
「俺がやります」
「しかし・・・・・・」
「信じて下さい」
「・・・・・わかりました」
ゼクロスは彼に顔を向けて言った。役はその眼を見て頷いた。
役は下がった。そして戦いを見守ることにした。
「フフフ、それでいい」
マシーン大元帥はそれを見て満足そうに言った。
「ごく普通の人間なぞに興味はない。私はライダーを倒すのが望みだからな」
「俺をか」
「何度も言っているようにな」
マシーン大元帥は構えをとった。
「覚悟はいいな」
「そちらこそな」
これが合図になった。遂にゼクロスとマシーン大元帥の一騎討ちがはじまった。
まずはマシーン大元帥が攻撃を仕掛けてきた。額からビームを発する。
「ムッ！」

ゼクロスは横に跳んだ。そしてそのビームをかわした。
「速いな」
「その程度」
ゼクロスは手裏剣を投げる。だがマシーン大元帥はそれを何なく右手で払った。
「無駄だ、このようなオモチャでは私は倒せん」
「そうか」
ゼクロスは特に驚いたようには見えなかった。すぐに次の攻撃を繰り出した。
「ではこれはどうだ」
そう言うとまた何かを投げた。
「ム」
マシーン大元帥はそれを見た。見れば黒く丸いものである。
爆発した。それは衝撃集中爆弾であった。
「これならどうだ」
ゼクロスはその爆風を見送り言った。やがて爆煙が消えた。
するとそこにはマシーン大元帥が何食わぬ顔で立っていた。何と全くダメージを受けていない。
「面白い余興だ」
彼は余裕に満ちた声でそう言った。
「だがこれでも私は倒せん」
そして背中からマシンガンを出した。
「しかしいいものを見せてくれた。これは返礼だ」
そう言うと斉射した。そしてそれでゼクロスを撃たんとする。
ゼクロスはそれもかわした。横に素早く動く。
銃弾がそれを追う。だが全く当たらない。ゼクロスは横転しつつそれをかわす。
「やるな、そうでなくてはな」
撃ち尽した。マシーン大元帥はそれを見ると銃を捨てた。
「もう小細工はいらん」

「それはこちらの台詞だ」
ゼクロスも体勢を立て直して言った。
「行くぞ」
「来い」
二人はススス、と前に出た。そしてほぼ同時に拳を出した。激しい衝撃がその場を覆った。
二人は格闘戦をはじめた。ゼクロスはスピードで、マシーン大元帥はパワーでそれぞれ相手を倒そうとする。
だが双方の実力は拮抗していた。両者は互いに一歩も引かず戦いを続ける。
「ムンッ」
マシーン大元帥の渾身の一撃が襲う。ゼクロスはそれを見事な身のこなしでかわす。
「今度はこちらの番だ」
そして反撃に手刀を繰り出す。しかしそれはマシーン大元帥に防がれる。
両者の攻防は続いた。疲れは見られず互いに相手に攻撃を仕掛け続けた。
マシーン大元帥が蹴りを放った。それは回し蹴りだった。
「遅い」
ゼクロスはそれを屈んでかわした。そしてそれと同時に足払いを出した。
「ウオッ」
それを受けバランスを崩したところにゼクロスはさらに攻撃を続ける。まずは彼を掴んだ。
「行くぞ」
そのまま飛んだ。マシーン大元帥を上に掴んで。
「ほう、投げ技か」
彼は掴まれてもまだ余裕の表情であった。
「まさかそれで私を倒すつもりか」

「そうだ」
ゼクロスは答えた。
「無駄だ」
大元帥は言った。
「私の耐久力は知っているだろう」
「確かにな」
わかっているのかいないのか、そういった言葉であった。
「普通に投げたのならばな」
「何！？」
マシーン大元帥はその言葉にはじめて表情を変えた。
「これではどうかな」
ゼクロスはそう言うとマシーン大元帥の身体を頭上で激しく回しはじめた。
「あれは・・・・・・！」
下で戦いを見守る役はその技を見て思わず声をあげた。
「まさかこの技は・・・・・・」
技を受けているマシーン大元帥も表情を強張らせていた。
「そうだ、あの技だ」
ゼクロスはまだマシーン大元帥の身体を回転させている。そして投げる時に言った。
「ダブルライダーの持つ技の一つライダーきりもみシュート、俺のこの技はさしづめゼクロスきりもみシュートか」
マシーン大元帥は激しく回転しながら投げ飛ばされた。上へ飛んでいく。
「まだだ」
ゼクロスはそれを追う様に上に向かっている。そして頂点まできたところで急降下する。
「くらえ・・・・・・」
その真下にはマシーン大元帥がいる。今落ちようとしているところだ。そこに攻撃を加える。

「ゼクロスキィーーーーーック！」
そして蹴りを浴びせた。それはマシーン大元帥の強固な腹を打ち抜いた。
「グフッ・・・・・・」
腹から鮮血がほとばしり出る。口からも吐いた。
そして地に落ちる。激しい衝撃が全身を襲った。
「どうだ、最早立てまい」
着地したゼクロスは身構えながら大元帥を見て言った。
「フン」
マシーン大元帥はその言葉に対し冷笑で返した。
「私を甘く見るな」
何と立ち上がってきたのだ。
「まだ闘えるというのか」
ゼクロスはそれを見て言った。
「安心しろ」
だがマシーン大元帥は言った。
「私はもう闘えるだけの力は持っていない。貴様の勝ちだ」
「そうか」
ゼクロスはそれを聞いて動きを止めた。
「よくぞこの私を倒した。そのことは褒めてやる」
彼は静かに言った。
「だがな」
無論それで言葉は終わらせない。

十三人の自分その十三

「それでバダンを倒せるとは思わないことだ」
彼は傲然と胸を張って言った。
「バダンの力はこんなものではない。貴様はいずれそれを知ることになるだろう」
いささかありきたりな言葉であったが彼が言うと妙な重みがあった。
「それを私は地獄から見ることにしよう。ゼクロスよ」
そして彼に対して言った。
「地獄で待っているぞ。バダンに栄光あれーーーーーーっ！」
それが最期の言葉であった。マシーン大元帥は前に倒れると爆死した。
「終わりましたね」
役はゼクロスの側に歩み寄ってきた。そして彼に声をかけた。
「はい、流石はデルザーでもその力を知られただけはあります」
ゼクロスは爆風を身体に浴びながら言った。
「見事でした。闘いも、その最期も」
素直に敬意を払っていた。敵といえど戦士への敬意を忘れてはいなかった。
「はい、敵とはいえ立派でした」
役も同意した。マシーン大元帥の身体は爆発により欠片すら残ってはいなかった。
「これでカナダでのバダンの勢力は壊滅しましたね」
「ええ、これで終わりです」
役が答えたその時であった。
「確かにマシーン大元帥は死んだ」
二人の後ろから声がした。
「その声はっ！？」

二人は慌てて後ろを振り向いた。同時に身構える。そこに彼がいた。
「フフフフ」
暗闇大使が無気味な笑みを浮かべて立っていた。既に黄金色のバトルボディに全身を包み右手には鞭を持っている。
「ゼクロスよ、久し振りだな」
「会いたくはなかったがな」
ゼクロスは彼を睨んで言った。
「だがここで会ったのが貴様にとって運の尽きだ」
そう言いながら身構えた。
「死ね」
「まあ待て」
だが暗闇大使はそんな彼に対して言った。
「今日は貴様と戦う為に来たのではない」
「どういうことだ!?」
ゼクロスと役はその言葉に一瞬首を傾げた。
「貴様に紹介したい者達がいてな」
「紹介!?」
「また何か企んでいるというのか!?」
役は咄嗟に拳銃を懐から取り出した。
「待てというのだ。貴様等と戦うつもりはないと言っただろう」
「ムウ」
「わしとてバダン最高幹部として誇りがある。言ったことは嘘ではない」
その言葉には偽りは感じられなかった。それを聞いて二人は警戒しながらも武器を収めた。
「それは誰だ」
ゼクロスはあらためて問うた。
「貴様がよく知っている者達だ」
「俺が!?」

「そうだ。来い」
暗闇大使は横に顔を向けた。するとそこに一人の男の影が現われた。
「ム・・・・・・」
ゼクロスはその影を見て声を漏らした。
「やはり生きていたか」
そして言った。影は次第に人になっていく。
「フフフ」
それは三影であった。サングラスに黒い皮のジャケットを身に着けている。
「村雨、いやゼクロス」
彼はサングラスを取り外してゼクロスに対して言った。
「久し振りだな。元気そうで何よりだ」
そしてその機械の左眼で彼を見た。
「俺はようやくこうして出られるようになったばかりだがな」
そう言うと再びサングラスをかけた。
「貴様の一撃は効いたぞ」
「そうか」
ゼクロスは無機質な声で答えた。
「フン、相変わらず感情の乏しい奴だ。しかし」
彼は言葉を続けた。
「それも今のうちだ」
「何!?」
ゼクロスはその言葉に対し身を前に乗り出した。
「待て」
大使は二人の間に立つようにしてそれを静止した。
「三影も挑発はよせ。今は戦わぬ」
「わかりました」
三影は口の端だけで笑って言った。
「言っておくが貴様に会いたいのはこの男だけではない」

「だろうな」
三影が出て来た時点である程度はわかっていた。
「いでよ、我がバダンの戦士達よ」
彼の言葉と共に無数の影が姿を現わした。それは暗闇大使の左右に現われた。
それはあの者達であった。バダンの改造人間となった者達、皆凄みのある笑みを浮かべてゼクロスを見据えていた。
「久し振りですね、ゼクロス」
ヤマアラシロイドもいた。彼もまた不敵な笑みを浮かべている。
「約束通り戻って来ましたよ」
「俺は約束した覚えはないが」
「ふふふ、相変わらず冗談の下手な方だ」
そう言うと目を光らせた。
「私を倒したあれが約束でなくて何だというのか」
「よせ」
暗闇大使はまた止めた。
「折角再会の場所を与えてやったというのに」
「これは失礼しました」
ヤマアラシロイドは恭しく頭を垂れて応えた。
「では私も静かにしておきましょう」
そして暗闇大使の側に控えた。

十三人の自分その十四

「わかればよい」
大使は彼に顔を向けて言った。その口には微笑みがあった。
「さてゼクロスよ」
そしてゼクロスに顔を戻した。
「どうだ、感動の再会だろう」
喜びを噛み締めた様な声でゼクロスに対し言った。
「俺はそうは思わないがな」
ゼクロスはやはり無機質な声で返した。
「まあそう言うな」
大使はそんな彼に言った。
「これから貴様に面白いものを見せるのだからな」
「何！？」
ゼクロスは彼の顔を見た。
「何だそれは」
「見たいようだな」
大使はあえて言葉に余裕を含ませている。
「まあどのみち見せるつもりだったがな」
暗闇大使は言葉を続けた。
「さて」
そして前に出て改造人間達の方へ顔を向けた。
「見せてやれ、貴様等の新しい姿を」
「わかりました」
「はい」
「ああ」
彼等は口々に答えた。そして不敵に笑った。
「ムッ！？」
その瞬間十二の光が彼等を包んだ。

その光は普通の光ではなかった。黒い、暗闇の光であった。
「馬鹿な、こんなものは有り得ない・・・・・・」
役は驚愕の声を出した。
「フフフ、この世の常識ではな」
暗闇大使は黒い光の中言った。
「だが我々はこの世の力だけではないのだ」
彼の声は自信に満ちていた。
「どういうことだ!?」
ゼクロスはそれに対して問うた。
「今教えるつもりはない」
彼は言った。
「今教えても面白くはない。そうだな」
彼はここでニヤリ、と笑った。
「貴様等が我々の軍門に降る時に教えてやろう」
「戯れ言を」
ゼクロスはそれを聞いて言った。
「戯れ言かどうかはやがてわかることだ」
やはり暗闇大使の声は自信に満ちたものであった。
「まあ今は落ち着いてこれを見るがいい」
「な・・・・・」
次第に黒い光が消えていく。ゼクロスはそれを見て次第に驚愕の色を露わにしだした。
そこにはゼクロスがいた。厳密に言うと彼ではない。彼と同じ姿をした者達だ。
色は違う。赤ではない。青、黄、緑、紫、茶、白、黒、灰、橙、金、銀、そして虹色のゼクロスがいた。彼等は黒い光が消え去るとそこに姿を現わしたのだ。
「どうだ、流石に驚いたようだな」
暗闇大使は不敵に笑いながら言った。
「自分自身が今ここにいるのだからな」

「クッ・・・・・・」
ゼクロスはそれを見て歯噛みした。
「どうだ、この者達は。素晴らしいだろう」
暗闇大使は彼にそのゼクロス達を見せつけるようにして言った。
「姿だけではないぞ。力も貴様とおなじだ。無論装備もな」
彼等はここでそれぞれ武器を取り出してみせた。
「そう、これも貴様と同じものだ」
「俺のコピーを作ってどういうつもりだ」
彼は問うた。
「何をするか！？決まっているだろう」
暗闇大使は不敵に笑って言った。
「この世を我等が手に収めるのだ。それ以外に何があるというのだ」
彼は愚問だ、と言わんばかりの態度を示して言った。
「それが我がバダンの目的なのだからな」
そして腕をゼクロスに向けた。
「今日のところはこれで終わりだ。ただの顔見世に過ぎんしな」
「顔見世か。えらく大袈裟にやってくれたな」
役は大使を睨みつけて言った。
「顔見世は派手にやったほうがいいからな」
彼はそれに対して言った。
「そうでなくてはこの者達の怖ろしさが貴様等にわからぬ」
「大した自信だな」
ゼクロスも言った。
「何なら今ここで倒してもいいのだが」
そしてその手に手裏剣と爆弾を持った。
「フン」
大使はそれを見て口の端を歪めた。
「せっかちな奴だ。余裕がない男は好かれぬぞ」
「そうした態度が何時までとれるかな」
彼は手裏剣を身構えて言った。

「そのようなものでか」
だが大使は手裏剣を見て嘲笑した。
「馬鹿な男よ、オモチャでわしを倒そうなどとは」
「オモチャというか。これを」
「ではそれでわしを倒してみよ」
彼はあえてゼクロスを嘲笑する言葉を吐いた。ゼクロスはそれに対し無言で手裏剣を放った。
それは一直線に暗闇大使の額を狙う。大使はそれを微動さにせず見ている。
「フン」
そして一瞬口の端を歪めたかと思うとマントを翻らせた。
「ムッ!?」
それだけであった。手裏剣はマントの中に消えた。
「この程度だということだ、貴様の自慢の武器はな」
彼は笑ったまま言った。
「馬鹿な、俺の手裏剣をこうも簡単に」
ゼクロスは流石に狼狽の色を見せた。

十三人の自分その十五

「これも先程の力だ」
「黒い光か」
「そうだ。これで少しはわかっただろう、我等の力が何であるかを」
「魔術か。それも黒魔術」
役は暗闇大使に対して銃を構えながら言った。
「そうだ。どうやら只のインターポールの人間ではないようだな」
「生憎。日本から来ていますから」
役は答えた。
「フフフ、そうか」
それだけではないだろう、と言うつもりだったが止めた。
「普通の黒魔術でもないがな」
暗闇大使はまだ余裕があった。
「だが今それを全て見せるつもりはない」
彼は言った。
「楽しみはあとまでゆっくりととっておきたいしな」
「余裕だな、すぐに滅びるというのに」
ゼクロスはまた言った。
「滅びるのはどちらかな」
大使は言葉を返した。
「その言葉は貴様等ライダーに返しておこう。今はな」
彼はそう言うとマントで全身を覆った。
「さらばだ」
そして姿を消す。十二人のゼクロス達もそれに続く。
「待てっ！」
ゼクロスはそれを追おうとする。だがそれはできなかった。
彼等は光の中に消えた。そしてそのまま黒い光に包まれていく。
ゼクロスは衝撃集中爆弾を投げた。だがそれも黒い光に吸い込ま

れた。
「無駄だ、それはわかっているだろう」
黒い光の中から大使の声がした。
「この光には誰もあがらえぬ」
「クッ・・・・・・」
ゼクロスは歯噛みした。
「ゼクロスよ」
最早彼の姿は見えなくなっていた。
「また会おう。その時がバダンが世界を征服している時だ」
それが最後の言葉であった。暗闇大使も十二人のゼクロスも姿を消していた。
「消えましたね」
役はそれを見て言った。
「ええ」
ゼクロスは答えた。その声は沈んだものとなっていた。
「かってショッカーライダーがありましたが」
ゲルショッカーがアンチショッカー同盟を倒す為に開発した六人のライダーのコピーである。ショッカーに残っていたライダーのデータを使い開発したものであった。
まずはハエトリバチと共同でライダー一号を海に叩き落とした。しかしそこでライダー二号こと一文字隼人が姿を現わし状況が変わった。そして二号と生きていた一号がやって来てダブルライダーとショッカーライダー達の戦いがはじまった。
結果はダブルライダーの勝利であった。ショッカーライダーは数に勝りながらもその能力はダブルライダーと比べると劣っていた。これはもとになった人間の違いであった。
本郷猛も一文字隼人もショッカーにその常人離れした能力を買われライダーに改造された。心技体どれをとっても超人的な二人と比べると流石にショッカーライダー達は劣っていた。それが結果に出たのだ。

ダブルライダーは勝った。それからもそれぞれの組織はことあるごとにライダーの偽者を開発した。だが所詮偽者は偽者であった。ライダー達には到底及ばなかった。
「しかし今回は違うようですね」
役は言った。
「全身から発せられていたあの黒い光」
それはこの世の常識ではありえないものである。
「あれこそがその証」
「ですね」
それはゼクロスにもわかっていた。彼もバダンとの戦いでそれを知っていた。
「おそらく彼等はライダーとしての力だけではありません」
「ではやはり」
「ええ。怪人の力も併せ持っているでしょう」
当然それは考えられた。彼等の前の身体は怪人なのだから。
「気をつけて下さい、彼等は強いです」
「はい」
「しかもバダンの武器は彼等だけではないでしょう」
「といいますと」
「あの黒い光」
役はまたあの光のことを口にした。
「あれを他のものに使ったなら」
「何か怖ろしいものができる」
「はい。全てを破壊するような力が」
「全てを破壊・・・・・・」
ゼクロスは言葉を暗くさせた。
「ゼクロス、いえ仮面ライダー」
役はここであえて仮面ライダーと言った。
「世界は貴方達の手にかかっています。世界を守って下さい」
「しかし俺には」

「いえ、貴方ならできます」
役は口篭もろうとする彼に対し言った。
「あの時一人の少女を助けた貴方なら」
「俺なら・・・・・・」
「はい、期待していますよ」
彼はここで微笑んでみせた。
「わかりました」
ゼクロスにはそう答えるしかなかった。
「この世界、そして人々の命」
ゼクロスは顎を上げて言う。
「俺が守ってみせます」
「はい」
二人は夕陽が映える滝の上で誓い合った。そして二人は新たな戦場へ向かうのであった。
「また派手な宣戦布告をしたな」
暗黒の中からあの首領の声がする。
「奇巌山の時といい中々演出が巧いな」
見れば暗闇の中央に何者かが浮かんでいる。
「これも戦いのうちです」
見れば暗闇大使であった。軍服に身を包んでいる。
「戦いは晴れの舞台、思い切った演出も必要です」
「演出か」
首領はそれを聞いて楽しそうな声をあげた。

十三人の自分その十六

「貴様は中々の演出家だな、それを聞くと」
「有り難うございます」
大使はそれを聞いて頭を垂れた。
「やはり貴様を最高幹部にしたのは正解だったようだな。切れる奴だ。ところで」
首領はここで話を変えた。
「あれはどうなっている」
「あれでございますか」
暗闇大使は顔を上げながら言った。
「そうだ。そろそろ開発が終了する頃だが」
「御心配無用です」
彼は落ち着いた声で言った。
「既に開発は終了しております」
その声には余裕すらあった。
「そうか、それは何よりだ」
暗闇に響き渡る首領の声はさらに上機嫌なものになった。
「ではすぐにそれを各地に送るがよい」
「わかりました」
大使はその命令に対し頭を下げた。
「既に各地の同志達には作戦のことを伝えております故」
「手回しが早いな」
「そうでなくてはライダーに遅れをとるかと」
「フフフ、確かに」
首領はライダーの名を聞いて笑った。
「今まではそれで奴等にやられてきた、常にな」
そうであった。ショッカーの時からである。
「だがこれからは違う」

「はい」
大使はその言葉に頭を垂れた。
「ライダー達の慌てふためく顔が目に見えるようだ」
声はまた上機嫌になった。
「世界が滅亡し絶望と暗黒が支配する世界」
首領は言葉を続けた。
「その世界が訪れる時がやって来たのだ」
「はい、我等の理想の世界が遂にこの世を覆うのです」
暗闇大使の声も上機嫌なものであった。
「今までどれだけライダー達にそれを阻まれてきたことか」
それまでのことが脳裏に浮かぶ。首領はそれに対し歯噛みしたようだ。
「しかしそれもこれまでだ。暗闇大使よ」
「ハッ」
大使は敬礼した。
「ライダーを倒せ、世界を支配しろ」
「お言葉のままに」
「そして全てをこの私が支配するのだ。永遠にな」
「永遠に絶望と暗黒が支配する世界」
彼はニヤリと笑って言った。
「地獄の黒い炎で絶え間なく焼かれる世界」
「そうだ、その世界がもうすぐやって来る、地獄が」
首領は目を細めたような声を出した。
「漆黒の中におわす偉大なる首領よ」
暗闇大使はここで首領に対して言った。
「私の全ては貴方の為に」
そう言うとまた敬礼した。
「暗闇大使よ、信頼しているぞ、暗黒の使いよ」
「お任せ下さい」
その瞬間彼の全身を暗黒が覆った。あの黒い光であった。

「この偉大なる力をお見せしましょう」
「期待しているぞ」
「はい」
「世界が私のものになる時も近い」
首領の声は笑った。
「世界を暗黒に覆ってやろうぞ・・・・・」
暗闇が全てを覆っていく。その中で首領の声だけが響いていた。

十三人の自分　　完

2004.7.14

サバンナの巨象その一

サバンナの巨象

ライダー達の活躍により世界各地におけるバダンの作戦はことごとく失敗に終わった。そしてそれに携わった大幹部や改造魔人達も戦死しその戦力は大きく失われていた。

だが首領は諦めてはいなかった。いや、むしろさらにその野心を膨らませことに当たっていた。

彼には自信があった。世界をその手に収められるという自信が。彼には力があった。

この世界は光と闇から成る。光がライダー達だとしたら彼は闇である。彼はその闇の力を使おうと考えていた。

それを知る者はまだいなかった。バダン以外は彼等はライダー達との戦いを続けながらその毒牙を磨いていたのだ。

その毒牙が今剥かれた。そして世界を、人々を、そしてライダーを殺さんと口を開いた。新たなる戦いが今ここに幕を開かんとしていた。

「随分と減ったものだな」

暗闇の中首領の声が響く。

「かってあれ程いたというのに」

その声からは感情が感じられない。ただ言った、そういう感じであった。

「申し訳ありません」

暗闇の中に立つ地獄大使が言った。

「皆ライダー達により倒されてしまいました」

見れば他の大幹部達もそこにいる。地獄大使の他には死神博士、ドクトル＝ゲー、キバ男爵、アポロガイスト、百目タイタン、ゼネラルシャドウ、ゼネラルモンスター、メガール将軍といった顔触れである。

「そして残ったのはこれだけか」
首領は地獄大使に対して問うた。
「残念ながら」
彼は頭を垂れたまま報告した。
「ふむ」
首領はここで考えるような声を出した。
「だがまだまだ作戦行動は可能だな」
「はい」
彼等は一様にそう答えた。
「ならばよい」
首領はそれを聞き満足した声を出した。
「それでは諸君」
そして彼等に対し言った。
「これより我がバダンの最大の作戦を発動する」
「最大の作戦!?」
それを聞いた大幹部達は一斉にざわめいた。首領はそれを見下ろすかのように沈黙をしていたがやがて言った。
「新兵器のことは聞いていよう」
「はい」
死神博士が答えた。
「それを使い世界を破壊するのだ」
「世界をですか!?」
ゼネラルモンスターが問うた。
「そうだ、世界をだ。そしてその廃墟の後に我がバダンの理想とする世界を作り上げる」
首領は見下ろすような声でまた言った。
「そしてライダー達だが」
「ハッ」
彼等は顔を声の方へ顔を向けた。
「必ずやこの作戦を阻止しに来るだろう。だがそれを必ずや叩き潰

せ」
「わかりました」
彼等は答えた。
「ですが首領」
ここで百目タイタンが言葉を出した。
「何だ！？」
首領はそれに対して問うた。
「その兵器とは一体どのようなものでしょう」
「そうです、我等はまだそれが届くとしか聞いておりませんが」
メガール将軍も言った。
「フフフ、まあそう焦るな」
首領は彼等に対して言った。
「すぐにわかることだ。その兵器が諸君等のもとに届いた時にな」
「そうですか」
彼等はその言葉に納得するしかなかった。首領の言葉は絶対であるからだ。
「ところで首領」
今度はドクトル＝ゲーが尋ねた。
「何だ？」
「仮面ライダーのことですが」
彼は言った。
「私は希望があるのです」
「わかっておる」
首領はそれを聞いて笑みを含んだ声で言った。
「貴様の願いは叶えてやろう。見事あの男を討ち取って来い」
「では私もそうさせて頂いてよろしいでしょうか」
今度はアポロガイストが尋ねてきた。
「無論だ。私はライダー達が倒れればそれでよい」
首領はいささか機嫌のよい声で彼に対しても言った。
「ゼネラルシャドウよ」

そしてシャドウに対しても言葉をかけた。
「ハッ」
彼はそれに対して姿勢を正した。
「貴様もわかっていような」
「有り難き幸せ」
彼は片膝を折りそれに感謝の意をあらわした。タイタンはそれを睨みつけていた。
「では首領」
キバ男爵が言った。

サバンナの巨象その二

「早速その作戦を発動すると致しましょう」
「そうだな」
首領はそれを聞いて言った。
「では暗闇大使よ」
「ハッ」
ここで暗闇大使が闇の中から姿を現わしてきた。
「ヌッ」
地獄大使は彼の姿を見て顔を顰めさせた。
「フン」
暗闇大使はそれを一瞥しただけであった。だがその目には明らかに敵意と憎悪の色があった。
「作戦の名を伝えよ」
「わかりました」
彼は一礼してから口を開いた。
「今回の作戦名を」
他の大幹部達をゴクリ、と喉を鳴らした。
「時空破断作戦とする」
「時空破断作戦・・・・・・」
彼等はその名を聞いて思わずその作戦名を口にした。
「そうだ、時空破断作戦だ」
首領はそんな彼等に対して言った。
「では諸君よ」
首領は言葉を続けた。
「行くがいい、そして全てを破壊しライダーを倒せ、そして我がバダンの世界を築き上げるのだ」
「ハッ！」
彼等は敬礼した。そして一斉にその場から姿を消した。

「さて、ライダー達よ」
一人残った首領の声が暗闇の中に木霊する。
「今度こそ貴様等の最後だ。楽しみにしているがよい。フフフフ・・・・・・」
哄笑が闇の中に木霊する。そこに姿はない。だが明らかに何者かの気がその場を支配していた。
ライダー達はそれぞれ世界各地に散っていた。だが何かが動いたのを感じた。
「まさか・・・・・・」
彼等は同時に顔を顰めた。各地に散っているというのに。
「行くか」
そして彼等は戦場へ向かった。マシンの爆音と共に彼等は向かう。
「はじまりましたよ、おやっさん」
日本に戻っていた結城は立花に対して言った。
「ああ、わかってるよ」
彼もまた感じていた。その正義を愛する心で。
「いよいよだな」
「ええ」
二人は固い表情で頷き合った。
「おそらく今までの最も辛い戦いになるぞ」
「ですね」
「丈二、御前は日本にいるんだな」
「はい、ここで村雨と一緒に」
彼は固い顔のまま言った。
「そうか、なら日本は安心だな。わしも安心してあいつ等のフォローに行ける」
「というとおやっさん」
「当然だ、あいつ等にだけ戦わせてたまるか、あいつ等を助けるのがわしの仕事だ」
立花は険しい顔でそう言った。

「御前もその一人だ」
「はい」
結城が人として温かい心を知るようになったのは立花の存在も大きかった。彼にとっても立花は父親のような存在であったのだ。
その立花にそう言ってもらえる、それが嬉しかった。だが顔には出さない。結城はあくまで自分を冷静な状態で留めるようにしているのだ。
「頼むぞ」
「任せて下さい、あんな連中の思うようにはさせませんから」
「そうか」
立花はそれを聞いて目を細めさせた。
それから数日後立花は日本を発った。息子達を助ける為に。結城はそれを空港で見送った。
立花を乗せた飛行機が飛び去っていく。彼はそれを見えなくなるまで見ていた。
「おやっさん行っちゃいましたね」
彼の隣にいた史郎が言った。
「そうだな、だが感傷に耽っている暇はないよ」
結城はそんな彼に対して言った。
「日本にもバダンは攻めてくるだろうし」
「やっぱり」
彼はそれを聞くとしょげた顔になった。それが面白い程似合っている。
「いつもそうだっただろう、連中が活動している時に日本が無事だったことがあるかい？」
「いえ、俺もショッカーにはいつも殺されかけてましたｈし」
「おいおい、大袈裟だなあ」
結城は思わず顔を綻ばせてしまった。史郎のそんな様子に思わずふきだしてしまったのだ。
「笑い事じゃないですよ、俺本当に危なかったんですから」

「けれど今もこうして生きているだろう」
「そりゃそうですけれど」
「君も戦士なんだよ。だから戦ってここまで生きてこられた」
「そうですかね。俺が戦士だなんて。戦死ならしそうですけれど」
「まあまあ、そう弱気ならない」
そこへチコとマコがやって来た。
「史郎さんだって戦闘員達と戦ってきたじゃない、大丈夫よ」
「そうそう、私達も結構史郎さんを頼りにしてるのよ」
「そうかなあ、俺君達にはいつもからかわれてるような気がするんだけれど」
「史郎さん面白いから」
ここで純子も出て来た。
「ついついそうやってからかいたくなるのよね」
「純子ちゃんまでそう言うのかい！？」
彼は口を尖らせてそう言った。
「おいおい、三人共それ位にしとけよ」
ここで結城が間に入ってきた。
「俺は本当に史郎さんは頼りにしてるんだから。いつも必死にやってくれるしな」
「丈二さん・・・・・」
三人はそれを聞いて史郎をからかうのを止めた。
「君達もだよ。君達の存在がなければ俺達は戦えないんだ」
結城は真摯な顔でそう言った。
「ライダーは一人じゃ戦えない、決してね」
かって彼は一人で戦おうとしていた。だがそれでは悪は倒せない、自らの経験でそれを知ったのだ。
「おやっさんや滝さん達だけじゃないんだ、君達みたいに俺達を支えてくれる人達がいてはじめて仮面ライダーは戦えるんだ」
「そんな、言い過ぎよ」
マコが言った。

「そうよ、丈二さん私達を買い被ってるわ。私達なんて単なる足手まといだし」
チコも続いた。彼等は幾度となくゴッドに捕らえられ神に救出されているのだ。
「それは俺だって同じさ、いや全てのライダーが」
どのライダーも幾度となく絶体絶命の危機に陥った。だがそれを立花やライダーと共に戦う彼女達により救い出されてきたのだ。
「君達がなければ今の俺達はない。当然バダンとも戦えない」
「丈二さん・・・・・・」
純子が彼を見上げて思わず彼の名を言った。
「だから・・・・・これからも頼むよ。バダンを倒す為に力を貸して欲しい」
「はい！」
史郎とチコ、マコ、純子は笑顔で答えた。そして空港を去りアミーゴに戻った。
丁度それと入れ違いに空港の出口にサングラスをかけた一人の男が姿を現わした。
「暫くぶりだな」
それは村雨だった。彼はサングラスを取り外すと感慨を込めて言った。
「バダン、ここにも来るか」
彼は何者かの気配を感じていた。
右に顔を向ける。サッと影が消えた。
「来るなら来い。俺は逃げも隠れもしない」
彼はそれを見て言った。
「俺の前に来るならば倒す、例え俺がどうなってもな」
村雨はそう言うと空港を去った。そして一人アミーゴへ向かった。

サバンナの巨象その三

アマゾンはアフリカのサバンナに来ていた。
「話には聞いていたけれど凄いな」
隣にいるモグラ獣人が感嘆の言葉を出した。彼は人間の姿をとっている。
「うん、アマゾンここへは何度か来たことあるけれど何時見ても凄い」
彼も目を細めて言った。
「アマゾンとはまた違う。こうした自然もいい」
「そうだよな、おいらもそう思うよ」
モグラ獣人もまた自然が好きだ。彼もまた密林の中で生きているからだ。
二人は象やガゼルの群れの間を歩いている。ふとライオンの群れの中に入った。
「ちょっと通る、心配いらない」
アマゾンは突然の侵入者を見て立ち上がったライオン達に対して言った。ライオン達はアマゾンの目を見てそこで止まった。そして逆にアマゾンを出迎えるように道を開けた。二人はその間を進んでいく。
「相変わらず動物達に凄い人気だなあ」
モグラ獣人はそれを見て言った。
「アマゾン動物好き、だからその想いが伝わる、だから動物道を開ける」
彼は笑顔でそう答えた。
「動物アマゾンの仲間。仲間は助け合うもの、アマゾンそう思う」
彼はそう考え今までライダーとして戦ってきた。彼はライダーの中でも特に純粋で心優しい戦士なのである。
「動物もいいけれどさあ」

モグラ獣人はそんなアマゾンに対して言った。
「アマゾン、ここで何をするつもりだい!?見たところ草原と木だけで何もないよ」
サバンナは見渡す限りの大草原である。ここにいる人々は狩猟により暮らしている。彼等もまた自然と共に生きているのだ。
「モグラ、心配いらない」
アマゾンは心配するモグラ獣人に微笑んで言った。
「もうすぐわかるから」
「もうすぐ、もうすぐ、っていったもう一週間だよ」
彼は不満を露わにして言った。彼等はこの一週間ずっとサバンナを歩き回っているのだ。
「まだバダンの奴等は見つからないのかい!?」
「バダン!?」
アマゾンはそれを聞いてキョトンとした顔をつくった。
「そうだよ、バダンだよ」
モグラはその口をさらに尖らせて言った。
「ここにもバダンがいるんだろう!?だから来たんだと思うけれど」
「うん、確かにバダンここにいる」
アマゾンは顔を真面目なものにして答えた。
「けれどまだバダンの連中には会えない」
「どうしてだい!?」
「奴等アマゾン達を狙っている」
アマゾンは言った。
「じゃあ今すぐにでも来そうなものじゃないか」
モグラ獣人は不思議そうな顔をして言った。
「奴等は待っている」
「何をだい!?」
「アマゾン達が隙を見せるのを。多分その時に来る」
「そうか」
モグラ獣人はようやく事情を理解した。そして二人はサバンナを

歩いていった。
　アマゾン達の動きはアマゾンが予想した通りバダンによって見張られていた。彼等はサバンナ中に網の目の様に監視網を作り二人を監視していた。
「アマゾンの動きはどうだ」
　キバ男爵は夕闇が覆うサバンナで戦闘員からの報告を受けていた。
「ハッ、やはり手強いです」
　その戦闘員は敬礼をして答えた。
「中々隙を見せません。どうやらこちらの動きを知っているようです」
「そうだろうな」
　彼はそれを聞いて言った。
「アマゾンライダーはああ見えても手強い男だ。わしはそれをカンボジアで知った」
「カンボジア・・・・・アンコールワットの戦いでですね」
「そうだ、あの時はアマゾン一人を狙ったが」
　彼はマンモスの骨の兜の下で言った。
「全く相手にならなかった。こちらの刺客は全て倒されてしまった」
「そして日本でもアマゾンでも我々は奴の前に一敗地にまみれましたな」
「うむ。まるで獣の様な男だ。おそらく今は逆にこちらの隙を窺っているのだろう」
「こちらのですか」
「そうだ、油断してはならぬぞ」
「わかりました」
　その戦闘員は答えた。
「だがこちらにも切り札がある」
　キバ男爵は顔を上げて言った。
「奴ですら一撃で倒すあの兵器がな」
「はい、アマゾンライダーをこのサバンナと共に消し去ってやりま

しょう」
戦闘員は頭を垂れて言った。
「その為には何をするべきか」
キバ男爵はここで考え込んだ。
「誘き出すべきか、それとも」
彼は言葉を続ける。
「一気に消し去るか」
そう言いながら闇の中へ消えた。夜のサバンナに象の咆哮が聞こえた。

サバンナの巨象その四

アマゾンとモグラ獣人は休んでいた。二人はモグラ獣人の掘った穴に入っている。

「何かツチブタみたいだな」

モグラ獣人は穴の中で笑いながらアマゾンに対して言った。

「ツチブタ！？ああ、あれか」

アマゾンはそれを聞いてある動物を思い出した。

ツチブタとはサバンナに住む動物である。土に穴を掘ってその中で暮らしている。夜行性の哺乳類である。

「似てるだろ、こうして穴の中にいるから。まあおいら達は昼に動いているけれど」

「確かに似てる。アマゾンとモグラツチブタそっくり」

「おいおい、けれどおいらはあんなに不細工じゃないよ」

彼は困った顔をしてそれを否定した。

「こんな男前を捕まえて何を言うんだよ」

「御免」

アマゾンは素直に謝罪した。

「モグラいい奴。アマゾンそれ保証する」

「顔はなしかよ。まあいいや」

元々そんなことにこだわる男ではない。彼等はそのまま穴の中で休息に入った。

「なあアマゾン」

モグラ獣人が不意に話しかけてきた。

「モグラ、どうした？」

アマゾンは顔を上げて尋ねてきた。

「何で昼動かないんだい！？おいらもアマゾンも夜でも平気なのに」

彼は不思議そうに尋ねた。

「夜は特別」

アマゾンはそう答えた。
「特別！？」
「そう、サバンナは昼と夜じゃ違う。出ている動物達も違う」
ライオンも実は夜行性である。彼等は昼は寝て夜に狩りをするのだ。
「だから出歩かない。さもないとそこにバダン来る」
「そうか、気をつけないとな」
「気をつけるの凄く大事。よく見ておくことも大事」
アマゾンは言った。
「バダン隙を見せる。その時に動く」
「そうか、それを考えていたのか」
モグラ獣人はそれを聞いてようやく納得した。
「その時は近い。アマゾンその時になったら一気に戦う、モグラも頼む」
「わかったよ」
二人はそう言い合うと眠りに入った。そして夜になった。
二人は穴から出てまたサバンナの中を歩きはじめた。やがて木の陰に止まった。
「御飯にしよう」
そしてその木の実をとり食べはじめた。
「アマゾンは食事を採っているな」
それを遠くから見る者達がいた。
一見この辺りに住む部族の者達である。だが何故か周りに山のようにいる獲物達を一瞥だにしない。ただアマゾン達を見ているのである。
「気をつけろよ。気付かれたら終わりだ」
リーダー格の一人が言った。
「はい」
彼等はそのリーダーの指示に従いゆっくりと風下からアマゾン達に近付く。そして一気に攻勢に出た。

「死ねっ！」
槍を投げ踊りかかる。だがアマゾンとモグラ獣人はそこにはいなかった。
「ムッ！？」
「何処だっ！？」
彼等は慌てて周りを探る。その時上から声がした。
「ケケーーーーッ！」
いきなりその中の一人が引っ掻かれた。見れば仮面ライダーアマゾンがいた。
「バダン、覚悟っ！」
彼はすぐに他の者に挑みかかった。そして別のバダンの者を噛み殺す。モグラ獣人も姿をあらわした。
「ヌウウ、こちらの動きを読んでいたか」
リーダー格の男は既に怪人の姿になっていた。ジンドグマの扇風怪人ゴールダーである。
「御前達の殺気、ここにみなぎっていた。アマゾンそれに気付いた」
「迂闊だったわ」
ゴールダーはそれを聞いて舌打ちした。
「だが貴様を倒せばそれですむこと」
怪人は身構えてそう言った。
「これでも受けるがいい」
そして力を溜めた。
口から冷凍ガスを放ってきた。だがアマゾンはそれを上に跳躍してかわした。
「ケケーーーーーッ！」
そして空中で一回転する。そのまま怪人へ向けて急降下する。
そして両手の爪で切り裂いた。それは怪人の胸を切った。
「ブブーーーーーッ！」
怪人は絶叫した。そして前に倒れた。
起き上がれなかった。ゴールダーは爆死して果てた。

「アマゾン、やったな！」
モグラ獣人はそれを見て喝采した。
「モグラ、油断しては駄目」
だがアマゾンはそんな彼に対して言った。
「何でだよ、折角怪人をやっつけたのに」
彼は口を尖らして反論した。だがアマゾンはそんな彼に対して言った。
「もう一人いる」
「えっ！？」
モグラ獣人はその言葉に思わず身構えた。そこへ何かが飛んできた。
「ムッ！」
二人はそれを左右に跳びかわした。それは溶解液であった。後ろの木がそれにより溶ける。

サバンナの巨象その五

「ファンファンファーーーーンッ！」
ゲルショッカーの触手怪人イソギンジャガーであった。怪人は無気味な唸り声を出してこちらにやって来た。
「ケケーーーーッ！」
アマゾンがそこに跳びかかる。まずは爪で切り裂かんとする。だが怪人はそれをかわした。そして右腕の触手で首を絞めようとする。
「甘いっ！」
しかしアマゾンはそれをかわした。だが左腕に絡み付いてきた。
「ムムム」
「ファファファファファ」
イソギンジャガーは得意そうに笑う。そして口から溶解液を出そうと身構える。
アマゾンはそこで右腕を振り下ろした。そしてそれで触手を断ち切った。
「ヌッ！」
一気に攻勢に転ずる。蹴り飛ばし怯んだところにまた襲い掛かる。
「ケーーーーーーーッ！」
右腕を振り下ろした。大切断だ。それで怪人を上から真っ二つにした。
イソギンジャガーの身体が左右に分かれる。鮮血をほとばしらせた後怪人の身体は爆発して果てた。
しかしそこにもう一体やって来た。今度は空からだ。
「ヴェーーーーーーッ！」
ショッカーのカマイタチ怪人ムササビートルだ。怪人は空中からアマゾンに急降下攻撃を仕掛けてきた。
「アマゾン！」

モグラ獣人はアマゾンに声をかけた。
「モグラ、大丈夫！」
しかし彼はそんなモグラ獣人に対して逆に元気付け、安心させるようにして言った。
一撃目はかわした。だがムササビートルは上空に舞い戻ると旋回した後また狙いを定めてきた。そしてまた急降下攻撃を仕掛ける。
「今だっ！」
そこで跳んだ。そしてこちらに襲い掛かってくるムササビートルに蹴りを放った。
「ケケケーーーーッ！」
アマゾンキックであった。それは急降下してくるムササビートルの顔を直撃した。
「ヴァッ！」
それを受けたムササビートルは空中に吹き飛ばされた。そして激しく回転し地に落ちた。
そしてそこで爆死した。こうしてバダンの怪人達は皆アマゾンにより退けられてしまった。
「アマゾン、よくやったね」
モグラ獣人は着地したアマゾンに対して声をかけた。
「よくやってない」
だがアマゾンはそれに対して首を横に振った。
「ライダーが怪人倒す、これ当然のこと。アマゾン当然のことしただけ」
「そうか、そうだったね」
モグラ獣人はそれを聞いて顔を綻ばせた。
「じゃあ言い方を変えるよ。勝ってよかったな」
「うん、それだといい」
人間の姿に戻ったアマゾンは笑顔でそれに応えた。そして二人はまた歩きはじめた。
キバ男爵はそれを遠くから見ていた。そして言った。

「怪人はあと三体残っていたな」
「はい」
戦闘員の一人が答えた。
「よし」
彼はそれを聞くと頷いた。
「あの兵器だがな」
「はい」
「可動式にできるか」
「可動式ですか！？」
戦闘員達はそれを聞き思わず声をあげた。
「そうだ、可動式だ」
キバ男爵はそれに対し顔を向けて言った。
「誘き出そうと思ったがそれはできないようだ。むしろこちらが攻めてくるのを待っている」
彼はアマゾン達に顔を戻して言った。
「あの男は生まれついての狩人だ。その程度のことはできる」
彼もまたロシアで勇名を馳せキバ一族の長として君臨してきた男である。密林において猛獣達を屠ってきた。そのことはよくわかる。
「ならばこちらもそれに乗ってやる」
彼は目の光を鋭くさせた。
「こちらから出向いて倒す、怪人達に召集をかけよ」
「わかりました」
戦闘員達はその指示に対して敬礼した。
「そしてあれだがな」
キバ男爵はここで兵器について言及した。
「自走式にできるか」
「自走式ですか」
「そうだ、それなら狩りに使える。アマゾンを追ってな。できるか」
「お任せ下さい」
戦闘員の一人が答えた。

サバンナの巨象その六

「万難を排してやってみせます」
「頼むぞ」
キバ男爵は顔をアマゾン達に向けたまま言った。
「アマゾンライダーよ」
そして遥か遠くのアマゾンに対して言葉をかけた。
「貴様の望み通りこちらから攻めてやる。しかしな」
彼はまた目の光を強くさせた。
「勝利を収めるのは我々だ。このバダンがな」
彼はそう言うと姿を消した。そしてサバンナはまた太陽の光に支配された。
アマゾンとモグラ獣人は川辺にいた。そして水を飲んでいる。
「いいなあ、やっぱり久し振りに川で飲む水はいいよ」
「うん、普段飲む水とやっぱり違う。いい」
モグラ獣人は水浴びまでしている。アマゾンは水を手ですくって飲んでいる。
「いつもは土を掘って飲んでいるもんな。それに比べたら全然違うよ」
「けれどサバンナはそういうところ。水凄く貴重」
アマゾンは愚痴を言うモグラ獣人に対して言った。
「アマゾンとは違う。それはわからないといけない」
その口調ややや厳しめであった。
「そうなんだよなあ、アマゾンと違うんだよな」
モグラ獣人は残念そうな顔をした。
「アマゾンなら水は飽きる程あるし食べ物も豊富なのに。ここはそれに比べてかなり苦しいよ」
彼等は主に魚や果物を食べる。だからサバンナの食事には慣れていないのだ。

「けれど仕方ない」
アマゾンはそんな彼に対して言った。
「アマゾンにはアマゾンの、サバンナにはサバンナの状況がある。アマゾンそう考えている」
「そうなんだ」
「そう、だから文句言うのよくない。それよりもバダン倒す、その方が大事」
「そうだったな、バダンがいるんだ」
モグラ獣人はその言葉に対し頷いた。
「今もここの何処かでおいら達を見ているんだよな」
「うん」
「そして隙あらば、か。油断できないな」
モグラ獣人は川から出て周りを見回したあとで言った。
「うん、けれどそれいつものこと」
アマゾンは言った。
「だから特に気を張り詰める必要ない。いつもと同じ」
「いつもと同じか」
モグラ獣人はやや困ったような声をあげた。
「いつもバダンと戦っているもんなあ。本当に」
「それアマゾン達の仕事」
「そうなんだよなあ、早く終わって平和に暮らしたいよ」
「その日何時か必ずやってくる」
アマゾンはモグラ獣人に対して言った。
「けれどそれにはバダン倒さなくてはいけない。その為にアマゾンいる」
「アマゾン」
モグラ獣人はその言葉に顔を向けさせた。
「モグラの力も必要、アマゾンも一人じゃ戦えない」
「わかってるよ」
彼はそれに対して微笑んでみせた。

「おいらは弱いし臆病だけれどアマゾンのことは好きだよ。だからこんなおいらでも力になれたらいいと思ってるよ」
「モグラ」
アマゾンはそれを聞き嬉しそうな表情を作った。
「おいらも出来ることの範囲で力になるよ。そしてバダンをやっつけようぜ」
「うん、アマゾン戦う。そして世界平和にする」
「そうこなっくちゃ」
彼等はここで両手を握り合った。そしてまた歩きはじめた。
二人はシマウマの群れの横にやって来た。サバンナの名物である動物の一つだ。
「本当に変わった模様だなあ」
モグラ獣人はそれを見ながら呟いた。
「何でこんな模様なんだろう」
「これ保護色」
アマゾンは彼に対して言った。
「保護色!?こんなに派手な色と模様なのに!?」
「そう、保護色」
アマゾンはにこりと笑って答えた。
「ライオンや豹の目人間のと違う。色がわからない」
「そうなんだ」
哺乳類で色の識別ができるのは人間と猿だけである。他の哺乳類は白黒でしかものを見ることができない。
「だから隠れられる。シマウマ周りの風景に隠れられる」
「そうやって自分の身を守っているんだね」
「そういうこと、要するにアマゾンの生き物と同じ」
「そうだったんだ、勉強になるなあ」
「アマゾンもモグラもこの身体は隠すことできる。シマウマもそれをしている。だから同じ」
「そうだね、けれどおいら達は戦う相手が違うけれど」

二人はシマウマの群れの間に入った。そしてその草を食べる様子を目を細めて見ていた。

サバンナの巨象その七

だがそれはすぐに終えなければならなかった。ここでバダンの攻撃を受けたのだ。

「！？」

草原の向こうから何かが向かってくる。それはバイクに乗った一団だった。

「環境保護の連中かな」

モグラ獣人は最初それを見てそう思った。

「いや、違う」

だがアマゾンはそれを見て言った。彼にはその一団が何者かすぐにわかった。

「モグラ、あれバダン！」

「えっ！？」

モグラ獣人はアマゾンのその言葉に思わず声をあげた。

「こちらにやって来る、すぐに用意しよう！」

「けれどどうやって・・・・・・」

モグラ獣人は慌てて周りを見回す。だが周りには何もない。

「モグラは潜る、それでいい」

「ああ、そうか」

アマゾンの言葉にハッとした。そして急いで地を掘り進む。

「アマゾンも来なよ」

「いや」

だがアマゾンはここで首を横に振った。

「アマゾンは隠れない。考えがある」

「どうするつもりだよ」

「アマゾンに任せる。何も心配いらない」

そしていつもの笑みを見せた。

「そうか、じゃあ」

その微笑みはいつも見ていた。彼がその笑みを見せた時は必ず勝利をおさめている。
「アマゾン、頼むよ」
「うん、モグラは下から頼む」
「わかった」
こうして両者は一旦別れた。そして迫り来るバダンの使者達に備えた。
「アマゾンライダーは何処に行った!?」
その一団がシマウマの群れの中にやって来て彼を探しはじめた。
「見たところシマウマしかいないが」
その先頭にいる怪人が辺りを見回した。ショッカーの吸血怪人モスキラスである。
「そんな筈はない、絶対にここにいる筈だ」
もう一体の怪人が言った。デストロンの突撃怪人サイタンクだ。
「しかし何処にいるというのだ」
モスキラスは焦っていた。アマゾンが奇襲を得意とするのを知っているからだ。
「落ち着け」
サイタンクはそんなモスキラスに対して言った。
「焦れば奴の思う壺だ」
「そうだな」
モスキラスは同僚のその言葉に落ち着きを取り戻した。そして再び辺りを見回した。
「この辺りにいる筈だが」
だが見つからない。また次第に焦りはじめた。
「ムムム」
その時だった。不意に奇声が何処からか聞こえてきた。
「ケケーーーーーーッ!」
「その声はっ!」
彼等はその声を発する者wよく知っていた。そう、彼である。

アマゾンライダーが姿を現わした。彼は前からジャングラーDに乗ってやってきた。
「前からかっ！」
バダンの一団はそれを見て一斉に前に機首を向けたシマウマ達が左右に散っていく。
両者を隔てるものはなくなった。バダンも突っ込む。両者はそのまま激突した。
「ケーーーーーーッ！」
アマゾンはマシンをそのまま突っ込ませた。戦闘員達はそれだけで何人か吹き飛んだ。
「クッ！」
モスキラスが憤怒の声を出す。そして突き抜けたアマゾンに機首を向ける。
そしてこちらに振り返ったアマゾンに突き進む。サイタンクは後ろから叫んだ。
「止めろ、俺と連携しろ！」
だがモスキラスは頭に血が上っていた。彼の制止を振り切りそのまま突き進む。
「ブゥゥーーーーーーヨンッ！」
アマゾンもまた突っ込んできた。モスキラスは彼を捕らえその血を吸いそれで倒すつもりだった。
しかしアマゾンの方が一歩上であった。彼は両手の鰭を一閃させた。
「ムンッ！」
それで終わりであった。両者が交差する。そしてマシンはそのまま突き進んでいく。
モスキラスはその間動かなかった。だがその頭が一瞬ぐらついた。
その頭が落ちた。すると首を失った身体はマシンにもたれかかるようにして倒れる。そしてそのまま横転し爆発に巻き込まれた。
「モスキラス・・・・・・」

サイタンクはそれを見て歯噛みした。そしてあらためてアマゾンを見た。
「仇はとってやる」
その声には明らかに怒りが込められていた。
「行くぞっ！」
マシンごと突っ込む。彼は額にある角を向けてきた。
「フワァーーーーーッ！」
その堅固な皮に覆われた巨体でアマゾンを叩き潰そうとする。彼の武器はその巨体と角であった。
アマゾンもマシンをそちらに向ける。そして突撃する。
アマゾンは身構えた。そしてその右腕を左肩のところに置く。
「ケケーーーーーッ！」
そしてそれを横に払った。丁度サイタンクと交差した時だった。
「・・・・・・・・」
サイタンクは動かなかった。そして何も言おうとしなかった。
やがてその上半身がゆっくりと落ちていく。そしてサバンナの草の上に落ちた。
マシンが爆発した。上半身も爆発した。こうして二体の怪人はアマゾンによりほぼ一瞬で倒された。
「見事だ、流石はゲドン、ガランダーを倒しただけはある」
ここで新たな声がした。
「仮面ライダーアマゾンよ」
二体の怪人を倒したアマゾンの前にもう一体の怪人が姿を現わした。
「今度は俺が相手だ」
ネオショッカーの切断怪人グランバザーミーであった。怪人はマシンに乗りその巨大な鋏の右腕を振り回していた。
「チョキチョキチョキチョキチョキチョキッ！」
そして奇声と共に向かって来た。アマゾンもそれに応じた。
「ケケーーーーーッ！」

マシンを正面からぶつける。凄まじい衝撃がサバンナに走った。
「ゲッ！？」
グランバザーミーはマシンから放り出された。だが上手く受け身をとり着地した。そしてアマゾンの襲撃に備える。
「何処だ」
ジャングラーDも何処かへ消えていた。当然アマゾンもいない。辺りを見回す。だがアマゾンの姿はない。

サバンナの巨象その八

八方に気を張り巡らす。その時だった。
後ろから何かの気配がした。慌ててそちらを振り向く。
「そこかっ！」
だがそこにあったのは一つの巨大な穴だった。それ以外には何もなかった。
「どういうことだ、モグラ獣人か！？」
彼はすぐにアマゾンと共に戦う獣人のことを脳裏に浮かべた。
「裏切り者が、一度死んでもまだ懲りないというのか」
穴に入ろうとする。入口を覗き込んだその時だった。
「ケケーーーーーッ！」
不意に上から声がした。怪人は咄嗟に上へ鋏を繰り出した。
だが遅かった。アマゾンはそれより前に腕を振り下ろしていた。
怪人の首が落ちた。そしてそれは穴の中に落ちていった。
首をなくした胴体が倒れ込む。そして爆発した。
穴の奥からも爆音が聞こえてきた。どうやらグランバザーミーの首が爆発したらしい。
「やったな」
アマゾンの後ろから声がした。モグラ獣人がそこにいた。
「モグラ、有り難う」
アマゾンは彼に対して言った。
「まさかこんな使い方するなんて思わなかったよ」
「咄嗟に思いついた。アマゾンもまさかこんなに上手くいくとは思わなかった」
アマゾンは変身を解きながら言った。
「まずジャングラーDで上に飛ぶ。そしてそこでマシンで空に留まる」
彼はマシンの激突の直後上に跳んでいたのだ。そこでマシンで空

を飛んでいたのだ。
「そしてモグラにテレパシーで送った。あいつの後ろに向かってくれ、と」
「うん」
これもガガの腕輪の力だった。この腕輪はアマゾンに超絶的な力を授けるだけではないのである。
「そして怪人がモグラの穴に気をとられている時にマシンから降りて襲い掛かる。やることはいつもと同じだけれどちょっと変えたらそれだけでかなり違う」
「そうだよな、おいらもびっくりしたよ」
「バダンの奴等強い、だからアマゾンの頭使わなくては駄目。そうでないと勝てない」
彼とて馬鹿ではない。そうした頭脳戦も得意なのである。
「けれどこれでバダンさらに追い詰められた。今度は全力で来る」
「全力でかい」
「そう、アマゾンバダンの攻撃二回退けた。そろそろ痺れを切らす頃」
その読みは当たっていた。
「モグラも気をつける。もうすぐバダンが総攻撃を仕掛けてくる」
「ああ」
アマゾンはマシンを呼び寄せた。アマゾンが乗った。
「モグラも乗るか」
「うん」
モグラ獣人は人間態になるとアマゾンの後ろに乗った。アマゾンはそれを確かめるとアクセルを踏んだ。
マシンは走りはじめた。そしてその場をあとにした。後に戦いの後を残して。
キバ男爵は夜のサバンナにいた。そして一人夜空を見上げていた。
「あの者達も敗れたか」
彼は星の動きから戦いの行方を見ていた。そして呟いた。

「こうなったら私自身が行くしかないな」
「そうか、遂に行くのか」
ここで後ろから声がした。
「うむ、これ以上は捨てておけぬ。無駄に戦力を消耗してしまうのでな」
「兵器の準備はできているのだろうな」
声の主はゆっくりとキバ男爵に近付いてきていた。
「当然だ、だからこそ行くのだ」
キバ男爵は落ち着いた声で言った。
「そういうお主も準備はできているのだろうな」
そして後ろを振り向いた。
「無論だ。後はあの男が来るのを待つだけだ」
その男はドクトル＝ゲーだった。彼は血に飢えた陰惨な笑みを浮かべながら言った。
「仮面ライダーブイスリーか。できるならこの私が相手をしたかったが」
キバ男爵はデストロンにいた時の屈辱を忘れたわけではなかった。恨みを込めた声でそう言った。
「それは致し方あるまい。だがお主にも獲物があるではないか」
「確かに」
男爵はゲーの言葉に対して頷いた。
「私にとってはおあつらえ向きの獲物かも知れぬな」
彼は表情を変えることなくそう言った。
「奴には何か感じるところがある」
「それは何だ！？」
ゲーは問うた。
「うむ、何かな。このサバンナで戦う運命だったような気がするのだ」
「運命か」
「そうだ、私はこのアフリカで長い間戦ってきた」

キバ一族はアフリカの暗黒宗教を信じる部族であった。その長となった彼もまたその暗黒宗教を信奉している。

「奴はアマゾンだがな。しかしどちらも文明とは無縁の場所だ」

「そういえばそうだな」

ドクトル＝ゲーはそれを聞いて言った。

サバンナの巨象その九

「そうだ、私は日本に来た時妙な違和感を覚えたものだ。ここは私に相応しい場所ではない、とな」
「ではこのサバンナの方がよいのだな」
「うむ。アフリカこそ私が戦う場所に相応しい。そう考えている」
「そうか」
ゲーはそれを聞いて頷いた。
「では仮面ライダーアマゾンはお主に任せてもよいな」
「うむ。お主は仮面ライダーブイスリーをやるがよい。それを私に約束させたくてここに来たのだろう」
「わかっていたか」
ゲーはその言葉を聞いて不敵に笑った。
「わからないと思ったか。お主のあの男への執念を知っていて」
「フフフ、ならばいい」
彼は満足そうに頷いた。
「仮面ラァーーーイダブイスリーは私が倒す。手出し等は一切無用だ」
「こちらもだ。私は獲物を狩るのに他の者の手は借りない主義だ」
「ならばこれで決まりだな」
「うむ、健闘を期待するぞ」
「そちらこそな。見事アマゾンの首をとるがよい」
「わかっておる、その時はまずお主に見せてやろう、アマゾンライダーの首を」
「楽しみにしているぞ。それではな」
「うむ」
ドクトル＝ゲーは別れの挨拶と共に姿を消した。あとにはキバ男爵だけが残った。
「アマゾンライダーよ」

彼の後ろで何か巨大なものが動く音がした。
「今度こそ貴様の最後だ」
まるで何か巨大な生物が歩くような音がする。それは夜のサバンナに地響きを立てて進んでいた。
アマゾンとモグラ獣人は相変わらずサバンナを歩いていた。そこを謎の一団が取り囲んできた。
「バダンか」
「その通り」
問うたアマゾンに対し誰かが答えた。
「キバ男爵」
その者はアマゾン達の正面にいた。そして彼に答えた。アマゾンはその者の名を呼んだ。
「アンコールワット以来だな。ここで決着を着けさせてもらう」
彼はその無気味に光る眼でアマゾンを見ながら言った。
「これでもってな」
彼は右手に持つ槍を掲げた。すると後ろから何かがやって来た。
「な・・・・・・」
それは一匹の巨大な象であった。恐竜程の大きさである。
いや、それは象ではなかった。それは機械であった。象に似せた巨大なロボットであった。
「これは・・・・・・」
「驚いたか。これが我がバダンの秘密兵器だ」
キバ男爵は驚くアマゾンに対して言った。
「秘密兵器・・・・・・」
「そうだ、時空破断システムという」
「何だそれは!?」
「答える必要はない」
キバ男爵はアマゾンに対し冷たい声で言い放った。
「今ここで見せてやるのだからな」
そう言うと槍をゆっくりと振り下ろした。

「貴様の命と引き換えに」
巨象はゆっくりと口を開いた。そしてそこから何かを吐き出した。
「ムッ！？」
それは光の帯だった。ただし普通の光ではない。何と黒い光だ。
「モグラ、跳べ！」
アマゾンは咄嗟に横にいるモグラ獣人に対して言った。モグラ獣人はそれに従いすぐに左に跳んだ。アマゾンは右に跳んでいた。
黒い光がそれまで二人がいた場所に突き刺さった。そうするとそこは跡形もなく消えていた。
「ふむ、かわしたか」
キバ男爵はそれを見て言った。
「だが何時までかわしきれるかな」
「ヌヌヌ」
アマゾンはその言葉を聞き激昂した。
「アマゾン甘く見るな。アマゾンそんなものに負けない」
「ではどうするつもりだ」
「見ていろ」
彼はそう言うと隣にいるモグラ獣人に顔を向けた。
「モグラ、ここはアマゾン一人でやる。モグラは安全な場所行く」
「しかしアマゾン・・・・・・」
彼はそんなアマゾンを気遣った。だがアマゾンはそれに対しいつもの微笑みを見せた。
「心配ない。アマゾン勝つ」
「・・・・・わかったよ」
彼はいつものようにアマゾンを信じることにした。そしてその場を去った。
「フン、まあ雑魚の一匹や二匹どうでもいい」
キバ男爵は地を掘りその中に消えたモグラ獣人を見て言った。
「今はアマゾンライダーさえ倒せればそれでいいからな。さて」
そして再びアマゾンに顔を向けた。

「覚悟はいいな」
「覚悟するのはそっち」
アマゾンはそんな彼に対して言い返した。そして構えに入った。
「行くぞ」
その身体にゆっくりと気が集まりはじめた。

サバンナの巨象その十

アーーーーー
両手を半ば拡げる。その指はまるで爪を立たせたようである。
雨腕は肩の高さで横に開いている。そして肘を直角にし上に向けている。
マーーーーー
その腕を胸の前でクロスさせた。
身体が緑と赤のマダラに覆われる。背中と両手両足に鰭が生え手袋とブーツが黒くなる。
ゾーーーーーン！
その両腕を元に戻す。眼が赤く光った。
白い光がアマゾンの全身を包む。その中右半分、左半分と獣の仮面が顔を覆っていく。

光が消えた。仮面ライダーアマゾンがそこに姿をあらわした。
「ケケーーーーーッ！」
アマゾンは奇声を発した。そして両手の鰭を擦り合わせ威嚇の音を出した。
「変身したか」
キバ男爵はそれを見て言った。
「ならば容赦する必要はない。やれい！」
再び槍を振り下ろした。巨象の口から再びあの黒い光が放たれる。
「ケケッ！」
アマゾンは恐るべき跳躍でそれをあくぁす。だが巨象はそこに続けて光を放つ。
それに対しアマゾンは空中で方向転換してかわした。そこに戦闘員達が襲い掛かる。
「無駄っ！」

アマゾンはその戦闘員達を爪で切り裂いた。胸や腹を切り裂かれた彼等はそのまま地に落ちる。
アマゾンは着地した。そこへまた黒い光が襲い掛かる。
今度は横に滑った。そして追いかけてくるその光をかわす。
戦闘員達はそこに骨の槍を投げる。だがそれはアマゾンの鰭の前に全て叩き落とされる。
アマゾンはまた跳躍した。天高く跳ぶ。
「ケケーーーーーーーーッ！」
光がそれを追うが間に合わない。アマゾンは空中で一回転した。
そして巨象の頭上に着地した。
「ここなら攻撃受けない」
「ヌウウ」
キバ男爵はそれを見上げて歯噛みした。
「黒い光、この世に存在しない」
アマゾンは巨象を見下ろしながら言った。
「だから潰す、そして世界救う！」
そう言うと右腕を大きく振り被った。
「スーーーパーーーー大切断っ！」
ギギの腕輪とガガの腕輪の力を最大にまで出したうえで繰り出すアマゾン最大の大技の一つである。それを巨象の脳天めがけ振り下ろしたのだ。
白い光が巨象の身体の中心を走った。そしてそれが消えた時アマゾンは地面に着地していた。
「これで巨象死んだ。黒い光もう出ない」
巨象は動きを止めていた。そしてやがてゆっくりと左右に分かれていく。
アマゾンの後ろで巨象が真っ二つになった。そして爆発が起こった。
「おのれ、よくも」
キバ男爵は爆風を背に受け立っているアマゾンを睨みつけた。

「かくなるうえは」
戦闘員達がアマゾンを取り囲んだ。キバ男爵は彼の正面に立った。
「私自ら貴様を倒してやろうぞ」
彼は槍を顔の前にかざした。そして何かを唱えはじめた。
「見るがいい、アマゾンライダーよ」
彼はその呪文を唱え終わるとアマゾンに対し言った。
「これが私の真の姿だ」
その身体が灰色の毛に覆われる。牙が生え鼻が異様に伸びる。そして左腕が醜く変形した
「怪人・・・・・・」
「そうだ」
キバ男爵は彼に対し言った。
「キバ一族の長吸血マンモス、これが私の正体だ」
キバ男爵、いや吸血マンモスは言った。槍はその右手にある。それでアマゾンを指していた。
「一つ言っておく」
吸血マンモスはまた言った。
「私のこの姿を見て生きている者はいない。唯一人を除いてな」
「何ッ」
「その一人ももうすぐ死ぬ。ドクトル＝ゲーの手にかかってな」
それが風見志郎であるのは言うまでもないことであった。
「そしてアマゾンライダーよ」
吸血マンモスのその目が赤く光った。
「貴様はここで死ぬのだ。行くぞ！」
「ケケッ！」
アマゾンはその言葉に対して身構えた。それが戦争のはじまりだった。吸血マンモスと戦闘員達は槍を手に一斉にアマゾンに襲い掛かった。
まずは戦闘員達が来る。アマゾンはそれを爪や蹴りで退ける。
「何処を見ているっ！」

そこに吸血マンモスの槍が襲い掛かる。だがアマゾンはそれを身体を右に捻ってかわした。
そして左手の鰭で切ろうとする。しかしそれは吸血マンモスの長い毛と厚い皮膚に防がれる。
「なっ」
「ククククク」
驚くアマゾンに対して吸血マンモスは不敵に笑った。
「今度はこちらの番だ」
そして左腕で打った。アマゾンはそれを胸にまともに受け後ろに吹き飛んだ。
「ウググ・・・・・」
だがアマゾンは一瞬で立ち上がった。しかしダメージは隠せない。
「私はかって世界を支配したマンモスの力を手に入れている」
吸血マンモスは痛みをこらえるアマゾンを見下ろすようにして言った。
「そして誇り高きキバ一族の長でもある」
その言葉には重みがあった。
「その二つにかけて負けるわけにはいかん」
そこで槍を繰り出した。
「ムッ」
アマゾンはそれを身体を捻ってかわした。
「仮面ライダーアマゾンよ」
吸血マンモスは槍を繰り出しながらアマゾンに対して言った。

サバンナの巨象その十一

「このサバンナが貴様の墓場だ」
槍をアマゾンの首に突き出した。だがアマゾンはそれもかわした。
「ケケッ！」
そしてその槍の穂に噛み付いた。その牙でもって砕こうとする。
「ムムム」
それを見た吸血マンモスは槍を離した。アマゾンはそれを見ると槍を手にとった。
「喰らえっ！」
そして槍を投げる。だがそれも吸血マンモスの堅固な皮膚の前に阻まれる。
「フフフフフ」
吸血マンモスは余裕の笑みを浮かべた。そしてアマゾンを見据えて言った。
「今度はこれだ」
そう言うとその左腕を地面に打ちつけた。
「ムッ！？」
すると辺りを地震が襲った。
「まさか」
アマゾンはその地震に必死に耐えながら怪人を見た。
「クククククク」
吸血マンモスは笑っていた。そしてまた左腕を地面に打ちつける。再び大地が揺れる。そして地割れがアマゾンを襲った。
「どうだ、地震の味は」
何とかその地割れから身をかわしたアマゾンを嘲笑するように言う。
「大地を支配したマンモスの力、とくと味わうがいい」
そう言うとまた地面を打った。また地割れがアマゾンを襲う。

サバンナを無数の地割れが襲った。それはやがて四方八方からアマゾンに向かって来た。

「まずい、このままでは」

アマゾン自身の身も危なかった。だが彼は別のことを危惧した。

「サバンナの自然が・・・・・・」

彼はこの時も自然を愛する心を忘れてはいなかった。そしてそれはその自然を破壊する者への怒りとなった。

「させない！」

アマゾンは吸血マンモスを見据えた。怪人は勝ち誇った顔で大地を打ち続ける。

「倒す、そして自然守る」

アマゾンは誓った。だがどうしてあの怪人を倒すのか。問題はそこであった。

あの毛と皮膚には大切断すら通じない。他の攻撃も効果は期待できない。

だが倒さなくてはならない。どうするべきか、アマゾンは考えた。

「象の力大きい」

それはわかっていた。だがそれをどうするか、である。

「その力の源は」

彼は考えた。それを絶てばいい。今までの戦いとアマゾンでの生活でそれはよくわかっている。

象の力は。そしてそれをあらわすのは何か。

「牙・・・・・・」

そう、牙であった。

吸血マンモス、いやキバ男爵はキバ一族の長である。ならばその力の源も牙である筈だ。アマゾンはそう考えた。

「牙さえ取れば・・・・・・！」

アマゾンは思った。そして跳んだ。

それまで彼がいた場所を地割れが蜘蛛の巣の様に襲い掛かった。

彼は咄嗟のところでそれをかわした。

「ケケーーーーーーーーッ！」
彼は叫んだ。そして空中で一回転した。
「また来るか」
吸血マンモスはその動きを見上げて言った。
「無駄なことを」
彼は自分の皮膚と毛の防御力に絶対の自信を持っていた。アマゾンの大切断ですら怖くはなかった。
そう、身体は。だがキバは違った。
アマゾンは急降下する。その真下にはキバがある。
「ケケーーーーーーーーッ！」
アマゾンは再び叫んだ。そしてそれと共に右腕を大きく振り被った。
「スーーーーーパーーーーーー・・・・・」
彼は技の名を叫びはじめた。
「効かぬというのがわからぬようだな」
吸血マンモスはそれを受けるつもりであった。そしてそこで彼に絶対的な敗北を悟らせるつもりだった。
だがそれは叶わなかった。
「大切断！」
アマゾンは右腕を振り下ろした。それは吸血マンモスの二本の牙を一閃した。
「ウオッ！？」
牙が地に落ちた。そこから鮮血がほとばしり出る。
「グオオオオオッ！」
両腕でその牙の傷口を押さえる。だが血は止まることなく溢れ出る。
「まだだっ！」
アマゾンはさらに攻撃を続けた。今度は吸血マンモスを掴み空中に放り投げた。
「ケケーーーーッ！」

そして自らも跳んだ。空に舞い上がった吸血マンモスに向かって蹴りを放つ。
「アマゾンキィーーーーーーーック！」
蹴りを放った。それは吸血マンモスの牙の間を直撃した。
攻撃を終えたアマゾンは両足で着地した。吸血マンモスはその前に落ちた。
「グググ・・・・・・」
吸血マンモスは傷口から血を流しながらも立ち上がってきた。
「まだ来るつもりか」
アマゾンはそんな彼に対して身構えた。
「心配するな」
吸血マンモスはそんなアマゾンに対して言った。
「私にはもう戦える力は残ってはおらぬ」
そしてキバ男爵の姿に戻った。
「ようやく復活した我がキバ一族が再び滅ぶとはな」
「悪が滅ぶ、これ運命」
「フン、運命か」
キバ男爵は蒼白の顔でアマゾンを見据えて口の左端を歪めた。
「ならば最後に勝つのはバダンだ」
そして槍を右手に構えながら力を振り絞って言った。
「偉大なる我等が首領が世界を手に入れられるのは定められしこと。ライダー達の死と共にな」
「それ違う、悪は滅びる運命になる」
アマゾンはそれに対し反論した。

サバンナの巨象その十二

「戯れ言を」
キバ男爵は言い返した。
「まあそれはすぐにわかることだ」
そしてまた口の端を歪めた。
「その時を見れないことだけが残念だが地獄での楽しみにとっておこう」
そう言うと最後の力を振り絞って両足で立った。
「仮面ライダーアマゾンよ」
そしてアマゾンを見て言った。
「キバ一族の火が消えるこの瞬間、よく見ておけ。そして」
彼は言葉を続けた。
「これが近いうちの貴様の未来だということを忘れるな」
そこまで言うとゆっくりと後ろに倒れた。
「バダンに栄光あれーーーーーーーっ！」
そう言い残し爆死して果てた。キバ一族の偉大なる長の見事な最後だった。
「アフリカでの戦いはこれで終わりか」
アマゾンはその爆発を見ながら呟いた。
「だけどまだ戦いは終わりじゃない。まだ首領が残っている」
そう言うとその場をあとにした。それまでサバンナをズタズタに引き裂いていた地割れもキバ男爵の死と共に消えていた。
戦いの傷跡は草原の中に消えていた。

「よく帰ってきたね」
モグラ獣人は川辺でアマゾンを出迎えていた。
「うん、何とか倒した」
アマゾンは出迎えたモグラ獣人に対して笑顔で応えた。

「手強かったけれど」
「仮にも大幹部だからな」
「うん、けれどこれでアフリカのバダンの勢力はかなり減った。キバ一族も滅んだ」
アマゾンは感慨深げに言う。
「他のライダーにも勝って欲しい」
「大丈夫だよ」
モグラ獣人はここでアマゾンを元気付けるようにして言った。
「皆あんなに強いんだよ、負ける筈ないじゃないか」
「モグラ」
「アマゾンも言ったじゃないか、正義は必ず勝つ、って。だろ!?ライダーが負ける筈ないさ」
「そう、そうだった」
アマゾンはその言葉に笑みを取り戻した。
「モグラ、有り難うアマゾン気が楽になった」
「アマゾン・・・・・」
「やっぱりアマゾン一人では戦えない」
彼はここで一瞬しょげた顔をした。
「けれどモグラやおやっさん、まさひこ、りつ子さんがいるから戦える。皆がいるからアマゾン戦うことできる」
それがアマゾンであった。鬼神の様に戦い敵を切り裂く。だがその心は繊細で心優しいのだ。
だからこそ悪と戦うことができるのだ。その友を守る為に、世界を守る為に戦うのだから。アマゾンの心は他のどのライダーよりも素朴で温かいのだ。
「行こう、モグラ」
アマゾンは言った。
「まだバダンは残っている。一人残らず倒して世界を平和にしよう」
「よし!」
二人は歩きはじめた。夕陽が二人を照らしていた。

長い影が消えていく。そして二人は新たな戦場に向かっていった。
「キバ男爵は死んだか」
ドイツの古城でドクトル＝ゲーはその報告を聞いた。
「惜しい男だったが」
デストロンにいた頃はツバサ大僧正等と共に競い合った。ヨロイ元帥とはうまが合わなかったが彼らは互いを認め合い功を競っていたのだ。
「やはりライダーは一筋縄ではいかんな」
ここで後ろから声がした。ゼネラルモンスターが闇の中から姿を現わした。
「うむ。そちらもそろそろ作戦を発動するようだな」
ゲーが彼に顔を向けた。
「既に全て整っている」
ゼネラルモンスターは胸を張って答えた。
「来るぞ、あの男が」
「それも計算のうちだ」
「そうか」
ゲーは彼の言葉を聞きやや機械的に頷いた。
「健闘を祈る」
そして儀礼的に言った。
「そのようなもの祈ってもらいたくはない」
だがゼネラルモンスターはそれに対して反論した。
「何っ！？」
「我がナチスの掟を忘れたのか」
ゼネラルモンスターは目をひそませたゲーに言った。
「総統は仰ったな。勝利こそ全てだ、と」
彼等はかってナチスにいた。その時ヒトラーに言われたことであった。
「私は勝利しか望まない。スカイライダーを倒し中東を死の荒野に変えることだけしかな」

「そうか、そうだったな」
ゲーはそれを聞き満足したように笑った。
「そういうことだ。ではシャンパンを用意して待っておくがいい」
彼はそう言うと背を向けた。
「スカイライダーの首を持って来る故な」
「楽しみにしいるぞ。私も持って来るからな」
彼はここで残忍な笑みを浮かべた。
「あの男の首をな」
「では私も祝いの酒を用意しておかなくてはならんな」
ゼネラルモンスターは振り向いて言った。
「当然だ」
「では用意しておこう。楽しみにしておくがいい」
彼はそこまで言うと顔を元に戻した。そして闇の中に消えた。
「仮面ラァーーーイダブイスリーよ」
一人残ったゲーは呟いた。
「あの時のようにはいかぬ、覚悟しておれ」
そこまで言うと彼も姿を消した。そしてあとには古城の古い苔むした石の壁だけが残った。

サバンナの巨象　　完

２００４・７・２４

隻眼の軍人その一

隻眼の軍人

中東には多くの戦火の跡が残されている。
かって四度の中東戦争があった。これはイスラエルとアラブ諸国の間で行われた戦争である。
これはイギリスの二枚舌外交に大きな要因があった。だがそれにも増してアラブとイスラエルの対立は激しかったのだ。
スエズやシナイ半島を巡って干戈を交えた。結果としてイスラエルは国土を守り多くの占領地を獲得した。
だがここで多くの深刻な問題が生じた。その一つがパエスチナ問題である。
この問題も複雑かつ深刻である。一朝一夜で解決できるものではない。
中東の問題は他にもある。クルド人にしろそうであるし原理主義者達もいる。いまだに中東は世界の火薬庫であるのだ。
その中東でかって最大の都市と謳われアラビアンンアイトにもその栄華を残す街がバグダットである。この街に今二人の男がいた。
「まだまだ戦争の傷跡があるな」
筑波洋は街を見回して言った。
「そらそうですやろ、あそこまで徹底的にやりましたからなあ」
がんがんじいも隣にいる。二人はバグダットの街を見回しながら歩いている。
「原因はどうあれ激しい戦争だったからな。そうおいそれとは修復しないか」
「ミサイルやら爆撃やらでようさん攻められてましたしな。人も大勢死んだし」
「そうだな」

筑波はそれを聞くと表情を暗くさせた。
「人間は愚かなこともする。戦争なんかはその際たるものだ」
戦争が行われる度に平和を言う人がいる。だがその人も別の立場だと戦争を主張したりする。それが人間の一面である。
逆に絶対的な平和主義というのも胡散臭い。我が国では口でそれをとなえても裏でテロリストや北朝鮮の如き悪辣な独裁国家と結託している自称平和主義者もいる。こうした連中が正義の味方の仮面を被り声高に己が主張を押し通そうとする。まことに卑しい話である。
「人は戦わなくちゃいけない時がある」
筑波はそう思っている。
「愛するもの、守るべきものがある時には」
彼は平和を愛している。だが平和主義者ではない。
平和を守る為に戦う戦士、それこそがライダーである。彼はその力を平和の為に使っているのだ。
ここで後ろから爆発がした。
「ん!?」
二人はそちらに顔を向けた。見ればビルが爆破されている。
「原理主義者でっしゃろか」
「多分」
筑波はがんがんじいの言葉に頷いた。
「行こう、負傷者がいたら救助しないと」
「はい」
二人は爆発したビルの方へ向かった。そして負傷者の救助にあたった。
今もバグダットは駐留する外国の軍隊と原理主義者達の戦いが続いている。双方共無益な血を流しながらもまだ陰惨な戦いを続けている。その中で巻き添えとなり無数の屍が築かれようとも。
筑波とがんがんじいは負傷者の救助を終えると赤十字の医療所に来た。そこでテロの話を報告したのだ。

「またですか」
報告を受けた赤十字の医者は表情を暗くさせた。中年の口髭を生やしたアラブ系の男である。
「一体何時になったら終わるのか」
彼はふう、と溜息をついた。
「今回は死者はいませんでしたが」
「しかし傷を負う人がいるのは事実です」
彼は筑波の慰めの言葉にも顔を晴れやかにさせなかった。
「戦争で傷つくのはいつも罪のない人達です」
「はあ」
二人はその言葉に頷くしかなかった。それを最もよくわかっているからだ。
「貴方達には感謝しています。しかし」
彼は顔を暗くさせたまま言う。
「戦争が完全に終結しない限りこうした悲劇は繰り返されます」
その通りであった。だからこそ彼は顔を暗くさせているのだ。
「私は元々軍医でしたが」
「そうだったのですか」
二人はその告白に少し驚いた。
「ええ、アメリカ海兵隊にいました」
「海兵隊ですか、それはまた」
筑波はそれを聞いて暗い顔になった。
「洋さん、海兵隊ってあの」
アメリカ海兵隊のことはがんがんじいも聞いていた。常時戦闘態勢にあり有事の際にはまず戦場に向かう軍である。アメリカ軍の先鋒である。それだけに損害も多い。訓練も極めて厳しい。
「ああ、あの海兵隊だ」
筑波は答えた。この医者はそこでおそらく多くの戦争の傷を見てきたのだ。
「戦場が嫌になり軍を辞めたのですが」

彼は俯き加減に話を続けた。

隻眼の軍人その二

「しかしそれでも傷ついた人を放っておくことはできませんでした。しかし」

その顔は暗さを増していくばかりである。

「やはり戦争により傷を負う人は減ることはない。こればかりは神ですら何もすることはできないのでしょうか」

「それは・・・・・・」

筑波とがんがんじいは何も言うことができなかった。

「信じる神が違う、と言えばそれまでですが」

医者は自嘲気味に笑ってから言った。

「それでも何とかしたい、しかし何もできない。私の力なぞは全く無力なものです」

「それは違いますよ」

筑波はここで言った。

「貴方のような方がいなくて誰が傷ついた人達を救うのですか」

「えっ・・・・・・」

医者はその言葉に顔を上げた。

「確かに戦争は悲惨なものです。しかし」

筑波は言った。

「その巻き添えになる人を救う人も必要なのです。貴方のような人が」

「私の様な」

「はい」

筑波は頷いた。

「見て下さい」

筑波は医者の後ろを指し示した。

「あ・・・・・・」

彼はそれを見て言葉をあげた。そこには手当てを受けている多く

の子供達がいた。
「貴方のような方がいなければあの子供達はどうなるのです。彼等には貴方が必要なのですよ」
「私が、ですか」
「そうです。戦争は一刻も早く終わらせなければなりません。しかし」
筑波は医者に目を戻した。
「貴方のように戦場で子供達を救う人も必要なのです。俺は馬鹿なんで上手くは言えませんが」
「いえ」
医者はここでようやく微笑んだ。
「貴方の言葉で目が覚めました。そうですね、傷ついた人々を助けなくては」
「わかってくれましたか」
筑波もそれを見て微笑んだ。
「はい、これからもここに留まりあの子供達の側にいることにします」
彼はそう言うとまた子供達の方に顔を向けた。
「お願いします」
筑波は右手を差し出した。
「わかりました」
彼もそれにならった。そして二人は固い握手を交わした。
「洋さんは優しいですな」
病院を離れた筑波にがんがんじいが言った。
「俺は別に優しくなんかないよ」
筑波はそれに対して苦笑して答えた。
「俺はライダーだからな。ライダーは人を救うことが務めだ。それに」
がんがんじいに顔を向けた。
「がんがんじいの方がよっぽど優しいよ」

「それは買い被りでっせ」
がんがんじいは顔を真っ赤にして言った。
「わいみたいなええ加減な人間そうはおりまへんで」
「いや、それは違う」
筑波はそんな彼に対して言った。
「がんがんじいはいつも身体を張って戦ってるじゃないか。人を守る為に」
「それはまあ正義の味方の務めですさかい」
「それで今までどれだけ傷を負ってきたか。その身体を見ればわかるよ」
見ればその身体のあちこちに傷がある。大きいのも小さいのも無数にある。
「これはわいが弱いから」
「弱いからじゃないよ、それは勲章だ」
「勲章・・・・・・」
「そう、がんがんじいはそれだけ人々を守る為に戦ってきたという証だよ。それが勲章じゃなくて何だというんだ」
「そうでっしゃろか」
「そうだよ、少なくとも俺はそう思っている」
「洋さん」
がんがんじいはその言葉にじんときた。今まで彼と共に戦ってきたが今の言葉はとりわけ心に響いた。
筑波は心優しい戦士である。彼は悪と戦う心と同時に人々をいたわる心も併せ持っている。
「心に優しさがないとライダーになれない」
かって本郷猛が言った言葉だ。彼等は改造人間だ。だがその心は人間である。
だからこそ哀しみを背負っている。孤独である。だがその哀しみと孤独を乗り越えて悪と戦い、人々を愛さなければならないのだ。
それがライダーなのだから。

がんがんじいもそれを知っている。だからこそ筑波のそんな言葉と心遣いが有り難いのだ。
「洋さん」
彼はまた筑波の名を呼んだ。
「何だい」
「夕食にしましょうや、そろそろ」
「もうそんな時間か」
見れば夕陽が沈もうとしている。家からは煙があがってきている。
「じゃあ何処かで食べよう。羊がいいな」
「今日はわいがおごりますわ」
「え、いいよそんなの。いつも通り割り勘でいこうよ」
実は食べる量はがんがんじいの方がずっと多い。しかしそれでも筑波は割り勘でいっているのだ。
「水臭いことはいいっこなしでっせ」
がんがんじいはそんな筑波に対して言った。
「今日はわいの奢りつったら奢りでっさかい」
「そこまで言うんなら」
彼も納得した。がんがんじいはそんな彼を押し立てるようにして前の店に入る。
そして二人は食事を採った。がんがんじいの言葉通り彼の奢りであった。
それを遠くから見る影があった。
「勲章か」
カーキ色の軍服に身を包んだ隻眼の男である。ゼネラルモンスターだ。

隻眼の軍人その三

「私にとっての勲章は一つしかないな」
彼は筑波達が入った店を見下ろしながら言った。
「それは筑波洋、貴様の命だけだ」
その目には冷たい炎が宿っていた。
「今度こそ貴様を倒す、ネオショッカーの時以来の我が悲願を果す為にな」
その後ろに数人の戦闘員が姿をあらわした。
「ゼネラルモンスター」
「何だ」
彼は後ろを振り返ることなく答えた。
「既にバグダットに怪人の配備を終えました」
「そうか」
彼は相変わらず振り返ることなく答えた。
「ではそろそろ作戦を発動するとしよう」
「ハッ」
戦闘員達は敬礼した。
「アメリカ軍も原理主義者も関係ない。我等はこのバグダットを占領するのみだ」
「はい」
「そしてここを拠点に中東を征服する。わかっておるな」
「当然でございます」
「ならばよい」
ゼネラルモンスターはそれを聞いて頷いた。
「その時には時空破断システムで全てを破壊する。そしてその廃墟のあとに我がバダンの世界が築かれるのだ」
彼はここでニヤリ、と笑った。
「よいな、そしてその為には」

眼下を見下ろす。
「スカイライダー、筑波洋は必ず除いておかなければならない」
ゼネラルモンスターは姿を消した。そしてあとには硝煙の匂いが漂っていた。
「フム、もうすぐはじまるか」
ゼネラルシャドウは赤い円卓の上でトランプ占いの結果を見て呟いた。
「ゼネラルモンスターも本気を出すか」
そのカードの結果は彼に戦いを知らせていた。
「これは面白いことになりそうだ」
「気楽に言うな」
ここで何者かの声がした。
「奴が時空破断システムを使用して中東を廃墟にしたならばこのシチリアにも影響が出るかも知れないというのに」
部屋の中に巨大な火の球が姿を現わした。
「貴様か」
シャドウはその火球を見て口の端を歪めて笑った。
「貴様はそれがわかっているのか」
百目タイタンは火球から姿を現わしてシャドウに対して言った。
「当然だ」
シャドウは口の端を歪めたまま答えた。
「そうでなくてはどうして楽しめるというのだ」
「フン」
タイタンはそれを見てその無数の目を歪めさせた。
「その時の手は打ってある、とでもいうつもりか」
「そうだ」
シャドウはあえて素っ気無い様子で答えた。
「もっともそれは貴様も同じだと思うがな」
「確かにな」
タイタンはそれを聞いて含み笑いを漏らした。

「俺は地底にいればいいからな」
「それは俺も同じこと。既に本拠地は別のところにある」
「ほう、ではこのシチリアを俺に明け渡すつもりか」
「残念だがそうではない」
シャドウは杯を空にすると言った。
「このシチリアはあの男との決着を着ける場だ。貴様に渡すわけにはいかぬ」
「それは俺とて同じこと」
タイタンはシャドウを見据えて言った。
「俺もあの男と決着を着けなければならんからな。その為に死神博士の力を借りた」
「そうか、それは何よりだ」
「今の俺はあの男にも勝てる、貴様の出る幕はない」
「それはどうかな」
シャドウはそれに対して冷笑で返した。
「どういうことだ」
タイタンはその言葉に顔を向けた。無数の目がシャドウを睨む。
「例えば、だ」
シャドウはトランプのカードを切りながら言う。
「貴様がここで死んだとしたならば」
「やるつもりか」
タイタンはその言葉に身構えた。
「安心しろ」
カードを切り終えたシャドウは言った。
「今貴様は死ぬ運命にはない。カードにはそう出ている」
「またカードか」
シャドウは構えを解きとシャドウの前のカードを見て言った。
「占いなぞで何がわかるというのだ」
「全てがわかる」
シャドウは皮肉な言葉を吐くタイタンに対して素っ気なく返した。

「俺の占いが外れることはない。それで俺は今まで戦ってきたのだ」
「フン」
タイタンはそれを聞き顔を一瞬そむけた。

隻眼の軍人その四

「どのみち勝てなければ意味はない。あの男に勝ってこそ、だ」
「その為に未来を知っていて損はないぞ」
「そんなものは自分の手で掴むのだ」
タイタンは言った。
「この力でな。時として奪い取る。それがバダンの掟だ」
右手を顔の前に開いて言う。そこには赤い炎が漂っている。
「確かにそうだ。しかし俺は違う」
シャドウは反論した。
「俺はあくまでカードに従って動く。そこから全てがはじまりますのだ」
「ならばそうするがいい」
タイタンは突き放すようにして言った。
「どちらにしろストロンガーを倒すのは俺だ」
「それはどうかな」
シャドウも負けてはいない。
「奴を倒すのは俺だとカードが教えているが」
彼はそこでタイタンに対し一枚のカードを見せた。スペードのキングである。
「これが何を意味するか、わかるな」
「わからんな」
タイタンはそれを見てもなおうそぶいた。
「俺はカードなぞ信じぬからな」
「そうか。ならばいい」
シャドウはカードを引っ込めた。
「いずれわかることだしな。中東での戦いの結果も」
「ゼネラルモンスターか」
タイタンは中東と聞き思い出したように言った。
「どう戦うかな」

「それは占ってはおらぬ」
シャドウはその言葉に対して言った。
「そこまで占っては面白くはないだろう」
「確かにな。珍しく意見が合ったな」
タイタンはそれを聞き不敵に笑った。
「ではゆっくりと観戦させてもらうとするか」
タイタンはそう言うと踵を返した。
「ストロンガーとの戦いに備えると共にな」
「それがいいだろうな」
シャドウはタイタンの背にかけるように言った。
「だが覚えておけ」
タイタンは振り返ることなく言った。
「ストロンガーを倒すのはこの俺だ。俺以外の誰にも倒させはせん」
「覚えておこう。一応はな」
「フン」
タイタンはそこで姿を消した。炎の燃えカスがあとに残ったがそれもすぐに消えた。
「行ったか」
シャドウはその燃えカスが消えるのを見ていた。
「どのみちカードの運命には逆らえぬということを知るだおうな」
そう言うと椅子を後ろに向けた。手には杯がある。
戦闘員が一人入って来た。ボトルを持っている。そしてシャドウの持つ杯に酒を注ぎ込んだ。白いワインである。
「ご苦労」
シャドウは酒を受けて言った。そして彼に対して指示した。
「モニターを」
「わかりました」
戦闘員は頷くとテーブルにある一つのボタンを押した。するとシャドウの前に映像が浮かんできた。
「では見せてもらうとするか、ゼネラルモンスターの戦いぶりを」

彼は杯を口に含んだ。そしてまた飲み干した。
「酒もある。今は酒と戦いに酔うとしよう」
彼はその皮膚のない顔を無気味に歪めて笑った。そしてモニターに映る戦いから目を離すことはなかった。
モニターにはスカイライダーが映っている。彼はバグダット郊外で怪人達と戦っていた。
「ウオーーーーーーーッ！」
ジンドグマの突進怪人マッハローラーが突撃を敢行する。スカイライダーはそれを紙一重でかわした。
「フンッ！」
その入れ替わりに襲い掛かって来る戦闘員を倒す。彼の隣にはがんがんぎいがいる。
「ライダー、雑魚はわいがやりますわ！」
「頼む！」
スカイライダーはそう言うと怪人に向かって行った。マッハローラーはそれを見るとまた突進した。
「ライダーに一度使った技は」
スカイライダーはその突進から目を離すことなく言った。
「二度と通用せん！」
屈んだ。そして足払いを仕掛ける。怪人はそれでバランスを崩した。
そこで怪人の身体を掴んだ。そしてそのまま激しく回転した。
「竹トンボシューー-トッ！」
上に向けて放り投げる。そして自らも跳んだ。
「喰らえっ！」
怪人に蹴りを放つ。マッハローラーはこれで爆死した。
怪人を倒し着地するスカイライダー。そこに新たな怪人が襲い掛かって来た。
「ウクククククククッ！」
ショッカーの凝結怪人ヤモゲラスである。怪人は無気味な声をあ

げライダーに向かって来た。
怪人は口から白い液体を吐き出してきた。ライダーはそれを左に動きかわす。
「凝結液か」
見れば後ろにいた戦闘員がそれを浴び固まった。スカイライダーはそれを見て身構えた。
両者は睨み合った。ヤモゲラスは口からまた吐き出そうとする。
「ムッ」
その時に一瞬隙が生じた。それを見逃すスカイライダーではなかった。
「トオッ！」
ライダーは跳んだ。そして怪人の頭上にやって来た。
「受けてみろ」
彼は空中で前転した。そして両足で怪人を踏み付ける。
「必殺飛び石砕きっ！」
彼は怪人を踏んだ。それも幾度となく踏んだ。
そして上に跳んだ。着地した時怪人は彼の後ろで倒れ爆発して果てていた。
「見事だ」
ゼネラルシャドウはそれを見て言った。だが彼と同時にもう一人の男もぞう言っていた。
「ムッ！？」
シャドウはその言葉を聞き耳を澄ませた。そしてモニターを見る。
「ほほう」
モニターを確認した彼は笑った。そしてまた椅子に身体を沈め観戦に戻った。
スカイライダーの前に一人の男が姿を現わした。ゼネラルモンスターである。
「久し振りだな、スカイライダー」
彼はゆっくりと前に進みながらスカイライダーに話しかけてきた。

隻眼の軍人その五

「いや、筑波洋よ」
「何の用だ、ゼネラルモンスター」
スカイライダーは彼を見据えて問うた。
「挨拶に来た」
「挨拶だと！？」
「そうだ」
彼はスカイライダーをその右目で凝視したまま言った。
「貴様に最後の勝負を挑む為にな」
「最後の、か」
「そうだ。今までの戦いに終止符を打つ」
ゼネラルモンスターの声は何時にも増して低く、強いものであった。
「この砂漠の都バグダットが貴様の墓場になる」
「その言葉、全て貴様に返す」
スカイライダーは言い返した。
「俺は負けるわけにはいかない。そしてゼネラルモンスターよ」
彼を指差した。
「貴様を今度こそ完全に地獄に叩き落してやる」
「言ってくれたな」
ゼネラルモンスターはそれを聞き右眼を光らせた。
「そうでなくては面白くない」
そして一瞬だがニヤリ、と笑った。
「ではあれを見るがいい」
彼はそう言うと右手のステッキで後ろを指し示した。
「ム！？」
スカイライダーはそちらに顔を向けた。それを見たライダーの顔が見る見る強張っていく。

「な・・・・・」
バグダットの郊外に巨大な塔が登ってきた。それは古代メソポタミアの建築様式で造られたものであった。
「あれはまさか・・・・・」
スカイライダーはそれが何かすぐにわかった。戦闘員達を倒し終え隣にいたがんがんじいの顔も強張っていく。
「そうだ、バベルの塔だ」
ゼネラルモンスターは二人に対して言った。
「かって神の世界に行こうとし、その神の怒りに触れた不遜の塔だ」
バダンは今それを復活させたのであった。
「そしてこの塔がバグダットを滅ぼすのだ」
「どういう意味だ!?」
「すぐにわかる」
ゼネラルモンスターは素っ気無い様子で言った。
「その時には貴様も全てが終わるが」
「何っ」
「スカイライダーよ」
ゼネラルモンスターは激昂しようとするスカイライダーに対して言った。
「このバグダットを救いたくばバベルの塔に来い。そして私を倒してみよ」
「望むところだ、ゼネラルモンスター」
スカイライダーは再びゼネラルモンスターを指差した。
「今度こそ貴様を倒す!」
「楽しみにしている」
彼はそう言うとライダーと正対したまま後ろに下がった。
「来た時が貴様の最後だ。よく覚えておくがいい。スカイライダー、貴様は私が倒す」
そして姿を消した。ゼネラルモンスターは影と共に消えた。
「行きましたな」

「ああ」
ライダーはがんがんじいに答えた。
「もうすぐ奴との最後の戦いか」
彼は塔を見て言った。
「生きて帰れる保証はない」
がんがんじいはそれに対して黙って頷くだけであった。
「だがそれでも行かなくちゃな」
「そうでんな」
がんがんじいはまた頷いた。
「そうでんな、ってがんがんじいまさか」
「洋さんだけやとしんどいでっしゃろ、わいも行かせてもらいますわ」
「しかし・・・・・・」
スカイライダーは自分だけで行くつもりであった。
敵は強い。おそらく塔の中には予想もできない数多くのトラップがあるだろう。だからこそ彼は一人で行くつもりだったのだ。
「前にも言ってくれましたやんか、わいも正義の戦士やって」
「ああ」
それは真実だ。スカイライダーにとってがんがんじいはもはや常に頼りになるパートナーであった。
「そうだよ筑波君、悪と戦っているのは君だけじゃない」
後ろから声がした。
「博士・・・・・・」
そこには志度博士が笑顔で立っていた。
「どうしてここに」
「君がバグダットにいると聞いてね。そして激しい爆発の音が聞こえてきたからもしやと思って来たんだ」
「そうだったんですか、お恥ずかしい」
「いや、恥ずかしいことじゃないよ」
やはり彼は筑波に対し微笑んでいた。

「君の見事な戦いを見せてもらったのだから。そして」
彼は言葉を続けた。
「今度はそれをバベルの塔で見せてくれ」
「わかりました」
スカイライダーはその言葉に対し頷いた。
「よし、じゃあ行こう」
彼はここでライダーとがんがんじいの肩に手を置いた。
「ええ」
「わかってますがな」
二人は頷いた。博士はそれを見てまた微笑んだ。
「じゃあ行こう、悪の塔へ」
そして三人は塔へ向かった。ゼネラルモンスターが待つ悪の本拠地へ。

隻眼の軍人その六

その頃暗闇大使はバダン日本支部で作戦の準備にあたっていた。
「ゼクロスとライダーマンの動きはどうか」
彼は指令室で戦闘員の一人に尋ねた。
「ハッ、今のところ目立った動きはありません」
その戦闘員は敬礼をして答えた。
「そうか。今何処にいるのだ」
「アミーゴを本拠地として我々のことを探っている模様です」
「ふむ」
彼はそれを聞き顎に手をあてた。
「あの二人がか」
彼には思い当たるところがあった。
「どちらも諜報には長けている。ライダーマンは頭が切れる。ゼクロスはまさに機械化された忍者だ」
「忍者ですか」
「そうだ」
大使は戦闘員の言葉に答えた。
「気をつけろ。忍者は影の中に潜みそこから襲い掛かる」
「魔物のようですね」
「魔物よりも手強い。かって忍者を従えた者がこの日本を制したとまで言われる」
「日本をですか」
「うむ」
彼はまた頷いた。
「それだけ忍者の力は絶大だったのだ」
戦国大名達は皆そうであった。武田信玄もそうであったし北条氏康もそうであった。徳川家康は伊賀忍者の力で天下人になったところが大きい。

その伊賀を攻めた織田信長にしてもそうだ。彼の配下には蜂須賀正勝や滝川一益等忍出身の者がいた。彼は諜報戦も得意としていたがそれは彼等の力があってのものであった。

その忍者は江戸時代においても隠密として活躍した。彼等はまさに歴史の影として活躍してきたのだ。

「だからこそ油断してはならん」

「わかりました」

「油断したならば一瞬にしてこのバダンも壊滅させられる。そう、一瞬にな」

「フン、相変わらず心配性だな」

ここで暗闇大使の声と全く同じ声が聞こえてきた。

「・・・・・貴様か」

大使は声のした方を不機嫌そのものの顔で見た。

「貴様はないだろう、折角会いに来てやったというのに」

「呼んだ覚えはない」

暗闇大使は嫌悪に満ちた声を返した。

「そう言うな。長い付き合いではないか」

「誰がっ」

大使はここで激昂した。

「貴様とのことなぞ我が記憶から全て消し去っておるわ」

「嘘を言う必要はない」

声は余裕のあるものであった。

「我々はあの時から一緒ではないか」

陰から銀と赤の右足が出て来た。

「あのスラム街で生まれた時からな」

声の主が姿を現わした。地獄大使であった。

「我々はあのベトナムのジャングルで共に戦った仲ではないか」

彼はまるで毒蛇の様な笑みを浮かべながら言った。

「誰が」

暗闇大使は彼を睨みつけていた。

「わしは司令官、貴様は参謀総長としてな。中々の名コンビだったな」

「ふざけるな、貴様はわしを利用していただけだっ！」

暗闇大使は語気を荒くさせていた。

「フランスとの戦いでも、アメリカとの戦いでも、中国との戦いでもそうだった。貴様は単にわしを利用していただけではないか！」

「馬鹿なことを言う」

だが地獄大使はそれに対して冷笑で以って応えた。

「それがあの戦争だったのではないか」

「どういう意味だ」

暗闇大使はまだ地獄大使を睨んでいる。

「あの戦争では全ての国民が駒に過ぎなかった。ホーチミンですらな」

ベトナムの一連の戦争であった。

まずフランスがこの地を植民地とした。そして第二次世界大戦の時に日本軍がやって来た。ここでも彼等は学校を建て現地民に対して厳格な教育を施した。融通が利かずしかもすぐ手をあげる日本の軍人達をわずわらしく思いながらも彼等はそこに自分達の進む道を見た。

「日本軍とも手を結ぶことが出来ていれば喜んで結んでいた」

当時を生きたベトナム人でこうした考えの者もいた。ベトナム共産党もである。

彼等が他の共産党と決定的に異なるのは彼等はあくまで民族主義者であったということだ。共産主義は独立を達成する為の錦の御旗に過ぎない。指導者であるホーチミンもそうした考えであった。

「共産主義なぞ何の役にも立たない」

彼等は後に自らの行動によりそれを公言した。現在のドイモイ政策である。

こうしたしたたかな国である。その国民も粘り強かった。

日本の敗戦後フランス軍がまたやって来た。彼等はまたベトナムを植民地にする為に戻って来たのだ。

彼等は前と同じようにベトナムを統治できると思っていた。だがそれは誤りだった。

ベトナムはホーチミンに率いられていた。そして彼等は日本軍の心を学んでいたのだ。

彼等は強かった。裸足の軍隊が近代装備のフランス軍を圧倒していたのだ。そして遂にフランス軍の本拠地難攻不落と言われたディビエンフー要塞が陥落した。これでフランスはベトナムを去った。

ところがここでベトナム共産党の伸張を快く思わないアメリカが介入してきた。彼等は南ベトナムに傀儡政権を置くとそれを援助する形でベトナムに介入してきた。その圧倒的な物量でベトナムを制圧しようとしたのだ。

だがアメリカ軍も苦戦した。彼等はジャングルに潜み、そこから攻撃を仕掛けた。農村にも都市にも潜んでいた。さしものアメリカ軍も彼等の神出鬼没の攻撃に手を焼いた。

隻眼の軍人その七

そこでベトナムは外交にも訴えた。アメリカこそが侵略者であり自分達は被害者だと。これは国際世論と何よりも国内の支持を失ったアメリカにとって致命的であった。

結果としてアメリカは敗れた。そしてベトナムは統一されたがここでまた敵が出て来た。

中国である。彼等は歴史的にベトナムを自分達の領土の一部だと考えていた。その中国がベトナムに雪崩れ込んできたのだ。

しかしそれも退けた。さしもの中国もベトナムの卓越した戦術の前に退くしかなかったのだ。

その後はアメリカ、中国、ＡＳＥＡＮ諸国との対立が続いた。しかし彼等はソ連と組みこれに対抗した。冷戦が終わるとこれ等の国々との関係を改善しＡＳＥＡＮにも加入した。そして日本にしきりにラブコールを送っている。

こうした優れた戦闘力と外交能力を持つベトナムが最も評価する国の一つが日本である。ベトナムの外交官の一人が日本軍の戦いを聞いて思わずこう言ったという。

「一度に二万の海兵隊を倒したなんて信じられない。日本軍の様に強い軍隊は今までない」

硫黄島での戦いだ。この歴史に残る壮絶な死闘はさしものベトナム人達も想像できないものであったのだ。

そうした長年に渡る死闘を潜り抜けてきたのがこの二人だ。だが彼等はそれでも互いを憎み合ってきた。

「貴様はあの時何をした」

「ショッカーより前のことは覚えておらぬ」

地獄大使はとぼけてみせた。

「わしにはもう何の意味もないことだからな」

「ふざけるな」

暗闇大使はそんな彼にくってかかった。
「何時でもそうだった。功績は常に貴様のものだった。わしは貴様の陰に過ぎなかったのだ」
「それが参謀であろう」
地獄大使は素っ気なく言った。
「貴様には表に出る能力がなかっただけのことだ。自身の無能を棚にあげてそのようなことを言うとは」
彼はここで従兄弟を侮蔑した目で見た。
「知の魔神の名が泣くぞ」
「言うな、わしは暗闇大使だ。その名はもうない」
叫ぶその目はもう血走っていた。
「このバダンの最高幹部だ！」
「フフフ」
地獄大使はそれを聞いて急に笑みを変えた。
「どうした？」
侮蔑が消えていた。何処か親しげな笑みであった。
「そうだ、バダンの最高幹部だったな」
「それがどうした」
暗闇大使はそれを聞き一瞬戸惑った。
「いや何も」
地獄大使はあえてからかうような顔をした。
「今のところは、という意味だったな」
挑発する為に。
「貴様っ！」
やはり暗闇大使は激昂した。左手に持つ鞭をこちらに向けようとする。
「面白い。ここでやるつもりか」
「だとしたらどうする！」
暗闇大使は感情的な声で言った。
「いや」

やはり地獄大使はからかうような顔をしている。
「最高幹部にしては軽率であるな、と思ってな」
「ム」
暗闇大使はその言葉に我に返った。
「フフフ」
地獄大使はその様子を楽しそうに見ている。
「落ち着くがいい。部下も見ているしな」
彼はあえて彼を宥めるようにして言った。
「ところで本題に入ろう」
地獄大使はここでようやく本題を言うことにした。
「時空破断システムだがな」
「うむ」
暗闇大使は内心で怒りを沸騰させていたがあえてそれを隠し応えた。
「あれはネクロノミコンの力を使っているな」
「だとしたらどうする」
暗闇大使は憮然とした顔で問うた。
「いや、だったらいいのだ」
地獄大使は納得した顔で頷いた。
「だとすればこちらも安心して使えるというものだ」
「もとは貴様が持っていたものだからな」
暗闇大使は言った。
「そうだ、わしがあえて貸してやったものだ」
「有り難く使わせてもらった」
「しかしそれだけではないだろう」
地獄大使はここで問うた。
「どういう意味だ?」
「ネクロノミコンだけで開発したわけではないだろう、と聞いているのだ」
「フン、察しがいいな」

「貴様の考えていることはわかる」
地獄大使は言った。
「何しろ血を分けた従兄弟同士なのだからな」
「不幸にしてな」
暗闇大使は再び顔を憮然とさせた。
「フフフ」
地獄大使にとってその様子がたまらなく面白いようだ。
「その力、何なのかと思ってな」
「それを聞く為にわざわざ日本に来たのか」
「まあな」
「わしが貴様に教えると思っているのか」
「言っただろう、わしには貴様のことは全てわかると」
「それはわしも同じだがな」
暗闇大使は言い返した。

隻眼の軍人その八

「そうだな。これでわしの知りたいことはわかった」
「そうか」
暗闇大使は相変わらず憮然とした様子で言った。
「ならば去れ」
「言われずともな。誰が好き好んで貴様と会うものか」
地獄大使はここで嫌悪感をあらわした。
「わしはこれで持ち場に去らせてもらう。だが一つ忘れるな」
「何だ」
暗闇大使は顔を向けた。
「貴様の椅子は仮のものに過ぎんということをな」
「そうか」
ここは気にもかけぬふりをした。
「いずれ・・・・・わかっているだろうな」
「何のことだ」
「フン、まあいい」
地獄大使は背を向けた。
「ショッカーの時からの掟だ。力こそが絶対だ」
「ならばわしの勝ちだな」
「言っておれ。それもいずれわかることだ」
地獄大使は背を向けたまま言った。
「その時を楽しみにしておれ」
「貴様の最期をな」
地獄大使はその言葉を聞き流し指令室をあとにした。暗闇大使はそれを見送りながら呟いた。
「あの男、気付いているのか」
彼はいぶかしんでいた。
「時空破断システムの秘密に」

それは彼と首領だけが知っていることである」
「いや」
しかし彼はここで首を横に振った。
「黒い光のことは誰も知らぬ筈だ。わしと首領以外は」
トロントでゼクロスに見せたあの光のことである。
「あの光がある限りわしの力は絶対なのだ」
彼は自分に言い聞かせるようにして言った。
「地獄大使、いやダモンよ」
彼は従兄弟の名を口にした。
「今度は貴様の後塵は拝さぬぞ。決してな」
その目には憎悪の光が宿っていた。
「今のわしの力をとくと思い知らせてやる」
彼はそう言うとその場から姿を消した。そして闇の中に沈んでいった。
筑波とがんがんじい、そして志度博士の三人はバベルの塔の前にいた。
「遂に来たな」
博士はその塔を見上げて言った。
「ええ」
二人はそれに対して頷いた。やはり上を見上げている。
「かって神の世界に行こうとして建てられた塔が今は悪の世界をもたらす為にある」
博士の言葉は神話を語るように神秘的なものであった。
「その塔を崩し中東に平和をもたらさなければならない。その為に」
左右にいる二人を見回した。
「行こう」
「はい」
二人は頷いた。見ればがんがんじいは既に鎧を着込んでいる。
筑波は人間の姿のままだ。だがすぐに腰からベルトを取り出した。
「行きますよ」

「うん」
二人は筑波の言葉に頷いた。筑波はゆっくりと変身の構えをとった。

スカイ・・・・・・
まず両手を拳にし脇に入れる。そして右手を前に突き出した。
すぐにそれを引っ込め左手をかわりに前に出す。その掌を拡げる。
そして手刀にすると右から左に旋回させる。
身体が黄緑のバトルボディに覆われ手首と足首が黒い手袋とブーツに覆われる。
変身！
その左手を脇に入れる。そして手刀にした右手を左斜め上に突き出す。
顔の右半分が黄緑の仮面に覆われる。左半分もすぐに。目が紅く光った。

光が全身を包む。光が去るとそこにはスカイライダーがいた。
「行きましょう」
「うん」
スカイライダーの言葉に今度は博士とがんがんじいが頷いた。三人はライダーを先頭に塔の中に入って行く。
塔の中は玄室と螺旋階段により繋がれていた。二人は玄室を通過し階段昇っていく。玄室と玄室の間は空洞になっている。
「ライダー」
がんがんじいは階段を昇りながらスカイライダーに尋ねた。
「何だい」
ライダーはその質問に対して問うた。
「空から上には行きまへんねんな」
「うん」
ライダーは頷いた。

「バダンの連中は中にいるからね。それに中の方が何かある可能性が高いし」
ライダーは言葉を続ける。
「屋上は守りが堅いだろうし。まずは中で敵の戦力を減らしていこうと思って」
「成程」
博士とがんがんじいはそれに納得した。
「それに」
ライダーは言葉を加えた。
「それに？」
「二人をそのままにしてはおけないから」
「ライダー・・・・・」
二人はここであらためてライダーの優しさを知った。
三人は螺旋階段を進んでいく。そこへ怪人達が姿を現わした。
「来たな」
「ホオーーーーーーーッ！」
デストロンツバサ一族の予言怪人火炎コンドルである。怪人は階段の上にいる三人に襲い掛かってきた。
「ここは俺に任せてっ！」
スカイライダーは二人にそう言うと跳んだ。そして怪人に向かっていく。

隻眼の軍人その九

「頼む！」
二人はそれに従い階段を昇っていく。前に戦闘員達が現われるがそれも倒していく。戦闘員達が悲鳴と共に暗闇の中に落ちていく。
火炎コンドルはスカイライダーに向けて体当たりを敢行しようとする。ライダーはまずその一撃をかわした。
「甘いな」
怪人は旋回した。そして今度は爪で切り裂こうとする。
口から火を吐く。だがスカイライダーはそれを全てかわした。
「無駄だ」
今度はライダーの攻撃であった。まずはパンチを繰り出す。
だが怪人もさるものである。それはかわす。
「やはりな」
それを見たライダーは後ろに退いた。そこに隙が生じた。
「今だっ！」
火炎コンドルはそこに襲い掛かった。両手の爪でスカイライダーの胸を切り裂かんとする。
「かかったな！」
そこでライダーは怪人の両手を掴んだ。そして思いきり後ろへ放り投げる。
「ギッ！」
怪人は壁に叩き付けられた。そこから立ち直り再び向かって来る怪人にスカイライダーは蹴りを繰り出した。
「スカイキィーーーーーーック！」
それは怪人の胸を貫いた。怪人は首をビクッ、とあげたがすぐにそれを垂れさせた。そしてスカイライダーの脚が抜かれると下に落ち爆死した。
ライダーは二人の元へ戻った。そして再び階段を昇る。

扉が見えてきた。するとそこが開いた。
「ム」
中から怪人が姿をあらわした。ショッカーの毒針怪人蠍男である。
「シュッシュシュッ」
怪人は奇妙な鳴き声をたてながらスカイライダーに向かってきた。
「こんなところで出て来るとは」
スカイライダーは前に出た。すると後ろから別の声が聞こえて来た。
「ルロロ、ルロロ！」
ブラックサタンの食虫怪人奇械人カメレオーンである。怪人は戦闘員達を引き連れ階段を昇っていく。
「ライダー、後ろはわて等に任せて！」
「君は前の怪人を！」
がんがんじいと博士が後ろの怪人達へ向かう。
「すまない！」
スカイライダーはそれを受けて前の蠍男へ向かう。怪人はそこに鋏を繰り出してきた。
「そうくると思った！」
彼はその鋏をかわした。怪人は続けて拳を繰り出す。
だがライダーはそれもかわした。そして脚払いを仕掛ける。
「シュッ！？」
怪人はそれでバランスを崩した。壁の方に倒れ掛かる。
そこでライダーは攻撃を仕掛けた。怪人の顔めがけ拳を浴びせた。
「スカイパァーーーーンチッ！」
一撃だけではなかった。続けて出す。それは怪人の頭部を激しく打ち据えた。
「シュッ・・・・・」
それで終わりであった。怪人は最後に一声叫ぶと崩れ落ちた。そして先の火炎コンドルと同じく闇の中へ落ちその中に消えた。最後に下の方で爆発が起こった。

「よし」
後ろを振り向く。見れば博士とがんがんじいが怪人達に苦戦している。
「ルロロロロロロ」
奇械人カメレオーンは左手を回転ノコギリに変形させた。そしてそれで二人を切り裂かんとしている。
「うわあっ！」
がんがんじいは慌ててそれをかわす。あまり格好のいい動きとは言えないがそれでも何とかかわしている。
「がんがんじい、無理をするんじゃない！」
博士はそんな彼に対して言う。言いながらがんがんじいをフォローしている。
「そうは言いましても」
彼にも引けない理由があった。今後ろではスカイライダーが戦っているのである。自分がしっかりしなくては彼にいらぬ負担がかかるのだ。
「そうだがんがんじい、ここは俺に任せろ！」
「その声は！」
後ろを振り返る。そこに彼がいた。
「よくやってくれた、あとは俺がやる！」
「はいな！」
彼等は場所を入れ替わった。スカイライダーが怪人の前に出て来た。
「行くぞっ！」
「ルロロロロロッ！」
怪人はライダーが前に出ると奇声を発した。すると急に姿を消した。
「保護色か」
カメレオンの怪人の特色である。彼等はカメレオンの能力で姿を消すことができるのだ。彼もそれは今までの戦いで知っていた。

「何処にいる」
ここは動かないことにした。どのみち階段には自分がいる。そこより後ろには回れない。攻撃は前からしか来ない。それがわかっているから気持ちは楽であった。
「さあ、どうする」
ライダーは姿を見せぬ怪人に問うた。その時であった。
何かがライダーの首めがけ襲い掛かってきた。彼はそれをかがんでかわした。
「来たなっ！」
ライダーはかがみながら前に拳を繰り出した。鈍い音と共に確かな手ごたえが拳に伝わった。
「ガハッ・・・・・」
怪人が血を吐きながら姿を現わした。ライダーはそれをのがさなかった。
「スカイスルーーーーッ！」
怪人を掴み壁めがけて放り投げる。ライダーの拳をまともに腹に受け弱っていた怪人にそれをかわすことは不可能であった。

隻眼の軍人その十

怪人は頭から壁にぶつかった。これでゆっくりと下に落ちていった。そしてまた爆発が起こった。

「これでよし」

ライダーはその爆発を見下ろして言った。そして上にいる二人に顔を向けた。

「じゃあ上に」

「よし」

二人はそれに対して頷いた。そして合流し扉をくぐった。

三人が入ったのは玄室であった。そこには何もなかった。左右に燭台が数台ずつ置かれているだけであった。

「ここは」

「スカイライダー、貴様が死ぬ場所だ」

ここで前の扉が開いた。そこから怪人が姿を現わした。

「ググググググ」

ドグマの蜘蛛怪人スパイダーバンであった。怪人は右手に持つ刀でライダーを差しながら言った。

「先に貴様に倒された仲間達の仇、とらせてもらう」

「来い」

ライダーは構えをとりそれに応えた。両者は間合いを詰めた。

「喰らえっ！」

怪人は左手から糸を放ってきた。

「ムッ！」

それはライダーの右腕を絡めとった。怪人はそれを見て会心の笑みを浮かべた。

「今度こそ貴様の最後だっ！」

一気に間合いを詰める。そして右手に持つ刀でライダーの首を断ち切らんとする。

だがそれは適わなかった。
「させんっ！」
ライダーはそれより前に残る左手で攻撃を繰り出した。怪人の右の手を手刀で打ったのだ。
「グオオッ！」
怪人はそれを受け思わず叫んだ。そして不覚にも刀を手放してしまった。
「よし！」
ライダーはその刀で糸を断ち切った。そして怪人にあらためて対峙した。
「まだだっ！」
スパイダーバンはそこにまた糸を放ってきた。だがライダーに一度見せた技は通用しない。
ライダーは右にステップしそれをかわした。そして左斜め前に跳び一気に怪人に襲い掛かった。
「フンッ！」
回し蹴りを繰り出す。それは怪人の後頭部を撃った。
「ウッ！」
思わず呻き声をあげる。ライダーはそこに続けざまに攻撃を仕掛けた。
拳を出す。怪人の左頬をまともに打った。
そこで怯んだ怪人を掴んだ。そして後ろに叩きつけた。
「スカイバックドロップ！」
プロレス技で有名なバックドロップだった。これをまともに受けた怪人はこれで倒れた。
そして爆発して消えた。これでこの玄室での戦いも終わった。
三人はさらに上を目指した。そして遂に頂上に辿り着いた。
「ここは」
そこは何層にもなったバルコニーであった。様々な植物が植えられ、花々が咲き乱れていた。清らかな水が流れ、砂漠の中にあると

はとても思えぬ光景であった。
「これはまさか」
三人はこれが何か知っていた。
「そうだ、あの伝説の遺跡だ」
三人の前にあの男が姿を現わした。
「ゼネラルモンスター」
彼等はその男の姿を認めてその名を呼んだ。
「よくぞここまで来た、スカイライダーよ」
ゼネラルモンスターはスカイライダーに対して言った。
「かって世界七不思議の一つと言われたバビロンの空中庭園にようこそ」
「バビルの塔の上に置くとは」
「凝った演出だろう、これも貴様と戦うのに相応しい場所を作る為だ」
「俺とか」
「その通り、見ろ」
ゼネラルモンスターは右手に持つステッキで庭園の頂上を指し示した。
「ム」
三人はその指し示した方を見た。そこには何か巨大な鏡のようなものがあった。
「とくと見るがいい」
ゼネラルモンスターがそう言うとその鏡に何かが宿った。
「あれは・・・・・・」
それは闇の様に見えた。
「いや、違う。あれは闇じゃない」
博士はそれを見て顔を青くさせた。
「あれは・・・・・・」
その黒いものは次第に鏡を覆っていった。
「黒い光だ！」

「まさか、そんなものがこの世に・・・・・・」
「存在する筈がない、と言いたいのだな」
ゼネラルモンスターはスカイライダーに対して言った。
「しかしこれは事実だ。その証拠に見せてやろう」
その言葉と同時に鏡を覆っていた黒い光が前方に放たれた。
それは光線となり前方を襲った。黒い光が通った場所が全て闇の中に消えていった。
「な・・・・・・」
三人はそれを見て絶句した。前にあった岩山が一瞬にして消え去ったのだ。
「どうだ、この光の力は」
ゼネラルモンスターは満足そうな声で言った。
「素晴らしいものだろう」
「ゼネラルモンスター、まさかこの黒い光で」
「そうだ、この中東を死の荒野に変えてやる」
スカイライダーに対して答えた。
「そしてそのあとに我がバダンの世界を築くのだ」
「クッ！」
彼はそれを聞きゼネラルモンスターに向き直った。
「そうだ、それでいい」
ゼネラルモンスターはそれを認めると不敵に笑った。

隻眼の軍人その十一

「どのみち貴様は倒さねばならないからな。我がバダンの為に。そして」

彼は言葉を続けた。

「この私のプライドにかけて」

「俺は違う」

ライダーはそれに対して反論した。

「ここにいる人々の為にゼネラルモンスター」

彼を見据えた。

「この黒い光を封じ、貴様を倒す！」

「そうか」

ゼネラルモンスターはそれを聞いて頷いた。

「ならば私を倒すがいい」

「そのつもりだ！」

彼は言い切った。

「フフフフ」

ゼネラルモンスターはそれを聞くと益々上機嫌な笑い声を出した。

「それでいい。ようやくあの時の借りを返せる」

彼は眼帯を取り外した。そこには赤い眼があった。

「行くぞ、スカイライダー」

見ればもう一方の目も変わっている。そして言った。

「ゼネラルモンスター、本体！」

掛け声と共にその身体が変わった。

そのカーキ色の軍服が黒い身体になる。帽子が角になり口からは牙が生える。そしてその左腕がヤモリに変形した。

ゼネラルモンスターの正体、ヤモリジンであった。

「行くぞっ！」

ヤモリジンは前に突進した。

「望むところだっ！」
スカイライダーも前に跳んだ。両者の拳が激突した。
「フンッ！」
ヤモリジンの右腕に鞭が現われた。それでスカイライダーを打ちすえようとする。
「グッ！」
それを左脇に受けた。思わず苦悶の声を出す。
攻撃はそれで終わらない。続けて鞭を繰り出す。
しかし一撃目こそ受けたもののスカイライダーも怯まない。脚を狙ったそれを上に跳びかわした。そして右脚で旋風脚を出す。
「フッ」
だがヤモリジンはそれを後ろに退きかわした。そして間合いをとるとニヤリ、と笑った。
「これをよけられるかな」
ヤモリジンは左右に分身した。そしてそのそれぞれのヤモリジンがライダーを取り囲んだ。
「分身か」
取り囲まれたライダーはそれを見て呟いた。
「その通り。そしてそれだけではない」
その全てのヤモリジンが攻撃を出す。無数の鞭がライダーを襲う。
「グオッ！」
激しく全身を打ち据えられる。思わず叫び声を出してしまった。
ゼネラルモンスターは後ろに戻った。すると分身が一つになる。
「フフフ、どうだ」
ヤモリジンは倒れ込むスカイライダーを見下ろして言った。その声にはあからさまな優越感があった。
「私の鞭は。かなり効くだろう」
「フン、残念だな」
ライダーはそれに対し言い返した。そして立ち上がった。
「この程度でライダーを倒せるとは思わないことだ」

「フン」
ヤモリジンはそれを見て言った。
「流石だな。もっともそうでなくては張り合いがないというものだ」
彼はそう言うと今度は左腕のヤモリの牙を鳴らさせた。
「次は別の方法で攻めてやろう」
立ち上がったスカイライダーに対してそのヤモリの首を伸ばした。
それは一直線にスカイライダーの首へ襲い掛かった。
「クッ・・・・・・！」
ヤモリの牙がスカイライダーの首を喰らう。ライダーは思わず苦悶の声を漏らした。
「さあ、これならどうする」
ヤモリジンはもがき苦しむライダーに対して言った。
「これはどうしても外すことはできない。外そうとすればする程その首に食い込む」
「ウウウ・・・・・・」
ライダーは何とか引き剥がそうとする。だがヤモリの牙はヤモリジンの言う通り剥がそうとすればする程ライダーの首に食い込んでいく。
「さあ、これで最後か」
ヤモリジンはそんな彼に対して言った。
「最後は苦しまないようにしてやろう。これでな」
右手に爆弾を持った。それでスカイライダーを始末しようというのだ。
「壮絶に散るがいい、最後はな」
彼は勝利を確信していた。だがスカイライダーは違っていた。
彼は諦めてはいなかった。勝機をまだ窺っていたのだ。
「まだだ」
ヤモリジンの左腕を見た。それはまだ彼の首にくらいついている。
しかし、だ。それを外さなくてはならない。何故か、ヤモリジンは今から爆弾を彼に投げるからだ。

この左腕は取り外しができない。従って爆発に巻き込まれない為にその瞬間外さなくてはならないのだ。

（その時だ）

しかしそれは一瞬である。それにダメージで満足に動けるかどうかさえもわからない。

それでも動かなくてはならない。勝つ為にだ。

ヤモリジンは勝ち誇った顔でゆっくりと爆弾を振り上げる。そしてそれを投げた。

「さあ、これで最後だ！」

ヤモリジンは叫んだ。そしてその瞬間左腕をスカイライダーから外した。

「今だっ！」

ライダーはそれを見てすぐに跳んだ。その瞬間までいた場所で爆発が起こった。

「ムッ！」

ヤモリジンは咄嗟に上を見た。そしてすぐに身構えようとする。

しかしライダーの方が早かった。彼は既に空中で攻撃の用意を整えていた。

「これで最後だヤモリジン、いやゼネラルモンスター！」

彼は激しく回転しながら言った。

「大回転・・・・・」

天高く舞い上がった彼は前転を繰り返しながら急降下する。

「スカイキィーーーーーーック！」

そして渾身の力を込めた蹴りを放った。それは身構えようとするヤモリジンのガードをかいくぐりその胸を撃った。

隻眼の軍人その十二

「ウオオオッ！」
ヤモリジンはそれを弾き返そうとする。だが力及ばず吹き飛ばされた。
激しく床に叩き付けられる。何度も床にバウンドし遂に止まった。
「決まったな」
スカイライダーは着地した。そして床に倒れ込む彼を見下ろして言った。
「見事だ」
ヤモリジンは立ち上がりながらスカイライダーに対して言った。
「どうやらまた敗れたようだな」
そしてゼネラルモンスターの姿に戻っていく。カーキ色の軍服の胸が血に染まっている。
「まさか二度に渡って敗れるとはな、この私が」
彼はここでニヤリ、と笑った。
「見事だ、スカイライダー」
「ゼネラルモンスター・・・・・」
その言葉に恨みも憎悪もなかった。ただ強敵を褒め称える言葉があるだけだった。
「私の負けだ。どうやら君は常に私より上にいたらしい」
彼は異様に清々しい顔で述べた。
「さらばだ。多くは言わない」
そして口から血を吐いた。
「早くこの塔から立ち去るがいい。私と死と共にこの塔は崩壊する」
「何と」
「私の身体には爆弾が埋め込まれている。私の死により爆発するようになっているのだ」
これは改造人間の常であった。

「それによりこの塔も崩壊する。さあ早く行け。私が倒れぬうちにな」
「・・・・・わかった」
スカイライダーは頷くと後ろを振り向いた。そこには博士とがんがんじいがいた。
「少し手洗いですが我慢して下さい」
そして二人を両脇に抱えた。そこでもう一度ゼネラルモンスターの方へ顔を向けた。
「ゼネラルモンスター」
彼に語りかけた。
「何だ」
「さようなら。見事だったぞ」
「礼を言う」
彼は死相を浮かべながらもそう言った。
「じゃあな」
スカイライダーは二人を抱え上にあがった。そして庭園から離れていった。
「フフフ、最後まで見事な男だ。味方であったならな」
ゼネラルモンスターはそう言うとゆっくりと前に倒れた。そして爆発の中に消えた。
それが合図だった。バベルの塔と空中庭園は爆発してしまった。
「これで終わりですね」
スカイライダーはそれを上から見下ろしていた。両脇に抱えられている二人は黙って頷いた。
「ゼネラルモンスターも遂に死んだか」
スカイライダーの声は感慨に満ちていた。そこには強敵を思う漢の心があった。
「ライダー・・・・・」
ライダーは何も答えない。だがその仮面が全てを物語っていた。
中東でのスカイライダーとゼネラルモンスターの戦いは終わった。

ライダーはここで長年の宿敵を遂に葬り去ったのだ。そして彼は中近東の平和も守ったのだ。
「ゼネラルモンスターも死んだか」
百目タイタンはモニターを消して呟いた。
「惜しい男だったが。何処か甘さがあったな」
「それは奴は軍人だったからだ」
同席していた男が言った。
「あの男はまず軍人であった。軍人は時としてその美意識に流されてしまう」
「お主は違うのだな」
タイタンは彼に対して問うた。
「当然だ。私ならばあのようなことはしない」
その男は毅然とした声で答えた。
「かって同じナチスにいても考えは違うということか」
「その通り」
彼はそう言うと立ち上がった。赤いマントが暗闇の中に現われた。
「フム」
タイタンは改めて彼を見上げた。
「そういえばお主は軍人としてナチスには入ったのではなかったのだったな」
「そうだ。私は科学者として入った」
赤いマントの男、ドクトル＝ゲーはそれに対して答えた。
「成程な。ナチスといっても科学者と軍人では違うのか」
「そういうことだ。私はあくまで冷徹にいく」
「仮面ライダーブイスリーとの勝負においてか」
「うむ」
ドクトル＝ゲーは頷いた。
「奴は必ず来る、私はあの男の考えることは全てわかるのだ」
「それは凄いことだ」
タイタンはやや冷ややかな声で言った。

「からかっているのか」
「いや」
彼はあえて余裕をもって首を横に振った。

隻眼の軍人その十三

「ただそれはある程度というところだろう」
「確かにな。それは否定しない」
彼は憮然としながらもそれを肯定した。
「だがそれだけで充分だ、奴は今上海にいる」
「ほう」
「そこで奴を倒す、あの魔都が奴の墓場だ」
「上海ごと消し去るつもりか」
「それでは面白くはない」
今度はドクトル＝ゲーが首を横に振った。
「仮面ラァーーーイダブイスリーはこの私の手で倒す。このドクトル＝ゲーの名にかけてな」
「ふむ」
タイタンはそれを興味ありげに聞いていた。
「そうでなくてはならん、奴はこの私の斧の前に倒れなくてはな」
「では上海はどうするのだ」
タイタンは彼に問うた。
「中国を滅ぼすのがお主の作戦だろう」
「それはわかっている」
ドクトル＝ゲーは言った。
「上海をまず廃墟にする。その手筈は既に整えている」
「そうか。どうやってするつもりだ」
「それを言ってしまっては面白くないだろう」
「確かに」
「楽しみにしておれ。中国は仮面ラァーーーイダブイスリーと共に必ずやこの世から消え去る」
「期待しておこう」
タイタンは素っ気ない声で言った。

「だがあの男もかなり手強いのだろう」
「それはよく知っている」
ドクトル＝ゲーはタイタンに目を向けた。
「私がもっともよく、な」
「ほお」
タイタンはここで彼の目の色が変わったことを見た。
「デストロンでもそうだったからな。そして」
「シンガポールでも」
「うむ」
彼はここで頷いた。
「よく知っているな」
「当然だ。俺も伊達に地底王国の主となったわけではない」
彼は平然とした態度で言葉を返した。
「お主にとってはどれも痛恨の敗北だったな」
「それは認める」
不本意ではあっても、だ。
「しかしそれも今回で最後だ。この悪魔生霊の力でな」
「生霊か」
タイタンはそれを聞いて目の色を少し変えた。
「その力、面白そうだな」
「ドイツに伝わる黒魔術の一つだ」
「北欧の神々の力を使ったものか！？」
ドイツの神々と北欧の神々は同じである。嵐の神ヴォータンや雷の神ドンナー、炎の神ローゲ、ワーグナーの楽劇にも登場する彼等は北欧の凍てついた大地より生まれた。
金色の髪に青い瞳を持つ彼等はその神々を心の奥に持つ。それは魔女や魔術師達により密かに伝えられていたのだ。
「そうだな。系列ではそうだろう」
「ふむ」
タイタンはドクトル＝ゲーの説明を聞き一応納得した。

「だがそれだけではないだろう」
それに気付かぬタイタンではない。彼はドクトル＝ゲーに対して言った。
「鋭いな」
ゲーはそれを肯定した。
「よくわかったな」
「わからないと思ったか」
タイタンの言葉は不敵なものであった。
「俺も黒魔術を使うのでな」
「そうだったな、それもかなりのものと聞いたが」
「そんなに使う機会はないがな。それでも一通りは知っている」
「そうか」
「それでその魔術には何を入れているのだ？」
「聞きたいか？」
「いや」
タイタンはここで首を横に振った。
「聞いては面白くない。当ててみせよう」
彼はゲーの魔術を当てることにした。
「そうだな」
彼は暫し考え込んだ。
「悪魔生霊というが俗にキリスト教でいう悪魔ではないな」
「ふむ」
ゲーはそれを聞き眉を少し上げた。
「そうだな。黒魔術とは実は悪魔の術ではない」
そうなのである。実際はゲルマンのルーン文字やケルトのドルイドの術の流れを汲むものが多いのだ。
「巨人族の術だな」
「そうだ」
ドクトル＝ゲーはそれを認めた。
「それも霜の巨人や山の巨人ではない」

北欧神話において巨人族は人間や神々の宿敵である。だが今タイタンが言った巨人達はそれ程力はない。

「炎の巨人の力か」

北欧神話において最も怖れられているのは炎の国ムスペルムヘイムに住むこの巨人達だ。彼等は全身が炎に覆われている。そして自分達の国から普段は出ようとしない。その国は全てが炎に包まれ他の世界の住人達は入ることすらできないのだ。

隻眼の軍人その十四

だが彼等は一度だけ他の世界に姿を現わすと言われている。それは世界が滅亡する時だ。

神々の黄昏、俗に言うラグナロクである。この時彼等は炎の国を出て神々のいるヴァルハラに攻め込んで来る。そして神々と熾烈な戦いを演じるのだ。

そして最後に世界に立っているのは彼等の王スルトである。彼はその手に持つ炎の剣レーヴァティンで全ての者が倒れた世界を焼き尽くす。そして炎の世界に戻っていくのだという。

神々も世界も焼き尽くす恐るべき力を持った彼等のことはあまりよく伝えられていない。表の世界に伝わるにはあまりにもその力が強大なのだ。

「だとしたらどうする」

彼は不敵な笑みを浮かべた。

「そうか、成程な」

タイタンはそこに答えを見た。

「流石だな、あの力を使えるとは」

「知るのにかなり苦労したがな」

「確かにあの力をもってすれば仮面ライダーブイスリーを倒すこともできるだろう。しかしな」

「しかし、何だ!?」

ドクトル＝ゲーはここに引っ掛かるものを感じた。

「炎にも弱点はある」

「それはどういうことだ!?」

「俺は全身に炎を持っている」

「それは知っている」

ゲーは何を言う、と言わんばかりの態度でもって応えた。

「まあ聞け。その俺もかってその炎の力で敗れた。それも二度だ」

「ブラックサタンの時にだな」
「うむ」
「だがあの時は炎の力の関係だったのだろう」
「簡単に言うとそうなるな」
一回目の戦いでは海に投げ込まれ、その冷却により敗れた。そして二度目はその力の許容量を超えていた為肩の部分を攻撃され、そこからマグマを噴き出して敗れた。
「だが俺が言いたいのはそれではない」
「わからんな」
ゲーはそれを聞き顔を顰めた。
「お主のその力のことではないのか！？」
「だから落ち着いて聞け」
タイタンはそんな彼に諭すようにして言った。
「炎の巨人の力にも欠点はあるというのだ」
「それは何だ！？」
「そこまでは俺は知らん。ゲルマンの魔術には詳しくないのでな」
「そうなのか」
ドクトル＝ゲーはそれを聞きいささか拍子抜けした。
「だが完全な魔術なぞない、それに頼り過ぎるな、ということだ」
「それはわかっているが」
「わかっていればいいがな」
タイタンはそれ以上は言わなかった。
「わかっているならいい。では健闘を祈る」
「礼を言う。長居したな」
「それは構わん。では中国を死の荒野にし、仮面ライダーブイスリーを倒すことを期待するぞ」
「楽しみにしておれ」
そう言うとドクトル＝ゲーは姿を消した。あとには白い煙だけが残った。
「わかっていないだろうな」

タイタンは彼が姿を完全に消したのを確認して言った。
「だからこそ今まで敗れてきたのだ」
その声は相変わらず冷徹なものであった。
「どうなるかわからんがあの男も強い」
ブイスリーのことは聞いていた。
「そうそう容易にはいかんだろうな。そして俺も」
彼はここで立ち上がった。
「奴に言ったことをよく肝に命じておかねばならん、さもないとまた敗れることになる」
無数の目が光った。
「三度目はない、それは俺のプライドが許さん」
暗闇の中に無数の赤い光が見える。
彼もまた闇の中に消えた。そしてあとには何も残っていなかった。

隻眼の軍人　　完

２００４・８・５

魔都の攻防その一

魔都の攻防

上海は現代の中国を語るうえで欠かせない街である。

この街が発達したのは宋代からである。港町に適していることに目を着けられ、ここに貿易の監督庁が置かれたのだ。

それから歴史がはじまった。元代には綿花の栽培が行われ、ここから運び出された。そして明代には綿織物の中心地の一つとなったのだ。

だがこの街が知られるようになったのは清代末期からである。この時清は康熙、雍正、乾隆の三人の皇帝による長い黄金時代を終え下り坂に達していた。そこでアヘン戦争が起こったのだ。

ことの発端は貿易からであった。当時清は茶の貿易で巨万の富を得ていた。主な貿易相手はイギリスである。彼等にとって紅茶は欠かせないものであった。

これによりイギリスは大幅な貿易赤字となった。これを解消する為にイギリスは決して手をつけてはいけない禁じ手に走った。阿片である。

阿片の貿易は巨額の富をもたらした。インドで作らせたものを清に売る。清からはこれまでどおり茶を購入するが阿片はインドを通じて行われる。所謂三角貿易だ。

これにより清では阿片中毒患者が急増する。これに困った清朝は林則徐を送り込む。

彼は何とかして阿片に浸る民衆を救おうと考えた。そして阿片を片っ端から押収し、処分した。

これに怒ったイギリスは清朝に宣戦を布告した。これがアヘン戦争である。これに敗れた清は南京条約を結びイギリスに屈服する。こうした時代であった。今現在イギリスが麻薬に悩まされているのはこれの因果応報であろうか。

この条約で上海に租借地ができた。これがこの街の運命を変えたのだ。

外国人がやってきたことはこの街に大きな影響を与えた。国際意識を持つようになり、文化にも影響を与えた。そしてこの街に人が集まるようになった。

清朝が滅んでもこの街の状況は変わらなかった。相変わらず外国人が出入りし、商人達が活発に動き回っていた。国民党の時代には浙江財閥の本拠地となっていた。南京に首都を置いた国民党政府にとっては南京と並ぶ重要な都市であったのだ。

共産党の時代でもこの都市は重要であった。文化大革命のはじまりはこの街からであった。十年に及ぶ無意味な内乱もここからはじまったのだ。

そして今は中国の経済の中心である。中国は昔から経済の中心は長江流域であった。その長江のはじまりであり終わりであるこの街は今も眠ることなく動いているのだ。

「噂には聞いていたが凄いな」

風見志郎はその上海の街中にいた。

「北京や重慶も凄かったが。ここはまた別格だな」

「そうですね」

隣にいた役が頷いた。

「何といってもここは中国で最も活気に満ちた街だと言われていますからね」

「中国のか」

「はい、それだけにその動きも激しいです」

「確かに。止まっていたら飲み込まれそうだ」

人々だけではない。車やバイクも滝のように走っている。

「気をつけて下さいよ、ちょっと油断したらあの中に消えてしまいますから」

「そうだな。何か東京よりもこっちの方が動きが速いな」

「中国人の動きは速いですからね」

実際に彼等は日本人よりもやや歩くのが速いようだ。
「それに結構物騒ですよ」
「それは知っている」
風見は役に顔を向けて答えた。
「魔都と呼ばれている位だからな」
上海には黒社会も多い。チャイニーズ＝マフィアと呼ばれる連中だ。
「しかし俺にはあまり関係ないな、連中は」
ライダーである彼にとってそのような組織は幾らあっても敵ではない。
「何かしているようなら容赦はしないが」
「そうですね。まあ黒社会は今回は敵ではないです」
役は落ち着いた声で言った。
「おそらく何もしてこないでしょう。不意の強盗等を除いては」
「その時は容赦しないさ」
風見は鋭い目で言った。
「まあまあ。今この街にはそんな連中より遥かに危険な者達が蠢いていますし」
「ああ」
風見はそこで頷いた。
「この魔都の何処かにいる。そしてこの中国を死の国変えようとしている奴等がいる」
「その者達を倒すことが我々の仕事です。黒社会も何とかしなければいけませんが今はバダンの方が先です」
「うん」
二人は頷き合うと街の中へ消えた。それをビルの屋上から見る影があった。
「来たか、風見志郎」
それはドクトル＝ゲーであった。
「この上海が貴様の墓場となる」

彼はその暗い顔で風見達を見ていた。
「最早逃げることはできん。そして」
右手を横にスッと挙げた。彼の後ろに無数の黒い影が姿をあらわした。
「この者達に追い詰められ死んでいくがいい。我々が中国を黒い光に覆うのを見ながらな」
そう言うと彼は姿を消した。影達も彼に続き姿を消していった。

魔都の攻防その二

アポロガイストはギリシアのある島にいた。
「さてと」
白いスーツに身を包んだ彼はボートを岸に着けるとすぐに上陸した。共に数人の戦闘員がいる。
「お待ちしておりました」
そこへ別の戦闘員達が姿を現わした。敬礼して彼を出迎える。
「ご苦労」
彼も敬礼してそれに応えた。そしてすぐに言葉をかけた。
「建造している場所は何処だ」
「こちらです」
戦闘員達は彼を案内して島の奥へ入って行った。
見れば岩山の上に草原が広がっている。彼等はそこを歩いていく。
「随分見晴らしのいい島だな」
アポロガイストは周りを見回しながら戦闘員達に対して言った。
「ですが人は住んでおりません。航路も空路も近くにはありません」
「ものを隠すには絶好の場所というわけか」
「はい」
戦闘員達は答えた。
「しかし念には念を入れました。地下で建造しています」
「正解だな。ライダー達に見つかりでもしたらことだ」
「はい、それが一番の問題です。連中は勘がいいですから」
「だからこそ奴等とは戦いがいがあるがな」
アポロガイストはここで不敵な笑みを浮かべた。
「ではそこに案内しろ」
「はい」
戦闘員達は彼をある大きな岩の前に連れて来た。
「ここです」

その岩の横を押す。すると岩が左から右に開いた。
「どうぞ」
「うむ」
アポロガイストは頷いてその中へ入った。戦闘員達もそれに続く。
彼等が全員入ると岩は自然に閉じていった。
その中は地下基地であった。一行はその中を歩いていく。
「随分深いな」
「何しろ大きいですから」
戦闘員の一人がアポロガイストの問いに答えた。
「確かにな」
アポロガイストはその言葉に納得した。
「だがあれをまた改造するとは思わなかったな」
「はい、あれだけで充分な戦力になりますし」
彼等はその建造中のものについて話しているのだろうか。
「しかしあれを付けることでさらに戦力があがったな」
「ええ。最初聞いた時は何かと思いましたが」
やがて基地の最深部に辿り着いた。
「こちらです」
先頭をいく戦闘員が階段を降り終えるとアポロガイストに言った。
「ここにあれがあるのだな」
「はい、あちらです」
戦闘員達は前方を指差した。アポロガイストはそこへ顔を向けた。
「ほお」
アポロガイストはそれを見て一声あげた。
「順調に進んでいるようだな」
彼は満足した笑みを浮かべた。
「まだまだやるべきことはありますが」
戦闘員の一人がそう答えた。
「そうだな。だがこれだけ進んでいるとは思わなかった。上出来だ」
「有り難うございます」

人を滅多に褒めることのないアポロガイストの言葉に彼等は思わず頭を垂れた。
「見ているがいい、エックスライダー」
彼は不敵な笑みを浮かべた。
「貴様はこの巨大な亡霊により滅びるのだ」
白いスーツが黒い光に包まれた。それはまるで闇の世界に輝く暗黒の太陽のようであった。
風見と役は上海の夜のビル街を歩いていた。
上海のビルは独特な感じがある。それは東京やニューヨークとはまた違う。
「これが中国なのかな」
風見は派手なネオンの光を見ながら呟いた。
「いや、これは上海独特のものですよ」
役が言った。
「北京や香港はまた違います」
「香港は知っているつもりだが。それにしてもシンガポールとは違って何か猥雑な感じがするな」
「シンガポールはまた特別ですよ」
シンガポールの風紀の厳しさは有名である。ニューヨークやこの上海はおろか他のどの都市と比べてもそれは際立っているのだ。
「あそこはまた厳し過ぎるという意見もある位です」
「しかしあそこまでしたほうがいいと思う時もあるな」
風見はそれに対して言った。
「太平洋への玄関口だからな。あそこまでしないとかえって困る」
「バダンも狙う程でしたしね」
「ああ、あの時あの基地を潰して本当によかった」
彼はシンガポールでの戦いを思いだして言った。
「もしシンガポールの基地が完成してあの場所を拠点にされていたら」
「おそらく今頃環太平洋地域はバダンの思うがままでしたね」

シンガポールはそれ程までに重要な地であるのだ。げんにバダンはシンガポールでの敗戦を今も悔やんでいる。
「この上海も今よりずっと大変なことになっていたな」
「そうですね。おそらく既にバダンの手に落ちていたでしょう」
「この上海がか」
「ええ」
風見は役の言葉を聞き戦慄を感じた。
「風見さんがあの時シンガポールにいなかったら・・・・・・。そう思うと私も恐ろしいですね」
「有り難う」
風見は彼に対して礼を言った。
「いえ、本当に思ったことを言ったまでです」
役はそれに対して謹んで言葉を返した。
「もしライダーがいなかったらこの世界は」
「いや、俺達は必ずこの世にいたと思いますよ」
風見は顔を暗くさせた役に言った。
「それが運命ですから」
「運命ですか」
「ええ、俺達は悪と戦う為にこうして改造人間になったんです。げんに」
彼は言葉を続けた。
「悪の組織が、あの首領が再び動く度に新たなライダーが誕生しています」
そうであった。首領が闇から身を起こす時、その時に新たなライダーがいつも誕生したのである。

魔都の攻防その三

「俺もそうでした。家族をデストロンに殺された俺はダブルライダーに改造人間にしてくれるよう頼み込んだ」
だが彼等はその時は断った。自分達のような境遇の者をこれ以上作りたくない為だった。
「そして二人を守って死に瀕した時俺は生まれ変わった」
自分達を守る為に瀕死の重傷を負った風見を救う為に彼等は改造手術を施したのだった。
「そして俺は悪と戦う三人目のライダー、仮面ライダーブイスリーとなった」
その時より彼は悪との絶えることなき戦いに身を投じたのである。
「あの首領が何度でも甦り、そして世界を狙うのなら俺達もそれを阻止する。そして」
その目に強い光が宿っていた。
「その度に光は強くなる。新たな光と共に」
「その新たな光がゼクロスですか」
「そうなりますね」
風見はそれを否定しなかった。
「彼の力は絶大です。それに」
「それに・・・・・・！？」
「彼もまた悲しみを知っています。ライダーは悲しみを知ってはじめて本当の意味でのライダーなのです」
「本当の意味で、ですか」
役にはその言葉の意味がわからなかった・
「悲しみを知ることにより本当の意味での優しさを知る、そしてその優しさを持ってこそ真実の強さを身に着けることができるのです」
「真実の強さ・・・・・・」
役はそれを聞き考え込んだ。

（では私が今まで思っていた強さは何だったのか）
彼はそう考え込んだのだ。
（長きに渡って、気の遠くなるような放浪を経て身に着けたこの力は真実の強さではないのか）
風見は役のそうした思考には気付かなかった。だが言った。
「ライダーだけがそれを持っているのではありません」
「といいますと」
役は顔を上げた。
「人が持つ強さですから」
「人が持つ強さ」
彼はそれにハッとした。そうであった。彼等は機械の身体を持っていてもその心は人間のものなのである。
だから彼等は人間なのだ。その彼等の持つ力もまた人間のものである。それは当然のことであった。
（何故今まで気付かなかったのか）
そう悔やまざるにいられなかった。
「風見さん」
彼は風見に声をかけた。
「はい」
「どうやら私はまた大切なことを教わったようです」
「よして下さいよ、そんな大袈裟な」
彼は笑って言った。
「いえ、大袈裟ではありません」
役はそれでも言った。
「また一つライダーに教えられました。ライダーは常にその心を胸に戦っているんですね」
「俺にも難しいことは言えませんが」
風見はそう断った。
「大切なのは人としての心ですよ、それを忘れないことです」
「そうなのですか」

「ええ。ライダーといっても心は人間です。それに」
「それに・・・・・・？」
「それがあるから人間なのだと思います。忘れたらそれこそバダンと同じです」
「それは人としての身体を持っていても、ですね」
「そうです、バダンの魂を売った者もいますから」
そうした者がバダンを支えている一因なのだ。もっともその中には騙され、純粋に正義を信じている者もいる。かっての結城丈二のように。
「俺はそう思うんですよ。人としての心があれば例えどのような身体であってもそれでいいと」
「・・・・・・・・・」
役はそれを聞いて沈黙した。
「俺も他のライダーも皆悩んだと思いますよ。茂なんかは自分から志願したにしろ最初はかなり悩んだと思いますし」
「そうですね」
城は親友の仇をとる為にライダーとなった。だがブラックサタンに入るまでにどれだけの覚悟と苦悩があったか。彼はそれを決して語ろうとしないが心の奥底にそれを秘めている。
「けれどそれで思い悩むのも人間だからなんです。皆そうやってその苦悩を乗り越えていくんです」
「辛いんですね」
「ええ。けれどそれに勝てないと悪には勝てない。まずは自分に打ち勝てないと」
自分に勝てなくて悪に勝てる筈もないのだ。
「厳しいですね」
「それがライダーの運命です」
風見はそう言うと前を向いた。
「この街にもバダンが潜んでいます」
「はい」

「奴等を一人残らずこの街から消す為にも俺は負けるわけにはいかないんです」
そう言うと歩きはじめた。そして繁華街へ入って行った。
繁華街に入るとすぎに数人の男が二人を取り囲んだ。
「ゴロツキか！？」
風見は彼等を見回した。どの者も卑しい顔をしている。
「いや、違う」
風見はすぐに察した。
「バダンか」
彼等は答えなかった。無言で一斉にナイフを放ってきた。
「ムッ！」
風見と役は上に跳んだ。男達は上を見上げた。
「逃げたか！」
見れば彼等の姿は戦闘員のそれに変わっていた。その中央にいる無気味なシルエットの男が言った。
「追うぞ」
見れば怪人であった。ネオショッカーの毒針怪人アブンガーである。
「はい」
戦闘員達は彼の言葉に従い間近のビルに登った。そしてそこから周りを見回す。

魔都の攻防その四

「何処だ」
だが気配はしない。上海の人々の夜を知らぬかのような猥雑な声と湿った風があるだけである。
「ここだ」
そこで声がした。彼等が声がした方に顔を向けた。
そこに探している男がいた。ブイスリーと役であった。二人は隣のビルの上にいた。そのビルはバダンの者達がいるビルより少し高かった。
「来ると思っていたぞ」
ブイスリーは彼等を指差して言った。
「貴様等が欲しいのは俺の首だな」
「そうだ」
アブンガーが答えた。
「仮面ライダーブイスリー、この上海を貴様の墓としてやる！」
「面白い」
ブイスリーはそれを聞いて言った。
「やれるものならやってみよ」
「望むところだ！」
戦闘員はブイスリーと役のいるビルに跳び移ってきた。アブンガーもそれに続く。
彼等はすぐにブイスリーと役を取り囲んだ。そして攻撃を仕掛けてきた。
「戦闘員は私が」
役がブイスリーの前に出て言った。
「お願いします」
ブイスリーはそう言うと怪人に向かった。
「アブーーーーーッ！」

怪人は奇声を発するとブイスリーに向かってきた。右手のその毒針を突き立ててくる。
「ムッ」
ブイスリーはそれを身体を左に捻ってかわした。そしてかわすと同時に蹴りを放つ。
それは怪人の顎を撃った。怪人はたまりかねて思わず体勢を崩す。
そこへ拳を繰り出す。怪人はそれを受け床に倒れた。
「止めだっ！」
ブイスリーはそこで跳躍した。
「トォッ！」
空中で回転する。赤い仮面が夜の闇の中に映える。
「ブイスリーきりもみキィーーーーーーック！」
そして蹴りを叩き込んだ。怪人はその直撃を受けビルから落ちた。
そして空中で爆死した。
「やりましたね」
そこへ戦闘員を全て倒し終えた役がやって来た。
「ええ」
ブイスリーはそれに頷いた。
「あとは私の仕事だ」
役はここで急に無気味な声を出した。
「仕事！？」
「そう、私の仕事は」
見れば彼の顔が急に変わっていく。
「仮面ライダーブイスリー、貴様を捕らえることだっ！」
彼は既に役の姿をとってはいなかった。そこにはデストロンの磁石怪人ジシャクイノシシがいた。
「クッ、どういうことだ」
ブイスリーは捕まりながらも怪人に顔を向けて問うた。
「フッフッフ、こういうことだ」
そこで前から声がした。

「何」
するとそこに黒い一団が姿を現わした。
「貴様は」
「久し振りだな、仮面ファーーーーイダブイスリー」
そこにはドクトル＝ゲーもいた。
見ればその後ろに役がいる。彼は戦闘員達に後ろ手で縛られている。
「すいません、ブイスリー。さっき捕まってしまいました」
「クッ・・・・・・」
助けに行こうにも彼も捕らえられていた。
「観念するのだな。逃れられん」
ドクトル＝ゲーの声が夜の街に響いた。その顔は酷薄な笑みに満ちていた。
捕らえられた二人は手を後ろに縛られ牢屋に入れられた。
「暫くそこで大人しくしているがいい」
ドクトル＝ゲーは牢屋に入れられた風見を見下ろして満足そうに言った。
「この中国が灰塵に帰するまでな」
「何、貴様やはり」
「フフフ、そうだ」
ゲーはまた酷薄な笑みを浮かべた。
「我がバダンの秘密兵器によりこの中国は消え去るのだ。まずはてはじめにこの上海からな」
「馬鹿な、十三億の人々を殺すつもりか」
「十三億のゴミと言った方がよいな」
ゲーはそううそぶいた。
「我がバダンに従わぬ者はゴミと同じ。違うのか」
「貴様、人をゴミと言うのか」
「私の考えはよく知っている筈だが」
ドクトル＝ゲーは風見を不思議そうに見て言った。

「バダンに従わぬ者は生きている価値すらない」
それが彼の、そしてバダンの考えの全てであった。
「貴様も中国の次に消してやる。まずはこの大陸が滅ぶのを見るがいい」
「誰がっつ」
風見は暴れようとする。だが手を後ろで縛られそれはできない。
「無駄だ、そのロープは特殊な繊維で作られている。力で引き千切ることはできん」
ゲーはそんな彼に対して言った。
「観念するがいい。そしてことが終わり次第」
彼はここでその手に持つ斧を風見に見せた。
「この斧で貴様の首を落としてやる。一撃でな」
そう言うと彼はその場を去った。後には彼の無気味な笑い声だけが牢獄の中に響き渡った。

魔都の攻防その五

「やはり中国を滅ぼすつもりでしたね」
憮然として床に座った風見に役が話しかけてきた。
「ええ、これは一大事です」
彼は流石に深刻な顔をしていた。
「何とかしないと怖ろしいことになる」
彼はその顔を険しくさせた。
「しかしこの状況では」
縛られていては何もできない。しかもロープはドクトル＝ゲーの言ったとおり力では駄目だった。
「まずいな、このままでは変身もできない」
「大丈夫です」
焦りはじめた風見に役が言った。
「ここは私に任せて下さい。もとはといえば私の責任ですし」
「しかし」
責任を問うつもりはなかった。だが役のその真摯な声に何かを感じずにはいられなかった。
「役さんも縛られていますし」
「これですか!?」
役はそう言って微笑んだ。見れば彼の手は自由となっている。
「え・・・・・」
これには流石の風見も驚かざるにいられなかった。
「縄抜けですよ」
役は風見を元気付けるような声で言った。
「私の特技の一つでして。私が古武術をしているのはご存知ですね」
「はい」
「その中に関節を外す技もありまして。それで抜けたのですよ」
「そうだったのですか」

「意外でしたか」
「いえ」
風見はそれには首を横に振った。
「どうも貴方は多くの技能を身に着けておられるようですしそれ程には」
「そうですか」
役はここで風見が自分のことに何か察しをつけているのでは、と思った。だがそれを口に出すことはなかった。
「ではロープをほどきますので」
「お願いします」
風見は身体の後ろを差し出した。役は素早い動きで彼の両手を縛るロープを解いた。
「これでよし」
風見は自由になった両手首を動かしながら言った。
「じゃああとはここを出るだけですね」
「ええ」
風見は頷くと鉄格子の前に来た。そして左右に引っ張った。
「ムン！」
それで鉄格子は破壊された。人一人が通れる隙間が開いた。
「行きましょう」
「はい」
二人はすぐにその間を通り抜けた。そして廊下に出た。
角を曲がる。丁度そこに戦闘員が一人いた。
「ムッ」
その戦闘員は慌てて身構えようとする。だが風見はそれより速く彼を手刀で倒した。
「今声を立てられたら困るのでな」
二人はその戦闘員が息絶えたのを確認すると先へ進んだ。
その時ドクトル＝ゲーは基地の最深部にいた。
「開発は進んでいるか」

そして白服に身を包んでいる戦闘員達に尋ねた。
「ハッ、あとは最終チェックだけです」
「そうか」
戦闘員の言葉を聞き満足気に笑った。
「それが終わればあとは出撃させるだけだな」
「はい」
戦闘員が答えた。
「これが起き上がった時まず上海が消える」
「それから中国全土が」
戦闘員は言葉に合わせた。
「そうだ、長い歴史を誇るこの国が瞬時にして地球上から消え去るのだ。壮大な話だな」
「まことに。おそらくバダンの輝かしい歴史にこの偉業が残ることでしょう」
「私の名と共にな」
ドクトル＝ゲーは追従ともとれるその言葉に頬を緩めた。
「そしてその光景はあの男にじっくりと見せてやる。そして」
「絶望の中その首を落とすのですな」
「そうだ、この斧でな」
そう言うと右手に持つ斧をゆっくりと上げた。
「待たせたな」
彼は自身の斧に語りかけた。
「だがもうすぐだ。無念を晴らす時はな」
その顔にいつもの酷薄な笑みが宿っていた。
「あの時の恨み、忘れたことはない。だが」
斧の向こうで何かが起き上がった。
「もう暫くの辛抱だ。待っておれよ」
その起き上がったものの頂上が光った。
「この魔神が中国を滅ぼす。そして」
「この俺がバダンの野望を打ち砕く」

ドクトル＝ゲーの声に合わせるように何者かの声がした。
「ムッ！？」
右だ。ドクトル＝ゲーも戦闘員達もそちらに顔を向けた。
「何、貴様！」
ゲーは荷物の上に立つその男を見て憤怒の声をあげた。
「どうしてここに、とは聞かないのか」
だがブイスリーはそんな彼にあえて余裕を含んだ声で言った。
「ヌヌヌ」
それがかえってゲーを怒らせた。

魔都の攻防その六

「貴様等の企みは必ず破られる運命になる」
ブイスリーは言った。
「たとえ捕らえられようともライダーはそれから必ず抜け出す、そして貴様等の野望をくじく！」
「ほざけ！」
ドクトル＝ゲーは怒りを爆発させた。そして斧を投げてきた。
「おっと」
ブイスリーはそれを何なくかわした。
「では今度はこちらからだ」
そう言うと荷物から降りた。そこを戦闘員達が取り囲む。
「やってしまえ！」
ゲーの命令が下る。戦闘員達が一斉に襲い掛かる。
「フン」
だが所詮ライダーの敵ではない。ブイスリーは彼等を埃を払うかのように何なく倒していく。
「ヌウウ、かくなるうえは」
ゲーはそれを見て歯軋りした。そして右手を挙げた。
「出でよ、怪人達よ！」
すると奥から三つの影が飛び出てきた。
「来たな」
それはやはり怪人達であった。ジシャクイノシシの他にも二体いた。
ショッカーの絞殺怪人ミミズ男とブラックサタンの電撃怪人奇械人電気エイだ。彼等は三方向からブイスリーに迫ってきた。
「シャクーーーーーッ！」
まずはジシャクイノシシが突進してきた。そしてその左腕で殴り掛かる。

ブイスリーはそれをかわした。そして逆に蹴りを放つ。
それはジシャクイノシシの左腕を撃った。それでジシャクが壊れた。
「よし！」
ブイスリーはさらに攻撃を仕掛ける。パンチを三連発で繰り出した。
「ブイスリートリプルパァーーーーンチッ！」
それで決まりだった。怪人は顔にそれを続けて受け倒れた。そして爆死した。
「オフオゥゥーーーーーーッ！」
今度はミミズ男がやって来た。怪人は手に持つリングを放ってきた。
それはブイスリーの首に引っ掛かった。
「これは」
それはミミズに似せたリングであった。ブイスリーの首にかかるとすぐに締め付けにかかった。
「グッ」
何とか外そうとする。だが動けば動く程それは食い込んできた。
「まずい、このままでは」
次第に息が苦しくなってくる。やがて倒れるのは時間の問題であった。
「その前に」
ブイスリーは怪人を睨みつけた。
「奴を倒す！」
そう叫ぶとまず体当たりを仕掛けた。
「オフッ！？」
そして次にはチョップを浴びせた。怪人はそれで怯んだ。
それで攻撃を止めるブイスリーではなかった。彼は続けて渾身のチョップを繰り出した。
「ブイスリーチョーーーーップ！」

普通のチョップとは違う。普段のそれよりも遥かに強力なチョップであった。

それが怪人の首を直撃した。ボキリ、と鈍い音がした。首の骨が折れる音であった。

ミミズ男もそれで倒れた。そして爆発の中に消えた。怪人が倒れると首のリングも力をなくし外れた。

残るは奇械人電気エイだけだった。怪人は爆発を背にブイスリーと対峙した。

「さあ来い」

ブイスリーは身構えながら怪人と対峙した。

「エーーーーーイッ！」

怪人は奇声を発した。そしてブイスリーに両手の鞭を振るってきた。

「甘いな」

だがブイスリーはそれを後ろに跳びかわした。敵の攻撃は既に見切っていた。

怪人の攻撃は執拗に続く。ブイスリーはそれでもそれを何なくかわす。

怪人は今度は電撃を放ってきた。それは一直線にブイスリーに向かってきた。

ブイスリーはそれを全身で受け止めた。身体にバリアーを張ったのだ。

「これでどうだっ！」

怪人の電撃はそのバリアーにより無効化された。怯む怪人にブイスリーは突進した。

「喰らえっ！」

飛び蹴りを放つ。そしてその反動で上に跳び上がった。

「ブイスリーダブルキィーーーーーーーック！」

そして空中でもう一度反転し再び蹴りを放つ。これで怪人は爆死した。

「もういないようだな」
彼は着地するとドクトル＝ゲーに顔を向けた。
「ドクトル＝ゲー」
彼の名を呼んで身構えた。
「遂に決着をつける時が来たな」
「私はそうは思わん」
彼はそれに対し不敵な言葉で返した。
「何！？」
「少し予定が変わったが」
彼はそう言いながら次第に後ろに下がっていく。
「どのみち貴様は始末する予定だ。そう、この上海でな」
「その言葉、貴様にそっくり返そう」
「できるかな！？」
ゲーは不敵に笑った。
「これを前にして」
「何！？」
するとドクトル＝ゲーの後ろにいた巨大なあの魔神が再び動き出したのだ。
「しまった、こいつのことを忘れていた！」
「ハハハ、迂闊だったな、仮面ラァーーーーイダブイスリー！」
ゲーの高笑いが響き渡る。
魔神は身体中に繋がれていたコードを全て引き千切った。そして周りのコンピューターや機械を壊しながらブイスリーに襲い掛かって来た。
見れば三面六臂の巨大な、阿修羅の如き姿である。その顔は鬼にそっくりだった。そして赤く薄い光に照らされた基地の最深部で暴れはじめた。

魔都の攻防その七

その目標は言うまでもない。ブイスリーである。
「クッ！」
魔神の巨大な脚が来た。ブイスリーはそれを何とかかわした。
そしてその巨体を昇りにかかった。素早く猿の様に駆け上がる。
だがそれを六本の腕が襲い掛かる。そしてそのうちの一本がブイスリーを叩き落とした。
「ガハッ！」
床に叩き付けられ思わず呻き声をあげた。だがすぐに立ち上がる。
「フフフ、どうだ。そうそう容易にはいかんぞ」
ゲーは後方から両者の戦いを見守りつつ彼に言った。
ブイスリーは戦法を変えた。魔神の後方に回り込もうとする。
「無駄だと言っておろうに」
ゲーはそんな彼を嘲笑する声を出した。顔は笑っていないが声は笑っていた。
魔神の三つの顔のうち一つがブイスリーを捉えた。そして目に何かが宿った。
「あれは！？」
それは闇だった。いや、よく見るとそれは闇ではなかった。
それは黒い光だった。それは二条の光線となりブイスリーに襲い掛かってきた。
「何のっ！」
ブイスリーはそれも何とかかわした。今さっきまでいた場所が黒い光を浴びその中に消えていた。
「何という光だ」
その床の場所にはもう何もなかった。ただ黒い穴が開いているだけであった。
「さて、何時までそうやって逃げていられるかな」

ゲーの声がまた響いた。
「三つの顔に六本の腕。そうそう容易には逃げられんぞ」
魔神の攻撃は続いた。彼はその目から放つ黒い光と丸太の様な六本の腕でブイスリーを追い詰めんとする。
ブイスリーはそれに対して逃げるだけで手一杯であった。次第に部屋の隅にまで追い詰められてきた。
「まずいな、このままでは」
背が壁についた。見れば魔神がすぐ側にまで迫ってきている。
「さあ、観念したか」
ゲーは魔神を挟んで彼と正対した。
「誰が」
ブイスリーに降伏の二文字はない。何故ならライダーだからだ。
「そうか、ならばそのまま死ね」
魔神がその言葉と共にゆっくりと六つの目にあの黒い光を宿してきた。
「クッ、どうすれば」
ここで彼の脳裏にあることが閃いた。
「そうだ、ここはあれしかない！」
見れば黒い光が今にも放たれようとしている。もう戸惑っている時間はなかった。
「さあ、観念したか」
ドクトル＝ゲーはブイスリーを見据えていた。
「止めは私がさしてやろうぞ」
そして右手に持つ斧を煌かせた。
だがブイスリーはそれに構わなかった。腰を落とし構えた。
「喰らえ」
そして腰のダブルタイフーンが光った。
「逆ダブルタイフーーーーンッ！」
腰のダブルタイフーンから二つの竜巻が発せられた。それは魔神を激しく打ち据えた。

「クッ、それがあったか！」
ドクトル＝ゲーも抜かりがあった。彼はダブルタイフーンの存在を忘れていたのだ。
魔神は瞬く間にその全身を破壊されていく。そしてすぐに砂のようになり消えていった。
「これでどうだ」
ブイスリーはそのうえでゲーに対峙した。
「おのれ、だが」
彼はそのブイスリーに向かって歩きだした。
「逆ダブルタイフーンのことを私が知らないと思ったか」
そう言うと手に持つ斧を振り被ってきた。
逆ダブルタイフーンには弱点がある。それは一度使用したら三時間は使えないのである。
斧が振り下ろされる。丁度変身が解ける瞬間に、だ。
「死ねぇっ！」
斧がブイスリーの頭上を襲う。だがブイスリーはそれを何なくかわした。
「何っ！？」
変身も解けてはいなかった。ブイスリーはそれまでと変わらぬ動きでゲーの斧をかわしていたのだ。
「これは一体」
「ドクトル＝ゲー、どうやら俺のことを詳しく調べていなかったな。若しくは忘れていたか」
「そういうことだ！？」
「俺は再改造を受けたのだ」
「それは知っている」
「その時に俺は弱点を克服した。そう、俺は逆ダブルタイフーンを使っても変身が解けないのだ」
「何っ！？」
ここで弱体化するのはあえて口にしなかった。それは駆け引きで

あった。
「抜かったな。さあどうする」
「おのれ、こうなれば」
彼は後ろに跳んだ。そしてその目に無気味な光を宿らせた。
「この私の手で」
そこで基地が地震に遭ったかのように揺れた。
「ムッ！？」
ゲーはこれに慌てて周りを見回した。
「これはどういうことだ！」
「ドクトル＝ゲー、大変です！」
彼の前に戦闘員達が雪崩れ込んで来た。
「御前達、これはどういうことだ！」
ゲーは彼等を問い詰めた。
「基地の各部で爆発が起こっております！」
「何、まさか！」
「そう、そのまさかだ」
ここでブイスリーが言った。
「もう一人いるということを忘れていたな」
「クッ、そうかあの男か」
ゲーは思わず歯軋りした。そうであった。役がいたのだ。
「ヌウウ、どうやら全てにおいて私の負けのようだな」
彼は屈辱に身を震わせながらもそれを認めた。
「仮面ラァーーーイダブイスリーよ」
斧で彼を指し示した。
「今回は負けを認める。だがな」
彼は言葉を続けた。
「この借りは必ず返す、この手でな」
そう言うと踵を返した。
「すぐに会おう、その時が貴様の最後だ」
そして戦闘員達と共にその場から立ち去った。

「これで上海はとりあえず救われたな」
ブイスリーは呟いた。だが、それが一時的なものに過ぎないこともわかっていた。
「ブイスリー！」
ここで後ろから役の声がした。

魔都の攻防その八

「ここにいましたか、捜しましたよ」
彼はそう言って駆け寄って来た。
「行きましょう、もうすぐこの基地は完全に破壊されます」
「わかりました」
ブイスリーは頷いた。そして役と共にその場を後にした。
二人が出ると基地は大爆発を起こした。上海の海からそれは上がった。
「海中にあったのですね」
二人は岸辺に板。役はその爆発を見ながら言った。
「ええ。どうやら海からあの魔神を出すつもりだったようです」
「魔神！？」
役はそれに顔を向けた。
「ええ、ドクトル＝ゲーが作らせていたものです。三面六臂の機械の巨人です」
「そうですか」
「怖ろしい奴でした、眼から黒い光を発していましたし」
「黒い光ですか！？」
役はそれを聞き目の色を変えた。
「ええ。何かご存知ですか？」
「はい。トロントでゼクロスと一緒にいた時ですが」
彼はその時の暗闇大使と十二人の闇の戦士達のことを話した。ブイスリーはそれを聞き終えると深刻な声で言った。
「そうでしたか。どうやら敵はまた新たな力を手に入れたようですね」
「はい」
役はそれに頷いた。
「その力がどういうものか、まだ詳しくは知りませんが」

役の顔は危惧のそれであった。
「どうやらこの世界を破壊し尽す程のものであることは間違いないようですね」
「ええ」
二人はその爆発を見ていた。翌日の新聞には謎の爆発と報じられた。だがこれといって被害もなく、バダンの証拠も残っていなかったのでそれで話は終わった。
魔神と基地を破壊されたドクトル＝ゲーは上海郊外に設けてあった第二基地に移っていた。
「さてと」
彼は指令室に入ると周りを見回した。
「魔神は破壊されてしまった。この失態をどうするか」
彼は考えていた。
「こうなっては仮面ラァーーーーイダブイスリーを始末するしかないが」
それは当初からの予定であった。だが今はそれよりも魔神を失った失態の方が気懸りであった。
「これが若し大首領のお耳に入れば」
彼はブイスリーを倒す前に首領により処刑されるだろう。それを考えると暗澹たる気持ちになった。
「それは心配ない」
ここで何者かの声がした。
「首領にはわしがとりなしておこう」
指令室おシャッターが左右に開いた。そしてそこから軍服の男が姿を現わした。
「お主か」
それは暗闇大使であった。ゲーは彼に顔を向けた。
「ドクトル＝ゲーよ」
彼はゲーを見据えて言った。
「お主は何の心配もする必要はない」

暗闇大使は彼を落ち着かせるようにして言った。
「フォローはわしに任せておけばよいからな」
「よいのか！？」
思いもよらぬ好意にゲーは少し不安になった。
「よい、そなたにはこの中国と仮面ライダーブイスリーを始末してもらわねばならんからな」
大使はそう言うとニイ、と笑った。
「そうか」
ゲーもそれを聞きようやく笑みを取り戻した。
「見返りは何だ」
「見返りか」
大使はそれを聞き口の両端を吊り上げた。
「ダモンとのことだがな」
「ダモン！？」
「地獄大使のことだ」
「ああ、あの男か」
ドクトル＝ゲーは彼の本名を忘れていた。
「何かあれば牽制してくれぬか」
「牽制か」
「そうだ。わしにつけなどという虫のいいことは言わぬ」
彼はドクトル＝ゲーを見据えて言った。
「だが奴が下手なことをせぬようにしてもらいたいのだ」
「ふむ」
ゲーはそれを聞き顎に手を当てて考えた。
「わかった」
そして顔を上げた。
「今回のことを考えるとな。喜んでやらせてもらおう」
「恩に着る」
暗闇大使は無気味な笑いを浮かべた。
「しかしだ」

ドクトル＝ゲーはここで眉を顰めさせた。
「お主とあの男のことだが」
「何だ」
大使はそれについて尋ねられたのが内心面白くなかったのだろう。微かに顔を歪めさせた。
「確か従兄弟同士だった筈だが」
「その通りだ」
かろうじてそれを心の中に押し込めて頷いた。
「どうしていがみ合うのだ。かっては共に祖国の為に戦っていたと聞いたが」
「それは認める」
だが憎悪も認めていた。
「あの男が指揮官、わしが参謀だった」
彼は苦虫を噛み潰した顔で答えた。
「思えば忌々しい話だ」
「何故だ？」
「わしがあの男の下にいたからだ。その他に理由があるか」
彼はゲーを睨み付けて言った。半ば叫んでいた。
「そうか」
だがゲーは落ち着いた物腰のままであった。
「それ程までにあの男が憎いか」
「否定はしない」
彼は言った。
「色々とあったらしいな。戦場で」
「うむ」
「ベトナムにいたそうだが」
「長い戦いだった」
彼は上を見上げた。そして虚空にその戦いの日々を浮かべた。
「我々はかってフランスに抑圧されていた」
ベトナムはフランスの植民地であった。彼等はこの地で典型的な

植民地統治を行なっていたのだ。

「どの者も無気力だった。だがそれが一変した」

フランスがドイツに敗れたのだ。それに乗じて日本がこの地にやって来たのだ。

「日本人達は厳格だった。融通が利かず短気で何かあるとすぐに手をあげた」

当時の日本軍の軍人達は確かにそうであった。

魔都の攻防その九

「だが同時に彼等は公正だった。規律に厳しく、我々に対してフランスのようなことはしなかった」

彼と地獄大使は幼い時に日本軍と会ったのだ。

「わしもダモンも彼等に会い目覚めた」

日本軍は彼等に武器を与えた。そして戦士になるよう教えたのだ。

「我々も日本軍のように戦った。彼等は確かに苛烈だったがそれだけに強かった」

あれ程自分達に対して絶対的な強さを誇示し、威張り散らしていたフランス軍が呆気なく敗れていった。それを見た彼等の驚きはどれだけのものだっただろう。

「彼等は最後には敗れた。しかし」

もう彼等は無力な植民地の民ではなかった。誇り高きベトナム人民だったのだ。

「わし等はホー＝チ＝ミンの軍に入った」

「人民軍だな」

「そうだ。そしてそこで我々は頭角を表わした」

ベトナム人民軍は強かった。彼等にとってフランス軍は最早敵ではなかった。瞬く間に破っていった。

「だが戦いは終わりではなかった」

その後はアメリカ軍が来た。南ベトナムにサイゴンを拠点として傀儡政権を作りそこから支配しようとした。

「我々は密林の中に潜み戦った」

正規戦も行った。だがそれ以上にアメリカ軍を悩ませたのが彼等のゲリラ戦であったのだ。

「何とか勝った。そして遂に祖国は統一された」

「それで終わりでないのが我々の世界だな」

ゲーはここで言った。

「そうだった」
大使はまた虚空を見た。
「今度は中国だった。奴等もフランスやアメリカと同じだった」
中国は歴史的にベトナムを自分達の領土とみなしていた。だから攻めて来るのは必然であった。
「それも破った。その頃にはホー＝チ＝ミンは既にこの世にはなかった」
「それからお主達はどうしたのだ？」
「カンボジアでの戦いに参戦した」
「そうだったな」
当時隣国カンボジアはポル＝ポトという狂気の独裁者による異常な恐怖政治が行われていた。彼等は経済も文化も芸術も全て破壊し知識人や都市に住む者を虐殺していった。それはカンボジアの人口の半数近くに及んだという説もある程であった。バダンに比肩し得る狂人の集団であった。
「あの地に攻め込んだのは中国との戦いの前だった。だが我々がその地に向かったのはその後だった」
中国に勝ってもベトナムに安息の時はなかったのだ。
「ダモンもわしも戦いを辛いと思ったことはなかった。我々は常に共に行動していた」
「指揮官と参謀としてだな」
「うむ」
彼は頷いた。
「あの時もそうだった。激情的で力押しを得意とする奴に対してわしは策略を得意とした」
「あの男の性格はあの頃から変わってはおらんようだな」
「・・・・・・・・」
暗闇大使はそれには答えなかった。
「まあいい。話を続けてくれ」
大使はそれには答えなかった。だがそのかわりにまた口を開いた。

「あの男を補佐してわしが作戦立案、計画する。奴が実際の指揮を執る。こうして長い間我々は常に勝ってきた。フランスにもアメリカにも中国にも。かって日本軍ですら成し得ぬことをやり遂げたのだ」

それがベトナムの誇りであった。いかなる国にも屈しないという。

「あの時もそうだった。ダモンとわしは戦場で指揮を執っていた」

カンボジアもまたジャングルである。アマゾンが戦ったアンコールワットもその中にあった。

「そこでわしは知ったのだ。あの男の真意を」

「それは何だ」

「あの男はわしを憎悪していたのだ。そう、自らの半身をな」

彼等は見れば見る程似ている。まるで鏡のように。

「あの男は次第にわしを疎んじるようになっていた。以前から作戦については意見対立が多かったしな」

「当然だろうな。指揮官と参謀の意見が食い違うことはよくあることだ」

「それは最初からだった。だが我々は祖国の為に戦っていた。だから互いに我慢をすることもあった」

彼の顔は次第い憎悪で歪んできた。

「あの時もそうであった筈だ。だがあの男はわしを陥れた」

「ほう」

ゲーはここで眉を上げた。

「敵の中にいる時にあの男は逃げた。わしを見捨ててな。いや」

その顔がさらに歪んできた。

「最初からそのつもりだったのだ。あの男、ダモンは敵にわしを殺させるつもりだったのだ」

こういう話がある。木の枝を隠すには林の中に隠す。死体を隠すには戦場に隠す。

「今までの衝突からの怨恨もあった。いずれは互いにそうなる運命だったかも知れぬ。しかし」

最早その顔は悪鬼のそれであった。
「殺すのはわしの方だった。あの男はわしを先に陥れたのだ」
「食うか、食われるか、か」
「そう言うかも知れんな」
彼はいささか落ち着いた。そしてそううそぶいた。
「奴はその直後ショッカーには入った。おそらくそこでさらなる力を欲したのだろう。あるいは祖国に見切りをつけたか」
「両方だろうな」
「それはよい。わしはポル＝ポトの兵士達の銃撃に倒れた。そして生き残った兵士達により埋葬された。それから長きに渡って眠っていた」
「それをマシーン大元帥により醒ませられた」
「うむ」
彼はその言葉に頷いた。
「そして大首領のお力により復活した。暗闇大使としてな」
「そうだったのか」
ゲーはそれを聞き息を吐いた。
「それだけのことがあったのか」
「済まんな、愚痴を言ってしまった」
「いや、構わん。わしはそのようなことを責めるつもりはない。だがお主に何かあれば牽制程度はしよう。今回のことは助かるしな」
「そうか」
「ではわしもすぐに動かなければな」
そう言うと扉の方へ動いた。

魔都の攻防その十

「もう行くのか」
「そうだ。あの男は手強い。すぐに動かなければ機を逃してしまう。まずはあの男を倒す。中国はそのあとでどうにでもなる」
「早いな。戦力はあるのか」
「戦力か」
ドクトル＝ゲーは暗闇大使のその言葉に唇の右の端を一瞬だけ歪めさせた。
「わし自身だ。わかっているだろう」
「そういうことか」
大使も口の両端だけで微かに笑った。
「では健闘を祈るぞ」
「うむ」
ゲーは扉の前に立った。
「では待っているがいい。仮面ラァーーーーイダブイスリーの首をな」
「楽しみにしていよう」
ゲーはそれを聞くと扉の中に消えた。
「さて、どうなるか」
暗闇大使は彼が消えた扉を見て呟いた。
「あの男も死力を尽くすだろうが相手も手強い。行方はわからんな」
それは彼の頭脳をもってしても不明であった。
「他にも手を打っておく必要があるな。狡猾な奴のことだ、そうそう罠にはかからぬだろうが」
従兄弟の性質は誰よりもわかっていた。
「わしも動こう」
そう言うとマントで全身を包んだ。そしてあの黒い光と共に姿を消した。

基地を破壊した風見と役は上海の外灘にいた。
ここはかっての租借地であった。今もここには当時を思わせる異国風の建物がある。
「何か不思議な感じだな」
風見はそこを歩きながら言った。
「中国にいるようで何処かそんなん気がしない。まるで他の国にいるようだ」
「元々ここは中国にある外国でしたからね」
隣にいる役が言った。
「ですからそうした感触を持たれます。私も何回かここに来ました」
「そうなのですか」
「ええ」
役はそう言って微笑んだ。
「かなり変わりましたがね。この感触は変わりません」
彼は懐かしむような顔で言った。
「街の外見は変わっても空気までは。色々とキナ臭さも漂いますが」
この街は多くの騒乱のはじまりともなってきた。そして暗黒街の勢力も強い。
「それでもその中には言葉にできない魅力があります。実はそこに魅入られているのです」
「そんな不思議な魅力がこの街にはあるのですか」
「ええ」
役は頷いた。
「危険な甘い毒のようなものです。確かに危ない、しかしその危険が何時しかたまらなくなるのです」
「そうですか」
風見は普通の危険には驚かない。デストロン以降の悪の組織との戦いでは常に死と隣り合わせであった。だからそう簡単に驚いては務まらないのだ。
「もっとも私も何度も死線をくぐりましたが」

「よく生きていましたね」
「そうそう簡単には死なない身体ですから」
「そうなのですか。ん！？」
風見はその言葉に引っ掛かるものを感じた。
「待って下さい、今何と」
「今ですか！？」
役は先程の言葉をしまった、と悔やんだ。そして慌ててとぼけた。
「ええ、今確かそう簡単に死なない身体と」
「それですが」
誤魔化そうとする。その時であった。
「風見志郎よ」
彼等を黒服の男達が取り囲んだ。
「来たか。相変わらず芸のない」
風見は彼等を見渡して言った。
「何とでも言え」
そこで怪人が前に出て来た。
「我々は最早貴様を倒すしかないのだからな」
デストロンの毒針怪人ドクバリグモであった。
「その通り」
もう一体姿を現わした。
「この中国を焦土にする前にはまず貴様を除かねばならんのだ」
ゴッドの催眠怪人パニックであった。
「風見志郎、いや仮面ライダーブイスリーよ」
彼等は前後から風見と役を取り囲んだ。
「覚悟するがいい」
「フン」
だが風見はそれに対して不敵に笑った。
「面白い。ではこの中国ではもう貴様等を倒すだけでいいのだな」
「何！？」
怪人達は彼の不敵な言葉に思わず声をあげた。

「何を驚いている、俺は難しいことは何一つ言っていないぞ」
既に怪人達を呑んでいた。
「ここで貴様等を倒す、そして中国に平和を取り戻す」
そう言いながら腰からベルトを取り出した。
「行くぞ」
そしてゆっくりと構えに入った。

魔都の攻防その十一

変身

両手に手刀を作り右の真横に置く。左手は肘を直角にし、右手と水平にさせる。

そしてその両手をゆっくりと右から左に旋回させる。

身体が緑のバトルボディに覆われ白い手袋と赤いブーツが現われる。そして胸が銀と赤になっていく。

ブイ・・・・・スリャーーーーーーーッ！

右手をまず脇に引く。その時手は拳にしている。

次には左手を脇に入れる。そして右手を手刀にし、それを斜め上に突き出す。

顔が赤い仮面に覆われる。右半分が、そして左半分が。眼は緑になっている。

ダブルタイフーンが激しく回転する。そこから強い光が放たれた。

「トォッ！」

ブイスリーは跳躍していた。そして怪人達と正対する位置に着地し身構えた。

「来いっ！」

「望むところだっ！」

怪人達も彼に向かった。そして戦いがはじまった。

「グモーーーーッ！」

まずはドクバリグモが襲い掛かって来た。

「来たな」

ブイスリーはそれを見つつススス、と前に進んだ。そこに毒針が襲い掛かる。

「甘い」

だがそれを何なくかわした。そして反撃に転じる。

腹に膝蹴りを入れた。そして怯んだところに背に肘を入れる。
「グオッ」
思わず身を屈めた怪人に対してさらに攻撃を仕掛ける。
「喰らえっ！」
その身体を掴んだ。そして空中へ放り投げる。
「トオッ！」
そして跳んだ。一直線に怪人に向けて跳ぶ。
「ブイスリードリルアターーーーーーック！」
そして激しくスクリューの様に回転しながら頭から突っ込んだ。
そしてそのまま怪人に体当たりを敢行した。
「グモーーーーーーッ！」
ブイスリーは怪人を貫いた。腹に巨大な穴を空けられた怪人は海面に落ちつつ爆発した。
ブイスリーは着地した。そしてパニックと対峙した。
「おのれ、よくもドクバリグモを」
パニックはドクバリグモの爆発を見ていたが、すぐにブイスリーに顔を向けた。
「今度は貴様だ」
ブイスリーはそんな怪人に対して指差して言った。
パニックもそれに怯むようなものではなかった。流石に怪人であるだけはあった。
頭をブイスリーに向けた。そしてそこからロケット弾を放った。
「ムッ！」
だがブイスリーはそれを上に跳んでかわした。しかしそれはパニックの計算のうちであった。
「かかったな！」
パニックは上を見上げてニヤリ、と笑った。そしてまたロケット弾を放って来た。
「その程度っ！」
だがブイスリーもそれは読んでいた。空中で反転すると叫んだ。

「ハリケーーーーーーンッ！」
　すると青いマシンニューハリケーンが飛んで来た。
「よし！」
　ブイスリーは空中でマシンに乗った。それはまるで合体するようであった。
「糞っ、マシンの存在を忘れていたわ！」
　歯噛みするパニック。だがそんな彼に対しブイスリーはマシンに乗ったまま特攻を掛けて来た。
「ハリケーーーーンアターーーーーーック！」
　マシンで空中から急降下体当たりを仕掛けた。これは流石に耐えられるものではなかった。
「クルーーーーーーーーーッ！」
　怪人は遥か彼方に吹き飛ばされた。そして空中で爆死した。
「これで怪人達は皆倒したな」
　ブイスリーは怪人の爆炎を見上げて言った。
「ブイスリー」
　そこへ役がやって来た。
「戦闘員は私が全て倒しました」
「そうですか。それは何より」
　ブイスリーはそれを聞くと明るい声で答えた。
「ですがまだここでの戦いは完全には終わっていません」
「ええ、最後の大物が残っていますからね」
　役はその言葉に頷いた。
「その通りだ」
　そこで声がした。空中からだ。
「出たなっ！」
　二人はそれを聞くと顔を上へ向けた。
「仮面ラァーーーーーーイダブイスリーよ」
　そこにはドクトル＝ゲーがいた。ただし彼自身がそこにいるわけではない。

巨大なホノグラフィーであった。彼の巨大な映像が浮かんでいた。
「ドクトル＝ゲー、何の用だ」
「わかっている筈だ」
ゲーはブイスリーを見下ろして言った。
「遂に決着を着ける時が来た」
「そうか」
ブイスリーはそれを聞き頷いた。
「私は今豫園にいる」
「豫園か」
豫園は上海の名所の一つである。黄浦江の中央にあり狭い空間に芸術的な細かい造りが多数為されている。まるで迷宮のようになっている。
「そこに私はいる。勝負は明日の正午だ。いいな」
「よし」
ブイスリーはそれに頷いた。
「ならばよい。仮面ラァーーーーイダブイスリーよ」
下にいる彼を見据えた。
「今度こそ貴様をこの手で倒す」
「それはこちらの台詞だ」
「相変わらずだな。楽しみだ」
ゲーは微かに笑った。
「貴様をこの手で葬るのを楽しみにしておこう」
そして彼は空の中に消えた。後には何も残らなかった。
「役さん」
ブイスリーは役に顔を向けた。
「はい」
「明日は俺一人で行きます」
「しかし」
「大丈夫です」
ブイスリーは力強い声でそう言った。

「ドクトル＝ゲーも一人です」
「確証はあるのですか？」
「ええ。奴はこうした時は必ず一人で勝負を挑むのです。デストロンの時もそうでした」
「そうですか」
「ええ。奴は汚い作戦をよく使いますが一騎打ちもまた好むんです。俺は過去それで奴を倒しました」
三浦海岸での闘いの時である。

魔都の攻防その十二

「あの時も奴は一対一で勝負を挑んできました。そして今度も」
「あの男の意地というやつですね」
「はい。ならば俺もそれにこたえるだけです。それが戦士です」
「ですね」
役は戦士という言葉を聞き頷いた。
「ならば私は止めません。思う存分闘ってきて下さい」
「わかりました」
「ただ」
「ただ！？」
「必ず勝ってかえってきて下さいね。貴方は世の人々の為に必要なのですから」
「はい」
風見は頷いた。そして決戦に思いを馳せるのであった。
翌日ブイスリーは豫園に来た。入口に来るとマシンから降りた。
「よし」
頷く。そしてその中へ入って行く。
園の中には池もある。緑波池という。蓮で有名な池だ。この中にある建物を湖心亭という。
その中央には橋がある。九曲橋という。ギザギザになった複雑なつくりをしている。こうしたつくりになったのは由来がある。
化け物よけだ。
「人間はギザギザにも歩けるが化け物にはそれができないからだ」
という。中国独自の考え方だ。
だが今その橋の上に魔人がいた。ドクトル＝ゲーである。
「そろそろだな」
彼は空を見上げた。太陽は中空にある。
「ドクトル＝ゲー」

そこで彼を呼ぶ声がした。
「来たな」
彼は声がした方に顔をゆっくりと向けた。そこにあの男がいた。
「約束通り来たぞ」
ブイスリーは彼を指差した。差されたゲーは不敵に笑った。
「よくぞ来てくれた。礼を言うぞ」
「そんなものはいい」
ブイスリーは言い返した。
「貴様の望みはわかっている。俺と最後の闘いをしたいのだろう」
「そうだ」
ゲーは不敵な笑みを浮かべたまま言った。
「この上海での作戦は水泡に帰した」
それはブイスリーが魔神を破壊し、怪人達を全滅させたことによりそうなったのだ。
「だが私がまだいる。そう、中国は私一人により灰燼に帰すのだ。貴様が死んだ後でな」
「戯れ言を、そんなことを俺が許すと思っているのか」
「貴様が思う、思わないは関係ないのだ」
ゲーは冷徹に言い放った。
「何故なら貴様はここで死ぬからだ」
ゲーは左手に持つ盾を自身の顔の前に掲げた。するとその後ろに無気味な影が姿を現わした。
「遂に正体を現わすか」
「その通り」
見ればゲーのシルエットが変わっていく。鎧が青い甲羅になっていく。金色の兜も青くなっていく。
「フフフフフ」
ゲーは笑った。盾を下ろす。するとそこには無気味な蟹の顔をした怪人がいた。
「カニレーザー」

ブイスリーは彼の姿を見て言った。
「そうだ、この姿に戻るのも久し振りだ」
ドクトル＝ゲー、いやカニレーザーは含み笑いを出したまま言った。
「私がこの姿をとるのはこれで二度目だ」
彼はブイスリーを右手に持つ斧で差しながら言った。
「一度は貴様に敗れた。だが二度目はない。仮面ファーーーーイダブイスリーよ」
彼は言葉を続けた。
「今度こそ貴様を倒す！」
「やらせるか！」
ブイスリーは前に跳んだ。そしてカニレーザーと正対する。そして上海での最後の闘いが幕を開けた。
「ムンッ！」
ゲーは斧を振り下ろした。ブイスリーはそれを横にかわした。
「トオッ！」
反撃に回る。右から拳を繰り出す。
だがそれはカニレーザーの盾に防がれた。
「フフフ」
攻撃を凌いだカニレーザーは余裕の笑みを出した。
「どうした、その程度か？」
「クッ」
ブイスリーは彼の言葉に歯噛みした。
「甘い、甘いぞ仮面ファーーーーイダブイスリー、私をこの程度で倒そうとはな」
彼は再び斧を繰り出してきた。
速い、そして重かった。それはドクトル＝ゲーの時のそれとは比較にならなかった。
ブイスリーはそれを何とかかわす。だがそれにも限度がある。次第に追い詰められていく。

「どうした、逃げてばかりいるつもりか！？」
「何をっ！」
その言葉に挑発された。拳を繰り出す。だがそれはやはり盾に防がれる。
「その程度では無駄だ。先程も言ったがな」
「グググ」
「ではそろそろ本気を出すとしよう」
彼の額が光った。そこに光が集まっていく。
周りが暗闇に覆われた。そして彼の額が光った。
「受けてみよっ！」
そして光を放った。それはレーザーだった。
「ウオッ！」
上に跳んだ。そしてそれを何とかかわした。
レーザーは後ろの石に当たった。それは瞬時に飴の様に溶けた。
「チ、かわしたか」
カニレーザーは口惜しそうに言った。
「だがそれで逃げたことにはならん」
今度は上に放つ。それは空中にいるブイスリーに襲い掛かる。
「何のっ！」
空中でキリモミ回転をしてそれをかわした。カニレーザーは続けてレーザーを放つが当たらない。
「おのれ」
彼は着地したブイスリーを見て歯噛みした。

魔都の攻防その十三

「こちらもそうそう簡単にやられるわけにはいかん」
ブイスリーは言った。
「やれるものならな」
だがカニレーザーは余裕であった。
「やってやる」
「ではやってみるがいい。できるものならな」
彼は自身が揺るぎない程の優勢にあると感じていた。だからこそここまでの余裕があった。
実際に斧と盾、そしてレーザーでブイスリーを追い詰めていた。
彼は接近し、また斧で切り掛かった。
「ムッ」
ブイスリーはそれを受けた。そして斧の柄を握った。
「まずはこれだっ！」
そう叫ぶと斧を奪った。そしてそれで逆に切りつけた。
「フン！」
カニレーザーはそれを盾で受けた。激しい激突音が響いた。
両者の腕に衝撃が走る。まずは盾が割れた。
続いて斧が。これで斧と盾は破壊された。
「どうだっ！」
斧と盾を破壊したブイスリーは叫んだ。
「甘いな」
だがカニレーザーはまだ余裕があった。間合いを離す。そしてレーザーを放たんとする。
ブイスリーはそれを冷静に見ていた。カニレーザーの動きの細部まで見ていた。
（やはりな）
ブイスリーはあることを確信した。

カニレーザーの動きはあまり速くはなかった。少なくともブイスリーのそれよりは。

（甲羅に覆われているせいか。動き自体は速くはない）

ドクトル＝ゲーの時からそうであった。攻撃は激しいがフットワークは今一つであった。

蟹は全身を硬い甲羅で覆われている。その為動きはあまり速くはない。

ドクトル＝ゲー、いやかにレーザーは攻撃自体は速い。だが、その甲羅のせいか身のこなしはあまり速くはなかった。

（ならばこちらにも戦い方がある」

既に斧と盾は破壊している。彼の武器はレーザーだけだ。

「死ねぇっ！」

カニレーザーがそのレーザーを放ってきた。ブイスリーは横に跳びそれをかわした。

「甘いな」

ブイスリーは言った。だがそこにカニレーザーは続けざまにレーザーを放って来る。

ブイスリーはそれを左右にかわす。かわしながら間合いを次第に縮めていく。

「今の奴なら近寄れば大丈夫だ」

懐に飛び込んだ。カニレーザーは間合いを離そうとする。だが動きが遅く追いつかれる。

「ヌウウ」

「今度はこちらの番だ」

ブイスリーは腕を出した。そしてそれを叩きつける。

「ムッ」

それは拳ではなかった。掌底であった。

「グッ」

思ったより効いた。カニレーザーは呻き声を出した。

「よし」

二号から聞いた。硬い鎧に覆われた相手には拳よりもこうした攻撃の方が効果があると。
「どうやらその通りだな」
ブイスリーはそれを見て確信した。どうやら拳よりも効果があるようだ。
「ならば」
続けて出す。それはカニレーザーの胸を激しく撃った。
「ガハッ」
血を吐いた。赤黒い血だ。その動きがさらに鈍くなった。
「よし！」
ブイスリーは勝機を見た。今こそ決着を着ける時であった。
「喰らえっ！」
怯むカニレーザーを掴んだ。そして空中へ放り投げた。
カニレーザーは宙に舞った。ブイスリーはそれに続いて飛翔した。
「最後だ、カニレーザー！」
叫んだ。そしてそのままカニレーザーに頭から一直線に突き進む。
「ブイスリー空中回転ドリルアターーーーーーーック！」
激しくキリモミ回転しながら体当たりを敢行した。それはカニレーザーの腹を直撃した。
「グオオオオッ！」
カニレーザーは激しい呻き声を発した。そしてさらに天高く弾かれる。
ブイスリーは着地した。その前に暫くしてカニレーザーが落ちて来た。
「グググ・・・・・」
何とか立ち上がる。だが所々傷を負い、全身から血を流していた。
「まさか衝撃を私の中に浴びせてくるとはな」
立ち上がった。そしてドクトル＝ゲーの姿に戻っていく。
「如何に貴様の鎧が厚くとも衝撃は浸透する。俺はそれを思い出したのだ」

ブイスリーは彼に対し言い放った。
「そして貴様の脚の動きは遅い、その鎧故にな」
「フフフ、そこまで見ていたか」
ドクトル＝ゲーはそれを聞いて笑った。
「どうやら私は自らの護りの故に敗れたようだな」
「そうだ、だが斧と盾を破壊しなければ俺も危なかった」
「あそこで勝負が決していたか」
「そうかも知れん。だが」
ブイスリーはさらに言った。
「俺は必ず勝つ運命だ。何故なら仮面ライダーだからだ」
「フン、言ってくれるな」
ドクトル＝ゲーはそれを聞いて笑った。だがそれは冷笑ではなかった。
「だが見事だ。そうまで言える者は貴様の他にはおらん。そして」
血を吐いた。だがまだ言葉を続ける。
「その貴様と戦えたことを誇りとしよう。地獄でな」
「ドクトル＝ゲー・・・・・」
「ではそろそろ楽にならせてもらおう」
彼は毅然とした姿勢になった。
「私は悪に殉じよう、喜んでな。さらばだ仮面ラァーーーーイダブイスリー！」
それが最後の言葉だった。ドクトル＝ゲーはゆっくりと前に倒れると爆死した。

魔都の攻防その十四

「ドクトル＝ゲー」
ブイスリーはそれを最後まで見送っていた。
「敵ながら見事な最後だ」
彼は敬意を覚えた。強敵に対する純粋な敬意であった。
これで上海の戦いは終わった。風見は役のもとへ戻った。
「そうですか、ドクトル＝ゲーも遂に」
「ああ、見事な最後だった」
二人は朝焼けの港にいた。今船がやって来た。
「手強い奴だった。流石にデストロンで大幹部だっただけはある」
「そうでしょうね。しかし彼も本望でしょう」
「何故だい」
二人は桟橋に足を踏み入れた。そしてそのままゆっくりと昇っていく。
「思う存分最後まで戦えたからですよ。それもライダーとね。それならば悔いはないでしょう」
「そうですか」
二人は船に入った。あとから続々と人が船に入る。
「彼等もまた戦士です。戦う旗印は違いますが」
「はい」
それは風見にもわかっていた。
「戦士は戦場での死を願うもの。彼もまた戦場で倒れました」
「それこそがあの男の願いだったのですか」
「少なくとも最後は」
役は意味ありげに言った。
「ですがその最後にこそ出るものです、その真の姿が」
「ええ」
ブイスリーも多くの敵と戦ってきた。ドクロ少佐も幽霊博士もそ

れぞれ勇敢で潔い最後であった。
「敵とはいえ敬意を払うべき時には払わなければなりません。たとえ敵であっても」
「はい」
風見は頷いた。その通りだと思った。
「では行きましょう」
桟橋が取り外された。汽笛が鳴る。船はゆっくりと出港した。
「次の戦場へ」
「はい」
船は次第に船足を速めていく。そして上海をあとにする。そして次の戦場に向かうのであった。
「ドクトル＝ゲーも倒れたか」
暗闇の中であの首領の声がする。
「はい」
その前に暗闇大使が控えていた。あの軍服姿である。
「見事な最後だったそうです」
「惜しい男だったが」
彼もまた首領の腹心であった。仮面ライダーブイスリーの前に作戦失敗を重ねていたとはいえ頼りになることに違いはなかった。
「だが惜しんでいてもはじまらぬ」
「はい」
首領は冷徹にそう言った。
「次の戦場は何処だ」
「アメリカです」
「誰がいるのだ」
「メガール将軍です」
「ほう、またアメリカに戻ったのか」
「はい、強く志願いたしまして」
「そうであろうな。あの国は奴にとっては複雑な思いがある」
首領は含み笑いと共に言った。

「希望を胸にして入り、そして絶望と共に人でなくなった地だ。さぞかし思うところも多いだろう」
「それに加えまして」
「まだ何かあるというのか」
「はい、あの国には」
大使はここでニイ、と笑った。
「あの男がおります」
「ほう、そうだったのか」
「東南アジアから転戦したようでして」
「それはいい。益々面白いことになった」
首領はさらに上機嫌になった。
「よし、メガール将軍に伝えよ。あの男とアメリカを見事完全に叩き潰せとな」
「それには及ばないかと。あの男は既にそのつもりです」
「そうであったな、ではここは奴に全てを任せるとしよう」
「わかりました」
首領と暗闇大使の笑いが闇の中に響く。そしてそれは次第に地の底へ沈んでいった。

魔都の攻防　　完

２００４・８・１６

神殿の闘神その一

神殿の闘神

この頃ギリシアでは一つの噂が起こっていた。
「二柱の神がエーゲ海に姿を現わしている」
というものである。
一人の神は巨大で角を生やした神である。それは赤い目を持ち海の中を進んでいるという。そしてその身体は鋼鉄だと言われている。もう一人は赤い仮面を被った神だ。それは神殿に現われ腕の立つ者を探しているという。
「また何とも思わせぶりな神だな」
それは日本の新聞でも話題になっていた。立花はそれをアミーゴのカウンターで読んでいた。
「おい、御前達はどう思う」
そこで史郎や純子に尋ねた。
「どうと言われましても」
「まさか本当に神様がいるなんて」
二人はピントの外れた答えを言った。
「ああ、わかってねえなあ」
立花はそれを聞いて首を横に傾げて言った。
「バダンの仕業かどうか、って聞いてるんだよ。ほら、思いきり怪しいじゃねえか」
「どう思う、純子ちゃん」
「言われてみれば確かに」
二人はようやくそれを理解した。そこへ結城が店に入って来た。
「三人共何騒いでるんですか」
その後ろにはチコとマコもいた。三人で情報収集に出ていたのだ。
「おお丈二、丁度いい時に来た」

立花は彼の方へ顔を向けた。
「いい時？」
「そうだ、これを読んでくれ」
そう言うと新聞紙を結城に渡した。
「そこの国際欄だ」
「国際欄ですか」
結城はそこに目を通した。チコとマコはそれを覗き見る。
「おい二人共、行儀悪いぞ」
立花はそんな二人を嗜めた。だが二人は新聞から目を離さない。
「ねえマコこれって」
チコは相棒に話し掛けた。その眉を顰めさせている。
「ええ、多分」
マコもわかっていた。見れば結城も察している。
「おやっさん、これって」
「怪しいと思うか」
立花は結城に顔を向けた。
「マスター、これってゴッドの連中よ」
「そうよ、間違いないわ」
チコとマコは立花に対して言った。
「おい、御前達には聞いてないぞ」
「何よ、私達だって話に入れてくれていいじゃない」
「そうよ、いつも子供扱いして」
「口だけは減らん奴等だ」
立花はその言葉にいささか閉口した。
「まあいい、言ってみろ」
「マスター、覚えてるでしょ、これ」
チコは結城が手に持っている新聞を指差して言った。
「何をだ！？」
「ゴッドよ、ゴッド」
マコも言った。

「ゴッド!?馬鹿を言えあの組織はとっくの昔に滅んでるぞ」
彼は口を尖らせた。
「だから、バダンってゴッドと同じなんでしょ!?首領が」
「ああ、そうだが」
「だったら話がわかるわ。これキングダークとアポロガイストよ」
「キングダークとアポロガイスト!?」
立花と結城は二人のその言葉に顔をハッとさせ見合わせた。
「おい、アポロガイストはわかるが」
立花はその顔を困惑させたものにしていた。
「キングダークはもう破壊されているよ、ゴッドの崩壊と共に」
キングダークは呪博士共々エックスライダーに破壊されているのだ。
「けれどまた作ったんじゃない?今までの大幹部を全員甦らせたんだし」
「すよ、バダンならそれだけの力はあるわ」
二人は口々に言った。
「ううむ、確かに」
「バダンの力をもってすればそれは容易い」
二人はその言葉に頷いた。
「もしそれが事実だとするとすぐに手を打たなければなりませんね」
結城は立花に顔を向けて言った。
「ああ、そうだな。今ギリシアにすぐ迎えるライダーはいないか」
「おじさん、今通信が入りました」
ここで純子の声がした。
「ん!?」
「誰からだ」
見れば純子は店の奥にいた。そこから声だけがする。
「敬介さんからです」
「敬介からか。また妙な縁だな」
立花はそれを聞いて思わず呟いた。

「おやっさん、とにかく通信に出ましょう」
「ああ」
結城に促され立花は通信室に向かった。チコやマコもそれに続く。
史郎は店番に残った。
「おい、敬介か」
立花はマイクを手に取ってまずそう問うた。
「はい」
すぐに神の声が聞こえてきた。
「よし、敬介だな。間違いない」
彼はそれを聞いてまずは安心した。
「今何処にいるんだ?実は御前に教えたいことがあるんだ」
「バダンのことですね」
「そうだ」
立花は頷いた。

神殿の闘神その二

「ギリシアにそれらしいのが出ているんだが」
「ええ、わかってますよ。今アテネにいますから」
「おい、もういるのか」
「はい、エーゲ海に怪しいのがいると聞きましたんで。今捜査中です」
「そうだったのか。じゃあわしから言うことは何もない。上手くやれよ」
「わかってますよ、おやっさん。こっちは俺に任せて下さい」
「おう、じゃあ頼むぞ」
「はい」
神はこれで通信を切った。
「もう敬介がいるんですか」
「ああ」
立花は結城に答えた。
「これでまあ問題はないだろう。特に海はな」
「そう思いたいですけれどそれは少し楽観し過ぎではないですか？」
落ち着いた顔の立花に対し結城の顔は険しかった。
「アポロガイストとキングダークがいるとしたら厄介ですよ」
「あの連中か」
立花は表情を暗くさせた。
「いや」
だがすぐに頭を振ってそれを打ち消した。
「ここは敬介を信じる。あいつならやってくれる」
彼は自分に言い聞かせているのではなかった。神のことをよく知っていたのだ。
彼はゴッドとの戦いの時は常に彼と共にあった。神もまた彼にとっては息子の様な存在であった。

「あいつのこともわしはよくわかっとる、御前のことと同じでな」
「おやっさん」
結城はその言葉を聞き感じ入った。
「だからここはあいつに任せる。なぁに待ってろ」
彼はここでニヤリと笑った。
「今度あいつがかけてくる通信は勝利の報告だ。それを楽しみに待っておこう」
「そうですね」
結城もそれを聞き微笑んだ。
「じゃあ俺達は心の準備をしおきましょう。そして」
それが日本であることは誰もがわかることであった。
「そして？」
「あいつの故郷を守りましょう。何時戻ってきてもいいようにね」
「おお、そうだな。そうしよう」
立花もそれに対し笑顔で頷いた。そして彼等はアミーゴのカウンターに戻っていった。
ギリシアは長い歴史を持つ国である。古代ギリシア文化が知られている。それは欧州の文化の源泉と言える存在である。オリンピックもそうである。これは古代ギリシアにおいて四年に一度ギリシア圏の全ての国や都市が参加する祭典であった。男達は全裸になりその技を競い合った。
そしてギリシア神話は今も多くの人の心を捉えている。トロイアでの戦いや多くの英雄達の物語なくして欧州の文学はなかっただろう。それは今も彼等の心に生きている。
そこにはロマンがあった。美がり悲劇があった。欧州の文化はここからはじまったと言っても過言ではない。
「ここで全てがはじまったんだな」
神はアテネにいた。この街も古い歴史を持っている。
アテネの名はギリシア神話の知と戦いの女神からとられている。海神ポセイドンとこの街を争ったがアテネのオリーブを選んだこの

街の市民によりアテネの街となりこの名を冠したのだ。
アテネはギリシアの中でも特に栄えた街であった。そしてペルシアと戦いそれに勝利を収めている。
「それもアテネの加護だったのかな」
神はふと呟いた。だがアテネの加護が去る時が来たのだ。
この勝利によりアテネはギリシア世界の盟主となった。だが次第に増長し各都市の反発を招くようになった。そしてスパルタとの戦いに敗れ以後衰退していく。
「驕りにより神の加護を失ったか」
神は丘の上を昇りながら言った。見れば所々に古代の遺跡がある。アテネもギリシアの神々も今でも生きていた。この古代の遺跡の中にいるのだ。
「キリスト教により異端とされたけれど」
だが彼等は生きているのだ。そして今もギリシアの、欧州の人々の心の中にいる。
神はそう考えながら丘の上を昇る。そして頂上にやって来た。
「さてと」
そこは古いイオニア様式の神殿であった。白い大理石である。
「ここに来る、って言っていたけれど」
神は辺りを見回した。そして腕の時計を見る。
「そろそろかな」
そう言った時だった。
「久し振りだな、神敬介よ」
神殿の陰ぁら白いスーツの青年が姿を現わした。
「貴様は！」
その青年が誰か。わからない筈がなかった。
「貴様がここに来ることはわかっていた」
アポロガイストは黒い手袋に覆われた手で神を指差した。
「だからこそここにやって来たのだ」
「何、ではすると俺に連絡をよこしたのは」

「連絡！？何のことだ」
アポロガイストは逆に問うた。
「俺はそんなことは知らん。ただ貴様の動きを呼んでここに来ただけだ」
彼は嘘を言う男ではない。それは神もよく知っていた。
「そして貴様を倒すだけだ」
右手をあげた。すると神殿の陰という陰から戦闘員達が姿を現わした。
「これだけではない」
さらに怪人までもが出て来た。
「ワオーーーーーーッ！」
ゴッドの三頭怪人ケルベロスだ。もう一体いた。
「チーーーリーーーーーッ！」
デストロンの針棘怪人ハリフグアパッチだ。二体の怪人は前後から神を取り囲んだ。
「覚悟はいいな」
アポロガイストは怪人と戦闘員の輪の外から神に対して言った。
「クッ」
神は歯噛みした。だが構えをとった。その時だった。
不意に神の左右で爆発が起こった。それで戦闘員達が吹き飛んだ。
「何だ！」
アポロガイストは咄嗟に辺りを見回した。右手に彼がいた。
「神さん、遅れて申し訳ありません」
そこには竜がいた。彼は手榴弾を放ったのだ。
そしてそれで戦闘員達を倒した。二体の怪人はそれより前に跳び安全圏に逃れていた。
「クッ、神敬介に連絡を送ったというのは貴様か」
「如何にも」
アポロガイストの問いに不敵に答えた。
「まさか貴様等がここにいるとは思わなかったがな。しかし遅れた

のがかえって好都合になった」
「フン、勝手に言え」
アポロガイストはそれに対して言った。

神殿の闘神その三

「貴様も神敬介と一緒に葬り去ってやる」
「そうはさせない！」
ここでアポロガイストの上から声がした。
「そこか！」
アポロガイストは懐から拳銃を取り出した。そして声のした方へ向けて発砲した。
だがその銃弾は届かなかった。全て弾き返されてしまった。
「やはり効かぬか」
だがアポロガイストはそれに驚いてはいなかった。当然のようにそこにいる男を見上げていた。
エックスライダーはそこにいた。身体の前でライドルを風車の様に回して銃弾を弾き返していたのだ。
「エックスライダーよ」
アポロガイストは彼に対して言った。
「降りて来い、そして俺と戦うがいい」
「望むところだ！」
エックスライダーはライドルを手に持ち飛び降りてきた。そして着地するとアポロガイストと対峙した。
「さあ来い、アポロガイスト！」
両者は睨み合う。だがそこに怪人達がやって来た。
「アポロガイスト、ここはまず我等にお任せを」
「エックスライダーを倒すのは我々の任務故」
ケルベロスとハリフグアパッチは言った。
「やれるか」
アポロガイストは問うた。
「無論」
「この名にかけて」

「そうか」
心の中に思うところもあったがここは彼等に任せることにした。
(どのみちこの者達に倒せる筈がない。だが今のエックスライダーを見ることはできるな)
だがそれは決して言わない。それは隠し彼等に対して言った。
「ではやってみるがいい。見事エックスライダーの首を挙げよ」
「ハッ」
「お任せあれ」
アポロガイストは一旦後方に退いた。怪人達はエックスライダーを取り囲んだ。
「行くぞ」
まずはハリフグアパッチが来た。怪人はまず肩から爆弾を放ってきた。
それはエックスライダーに向かって飛んできた。だが彼は臆していなかった。
「ムンッ!」
ライドルをホイップに換えた。そしてそれで爆弾を両断した。
爆弾は空中で爆発した。エックスライダーは爆風に隠れるようにして跳んだ。
「トォッ!」
空中でライドルのスイッチを入れる。今度はロングポールだ。
「受けろ!」
そして伸びるそれで怪人を突く。それはハリフグアパッチの胸を貫いた。
またライドルのスイッチを入れる。するとポールは引っ込んだ。
「グオオオーーーーーッ!」
胸を貫かれた怪人はその場に倒れた。そして爆発して果てた。
今度はケルベロスの番だ。怪人はエックスライダーの着地地点にいた。
「死ねぇっ!」

全身に電気を帯びた。そしてそれでエックスライダーを包み込まんとする。

しかしエックスライダーの方が一枚上手であった。彼はライドルをまた換えていた。

「これならどうだっ！」

それはロープであった。鞭の様に操りそれで怪人の三つの首を絞めた。

「グググ」

怪人はそれを引き離そうとする。だがそれはもがけばもがく程食い込んでくる。

電流を流そうとする。だがそれも効かなかった。

「無駄だ、このロープは電流を通さない」

エックスライダーは言った。そして首を絞める力を強くさせる。

次第に怪人の三つの頭の顔は歪んでいく。顔の色もドス黒くなってきた。

「グオオ・・・・・」

そして力が弱ってきた。最後にガクリ、と膝を着いた。

それで終わりであった。エックスライダーがロープを抜くと怪人はその場に崩れ落ち爆発の中に消えた。

「これで怪人は倒した」

エックスライダーはその爆発を見送っていた。そして顔を後ろに向けた。

「アポロガイスト、今度は貴様の番だ！」

そしてライドルをホイップにして身体の前でエックスの文字を描いた。そしてアポロガイストに対して身構えた。

「望むところだ！」

アポロガイストも右手でエックスライダーを指し示した。そして両者は前に出た。その剣を打ち合わせる。

忽ち激しい剣撃がはじまった。両者は一歩も引かず互いに剣を繰り出す。

「流石だな。またしても腕をあげたようだな」
アポロガイストはエックスライダーのホイップを受けながら満足そうに言った。
「貴様こそな」
エックスライダーもそれは感じていた。二人は互いの腕を認めていた。
「どうやら今はお互いこのまま闘っても決着は着かない」
アポロガイストは間合いを離して言った。
「だがこの戦いは最後には俺が勝つ」
「どういう意味だ？」
エックスライダーはその言葉に問うた。
「知りたいか。ならば教えてやろう」
彼は自信に満ちた声で言った。
「見るがいい」
そして丘の上から見える海を指し示した。そこにはエーゲ海の青く澄んだ世界が広がっていた。

神殿の闘神その四

だがそれは一瞬であった。すぐにそこから銀の神が姿を現わした。
「あれは！」
エックスライダーはその海神の姿を見て思わず言葉を失った。
「フフフ、驚いたようだな」
アポロガイストはそれを見て更に機嫌をよくした。
「忘れたわけではあるまい、あの巨人を」
見れば海に現われたその神は全身が銀でできていた。そして頭から二本の角を生やしていた。
「キングダーク」
エックスライダーはその巨人の名を呼んだ。
「まさかキングダークまで復活させているとは」
「ただ復活させただけではない」
アポロガイストは言った。
「見るがいい」
アポロガイストはまたキングダークを指し示した。するとその目が黒くなった。
「あれは・・・・・・」
それは闇ではなかった。何と黒い光であった。そしてそれがキングダークの両目に満ちた。
そして放たれた。黒い光はキングダークの側の小島を撃った。
一瞬であった。その小島は跡形もなく消え去っていた。
「何と・・・・・・」
エックスライダーはそれを見て思わず呆然となった。
「驚いているようだな」
アポロガイストは彼に言った。
「これが我がバダンの切り札だ。時空破断システム」
「時空破断システム」

「全てを消し去る究極の兵器だ。そう、全てとな」
「まさかそれを使って」
「そう、そのまさかだ」
彼は言った。
「このギリシア、そして地中海を全て消し去ってやる。黒い光の中に全ては消え去るのだ」
「そんなことはこの俺が許さん！」
「そう言うと思っていた」
アポロガイストはそれを聞くと満足そうに言った。
「ならば来い、エックスライダーよ。そしてキングダークを倒してみよ」
「言われなくともそうしてやろう！」
「そうでなくては面白くない」
アポロガイストはそう言うと背中のマントをたなびかせた。風が吹いてきていた。
「俺とキングダークはこの海の中にいる。そして貴様を待ち受けている。さあ来るがいい、エックスライダーよ」
その目が光った。
「このエーゲ海の藻屑にしてくれる！」
「それは俺の台詞だ！」
そう言った時にはアポロガイストは姿を消していた。見ればキングダークも青い海の中に姿を消していた。
「アポロガイスト、キングダーク」
彼がゴッドと戦っている時に常にその前に立ちはだかってきた強敵であった。ゴッドとの戦いは彼等との戦いであったと言っても過言ではなかった。
「俺は必ず勝つ、貴様等を倒してな！」
「エックスライダー・・・・・・」
戦闘員達を倒し終えた竜はその後ろ姿を見ていた。何時になく激しい彼の気迫を見て声をかけることができなかったのである。

丘の上での戦いはとりあえずは終わった。だがそれは次の戦いのほんの序章に過ぎなかった。それはエックスライダーも竜もアポロガイストもわかっていた。

「とりあえずはこれでいい」

アポロガイストは小島に置いた基地の指令室に着くと言った。既にスーツ姿に戻っている。

「エックスライダーは間違いなく海にやって来る」

「宜しいのですか？」

ここで戦闘員の一人が問うてきた。

「何故だ」

アポロガイストはその戦闘員に顔を向けて逆に問うた。

「エックスライダーは水中戦においては無類の強さを発揮しますが」

「それか」

アポロガイストはそれを聞くとニヤリ、と笑った。

「俺がそれを知らないと思っているのか」

「いえ」

戦闘員は首を横に振って応えた。

「ならばいい。若しここで首を縦に振っていたならば」

言葉を続ける。

「わかっているな」

「わかっております」

アポロガイストの冷酷さはバダンにおいてもよく知られていた。彼はゴッドにおいては怪人や戦闘員を処刑する権限を与えられていた。それを実行することも多かった。

バダンにおいては大幹部や改造魔人の権限は他の組織に比して大きかった。首領に意見を上奏することもできるし、怪人や戦闘員を処刑することもできた。これまでの組織と違う部分はまずここであった。

「では俺が考えていることも大体予想がつくだろう」

「はい」

「見るがいい」
アポロガイストはここでモニターのスイッチを換えさせた。それまで海面を映していたが基地の中に切り換わった。
そこには怪人達が映っていた。普通の怪人達ではなかった。
ショッカーの放電怪人ナマズギラー、ゲルショッカーの毒粉怪人エイドクガ、ブラックサタンの豪力怪人奇械人ワニーダ、ネオショッカーの宝石怪人ウニデーモン。いずれも海棲動物をベースとする怪人ばかりであった。
「この者達がエックスライダーの相手をする。そして」
アポロガイストはここでニヤリと笑った。
「俺も行く。そしてあの男を完全に叩き潰す」
「アポロガイスト自らですか」
「そうだ。俺は水中戦にも秀でているのは知っていよう」
「はい」
戦闘員はその言葉に頷いた。
「さあ来るがいい、エックスライダーよ」
アポロガイストはその顔から笑みを消した。
「今度こそ貴様を倒してやる。貴様の愛する海でな」
モニターは海面に切り替わった。海は戦いへの序曲を知りもせずその静かな動きを続けていた。
地獄大使は東南アジアにいた。彼はジャングルの中にいた。
「行くぞ」
周りには戦闘員達がいる。彼は戦闘員達を急かしながら進んでいく。
そしてある場所に着くと彼等に対し言った。
「ここでいい」
次に目配せをした。
「来るがいい」
「ハッ」
戦闘員達は頷いた。そして密林の中に消えていった。

地獄大使はその中に立っていた。だがすぐにそこから動いた。
弓矢が飛んできた。彼はそれをかわしたのだ。
前に突き進む。だがそのすぐ下から槍が来た。
「甘いっ！」
そこには戦闘員がいた。彼は鞭で槍を弾き飛ばした。
そしてその戦闘員を撃つと上に跳んだ。木の上に止まる。
だがそこにもすぐに攻撃が仕掛けられた。何とすぐ後ろに戦闘員の一人が保護色を使って紛れ込んでいたのだ。
「グググ」
その戦闘員は後ろから首を絞めてきた。地獄大使の顔が見る見る赤くなっていく。

神殿の闘神その五

しかし彼はそれからすぐに脱出した。戦闘員の腹を殴ったのだ。
「ガハッ」
彼は腹を押さえてその場に崩れ落ちた。地獄大使は彼を掴むと下に放り投げた。
「まだだ、来い！」
地獄大使は叫ぶ。そして密林の中に飛び込んだ。
暫く気配を立った。やがて痺れを切らした戦闘員が二人姿を現わした。
そこに鞭が襲い掛かった。茂みの中から出て来たそれはその二人の戦闘員を捕らえた。
だがそこに弓矢がまた来た。茂みの中に射る。
「そこか！」
しかし何もなかった。どうやら既に姿を消しているらしい。
暫くはまた静寂がジャングルを支配した。双方息を潜めている。
何かが動いた。茂みの中だ。
「そこだ！」
弓が来た。呻き声があがった。
「やったか！」
だがそれは違った。中から出て来たのは一匹の鹿であった。
「鹿！？」
声をあげてしまった。それが命取りとなった。
「そこかあっ！」
上から声がした。木の陰で弓を持って立っていた戦闘員は思わず顔を上げた。
そこに彼はいた。攻撃する暇すら与えず跳び掛かって来た。
それで終わりだった。彼の喉元には地獄大使の鍵爪が突き付けられていた。

「これで終わりだな」
大使はニヤリと笑って言った。
「ご苦労であった。いい練習になった」
「ハッ」
すると茂みから他の戦闘員達も出て来た。
「お見事でした」
戦闘員の一人が他の者を代表して彼に言った。
「いや、そなた達もご苦労であった」
彼はそれに対しねぎらいの言葉をかけた。
「こうして常に鍛えておかねばな。ライダー達に遅れをとってしまう」
「ハッ」
戦闘員達はその言葉に頷いた。
「そしてあ奴にもな」
彼はここで憎悪をその顔に剥き出させた。
「負けるわけにはいかんのだ。それはわkっておろう」
「はい」
「ならばよい」
彼は一先その憎悪を顔から消した。
「ここにもすぐにライダーがやって来よう。どのライダーであろうが必ず倒す。そしてこの東南アジアを地球から消し去るのだ」
「わかっております」
「その為には気を緩めてはならん。ライダーは手強い」
彼の言葉には普段の豪放さはなかった。険しいものであった。
「ライダーだけではない」
また言った。
「あの男もいる」
「あの男とは!?」
戦闘員の一人がそこに突っ込んだ。
「・・・・・いや何でもない」

地獄大使はそれを否定した。
「今の言葉は忘れよ。よいな」
「はい」
その戦闘員は頷いて応えた。
「では戻るとしよう。そうだ」
彼はここであることを思い出した。
「さき程鹿を射ていたな。あれで今日は宴といこう」
「それはよろしゅうございます」
「そなた等も付き合うがいい。宴は人が多いにこしたことはない」
「有り難き幸せ」
これも地獄大使であった。彼は陽気さも併せ持っているのだ。
「では帰るぞ。帰ったらすぐにあの鹿を食べるとしよう」
「はい」
彼等は鹿を見つけるとそれを担いだ。そして密林から姿を消した。
エックスライダーはクルーザーDで海中を進んでいた。アポロガイストの挑戦を受けてのことである。
「アポロガイスト」
彼はふと宿敵の名を呟いた。
「海中戦を挑むとはどういうつもりだ」
それが不思議でならなかったのだ。
彼はカイゾーグである。当然の様に海中戦は得意としている。元々は深海開発用に計画されていたのだから当然といえば当然であった。
だからこそ不思議なのだ。ゴッドも彼には水中戦はあまり挑んでいない。アポロガイストは特にそれを避けていたふしがあった。
「それが何故だ」
彼は考えていた。
アポロガイストがそうしていたのは負けることがわかっていたからだ。むざむざ敵の有利とする場所で戦う程彼は愚かではない。これは戦略の基本である。

しかし今は違う。彼はエックスライダーをあえて水中に誘い込んできたのだ。

「何かある」

普通はそう思う。だがアポロガイストは決戦においては小細工を弄するしない。誇り高い彼は自らの手で倒すことを好む傾向があるのだ。これはバダンの者では珍しいことであった。

「誇りか」

エックスライダーはここにハッとした。

そうであった。アポロガイストは誇り高い。そうだからこそ彼はここにエックスライダーを呼んだのではなかろうか。

「あえて俺が得意とする戦場を選ぶ。そしてそこで倒す」

彼の好みそうなことであった。

「だとしたら俺も負けるわけにはいかない。カイゾーグの名にかけて」

父により開発されたカイゾーグ。彼はここでもゴッドい殺された父の心を受けていたのだ。

「親父」

亡き父のことを思い出した。

神殿の闘神その六

「見ていてくれ。俺は必ずバダンを倒す。そして」
海中は戦いの予兆なぞ全く感じさせない。普段と変わらない。
「世界に平和を取り戻してやる」
そう思いながら彼は海中を進んでいった。
海藻や珊瑚が下に見える。エックスライダーはそれを見下ろして思った。
（綺麗だな。何時見ても飽きない）
彼はこの海藻や珊瑚が好きだった。これ等だけではない。海の全てを愛しているのだ。
だからこそバダンが許せなかった。彼にとって何にも替え難いこの海を汚すからである。
（バダン）
彼は組織の名を心の中で呟いた。
（貴様等はこの俺が倒す。例え何があろうとも）
岩山の側を通り掛かった。そこを横切る。
不意にその岩山が動いた様に見えた。
「ムッ！？」
それは岩山ではなかった。巨大な腕が現われた。
「危ないっ！」
マシンの機首を捻る。そして咄嗟に身をかわした。
腕から逃れた。そして安全な場所にまで退避する。
「キングダークか！」
「その通り」
上の方から声がした。聞き覚えのある声だった。
「その声は！」
エックスライダーは上を振り向いた。そこにはあの男がいた。
「よくぞ来た、エックスライダーよ。招きに応じてくれて感謝する」

アポロガイストは既に変身していた。そして水中に立っている。
「貴様をここに招いた理由はわかっているな」
「無論」
エックスライダーはマシンから降りるとライドルを引き抜いて身構えた。
「ここでキングダークも貴様も倒してやる」
「フフフ、そうでなくてはな」
アポロガイストは下にいるエックスライダーを見据えていた。
「こちらも面白くはない」
そして右手をゆっくりと上げた。
「折角この者達を集めて来たのだからな」
彼の周りに四体の怪人達が姿を現わした。あの四体の海棲怪人達だ。
「さあ行け、そしてエックスライダーを倒すのだ！」
「ハッ！」
四体の怪人はアポロガイストの指示に従い四方に散った。そしてそれぞれエックスライダーに襲い掛かってきた。
「来たか」
エックスライダーはその怪人達から目を離さない。すぐにその中の一体が来た。
「ウニニーーーーッ！」
怪人は棍棒を振り回してやって来る。エックスライダーはそれに対してライドルのスイッチを入れた。
「ライドルホイップ！」
それまでのスティックからホイップに換えた。そしてそれを手にウニデーモンに向かっていく。
棍棒が振り下ろされる。だがエックスライダーはそのまま進む。
「愚かな。水中戦を知らないか」
ウニデーモンは確かに海栗をベースとしている。だがどちらかというと鬼に近い。だから海での戦いを忘れていた。

棍棒は重い。その為水中では抵抗を強く受け動きが鈍くなる。鈍くなるとそれだけ衝撃が弱まる。
だがホイップは違う。抵抗が極めて少ない。その差が出た。
ホイップが一閃された。それは棍棒を切った。
柄のところで切断される。それは海の底へ落ちていく。
「ウニッ！」
だがウニデーモンは怯まない。今度は額から光線を出そうとする。
「まだ水中戦がわかっていないか」
エックスライダーはそれを見て呟いた。
光線は熱である。熱は水中では弱まる。従ってウニデーモンの自慢の光線もその力は極端に弱まるのだ。
エックスライダーはそれを何なくかわした。そしてそのまま前に進む。
「喰らえっ！」
ライドルを突く。それは怪人の首を刺し貫いた。
それで決まりであった。怪人は動きを止めた。ホイップを引き抜くとそのまま下に落ち海の底で爆発した。
すぐに別の怪人が来た。エイドクガーである。
「クエェェーーーーーッ！」
怪人は奇声と共に右手の毒針を振るってきた。ウニデーモンのそれとは比較にならない速さだ。
エックスライダーはそれをかわす。水中にいるとは思えない速さだ。
「ウニデーモンよりは慣れているな」
エックスライダーはそれを見て言った。
怪人の動きもかなり速かった。やはりエイの力を受けているだけはあった。だがそれだけでこの動きは出せなかった。
毒蛾の動きである。空を舞う様にヒラヒラと飛ぶ様に来る。
「舞うか」
「そうとも」

エイドクガーは不敵に言った。
「エックスライダー、貴様も舞わせてやろう！」
毒針を振るう。だがそれは流石に当たりはしない。エックスライダーは彼の動きから目を離さない。
次第に目が慣れてきた。動きが見えてきた。
「よし！」
ホイップを振るった。それはエイドクガーの右腕を一閃した。
「クエッ！？」
右腕が断ち切られた。だがエックスライダーの攻撃はそれで終わらなかった。
「トォッ！」
怪人の腹を切った。その腹から鮮血が溢れ出る。
「クエエエ・・・・・・」
それで決まりであった。エイドクガーもまた海の底に落ち爆発して果てた。
次に来たのは奇械人トラフグンであった。
「死ね、エックスライダー！」
怪人は両手の鋭い鰭の刃でエックスライダーを両断せんとする。
左右に縦横無尽に振るう。
だがエックスライダーも負けてはいない。それをホイップで受ける。
「この程度か！」
「まだだ！」
怪人は叫んだ。間合いを離し腰に手を当てた。
「喰らえっ！」
そこからトゲを出した。それをすぐに撃って来る。
「これならどうだ！」
それは一直線にエックスライダーに向けて向かって来る。まるで魚雷の様に。

神殿の闘神その七

しかしそれもエックスライダーには通用しなかった。
「甘いなっ！」
それもホイップで叩き落とされた。そしてすぐに前に出た。
怪人はそれに対してまたもや刃を振るう。だがそれはもう見切られていた。
「ムン！」
ライドルを一閃させた。それは怪人の額を断ち切った。
「エェヒィーーーーンッ！」
奇械人トラフグンは断末魔の叫び声をあげた。そして彼もまた同僚達の後を追い爆死した。
「残るは貴様だけだ！」
エックスライダーはナマズギラーをライドルで指し示した。
「アレレレレレレッ！」
怪人はまず全身に力を溜めた。
「何をする気だ！？」
エックスライダーは咄嗟に身構えた。これが仇になった。
「アレーーーーーーッ！」
怪人は全身から電気を放ってきた。電気ナマズの改造人間だったのだ。
「クッ、しまった！」
エックスライダーは自分の迂闊さを悔やんだ。水は電流をよく通すのだ。
「グググ」
しかしそれでもエックスライダーは踏ん張った。顔を上げ怪人を睨みつける。
「ほお、まだやる気か」
ナマズギラーは既に勝利を確信しちえた。電流のダメージはかな

りのものである筈だからだ。
「だがこれで終わりだ」
今度は口髭を伸ばしてきた。
「じかに電流を味あわせてやるわ！」
「今だ！」
エックスライダーは髭が伸びてきたのを見て咄嗟に動いた。
「貴様の力の源はそれだな！」
彼はナマズギラーの髭に電流が宿っているのを見て言った。
「ならばそれを断ち切ればいい！」
そしてライドルを一閃させた。髭はそれぞれ断ち切られた。
「グオッ！」
エックスライダーの予想は当たっていた。それは怪人の力の源であった。
怪人の身体から電流が消えていく。これで勝負は決まった。
「トゥッ！」
ライドルを袈裟斬りにした。怪人は鮮血を水中に撒き散らしその場で爆死した。
「成程な。さらに腕をあげている。戦う度に」
アポロガイストはその戦いぶりを見て言った。
「アポロガイスト、来い！」
エックスライダーはそんな彼をライドルで指し示していた。
「言われずとも行こう」
ゆっくりと動いた。そして降りて来た。だがそこで山が動いた。
「ムッ」
それはキングダークの腕であった。彼は両者の間に入るようにして上がって来た。
「キングダークか」
キングダークはエックスライダーの前にその巨体を現わしてきた。
アポロガイストはそれを見て後ろに退いた。
「わかった。ではまずは貴様に任せよう」

彼は後方に退いた。そしてエックスライダーとキングダークの戦いを観戦することにした。
「エックスライダー、残念だがまずはキングダークと戦ってもらう。俺との勝負はその後だ」
「わかった」
エックスライダーのそれを了承した。
「一つ言っておく。キングダークも生まれ変わった」
「どういう意味だ!?」
「かってのキングダークは総司令自ら動かされていた」
最初キングダークは鉄の巨人だと思われていた。だがエックスライダーが中に潜入するとそこにはゴッド総司令である呪博士がいた。彼が脳波でキングダークを操っていたのであった。
「今は違う。話すことはできないが自らの意思で動いているのだ」
「人工知能か」
「そうだ」
アポロガイストは答えた。
「さあエックスライダーよ、この新生キングダークに勝つのだ。そしてこの俺と決着をつけろ」
それこそがアポロガイストの望みであった。彼はあくまでエックスライダーと決着を着けることを望んでいるのだ。
だがキングダークにも意思がある。例えそれが人工知能であったとしても。彼はエックスライダーを見据えるとその岩石の様な腕を振り回してきた。
「来たか」
その腕で掴もうとする。だがエックスライダーは巧みに泳ぎそれをかわした。
しかしそこにもう一撃来た。もう一方の手で殴ろうとする。
だが力が減退されている。やはり水中では思う様に動けない。
「この程度ならば相手にはならん」
エックスライダーはその拳をかわしながら言った。そしてライド

ルを身構えた。
「行くぞ、キングダーク！もう一度貴様を地獄に葬ってやる！」
そして飛ぶ様に泳ぐ。そのままキングダークの懐に潜り込む。
「グオッ」
キングダークの呻き声にも似た叫び声が出てきた。そしてエックスライダーを防ごうとする。
しかしエックスライダーの動きは彼のそれより遥かに速かった。彼はすぐにキングダークの身体に貼り付いた。
「ほお、そう来るか」
アポロガイストはそれを見て言葉を漏らした。手出しをするつもりはないようだ。
「だが通用するかな、キングダークに」
彼はエックスライダーのその戦術をやや冷ややかに見ていた。
「まあやってみるがいい。負けないようにな」
エックスライダーはその言葉を聞いてはいなかった。ライドルで？ぎ目を突く。
「トォッ！」
だがその手応えはなかった。いや、見事に弾き返されてしまった。
「何ッ！」
「グググ」
上からキングダークの呻く様な笑いが聞こえて来る。腕が動いた。
「危ない！」
エックスライダーは素早くキングダークから離れる。そして止むを得ず間合いを離す。

神殿の闘神その八

腕が遂先程までエックスライダーがいた部分を襲う。少しでも遅れていたならば命はなかったであろう。
「まさか以前より硬度が増しているのか」
「その通りだ」
アポロガイストはエックスライダーに対して答えた。
「このキングダークはただ復活したわけではない。以前よりも遥かに強くなっているのだ。水中ではわかりにくいだろうがな」
「クッ、そうだったのか」
エックスライダーはそれを聞き歯噛みした。
「そして違うのは力だけではない」
アポロガイストの言葉に合わせるかのようにキングダークの両目に黒い光が宿っていく。
「クッ！」
エックスライダーはそれを見て慌ててその場から離れる。そこに二条の黒い光が襲い掛かった。
「やはりな。そう簡単には当たらぬか」
「当たるものか」
「そうでなくては面白くない。だがな」
アポロガイストの声は笑っていた。
「何時までもかわせるものではない。さて、どうする？」
確かにエックスライダーは今はかわしている。だがその動きにキレが次第になくなってきていた。疲れが出てきたのだ。
「クッ、まずいな」
それは彼も自覚していた。危機が近付いているのがわかった。
彼は考えた。敵の守りは硬い。まともな攻撃では通用しない。
「エックスキックでも無理だ」
水中ではただでさえ威力が大きく減少する。だからこそ怪人達と

の戦いもライドルで行ったのだ。
「どうすればいい」
彼は黒い光をかわしながら考えた。攻撃を当てることは容易なのだ。
「あれだけの巨体ならば当然か」
そう、巨体であった。
「待てよ」
彼はここで閃いた。
「攻撃を当てることは容易だ。ならば」
彼はまずは間合いをさらに広くした。
「？どうするつもりだ」
アポロガイストはそれを見て不思議に思った。
「あの間合いならば攻撃は全くできないぞ」
だがエックスライダーはあえて間合いを広くしている。そして彼は叫んだ。
「来い、クルーザー！」
マシンを呼んだ。すると後ろから銀のマシンがやって来た。
「よし！」
そしてそのマシンに跳び乗った。マシンは速度を全く緩めない。そのままキングダークに突進していく。アポロガイストはそれを見て思わず叫んだ。
「それがあったか！」
キングダークは光を放つ。だがそれはマシンの魚雷の様な動きの前に全く無力であった。
「この程度で！」
エックスライダーは突き進む。キングダークは腕を振り回す。だが当たるものではない。エックスライダーはそのまま体当たりを敢行する。
「クルーザーアターーーーーック！」
そしてキングダークの腹の突攻する。激しい衝撃が水中で起こっ

た。
マシンがキングダークの腹を撃ち抜いた。そして背中から飛び出て来た。
「決まったな」
エックスライダーは暫くそのまま進むと機首をキングダークの背に向けて反転させた。そこではキングダークが貫かれたままで動きを止めていた。
やがてガクリ、と頭を垂れた。そしてそのまま爆死した。
「キングダークはこれで死んだか」
ゴッド悪人軍団を掌握していた巨大な魔人を再び地獄に葬り去ったのであった。だが戦いはそれで終わりではなかった。
「見事だ、エックスライダーよ」
目の前にあの男がやって来た。
「マシンを使うとは思わなかった。流石だと褒めておこう」
「アポロガイスト」
エックスライダーは宿敵を見据えた。
「待て、今貴様と戦うつもりはない」
「どういうことだ」
エックスライダーは問い詰めた。アポロガイストはそれに対して言った。
「今の貴様は疲れきっている。そんな状況の貴様に勝っても嬉しくとも何ともない」
彼は弱っている敵の相手をする趣味はない。
「日をあらためる。勝負は三日後だ」
「三日後か」
「そうだ。場所はパルテノン神殿」
アテネにあるアテネ女神の神殿だ。
「時間は正午だ。必ず来るがいい」
「言われずとも」
「ふふふ、それでいい」

アポロガイストはそれを聞いて笑った。
「では楽しみにしているぞエックスライダーよ。そこで決着を着けようぞ」
「望むところだ」
エックスライダーもそれを了承した。これで決まりであった。
「今日はこれでさらばだ。だが三日後貴様は死ぬ」
彼はそう宣言した。
「それまでこの世に未練がないようにしておくがいい」
そして海中から消えた。あとにはエックスライダーが残った。
「最後の戦いか、アポロガイストと」
ゴッドの時には数多くの死闘を繰り広げた。そしてバダンになってからもであった。彼の行くところ常に彼の姿があったと言ってもよい。例外は日本だけであったが奇巌山で対峙している。

神殿の闘神その九

「・・・・・・・・・」

エックスライダーは思うところがあった。だがそれは口には出さなかった。

そして彼も海から姿を消した。後には死闘を告げる怪人達の残骸が残されていた。

アポロガイストは基地に帰るとすぐに指令室に入った。そして言った。

「すぐに残りの戦闘員を集めよ」

と。指令室にいた戦闘員達は突然のその言葉に驚いた。

「全員ですか」

「そうだ」

アポロガイストは頷いた。

「基地の外に出ている者全員だ。このギリシアにいるバダンの者は全て集めろ」

「それですとアポロガイスト」

戦闘員の一人が恐る恐る尋ねた。

「何だ」

アポロガイストはそちらに顔を向けた。

「この指令室には収まりきれませんが」

見たところこの指令室はあまり広くはない。少なくともギリシアにいるバダンの者全ては収めきれない。

「そうか」

アポロガイストはそれを聞き口に手を当てて考え込んだ。そしてまた言った。

「では上に出よう。あそこなら問題ない」

「わかりました」

戦闘員はその言葉に頷いた。

「ではすぐに全員集めよ。大至急だ」
「ハッ」
指令室にいる戦闘員達は皆敬礼をして答えた。そしてすぐに召集にかかった。
暫くするとギリシアにいるバダンの者全てが基地が置かれている宮殿の大広間にやって来た。アポロガイストの宮殿であるアポロン宮殿だ。この宮殿は外からは霧に覆われ決して見えないのだ。レーダーにもかからない。将に謎に覆われた城であった。
「諸君等に来てもらったのは他でもない」
アポロガイストはバダンギリシア支部、いや東欧にいるバダンの者全てを前にして言った。ここにはギリシアだけでなく東欧のバダンの者も全て集まっていた。彼が召集したのだ。
「バダン東欧本部は今日を以って解散する。諸君等はこれより西欧本部若しくは南欧本部に落ちるがいい」
西欧本部は今はスペインにある。死神博士の管轄だ。南欧はシチリアだ。百目タイタンがいる。尚北欧本部であるゼネラルシャドウは本拠地を置いていない。これは彼独自の戦略思想に拠るところが大きい。
「な・・・・・・！」
戦闘員も科学者達も彼の言葉に仰天した。無理のないことであった。
「アポロガイスト、本気ですか！？」
「俺が嘘を言ったことがあるか」
アポロガイストは平然とした様子で彼等に言葉を返した。
「俺は言ったことは必ず行動に移す。バダン東欧本部は解散だ」
「しかし」
彼等はそれでもまだ信じられなかった。アポロガイストの性格を知っていてもだ。
「一体何を為さるおつもりですか」
「決まっている、エックスライダーを倒す」

その口調も物腰も毅然としたものであった。
「それでしたら我々の力も必要でしょう」
「そうです、是非お供させて下さい」
戦闘員達が次々に申し出る。彼は冷酷であったがカリスマ性も併せ持っていたのだ。
「駄目だ」
しかし彼はその申し出を断った。
「エックスライダーを倒すことができるのはこの俺しかいない。足手まといを連れて行くつもりはない」
「しかし」
「くどい」
彼は次に来るであろう言葉を拒絶した。
「それ以上言うとその者を今この場で処刑する」
そして白いスーツの懐から拳銃を取り出した。
「さあ、まだ言いたい者はいるか」
「いえ」
戦闘員達はその言葉と銃を見て口を閉ざした。他の者もである。
「ならばいい」
彼はそれを見て銃を懐に収めた。
「ではすぐにこの宮殿から立ち去るがいい。既に爆弾を仕掛けてある」
「それでは・・・・・・」
「案ずることはない。俺が負けることなぞ有り得ない」
アポロガイストは彼等に対しそう宣言した。
「だから行くがいい。今度会う時はこの手にエックスライダーの首を下げている」
「わかりました」
彼等もそれに従った。そして次々とその場を去って行った。
「さらばだ」
アポロガイストは去って行く彼等の背を見ながらそう呟いた。

「再び会う。その時までの別れだ」
そして彼も宮殿を後にした。暫くしてアポロン宮殿は爆発し炎の中に包まれた。そして後には欠片一つ残ってはいなかった。
バダン東欧本部の者達はアポロガイストの言葉に従い南欧、及び西欧本部に向かった。そしてそこでそれぞれの部に入れられた。

神殿の闘神その十

「アポロガイストめ、何を考えている」
死神博士も百目タイタンも彼の行動について首を傾げた。
「前々から妙な考えを持っているとは思っていたが」
百目タイタンは地下の己の宮殿の謁見の間で一人考え込んでいた。
「わからんな。何故一人で行くのか」
「フフフ、貴様にはわかるまい」
そこであの声がした。
「また貴様か」
それは後ろからであった。タイタンは後ろを振り向いた。
「そうだ。ギリシアでの話を知ってこちらに来てやったのだ」
ゼネラルシャドウはマントを翻しながら言った。
「アポロガイストの行動の意味がわかりかねているな」
「否定はしない」
百目タイタンは不機嫌を込めた声で返した。
「何故全力で以ってエックスライダーに向かわない。俺にはそれがわからん」
「あの男は全力で向かっている」
「一人でか」
「そうだ。奴は己の全てを賭けてエックスライダーに向かっているのだ」
「ふむ」
タイタンはそれを聞いて首を二三回縦に振った。
「つまり戦闘員達を足手まといと考えているのか」
「それもあるだろうが大筋においては違うな」
「では何だ」
「貴様はストロンガーとの闘いを他の者に邪魔されたいか」
「邪魔をするならば命はない。そう」

ここでシャドウに顔を向けた。
「貴様といえどな」
その無数の目で彼を睨みつけた。
「そうだろうな。それは俺とて同じこと」
「成程な。奴の考えがこれで理解できたわ」
タイタンは納得したような声で言った。
「つまり奴は自分自身だけの力で決着を漬けたいというのか」
「そうだ。それにはもう他の者の存在なぞ一切不要だ」
ゼネラルシャドウは半ば自分自身に言うようにして語った。
「そう、何者ものな」
今度はその声をタイタンに向けた。
「貴様の言いたいことはわかっている」
タイタンはまた彼に無数の眼を向けた。
「アポロガイストはエックスライダーと一騎打ちで決着を着けたいのだろう」
「そうだ。ようやくわかったか」
「フン」
シャドウの声に対しいささか不服そうな声を出した。
「俺もその程度はわかる。貴様がどう思っているか知らんがな」
「フフフフフ」
「奴のその心意気は認める。だがな」
ここでまたシャドウを見据えた。
「奴のとの戦いは俺のものだ」
「それはどうかな」
だがシャドウも引かない。
「北欧に来たら俺が優先的にやらせてもらう。北欧は俺の管轄だからな」
「勝手にしろ。だがな」
タイタンはここで言った。
「若し南欧に来た場合はわかっているな」

「当然だ。俺もその程度の分別はある」
シャドウは言葉を返した。
「もっとも奴の倒すのは誰なのかは既に定まっていることだが」
「どうせまたカードの結果なのだろう」
「悪いか」
「いや」
タイタンはそれをあえて否定しなかった。
「貴様の占いに口を挟むつもりはない。貴様の好きにすればいい」
「ではそうさせてもらおう」
「だがな」
タイタンはここで目を光らせた。
「これからは言わなくともわかっているだろう」
「フフフ」
シャドウはそれに対しては不敵に笑って返した。
「では俺はこれで帰らせてもらおう」
「土産はいるか」
「土産？」
「持って行くがいい」
タイタンはシャドウに対し何かを投げた。それは一本のワインであった。
「シチリアのワインだ。口に合うかどうかはわからんがな」
「赤か白か」
「白だ。あえて貴様の好みに合わせてやった。有り難く思え」
「心遣い感謝しよう。では俺も返礼をするとしよう」
「何だ」
「受け取るがいい」
そう言うとマントを翻した。すると空中に数本の煙草が現われた。
「ハバナ産だ。貴様にやろう」
「有り難いな。最近ハバナ産に凝っていてな、早速失敬させてもらおうか」

「好きにするがいい」
タイタンはそれを掴んだ。そして指で火を点けた。すぐに口に含んだ。
「フム」
「美味いか」
「ああ」
タイタンは満足した様に口から煙を吐いた。
「葉巻はいい。どうも普通の煙草では味わいがない」
「そんなにいいのか」
「貴様もどうだ」
「いや、俺は煙草は吸わん」
シャドウはそれに対しては右手を出して拒絶した。
「酒は嗜むがな」
「そうか。ではこの葉巻は全ていただくとしよう」
「その為に持って来た。そうするがいい」
「わかった」
タイタンは遠慮なく葉巻を全て手に取った。そしてそれを全て収めた。
「ではな。俺は本拠地に帰らせてもらう」
「ああ」
その時だった。不意に上の方から声がした。
「タイタンにシャドウよ」
「その声は」
忘れられる声ではなかった。あの声であった。

神殿の闘神その十一

「元気そうで何よりだ」
「首領！」
二人はすぐにその場で片膝を着いた。そして恭しく頭を垂れた。
「フフフ、よい。そう畏まらなくともな」
「ハッ」
だが二人はそれでも片膝を着いたままであった。
「御前達に声をかけたのは他でもない」
「何でしょうか」
「うむ」
首領はここで一旦言葉をとぎらせた。そしてまた口を開いた。
「今度の作戦だが」
「はい」
二人は次の言葉を待った。
「一つに集中させる。北欧本部及び南欧本部は統合させる」
「統合ですか」
「そうだ」
首領は厳粛な声でそう言った。
「そして本部はこのシチリアに置く。そしてここで時空破断システムを使用するがいい」
「わかりました」
二人はそれぞれ時空破断システムを授かっていた。それぞれそれを兵器に装填しているところであった。
「指揮権はそなた達二人に任せる。上手くやるようにな」
「ハッ」
二人は頭を垂れながらチラリと互いを見た。何かを含む目であった。
「この欧州を死の荒野とするがいい。期待しているぞ」

「お任せ下さい」
二人はそう言って上げていた頭を再び垂れた。
「では任せた。思う存分やるがいい」
「ハッ！」
こう言い残すと首領はそこから気配を消した。そして彼は何処かへ気配を移した。
「これで欧州はよし」
彼は既に日本の本部へ移っていた。
「暗闇大使よ」
「ハッ」
その前には鍵爪を生やした暗闇大使が畏まっていた。
「御前の言う通りだ。二人は早速互いを意識しておったわ」
「そうでございましょう」
彼はそれを聞き満足した様な笑みを浮かべて答えた。
「あの二人はブラックサタンでも何かと張り合っていました」
「それはよく覚えているぞ」
首領は思い出した様に笑った。
「思えば滑稽ではあったがな。何かというといがみ合っておったわ」
「そうでございましょう。奴等の属性は水と油の如きものですから」
タイタンは奸智を好む、だがシャドウは策は弄しても戦いは正々堂々としている。戦い方でもかなりの違いがあった。
「対立しない筈がないのです」
「そしてその対立から力を出させるのか」
「はい。おそらくあの地域に向かうライダーはストロンガーです。チャージアップしたあの男の力は凄まじいものがあります」
「それに勝つ為にだな」
「はい。あの二人は確かに強大な力を持っております。しかしそれだけでは足りません」
「フム。タイタンは死神博士から何かを借りたようだがな」
「それでもです。またシャドウもその全力を出すでしょうが」

「それだけでは足りないというのだな」
「怖れながら」
暗闇大使はここでまた頭を垂れた。
「流石だな。かってベトナムにおいてその智略で名を馳せただけはある」
「遠い昔の話です」
だが彼は心の中で胸を張っていた。それは彼の誇りであるからだ。
「ではシチリアはこれでいいな」
「はい」
「ギリシアだが」
首領はここで話を移した。
「アポロガイストは一騎打ちを挑むつもりのようだな」
「そうのようです」
「しかも東欧のバダンを解散させてか。どうやら退路を断ったようだな」
「あの男にはあの男の考えがあるのでしょう」
暗闇大使は考える顔を述べた。
「頭の切れる男だが昔からどうも勝負にこだわるところがある。それが奴の持ち味だがな」
「それがこの度の行動になったのでしょう」
「うむ」
首領はここで考える様な声を出した。
「ここは奴に任せるとしよう。どのみち東欧ではこれ以上の損害は出ない」
「では独断で東欧本部を解散させたのは不問ですな」
「そうだ。エックスライダーを倒せばそれでいい。倒せない時はあの男が死ぬ時だしな」
「では今回はあの男の戦いをゆうるりと見守ることに致しましょう」
「そうだな。アポロガイストも強い。奴の力だと必ずやエックスライダーを倒すことができよう」

「ハッ」
「では下がるがよい。そなたも日本での作戦があるだろう」
「わかりました。では」
暗闇大使はマントでその全身を包んだ。そして闇の中に消えた。
「アポロガイスト、期待しておるぞ」
首領もそう言うと何処かへ姿を消した。そして全ては暗闇の中となった。
「健闘を祈ります」
竜はパルテノン神殿に向かう神に対して声をかけた。
「有り難うございます」
神は後ろを振り向いてそれに応えた。その顔には笑みがあった。
「これがアポロガイストとの最後の戦いになるでしょう」
「はい」
神もそれはようわかっていた。
「今回で決着を着けます。向こうもそのつもりでしょう」
「そうでしょうね」
今度は竜が頷いた。
「明日またこの場所で。楽しみに待っていて下さい」
「はい。最高級のシャンパンを用意しておきますよ」
「有り難いですね。俺はあれが大好きなんですよ」
「ではそれを楽しみにしておいて下さい」
「ええ」
神はバイクに乗った。そして今度は振り向くことはなかった。
「絶対に帰って来て下さいよ、神さん。いや」
竜はここで言い替えた。
「エックスライダー」
戦場に向かう神の背は神のものであった。だがそこには仮面ライダーエックスの姿がはっきりと現われていた。

神殿の闘神その十二

パルテノン神殿はアテネのアクロポリスの丘にある。この神殿が建てられたのは遥かな昔である。紀元前四三二年に当時の優れた建築家や陶芸家を集めて作られた。アテネの守護神である知と戦いの女神アテネの為の神殿であることは言うまでもない。

ドーリア様式の代表としても知られるこの神殿もギリシアの長い歴史の証人である。東ローマ帝国の時代には教会となっていた。そこに住む神はアテネではなくなっていたのだ。だがその神は変わった。

東ローマ帝国が倒れオスマン＝トルコが支配するようになった。今度はイスラムのモスクとなった。この神殿はアテネから二度も主を変えることになったのだ。

ギリシアが独立すると本来の神が戻って来た。かって戦乱に崩壊したこともあったが今ではその姿を取り戻している。そして今もアテネを見守っているのである。

「これがパルテノン神殿か」

神はその前に来た。感慨を込めて神殿を見上げる。

「思っていたよりずっと巨大なんだな」

ここに来たのははじめてであった。初めて見るこの神殿に対して思いを馳せずにはおられなかった。

神が座すこの神殿で今運命の戦いがはじまろうとしていた。神はそのことを考えると複雑な思いになった。

「戦いの女神の神殿での戦いか」

「我等の決着を着けるのに相応しい場所だとは思わないか」

神殿の柱の陰から白いスーツに身を包んだアポロガイストが姿を現わした。

「確かにな」

神はそれに応えた。

「アテナは戦いを司る。だがそれは決してアーレスの好むような戦いではない」
アーレスもまた戦いの神である。ゼウスとヘラの息子だ。同じ戦いの神であってもアテナと違い粗暴で血を好む。その為あまり親しまれてはいない。
「あくまで知と技による戦いなのだ」
「そうか」
神はアポロガイストのその言葉に頷いた。
「我等の戦いに相応しいとは思わないか。かって日本において幾多の死闘を繰り広げた我等にとってな」
「それは貴様に同意する」
「有り難いな。どうやら気に入ってもらえたようだ」
アポロガイストは口の左端を歪めて笑った。
「でははじめるとしよう。我等の最後の戦いを」
「望むところだ」
アポロガイストは神の前に降りて来た。そして二人は睨み合う。
「行くぞ」
まずはアポロガイストが構えをとった。

アポロ
両手を肩の上まで上げる。そしてそこから一旦左右に大きく開く。
チェンジ！
その両手を顔の前でクロスさせた。白いスーツが黒く変わった。
背中に白いマントが現われる。右手が変形し左手に炎の楯が現われる。
顔が赤い仮面に覆われた。アポロガイストはクロスさせている両手を元に戻した。

「さあ来い！」
神に対して叫ぶ。神もそれに対して構えをとった。

「行くぞ、アポロガイスト！」
そして変身に入った。

大変身
両手を真上に突き出す。そこからゆっくりと左右に開く。斜め上で止める。
身体が銀のバトルボディに覆われ胸が赤くなる。黒い手袋とブーツが現われた。
エーーーーックス！
そして左手を拳にして脇に入れる。右手を手刀にして斜め前に突き出す。
銀色の仮面が顔の右半分を覆うと左半分もすぐに覆われた。そして眼が赤くなった。

全身を光が包んだ。そして仮面ライダーエックスが姿を現わした。
「トォッ！」
ライドルを引き抜いた。そしてアポロガイストに襲い掛かる。
「ムンッ！」
アポロガイストはまずそれを楯で受けた。そして戦いを開始した。
楯でライドルを受けると右手のサーベルで突いた。エックスライダーは後ろに跳びそれをかわす。
後ろに跳ぶとすぐに反撃に転じた。前に跳びライドルで突く。
それを払う。そして今度は切り払う。エックスライダーはライドルでそれを受ける。
「流石にやるな」
アポロガイストはそこで言った。
「貴様こそな」
エックスライダーも負けてはいない。彼等は鍔競り合いを開始した。
両者共一歩も引かない。そして同時に後ろに退く。

アポロガイストは今度は右腕を前に突き出してきた。そして銃弾を放ってきた。
「アポロマグナム！」
銃弾が襲い掛かる。だがエックスライダーはそれに対して逃げようとはしない。
「この程度っ！」
そう叫ぶとライドルを身体の前に風車の様に激しく回転させた。
「ライドル地獄車！」
そしてそれで銃弾を全て弾き返した。
「ならばっ！」
今度は左手を大きく振り被った。そこには楯がある。
「ガイストカッターーーーッ！」
横からその楯を投げる。楯の横の刃が高速回転をしながら襲い掛かる。だがエックスライダーはそれから目を離してはいなかった。
「トォッ！」
上に跳ぶ。そして紙一重でそれをかわした。
「甘いな」
しかしアポロガイストはそれに対して余裕の笑みを見せた。
楯が後ろで飛んでいる。だがそれは急に向きを変えた。エックスライダーはそれに気付いてはいないようだ。少なくともそう見ることができた。
だがエックスライダーも伊達に今まで多くの組織と戦ってきたわけではない。それは見切っていた。

神殿の闘神その十三

「トォッ！」
ガイストカッターが背中に突き刺さるその直前に跳んだ。そしてそれをかわした。
ライドルを使い空中で大車輪をする。そして着地した。
「これをかわすとはな」
アポロガイストは楯を左手で受けながら言った。
「見事なものだ。褒めてやろう」
「あと少し跳ぶのが遅れていたら俺は死んでいた」
「そうか。ならばこれで死ぬがいい」
またマグナムを放ってきた。だがそれは簡単にかわされてしまう。
「フン、この程度では最早通用せぬか」
「言った筈だ、ライダーに同じ技は通用しないと」
「確かにな」
彼はそれを聞くと構えを変えた。
「ならばこのサーベルで決着を着けよう。良いか」
「望むところだ」
エックスライダーもライドルをスティックからホイップに換えた。
そして身構えた。
「行くぞ！」
「来い！」
そして両者は再び激しく斬り合った。銀の火花が辺りに飛び散る。
「死ねっ、エックスライダー！」
「誰が！」
左右に斬り合い、突きを繰り出す。そしてそれを防ぎ反撃を仕掛ける。双方一歩も引かなかった。
アポロガイストのマントが翻る。エックスライダーは上に跳ぶ。
やがて斬り合いは百合を越えた。

それでも決着は着かなかった。エックスライダーは突きを繰り出した。
「フンッ！」
アポロガイストは楯でそれを防ぐ。その瞬間激しい衝撃が彼を襲った。
「何っ！」
楯が粉々に砕けたのだ。エックスライダーの突きが彼の楯を打ち砕いたのだ。
さらにライドルを繰り出す。だがそれはアポロガイストのサーベルの前に全て防がれてしまう。
楯を失おうともアポロガイストは怯まなかった。なおも激しい攻撃を繰り出し続ける。
エックスライダーもだ。時は流れやがて陽が落ちる頃になった。
両者は徐々に疲れを感じるようになっていた。そして互いに隙を窺うようになった。
（早く勝負を決めなければ）
（こちらがやられる）
エックスライダーもアポロガイストもそう考えていた。そして互いに動きを止めた。
（これが最後になる）
それはわかっていた。だが迂闊に動くことはできなかった。先に動いた方が負けだからだ。
（来い）
二人は互いを窺う。だがピクリとも動かない。
そのまま時が過ぎていく。次第に焦りを感じるようになった。
（おのれ）
痺れを切らしだしたのはアポロガイストの方であった。彼の気性がそうさせた。
（何とかして決めなければ）
隙を窺う。だが相手もそうそう迂闊ではない。隙は見せない。

だが一瞬であった。エックスライダーはピクリ、と動いた。
（ムッ！？）
右腕が動いた。ライドルを持つ手だ。
胸が空いた。心臓が見えた。
「今だ！」
それを見たアポロガイストはすぐに動いた。
「これで最後だ！死ね、エックスライダー！」
そして突きを繰り出す。心臓を突くつもりであった。
突進するアポロガイスト。だがエックスライダーはそれを見ても焦らない。
彼も動いた。そしてスッと前に出た。
「よし！」
そして態勢を崩したアポロガイストに向かった。
「喰らえ」
そしてライドルを繰り出す。
「ライドル三段突きーーーーっ！」
アポロガイストの胸にライドルを繰り出した。それは彼の胸を激しく突いた。
心臓を、腹を。そして喉を。三つの急所を瞬く間に貫いた。
「ガハッ！」
アポロガイストは思わず呻き声を出した。そして前に崩れていく。
エックスライダーはそれをすり抜けた。そしてアポロガイストの背の方に振り向いた。
「終わったな」
アポロガイストは崩れ落ちていく。やはり急所を貫かれたのは効いたようであった。
だが彼も意地があった。かろうじて踏み止まった。
「甘く見るな」
そう言うと倒れ込みそうになるところで態勢を立て直した。
「俺を）誰だと思っている」

そう言いながらエックスライダーの方へ向き直った。
「アポロガイストだ」
そして完全に立ち上がった。
「見事だ、エックスライダーよ。まさか急所を三つ攻撃するとはな」
「咄嗟に繰り出しただけだ。成功するとは思わなかった」
「謙遜はいい。俺は貴様を褒めているのだ」
彼はそう言いながら変身を解いた。そして白いスーツに戻る。
「軍人であった頃から、いやそれより前から俺は誰にも負けたことがなかった。俺は常に勝利者だった」
それが彼の誇りであった。

神殿の闘神その十四

「そしてゴッドに入っても俺は常に勝ってきた。皆俺の前に屍を曝した。だが」

彼はここで口調を変えた。

「その俺を破ったのが貴様だった。復讐の為に甦ろうともまたしても敗れた」

アポロン第二宮殿での最後の戦いの時だ。死期を悟った彼はエックスライダーに対して戦いを挑んだのである。

「そしてバダンにおいても何度か刃を交えたが遂に勝利を収めることはできなかった」

「長江とモンゴルでだな」

「そうだ。そしてここでもだ。俺は遂に貴様に勝つことはできなかった」

彼は言葉を続けた。

「だが俺はそれを恥だとは思ってはいない。むしろ誇りだと思っている」

「誇り」

「そうだ。貴様の様な男と最後まで命を賭けて戦ったのだからな。戦士としてこれ以上の喜びはない」

「アポロガイスト」

「そろそろお別れだ。貴様との勝負実に楽しかったぞ」

そしてニヤリ、と笑った。

「エックスライダーよ、さらばだ。俺が戦った中で最強にして最高の戦士よ」

彼は倒れなかった。最後にこう言った。

「バダンに栄光あれ。偉大なる首領の手に世界が収められんことを！」

そう言うと彼は爆死した。その後には何も残らなかった。

「アポロガイスト・・・・・」
エックスライダーはその爆煙が全くなくなるまで見ていた。そしてその風を正面から受けていた。
「見事な戦士だった。味方だったならどれだけ心強かったか」
ギリシアの戦いは終わった。こうして東欧に平和が戻ったのであった。
「そうですか、アポロガイストがそんなことを」
戦いの後アテネの空港で竜は神から戦いの結末を聞いていた。
「見事ですね、バダンにいるのが惜しい位です」
「はい」
神も同じ意見であった。
「しかしそれがあの男の生き方だったのでしょう。いや、戦士にとって何処に属しているかは関係ない。ただ強い相手と戦いたいだけです」
「それだけが望みですか」
「ええ。ですからあの男は貴方との戦いを最後まで望んだのです。バダンにおいても貴方だけを狙っていた」
「確かに。けれど俺はそれを嫌だと思ったことはなかった。常に倒してやると思っていました」
「そういうものです。貴方も戦士なのですから」
「戦士ですか。ライダーではなく」
神はそれを聞いて苦笑した。
「あっと、ライダーであることを否定したりはしませんよ」
竜は笑ってそう弁明した。
「戦士とライダーは同じなのですから」
「同じですか」
「はい、戦いに身を置く者として。しかし」
「しかし!?」
「ライダーは正義の為に戦います。それが戦士であるところにプラスアルファされるのです」

「正義ですか」
「ええ、正義です」
竜は頷いて答えた。
「それがライダーなのでしょう。貴方達は正義の為にライダーとなった」
「・・・・・・・・・」
神はそれには沈黙した。決して望んで改造人間となったわけではないのだから。
「それは否定されたいでしょう」
「ええ」
「お気持ちはわかります。私は貴方達の全てを知っているわけではありませんが貴方達のこれまでの戦いやライダーとなった経緯は知っています」
ライダーと関わる者としてそれを知らない者はいない。特に立花は。
「それぞれそれについて思われるところはあるでしょう。私の考えではそれは全て運命だったのです」
「運命ですか」
神はそれを聞いて悲しげな顔になった。
「運命だったのですか、俺がカイゾーグ仮面ライダーエックスとなったのは」
「認めたくありませんか」
「いえ」
彼は首を横に振った。
「そうなんでしょうね。あの時親父と共にゴッドに殺されかけたのは」
あの時の記憶が甦る。神はゴッドの刺客により父と共に瀕死の重傷を負った。
しかし彼は甦った。その父が最後の力を振り絞って彼を改造人間にしたのだ。

「敬介、御前はもう人間ではない」
父神敬太郎はそう言いながら彼に改造手術を施した。
「だが御前の命を救うにはこれしかない。・・・・・許してくれ」
その目は泣いていた。父として我が子を改造人間にするには忍びなかった。
だがそれしかなかった。そして彼は改造人間となり甦った。
ゴッドとの戦いでも多くのものを失った。恋人であった水城涼子はゴッドの工作員となって彼に襲い掛かってきた。幾度も命を狙われた。
そして彼女と瓜二つの顔と姿を持つ霧子。彼女達は何と双子の姉妹であったのだ。そして涼子はゴッドに潜入していたのだ。彼を裏切ったわけではなかった。
その彼女達も死んだ。ゴッドに手にかかったのだ。
彼には何も残ってはいなかった。だがそんな彼を立花やチコ、マコ達が支えてくれたのだ。
「そしておやっさんと出会ったのも。アポロガイストとの戦いも運命か」
「はい。そして今も戦い続けているのも」
「残酷な運命だ」
首を横に振ってそう言った。何かを打ち消すように。
「しかし受け入れますよ、喜んで」
そこで笑顔になった。
「そう言うと思いましたよ」
竜はそれを聞いて微笑んだ。
「貴方はそういう人です。だからこそライダーになった」
「運命の女神達が選んだのですかね、俺を」
「そうなのでしょう。貴方だけでなく他のライダー達も。そう」
言葉を続けた。
「貴方達だからこそ選ばれたのだと思います」
「俺達だからですか」

「はい、その運命は確かに過酷です。しかし貴方達ならそれを克服することができます。いえ、しました」
「色々とありましたけれどね」
「それでもです。自分に勝てないとバダンにも勝てません。どれだけ強くとも」
　力の強さは本当の強さではないのだ。心が強いことこそ本当の強さなのだ。竜はそう言っていた。
「その強さがあるから貴方達は戦える。そして勝てる」
「バダンにも」
「当然です。そしてその勝利はもうすぐです」
「はい」
「では行きましょう。そろそろ最後の戦いがはじまりますよ」
　二人は日本行きの便に向かった。そしてそこから日本に向かった。戦いに向かう為に。

神殿の闘神　　完

２００４・９・９

絶望の運命その一

絶望の運命

アメリカは実に多彩な顔を持つ国家である。

フロンティアや摩天楼だけではない。見渡す限りの農園もあれば荒涼とした平原もある。雪に覆われた山々があり湖がある。

そこにいる人々も雑多である。白人だけではない。黒人やアジア系もいる。ネィティブもいる。まさに人種の坩堝だ。黒人、すなわちアフリカ系アメリカンはかっては南部に多くいた。その文化は今でも南部に色濃く残っている。その中心地がニューオーリンズである。

この街はルイジアナ州のみならず南部の中心都市の一つでもある。ルイジアナの名が示す通りかってはフランスの植民地であった。

だがイギリスとの戦争やアメリカの独立等を経てアメリカの領土となった。そこからこの街の新たな歴史がはじまった。

この街はミシッシピー河の河口にあることから港町として栄えた。外輪船が行き交い、フランス風の建物が立ち並んでいた。やがてこの街を別のものが支配するようになる。

音楽である。奴隷として連れて来られた黒人達が教会で賛美歌を習い、そこから黒人霊歌が誕生した。

そしてジャズ、カントリー、ソウル、ゴスペル、ブルース等が誕生した。黒人達はその卓越した音楽センスでもって多くの素晴らしい音楽を生み出していった。

今ではこの街は工業都市でもある。ヒューストンの石油工業とも繋がり、機械や化学も盛んである。

「こうして見ると色んな顔のある街ですね」

佐久間は今では観光用となっている外輪船に乗りながら言った。

「繁栄もあれば差別もある、それの克服と栄光もある。貿易もしちえれば工業もある」

「まるでアメリカそのものですね」
隣にいた沖がそれに合わせるように言った。
「アメリカにいた時にここにも何度か来たことがあります」
「そうだったのですか」
「はい。それで結構色んなことがありましたね」
彼は微笑んで言った。
「タチの悪い男にからまれたこともありますよ。何でもクー＝クラックス＝クランとか言って」
「本当ですか！？」
アメリカ南部を中心に活動する白人至上主義を旗印とする狂信的な団体である。真っ白な服と独特のフードを被っていることで知られている。
彼等の主張はかなり極端である。標的はアフリカ系だけではない。ユダヤ系やアジア系、ヒスパニックやアイルランド系、イタリア系等のカトリックにも向けられる。先鋭的なプロテスタントでもあるのだ。
その為実際には敵も多い。その野蛮な行動の為多くの者の嫌悪も買っている。
かってクランの幹部だった男が政界に名乗り出たことがあった。そのまま白人至上主義を唱えていた。
結果は無様なものであった。殆ど票が入らなかった。ことあるごとに反対のデモが起き、所属している政党から締め出しを受けるという有り様であった。
所詮そうした詰まらない連中である。差別を謳い蛮行を繰り返すだけが脳の輩共だ。何故顔を隠すのか。それは自らの行いが人間として最低なものであることをあらわしているに他ならない。
「それでどうなりました」
「どうもなりませんよ」
沖は涼しい顔で言った。
「返り討ちにしてやりましたよ」

「大丈夫だったんですか！？」
クランの報復を危惧しての発言だった。
「何、単なるチンピラだったようです。酒に酔ってからんできただけだったようで」
「それはよかった」
佐久間はそれを聞きホッと胸を撫で下ろした。
「別に何ともありませんよ」
沖は何でもなかったように答えた。
「例えそいつがクランでも」
「クランでも」
「そんな奴は許せません。差別を言い立て他の者を暴力で屈服させるなぞバダンと同じですから」
「そうですね」
佐久間はそれに頷いた。そしてあることに気付いた。
（俺達も心の中の何処かにバダンがあるのかな）
と。これはある意味で事実だろう。人は良心だけではないのだ。中には邪悪な心も持っている。それが不完全な存在である人間なのだ。
（そしてこの人はライダーになるべくしてなった）
沖の今の話を聞いてそれを確信した。
（正義感と悪を排除しようとする心、それがなくてはライダーにはなれない）
人々を守る為にその拳を血に染めるライダー、その心は常に正義を愛する心と悪と戦う心がなくてはならないのである。
「船から降りたらどうします？」
沖はその話を打ち切って佐久間に話し掛けてきた。
「降りてからですか？」
「はい。そろそろ食事時ですが」
見ればもうすぐ正午である。
「そうですね」

佐久間は少し考えてから答えた。
「音楽を聴きながら食べるのもいいですね」
「それならいいお店を知っていますよ」
沖は微笑んで言った。
「ハンバーガーのお店でして。他にも色々な料理がありますよ」
「それはよさそうですね」
アメリカの特色のひとつだがニューオーリンズも多くの人々がいる。だから食べられる料理も多岐に渡るのだ。
「歌手はかなりいいのが揃っていますよ。ジャズですけれど」
「ジャズですか」
ニューオーリンズからはじまったアメリカの誇る音楽文化の一つである。
「ジャズはお好きですか？」
「はい」
「なら問題ありませんね」
こうして二人はその店へ向かった。そして料理と音楽を楽しみに行った。

絶望の運命その二

「そうか、あの男が来たか」
メガール将軍はニューオーリンズの後方に広がる広大な沼沢地の中にある基地の中でその報告を聞いていた。
「やはりな。すぐに来ると思っていた」
それは彼にとって予定されたことであった。
「どうなさいますか」
「既に考えてある」
将軍は戦闘員の言葉にすぐ答えた。
「この時が必ず来るとわかっていたからな」
彼は思わせぶりにそう言った。
「左様ですか」
「うむ。既に戦力も整えてある」
彼は戦闘員に顔を向けた。
「私のやり方は知っているな」
「はい」
「ならば良い。既に刺客を送り込んである」
「刺客をですか」
「うむ。だがそれはほんの挨拶だ」
彼はニコリともせず言葉を続ける。
いつものように硬い表情である。彼はその顔を変えることはない。
「その者達にはすぐに帰るように言ってある。形勢が不利になったならな」
「何故ですか」
「あの男を倒すのは誰だ」
「それは・・・・・・」
戦闘員は問われ少し口篭もった。
「私以外にはおらん」

彼は答えられないのはわかっていた。だから自分で言った。
「それが運命なのだ。私のな」
彼の声は沈んだものになっていた。
「私のこの身体とスーパー1のあの身体」
恨めしそうに言った。
「同じものであった筈なのだ」
顔を少し上に上げた。
「それが何故こうなったのか」
暗い表情がさらに暗くなった。
「悔やんでもはじまらないがそう思わずにはいられない」
顔を下に向けた。
「だがそうした思いもここで断ち切らねばならない」
彼はそう言うと再び戦闘員に顔を向けた。
「よいな、あの男を倒し、このアメリカを消し去る」
「はい」
戦闘員はその言葉に対し敬礼した。
「その為に私は選りすぐりの精鋭達を連れて来た」
「といいますと」
「見よ」
将軍は右を指差した。そこにあったシャッターが開いた。
「おお」
それを見た戦闘員は思わず声をあげた。
「この者達が全てを成し遂げるであろう」
「流石です、将軍」
彼はメガール将軍にバダン設立当初から属していた。その為彼に対する忠誠心も篤かった。
「用意はいいな」
将軍はそれをよそにシャッターの向こうにいる者達に語り掛けた。
「はい」
彼等は一様に頷いた。

「よし。ならば早速作戦に取り掛かるぞ」
「わかっております」
彼等はシャッターから出て来た。全部で五人いた。
「久しいな」
「地獄谷以来ですから」
彼等は全部で五人いた。その中央にいる忍者に似た服の女が答えた。
「そうだったな。思えばあの時からかなり経つ」
「はい」
五人は深々と頭を垂れた。
「堅苦しいことはいい。今はそういう時ではない」
だが将軍は彼等に顔を上げさせた。
「あれの用意もいいな」
「万事整っております」
五人の中にいるスキンヘッドの大男が答えた。
「そうか」
「何時でも出撃はできます」
細い目の男が言った。
「ではすぐにでも行こう」
メガール将軍はシャッターの方へ歩きだした。
「お待ち下さい」
頭に布を着けた男が彼を引き留めた。
「我々もお供致します」
虎の毛を着た男も言った。
「よいのか」
将軍は彼等に顔を向けた。
「この戦いは生きて帰れる保証はないぞ」
「それがバダンの戦い」
五人はそれに対して言った。
「我等とてそれは承知しております」

「そうか」
将軍の顔は変わらなかった。だが声は変わっていた。
「是非ともお供を。そしてスーパー1を共に倒しましょうぞ」
「そなた達には別の作戦を執ってもらいたかったのだが」
「それは問題ない」
ここで後ろから声がした。
「お主は」
見ればそこに死神博士がいた。
「スペインにいた筈ではなかったのか」
「興味深い話を聞いたのでな」
彼は科学者特有の冷徹な目でメガール将軍を見た。
「興味深い話？」
「そうだ。お主が使っている機械だ」
「あれか」
「そうだ。一度見たいと思ってな」
彼はそれ以上は語らなかった。

絶望の運命その三

「よいか」
「どうせ断っても無理に見るつもりであろう。構わん」
「ふふふ、恩に着る」
彼は前に出た。そして将軍と共にシャッターの向こうの通路を進んだ。
「聞いたところによると古代中国の破壊兵器だそうだな」
「うむ。マタギの里である山彦村に隠されていた」
「その経緯は知っている。それにしてもよく残っていたものだ」
「だから我等も利用したのだ。一度はスーパー1に破壊されたがな」
後ろにはあの五人が続く。戦闘員達もだ。
やがて格納庫に辿り着いた。
「ここだ」
将軍は扉を開けた。
「済まんな」
死神博士はその扉をくぐった。そして将軍と五人が続く。戦闘員の最後の一人が閉めた。
中には一機だけ置かれていた。龍の首を持つ巨大な円盤だ。
「ほう」
博士はそれを見てまず声をあげた。
「見事なものだな」
「お主もそう思うか」
「うむ。これだとこのニューオーリンズは楽に破壊できる。だが」
「だが！？」
「アメリカ全土を瞬時となると難しいな」
「そうか」
将軍はそれを聞き目を少し暗くさせた。
「時空破断システムを搭載していないな」

「わかるか。装填には成功していない。思ったより扱いにくくてな」
「そうか。では力を貸してやろうか」
「力を!?」
「そうだ。ことと次第によってはお主の作戦もかなり変わるぞ」
実は彼はこれに乗りスーパー1ごとニューオーリンズを焼き払うつもりだったのだ。
当然スーパー1はここに乗り込んでくるだろう。その時はこの兵器ごと自爆するつもりであった。五人には別に作戦を執ってもらい、後を託すつもりだったのだ。
「まずはこれに時空破断システムを搭載する。そして無人飛行が可能なようにする」
「そんなことができるのか」
「私を誰だと思っている」
死神博士は自信に満ちた声で言った。
「死神博士だぞ」
それだけで充分であった。彼の名はバダンにおいては権威そのものであった。
「そうか、ではやれるのだな」
「当然だ」
死神博士は不敵に笑った。薄い唇に自信が満ちる。
「ではとくと見せてやろう。我が技術の粋をな」
それから数日死神博士は格納庫から出て来なかった。他の者の立ち入りは一切許されなかった。
「恐るべきプロフェッショナルの意識ですね」
指令室で戦闘員の一人がメガール将軍に対して言った。
「うむ。伊達にショッカーで最高の頭脳と謳われたわけではない」
将軍も彼には一目置いていた。
「いいか、決して邪魔はするなよ」
そして周りの部下達にこう言った。
「死神博士は誇り高い。もしそんなことをすれば・・・・・。わ

かっているな」
「はい」
彼等はそれを聞き顔を一瞬青くさせた。死神博士は冷酷非情なことでも知られているからだ。
誰も格納庫には近寄ろうとしなかった。そしてそこからまた数日が経った。
「終わったぞ」
死神博士が指令室にやって来た。その顔は格納庫に篭る前と何ら変わってはいなかった。だが表情は自信に満ちたものであった。
「そうか」
将軍はそれを聞き頷いた。
「では見せてもらおう」
「うむ、とくと見るがいい」
今度は死神博士が案内した。そして二人は格納庫へ向かった。
「これだ」
そして博士は基地の中の火の車を指差した。
見たところ外見には何羅変わったところはない。
「外見ではない、見るところは」
博士は将軍の次の言葉を見透かしたように言った。
「念じてみよ。飛べと」
「うむ」
将軍は死神博士に言われ試しに念じてみた。
すると火の車が宙に浮いた。
「おお」
将軍はそれを見て思わず声をあげた。
「それでKではない。撃てと念じてみよ」
言われるままに念じてみた。すると竜の目から黒い光が放たれた。
「時空破断システムを竜の目においたのだ。どうだ、いいだろう」
「うむ、まさかこれ程までのものにしてくれるとは」
将軍は満足したように言った。

「これなら文句はあるまい」
博士はやはり自信に満ちた笑みを浮かべた。
「それどころではない。有り難く礼を言わせてもらう」
「礼はいい。当然のことだからな」
彼にとっては開発も改造も自然なことであった。息を吸うようなものである。
「わしの望みは一つだ。これでアメリカを、スーパー1を倒すがいい」
「わかった」
将軍は頷いた。
「喜んで使わせてもらおう」
「それでいい。では健闘を期待するぞ」
「うむ」
死神博士は踵を返した。そして格納庫から姿を消した。

絶望の運命その四

将軍は暫く格納庫に残っていた。そして火の車のテストを繰り返していた。

「将軍」

そこにあの五人がやって来た。

「御前達か」

彼は五人に顔を向けた。

「見よ、これが死神博士の改造した火の車だ」

彼はそれを指差して言った。

「私の意のままに動く。これ程までのものを作るとはな。流石だと思わんか」

「その死神博士ですが」

見れば彼等は険しい顔をしている。

「言いたいことはわかっている」

将軍は落ち着いた顔で頷いた。

「はい、死神博士といえば」

狡猾な一面もあったのだ。だからこそショッカーにおいて大幹部として君臨することができたのだ。

「それはわかっている。だがもしそうならばこちらにもやり方がある」

「といいますと」

「簡単なことだ。これを使わなければよい」

メガール将軍は素っ気ない声で言った。

「そういう顔をする必要はない」

将軍は五人が表情をさっと暗くさせたのを見て宥めた。

「それはそれでもう考えてある。当然死神博士もそれはわかっているだろう」

「それはそうですが」

よく考えてみればあの死神博士がそこまで頭が回らないとはとても思えなかった。
「だがこれで二正面作戦を展開することが可能になったな。我々tこの火の車とでだ」
「はい」
「では作戦会議に移ろう」
メガール将軍は五人に対して言った。
「今後のスーパー1及びアメリカをどうするかについてな」
「わかりました」
こうして将軍と五人は指令室に戻った。見ればモニターがついたままである。
「来たか」
そこには死神博士がいた。彼は将軍達に顔を向けた。
「丁度いいものが行われているぞ」
「いいもの？」
「見るがいい」
死神博士はその手に持つ鞭でモニターを指し示した。見ればそこにはスーパー1が映っていた。
彼だけではない。他にもいた。
「ム」
見ればバダンの戦闘員達である。
スーパー1は彼等と戦っている。街は言うまでもなかった。
「これはどういうことだ」
メガール将軍は死神博士に問うた。
「お主に見せたいものがあってな」
彼は不敵な笑みを浮かべていた。
「私にか」
「そうだ。スーパー1が改造手術を受けているのは知っているな」
「無論だ。全てのライダーが受けていることをな」
それはメガール将軍も知っていることであった。

「だがその戦闘までは見ていないだろう」
「残念だが。スーパー1は東南アジアにいたのでな。私は北欧だった」
「それは仕方ないな。だが一度その目で見ていた方がいい」
「うむ」
スーパー1はその拳法でもって戦闘員達を次々と倒していた。
「また腕を上げているな」
将軍はそれを見て言った。
「単に改造のせいだけではない。腕自体もかなり上達している」
スーパー1は赤心少林拳の使い手である。
「そして」
将軍の目はそこに留まらなかった。
「格闘スタイルはそれ程変わりはないようだな」
「そうか」
死神博士は拳法にはあまり興味がない。
「やはり守り主体か。ならばそこに攻め方がある」
「見出したようだな」
「うむ。私もまた拳法を使うからな」
ドグマの帝王テラーマクロから直伝されたものである。
「ではそれを使うのだな」
「うむ。だが」
将軍はここで考える顔をした。
「当然工夫はしていくつもりだ」
「そうであろうな」
死神博士にもそれはわかった。
「だがそれはお主自身で考えることだ。私の管轄外だ」
「わかっている」
将軍は頷いた。
「見ているがいい。私がどう戦い、どう勝つのかをな」
「楽しみにしておこう」

博士は唇の端だけで笑った。
「では私はこれで失礼させてもらう。こちらもそろそろ作戦の準備があるのでな」
「確かセビーリャだったな」
「うむ、よい街だ」
スペイン南部の港町だ。死神博士の出身地でもある。
「そこから欧州の地獄がはじまる。ダンテの神曲のようなな」
「また古い作品を出すな」
「地獄を描いた作品としては最もよい。まさにあれこそ地獄だ」
彼等は復活するまでその地獄にいた。だからこそよくわかるのだ。
「地獄はいい。実に快適だった。そして」
彼の目が妖しく光った。
「この世にそれを復活させればそれこそ我がバダンの理想郷となる」
「それは同意する」
メガール将軍にとってこの世界は破壊されなければならないものである。
「だが私はそれよりもまず為さねばならないことがある」
「それがあの男との戦いだな」
「そうだ」
「思う存分やるがいい。ではな」
「うむ」
こうして死神博士は姿を消した。そして後には何も残らなかった。
「行ったか」
将軍は彼が姿を消すのを見届けた。
「では我々も行くぞ」
「はい」
五人は同時に頷いた。
「仮面ライダースーパー1よ」
彼は暗い目で呟いた。
「今度こそ貴様との決着をつける」

そして五人に顔を向けた。
「よいな。その為にはそなた達の力が必要だ」
「わかっております」
五人はその言葉に頷いた。
「我等の命はメガール将軍に預けます」
「すまん」
メガール将軍は頷いた。そして言った。
「行くぞ、仮面ライダースーパー1を倒しに！」
「ハッ！」
五人だけではなかった。戦闘員達も続いた。彼等はメガール将軍を先頭に基地から出撃していった。

絶望の運命その五

戦闘員達との戦いを終えた沖と佐久間はニューオーリンズの郊外にいた。
「街から少し行くと沼地ばかりですね」
「ええ。ですから結構蚊も多いんですよ」
沖が答えた。
「ミシシッピー河の河口にありますからね。どうしても水気が多くなってしまうんです」
「そうなのですか。南部にはあまり来たことがないですからそれは知りませんでした」
「佐久間さんは主にニューヨークや五大湖近辺で活動されたんですよね」
「はい。あちらはここよりはずっと乾燥していますね」
ニューヨークとニューオーリンズでは気候にかなりの違いがある。ニューヨークは西岸海洋性気候だがニューオーリンズは亜熱帯に近い。すぐ前にはカリブ海が広がっている。
「五大湖にしろ寒い位ですからね」
「そうでしょうね。しかしアメリカは広い」
「こうした街もあるということですね」
「はい。アメリカは多くの顔を持つ国です。このニューオーリンズにしろそうです」
「隣にはテキサスもありますね」
西部劇での有名な舞台である。
「テキサスもまたアメリカです。シカゴもニューヨークもまたアメリカです」
「面白い国ですね。様々な顔がある」
役はあらためてそれを知った。
「これでバダンさえいなければ」

佐久間は少し苦笑させた。先の小競り合いを思い出したのだ。
「ですが見逃すわけにはいかない」
沖はここで険しい顔を作った。
「バダンを倒すことこそが俺達の使命なのですから」
「わかってますよ」
佐久間は答えた。
「世界を守ることがライダーの役目。そしてその為には」
「全てを賭けます」
その顔は引き締まっていた。強い決意が見られた。
「俺がライダーとして生まれ変わったその日からそれは決まっていたことです。いや」
彼はここで言葉を訂正した。
「俺がこの世に生まれた時からそれは決まっていたのかも知れません」
「運命ですか」
「はい」
佐久間は頷いた。
「人の一生はおそらく生まれる前から決まっているんだと思います。その人が何をするのか」
「そして貴方はライダーになる運命だったと」
「ええ。ならば俺はその運命に喜んで従います。ライダーとして」
彼もまた強い決意を胸に持っていた。佐久間は彼にもライダーとは何であるかを感じ取っていた。
「だからこそ」
彼はここで街の方を振り向いた。
「絶対に守り抜きます。この世界を」
「はい」
佐久間もそれに頷いた。その時だった。
「運命か」
後ろから声がした。

「出たな」
沖と役は素早く向き直った。
「久方ぶりだな。沖一也よ」
そこにはメガール将軍が立っていた。あの五人と戦闘員達も一緒である。
「奇巌山以来だな」
「そうだな」
彼はあの時のバダンとの対峙を脳裏に思い出した。
「メガール将軍よ」
彼はすぐに構えをとった。赤心少林拳の構えである。
「貴様がここに来た理由はわかっている」
「そうか」
彼はゆっくりと前に出た。
「お待ち下さい」
だが後ろに控えていた五人が彼の前に出た。
「ここは我等にお任せを」
彼等はそう言って将軍を制止した。
「よいか」
将軍は彼等を一瞥して問うた。
「はい」
五人は胸のところで左手に拳を作り右手の平でそれを包んで答えた。
「ならば見せてもらおう。そなた達の戦いを」
「有り難うございます」
五人は頭を垂れた。そして沖と佐久間に向かい合った。
「沖一也よ」
五人の中心にいる黒服の女が彼に問うた。
「我等のことは覚えているな」
「無論だ」
沖は構えを保ったまま答えた。

「地獄谷五人衆、忘れる筈がない」
「ならばよい」
五人はここで左右に散った。
「鷹爪火見子」
黒服の女が名乗った。
「蛇塚蛭夫」
細目の男が続いた。
「熊嵐大五郎」
スキンヘッドの大男が。
「大虎竜太郎」
虎の毛を羽織った男も。
「象丸一心斎」
最後に頭に布を巻いた男が。五人はそれぞれの名を名乗り終えると構えをとった。
「ムン！」
掛け声と共にその全身を気で覆った。するとそれぞれその身体が変わっていった。
まずは鷹爪の身体が紅くなる。翼が生え爪と嘴が生える。
「サタンホーク！」
蛇塚の身体が緑色になる。そして顔が蛇のそれになる。

絶望の運命その六

身体に蛇が巻きつき左手も蛇に変化する。
「ヘビンダー！」
熊嵐の額に金属の三日月が出る。鬣と鉄の身体が全身を覆う。
そしてその左腕は鉄球になる。
「ストロングベア！」
大虎の身体はその身に着けている虎の毛皮と同化していく。
爪が生えた。そして牙も生え揃った。
「クレイジータイガー！」
象丸の右手に巨大なバズーカが現われる。その身体も青灰色になる。
牙が生え目が赤くなった。
「ゾゾンガー！」
彼等はそれぞれ怪人に身体を変えた。そして沖を取り囲んだ。
「覚悟はいいか、沖一也！」
サタンホークが彼の前に出て問うた。
「せめて苦しまぬよう一撃で倒してやる！」
そう言うと両手の爪で引き裂かんとした。だが沖はそれを上に跳びかわした。
「無駄だっ！」
だがそこにゾゾンガーが砲撃を仕掛けた。右手に持つバズーカを使ったのだ。
「沖さん！」
佐久間が思わず叫んだ。沖は爆風の中に呑み込まれたかに見えた。
だがそれはそう見えただけであった。彼はその中からすぐに出て来た。
「トォッ！」
その時には姿は変わっていた。スーパー1に変身していたのだ。

「変身したか、やはりな」
後方から戦いを見守るメガール将軍はそれを見て呟いた。
「油断するな」
将軍は五人に対して言った。
「スーパー1の力は知っていよう。気を抜いてはならんぞ」
「ハッ」
五人はそれに対し振り向くことなく頷いた。顔はスーパー1から離さない。
スーパー1は五人の輪の中に着地した。そして構えをとっている。佐久間は既に戦闘員達と戦っている。そしてスーパー1の戦いもはじまった。
「行くぞっ！」
まずはサタンホークが跳び掛かって来た。その爪で再び切り裂かんとする。
「二度も同じ手にっ！」
だがスーパー1はそれを巧みにかわした。足捌きだけで、である。しかしそこにヘビンダーがやって来た。
「サタンホーク、助太刀するぞ」
「済まない」
サタンホークは右に、ヘビンダーは左に展開した。
「ふふふふふ」
ヘビンダーは無気味な笑い声を漏らした。そしてその左手を伸ばしてきた。
「甘いっ！」
しかしスーパー1はそれもかわした。だがそこに鉄球が襲い掛かって来た。
「ムンッ！」
それは蹴りで弾き返した。パワーハンドに換える暇はなかった。
「よくぞ今のを防いだ」
そこにはストロングベアがいた。

「だがこれはどうかな」
間合いを離す。そして胸のブーメランを取り外した。
「死ねっ！」
そのブーメランをスーパー1めがけ投げつけた。しかしスーパー1は既にレーダーハンドに腕を換えていた。
「させん！」
そして右手からミサイルを放った。それでブーメランを撃ち落とした。
しかし息をつく暇はなかった。そこに槍が襲い掛かって来た。
今度はクレイジータイガーの槍だった。怪人はそれを手足のように使っている。
「俺もいるということを忘れるな」
「クッ」
他の三体の怪人もスーパー1を取り囲もうとする。ゾゾンガーは離れた場所で他の四人を援護しようとバズーカを構えている。
「さあ、どうする、スーパー1よ」
メガール将軍はスーパー1を見据えて言った。
「山彦村の時は各個撃破されたが今度はそうはいかんぞ」
「そのようだな」
スーパー1は五体の怪人に囲まれながらもいささかも怯んではいなかった。恐怖なぞ何処にもなかった。
「今度はあの時のようにはいかんぞ。それを今教えてやろう」
「それはどうかな」
しかしスーパー1はまだ諦めてはいなかった。
「こうした時の戦い方もあるということを見せてやる」
「そうか」
何かあるな、メガール将軍はすぐにそれを悟った。
だがそれに対処するつもりはなかった。ここは様子を見ることにした。
（この五人さえ無事ならそれでいい）

彼はそう考えていた。いざという時は自分が出る筈だった。
「待て、スーパー1」
将軍とスーパー1の会話を遮る様にクレイジータイガーが出て来た。
「今の貴様の相手は我等だ。まずは我等の相手をしてもらおうか」
「望むところだ」
スーパー1はそれを受けた。腕をすぐに換えた。
「チェーーーンジ、エレキハァーーーーンドッ！」
「エレキハンドか」
メガール将軍は彼が換えた青い手を冷静な様子で見ていた。
「それをどうするつもりだ」
表情を一切変えない。ただスーパー1を見ている。
「さあ来いっ！」
そして怪人達を挑発する様に言った。
「言われなくとも！」
怪人達はそれに対しスーパー1の言葉が終わらぬうちに一斉に進み出た。その瞬間に隙が生じた。
「よし、今だ！」
スーパー1はその隙を見逃さなかった。すぐにその青い拳を地面に撃ち付けた。
「エレクトロサンダーーーーーーッ！」
地面に電流を放った。ストロンガーが得意とするあの技だ。
「ウオオッ！」
これには怪人達も思いもよらなかった。全身を電流に覆われもがき苦しむ。

絶望の運命その七

「そうか、広範囲に電流を放ち対処したのか」
メガール将軍もこれには考えが及ばなかった。
「流石と言うべきか」
しかしスーパー1の攻撃はこれで終わらなかった。
「チェーーーーンジ、冷熱ハァーーーーンドッ！」
緑の腕に換えた。そしてそれで下を凍らせた。そしてすぐにまた腕を換えた。
「チェーーーーンジ、パワーハァーーーーンドッ！」
今度は赤い腕だ。それで凍りついた大地を渾身の力で打つ。
凍てついた大地に亀裂が走った。凍った泥地はこれで地震の様に亀裂が走った。
そしてまだ冷熱ハンドに換える。その亀裂に炎を走らせる。
それで大地は再び溶けた。そして怪人達はその泥の中に沈んでいく。
スーパー1は再びエレキハンドに換装した。目にも止まらぬ速さだ。
「腕の換装にも時間をかけなくなっているな」
メガール将軍はそれを見て呟いた。
スーパー1は再び電流を大地に走らせた。電流が今度は半身を泥の中に埋めている怪人達に襲い掛かった。
「グググ・・・・・」
これには流石に大きなダメージを受けた。怪人達は何とか泥から這い出ても立っているだけでやっとだった。
「どうだ、この攻撃は」
スーパー1は重力をコントロールさせて泥の上に立っていた。彼ならではの能力であった。
「フム、見事だったと褒めてやろう」

メガール将軍はそう言いながら前に出て来た。
「だがそれ位にしてもらおうか。この者達は私の腹心なのでな」
「戯れ言を」
スーパー1は将軍を見据えて言った。
「メガール将軍よ」
そして今度は彼に正対した。
「ならば貴様が相手になるというのか」
「それも悪くはない」
将軍は平然とした態度で言った。
「来るか」
スーパー1はそれを聞き身構えた。
「血気にはやるな。今は貴様と闘うつもりはない」
「ではどうするつもりだ」
「貴様に見せたいものがある」
「見せたいもの!?」
「そうだ。見るがいい」
将軍は悠然と言った。右手をゆっくりと上げる。すると空に何かが姿を現わした。
「あれは」
スーパー1は空に姿を現わしたそれを見て思わず息を呑んだ。
「懐かしいであろう」
将軍はスーパー1を見たまま言った。
「火の車、あれまで復活していたのか」
「そうだ、全ては貴様とこのアメリカを滅ぼす為にだ」
「できるものか」
だがスーパー1は厳然とした態度で言い返した。
「確かに前に火の車ならできなかっただろう」
将軍は言った。
「だがこの火の車は違う」
そう言うと上を飛ぶ火の車をチラリ、と見た。

「見るがいい、新たな力を」
そして右手を再び上げた。
「やれ」
右手を下ろした。すると火の車の龍の目に黒い光が宿った。
「あれは！」
「何だあれは・・・・・・！」
その時スーパー1の隣に佐久間が来た。彼も戦闘員達との戦いを終えていたのだ。
「これは流石に知らないようだな」
将軍はそれを見て呟いた。
「ではとくと見ておくがいい。我がバダンの新たな力をな」
両眼からその黒い光が放たれた。それは大地を撃った。
「ムッ！」
沖と佐久間はそれを見て思わず叫んだ。
二条の黒い光が大地を撃った。するとその一帯が瞬く間に消え去った。
「何だ今のは」
二人はそれを見て呆然となった。
「驚いたようだな」
メガール将軍はそれを見て言った。
「これが我がバダンの時空破断システムだ」
「時空破断システム！？」
「そうだ。暗黒の力を使った究極の兵器だ。全てを抹殺する、な」
彼は冷然とした態度をそのままにして言った。
「スーパー1よ、今この場でこの黒い光を貴様に放ってもよい。だが」
将軍はここでスーパー1を睨んだ。暗い光が宿っていた。
「貴様を倒すのはこの私の拳以外にない。だから今日はこれで退こう」
「クッ・・・・・・」

スーパー1は歯噛みした。
「また近いうちに会おう。ニューオーリンズでな」
将軍の声は相変わらず冷然としたものである。
背を向けた。ようやく立ち上がった五人がそれに続く。
「その時が貴様の最後だ。それまで腕を磨いておくがいい」
そして彼等は姿を消した。火の車も何処かへ消えていった。
「スーパー1」
佐久間が彼に声をかけた。心配そうな顔をしている。
「大丈夫です」
だがスーパー1はそんな彼を逆に励ますような声を出した。
「火の車も地獄谷五人衆もメガール将軍も必ず俺が倒します」
その声は力強いものであった。
「だから・・・・・悲観してはいけません」
「はい」
佐久間はその言葉を聞いて頷いた。
「諦めてもいけません。諦めたらそれで終わりですから」
「そうですね」
彼はまた沖の、スーパー1の強さを知った。そして二人は新たな戦いに備え気を張るのであった。
「とりあえずはこれでいい」
基地に戻ったメガール将軍は言った。
「そなた達もご苦労であったな」
そして側に控える五人に対して声をかけた。
「いえ、我々は」
だが五人はその言葉に謙遜した。
「スーパー1に遅れをとりましたし」
「それはよい」
将軍はそれを宥めた。
「むしろそれを経験に生かしてもらいたい。次の戦いがあるからな」
「わかりました」

五人はそれを聞き頭を垂れた。
「そなた達は十二分によくやってくれている。このメガール、謹んで礼を言うぞ」
「勿体なきお言葉」
彼は部下を粗末にするような男ではなかった。ましてや彼等は自分自身が鍛えた者達である。愛情も持っていた。

絶望の運命その八

「今はゆっくりと休むがいい。そして次の戦いに備えよ」
「ハッ」
五人は下がった。そしてメガール将軍は一人になった。
「仮面ライダースーパー1」
彼はスーパー1の名を呟いた。
「貴様は確かに美しい。だがそれ故に憎かった」
かってドグマにいた時のことを思い出していた。
「私もあの姿になる筈だった。しかし」
改造手術の技術が未熟であった為彼は醜い姿になってしまったのだ。
それに悲観した彼は研究所から去った。そして一人命を絶とうとしていた。
その彼を救ったのがテラーマクロであった。彼はそんな将軍に声をかけドグマに誘ったのだ。
「あの時は本当に救われたと思った」
彼はドグマの大幹部の一人となった。そして他の四人の大幹部や最高幹部であった悪魔元帥と共にテラーマクロの下で暗躍した。
しかしやがてテラーマクロと悪魔元帥が対立する。二人は性が合わなかったのだ。
悪魔元帥はドグマから出ることになった。他の四人は彼についた。
「お主はどうするのだ?」
五人は組織を出る時メガール将軍に尋ねた。彼はドグマに残ることにした。
「テラーマクロには命を救って頂いた」
彼はその時に言った。
「そうか」
五人はそれを聞くと静かに頷いた。そしてそれ以上は誘おうとし

なかった。
「ならばお主の好きにするがいい。我等はそれを止めることはせん。そしてお主には危害は加えん」
「すまない」
「だがな」
悪魔元帥はここで言った。
「お主はあまりにも自分の過去を気にし過ぎる。仕方のないことだが」
「・・・・・・・・・」
将軍はそれには答えなかった。
「それを忘れることも必要だ。そうでなければ何時かそれに押し潰される」
彼はそう言うとドグマをあとにした。そしてそれが彼と悪魔元帥の最後の会合であった。
「悪魔元帥の言ったことは正しかった」
彼はまた呟いた。
「私は己の醜い姿を呪い過ぎた」
それを悔やむのであった。
彼はドグマ怪人の墓場にてスーパー1との決戦に挑んだ。そして奥沢正人としての過去の姿を知らされた。
だが彼はそれでもスーパー1と闘った。婚約者の命まで奪って。そしてメガール将軍として死んだ。
「私はメガール将軍だ」
彼は一人呟き続ける。
「奥沢正人ではない」
それが今の彼の全てだった。
「バダンの大幹部、それ以外の何者でもないのだ」
そして席を立った。
「スーパー1を倒す。バダンとして」
モニターをつける。そこにはスーパー1が映っていた。

「覚悟するがいい。貴様は私が必ず倒す」
そして拳を前に掲げた。
「この手でな」
そう言うとその場を去った。あとには闇だけが残っていた。
沖と佐久間はメガール将軍との対峙のあとニューオーリンズを回っていた。
「必ずバダンは来る」
そう確信していた。
二人はフレンチクォーターに来ていた。ここはかってフランスの植民地時代市街地であった場所だ。
彼等はそこを調べていた。バダンがテロを仕掛けて来るのではと危惧しているのだ。
「メガール将軍はあまりテロは好まないですが」
沖は彼の性格はよく知っていた。
「だがもしもの場合もあります。他の者が来ている可能性も否定できない」
「それはありますね」
佐久間は彼の言葉に頷いた。
「バダンは複数の大幹部が一つのエリアで作戦行動を執ることも多い。テキサスでも重慶でもそうだった」
沖はそれまでの戦いを思い出しながら言った。
「磁石団長や魔神提督も一緒にいた。魔女参謀と幽霊博士も同時に来た」
「やはりそれだけの戦力があるということなのでしょうね」
「そうですね。今までの組織でもこれだけのものはなかった」
沖は真剣な表情で答えた。
「今までこれだけの怪人達を一度に相手にしたことはありません」
「はい、そして今度は時空破断システムという未知の兵器まで使用してきています」
「怖ろしい奴等です、一体どれ程の力があるというのか」

彼は己の力を過信してはいなかった。冷静にバダンの力を見極めていた。
そこに何者かが姿を現わした。そして沖と佐久間を取り囲む。
「何奴っ！」
二人はそれに対して素早く身構える。
「そこにいたか、二人共」
そこに蛇塚と象丸が姿を現わした。
「くっつ、貴様等は！」
「探したぞ、今度こそ息の根を止めてやる」
大虎と鷹爪も出て来た。
「熊嵐は」
象丸は鷹爪に問うた。
「もうすぐ来るわ、心配しないで」
「そうか」
他の三人はそれを聞き頷いた。
「ならば暫し我等四人で沖一也の相手をしよう」
そして戦闘員達と共に沖と佐久間を取り囲んだ。
「行くぞ！」
そして沖に一斉に襲い掛かった。
「来たか！」
沖もそれに立ち向かった。そして四人と拳を交えた。
「我等の力が怪人の時だけだと思ったら大間違いだ！」
彼等は銘々独自の構えをとり沖に立ち向かって来た。
「これを受けてみよ！」
熊嵐は激しい動きで襲い掛かって来た。
「ムッ！」
沖はそれを受け止めた。そこに蛇塚が来る。
「シューーーーーッ！」
腕を蛇の様にしならせる。そしてその腕を鎌首の様にして襲って来た。

だが沖はそれを屈んでかわした。しかしそこに大虎の足払いがくる。

「甘いわっ！」

それはまるで竜巻の様であった。沖はそれを自らも足払いをかけることで相殺させた。

沖は跳んだ。態勢を立て直す為だ。だがそこに鷹爪が跳び掛かってきた。

「そうそう逃げられると思わないことだ！」

その爪で切り裂かんとする。沖はそれを後ろに身を捻ってかわした。

すんでのところで着地する。そこに新たな男が来た。

「待たせたな！」

「象丸！」

象丸はその拳で沖の顔を砕かんとする。だが沖はそれを両手で防いだ。

「やるな」

拳を受けられた象丸は思わず笑みを漏らした。

「流石は赤心少林拳の最後の継承者だけのことはある」

赤心少林拳、既にテラーマクロにより壊滅させられていた。沖はその最後の奥儀伝承者であった。

絶望の運命その九

「生憎だが俺は負けるわけにはいかない」
沖は象丸から身を離し彼等と間合いをとって言った。
「貴様等を全て倒すまではな。さあ、来い」
「残念だがそれはない」
彼等は沖を睨みつけたまま言った。
「貴様は今からこのニューオーリンズと運命を共にするからだ」
「何！？」
「見るがいい」
五人は上を指差した。すると空から雷の様な爆音が聞こえてきた。
「あれか」
沖はその爆音の主が何であるかすぐに悟った。
火の車が来た。厚い雲の間から舞い降りて来た。
「さあ、沖一也よ」
五人は彼に対して言った。
「黒い光を浴びて死ぬがいい」
そう言うと彼等は姿を消した。
火の車はゆっくりと沖に近付いて来た。だが沖はそれから退こうとしなかった。
「沖さん、ここは一時撤退しましょう」
戦闘員達との戦いを終えた佐久間が言った。だが沖はそれに対して首を横に振った。
「いえ、それはできません」
「しかし」
「俺が退いたらこのニューオーリンズはあの火の車により消されてしまうでしょう。それだけは許してはなりません」
「ではまさか」
「そのまさかです」

佐久間の言葉ににこりと笑って答えた。
「見ていて下さい、沖一也の、仮面ライダースーパー1の戦い方を！」
そう言うと天高く跳び上がった。
「ブルーバージョン！」
そしてマシンの名を叫ぶ。するとブルーバージョン改が姿を現わした。
マシンは大地を蹴った。そして沖のもとへ飛ぶ。
沖は既にスーパー1に変身していた。光の中から姿を現わす。
そしてそれに乗った。マシンは彼を乗せたまま空を飛ぶ。
火の車はスーパー1に狙いを定めた。そして目に黒い光を充填させる。
「やはりあそこか」
スーパー1はそれを冷静に見ていた。
「あの両目を破壊すれば火の車はただの円盤になる」
彼はそう喝破した。だがそれは容易ではないこともわかっていた。
二条の黒い光が襲い掛かる。スーパー1はそれをマシンの機首を捻ってかわした。
「ムン！」
黒い光は後ろに消えた。空の彼方で消滅する。
火の車の目は赤に戻った。スーパー1はその間に腕を換装していた。
「これなら」
それはレーダーハンドであった。それで火の車の左眼に照準を定める。
「喰らえっ！」
ミサイルを放った。それは一直線に火の車の左眼に飛んでいく。
ミサイルが炸裂した。爆発と共に龍の左眼が潰れた。
「よし！」
だが右眼がまだ残っていた。その右眼をこちらに向けてきた。

そしてまた光を放つ。だがそれもかわした。だがミサイルはもうない。
「今度はこれだ！」
そしてまた腕を換装させた。エレキハンドだった。
「喰らえっ！」
両手を重ね合わせそこから電流を放つ。それは龍の右眼を破壊した。
これで黒い光を放つことはできなくなった。だがスーパー1は攻撃を止めなかった。
「チェーーーンジ、冷熱ハァーーーーンドッ！」
緑の腕に換える。まずは炎を放った。
炎が火の車の全身を包む。そしてその身体を真っ赤にした。
今度は冷気を放った。一度極限にまで熱されたその身体が今度は急激に冷やされる。
それによりかなりのダメージを受けた。装甲はもうあちこちが破損していた。
「よし！」
ブルーバージョン改から跳んだ。そして火の車の背に跳び乗った。
「止めだっ！」
また腕を換装した。パワーハンドだ。
その紅い拳で龍の背を激しく殴る。そｓｈちえその各部を次々と破壊していく。
装甲を破壊された火の車は最早それに対して全く無力であった。
瞬く間に原型を留めぬ程にまで破壊された。
スーパー1は跳んだ。そして蹴りを放った。
「旋風スーパァーーーーキィーーーーーック！」
火の車を貫いた。そしてスーパー1が着地した時火の車は空中で爆発していた。
「やりましたね」
着地したスーパー1のもとに佐久間が駆け寄って言葉をかけてき

た。
「ええ、とりあえずこれで敵の兵器は破壊しました」
スーパー1は立ち上がって答えた。
「はい」
「ですが油断はできません」
スーパー1の声はまだ気を緩めたものではなかった。
「わかっています、残るは」
「はい、地獄谷五人衆とメガール将軍です」
二人はついさっきまで火の車があった空を見た。そこでは爆発が消え戦いの後は何も残ってはいなかった。

絶望の運命その十

「火の車が破壊されたか」
メガール将軍はそれを指令室で五人衆と共に観戦していた。火の車は彼が操っていたのだ。
「やりおるな、やはり」
だが彼は驚かなかった。当然のことのように受け止めていた。
「将軍、如何致しましょう」
鷹爪が尋ねてきた。
「こうなっては最早我等だけでスーパー1を倒すしかないかと」
大虎も言った。
「全ては将軍の思われるまま」
蛇塚が続いた。
「将軍が行かれるところなら何処までも」
象丸が畏まった。
「参りましょう」
そして最後に熊嵐が言った。
「そうか」
将軍はそれを黙って聞いていた。
「ならば決まっている。スーパー1に最後の戦いを挑みに行くぞ」
「ハハッ」
五人衆はそれを聞き片膝を折って応えた。
「我等が勝つか、スーパー1が勝つか」
将軍はその戦いに思いを馳せながら言葉を出した。
「それを遂に決する時が来た」
「はい」
五人は一斉に頷いた。
「行くぞ」
「わかりました」

これで終わりだった。彼等は指令室をあとにした。そしてそこに戻ることはなかった。

「基地を爆破したのか」

死神博士はそれをスペインの基地から見ていた。

「潔いな。バダンの者とは思えぬ」

彼はそれを見て呟いた。

「元々この道に入るべき男でなかったのかも知れぬ。そう」

彼は完全に爆破された基地の後を見ながら言った。

「沖一也と同じ道を歩むべきだったのだろう」

死神博士は同じ科学者であった彼のことを常に意識していたのだ。

「科学者といっても色々いる。私の様な天才故に全てを欲する者もいれば純粋にその身を捧げる者もいる。あの男は後者だったのだろう」

流石にそれをよく見極めていた。

「やはりあの手術の失敗が影響しているのだろうか。いや」

ここで思い直した。

「あれは確かにはじまりだった。そしてそれによりスーパー1を憎んでいた。だが今は違うな」

流石はショッカー随一の頭脳である。鋭い見極めであった。

「バダンで別の道に目覚めた。そう、もうあの男に己の姿を嫌う心はない」

だとしたら何か。

「あくまでスーパー1と戦いたいか。そして倒したい。どうやら戦士として目覚めたようだな」

彼もまた将軍であるからだろうか。

「ならば良い。思う存分戦うがよい。そして」

死神博士はここで酷薄な笑みを浮かべた。

「ライダーの血で祝杯を挙げようぞ」

そしてその部屋から消えた。暗闇の中に消えていった。

沖と佐久間、そしてメガール将軍達はニューオーリンズの市街で

対峙していた。
「これが最後の戦いだ」
メガール将軍は一歩前に出て沖に対して言った。
「この街を貴様の墓場とする。前に言った通りにな」
「そうか」
沖は壁に背を着けた。見れば壁にはジャズ歌手の絵が描かれている。如何にもアメリカらしい。
「火の車への戦い方、見事であった。だが私達はそうはいかん」
五人が左右に出て来た。
「まずはこの者達が相手をする」
そして将軍は後ろに下がった。
「それから私が相手をしよう。それでいいな」
「望むところだ」
五人は素早く左右に散り沖と佐久間を取り囲んだ。戦闘員達もいた。
「沖さん、戦闘員達はいつも通り俺がやります」
「頼みます」
沖は佐久間の言葉に頷いた。
「では」
佐久間も身構えた。だが五人衆は彼には目をくれない。あくまで沖だけを見ている。
「行くぞ」
そして彼等は顔の前で両手を交差させた。そして変身した。
「変身したか」
沖はそれを見て言った。声は落ち着いていた。
「ならば俺も」
彼も変身に入った。右手をゆっくりと後ろに引いていく。
変・・・・・・
引いた右手を上に持っていく。左手はそれに合わせるかのように

下にし前に置いている。両手は爪の様に指を半ば曲げている。
右手を前に持ってきた。左手をそれに合わせる。そして両手を手首のところで合わせる。そのままゆっくりと前に出す。
身体が黒いバトルボディに覆われる。胸は銀だ。手袋とブーツも銀であった。
・・・・・身！
その前に出して両手を止めた。そして時計回りに一八〇度回転させる。
顔の右半分を銀の仮面が覆う。眼は紅だ。そして左半分も覆われる。

ベルトから光が放たれる。そしてそれが消えた時銀色のライダーがそこにいた。
「行くぞっ！」
スーパー1は前に突進した。佐久間もそれに続く。怪人と戦闘員達が彼等を取り囲む。そして戦いがはじまった。
まず佐久間は戦闘員達に向かっていった。そして拳と蹴りで彼等を倒していく。
「貴様等の相手は俺だっ！」
そして戦闘員達をスーパー1のところに近寄せない。そして戦いをスーパー1に有利なようにした。
それを受けてスーパー1は五人衆と対峙した。彼等は半円型の陣で彼を取り囲んでいる。
彼等とスーパー1は睨み合う。互いに隙を窺っている。
先に動いた方がやられる、そんな感じだった。双方共息を呑む。
五人の足の動きが一瞬乱れた。スーパー1はそこに隙を見た。
「よし！」
一気に攻勢に出た。その拳と脚で五人に切り込む。

絶望の運命その十一

「囲め！」
ゾゾンガーが叫んだ。他の四人は素早くスーパー1を取り囲んだ。
「よし、今だ！」
ゾゾンガーがバズーカを放とうとする。他の四人はバズーカが発砲された瞬間素早く跳び退いた。
砲弾がスーパー1に襲い掛かる。だがスーパー1は瞬時に姿を消していた。
「ムッ、何処に行った！」
五人は慌てて彼を探す。不意に気配が姿を現わした。
それはゾゾンガーの前に来た。そしてバズーカを奪った。
「トォッ！」
その気配の正体はやはりスーパー1だった。彼は目にも止まらぬ動きで彼等の目を眩ませていたのだ。
バズーカを奪うとそれを拳で砕いた。そして言った。
「これで飛び道具はなくなったぞ！」
「ほざけ！」
ゾゾンガーは怒りに身体を震わせスーパー1に体当たりを敢行した。だがスーパー1はそれを防いだ。
「甘いな」
両手で受け止めたのだ。そしてゾゾンガーの身体を掴むと上に放り投げた。
「クッ！」
だがゾゾンガーは空中で身体を回転させた。そして両足で受け身を取った。
彼の周りを他の四人が取り囲む。そして再びスーパー1と対峙した。
「こうなったら拳で倒す」

スーパー1を取り囲む。
「最初からそうするべきだった」
彼等はジリ、ジリ、と間合いを詰める。スーパー1は摺り足で間合いを図る。
「来るな」
彼は悟った。そして五人を注視した。
「問題はどう来るかだ」
まずはヘビンダーが来た。
「行くぞ！」
その身体が右から左に複数に分かれる。分身の術だ。
その全てがスーパー1に向かって来る。彼はその全てを相手にした。
「よし！」
そしてその後方からストロングベアがブーメランを投げる。どうやらヘビンダーの分身はどれかわかっているようだ。的確に分身体に向かって投げる。そしてブーメランはその身体をすり抜けてスーパー1に襲い掛かる。
「クッ！」
スーパー1はヘビンダーの攻撃とそれを身を捻ってかわした。だがそこに槍が襲い掛かって来た。
「油断したな！」
それはクレイジータイガーの槍だった。そして見れば左右にはサタンホークとゾンガーがいる。
「我等の拳、受けてみよ！」
五人は一斉に攻撃を仕掛けた。その瞬間だった。
「今だ！」
スーパー1は上に跳んだ。
「上か！」
「だが！」
五人は焦ってはいなかった。彼の降りるところを待ち構えていた。

攻撃が来てもかわすつもりであった。
しかし彼等は一箇所に固まっていた。それがスーパー1の狙いであったのだ。
「この時を待っていた！」
彼は一旦遠くに着地した。そしてそれでまずは敵の出鼻をくじいた。
「何をするつもりだ！？」
彼等はすぐに攻撃が来るものだと思っていたが当てが外れて少し拍子抜けした。
しかしスーパー1はそのまま地を滑ってきた。
「突進して来るか！」
だがこれもフェイントだった。スーパー1は彼等の目の前で跳んだ。
「トゥッ！」
そして空中で前転した。そのまま構えを取る。
「スーパーライダァーーーー・・・・・」
構えの後背面跳びになる。そしてそこから蹴りに入る。
「天空連続キィーーーーーーック！」
五人衆に向けて蹴りを放った。連続して五発繰り出す。それぞれ一撃ずつ撃った。
それだけではなかった。そこから一度後ろに跳び蹴りを放った。今度は気を全身に纏っている。
そして五人を貫く様に蹴った。気が五人を包んだ。
「グオオオオッ！」
凄まじい爆発が起こった。そして五人は吹き飛ばされた。
「な、何という攻撃だ・・・・・」
彼等はそれでも立ち上がってきた。だが変身を解き人間態になっている。
「まさか我等を一度に倒すとは」
五人は全身に深い傷を負っていた。最早余命幾許も無いことは明

らかであった。
「この時を待っていたのだ。貴様等が一度に集まる時をな」
スーパー1は彼等に対して言った。冷静な声であった。
「そうだったのか」
「ぬかったわ、我等の負けだ」
彼等は血に塗れた口でそう言った。
「だが我等の仇はメガール将軍がとって下さる」
「地獄で貴様が来るのを待っていよう」
「さらばだスーパー1！」
そして彼等は倒れた五つの爆発が起こった。
「これで地獄谷五人衆は倒したか」
「そうだ、その戦い見事であった」
スーパー1の前にメガール将軍が姿を現わした。

絶望の運命その十二

「あの五人を一度に倒すとはな。腕をあげたようだな」
彼は後ろの爆煙を見ながら言った。
「だがスーパー1よ」
そしてスーパー1に顔を戻した。
「この者達の仇は取らせてもらう、そして」
スーパー1を睨んだ。鋭い光が宿っている。
「貴様との闘いをこれで終わらせる」
「望むところだ」
彼もまた将軍を睨みつけていた。
「メガール将軍」
彼の名を呼んだ。
「来い、そして全てを終わらせてやる」
「その為に私は甦った」
彼は言った。
「さあ行くぞ、スーパー1よ」
背中のマントを取った。
「私の真の姿で相手をしてやる」
そしてそのマントで全身を包んだ。マントを剥がすとそこには巨大な牛の頭部を持つ機械の怪人が立っていた。
「死神バッファロー」
彼は自らの名を呼んだ。
「この名にかけて貴様を倒す！」
そして右手に持つ巨大な鉄球を投げてきた。
「行くぞ！」
スーパー1は前に跳んだ。そしてその鉄球をかわして死神バッファローに攻撃を仕掛ける。
「ムンッ！」

だが死神バッファローはそれを受けた。鉄球は既に壁にぶつかりそれを粉々に砕いていた。
スーパー1は蹴りを放った。死神バッファローはそれを受ける。
「今度はこちらの番だ！」
そして逆に手刀を放つ。スーパー1はそれを後ろに身体を捻ってかわした。
「この程度っ！」
そして捻りながら死神バッファローの顎に下から蹴りを放つ。しかし彼はそれを受けた。
「どうした、動きが遅いぞ」
彼は両手でスーパー1の足を掴んでいた。そして左に投げた。
「グォッ！」
スーパー1はアスファルトに叩き付けられる。激しい衝撃が全身を襲った。
「まだだっ！」
死神バッファローの攻撃はそれで終わりではなかった。立ち上がってきたスーパー1に体当たりを敢行した。
右肩からぶつかる。それはスーパー1の腹を直撃した。
「ガハッ・・・・・！」
思わず呻き声をあげた。吹き飛ばされはしなかったが再び激しい衝撃が全身を襲った。
だがそれに耐えた。そして踏み止まった。
「まだだ！」
彼にも意地があった。
「流石だ」
死神バッファローはそれを見て賞賛の言葉を口にした。
「それでこそ私の生涯の敵だ」
その声には敵愾心はなかった。
「スーパー1よ、さっきも言ったが私は貴様を倒す為に甦ってきた」
そしてスーパー1に対して言った。

「かってはこの身体を醜いとも思っていた」
その為にドグマに入ったのであった。
「だが今は違う。この身体は貴様と戦う為にあるのだ。そう、これは運命だったのだ」
「運命・・・・・・」
「そうだ」
彼は答えた。
「私は貴様と戦う運命だったのだ。その為に絶望の底に叩き落とされたこともあった」
一度は自ら死を選ぼうとしていた程であった。
「だがそれは誤りだったのだ。私が何故改造手術を受け、ドグマに入ったのか考えた。地獄でな」
彼にとって地獄はその答えを出す場所であったのだ。これが他の大幹部や改造魔人達とは違っていた。これは彼がドグマに入るまで、そして入ってからの経緯も関係していた。
「そしてわかった。私の運命を」
「俺と戦うというか」
「そうだ。スーパー1よ」
彼はここでスーパー1を見据えた。
「今ここで貴様を倒す！」
そして構えをとった。
「そうか、運命か」
スーパー1はその言葉を反芻した。
「運命は俺にもある」
そして死神バッファローを見据えた。
「俺の運命、それは」
そしてゆっくりと構えをとった。
「悪を倒し、この世に平和を取り戻すことだ。そしてその為に」
全身を闘気が包んでいく。
「メガール将軍、いや死神バッファローよ」

彼の名を呼んだ。
「貴様を倒す！それが俺の運命なのだから！」
「望むところだ！」
両者は同時に突進した。そして互いに拳を繰り出した。激しい衝撃がその場を覆った。
二人はその場所で激しく撃ち合った。そこには恨みも憎悪もなかった。ただ闘う二人の戦士がいるだけであった。
「スーパー1・・・・・・」
戦闘員達との戦いを終えていた佐久間はその戦いのあまりもの激しさに戦慄を覚えていた。

絶望の運命その十三

これ程までに激しい戦いは彼も今までそうそう見たことはなかった。双方共一歩も退いてはいなかった。

佐久間はそれを見守ることしかできなかった。ただその拳と拳の撃ち合いを見るだけであった。

スーパー1は技で、死神バッファローは力で闘っていた。二人は最早ガードもなく互いに激しく拳を繰り出していた。その全身が傷だらけになっていた。

体力は僅かに死神バッファローの方が上だった。スーパー1の動きが鈍くなってきた。

「そろそろ終わりだな」

死神バッファローは肩で息をしだしたスーパー1を見て言った。そして身体に力を貯めた。

「これで終わりだあっ！」

拳を出した。それは今までのものとは比べ物にならないものであった。

「これを受けたならば」

スーパー1はそれを見て考えていた。

「ただでは済まない」

すぐにわかった。このままでは危ない、すぐに察知した。

「トォッ！」

上に跳んだ。そしてその拳をかわした。

「上かっ！」

死神バッファローは上を見上げた。スーパー1はそこにいた。宙返りをしていた。

「これで決める！」

スーパー1は空中で構えをとった。

「スーパーライダァーーーー」

そして空中で型をとる。
「月面キィーーーーック！」
蹴りを放った。雷の様な速さで死神バッファローに急降下していく。
見えなくなった。それはまるで流星の様であった。
蹴りが死神バッファローの胸を直撃した。あまりもの速さの為かわすことはできなかった。
「グワアアッ！」
死神バッファローは叫び声をあげた。そして後ろの壁に叩き付けられた。
「これで決まりか」
スーパー1は着地して壁に叩き付けられた死神バッファローを見た。彼は身動き一つしていなかった。
「グググ・・・・・」
だがそれは一瞬であった。彼は壁から出て来た。
「やはりな」
スーパー1はそれを見て身構えた。警戒は解いていない。
「安心しろ、スーパー1よ」
だが死神バッファローはそんな彼に対して言った。
「私はもう闘うことはできない。貴様の勝ちだ」
そしてゆっくりとメガール将軍の姿に戻ってきた。
メガール将軍は壁の前に立った。その全身からは血が噴き出していたがそれでも立っていた。
「見事な蹴りだった。私でもあれはかわすことができなかった」
「そうか」
スーパー1はそれを静かに聞いていた。
「褒めてやろう、スーパー1よ。貴様は私が今まで合った中で最高の戦士だ」
「礼を言う」
彼は素直にそう応えた。

「その最高の戦士と拳を心ゆくまで交えることができた。最早思い残すことはない」
その表情は死ぬ前にしては不思議な程清々しかった。
彼はその場を動かなかった。だがその顔はスーパー1から離れなかった。
「かってはこの身体に絶望したが今は違う。貴様と闘うことができたのだからな、最後まで」
「メガール将軍」
「貴様を倒すことができなかったことは心残りだがそんなことは最早どうでもいい。さらばだ」
そう言うと最後に笑った。
「生まれ変わりまた会おうぞ。その時はまた拳を交えよう！」
それが最後の言葉だった。彼は爆発の中に消えていった。
「メガール将軍」
スーパー1はそれを感慨深げに見ていた。爆発の煙も炎も消えその後には何も残ってはいなかった。
「見事な男だった。そして」
彼は言葉を続けた。
「生まれ変わりまた会う日を楽しみにしている。貴様と拳を交えるその日をな」
そして彼はその場から背を向けた。隣に佐久間がやって来た。
「お見事でした」
それだけであった。他には何も言わなかった。
「有り難う」
スーパー1もそう言っただけであった。そして二人はニューオーリンズを後にした。
「メガール将軍は死んだか」
死神博士は自分の部屋でその話を聞いていた。
「立派な最後だったそうです」
戦闘員は敬礼して報告を続けた。

「そうか」
彼はそれを車椅子に座って聞いていた。
「惜しい男だったが」
そして少し上を見た。
「だが最後まで思う存分戦うことができたのだ。悔いはあるまい」
「はい」
その戦闘員は静かにそう答えた。
「あの男は自分の望む通りの最後を迎えた。思えば幸せな男だ」
「そうでしょうか」
戦闘員はその言葉に思わず問うた。彼もメガール将軍のことは知っているからだ。
「人の一生は最後で決まる」
博士はそんな彼を評するように言った。
「あの男の最後はそれをよく語っていた。そう」
彼は車椅子から立った。
「私もそうだ。そう、この街で生まれ、また帰ってきた」
「はい」
戦闘員はその言葉に応えた。
「それが何を意味するか、わかるだろう。すぐにな」
思わせぶりな言葉であった。
「死神博士、そのお言葉は」
「ライダーの死を意味しているのだ」
不安になった戦闘員に対して不敵な笑みで返した。
「ライダーが死に、私がこの街でバダンの勝利を宣言するのだ。素晴らしいと思わんか」
「それはそうですが」
だがその戦闘員はまだ不安を拭えてはいなかった。
「心配無用だ。私には切り札がある」
「時空破断システムでしょうか」
「切り札は一つとは限らない」

彼はニヤリと笑った。
「そう、それは空にある」
彼は上を見上げた。そこにその切り札はあるのだ。
「待っておれ、ライダーよ」
まだその不敵な笑みをたたえていた。
「今度こそ貴様を葬ってやる」
彼の笑いは続いていた。そしてそれは闇に同化していった。

絶望の運命　　完

２００４・８・２８

永遠の絆その一

永遠の絆

シチリア。イタリア南部の島だ。この島は地中海の制海権を考えるにあたり極めて重要な位置にあり昔から抗争が絶えなかった。

まずはローマとカルタゴが衝突した。ポエニ戦争である。この戦争は三回に渡って繰り広げられ遂にはカルタゴが滅亡して終わった。ローマはこれにより地中海を完全に掌握した。だがそれでも戦いは終わらず宿敵ペルシア、そしてゲルマン人達との戦いを続けた。それはローマ帝国が東西に分裂しても続いた。

それからイスラム教徒が占拠した。それからフランスが。続いてナポリが。戦いは続き時には大規模な暴動も起こった。この時反仏の抵抗組織がマフィアになったというがそれはどうやら誤りらしい。マフィアの起源は意外と新しい。

ナポリ統治時代、十八世紀後半辺りからナポリ政府はこの島の治安維持に対して山賊達を警官にして当たらせるようになった。毒を以って毒を制す、というわけだ。裏世界にも通じていた彼等はそちらでも力を持つようになりやがてそちらの世界のドンとなった。それがマフィアのもとである。この山賊警察は力を握ったままでそのまま犯罪組織となってしまったのである。

彼等がアメリカに移住するとそこでも力を持った。独自の厳格な戒律と一族による固い絆が武器だった。そしてアメリカの暗黒街を牛耳るようになったのだ。

だが彼等には一つの特徴がある。それは彼等がシチリア出身ということである。その郷土意識が彼等のアイデンティティでもあった。

アル＝カポネは実を言うとマフィアのドンにはなれなかったのだ。彼はナポリにルーツを持つ。南イタリアはマフィアとはまた違った系列の犯罪組織がある。カモラというものである。

だから彼は本来ならマフィアのドンにはなれなかったのだ。どれだけ頭が切れ大胆であってもだ。彼は最初頼りになるドンがいた。その人物に引き立てられたのだ。そして禁酒法時代のシカゴにて絶大な力を誇った。最早この街の夜の世界は彼のものであった。

そうしたいささか複雑な歴史を持つアメリカン＝マフィアだがイタリアにおいてもそれは変わらない。むしろ彼等の故郷でありシチリアではアメリカよりもそれが顕著だ。

彼等は裏の全てを取り仕切っている。表の世界にも顔を出す。この島は農業で知られているがその仲介等もしているのだ。

こういったことがあった。大規模な農場を経営しているある貴族が子供を誤って殺してしまった。当然捜査が入ったがここで彼と親しいマフィアが出て来た。そして話を収めた。

「済まないな」

その貴族はマフィアのドンに礼を言った。ドンは笑って答えた。

「何、こういったことはお互い様さ。何かあったらまた話をしてくれ」

「ああ」

彼はマフィアとの商売により利益を得ていた。このドンとも懇意であった。

「だがあんたはまだ警察とかにマークされているぜ」

ここでドンは彼に忠告した。

「警察がか」

彼はそれを聞き顔を顰めた。

「そうだ。少し姿を隠した方がいいな。何処かの綺麗なホテルにでも」

「わかった、そうしよう」

こうして彼はとあるホテルに身を隠した。一時のつもりだったがそのホテルがいたく気に入ったのだ。

「ここにずっと住んでもいいな」

そして彼はそのホテルに死ぬまで住んだ。ホテルの住人ディ＝ス

テーファノ男爵である。
　こうしたことからもわかるようにマフィアはこの島について語るうえで避けられないものだ。それはこの島の者が好むと好まざるに関わらず、だ。
　そしてこの島にはエトナ山がある。火山である。ギリシア神話においては巨大な怪物テューポーンがそこに封じ込められているという。
　そう、火山である。そして今この島はそのせいか異常に気温が高かった。連日うだるような暑さが続いた。
「この暑さは尋常じゃない」
　島の者はそう思い調査を行った。だが火山には何ら異常はなかった。ただ地表が不自然なまでに熱かったのだ。
　作物にも影響が出ていた。時として池が蒸発することすらあった。
「噴火の前触れか」
「それにしてはおかしい」
　こうした話がされた。真相は誰にも掴めなかった。
「人間共にわかる筈がない」
　百目タイタンはそれを聞きそう言って笑った。
「この暑さが俺のせいだとは誰も思わないだろう」
　彼の体内には八万度のマグマが流れていた。それが改造手術により数十倍にも高められているのだ。
　その熱気が島を下から熱していたのだ。恐るべき力であった。
「ストロンガーよ、来るなら来い」
　彼は指令室の椅子に座りながら言った。
「このマグマで焼き尽くしてくれるわ」
「フフフ、大した気合の入りようだな」
　そこでシャドウが部屋に入って来た。
「だが少し熱くなり過ぎではないか。今からそれ程熱くなっても仕方なかろう」
「ふん」

タイタンはそれを聞き鼻で笑った。
「それは貴様とて同じだろう」
そう言って反論した。
「何処がだ」
シャドウはそれに対して澄ました様子で返した。
「貴様の手にあるのは何だ」
タイタンはシャドウが手で弄ぶカードを指差した。
「それここが貴様が今戦いを待ち望んでいる証拠だ」
「確かに」
シャドウは戦いを前にすると興奮を抑える為手でカードを弄ぶ。
タイタンはそれをよく知っていた。
「どうやら隠していても仕方ないらしいな」
「俺に隠し事は通用しないとわかっていないようだな」
「そういうつもりはないが」
シャドウはそう言うとカードを収めた。
「さて」
彼はここでタイタンに歩み寄った。
「これからは俺と貴様の勝負だな」
「どちらが先にあの男を倒すか、か」
「そうだ。遂にこの時が来た」
シャドウの声は先程のそれとはうって変わって硬いものであった。
「わかっているな」
「当然だ」
タイタンは言葉を返した。
「俺はこの時の為に地獄から甦ってきた」
「それは俺も同じ」
彼等の目に炎が宿った。
「どちらがあの男を倒すか、勝負だ」
「うむ」
タイタンとシャドウは互いをみやった。

「俺があの男を倒す」
「それは俺の言葉だ」
二人は睨み合った。だがすぐに視線を外した。
「先にあの男を倒した方が勝ちだ。よいな」
「望むところ」
タイタンとシャドウはまるで敵同士の様に対峙していた。シャドウが正面を向くタイタンの後ろに回り込む。
「では俺はすぐに動かさせてもらおう。悪いがこれで失礼する」
「行くがいい。だが奴を倒すのは俺だ」
指令室を去ろうとするシャドウにそう言葉をかけた。

永遠の絆その二

「ではな」
そしてシャドウは指令室をあとにした。タイタンだけが残った。
タイタンはベルを鳴らした。すると数名の戦闘員が入って来た。
「百目タイタン、お呼びでしょうか」
彼等は敬礼をした後そう尋ねた。
「怪人達はどうなっている」
彼は戦闘員達に問うた。
「既に準備は整っております。後は百目タイタンの指示を待つだけです」
「そうか」
タイタンはそれを聞いて頷いた。
「ではすぐに出撃だ。そしてあの男の首を取るぞ」
「わかりました。ところであれはどうしましょうか」
「あれか」
タイタンはそれを聞き考える目をした。
「連れて行こう。だが我々と離れてな。いざという時の切り札だ」
「わかりました」
戦闘員はそれを聞き頷いた。そして前に出て彼等の間に入ったタイタンの後ろに回った。
「行くぞ」
「ハッ」
タイタンは指令室を後にする。その後を戦闘員達が続く。
彼等は基地を出た。そしてタイタンを先頭に岩山の上を進んでいく。
「早いな。もう動くか」
シャドウはそれを上から見下ろしていた。
「我等も動きますか」

傍に控える戦闘員が問うた。
「そうだな」
シャドウはそれを聞き不敵に笑った。
「ここは奴に花を持たせるとしよう。いや、お手並み拝見か」
「といいますと」
「我等が動くのはあとでよい。まずは奴等の戦いが終わってからだ。よいな」
「わかりました」
その戦闘員はそう言って敬礼した。
「では戻るぞ。そして戦いの用意だ」
「ハッ」
シャドウ達はそこから引き揚げた。そしてあとには岩山から出る硫黄の煙が立ち込めていた。
このシチリアは大規模な農園が多いことで知られている。特にオリーブの栽培は有名だ。
彼は今そこにいた。そしてオリーブの木々の中を歩いている。
「そういえば今までオリーブの木は見たことがなかったな」
彼はその木を見上げて言った。
「こんなのだったのか。そしてここからオリーブ油がとれる」
そう言ってオリーブの実を撫でる。見たところ油が採れるようなものではない。
このまま食べられるだろうかとさえ思った。だが取るのは止めた。
「折角ここの人達が丹精込めて作っているんだ。それを取るのは悪いな」
そう思ったからだ。彼はオリーブから手を離し先へ進もうとした。
「おい茂、ここにいたのか」
ここで後ろから彼を呼ぶ声がした。
「おやっさん」
彼はその声に応え後ろを振り向いた。そこにそのおやっさんがいた。

「シチリアにいると聞いてやって来たんだがようやく見つけたぞ」
立花は少し息を切らしながら城の方に駆けてきた。そしてふう、と一息つく。
「まさかこんなところにいるとはな」
「似合いませんか」
城はにこやかに笑ってそう尋ねた。
「いや、そうは思わんが」
立花も笑って返した。
「案外似合うんじゃないか。その格好に農園は」
見れば城の格好はジーンズである。元々作業着だからこうした場でも不自然ではない。
「だといいですがね」
彼は笑いながらそう言った。
「俺は結構目立つそうですから」
「少しは自覚しろ」
立花はそれに対してそう返した。
「薔薇の刺繍のジーンズなんてそうそう見ないぞ」
「これは俺のポリシーなんですよ」
「それでも目立つものは目立つんだよ。それだとバダンと戦う時に大変だろうが。すぐに見つかって」
「いやいや、これがいいんですよ」
彼はここで反論した。
「何でだ」
立花はそれを聞いて怪訝そうな顔をした。
「向こうからわざわざ来てくれますから。探す手間が省けるんですよ」
「そんなもんかな」
「ええ。ブラックサタンの時からそうだったじゃないですか」
「あれは御前は無茶な行動するからだろうが。他の奴はもうちょっと慎重だったぞ」

「風見先輩もそうでしたか？」
「ああ、志郎の奴は周りに純子とか丈二がいたからな。御前の場合一人だろうが」
「今はね」
ここで城は寂しげな顔をした。
「今はね・・・・・・って、そうか。済まん」
立花はその言葉の意味で気付いた。
「いえ、いいです」
城はそう言った。だがその顔は明らかに曇っている。
「あれからどれ位経ったかな」
「さあ。けれど気の遠くなるような昔の話に思えますね」
「そうだな。ドクターケイトはまた死んだしな。敬介の奴の手で」
「モンゴルでしたね」
「ああ。手強かったそうだ」
「そうでしょうね。そうでなければあいつも死ななかった」
彼等はオリーブの木々の中を進みながらそう話した。
「あの時あいつは命を賭けた。そして死んだ」
「ええ」
「わしはあいつに何をしてやれなかった」
「俺もです」
二人は俯いていた。
「そしてあいつはこの世から去った。何も言わずにな」
「・・・・・・・・・」
城はもう沈黙していた。
「茂」
立花はここで彼の名を呼んだ。
「忘れられないとは思う。だが乗り越えてはいると思う」
だが彼はそれには答えられなかった。
「戦おう、バダンと。そしてあいつが望んでいた平和を取り戻すんだ」

「はい」

二人はオリーブの中を進んでいく。そしてラグーサまで来た。

永遠の絆その三

ここはイベレア山麓の町である。青銅器時代からあったという古い町でありギリシア人の植民都市と交流があったという。ビザンツ帝国の時代には城壁で覆われイスラム教徒の襲撃に備えた。だが九世紀には彼等の手に落ちやがてノルマン人の領土となった。二回の大地震に見舞われるとそれを機に新しく整備された。そして十九世紀には新旧二つの地区に分けられ、古い地区はラグーサ＝イブラ、新しい地区はラグーサ＝スーーベリオーレと名付けられた。今二人はイブラの地区にいた。

「古い地区というだけあって古風な建物が並ぶな」

立花は左右を見回して言った。見れば石造りの古い建物が峡谷の部分にる。山麓にあるだけあってその傾斜は激しい。

「そうですね」

隣にいた城が相槌を打った。

「イタリアにはこうした街が結構多いですけれどここはまた格別ですね」

「そうだな。少なくとも日本じゃこうした街はないな」

「ええ。やっぱり日本は木の家ですよ」

「そうだな。檜なら言うことなしだ」

立花はそう言って目を細めた。彼もやはり日本人だ。和風の建物を愛していた。

「一度こうしたところに住んでみたいとは思ったことがあるがな」

「そうなんですか」

「ああ。若い頃ナポリに旅行に行ってな。そこで思ったんだ」

「意外ですね」

「そう思うか。これでも若い頃は色々と考えてたんだぞ」

「いやあ、おやっさんって頑固ですから」

「茂、そりゃどういう意味だ」

立花はその言葉に顔を顰めさせて向けてきた。
「いや、大した意味はないですよ」
城はそれに対して言った。
「おやっさん若い頃からこんなんだったのかなあ、って思ってましたから」
「そんなわけないだろうが、御前はわしを何だと思っとるんだ」
彼は怒った顔をしてみせた。
「いやいや、すいません。冗談ですよ」
「冗談でも言っていいことと悪いことがあるぞ」
彼はまだ口を尖らせていた。
「気分を害したぞ。昼飯は御前がおごれ」
「はいはい」
そう言いながらも立花の機嫌は悪くはなかった。彼は城というだけでもよかったのだ。ライダー達は彼のとって息子のようなものだからだ。
「さてと」
城は立花の言葉に従いレストランを探した。だがいざ探してみると中々ない。
「参ったな。もう少し先に行きますか」
「ああ」
立花は頷いた。二人は傾斜の激しい道をそのまま進んでいく。
やがて十字路に来た。そこで左右から何かが来た。
「城茂、覚悟！」
不意に銃弾が襲い掛かって来た。
「ムッ！」
城と立花がそれを察知した時は既に遅かった。それは彼等のいた場所で爆発した。
「やったか！」
十字路の左右から戦闘員達が姿を現わした。彼等は手にそれぞれ大型の銃を持っている。

「いや、待て」
前から黒服の男がやって来た。
「死体を確認しろ。あの男はそうそう簡単には死なぬ」
百目タイタンであった。彼はスーツ姿でそこに姿を現わしてきた。
「よいな」
「わかりました」
戦闘員達は頷いた。そして爆煙が消えるのを待った。
消えた。だがそこには何もなかった。
「ムッ！」
戦闘員達が声をあげた。その時だった。
「ハッハッハッハッハッハ」
建物の上から笑い声が響いてきた。
「その声は！」
タイタンが見上げる。戦闘員達もそれに続く。
そこにいた。緑の眼を持つライダーがいた。
「やはり無事だったか」
タイタンは彼を見上げながら言った。
「当然だ、あの程度でこの俺が倒せると思っていたか」
ストロンガーはそれに対して言った。その隣には立花がいる。
「だが売られた喧嘩は買わせてもらう。高くな」
そう言うと身構えた。
「行くぞ！」
そして下に飛び降りる。戦闘員達の中に着地する。
「さあ来い！」
取り囲む戦闘員を挑発する。戦闘員達はそれに乗ろうとした。だがタイタンあそれを止めた。
「待て！」
そして前に出た。
「気をつけろ、ストロンガーには電気の技がある。下手に動くと一掃されるぞ」

「ハッ、そうでした」
戦闘員達はそれを聞いて動きを止めた。
「フン、流石だなタイタンよ」
「俺を馬鹿にするな」
タイタンはストロンガーに対して返した。
「伊達に貴様と何度と戦っているわけではない。俺を甘く見るな」
「確かにな」
「貴様の相手はこの者達がしてやる」
するとタイタンの背に何者かが姿を現わした。
「行け、そしてストロンガーを倒せ！」
奇声と共に怪人達が姿を現わした。
「ホワァーーーーーーッ！」
「ショワーーーーーーッ！」
「アブンガーーーーーッ！」
デストロンの突撃怪人ドクロイノシシ、ゲドンの八足怪人クモ獣人、ネオショッカーの毒針怪人アブンガー、計三体の怪人達であった。彼等は素早い動きでストロンガーを取り囲んだ。
「さあストロンガーよ、まずはその怪人達と戦ってもらおうか。勝てるかな」
「戯れ言を」
ストロンガーは自信に満ちた声で返した。
「俺が怪人達に負けるとでも思っているのか」
「フン、相変わらずだな」
タイタンはそれを聞いて言った。何処かその言葉を待ち望んでいたようであった。
「ではまずはこの者達と戦うがいい。その後で俺がたっぷりと相手をしてやろう。生きていたならな」
「タイタン」
ストロンガーはここでタイタンに対して言った。
「それは俺の台詞だ。死ぬのは貴様だ」

「フフフ、そうでなくてはな。面白くとも何ともないわ。だがな」
その無数の眼が光った。
「貴様はこの俺の手で倒してやるということを忘れるな。覚悟しろ」
「望むところだ」
ここで怪人達が襲い掛かってきた。
まずはアブンガーからだ。右手の毒針を振り回してくる。
「アブの毒針か」
ストロンガーはそれを見て呟いた。
「確かに毒は脅威だ。だがな」
彼は不敵な笑みを言葉に含んでいた。
「それは俺には通用せん！」
そう言うとその右腕を掴んだ。
「ウオオッ！」
そしてそのまま投げた。柔道の背負い投げだ。
「ウワァッ！」
アブンガーは思わず叫び声をあげた。受け身を取ろうとする。だが間に合わなかった。
背中から思いきり叩き付けられる。後頭部も打った。その衝撃が全身を襲った。

永遠の絆その四

昏倒する。ストロンガーはそこに拳を振り下ろした。
「電パァーーーーンチッ！」
雷を帯びた拳がその胸を撃つ。電撃が心臓を直撃した。
「グオオオオッ！」
それをまともに受けたアブンガーは断末魔の叫びをあげる。そしてストロンガーが離れた時彼は爆死して果てた。
「さあ、次は誰だ」
ストロンガーはアブンガーの爆煙が消えると残る二体の怪人に対して言った。
「ぬうう」
「では俺が相手になってやる！」
今度はドクロイノシシが来た。そのままストロンガーに突進する。
「死ね、ストロンガー！」
両脇からキバを出す。それで突き刺すつもりだ。
しかしストロンガーは退くわけでもなくそれを冷静に見ていた。間合いに入ったと見るとすぐに身を屈めた。
「ムッ！？」
エレクトロファイアーかと思った。それならばすぐに跳ぶつもりだった。
だがどうやら違うようだ。彼は腕を前に出した。そして叫んだ。
「磁力扇風機！」
両手から磁力の嵐を放ってきた。そしてそれで怪人を撃ってきた。
「ウワッ！」
これには怯んだ。思いもよらぬ攻撃にさしものドクロイノシシも怯んだ。突進を止めた。
それが命取りとなった。嵐が去るとストロンガーは消えていた。
「何処だっ！」

辺りを見回す。だが何処にもいない。
「クッ、何処にいる！」
「ここだっ！」
上から声がした。咄嗟にそちらに顔を向ける。
ストロンガーはそこにいた。すぐに攻撃を仕掛けようとしたが既に手遅れだった。
「喰らえっ！」
ストロンガーは攻撃態勢に入っていた。一回転してから身体を激しくきりもみ状に回転させる。
「スクリューーーーキィーーーーック！」
そして蹴りを放つ。それは怪人の胸を貫いた。
「グオオオオオッ！」
胸に大穴をあけられたドクロイノシシは最後の絶叫をあげる。倒れ込み爆発の中に消えた。
「ショワショワショワッ！」
最後の一体クモ獣人は既に動いていた。壁に貼り付いている。
そして糸を撒き散らす。ストロンガーをその中に置いた。
「俺を捕らえるつもりか」
「その通り」
彼は既に巣を作っていた。そしてその網の目の中央に位置していた。
「貴様はカブトムシの改造人間、それに対して俺は蜘蛛の改造人間」
「それがどうした」
「虫は蜘蛛に喰われる運命。今からそれを思い出させてやる」
そしてストロンガーの周りを漂う糸をその八本の足で引いた。
「喰らえっ！」
糸が一斉に襲い掛かる。そしてストロンガーの全身を覆った。
「ストロンガー、その糸の中で潰されるがいい！」
糸が無気味な音を立ててきしむ。そしてストロンガーの全身を締め付ける。これで終わりかと思われた。

「フフフフ」
だがその中にいるストロンガーは余裕の笑みを出した。
「何」
「甘いな、クモ獣人よ」
ストロンガーはまた言った。
「この程度で俺を倒せると思っているのか」
「戯れ言を。今貴様は繭の中にいるではないか。俺の糸の中に」
「今はな。だが」
ここで激しい放電が起こった。
「な！」
クモ獣人はそれを見て叫び声をあげた。
「これでどうかな」
放電による熱が糸に伝わる。そしてそれにより糸が瞬く間に焼かれていった。
糸は消えた。そしてストロンガーは繭から無事出て来た。
「放電による熱を忘れていたな、クモ獣人よ」
「クッ、ぬかったわ」
「その台詞は何時聞いてもいい。だがな」
彼は身構えた。
「今度は俺の番だ。ケリをつけさせてもらう」
そう言うと跳んだ。そしてクモ獣人の前に来た。
「受けてみろ」
右腕に力を溜めている。
「電気ビーームッ！」
そして電気を放った。それは一直線に怪人に襲い掛かる。
「させんっ！」
怪人はそれに対して糸を放つ。それで防ごうというのだ。
だがそれは出来なかった。やはり熱には勝てない。焼かれていく。
電気が怪人の胸を撃った。糸の巣が伝わった熱で瞬く間に焼かれていく。

「グググ」
クモ獣人は炎に包まれた。そしてゆっくりと下に落ちていく。

永遠の絆その五

「見事だ、ストロンガーよ」
それが最後の言葉だった。地に落ちると爆発して果てた。
ストロンガーは着地した。そして戦闘員達を後ろに従えたタイタンを指差した。
「タイタン、残るは貴様だけだ」
「俺だけか」
「そうだ、他に誰がいるというのだ」
ストロンガーは悠然とした物言いのタイタンに対して言い返した。
「それともまだ誰かいるというのか」
「いると言ったらどうする」
「知れたこと。そいつも倒してやる」
「そう言うと思っていた。では貴様にも見せてやろう。我がバダンの新たな切り札を」
「新たな切り札」
「そう、あれだ」
タイタンがそう言うと同時に大地が揺れた。
「ムッ！？」
「見るがいい、ストロンガーよ」
タイタンはその揺れを楽しむようにして言った。
「あの巨人を！」
すると街の上に一体の巨人が姿を現わした。
「ウオオオオオオオッ！」
その巨人は姿を現わすと同時に地の底から響き渡る様な声で咆哮した。
「何と・・・・・・」
ストロンガーはその姿を見て絶句した。巨大さにはまだ驚いていなかった。

その姿は武装した男であった。古代ギリシアの鎧と兜で武装し、手には槍を持っている。漆黒の肌に濃い髭を生やしている。

だがさらに驚くべきはその両足であった。何と人間のものではないのだ。

それは巨大な蛇であった。二匹の大蛇がシュウシュウと音を立てて進んでいた。

「あれはまさか・・・・・・」

「ほう、やはり知っていたか」

タイタンはストロンガーが驚いているのを見てさらに機嫌をよくさせた。

「ギガンテスだ。その目で見るとは思わなかっただろう」

タイタンはストロンガーに対して言った。笑いを含ませた声で。

ギリシア神話において大地の神ガイアが作り出した神々の敵対者。その巨大な身体と強大な力を以って神々と覇権を争った巨人達である。彼等はまさに大地の化身であった。

「このギガンテスはあのギガンテスとはまた違う」

「何!?」

「あれを見よ」

タイタンはギガンテスを指差した。すると巨人の両足の二匹の蛇の目が赤く光った。

そしてその口を開ける。そこに闇が集まった。

「いや、違う。あれは」

ストロンガーはそれを見て思わずことばを出した。その声は半ば叫びとなっていた。

それは黒い光であった。ある筈のない光が蛇の口に集まってきていた。

その黒い光が放たれた。山に向けて放たれた。

そしてその山の頂上を消し去った。山の頂上は跡形もなく消え去り跡には何も残っていなかった。

「何という力だ」

ストロンガーはそれを見て思わず絶句した。タイタンはそんな彼に対して言った。
「どうだ、素晴らしい力だろう。これがバダンの力だ」
「タイタン、何を考えている」
ストロンガーは高らかに笑う彼に詰め寄った。
「その力で何をするつもりだ」
「何をするつもりか」
彼はニヤリ、と笑った。
「それ貴様が最もよくわかっていることだと思うがな」
「クッ」
「ブラックサタン、いやショッカーからの我等が悲願、遂にそれが果される日が来るのだ」
タイタンは誇らしげに胸を張った。
「だが俺はその前にやらなければならないことがある」
そう言ってストロンガーをその無数の目で見やった。
「ライダーストロンガー、貴様はこの俺の手で倒す。必ずな」
「やれるものか」
「フフフ、いつもながら大した自信だ。だがな」
その無数の目が光った。
「ブラックサタンの頃の俺だとは思わないことだ。後悔するぞ」
「何を！」
激昂したストロンガーはエレクトロファイアーを放った。
電撃が地を伝う。そしてタイタンを撃った。だが彼は平然としていた。
「その程度では俺を倒せはせん」
「減らず口を！」
「まあよい。挨拶としては実にいい」
彼は後ろに下がった。
「すぐに会おう。その時こそ貴様が死ぬ時だ」
「言うな！」

「その時は超電子の力で来るがいい。そうでなければ面白くはない」
「貴様に言われずとも見せてやる」
「楽しみにしておこう」
タイタンは余裕に満ちた声でそう言った。
「ではさらばだ、フフフフ」
そして彼は姿を消した。戦闘員達もそれに続いた。
ギガンテスも何時の間にか姿を消していた。戦いの後は何処にも残ってはいなかった。
「ストロンガー」
そこに立花が戻ってきた。
「おやっさん」
ストロンガーは彼に顔を向けた。
「多くは言わん。だがな」
彼はあえて言葉を少なくさせた。
「戦え。そして勝て。わかったな」
「はい」
ストロンガーは頷いた。そして次の戦いへの決意を新たにした。
タイタンとの戦いを終えた城は一旦立花と別れた。そして一人バイクでシチリアの荒野を進んでいた。
「ギガンテスか」
そしてタイタンの出した蛇の足を持つ巨人のことを脳裏に浮かべた。
「恐ろしい奴だ。あの黒い光は尋常じゃない」
それは嫌でもわかることであった。
黒い光は通常では有り得ない。それをバダンは使っている。それだけでも信じ難いことだ。
それだけではなかった。その力は恐るべきものである。一撃で山の頂上を消し去る程である。
もしそれで世界を破壊にかかったならば。結果は容易に想像できた。

「それだけは許さん」
彼は強い声でそう呟いた。
「俺が、ライダーがいる限り世界は守る」
それが彼の決意であった。
「そして」
彼にはもう一つの決意があった。

永遠の絆その六

「あいつに誓ったことを今度こそ果す」
デルザーが崩壊した後彼は世界に旅立った。別れも告げずに。
既に首領はこの時新たな組織の胎動を開始していた。ライダー達はそれを察知していたのだ。
暗黒大将軍という怪しげな男と戦ったこともあった。彼はかっての組織の怪人達を使っていた。それが何故か、すぐにわかることであった。
「奴はほんの時間稼ぎに過ぎなかった」
彼もまた首領の使徒であったのだ。
彼との戦いでライダー達は首領の存在を感づいた。そしてすぐに動いた。
それから世界各地に散ったのだ。デルザーを倒してすぐのことであった。
首領はすぐに復活した。ネオショッカーと共に。
ネオショッカーは世界で暗躍した。その力はかってのショッカーを彷彿とさせる程であった。
ネオショッカーを倒し彼等が宇宙から帰って来た時にはまたもや首領が動いていた。宇宙に葬り去った筈の首領が生きていたのだ。
ドグマ、ジンドグマ。戦いは何時終わるかわからなかった。
そしてバダンだ。彼等は休むことなく戦い続けている。
その為約束は今だに果されてはいない。それが何時になるのか彼にはわからない。
「もしかすると永遠かもな」
そう思うことも何度もあった。だが彼は決して諦めてはいなかった。
諦めない、それがライダーである。ほんの一条でも希望がある限り。

だからこそ彼等は戦うのだ。少しでも希望があればそれを力づくでこじ開ける。そして世界を救うのだ。

「それがわかるまでどれだけかかったか」

絶望に苛まれることもあった。特にデルザーとの死闘の時には。だが彼はそれを乗り越えた。

超電子ダイナモを受け入れた時それを悟った。超電子の力は彼に悪と戦う力を与えただけではなかったのだ。

この時彼は言われた。手術をして生き残る可能性は僅かだと。だが彼はそれにかけたのだ。悪に勝つ為に。

そして彼は勝った。悪に勝ったのだ。そして心にある信念を宿らせた。

「ほんの少しでも希望、可能性があればそれに賭ける」

ということを。そこから突破すればいいのだと。

今もそれを胸に戦っている。それが彼の信念であった。

「勝つ。絶対にだ！」

彼はあらためてそう決意した。そして荒野を進んでいく。

暫く進んだ時であった。不意に何かが城に向かって飛んで来た。

「ムッ！？」

それは数枚のトランプであった。

「まさか！」

トランプ、それを彼はよく知っていた。

爆発が彼を包んだ。激しい光と煙が荒野を覆った。

「やったか！」

戦闘員達が姿を現わした。そして辺りを確認する。

「気をつけろ。そう簡単に死ぬような男ではない」

怪人も姿を現わした。ブラックサタンの豪力怪人奇械人メカゴリラである。

「ハッ、それはわかっております」

戦闘員達は彼に敬礼して答えた。

「左右に散れ。そしてくまなく探し回れ」

怪人は素早く指示を出す。そして城とバイクを探させた。
「一体何処にいるのか。あの程度で死ぬ筈がない」
そう言った時であった。
「その通り！」
不意に右から声がした。
「その声は！」
怪人と戦闘員達が振り向く。そこに彼がいた。
「行くぞバダン！」
カブトローブイに乗る雷のライダー、仮面ライダーストロンガーがそこにいた。
ストロンガーは突き進む。その前を戦闘員達が立ちはだかる。
「邪魔だ！」
ストロンガーは叫んだ。そして戦闘員達を吹き飛ばしていく。
そのまま怪人に突っ込む。奇械人メカゴリラはそれを見て構えをとった。
「させん！」
その力で防ぐつもりだ。だがストロンガーは止まらなかった。
怪人はその左の鋏でマシンを止めようとする。ストロンガーはそれでも進む。
「貴様の力と俺のマシン、どちらが勝つか」
彼は突き進みながら言った。
「勝負だ！」
そして体当たりを敢行する。怪人は鋏でそれを掴む。
だがマシンは止まらなかった。鋏を弾き飛ばし怪人にぶち当たる。
「グオオオッ！」
思いきり跳ね飛ばされた。そして岩の地面に叩き付けられる。
何度かバウンドした。そして空中に舞い上がったところで爆死して果てた。
ストロンガーはそこで止まった。マシンから降りたその時だ。
「ムッ！？」

彼の周りを数枚の巨大な布が覆った。その色は赤、青、黄、緑等と様々だ。

そこから戦闘員達が姿を現わした。彼等は槍を手に襲い掛かる。

「死ねっ！」

槍でストロンガーを突く。だがそれは全てかわされてしまう。

「その程度っ！」

ストロンガーは一人の槍を奪った。そしてそれを手に戦闘員達の中に切り込む。

槍を縦横無尽に振るう。戦闘員達はそれにより次々と薙ぎ倒されていく。

「グワアアッ！」

戦闘員達が一人残らず倒れるのに然程時間はかならなかった。だがそれで戦いが終わったわけではなかった。

永遠の絆その七

「ギギギギィィィィッ！」
また怪人が出て来た。ゲルショッカーの植物怪人サボテンバットである。
「ストロンガー、貴様をサボテンにしてやろう！」
怪人はそう叫ぶと腕を振るって向かって来た。ストロンガーはそれを槍で受けた。
「させんっ！」
そしてそれで突く。だが怪人はそれをかわした。
かわした反動を利用して再び襲い掛かる。だがそれはかわされてしまった。
両者はそのまま攻防に入る。サボテンバットはその腕で槍を叩き折ろうとする。だがストロンガーはそれを察知して巧みにかわす。
「トォッ！」
らちが明かないと見たストロンガーは後ろに跳んだ。そして間合いを離した。
そして思いきり振り被った。当然その手には槍がある。
「これでどうだ！」
槍を投げた。それは唸り声をあげながら怪人に向かって行く。
「グワアアッ！」
槍は怪人の胸を刺し貫いた。サボテンバットは絶叫した。
だが致命傷にはならなかった。怪人はまだ立っていた。
「ならばっ！」
それを見たストロンガーは跳んだ。そして空中で一回転する。
「電キィーーーーーック！」
蹴りを放つ。だがそれは怪人を狙ったものではなかった。
突き刺さった槍を狙っていたのだ。その先を蹴る。
槍が怪人の身体を貫通した。怪人はそれを受け断末魔の叫びをあ

げた。
「ウワアアアアーーーーーーッ！」
それが最後の言葉だった。サボテンバットは無残に爆死して果てた。
「これで二体」
ストロンガーは油断してはいなかった。慎重に辺りを見回す。
「奴等のことだ、まだ何かしてくる筈だ」
その予想は不幸にして的中した。
「シャーーーーーッ！」
突如としてミサイルが飛んで来た。ストロンガーは咄嗟に跳んだ。ミサイルは今まで彼がいた場所で爆発した。彼はそれを紙一重でかわしたのだ。
「危ないところだったな」
だが危険はまだ去ってはいなかった。
「甘いわ！」
今度は蛇の首が襲い掛かって来た。
「ムッ！」
ストロンガーはそれを手刀で叩き落とす。蛇の首はその手刀で断ち切られた。
だがそれで終わりではなかった。蛇の首は空を飛んで襲い掛かって来た。
「ウオッ！」
身体を後ろに捻りかわす。そして反転して態勢を立て直す。
「どういうことだ」
ストロンガーは再び襲い掛かろうと空中を浮遊する首を見た。その前に一体の怪人が姿を現わした。
「知りたいか」
それは蛇の怪人であった。ドグマの毒蛇怪人スネークコブランである。
「それは俺の左腕だ」

「何ッ」
怪人の左腕を見る。確かに手首から上がない。
「俺は左腕を自由に操ることができるのだ。例え離れていようとはな」
「離れていてもか」
「そうだ。それが俺の力だ」
スネークコブランは誇らしげに言った。
「だがそれだけではない」
そう言うと口に手を当て身構えた。
「喰らえっ！」
そして口からミサイルを放ってきた。だがそれはストロンガーに何なくかわされてしまう。
「さっきのミサイルも貴様のものか」
「フフフ、如何にも」
怪人はそれを肯定した。
「どうだ、素晴らしい力だろう、ライダーストロンガーよ」
「確かにな」
ストロンガーは身構えながら言った。
「貴様はここで死ぬ。この俺の手でな」
不敵な笑みを浮かべた。
「さあ死ね、苦しまずに殺してやる！」
首が襲い掛かる。ミサイルも放った。ストロンガーはそれに対して微動だにしない。
「観念したか！」
違った。彼は決して諦めてはいなかった。
前に走った。ジグザクに走りミサイルをかわす。
「そうきたか。だが俺の首から逃れられるか！」
首が襲い掛かる。ストロンガーめがけ牙を剥いてやって来る。
ストロンガーは逃げなかった。その首を前に拳を出した。
「ムン！」

その首を掴んだ。そして両手で掴む。
「電ショック！」
両手から電撃を放つ。そしてそれで首を撃つ。
「まさか！」
高圧電流を受けた首は忽ち黒焦げになった。そしてすぐに炭となり消えていった。
「残るは貴様だけだ！」
ストロンガーはなおも突っ込む。そして怪人に手刀を繰り出した。
「電チョップ！」
怪人の胸を撃つ。雷を帯びた手刀を受け怯む。
火花が散る中ストロンガーはさらに攻撃を続ける。
「電タッチ！」
怪人の身体を掴み加熱させる。そしてそれで怪人を焼く。
「ウオオオオオッ！」
それを受けた怪人は叫び声をあげる。ストロンガーはなおも攻撃を仕掛ける。

永遠の絆その八

投げた。空中に高々と投げる。
「トォッ！」
そして自らも跳んだ。空中で態勢を整える。
「ストロンガーニーブローーーーーック！」
膝蹴りを放つ。それは怪人の腹を打った。
それが決め手であった。怪人は空中で爆発四散して果てた。
ストロンガーは着地した。最早そこには誰もいなかった。
だがそこに何かが飛んで来た。
「ムッ！？」
ストロンガーはそれに対して構えを取った。それは一枚の巨大なトランプであった。
「スペードのキングか」
彼はそのカードに心当たりがあった。
「貴様か」
「その通り」
カードの中から一人の男が姿を現わした。
「ストロンガーよ、暫く振りだな」
ゼネラルシャドウはストロンガーに正対した。
「俺がここに来た理由はわかっているな」
「当然だ」
ストロンガーは彼に対して言った。
「貴様の考えはよくわかっている。さっきのトランプ爆弾も貴様だろう」
「如何にも」
「シャドウ、貴様もタイタンと同じく俺の首を狙っているな」
「そうだ。その他に何の理由があるのだ」
シャドウは背中のマントを翻しながら言った。

「貴様を倒すことこそが俺の生きがいなのだからな」
そして腰の剣を抜いた。
「シャドウ剣」
剣の名を呼び構えをとる。
「その剣を抜いたということは」
ストロンガーは構えを崩していなかった。シャドウから目を離さない。
「やるつもりか」
「そうだ」
シャドウは答えた。
「だがそれは今ではない」
そして剣を下した。
「何！？」
「あれを見るがいい」
シャドウはそう言うと自らの右手を剣で指し示した。
「ムッ」
ストロンガーはそちらに顔を向けた。そこは岩山であった。
「見るがいい。俺の切り札を」
シャドウはここでカードを取り出した。スペードのエースである。
「さあ、来るがいい古の巨人よ」
「古の巨人！？」
ストロンガーはその言葉にハッとした。
「まさかそれは」
「フフフ、少し違うがな」
シャドウは面白そうに笑った。
「タイタンのギガンテスのことを言っているのだろう。だが俺はタイタンとはまた違う。そこまで芸がないつもりではない」
「では何だ」
「問う前に見るがいい、あれを」
「ムッ」

ストロンガーは言われるままに顔を向け直した。そこに巨人が姿を現わした。
「グオオオオーーーーーッ！」
それは青銅の巨人であった。身体の全てが青銅で作られていた。
「タロスか」
「その通り」
シャドウは答えた。ギリシア神話に出て来る青銅の巨人である。
「俺の生み出した最強の切り札だ。ストロンガーよ、よく見るがいい」
「クッ」
ストロンガーは歯噛みしながらタロスを見据えた。
「この怖そるべき力を」
タロスは両腕を上げた。そしてその手の平を下に向ける。
そこからあの黒い光が放たれる。それはストロンガーとシャドウの少し前に当たった。
やはり消えた。そこには巨大な穴が出来上がった。
「先にもこの黒い光は見ているな」
「・・・・・・・・・」
ストロンガーは答えなかった。答えずともわかっていることだからだ。
「ならばわかっている筈だ。バダンの考えを」
ストロンガーはなおも答えようとしなかった。
「ストロンガー、貴様の考えはわかっている。答えずともな」
「そうか」
ここで彼はようやく口を開いた。
「来るがいい。そして俺と刃を交えるのだ」
シャドウは来たるべき戦いに思いを馳せつつ言った。
「このシャドウ剣が貴様を倒す。それを楽しみにしていろ」
「生憎だがそうはいかない」
ストロンガーは反論した。

「何度も言った筈だ。俺は悪には決して屈しないと」
「そう言うと思っていた」
シャドウはやはり満足気に言った。
「俺もそうでなくては張り合いがない。貴様を倒すことにな」
「シャドウよ、これも何度も言ったことだ」
ストロンガーはなおも反論を続けた。
「俺はバダンにも貴様にもタイタンにも決して負けはしない、とな」
「そうだったな」
だが不敵な笑みは崩さない。それがゼネラルシャドウであった。
「では次に会う時を楽しみにしておこう。その時こそ貴様の最後だ」
そう言うと手にトランプを拡げた。そしてそれを上に放り投げた。
「トランプフェイド！」
そのトランプの吹雪の中に消えた。後にはトランプのカードだけが残された。
「消えたか」
ストロンガーはそのカードを見下ろして呟いた。
「タイタン、シャドウと奴等が率いる二体の巨人か」
ストロンガーはそのことについて考えた。
「相手にとって不足はない。俺は必ず勝つ」
そして青空を見た。
「それがあいつに誓ったことだからな」
空は何処までも広がっている。青くまるでサファイアの様に澄んでいる。
だが今もここで戦いが行われている。ライダー達とバダンの世界の平和をかけた戦いが。彼はそれについて思わずにはいられなかった。
「必ずその日は来る」
彼はまた呟いた。
「この世から怪人共が全ていなくなる日が」
彼は戦場を去った。そして立花のいる休息の場所に向かった。束

の間の休息をとる為に。
　立花はレストランにいた。そしてそこで食事を採っていた。
「どうやら一戦交えてきたようだな」
　立花は城の顔を見るなりそう言った。
「わかりますか」
「わからない筈ないだろうが」
　立花はそれに対して言った。
「伊達に御前達と長い間付き合ってるわけじゃないぞ」
「そうでしたね」
「御前達のことなら何でも知っているさ。今度はゼネラルシャドウにでも遭ったか」
「ええ」
　城はその問いに対して頷いた。
「奴も巨人を連れていました」
「そうか」
　立花もそれを聞いて頷いた。
「今度は青銅の巨人でした。ギリシア神話のタロスです」
「タロスか。また手強そうな奴が出て来たな」
「はい」
「だが行くんだろう。奴等を倒しに」
「はい」
　城は一言言って呟いた。
「そう言うと思っていたさ。じゃあまずは腹ごしらえといこう」
　立花はウェイターを呼んだ。そして料理を注文する。暫くして山の様な料理が運ばれてきた。
「おやっさん、これは」
「わしのおごりだ、たんと食え」
　立花は驚く城に微笑んだ。
「わしにはこれ位しかできないがな。けれどたっぷり食ってくれ」
「はい」

城は頷いた。そしてフォークを手にまずはナスとトマトソースのスパゲティを口にした。
「美味い」
「そうだろうな、本場だからな」
立花はそれを見て目を細めた。
「食ったらすぐに行くぞ。わしも一緒だ」
「おやっさんもですか」
「当然だ。わしが行かなくて他に誰が行くんだ」
「そうでしたね」
城も温かい目をした。思えば立花がいなければ今の自分はなかった。

永遠の絆その九

「わしは何時でも御前達の味方だ。例え何があろうとな」
「はい」
その言葉に偽りはなかった。立花はどんな時でも自分達を信じ、時には優しく、時には厳しく接してきた。身寄りのないライダー達にとって彼はまさに父親であった。
父親は常に子を見守り育て慈しむものだ。立花は子はなくとも立派な父親であった。
だからこそ城も他のライダー達も彼を慕うのだ。彼なくしてライダーはなかった。
「茂」
立花はここでワインを出した。シチリア産の赤だ。
「飲め。まずはこれで戦意を高めろ」
「はい」
城は言われるままにグラスを差し出した。そこに紅いルビーの様な酒が注がれる。
城はそれを飲んだ。口の中に芳香な味が漂う。
「いいですね」
「そうだろ、やっぱりイタリアのワインは違うな」
見れば立花は顔を少し赤らめている。
「もう一杯どうだ」
「いいですね」
そしてもう一杯飲む。立花もだ。酒はそれでなくなった。
「もう一本いくか」
「いえ」
だが城はそれを断った。
「もういいです」
「何でだ」

「戦いがありますから」
「そうだったな」
立花もそれに納得した。
「これ以上飲むのは勝ってからにするか」
「はい」
城はそのつもりだったのだ。二人共酔って身体の動きを崩すようなことはない。ただ勝利の美酒は味わいたいのだ。
「じゃあ行くか」
「はい」
二人は立ち上がった。
「奴等の首をへし折ってやるか」
「この手で」
城は右の拳を出した。黒い手袋がギュッ、と音を立てる。
「よし」
二人は店を後にした。そして戦場に向かうのであった。
城は既にストロンガーに変身していた。そして立花と共に海辺に来ていた。
「反応はあるか」
立花はストロンガーに問うた。
「いえ」
ストロンガーはシグナルに注意を払いながら答えた。
「どうやらここにはいないようです」
「そうか」
二人は海辺を後にした。
「この海から離れるのは少し心苦しいですが」
「勝ってからゆっくり見るか」
「はい」
こうした時でも洒落っ気を忘れない二人であった。
古代劇場に来た。かってのギリシア文化の名残だ。
「ここで戦いになると絵になりますね」

「ははは、確かにな」
立花はストロンガーのジョークに笑った。
「いつもはこういう時に奴等が出て来るがな」
「呼んだか」
ここでタイタンの声がした。
「・・・・・噂をすれば何とやら、か」
「その通りだ」
百目タイタンが姿を現わした。
「俺は貴様等がここに来るのを待っていたのだ」
だが彼は今はスーツを着ている。戦闘服ではない。
「そして俺も」
二人の後ろからもう一人が姿を現わした。
「シャドウか」
ストロンガーは後ろを振り向いて言った。
「そうだ」
シャドウはゆっくりと歩み寄りながら答えた。
「ストロンガー、もう逃げられんぞ」
「フン」
ストロンガーはタイタンに言葉に対し不敵な笑みで応えた。
「元々逃げるつもりはない」
「ほう」
二人はそれに応える様に間合いを詰めてきた。
「タイタン、シャドウ」
ストロンガーは二人を見据えた。
「今ここで貴様等を倒す！」
そして構えを取った。だが二人はそんな彼に対して言った。
「それはあの者達を倒してから言うのだな」
「残念だが俺との戦いはその後になる」
二人はサッと間合いを離した。
「あの巨人達か」

「そうだ」
二人は答えた。
「さあ、い出よギガンテス！」
「タロス、ここに姿を現わすがいい！」
二人の声に合わせ巨人達が姿を現わした。二体の巨人達は左右から劇場の外に姿を現わした。
「ストロンガー、外に出るがいい」
タイタンはストロンガーに言った。
「貴様もこの劇場を破壊したくはないだろう」
「無論」
キザでも知られているタイタンらしかった。彼はこの歴史ある劇場を破壊することを好まなかったのだ。
「ほう、タイタンよ」
シャドウはそれを見て笑った。
「貴様も芸術がわかるようだな」
「ふざけるな、シャドウ」
タイタンはシャドウに振り向かずに言った。
「俺とて地底王国の魔王、芸術を見る目は備えている」
「フフフ、そうだったか」
シャドウは笑みを出し続けている。タイタンはそんな彼に対しまた言った。
「からかうな、シャドウよ。それ以上は許さんぞ」
「そうか、では止めるとしよう」
彼は笑みを消した。
「俺も貴様に従う。確かにこの劇場は壊すに惜しい。むしろ」
劇場を見渡している。
「ここでストロンガーを倒したいと思う位だ」
「フン、相変わらずだな」
「フフフ」
シャドウは再び不敵な笑みを出した。そして劇場から去った。タ

イタンもだ。
「行くぞ」
二人は観戦に向かった。外では既に巨人達の咆哮が木霊している。

永遠の絆その十

「わしも行くぞ」
立花も向かった。彼は観戦の為ではない。ストロンガーと共に戦う為である。
立花が劇場を出た時には戦いは既にはじまっていた。ストロンガーは二体の巨人を向こうに回していた。
「トォッ！」
上に跳ぶ。そしてギガンテスに蹴りを放つ。
「電キィーーーーック！」
だがそれは効果がなかった。巨人は平然としていた。
「クッ、この程度では効果がないか」
「グオーーーーーーッ！」
巨人は叫んだ。そして着地したストロンガーの上に槍を振り下ろす。
だがそれはかわした。ストロンガーは側転しながらかわす。
しかし巨人はギガンテスだけではに。もう一体のいるのだ。
「ガオオオーーーーッ！」
タロスが足を振り下ろす。そしてストロンガーを踏み潰そうとする。
ストロンガーはそれに対し側転を続けた。そしてそれでタロスの足をかわした。
「危ないところだったな」
ストロンガーは態勢を立て直して言った。そこに立花が来た。
「おやっさん」
「ストロンガー、わしも戦うぞ」
心強い味方であった。ストロンガーはその言葉を聞いて頷いた。
「わかりました、頼りにしてます」
「おう、任せとけ」

立花は素早い動きで巨人の足下に潜り込んだ。
「こっちだ化け物！」
そして怪人を挑発する。巨人はそちらに気をとられた。
その隙にストロンガーが攻撃を仕掛ける。跳び拳を巨人の顔に繰り出す。
「喰らえっ！」
だがそれはその青銅の身体に弾き返される。その身体は伊達ではなかった。
「グオッ！」
ダメージはなかったが巨人の神経を逆撫でするには充分効果があった。タロスは両手でストロンガーを掴み、握り潰そうとする。
だがそれはかわされた。ストロンガーは巨人の肩を踏み台にして後ろに跳んだ。そして巨人の手が届かない範囲で両手を胸でクロスさせた。
「チャーージアップ！」
胸のSの文字が回転する。そして超電子ダイナモが作動した。
ストロンガーの角と胸の一部が銀色になった。超電子の力が身体に宿ったのだ。
「トォッ！」
前に跳ぶ。そこには立花がいた。
「おやっさん、下がって！」
「おう！」
立花はそれに従い後方に下がる。そしてタロスの攻撃が届かない範囲まで退いた。
「ストロンガー、神話を思い出せ！」
そしてストロンガーに対して言った。
「神話！？」
「そうだ！」
立花は叫んだ。
「タロスの弱点、それは」

「クッ、まさか」
観戦していたシャドウはその言葉に反応した。
「踵だ！タロスはそこを突かれて死んでいるんだ！」
「そうだ、踵だ」
ストロンガーもそれを思い出した。そして巨人の足下に潜り込む。
「グオーーーーーッ！」
巨人は手の平から黒い光を放つ。しかし超電子の力で速度を速めているストロンガーには当たらなかった。
「その程度で俺を倒せるか！」
ストロンガーは右の踵のところに来た。そして手刀を繰り出す。
「超電子チョップ！」
それでまず一撃を加えた。
「グオオオオオッ！」
巨人は絶叫した。そして苦しみのあまりその動きを止めた。
「おやっさんの言う通りだ」
ストロンガーはその苦しみを見て確信した。そしてさらに攻撃を仕掛ける。
「まだだ！」
振り被った。そして拳に雷を宿らせて繰り出す。
「超電三段パァーーーーンチッ！」
三連続で拳を繰り出す。そしてそれで巨人の踵を完全に粉砕した。
「グオオオオーーーーーッ！」
タロスは断末魔の絶叫をあげた。そしてたちどころに砂の様に崩れてきた。
「危ない！」
ストロンガーはそれから素早く飛び退いた。そして難を逃れた。
まずは一体だ。
「フフフ、どうやら奴は貴様の巨人の手に負える男ではなかったようだな」
タイタンはその様子を見てシャドウに語りかけた。

「何を」
シャドウはキッと彼を見据えた。
「すぐに貴様の巨人もああなる」
「それはどうかな」
だがタイタンは自信ありげな態度を崩してはいない。
「俺の巨人はタロスとは違う。そう」
言葉を続けた。
「俺の巨人はかって神々と覇権を争った程の恐るべき巨人だ。あの様な作り物とは違う」
ギガンテスは複数称である。単数ではギガスである。だがタイタンはあえてそう名付けた。その絶大な力故である。
ギガンテスの力は他の巨人達よりも上であった。純粋に戦闘力ならばティターン神族よりも上であったしオリンポスの神々すらも凌駕していた。それはその怪物的な姿とも関係があった。
「さあ、ギガンテスよ」
タイタンは眼下の巨人に対して言った。
「今こそその力を見せろ。そしてストロンガーを倒せ！」
「ガオオーーーーーッ！」
それに応えるかの様に巨人は吠えた。そして両足の大蛇達が鎌首をもたげた。
その両眼から黒い光が放たれる。ストロンガーはそれをかわした。
「おやっさん、こいつは」
そして立花に問うた。
「ギガンテスか」
「はい」
ストロンガーは答えた。
「確か神と戦ったやつだったな」
「ええ」
立花もそれは知っていた。

永遠の絆その十一

「確かこいつは」
二人は巨人の槍と黒い光をかわしていた。そして隙を窺う。
「弓にやられたな。神々とヘラクレスの弓にだ」
「ヘラクレスにですか」
彼は力だけでなく弓にも秀でていたのだ。
「そうだ。その弓で一人残らずやられたんだ」
「そうだったのですか」
ストロンガーはそれを聞いて考え込んだ。
「弓か」
彼の脳裏にとあることが思い浮かんだ。
「上からならば蛇も狙うことは簡単じゃない」
ギガンテスの蛇は両足である。下から上を狙うのは中々難しい。
「それは槍もだ」
彼はこの巨人の弱点を見出した。上からの攻撃だ。
「よし！」
彼は跳んだ。そして空中で構える。
「これでどうだっ！」
そこから蹴りを放つ。
「超電子ドリルキィーーーーーーック！」
高速できりもみ回転しながら急降下する。そしてそれでもって巨人の胸を貫く。
ストロンガーはその巨体を貫通した。背中まで蹴破り地面に着地した。
「ムッ」
後ろを振り返る。そこで胸に巨大な風穴をあけた巨人が立っていた。
しかしそれは一瞬のことであった。ギガンテスもまた砂の様に消

え去っていった。
「巨人達は倒したか」
「ストロンガー、よくやった」
立花がそこに駆け寄って来る。
「見事な戦いだったぞ」
「いえ」
だが彼はその言葉には首を横に振った。
「どうしたんだ」
立花はそれを見て怪訝そうな顔をした。
「今回の戦いはおやっさんのおかげです。おやっさんの助言がなければ勝つことはできませんでした」
「おい、謙遜は止めてくれよ」
立花はそれを聞いて照れる。
「その通り、この度の戦いは立花藤兵衛の言葉があったからこそだ」
ここでシャドウが言った。
「その助言があればこそストロンガーは勝つことができた。だが」
彼は言葉を続けた。
「やはり巨人ではストロンガーの相手にはならなかったのも事実。やはりストロンガーを倒すのはこの俺しかいない」
「シャドウ」
ストロンガーは顔を上げた。
「ストロンガー」
シャドウはストロンガーに対して言った。
「明日勝負を挑む。いいな」
「望むところだ」
ストロンガーはそれを承諾した。
「場所はシラクサのコロシアムだ。いいな」
「シラクサか」
「そうだ。我等が決着を着けるのに相応しい場所だろう」
シャドウはそう言うとニヤリ、と笑った。

シラクサはかってポエニ戦争で激戦地となった都市である。この都市を巡ってローマとカルタゴの勢力は互いに争った。そしてローマはこの都市を何とか陥落させている。

なおこの街は偉大な学者アルキメデスの出身地として有名である。数学の定理で知られる彼はこの街がローマに占拠された際兵士達に殺されている。占領の際の交渉によりローマの将兵は一般市民には一切手を出さないことになっていた。ただ財宝はもらった。この時代の戦争においては当然の報酬であった。

この時トラブルが起こった。兵士の一人がうっかりと数学の公式について考えている彼の思想の邪魔をしたのだ。これにアルキメデスは激怒した。それに激昂した兵士はアルキメデスを殺してしまった。不幸な話であった。

「それでよいな」

「俺に異論はない」

「よし」

シャドウは満足したように頷いた。

「では明日だ。楽しみに待っている」

シャドウはそう言うと身体を背中のマントで覆った。

「マントフェイド！」

そしてその中に消えていった。後にはタイタンが残っていた。

「フン、相変わらずキザな男だ」

タイタンはシャドウの様子を見送って言った。

「貴様も人のことは言えないだろうが」

立花が彼に対して言った。

「いつも黒いスーツに身を包みやがって。そんなに服が大事か」

「当然だ」

タイタンは無数の目で彼を見下ろして答えた。

「だが俺はキザではない」

「じゃあ何なんだ」

「これはダンディズムというのだ。貴様にはわかるまいがな」

「どっちも同じだ」
「まあいい。貴様には関係ない話だ。ところで」
タイタンもまたストロンガーに目を向けた。
「俺もまた貴様に勝負を挑もう」
「やはりな」
ストロンガーはそれを予感していた。
「時間はシャドウとの戦いの後でいい。何時でもな」
「そうか」
「場所はパレルモ。クワットロ＝カンティだ」
「クワットロ＝カンティか」
「そうだ。貴様の墓標に選んでやった。感謝するがいい」
クワットロ＝カンティとは『四つ角』という意味でありヴィットーリオ＝エマヌエレ通りとマクエダ通りが直角に交わる場所である。それぞれの角にスペイン統治時代の君主や四季等を司る守護聖人達の像が置かれている。
「俺はそこにいる。シャドウとの戦いが終わったならば来るがいい」
「わかった」
「俺から言うことはそれだけだ。それではな」
タイタンはそう言うと全身を巨大な火の玉に変えた。

永遠の絆その十二

「では次に会う時を楽しみにしているぞ」
そして姿を消した。
「ンッフッフッフッフッフ」
その独特の笑い声だけが残った。
「ストロンガー」
立花は険しい顔でストロンガーに語り掛けた。
「わかっています」
彼は強い声で答えた。
「シャドウにタイタン、リビアで再び対峙した時から何時かはこうなると思っていました」
「そうか」
「行きます」
彼は頷いた。
「そして勝ってきます」
「おう、その時こそ飲むぞ」
「はい」
こうして二人もこの劇場から去った。そして次の戦いに備え英気を養うのであった。
翌日の正午城は約束通りシラクサのコロシアムに姿を現わした。
一人である。あえて立花は呼ばなかった。
「一騎打ちですから」
彼は立花に言った。男と男の勝負だからだ。
このコロシアムはローマ風であった。擂り鉢状でありその中心に闘いの場があった。
「シャドウ」
彼はゼネラルシャドウを呼んだ。
「約束通り来たぞ、早く姿を現わせ」

「言われずとも既にいる」
前からシャドウが姿を現わした。
「城茂、いや仮面ライダーストロンガーよ」
そしてあらためて彼に対して言った。
「よく俺の申し出を受けてくれた。礼を言うぞ」
「礼なぞ要らん」
だがストロンガーはそれを突っぱねた。
「今から俺と御前は命をかけて闘う。それなのに礼なぞ不要だ」
「フフフ、そうか」
シャドウはそれを聞きいつものように不敵に笑った。
「確かにな。これからどちらかが必ず死ぬ。それなのに礼なぞ言っても仕方ないか」
そう言うと剣を抜いた。
「そして死ぬのはストロンガー、貴様だ」
「それはどうかな」
城も不敵な声で返した。
「俺もそうそう簡単にやられるわけにはいかないからな」
「俺の勝利は決まっている」
シャドウはそう言うと一枚のカードを取り出した。
「これを見ろ」
そしてそのカードを城に見せた。
「カードが俺に告げている。俺の勝利をな」
「カードがか」
「そうだ。俺のカードが何なのか貴様はよくわかっている筈だ」
シャドウはトランプの占いにより全てを決する。そして今まで生き抜いてきたのだ。彼の占いが外れたことはない。
「貴様は必ず死ぬ。この俺の手で」
「それはどうかな」
だが城は不敵な態度のままである。
「生憎俺は占いは全く信じちゃいない。貴様もそれはよく知ってい

ると思うがな」
「愚かな」
「愚かかどうかはこれからわかることだ」
城は反論した。
「今からの闘いでな」
「面白い」
シャドウもその言葉に乗った。
「では俺は俺の占いの正しさを証明するとしよう。この闘いに勝ってな。さあ来るがいい」
「言われずとも」
城は構えに入った。両腕をゆっくりと動かす。

変身

まずは両手の手袋を脱ぐ。そこから銀の腕が現われた。
そしてその両腕を右に置く。肩の高さだ。左腕は肘を直角にして右に合わせている。
それを右から左に旋回させる。それと共に身体が黒いバトルボディに覆われた。胸は赤くなる。手袋とブーツは白だ。
スト・・・・・ロンガーーーーッ！」
左斜め上に置いた両手を合わせる。そしてそこに雷を宿らせる。
すると顔の右半分を黒い緑の眼を持つ仮面が覆った。そして左半分も。角も備えていた。

身体が激しい電流に覆われる。そしてその中から雷のライダーが姿を現わした。
「フフフ、変身したな」
シャドウはそれを見届けて言った。
「さあ来い、これが最後の闘いだ！」
「行くぞ！」
ストロンガーは前に跳んだ。そして拳を繰り出した。

「甘いっ！」
シャドウはそれをマントで防いだ。そして逆にその拳を絡め取ろうとする。しかしストロンガーはそれより前に退いた。
「トゥッ！」
今度は蹴りを繰り出す。だがそれもシャドウのマントに防がれてしまう。
「マントを使うか」
「フフフフ」
シャドウはそれに対して不敵に笑った。
「俺のマントは単なる飾りではない。こういったことにも使えるのだ」
シャドウは笑みの後でこう言った。
「俺の身体にあるものは全て戦いの為のもの。それを忘れてもらっては困るな」
「クッ」
「そしてこれもだ」
シャドウはここでトランプのカードを取り出した。
「受けよっ！」
カードを投げる。ストロンガーはそれをしゃがんでかわした。
「この程度！」
「ならばこれはどうだ」
続け様に投げる。しかしそれは全てストロンガーの素早い身のこなしの前にかわされる。

永遠の絆その十三

「さらに腕を上げているな」
「当然だ、伊達に今まで戦ってきたわけではない」
ストロンガーは言葉を返した。
「貴様等を全員倒すまで俺の戦いは終わらない、だからこそ俺は腕を磨いた」
「そうか、俺を倒す為にか」
シャドウは不敵に笑った。
「貴様だけではない」
だがストロンガーはまた言った。
「バダン全てを粉砕する為、世界に平和を取り戻す為だ！」
「それだけではないな」
「何っ！？」
ストロンガーはシャドウの言葉にピクリ、と動きを止めた。
「あの女との誓いもあるのだろう」
ストロンガーはそれに対しては何も言わなかった。
「デルザーとの戦いで倒れたあの女との誓いだ。知らぬとは言わせぬぞ」
「・・・・・否定はしない」
彼は言った。
「そう、その為に俺は戦っている」
そしてシャドウを見据えた。
「シャドウ、その誓いを果す為にも貴様を倒す！」
「フフフ」
シャドウはそれを聞きニヤリと笑った。
「ならば全力で来るがいい。そして俺を倒してみよ」
「望むところだ！」
彼はここで胸のエスの文字に両手を合わせた。

「チャーーージアップ！」
胸のその文字が激しく回転する。そしてストロンガーの全身が光った。
超電子の力を開放した。そして彼は超電子人間に変身した。
「行くぞシャドウ！」
「フフフ」
構えをとったストロンガーに対して彼も構えを取った。剣を構える。
「そうでなくては面白くない。生まれ変わった超電子の力見せてもらうぞ」
「貴様に言われずとも！」
ストロンガーは前に跳んだ。そして連続して手刀を出す。
「どうだ！」
「まだまだ！」
シャドウはそれを剣でかわす。そして一瞬の隙を見て剣を繰り出す。
「クッ！」
それはストロンガーの右肩を掠った。彼は危ういところでそれをかわした。
シャドウの攻撃は続いた。突きを縦横無尽に繰り出す。
「フフフ、どうでぃたストロンガーを」
流星の様な突きを出しながらもシャドウにはまだ余裕があった。
「俺の力はまだこんなものではないぞ」
ストロンガーはたまりかねて間合いを離した。シャドウはそこにカードを投げた。
「間合いを離しても無駄なこと」
トランプは電気ストームに落とされる。だがシャドウはそれにかまわず更にカードを投げる。
「こうしたものもあるからな」
今度はその投げたカードが爆発した。

「うわあっ！」
ストロンガーは爆発に吹き飛ばされる。だがかろうじて空中で態勢を建て直し着地した。
「トランプショットだ。俺のトランプは爆弾にもなるのを忘れていたな」
「クソッ・・・・・」
ストロンガーは歯噛みした。鈍い痛みが全身を襲う。
「いかん、このままでは」
ダメージは思ったよりも大きかった。動きにも支障が出かねない程であった。
「ストロンガー」
だが敵は待ってはくれない。シャドウはストロンガーに対して言った。
「今度はこれを受けてみるがいい」
そう言うと剣を一閃させた。するとストロンガーの周りを数枚の巨大なカードが取り囲んだ。
「これはまさか」
「思い出したか」
シャドウは嬉しそうな声で語りかけた。
「このカードの力は貴様はよく知っている筈だ」
「クッ」
「さあ、ストロンガーよ。このカードの中で死ぬがいい」
「誰がっ」
「フフフ、相変わらず気の強い男だ。だがそれでもこれを凌ぐことは出来まい」
五枚のカードが一斉に火を噴いた。ストロンガーはそれから身をかわすだけで精一杯であった。
それだけではない。シャドウは分身の術を使った。そしてカードの陰からストロンガーを狙う。
「敵はカードだけではないぞ」

そうしてストロンガーを徐々に追い詰めていった。
「まずい、このままでは」
ストロンガーは形勢が不利になっていることに焦っていた。
「何とかしなければ」
だがシャドウの攻撃は激しかった。そうそう容易には破ることは出来そうもない。
「さあ、どうするストロンガーよ」
隙を探っている間にもシャドウの攻撃は続く。
「どうして俺を倒すつもりだ」
巨大なカードの間から攻撃を次々と繰り出す。
「どうするべきか」
ストロンガーは考えた。
「上に逃げるしかないか」
だがそうすればシャドウも跳ぶだろう。そして空中で剣に襲われるのは目に見えていた。
「フフフ」
シャドウは剣も繰り出す。振り下ろされるその銀の煌きが目に入った。
「ムッ！？」
ストロンガーはそれを見て閃いた。
「あったぞ、この攻撃を打ち破る方法が」
彼はすぐに右腕に力を込めた。
「見ろ、シャドウ」
そして叫んだ。
「ムッ！？」
シャドウもそれを聞き思わず動きを止めた。
「これで貴様の攻撃は終わりだ！」
そう叫ぶと力を溜めていた右腕を拳にして天に突き出した。
「見ろ、これが俺の戦い方だ！」
渾身の力で叫ぶ。それと共に右の拳から雷を天に向けて放った。

「何ィ！」
それを見て流石のシャドウも思わず叫んだ。天に向かって放たれた雷は忽ち天空を暗い雲で覆った。
「エレクトロサンダーーーーーーーッ！」
無数の雷が降り注いだ。そしてストロンガーの周りを覆う。
「おおっ！」
素早く後方に退いたシャドウはその凄まじい光景を見て驚嘆の声をあげた。カードは全て雷に撃たれていた。
カードは瞬く間に炎に覆われる。ストロンガーは雷を全身に宿らせたままその炎の中からゆっくりと姿を現わした。
「まさかここでエレクトロサンダーを使うとはな」
シャドウは思わず賞賛の声を漏らした。
「シャドウよ、言った筈だ」
ストロンガーは雷を宿らせたまま言った。
「俺は必ず勝つ、と。その為には何でもする」
「そうだったな」
シャドウはそれを聞いてようやくストロンガーの本質を思い出した。
「勝つ為には何としても勝つ。正義の為に」
ストロンガーはそれに応えるように宣言した。
「それがストロンガーだ！」
「ならば」
シャドウもそれを聞き構えた。
「俺も必ず勝つ。カードの結果こそが俺の運命」
そしてカードを抜いた。
「俺のカードは決して間違わん。ストロンガー、貴様の運命は決まっている」
「運命か」
「そうだ」
シャドウはそこでその手に持つカードを投げた。

「それは死だ」
ストロンガーに投げたカードは全てジョーカーであった。道化師が無気味な笑いを浮かべてそこにいる。

永遠の絆その十四

「さあ、カードの運命に従い死ぬがいいストロンガー」
「カードか」
ストロンガーはそれに対して不敵な声を出した。
「運命は自分で切り開くもの、俺はカードになぞ頼らん」
「戯れ言を」
「ならばそのカードに占めされた運命を今こそ変えてやろう。ゼネラルシャドウよ」
彼を指差した。
「今ここで貴様を倒す。覚悟しろ！」
「やれるものならな」
ここでシャドウの全身を激しい気が覆った。
「俺にも切り札があることを忘れるな」
その気は見る見るうちに強くなっていく。
「まさかその気は」
「そう、そのまさかだ」
シャドウは笑った。皮膚のない肉だけの顔が恐ろしい笑みを浮かべた。
「かって貴様に見せたこの力、今また貴様に見せよう」
力が全身を覆っていく。
「行くぞ、シャドウパワー！」
身体を凄まじい気が覆った。それはまるで鎧の様であった。
「全力を出すか」
だがストロンガーはそれに臆してはいなかった。
「ならば俺も全力で戦おう」
全身を覆う雷を一つに集めだした。
「この雷にかけて！」
「無駄だ、カードの定めた運命には勝てぬ！」

ストロンガーが放った雷撃を剣で両断する。何と剣で雷を切ったのだ。
「クッ、剣で切ったか！」
「フフフフ」
シャドウはジリジリと間合いを詰めてきた。
「さあ、どうする（ストロンガーよ。雷は最早俺には通用せんぞ」
「クッ、まさかそこまでの剣技を出してくるとは」
しかしストロンガーは諦めてはいなかった。彼の隙を窺っていた。
（だが必ず勝つ。いや、勝てる）
シャドウとて隙は生じる。その時を待っていた。
だが敵もさるものである。シャドウもまたそれを狙っていた。
（さあ来い、ストロンガーよ）
彼はストロンガーが動くのを待っていた。
（その一瞬に隙が生じる。その時にこの剣で心臓を刺し貫いてやる）
両者は互いの隙を窺っていた。緊張した空気がその場を支配していた。
先にストロンガーが動いた。その瞬間をシャドウは逃さなかった。
「今だっ！」
剣を繰り出す。それでストロンガーの心臓を刺し貫こうとする。
だがストロンガーはそれを察していた。彼は正面に出たのではなかった。
右斜めに出ていたのだ。それで剣をかわした。
「クッ！」
「もらったぞ、シャドウ！」
ストロンガーは手刀を放った。それでシャドウの首を撃つ。
「ガハッ！」
普通の怪人ならばそれで首の骨を叩き折られているところだ。だがその力を全て開放したシャドウにとってはそれはどうということはなかった。だが衝撃で動きが一瞬乱れた。そしてその乱れが致命傷となった。

「トォッ！」
ストロンガーは跳んでいた。そして空中で攻撃態勢に入っていた。
「行くぞ！」
空中で大の字を作る。そして横に激しく回転する。
「受けろ！」
そこから蹴りの態勢に入った。
「超電子・・・・・・」
やはり超電子の技だった。だがそれは普通の超電子の技ではなかった。
「大車輪キィーーーーーック！」
回転による力を使った蹴りであった。凄まじい衝撃が空中から急降下した。
そしてそれはシャドウの胸を直撃した。その凄まじい衝撃が彼の全身を襲った。
「グフッ！」
だが彼はそれに耐えた。ストロンガーの足を掴んでその衝撃に必死に耐える。
しかしそれも限界であった。彼はその手を離した。
ストロンガーは蹴った反動を使って離れる。だがシャドウはそれでも倒れはしなかった。
倒れもしなかった。彼はその衝撃に耐え何とか立っていた。
「何、超電子の力を以ってしてもか！」
流石にそれには絶句した。だが超電子の力は何者も防ぐことはできなかった。
「案ずるな、ストロンガー」
シャドウは言った。
「この戦い、貴様の勝ちだ」
そして口から血を噴き出した。
「超電子の力、受けさせてもらったぞ。これ程の力を使いこなすとは見事だ」

「シャドウ」
「俺の負けだ。まさかカードの予想が外れるとはな。こんなことは今までなかったことだ」
彼のカードが外れたことはない。かって彼がストロンガーとの戦いに敗れた時もカードは外れはしなかったのだ。その時カードは彼の敗北を伝えていたのだった。
「ジプシーに生まれた俺がカードを外す時の運命はわかっている。それで俺は終わりだ」
「シャドウ・・・・・」
彼は常にカードにより全てを決してきた。カードは彼の全てであったのだ。そのカードを外すということは彼にとっては死そのものであった。
「だが貴様はこれからタイタンとの戦いがあるのだろう。あの男は手強い。俺と同じ位にな」
タイタンの強さは彼が最もよくわかっていた。かってブラックサタンにおいて、そしてこのバダンにおいてもライバルであったからだ。
「俺との戦いの後では辛いだろう。これが俺の最後のはなむけだ」
そう言うと剣を天にかざした。
「受け取るがいい、ストロンガーよ！」
すると雷が落ちてきた。そしてそれはストロンガーを直撃した。
「ウオッ！」
思わず声をあげた。それは瞬く間に彼の全身を駆け巡った。
「どうだ、これで充分だろう。もっともこれ以上雷は出せぬがな」
「シャドウ」
「礼は要らぬ。俺と貴様は敵同士なのだからな」
シャドウの足がかすかによろめいた。もう限界であった。
「だが俺の長い戦いの人生の中で貴様と出会えたのは幸運であった」
最後にニヤリ、と笑った。
「思い残すことはない。思う存分戦うことができた」

そこまで言うと全身をマントで覆った。
「さらばだストロンガーよ、さらばだバダンよ。偉大なる首領よ永遠なれ！」
そして爆発の中に消えていった。あとにはカードが飛び散った。

永遠の絆その十五

「ゼネラルシャドウ」
ストロンガーは爆発の中に舞うカードを見た。
「貴様が味方だったならな。惜しい男だった」
カードは塵となって消えていく。ストロンガーはそれを黙って見ていた。
「だが俺にはまだやることがある」
顔をカードから離した。
「タイタン、待っていろ」
そこにマシンが来た。
ストロンガーはそれに乗った。そしてその場を去った。
こうしてブラックサタン、デルザーにおいて独自の地位を築き続け多くの者に一目置かれていたゼネラルシャドウは死んだ。彼は自らのカードの占いに反して壮絶な最期を遂げた。
タイタンはこの時既に戦場にいた。そしてそこでストロンガーを待っていた。
「さあ、すぐに来るがよい、ストロンガーよ」
彼は戦闘服に着替えていた。漆黒の皮の服である。
これは黒龍の皮から作られている。彼の強烈な体温に耐えられるのはこれしかないのだ。
そこに何かが飛んで来た。タイタンはそちらに目を向けた。
「ムッ」
それは一枚のカードであった。スペードのキングである。
「そうか」
タイタンはそれを見ただけで全てを察した。そのカードは彼の手の中に落ちた。
「シャドウ」
彼はそのキングを見やった。

「どうやら最期まで退くことなく戦ったようだな。貴様らしい」
彼はシャドウを嫌っていた。だがその能力は率直に認めていた。
ブラックサタンにおいてもこのバダンにおいてもそうであった。
彼等はやり方こそ違えどその能力は伯仲していた。時には激しく争ったのもその為であった。
「貴様の形見、確かに受け取った」
彼はそれを己が懐の中に収めた。そして顔を元に戻す。
「あとは俺の仕事だ、そう」
ここで前を見据えた。
「早く来るがいい、ストロンガーよ」
その声は力強いものであった。
「今度こそ貴様を倒す」
そして前から来る陰を見据えた。
ストロンガーは来た。タイタンの前に来ると颯爽とマシンから飛び降りた。
「百目タイタン」
そしてタイタンを見据えた。
「何だ」
タイタンはわかっていた。だがあえて問うた。
「今日で全てが終わる、全てがな」
そう言って彼は身構えた。
「行くぞ、貴様を倒す」
「フン」
タイタンはそれに対して不敵に笑った。
「貴様に出来るのか」
「戯れ言を」
彼はこの時においてもまだ強気であった。
「この超電子の力で貴様を倒す」
「超電子の力か」
圧倒的なパワーを持つ。タイタンはそれに対しても臆することは

なかった。
「それで俺を倒せると思っているのか」
「当然だ」
その銀の角が光った。
「その為にここに来たのだからな」
「フン」
タイタンはまた不敵に笑った。
「面白い冗談だ。この俺を倒すとはな」
「言うな！」
ストロンガーはそれに対しては激昂した声を出した。
「タイタン、貴様の命は今日で終わる」
「シャドウのカードにでも出ていたな」
「まだふざけていられるのか」
彼は気を抑えるのも必死になった。
（フフフ、いいぞ）
これは無論彼の策略であった。
（怒れ、そして冷静さを失え）
そこに付け込むつもりなのだ。
だがストロンガーのそれにはすぐ気付いた。表情を元に戻した。
「フッ、危ないところだった」
そう言って深く息をした。
「むざむざ貴様の策に陥ってしまうところだった。タイタン、貴様の考えは読めているぞ」
「そうか」
彼は内心舌打ちした。
「では前哨戦はこの程度にしておくか」
「当然だ、行くぞタイタン」
「フフフフフ」
タイタンは身構えた。そして不敵な笑みを漏らした。
「さあ来いストロンガー」

彼は悠然と構えたまま言った。
「このクワットロ＝カンティが貴様の墓場となる。前に言った通りな」
「それはどうかな」
「何！？」
タイタンは彼の言葉にその無数の目を動かした。
「クワットロ＝カンティは貴様の墓標となる、ということか」
「戯れ言を」
「それはすぐにわかる。今からな」
「そうだったな。では俺が貴様の言葉を訂正してやろう」
彼は両腕に炎を宿らせた。
「この地獄の炎でな」
ストロンガーも雷を宿らせた。そして両者は戦いを開始した。シチリアでの最後の戦いの幕が開けた。
「喰らえっ！」
まずはタイタンが炎を放って来た。
「ファイアーーーボーーールッ！」
「何のっ！」
ストロンガーは両手の雷でそれを打ち消した。そして続けて地面を撃った。
「エレクトロファイアーーーーーッ！」
電流を放つ。それは地を走りタイタンを撃った。だが彼は全く平気であった。
「フフフフ、その程度か、超電子の力も」
彼には何の効果もなかったのだ。
「俺をこの程度で倒せるとでも思っているのか」
「フン、まだだ！」
ストロンガーはその挑発に乗るようにまた攻撃を仕掛けた。
「トォッ！」
前に跳び込む。そして拳を繰り出した。

「超電子三段パァーーーーンチッ！」
拳を繰り出す。三段で続けて放つ。だがそれもタイタンに全て防がれてしまった。
「効かんな」
「クソッ！」
ストロンガーは今度は手刀を放つ。それもタイタンに弾かれてしまった。
「効かんと言っている」
「おのれっ！」
タイタンは強大であった。超電子の力を身に着けたストロンガーの攻撃すら簡単に受けていた。タイタンの攻撃もストロンガーはその力を以って防いでいる。両者は激しい死闘を展開していた。
「何という手強さだ」
ストロンガーは間合いを離して思わず呟いた。
「あの時よりもまだ強くなっている」
かってブラックサタンの時にも二人は激しい死闘を繰り広げた。彼はその時ある場所を狙って勝利を収めている。
「ストロンガーよ、肩を狙っても無駄だぞ」
だがタイタンはそれを予期したようにそう言った。

永遠の絆その十六

「俺は死神博士の改造手術を受けパワーアップした。その時に力は全てこの中に封じ込めているのだ」
「クッ、そうだったのか」
「かっては貴様に飽和しきった状態で肩を攻められて敗れた。だが今度は違う」
彼は自信に満ちた声で言った。
「今の俺に弱点はない。ストロンガーよ、今日こそ貴様の最後だ」
「何を！」
ストロンガーは前に出た。そして手刀を出す。しかしそれはタイタンに防がれた。
「無駄なことを」
彼はやはり余裕に満ちていた。
「その程度で俺を倒せると思っているのか」
そして放り投げた。ストロンガーは空中で回転し受け身をとった。
「フン、身のこなしは見事だな」
両足で着地した彼を見て言った。
「しかしそれだけでは勝てはせん。この俺の圧倒的なパワーの前にはな」
頭部に手をやり目玉を一つ取り出した。
「ファイアーーーシューーーーートッ！」
その目が炎となった。そしてストロンガーに襲い掛かる。
「何のっ！」
だが彼はそれから身をかわした。そして逆にタイタンの懐に飛び込む。
「何度やっても同じだ」
拳を繰り出したがそれも防がれた。
「その程度のパワーで俺を倒すことはできんと何度言えばわかる」

拳を掴もうとする。握り潰すつもりだ。だがストロンガーはそれよりも前に後ろに跳び退いていた。
「またしても逃げるか。まあいい」
やはり余裕があった。
「いずれは捕まえられる。その時こそこの炎で焼き尽くしてくれるわ」
懐から拳銃を取り出した。そしてそれをストロンガーに向けて放つ。
「さあ、逃げるがいい、ストロンガーよ」
ストロンガーを狙って次々と発砲する。
「何時まで逃げられるかな」
「クッ、このままでは」
確かに何時までも逃げられるものではなかった。ストロンガーの体力にも限界があった。確かに超電子の力を多く使うことができる。しかしそれでもエネルギーを消費することには変わらないのだ。
超電子はその力が絶大なだけに通常の状態よりも遥かにエネルギーを消費する。そしてこの力を使っている間は身体に凄まじいまでの激痛が走る。ライダー達は変身の時には激痛に耐える。だが超電子の激痛はその比ではないのである。
「だが何としてもタイタンは倒さなければならない。ここで諦めるわけには」
冷静さを必死に保つ。まずは構えを取り戻した。
そして戦場を見る。そこに一輪の花があった。
「あれは」
それは紅い百合であった。淡い色をした一輪の百合が道の端にたたずんでいた。
「百合・・・・・」
ストロンガーはかって共に戦った一人の戦士のことを思い出した。自分より遥かに力が劣っていても果敢に戦っていたあの戦士を。
「あいつも決して諦めてはいなかった」

例え力がなくとも。彼女は決して逃げることはなかった。
「あいつはあいつなりに必死に戦っていた。ならば俺も」
キッとタイタンを見据えた。
「逃げるわけにはいかない。タイタン」
そしてタイタンの名を呼んだ。
「今から貴様を必ず倒す、覚悟しろ！」
「出来るものならな」
だが彼はそれでも自信に満ちた態度を崩すことはなかった。
「この俺のパワーに勝てるのならな」
「またパワーか」
確かにパワーでは大きく劣っていた。しかし。
「見たところスピードは強化されていないな」
ストロンガーはこれまでの戦いでそれを察知していた。
「ならば戦い方はある」
彼はスッと右に動いた。
「フフフ、どうするつもりだ」
「今にわかる」
ストロンガーはタイタンの後方に回り込んだ。
そして跳んだ。そこから拳を出す。
「何をするかと思えばまたそれか」
だがそれはタイタンに防がれてしまった。
「芸のない奴だ」
「それはどうかな」
ストロンガーはそれに対して言い返した。
すぐに再び攻撃を放った。今度はローキックだ。
「ムッ」
それはタイタンの脛を撃った。さしたるダメージではないがこれは効果がある。
足にダメージを受けたタイタンの動きが微かだが鈍った。ストロンガーはそれに付け込みさらに攻撃を加える。

「これでどうだ！」
ストロンガーは果敢に攻撃を続ける。そしてタイタンを次第に押していった。
「おのれ」
タイタンはそれに対して拳に炎を宿らせた。そしてそれでストロンガーを撃とうとする。だがそれはストロンガーの素早い動きの前にかわされてしまった。
ストロンガーは攻撃を続ける。一撃一撃はタイタンの体力と防御力の前にさ程効果はない。だが手数で次第にダメージを与えていく。
さしものタイタンもパワーが落ちてきた。何よりもパワーがもう限界だった。
「よし！」
好機と見たストロンガーは跳んだ。そして空中で構えをとった。
「超電子・・・・・」
技の名を叫びながら激しく回転する。
「スクリューーーキィーーーーーーック！」
雷の様な蹴りを放った。きりもみ回転しながらタイタンに向けて急降下する。
よけきれる速さではなかった。タイタンはそれを胸にまともに受けた。
「グフッ！」
口から血を吐き出す。ストロンガーは胸を撃ちながらもまだ回転していた。
本来なら完全に撃ち抜いているところである。だがタイタンはそれを凌いでいた。

永遠の絆その十七

回転が止まった。ストロンガーは後ろに跳び退き後方に着地した。タイタンはなおも立っていた。足は揺らいでいたがそれでも立っていた。

「ストロンガーよ」

タイタンはストロンガーに対して言った。

「見事だった。まさかスピードを使うとはな」

彼はその無数の目でストロンガーを見据えていた。

「パワーにのみ頼った俺が迂闊だった。力だけでは勝てぬということか」

「いや、俺も危なかった。タイタン、貴様のパワーは確かに強大だった。下手をすれば俺も敗れていた」

「フッ、慰めはいい」

彼はシニカルに笑った。

「俺の負けなのは事実だ。結局俺は最後まで貴様に勝てなかった、それだけだ」

ストロンガーはそれに対しては何も言わなかった。

「だがいい闘いだった。この俺の最後を飾るに相応しいものだった」

そう言うと姿勢を正した。

「貴様と闘えたことを誇りにして地獄へ行くのも悪くはない。そこでシャドウとでも心ゆくまで語り合うか」

「シャドウとか」

やはり彼等はいがみ合いながらも互いに認め合っていたのであった。

「そうだ。さらばだストロンガー、だが地獄に来たならばまた会おう。楽しみに待っているぞ」

そして前にゆっくりと倒れた。

「バダンバンザァーーーーーーイッ！」

そして爆発して果てた。炎の化身である彼の爆発は一際大きなものであった。

「これでブラックサタンの二人の大幹部も死んだか」

ストロンガーはその爆発を見ながら呟いた。

「敵ながら見事な奴等だった。シャドウもタイタンも」

爆発は消えていった。タイタンの姿は何処にもなかった。

ストロンガーと二人の大幹部の戦いは終わった。彼は遂にブラックサタンからの強敵を倒すことに成功したのであった。だが彼の戦いは終わってはいなかった。

「おやっさんはこれからどうします？」

城は空港で立花に尋ねた。

「わしか」

彼を見送りにきた立花はそれを聞いて少し考え込んだ。

「そうだな、スペインに行こうと思っている」

「スペインですか」

「ああ、隼人があそこに向かっているらしい。何かと助けてやらにゃあいかんからな」

「おやっさんも大変ですね、一文字先輩のサポートは疲れますよ」

一文字は本郷と比べて無茶な行動をすることが多いのを受けてそう言っているのである。

「何言ってやがる、御前が一番無鉄砲だろうが」

「あれ、そうですか。俺は自分では慎重な方だと思っていますけれど」

城は悪戯っぽく笑った。

「フン、いつもそう言いやがる。何かというと無茶しやがった癖に」

「あの頃はね。あいつもいたし」

「ああ、あいつもいたな。確かに」

立花は感慨深げに呟いた。

「そういえば御前そこにあるのは何だ」

立花は城が横に置いている鉢植えを指差した。それは袋で覆われ

ている。
「これですか、花ですよ」
「花、ってえと」
「ええ、百合です」
「・・・・・やっぱりな」
立花にはわかっていた。だがそれを聞いてあらためて頷いた。
「あいつが俺に教えてくれたんですよ、花を通じて」
「だろうな、あいつはそういう奴だ」
「おやっさん、俺はこれから日本に戻ります。最後の戦いの為に」
「丈二や良の助っ人にか」
「それもありますが予感があるんです。日本で何かがあるって」
「予感か」
立花はそれを聞いて口に手を当てて考えた。城の予感はよく当たる。これはライダー全員に言えた。そうしたものがなければ今まで生きてこれなかったからだ。ライダーに求められるのはそうしたものもあるのだ。
「御前がそう言うってことは間違いないだろうな」
「ええ。他のライダー達ももう日本に向かっているようですし」
「他の連中もか。いよいよ何かあるな」
「おやっさんはスペインへ」
「ああ。わしも同じだ。あそこで絶対に何かあるからな」
彼もまた歴戦の戦士である。それだけのものは持っていた。
「茂、日本は御前達に任せた。まあ暫くはバダンも何もせんだろうが」
「はい」
「わしはその間に本郷と隼人を助けて来る。そしてバダンの奴等を一掃してやる」
「頼みましたよ」
城もまた立花を頼りにしていた。彼なくして今まで戦ってはこれなかったからだ。

「任せろ」
立花は笑顔で城と別れた。
「日本で会いましょう」
「待っていろ」
二人はそれで別れた。そしてそれぞれ次の戦場に向かうのであった。
城の手には百合があった。彼はそれを手に最後の戦場に向かうのであった。

永遠の絆　　完

２００４・９・２５

スペインに死すその一

スペインに死す

「ゼネラルシャドウと百目タイタンもか」
死神博士は海が見える古城にて部下達からの報告を聞いていた。
「あれだけの猛者達まで敗れるとはな」
「超電子の力でしょうか」
「違うな」
だが死神博士はそれを否定した。
「彼等が敗れたのは時空破断システムの使い方にあったのだ」
「時空破断システムのですか」
「そうだ。その使い方さえ間違えていなければ勝てただろう」
「そうですか」
「そうだ。私の言葉に間違いはあるか！？」
彼はここでそのスーツにサングラスの部下をジロリ、と見据えた。
「い、いえ」
その部下は慌ててそれを否定した。
「そんなこと滅相もありません。死神博士のお言葉に間違いなぞ」
「そうだ。私の考えることに誤りはない」
彼は言った。
「ショッカーにおいても随一の頭脳だった私にはな」
自負があった。ショッカーの頃から、いやその遥か前から彼には揺るぎない自負があった。己の頭脳に対する絶対的なものが。
「私が為したことは常に完璧でなければならないのだ」
「はい」
彼は完璧主義者であった。どの様な些細なミスも許されなかった。その為絶対的な畏怖と恐怖を同時に持たれていた。部下にとっては実に仕えづらい男であった。

バダンにおいてもそれは変わらない。むしろそれはさらに強まっていた。

そんな彼には誰にも反論はできなかった。反論したからといって何をされるわけでもない。彼はそれ程度量の狭い男ではない。

言えないのだ。そのオーラが他の者を寄せ付けなかった。彼はそれ程までに絶対的な存在であるのだ。

「一文字隼人が来たそうだな」

彼は話題を変えた。

「は、はい」

部下は敬礼をし、姿勢を正して答えた。

「どうやらセヴィーリアに向かっているようです」

「そうか」

彼は窓を見ていた。ガラスに映るその顔がニヤリ、と笑った。

「ならば好都合だ。すぐにセヴィーリアに向かうぞ」

「すぐにですか」

「そうだ。そこであの男を討つ。よいな」

「わかりました」

男は再び敬礼をした。

「ではすぐ準備に取り掛かれ。怪人達も総動員しろ」

「ハッ」

男はすぐにその場から立ち去った。後には死神博士だけが残った。

「一文字隼人か」

彼と一文字は深い因縁があった。

「必ずこの手で倒す。日本と南米の雪辱の為にもな」

彼はショッカーにいた頃スイスにて他を寄せ付けぬ功績をあげた。そしてそれを高く評価され戦死したゾル大佐の後を受け日本支部長に就任したのであった。

「その御言葉は日本征服作戦完了まで保留して頂きたい」

その時彼は首領に対してこう言った。日本と仮面ライダーを攻略する絶対の自信があったからである。

だが彼の作戦と自ら改造手術を施した強力な怪人達は破られていった。そして人口重力装置の争奪戦でダブルライダーに敗北するに及び南米支部に更迭された。その多くは一文字との戦いの敗北によるものであった。

彼にとっては生涯でも最大の屈辱の一つであった。もう一つの屈辱は日本にて本郷猛との戦いに敗れたことであるが。彼にとってダブルライダーは不倶戴天の敵であった。

「まずは一文字だ」

彼は言った。その声に憎悪が篭っている。

「私の手で倒さなければならない、必ずな」

そして窓に背を向けた。まるで悪鬼の様な形相をしていた。

「この時の為に備えていた。私は行く」

彼は前に進んだ。そして部屋の扉を開けた。

「ライダーを倒す為にな」

そして部屋を後にした。彼はこうして戦場に向かっていった。

「フフフ、死神博士が遂に動いたか」

暗闇大使はそれを暗黒の中で聞いていた。

「ハッ、既にセヴィーリアまで移動された模様です」

戦闘員の一人が報告を追え敬礼した。

「面白くなってきたな。確かあの地には仮面ライダー二号が向かっていたな」

「はい」

戦闘員は答えた。

「運命の対決だな、まさしく」

「はい・・・・・・」

戦闘員は力のない声で答えた。

「ん、お主どうやらあまり知らぬようだな」

大使は戦闘員の声のトーンでそれに気付いた。

「申し訳ありません」

彼はうなだれてそれを認めた。

「謝る必要はない。何しろかなり昔のことだ」
大使は彼を慰めるようにして言った。
「一号と二号が伝説とまで言われていたことも知らないのだろう」
「それは本当ですか！？」
これにはその戦闘員も驚いた。何しろ実際に今戦っている敵なのだから。
「ああ、かってはな」
大使は答えた。
「今思えば不思議なことだが」
彼は戦闘員に対し語りはじめた。
「デルザーの頃は伝説とされていたのだ」
「何故でしょうか」
「それは彼等があまりにも強かったからだ」
彼は戦闘員に語った。

スペインに死すその二

「その為一度出会った者は必ず倒されていた。これでは情報が入らず伝説とさえ言われるのも無理はないだろう」
「そうだったのですか。しかし」
「しかし！？」
暗闇大使はその言場に反応した。
「それ程強かったのですか、あの二人は」
「うむ」
彼は頷いた。
「一人一人でもかなりの強さを持つ。今までの無数の戦いがあの二人を作り上げていった」
「技の一号、力の二号ですね」
「よくそう言われるな。それも戦いで身に着けていったのだ」
彼は言った。
「一号は技で、二号は力でショッカーと戦っていった。それは欧州と南米で身に着けたのだ」
「日本ではないのですね」
「そうだ。どちらも死神博士の配下との戦いだったな」
「死神博士と」
「彼の作る改造人間の性能は知っているだろう」
「はい」
バダンにおいては今更言うまでもないことであった。死神博士は改造人間の開発の権威でもあるのだ。
「その強力な改造人間達に対抗する為に力と技を磨いていった。今では二人共両方を身に着けているがな」
「改造手術と特訓で」
「っそれと同じ位の効果が戦いの経験になったのだ。だからこそ彼等は強くなった」

「そうだったのですか。それで伝説と呼ばれるまでに」
「そうだ。だが彼等の力はそれだけではない。ダブルライダーと呼ばれるな」
「はい」
「それは何故だと思う？」
「ショッカーに対し二人で戦ったからでしょうか」
「おおまかな意味では正解だ。だが細かく言うと不正解だ」
「はあ」
戦闘員は言葉の意味がよくわからなかった。思わず首を傾げた。
「まあそういう顔をするな。わしが言いたいのはあの二人の戦い方だ」
「戦い方ですか」
「そうだ。あの二人は元々同じタイプの改造人間だった」
「ショッカーにおいてバッタを基として作られた」
「そうだ。改造された時期こそ異なるがな」
「確か二号は一号を倒す為に作られたのでしたね」
「その通りだ」
本郷は恩師でもある緑川博士により改造手術を受けた。ショッカーはそのデータから一文字を仮面ライダーにしたのだ。目的は本郷猛の打倒であった。
だが脳手術の直前に彼は本郷に救い出された。そして第二の仮面ライダーとして生まれ変わったのだ。
「同じタイプの改造人間だからだけではない。彼等は共に幾多の死闘を潜り抜けてきた」
「無二の盟友なのですね」
「そうだ。だからこそ彼等の動きは合う。そして力を最大限に引き出すのだ」
「互いの力を」
それは二倍しただけに留まらない。何乗にもなり強化されるのだ。
「ダブルライダーの真の力はそこにあるのだ。それにより多くの強

力な怪人達が敗れた」
「ショッカーライダーをはじめとして」
「ショッカーライダーはゲルショッカーの切り札だったのだがな。それでもあの二人には勝てなかった」
「それだけ二人合わさった時の力が強大だということですね」
「一言で言えばそうなる」
大使はその言葉を認めた。
「だからこそ彼等は伝説になった」
「一人一人でも強力だというのに」
「そう、一人一人でもな。彼等はライダー達のリーダーでもある」
これは誰もが認めることであった。仮面ライダー一号と二号、本郷猛と一文字隼人はライダー達をまとめる重要なライダーであった。
「だからこそスペインの戦いは激しいものになるだろう」
「死神博士を以ってしても」
「死神博士だからこそ、だ。彼でもだ」
「そうですか」
「だがかなり面白い戦いになりそうだな」
暗闇大使はそう言うと凄みのある笑みを浮かべた。
「ゆっくりと観させてもらうか」
「はっ！？」
小さい声だったのでこれは戦闘員には聞き取れなかった。
「暗闇大使、今何と」
彼はすぐに聞きなおした。
「何でもない」
だが大使はそれを打ち消した。
「ところで今ライダー達が日本に続々と戻って来ているそうだな」
「はい」
「どうやら決戦の時が近付いてきているようだな」
彼の笑みが凄みのあるものになった。
「その準備にも取り掛かれ。まだ時間はあるがな」

「わかりました」
戦闘員は敬礼をして応えた。
「それで全てが決まる。バダンの世界がな」
「はい」
「よいな、我々は必ず勝つ。それは既に決められたことなのだ」
彼は確固たる自信をもってそう言った。
「行くぞ、勝利は我等と共にある」
「はい」
暗闇大使は戦闘員を連れその部屋を後にした。そして彼もまた戦いに備えるのであった。
一文字隼人は今セヴィーリアの街中にいた。
「中々面白い街だな。美人も多いし」
それが彼のこの街を見た最初の感想であった。
このセヴィーリアはメリメの小説、ビゼーのオペラ『カルメン』の舞台として名高い。自らを自由なジプシーの女と呼ぶ奔放な女性カルメンは生真面目な田舎出身の騎兵伍長ドン＝ホセに惚れる。彼の整った顔が気に入ったのだ。それから話がはじまる。

スペインに死すその三

やがて二人は愛し合うようになる。だがカルメンは自由な女だ。次第にホセに飽き他の男に惚れるようになる。捨てられたホセは彼女に寄りを戻すよう詰め寄る。だがカルメンはそれを断り逆上したホセは彼女を刺殺してしまう。世界各国のオペラハウスで上演されるのであまりにも有名なセヴィーリアを舞台として悲劇である。

カルメンだけでなくこの街は多くのオペラの舞台となっている。ロッシーニの『セヴィーリアの理髪師』。頭の回転の速い散髪屋フィガロが伯爵と元気のいい娘の恋愛を成就させる話である。その続編にあたるのがモーツァルトの『フィガロの結婚』だ。今度はそのフィガロが結婚するのだがそれを巡る一夜のドタバタ劇である。ロッシーニもモーツァルトもボーマルシェ原作のこの作品に素晴らしい音楽を与えている。特にモーツァルトのそれは彼が何故天才とまで呼ばれたかということを雄弁に語っている。

モーツァルトは他にもこの街を舞台とした作品を作曲している。デーモニッシュな魅力を漂わせた『ドン＝ジョバンニ』、奇妙な恋愛劇である『コシ＝ファン＝トゥッテ』、どれもモーツァルトの名作である。端役なし、駄作なしとまで言われる彼の作品においてもとりわけ有名な作品達である。

またこの街はイタリアの作曲家ヴェルディも舞台にしている。不可思議なジプシーの女アズチェーナの復讐とその息子マンリーコと実は彼の兄であるルーナ伯爵の美少女レオノーラを巡る争いを描いた『トロヴァトーレ』。これは炎が支配するヴェルディの作品の中でも最も情熱的であり、かつ最も暗い炎が味わえる傑作である。ヴェルディは男の暗い情念の炎を曲にした男であるがこの作品においてはそれが爆発していた。それが為にこのトロヴァトーレは不滅の名作となっている。

「ロンドンにいた頃は親父やお袋に連れられていたっけ」

ロンドンにもオペラハウスはある。イギリスはどちらかというとオペラの消費地であるが。

「カルメンも何回か観たな。音楽はいい。けれど」

彼は少し首を傾げた。

「ああいったストーリーはなあ。やっぱり明るいのがいいよ」

彼は失恋の話等は好まない。ハッピーエンドの話を好むのだ。

「スペインは陽気な国なんだしそうした音楽を楽しみたいな。とりあえずお昼はフラメンコが聴ける店に行くか」

そう言って市場に向かった。そしてそこで食事を採るのであった。食事は鶏肉のパエリアであった。特によく知られた料理である。スペインの料理は日本のそれよりも多い。これは殆どの国で言えることである。

実は日本人は少食であるらしい。例えばイタリアでパスタだけ食べるので奇妙に思われたりしている。

「俺はそんなことは言われたことはないな」

一文字はわりかし大食な方である。彼やアマゾン、城などはライダーの中では大食の方である。彼等がそれについて言われるといつもこう言う。

「腹が減っては戦ができぬ」

その通りであった。彼等はその激しいエネルギーを養う為にも食べなければならなかった。たとえ改造人間であってもエネルギーは必要なのであった。

「全く飯ばかり食いやがって」

立花は彼等に対しよくこう言った。城には丼一杯の白い御飯と何杯ものラーメンをよくおごった。

「そんなもんでいいのかよ」

「ええ、俺はこれだけで」

こんなやりとりもあった。立花はとりあえず金の心配はなかった。必要とあらば手に持っている技で幾らでも手に入った。

伊達にマスターをしたり本郷達のマシンノメンテナンスをしていた

わけではないのだ。
　風見や純子には河豚をおごったこともある。戦いの間のささやかな贅沢であった。
「おやっさんには食い物のことでも世話になったな」
　一文字もそれは同じであった。彼はそうしたことからもライダー達の父親であったのだ。
　彼は市場を進んでいた。そこでなにやら小柄な男性が店を見て歩いていた。
「ん」
　よく見ればアジア系である。スペイン人はどちらかというと小柄な方である。欧州ではラテン系はそれ程背は高くない。北欧やゲルマン系に比べると小柄だ。小柄といっても日本人と同じ位だが。
「何処の国の人だろう」
　よくいるのは日本人か中国人だ。たまにアジア系アメリカ人だったり韓国人だったりする。大体海外にいるアジア系といえば彼等である。
「お、この魚いいな」
　そうやら店の品物の品定めをしているようだ。言葉は日本語である。
「この声は」
　一文字はその声を聞きすぐに誰だかわかった。見ればそのアジア系の男性は野菜や果物にも目を通してる。
「物価はスペインの方が安いな。まあ東京はちょっと変なんだが」
　彼は赤いパプリカを手にしていた。そしえそれをまじまじと見ながら語っていた。
「まあ日本のやつが決して悪いってわけじゃねえけれどな。ただもう少し安かったらなあ」
　これといって日本を批判したりはしない人物のようだ。日本には他国を引き合いに出して日本を何かと批判する者が多い。物価にしろ食べ物にしろ風習にしろ文化にしろ、だ。

だが彼等を振り返ってみればいい。彼等は日本にいて日本の生活にどっぷりと浸かっている。中には税金逃れの為に海外に移住してそこで日本を批判する輩もいるがこうした連中は論外である。何処ぞの自称美食漫画原作者は生半可で愚劣で浅墓な知識でもって食べ物を騙っているだけに過ぎない。その実は文化や文明を解さない猿に過ぎない。この男は料理はわからない。文化もわからない。七十年代に流行った反文明的思考を今も何一つ変わらずに背負っているだけだ。言うならば原始人である。料理を騙るよりも石斧を持って太鼓を叩いている方が余程似合う。そもそもこの男は口では日本や日本人に謝罪を強要する。しかし本人は贅沢な食事をしている。なおかつテロ支援国家とも癒着している。滑稽な現実がそこにはある。

こうした輩は他にもいる。下品な笑いと英語だけで芸能界に君臨した醜く肥満した老人である。この男はその中途半端な知識と教養をひけらかすのだけが脳であった。そして自分は他の誰よりも偉いと思い上がっていた。

オーストラリアに移住したが何でも日本の危機だと言って選挙に立候補した。当選したがそこで急に辞める。あげくにテロ支援国家により日本国民の拉致は疑問だの徴兵制度が復活するなど寝言を連発した。見事に馬脚を露わした。この男は何の識見も持たなかったのだ。

スペインに死すその四

こうしたことを見てもわかるように他国を引き合いに出して自国を批判したり貶めたりするのは自分が勉強していないからだ。自信がないからだ。批判するのならまず自国のことを学ぶべきだ。そしてそこから何処が悪く、何処がよいか検証する。そしてそれを正していくにはどうすればよいか、それを考えるべきなのである。それが出来ない者は知識人として失格である。当然日本にも悪い点は多々ある。だがそれは全ての国に言えることであるのだ。

光があれば陰がある。そういうことだ。それがわからない者は愚か者と言って過言ではない。

「肉もあるな」

今度は肉屋を見ている。色々と見回っているようだ。

「ふんふん、羊か」

日本ではメジャーとは言い難いが海外ではポピュラーである。魚が主体の日本人ではこれは仕方がない。匂いが苦手という人が多いのだ。

「おやっさん」

一文字はその男の背中から声をかけた。

「お、その声は」

男の方でも声でわかっているようだ。

「おう、意外なところで合ったな」

男は後ろを振り向いてニカッと笑った。やはり立花藤兵衛その人であった。

「意外なところって」

面食らったのは一文字であった。

「まさかこんなところにいるなんて。一体どうしたんですか」

「スペインにいる、って聞いてな。それで来たんだ」

「よくセヴィーリアにいるってわかりましたね」

「本郷に聞いたのさ。あいつなら御前の居場所がわかるからな」
「そうだったのですか」
本郷と一文字は互いの脳波を感じることで互いに何処にいるかがわかるのだ。それも彼等の絆の深さの一つとなっているのだ。
「それでもこんなに早く出会えるとは思わんかったぞ。それもこんなところで」
「俺もビックリしていますよ」
「ははは、実はわしもだ」
二人はそう言って笑い合った。
「そもそもこんなスペインの南の街で日本人が会うことも珍しいからな」
「ええ。確かに」
彼は歩きはじめた。立花もその横にいく。
「案外日本人は少ないんですよね、この街」
「確かにな。皆バルセロナとかに行っちまうからな」
「そういえばそうですね。しかしこの街って結構有名なんですよね」
「フラメンコでか？」
「いえ、オペラで」
「そっちでか」
立花はそれを聞いて意外そうな顔をした。
「わしはオペラはあまり知らないんだ、悪いが」
「そうなんですか」
「どっちかというとフラメンコかな。あれは結構好きだ」
「スペインといえばあれですからね」
「ああ。どっかで見られるかな」
「そうですね」
一文字は立花に問われ辺りを見回した。既に酒場の並ぶ場所に来ている。
見たところ何件かある。だがどれも昼なのでまだ閉まっている。
「夜に行きますか」

「そうだな。酒は夜飲むのがいい」
「ここじゃ違いますけれどね」
欧州では昼からワインを飲むことが多い。水が悪くそうせざるを得ないからだ。
「じゃあまずは宿でも探すか」
「はい」
こうして二人は市場と酒場をあとにした。そして宿を探しに行った。
「そうか、市場にいるか」
死神博士はそれを基地の指令室で聞いていた。
「ハッ、既に我々の存在は察知しているものと思われます」
報告をした傍らに立つ戦闘員が敬礼して答えた。
「そうか」
博士はそれを聞いて頷いた。暗い基地の中で赤い円卓に一人座っている。座っているのは車椅子だ。
「ならばこちらも動くとするか」
彼は顔をいささか俯けたまま言った。
「はい」
戦闘員は頷いた。そして彼の背後に回ろうとする。
「よい」
だが彼はそれを手で制止した。マントが微かに翻る。
「一人で充分だ」
すると車椅子はひとりでに進みだした。誰も手を出していないのに、である。
「行くぞ、他の者にも伝えるがよい」
「わかりました」
彼はその後に従った。
博士が前に来ると扉が開いた。そして彼はそこをくぐる。そこには怪人と戦闘員達が横に整列して並んでいた。
「用意はいいな」

「ハッ」
「既に整っております」
彼等は答えた。
「よし」
彼は進んだ。その後に悪の使徒達が続くのであった。

スペインに死すその五

一文字は夕刻もセヴィーリアの街中を歩いていた。立花は店で酒とフラメンコを楽しんでいる。

「おやっさんも好きだなあ」

彼は思わず苦笑した。立花は実際に歳よりも遥かに活動的な男である。

「まあだからあの歳でバダンと戦えるんだろうけれど」

彼の戦いもまた長かった。ショッカーからデルザーまで多くの組織と戦ってきた。そして今もバダンと戦っている。

一文字も本郷も長い戦いを経ていた。立花はそれとほぼ同じ時間を戦ってきているのだ。

二人はそれを忘れたことはなかった。やはり立花は決して忘れることのできない存在なのだ。

急に雨が降ってきた。激しい雨であった。

「おっとと」

慌てて物陰に入ろうとする。だがその前に一人の男が立ちはだかった。

「ん！？」

その男は急に拳を繰り出して来た。

「ムッ！」

一文字は後ろに反転した。手をつきバク転で態勢を立て直す。そして身構える。その周りを戦闘員達が取り囲んだ。

「バダンか」

「その通り！」

彼等は一斉に斧を投げてきた。しかし一文字はそれを跳んでかわした。

「甘い！」

そしてそのまま姿を隠した。

「クッ、何処だ！」
戦闘員達は辺りを探る。すると上の方から声がした。
「ここだ！」
建物の屋上から声がした。そこにライダーがいた。
赤い拳のライダー、仮面ライダー二号であった。彼は跳躍し戦闘員の一人を蹴りで倒した。
「さあ、次は誰だ」
そして戦闘員達の中に踊り込む。戦闘員達は斧を手に立ち向かうがやはりライダーの敵ではない。為す術もなく倒されていく。
「待て、ライダー二号！」
戦闘員達をあらかた倒したところで何者かの声がした。
「誰だ！」
二号はその声に振り向いた。
「貴様の相手はこの俺がしよう」
ゴッド悪人軍団の策略怪人クモナポレオンであった。彼は右手から蜘蛛の糸を放ってきた。
「キシャーーーーーーッ！」
奇声と共に蜘蛛の糸が飛ぶ。それはライダーの左腕を捉えた。
「ムッ！」
それは完全に絡み付いていた。そして徐々に彼の左腕を締め付けていく。
「これだけではないぞ」
彼はさらに攻撃を続けた。今度は毒蜘蛛を放ってきた。
「フフフフ」
蜘蛛達は二号に近付いてくる。彼はそれから逃れられないように思われた。
「さあ、どうする」
「知れたこと」
二号はそれに対しすぐに言い返した。
「突破するだけだ」

「ほう、どうやってだ」
クモナポレオンはそれを聞き嘲笑した。
「逃げられぬというのに」
「逃げる！？」
「そうだ、俺のこの糸からな」
そう言って二号の左腕を締めつける糸を指差した。
「これか」
二号はそれを無感情に見た。
「そうだ、逃れられるかな、果たして」
彼は自身の糸に絶対の自信を持っていた。だが二号はそれでも尚余裕を隠さなかった。
「この程度」
そしてその糸に右手をかけた。
「ムッ！？」
思いきり引いた。その糸を引き千切ろうというのだ。
「フン、馬鹿なことを」
クモナポレオンはそれを見て更に嘲笑した。
「俺のこの糸は決して切れはしないのだ！」
「それはどうかな！」
二号はさらに力を入れた。すると糸がブチブチ、と激しい音を立てて引き千切られた。
「何っ！」
これにはさしものクモナポレオンも驚愕の色を顔に浮かべた。
「俺が力の二号と呼ばれているのはわかっていた筈だ」
「し、しかし」
それでも自分の糸が敗れるとは夢にも思わなかったのだ。
怪人はたじろいだ。それが命取りとなった。
「今だ！」
二号は前に出た。そして拳を繰り出す。
「グフッ！」

それは怪人の腹を撃った。それで怯んだところにさらに攻撃を仕掛ける。
「トオッ！」
怪人の身体を掴んだ。そしてそのまま上に跳ぶ。
「喰らえ！」
怪人の頭を両足で抱え込んだ。そしてそれを地面に叩き付ける。
「ライダァーーーヘッドクラッシャーーーーッ！」
怪人は脳天を地面に叩き付けられた。すぐに跳び退いた二号を追う様に立ち上がるがそれが限界であった。
クモナポレオンは倒れた。そしてそのまま爆死して果てた。
「死んだか」
二号はその爆発を見送って呟いた。だがそこに新たな敵が来た。
「ミミンガーーーーーーッ！」
デストロンの熱風怪人ヒーターゼミであった。怪人はまず両腕の機関砲を放ってきた。
「ムッ！」
二号はそれを左に動いてかわした。そしてすぐに間合いを詰めていく。
「来たな」
怪人はそれを読んでいた。すぐに機関砲を引っ込める。
そして両目から熱風を出す。それで二号を焼き殺すつもりだ。
「死ねぇ、ライダー二号！」
だが二号はそれに対して身を屈めた。そして柔道でいう大外刈りを仕掛けた。
「ウオッ！」
怪人はそれでバランスを崩した。二号はそこに間髪入れず肘を入れた。
さらに攻撃を続ける。身体を掴んで投げた。怪人は地面に叩き付けられた。
「まだだ！」

しかしそれでも立ち上がってきた。だがその時既に二号は跳んでいた。

スペインに死すその六

「トゥッ！」
空中で激しく回転する。そして蹴りを放ってきた。
「ライダァーーー回転キィーーーーーック！」
胸を打たれた怪人は大きく吹き飛ばされた。そしてその場で爆死して果てた。
「これで終わりか」
二号は辺りを見回した。残るは怪人の残骸と戦闘員達の屍ばかりである。
「フン、見事にやってくれたものだ」
ここで一人の大柄な老人が姿を現わしてきた。
「来たな」
二号は彼に目を向けて言った。
「死神博士」
「如何にも」
死神博士は二号を見据えたまま言った。
「このセヴィーリアは貴様の故郷だったな」
「そうだ」
彼はそれを認めた。
「その故郷で貴様は何をするつもりだ」
「何をするつもり、か」
彼はそれを聞き不敵に笑った。
「我等が為すことといえば一つしかなかろう」
「むっ」
二号は彼の言葉にただならぬ殺気を感じた。そして再び構えをとった。
「案ずるな。今は戦わぬ」
博士は二号を制して言った。

「貴様には一つ教えておくことがある。だからここに来たのだ」
「何だ」
だが油断はできない。二号は構えをとったまま死神博士に問うた。
「この街は星屑と暗闇により崩壊する。それだけだ」
「星屑と暗闇」
「そうだ、これだけ言えば貴様にはわかるだろう」
「・・・・・・・・・」
星屑はわかった。彼も博士の力はよくわかっていた。
「そして暗闇というのはあれか」
各地でのライダー達の戦いのことは聞いている。彼はそれを問うた。
「答えるつもりはない」
それが何にも増す答えであった。
「私から言うことはそれだけだ」
彼はそう言うと踵を返した。そしてそこから去ろうとする。
「待て！」
二号は彼を追おうとする。だがその前に一体の怪人が姿を現わした。
「ガブガブガブゥーーーーーッ！」
ショッカーの殺戮怪人ギリザメスであった。怪人は出て来るなり左腕の刃を振るってきた。
「クッ！」
博士を追うどころではなかった。まずはこの怪人を倒さなければならなかった。
「それにしてもこいつが出て来るとは」
二号は怪人の攻撃をかわしながら思った。
「死神博士の正体はやはり」
博士の影は雨の為日が翳り見えない。だがその足下は雨で水溜りとなっていた。
そこに彼の姿が映っていた。白い悪魔の様な姿であった。

「・・・・・やはりな」
二号はそれを見て妙に納得した。そしてギリザメスに顔を戻した。
「来い！」
「ガブガブブーーーーーーッ！」
怪人の攻撃は続く。頭部の鋸も使ってきた。
「フンッ！」
それをかわす。そして逆に怪人の腹を膝で蹴った。
「ゲフッ！」
蹴りを受けて怪人は怯んだ。そこに立て続けに攻撃を仕掛ける。
拳を繰り出す。その連打を受けてさしものギリザメスも弱ってきた。
「今だ！」
怪人を掴んだ。そして空中に跳ぶ。
「ライダァーーーー空中ハンマァーーーーッ！」
空中でジャイアントスイングを仕掛ける。そして怪人を渾身の力で放り投げた。
「ガブーーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びをあげながら地面に叩き付けられた。そして無残に爆死した。
「死神博士、何処だ！」
二号は着地するとすぐに死神博士を探した。だが彼の姿は既にそこにはなかった。
「消えたか」
その通りであった。彼は二号が怪人と戦っている間に既に姿を消していた。
「だが次は逃さん」
彼も諦めるわけにはいかなかった。死神博士はショッカーの頃から悪魔の心を持つ天才科学者として知られている危険な男だからだ。
彼は雨の中決意した。この街で死神博士との長年の戦いを終わらせることを。

「死神博士よ」
基地で首領の声が木霊する。
「仮面ライダー二号との初戦はどうであった」
彼は前に控える死神博士に語り掛けていた。
「ハッ」
彼は壁にあるバダンの紋章の前に立っていた。首領の声はそこから聞こえていた。
「やはり手強い相手です。ですが今のあの男の戦闘能力はよくわかりました」
「フフフ、そうか」
「私に全てお任せ下さい。必ずやあの男をこのセヴィーリア共々灰燼に帰して差し上げましょう」
「期待してよいな」
「必ずや」
博士はその言葉に対し不敵に笑って答えた。
「この死神の名にかけて」
「そうか」
首領はその声に満足したようであった。
「ではこの作戦は貴様に全て委任するとしよう。報告は全てが終わってからでよい」
「ハッ」
彼は頭を垂れた。
「朗報を期待している。それでは私はここから去るとしよう」
「御機嫌よう」
首領の気配が消えた。そしてあとには死神博士だけが残った。

スペインに死すその七

「誰かいるか」
彼は前を向いたまま周りに問うた。
「はっつ、ここに」
すぐさま数人の戦闘員達が姿を現わした。
「作戦の第二段だ。用意はいいな」
「わかりました」
その戦闘員はそれを受けて敬礼した。
「すぐに送れ。そしてライダーを倒せ」
「ハッ！」
戦闘員達は敬礼した。そして一斉にその場から離れた。
「さあ一文字隼人、いや仮面ライダー二号よ」
やはり彼はそのままの姿勢であった。そして言った。
「貴様の力が勝つか、私の頭脳が勝つか勝負だ」
彼は勝負に出ていた。その目が強く光った。
二号が雨の中の戦いを終えた翌日セヴィーリアに不穏な空気が流れていた。
「テロですって！？」
一文字はホテルで朝食の後立花に問うた。
「ああ、何でも駅の方らしい。どうやらかなりの死者が出たようだ」
彼はテレビに映るニュースを見ながら一文字に話した。テレビでは傷を負った者達が担架で担ぎ出されている。まだ煙や炎が見える。
「みたいですね」
一文字は南米で戦っていた経験からスペイン語がわかる。放送によると夥しい犠牲者が報告されている。
映像はさらに続く。犠牲者達が次々に運び出されていた。
「・・・・・・・・・」
彼はそれを見ながら考えていた。そして立花に言った。

「ちょっと行って来ます」
「駅にか」
「はい、ちょっと匂いますんで」
「バダンだな」
立花の問いに対して無言で頷いた。
「よしわかった、わしも行こう」
「おやっさんもですか」
「ああ、すぐに行くぞ」
「はい」
こうして逆に立花に急かされるように駅に向かった。そこではまだ救助活動が行なわれていた。
「酷いな」
駅は完全に崩壊していた。壁は無残に砕けその下からは犠牲者の血に塗れた手が姿を出していた。
「それがテロです」
一文字は苦渋に満ちた声で言った。
「自分達の為なら他の者がどうなろうと知ったことじゃない。だからこんなことも平気でするんです」
「そうだな」
それは立花も同意だった。
「主張があるのならそれを堂々と言えばいい。戦うのなら権力者に対してのみ戦えばいい」
握り締める拳に力がこもっていた。
「俺はテロリストも許すことができない。しかしこれは奴等の仕業じゃない」
「何故だ」
「この爆発の規模を見て下さい」
見ればかなりの広範囲に及んでいた。
「ここまでの威力を持つ爆弾は普通のテロリスト達に持てるものじゃない」

「ということはだ」
立花もそれを聞いてすぐに悟った。
「ええ、バダンです。間違いありません」
「おい、隼人」
「わかってますよ、おやっさん」
一文字は頷いた。そしてすぐに動いた。
破壊し尽くされた駅の中に入って行く。そしてその中で走りながら変身した。あまりもの速さの為誰の目にも止まることはなかった。
「！？」
ライダーの動きは速い。その為その動きは人の目に止まることはないのだ。
彼はすぐに物陰に消えた。そしてOシグナルに集中した。
「ここにまだいる筈だ」
シグナルが点滅した。彼の予想が当たった。
「では何処だ」
その時無気味な叫び声が聞こえてきた。
「ビラビラビラビラーーーーーッ！」
「言っているそばから来たか！」
二号はすぐに物陰から飛び出た。見れば廃墟の中に一体の無気味な怪人が立っていた。
ネオショッカーの毒液怪人ヒルビランであった。怪人は負傷者を救助する人々に襲い掛かろうとしていた。
「無駄なことは止めろ、そいつ等は死ぬ運命にあるのだ！」
怪人の後ろには戦闘員達もいた。何と戦車まである。
「化け物が出て来たぞ！」
「戦車まである！」
人々は口々にそう叫び逃げようとする。そんな彼等に戦闘員達が襲い掛かる。
「そうはさせるか！」
立花がその前に立ち塞がる。そして戦闘員達を倒していく。

だが多勢に無勢だ。その上敵には戦車まであるのだ。
戦車が機銃を掃射した。それは立花の足下を襲った。
「うわっ！」
足をバタバタと動かして何とかそれをやりすごす。だがそれで劣勢は明らかとなった。
「無駄なことを」
ヒルビランは動きを止めた立花に対して言った。
「貴様一人でどうでもできる筈がなかろう」
「言ってくれるな、おい」
彼はその言葉に対し逆にくってかかった。
「貴様等なんぞ怖くとも何ともないぞ」
「相変わらず強気だな」
「わしは貴様等なんぞに屈したりはせん、それはわかっているだろう」
「フン、確かにな」
バダンの方もそれは嫌という程わかっていた。
「だがこれには勝てまい」
怪人の言葉を合図として戦車が砲身を立花に向けてきた。
「さ、、どうする」
「こうするのさ」
不意に何処からか声がした。

スペインに死すその八

「ムッ！？」
ヒルビランがその言葉に顔を向けた時には声の主は跳んでいた。
そして戦車に蹴りを入れた。
「トォッ！」
その蹴りで戦車は完全に戦闘力を喪失した。そして間髪入れずその戦車を担ぎ上げた。
「ウオオオオオオッ！」
戦車を空中に放り投げる。既に大破していた戦車は空中で爆発四散した。
「やはりいたか」
「当然だ、既に貴様の配下の者達は全員俺が倒したぞ」
戦車を破壊した二号が彼の前に出て言った。見れば周りの戦闘員達は二号の言葉通り全員倒れ伏している。
「クッ、何時の間に・・・・・・」
「ライダーのスピードを甘く見たな。ライダーの力はパワーと技だけじゃない」
「ぬかったわ」
ヒルビランはそれを聞き悔しげな言葉を漏らした。
「あと貴様に聞きたいことがある」
「何だ」
怪人は二号を睨みつけた。
「この駅のテロは貴様の仕業か」
「だとしたらどうする」
怪人はそれを認めた。否定する必要も意思もなかったからだ。
「そうか」
二号はそれを静かに聞いていた。そしてゆっくりと構えをとった。
「許さん、貴様だけは何があろうと倒す！」

構えをとった。いつもの構えとは違う。ライダーファイトだ。
変身の時の最後の構えだ。左腕を肩の高さで直角に上に向ける。右腕はそれに合わせるように胸に垂直にする。肘はやはり直角に曲げている。両手は拳だ。
「許さんか」
ヒルビランはそれを聞き嘲笑の声を漏らした。
「戯れ言を。バダンにとっては不要な存在を消したに過ぎんというのに」
「不要な存在だと」
二号はそれを聞きさらに激昂した。
「そうだ、どのみちこの者達は我等が世界を掌握した時に粛清されるのだ。ならば今のうちに少しでも減らしておいて損はあるまい」
「人の命を何だと思っている！人の未来を」
「そんなものは知らん。俺達にとっては一人一人の命なぞその辺りの石と同じものだ。それ位わかっていよう」
「ぬううう」
それはわかっていた。ショッカー以来変わることのない思想であった。その思想が為にライダーは彼等と戦っているのだ。
「それ以上言う必要はない。仮面ライダー二号よ」
怪人は話を打ち切ると構えをとった。
「貴様にはここで死んでもらう。喰らえ！」
そう言うと両手を振り回した。そして小型の蛭を放ってきた。
「ムッ！」
それは二号の身体にへばり付いた。そして血を吸っていく。
「フフフ、その蛭からは逃れられんぞ」
ヒルビランはそれを見て勝ち誇った笑みを浮かべた。
「二号ライダーよ、そのまま全身の血を吸われて死ぬがいい」
蛭は凄まじい勢いで二号の血を吸っていく。そしてその身体を急激に膨張させていく。
かに見えた。だがそれは違っていた。

蛭はまったく膨らまなかった。そして二号の手で呆気なく取り払われていく。
「何ッ！？」
これに驚いたのはヒルビランであった。彼の切り札が全く通用しないから当然であった。
「これはどういうことだ」
「ヒルビラン、貴様はライダーのことを何も知らないようだな」
「それはどういう意味だ」
彼にはその言葉の意味がわからなかった。ライダーのことならばくまなく研究した筈だからだ。
「俺は全身を瞬時に硬化させることができる。それを知らないわけではあるまい」
「ということは」
「そうだ、それにより蛭を防いだのだ。迂闊だったな」
「何と・・・・・・」
彼はそれを聞き再び口惜しそうな声を漏らした。
「まさかそれをここで使うとは」
それは彼も知らないわけではなかった。だがこの様な使い方があるとは夢にも思わなかった。
「話は終わりだ」
二号は蛭を全て取り払うと怪人に対して言った。
「貴様だけは許さん！」
そして前に跳んだ。怪人の身体を掴んだ。
「トォッ！」
空中に高く放り投げた。そして自身も跳んだ。
壁を蹴る。ヒルビランに破壊された駅の残された壁だ。
「貴様に殺された多くの罪のない人達の恨みだ！」
二号は壁を蹴りながら叫んだ。その足に多くの人々の恨みと悲しみを宿らせて。
「ライダァーーーーー反転キィーーーーーーック！」

これもまた一号の技であった。再改造と特訓により身に着けたのである。

空中にある怪人を蹴った。そしてそのまま吹き飛ばした。

ヒルビランは空中に吹き飛ばされた。そしてそこで先程の戦車と同じように爆発した。

「仇はとれただろうか」

二号は着地して呟いた。怪人を倒したところで犠牲者は帰っては来ない。しかし。

悪は倒した。人々の仇は取ったと言えば取ったことになる。

「だが」

やはり二号は釈然としなかった。彼は死者を甦らすことはできないのだ。

彼は立花のところに向かった。そして彼と共に生存者の救助に当たった。

翌日二人は街をパトロールしていた。昨日のことがあり警戒しているのだ。

「おやっさん、また派手なジープですね」

一文字は隣でジープを駆る立花に対して言った。

「おかしいか、わしは気に入っているんだが」

このジープは彼の愛車であった。かってブラックサタン、デルザーと戦っていた時以来のものだ。

「いえ、中々似合ってますよ」

「だったらいいがな。茂には最初結構冷やかされたもんだ」

「あいつもかなり派手ですけれどね」

「御前もそう思うか」

「ええ」

城の派手好きはライダー達の間でも有名であった。薔薇の刺繍の入ったジーンズなぞ身に着けるのは彼位だと言ってよかった。

スペインに死すその九

「まああいつにはあれが似合ってますけれどね」
「確かにな。不思議な位にな」
それは認めた。城はそれが似合う不思議な男だった。
「そういう御前の服も結構独特だな」
「そうですか」
一文字はイギリスの服を着ることが多い。やはり幼い頃のロンドンでの暮らしからか。
「まあどのライダーも皆それぞれ服には凝ってるな」
「アマゾンはどうですか」
「それがあいつもあれで結構洒落者だ」
「本当ですか。まあ普段の服も似合っていますけれどね」
アマゾンは密林にいた時からの服であった。それが野生児である彼にはピッタリの服であった。
「一度白いスーツに身を包んでいたなあ」
「へえ」
「ガランダーを倒して日本を後にする時にな。まあすぐにあの服に戻ったが」
「そうだったんですか」
「まあ皆それぞれの服を着ていいさ。それがライダーの個性を現しているしな」
「確かに」
十人のライダーはそれぞれ異なる能力、個性、戦い方を持っている。それが服装にも表れているのだ。
一文字と本郷ですらその人格や戦い方は全く異なる。だからこそ彼等は無二の戦友であり、同志であり続けていると言っても過言ではない。
人にはそれぞれ個性がある。改造人間であるライダー達も。だが

バダンはそれを認めないのだ。
「だからこそ俺達は奴等を許せない」
一文字、いやライダー達はこう思う時がある。バダンが求めているのは機械なのだ。人間ではないのだ。
その考えから改造人間が生まれた。彼等はあくまで人はものと考えているのだ。
だからこそ平然と殺すことが出来る。処分することが出来る。何とも思っていないからだ。
ライダー達はその考えを許すことが出来ない。ライダーとバダンはそうした意味でも決して交わることのない関係にあると言ってよい。
立花もそうであった。彼はかって七人のライダー達と共に戦った。いずれも個性豊かな者達であった。彼はその個性を決して消そうとしなかった。
むしろその個性を伸ばした。それがライダー達の成長に繋がっていったのだ。
彼はライダーを育てた。彼なくしてライダー達は悪に勝つことは出来なかったのだ。
「おやっさん」
一文字は立花に話しかけた。
「何だ」
立花は運転しながら彼に応えた。
「これが終わったら皆で遊びに行きませんか」
「いいな。何処へ行く」
「そうですね」
一文字は暫し考え込んだ。
「富士山でも行きますか。それで皆で乾杯しましょう」
「いいな、この戦いが終わったらな」
「ええ、一杯おごりますよ」
「楽しみにしているぞ」

「はい」
二人はこんなやりとりを続けながらセヴィーリアの街をパトロールしていた。その日は何事もなかった。
「何もなかったな」
二人はホテルに戻って一息ついた。
「俺達を警戒しているんでしょう。すぐにまた動きだしますよ」
「そうだろうな」
彼もバダンのやり口はよくわかっていた。
「今夜も危ないな」
「はい」
二人は夕食をとりとりあえずはベッドに入った。だが一文字は一人ベッドから這い出た。
そして部屋を後にする。立花は起こさず一人で出た。
ライダーに変身する。そして夜の街を駆けて行った。
闘技場の側に来た。そこでふとOシグナルが点滅した。
「ムッ」
闘技場の中からだ。それを察した彼は闇に紛れるようにして闘技場の中に入った。
闘技場の中心で何者かが蠢いていた。見れば戦闘員達である。
「どうだ、作業は進んでいるか」
それを指揮する影があった。ドグマの蟷螂怪人カマギリガンであった。
「ハッ、全て順調であります」
戦闘員の一人がそれに対して敬礼で返した。
「うむ、ならばよい」
カマギリガンはそれを聞き満足したように頷いた。
「早く済ませなければな。二号ライダーに見つかったりしたら大変だ」
「そんなに大変か」
後ろから声がした。

「当然だ、奴は手強い。こうしたことは見つからないうちに済ませるのが一番だ」
「そうか、確かにな」
「わかったら貴様も早く貴様の部署に行け。客席にも仕掛ける予定だろうが」
「そうだったのか」
「おい、とぼけるな」
カマギリガンはそれを聞いて声を荒だたせた。
「貴様の仕事は死神博士からお聞きしているだろう、そんなことを言っているとあの方に何をされるかわからんぞ」
「その心配はない」
「何故だ」
怪人は次第に苛立ちを感じていた。
「俺が貴様等の計画を全て叩き潰すからだ」
「何ッ！」
怪人はそれを聞いて後ろを振り向いた。振り向き様に拳が来た。
「グハッ！」
それを頬に受けたカマギリガンは吹き飛んだ。そして闘技場の土の上に叩き付けられた。
「貴様は」
立ち上がりながら拳の主を見る。それは赤い拳を闇の中に浮かび上がらせていた。
「言わないとわからないか」
二号は拳を構えなおして言った。
「クッ」
カマギリガンは声に悔しさを滲ませながら立ち上がった。
「俺を甘く見るな」
彼は両手に持つ鎌を投げてきた。そしてそれで二号を両断しようとする。
だが彼はそれを素早い身のこなしでかわした。夜とはいえ動きは

素早い。

スペインに死すその十

「おのれ！」
彼は腕をサッと上げた。それによりそれまで左右に散っていた戦闘員達が動いた。
「やれい！」
「イィーーーーーッ！」
彼等は奇声と共に二号に襲い掛かろうとする。だがそこに誰かが来た。
それは一台のバイクであった。颯爽と闘技場を駆けて来た。
「誰だっ！」
バイクの主は答えない。そのかわりにライダーに襲い掛かろうとしていた戦闘員達をバイクで一掃した。
「ライダー、助けに来たぞ！」
バイクの主がヘルメットの中から叫んだ。
「その声は！」
二号はその声に聞き覚えがあった。
「おう、俺だ！」
彼はヘルメットを取った。それはライダー達の掛け替えのない盟友であった。
「滝、どうしてここに！」
「おっと、バダンのあるところライダーありだろ」
滝は悪戯っぽく笑って言った。
「じゃあ俺もいるのさ。ライダーと一緒に戦うのが俺の仕事だからな」
彼はインターポールの捜査網によりバダンの動向を掴んでいたのだ。そしてこのセヴィーリアに来たのだ。
彼はバイクから飛び降りた。そして二号の横に来た。
「戦闘員はいつも通り俺に任せてくれ」

「わかった」
「御前は怪人をやれ、いいな」
「よし！」
二号は頷くとすぐに動いた。カマギリガンに飛び掛かった。
「行くぞ！」
「チッ、小癪な！」
怪人は両手の鎌を振るってきた。二号はそれをかわしつつ間合いを詰めて来た。
「おのれ、何とすばしっこい」
「ライダーの武器はパワーだけじゃないのがよくわかるだろう」
見れば摺り足で動いている。武道の達人である彼ならではの技だ。
最小限の動きで攻撃をかわしつつ間合いを詰めた。そしてその身体を掴んだ。
「喰らえっ！」
そのまま投げた。柔道でいる肩車だ。
「グフッ！」
肺から息が吐き出た。肋骨が砕ける音がした。
それでも立ち上がろうとする。だがその時には二号は既に空を跳んでいた。
「受けてみろ！」
彼は攻撃態勢に入っていた。
「ライダァーーーーパァーーーーンチッ！」
そして拳を繰り出した。それで怪人を撃った。
カマギリガンは後ろに吹き飛んだ。そして闘技場の中央で倒れ爆死して果てた。
「終わったか」
ライダーのもとへ戦闘員達を倒し終えた滝が来た。
「いや、まだだ」
だが二号はそれに対し首を横に振った。
「今の怪人の話だと観客席にも向かったらしい。まだここにいる筈

だ」
「その通り」
そこで何者かの声がした。
「よくもカマギリガンを倒してくれたな」
怪人が夜の闇の中から姿を現わした。
「仇はとらせてもらうぞ」
「貴様は」
二号は彼に名を問うた。
「知りたいか」
怪人は不敵な声で言った。
「まあよい。どのみち死ぬ身だ。教えてやろう」
怪人はそう言うとその威容な姿を現わした。
「ゴッドの地獄怪人死神クロノス。よく覚えておくがいい」
「死神クロノスか」
「そうだ。俺のこの大鎌、受けて地獄に行くがいい」
怪人は手に持つ巨大な鎌で二号を指し示しつつ言った。
「死ねい、仮面ライダー二号よ！」
鎌に炎を宿らせた。そしてそれで断ち切らんとする。
しかし二号はそれをかわした。後ろに跳び退く。
「今のをかわすとはな。噂通りのことはある」
二号はそれには答えなかった。
「だがこれはどうだ」
怪人はさらに攻撃を繰り出してきた。それで二号を両断せんとする。
しかし二号はフットワークだけでそれをかわす。焦っているところはなかった。
「落ち着いているな」
「当然だ。この程度で」
彼は冷静にその鎌の動きを見ていた。そしてそれから目を離さなかった。

死神クロノスは鎌を繰り出し続ける。二号はその軌跡を見ていた。
「見切った！」
すぐに動いた。斬り掛かって来るその刃身を蹴った。
「ウオッ！」
鎌は回転しながら天を舞う。炎が回転している様であった。
地に落ちた。そして闘技場に突き刺さった。
「おのれ」
怪人は呪詛の声を漏らした。二号はその間に一気に間合いを詰めた。
「炎を宿らせたのが貴様の敗因だ」
「そういうことだ！？」
「この闇の中に炎はよく映える」
二号は怪人の腹に掌底を浴びせながら言った。
「グフッ！」
それを受けた怪人は口から血を噴き出した。
「ならば見切るのは実にたやすいのだ」
「クッ、そうであったか」
二号は怪人の身体を掴んだ。
「この死神クロノス一生の不覚」
「時と場所を選ぶべきだったな」
彼は最後の言葉を漏らした。二号は怪人を放り投げた。
「ライダーーーー投げ！」
ライダーの基本的な必殺技であった。それで怪人を思いきり投げた。
怪人は闘技場のフェンスに叩き付けられた。そして崩れ落ちそのまま爆発した。
「これで終わりだ」
二号は闇の中のその爆発を見届けて言った。

スペインに死すその十一

「やっとか」
「ああ、後はこの場所を調べよう。まだ爆弾が残っているかも知れない」
「おお」
二人は爆弾の回収に当たった。観客席のそれを見つけると宙に放り投げ処分した。そしてバダンの邪な行動を見事阻止したのであった。
死神博士はその一連の戦いを地下のモニターを通じて見ていた。
「やりおるな、やはり」
彼は瞬き一つせずそれを見ていた。車椅子に座りながらである。
「並の怪人では相手にならぬか。ではいよいよ私が動く時だな」
そう言って立ち上がった。
ベルを鳴らす。そして戦闘員達を集めた。
「これで全てか」
「ハッ」
見ればかなりの数がいる。おそらくこの基地にいる全ての戦闘員であろう。
「よし。ではかねてよりの最後の作戦を発動する」
「遂にですか」
戦闘員達はその言葉にざわめきだった。
「うむ。怪人達は全て倒された。最早私が行くしかあの男を倒す方法はない」
「わかりました」
戦闘員達は皆動作を合わせたかの様に首を縦に頷いた。
博士は車椅子から立った。そして今まで戦闘員達に背を向けていたが彼等に向き直った。
「行くぞ。セヴィーリアを死の街に変える」

「ハッ」
彼等は敬礼した。そして死神博士に続いて出撃していった。
こうして彼等は基地を後にした。仮面ライダー二号の首を挙げるまでは決して帰るつもりはなかった。
数日後セヴィーリアに戦闘員達が次々と姿を現わした。そして街に襲撃を仕掛けて来た。
「また来たか！」
二号はニューサイクロン改に乗り出撃した。立花はジープで、滝はバイクでそれぞれ後に続く。
戦闘員達は広場で市民達に攻撃を仕掛けている。皆手に刀や槍を持っている。
「逃げろ！」
市民達は彼等を見て必死に逃げ惑う。戦闘員達は武器を手に彼等を追う。
「殺せ、一人も逃がすな！」
戦闘員達の殺気走った声が飛ぶ。そして市民達を追い詰めていく。だがそこに銀のマシンがやって来た。今まさに刀を振り下ろさんとする戦闘員を吹き飛ばした。
「そうはさせるか！」
二号はマシンから刃の翼を出し、運転を続けながら叫んだ。そしてそのまま戦闘員達に突入して行く。
マシンだけで戦闘員達を倒して行く。そしてすぐに彼等を一掃した。
「終わったか」
見れば他の戦闘員達も滝や立花に倒されていっている。だがそれで終わりではなかった。
最後の戦闘員を倒し終えた滝の携帯に電話が入った。
「はい」
それは現地の警察からであった。話を聞く滝の顔がみるみる強張っていく。

「・・・・・わかりました」
滝は頷くと電話を切った。そして二号と立花に対して言った。
「新手だ。今度は市場だ」
「わかった」
二人はそれに頷き戦場に向かった。
市場でもやはり戦闘員達が暴れていた。武器を手に襲い掛かろうとしている。警官達が彼等と戦っていた。
「性懲りもなく！」
三人は変身を解いていた一文字を先頭に警官達の助っ人に入った。そして戦闘員達を次々と倒していく。
警官達の力もあり市場の戦闘員達も全て倒した。警官達が彼等のところにやって来た。
「有り難うございます、おかげで助かりました」
「いえ、それ程のことは」
三人は少し照れ臭そうにそう言った。礼を言われる様なことはしていないと言いたげであった。
それも当然であった。彼等はバダンと戦うことが仕事なのだから。
「それにしてもこの連中は一体何者ですか？見たところテロリストの様ですが」
警官達の先頭に立つ背広の男が一文字に問うた。どうやら刑事の様だ。
「まあそんなところです」
一文字はあえてそれをはぐらかして答えた。バダンのことを普通の者に教えたくはなかった。混乱が起こりかねないからだ。
「実は俺達はインターポールの者でして」
滝が身分証明書を見せながらその刑事に説明した。
「この連中を追っているんです。それでここに来ました。そちらの署長から連絡を受けて」
先程の滝への電話が署長からのものであったようだ。

スペインに死すその十二

「おお、そうだったのですか」
「はい。この連中は世界的なテロリストでしてね。このセヴィーリアに大勢来ていると聞いてここに来たんです」
「この街にですか」
「はい」
三人は深刻な表情で頷いた。
「ではこの前の駅での爆発事故も」
「そうです」
一文字が答えた。
「全てこの連中の仕業です」
「何という連中だ」
「それがテロリストですよ。目的の為ならどのようなこともする。だからこそテロリストなんです」
「全くです。この連中だけは許してはならない」
刑事は顔を歪めて強い声でそう言った。どうやらテロリストを激しく憎んでいる様だ。
「しかしインターポールの人がいるとは心強い。宜しければ協力して頂けますか」
「喜んで」
滝は答えた。そして彼と刑事は固く手を握り合った。
三人は署に向かおうとした。とりあえず詳しい話をする為だ。だがそこにまた電話が入った。
「またか」
滝は電話に出た。そして苦い声で一文字と立花に言った。
「今度は教会らしいぞ」
「カテドラルですね」
ここで刑事が言った。

「ここからすぐです。気をつけて入って下さい。すぐに我々も向かいます」

彼等にはまだここでやらなければならないことがあった。まだ残党がいるかも知れないからだ。

「わかりました」

一文字達は頷いた。そしてすぐにその場を立った。

「すぐに行きますから、お願いします」

「はい！」

こうして三人はカテドラルに向かった。

カテドラルは欧州で三番目に大きな寺院である。コロンブスの墓があることでも有名だ。

スペインは欧州の中でも特にカトリックの勢力が強いことで知られている。ハプスブルグ家が長い間王であったことも関係しているがこれにはスペインの歴史が深く関わっていた。

スペインはかってはイスラムの勢力圏であった。その名残は今でも各地にある。

それに対してキリスト教世界は反撃に出た。所謂レコンキスタである。

この旗印となったのがカトリックであった。イスラムに対抗する為にそれは至極当然のことであった。これを通じてスペインでのカトリックへの信仰は深いものとなっていた。

これはスペインが世界に進出する時でも重要な役割を果した。彼等は神父と共に世界へ出て行ったのだ。

そして各地で布教した。その血生臭い歴史はつとに知られている。だがスペインの統治は実際はまだ緩やかであった。後のイギリスのインド支配に比べると遥かにましであった。

今もスペインではカトリックの信仰は深い。ローマ＝カトリック教会のお膝元であるイタリアよりも深い程だとも言われている。

この寺院もそうした歴史を見てきている。歴史の生き証人でもあるのだ。今その寺院に悪しき者達が来ていた。

「壊せ！全て壊すのだ！」
戦闘員達がいた。既に寺院の中に侵入してきていた。
「この跡地にバダンの基地を作るのだ！そして偉大なる我等は首領をお迎えしろ！」
彼等は口々に叫んでいた。そして抵抗する僧侶や観光客に対して容赦なく攻撃を加える。
だが彼等も負けてはいない。手に得物を持ち、そうでない者は素手て抵抗していた。
僧侶達は古い倉庫から様々な武器を取り出していた。教会にも武器はある。彼等は刃物を持つことは許されていなかったが棍棒の類は許されていたのだ。その中にはかなり物騒なものもある。
「退きなさい、神のおわす場所を汚すことは許しませんよ！」
彼等はそれを手にバダンと戦っていた。如何に彼等といえど寺院を汚すことは許せなかったのだ。
「フン、神が何だ！」
バダンは神を信じてはいない。少なくともキリスト教の神は。
彼等にとって神とは首領のみである。他には何もいないのだ。
だからこそこの寺院を破壊しようと何とも思わなかった。当然僧侶達を攻撃するのにも躊躇いはなかった。
「死ね！」
そう叫び攻撃を続ける。だが僧侶達も必死なので中々倒せない。
両者は何時しか寺院の中で睨み合うこととなった。
「クソッ、しぶとい奴等だ」
通路にバリケードまで出来ていた。一方には戦闘員、もう一方には僧侶と観光客達がいる。両者はそれで身を守りながら激しく睨み合っていた。
「だがそれもこれまでだ」
戦闘員の一人が言った。
「もうすぐあの方が来られる。そうすればこんな連中」
彼は笑った。そして攻勢の準備に入った。

だがそれは出来なかった。突如僧侶達のところから一人の男が飛び出して来たのだ。

「何ッ！」

それは一文字であった。彼は戦闘員達のバリケードを叩き潰すとその中に踊り込んできた。

その後に滝と立花が続く。三人はそのまま戦闘員達を次々と倒していく。

「何故貴様等がここに」

「俺達の情報網を甘く見ていたな。警察から聞いたのさ」

一文字は戦闘員の一人を手刀で倒しながら言った。

「貴様等の行動は全てわかる運命になっている。諦めるんだな」

「フン、戯れ言を。その言葉地獄で後悔させてやる！」

だが形勢が変わったのは明らかだった。三人は次第に戦闘員達を押していく。

その後ろから僧侶や観光客が続く。そして警官達もやって来た。

バダンの者達は寺院の中から追い出された。そして外の庭園に追い詰められていく。

そこで一人残らず倒された。やはり一文字達が来たことが大きかった。

「これで終わりではないな」

しかし一文字はまだ油断していなかった。

「おそらく来るな」

彼は予感していた。いよいよ決戦がはじまることを。

そこで誰かが叫んだ。

「また来たぞ！」

「やはりな」

彼は声がした方に顔を向けた。

そこにあの男がいた。戦闘員達を後ろに従え立っていた。

「死神博士」

一文字は彼の前に来た。そしてその名を呼んだ。

「やはりここに来たか」
「そうだ、この寺院を破壊する為にな」
「何故だ」
「この街を破壊し尽くす為だ。それだけでは説明は不足かな」
「クッ」
どれで充分であった。他に理由はなかった。
「だがその前に貴様も倒さなくてはならないようだな」
彼は一文字を見て言った。冷たく、それでいて残忍な光が宿っていた。
「望むところだ」
一文字もそのつもりだった。彼を見据えて構えをとった。
「だがそれはここではない」
しかし死神博士は一文字を睨んだままそう言った。
「我等が雌雄を決すべき場所は他にある」
「どういうことだ」
「来い。貴様の死に場所に案内してやろう」
そして踵を返した。その黒いマントが翻る。
「待て！」
一文字は彼を追いはじめた。だがその前に戦闘員達が立ちはだかる。

スペインに死すその十三

「イィーーーーーーッ！」
だがそこに滝と立花が来た。
「雑魚は俺達に任せろ！」
「御前は死神博士を追うんだ！」
そして戦闘員達と戦いはじめた。
「さあ、早く行け！」
一文字はそんな二人の心遣いを有り難く思った。
「済まない。滝、おやっさん」
そして彼は死神博士を追った。
老齢とは思えぬ程の速さであった。車椅子に乗っているのはその独特のダンディズム故であろうか。だがそれは誰にもわからない。
彼はただひたすら歩いていた。それでも走っている一文字が中々追いつくことができない。
「クッ、奇怪な」
おそらく死神博士の時の身体の能力も上がっているのだろう。そうでなければ考えられない速さであった。
やがて二人はカテドラルから離れた。そして荒野に来た。
遠くからヒラルダの塔が見える。それはカテドラルにある鐘楼である。セヴィーリアの象徴とも言える塔である。
「ここでよいな」
死神博士はようやく後ろを振り返った。そして一文字へ顔を向けた。
「一文字隼人よ、ここが貴様の死に場所だ」
「ほう、それはいい。あの塔が見えることだしな」
彼は塔をチラリ、と見て答えた。
「だがその言葉少し訂正させてもらおう」
「何！？」

「ここで死ぬのは俺じゃない。死神博士、貴様自身だ」
「戯れ言を」
彼はそれを聞いて口の端だけで笑った。
「では今からその減らず口を塞いでやろう」
「出来るものならな」
博士はススス、と前に出た。やはり老人とは思えない動きである。
その右手には鞭があった。乗馬用のそれに近いものであった。それで二号を打ち据えにかかった。
「そんなもの！」
二号はそれをかわした。見れば鞭には電撃が宿っていた。
博士は攻撃を続けた。しなやかでｓれでいて強靭な動きであった。だが一文字も負けてはいない。攻撃の合間の一瞬の隙を衝き攻撃を仕掛ける。
「トォッ！」
左足から蹴りを繰り出す。それで博士を吹き飛ばそうとする。
だが博士の姿はそこにはなかった。気がつけば一文字のすぐ後ろにいた。
「テレポーテーションか！」
「如何にも」
彼は答えた。そして一文字の背に鞭を振り下ろしてきた。
「グフッ！」
身体中に電撃が走った。一文字はその瞬間身体を大きくのけぞらせた。
「どうだ、私の鞭は」
かろうじて踏み止まり何とかこちらに向き直った一文字に対して言った。
「普通の鞭ではないぞ。立っているのがやっとであろう」
「それはどうかな」
だが一文字はそれでも平気な顔をした。あえてそういう顔を作ってみせたのだ。

「おれを舐めてもらっては困るな。その証拠に見ろ、自分の胸を」
「何！？」
一文字に言われて己が胸を見た。そこには拳の跡があった。
「グフッ」
その途端胸に鈍い痛みが走った。どうやら先程の一文字の攻撃の際に受けていたらしい。
「これでお相子だな」
「クッ、確かに」
それは認めざるを得なかった。胸を走る鈍い痛みがそれを教えていた。
博士は間合いを離した。そして一文字に対して言った。
「ならば私も本気を出そう」
「本気か」
「そうだ。私の真の姿、よく見るがいい」
そう言うと羽織っていたマントを取り外した。そしてそれを上からバッサリと被った。
その中で死神博士の身体が変わっていった。白いタキシードが軟体動物を思わせる皮膚になり身体中に何やら無気味な触手の様なものが生えてきていた。そしてそれは彼の両手に絡んでいった。
「フフフフフ」
マントの中から死神博士の哄笑が聞こえてくる。そして彼はマントを取り払った。
「行くぞ、一文字隼人」
そこには奇怪な姿をした怪人がいた。烏賊を思わせる白い怪人であった。
「イカデビルか」
「そうだ。私の真の姿は知っていよう」
ショッカーにおいてその名を恐怖と共に知られた怪人である。その力はショッカーの怪人達の中でも最強と噂だれていた。
「この姿を見た者は必ず死ぬ。例えそれがライダーだとしてもな」

「ライダーでもか」
「そうだ。さあ一文字隼人よ、早く変身するがいい」
彼は一文字に対して言った。
「この手で完全に破壊してやる」
「そうか」
一文字はそれを聞いて不敵な笑みで返した。
「では俺も変身するとしよう」
そう言うと腰に風車のベルトを出した。
「行くぞ、死神博士、いやイカデビル」
そして変身に入った。

変・・・・・・
両手を右から上へゆっくりと旋回させる。手は手刀の形である。
次第に身体が黒いバトルボディに覆われていく。その手袋とブーツが真紅のそれになっていく。
・・・・・・身!
左で両手を止めた。
左腕は肩の高さで肘を直角に上に向けている。
右腕はそれに合わせて胸に水平にしている。やはり肘は直角だ。
手は両方共拳にしている。
顔が深緑の仮面に覆われていく。右から、そして左から。その目が紅に光った。

激しい光がベルトから放たれる。そして光が全身を覆った。
そしてライダーが姿を現わした。紅い戦いの心を持つライダーが現われた。
「行くぞ!」
そして身構えた。こうして遂にスペインでの最後の戦いの幕が開けた。
まずはイカデビルが来た。両手の烏賊の鞭で二号を打ち据えに来

た。
だがそれはかわされる。二号は左に動いた。
「喰らえっ！」
そして拳を繰り出す。だがそれはイカデビルの奇妙な皮膚に防がれてしまった。
「フフフフフ」
イカデビルはそれを見て奇妙な笑い声を出した。

スペインに死すその十四

「攻撃は何も硬い鎧で防ぐだけではない」
彼は言った。
「吸収し、無効化することもできるのだ」
「ではその皮膚は」
「そうだ、私のこの身体を甘く見てもらっては困るな」
そしてライダーを掴んだ。そのまま投げ飛ばした。
「フン！」
だが彼は上手く着地した。この程度の攻撃では楽に防ぐことができた。
しかしイカデビルの攻撃は続く。今度は口から墨を吐いてきた。それでもって辺りを覆う。イカデビルの姿は完全に見えなくなった。
「考えたな、今度は目くらましか」
二号はその中でイカデビルの気配を探った。
二号は動きを止めた。そして半ばしゃがんで身構えた。そして四方八方に気を張り巡らせる。
「来い」
この闇の中にいるのは間違いない。そして彼を狙っていることも。そう考えると対処が楽であった。
（必ず来る。ならば）
彼はその時を狙っているのだ。問題は何時、何処から来るかだ。それが問題なのだ。
（勝負は一瞬、それを逃したら終わりだ）
それはよくわかっていた。だからこそ息を潜めている。そして待っているのだ。
不意に左斜め後ろから何かを感じた。殺気だ。
（来たな！）

彼はすぐにわかった。そこに烏賊の鞭が飛んで来た。
「喰らえ！」
イカデビルの声がした。それが何よりの証拠であった。
「よし！」
二号はそれをかわした。そしてすぐに鞭が来た方へ跳んだ。
そこには彼がいた。気配が何よりもそれを教えてくれている。彼は掌底を繰り出した。
「これならどうだっ！」
かって鋼鉄参謀にダメージを与えた技である。これならば衝撃は伝わる。そしてダメージを与えられると読んだのだ。
だがそれは適わなかった。確かに掌底は当たった。だがそれは効いてはいないようであった。
「フフフフ」
黒い霧は晴れた。そしてイカデビルが姿を現わした。彼は二号の掌底を浴びながらも立っていた。
笑っていた。余裕の笑みであった。それだけで彼がダメージを受けてはいないことがわかった。
「まさか鋼鉄参謀との戦いを私が知らないとでも思っているのか」
「クッ」
そうであった。彼は二号と鋼鉄参謀との最初の戦いの時インドに共にいたのだ。基地の中で戦ったことすらある。
「貴様の攻撃は全て研究済みだ。当然他のライダー達もな」
「俺達のことは全て知っているということだ」
「無論だ。私を誰だと思っている」
そう言いながら攻撃を浴びせてきた。二号はそれをかわしながら間合いをとった。
「私はイカデビルだ。ショッカーで最大の頭脳を謳われたな」
「そうだったな」
死神博士は若い頃から不世出の天才と言われていた。その悪魔的な頭脳を買われてショッカーに入っているのだ。

それだけに彼は鋭かった。二号のことも全て研究しているのも道理であった。

「私が研究したのは防御だけではない」

イカデビルはまた言った。

「攻撃も研究している」

そう言いながら手を大きく振った。すると空が急に暗くなりだした。

「ムッ！」

二号は上を見上げた。するとそこから何かが降り注いできた。

それは隕石であった。無数の隕石が二号めがけて降り注いで来たのだ。

「おのれっ！」

二号はそれを驚異的な運動能力でかわした。だがそれは絶え間なく二号に襲い掛かって来る。

「私のこ力は知っているだろう」

「知らないとでも思っているのか」

本郷から聞いていた。イカデビルの本当の恐ろしさは何にあるかを。

それは流れ星を操る能力だ。彼はこれで日本を壊滅状態に陥れるつもりであったのだ。

それは今もなお健在であった。彼は今それを二号に向けて使ったのだ。

「だが私の力はこれだけでない」

「何！？」

イカデビルの自信に満ちた声に再び身構えた。

「黒い光は聞いていよう」

「それがどうした」

キングダークや巨人達に備わっていたあの黒い光。二号もそれは各ライダー達から聞いていた。

全てを消し去る程の力があるという。だがこのセヴィーリアの戦

いにおいてはまだ影も形も見てはいなかった。
「私が出して来ないのを不審に思っているだろう」
「フン」
その通りであった。それを否定するつもりもなかった。
「今それを見せてやろう。有り難く思うのだな」
「別に見たくはないがな」
「フフフ、遠慮することはない」
イカデビルはそう言いながら両腕をゆっくりと上げてきた。
そして掌を二号に向けた。そこに黒い光が宿った。
それは一直線に二号に向かって飛んで来た。そして二号を消し去らんとする。
「クッ！」
咄嗟に上に跳んだ。光は後ろの岩に当たった。
見れば岩は瞬時にして消えていた。後には何もなかった。
「ふむ、よけたか」
イカデビルは落ち着いた声でそれを見て言った。
「そうそう簡単には当たらぬか」
「当然だ、俺を誰だと思っている」
着地した二号はイカデビルに対して反論した。
「ライダーがそう簡単に倒されるとでも思っているのか。いや」
二号は言葉を変えた。
「ライダーは決して敗れはしない。貴様等の悪しき野望にはな」
「フフフ、どの様な状況でも威勢がいいのは変わらないな」
イカデビルはそれを聞きかえって楽しそうな声をあげた。
「だがそうでなくては面白くない。私も戦いを楽しみたい」
彼にしては意外な言葉であった。彼は本来は武器をとることは少ないからだ。

スペインに死すその十五

しかしそこには別の意味があった。戦いを欲するのとは別の意味が。

「血がそれだけ流れるからな」

彼ももう一つの顔が姿を現わしていたのだ。酷薄な顔が。

「そうか」

二号はその声を聞いて呟いた。彼のことはよく知っているつもりだ。当然この酷薄な顔も。

（ならば）

彼はここで何かを決意した。その酷薄な顔が出ると何かが起こるのを知っているかの様に。

「しかしそうそう戦ってばかりもいられない。そろそろ終わりにするとしよう」

イカデビルはそう言いながら再び両手を上げた。

「隕石と光、二つ同時ではどうかな」

彼の酷薄な顔にはそれがあったのだ。同時攻撃で二号を葬り去るつもりだったのだ。

空が再び暗くなった。また隕石が降り注いで来る。

「死ぬがいい、仮面ライダー二号よ」

イカデビルは暗い声で言った。

「跡形もなく消し去ってくれる」

そして両手からまたもや黒い光を放って来た。

それは一直線に二号に襲い掛かる。同時に上から隕石が降り注いで来た。

上と前からだ。逃げ道はないように思われた。

「死ねぇ！」

イカデビルは叫んでいた。勝ち誇った声であった。

だが彼は気付いていなかった。自身が完全に無防備になっている

ことに。
そこに二号は目を付けていた。残忍さが前に出るあまり彼は普段の慎重さをなくしていたのだ。
「今だ！」
二号は跳んだ。隕石の方にである。
「馬鹿な、わざわざ死ぬつもりか！」
だがそれは違っていた。何と二号は隕石を蹴っていたのだ。
そして上に上がって行く。隕石を蹴りながらその反動で次々と上に上がって行く。
まるで滝を昇る龍の様であった。凄まじいその脚力がなければ出来ないことであった。
そうして遂に隕石を全てかいくぐった。そのまま急降下する。
「トォッ！」
そしてイカデビルの懐に入った。彼を掴むとまた跳んだ。
「これならどうだ！」
そしてイカデビルを頭上で激しく回転させはじめた。
「ライダァーーーーー・・・・・」
ダブルライダーがライダーキックと同じ程得意としている大技である。
「きりもみシューーーーーートォッ！」
それは普段のものより遥かに威力が大きかった。彼は隕石を蹴った力をそのまま技に溜め込んでいたのだ。
激しく回転させた。それから渾身の力で地面に叩き付けた。
それで決まりであった。イカデビルは頭から叩き付けられた。
それからバウンドする。それで全身を打ち据えられていた。
二号は着地した。その前でイカデビルは倒れ伏していた。
「終わったか」
どう見ても致命傷であった。勝負が決したのは明らかであった。
「ウググ・・・・・」
だが彼は立ち上がって来た。恐るべき生命力であった。

「見事だ、仮面ライダー二号よ」
彼は何とか立ち上がった。そしてライダーの方に顔を向けた。
「まさかあの様なやり方で私の攻撃を破るとはな」
そして死神博士の姿に戻っていく。
博士は手を震えながらも動かした。そうすると先程脱ぎ捨てたマントが動いた。
マントはふわふわと飛び博士の背についた。彼はそれを再び羽織った。
「流石だと褒めておこう」
あらためてそう言った。
「まさか貴様が俺を褒めるとはな」
これは意外であった。自信の塊である彼が他者を褒めることなぞ考えられないことだからだ。ましてや宿敵である仮面ライダーを。
「ふ、素直に貴様の力を認めただけだ」
彼はそれに対して言った。
「貴様はこの私を倒した。それも力だけでなく頭脳でもな」
「頭脳でもか」
「そうだ。あの戦い方は見事だった。咄嗟によくぞあれ程までのことをしてくれた」
「隕石を昇ったことか」
「左様。まさかあの様な技を出すとはな。見事な機転だ」
「俺は特訓で得た体術を使っただけだ。驚くことじゃない」
だが二号はそれについては誇ることはなかった。
「俺は身体で覚えている技を使っただけだ。頭脳を使ったわけじゃない」
「いや、それは違う」
だが博士はそれを否定した。
「どう違うのだ？」
「それは無意識にそうした考えがないとできはせぬ」
「無意識にか」

「そうだ。それを使うのもまた頭脳なのだ」
博士の話はかなり困難なものであった。だが二号はその言わんとしていることが容易に理解できた。
「ないものを使うことはできはしないのだからな」
「つまり俺の中にあの戦い方が最初からあったというのか」
「そうだ」
博士は言った。
「それをあの場面で使うとは思わなかった。実に見事だった」
二号はそれには答えなかった。だが博士は言葉を続けた。
「ダブルライダー、私が唯一勝てなかった存在」
彼は今まで数多くの戦いを経てきた。欧州でのショッカーでの活動の成功は彼の手によることが大きかった。
「それは褒めてやろう。私は最後まで貴様等に勝つことはできなかった。だがな」
彼は言葉を続けた。
「貴様等と戦えたことについては恥とは思ってはいない。それは確かだ」
「そうか」
「その誇りを胸に抱いて私は死のう。さらばだ仮面ライダーよ」
彼はそう言うとゆっくりと前に倒れていった。
「偉大なるバダン首領の手に世界が渡らんことを！」
それが最後の言葉だった。彼は爆発の中に消えた。これがショッカーが誇った最高の頭脳死神博士の最後であった。

スペインに死すその十六

「死神博士も死んだか」
二号はそれを感慨を込めて見ていた。
「だが戦いは終わってはいない」
そうであった。バダンにはまだ戦力があるのだ。彼もそれはわかっていた。
「行くか」
爆発が消えると踵を返した。
「日本へ」
そしてその場を後にした。スペインの戦いはこれで終わった。死神博士の死と共に全てが終わった。
一文字はすぐに日本へ発つことになった。
「じゃあこれで」
一文字は復興作業の中のセヴィーリアの駅で立花と滝に対して言った。
「おう」
「またな」
駅から空港に向かう。そして日本へ行くのだ。
「おやっさんと滝はどうするんですか」
彼はここで二人に尋ねてきた。
「わし等か」
立花がそれに答えた。
「大体決まっている。今度はベトナムへ行くつもりだ」
「ベトナムですか」
「ああ、あそこに本郷がいる。そこであいつと一緒に戦うつもりだ」
滝も答えた。どうやら二人は一緒にベトナムに行くつもりらしい。
「俺も行きたいですけれどね。けれどここはあいつに任せるか」
今日本では不穏な空気が渦巻いている。それが気になって仕方が

ないのだ。
　一文字はその空気を感づいていた。だからこそベトナムに向かうわけにはいかなかったのだ。
「本郷ならやってくれるでしょうね」
「ああ」
　二人は一文字の言葉に頷いた。
「だがあいつだけだと何かと大変だろうからな」
「俺達の力も必要な筈だ」
「でしょうね」
　一文字は二人の気持ちが誰よりもよくわかった。だからこそここは二人に任せるつもりだった。だが。
　ここで立花の携帯が鳴った。見ればアミーゴからだ。
「何だ」
　彼はすぐに電話に出た。それは純子の声であった。
「何だ、御前か。どうしたんだ」
　立花は純子の声を聞き少し安堵を感じた。これがチコやマコなら何かと騒がしいからだ。
「おじさん、大変です。すぐに日本に戻って下さい」
　純子の声はかなり狼狽したものであった。
「おい、どうしたんだそんなに慌てて」
　一文字と滝もその様子に唯ならぬものを感じていた。
「暗闇大使が動き出したんです。ゼクロスにそっくりの改造人間を出してきて」
「何っ、それは本当か！？」
　それを聞いてさしもの立花も血相を変えた。
「本当です。今日本にいるライダーは皆その改造人間達との戦いに出ているんです。けれど神出鬼没でして」
「で、あいつ等は無事なんだろうな」
　立花は不安そうに問うた。一文字も滝も不安の色を隠せない。
「はい、何とか。けれど今手が一杯で」

「そうか」
立花も日本の危機がよくわかった。今戻らなくてはおそらく大変なことになるだろう。
「すぐに日本へ戻って来て下さい。滝さんにも伝えて下さい」
「わかった、すぐに戻る」
立花はそう答えた。そして電話を切って懐に収めた。そして二人に顔を向けた。
「聞いたか」
「ええ」
二人はそれに対して頷いた。
「どうやらベトナムどころじゃないようだ。日本にバダンの主力が集結している」
「そのゼクロスそっくりの改造人間というのは」
「わからん。だがかなりの力を持っている奴だろうな」
立花の顔は深刻なものであった。彼は長年の戦いの勘から危機を確信していた。
「隼人、滝」
そして二人に対して言った。
「予定変更だ。わし等三人で日本へ向かうぞ」
「はい」
「わかりました」
二人はそれに対して頷いた。
「ベトナムは本郷に任せる。だがサポートする奴がいないな」
「それならルリ子さんがいますよ」
一文字が答えた。
「ああ、彼女がいたか」
滝はその名を聞いて少し安心したような声を出した。
「彼女なら大丈夫です。俺から連絡をしておきます」
「そうか、頼む」
一文字はすぐに電話を入れた。事情を聞いたルリ子はそれを了承

した。
「これでよし」
一文字は頷いた。あとの二人もそれを見てとりあえずは安心した。
「あとはあの二人次第だな」
「はい」
ここは任せるしかなかった。だが不安はなかった。
「あの二人ならきっとやってくれますよ」
一文字はまた言った。やはり彼等を心から信頼しているからこその言葉だった。
「ああ」
「そうだな」
二人もそれに頷いた。
「では行きましょうか。ほら、来ましたよ」
そこに電車が来た。丁度空港へ直行する便だ。
「よし」
三人はそれに乗った。そして遠い日本へ向かうのであった。日本を守る為に。

スペインに死す　　完

２００４・１０・９

二匹の毒蛇その一

二匹の毒蛇

死神博士がスペインで倒れたという話はすぐにバダンにも伝わった。流石にこれには多くの者が衝撃を受けた。

「それは本当か」

首領も驚きを隠せなかった。エンブレムから思わず暗闇大使に問うた。

「ハ、残念ながら」

彼は頭を垂れてそれに答えた。

「仮面ライダー二号との戦いにおいて。見事な最後だったといいます」

「そうか」

彼はそれでようやく事態を認識できた。だがそれでも落ち着きは取り戻せなかった。

「あの男がか」

死神博士はショッカーの時から首領に絶大な信頼を受けていた。それはこのバダンにおいても同じであった。

ゾル大佐や地獄大使と共にその功を競い合った。この三人こそがショッカーの最大の切り札であったのだ。

だがその三人が敗れた時ショッカーは終わった。首領はショッカーに見切りをつけ新たな組織であるゲルショッカーを設立したのであった。

「あの時と一緒だな」

彼はふとその言葉を口にした。

「あの時とは」

暗闇大使はその言葉に顔を向けた。

「いや」

だが首領はそれを打ち消した。
「何でもない。気にする必要はない」
「ハッ」
バダンにおいては首領の存在は絶対である。よってその言葉もまた絶対であった。暗闇大使はそれ以上は何も尋ねようとはしなかった。
「ところであの男はどうしている」
「一文字隼人でしょうか」
「うむ。スペインから何処へ行ったのだ。消息を知りたい」
「この日本に。立花藤兵衛や滝和也も一緒です」
「そうか。どうやら我等の計画に気付いているな」
「おそらく。やはりあの者達を動かしたのが少し早過ぎたようです」
「いや、早くはなかったな」
だが首領はそれには賛同しなかった。
「どちらにしろライダー達はこの日本に集まって来る。それを考えるとあの者達を出すのに遅いということはない」
「左様ですか」
「うむ。ただ一文字隼人が来るとなるとやはりそれなりの警戒は必要だな」
「はい。あの男は何よりも幾多の戦いで培ってきた勘が備わっておりますから。それは他のライダー達を凌駕しております」
「そうだ。そしてもう一人の男も気になる」
「本郷猛ですか」
「その通り」
首領はそれに対し険しい声で答えた。
「あの男は特に危険だ」
バダンにとっては。
「あの男まで来るとかなり厄介なことになるだろうな」
「はい」
それは暗闇大使もよくわかっていた。長崎や沖縄での戦いは彼も

よく知っていた。
「何とか今のうちに倒しておきたいが。そうすればライダー達にとっても大きな痛手だ」
「それでしたら」
「何か手はあるのか？」
首領は大使に問うた。
「私にはありませんが」
「何、では何もないではないか」
「いえ」
不機嫌を露わにした首領に対しても冷静さを失ってはいなかった。
「他の者が動いてくれるでしょう」
「他の者か」
「はい。私に策があります」
彼はそう言うと口の端を歪めて笑った。邪な笑みであった。
「本郷猛を倒すのにうってつけの者がおります」
「フフフ、わかったぞ」
どうやら首領も理解したらしい。それに合わせて笑った。
「では今回も貴様に任せるとしようか」
「有り難き幸せ」
彼は深々と頭を垂れた。
「おあつらえ向きに今あの男はベトナムにおります」
「そうか、ベトナムに」
暗闇大使の故郷である。そしてあの男にとっても。
「必ずや本郷猛を狙って動き出すでしょう」
「そうだったな。あの男は東南アジア支部長でもあった」
首領は思惑を含んだ声で言った。
「はい。将に適役です。色々な意味で」
「色々な意味でな」
やはり企んでいる声であった。
「あの男も必死になって戦うであろうな」

「当然でしょう。奴にも意地があります故」
暗闇大使はこれからの成り行きを予想していた。そしてそれだけで楽しくて仕方がなかった。
「面白いことになるでしょうな」
「うむ」
それは首領も同じであった。邪悪な含み笑いが漏れた。
「それでは早速かかるがよい。そして見事あの男を使って本郷猛を始末せよ」
「ハッ！」
それだけ言うと首領の気配は消えた。後に残った暗闇大使も気配が消えたのを確かめるとすぐにその場を後にした。

二匹の毒蛇その二

地獄大使はこの時ラオスの奥地にいた。そこで訓練を行っていたのだ。

「状況はどうだ」

彼は側にいた戦闘員の一人に問うた。

「ハッ、全て順調であります」

その戦闘員は敬礼をして答えた。

「怪人も連度を急激に上げております。おそらくこのままいけば一週間後には目標の連度にまで達するかと」

「そうか」

地獄大使はその言葉を聞き目を細めた。

「どうやらかなり上手くいっているようだな」

「その様です」

戦闘員は答えた。

「我々戦闘員の動きも見違える程になりました」

「さらによいことだ」

彼はそれを聞いてさらに目を細めた。

「戦力は確かな方がよいからな。これからのことを考えると」

「ハッ」

「これだけは覚えておくがよい。ライダーはおいそれとは勝てぬ相手だ」

「ハイ」

それを聞いた戦闘員は言葉を深刻なものにさせた。

「これでいいという段階でも勝ては出来なかった。今まではな」

戦闘員は表情を更に深刻なものにさせた。

「それ程手強い相手だ。だが今度は違う」

地獄大使はここで言葉をキッと引き締めさせた。

「わしもいるからな」

「はい」
「今度はわしが先頭に立ってあの男を倒す。よいな」
「わかりました」
今までは怪人や戦闘員が前面に出ていた。彼は確かに前線での指揮を好む実戦派であったがライダーと直接戦う機会は少なかった。彼はそれを見直したのである。
「わしが直接戦えば奴等もそうそう容易に戦いを進めはしまい」
「そうでしょうな。如何に奴等が強かろうとも大使を相手にしていてはそうそう力を集中させるわけには」
「そうだ。そこを衝けばよい」
彼はニイ、と笑った。酷薄な笑みであった。
「問題はどのライダーが来るかだな」
「はい」
「その心配はない」
ここで地獄大使と全く同じ声が聞こえてきた。
「その声は」
地獄大使はその声を聞くと表情を一変させた。
「ふふふ、その通りだ」
そこへ声の主が姿を現わしてきた。
「ダモンよ、暫くぶりだな。元気そうで何よりだ」
「その名を呼ぶなと言っただろうが」
地獄大使は彼を睨みつけて言った。憎しみに満ちた声であった。
「水臭いことを言うな。たった二人の肉親だというのに」
だが暗闇大使は皮肉を止めなかった。彼の声も憎しみで燃え盛っているというのにだ。
「我等は何時でも一緒であったではないか」
「・・・・・ガモンよ、貴様死にたいのか」
「ガモンとな」
その名を聞いた彼の顔が一瞬憤怒で歪んだ。
「一つ言っておく。私の今の名は暗闇大使という。ガモンではない」

「それはわしも同じだ。二度とあの名で呼ぶな」
彼等は互いに憎しみを隠そうとはしなかった。激しく睨み合っていた。
「やるつもりか」
暗闇大使には普段の冷静さは全くなかった。
「貴様が望むのならばな」
地獄大使はその気性を露わにしていた。少なくとも彼は引くつもりは一切なかった。
「何ならライダーを倒す前にまず貴様を血祭りにしてもよいのだぞ。出陣前の祭りにな」
「ライダー」
それを聞いた暗闇大使の顔に急激に落ち着きが戻ってきていた。
「ふ、そうであったな」
彼は急に口の端だけで微笑んだ。
「大切なことを忘れておったわ。今は貴様の相手をしている時ではないのだ」
「喧嘩を売ってきたのは貴様であろうが」
「ふふふ、そうだったかな」
暗闇大使はそれに対してはとぼけてみせた。そして話をはぐらかした後で話を移した。
「ここにライダーが向かっているのは知っているな」
「やはりな」
それは地獄大使もわかっていた。やはりその程度は察知していた。伊達にショッカーとバダンで大幹部を勤めてきているわけではないのだ。
「だがそれが誰であるかまではわかるまい」
「残念だがな。だが誰であろうが関係はない」
地獄大使は強い声で言った。
「倒すだけだ。この手でな」
そして右手に持つ鞭を掲げてみせた。鞭は鈍い黄金色の光を放っ

ている。
「だができるだけ因縁のある相手と戦いたいであろう」
「因縁のある相手」
「そうだ。貴様が最も憎む男だ」
「何が言いたい」
地獄大使は従兄弟の顔を見据えた。暗闇大使はそれを見て内心ほくそ笑んだ。
（よし）
彼は従兄弟が術中にかかったのを確信した。
「銀の拳を忘れたわけではあるまい」
「忘れると思っているのか」
あの男だけは忘れられる筈がなかった。今までの多くの戦いが彼の頭の中に甦った。
「この地獄大使、受けた恨みは決して忘れはせぬからな」
「ふふふ、ならば話は早い」
暗闇大使はニヤリ、と笑って彼に言った。
「その男が今ベトナムに向かっている」
「まことか」
地獄大使はそれを聞き表情をまた一変させた。それは驚きのものであった。
「わしは嘘は言わぬ。どうして今それを言う必要があるか」
「むう」
彼等は互いに全く信用してはいない。だがその手のうちはよくわかっている。だからこそわかった。
「そうだな。貴様の言葉、今は信じよう」
「それでいい」
暗闇大使はそれを聞きまたもや口の端を歪めて笑った。
「では今後どうするべきかわかっておろうな」
「無論だ」
地獄大使は即答した。

「すぐにベトナムに向かう。そしてあの男の首を首領に献上しようぞ」
「うむ」
暗闇大使はそれを聞きながらほくそ笑んでいた。
（これでいい）
最早彼はその術中に完全にかかっていた。それを確信したのだ。
「では健闘を祈る。わしは日本に戻るとしよう」
「待て」
ここでマントに身体を包み姿を消そうとする彼を地獄大使が呼び止めた。

二匹の毒蛇その三

「一つ言っておくことがある」
「何だ」
暗闇大使はマントを一旦下した。そして地獄大使に向き直った。
「ライダーの次は貴様だ。わかっていような」
そう言う地獄大使の目にはやはり憎悪がたたえられていた。それを見た暗闇大使の目も同じであった。
「無論だ」
彼はそれに対して応えた。そして言葉を返した。
「だが勝つのはわしだ。それだけは覚えておけ」
「フン」
暗闇大使はそう言うと再びその身体をマントに包んだ。そして今度こそ完全に姿を消した。
後には地獄大使が残った。彼は部下の戦闘員達に向き直った。
「聞いておったな」
「は、はい」
戦闘員達は先程までの激しい睨み合いにいささか驚いていた。そして咄嗟に問われて狼狽してしまったのだ。
「すぐにベトナムに戻るぞ。よいな」
「はい」
有無を言わせぬ声であった。それに従わざるを得なかった。
こうして彼等はラオスの奥地からベトナムに向かった。そして戦いに挑むのであった。
ベトナムの近代の歴史は戦乱の歴史であると言っても過言ではない。これは帝国主義と冷戦の影響であったのは歴史が教える通りである。
まずは清朝とフランスが争った。その結果インドシナ半島の東はフランス領となった。フランス領インドシナである。

第二次世界大戦でフランスがドイツに降伏するとここにドイツの同盟国である日本が入った。彼等はまずベトナムの者に教育を施した。

「アジアは一つだ」

と。これは多くの者に多大な影響を与えた。

無論ここには日本の考えもあった。彼等はベトナムを自国の勢力圏に置くことを考えていたのだ。

だがそれと同時にベトナム人の国を建国させるつもりであった。当時の日本がアジアの自立を掲げている以上これは必ず達成すべきことであった。そして彼等はそうしたのであった。

この時代の日本程その理想に獲り憑かれ現実を見えなくなっていた国はなかった。彼等は帝国主義的であった反面こうした理想主義にも心を奪われていたのだ。

だがこの考えがベトナムの者に光を見出したことは事実であった。彼等は立ち上がった。そこには今までの様なただ主人に従うだけの使用人の姿も心もなかった。

戦いが終わり日本は去った。そこにフランスがまたやって来たのだ。彼等にしてみれば当然であった。

だがベトナムの民衆はそれまでとは違っていた。彼等は自分達の国を勝ち取るべく戦う決意を固めていたのであった。

彼等は果敢に戦った。裸足の軍隊とまで言われ、その装備は貧弱なものであった。だがそれでも彼等は戦ったのであった。

相手は近代装備の軍隊である。しかし彼等は次々と勝利を収めた。遂には難攻不落を呼ばれたフランス軍の本拠地ディエンビエンフー要塞を陥落させた。それからの和平交渉の末彼等は遂に独立を勝ち取った。

だがそれで終わりではなかった。問題は彼等を指導しているのが共産党であったことだ。

厳密に言うとベトナム共産党は共産党ではない。指導者であるホー・チミン自身がナショナリストであり共産主義ではなかったのだ。

彼は共産主義は独立を勝ち取る為の看板に過ぎないと完全に認識していた。必要とあれば外す看板であり、状況によっては日本と組んでも一向に構わなかったし、ナチスでも良かった。実際に彼はソ連と組んだ。これはあくまで独立を勝ち取る為だ。また彼等が何かした場合はすぐに手を切るつもりであった。恐るべき現実的な思考を持った優れた戦略家であり知的なナショナリストであった。

彼がいたことはベトナムにとって幸運であった。何故なら戦いはこれで終わりではなかったからだ。

アメリカが介入してきたのだ。共産主義を標榜する彼等を無視できなかったのだ。

「このままではインドシナだけでなく東南アジア全体が共産主義の手に落ちる」

そう考えたアメリカはまず軍事顧問団を派遣した。そして南ベトナムに傀儡政権を樹立した。そしてトンキン湾事件を引き起こし本格的に介入を開始した。

アメリカは空から大規模な空爆を行った。大軍を送り込み共産勢力を掃討しにかかった。

だがこれは上手くいかなかった。ベトコンはジャングルに隠れ彼等を奇襲したのだ。アメリカはこれに対して執拗な掃滅戦と枯葉剤やナパームによる焦土戦術を実行した。

それでもベトナムは屈しなかった。アメリカ軍に消耗を強いると共に外交戦略に訴えアメリカを逆に追い詰めていった。そして遂にアメリカの撤退という勝利を勝ち取ったのだ。

それから統一を果した。ベトナムの長年の苦労が報われたかに思われた。だが歴史の神というのは極めて残酷な存在である。彼はベトナムにさらなる戦いを用意した。

その頃隣のカンボジアには恐ろしい狂気の政権が蠢いていた。

ポルポト政権である。異常な共産主義に支配されたこの政権は自国民を次々に殺戮していった。

知識人、いや中には眼鏡をかけているというだけで殺された者も

いた。文化も芸術も根絶し経済を完全に壊滅させた。国民は皆農業に強制的に従事させられた。

厳格というよりは異常な刑罰で国民を殺していった。そしてその犠牲者は一説によると国民の半数近くに及んだという。

この存在を危惧したベトナムはカンボジアに侵攻した。彼等がベトナムに影響を及ぼすのを警戒したのだ。

しかしこれに神経を尖らせた国があった。北の大国中国である。カンボジアは中国と友好関係にあった。これは外交戦略においてベトナムを牽制する為であった。

そのカンボジアが攻められ親越政権が樹立されたのである。しかも彼等はソ連とも友好を深めていた。ソ連は中国にとって不倶戴天の敵であった。これは中国の北にあるからだ。彼等にとってソ連とは北方の遊牧民族に他ならなかった。万里の長城の向こうにいる何よりも憎い存在に他ならなかった。

ベトナムもソ連と友好関係にあった。ソ連海軍の基地すらあった程だ。これをアメリカも許す筈がなかった。

中国はアメリカに話をつけたうえでベトナムに侵攻した。名分は懲罰であったがその実はこれ以上の勢力伸張を放ってはおけなかったのだ。これに対してベトナムも反撃し両国は国境付近で激突した。

大方の予想は中国有利であった。国力差を考えると当然であった。だが彼等はまたもや勝利を収めたのだ。

やはり彼等は強かった。中国軍は圧倒的な物量を誇りながら敗れてしまったのだ。

これを機にベトナムはソ連との関係をさらに強めた。そしてアメリカ中国、ＡＳＥＡＮ諸国と睨み合った。太平洋の情勢はそうした一触即発の状況であった。

だがソ連の崩壊と共に情勢は変わった。ベトナムは経済においては共産主義を躊躇いもなく放棄し資本主義を導入した。所謂ドイモイ政策である。

そしてＡＳＥＡＮやＡＰＥＣにも参加したこうして見事冷戦を乗

り切り新たな道を歩んでいる。卓越した外交と粘り強い戦いぶりは世界に知られている。

二匹の毒蛇その四

今この国は発展途上にある。中でも南部の中心地ホー・チミンは特にそれが著しい。

かってこの街はサイゴンといった。南ベトナムの首都でありメコン川の河口に位置している。

統一と共にこの名となった。言うまでもなく独立の指導者ホー・チミンの名を冠したのである。

今この街に一人の男がいた。彼は市街を歩いていた。

「やっぱり暑いな」

見れば太い眉に精悍な顔立ちをしている。本郷猛であった。

「この街にも何度か来たことはあるがこの暑さには中々慣れないな」

「あら、そう」

隣にはルリ子がいた。彼女は本郷を見上げて言った。

「私は結構平気だけれど。この街はそんなに暑くはないわよ」

「そうかな」

彼はそれを聞き考える顔をした。

「かなり暑いと思うけれど」

「インドネシアやポリネシアよりは涼しいと思うけれど」

「ううむ」

そう言われてみればそうかも知れない。本郷は考える顔をそのままにしていた。

「アマゾンよりはまだ快適じゃないかしら」

「あそこはまた特別だ。そうそうおいそれと暮らしていけるところじゃない」

「アマゾン以外はね」

「アマゾンはまた特別だ。あれだけ環境適応能力が高いのはライダーでもいない」

アマゾンの身体の強靭さと適応能力はまた特別であった。彼はア

マゾンの密林での生活で他の者とは比較にならない程逞しい生命力を身に着けていたのだ。
「そうなの」
「うん。確かにライダーは元々常人とはかけ離れた身体能力を持っている」
本郷は頭脳だけでなくその運動神経も超人的であった。
「だがやはり本来住んでいた環境に一番適応しているんだ。この場合は日本だ」
「そうだったの」
これは少し意外だった。ルリ子はライダーはどの様な環境でも問題ないと思っていたからだ。
「だから日本の環境一番適応しているんだ。これは個人差があるけれどね」
「けれど私はここでもそんなに辛くはないけれど」
「それが個人差なんだ」
本郷はそこで彼女に対して言った。
「例えば一文字はロンドンで快適そうだっただろ」
「ええ」
「あいつはロンドンで生まれ育ったから霧の中でも平気なんだ」
「そういうものなの」
「ルリ子さんは幼い頃は沖縄にいたね」
「ええ。御父様が沖縄の大学にいたから」
「幼い頃にそこで暮らしているとその場に適応する。だからこのホー・チミンの暑さも苦にならないんだ」
「そうだったの」
これは実際にある。例えば九州に生まれた者は東北の寒さが堪える。そして東北の者にとっては九州はあまりにも暑い。日本でもこれだけの差があるのだ。
「俺にとってはベトナムは暑いね。どうも慣れない」
「大丈夫なの、猛さん」

「ああ、戦いは任せてくれ」
だが本郷はそれに対しては気を抜いてはいなかった。
「バダンに対しては別さ。必ず倒す」
「それを聞いて安心したわ」
ルリ子はすっと笑った。
「流石はライダーのリーダーね。猛さんがいるだけで安心できるわ」
「おっと、それは買い被りだよ」
本郷は苦笑して言った。
「俺はそんなに立派じゃない。ただの改造人間だ。ただのね」
そこで一瞬表情が曇った。やはり改造人間であるということは変わらないのだ。
実際は暑くとも普通の者とはまた感覚が異なる。汗もそれ程かきはしない。何故なら身体のつくりがもう普通の者とは全く異なっているからだ。
「ええ」
ルリ子は何と言ってよいかわからなかった。だが本郷は自分ですぐに気をとりなおしていた。
「それでも生きていくしかない。改造人間として、いやライダーとして。それはわかっているつもりさ」
「そう」
ルリ子はその言葉を聞いて顔を明るくさせた。そう思っているのなら安心だった。
「猛さん」
そしてあらためて本郷に言った。
「何処か食べに行きましょ。ベトナムは美味しいものが多いし」
「うん」
本郷もそれに頷いた。
「ねえ、何処に行く?」
「そうだな」
本郷はまた別の問題で考えはじめた。

「ベトナムといえば屋台だしな」
タイと同じでこの国は屋台が多い。これも東南アジア独特の文化である。
「麺類なんてどうかしら」
「悪くないね」
「あとご飯もいいわね」
「そうだな、ベトナムは本当に美味い料理が多い。蛙も食べられるし」
「あら、蛙も」
蛙を食べる国は案外多い。中国でもそうだしアメリカでも食べる。東南アジアではわりかしポピュラーな料理だ。
ルリ子も蛙は嫌いではない。欧州においてもフランスやドイツでは昔から食べられている。神聖ローマ帝国皇帝でありスペイン国王であったハプスブルグ家のカール五世は蛙の足を好んだことで有名である。彼は質素な生活を好み他には鰻やビールを好んだ。余談であるがこれはハプスブルグ家の伝統でありこの家は欧州随一の名門でありながらその生活は質素な者が多かった。これは宿敵であったブルボン家のそれとは大きな違いであった。

二匹の毒蛇その五

「それはいいわね」
「おや、ルリ子さんも変わったね」
本郷はそこでからかうようにして言った。
「あの時はあんなに気味悪がっていたのに」
「昔の話は止めてよ」
ルリ子はそれに対して口を尖らせた。かっては彼女も蛙が苦手であった。最初蛙の足を見た時は飛び上がった位である。
実は本郷はそれを意外に思ったのだ。
何故なら彼は科学者でもある。動物の解剖も行ったことがある。だからこれ位では驚かないのである。
だがルリ子は違う。元々文学部の学生である。そうしたことに慣れている筈もなかった。しかし本郷がそれを知るよしもない。
「あの時は驚いたなあ」
「猛さんとは違うわ」
彼は元々動揺することのない冷静な男である。時としてそれが浮世離れしたものに思われる時もある。
だが彼はそれに中々気付かないのである。これも彼の生真面目さゆえんであろうか。
「まあ今は腹ごしらえといこう。本当にお腹がすいてきた」
「そうね」
それはルリ子も同じであった。同意して頷いた。
「じゃあすぐに行きましょう。本当にお腹が鳴りそうだわ」
「ははは、確かに」
「あっちね」
二人は屋台が立ち並ぶ場所に歩いていった。そしてそこで米の汁ビーフンや蛙を楽しむのであった。
その頃日本ではいよいよ事態が急転しようとしていた。

「隼人さんはもう行ったのね」
りつ子がアミーゴのカウンターで立花に尋ねていた。
「ああ」
立花は答えた。その顔は晴れやかなものではなかった。
「あいつも行っちまったよ」
「そう」
「戦場にな。それがあいつ等のやらなきゃいけないことだってわかってはいるんだが」
それでも心苦しくない筈もなかった。立花はそれを思うとどうしても顔が晴れないのだ。
「わしよりもあいつ等の方が余程辛いだろう。しかしな」
「それがあいつ等の宿命ですからね」
そこで店に滝が入って来た。
「帰ってたのか」
「ええ。川崎の方は何とかしてきました」
滝は立花に対して答えた。
「バダンの攻勢はかなり激しかったですけれどね」
「そうだろうな。奴等も必死だ」
立花は表情を険しくしたままであった。
「川崎にもライダーが行ったんだよな」
「ええ、志郎の奴が」
「そうか、あいつも日本中駆け回ってるな」
「そうですね。本当に頭が下がりますよ。あれだけ傷を負っているのに」
ライダー達も幾度もの激しい戦いで深い傷を負っていｔだ。だがそれでも彼等は立ち上がらなくてはならないのだ。それがライダーだからだ。
「他の連中もな。隼人も行ったぞ」
「そうですか」
「新潟にな。そこに出たらしい」

「新潟ですか」
「そっちには佐久間も向かった。役君も向かうそうだ」
「役もですか」
「ああ。今ここに残っているのはわし等だけしかない」
「苦しいですね」
「苦しくない戦いなんてあるものか」
立花は苦い顔でそう言った。
「苦しいから戦いなんだ。それは向こうも同じだ」
「はい」
それは滝もわかっているつもりであった。だがそれでも思わざるをえなかったのだ。
「ここが耐え時だ」
立花はまた言った。
「わし等もな。それを乗り切ったら一気にいくぞ」
「一気にですか」
「そうだ。まだわし等には力がない。本郷もいない」
「それに村雨も」
滝の言葉は何やら深い意味があるようであった。
「ああ。まだわし等は我慢する時だ。ライダー達もそれはわかっているだろう」
「そうでしょうね。いや、それが一番よくわかっているのはあいつ等でしょうね」
「そうだったな。あいつ等が一番わかっていることだった」
立花の顔はやはり苦しいものであった。
「何故それがわからんのだ、わしは」
「それは違いますよ」
ここでりつ子が言った。
「おじさんはライダー達のことを思い過ぎなんですよ。だから色々考えてしまうのだと思うわ」
「谷さんもですね」

滝も言った。
「あの人もいつもライダー達のことを考えていますよ」
「同じなんだよ、わしとあの人は」
立花は言った。
「あいつ等といつも一緒で共に戦い寝食を共にしてきたからな。どうしても色々と考えてしまう」
「でしょうね。おやっさんも谷さんもあいつ等といつも一緒だったから」
「最初はどいつも色々と癖があったよ。隼人の奴なんていきなり出て来たからな」
「あの時は驚きましたね」
滝はその時のことを思い出して微かな笑みを作った。

二匹の毒蛇その六

「本郷がいないと思ったらあいつが出て来ましたから」
「それでわし等の前で変身してな。けれどあいつもよくやってくれたよ」
「ええ。あいつも本郷もどちらかがいなかったらショッカーもゲルショッカーも倒せなかったでしょうね」
「だろうな。あいつ等がいてくれて本当によかった」
だがその彼等は言う。立花や滝がいなくてはとてもショッカーもゲルショッカーも倒すことはできなかったと。彼等は互いに助け合って悪を倒したのである。
「今もな。本郷も隼人も本当によくやってくれているよ」
「他のライダー達も」
「ああ。アマゾンは今千葉にいる。敬介は和歌山だ」
「茂は名古屋らしいですね」
「そうだ、琵琶湖には洋が向かった」
「あとは和也が松山ですか」
「丈二が稚内でな。戻って来たらすぐに戦いに向かったよ」
「風の様に戻って来て風の様に戦場に向かうのね」
「そうだ」
立花はりつ子の言葉に頷いた
「あいつ等は風だ。悪を吹き飛ばす正義の風だ」
それがライダーであった。彼等は悪を倒す為に常に吹き続ける風なのであった。
風だから常にさすらわなくてはならない。だが彼等はそれを苦しみとしてはいけないのだ。何故ならそれがライダーだからだ。常に悪のあるところに向かい、それを倒す。それがライダーなのである。
苦しみも悲しみも心の奥底に秘めて戦う。それは決して表に出る

ことはない。仮面の下の顔は決して見せてはならないのである。
だが彼等はそれでも悪に立ち向かう。そして戦う。この世にいる多くの人々の為に。
「あいつ等の中には憎しみに心を奪われていた奴もいたさ」
風見がそうであった。彼は両親と妹をデストロンに殺されていた。神も父を殺された。他の者達も師や友人を悪の手で殺されている。その怒りと憎しみは忘れられない。
だが彼等はそれを乗り越えたのだ。そして本当の意味で正義の戦士となった。その心を消し去り正義を胸に抱いて。
「だからこそあいつ等は凄いんだ」
それは立花も認めていた。だが彼等は人間である。悩み、苦しむ人間なのだ。
そんな彼等を支え、時には厳しく、時には優しく育ててきた。立花は彼等が人間だからこそそうしてきたのである。
「人間は身体がどうとかいうんじゃない、心なんだ」
彼はそれを知った。例えどの様な身体でも彼等は人間なのである。ライダーは人間なのだ。
人間だから人の為に戦う。そして護る。それは人でなくては出来ないことであった。
それを誰よりもわかっているのが立花であり谷であり滝であった。彼等はだからこそライダーと共にいるのだ。
「ところでだ」
立花はここで話題を変えた。
「谷さんは今何処にいるんだ」
「あの人は今自分の店にいますよ。またこっちに来るそうです」
「そうか」
立花はそれを聞いて頷いた。
「てっきり良のところに行ってると思ったんだがな」
「あっちには博士達が行ってます。全員で」
「全員でか」

「ええ。何でも奴の身体にはまだまだ潜在能力が眠っているそうで。伊藤博士も一緒ですよ」
「そうか」
「どうやらかなり凄い奴のようですね」
「そうでなくちゃあ困るしな」
立花の声は険しかった。
「あいつはまだまだライダーになって間もない。経験は浅いんだ」
ライダーも多くの戦いによる経験が必要なのは言うまでもないことであった。
「けれどアメリカとカナダじゃあ」
「ヘビ女とマシーン大元帥だな」
「ええ」
「確かにあれはいい勝負だったらしいな」
それは立花も聞いていた。
「だがそれだけじゃまだまだ経験不足なんだ」
「そういうものですか」
「滝」
立花はここで滝に顔を向けた。
「御前もわかるだろう、何で本郷と隼人があそこまで強くなったかを」
「はい」
常に彼等と共に戦ってきた。それがわからない筈がなかった。
「そういうことだ。経験も必要なんだ、奴にはまだそれがない」
「このバダンとの戦いだけじゃまだ足りないですか」
「ああ、確かに最初の頃よりはずっといいだろう」
「その最初でライダー達をまとめて相手したのにですか」
「それからあいつ等は再改造を受けて特訓もした。あの頃とは比較にならん」
「それはわかります」
確かにライダー達は強くなっていた。それは事実だ。

「わしはな、あいつ等の特訓の時に念頭に入れていたことがあるんだ」
「それは何ですか」
「あいつ等に今までの戦いを思い出させる様な特訓をしたんだ。谷さんと話し合ってな」
「そうだったんですか」
「ああ、それまでの戦いを思い出させ、そこからあいつ等を鍛えるつもりだったんだ。そしてそれは成功した」
だからこそ彼等はバダンと戦うことができたのである。立花はそれが誰よりもよくわかったいた。いや、彼でなくてはわからなかったであろう。
「皆戦いを経て成長していったんだ。良にはまだそれがない」
「それを補う為に力を引き出すんですか」
「そうだ。あいつにはかなり苦しいことだと思う。だがな」
立花の顔は更に深刻なものになっていく。
「その苦しいことを乗り越えて悪と戦うのがライダーなんだ」
「ええ」
それは滝も嫌という程よくわかっていた。
「あいつにも苦労をかける。だがそれは乗り越えなくちゃならないんだ」
「この世界の為に」
「そしてあいつの為に。あいつもライダーなんだからな」
二人の話は険しいものであった。だが彼等は誰よりもライダー達を愛していた。
それだからこそ出る言葉であった。二人はあくまで村雨のことを思っていた。
「おやっさん」
滝が言った。
「俺も行きましょうか、あいつのところへ」
「行くのか」

立花は顔を上げた。

二匹の毒蛇その七

「ええ、練習相手も必要でしょう。博士達にはそれは辛いでしょうし」
「そうか、じゃあ行って来い」
彼はそれを認めた。
「わかってるとは思うが手加減はするなよ」
「おっと、さるのはこっちですよ。相手はライダーですよ」
「おっと、そうだったな」
ここで立花はようやく笑った。
「ライダーが相手なら御前も悪ふざけはできないだろうしな」
「おやっさん、俺はそんなことしませんよ」
「何言ってやがる、しょっちゅうしやがったくせに」
「あれ、そうでしたっけ」
「この野郎、とぼけるつもりか」
二人は笑顔になった。こうした明るさがなくては戦えないのもまた事実であった。
そんな光景をりつ子は笑顔で見ていた。彼女もそうした二人を見るのが好きであった。
翌日滝はすぐに村雨の元へ向かった。東京の守りは立花と谷、そしてアミーゴの面々が担うことになった。
「またやらなくちゃいけないんですかあ」
史郎は情ない声で言った。
「何言ってやがる、それがわし等の仕事だろうが」
立花はそんな彼を叱り飛ばすようにして言った。
「けれど俺」
「何だ」
顔を顰める立花に怯えつつも怖る怖す声を出した。
「只の喫茶店のお兄さんですよ。そんなバダンと戦うなんて」

「何言ってやがる、ショッカーとも戦っていただろうが」
「けど」
「まあまあ」
そこへ谷が入って来た。
「ここは私達だけでやりましょうよ。彼はアミーゴさえ守ってもらえばそれでいいですし」
「谷さんがそう言うんなら」
立花もそう言われようやく納得した。
「戦い方は幾らでもありますよ」
「成程、確かに」
言われてみればそうである。立花は大いに頷いた。
「今はここにいるのは私達と彼、それに女の子達だけですし」
今東京に残っている者は少なかった。純子とチコ、マコ、りつ子、そして史郎と立花、谷だけである。戦力になりそうなのは二人だけであった。
チョロやがんがんじい、竜はライダーのサポートに向かっている。役は役で調査に当たっているという。
「役君がいてくれたら楽なんですがね」
「彼にも彼の事情があるのでしょう、仕方ありませんよ」
谷はそれに対しては何も言うつもりはなかった。
「それよりも今私達だけでやれることをやりましょう」
「ええ」
結局そうするしかない。立花は頷いた。
「丁度少年ライダー隊もいますし。彼等には情報収集なんかをしてもらって」
「危険な任務からは外して」
「はい。後は赤心少林拳の人達にも協力を頼みましょう」
かってドグマに壊滅させられたが生き残った僅かな者達によって復興されていたのである。再び道場を構え日々修業に励んでいる。
「それだけでかなりの戦力になりますね」

「そうですね。少年ライダー隊を後方に回してわし等と赤心少林拳で戦うと」
「そうなりますね。アミーゴを基地として」
「はい」
立花はここでアミーゴを見回した。
「何かと色々と役に立ってくれるなあ」
「本当に。ここがなくては今頃どうなっていたことか」
谷もそれに同意した。
「うちじゃあこうはいきませんよ」
「そうなんですか」
「ええ、通信設備もマシンの整備も出来ませんから」
やはりそうした設備は不可欠なのは言うまでもないことであった。
立花はマシンの整備を得意としていた。かってサイクロン改から研究して新たなマシン新サイクロンを開発したこともある。その腕は確かであった。
「それに気のいい面々もいますし」
谷はそこで史郎達に顔を向けた。
「俺ですか」
史郎は顔を向けられ少し嬉しそうな顔をした。
「ああ、頼りにしているよ」
谷の顔は温かかった。彼もまた立花と同じくライダー達にとって父親の様な存在であった。
「いいなあ、俺谷さんのところへ行こうかな」
「勝手にしろ」
立花はそれを聞き冗談混じりに言った。
「おやっさん、それはないですよ」
しかし彼はそれに対して悲しそうな声を出した。
「俺はここしか居場所がないんですから」
「そうか、だったら今月から給料は半分だ」
「そ、そんなあ」

彼はまた情ない声を出した。谷はそれを笑いながら聞いていた。
こうして話し合いは終わった。彼等もまた戦いに赴くのであった。

二匹の毒蛇その八

本郷とルリ子は食事を終えホー＝チミンの街中を歩いていた。
「美味しかったわね」
「ああ」
二人は今しがた食べ終えたばかりの昼食について話していた。
「ベトナムの料理ってタイのとはまた違うわね」
「そうだな、タイのもの程辛くはない」
タイの料理はまた特別である。
「あの青い唐辛子は一度食べたら忘れられない」
「沖さんが好きらしいわね」
「一度タイへ行ってからだったな。それ以来病みつきになったらしい」
人の舌というのも不思議である。気に入るとそれをずっと食べたくなったりするのだ。
日本人にとってはそれが醤油や味噌、白米等である。その白米もジャポニカ米という独特のものだ。
だがこれは他の国の人々には人気がない。ベチャベチャしているというのだ。
日本人にはこれが不思議でならない。逆に日本人やタイ米やカルフォルニア米はパサパサしているといった好まない。
「日本人の味覚はよくわからない」
タイの人はよくこう言う。米だけでなく生の魚を好んで食べることも理解できないというのだ。
「あんな奇妙な魚をどうやって食べるのだろう」
フィリピンの人達は日本に向けて輸出される魚を見て首を傾げる。
彼等は日本で食べられるような魚はあまり口にはしないのである。
これは逆のことにもなる。日本人がタイに行くとその辛い料理に驚く。だがタイ人にとっては普通だ。

「こんな辛い料理平気なんですか」
「何がですか」
逆にこう不思議がられるのだ。フィリピンでもだ。とかく料理というものは難しく、かつ面白いものだ。ここからもそれぞれの国の違いが出て来るのだ。
「一文字はロンドンの料理がまずいと言っていたな」
「私はそんなに感じなかったけれど」
「最近はね。昔はそれこそ凄いものだったらしい」
彼が日本に来てまず驚いたことは料理の美味さだったという。それ程までにイギリスの料理はまずいとまで言っていた。
「隼人さんが言うと何だかオーバーに聞こえるわね」
「いや、それは本当だ」
本郷はそれに対して注釈を入れた。
「俺も一度ゴッドとの戦いの時イギリスにいたことがあってね」
「ええ」
その時ルリ子はユーゴスラビアで別行動をとっていたのだ。
「あの料理は酷いものだった。どうしたらあそこまでできるのか不思議な程だ」
「アメリカよりも凄いの？」
「アメリカは量が多いだけで味はそれ程だとは思わないけれどね」
実際アメリカはその差が大きい。だが量は異常に多いのが特色だ。
「ベトナムの料理はそんなに脂っこくないわね」
「そうだね、生野菜も多いし」
それがベトナム料理の特色の一つであった。
「食べ易くて値段も手頃で。何か家庭料理が多いわ」
「それがこの国の特徴なんだ」
本郷はここで感慨に耽る顔をした。
「今まで長い間苦難の歴史を歩んできたからね」
ここで旧アメリカ大使館の前を横切った。その苦難の歴史の象徴の一つだ。

「アメリカだけじゃない、中国もフランスも」
「どの国もベトナムを狙って戦争をした」
「それに打ち勝つのは大変だっただろう。多くの犠牲者が出た」
長い戦いにより夥しい人命が失われた。そして国土は荒廃した。
それを戦い抜いたのは民衆の力もあった。ベトナムは民衆の力で大国に勝ってきた国なのだ。
「ホー＝チミンという素晴らしい指導者がいたことも事実だ」
「けれど民衆の力がなければ到底勝つことはできなかった」
「そう思う、彼等は命を賭けて侵略者に戦いを挑んだ」
「そして遂に独立を勝ち取った」
「夥しい犠牲を払いながらね」
その象徴がこの旧アメリカ大使館であった。彼等の苦難の歴史の中の一ページもであるのだ。
「そう、ベトナムの二十世紀の歴史は戦いの歴史だった」
ここで声がした。
「その声は」
本郷とルリ子はその声に聞き覚えがあった。忘れることのできない声であった。
二人は振り向いた。そこにあの男がいた。
「久し振りだな、本郷猛よ」
地獄大使は彼を見据えて言った。
「貴様か」
「そうだ、ベトナムの歴史をよく知っているな」
「知らない筈がないだろう」
本郷は彼に対して言葉を返した。
「貴様の祖国でもあるからな」
「それも知っていたか」
「三度のインドシナ戦争」
フランスとの独立戦争、ベトナム戦争、中越戦争の三つのことである。

二匹の毒蛇その九

「その全ての戦いにおいて獅子奮迅の活躍をした名将ダモン」
「ダモン」
ルリ子がその名を聞き思わず地獄大使に顔を向けた。
「あのゴー＝ウェン＝ザップと並び称された名将」
「そんなこともあったかな」
地獄大使はその名を聞きとぼけてみせた。
「それを知らないとでも思ったか」
だが本郷はそれに構わず言った。彼は地獄大使から目を離すことはなかった。
「おそらくここに来るのは貴様どろうと思っていた」
「ここがわしの祖国だからか」
「それもある。だが」
「だが！？」
「俺が来たのを知って動かない筈がないと思っていた」
「わしの考えを読んでいる、と言いたいのだな」
「そうは言わない」
「ほう」
大使はそれを聞き左の眉を一瞬上がらせた。
「バダンの戦略自体を読んだのだ」
「我々の考えは全てお見通しというわけか」
「そうでなくてはライダーは務まらない」
彼はそう言って身構えた。
「そして既にここには怪人達もいる」
「その通りだ」
地獄大使の後ろに怪人達が姿を現わした。
「マダラマダラマダラーーーーーーッ！」
「ギローーーーーーーッ！」

「ミッミッミッミッミッ！」
ネオショッカーの機銃怪人マダラカジン、ジンドグマの電気怪人イスギロチン、ショッカーの音波怪人セミミンガの三体の怪人が姿を現わした。怪人達は地獄大使を護る様に前に出て来た。
そこに戦闘員達も姿を現わした。彼等はすぐに本郷とルリ子を取り囲んだ。
「では我等が何を考えているかもわかるであろう」
「無論」
本郷は言い返した。
「俺の首を欲しいのだろう」
「その通り」
地獄大使は酷薄な笑みを浮かべた。
「覚悟するがいい。このサイゴンが貴様の死に場所だ」
「サイゴン」
本郷はその言葉に反応した。それはホー＝チミンの旧名である。
見れば地獄大使の顔は普段と違っていた。
普段は血を好む残忍な顔をしている。だが今の彼はそれとは全く異なる顔をしていた。
燃えていた。それでいて落ち着いている。まるで戦いを指揮する指揮官の様である。
「そういうことか」
彼はあの時に戻っていたのだ。歴戦に勇将であったダモンの頃に。
だからこそその街の名を呼んだのだ。
「やれい！」
大使は命令を下した。すると怪人達はサッと上と左右に跳んだ。
そこから攻撃を仕掛ける。狙うは本郷の首だ。
「死ねぃ！」
一斉に攻撃を仕掛ける。怪人達の刃が本郷を襲う。
だがその瞬間本郷は姿を消した。まるで煙の様に。
「何処だっ！」

怪人達は辺りを探った。そこで上から声がした。
「ここだっ！」
「ムッ！」
上を見上げる。丁度怪人達の真上の木の上からであった。
そこにライダーがいた。彼は跳んだ瞬間に変身していたのだ。
「トォッ！」
下に跳び降りて来た。そして怪人達と対峙する。
「さあ来い！」
その横にルリ子が来た。
「ライダー、戦闘員は私が」
「わかった」
一号は頷いた。ルリ子はすぐに戦闘員達に向かって行った。
「御前達の相手は俺だ！」
「小癪な！」
一号と怪人達は対峙する。そこに地獄大使が割って入って来た。
「甘いな」
彼は不敵な笑みを浮かべていた。
「貴様の相手は怪人達だけではない」
「どういうことだ」
彼は地獄大使を見据えた。
「このわしもいるということだ」
地獄大使は右手の鞭で彼を差した。
「わしの力、知っていような」
「フン」
知らない筈がなかった。地獄大使とはショッカーにおいて数多くの死闘を繰り広げてきたのだから。
「では行くぞ」
彼は音もなく近寄って来た。そして鞭を繰り出して来た。
「喰らえっ！」
だがそれは上に跳びかわす。だがそこに怪人の攻撃が来る。

「シャーーーーーッ！」
イスギロチンが鞭を繰り出して来た。その鞭は地獄大使のものと違い高圧電流を宿していた。
それでライダーを撃とうとする。だがライダーはそれに対して空中で身を右に捻ってかわした。
「ムンッ！」
その動きで回転する。そして怪人に接近した。
そして手刀を浴びせる。それは怪人の首を撃った。
「グオッ！」
動きが怯んだ。そこに勝機を見た。
「今だ！」
ライダーは怪人の身体を掴んだ。そしてその首を両足で掴んだ。
「ライダァーーーーヘッドクラッシャアアーーーーーッ！」
そのまま怪人の頭を地面に叩き付ける。激しい衝撃を受けた怪人はライダーが飛び退くと同時に爆発四散して果てた。
そこに地獄大使が接近する。今度は左の爪で切り裂かんとする。
「これならどうじゃっ！」
彼は他の大幹部達と比べて実戦に適した身体をしている。それは陣頭で指揮を執ることを好む彼の気性がそうさせていたのだ。
だがライダーもさるものである。その攻撃を的確にかわしていく。
しかしそこに新手が来た。マダラカジンだ。
「地獄大使、助太刀致します！」
「うむ！」
彼は右のサーベルで一号を突き刺さんとする。それと大使の爪が一号に襲い掛かる。
しかし一号はその二つの攻撃をかわす。そしてその間にも反撃の機会を窺う。
「どっちだ」
彼は怪人と大使の両方を見た。そしてどちらかに隙が生じるのを待った。

それはマダラカジンに出た。怪人はサーベルを横に振った。
「これでどうだっ！」
それで一号の首を断ち切らんとしたのだ。だがそれが誤りであった。

二匹の毒蛇その十

サーベルは本来突く為のものである。彼は咄嗟にそのことを忘れてしまった。

それが命取りとなった。その時に生じた一瞬の隙を逃す一号ではなかった。

「ムンッ！」

その腹に蹴りを入れた。それで怪人は動きを止めた。

「グフッ！」

更に攻撃を続ける。拳を出す。

「ライダァーーーパァーーーーンチッ！」

それで怪人の顔を激しく殴打する。続け様に繰り出す。

それは致命傷となっていった。最後の一撃が怪人の顔を叩き潰した。

「グオオオオッ！」

怪人は呻き声と共に後ろに吹き飛ばされた。そして壁に打ち付けられ倒れた。

そして爆死した。さしもの怪人もライダーの強烈な拳の連打を浴びては生きてはいられなかった。

「クッ、力を使うとはな」

「驚いたか」

一号は舌打ちした地獄大使に対して言った。

「ライダー二号の専売だと思っていたがな」

「今まではな」

一号はそれに対して言った。

「だがこれからは違う。俺も二号も互いの力と技を学び合った。改造も経てな」

「それが今の強さの秘密か」

「そうだ。覚えておけ、ライダーは常に進化するのだと」

「進化か」
「その通り、戦う度に強くなる。それを忘れるな」
「フン、忘れるものか」
だが地獄大使はその言葉を一笑に付した。
「わしがどれだけ貴様等と戦ってきたと思う」
彼は言葉を続けた。
「それだけではない、わしがのこれまでの戦いを知らないと見える」
その目には戦いに燃える激しい炎があった。
「この街を陥落させたのもわしだ。同志ホー＝チミンの為にな」
ホー＝チミンはアメリカとの戦争の最中死んでいた。最後までベトナムの独立を目指した英傑の死であった。
「そのわしの長年の戦いを経て身に着けた力、今こそ見せてやろう」
身構えた。その目が無気味に光った。
「ムッ」
何かある、一号はすぐに悟った。そして彼も次の動きに備えた。
だがそこで別の者が割って入って来た。
「地獄大使、それには及びません」
残った最後の怪人セミミンガであった。
「ここは私にお任せを」
「いいか」
彼は何やら少し残念そうであったが怪人の言葉に顔を向けた。
「ハッ、地獄大使の手を煩わせるまでもありません」
そしてライダーを睨みつけた。
「ライダーの相手は私が。先の仲間達のこともありますので」
「そうか」
それを出されると言いにくい。彼はここは怪人に任せることにした。
「では貴様に任せた。見事ライダーの首をとるがいい」
「ハッ、有り難き幸せ」
セミミンガは頭を垂れた。そしてすぐに一号に顔を向けた。

「行くぞ」
「来い」
一号も退くつもりは毛頭ない。彼は構えをとった。
「ミッミーーーーッ！」
顔から超音波を放ってきた。それはライダーに向けて襲い掛かる。
ライダーはそれをはっきりと見ていた。常人それとは違うその紅い目で見ていたのだ。
「その程度！」
一号は上に跳んだ。だがそれは怪人も読んでいた。
「やはりな！」
怪人も跳んだ。彼はその背の羽根を使っていたのだ。
「俺が蝉の改造人間であるのを忘れていたな！」
「それはどうかな」
だが一号は落ち着きを保っていた。
「俺もまた改造人間だ」
彼は言った。
「そう、空での戦いも可能だ」
「フン、戯れ言を」
だがセミミンガは余裕であった。
「バッタがセミに勝てると思っているのか！」
「当然だ」
だがライダーは冷静さを失ってはいない。
「貴様はバッタのことを知らない」
一号は言った。
「バッタも飛ぶことができるのだ」
実際にイナゴ等はかなりの長い距離を飛ぶことができる。だが彼がここで言ったことはまた別の意味であった。
「ムン！」
空中で後転した。それで怪人の顎を蹴る。
「グオッ！」

不意を衝かれた怪人はそれに怯んだ。一号はさらに動く。
怪人の腿に足をかけた。そしてそれを踏み台にして跳んだ。
「トォッ！」
そして怪人の頭上をとった。そしてそこで攻撃に移った。
「空中戦にはこうした戦い方もある！」
空中で激しい回転に移る。
「ライダァーーーー回転キィーーーーック！」
本来は二号の技である。だが特訓により身に着けていたのだ。彼等はその地獄の様な特訓でお互いの技も学び合い身に着けていたのだ。
そしてそれで怪人の胸を蹴った。その衝撃を受けたセミミンガは地面に叩き付けられた。そしてバウンドし空中に跳ね飛んだところで爆発して果てた。
「奢ったな、飛ぶことができるのはセミだけじゃない」
一号は着地した。そしてその爆発を見上げて言った。
「フン、その様な戦い方があるとはな」
そこで地獄大使の声がした。
「流石は仮面ライダー一号だと褒めておこう。見事な戦い方であった」
彼は苦い顔でそう言った。
「だがこれで勝ったとは思わないことだ」
「どういうことだ」
一号はその言葉に反応し顔を向けた。
「わしの攻撃はまだこれで終わりではないということだ」
一号はその言葉に対してすぐに身構えた。
「ふふふ、だがそれは今ではない」
だが大使は今の攻撃を否定した。
「今は怪人達ももういない。これで退いておこう」
「そうか」
だがまだ安心したわけではない。

「この街はわしにとっては特に思い入れの強い街だ。楽しませてもらおう」
「楽しむだと」
「そうだ。貴様を狩ることをな」
彼はここで残忍な笑みを浮かべた。

二匹の毒蛇その十一

「思い出すな、かっての戦いを」
彼はここで過去の自身の戦いのことを口にした。
「フランスもアメリカも中国も強大であった。それぞれ恐るべき戦士達がいた」
彼はその時から自ら前線で指揮を執ることを好んだのだ。
「だが皆わしの前に敗れた。どの者もわしに勝つことはできなかった」
「貴様はその時から自らも戦っていたのか」
「そうだ。そうでなくては戦場に出る意味がなかろう」
彼は戦場を愛していた。その火薬と血の匂いを何よりも愛していたのだ。
これは当時のベトナムの事情もあった。戦力おいて圧倒的に劣る彼等は将といえども戦場においては自ら戦うしかなかったのである。だからこそ彼は戦った。そしてその中で生き抜いてきたのである。
「ライダーよ、楽しみにしておれ」
大使は言った。
「この街で貴様は死ぬ。わしの手でな」
「それはどうかな」
だがライダーも怯んではいなかった。
「俺もそうそう狩られるつもりはない」
そう言って反撃した。
「貴様を倒す為に今ここにいるのだからな」
「フン」
地獄大使はその言葉を鼻で笑った。
「わしが狙った獲物を逃したことはない」
その瞬間両目が黄色く光った。
「戦場においては特にな」

2014

「戦場か」
「そうだ、他に何と呼ぶのだ」
彼はこの街を戦場と認識していたのだ。
「今はその命預けておこう。だが」
「だが？」
「それも僅かの間だ。貴様の命は我が牙の中にあるのだ」
そう言うとマントで全身を覆った。
「それを忘れぬようにな」
そして姿を消した。後には彼の高笑いだけが残った。
「ライダー」
そこに戦闘員達を倒し終えたルリ子がそっと来た。
「大丈夫よね」
彼を気遣って声をかける。見上げたその顔は不安に支配されていた。
「大丈夫だ」
一号はそんな彼女の不安を取り払うようにして言った。
「ライダーは負けない。決して」
そして地獄大使が消えた方を見た。そこには既に何者の影もなかった。
戦いを終えた地獄大使は基地に戻っていた。そしてそこで早速次の作戦に備えていた。
「今度の作戦だが」
彼は怪人や戦闘員達を会議室に集めて話をしていた。だがそこで何者かの声がした。
「柄に合わないことをしておるな」
それを聞いた大使の表情が一変した。
「何の用だ」
彼は見る見るうちに機嫌を悪くしていった。
「まあそう怒るな」
だが声の主はそんな彼をからかうようにして言った。

「折角貴様にいい策を授けてやろうと思って来たのだからな」
「策だと」
彼はそれを聞いて顔をいささか戻した。
「それは一体何だ」
「今ここでは話すことはできん」
「そうか」
地獄大使はそれを受けて席にいた怪人や戦闘員達に対して顔を向けて言った。
「休んでよいぞ」
そう言って下がらせた。
彼等はそれに従い部屋を後にした。そして地獄大使だけが残った。
「これでよい」
声の主は満足そうに笑った。
「我等はいつもこうして作戦を決めておったからな、二人で」
「戯れ言はいい」
地獄大使は苛立たしげに言った。
「早く姿を現わすがいい」
「わかった」
声の主はそれを受けて姿を現わした。壁から浮き出る様にして地獄大使の前に現われた。
「また来るとはな」
地獄大使は彼の姿を見て不機嫌そのものの声を出した。
「ふふふ、まあそう言うな」
暗闇大使はそれに対しやはり彼の応対を楽しむような声を出した。
「我等はこの世でたった二人の肉親ではないか」
「貴様が言うとはな」
「何を水臭いことを言う」
おそらく心にもないことであろう。だが暗闇大使は言った。
「我等は常に共にあったではないか。あの時から」
「あの時か」

彼等が物心ついた時には互いの両親はもういいなかった。二人は孤児として育った。

その中で必死に生きてきた。その時主であったフランス人に仕えて生きてきたのだ。

「あの者達の靴を舐めて暮らしてきた」

「忘れる筈がなかろう」

地獄大使は従兄弟から背を向けた。忌まわしい過去であった。

彼等は自分達を見下す主人達に時として殴られ虐待された。だがそれに耐えてきた。全ては生きる為であった。

「覚えているか、あの時を」

「貴様も覚えていよう」

暗闇大使はそれに言葉を返した。

「我等があれを忘れる筈がないだろう」

暗闇大使の言葉は心理であった。彼等はその時のことを今でもはっきりと覚えていた。

日本軍の仏印進駐。国際社会から批判を浴びたこの行為だがそれにより彼等は目覚めたのだ。

あのフランス人達を何なく蹴散らした自分達と同じ黄色い肌の者達。彼等は威風堂々とベトナムに入って来たのだ。

彼等は厳格で規律正しかった。融通が効かなく押し付けがましいところがあったがそれでもフランス人達より余程公正であり親切であった。

何よりも強かった。彼等はその強さに魅せられたのだ。

日本軍が敗れ去っても彼等は残った。そして今度は自らが戦場に向かったのであった。

「あの頃から常に共にいたではないか」

「長い間だったな」

地獄大使はそえには頷いた。彼としてもそれは認める。

二匹の毒蛇その十二

「だがわしと貴様は最早あの時の従兄弟ではない筈だ」
彼は暗闇大使を見据えて言った。
「あの時以来な」
「確かにな」
暗闇大使はその言葉に頷いた。
「我等はもう暗闇大使と地獄大使になった。ガモンとダモンではない」
「わかりきったことであろうが」
「うむ。だが今一度わしは貴様に策を授けに来たのだ」
「どういうつもりだ」
彼は従兄弟をキッと見据えた。
「貴様に授けられるものなぞないぞ」
「まあそう言うな」
暗闇大使は笑ってそう言った。
「別に見返りは要求せぬ。それでよいだろう」
「・・・・・わかった」
地獄大使はとりあえず頷いた。
「では貴様の策を聞こうか」
「うむ」
暗闇大使はここで頷いた。
「時空破断システムは整っているな」
「無論だ」
「そして怪人も戦闘員達もいる」
「今にでも全力出撃が可能だ」
「それならばよい」
彼はそこまで聞いて頷いた。
「すぐにでもわしの策を実行に移せるな。やはり貴様は歴戦の将だ

けはある」
「褒め言葉はいい。話を続けろ」
「フフフ、わかった」
彼は笑いながら応えた。
「その全てを同時に使うのだ」
「一斉攻撃か」
「そうだ。それならば仮面ライダー一号といえど人たまりもあるまい。どうだ、中々いい作戦だろう」
「わしのやり方にも合っているな」
「そう考えて提案したのだ。どうだ、やってみるか」
「うむ」
地獄大使はそれに頷いた。
「では詳しいことを聞こうか」
「わかった」
こうして二人は席についた。そして話を進めた。
話が終わり暗闇大使は日本に引き揚げた。そして首領の下に来た。
「地獄大使に策を授けたそうだな」
暗闇の中首領の声が響き渡る。
「ハッ」
彼は頭を下げて答えた。彼は暗闇の中に跪いていた。
「それもかなり念入りな策と聞いているが」
「お言葉の通りです」
彼はそれを認めた。
「あの男に合った策を授けました。これでライダー一号を倒すことができるでしょう」
「それは何よりだ」
首領はそれを聞き明るい声を出した。
「だが一つ気になることがある」
「何でございましょう」
彼はその言葉に顔を上げた。

「あれ程憎んでいたというのにそこまで策を授けたものだな」
「はい」
彼の顔に一瞬だが陰が差した。
「最初は陥れ利用するつもりではなかったのか」
「私も最初はそのつもりでしたが」
彼は謹んでそう言った。
「実際に会ってみると考えが変わりました。ここは策を授けるべきだと思いましたので」
「また急な心変わりだな。一体どうしたのだ」
「目を見まして」
「目か」
「はい。あの男の目は昔の目でした」
「人であった頃のか」
「それは」
暗闇大使はそれには答えかねた。だがそれが他ならぬ答えとなってしまっていた。
「ふふふ、よい」
首領はそれを見て笑った。
「それで仮面ライダーが倒せるのならな。私はそれで構わん」
「左様ですか」
「そうだ。それが世界征服への第一歩となるのだからな」
「そうなのですか」
「そうだ。今我々は勢力を大きく減らしている。これは事実だ」
「はい」
「ライダー達によってな。今残っているのは貴様と地獄大使だけだ」
暗闇大使はそれには答えなかった。首領は言葉を続けた。
「今はライダーを一人でも減らしておきたい。そして日本での最後の決戦に備えるのだ」
「この日本でですな」
「そうだ。その為の手筈は整っているな」

「無論」
暗闇大使は不敵に笑って答えた。
「間も無く我がバダンの大攻勢がはじまるでしょう」
「その為には奴等の力が少しでも減っておかねばならない。この世界を我が手に収める為にな」
「御意」
「その為の策ならば何をしてもよい。何としてもライダーを倒せ」
「わかりました」
「では下がるがよい。すぐにその準備に取り掛かるがよい」
「ハッ」
こうして暗闇大使は闇を後にしたそして自室に戻った。
「さてダモンよ」
彼は従兄弟のいるベトナムの方に顔を向けた。
「上手くやるがいい。そして見事ライダーの首を挙げるがいい」
そこには憎悪はなかった。ただその作戦の成功を願う参謀の顔があるだけであった。
「フン」
彼は自分でもそれに気付いた。そして自嘲するように笑った。
「因果なものだな。また奴に策を授けるとは」
ふとベトナムでの戦いのことを思い出した。
「やるがいい、ダモンよ。そして見事勝つがいい」
そして彼は棚からワインとグラスを取り出した。血の様に赤いワインであった。
「今は貴様に乾杯しよう。そして帰って来たならば」
グラスに口をつける。そして飲んだ。
「二人でまた飲もうぞ。あの時のようにな」
そして一人飲みはじめた。彼はそうして酒を楽しんだのであった。

二匹の毒蛇その十三

従兄弟から策を授けられた地獄大使はすぐに行動に出た。総力をあげてホー＝チミンに攻撃を仕掛けて来たのだ。

「来たか！」

本郷とルリ子はそれに対してすぐに出撃した。彼等はベンタン市場で激突した。観光名所としても知られているベトナムでも最も有名な市場である。

「フッフッフ、本郷猛よ」

地獄大使は既にそこにいた。そして本郷を見て笑った。

「この前言った約束を果させてもらうぞ」

「何」

彼はその言葉に目を向けた。

「貴様にはここで死んでもらう。言った筈だな」

「それがどうしたというのだ」

彼はそれに対して言い返した。

「俺はそのような約束などはしていない。勝手に決めてもらっては困るな」

「フフフフフ」

だが大使はそれに対して無気味な笑い声で応えた。

「わしはよく強引な男と呼ばれていてな」

彼は笑いながら言った。

「約束も人に強要することが多いと言われてきた」

「誰が貴様の話なぞ聞いている」

「まあ聞け」

だが彼は本郷を言葉で制して話を続けた。

「今もだ。貴様には約束を是非守ってもらいたいのだ」

「誰が！」

本郷はそれを当然の様に拒絶した。

「死ぬのは貴様だ、その言葉そっくり返してやろう」
「それでいい」
だが彼はその言葉を聞きさらに笑った。目に炎が宿った。
「さあ来い。そしてこの手で倒してやろう」
「言われずとも」
本郷は変身に入った。腰にあのベルトが姿を現わす。

ライダァーーーー
右腕を手刀の形にして左から右に大きく旋回させる。
それと共に身体が黒いバトルボディに覆われる。そして銀色の手袋とブーツが姿を現わした。
変身！
右腕を拳にして脇に入れる。左手を斜め上に突き出す。その手もやはり手刀だ。
それと共に顔の右半分がライトグリーンの仮面に覆われる。目は真紅だ。そして左もすぐに覆われる。

腰のベルトが回転をはじめた。そして光が放たれる。彼はそれに包まれた。
そして光の中からライダーが姿を現わした。多彩な技を誇るライダー達のリーダー仮面ライダー一号である。
「フフフ、変身したか」
だが地獄大使はまだ余裕を保っていた。
「そうでなくては面白くはない」
ここで後ろを振り向いた。
「あれを出せ」
「ハッ」
後ろに控える戦闘員が敬礼して応えた。すると何やら地響きが聞こえてきた。
「これは一体」

「すぐにわかる」
地獄大使は一号とルリ子に対して言った。やがて巨大な戦車が姿を現わした。
砲塔はなく巨大な大砲があるだけであった。何やら自走砲のようである。
「それはまさか」
「そう、そのまさかだ」
地獄大使は笑いながら答えた。そして鞭を持つその右手をゆっくりと上げた。
「撃て」
「はい」
戦闘員の一人が答えた。すると戦車の砲身に何かが宿った。
それは黒い光であった。それを徐々に増大させながら砲口を一号とルリ子に向けてきた。
「いかん！」
すぐに危機を悟った一号はルリ子を抱えて跳んだ。その直後に二人がそれまでいた場所に黒い光が放たれた。
それはその場を跡形もなく消し去った。後には巨大な穴だけが残った。
「ふむ、かわしたか」
地獄大使はそれを見てまるで楽しむように言った。
「だが何時までかわせるかな」
「戯れ言を」
一号も怯んではいない。
「ルリ子さん」
まずはルリ子に顔を向けた。
「ここは安全な場所へ」
「けど」
「俺は大丈夫だ。いいね」
「・・・・・・はい」

一号の強い言葉に従わざるを得なかった。ルリ子は黙って頷いた。
そして後方へ下がる。地獄大使は戦闘員達に彼女を追わせようとするがそれが一号が阻んだ。
「貴様等の相手はこの俺だ」
そして戦闘員達を次々と倒していく。
「ふむ」
地獄大使はそれを見て頷いた。そして左右に控える怪人達に顔を向けた。
「行け」
「ハッ」
怪人達は頷いた。そして左右に散った。
それと同時に再び黒い光が放たれる。一号はそれをやはり跳んでかわした。
そこへ怪人達が襲い掛かる。右からゲドンの変体怪人獣人ヘビトンボ、左からブラックサタンの吸血怪人奇械人ブブンガーが来た。
「死ね、ライダー一号！」
彼等は空中から同時にライダーに攻撃を仕掛けてきた。まず獣人ヘビトンボの鎌が来た。
「ジャーーーーーッ！」
同時に口から緑色の液体を吐き出す。これで一号を溶かすつもりなのだ。

二匹の毒蛇その十四

「クッ！」
一号はそれを身を捻ってかわした。そしてそこで怪人の腹を蹴った。
「ゲハッ！」
そしてそれを反動に後ろに跳ぶ。そこで叫んだ。
「サイクロン！」
すぐにそこに新サイクロン改が来た。空を駆っていた。
その機首を蹴った。その反動で獣人ヘビトンボに向かって跳ぶ。
「食らえ！」
そして攻撃態勢に入った。
「ライダァーーーーー反転キィーーーーーーーーック！」
蹴りを放った。それで怪人を大きく吹き飛ばす。
「ジャーーーーーッ！」
怪人は断末魔の叫びと共に後ろに吹き飛んだ。そして爆死して果てた。
一号は空中で前転し態勢を立て直そうとする。だがそこにもう一体の怪人が来た。
「ビビビビビビッ！」
口の針を引き抜きそれを剣にする。それで切りつけてきた。
「甘い！」
だが一号はその手を蹴った。そして剣を叩き落とし使えなくした。
一瞬隙が生じた。一号はそれを逃さなかった。
「今だっ！」
空中であるが怪人の身体を掴んだ。そして上に向けて投げた。
「トォッ！」
そしてそこでまたマシンを踏み台にして跳んだ。上に飛ぶ怪人に対して攻撃を仕掛ける。

「ライダァーーーーフライングチョーーーーーーップ！」
顔の前で両手を交差させそれで怪人を撃った。奇械人ブブンガーも空中で爆死した。
これで二体の怪人を倒した。一号はマシンに乗ろうとする。だがそこに再び黒い光が襲い掛かって来た。彼はそれを慌ててかわした。
「油断はできないか」
時空破断システムに目をやった。どうやらこれを倒さなくては何にもならないようだ。一号は意を決した。
「よし」
そして急降下する。二次大戦の時の爆撃機と同じ様にだ。ほぼ直角に下がる。丁度砲の死角にあい狙うことはできない。
「ほう」
それを見た地獄大使は思わず口の端に笑みを零した。
「またいいものを見た。急降下爆撃か」
急降下するマシンが今凄まじい唸り声をあげていた。
これはかって東部戦線で死のサイレンと呼ばれていた。ドイツ軍がソ連軍の戦車を襲う時の音を評してこう呼んだのだ。
ドイツ軍の急降下爆撃機シュツーカもまた多くの戦果をあげた。だがそれよりも怖るべき活躍をしたのが日本軍の急降下爆撃機であった。
九九式艦上爆撃機。その攻撃で連合軍を恐怖のドン底に陥れた爆撃機であった。
連合軍の夥しい艦船を海の藻屑にしてきた。その光景は地獄大使も砂浜で見たことがある。自分達に対する圧政の象徴の一つであった重厚な白人の船をいとも簡単に沈めていったのだ。
急降下爆撃の命中率は本来低いものである。二桁に達すればそれで上出来だと思われていた。だが日本軍は信じられない程の訓練によりその命中率を九割近くにまでしていた。
日本軍の急降下爆撃の怖ろしさは機体だけではなかったのだ。そ

のパイロットの技量もあったのだ。
地獄大使は今ライダーにその姿を見ていた。それを思うと思わず笑みが零れたのだ。
「素晴らしい。あの伝説の攻撃を今見ることが出来るとはな」
感嘆の言葉が漏れた。
「だがそうはいかぬ。生憎だがわしも敗れるわけにはいかぬからな」
彼は今度は全く別の笑みを浮かべた。勝利を確信した笑みであった。
「わしが何の備えもしておらぬと思うか」
急降下を続ける一号を見て言った。
「行け、そして見事ライダーを倒せ！」
彼は叫んだ。すると時空破断システムから一体の怪人が飛び出て来た。
「ガーーーーーーーッ！」
デストロンツバサ一族の毒霧怪人殺人ドクガーラだ。怪人は一直線に一号に向かって来た。
「来たか！」
一号はそれを確認しながらも急降下を続ける。怪人を体当たりを吹き飛ばそうというのか。
怪人はそこに攻撃を仕掛けてきた。羽根から無数の蛾を放ってきたのだ。
「クッ！」
それを見た一号はマシンから跳んだ。そして怪人に飛びかかった。
「そうくるならばっ！」
そして怪人の腹を殴り動きを止める。続いて怪人の身体を掴んだ。
「ライダァーーーーハンマァーーーーーッ！」
空中でスイングを仕掛けた。まるでコマの様に回転する。
そして投げた。時空破断システムに向けてだ。
「クッ、そうくるか！」
地獄大使はそれを見て叫んだ。そしてシステムから離れるべき跳

んだ。
「いかん！」
マントで身を守った。その瞬間黒い光がその場を支配した。
殺人ドクガーラはシステムに叩き付けられていた。そして同時に爆発したのだ。言わば怪人を爆弾にしたのだ。
当然システムも無事で済む筈がなかった。怪人の爆発によりシステムもまた爆発した。それにより黒い光が出て来たのだ。
それが通り過ぎると後には何も残ってはいなかった。一号はその場に着地しておりその後ろにはマシンがあった。
「ぬうう」
地獄大使は彼を歯噛みした顔で見据えていた。
「まさか怪人を爆弾代わりにするとはな」
「あくまで咄嗟のことだ」
一号はそれに対して言った。
「だがかなりの効果があったな。本来ならばマシンを犠牲にしてでも破壊するつもりだったが」
彼は前に来たマシンを見ながら言った。
「そうしなくて済んだ。僥倖だな」
「フン」
地獄大使はそれを聞き顔を歪めさせた。
「それで勝ったとは思わぬことだ」
「無論」
一号はその言葉に合わせて身構えた。
「貴様を倒さなければ終わったことにはならないからな」
そしてジリジリと前に出て来た。
「貴様にできるかな」
大使もそれに合わせて前に出て来た。両者は互いの隙を窺いはじめた。その時であった。
「待て！」
不意に声がした。一号の右手、地獄大使の左手にだ。

「貴様か」
地獄大使はその声にすぐ反応した顔をそちらに向けた。
「貴様！？」
一号はその言葉に疑念を抱きながらも右手に顔を向けた。するとそこにはもう一人地獄大使がいた。
「いや」
違った。彼のことは一号もよく知っていた。

二匹の毒蛇その十五

「暗闇大使か」
「如何にも」
暗闇大使はニヤリと笑って一号に言葉を返した。
「やはりわしのことは知っているようだな」
「知らないとでも思っているのか」
一号は彼に言葉を返した。
「一体何の用だ」
「わかっていると思うが」
彼はその酷薄そうな笑みを浮かべたまま答えた。
「ダモンよ」
そして従兄弟に顔を向けた。
「苦戦しているようだな。助太刀に来たぞ」
「助太刀だと」
だがその従兄弟がそれを聞いて更に顔を歪めさせた。
「誰が頼んだ、わしは貴様を呼んだ覚えはないぞ」
「水臭いことを言うな」
だが彼はそれを聞いても尚笑っていた。
「実際に今窮地に追い込まれているではないか」
「馬鹿なことを言うな！」
だが地獄大使はそれに対して激昂して叫んだ。
「わしはまだ負けてはおらぬ。この程度で窮地とは片腹痛いわ」
「ほう」
暗闇大使はそれを聞いて眉を上げた。
「貴様も知っていよう。我等が今まで潜り抜けてきた戦場を」
「無論」
暗闇大使もまた戦場を潜り抜けてきた。圧倒的な物量を誇る大国を前にしては指揮官もそうであるように参謀もまた自ら武器を手に

とって戦うしかなかったのである。彼等の生き抜いてきた戦場はそれ程までに過酷であった。将校といえども自ら武器を手に戦わなくてはならない程だったのだ。

「それを思えばこの程度。それにわしは今勝機を掴んだのだ」

「勝機」

「わかっているだろう」

そう言った地獄大使の目が黄色く光った。暗闇大使はそれを見て再び笑った。

「わかった」

そしてこう言った。

「ならばここは貴様に全て任せるとしようか。かっては常にそうであったように」

「うむ」

「では見事武勲を挙げるがよい。わしはあの時の様に陰に潜むとしよう」

「好きにしろ」

「そうさせてもらおう」

そう言うと背中のマントで全身を包んだ。

「日本で待っているぞ」

そして彼は姿を消した。後には影も形も残ってはいなかった。

「さてライダーよ」

地獄大使は従兄弟が消えたのを確認して一号に顔を戻した。

「いよいよ貴様の首を貰い受ける時が来た」

その目がまた黄色く光った。

「行くぞ、わしの真の姿」

そう言いながら背中のマントを被った。

「再び貴様に見せようぞ」

マントの中の身体が変わっていく。脚が黒くなりマントの中の頭部の形も変化していく。そしてマントが剥ぎ取られた。

「ガァーーーラッ！」

毒蛇の頭と鱗を持つ怪人が姿を現わした。右手は鞭になっている。
「再びこの姿を貴様に見せるとは思わなかったな」
彼は言った。
「ガラガランダ、わしの正体を二度も見たのは貴様がはじめてだ」
彼はその黄色い目で一号を見据えながら言った。
「この姿を見た者はショッカーの者以外で誰一人として生きてはいないからだ、貴様等以外はな。いや」
「いや！？」
一号はそれに反応した。
「今貴様も死ぬ。また一人わしの正体を知る者はいなくなるのだ」
「それはどうかな」
だが一号はやはり言い返した。
「死ぬのは地獄大使、いや、ガラガランダ」
ガラガランダを見据えた。
「貴様だ！」
そして指差した。宣戦布告であった。
「フン」
だがガラガランダはそれを鼻で笑った。
「貴様にできるのか、わしを倒すことが」
「無論」
彼は身構えながら言った。
「今ここで倒してやる」
「フフフフ」
ガラガランダはそれを聞いて不敵に笑った。
「ならばやってみせるがいい。返り討ちにしてくれるわ」
「行くぞ」
「望むところだ！」
二人は同時に前に出た。そして互いに攻撃を繰り出し合った。
一号は拳と蹴りを繰り出す。それに対してガラガランダは右手の鞭を振るう。互いに一歩も引かない。

そして暫くの間攻防を続けた。だが両者共隙は全く見せず闘いは膠着状態になりつつあった。

「クッ、このままでは埒があらぬわ」

先に痺れを切らしたのはガラガランダであった。

「こうなっては」

彼は地中に姿を消した。アスファルトであろうがその中に消えていった。

「消えたか」

一号はそれに対して構えを一旦解いた。そして辺りを見回した。

「何処から来る」

そしてガラガランダの気を探る。彼は必ず来ると予想しちえた。

それは当たった。後ろから鞭が来た。

「やはり！」

彼は跳んだ。そしてその鞭をかわした。

だがそれを追って鞭が来る。それも一本ではなかった。

「何！？」

前後左右から無数の鞭が来た。だがそれでも彼は慌ててはいなかった。

目では無数の鞭が見えていても実は一本しかない。これはガラガランダの幻術であることを見抜いていたからだ。

「そらく本物は」

一号はそこで後ろへ振り向いた。

二匹の毒蛇その十六

「これだ！」

そして最初に来た鞭を蹴った。それが本物だと見抜いていたからだ。

「おのれ！」

地中から声がした。ガラガランダのものであるのは言うまでもない。

「よくぞわしの術を見破ったな」

「この程度、俺がわからないと思ったか」

一号は着地して地中にいるガラガランダの対して言った。

「さあ来い、まだ終わりではないだろう」

「その通り」

再び地中から声がした。

「わしを甘く見るな」

そして気配を地の底に消した。

「またか」

一号はそれを見て身を翻めた。そして敵の気を探った。

「何処にいる、そして何処から来る」

それが問題であった。一瞬でもそれを見誤れば死に直結する。それは彼が最もよくわかっていることであった。

「どうする」

彼は自分の動きについても考えた。下手に動くと全てが終わる。どうするべきか。

まずは気配を消した。それで周りを見た。

ガラガランダは動いてはいない。だがいずれ必ず動いてくる。一号は彼の性格をよく知っていた。

（奴の性格なら）

地獄大使の気性の激しさは有名である。ショッカーでもそれはよ

く知られていた。バダンにおいても激情家として名が通っている。
（すぐに動く）
そう読んでいた。おそらく長い間息を顰めていることは出来ないであろう。
時が暫く流れた。両者はまだ動かない。
（まだか）
一号は待った。次第に何者かの焦る様子が感じられてきた。
（来るか）
来た。それもすぐ目の前に。
「ガァーーーラァーーーーーッ！」
地の中から出て来た。そして一号に襲い掛かる。
「死ねぇっ！」
鞭を振るおうとする。だが一号はそれより前に動いた。
「今だ！」
彼の身体を掴んだ。そして空中に放り投げた。
「この程度で！」
だがガラガランダもさるものである。空中で態勢を立て直し着地した。
「わしを倒せると思ったか！」
「俺の攻撃がこれで終わるとは思わないことだ！」
だが一号もそれで終わりではなかった。ガラガランダに向けて突進していた。
「喰らえっ！」
そして体当たりを浴びせた。それで怪人の態勢が崩れた。
「ウォッ！」
「トォッ！」
一号はガラガランダを掴んだ。そして再び空中に投げ飛ばした。
体当たりのダメージで今度は思うように動けない。一号はその隙を逃さずすかさず跳んだ。
「これならどうだっ！」

空中で攻撃態勢に入る。そしてガラガランダに向かって行く。
「受けてみろ」
蹴りを出して来た。
「電光ライダァーーーーキィーーーーーーーック！」
強烈な蹴りが空中のガラガランダの腹を直撃した。これを受け空中高くに跳ね飛ばされた。
攻撃を終えた一号は着地した。ガラガランダはまだ宙を舞っている。だが彼も大地に落ちた。
「終わったか」
激しい衝撃と音と共に落ちた怪人を見て呟く。だがガラガランダは最後の力を振り絞って立ち上がってきた。
「まだだ」
彼は言った。そして地獄大使の姿に戻っていった。
「わしはまだ倒れぬぞ」
そう言いながら一号に顔を向けた。
「生涯で最強の敵の顔を見るまではな」
そして一号の顔を見る。そしてニヤリと笑った。
「二度もこのわしを倒すとはな。褒めてやろう」
「礼を言う」
一号はそれに応えた。
「わしは今まで数多くの戦いを経てきた。だが一度として敗れたことはない」
彼は言った。
「どれ程強大な敵にもな。フランスにもアメリカにも中国にも勝った」
「この国での戦いか」
「そうだ」
彼はそれに答えた。
「ショッカーにおいてもだ。わしは東南アジアを支配していた」
彼はその実績を買われ日本支部長となっていたのである。

「だが貴様に会ってからそれは全て変わった」
ライダー達の前に全ての作戦が失敗に終わった。首領にも見捨てられ進退が極まった彼は最後の賭けに出た。自らを裏切り者にしてライダーを誘き寄せたのだ。
「あの時は上手くいったと思ったがな。まさか敗れるとは」
「あの時は俺も苦戦した」
一号はそれに対して言った。
「それでも貴様は勝った。わしにな」
「ああ」
「あの時も見事であった」
彼はそれを素直に称賛した。
「そして今も」
そこでニヤリと笑った。そこには恨みも憎しみもなかった。
「わしを二度も倒す者がいるとは思わなかったわ。だが悔いはない」
清々しい顔になっていた。
「力の限り闘うこともできた。これでもう思い残すことはない」
そして日本の方へ顔を向けた。
「首領、世界をその手に納められることを心より願います。その時を見ずに逝くのをお許し下さい」
言葉を続けた。
「ガモンよ、先に行っておく。待って折るぞ」
そう言うと最後に叫んだ。
「バダン万歳！」
前に倒れた。そして爆発の中に消えていった。こうしてショッカーでその勇名を馳せた大幹部地獄大使も死んだ。これでかっての大幹部、改造魔人達は暗闇大使を除いて全てこの世から去った。
「地獄大使」
一号はその爆風の最後の風を浴びていた。
「見事だった。貴様が味方だったならどれ程頼もしかったことか」
風も消えた。こうして地獄大使の名残もまたこの世から消えたの

であった。
　ベトナムでの戦いも終わった。本郷とルリ子は残党のいないことを確認すると二人日本に向かった。こうして全てのライダーが日本に集結することとなった。
「ダモン、敗れたか」
　暗闇大使は報告を聞いた後自室で一人いた。
「わしの策を使いあ奴が敗れるのははじめてのことだ」
　彼は暗い部屋の中で呟いていた。
「ライダー、侮ることはできぬな。そして」
　ここで顔を上げた。
「ダモンよ、貴様の仇は取る。安心して地獄に行くがいい」
　その時心には憎しみはなかった。従兄弟への肉親としての気持ちだけがあった。
　かって彼等は激しく憎み合った。それは今後のベトナムのあり方を巡ってであった。
　中国との戦いに勝利したベトナムだったがその受けた傷は深かった。長い戦乱で疲弊しきっていたのだ。

二匹の毒蛇その十七

これを見たガモンは今後は内政に力を注ぐべきだと考えていた。その為周辺各国とは融和的な政策を執るべきであると考えていたのだ。

だがダモンは違っていた。彼はまだ敵が来ると主張して軍備の充実、そして強硬策を主張した。これで両者の間に修復不可能な溝ができた。

どちらも心からベトナムを思っていた。それだけに譲らなかったのだ。何時しかその対立は軍部を大きく割る事態となった。

常勝将軍と天才軍師、どちらも力があった。そして従兄弟同士でもありその対立は日増しに強まっていった。

やがて彼等はミャンマーで極秘に作戦にあたることとなった。ここで彼等の仲違いが思わぬ悲劇を招いた。

それにより作戦に大きな支障をきたしているところを敵に襲われた。ガモンは戦死し、ダモンは行方不明となった。

ベトナムは陰の勝利とひきかえに二人の有能な軍人を失ったのだ。

だがダモンは生きていた。川に落ちながらも何とか生きていた。そして鰐の牙をかいくぐり出て来たところをショッカーにスカウトされたのだ。祖国では既に彼は死んでいるということになっているということを教えて。

こうして彼はショッカーの地獄大使となった。彼はガモンのことは忘れてはいなかった。だが最早彼もダモンではなくそれに固執することもなかった。やはり彼は以前の彼ではなくなっていたからだ。

ガモンは墓で眠っていた。ベトナム軍の将兵達が作った墓であった。密林の奥でありとても祖国まで持ち帰ることが出来なかったのだ。

こうして彼はバダンにより甦らされるまでそこで眠っていた。長い眠りであった。

「眠りから醒めるとこの身体になっているとはな」
やはり彼も帰るべき祖国はなかった。死んでいる身で帰っても場所は何処にもないからだ。
彼は暗闇大使となった。それが今の彼であった。
「ダモンよ」
彼は従兄弟の名を呟いた。
「今ここにいるのだろう」
席を立った。そして棚から酒と杯を二つ出した。
「共に飲もうぞ。ベトナムの酒だ」
ベトナムの酒は案外強い。熱い国であるがその気候によく合っている。甘く一度好きになると病みつきになる。
彼は二つの杯にその酒を入れた。そしてそのうちの一つを手にとった。
「乾杯だ、貴様の戦いに」
そして飲み干した。見ればもう一つの杯の酒も減っていく。
「今宵は久し振りに二人で飲み明かそうぞ、心ゆくまでな」
そして彼は杯に酒を再び注いだ。また飲む。もう一つの杯も減っていく。
「地獄でも達者でな。よろしくやるがいい」
彼等は飲み続けた。宴は何時果てるともなく続いていた。
本郷とルリ子はアミーゴに入った。それを見て驚いた顔をしたのは史郎であった。
「猛さん、戻ったんですか」
「ああ」
本郷は何故彼が驚いているのかよくわからなかった。だが気の小さい彼がそんな顔をするのはいつものことである。ここは冷静に応対することにした。
「一体何をそんなに驚いているんだい」
「いえ、まだベトナムにいるとばかり思ってまして」
「ははは、そんなことか」

本郷はそれを聞いて安心したように笑った。
「ベトナムでの戦いは終わったよ。東南アジアのバダンは壊滅した」
「そうだったんですか」
「あの史郎さん」
ここでルリ子が尋ねてきた。
「立花さんはいますか？」
「おやっさんですか？」
「ええ。やっと戻ってこれたしお顔を見たいのですけれど」
「生憎今はここにはいないんですよ。すいませんねえ」
「では今何処にいるんだい？」
本郷も尋ねてきた。
「今ですか」
問われた史郎は少しキョトンとしたような顔になった。
「村雨君と一緒ですよ」
「良とか」
「ええ、滝さんも一緒で」
「滝もか」
彼はそれを聞いて少し考え込んだ。
「一体何をしているのだろう」
「何でも彼の潜在能力を引き出す為に協力しているとか。俺も詳しいことは知らないんですけれどね」
「潜在能力」
本郷はそれを聞いてさらに考え込んだ。
「あいつにはまだ秘められた力があるというのか。だとしたらそれは一体」
そう思うとさらに深く考えざるをえなかった。彼の頭脳がそうさせるのだ。
「猛さん、それも大事だけれど」
だがここでルリ子が言葉を入れてきた。
「今日本はバダンの総攻撃を受けているんでしょう。猛さんも落ち

着いてはいられないわよ」
「おっと、そうだった」
彼はルリ子のその言葉にハッとした。そして史郎に顔を向けた。
「今他のライダー達はどうしているんだい」
彼に問うた。
「皆各地で戦っていますよ。ただ今のところこの東京には誰もいません」
「そうか」
彼はそれを聞き頷いた。
「じゃあ今のところ東京の守りは俺が引き受けよう。やはりライダーがいないと危険だからな」
「お願いできますか」
「当然だ。それがライダーの仕事だからな」
史郎に対して毅然とした声で言った。
「何でも言ってくれ、バダンは俺が全て引き受ける」
ここで後ろの通信室から誰かが出て来た。ハルミであった。
「あ、猛さん」
「ハルミ君がいたのか」
いつもは谷のところにいるがどうやら応援で来ているらしい。
「お久し振りです」
「うん」
本郷はそれに頷いた。
「ところで通信の内容は？」
史郎が問うた。
「一文字さんからです」
「一文字からか」
「ええ、何でも今後のことでお話したいということですけれど。立花さんがおられるかどうか聞いていますけれど」
「ふむ」
本郷はそれを聞いて暫し考え込んだ。そして口を開いた。

「俺が出てもいいかな」
「猛さんが！？」
史郎もハルミもルリ子もそれを聞いて思わず声をあげた。
「隼人さんが驚かないかしら」
「いや、あいつにはいつもされていることだから今度はこちらが驚かせたいんだ」
本郷はにやりと笑って言った。
「いいかな」
「まあ」
「俺達もいつも隼人さんの唐突さには驚かされていますし」
こうして決まった。本郷は通信室に入った。
「一文字か」
そして彼に語りかけた。通信機の向こうの一文字が驚いた声をあげる。
「ははは、驚いたようだな」
本郷はそれを聞いて笑った。そして二人は話に入った。

二匹の毒蛇　　完

２００４・１０・２４

秘められた力その一

秘められた力

「さて同志達よ」
暗闇大使は闇の中の一室で影達に対し語り掛けていた。
「遂に全てのライダーが日本に集結した」
それを聞いた影達の気が蠢いた。
「驚くことはない。これは予定されていたことだ」
暗闇大使はそれを宥めるように言った。
「諸君等もそれはわかっている筈だ」
「しかし暗闇大使」
影の一つが口を開いた。
「何だ」
大使はそちらに顔を向けた。
「十人のライダーを一度に相手にすることはいささか困難であると考えますが」
「それについては今まで何度も議論が為されてきた筈だが」
だが大使はそれに動揺してはいなかった。
「案ずることはない。諸君等も私も心配することはないのだ」
見れば彼は軍服であった。あの戦闘用の服ではない。
「全てはここにある」
そう言って自分の頭を指差した。
「ライダーを倒す方法は幾らでもある。それは君もわかっている筈だが」
「はい」
その影は項垂れた声で答えた。
「私の不明でした、お許し下さい」
「わかればいい」

大使はそんな同志を慰める言葉をかけた。
「さて今我々が為さなければならないことは」
彼はあらためて同志達に顔を向けた。
「二つある」
声は急に峻厳なものとなった。
「まずはこの日本を占領しバダンの世界征服の一大拠点とすること。
そして」
言葉を続けた。
「ライダー達を一人残らず倒すことだ。これは並行して同時に進めていく」
「ハッ」
影達はそれに頷いた。
「その為の戦力は充分にある。それもわかっていると思う」
「黒い光を持つ戦士達ですね」
「その通り」
彼はそれを聞きニイ、と笑った。恐ろしい笑みであった。
「そして時空破断システムもある。力は有り余る程ある」
「それでこの日本に我がバダンの最初の領土を置く」
「そこから世界へ」
「そう、時空破断システムにより世界を灰燼に帰してからな」
暗闇大使は話す度に機嫌をよくしていった。
「その為には諸君等には十二分に働いてもらいたい」
「それはもう」
影達はその言葉に頭を垂れた。
「ご期待下さい、暗闇大使」
「必ずや我等の手でバダンの理想郷を築きましょうぞ」
「うむ、頼むぞ」
大使はそれを聞き頷いた。
「全ては諸君等の手にかかっているからな」
「いや、それは買い被りというものでは」

「いや」
謙遜に対して首を横に振った。
「我等は選ばれた者達だ、必ずや事は成就する」
「選ばれた者」
ある種の人間にとってはこのうえなく甘美な響きを持つ言葉である。それが今彼等の心を溶かした。
「わかりました、暗闇大使」
「必ずや我等の理想を達成しましょうぞ」
「頼むぞ、同志達よ」
再び言った。彼は自分の言葉に彼等が心を支配されていくのを感じていた。
「では行こうぞ、愛する同志達よ。ライダー達を倒し我がバダンの世界を作り上げる為に」
「ハッ！」
影は一斉に散った。そして彼等は己が戦いに場に向かった。
「同志達も行ったか」
彼はそれを見届けて呟いた。
「ではわしも動くとしよう、バダンの理想を成し遂げる為に」
そして姿を消した。後には闇だけが残っていた。
村雨は富士にて特訓を受けていた。それはまるで戦場の様であった。
「まだだ！遅いぞ！」
立花の叱咤が飛ぶ。巨大な岩石が上から降り注ぐ。
「それを全て叩き潰せ！そしてここまで来い！」
「はい！」
村雨はそれに答える。そしてその岩石を全て叩き壊し立花のところまで跳んで来た。
その前に滝が出た。いきなり村雨に襲い掛かる。
「くっ！」
村雨は滝の拳を防いだ。そしてすぐさま反撃を繰り出す。

「なんのっ！」
だが滝も負けてはいない。それをかわし村雨の腕を掴んだ。
「でやあっ！」
彼を後ろに投げ飛ばす。だが村雨は両足で踏ん張りブリッジをする形でこらえた。
そこから跳ね飛ぶ。両膝で滝の頭を狙う。
だが滝はそれを身を捻ってかわした。そして村雨から腕を放し彼から離れた。
「よし、そこまでだ」
立花はそこで二人を止めた。そして二人を側に寄せて言った。
「昼飯を食ったらすぐにまたはじめるぞ、いいな」
「はい」
「わかりました」
二人は頷いた。そして少し離れたところにあるテントに入って行った。
それを離れた場所から白衣の男達が見ていた。志度博士や海堂博士達である。
「どう思う、彼の動きを」
志度は海堂に対して問うた。
「そうだな、かなり動きはよくなった」
海堂は先程まで村雨がいた場所に目をやりながら答えた。
「確かにな。今回の特訓でさらに動きはよくなった」
それは志度もわかっていた。海堂の言葉に頷いた。
「だがまだ足りないな」
「足りないか」
「うん。おそらく彼の力はまだまだ秘められている筈だ。それを引き出せてはいないと思う」
「そうか」
「それを引き出すにはまだ時間が必要だ。我々も彼の動きを見守ろう」

「そうだな、そして力にならなければ」
「うむ」
志度は頷いた。
「おおい二人共」
ここで伊藤が出て来た。
「村雨君の様子はどうだい」
「おっ、来たか」
二人は彼に顔を向けた。
「あっちの状況はどうだい」
「いいね。特訓には持って来いの場所だよ」
伊藤は満足したように笑って答えた。
「ならいい。では立花さんには言おうか。午後の特訓は場所を変えてみてはどうかと」
「そうだな。ではすぐに言おう」
海堂と志度もそれに賛成した。
「よし。では我々もまずは腹ごしらえといこう。腹が減っては何もできない」
「そうだな」
二人は伊藤の言葉に従った。そして彼等のテントに入って行った。
彼等はこうして特訓を続けていた。それを遠くから見る者がいた。
サングラスをかけたリーゼントの男である。黒いジャケットと皮のズボンに身を包んでいる。
「やはりここにいたか」
男は村雨達のテントを見下ろして呟いた。
「今なら確実に殺せる」
見れば彼等のテントは丸見えである。攻撃を仕掛けるならば絶好の位置である。

秘められた力その二

「やるか」
彼は攻撃を仕掛けようかと思った。だがそこで胸の携帯に電話がかかった。
「チッ」
彼は舌打ちした。そしてその電話を手にとった。
「俺だ」
そして不承不承それに出た。
「同志よ」
それは暗闇大使の声であった。
「・・・・・あんたか」
男はその声を聞きさらに不機嫌になった。
「一体何の用だ。この任務は俺に一任されている筈だが」
「フフフ、そう不機嫌になるな」
暗闇大使は電話の向こうで笑っていた。
「貴様にいいことを教えてやろうと思ってな」
「いい情報だと!?」
彼はそれを聞きサングラスの奥の目の色を変えた。
「そうだ、聞きたいか」
「聞きたくないと言っても言うだろう」
「まあな」
大使はそれを否定しなかった。
「わしの性格を実によく知っているな、流石だ」
「からかわないでくれ」
男はまた不機嫌な声に戻った。
「話があるなら早くしてくれ。俺は気が短いのは知っているだろう」
「やれやれ」
大使はあえて呆れたような声を出した。

「ではすぐに言うとしよう」
「頼む」
男は言った。焦っているわけでもないが何故かイライラしている様な感じがある。眼下のテントを異様に気にしている。
「早くあいつをこの手で殺したいからな」
サングラスの瞳が憎悪に燃えていた。
「それだ」
暗闇大使は彼に言った。
「村雨良のことだが」
「あいつのことだったのか」
男のサングラスの奥の色がまた変わった。
「一体何だ、教えてくれ」
彼は急かした。
「待て、先程とは言葉が違うではないか」
暗闇大使はそれを楽しむような声で言った。
「どうしたのだ」
「訳はわかっているだろう」
男はそれだけを言った。
「だから教えてくれ、一体何なのだ」
「うむ」
暗闇大使は一呼吸置いた。そして電話の向こうで口を開いた。
「今何故ああした特訓をしていると思う」
「強化の為だろう」
男はすげない声で言った。
「それは俺でもわかるぞ」
「それも確かにある」
暗闇大使はそれを認めた。
「しかしそれだけではない」
「どういうことだ」
男はそれに問うた。

「あの男の力は知っているな」
「無論」
男は答えた。
「伊達に一度負けたわけではない」
そこで男の目に憤怒の炎が宿った。サングラスを照らし爛々と燃え盛っていた。
「だがそれで全てでないとしたら」
「何！？」
「あの男にはまだまだ秘められた力があるということだ」
「・・・・・・・・・」
男はそれを聞き沈黙した。暫し静寂がその場を支配した。
「それは何だ、黒い光か」
「残念だが違う」
大使は答えた。
「ゼクロスの能力は隠密行動に重点が置かれたものであることは知っているな」
「うむ」
その武器も身体も全て闇に潜み、闇から攻める忍のそれであるからだ。
「それだけではなかったのだ。あの男には他にも恐るべきものがあった」
「それが秘められた力か」
「そういうことだ。それが何かまではわしは知らぬがな」
「何故だ、あんたはバダンの最高幹部だろう、知らないことはない筈じゃないのか」
男は問い詰めた。本来ならば処刑されても文句は言えない言葉であった。だが暗闇大使はそれについてはとやかくは言わなかった。それ程器の小さい男ではないのである。
「わしとて知らないことはあるということだ。僅かだがな」
「それがあいつの力だったということか」

「そうだ、あの男は伊藤博士が改造した。彼しか知らないこともある」
「俺達とあいつは同じではなかったのか」
「貴様等の改造は確かにあの男をベースにした」
暗闇大使は言った。
「だがその根幹が違ったのだ。貴様等には黒い光を宿らせた」
「ああ」
「あの男には別の力が宿らされているようなのだ」
「それが秘められた力だというのは」
「それはわからん。だが伊藤博士がそれを知っている可能性はある」
「そうか」
男はそれに対して頷いた。
「じゃあ伊藤博士から聞き出せばいいのだな。ならば話は早い」
彼は再び下を見下ろした。
「すぐにさらって来る。待っていろ」
「だから待てというのだ」
暗闇大使は血気にはやろうとする男を宥めた。
「ここはまずは様子を見ろ」
「様子を見ろ、だと」
男はそれを聞きサングラスの奥の眉を吊り上げさせた。
「今すぐ側にいるというのにか、この俺が」
「待つのも戦いの一つだ」
大使はそんな彼を嗜めた。
「それがわからぬ貴様でもあるまいに」
「フン」
男は渋々ながらもそれを認めた。
「ではわかったな」
「ああ、今は様子を見よう」
彼は暗闇大使に従うことにした。
「だが俺の考えはわかっていると思う」

「それは承知している。あの男の首は貴様のものだ」
「よし」
男はそれを聞き安心したように頷いた。

秘められた力その三

「ならばいい。それを保障してくれるのならな」
「それはこの暗闇大使の名にかけてな」
彼にも誇りがあった。それを自ら捨てるつもりもなかった。
「ではよいな。ことは慎重に運ぶように」
「わかった。ではな」
「うむ」
男はここで電話を切った。そして再び眼下のテントを見た。
「待っているがいい」
彼は低い声で呻く様に言った。
「貴様の首が胴から離れる時をな。その時を楽しみにしていろ」
男はそこから姿を消した。そして何処かに姿を消した。
村雨の特訓は続いていた。今度は樹海の中で行われていた。
彼は一人樹海の中を進んでいた。そこは深い木々の中であった。
立花も滝もいなかった。だが彼等がこの密林の何処かに身を潜め彼を狙っているのは間違いない。
「何処から来るか、だ」
これが特訓であった。彼は孤独と森林戦の訓練を受けていたのだ。
生き物の気配は四方から伝わってくる。しかしそこに立花や滝の気があるか、というとどうもそうではない。人の気は今は感じない。
それでも油断はできない。彼等も歴戦の戦士である自らの気配をある程度は消すこともできる。そして一瞬で側に近付いてくるだろう。
村雨は慎重に辺りを探りつつ場所を移動する。そして木を背にして構えをとった。
それを繰り返しながら場所を移っていく。一瞬たりとも気を抜くわけにはいかなかった。
日の光すらささない。暗闇の中にも似ている。彼はその中を進ん

でいった。
「まだ来ないか」
焦ってはいない。こうした戦いにおいては焦りは禁物である。気の乱れが生じるからだ。
そうすればそこに付け込まれる。一瞬の乱れが死に直結する、密林での戦い、孤独との戦いはそれだからこそ辛いのであった。
後ろから突き刺す様な視線を感じる時もある。二人が村雨の隙を窺っているのは事実だ。決して殺すつもりではないにしろ本気であった。そうでなくては特訓の意味もなかった。
「何時か、だ」
村雨はまた呟いた。
「何時来るかだ」
彼もまた二人が来るのを待っていた。
「姿を見せれば対処し易い」
彼が二人を待っているのはそういう理由からであった。
「そこを狙う。ゲリラに対しては待つのが一番だ」
かってバダンにいた頃そう教えられてきたのを思い出した。彼にとっては決していい記憶ではなかったが。
それでも今はそれが役に立っていた。今実際に彼はその時の経験を生かして動いていた。
「皮肉なものだな」
彼はそれを思い呟いた。
「あのバダンの忌まわしい日々が今役に立っている」
だがそれも運命なのだと思った。
「俺の運命か」
彼はシニカルに笑った。
「ライダーとしての」
姉を失い、記憶を奪われ改造人間となった。そしてライダー達との最初の戦いで心が動いた。そこから伊藤博士と共にバダンを脱出し、その道中で多くのことを学び、感じ取った。そしてヤマアラシ

ロイド、タイガーロイドとの戦いで記憶を取り戻し、ライダーの一員となった。長いようであっという間の出来事であった。

そして彼もバダンとの戦いに身を投じた。ライダー達との戦いがなければ今こうして特訓を受けてもいなかったであろう。

それを思うと不思議だった。しかし同時にそれ等のことが全てあらかじめ予定されていたことのようにも思えるのだった。

「だからこそ運命なのかもな」

彼は宗教めいたことにも思いを馳せた。ライダーは戦う神だとも言う者がいる。悪を打ち滅ぼす為に戦う神なのだと。だが彼等はあくまで人間なのである。

身体が違っていてもその心は何処までも人間なのだ。人の痛み、優しさ、怒り、悲しみ、全てを知る人間なのだ。ライダーは人間なのである。

彼もそれがようやくわかったのだ。多くの戦いと経験を経て。ライダーとなるにはまず人の心を持たなくてはならないということを。

「俺は人間なんだ」

今では確かにそれを言う事が出来る。

「身体がどうなっていようと」

もうこの機械の身体を悲しんだり、憎むこともなかった。心が人間なのだから。

「誰もが最初は苦しむんだ」

先輩に当たる他のライダー達は口々にそう言う。自ら進んで改造手術を受けた白や沖にしろそれを決意するまでにはかなりの苦悩があったのかも知れない。彼等が口に出さないだけで。風見は家族を奪われた悲しみと憎しみからなろうとした。そうした重く暗いものが彼等にはあった。

それを乗り越えていく。そこから本当の意味でのライダーに目覚めていく。彼も多くの戦いからそれを学んでいたのだ。

「俺もライダーになれたのだろうか」

しかしそれはまだだと思った。本当のライダーとは何か、常に思

うことである。
十人のライダーがいれば十人の考えがあるだろう。答えは一つではない。ライダーそれぞれのタイプが違うように。
彼には彼のライダーがある。ならばそれを目指していくしかないのだ。
「それは戦いの中で見極めていくしかない」
彼はそうも考えていた。
「ならば」
それがこのバダンとの戦いにおいて出るか、それはわからない。しかし戦わなくてはならないことに変わりはなかった。
彼はまた動いた。この特訓もその戦いの一貫である。そう考えると身体が動いた。

秘められた力その四

そこに何かが来た。村雨は咄嗟に首を右に動かした。
今まで彼がいた場所にナイフがあった。それは木に突き刺さっていた。
「立花さんか！？」
そう思いながら違う、と思った。彼はナイフを使うことはない。
滝でもないようだ。彼はナイフを投げる術は身に着けてはいない。
では誰か。彼はナイフが飛んできた方を見た。そこにナイフの主がいた。
「お見事です」
それは役であった。彼はゆっくりと前に出て来た。
「貴方もここに」
村雨は彼の姿を認めて言った。
「確か北陸かその辺りに言ったと聞いていましたが」
「事情が変わりましてね」
彼は微笑んでそれに答えた。
「貴方がここで特訓を受けていると聞きまして。それで協力させてもらいに来たのですよ」
「そうだったのですか」
村雨はそれを聞いて納得した言葉を述べた。だが内心では腑に落ちないことがあった。
（何故ここがわかったのだろう）
立花は今日ここで特訓をすることに決めたというのに。
それに何故自分の場所がわかったか。彼には不思議なことであった。
だがそれを問うことはできなかった。役は彼に話しかけてきたのだ。
「迷っておられるようですね」

彼は優しい笑みと共に尋ねてきた。
「え！？」
村雨はそう言われ思わず声をあげた。
「ライダーとして。これからどうあるべきか」
「え、ええ」
答えずにはいられなかった。その通りであるからだ。
だが何故彼の心までわかるのだろう。これもまた不思議なことであった。
（何故だ）
村雨は異様にすら思った。役を見た。
やはり優しげな笑みを浮かべている。だがその笑みにはえも言われぬ凄みがあるようであった。
（彼は一体何者なのだ）
一旦起こった疑念は消えなかった。膨らむ一方であった。
（今俺が考えていることも読めているとすると）
底知れぬ無気味ささえ感じていた。
だが彼の考えはここで強制的に中断されてしまった。
「立花さん達は何処でしょうか」
役は不意に尋ねてきた。
「立花さん！？」
「はい、折角来ましたから。挨拶をしておこうと思いまして」
「そうなのですか」
「どちらでしょうか」
役は再び尋ねた。
「この樹海の何処かに。実は今その立花さんに特訓をつけてもらっているところなのです」
「そうだったのですか」
「はい。多分今も俺を探していますよ。そして攻撃を仕掛けようと狙っています」
「ほう」

役はそれを聞き声をあげた。
「滝さんも一緒です。御二人共それぞれ別々に俺を狙っていますよ」
「それはいいですね。いい訓練になると思いますよ」
「はい」
村雨は役の賛同の言葉に頷いた。
「では私もこれから協力させてもらいたいのですが。宜しいでしょうか」
「俺は別に構いませんよ。相手をしてくれる人が多いならそれにこしたことはありませんから」
「それを聞いて安心しました」
役は微笑んで頷いた。
「では後程。流石に今は何かと不都合がありますから」
「はい」
役は挨拶をした後でその場から姿を消した。そして村雨は特訓に戻った。
それは日が落ちるまで続いた。そしてそれから役も入れての夕食となった。
「やっぱり良はああした場所での戦いが上手いな」
立花はレトルトのカレーを飯盒に入れながら言った。
「こうした時にもライダーの時の適正が出るんだな、つくづくそう思ったよ」
「そういえばそうですね」
滝もそれに同意した。彼もレトルトのカレーを食べている。
「本郷にしろ隼人にしろそうでしたからね。敬介も」
「アマゾンなんかは特にそうだな。あいつ位になると変身してもさ程変化があるようには思えねえな」
「ははは、確かに」
滝はそれを聞いて笑った。茶色い米粒が頬についている。
「筑波君もそうだな。ハングライダーをしていたせいだろうが」
志度もそれを聞いて言った。

「やはり元々の地がライダーに影響しているのだろうな。村雨君はおそらくバダンでの訓練が大きく影響していると思う。こう言うと不愉快に思うかも知れないが」
「いえ」
村雨は伊藤の言葉に首を横に振った。
「そのおかげで今のライダーとしての俺がありますから。それは別に何とも思ってはいません」
「そうか」
皆それを聞き安心したように頷いた。

秘められた力その五

「じゃあその適正についてもよく考えてくれ。そこに答えがあるかも知れないからな」
「はい」
海堂の言葉に対し頷いた。
「では今日はもう休もう。明日も早くから特訓だ」
「みっちりしごいてやるからな」
こうした会話の後彼等は食事の後始末をしそれぞれのテントに入った。そしてすぐに眠りに入った。
「・・・・・寝たか」
それを遠くから見る一つの影があった。あの男であった。
彼はやはり上から村雨達のいるテントを見下ろしていた。見下ろしながら懐から何かを取り出した。
それは煙草であった。一本口に咥えるとライターを取り出した。火を点ける。煙が先から出た。
「ふう」
その煙草を口から離す。そして口から白い煙を吐き出す。
それは闇夜の中に浮かんだ。そしてすぐにその中に消えた。
「そろそろはじめるとするか」
彼は煙草を吸い終えるとその場から立ち去った。そして下に降りて行った。
村雨は起きていた。横になりながらも目を開けていた。
「・・・・・・・・」
目が冴えていた。どうしても眠りにつくことが出来ない。
彼の隣では立花が大きな口を開けて眠っていた。彼を挟んで向こうには滝が横になっている。
彼等は三人で一つのテントに入っていた。三人の博士と役は別のテントである。

彼は姿勢を変えた。仰向けになった。だがやはり眠りにはつくことが出来ない。

「参ったな」

眠れないことに少し苛立ちを覚えていた。

それならば仕方がない。彼は外に出ることにした。

靴を履きテントから出る。そして夜の空気を吸った。

ふと空を見上げる。そこには無限の星の大海が拡がっていた。

「綺麗なものだな」

彼はそれを見て呟いた。考えてみるとライダーになってから空を見上げたことはなかった。

常に目の前の敵と対峙していた。そして激しい死闘を繰り返していた。

それがライダーの宿命といえばそれまでである。だが言い換えるとこれは余裕がなかったことにもなるのだ。

「そういえば沖先輩が言っていたな」

ここで彼は沖一也の言葉を思い出した。

戦いの中にも一輪の花を愛する心も必要だ、と。彼が赤心少林拳で学んだことだという。

「戦いの中でもか」

彼はそれについて思った。

今までの彼は敵を倒し、人々を救うことのみで必死であった。花のことなぞ考えたこともなかった。

「いや」

だが彼はここでふと気付いた。

花とは単に一輪の花だけではないのだ。そこには多くの意味がある。

人の命や平和もそれに入るのだ。ならば彼は既に戦いの中に一輪の花を愛する心を備わっているということになる。

「難しく考え過ぎても駄目か」

その通りであった。真実は時として極めて単純なものなのである。

よく言われることである。書において難解なものは無理をして読む必要がない。何故ならそれは実際には中身が全くないからだという。

これを実証するような話もある。ある偉大な思想家と呼ばれていた男は何を書いているかわからない時は偉大な思想家であった。だが誰にでもわかる文章を書くようになるとただの思想家となってしまったのだ。

否、彼は普通以下どころかまともな知性や常識すら備わっていなかったのであろう。馬脚を露にしたのはさる凶悪な宗教団体がテロに及んだ時であった。

多くの者はこの宗教団体の教組を批判した。テロ行為を行ったのだから当然である。そしてその出鱈目な教義も明らかとなりそれも批判された。

だが彼はこの愚かで卑しい教組を擁護した。曰く彼は偉大な思想家だという。そして最も浄土に近く、テロの犠牲者を踏み躙る発言を平然と続けた。

この程度の男なのであった。何が偉大な思想家なのだろうか。小学生ですら普通にわかる理屈をこの男は全く理解できていないのだ。この様な愚かな男が戦後最大の思想家と言われてきたことは日本にとって実に不幸なことであった。何故ならこの男が知性の象徴なのだから。

村雨は単純に考えてみることにした。そうすればそこから自ずと答えが出て来るように思えたからだ。

「とりあえずは特訓を続けるか。鍛えられもするし」

目の前のことからはじめてみるのも解決方法の一つであった。

「そこから答えも出て来る筈だ」

彼は決めた。これで気が楽になった。

テントに戻ろうとした。しかしその前に何者かが姿を現わした。

「貴様は」

村雨は暗闇の中に浮かぶその男の姿を認めた。

「久し振りだな」
男はニヤリと笑って彼に語り掛けてきた。

秘められた力その六

「ナイアガラ以来か。元気そうで何よりだ」
「何の用だ」
村雨は彼に問うた。
「何の用だ、か」
その男、三影は不敵な空気を漂わせつつ村雨の言葉を繰り返した。
「わかっていると思うがな」
村雨はそれには答えなかった。そのかわりに身構えた。
「用意がいいな」
三影はそれを見て言った。
「確かに俺は貴様を殺しにここまで来た」
そう言いながらサングラスを取り外した。
あの機械の目が村雨を見た。光だけで魂のない目である。
だがそこには憎悪が宿っていた。彼に対する底知れぬ憎悪の眼差しであった。
「この目が何よりの証拠だ」
彼は冷たい声でそう言った。
「今ここで貴様を倒すこともできる」
「やるつもりか」
村雨はその言葉を受けすぐに身構えた。だが三影はそんな彼に対して言った。
「だがそれは今ではない」
「!?どういうつもりだ」
村雨は彼の真意が読めなかった。三影の性格とその目の光からすぐにでも襲い掛かってきそうであるというのに。
「気が変わったのだ。ここに来たのは貴様をこの手で殺す為だったがな」
「ではどうするつもりだ」

「また貴様の前に姿を現わす。その時だ」
彼はまた冷たい言葉を返した。
「その時を楽しみにしているがいい。だが一つだけ言っておこう」
三影は村雨に背を向けた。そして振り向いた。
「貴様を倒すのは俺以外にいないということをな。これだけは忘れるな」
そして彼は闇の中に消えた。後には村雨だけが残った。
「三影・・・・・・」
彼はかっての友が消えた場所を見ていた。そこにはもう影も形もなかった。
この時彼はそこにいるのは自分だけだと思っていた。だがそれは間違いであった。
それを見ている者がいた。役であった。
「全ては予定通りか」
彼は何かを知っているような言葉を呟いた。その目も同じであった。
そして彼は村雨が自分のテントに戻っていくのを確かめると自身もテントへ戻った。そして次の朝何食わぬ顔で村雨の前に出て来た。無論村雨はそれを知らない。
村雨は朝食の後すぐに特訓を開始した。今度のメインの相手は役である。
「今回はこれを使いましょう」
彼は愛用のライフルを取り出した。
「無論実弾は使いませんよ」
笑って村雨に対し説明した。
「遠くからこれで貴方を狙撃します。それを察知し、かわして下さいね」
「はい」
村雨はそれを了承して頷いた。
「この富士の何処からか貴方を狙います。それをかわし何処かにい

る私を見つけその後ろに回り込んでその背中をとる。それができるまで特訓は続きます」
「というと場合によっては何日もか」
「ええ」
役は立花の問いに答えた。
「戦闘にはそうしたケースもありますから」
「その間の食事は携帯だな」
「そうですね。それがなくなれば自分で調達するしかないでしょうね」
滝の問いにも答えた。
「何か話を聞くとレンジャーみたいだな、自衛隊の」
立花はそれを聞いて言った。実際にこの富士では陸上自衛隊レンジャー部隊の訓練も行われている。彼等は自衛隊の中でもパイロットと並ぶ過酷な訓練を受けているのだ。そしてそこから真の精鋭を目指しているのである。
「確かに似ているかも知れませんね。ただ」
「ただ!?」
立花と滝は問うた。
「相手が比較にならない程危険だということです。村雨さんはバダンが敵なのですから」
「・・・・・そうだったな」
二人は役のその言葉にあらためて表情を険しくさせた。
「バダンは常に村雨さんを狙っています。そして何をしてくるか全く予想がつきません。それに対処できなくては力を引き出すことなぞ夢物語です」
「厳しいな」
「そうでなくては勝てません」
彼は博士達にも言った。
「そして世界を守ることも」
「そうだったな」

彼等はそれに頷いた。
「では今回の特訓は役君に任せよう。村雨君、それでいいかね」
「はい」
村雨は伊藤の言葉に頷いた。
「それではすぐにはじめよう。万が一の時は我々が責任をもって村雨君の治療にあたる」
志度が強い声でそう言った。
「だから安心して受け給え。いざとなったら我々がいるからな」
「わかりました」
海堂の言葉に頷いた。こうして村雨と役の特訓がはじまった。

秘められた力その七

彼はまず富士山に登った。言うまでもなく日本で最も知られた霊峰である。

険しい山道を登る。そしてそこで役の狙撃に備えた。

「確かにここは狙われ易い」

富士には木はない。そして足場も極めて悪い。だが彼はそれを知りながらあえて登ったのである。

それは何故か。周りがよく見えるからだ。

見たところ役の姿はない。だが何処からか彼を狙い狙撃する隙を窺っているのだ。

「まずは彼が何処にいるのか見極めてからだ」

彼は最初の攻撃は浴びる覚悟があった。

「そこからだ。それから動いてもいい」

そう考えていた。役の最初の狙撃は何としてもかわすつもりであった。

山を登り続ける。そして頂上に達した。

「さて」

彼は下を見回した。

「どう来るかな」

だが気配はしない。そして数時間が経った。

村雨は気を抜くことなく狙撃を待っていた。だがまだ来ない。

それでも村雨は待つことにした。恐るべき精神力であった。

不意に何かが光った。斜め下からであった。

「来たか！」

彼はすぐに跳んだ。すると今までいたところに銃弾が飛んできた。

彼はそれをかわしたのだ。

着地する。そして銃弾が来た方を見た。見れば樹海の中だ。

「そこか！」

村雨は山を駆け下りた。そして樹海の中に入っていった。
樹海の中を進むのは慣れていた。彼は一人その中を行く。
「何処にいる」
この樹海は日本の秘境と呼ばれている。迷ったら最後出ては来れないとされている。
だが彼はその中を平然と進んでいった。今までの経験と勘が彼を支えていた。
「この程度なら問題はない」
彼にとって、いやライダーにとっては樹海は恐ろしくはなかった。アマゾンが特にそうだが皆密林での戦いを経験してきているからだ。
彼もそれは同じであった。バダンにいた頃は一人アマゾンに放り出されたこともある。
「それに比べれば遙かにましだな」
その時はジャガーや毒蛇等と死闘を繰り広げた。川に入れば鰐やピラニア、アナコンダがいる。電気ウナギもいれば血を吸う魚までいうのだ。
彼はその中を進んできた。この樹海にはそうした猛獣や危険はない。それに広さも比べ物にならなかった。
だからこそ特訓に使われているのだ。アマゾンで一人生き抜いたこともある彼にとってみれば本当に練習に過ぎなかったのだ。
だからこそ落ち着いていた。そして役を探した。
「今度は何処から来る?」
来るのは間違いない。そこを衝くつもりであった。
木に登りその中に潜む。そしてそこから周りを見回した。
「ムッ」
そして彼は遠くの木に一つの影を見た。
見ればライフルを構えている。それが誰か、言うまでもなかった。
「いたか」
村雨は彼を確認した。そしてすぐに行動に移った。すぐにそこから姿を消した。

役はその時村雨を探していた。その手にはライフルがある。
「さて何処でしょうかね」
彼もまた状況は同じであった。狙われているのも同じである。
だからこそ緊張していた。そして木の上で息を顰めている。
ライフルには銃弾が込められている。それで村雨を狙うのだ。無論本物ではないので殺傷能力はない。当たれば赤いインクが飛び散るだけである。
しかしそれでも負けは負けだ。それは許されない。
村雨は気配を消した。そして藪の中に隠れた。
役は辺りを探り続けている。村雨を何としても撃つつもりであった。
「容赦はしませんよ」
そうでなければ意味がなかった。それが彼の為でもあるからだ。
不意に藪が動いた。
「狸か！？」
違った。それより遙かに大きい。
「熊でもない」
そこまでがっしりとしてはいなかった。日本、本州等に棲むツキノワグマは熊の中では比較的小型である。また大人しく人を襲うことはあってもそれはテリトリーを守る為だ。喰うようなことはない。
「ならば」
それが何か見切った。引き金に指を当てる。
出て来た。それに向けて発砲する。
「よし！」
銃弾が当たった。役はそれを見て会心の笑みを浮かべた。
「村雨さん、私の勝ちですよ」
そして村雨に対して言う。だが次の瞬間彼は会心の笑みを強張らせた。
「なっ！」
藪から出て来たのは村雨ではなかった。何とそれは一本の丸太で

あった。
「まさか・・・・・・」
彼は忍術でいううつせみの術を使ったのだ。忍者と呼ばれることもあるゼクロスだけはあった。
「しまった、あの人の特技を忘れていました」
一旦発砲したからにはすぐに場所を移さなくてはならない。狙撃の鉄則である。さもないと死ぬ。
彼は木から飛び降りた。そして別の木に移ろうとする。だがそこで動きが止まった。
「俺の勝ちですね」
後ろから声がした。声の主はわかっていた。
「やられましたね」
役は後ろを振り向いてそう言った。そこにはやはり彼がいた。
「報酬はジュース一本でいいですよ」
村雨は役に微笑んでそう言った。
「安いものでしょう」
「ペットボトルででもいいですよ」
役も笑顔で返した。こうして特訓は終わった。
そして二人は立花達の待つテントへと戻って行った。その途中であった。
「!?」
村雨は不意に立ち止まった。
「どうしました?」
役はそんな彼に尋ねた。
「いえ」
村雨は樹海の中の一点を見ていた。そこに何かを見ているようである。

秘められた力その八

「役さん、気付いているのでしょう」
そしてこう言った。
「来ますよ、あの男が」
「・・・・・・・・・」
役は答えなかった。そのかわりに懐から銃を取り出した。やはり彼は只者ではないようだ。
村雨が見ている場所に影が姿を現わした。それはこちらに来る。次第に大きくなってきた。そして二人の前に姿を現わした。
「待ってくれるとはな。有り難い」
三影は不敵な声で言った。
「自分の死をな」
そしてニヤリ、と口の端で笑った。
「三影」
村雨はそんな彼の名を呼んだ。
「あくまでそうして俺との戦いを望むか」
「当然だ」
彼は即答した。
「俺はバダンの者だ。そして貴様はバダンを裏切った。そのうえ」
彼はここで歯を噛み合わせた。唇から見えるそれは虎の牙であった。
「この俺を倒した。それで充分だろう」
「ふん」
村雨はそれを聞くとすぐに身構えた。
「確かにな。俺の望みはバダンを倒すこと。世界の平和を脅かす貴様等をな」
「理想社会などどうでもいいのか」
「俺は多くの罪もない人々を殺し、その上に築かれる社会を理想社

会とは呼ばん。それは」
「それは・・・・・何だ?」
三影は問うた。
「地獄だ。貴様等はこの世に地獄を築こうとしているだけだ」
「戯れ言を」
三影はその言葉を一笑にふした。
「弱い者、役に立たない者なぞ不要だ。力のある者だけが正義だ」
「力のある者だけが、か」
「そうだ。力こそが正義だ。だからバダンは正義なのだ」
彼は傲然とそう言い切った。
「他に何が必要だ。貴様が守ろうとしている人間共を見ろ」
彼は権力欲と選民思想で濁りきった目で言った。それはバダンの者に特有の目であった。
「弱いからこそ互いに争う。疑い、殺し合う。実に醜いものだ」
「醜いか」
「そうだ。弱いからこそそうする。実に醜い。奴等は存在自体が悪なのだ」
彼は言葉を続けた。
「人間共こそ悪だ。俺達はそんな奴等を粛清しているだけだ」
「粛清か」
「その通り、そして不要な存在を全て消し去り俺達はそこに今までとは全く違う世界を築くのだ。バダンによる理想郷をな」
「首領による暗黒の世界をな」
「貴様にわかるとは思ってはいない」
三影は村雨に対して言い返した。
「裏切り者にはな。貴様は所詮その程度の器だったのだ」
「その程度か」
「そうだ、バダンの偉大な理想を理解できぬ愚か者だ。愚か者はこの世に生きている資格はない」
彼はそう言うとサングラスを外した。

「この俺の手で倒してやる、覚悟しろ」
身体が厚い毛に覆われる。爪が伸び顔が前に出ていく。背中に巨砲が姿を現わし牙が剥き出しになった。
「行くぞ」
彼はタイガーロイドに変身した。その左右に戦闘員達が姿を現わした。
「ここが貴様の墓場だ」
戦闘員達と共に襲い掛かる。まずはその爪で切り裂かんとする。
「来るか」
村雨はそれを冷静に見ていた。その一撃目はすんなりとかわした。そして攻撃を繰り出す。膝蹴りだ。それはタイガーロイドの腹を打った。
だが効果はなかった。タイガーロイドはそれを受けニヤリと笑った。
「無駄だ」
逆に彼を掴んだ。そして投げ飛ばした。
投げ飛ばされた村雨は空中で回転した。そして木を両足で蹴ってその衝撃を殺した。
その反動でタイガーロイドに再び襲い掛かる。頭から突っ込む。
「ならば」
タイガーロイドはそれを見て構えをとった。
「その首、叩き飛ばしてくれる！」
腕の一撃で彼の頭を潰すつもりであった。突攻してくる村雨を見る。
村雨は空中でまた回転した。前転である。
そして浴びせ蹴りを放つ。踵でタイガーロイドの脳天を砕こうとする。
しかしそれもかわされた。タイガーロイドは恐るべき反射神経でそれをかわした。
「無駄だと言っただろう」

彼は村雨の左手に移って言った。
「そのままで俺の相手をできると思っているのか」
タイガーロイドは村雨に対して言った。
「変身しろ。そのままで戦ってもやはり面白くない」
「面白くないか」
「そうだ、ライダーとなった貴様を倒してやる」
彼の目に炎が宿った。
「俺を倒したあの時の貴様をな」
それは憎悪と復讐の炎であった。彼の心そのものが今目に浮かび上がっていたのだ。
「そうか」
村雨はそれを受けても冷静なままであった。
「ならば俺も受けなくてはなるまい」
「当然だ」
タイガーロイドはそれに対して言い放った。
「もっとも俺もまだ切り札があるがな」
そう言ってニヤリ、と笑った。
「フン、あれか」
「それは言わないでおこう」
彼はその邪さを含んだ笑みをたたえたまま返した。
「それを見たければ変身するがいい、今すぐにな」
「言われずとも」
村雨は言葉を返すと変身に構えをとった。辺りを緊迫した空気が支配しはじめた。

変・・・・・・
まず右腕を真横にする。それから斜め上に持って行き左腕はそれと垂直に置く。
それから左腕を斜め上に動かし右腕もそれと一直線になるように動かす。

身体が赤と銀の機械のバトルボディに覆われていく。銀色の手袋とブーツで姿を現わした。

・・・・・身！

左手を拳にし脇に入れる。そして右腕を斜め前に突き出す。

顔の右半分を赤い仮面が覆う。そして左半分も。眼は緑になっていく。

光が全身を包んだ。村雨良は仮面ライダーゼクロスに変身した。

「遂に姿を現わしたな」

タイガーロイドはその姿を認めて笑った。

「それでいい、そうでないと戦いがいがない」

彼はまた笑った。そして背を丸めた。

「ゼクロス！」

彼の名を叫んだ。砲身に光が込められていく。

秘められた力その九

「これが俺の挨拶だ、受け取れ！」
そして砲撃を放ってきた。巨大な砲弾が彼を襲う。
「フン！」
ゼクロスはそれを横に跳びかわした。砲弾はその後ろで派手に爆発した。
「ゼクロス！」
役がそれを見て思わず叫んだ。しかしゼクロスは冷静さを失ってはいなかった。
「大丈夫です」
彼は落ち着いた声で彼に言った。
「それよりも役さんは他の連中を頼みます」
「他の！？」
彼はその言葉にハッとした。見れば戦闘員達が彼とゼクロスの周りを取り囲んでいた。それを見て彼は自分が何をするべきであるか悟った。
「わかりました」
そしてゼクロスに対して言った。
「戦闘員は私がやります。ですからゼクロス、貴方は」
「はい」
ゼクロスはそれに頷いた。言われるまでもなくタイガーロイドと対峙していた。
「今のをかわすとはな。流石だと褒めてやろう」
タイガーロイドは砲撃を何なくかわしたゼクロスに対して言った。
「だがそれも何時まで続くかな。それに俺の力は砲撃だけではない」
「それは俺も同じことだ」
ゼクロスは構えをとりながら言葉を返した。
「俺もやられてばかりでいるつもりはない」

「ふふふ、そうでなくてはな」
タイガーロイドはそれを聞き満足そうに笑った。
「俺も面白くとも何ともない」
腰の二丁の機関銃がうごいた。そしてゼクロスに向けられる。
「もっと楽しませてもらわなくてはな」
その機関銃を放った。それはゼクロスに襲い掛かる。
「今度は機関銃か」
ゼクロスはそれから目を離さなかった。
「ならばこれはどうだ」
腕を前に突き出した。そして手の平から音波を出して来た。
それは機銃弾の信管に当たった。そして全て爆発させてしまった。
「音波にはこうした使い方もある」
「フン」
だがタイガーロイドはそれを見ても尚余裕を崩さなかった。
「その程度は計算済みだ。ならばこれはどうだ」
そして今度は突進してきた。爪でゼクロスを引き裂こうとする。
爪がゼクロスの頭上に襲い掛かる。そして脳を潰さんとしたその時だった。
ゼクロスは姿を消した。そして何処かへ姿を消した。
「ムッ！」
タイガーロイドは彼が姿を消した瞬間目を瞠った。爪は空しく空を切った。
「幻か」
これもまた彼の能力であった。彼は幻を機械により作り出すことができるのだ。
タイガーロイドはそこで動きを一旦止めた。そして辺りの気を探った。
必ず近くにいる、彼は確信していた。だから慌てることはなかった。
「問題は何処にいるかだ。そして」

横目で辺りを見回す。
「何時来るかだ。ゼクロスよ、どう出る!?」
彼はゼクロスが来ると確信していた。そしてそれを待っていた。
不意に頭上から何かが降り立って来た。それは赤と銀の影だった。
「来たか!」
タイガーロイドはそれを両手で掴んだ。そして一気に挟み潰そうとする。
「死ね、ゼクロス!」
激しい衝撃が両腕に伝わる。何かが砕ける音がした。
だがそれはゼクロスではなかった。一本の丸太であった。
「なっ!」
それを見たタイガーロイドは驚愕の色を顔に現わした。またしても彼の幻術であったのだ。
「クッ!」
彼は丸太を粉砕してすぐに左右を見回した。彼の姿は何処にもなかった。
「一度ならず二度までも」
彼は自分がたばかられたと感じた。
「この俺を舐めるとはな」
屈辱が顔に浮き出る。彼は激しい憤りを感じていた。
だがすぐに冷静さを取り戻す。そして再び冷静に辺りを探る。
「だがこの程度で俺が我を失うと思ってもらっては困るな」
そう言いながら口の端を歪めて笑った。
「まだまだ、甘い」
「甘いというか」
何処からかゼクロスの声がした。
「そうだ、俺を倒そうというのならな」
タイガーロイドはゼクロスの気配を探り続けながら言った。
「貴様もわかっているだろう、俺の力は」
「確かにな」

またゼクロスの声がした。
「あの時でそれはよくわかっている筈だ」
ここでタイガーロイドは奇巌山での戦いのことを口にした。
「そして俺はその時よりも比較にならない程強くなっている。貴様よりもな」
「俺よりもか」
「それを確かめたいだろう。ならばこの程度の小細工に何時までも頼らないことだ。全力で来るがいい！」
「わかった」
ゼクロスは声でそれに頷いた。
「ならばこれを受けてみろ」
すると四方八方から十字手裏剣が飛んで来た。そしてタイガーロイドに襲い掛かる。
「フフフ」
やはり彼は笑っていた。
「そうでなくては面白くないわ！」
彼は両腕を振り回した。そしてそれで竜巻を作る。それは彼の身体を覆った。
その竜巻で彼は己を守った。手裏剣は全てそれに巻き込まれてしまった。
「俺に手裏剣は効かぬぞ」
「ふむ」
だがゼクロスの声は変わりがなかった。

秘められた力その十

「これは竜巻では防げまい」
そして今度は爆弾を放ってきた。
「爆弾か」
タイガーロイドはその無数の爆弾を何の感情を込めることもなく見ていた。
「今更その程度で俺が倒せると思っているのか」
そしてやはり余裕に満ちた声を出した。４
腰の機関砲が動いた。そしてそこからまだ銃弾が放たれた。
そしてそれで爆弾を全て撃った。爆弾は彼に当たる前に空中で爆発した。
「俺の機関砲は強烈でな」
彼は勝ち誇った様子で言った。
「竜巻にも負けることがないのだ」
「竜巻にもか」
「そうだ。そこまでは考えに至らなかったようだな」
その竜巻が消えた。タイガーロイドは生身をゼクロスの前に晒した。
「さてゼクロスよ」
彼はまたゼクロスに語り掛けた。
「次はどうするつもりだ？まだ手はあるのだろう」
「戯れ言を」
ゼクロスはそれを受けて呟いた。そして腕から何かを放った。
「これはどうだ」
それはチェーンであった。それでタイガーロイドの首を絡め取った。
「ふむ」
だがタイガーロイドはそれにも慌てることがなかった。

「マイクロチェーンか」
「その通り」
彼は答えた。
「これの力は知っているだろう」
そう言うとグイ、と引いた。それでタイガーロイドの身体が動いた。
だが彼はその力に抵抗しなかった。ただ引かれるだけであった。
「また力が強くなっているな」
「俺も今までの時を無駄に過ごしてきたわけではない」
ゼクロスは言った。
「それを見せてやる」
そして腕に力を込める。腕力とは全く別の力だ。
「喰らえ」
それは電流であった。チェーンを伝ってタイガーロイドに襲い掛かる。
「今度は逃げられまい」
ゼクロスは彼に対して言った。しかしタイガーロイドの態度は変わらない。
「無駄なことを」
「何!?」
ゼクロスはその声に思わず自らも声をあげた。
「この程度の鎖で俺を縛れると思ったか」
チェーンを高圧電流が伝う。だがタイガーロイドはそれに構わず両手でチェーンを掴んだ。
「俺を縛るつもりならば」
彼は鎖を握る手に力を込めた。
「地獄の番犬を縛るチェーンを持って来い!」
そして思い切り引いた。それでチェーンは断ち切られてしまった。
「クッ!」
電流が彼を襲う直前であった。さしものゼクロスも舌打ちをせず

にいられなかった。
「ゼクロスよ」
タイガーロイドは首にかかる鎖を取り払いながらゼクロスに対して言った。
「俺を失望させるつもりか。この程度の攻撃ばかり繰り返すとは」
「クッ・・・・・・」
「この俺を一度は倒した男。この程度だったとは笑わせてくれる」
「誰が！」
ゼクロスはその声に怒りを覚えた。声にも怒気がこもる。
「怒ったか」
タイガーロイドはそれを見て口の端だけで笑った。
「それでいい。そうでなければな」
「まだそんな口を言えるのか！」
ゼクロスの声がまた荒くなってきた。
「フフフ、怒っているな」
タイガーロイドはそれをさも嬉しそうに見ていた。
「怒れ、もっとな。そして俺に打ちかかって来い」
「言われずとも！」
ゼクロスは動いた。そして彼に拳を打ちつける。
タイガーロイドはそれを己の手で受けた。そしてその拳を握り締める。
「それが貴様の拳か」
挑発するように言った。
「まだまだだな」
そしてそれを握り潰そうとする。指に力を込める。
「ウオオッ！」
ゼクロスはその痛みを受けて絶叫する。その声はやはりタイガーロイドを喜ばせた。
「いい声だ、もっと叫べ」
「おのれっ！」

だが彼はここでタイガーロイドの腹を蹴った。
「グッ！」
タイガーロイドはそれに怯んだ。指の力が抜けた。
その隙に逃れた。ゼクロスは再び間合いをとった。
「ククククク」
タイガーロイドは腹を抑えしゃがみ込んでいた。だがその声は笑っていた。
「少しは意地を見せてくれるな」
そして顔を上げた。痛みは顔には出していない。
「安心したぞ、どうやら俺を楽しませてくれそうだ」
「楽しませるだと」
ゼクロスはその声にキッとした。
「俺は貴様を楽しませるつもりはない」
そして彼に対して言った。
「俺は貴様を倒すこと、それしかないのだ」
「バダンもか」
「無論だ。俺の望みだからな」
「ならばいい」
タイガーロイドの声は何故か安堵したものであった。
「俺もこれで心おきなく変身できる」
「変身」
「そうだ、変身だ」
タイガーロイドは答えた。

秘められた力その十一

「見るがいい、ゼクロスよ」
彼の眼は笑っていた。その光は邪悪に満ちていた。
「これが俺のもう一つの姿、あらたな身体だ」
「あれか」
「そうだ、あれだ」
彼は笑いながらゼクロスに答えた。
「再び見せてやる、この俺のもう一つの姿を」
そう言った瞬間にベルトの形が変わった。バダンの紋章からゼクロスのそれに酷似したものになった。
「解き放たれよ、暗黒の力よ」
タイガーロイドは言った。
「そしてこの俺をそれで包み込め、全てを支配する偉大なる首領の力よ！」
ベルトが開いた。そしてそこから黒い光が放たれた。
黒い光はタイガーロイドを包み込んだ。そしてその中で彼の姿が変わっていく。
「フフフフフ」
彼はその中で笑っていた。
「ハーーーーッハッハッハッハッハッハ！」
彼の笑い声が響いた。そしてその中から別の者が姿を現わした。
黒い光が消えた。そして彼がそこに立っていた。
「遂にその姿となったか」
「ククク」
彼はまだ笑っていた。
「どうだ、この姿、そしてこの力」
そこにはゼクロスがいた。だが色が違っていた。
虹色に輝くゼクロスであった。だがその輝きは本来の虹が持つ美

しいものではなかった。
何処か邪悪さが漂っていた。虹の美しさではなかった。邪な輝きであった。
「フフフ、どうだこの姿は」
タイガーロイド、いや虹色のゼクロスは勝ち誇った声でゼクロスに言った。
「素晴らしいだろう。身体に力がみなぎるのがわかるぞ」
「力がか」
「そうだ、素晴らしい力だ」
彼は恍惚とした声で言った。
「暗黒の力だ。ゼクロス、貴様が持っていない力だ」
「俺が持っていない力か」
「その通り。この黒い光は貴様の中にはあるまい」
「そのような邪な力」
彼は毅然とした声を発した。
「欲しいとは思わない」
「フン」
だが虹のゼクロスはその言葉を鼻で笑った。
「貴様は所詮その程度の器だということだ」
彼は完全にゼクロスを見下していた。
「この力の素晴らしさを知らないのだからな」
「一つ言っておく」
ゼクロスは勝ち誇る彼に対して言った。
「その力、この世にあるものではないな」
「それがどうした」
それは肯定の言葉であった。
「この力はネクロノミコンの力だ」
「ネクロノミコンのか」
「そうだ。あの伝説の魔道書のな」
狂えるアラブ人によって書かれたと言われる書である。『死者の

書』という意味でありこれはイギリスで訳された時に名付けられた。本来は『アル＝アジフ』という。夜の砂漠で囁く悪魔の声をあらわしたものだという。今までの魔道を集大成したと言われている書である。

その実在は確かではない。幻の書とも呼ばれ空想の世界にのにあると言われていた。

「あの書が本当にあったというのか」

ゼクロスもこの書のことは聞いていた。だが本当にあるとは思っていなかった。

「そうだ」

虹のゼクロスは答えた。

「この世の闇にあるとされるその書のうちの一冊を」

彼は語った。

「地獄大使が持っていたのだ」

「あの男が」

「そう、そしてそれを暗闇大使が借りた。そして」

「その中の力を使ったのか」

「その通りだ。それこそがこの暗黒の力なのだ」

彼の眼が不気味に笑った。緑だがゼクロスのそれとは異なっていた。陰惨な色の緑であった。

「貴様が備えている筈もない。貴様が組織を裏切った後でこの力が解放されたのだからな。そう、貴様が脱走した後でな」

「何が言いたい」

「何が言いたい、だと!?」

虹のゼクロスは彼の言葉を繰り返した。

「フフフ、俺は貴様より後でゼクロスに改造されたのだ」

「それがどうした」

「まあ焦るな。話は最後まで聞け」

彼は余裕をもってゼクロスを制した。

「俺達は貴様のデータを基に改造されたのだ」

「それは知っている」
「フフフ、焦るなと言っているだろう」
「別に焦ってはいないが。ただ聞きたくはないだけだ」
「聞きたくないか。だが俺は話したい」
優越感に浸った声であった。
「この俺の力をな」
ゼクロスは答えなかった。虹のゼクロスはそれに構わず言葉を続ける。
「俺も他の者も皆それぞれ貴様の力を手に入れている。その証拠に見ろ」
そこで彼は己の肘をゼクロスに見せつけた。
「これは十字手裏剣だ。先程貴様が俺に投げたものと同じだ」
「俺の手裏剣か」
「そうだ。貴様のそれと全く同じだ」
ゼクロスはそれを聞いて違和感を感じずにはいられなかった。これは彼だけのものであると今まで思っていたからだ。
「そしてこれも」
今度はチェーンを取り出した。
「貴様のものだったものだ。だが今では俺達も使える」
「所詮猿真似だ。それがどうした」
「それは否定しない」
虹のゼクロスはそれに対して反論はしなかった。
「だがこの黒い光は備わってはいないだろう。ネクロノミコンのこの力は」
「俺にはその様なものは不要だ」
ゼクロスは吐き捨てる様に答えた。

秘められた力その十二

「俺にはライダーとしての心がある。それ以外のものは必要ない。暗黒の力などはな」
「そう言うと思っていた」
虹のゼクロスはそれを予想していた。
「だがな」
しかし次の言葉も用意していた。
「脳に秘められた力を極限まで引き出したうえで身に着けたこの力に勝てるか。この力に」
「当然だ」
ゼクロスはそれに臆することなく答えた。
「必ず勝つ、それがライダーの宿命だ」
「宿命か」
「そうだ。貴様等バダン、いや悪は滅びる運命にあるのだ。俺達ライダーの手でな」
「それはどうかな」
虹のゼクロスは再び不敵に笑った。
「俺のこの力を見てそれが言えるかな」
「無論」
ゼクロスは躊躇することなく答えた。
「この俺がライダーでいる限り貴様等には負けない」
そう言いながらナイフを取り出した。
「貴様もここで倒す」
「フフフ」
虹のゼクロスもこれに応えナイフを取り出した。そしてそこに暗黒の光を宿す。
「ならば来い。そしてこの暗黒の力を味わうがよい」
「行くぞ」

ゼクロスは前に出た。そしてナイフを横に振った。
それは虹のゼクロスの首を掻き切らんとする。だが彼はそれを己のナイフで受けた。
普通に受けたのではない。その暗黒の力で受けたのだ。
ゼクロスのナイフはその力により溶けた。そして二つに分かれ刃の部分は地に落ちた。
「ククク」
虹のゼクロスはそれを見て哄笑した。ゼクロスは危機を察し咄嗟に後ろに跳ぶ。
「クッ！」
そして再び間合いを置いた。そこへ虹のゼクロスの手裏剣が来た。
ゼクロスはそれを己も手裏剣を出し防いだ。双方の手裏剣が空中で激しくぶつかり合う。
そして衝撃音と共に地に落ちる。どうやら武器の性能はそれ程変わらないようであった。
両者は森の中を跳んだ。そして駆けながら互いの隙を窺う。体術もほぼ互角であった。
だが虹のゼクロスの顔には焦りも危機もなかった。彼は単純に戦い、いや狩りを楽しんでいるように見えた。
「そうだ、もっと動け」
彼はそれを証明するように言った。
「そして俺をもっと楽しませろ」
彼はゼクロスから目を離すことなく言葉を続ける。
「そうでなくては倒す介がないからな」
明らかにそれを狩りだと認識していた。彼はゼクロスを獲物だと認識していた。
時折攻撃を放つ。それは彼を狙っていた。しかし殺す為のものではなかった。
追い詰めていくようであった。彼はジリジリと間合いを詰めてきていた。

駆けながらその脇に来た。それと同時にナイフを繰り出す。
「死ね！」
そしてそれで首を落とそうとする。刃には黒い光が宿っている。
だがゼクロスは紙一重でそれをかわした。走りながらバク転をする。
そしてその力を使って下から蹴りを浴びせる。それは虹のゼクロスの顎を狙っていた。
「ヌッ！」
虹のゼクロスも後ろにのけぞった。そしてその蹴りをかわした。
「そうでなくてはな！」
笑いながらバク転で態勢を整える。そして起き上がったところのゼクロスに攻撃を仕掛けた。
「喰らえっ！」
それは拳であった。それでゼクロスの頭を砕こうとする。
「ガハッ！」
ゼクロスの頬を直撃した。彼は後ろに弾き飛ばされた。
「アイディアはよかったが」
虹のゼクロスは木に叩き付けられたゼクロスに歩み寄りながら言った。
「俺には通用しない。それが計算違いだったな」
「おのれ」
ゼクロスは全身に鈍い痛みを感じていた。だがそれでも立ち上がろうとする。
しかしダメージは思ったより大きかった。身体の動きが鈍い。
「俺の拳を受けたのだ、当然だな」
虹のゼクロスはそれを見ながら笑った。
「そしてそれが命取りとなる」
「命取りか」
「その通り。これで終わりだ」
彼はそう言いながらゼクロスの頭を掴んだ。

「このまま貴様の脳をこの指で潰してくれる」
指を彼の頭に突きたててきた。
「もう逃れられぬ。観念するがいい」
「誰が」
だがやはり立てなかった。彼の身体は思うように動けなかった。
「ククククク」
虹のゼクロスはそんな彼を見下ろし愉快そうに笑った。彼は勝利を確信していた。
「もう逃れられはせぬ。諦めるのだな」
指が入っていく。頭を覆う護りがミシミシと音を立てていた。
「ゼクロス」
そこに戦闘員達を倒し終えた役が来た。
「遅かったな」
虹のゼクロスは彼の方を振り返り言った。
「今からこの男は死ぬ。この俺の手でな」
「ゼクロスが」
「そうだ。今からそこで見ているがいい。正義の戦士とやらが死ぬ光景をな」
虹のゼクロスはやはり笑っていた。
「貴様は殺さぬから安心しろ」
そして彼に対して言った。
「どのみち弱く愚かな人間共は我等の理想世界において淘汰されるのだ。それまでの命、精々楽しんでおくがいい」
「何を言うかと思えば」
役は彼のそんな言葉を笑い飛ばした。
「実にありふれた言葉ですね。それでどうするつもりですか」
「何!?」
虹のゼクロスは嘲笑を浴びて顔色を変えた。
「人間よ。俺を侮辱しているのか」
「侮辱、確かに」

彼はまた笑った。
「愚かな存在を笑うのが侮辱というのなら。私が貴方を笑うのがそうでしたら」
「・・・・・死にたいのか」
虹のゼクロスの言葉に怒気が篭りだした。
「残り少ない命、折角おいてやろうというのに」
「生憎ですが」
だが役はその言葉にも怯んではいなかった。
「私達人間はこれから大きく羽ばたく運命にあります。貴方達とは違ってね」
「戯れ言を」
「戯れ言ではありませんよ」
ここで彼はまた言った。
「定められた運命です。人類の未来は」
その目は真実を語っているという確信に満ちていた。曇りは全くなかった。

秘められた力その十三

「未来か」
だが虹のゼクロスは口の端を歪めて笑った。
「我等の糧となるだけの存在だというのに」
「糧」
役はその言葉に対してシニカルな声を出した。
「そんなことはこれからの未来にはありませんが」
「また未来か」
虹のゼクロスはそれを聞いてまた腹立たしさを憶えた。
「では貴様はこれからのことを全て知っているというのか」
「ええ」
役は答えた。
「完全にね。虹のゼクロス」
「何故俺の名を」
「いえ、こう言いましょうか。三影英介」
彼は不敵に笑いながら言った。
「貴方の運命も知っていますよ。貴方は敗れる」
「馬鹿なことを」
「いえ、事実です。貴方はゼクロスにより倒されます。それはもう既に決められていることなのです」
「・・・・・貴様はどうやら冗談が過ぎるようだ」
彼は怒りに満ちた声でそう言った。
「そこにいろ。ゼクロスの始末が終わったら次は貴様だ。本来ならば嬲り殺しにしてくれるところだが特別に苦しまずに殺してやる」
「それはどうも」
だが役は尚も余裕を保っている。
「では存分にゼクロスの相手をして下さい」
「言われずともな」

彼はそう言うと指に力を入れた。指が人口骨を砕き脳に近付いていく。
灰色の脳漿が出て来た。それが指を染めていく。
指は更に進んだ。そしてそれが脳に達した。
「いよいよですね」
役はそれを見ながら笑っていた。今ゼクロスが死のうとしているというのに。
「さあ、ゼクロスよ今です」
ゼクロスは今まで何も言わなかった。彼は何とかして逃れようとしていたが虹のゼクロスの指の圧力の前に抗することが出来ず呻いていたのだ。
「グググ・・・・・」
逃れることは出来なかった。そして指が脳を貫いた。
「死ね」
虹のゼクロスはそれを感じて言った。彼はその顔に残忍な歓喜の色を浮かべた。
「これで最後だ」
指がさらに深く入った。するとその瞬間光がそこから漏れてきた。
「何っ!?」
虹のゼクロスはそれを見て思わず動きを止めた。光はすぐにゼクロスの全身を覆った。
「よし」
役はそれを見て会心の笑みを浮かべた。
「全ては予定通りだ」
光は彼を覆う。そしてそれはオーラの様に包み込んでいる。
「さあゼクロスよ、今こそ本当の力を発揮する時です」
光は黄金色から赤に変わっていく。そしてそれと共にゼクロスの身体が動きはじめた。
「何ッ!?」
虹のゼクロスはそれを見て驚きの声をあげた。

「まさか俺の圧力を受けても尚動けるとは・・・・・・」
「彼の力を侮っていましたね」
役はそれに対して言った。
「今までの力は全てではなかった」
「俺が知らないとでも思っているのかっ」
虹のゼクロスは語気を荒わげた。彼は怒りを抑えられなくなっていた。
「ええ」
役はそんな彼を挑発するように言葉を放った。
「そう言わずして何と言いましょう」
「貴様・・・・・・」
「おや、怒っておられるのですか」
「調子に乗るなよ、人間が。貴様から始末してもいいのだぞ」
「それができればね。今貴方の手の中で何が起こっているか、御覧なさい」
「ぬうう」
ゼクロスの身体は赤い光に覆われていた。そして動きが活発になってきた。
「俺は・・・・・・」
彼は言った。その手をゆっくりと動かした。
「ここで負けるわけにはいかない」
そして虹のゼクロスの腕を掴んだ。
「何・・・・・・」
虹のゼクロスはその動きに戸惑った。力が緩む。
隙も生じた。その隙を逃すゼクロスではなかった。
ゼクロスは立ち上がった。そして掴んでいるその手を思い切り振り被った。
「うおおおおおおっ！」
そのまま投げた。虹のゼクロスは投げ飛ばされた。
「おのれっ！」

だが彼は空中で回転して態勢を整えた。そして何なく着地した。
「まさか俺の力を退けるとはな。それが秘められた力だというのか」
「秘められた力」
ゼクロスはその言葉にようやく己の身体の変化に気付いた。そして自分の身体を見回す。
「これは・・・・・・」
ここでようやく己の身体を包む赤い光に気付いたのだ。
「それが貴方の力です、ゼクロス」
役が彼に言った。
「役さん」
ゼクロスは彼に顔を向けた。彼はその力がまだわかっていなかった。
「その力は貴方の奥底に秘められていたものです」
「奥底に」
「そう、今までは攻撃を放つ瞬間にのに現われていたものです」
「あれか」
虹のゼクロスはその赤い光に気付いた。彼は一度その攻撃を奇巌山で受けているからだ。

秘められた力その十四

「まさかあの時のあれがそうだったとは」
「今まで貴方はそれを攻撃の瞬間にしか出せませんでした」
「何故ですか」
「気だからです」
「気」
「はい。それが極限にまで達した時にその赤い光は現われるものでした。言うならば切り札です」
「切り札」
「そうです。簡単に言いますとそうなります」
役は言った。
「それこそが貴方の秘められた力だったのです。それを自由自在に使いこなす力こそが」
「そして俺は今それを身に着けた」
「ええ。他ならぬバダンの手によってね」
役はゼクロスににこやかにそう語りかけながらもう一人のゼクロスを見た。
「御苦労様です。感謝しますよ」
「感謝だと」
「ええ。わざわざ彼の力を引き出して下さって。これからの貴方達との戦いがぐっと楽になりましたよ」
「俺を馬鹿にしているのか」
虹のゼクロスの身体が黒い光に覆われだした。
「言え。返答次第によっては容赦せんぞ」
その黒い光は怒りに満ちたものであった。どうやら彼は黒い光を操るらしい。ゼクロスのそれとはまた違うようだ。
「そう聞こえなかったとしたら残念なことですね」
彼はあくまで強気であった。その黒い光にも臆することはなかっ

た。
「貴様！」
彼は激昂した。黒い光を全身に纏ったまま役に襲い掛かった。
「ここは俺が」
だがゼクロスがそこで出て来た。
「三影、貴様の相手は俺の筈だ」
「ぬかせ！」
まるで獣の様な声であった。虹のゼクロスは黒い光を纏った拳を繰り出して来た。
「死ねっ！」
その拳はそれまでのものとはまるで違っていた。怒りに任せた荒々しいものであった。
ゼクロスはそれを何なくかわした。そして逆に膝蹴りを放った。
「この程度なら」
それは虹のゼクロスの腹を打った。
「グブッ！」
「今の俺にとって問題はない」
呻き声を挙げる敵を見下ろしながらそう言った。
攻撃はそれだけでは終わらなかった。肘を下ろした。
それが虹のゼクロスの背を打つ。彼はさらに声をあげた。
「グオッ！」
だが彼もやられっぱなしで終わるような者ではなかった。反撃に転じることにした。
上からアッパーを出す。それでゼクロスの顎を砕くつもりであった。
ゼクロスは首を左に捻った。そしてその態勢のままそのアッパーを繰り出した腕を掴んだ。
その掴んだ手を捻ろうとする。しかし虹のゼクロスはその瞬間何と腕の関節を外した。
「ぬっ！」

そして彼は無理な態勢をとった。腕を極限まで伸ばして屈んだのだ。
その下から蹴りを出した。それはゼクロスの腹を狙っていた。
蹴りがゼクロスを打った。今度は彼がダメージに苦しむ番であった。
「ググッ」
腕が離れた。虹のゼクロスは腕の関節を元に戻すとすぐに間合いを離した。そして仕切りなおしにかかった。
「どうだ、これは予想がつかなかっただろう」
だが腕にはそれなりのダメージを受けたようだ。彼は腕を押さえていた。
「勝つ為には何でもする。勝利こそが正しいのだからな」
「まだ言うのか」
ゼクロスはそれを聞いて小さな声で呟いた。
「フン、これだけは変わらん」
虹のゼクロスの声は弱ってはいなかった。
「俺の信念は変わらんのだ。何があろうともな」
「何があろうともか」
「そうだ、ゼクロス」
そして目の前の敵の名を呼んだ。
「貴様を倒すこともな。今ここで決着をつけてやる」
「それも変わらないのだな」
「無論、俺が正しいか、貴様が正しいか、今ここではっきりさせてやる」
「わかった」
ゼクロスも身構えた。そして虹のゼクロスを見据えた。
「次で決める。覚悟はいいな」
「貴様こそな」
二人は気を溜めた。二つの光がその場を覆った。
それを見る役の顔が左右から照らし出されていた。赤い光と黒い

光、その光により彼の顔は二つに別れていた。それはまるでヤヌスの様であった。

彼は動かなかった。そして二人の戦いの行く末を注視していた。だがここで思わぬ参入者が姿を現わした。

「待つがいい」

二人の間に別の影が姿を現わした。

「ムッ！」

「誰だ！」

二人はほぼ同時にその影の方を向いた。影は急激に人の形をとっていった。

「二人共、落ち着くがいい」

それは軍服を身に纏った男であった。暗闇大使である。

「それ程焦ることもあるまい」

「暗闇大使」

二人だけでなく役も彼の姿を認めその名を呼んだ。

「一体何故ここに」

「ふふふふふ」

役の問いには答えなかった。その替わりに無気味な含み笑いを出した。

「同志が心配になってな」

「同志だと」

「そうだ。三影、いや虹のゼクロスよ」

彼は虹のゼクロスに顔を向けた。その顔が黒い光に覆われる。

「今は退け。時は来てはおらぬ」

「またか」

彼はそれを聞いて不満を露にした。

秘められた力その十五

「いつもそう言うがでは一体何時その時が来るというのだ」
「それは近い」
「今ではないのか、そしてそうやって俺を何時まで待たせるつもりだ」
「これは首領の御命令である」
暗闇大使はここで峻厳に言い放った。
「首領の・・・・・・」
「わかったな。では大人しくさがるがいい」
「・・・・・わかった」
流石に不満があろうとも押し殺さざるを得なかった。バダンにおいて首領こそ唯一無二の存在であるからだ。
「ゼクロス」
ゼクロスに顔を向けた。
「今は退く。だが忘れるな」
その顔には憎悪が浮かび上がっていた。黒い光にそれは包まれている。
「貴様は俺が倒す。必ずな」
そう言い残すと姿を消した。黒い光の中に消えていった。
「これでよし」
暗闇大使はそれを見届けると満足気に笑った。
「ではわしも帰るとするか」
「待て」
呼び止める声があった。ゼクロスのものであった。
「何だ」
彼はそれに反応し顔を向けた。
「貴様はこの日本で一体何を企んでいるのだ」
「企んでいる」

「そうだ。何故この国に戦力を集結させている。どういうつもりだ」
「愚問だな」
彼はそれを口の端だけで笑い飛ばした。
「何かと思えばそんなことか。詰まらぬ」
「詰まらないだと？」
「そうだ、そんなことはわかっているだろう、他ならぬ貴様達自身が」
「俺達が」
「そうだ。我々の行動は一切わかっているだろう」
「というとやはり」
「そういうことだ。ゼクロスよ」
彼はゼクロスを見据えた。
「この日本で最後の決戦を挑む。貴様等とこのバダンの最後の戦いだ」
「最後の」
「そうだ、我等は必ずや貴様を倒す。そして」
「そして」
「ふふふふふ」
彼は無気味な哄笑を発した。
「貴様等を倒しこのバダンの世界を築き上げるのだ。貴様等を一人残らず倒したうえでな」
「そんなことが出来るとおもっているのか」
ゼクロスは少し感情を込めた声を発した。
「我がバダンに不可能はない」
だが暗闇大使はあくまで強気であった。
「だからこそ言うのだ」
「むっ」
彼は言葉を詰まらせた。だがそれは一瞬のことだった。
「この日本は貴様等の生まれ出た地。この地で貴様等を倒す為に我等は集結したのだ」

「俺達を」
「日本は貴様等と共に滅びる。そしてその跡地に我等の最初の帝国が誕生するのだ。貴様等十人の首を偉大なる首領の御前に出してな」
彼はその光景を思い浮かべて笑っていた。その時のライダーの血に酔っているかのようであった。
「特にゼクロス。貴様の首を見るのを楽しみにしているぞ」
「戯れ言を」
「それが戯れ言かどうか」
彼はその身を翻した。
「すぐにわかることだ。ククククク」
そして闇の中に消えていった。後には何も残ってはいなかった。
「消えたか」
ゼクロスは彼が消え去ったのを確かめて呟いた。
「いつもながら消えるのが早い奴だ」
「それだけあの黒い光の力を完全に我がものとしているのでしょう」
隣にいた役が言った。
「そうでなければあそこまで素早く移動はできません」
「そうなのですか」
「ええ。そして彼の力はあれだけではありません」
「改造人間の姿の時以外にもですか」
「はい。恐らく彼もまたあれは仮の姿です。他の大幹部達がそうであるように」
「正体はまた別のもの」
「そうです」
役はそれを深刻な表情で言った。
「その正体の姿は今の比ではありません。多くの大幹部達がそうであるように」
「デルザーの改造魔人達と同じ位でしょうか」
彼は大幹部達とは戦ってはいない。改造魔人であるヘビ女、マシーン大元帥と戦ってはいるが。

「デルザーのですか」
「ええ。彼等も大幹部と同等に強さを持っていますし」
「そうですね」
役は考えながら言った。
「彼等よりも遙かに強い可能性がありますね」
「マシーン大元帥よりもですか」
マシーン大元帥はデルザーにおいても随一の強さを誇っていた。
その圧倒的な戦闘力はゼネラルシャドウすらも凌駕し、彼から指揮権を何なく剥奪したことからもその強さがわかる。
「彼も確かに強かった。しかし」
「しかし!?」
「暗闇大使にはあの黒い光の強さがあるのです。侮ってはいけませんよ」
「・・・・・そうでしたね」
ゼクロスはその言葉に対して頷いた。
「油断はできませんね」
「そうです。おそらく彼もまた戦いにおいては決死の覚悟で挑んで来るでしょう」
「決死で」
「それが大幹部です。戦場においては常に最前線で立つ。それに彼は地獄大使の従兄弟です」
「あの地獄大使の」
彼はベトナムの頃から常に前線に立っていた。そしてその参謀である暗闇大使もだ。
「戦いに無上の喜びを見出しているのです」
「無上の」
「そうです。だからこそ貴方に対しても並々ならぬ関心を向けているのでしょう。単にライダーとしてだけでなく」
「迷惑な話ですね」
「しかしそれが戦いです」

役は冷然とそう言い切った。
「そして向かって来る敵は倒さなくてはならない」
「それはわかっています」
ゼクロスはそれに対して反論した。
「いや、違うな」
彼は言葉を訂正した。
「バダン、この世の平和を乱す存在を許すわけにはいかない。そうした存在は何があろうと倒す。それがライダーです」
「それを聞いて安心しました」
役はスッと微笑んだ。
「では行きますか、皆のところへ」
「あ、はい」
彼はここで立花達のことを思い出した。

秘められた力その十六

「力を引き出すこともできましたしもうここには用がありません。帰りましょう」
「そうですね。何かあっという間でした」
「そういうものですよ、この世にある全てのことは」
彼は何やら不可思議な言葉を発した。
「世界にある全ての事柄は一瞬のことに過ぎません。無限の時の中では」
「・・・・・・・・・」
インド哲学の様な言葉であった。ゼクロスはそれを黙って聞いていた。
「しかしその中で何をするのかが重要なのです。違いますか」
「いえ」
ゼクロスも大体同じ考えであった。否定するつもりはなかった。
「面白くないですかね。こんな話は」
「そうは思いません」
彼もそうした話には興味のある方であった。
「俺達はつまり永遠の時間の中で戦っているのですね」
「はい。少なくとも人間にとっては永遠の時間の中で」
役は答えた。
「人間の生きている時間は僅かなものです。この宇宙の時の中では」
「その宇宙もまた永遠の時の中の一つに過ぎない」
「はい。インドにおいてはそう考えられています」
インド哲学は極めて独特の世界観を持つ。輪廻転生の思想があり人は死んでも転生するのだ。そして魂はその時の間を漂うようにして生きる。
人も神々も魔族も同じである。彼等はその輪廻の中で生きているのだ。

「俺もそうなのかも知れないのですね」
「そうですね」
役はそれを否定しなかった。
「中には輪廻から解き放たれた者もいますが」
「そんな者もいるのですか」
「ええ。ごく僅かですがね。確かにいます」
「そうなのですか」
「彼等は彼等でその輪廻の秩序を守っているのです。そうした意味で彼等もまた輪廻の中にいる」
「またややこしいですね」
「難しく考える必要はありません」
だが役はここで断った。
「人は死んでまた生まれ変わる。宇宙もその宇宙を無数に置く世界全ても」
「何もかもがですか」
「そうです。宇宙にしろ大樹の木の葉の一つに過ぎません」
「面白いことを言いますね」
ゼクロスはそれを聞いて笑った。
「それでは俺達が今生きているこの宇宙もその大樹の一葉に過ぎないのですか。そしてその葉が無数にある」
「はい」
「その中で戦っているに過ぎない。俺達は実にちっぽけな存在なのですね」
「それは違います」
だが役はそれは否定した。
「そこに生きている者は全てそれぞれの世界を持っているのです」
「それぞれの世界を」
「はい。それは大きさも実は変わらないのです」
「同じなのですか」
「ええ。それは心そのものなのですから」

「心」
「そうです。ゼクロス、貴方の心もです」
役はそこでゼクロスの目を見た。緑の機械の目だ。だがその目は人のものである。機械であってもそれはまごうかたなき彼の目であった。
「俺の心も」
「そう。貴方の悪と戦うその心もまた世界の一つ。ライダーは一人一人が世界そのものなのです」
「十の世界ですね」
「ええ。正義もまたそれぞれです。ライダーそれぞれが世界であるように。ただ」
「ただ!?」
「貴方達が目指すものは同じです。この世に平和をもたらすこと。それは貴方達が最もよくわかっている筈です」
「・・・・・はい」
ゼクロスはその言葉に対して頷いた。否定はしなかった。
「だからこそよく考えて下さい、世界を守るということを。そしてその大切さを」
「大切さを」
「最も貴方達ライダーは私なぞより遙かそれについておわかりですが」
「まさか」
だが役の微笑みはそれを告げていた。彼が何よりも、誰よりも世界を守ることの意義と大切さを知っていることを。
「では行きましょう。お話はこれで終わりです」
「は、はい」
ゼクロスはその言葉に我に返った。
「皆待っていますよ。貴方が生まれ変わったその姿を見ることを」
それが最後の言葉であった。二人はその場を後にした。そして立花達の待つテントへと向かった。

「そうか、あの力を完全に我がものとしたか」
無数のマネキンが置かれた無気味な一室があった。暗闇大使と三影はそこで首領の声を聞いていた。
二人は恭しく頭を垂れていた。マネキンはその周りにまるで林の様に立っていた。
その中のどれかからだろうか。首領の声はそこから聞こえていたのだ。
「ハッ、申し訳ありません」
三影は頭を垂れたまま首領に対して言った。
「我を忘れてしまいました。この度の失態は万死を以って償います」
「まあ待て」
だが首領はそんな彼を止めた。
「これは予定事項だ。貴様が今償う必要はない」
「予定事項と言いますと」
三影はそれを聞いて顔を上げた。
「フフフ、あの男の力が開放されるのは予想していたということだ」
首領は自信に満ちた声で答えた。
「それよりも三影よ」
「ハッ」
「今は休むがよい。そして次なる戦いに備え英気を養っておくがいい」
「わかりました」
彼はそう答えると黒い光に覆われた。そして消えていった。
後には暗闇大使だけが残った。彼は頭を垂れたままである。
「さて」
首領は彼に言葉をかけてきた。
「どうやら貴様の方は極めて順調なようだな」
「ハッ」
彼は頭を垂れたまま答えた。
「期待しているぞ。貴様のその力がライダーとの戦いの切り札とな

る」
「わかっております」
彼は恭しい声で答えた。
「この暗闇大使偉大なるバダンの首領の為に全てをなげうってライダー達を全て倒して御覧に入れます」
「だが奴等の首は他の者も狙っているぞ」
「それはわかっております」
彼は答えた。
「ですがそれが何だというのでありましょう。私が奴等の首を獲るというのは既に決まっていることです」
そしてニイイ、と笑った。
「この力、思う存分お見せしましょう。その時は近付いております」
「フフフ、楽しみにしているぞ」
首領はそれを聞き嬉しそうに答えた。
「貴様のその力を見るのが今から待ち遠しくて仕方がない程だ」
「お褒めに預かり光栄です」
「褒め言葉ではない」
だが首領はそれを否定した。
「事実だ。それは褒め言葉にはならないだろう」
「ハッ」
「私の世界が遂に誕生するのだ、貴様がライダー達を一人残らず倒したその時に」
「はい」
大使は答えた。
「それは約束致しましょう。必ずやその御前にライダーの首を持って参ります」
「うむ、頼むぞ」
首領はやや鷹揚に言葉をかけた。
「貴様ならばできる」
「はい」

「そして暗黒の世界が誕生するのだ」
「我等が理想の世界が」
「そうだ、その時が遂に来る。今まで果たし得なかったその世界が」
その声は喜びに満ちていた。
「フフフフフ」
首領は笑い声を発した。地の底から響く様な声であった。
「ハハハハハハ」
暗闇大使も共に笑った。哄笑が無気味なマネキンの林の中に響き渡る。
マネキンが消えていった。それと共に首領の気も。暗闇大使はそれを見届けるとゆっくりと立ち上がった。
「フフフ・・・・・」
そして彼も消えた。後には何も残ってはいなかった。

秘められた力　　完

２００４・１１・８

嵐の前その一

嵐の前

「おやっさん、お帰りなさい」
村雨の特訓を終え、アミーゴに帰ってきた立花に後ろから声をかける者がいた。
「その声は」
立花は後ろを振り返った。そこに彼はいた。
「暫くです」
それは神だった。彼はにこやかに微笑んでいた。
「おう、何か大分会っていなかった感じだな。元気そうで何よりだ」
立花も笑顔になった。彼の顔を見ることができてやはり嬉しいのだ。
「ところで向こうはどうなったんだ？まあ終わったからこっちに来たんだろうが」
「ええ、まあ」
だが彼の顔は浮かなかった。
「何かあったな」
立花はそれを素早く見抜いた。そして問うた。
「わかりますか」
「わからない筈ないだろう、わしを誰だと思っているんだ」
「おやっさんです」
「そうだろう、御前等のことなら何でもわかるんだ。で」
立花はそう言いながら神を見上げた。
「何があったんだ？」
「いえね」
彼は浮かない顔のまま答えた。
「奴等急に姿を消したんですよ。どういうわけかわかりませんけれ

ど」
「急にか」
「ええ。おかしいと思いませんか？」
「確かにな。奴等はとにかくしつこいからな」
立花も彼等のことはよく知っていた。だからこそわかった。
「御前の行ったところだけか？それは」
「いや、そこまでは」
神もそこまではわからなかった。だがここでもう一人やって来た。
「こっちもそうでしたよ」
城が姿を現わした。
「茂か」
「俺だけじゃありませんよ、ほら」
親指で後ろを指し示した。そこには筑波もいた。
「洋の奴のところもらしいですよ。奴等は急に姿を消した。一週間前にね」
「一週間前か」
神はそれを聞いて右目を顰めさせた。
「ええ」
城はそれを見て少し驚いた顔をして答えた。
「俺の方もだ。丁度一週間前に姿を消した」
「神さんのところもですか」
筑波が彼等のところに来て言った。
「こっちもです。どういうわけか奴等は急に姿を消しまして」
「御前のところもか。一体どういうことだ」
「わかりません。けれどこれは何かありますよ」
「だろうな。何かない方がおかしい」
神と筑波はそう言って考え込んだ。城もである。ここで立花の携帯が鳴った。
「はい。お、谷さんか」
立花は彼の声が普段と違うことに気付いた。

「・・・・・そっちもですか」
そして急に深刻な顔になった。
「おい」
携帯の電話を切った後で三人に顔を向けた。そして言った。
「谷さんのところに志郎と一也が来たらしい」
「そして何と？」
「一緒だ。やっぱり一週間前に奴等は姿を消したらしい」
「やはり」
三人はそれを聞いて頷いた。
「そうだと思いましたよ」
「とりあえずは中に入ろう。谷さんと二人もすぐにこっちへ来るらしいしな」
「わかりました」
三人は立花に従いアミーゴの中に入った。そこには結城がいた。
「どうも」
彼は立花と三人に挨拶をした。
「御前のところもか」
「ええ」
彼は立花の質問の意味がわかっていた。真摯な顔で頷いた。
「どういうことだろうな」
「まさか奴等がびびって逃げたとか？」
カウンターにいた史郎が言った。
「馬鹿言え、そんな筈があるか」
立花はそれを一笑に伏した。
「御前も奴等のことはわかってるだろうが。そんな連中か」
「やっぱり」
「しかし問題は奴等がどうして姿を消したかですね」
結城がそこで言った。
「やっぱり何かあるでしょうね」
「ああ」

立花は頷いた。そこに谷が入って来た。
「どうも」
「おお」
立花とライダー達が彼に顔を向けた。
谷が中に入って来た。風見と沖も一緒である。
「立花さん、さっきお話したことですが」
「ええ。わかってます」
立花は答えた。
「一体どういうことなんでしょうな、これは」
「わかりません。ただ奴等が何も企んでいないとは考えられません」
「ですね。絶対何かありますよ」
立花は目を細めて考えながら言った。
「問題は何をしてくるかです」
「それなら大体わかってますよ」
入口であの声がした。
「おお」
一同そちらに再び顔を向ける。そこには本郷と一文字がいた。
「やっぱり御前等のところもか」
「ええ、それで今まで二人で調べていたんです」
本郷が答えた。
「それがこれです」
一文字が懐から何か取り出した。それは一枚の写真であった。

嵐の前その二

「これは・・・・・・」
それは奇巌山の写真であった。だが只の写真ではない。
そこにはバダンの者達が映っていた。暗闇大使の姿もある。
「ちょっとあの山に細工をしておきまして。それから手に入れた写真です」
「そうか」
立花はそれを受け取って見た。谷も一緒である。
「見たところあの山を去っているようだな」
「ええ」
本郷が答えた。
「やはり何か考えているようですね」
「ああ。問題はそれが何かだ」
立花は考え込んだ。
「奴等のことだ。とんでもないことを考えているぞ」
「そうでしょうね」
「何をしやがるかな、本当に」
「あの時空破断システムは絶対に使ってくるでしょうね」
「ああ、そうだろうな」
一文字に答えた。
「それは間違いない。ただ奴等はそれで終わるような連中じゃない。あの首領だぞ」
「はい」
本郷と一文字だけではない。そこにいる九人のライダー達が頷いた。
「今までの大幹部や改造魔人まで復活させてきたような連中だ。多分とんでもないことを考えているに違いない」
「一体何を企んでいるか、ですね。今度は」

「隼人」
立花は一文字に顔を向けた。
「御前はどう考える？」
「俺ですか」
「ああ。他の皆もだ。御前等はこれについてどう考える」
「そうですね」
ライダー達は立花の言葉を受けて考え込んだ。
「わしは正直奇巌山に基地をまだ置いていること事態に驚いた。一度日本から撤退していたからな」
「ええ。多分俺達が世界に散ったバダンの相手をしているうちに戻って来たのでしょう」
城がそれに答えた。
「しかしその基地も放棄した」
神がそれを受けて言った。
「ということは別に基地を置いているということですね」
沖も考えながらそれを受けて言った。
「だとしたら何処にその基地があるかだ。その場所によって奴等の次の作戦が大体わかる」
風見は席から立ち上がった。そして歩き回りながらそう言った。
「まずは今奴等が持っている戦力だが」
本郷がここで他のライダーと立花に対して話した。
「大幹部も改造魔人も皆倒れた。怪人達も俺達によって相当数が失われている」
「ということは今バダンには戦力はあまり残ってはいない」
筑波が言った。
「それはどうかな。その割には奴等には余裕がある。おそらくまだ切り札があるんだろう」
だがここで一文字がそれを否定した。
「だが問題はその切り札が何かだ」
立花が言った。

「今奴等が持っているのは」
「あの改造人間と時空破断システムですね」
結城がそれに答えた。
「ああ。今のところわかっているのはその二つだ」
「しかしそれだけじゃない」
ここでアマゾンが言った。
「アマゾンわかる。バダン絶対に他にも何か持っている」
「だろうな。アマゾンの言う通りだ」
立花がそれを受けた。
「とりあえず今それを良と役君が調べに行っているけれどな」
「あ、そういえば」
彼等はここでようやく村雨がいないことに気付いた。
「あの二人がですか」
「ああ」
立花はライダー達に頷いた。
「あの二人ならやってくれるだろう。ここは任せてみることにした」
「そうですか」
「それで御前達だが」
ここで滝が入って来た。
「おっ、皆揃っているな」
彼はライダー達の顔を見てその顔を綻ばせた。
「おお、いいところに来た」
立花は彼に対して言った。
「滝御前に頼みたいことがあるんだ」
「何ですか？」
「これから暫くこいつ等のアシストに回ってくれないか」
ライダー達を親指で指し示しながら言う。

嵐の前その三

「ライダー達のですか」
「ああ。他にもチョロやモグラ、竜君にも頼みたいんだが」
「一体何をするつもりですか？」
「陽動だ」
立花はここで不敵に笑った。
「陽動」
「そうだ、陽動だ」
「おやっさん」
ここでライダー達も話に加わった。
「また何か企んでいますね」
「当たり前だ、奴等はそうしたことが何よりも得意だ。それならな」
「それなら」
ライダー達は問うた。
「こっちもやってやるんだ。まずは御前達はあえて目立つ様に動き回れ」
「はい」
「そして滝達も一緒だ。関東を中心に動くんだ」
「わかりました」
滝もそれに頷いた。
「そうすればバダンが動くな。こっちに目がどうしてもいく」
「はい」
「それが狙いだ。奴等が何処から出て来ているのかわかるだろう。そうでなくても戦力がこちらに向く。良達には目がいかない」
「成程」
ライダー達も滝をそれを聞いて会心の顔で頷いた。
「つまり良の行動の援護ですね」
「そういうことだ」

立花はニヤリと笑って答えた。
「出来るだけ派手に動けよ。谷さんも協力をお願いしますよ」
「ええ」
谷はそれを受けてにこやかに笑った。
「やりましょう。これは面白そうだ」
「そうでしょう。バダンの奴等にはショッカーの頃から色々と煮え湯を飲まされているんだ。今度はこっちが飲ましてやる番だ」
「おやっさんも結構根に持つタイプなんですね」
ここで後ろにいた史郎が言った。
「おう、御前も参加しろよ」
立花は彼の声を聞き思い出した様に言った。
「えっ、俺もですか!?」
「当たり前だろうが。ここは全員でやるんだ」
「け、けれど俺・・・・・・」
わかってるよ。御前には別の方法でやってもらう」
「別の方法」
「そうだ、通信でやってもらう。純子達と一緒に偽の情報を流しまくるんだ」
「そっちでもやるんですか」
「当たり前だ、やれることは何でもやる」
立花は強い声でそう答えた。
「そうでなかったらバダンには勝てないからな」
「わかりました」
とりあえず戦いに駆り出されるわけではないのでホッと胸を撫で下ろした。
「じゃあ早速取り掛かるか。他のメンバーも集めてな」
「はい」
ライダー達はそれに頷いた。
「いいか、やるからには派手にやるぞ。そしてバダンの目を全部こっちに引き付けるんだ」

「ええ、任せて下さい」
彼等は不敵に笑って言った。
「絶対にやりますよ。それもおやっさんが言うのよりもずっと派手にね」
「おう、その意気だ。どんどんやれ」
「はい！」
彼等は力強く答えた。そしてすぐにアミーゴを出てそれぞれのマシンに飛び乗った。
ライダー達の動きはすぐにバダンにも伝わった。
「何やら活発に動き回っているな」
暗闇大使は指令室でライダー達の動向を見ながら言った。
「一体何をするつもりなのか」
「我々を探しているのでは？」
ここで側に控える戦闘員が言った。
「おそらく我々が奇巌山を後にしたのを知っているでしょうし」
「うむ」
彼はそれを聞いて考える顔をした。
「それは有り得るな」
「そういえばここは何度か戦いの場になっておりますし」
「一度撤収しているからといってマークが外れるとは考えにくいな」
「はい」
戦闘員は答えた。
「今ライダー達は何処で動いているか」
暗闇大使は他の戦闘員達に問うた。
「ハッ」
右に控えていた戦闘員が敬礼した。そして答えた。
「関東で活動しております。こちらには一人も向かってはおりません」
「どうやら我々の所在は掴んではいないようだな」
「そのようですね」

「我々の基地が関東にあると思っているのだろうか」
彼は話を聞きながら考え込んだ。
「そうではないでしょうか。実際に今までの組織は日本においては関東を狙うことが多かったですから」
「ふむ」
大使は戦闘員の言葉を受け考え込んだ。

嵐の前その四

「ならば問題はないが」
「ただ関東に置いてある我等の支部を狙う可能性があります」
「それはあるな。奴等に関東の支部を叩かれては後々の作戦に支障が出る」
「ではやはり兵を向けますか」
「うむ。それもライダーがあれだけいるのだ。かなりの兵力を向けなくてはなるまい」
そこで彼は後ろを見た。そこには影達がいた。
「いけるか」
「何時でも」
影達は答えた。そしてすぐにその場から消え去った。
「流石だな。動きが速い」
「時空破断システムはどうしますか」
戦闘員の一人が尋ねた。
「あれか」
「はい、ライダー達を倒すにはやはりあれがないと苦しいと思うのですが」
「今はいい」
だが彼はそれを引っ込めた。
「あれはまだ調整段階だ。それに今使うのは得策ではない」
「何故でしょうか」
「あれは決戦の時に使う。今の戦いはほんの前哨戦だ。あの者達にも伝えておけ」
そう言いながら戦闘員達を見渡した。
「今は無理をするな、と。何かあったらすぐに退くように、とな」
「わかりました」
戦闘員達はそれに頷いた。

「では我々もすぐに向かいましょう」
「うむ、頼んだぞ」
暗闇大使はそれを受けて言った。戦闘員達に一部がそれを受けてそこから姿を消していった。
大使はそれを見送りながら顔をモニターに移した。
「ところであの男はどうしている」
「三影様ですか」
「そうだ」
戦闘員に答えた。
「あの戦い以後どうやら自室に篭っているかトレーニングに励んでいるかのどちらかのようだが」
「はい」
戦闘員の一人が答えた。
「今のところはそのようです。ですが何やら考えておられるようです」
「何やら、か」
「はい。お伺いになられますか？」
「いや」
だが大使はそれには首を横に振った。
「今は一人にしておけ。答えはおのずと出るだろう」
「ハッ」
「あの者にはわかっている筈だ。今後己が何をするべきか、をな」
「何をするべきか、ですか」
「そうだ、それは既に答えが出ている。ならばそれに向けて動くだけだ。今はその時ではないということだ」
「機が熟せば、ですか」
「うむ、急いては事を仕損じる。虎も牙や爪を養う時が必要なのだ」
「牙や爪を」
「そういうことだ。今はあの男は静かにしておけ。時が来れば自ら動く」

「わかりました」
その戦闘員は敬礼をして答えた。
「では今後ライダー達から目を離すな。今この基地の存在を知られてはまずいからな」
「わかりました」
戦闘員達がそれに応えた。
「そして準備を怠るな。我等も時が来れば動かなければならぬからな。その時はもう間近に迫っておるぞ」
「ハッ！」
戦闘員達は一斉に敬礼をした。そして彼等は次の動きに備えて気を養うのであった。
その頃村雨と役は名古屋にいた。中部日本でも随一の大都市である。
「名古屋はまた独特の街ですね」
村雨はうどん屋できし麺を食べながら役に語りかけていた。
「ええ、何か食べ物も独特ですしね」
役は海老を食べていた。名古屋では非常によく食べられるものである。
「この味噌と海老は欠かせないものですかね」
「まあそうでしょうね」
見れば役も海老に味噌を付けている。それも赤味噌である。

嵐の前その五

「織田信長も好きだったそうですよ」
「本当ですか」
「ええ」
これは事実である。信長は毎食焼き味噌を食べていた。当時味噌は非常に高価なものでありこの焼き味噌は金が落ちるとまで言われていた。だがこの戦国から安土桃山の時代にかけて生産力が大幅に上昇しこうした味噌も普通に食べられるようになっていくのである。弁当に味噌を入れるのはこの頃からであり、江戸時代には味噌汁も庶民の間で普通に飲まれるようになっていくのである。日本の食事は実はこの時代に下地があったのである。
「そう思うと何だが意味深ですね」
「実際に味噌は身体にいいですしね。うちの田舎でも結構食べますよ」
「そういえば役さんは長野県警におられたのですね」
「ええ、そうです」
役はここで顔を崩した。
「長野といえば蕎麦ですけれどね。あと林檎でしょうか」
「あそこの蕎麦はいいですね」
「そうでしょう、一度来られるといいですよ。御馳走しますから」
「それは楽しみだ」
二人はこんな会話を楽しみながら食事を採った。そして店を出ると市街に向かった。
「行きましょう」
「ええ」
二人は顔を引き締めさせた。そして中に入って行った。
二人は街中で何かを探し続けていた。時として散り、時として集まった。何かを必死に探していた。

「ありましたか？」
「いいえ」
二人は集まる度にそう言い合って首を横に振ったりしていた。だがそこに焦りはなかった。
彼等は探していた。明らかに何かを探していた。
この名古屋にそれはあるのだろうか。それはわからない。だが彼等はそれでも探していた。
名古屋城の前に来た。名古屋の者にとっては大阪人の大阪城のようなものである。
この城は御三家筆頭尾張徳川家の城である。築城の名人加藤清正によって建てられたこの城は金の鯱で知られる名古屋の象徴であった。
雄大な天守閣である。この天守閣は二代目だ。第二次世界大戦の空襲により焼け落ち建て直された。だがその心は今もなお健在である。
「いい城ですね」
「はい」
役は城を見上げながら感嘆の言葉を漏らす村雨に答えた。
「これだけの城は我が国にもそうそうありませんね」
「そうですね。会津に大阪、姫路、広島、それに熊本がありますがこの城もその中に入りますね」
「ええ、本当に立派な城ですよ」
彼はその中でもこの城が特に気に入っていた。彼の好みに合っているのだ。
「この城にあるかもしれませんね」
「ええ、ここにもバダンがうろついていたそうですし」
バダンはあらゆるところに潜む。そしてそこから隙を窺うのである。
彼等はそれがよくわかっていた。だからこそ慎重に動いているのだ。

名古屋城に入る。そして入口で二手に別れた。
「それじゃあ」
「はい」
左右に散った。そして何かの捜索を開始した。
だがその何かは中々見つからなかった。城内を隈なく探した二人は天守閣の前に集まった。
「やはりここしかないようですね」
村雨はその天守閣を見上げながら役に対して言った。
「はい」
役はそれに頷いた。そして二人はその中に入って行った。
一段一段探し回りながら昇っていく。だがやはり見つかりはしない。そして遂に頂上に達した。役はまだ下の方にいる。
「ここにもないか」
彼が諦めようとしたその時であった。
「御苦労なことだな」
天守閣の外の廊下からサングラスの男が姿を現わした。
「三影」
村雨は彼の姿を認めてすぐに身構えた。
「よせ、今は貴様と戦うつもりはない」
だが彼は構えはとらなかった。村雨が構えをとらない相手を攻撃しないのを知ってのことであった。無論彼自身もそうである。
「では何故ここに来た」
村雨は構えを解いて彼に問うた。
「一つ聞きたいことがある」
「何だ」
「あの役という男だ」
「役さんがどうかしたのか」
「貴様はあの男と今一緒に行動しているな」
「ああ」
別に否定するつもりもなかった。

「では暫し見ている筈だ」
「何をだ」
「あの男の行動をだ」
「行動」
村雨はそれを聞いて怪訝な顔をした。
「役さんの行動に何かあるのか」
「ふむ」
だが三影はそれに対しては答えなかった。そのかわり考える言葉を発した。
「どうやら知らないようだな」
「何をだ」
「あの男のことをだ。一体あの男が何者かということをだ」
「おかしなことを聞くな」
村雨はそれを聞いて首を傾げずにはいられなかった。
「おかしなことか」
「そうだ、そんなことは貴様等バダンも既に調べてある筈だが。貴様等の情報網を以ってすれば簡単にわかるだろう」
「確かにな」
三影はそれについては認めた。
「長野県警に在籍する警官だな。階級は警部補、年齢は二十五歳だ」
「その通りだ」
寸分の狂いもない。やはりバダンの情報網は恐るべきものであった。

嵐の前その六

「だがそれは表の話だけのことだ」
「表の」
「そうだ、全てにおいて表と裏が存在する。コインがそうであるようにな」
「何が言いたい」
村雨は彼の言葉の真意がわかりかねなくなっていた。
「一つ言っておくが我がバダンはあの男とは関係はない。それは安心しろ」
「それはわかっている」
三影の方から彼がバダンのダブルスパイであることを否定してきた。だがこれは既にわかっていることである。それは彼の行動でわかっている。
「しかしそれまでの経歴がわからない」
「経歴が」
「そうだ。何時何処にいたのか一切掴めないのだ」
「長野にいたのではないのか」
「いない。調べたが何も出てはこなかった。こんなことははじめてだ」
「バダンの情報網でもか」
「そうだ、悔しいことだがな」
彼はそう言いながら顔を顰めさせた。
「それにあの射撃の腕だ。あれは一体何だ」
「警察で鍛錬を積んだのだろう」
「それであれだけの種類の銃を使えるか。あれは最早神業の領域だ」
「才能があったのではないのか」
「貴様はそう考えるか」
「それ以外にどう考えろというのだ」

「フン」
三影はここで半ば舌打ち混じりに言った。
「どうやらあの時の言葉を覚えてはいないようだな」
「あの時の」
「そうだ、富士の樹海で俺が貴様を殺そうとした時のことだ」
「あの時か」
村雨はそう言われ目を顰めた。
「あの時俺は秘められていた赤い光の力を開放することができたが」
「その時のあの男の言葉だ。どうやら聞こえてはいなかったようだな」
「残念だがな。それどころではなかった」
「ならば仕方ない。教えてやろう」
彼はあらためてそう言った。
「あの時あの男は『予定通り』と言ったのだ」
「予定通り!?」
「そうだ、貴様がその力を開放するのをあらかじめ知っていたのだ。これは一体どういうことだ?」
「・・・・・それは本当か」
「嘘を言ってどうするのだ。それに俺にも誇りがある。決して嘘はつかん」
それが彼の誇りであった。彼のプライドの高さは村雨もよく知っている。
「何故そう言える。奴は未来を知っているとでも言うのか」
「・・・・・・・・」
村雨にはわからなかった。だがそれが嘘ではないのもわかっている。
「はっきり言わせてもらおう。奴は只の警官ではない。おそらく遙かに恐るべき存在だ」
「恐るべき存在」
「そうだ。あの全てを知っているかの様な話し方。おそらく何か別

の力を受けて動いている筈だ」
「またわからないことを言う」
村雨の疑念は止まるところがなかった。
「その別の力とは一体何なのだ」
「それは俺にもわからん」
三影もそう答えることしかできなかった。
「だがそれは俺達とはまた別の次元にある話だ」
「どういうことだ」
「強いて言うならば」
三影の言葉が低いものになっていく。感情がこもってきていた。
「神か」
「神」
「そうだ。それはおそらくこの世の摂理を司る神だ」
三影もまた神を崇拝しているからこそ言える言葉であった。彼の信じる神はあの首領であった。この世の摂理を破壊し、そしてそこから新たな世界、己が全てを支配する世界を築かんとする邪なる神である。
「その中のどれかはわからないがな」
「では役さんは神の僕だということか」
「そこまではわからん。より高位の存在ではないかと思うがな」
「では神・・・・・・」
「さてな。そこまではわからん」
三影はそれについては言葉を濁した。
「しかし少なくともその力は貴様等ライダーや俺達と同じ程度はあるだろう」
「俺達と」
「そうだ、種類こそ違えどな」
「生身だというのにか」
「確かに生身だろう。だがな」
「だが！？」

「人間だとは限らないのだ。それはわかるな」
「ああ」
村雨はそれに対して頷くしかなかった。彼も三影もその身体はもう人間ではないのだ。だからこそわかる言葉であった。
「残念だがな」
そしてこう言うしかなかった。
「今ではそれも誇りに思っているが」
「そういう考えになったか」
三影はそれを受けて言った。
「だがそれはいい。問題はあの男だ」
「うむ」
「少なくとも改造人間ではない。そうした意味で俺達とは違う」
「わかるのか」
「わかるさ」
三影は答えた。
「俺達とはあきらかに気配が違うからな。それは御前も感じているだろう」
「うむ」
「しかし普通の人間のそれとも違う。それもわかるな」
「確かに」
それは以前より薄々ながら感じていた。村雨もライダーである。その勘は普通の人間のそれとは比較にならない。
「俺はそういったことから言っているのだ。あの男の謎をな」
「生身であるが人間ではない、と」
「そういうことだ。では何者か」
「神かそれに近いもの」
「あくまで仮定だがな」
三影はそう断った。だがそのサングラスの奥の目はそれを仮定だとはみなしていなかった。

嵐の前その七

「俺にとってはあの男も敵だ。そういった意味であいつもライダーと同じ存在だ」
「同じか」
「違うか。バダンの世界を築くのを防ごうとしているのだからな」
「確かにな。だが一つ言っておこう」
「何だ」
「それは俺達だけじゃない。この世界の心ある人全ての願いだ」
「つまり俺達は世界の敵ということか」
「そう言わずして何と言うのだ」
「フン、それは否定しない」
三影はそれを笑いながらも認めた。
「何しろ俺達バダンは真の理想世界を築こうとしているのだからな。弱い者や愚かな者にはそれがわからないのだ」
「三影」
村雨は不敵な調子でそう言った三影を見据えて言った。
「どうやら貴様はあくまでわかろうとしないようだな」
「わかる？」
だが三影はそれには口の左端を歪めて返すだけであった。
「一体何をわかるというのだ。弱い者や愚かな者はそれだけで罪だというのに」
「それがバダンなのはわかっている、そして貴様も」
村雨はそれを聞いて言葉を出した。
「それ故に貴様等を許すことはできん」
「許す、か」
三影はその言葉も笑い飛ばした。
「バダンにはない言葉だな」
「バダンにはか」

「そうだ。そんな女々しい言葉には興味がない。俺が好きな言葉は」
口の端を歪めたまま言った。
「力こそ正義、だ。これは不変の真理だ」
「不変の真理か」
「そうだ。一度は俺は貴様に敗れた。だがな」
ここでサングラスを取り外した。その目が無気味に光っていた。
「最後に貴様を倒せばいいのだ。それで俺の正義が確かになる」
「では貴様にとってはバダンが正義なのだな」
「それ以外の何だというのだ」
「わかった。ではいい」
村雨はそれ以上話をする気にはなれなかった。
「近いうちにそれははっきりするだろう。その時にわかることだ」
「そうだな、俺が貴様を倒す時だ」
三影はサングラスをかけた。そして表情を元に戻した。
「その時に備えて精々強くなっておけ。今以上に強くないと俺は認めん」
「言われずともそのつもりだ」
「では期待しておこう」
そう言い終えた三影の身体を黒い光が包み込んだ。
「貴様と拳を交える時をな」
彼は黒い光の中に消えた。村雨はそれを見届けるとその階を調べはじめた。
「ここにあるかな」
「村雨さん」
ここで下から役の声がした。
「ありましたよ、バダンの手懸かりが」
「本当ですか」
彼は顔を下に向けて役に問うた。
「ええ、ちょっと来て下さい」
「はい」

彼はそれに従い下に降りた。そこでは役が手に何かを持っていた。
「これです」
それは一枚の地図であった。
「地図ですか」
「ええ、最初はディスクメモリーか何かだと思ったのですが」
「それは俺もです」
村雨は先程の三影との言葉を心の奥にしまって彼に応えた。
「まさかそれが出て来るとは思いませんでしたね」
「はい」
役はそれに答えた。
「ですが何やら罠の可能性もあります」
「罠」
「はい、肝心の地図を見て下さい」
役に地図を手渡された。それは日本アルプスの地図であった。
「ここは」
「以前ここでスカイライダーとタカロイドが死闘を繰り広げたのは御存知ですね」
「はい」
「そしてスカイライダーが勝った。その時の作戦は核爆弾を使ったテロでした」
「そうらしいですね、それは筑波先輩からお聞きしています」
「一度破壊しようとしたところに本拠地を置くでしょうか。普通は有り得ないでしょう」
「そうですね」
それは村雨も同じ考えであった。
「ではこれは罠ですか」
「はい、間違いなくそうでしょう」
役は村雨に対して言った。
「おそらく事前に我々がここに来ることを察知してバダンが置いたものです。これは信用できません」

「そうですか」
三影がここに来た理由の一つがわかった。彼はそこに自分達を誘き寄せるつもりなのだ。
「ではどうしますか。この地図は破棄しますか」
「そうですね、何の役にも立ちませんし」
役はそれに同意し、その地図を破り捨てようとした。その時だった。不意に村雨の携帯が鳴った。
「はい」
「おう、わしだ」
「立花さんですか」
「んっ」
役はそれに耳を立てさせた。

嵐の前その八

「実はな」
立花は今の彼等の行動について話をした。話を聞き終えた村雨は顔を少し綻ばせていた。
「そうですか、有り難うございます」
「何、これも奴等との戦いだ」
立花は明るい声でそう返した。
「今こっちにはバダンのかなりの戦力が来ている。あいつ等もいるぞ」
「ロイドですね」
村雨はそれを聞いて顔を真剣なものにした。
「おう、かなり来ているな。わしも全員見たわけじゃないが」
「確か先輩達は全員そちらでしたよね」
「ああ、皆こっちにいるぞ」
立花はそれに答えた。
「だからこっちの方は心配するな。どうにでもなるからな」
「わかりました」
「だから御前は役君と調査をしっかりやれ。わかったな」
「はい」
「そういうことだ。じゃあな」
「はい、お元気で」
こうして電話は終わった。携帯をしまった村雨を役が見た。
「立花さんからですね」
「はい。何でも向こうにバダンの戦力がかなり向かっているようです。どうやら関東で陽動作戦を展開していてそれで引き付けたようです」
「そうみたいですね」
それは電話の声からも伝わった。

「ではこちらには殆どノーマークですね」
「それはどうでしょうか」
三影のことを言おうとした。だが急にそれを言ってはならない気がした。
(何故だ)
それは村雨にもわからない。しかし彼はそれを受けて話をするのを止めることにした。
「何かあるのですか？」
「あ、いえ」
彼はそれを打ち消した。役の問いに対して首を横に振った。
「何でもありません。ただ警戒は怠ってはならないかと」
「それはわかっています」
役は答えた。
「それでこの地図ですが」
「はい」
話は地図に戻った。
「やはり罠だと思います」
「やはりそう思われますか」
「ええ。敵はおそらく別の場所に本拠地を置いていると思われます」
「それは何処だと思われますか」
「今まで彼等はこの日本だけでも実に多くの場所で活動してきました」
「はい。どうやらこの国に一時は最大の戦力を配置していたようです」
それが日本における各ライダーとバダンの改造人間達の戦いであった。その後彼等は日本から撤収していたがまた舞い戻ってきているのである。
「その中には多くの霊力の強い場所もありました」
「霊力」
「そうです。彼等は霊力も利用しているのです。いえ」

ここで彼は目の光を強くさせた。一瞬それは緑に光ったように見えた。
（！？）
村雨はその緑の光に不意に気付いたがそれは一瞬のことであった。すぐにそれは消えたのでやはり一瞬の幻だと思った。
「首領自身が霊力を欲しているというべきでしょうか」
「首領が」
村雨はそれを聞いて不思議に思わずにいられなかった。
「何故必要とするのです！？」
「これは単なる仮定です」
役はそう断ったうえで話をはじめた。
「今まで首領は数多くの戦いで傷を受けてきました」
「はい」
ネオショッカーの時などは最後にその実体すら崩壊している。だがそれでも彼は生きていたのだ。それ自体が信じられないことであった。
「そのダメージがまだ完全に回復してはいないのではないでしょうか」
「そうなのですか」
「あくまで仮定ですよ」
役はここでまた断った。
「別の理由かも知れません。ただ」
「ただ！？」
「今までの作戦を見るかぎり彼が霊力を欲する傾向にあるのは間違いないでしょう」
「そういえば」
村雨はその言葉を受け考えた。確かに多くのテロ作戦がバダンにより命じられてきた。だがその時の基地とする場所にはいわくつきの場所が実に多かった。
日本においても霊山の多い日本アルプスや桜島、大阪城、金沢城。

長崎の様に宗教的な色彩のある都市において活動することも多かった。

それを考えてみると役の言葉にも納得がいく。そしてこの辺りでそうした地域といえば。彼はすぐにわかった。

「伊勢ですか」

「可能性はあると思います」

役もそれに頷いた。どうやら彼も同じ考えであったらしい。

「それにあの場所は何かと隠密行動に向いています」

「山が多く海岸線も複雑ですからね」

そうした場所は彼等の好む場所であることは言うまでもなかった。それに彼等は一度この辺りに基地を造ろうとしたこともある。正反対の場所であるが紀伊半島である。ショッカーの地獄大使がここに基地を建設しようとしてダブルライダーと激戦を展開したのである。

「彼等にとっては王者の地かと」

「王者の地」

村雨はそれを聞いて眉を顰めさせた。

「確かに王者ですね」

思わせぶりな言葉を口にした。

「しかしそれは邪悪の王者だ」

首領を指しているのは言うまでもない。

嵐の前その九

「それが今伊勢にいるとしたら大変なことです」
「ええ」
伊勢は古来より日本の聖地とされている。その地に首領がいるということはその冒涜だけではない。その力を彼のものにされる恐れもあるのだ。
「行きましょう、それで何もなければいいですが」
「あれば」
「戦うだけです」
村雨は強い声で言った。
「そして倒す。それ以外に何がありますか」
「それを聞いて安心しましたよ」
役は彼の言葉を受けて微笑んでそう言った。
「では行きますか。伊勢へ」
「はい」
二人はここで頂上に登った。そしてそこから外を眺めた。
「伊勢はここからだと見えませんね」
「ええ、残念ながら」
だが村雨にも役にも見えていた。そこに潜む悪の影が。
迷うことはなかった。彼等は互いの顔を見て頷き合った。
「行きましょう」
「はい」
それだけで充分であった。二人は天守閣を降りた。そして城を後にするとすぐに伊勢へ向けて発った。
後には爆音だけが残った。それは戦いへと向かうワルキューレの雄叫びにも似ていた。
それを遠くから見る男がいた。三影であった。
「伊勢に来るか。やはりな」

彼は山の上からそれを見ていた。
「ならばいい。俺が思う存分相手をしてやろう」
彼にとってはそれは予想されたことであった。村雨を見ながら懐から煙草を取り出した。
それに火を点ける。そしておもむろに吸った。
吸うと口から離した。口から煙を吐いた。
「ふううう」
美味そうに味わっている。そしてそれを手に村雨から役に視線を移した。
「今度は貴様も相手にしてやろう」
彼は役も標的に入れていた。
「最早容赦はせん」
その目が光った。まるで刃の光であった。
煙草を吸い終えると彼はそれを放り捨てた。天高く飛ぶ。
「フン」
懐から拳銃を取り出す。そしてそれで煙草を撃ち抜いた。
小さな煙草はそれで粉々になった。そして葉を撒き散らしながら落ちていった。
「貴様等もこうしてやろう」
そして彼はその場から姿を消した。後には獣の気だけが残っていた。

嵐の前　　完

２００４・１１・１５

戦士達の集結その一

戦士達の集結

「じゃあ先に行っています」
「ああ」
朝になった。ライダー達はまず自分達のマシンに乗っていた。
そして立花達の見送りを受けアミーゴを後にする。行く先は決まっていた。
すぐにその姿は見えなくなった。ただ爆音だけが朝の人気のない道に轟いていた。
「おい」
立花は彼等の爆音が聴こえなくなったのを見計らって皆に声をかけた。
「滝にケン、モグラにがんがんじい、チョロ、そして竜はわしと一緒に行くぞ」
「はい」
名を呼ばれた者達はそれに答えた。
「谷さんは博士達と合流して。車は裏に用意してありますんで」
「わかりました」
谷はそれに対して頷いた。
「史郎と純子達はここに残ってくれ。そして後方支援を頼む」
「ええ」
「わかりました」
彼等もそれに頷いた。こうして一同の行動が決まった。
立花はトラックにメンバーを乗せ出て行く。谷は後ろからライトバンを持って来た。そして城南大学に向かった。
史郎達はアミーゴの中に入った。こうして最後の戦いの前の最後の挨拶と出陣が終わったのであった。

「ライダー達が動いたようだな」
首領は伊勢の地下深くにある基地の底で暗闇大使に対して語り掛けていた。
「ハッ、どうやらこちらに向かっているようであります」
彼はバダンの紋章の前に跪き答えていた。
「おそらく我々の所在を掴んだものと思われます」
「そうか、三影は失敗したようだな」
「いえ、それは違います」
彼はここで三影を庇った。
「今回は基地の警戒を怠った私の不始末でございます。あの者は的確に動いておりました」
「そうなのか」
「はい、私の責任であります。どの様な処罰も受けましょう」
「・・・・・・・・・」
首領はそれに対して沈黙していた。大使はその前で跪いたままである。
「よい」
首領は沈黙の後で彼に対して言った。
「どのみちわかるものであった。ゼクロスの力をもってすればな」
彼は大使を不問にすることにした。
「それに今はそうこう言っている場合ではない。ライダー達を倒すには少しでも戦力が必要だ。貴様のその力は貴重なものだ」
「有り難き幸せ」
「責任は戦いでとるがよい。見事ライダー達の首を挙げるのだ」
「ハッ」
暗闇大使はそれに謹んで言葉を述べた。
「必ずやライダー達の首級を首領の御前に持って来ましょうぞ」
「うむ、楽しみにしているぞ」
首領は笑いを含みつつそれに応えた。そしてすぐに次の指令を発した。

「そして関東にいる者達を急ぎ招集せよ」
「ハッ」
「今回は間違いなく決戦になるからな。あの者達が戻って来るまではここの防御に徹することとする」
「わかりました」
「その防衛は貴様に任せる。あと時空破断システムも用意しておけ」
「それは既に出来ております」
大使は顔を上げて言った。
「何時でも出せる状況であります」
「ほう、そうだったのか」
それを聞いた首領の声が上機嫌なものとなった。
「それでは今関東にいる者達が戻って来たならばすぐに出すがよい」
「わかりました」
彼はそれに応えた。
「そして三影にも伝えよ」
首領の指示は続く。
「すぐにここに戻るようにな」
「わかりました。ではその様に言っておきます」
「頼むぞ」
首領は厳粛な声で言った。
「そしてだ」
「はい」
話はこれで終わりではなかった。
「今村雨は何処にいるのだ」
「ハッ、それですが」
彼はそれを受けて答えた。
「今は津の方にいるようです」
「あの街にか」
「はい、そこでこちらを探っておるようです。どうやら我等が動くものと思っているようです」

「そうか、ここのすぐ側にはいないのだな」
「はい」
彼は答えた。
「如何致しましょうか」
「放っておけ。だがあの場所にいるとなると少し厄介だな。戻って来る者への障壁となる」
「陽動の兵を送りましょうか」
「そうだな。だがそれは僅かでよいぞ。今は少しでも多くの兵が欲しい」
「ハッ」
大使はその言葉に頷いた。
「ではそのように致します」
「うむ。松坂にはまだ何人かいたな。そこの者を使え」
「松坂の」
「そうだ。あそこは津に近い。どうだろうか」
「それでしたら私に考えがあります」
大使はそれを受けて上奏した。顔を上げる。
「どのような考えだ」
「はい、あの地に我等の防衛線を築いておくのです。如何でしょうか」
「松坂にか」
「そうです、あの地は交通の要衝。必ずやライダー達も通りましょう。悪くはないかと」
「ううむ」
首領はそれを聞いて考える言葉を漏らした。それから大使に対して言った。

戦士達の集結その二

「よし、やってみるがいい。確かにあの地は重要だ」
「ハッ」
「だが急ぐようにな。既に他のライダー達がこの地に迫って来ているということを忘れるな」
「それは承知しております」
「ならばよい。ではすぐに取り掛かれ。だがこの地の防衛も忘れてはならんぞ」
「それは三影に任せましょう。私は松坂を担当します」
「そうか。では松坂は貴様に任せよう」
「有り難き幸せ」
「それではすぐに取り掛かるがよい。そしてライダーを倒すのだ」
「ハッ」
大使はそこで立ち上がった。
「この暗闇大使、必ずやバダンの理想世界を築き上げて御覧に入れましょう」
「期待しているぞ、フフフ」
首領は笑った。その声が部屋の中に木霊する。
「全てはこの地からはじまるのだ」
「はい、バダンの世界が」
「ショッカーよりの夢が遂に叶うのだ。私が神となる日がな。フフフフフ」
首領の無気味な声が部屋の中に響き続けた。暗闇大使はそれを聞きながら凄みのある笑みを浮かべていた。
村雨はバダンの情報通り津市にいた。そしてその街中を歩き回っていた。
「参ったな、ここで落ち合う約束だったのに」
彼は誰かを探していた。その眉に不安の色がよぎる。

商店街に入った。すると後ろから気配がした。
「ムッ」
それを感じてすぐに振り向く。するとそこに彼がいた。
「やあ」
それは役であった。彼は村雨の肩を叩いて微笑んだ。
「探されたようですね」
「ええ」
彼は苦笑いしてそれに答えた。
「今まで何処に行ってたんですか」
「ちょっとね」
彼はそれに対しては答えをはぐらかせた。そして自分の話に持って行った。
「ところでバダンがこの津に来ているのは御存知ですか？」
「本当ですか、それは」
彼はそれを聞いて顔色を変えた。
「ええ。ほら、見て下さい」
彼はそこで親指で後ろを指し示した。
「妙な行動をとっている人が何人かいるでしょう」
「確かに」
どうやら彼等をつけているようである。外見は普通の者と変わりはないが気配が明らかに違っていた。
「場所を変えますか」
村雨はそれを見て役に対して囁いた。
「そうするべきかと」
彼もそれに賛成した。そして二人はそこから立ち去った。脇道に入り込みそこから追っ手をまく。そして別の道に出た。そこで歩きながら話をした。当然周囲への警戒は怠ってはいない。
「そして松坂には暗闇大使が来ているようです」
「あの男がですか」
「はい。どうやらあの街に防衛拠点を置くようですね」

「そうですか。あの街は交通の要衝ですからね」
松坂は伊勢と奈良、そして愛知を結ぶ場所にある。古来より交通の要地であった。
「おそらく彼はそこで最初の決戦を挑むものと思われます」
「伊勢に通すことは許さない、と」
「そうでしょうね。ただ伊勢もかなりの防衛が施されているでしょうが」
「では海から攻めるのも難しいでしょうか」
「残念ながら。おそらく彼等の守りはかなり堅いでしょう。海から攻めるのは危険です」
「そうですか」
「これは既に他のライダーの皆さんにも伝えておきました。彼等は陸路でこちらに来られることになりました」
「陸からですか」
「はい。何処かで落ち合うべきでしょうね」
「それならこの津は少し危険でしょうか」
「多分。北の方が宜しいかと」
「北ですか」
村雨はそれを受けて少し考え込んだ。
「それでしたら」
そして口を再び開いた。
「四日市辺りはどうですかね。あそこからですと攻撃にも移り易い距離にありますし」
「ええ、それでいいと思います」
役はそれに対して頷いた。
「ただ関東にいるバダンの動きが気になりますね」
「ええ」
それは村雨も気にしていた。
「彼等が陸路で来るとなると厄介ですね。俺達は挟み撃ちに遭う危険性があります」

「はい、それを避ける為にもこの津にいるのは危ないでしょうね」
「やはりここを移りますか」
「そうするべきかと。幸いこの三重県には隠れる場所も多いですし」
三重県は東には海を持つが西には山が多い。かなり地形が複雑なのである。
「隠れるとしたら何処がいいですかね」
「そうですね」
これは役も一緒になって考えた。

戦士達の集結その三

「青山峠にでも行きますか」
「青山峠」
「はい、あそこは山に覆われていますから。隠れるにはもってこいです」
「ふむ」
村雨はそれを聞いてまた考えに入った。
「四日市にも近いですか？そこは」
「ええ、マシンだとすぐですよ」
「そうですか。それなら問題はありませんね」
「はい」
「ではそこにしましょう」
「わかりました」
こうして二人は青山峠に向かった。そしてそこで他のライダー達を待つと共に身を隠すことにしたのであった。バダンは彼等の姿が消えたのを見てすぐに津市の追っ手を他に向けた。だが彼等を見つけることはできなかった。
「何処に消えたか」
本部で防衛の指揮にあたっている三影にもそのことは耳に入っていた。
「ハッ、その件に関しては既に津に向かった者に捜索を命じておりますが」
「消息は掴めていないのだな」
「はい」
報告をした戦闘員は答えた。
「残念ながら今のところは」
「そうか」
三影はそれを受けて頷いた。

「こちらに奇襲を仕掛けるようなことはないでしょうか」
ここで別の戦闘員が尋ねてきた。だが三影はそれには首を横に振った。
「それはないだろう」
「そうですか」
「今ここには関東に向けた者が戻ってきつつある。それに海と松坂を押さえてある。そうそう奇襲を仕掛けてはこれない」
彼は言った。
「ここの防御もかなり堅くなっている。そして警備もな。これで襲撃を仕掛けるのはゼクロスですら不可能だ。そのうえ」
「そのうえ？」
「他のライダー達も来ているのだろう。おそらく奴等との合流を優先させる筈だ。今ここへの奇襲は有り得ない」
「わかりました」
その戦闘員はそれを聞いて納得した。
「しかし所在が掴めないのではやはり危惧は拭えません。何としても探し出しておかなくては」
「いざという時にも危険です」
「そうだな。ゼクロスの能力を考えると」
村雨はそれに納得した。ここで他の戦闘員に問うた。
「今他の九人のライダー達は何処にいる」
「ハッ」
それに対して彼の後ろにいる戦闘員が敬礼をして答えた。
「今彼等は静岡におります。まずはライダー達が先行しています」
「ライダー達がか」
「はい、そしてその後ろに立花藤兵衛や谷源次郎達が続いております。戦える者は全て来ているようです」
「ふむ」
三影はそれを聞いて思索に入った。
「そして同志達は今何処だ」

「はい、それですが」
彼は言おうとした。その時指令室に音が鳴った。
「ムッ」
警戒警報の音ではなかった。それとは別の音であった。
「何だ！？」
「落ち着け、敵ではない」
三影は身構えた部下達に対して言った。
「戻って来たようだな」
「関東の同志達がですか」
「うむ。それ以外にはない」
彼はそれに答えた。
「思ったより早かったな」
「はい」
「ライダー達の動きに気をとられるのではないかと思っていたが」
「それは杞憂だったようですね」
「うむ。では彼等を迎えよう」
「ハッ」
三影は戦闘員達の一部を引き連れ指令室を後にした。そして基地の入口に向かった。
岩場に彼等はいた。そこから上陸していた。
「足下に気をつけなさい」
ジェラインド＝ブリックことヤマアラシロイドは他の者に対して言った。
「ここで怪我をしては何もなりませんからね」
「ハッ」
戦闘員達がそれに頷く。他の改造人間達もそこにいた。
「同志ヤマアラシロイドよ」
タカロイドが彼に声をかけた。今は人間の姿であった。
「はい」
ヤマアラシロイドはそれを受けて彼に顔を向けた。

「今この基地に暗闇大使がおられぬというのは本当か？」
「そのようですね」
彼はそれに答えた。
「どうやら松坂におられるようです」
「そうか」
彼はそれを聞いた後で頷いた。
「あの地に防衛線でも築いておられるのかな」
「詳しいことはわかりませんが」
彼もまだそこまでは聞いてはいなかった。
「おそらくそうではないでしょうか」
だがそれ位の予想はつけることはできる。そしてそれは当たっていた。
「ならば我等もそこに行くことにるかもな」
アメンバロイドがここで入って来た。
「そこでライダー達を食い止めるということも可能だからな」
「そうですね。伊勢に入る前に彼等を倒せることができればそれでよし。ただ」
「ただ、どうした？ドクガロイド」
「いえ」
彼はジゴクロイドの問いに言葉を濁した。
「そうそう楽観はできないだろうな、と思いまして」
「確かにな」
ここで前から声がした。

戦士達の集結その四

「今は決戦の時だ。ほんの少しの油断が命取りとなるだろう」
そこには三影がいた。彼は基地の入口の前で立っていた。
「ライダー達は手強い。奴等に勝つ為には少しでも力が必要だというのが首領の御考えだ」
彼は同志達に対して言った。
「そして今貴様等の力が必要なのだ。いいわ」
「無論」
ヤマアラシロイドだけではない。他の者達もそれに答えた。
ニヤリと笑う。三影もそれに対して不敵な笑みで返す。
「わかっているな。ならばいい」
そして同志達に対してまた言った。
「入ろう。首領がお待ちだ」
「うむ」
そして彼等は中に入った。そして首領への謁見を行うのであった。
謁見を終えた彼等はある部屋に入った。そこは奈落であった。
暗闇が底まで続いている。そしてその果ては見えない。ただ闇があるばかりであった。
そこから円柱がそびえ立っている。それはそれぞれの長さで段のようになっていた。
「でははじめましょうか」
ヤマアラシロイドが他の者に声をかける。
「ああ」
彼等はそれを了承する。そして彼等は跳びそれぞれの席にそれぞれの姿勢で位置した。
「三影、いやタイガーロイドは」
カニロイドが辺りを見回して問うた。
「仕事だ。この基地の防衛を備えているらしい。今は来れないとの

ことだ」
「そうか」
彼はクモロイドの言葉に頷いた。
「ならばよい。だがあの男はどうも我等とは少し違うな」
「それは当然よ」
バラロイドがそれに答えた。
「彼は元々私達とは違うから。生粋のバダンの者なのよ」
「確かに」
カメレオロイドが闇の中からスッと姿を現わした。
「彼は私達の様に選ばれたのとはまた違う。バダンを選んだのだからな」
「そしてバダンはそれを認めた」
カマキロイドがそれを聞いて呟いた。
「彼自身を」
「そういうことですね」
ヤマアラシロイドがそれを総括するようにして言葉を発した。
「私達はバダンに選ばれた。だが彼は選んだ。違うのは当然でしょう」
「だが我等があの男より劣っているわけではないがな」
アメンバロイドがそこで言った。
「それは言うまでもない」
トカゲロイドもそれに同意する。
「しかしあの男の気は我等とはまた違う。何かが違うのだ」
「邪悪さがないといいまようかね」
ヤマアラシロイドの言葉が本質を衝いていた。
「純粋なものを感じます、今も。そしてその向けられる先は」
「あの男か」
「はい、彼です」
彼は同志達に答えた。
「彼の目はあの時から変わってはいませんよ」

「確かにな」
それは彼等にもよくわかっていた。
「では今ここにいるのは何かと不満かもな。すぐにでて出向きたいだろうから」
「それはどうでしょうか」
しかしヤマアラシロイドはそれには賛同しなかった。
「どういうことだ」
彼等はそれに対して問わずにはいられなかった。そして問うた。
「牙も爪も時には研ぐ必要があるということです」
彼は怪しい笑みを浮かべてそれに答えた。
「ましてや彼は虎なのですから。全ての獣の頂点に立つ王者なのですよ」
「ううむ」
実際に虎の力はかなり大きい。よく獅子と比較されるがその身体は虎の方が遙かに大きい。そしてその力もだ。虎の強さはそれだけのものがあるのだ。
「そして虎は誇り高い。時も知っています」
「時もか」
「そうです。今は戦いの時ではありません。ですが時が来たならば」
「狩る」
「はい」
彼は同志達の言葉に頷いた。
「それで全てが終わるでしょう。ふふふ」
彼は再び怪しい笑みを発した。それは闇の中に響いていた。
彼等はそのまま闇の中に消えた。そして哄笑だけがそこに響いていた。

戦士達の集結その五

ライダー達はこの時静岡を過ぎ愛知に入っていた。
九台のバイクが進む。その先頭には本郷がいる。
その横には一文字がいる。そして彼等に導かれるようにして他のライダー達が続く。
風見と神、アマゾンと城、筑波と沖。結城は最後尾にいた。
豊橋に着いた。彼等はそこで一旦止まった。ドライブインに入った。
「ふう」
バイクから降りヘルメットを外す。そして中に入った。
大きなテーブルに着く。そしてようやく一息ついた。
「どうやら奴等はもう伊勢に入ったようだな」
まずは一文字が口を開いた。
「そうみたいですね。ここか渥美から海で行ったようです」
神が答えた。
「だろうな。一番近いからな」
本郷がそれを聞いて言った。その顔はやはり真剣なものであった。
「じゃあこっちも急がないとな。おやっさん達は今どの辺りだ？」
「静岡を出たところだ。そんなに離れてはいない」
結城が風見の問いに答えた。
「じゃあ問題はありませんね。問題があるとしたら」
沖が言った。
「良の奴だな。何処にいるか、だ」
城がそこで口を入れてきた。皆それに頷いた。
「多分もう津にはいないでしょうね」
筑波が考えながら自分の考えを述べる。
「だろうな。そのまま留まるには危険だ。バダンの奴等と挟み撃ちに遭う可能性があったからな」

「だとすれば何処だ」
ダブルライダーはそう言いながら考え込む。ここでアマゾンが口を開いた。
「これアマゾンの予想」
「おお」
一同は彼に目を向けた。
「良は多分山の方にいる。そういう予感する」
「山か」
彼等はそれを聞き顔を見合わせた。
「だとしたら大体予想はつくな」
「ええ。三重で山と言えば」
西の方しかない。そしておそらく伊勢より北だ。ならば大体彼がいそうな場所が絞れてくる。
地図を取り出した。そしてそれを見ながら色々と話をする。そして遂に結論が出た。
「ここだ」
彼等は一斉にある場所を指差した。
「そこ以外には考えられないな」
「ああ」
皆同じ考えであった。そして彼等は食事を終えた後一斉に席を立った。
「行くか」
「うむ」
「まずは合流だ」
そして彼等は戦場に向かうのであった。爆音が道に轟いた。
その頃伊勢では謎のテロが起こっていた。伊勢のとあるテーマパークが謎の爆発を起こしたのだ。
建物は全壊した。幸い客は全く入っておらず犠牲者は少なかった。だがここで経営している者達の不正や利権が露になり、このことで大量の逮捕者が出た。

「わしは悪くない！悪いのはあいつ等だ！」
その総責任者であるとある大企業の社長がテレビの前に醜く叫ぶ。
彼は多くの社員をリストラし、関連企業を次々と潰してこのテーマパークに巨大な利権を置いていたのだ。そしてそれを貪り続けていた。
この男は会社にどれだけの損害を与えても平然と居座っていた。
そして私腹を肥やし続けていたのだ。
彼とその一味に対する批判は頂点に達していた。とりわけ彼にリストラされた者や関連会社を潰された者達の怒りは凄まじかった。
そして遂に正義の裁きが下された。
彼はある日世論の追求を逃れて一人愛人のマンションで酒を飲んでいた。
「わしの何が悪いんじゃ」
古い歴史ある街に彼はいた。この様な愚劣な男には相応しくはない街である。
「私腹を肥やして何が悪い。わしの様に偉い人間は何をしても許されるんじゃ」
彼はそうした考えの人間であった。経営者というよりは犯罪者といった方がいい顔立ちをしている。醜く、下衆な顔をしていた。
「おい」
彼は酒を飲みながら愛人を呼んだ。
「ツマミを持って来い」
しかし返事はなかった。そのかわりに何かが彼のところに投げ込まれた。
「ん！？」
泥酔しきった目でその投げ込まれたものを見る。それは床にゴロゴロと転がっていた。
「う・・・・・」
それは首であった。美しい黒髪の女の首である。言うまでもなく彼の愛人の首であった。

「ひ・・・・・！」
彼はそれを見て失禁した。小だけでなく大の方もである。忽ち部屋の中に悪臭が漂う。
立ち上がった。そして部屋の中を見回す。
「誰じゃ！」
だが返答はない。次には部屋の灯りが消えた。
その中で何かが動いた。そしてこの男はその醜い生涯を終えた。
翌日彼が行方不明になったと新聞で報道があった。そして数日後この愛人のマンションでバラバラ死体となって発見された。世の人々はそれを聞いて喝采を叫んだ。彼の無能で卑劣な部下達は刑務所に入ることになった。そしてそこで徹底的な虐待を受けたという。
「自業自得だな」
立花はその記事をライトバンの中で読みながら言った。
「悪人の末路なんてこんなもんだ」
「そうでしょうね」
隣で車を運転している滝がそれに応えた。
「けれどこのテーマパークのテロって臭くないですか？」
「確かにな」
立花にもそれはわかっていた。
「バダンの仕業だろうな、間違いなく」
「でしょうね。おそらくこれは警告ですよ」
「わし等へのか」
「ええ、他には考えられません」
「だとしたらかなり手荒な警告でんな」
後ろの席からがんがんじいが顔を出してきた。
「連中らしいと言えばそうでっけど」
「まあな。ただ爆弾を使っただけなのか、記事だとそう書いてあるが」
「まさか」
ここで一同は顔を暗くさせた。

戦士達の集結その六

「ああ、あれを使ってたんじゃないか」
「時空破断システム」
竜がここで言った。
「あれを使った、と仰りたいのですね」
「テストも兼ねてな。ほら人の全くいない場所だっただろ、テーマパークなのに」
「ええ」
「実験にはもって来いだろ。それに経営している奴等もろくでもない連中だったからそっちに目がいく。実際このテロよりも奴等の悪事の方に目がいってるしな」
「そういえば犯人も捕まっていないですしね」
「犯人は多分バダンじゃないだろうがな」
立花はそう見ていた。
「これは奴等に恨みを持つ連中だろう。相当汚いことや悪いことをやって私腹を肥やしていたからな。会社の経営まで出鱈目にして」
「とんでもない奴ですね」
「そんな奴はどうなっても自業自得だがな。ただそれでバダンの影が隠れちまうのはな」
「俺達だけしか気付かない、ってことですね」
ここでチョロも話に入って来た。
「ああ、もっともそれが目的かも知れんがな」
「警告、ですか」
佐久間がそこで呟いた。
「ああ。バダンの力を見せ付けるって意味でもな。多分使ったのは爆弾じゃない」
「ですね」
他の者もそれに賛同した。

「ただダミー工作はしているかも知れんがな、テロの現場は」
「他の者が見てもわからないように、ですか」
「奴等ならその程度はやれる」
「確かに」
「だとするとやっぱり伊勢での戦いは決戦になるだろうな」
「ええ」
「気合入れて行くぞ、そして勝つぞ」
「当然ですよ」
彼等もそれは同じ考えであった。
「バダンをぶっ潰しましょう」
「そして世界に平和を」
「よし」
立花は彼等の言葉に対して頷いた。
「ライダー達に遅れるなよ。いいな」
「はい！」
彼等は力強く答えた。戦いの前から士気は既に高かった。
それはその後ろの車でも同じであった。そこには谷と三人の博士達が乗っていた。
「前の車は元気ですね」
助手席に座っている志度がそれを見て微笑んでいた。
「でしょうね。あっちには戦闘要員が集まっていますから」
車を運転する谷がそれを受けて言った。
「血気も盛んですよ」
「立花さんもいますし」
後ろにいる海堂が言った。
「ははは、確かに」
伊藤がそれを聞いて笑った。
「あの人は元気ですからね、何時でも。最初御会いした時は驚きましたよ」
「私もですよ」

志度もそれに同意した。
「谷さんみたいな方ももう一人おられたのですから」
「おいおい、そりゃどういう意味ですか」
谷がその言葉に口を尖らせた。
「私はそんなに変わってますかね」
「御存知ない」
三人は呆れた素振りでそう言った。
「またそんなことを仰る」
谷は口を尖らせた。
「自分ではそうは思ってはいないですけれどね」
「いやいや、御気を悪くされたのでしたら申し訳ない」
「けれど我々にとっては谷さんも立花さんも非常に頼りになる存在なのですよ」
「そうなのですか」
彼はそれを聞いていささか機嫌を直した。
「だったらいいですけれどね、私みたいなおっちゃこちょいが」
「いえいえ」
三人は謙遜する谷に対して言った。
「頼りにしてますよ、本当に」
「今回も頼みますから」
彼等はやはり科学者である。戦闘員達は何とか相手できるにしろ戦いは苦手である。だからこそ谷の様な存在は有り難いのである。
谷もそれは同じであった。やはり彼等の存在は有り難い。彼等は互いに仲間であるからこそ信頼し合い、助け合っているのである。
二台の車もまた伊勢に向かっていた。そして戦場に向けて進むのであった。
その頃村雨と役は青山町にいた。
ここは木津川が流れる緑の山地である。見渡す限り山が続き緑の木々が生い茂っている。
二人はその中に潜んでいた。そして時が来るのを待っていた。

「それでもこんな家があるとは思いませんでしたね」
役は山の中の家のリビングで呟いた。
「ええ」
その隣の台所から村雨が出て来た。
「どうやら廃家みたいですけれどね。それでも生活するには支障はありませんよ」
誰かの別荘であったのだろうか。傷んではいるがかなりいい造りの家である。
「確かに。少なくとも雨露はしのげますし」
「それだけでも大きいですね」
二人はそう話しながら食事の用意をしていた。見ればカレーである。
「それにわりかし近くに店もありますし」
「ええ」
道に出ればコンビニもある。二人はそこで色々と買い物もしているのだ。
「姿を隠すのにも苦労しませんね」
「ただ用心は必要ですけれどね」
ハンバーグカレーであった。ハンバーグはレトルトのものである。
二人はそのハンバーグを切ってカレーと共に口に入れる。
「美味い」
村雨はそれを一口食べてそう言った。

戦士達の集結その七

「いいですね。実はハンバーグカレーは食べるのははじめてですが」
「そうなんですか」
「はい。ハンバーグ自体あまり食べたことがありませんので」
「へえ」
これは少し意外であった。
「タルタルステーキの方が多いですかね、食べてきたのは」
「タルタルステーキですか」
馬の生肉を細かく刻んで卵や玉葱の細かく切ったものと混ぜて食べる料理である。元々モンゴルで食べられていた料理がもととなっている。
「あれも美味しいですよ。馬の肉は癖もありませんし」
「そうですね」
馬肉は村雨も食べたことがある。
「俺は馬刺しが好きですね」
「あれもいいですね。大蒜醤油で」
「はい。一度食べたら病みつきになりますよね」
村雨の顔がほころんでいた。
「あれが好きでして」
「私もですよ。日本ではあれが好きなだけ食べられるのですから‥
「そういえば他の国ではあまり食べないですね」
「ええ、生肉自体が」
「確かに。東南アジアで生の魚食べて驚かれた日本人がいたそうですね。それも鯛を」
「そうらしいですね。まあそうでしょう」
役は首を縦に振りながらそう言った。
「生の肉や魚をあれだけ食べるのは日本だけですから」
「俺も外国でそれ見てびっくりしましたね。生で食べるのを凄く嫌

がるんで」
「大昔はそうも言っていられなかったのですけれどね」
役はここで微かに微笑みながら言った。
「人も豊かになったものですよ、本当に」
その眼は不自然な程温かかった。まるで親が子を見るようであった。
（・・・・・・・・・）
村雨はそれをやはり違和感を覚えながら見た。彼には何かあるのだろうと思えてならなかった。
「さて」
一足先に食べ終えた役は彼に声をかけた。
「食べ終わったら行きますか」
「はい」
ここで丁度彼も食べ終えた。
「食器を洗ってから」
「おっと、そうでした」
そして二人は食器を洗った。これも見れば何処かで買った安いものである。中には紙のものもある。
洗いを終えると彼等は家を出た。そして山の中に入って行った。
その山の中で蠢く影がいた。
「ここにいるのか」
それはバダンの戦闘員達であった。
「間違いない」
その中の一人が答えた。
「家に灯りが点いていたからな」
「他の者ではないな」
「ああ、間違いない」
彼はそれに頷いた。
「二人の顔も見た、この目でな」
「そうか、なら間違いないな」

彼等はそれを聞いて頷いた。
「では行くとしよう。だがわかっているな」
「無論だ。我々の任務はあくまで偵察だ。彼等を倒すことではない」
「そういうことだ」
そして彼等は木々の中に消えていった。
村雨と役は山の中を歩き回っていた。そして青山公園に辿り着いた。
ここは青山の山地を公園にした場所である。風光明媚であり緑豊かな公園である。
二人はここで何か打ち合わせをしていた。
「ではもうすぐですね」
「はい」
彼等は椅子に座り話をしている。
「それでは我々も」
「ええ。時は来ました」
何かがあったようである。二人は頷き合う。
それから立ち上がる。そして再び公園の中に消えた。
「あそこだ」
それを遠くから見る影達がいた。あの戦闘員達である。
「遂に尻尾を掴んだな」
「うむ」
彼等もまた頷き合う。そして姿を消した。
「本部に連絡だ」
そう囁き合っていた。そのまま消えていった。
それから数日経った。ここに何人かの異様な風采の者達が入って来た。
「行きましょう」
「おお」
「了解」
彼等はそれぞれに別れた。そして個々に山に入っていくのであっ

た。

その時村雨と役はあの家にいた。丁度朝になった時であった。

「お早うございます」

村雨は居間でソファーに横になって寝ていた。家に残されていた古い皮のソファーである。

「はい」

役は二階から降りて来た。彼は二階で寝ていた。これはここに隠れる時に二人で決めたことであった。一人が互いに警戒をする為である。

一階は村雨が担当する。そして二階は役。彼等はこうして手分けしてバダンを警戒していたのだ。

「ところで」

役が彼に声をかけた。

「わかっていますよ」

村雨はそれに対して引き締まった顔で答えた。

「では」

「はい」

村雨は起き上がった。そして二人はすぐに家を出た。そしてそのまま森に入って行った。

戦士達の集結その八

二人は青山公園に出た。森から出るとすぐに日差しに迎え入れられた。そして他の者達にも。

「お待ちしておりましたよ」

そこで誰かの声がした。

「その声は」

村雨はその声を聞くとすぐに身構えた。そして辺りを見回した。

そこに彼等はいた。皆既にゼクロスを取り囲んでいる。

村雨と正対する位置にヤマアラシロイドがいた。彼は村雨を見ながら不敵な笑みを浮かべている。

「ふふふふふ」

「何がおかしい」

「いえ、楽しいのですよ」

彼は余裕に満ちた様子でそう返した。

「貴方と再び御会いできたのがね」

「戯れ言を」

「戯れ言ではありませんよ」

彼は言った。

「ようやくあの時の戦いの続きができるのですからね」

「横須賀での時か」

「はい」

彼は答えた。

「まさかお忘れになったわけではないでしょう。貴方が記憶を取り戻された時なのですから」

「確かにな」

「そしてこれも」

彼はここで腕を振るった。するとその手の中に一本の槍の様な針が現われた。

そしてそれを村雨に向けて投げた。しかし村雨はそれを上に跳んでかわした。
「どういうつもりだ」
「挨拶ですよ。ほんのね」
彼は笑いながらそう言った。
「これから貴方を地獄にお送りする前の」
「どうやら復活しても大言する癖はなおっていないようだな」
「大言!?とんでもない」
彼はやはり笑いながらそう言った。
「真実ですよ。私が言う事は全て真実です」
「バダンが真実なぞ言うのか」
「ええ。何故なら」
彼の後ろにいる他の者達も動いた。
「貴方がここで死ぬのも事実だからです」
「やってみるか」
「ええ」
彼はそう言いながらニヤリと笑った。
「今ここでね」
左手を広げて顔の前にかざす。するとまず目が変わった。
髪が伸びそれが針になる。そして服が徐々に化け物の身体になっていく。
他の者達も同じであった。皆バダンの改造人間に変身していた。
そして戦闘員達も姿を現わす。彼等もまた村雨と役を取り囲んだ。
「さあ貴方も」
ヤマアラシロイドは村雨に対して言った。
「変身しなさい。そして私達に倒されるのです」
「倒されるつもりは毛頭ないが」
彼はゆっくりと前に出ながら言った。
「だが変身するのは同意だ。言われずともな」
「ふふふ」

「では行くぞ、バダンの者達よ」
彼はゆっくりと変身の構えに入った。
「ここを逆に貴様等の墓場にしてくれる」

変・・・・・・
まずは右手を真横に置く。そしてそこから斜め上四十五度に上げる。そして左手をそれと合わせ垂直にする。
それから左手を上げて左斜め上に持って行く。右手はそれを合わせて垂直にさせる。
それと共に身体が変わっていく。銀色になり手足が赤い炎の色になる。だがその先の手袋とブーツは機械の色である。
・・・・・・身！
左手を拳にし、それを脇に入れた。右手はそれと連動し斜め前に突き出す。
顔を赤い仮面が覆った。まずは右を、そして左を。眼が緑になった。

光が彼を覆う。そしてそれが消え去るとそこに赤い機械のライダーがいた。
「トォッ！」
彼はすぐに跳んだ。そして空中で攻撃の態勢に入る。
「無駄なことを」
ヤマアラシロイドはそれを見上げて不敵に笑った。
「空中でも貴方の相手をしてくれる者はおりますよ」
ここで彼の後ろにいる二体の改造人間が動いた。
「頼みますよ」
「了解」
「わかりました」
タカロイドとドクガロイドがすぐに動いた。彼等は翼を羽ばたかせ天にあがった。

「食らえっ！」
まずはタカロイドが羽根を投げつけてきた。
だがゼクロスはそれをかわした。空中で身体を捻ったのだ。
「甘いっ！」
「甘いですか！」
だがそこにドクガロイドが襲い掛かって来る。間髪入れぬ攻撃だ。
「バダンが甘い。よくぞ言ってくれました」
そう言いながら翼をはばたかせる。
「その言葉、後悔させてあげましょう」
毒粉を撒き散らしてくる。そしてそれでゼクロスを覆おうとする。
だがゼクロスはそれに対して急降下してかわした。だがその下には既に他の者が待っていた。
「見え見えだ！」
そこにはトカゲロイドとクモロイドがいた。
まずはクモロイドが攻撃を仕掛ける。口から糸を吐いてきた。
「フン！」
それはゼクロスに向けて襲い掛かる。だがゼクロスはここで足に赤い光を溜めた。
「これでどうだっ！」
そしてその赤い光で糸を切り裂いた。そのまま急降下を続けクモロイドに攻撃を仕掛けようとする。
だがそこにトカゲロイドが出て来た。
「させんっ！」
口から炎を吐く。それでゼクロスを焼き尽くさんとする。
「これは防げまい！」
だがゼクロスはそれも薙ぎ払った。何と赤い光の足でその炎を断ち切ったのである。

戦士達の集結その九

「何と！」
「この程度の炎で！」
そのまま急降下を仕掛ける。そしてこの二体の怪人を倒そうとする。だがそれはならなかった。
「そうはさせないわ」
横からバラロイドが攻撃を仕掛けてきたのだ。バラの棘の蔦でゼクロスを打とうとする。
「ムッ！」
それは上からゼクロスに襲い掛かってきた。彼は止むを得なくそちらに攻撃を向けた。
腕に光を集める。それでバラの蔦を弾き返した。
そして着地する。攻撃に移る暇もなくカマキロイドとカメレオロイドが攻撃を仕掛けてきた。
「死ねぃ！」
鎌と刀が来る。ゼクロスはそれを巧みなフットワークでかわす。
そして一旦後方に退いた後攻撃に移ろうとする。
しかしそこにも怪人達の攻撃が来た。
ジゴクロイドとアメンバロイドである。拳が彼を襲う。
「クッ！」
それは普通の拳ではなかった。ボクサー、そして拳法家の拳である。動きが尋常なものではない。
だがゼクロスはそれを身を屈んでかわす。そして彼等の腹に逆に拳を繰り出そうとする。
そこで二体の怪人は退いた。そして今度はカニロイドが出て来た。
「これならどうだ！」
鋏でゼクロスの首を狙う。それで断ち切るつもりなのは言うまでもない。

彼はその鋏を掴んだ。だがカニロイドは力で押し切ろうとする。
「グググ・・・・・」
両者は力比べに入った。互いに一歩も譲らない。
しかし遂にゼクロスが勝った。彼は怪人を上に放り投げた。
「今だ！」
そこから飛び上がり蹴りを放とうとする。しかしそこにも邪魔が入った。
「そうはさせません」
ヤマアラシロイドが来た。彼は棘の槍でゼクロスを追い詰めてきた。
稲妻の様な速さで槍を繰り出す。それは的確にゼクロスの急所を狙っている。
ゼクロスはそれを巧みな動きでかわす。だがその後ろに他の怪人達も迫って来ていた。
「危ないゼクロス！」
役がそれを見て叫ぶ。後ろからバラロイドの蔦が来た。
「喰らえっ！」
「クッ！」
ゼクロスはそれを避けようとする。だがヤマアラシロイドの槍に気をとられそれは鈍かった。
間に合わない。蔦がその背を撃つ。そう思われた瞬間であった。
蔦が弾け飛んだ。何かがその蔦を撃ったのだ。
「ムッ！？」
バラロイドだけではない。他の怪人達も動きを止めた。
「誰だっ！」
まずはその弾き飛ばしたものが何であるか確かめようとした。それは一本のロープであった。
「まさか」
「そうだ、そのまさかだ」
左手からあの声がした。

「バダン、ゼクロスは倒させはしないぞ！」
そこには仮面ライダーエックスがいた。彼はライドルロープを手に太陽を背にして立っていた。
「エックスライダー！」
怪人達は彼の姿を見て思わず叫んだ。
「どうしてここに！」
「貴様等の行動なぞすぐにわかることだ。もっとも今回はゼクロスと合流する為にここに来たのだがな」
彼はライドルをスティックに換えながらそう答えた。
「さてと」
彼は跳躍してゼクロスの側に来た。
「加勢するぞ、ゼクロス。もう安心していいぞ」
「申し訳ありません」
ゼクロスは彼に対して礼を述べた。だがエックスはそれに対して言った。
「礼はいい。今はこの連中を退けることだけを考えよう」
「はい」
ゼクロスはそれに答えた。そして彼もナイフを取り出した。
「さあ来い」
彼等は背中合わせに取り囲む怪人達と対峙した。彼等はジリジリと睨み合う。
「フン、たった二人だ。どうということはない」
トカゲロイドがそう言った。
「そうだな、確かに」
それにジゴクロイドも同調する。
「ならばさっきと大して変わらん。二手に別れてやるぞ」
「うむ」
怪人達はその言葉通り二手に別れようとする。だがここでエックスライダーが言った。
「誰が俺一人だけだと言った！？」

「何！？」
その時だった。怪人達の周りに雷が落ちてきた。
「ムッ！」
「これはまさか！」
その雷の主が誰か、わからないものはいなかった。
「その通りだ！」
そこにまた一人ライダーが姿を現わした。彼は雷を全身に纏っていた。
「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ、悪を倒せと俺を呼ぶ！仮面ライダーストロンガー見参！」
「クッ、ストロンガーもか！」
「俺だけではないぞ！」
ストロンガーが叫ぶ。すると林の中からもう一人姿を現わした。
「ケケーーーーーッ！」
それはアマゾンであった。彼は天高く跳躍しゼクロス達のところに来た。
「ゼクロス、もう大丈夫！」
ゼクロスの前に来てそう言った。
「アマゾンが来たから何も心配いらない！ここは任せる！」
そして怪人達を睨みつける。その背鰭が激しく動いた。
「おのれ、四人もライダーが」
ヤマアラシロイドはそれを見て歯噛みした。だがそこでまた声がした。
「ハリケーーーーン！」
青いマシンがこちらにやって来る。そしてそこから何者かが跳んだ。
「トォッ！」
空中で一回転する。そしてストロンガーの横に着地した。
「仮面ライダーブイスリー、貴様等に引導を渡す為に来たぞ！」
「ブイスリーもか！」

「そうだ、そして俺もいる！」
そこでブイスリーに目掛けて放たれたクモロイドの糸を炎が焼き尽くした。
「スーパー1か！」
「その通り！」
銀のライダーがそこに姿を現わしてきた。
「どうやら間に合ったな」
そしてまた一人声がした。
「俺も忘れてもらっては困るな」
ライダーマンであった。彼はゆっくりとこちらにやって来てスーパー1の横に来た。

戦士達の集結その十

「空には俺がいるぞ！」
怪人達は空を見た。するとそこにはスカイライダーがいた。
「バダン、空は押さえたぞ！」
「おのれ！」
怪人達は逆に取り囲まれる形となってきた。そしてあの二人が姿を現わした。
「これで全員揃ったな」
「ああ、やっとな」
二人のライダーが銀のマシンに乗ってこちらにやって来る。彼等はマシンから飛び降りた。
「トゥッ！」
そしてストロンガー達とは逆の位置に着地する。そして怪人達と対峙した。
「ダブルライダー」
怪人達の誰かが彼等の名を呼んだ。
「そうだ」
そして彼等はそれに答えた。
「ゼクロスと合流する為にここへ来たのだがな。だが貴様等までいるとは思わなかった」
「戦いは先になると思っていたが遭ったからには仕方がない。ここで決着をつけさせてもらうか」
ライダー達はその言葉を合図にするかのように構えをとった。そして怪人達に向かい合う。
「フフフ、面白い」
だがヤマアラシロイドはここで余裕の笑みを浮かべた。
「我々にとっても好都合ですね、ここで貴方達と戦えるとは」
「どういう意味だ」

ブイスリーがそれに問うた。
「貴方達の首級を挙げることができるからですよ。そしてそれを偉大なる我等が首領に献上する」
「あの首領にか」
「ええ。それでバダンの世界征服は成ったも同然です。貴方達は我等が理想世界の為に礎となるのです。感謝しなさい」
「戯れ言を」
ゼクロスがそれを聞いて言った。
「我々は貴様等に倒される為に生きているわけではない」
「その通り、むしろその逆だ」
二号が言った。
「貴様等を倒すことこそ我等が使命、それは決して変わることがない」
「確かに」
ヤマアラシロイドはそれでもなお笑っていた。
「しかしそれは我々にとっても同じことなのです」
「所詮戦うしかないということか」
「まあそういうことになるでしょう」
スーパー1に言葉を返した。
「そして我々はこれ以上貴方達とお話するつもりはありません」
「やるということか」
「ええ」
エックスライダーの問いに答えた。
「今更言う必要も無いでしょう、それは」
「確かにな」
スカイライダーが着地してきた。
「ではここで決着をつけようか」
「グルル」
一号とアマゾンが再び構えをとる。他のライダー達もだ。
「それは我等とて望むところ」

怪人達も構えに入った。そして両者は睨み合いをはじめた。その時であった。
「同志達よ」
そこでしわがれた低い声がした。
「その声は」
ダブルライダーがまず反応した。そして他のライダー達も続いた。怪人達もである。
「フフフ、やはり貴様等がまず振り向いたか」
暗闇大使はそれを見て満足したように笑った。
「どうやらわしはダモンとは声まで似ているようだな従兄弟だから当然か」
「何をしに来た」
ゼクロスが彼に問うた。
「まさか貴様も戦うつもりか」
「そうして欲しいか？」
彼は不敵な様子でそれにこたえた。
「ならばそうしてもよいがな」
「ムッ」
ゼクロスは彼と向かい合った。だが彼は攻撃を仕掛けては来なかった。構えもとってはいない。
「どういうつもりだ」
「これでわかるだろう」
暗闇大使は構えをとっていないことでそれを示した。

戦士達の集結その十一

「今は貴様等と戦うつもりはないということだ」
「どういうことだ」
「まあそうつっかかるな。わしとて戦いは心得ている」
そう言いながら怪人達に顔を向けた。
「今は下がるがいい。よいな」
「しかし」
だが彼等はそれに抵抗を示す。大使はそんな彼等に対して言った。
「同志達よ」
その時目が怪しく光った。
「偉大なる我等が首領の御命令である。それ以上は言わぬぞ」
「首領の」
「そうだ。わかったな」
「はい」
彼等は頭を下げた。そして変身を解いた。
「先に行くがいい。ここはわしに任せよ」
「ハッ」
怪人達は姿を消した。そして大使と戦闘員だけが残った。その戦闘員達も暗闇大使の側に来た。
「さてライダー達よ」
彼はライダー達と正対した。
「よくぞここまで来た。この伊勢までな」
「伊勢か」
「そうだ。ここに我等の本拠地があることは既に知っているな」
「無論、だからこそ来たのだ」
「貴様等を倒す為にな」
「威勢がいい。やはりこうではなくてはな」
暗闇大使は余裕に満ちた笑いを発した。

「面白くとも何ともないわ」
「戯れ言はいい。どういうつもりだ」
「どういうつもりか？」
大使はライダー達のその言葉にもまだ笑っていた。
「それは貴様等が一番わかっていることであろう」
「我々をからかうのもそれまでにしておけ。貴様が腹に一物あるのはもうわかっている」
「買い被ってくれるな、また」
「バダンの大幹部、それがどういったものか俺達がわからないとでも思うか」
ライダー達はそう反論した。
「ましてや貴様はあの地獄大使の従兄弟、そう簡単に言葉を信じられはせん」
「ダモンのか。かってはそれが怒りの源であったな」
彼はその名を聞き目を細めた。
「だが今では懐かしい。我が半身であった」
そしてライダー達を睨みつけた。その目はもう笑っていなかった。
「半身の仇はとらねばならぬな。だがそれは今ではない」
「まだ言うか」
「フン」
大使はここで彼等を鼻で笑った。
「機が来ておらぬからな。ライダー達よ、松坂に来い」
「松坂」
「そうだ、わしはそこで待っている。バダンの同志達と共にな」
これは事実上の宣戦布告であった。
「そこで貴様等を倒してくれよう。さあ、来るのか来ないのか」
「言うまでもない」
ライダー達の返答は決まっていた。
「言われずとも来てやる。暗闇大使」
ここで彼の名を呼んだ。

「松坂が貴様の最後の地になる。覚悟していろ」
「その言葉、貴様等に返らねばよいがな」
だが彼の余裕は変わることがなかった。
「バダンの力、見せてやろうぞ」
「望むところだ」
ライダー達もその宣戦布告を受け取った。こうして両者の最後の戦いが決まった。
「では松坂で会おうぞ」
そう言うと身体をマントで覆った。そしてその中に消えた。戦闘員達も姿を消した。
「消えたか」
ライダー達はそれを見送った。後には青山の緑の山々だけが見えている。
「行くか」
「おう」
ライダー達は口々に言い合った。
「最後の戦いだ」
「これで全てが決まるぞ」
「うむ」
彼等は頷き合う。そして最終決戦に思いを馳せるのであった。

戦士達の集結　　完

２００４・１２・５

悪魔の兵器その一

悪魔の兵器

青山町での対峙を終えたライダー達は鈴鹿に向かっていた。そこで立花達と合流する為である。
この鈴鹿はレース会場として有名である。立花達は今そのレース場にいた。
「ここでレースを見るのが好きなんですよ」
立花は笑いながら谷達に語っている。
「やっぱりレースはいい。男のロマンですよ」
「おやっさんまだ諦めていなかったんですか」
谷がここで笑いながら口を入れてきた。
「当然だ」
立花は口を尖らせてそう反論した。
「まだまだ諦めていないぞ、何なら御前がレーサーになるか」
「いや、もう俺は歳ですから」
彼はそれを笑って断った。
「流石にもう駄目でしょう」
「何を言っているんだ、わしはまだやるつもりだぞ」
「おやっさんがですか！？」
「当然だ。誰もやらないのならわしがやるだけだ」
彼は胸を張ってそう言った。
「もっとも他の若い奴も探しているがな」
そしてここで顔を綻ばせた。
「アマゾンなんかはかなりいい素質があるんだがなあ」
「あいつはまた勘が違いますからね」
「そうだ、まあライダーの仕事があるから仕方ないが」
「史郎なんかはどうです？」

「あいつがか？あいつは駄目だよ」
「何でですか？」
「向き不向きがあるんだ。あいつはカウンターにいるのが一番似合ってる」
「ははは、確かに」
滝だけでなく他の者もそこで笑った。
「あいつがバイクに乗る姿はちょっと想像できませんね」
「五〇ＣＣは乗れるみたいだがな。あと車も」
「それでもバイクには向いていませんね」
「そういうことだ。ましてやレースともなるとな」
立花はここで顔を引き締めさせた。
「センスが必要なんだ。そうした奴はそうそういるもんじゃない」
「本郷にはそれがありましたね」
「ああ。ライダーには全員あるな。だからこそライダーになったんだろうが」
「確かに」
皆その言葉に対して頷いた。
「ところでだ」
立花はここで志度に顔を向けた。
「時間はどうなっていますか」
「はい」
彼はそれを受けて腕時計を見た。
「そろそろですね」
「そうですか」
立花はそれを聞くと顔を前に戻した。そしてその向こうに何かを見ていた。
「来るな」
そう呟いた。すると一陣の風が来た。
青いマシンが姿を現わした。それはコーナーを高速で回りながらこちらにやって来た。

「まずはあいつですか」
滝はその青いマシンを見て言った。
「ちょっと予想とは外れましたね」
「そうですか。風見先輩らしいですけれど」
だが佐久間はそれを見て当然のようにコメントした。
「あの人はああいう人なんですよ」
「そうだったのか」
「確かにな。あいつらしいと言えばあいつらしいな」
立花もそれに納得したようである。ニューハリケーンが彼等の前に止まった。
挨拶をするよりも早く次のマシンが姿を現わした。それは雷を纏っていた。
「また派手に出てきやがったな」
立花はそれを見て苦笑した。
「いつもああなんだ。とにかく目だちたがり屋でな」
「ライダーにしては珍しいですね」
伊藤がそれを聞いて言った。
「まあその分結果は出していますがね。それでも見ている方はヒヤヒヤしていますよ、いつも」
「そうでしょうね」
ニューハリケーンの横にそのマシンは止まった。
またマシンがやって来た。今度は銀のマシンだ。
「今度は」
それは新サイクロン改であった。
「本郷か隼人か」
「あれは」
滝と立花はそのマシンを見ながら話をしていた。やがて立花が言った。
「本郷だな」
見れば手袋とブーツが銀色であった。そしてマシンの動きも流れ

るようであった。
「隼人のは少し強引なんだ。本郷は流れに従う」
「そうだったんですか」
「おい、御前はいつもあいつの走りを見ていただろうが」
「そこまで見ていませんよ」
「何言っているんだ、そんなんだから御前はレーサーとしては今一つだったんだぞ」
「それは関係ないでしょう」
そんな話をしているうちに一号も到着した。
「次は誰ですかな」
谷がコーナーに目を向けた。
「さて、誰でしょうね」
立花もであった。他の者も目をみはっている。
そしてすぐに次のライダーが姿を現わした。青いマシンであった。
「あれで来たか」
谷はそれを見て思わず口に出した。
「ブイジェットカスタムで来ると思ったんだがな」
「あれは小回りがききませんからね」
横にいる立花が言った。
「ブルーバージョン改はオフロード用ですから。その分機動性がいいんですよ」
「成程、確かにあれは小回りがききませんからね。それもありますか」
「はい。おそらくそうでしょう」
ブルーバージョン改が到着するや否や次のマシンがやって来た。
それは激しい動きをしていた。
「今度はあいつか」
立花の目には獣に似た形のマシンが映っていた。
「相変わらず独特な動きをするな」
そのマシンはまるで生き物の様に激しく動いていた。

「操る動きもな。あいつはちょっと他のライダーとは違うんだ」
「違うんですか」
竜がそれに尋ねてきた。
「違うさ。わしにはわかる」
立花はジャングラーGから目を離しはしない。
「そして操縦しながら喜んでいる。それも変わらないな」
到着すると背鰭を激しく動かした。そしてアマゾンもマシンも立花に挨拶をした。
次に出て来たのはプロペラを持つ銀色のマシンであった。
「ほう」
立花はそのコーナリングを見て目を細めた。
「いいな。あのマシンは動かすのがかなり厄介なんだが」
「そうなんですか」
「ええ。バランスがね、独特なんですよ」
海堂の質問に答える。
「もっともあいつは最初からあれを乗りこなしていましたけれどね。それでもあのコーナリングはそうそう出来るもんじゃない」
彼はマシンの動きに関心していた。
「センスだけでも駄目なんですよ。やっぱり経験がなければ」
「そういうものなんですね」
「ええ」
クルーザーDが到着すると同時に別のマシンが来た。
「今度はあいつか」
「待たせてくれましたわ」
谷とがんがんじいが同時に声をあげた。スカイターボカスタムがやって来た。
「あれはかなりのスピードが出るんですよね」

「ああ」
谷が滝に答えた。
「流石に今はそんなにスピードは出せませんか」
「そりゃね。けれどそれでもかなり速いな」
谷がマシンの動きに感心していた。
「よくあれだけ出せるものだ。重力も相当なものだろうに」
「あいつは空を飛ぶからな。重力には強いんだよ」
「成程」
スカイターボカスタムも止まった。そこで荒々しい風の音が聞こえてきた。
「この音は」
「来たな」
立花はその音を聞いてニヤリと笑った。
「やっぱり最後の方になって出て来やがったか。変わらねえな、あいつも」
「ええ」
滝がそれに賛同した。
「あいつらしいと言えばあいつらしいですね、本当に」
「ああ、マシンの動きも変わっちゃいね。そのまま長所を伸ばしてやがる」
二号の新サイクロン改は立花が言うには荒々しい動きでコーナーを曲がりこちらに来た。その止まり方も一号とは微妙に違っていた。急停車であった。
「じゃあ次は」
「あいつだな」
立花には次のライダーがもうわかっていた。
「どちらだと思います」
「決まっているじゃないか」
彼は他の者に対して自信ありげに答えた。
「ライダーマンだよ」

その言葉と同時にライダーマンのマシンであるライダーマンマシンカスタムがコーナーを曲がってきた。
「な、わしの予想は当たっただろ？」
立花は他の者に声をかけた。やや自慢げに聞こえる。
「ええ。何故わかったんです？」
「勘だよ」
「勘、ですか」
「ああ。あいつの性格も考えてな。多分次に来るんじゃないかと思ったんだ」
「それで予想できたんですか。流石ですね」
「長い付き合いだからな。わかるさ」
それは立花だからこそ言える言葉であった。
「マシンの動きもな。あいつのは特徴があるんだ」
「そうなんですか。見たところそうは思えませんけれどね」
「無駄がないだろ。それにハンドル裁きも慎重だ」
「ううむ」
だがそこまでわかる者はいなかった。わかるのは立花だけであった。
「わししかわからんのかな。まあいいさ」
彼は笑ってそう言った。
「これがわかるようになるにはかなりの年期ってやつが必要だからな」
「はあ」
そう話している間にライダーマンも到着した。そしていよいよ最後のライダーの番である。
「やっぱりトリはあいつか」
「まあこれは予想通りですけれど」
やがて先の尖ったマシンがやって来た。それはコーナーをやや傾きながらやって来る。
曲がり終えるとそのまま姿勢を元に戻しこちらに来る。それはま

るで影の様に静かな動きであった。
「ほう」
立花はそのマシンの動きを見て思わず声を漏らした。
「あいつの動きは今初めて見るがなかなか」
「どうですか」
伊藤が彼に尋ねてきた。
「彼のマシンの動きは」
「いいですね。またこれはいい」
「そうですか」
彼はそれを聞いて安心したように微笑んだ。
「そう言ってもらえると有り難いですね」
彼とは長い付き合いである。共にバダンを抜け出している。だからこそそう言ってもらえると有り難いのである。
「またこれは無駄がない。あんな派手なマシンに乗ってよくあれだけやれますよ」
「そうなんですか」
「ええ。筋がいい。これは楽しみですね」
立花はここで笑った。
「この戦いが終わったら誘ってみるか」
「レーサーにですか」
「ああ」
滝の問いに頷いた。

悪魔の兵器その三

「あいつ次第だけれどな。けれどあいつはいいレーサーになるぞ、わしが保障する」

そのゼクロスも彼等の側で止まった。こうして十人のライダーが勢揃いした。

「行くか」

立花は彼等に声を掛けた。

「はい」

戦士達はそれに頷いた。そして戦場に向かうのであった。

ライダー達と立花達は合流した後すぐに鈴鹿を発った。そしてそのまま南に向かった。

先にライダー達のバイクが進む。彼等は変身を解いていた。

「おおい」

その彼等に立花は後ろの車から顔を出して声をかける。

「はい」

風見がそれに振り向いた。

「今どの辺だ」

「ええと」

問われた彼は遠くに見える標識を見る。普通の者では見えないが改造人間である彼には容易に見ることができた。

「今丁度河芸です」

「そうか」

立花はそれを聞いて頷いた。

「じゃあ津までもう少しだな」

「ええ」

風見はそれに答えた。

「そこで一旦休むぞ」

「はい」

他のライダー達もそれに頷く。彼等はそのまま進んで行く。
そして津に着いた。既に日が落ちようとしている。
彼等は旅館に入った。海の見える旅館だ。
「さてと」
一向は浴衣に着替えて部屋に集まっていた。その前には刺身等海の幸の料理と酒が並んでいる。
「これはわしの奢りだ。思う存分食ってくれ」
立花は周りに座る一行に言う。
「はい」
ライダー達だけでなく滝や志度達もそれに頷いた。
「ここで一泊した後朝に発つぞ。松坂にな」
「わかっています」
彼等は顔を引き締めてそれに応える。
「その後はわかっていると思う。健闘を祈るぞ。そしてだ」
「そして」
「必ず勝つ。そして誰も死ぬな」
「わかっていますよ」
本郷と一文字がそれに応える。
「おやっさんもね」
「無理はしないで下さいよ、歳なんですから」
「おい、何を言うんだ」
立花はそれを聞いて口を尖らせた。ここであえてひょっとこの様な顔をしてみせる。
「わしはまだまだ若いぞ。御前達には負けんぞ」
「そう言っていつも後で腰が痛いとか言ってたじゃないですか」
ここで城が入ってきた。
「そうそう、戦いの後はいつもそうでしょね、おやっさんは」
「おい敬介、御前まで言うのか」
立花はそれを聞いてさらに口を尖らせる。
「わしみたいに若い奴はそうそうおらんぞ」

「気持ちだけは」
「こら丈二」
立花は結城を叱るふりをした。
「御前はこの前わしを二十代みたいだと言ってただろうが」
「そうでしたっけ」
「くそ、どいつもこいつも。おいアマゾン」
退路がなくなった彼はアマゾンに助っ人を頼んだ。
「御前はどう思う。御前はわしの味方だよな」
「うん」
アマゾンは頷いてそれに応えた。
「アマゾンおやっさんの味方。これ変わらない」
「よしよし、流石にアマゾンはわかっているな」
それを聞いて目を細める。
「だからアマゾン言う。おやっさん無理しちゃ駄目」
「なぬ!?」
「おやっさんもう歳、だから無理するのよくない。アマゾンそう思う」
「御前もか」
立花の顔はそれを聞いてさらに渋くなった。
「まあまあ」
谷がそれを宥める。
「彼等も悪気はないんですし」
「しかし」
「いいじゃないですか。心配してくれてるんですから。それだけ立花さんが慕われているってことですよ」
「そうですかね」
彼は自分が年寄り扱いされることを嫌う。だからヘソを曲げているのだ。
「まあ今回は私にも任せて下さいよ。私もまだまだやれますし」
「そうですかぁ!?」

ここで筑波と沖が声をあげた。
「谷さんも立花さんと大して変わりませんよ」
「関節痛は大丈夫ですか！？」
「何を言うんだ、御前達は」
谷はそれを聞いて立花と同じ様に口を尖らせた。
「わしのことをまだよくわかっておらんようだな」
「わかってますよ」
筑波は苦笑しながら答えた。
「背中にお灸していることは」
「これは気合を入れる為だ」
「じゃあそこのサロンパスは」
沖が指摘する。見れば肩から見えている。
「うぬぬ」
彼はそこで観念した。顔を顰めるだけである。
「どうやらお互い様みたいですな」
立花はそれを見ながら谷に言った。顔はもう苦笑いとなっている。
「全く」
認めるしかなかった。彼はおもむろに盃を手にした。

悪魔の兵器その四

「こうなったらやけ酒だ。どんどん飲むぞ」
「肴もありますしね」
谷は刺身を醤油に漬けて食べはじめた。平目の刺身である。
「皆食ってやる。年寄りを馬鹿にするとどういうことになるかよく教えてやるからな」
「あ、ちょっと待って下さいよ」
「俺達の分もあるんですよ」
ライダー達だけでなく滝達もそれに入った。そして彼等は食べ物の争奪を開始した。
「おい、まだまだあるからそうがっつくな」
「全部食うって言ったのはおやっさん達の方じゃないですか」
そう言いながらも朗らかに食事を続ける。喧騒はあるが比較的和気藹々とした感じであった。
村雨はその時場の端にいた。そしてそれを微笑みながら見ていた。
「食べてるかい」
そこに伊藤がやって来た。
「はい」
彼はそれに頷いた。
「美味いですね、ここの魚は」
「魚だけじゃないぞ」
伊藤はにこやかに笑ってそう答えた。
「伊勢に来たらあれを食べないとな」
「あれですか」
「そうだ。見れば役君なんかはそれを楽しみにしているようだぞ」
「役さんが」
彼はここで役に目をやる。見れば確かに何かを待っているようだ。
「お待たせしました」

ここで仲居が入って来た。
「おお、来たな」
立花が仲居が手にするそれを見て喜びの声をあげた。
「こっちに持って来て」
そして彼女に声をかける。仲居はそれに従いそれを台の中央に持って来た。既に平日は全部食べられていた。
それが台の上に置かれる。伊勢海老の刺身であった。
「これだよ、これ」
立花はまだ動いている伊勢海老を指して言った。
「伊勢に来たらこれを食わないとな」
「おやっさんって海老好きだったんですね」
本郷が彼に問うた。
「まあ嫌いじゃないな。他の海老も好きだしな」
「そういえばこの前海老フライをかなり食べてましたね」
一文字がそこで言った。
「ああ。美味かったからな。ささ、話はそれ位にして食おう」
そこで他のものに声をかけた。
「この後は味噌汁も来るからな。たっぷり楽しめよ」
「はい！」
こうして一同は伊勢海老に箸をつけた。それは瞬く間に消えていった。
特に役はそれに舌づつみを打っていた。どうやら伊藤の予想は当たっていたようである。
「ところで良君」
「はい」
伊藤がまた声をかけてきた。
「君は酒は飲まないのかい」
「いや、そういうわけじゃないですけれど」
「そのわりに進んでいないね」
見れば彼の杯は殆ど減ってはいなかった。

「実は日本酒は駄目でして」
「そうか。じゃあビールはどうだい」
「いただきます」
彼は笑顔で答えた。どうやらビールは好きらしい。
「それじゃあ」
伊藤はそれに応えてコップを持って来た。そしてビールをそこに注ぎ込んできた。
一向は飽きるまで食べ、そして飲んだ。全てを食べ終え、飲み終えるともう台の上には何もなかった。
「ああ、食った食った」
それで終わりであった。彼等は何とか布団の上にまで行くとそこで倒れ込んだ。そしてそのまま潰れてしまった。
台は村雨が呼んだ仲居により片付けられた。村雨はそれを見届けると一人外に出た。そして風呂に向かった。
ここの風呂は外にあった。彼はそこに浸かり酒を抜いていた。
「ふう」
大きく息を吐く。それは湯気の中に消えた。
彼は夜空を見上げた。そこには星が瞬いていた。
「綺麗ですね」
横から声がした。そちらに目をやると役がいた。
「役さん」
「こうして空を見上げることなんて最近なかったですね」
「そうですね。・・・・・いや」
彼はここで口ごもった。
「俺はあります」
「そうなんですか」
「はい。覚えていますよ、あの時を」
彼はここでバダンを脱出し東京に向かって伊藤と共に旅をしていた時のことを話した。その途中で彼はふと夜空を見上げた時があったのだ。

「あの時の空は綺麗でしたね。とても」
「そうだったのですか」
「はい、今でも覚えていますよ」
彼はにこやかに微笑んでそう言った。
「あの時の星は綺麗でしたね。まだ感情ってやつが戻っていなかったんですけれどよく覚えていますよ」
「そうなんですか」
「ええ。感情を取り戻すまでに本当に色々とありましたけれどその中でもいい思い出の一つですね」
彼はやや饒舌に語った。
「少なくともバダンでは見れないものでしたよ」
「それはわかります」
役はそれに同意した。
「バダンの支配する世界ではこんな綺麗な空はありませんよ」
「はい」
それは誰もがわかることであった。彼等にとって夜空の星は不要なのだ。
「彼等に必要なのは自分達だけです。首領を崇めない者は彼等にとっては敵でしかありません」
「そして弱い者も」
「そうです。彼等の世界、それは地獄です。この世に存在してはならない世界です」
「暗黒の世界ですね。俺もあの時まではそれがわからなかった」
彼はそこで顔を俯けた。
「心がなかったから。その心はバダンに消されていた」
「それがバダンなんですよ。不要なものは全て抹殺する」
「姉さんも」
ここで彼は姉しずかのことを思い出した。

悪魔の兵器その五

「俺の目の前で殺された。まるでゴミの様に」
「彼等にとってはゴミだったのでしょう」
「はい」
激昂する気になれなかった。実際にバダンにとってはそうだったのだから。
「だから姉さんは殺され俺は心を奪われた」
「全ては彼等の野望の為にです」
「つくづくとんでもない連中ですね」
「はい。その様な者達はこの世に残しておいてはいけません」
役の声が強くなった。
「わかりますね」
「ええ」
もう詳しく言う必要もなかった。村雨もただ頷くだけであった。
「松坂には暗闇大使がいます。そしてバダンの改造人間も」
「それだけではないでしょうけれどね」
「そうでしょうね。あれを持って来ているでしょう」
「時空破断システム」
「どの様なものかは御存知ですね」
「ええ、黒い光を発するのですよね。今までは色々な形になって各地で暴れてましたが」
「今度のはおそらくこれまでのよりも遙かに強力なものでしょう」
「そうでしょうね、あの暗闇大使のことですから」
村雨にはそれが嫌になる程よくわかった。
「恐らくとんでもないのを用意していますよ」
「ええ。今はそれに備えて英気を養いましょう。戦いの前に」
「そうですね」
彼はそれに頷いた。そして湯を楽しんだ。

翌朝彼等は出撃した。向かうは松坂であった。
松坂には既に暗闇大使が改造人間達と共に布陣していた。彼は大河内城跡にいた。ここはかって伊勢に勢力を持っていた北畠氏の居城である。
「そうか、来たか」
彼は戦闘員からの報告を受けていた。
「そして今奴等は何処にいる」
「ハッ、今市内に入ったところです」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「ではまだこちらの防衛ラインには達してはおらぬな」
「その様です」
報告をする戦闘員は彼の前に跪いていた。そして報告を続ける。
「確か第一防衛ラインにはアメンバロイドとクモロイド、そしてカニロイドがいたな」
「はい」
「二人に伝えよ。ギリギリまで奴等を引きつけろとな」
「わかりました」
戦闘員は跪いたまま頭を垂れた。
「そして無理をするなとな。予定通りある程度戦ったならば退け、と」
「ハッ」
戦闘員は再び頷いた。
「それから市街地に誘い込め。そして分断して攻め掛かるのだ」
「予定通りですね」
「そうだ。よいか、決して無理をするな。まだその時ではないのだ」
「ハッ、そう伝えておきます」
「ここまで誘い込め。その時が勝負なのだ」
「この城跡にですね」
「ここ程それに相応しい場所はないからな」

彼はそう言って笑った。
「織田信長ですら陥とせなかったこの城、果たしてライダー達に陥とせることができるかな」
不敵に笑っていた。そして彼は市街に目をやった。
「来るがよい、そして死ぬのだ」
その声はまるで毒を滴らせている如くであった。
「神の御業によってな」
そして彼はさらに奥に向かった。そこでは何かが胎動していた。
ライダー達はオートキャンプ場に入った。そこにはトレーラーハウスが並んで置かれていた。
「油断するな」
立花はライダー達に対して言った。
「連中のことだ。何時来るかわからんぞ」
「わかってますよ」
立花達を護る様にして位置するライダー達はそれに頷いた。見れば既に変身している。
「いつもいきなり来るからな。特にこうした隠れるところの多い場所だと特にな」
「その通りだ」
そこで何者かの声がした。
「ムッ！」
「来たか！」
彼等はその声に反応してすぐに身構えた。すると上空から赤や青の布が飛んで来た。
それはライダー達を取り囲んだ。そしてそれは戦闘員達に変わった。
「やはりな！」
「ギィッ！」
戦闘員達は手にする剣で斬り掛かって来る。ライダー達はすぐに攻撃に入った。

「ここは俺が！」
エックスが彼等の先頭に出る。腰からライドルを抜いた。
「ライドルホイップ！」
そのらライドルを剣にする。そしてそれで戦闘員達の中に切り込んだ。
エックスのライドルが風と共に唸る。そして左右に群がる戦闘員達を次々に斬り伏せていく。
「流石にやるな」
そこで先程の声がした。
「その声は」
「そう、俺だ」
そこにカニロイドが姿を現わしてきた。
「エックスライダーよ、あの時の決着をつけてやろうか」
「望むところだ」
エックスは彼と対峙した。ライドルを握る手に力が篭る。

悪魔の兵器その六

「待て、カニロイド」
だがここで別の声がした。
「今ここで我等の任務を忘れるでないぞ」
「チッ」
彼はその声に対して舌打ちした。トレーラーハウスの陰からクモロイドが姿を現わした。
「わかっている。同志暗闇大使の作戦はな」
「それならばよいがな」
彼はそれを聞いて頷いた。
「アメンバロイドは何処だ」
「俺はここにいるぞ」
クモロイドの声に応えて彼が姿を現わしてきた。丁度ライダー達の後ろに出た。
「心配無用だ、俺はわかっている」
「ならば良い」
クモロイドはそれを受けて納得したように首を縦に振った。
「では行くぞ」
「うむ」
三体の怪人はライダー達を取り囲んだ。そしてその後ろに新手の戦闘員達が姿を現わしてきた。
「また出て来たか」
「流石に暗闇大使がいるだけはある、かなりの数の戦闘員がいるな」
「フフフ」
怪人達はライダーの言葉を笑みをもって聞いていた。
「それだけではないのはわかっているだろう」
「・・・・・確かに」
それは当然のことであった。

「さあ、かかれ」
クモロイドが戦闘員達に号令をかけた。
「ギィッ」
すると彼等はそれに応えるように腰から何かを取り出した。それは鎖鎌であった。
左手に鎌を持ち右手で分銅を振り回す。そしてゆっくりと前に出て来た。
「さあ、ライダー達を」
怪人達は後ろに下がって彼等に対して言う。
「これにはどうするつもりだ」
「知れたこと」
だが彼等はそれでも臆することはなかった。
「倒すまでだ。他に何がある」
「ではやってみせるがいい。できるものならな」
クモロイドはそれを聞いて冷淡に返した。そして戦闘員達に対して号令した。
「やれ」
それと同時に分銅が一斉に放たれる。それにライダー達が前に出た。
「おやっさん達は伏せて！」
「ここは俺達が！」
すぐに立花達に声をかける。
「わかった！」
「頼む！」
彼等はそれに従いすぐに身を屈める。ライダー達はそれを横目に分銅に立ち向かう。
「トォッ！」
その両手で分銅を掴む。それも一度に何本もだ。
続いてそれを引く。すると戦闘員達は態勢を崩した。それで全ては決まった。

ライダー達が突進する。そして態勢を崩していた戦闘員達を薙ぎ倒していく。勝負はほぼ一瞬で決まってしまった。
「これで終わりだな」
「次はどうするつもりだ」
ライダー達は怪人達の前に出た。だが怪人達は不敵な笑みを浮かべたままである。
「ククククク」
「何がおかしい」
ブイスリーが問うた。
「ここは下がってやろう」
「だがこれで終わりではないぞ」
そして三体の怪人達は後ろへ退いた。
「クッ！」
「逃がすか！」
ライダー達はそれを追う。立花達もそれに続く。
ライダー達はそのまま市街地に入った。江戸時代の建物が立ち並ぶ古い街並みだ。
「おい、気をつけろ」
ここで立花が一向に対して言った。
「奴等のことだ。こういった場所でこそ何かしてくるぞ」
「わかってますよ」
それはライダー達もわかっていた。
「おそらくここにもいるでしょうね」
「来ますよ、絶対」
彼等も油断してはいなかった。身構え、辺りを警戒しながら進んで行く。
「ケッ！？」
ここでアマゾンがふと顔を上げた。
「いるのか！？」
それを見て二号も辺りを見た。

「来る、アマゾンにはわかった」
そう言った瞬間に何かが飛んで来た。
「危ない！」
二人は左右に散った。それまでいたところに鎌が突き刺さっていた。
「この鎌は！」
「ホホホ、アマゾンよ久し振りだねえ」
屋根の上から女の声がした。
「奈良での恨み、晴らさせてもらうよ」
カマキロイドは無気味な笑い声を立てながらアマゾンを見下ろしていた。
「ぬうう」
ライダー達も立花達も彼女を見上げて構えをとった。だがアマゾンが彼等を制した。
「ここはアマゾンがやる」
「しかし」
「大丈夫。アマゾン負けない」
「・・・・・わかった」
二号がまずそう言った。
「こいつは御前に任せる。頼むぞ」
「うん」
アマゾンは頷く。その横にモグラ獣人がついた。
「モグラ」
「俺らも手伝わせてくれよ」
彼は笑いながら彼に顔を向けてきた。
「けどこいつは」
「戦闘員もいるだろ。そいつ等を任せてくれよ」
そこでその戦闘員達が姿を現わして来た。彼等は鉈を手にアマゾン達を取り囲んで来た。
「わかった。モグラ、頼む」

アマゾンは彼の意を受け入れることにした。それを聞いたモグラ獣人はまた笑った。

悪魔の兵器その七

「そうこなくっちゃ」
「けれど気をつける。いいな」
「わかってるよ」
こうして二人がカマキロイドとその配下を引き受けた。ライダー達は先に進もうとする。だがその前に新手が現われた。
「残念だがそうはいかん」
そこにはカメレオロイドが立っていた。
「我々とて仕事なのでな。貴様等にはここで死んでもらおう」
「戯れ言を」
「戯れ言!?」
カメレオロイドは滝のその言葉に顔を歪めさせた。
「生憎これでも私はかっては神父だったのでな。嘘は言わん」
「バダンが嘘を言わなかったことがあるか」
「ある!」
そう言いながら彼は自らの舌を剣に変えてきた。
「この剣で貴様等を倒す。これが嘘だと思うか」
「クッ・・・・・・」
これには滝も言葉を詰まらせた。だがここで一号が出て来た。
「ではその言葉、偽りにしてやろう」
「できるのか、貴様に」
「では俺も言おう。不可能を可能にする」
その言葉尻が強くなった。
「それがライダーだ!そしてライダーは決して嘘はつかん!」
「面白い」
カメレオロイドはそこでまた笑った。後ろに戦闘員達が姿を現わす。かなりの数であった。
「ではその言葉、偽りのものとしてやろう。覚悟はいいな」

「待て」
そこで新たな声がした。
「ムッ」
それは後ろからだった。カメレオロイドの目が後ろにまで動いた。
「貴様等か」
「ああ」
そこには二体の怪人がいた。トカゲロイドとタカロイドであった。
「貴様一人では流石に分が悪いだろう」
「俺達も参戦させてもらうぞ」
「勝手にしろ」
彼はそれを受け入れるでもなくそう言った。
「私は私のやり方でやらせてもらう。だが御前達が戦うというのならそうしろ」
「わかった」
「そうさせてもらう」
二人は答えた。そしてアマゾンと対峙するカマキロイドに声をかけた。
「カマキロイド」
「何だい？」
彼女はそれに反応して顔を向けてきた。
「こちらに来い。まとまるぞ」
「フン」
彼女はそれを聞いていささか不満げであった。だがそれに従うことにした。
「わかったよ。確かにそっちの方が何かとやり易いだろうしね」
「それでいい」
「では行くぞ」
「ああ、わかったよ」
カマキロイドは跳んだ。戦闘員達もそれに続く。
そして別の屋根の上に着地した。そこはライダー達のすぐ側であ

った。
「ケケケッ」
アマゾンとモグラ獣人もそこに来た。こうして四体の怪人達とライダー達が対峙する形となった。
「まずは俺からやらせてもらおう」
トカゲロイドはそう言うと口から炎を吐き出してきた。それでライダー達を焼き尽くそうとする。
そこにスーパー1が出て来た。すぐに腕を換える。
「チェーーーンジ冷熱ハァーーーーンドッ！」
両手を緑のものに変える。そして左腕を前に突き出して来た。
そこから冷気を発する。それで炎を退けた。
「ヌヌヌ」
それを見たトカゲロイドは怒りで顔を歪めさせる。その間に戦いは動いていた。
一号とカメレオロイドが戦いをはじめた。一号は素手ながら彼と五分に渡り合っていた。
空ではスカイライダーがタカロイドと戦っている。両者は激しい空中戦を展開している。
そしてアマゾンとカマキロイドもだ。彼等は屋根の上を激しく飛び回りながら切り合っている。
「ケケッ！」
アマゾンの叫び声が響き渡る。両者は互いに譲らず打ち合う音を響かせている。
他のライダー達は戦闘員達を相手にしている。二号の拳が唸った。
「食らえっ！」
それで戦闘員達を倒していく。やはり力の差は歴然たるものがあった。
立花も谷も戦っていた。歳を言われたとはいえ彼等もひとかどの戦士である。戦闘員達には負けてはいなかった。
戦いはライダー達が優勢に進めていた。やがて戦闘員達はあらか

た倒されてしまった。
「これ以上の戦いは無意味だな」
トカゲロイドは戦闘員達が殆どいなくなったのを見てそう呟いた。
そして同僚達に対して言った。
「退くぞ、ここでの戦いは終わりだ」
「わかった」
「もう少し戦いたかったがな」
「仕方ないわね」
彼等はそれに従った。そして後ろに大きく跳んだ
「それではな、ライダー達よ」
屋根の上に着地するとライダー達に対して言った。
「さらばだ」
「おのれ！」
「待て！」
彼等はそれを追う。そしてさらに進んで行った。
怪人達は西に向けて逃げて行く。やがて泉の森に入った。ここはかっては大神神社があった。今は森になっている。ここには春の種蒔きの時に泉が沸き、そして秋の刈り入れ時に枯れるという言い伝えがある。
「森か」
「また何かありそうな場所に案内してくれたな」
ライダー達はやはり立花達を守る様に円になり身構える。そして上下左右を警戒している。
「来るぞ、絶対にな」
「ああ、わかっている」
ライダー達は警戒を緩めない。その時木々が動いた。
「ムッ！」
そこから何かが飛んで来た。それは薔薇の蔦であった。
「ヒヒヒヒヒヒ！」
バラロイドが姿を現わして来た。怪人は奇声と共にライダー達に

襲い掛かる。
「ここから先は行かせないよ」
「それは貴様等だけの都合だ」
ブイスリーはスッと前に出て来た。
「俺達には俺達の都合がある。悪いが通らせてもらう」
そして拳を繰り出す。それでバラロイドを打とうとする。

悪魔の兵器その八

「おっと」
だが怪人はそれを蔦で防いだ。余裕をもった動きで後ろに下がる。
「甘いね、ブイスリー。それでは倒せはしないよ」
「クッ」
ブイスリーはそれを聞いて歯噛みした声を漏らした。だが怯んではいなかった。
「ならば」
さらなる攻撃に移ろうとする。だがその前に戦闘員達が姿を現わして来た。
「ギィッ」
「やはり出たな」
それを見た他のライダー達も立花達も彼等に向かって行った。こうして森での戦いがはじまった。
戦闘員達との戦いがはじまった。ライダー達はその戦闘力により数をものとしなかった。戦闘員達は瞬く間にその数を減らしていく。
「油断するな」
ここで二号が他の者に対して言った。
「まだ来るぞ」
「ええ」
それは他の者もわかっていた。そしてそれは来た。
槍が来た。それは一直線に二号に向けて飛んで来た。
「ムッ！」
二号はその槍を掴み取った。そしてそれを膝で叩き折った。
「来たな」
「フフフフフ」
森の中からヤマアラシロイドが姿を現わしてきた。
「あれを掴み取るとは。流石と褒めておきましょうか」

「戯れ言はいい」
だが二号はその言葉を受けなかった。
「まさか貴様がここに出て来るとはな」
「意外でしたか」
「どうやらそう言って欲しいようだからな。そう言っておこうか」
「やれやれ、素直ではありませんね。仮面ライダー二号は一号に比べて明朗闊達だと聞いていたのですが」
「それは平和を愛する人々に対してだ」
二号はそう言い返した。
「貴様等には違う。平和を害する貴様等にはな」
そして前に出た。そのまま攻撃に入る。
「フフフ」
ヤマアラシロイドは笑った。そして彼も二号に向かって行った。
「後悔しますよ」
「それはこちらの台詞だ」
拳が激しい音と共に撃ち合った。両者は戦いをはじめた。
「さあ、こっちに来い！」
ストロンガーは戦闘員達のかなりの数を相手にしていた。相手にしながら他のライダー達がいない場所にまで誘導していく。
「そうだ、来い、来るんだ」
やがてその誰もいない場所に来た。森の出口だ。
「よし、ここならいいな」
ストロンガーはそれを確かめて笑った。そしてその拳に雷を宿らせた。
「エレクトロサンダーーーーッ！」
拳を地面に打ちつけた。すると雷が地を走った。
「ギエエエエエエエッ！」
戦闘員達は断末魔の悲鳴をあげて絶命した。そして皆地に倒れ伏した。
「これでよし、出口も押さえたぞ」

ストロンガーはそれを見て満足そうに笑った。だがそれはやや早計であった。
「それはどうでしょうか」
後ろから何者かの声がした。
「その声は」
ストロンガーはそれに反応して後ろを向いた。
「やはり貴様か」
「うふふふふ」
ドクガロイドは身体を向けてきたストロンガーに対して無気味に笑った。
「私だけではありませんよ」
「何!?」
「俺もいる」
そこにジゴクロイドも姿を現わしてきた。
「ここで戦闘になれば来る予定だった。間に合ったようだな」
「ええ」
ドクガロイドは同志に対して頷いた。
「丁度いいタイミングでしたよ」
「それは何よりだ。さて」
ここであらためてストロンガーに向き直った。
「どうする、ライダーストロンガーよ。こちらは二人だ。観念するか」
「観念!?何だその言葉は」
だが彼はそれを聞いてとぼけたふりをしてみせた。
「生憎だが俺はそんな言葉は知らないな」
「ふふふ、相変わらずですね」
ドクガロイドはそれを聞いて笑った。
「強気な方です。ですがそれが何時まで続きますかね」
「何時まで?これはまた愚問だな」
ストロンガーはそう言い返した。

「死ぬまでだ。いや、俺は死ぬことはないから永遠にだ」
「面白い人だ」
ドクガロイドはまた笑った。
「ではあの世に導いてさしあげましょう。行きますか、ジゴクロイド」
「おお」
ジゴクロイドは頷いた。そしてストロンガーの後ろに回る。
「行くぞ、ライダーストロンガー」
「挟み撃ちか。これはいい」
だがそれを見てもストロンガーは余裕なままであった。
「こうでなくては面白くはないからな」
「そういう強がりもいい加減にしておけ」
ここでライダーマンが姿を現わしてきた。
「見ないので何処に行ったかと思ったらこんなところにいたのか」
「ライダーマン」
ストロンガーは彼に顔を向けた。
「ストロンガー、助太刀させてもらうぞ。幾ら御前でも怪人が二体では辛いだろう」
「いえ、大丈夫ですよこの程度」
だがストロンガーも引かない。何か今の状況を楽しんでいるようである。
「ピンチを楽しむのもいいがな。俺にも戦わせろ」
だがライダーマンはそんな彼に対して言った。
「俺もライダーなのだからな」
「そうきましたか」
「当然だ。では行くぞ」
「はい」
ストロンガーはそれを受けてジゴクロイドと対峙した。ライダーマンは毒がロイドとである。

悪魔の兵器その九

「覚悟はいいな」
「それは貴方の方こそ」
双方の宣戦布告は終わった。ライダーマンはパワーアームを装填するとドクガロイドに切りかかって行った。
こうして二組の一騎打ちがはじまった。ライダー達も怪人達も互いに譲らず五分と五分の戦いが繰り広げられていた。
だが次第にライダー達の方が優勢になってきた。やはり長年の経験とその地力がものを言ってきた。
「まずいな」
ジゴクロイドはストロンガーの拳をかわしながらそう呟いた。
「やはりこの辺りが潮時か」
そう言うとドクガロイドに顔を向けた。
「おい、下がるぞ」
「わかりました」
彼はそれに頷くとライダーマンとの間合いを離した。
「ライダーマン、また御会いしましょう」
「クッ、待て！」
ライダーマンはドクガロイドを追おうとする。だが彼はその前に毒の霧を発した。
「ムッ！」
彼はそれを見て咄嗟に後ろに退いた。ストロンガーもである。その間に二体の怪人は後ろに下がった。
「しまった・・・・・」
「よりによってこんな時に」
二人は逃げ去って行く彼等を見て歯噛みした。そこに他のライダー達や立花達がやって来た。
「おう、ここにいたのか」

立花は二人のライダーを見て声をかけてきた。
「何処に行ったかと思ったぞ。無事で何よりだ」
「ええ」
ストロンガーがそれに応えた。
「ところでそちらは」
ライダーマンが彼に戦いの行方を尋ねた。
「駄目だ、逃げられた」
立花は首を横に振ってそう答えた。
「相変わらず逃げ足も速い奴等だ」
「そうですか」
それは大体予想できていた。ライダーマンもそれに関しては特に驚いてはいなかった。
「それで奴等は何処に」
「大河内城の跡に向かっているようだ」
ブイスリーがそれに答えた。
「バラロイドが逃げた後ブイスリーホッパーを使ったらそこに反応があった。だがそれだけじゃない」
「どういうことだ」
「そこにかなりの数がいた。どうやらそこが本拠地のようだ」
「この松阪のか」
「ああ」
ブイスリーはライダーマンの問いに対して頷いた。
「おそらくこれまでの戦いはほんの前哨戦だろう。そこに奴等の切り札がある筈だ」
二号がここでこう言った。
「そして暗闇大使もいる」
「暗闇大使」
ゼクロスがそれに反応した。
「気をつけろ、あいつはあの地獄大使の従兄弟だからな。一体どんなことをしてくるかわからんぞ」

「そうですね」
二号は立花の言葉に頷いた。
「おやっさんの言う通りだ。皆、気をつけていけ」
「おう」
ライダーも滝達もそれに応えた。
「ところでだ」
ここで滝がゼクロスに尋ねてきた。
「はい」
ゼクロスはそれを受けて彼に顔を向けた。
「その暗闇大使だがあいつも改造人間なのか？見たところそれっぽいが」
「おそらく」
ゼクロスはそれに答えた。
「今までの大幹部や改造魔人もそうでしたし。あの魔神提督も脳と心臓以外は機械でしたよね」
「そうだったな。ショッカーでもそうだった」
滝はそれを聞きながら呟いた。
「じゃああいつも何かしらの改造人間か。一体どんな正体かはわからないが」
「でしょうね。大幹部の正体は怪人、その鉄則からすればあの男も怪人なのでしょう」
「ゾル大佐は黄金狼男だった。死神博士はイカデビルだった」
「そしてあいつの従兄弟はガラガランダだった。毒蛇の化身の」
ここで一号が言った。
「ではあいつは一体」
「わからん。だがこれだけは言える」
一号の声が深刻なものとなった。
「かなりの力を持っている。そう、今までの大幹部達に勝るとも劣らぬ程にな」
「そうか」

皆その言葉に息を呑んだ。
「注意しなくてはな。かなり激しい戦いになる」
「それはもとより承知」
誰かがそう言った。
「それを覚悟で来たんだからな」
「そうだな」
一同それに頷いた。
「行くぞ」
「ああ」
そして戦士達は大河内城に向かった。そこに何があるのかはわかっている。だがあえてそこに向かうのであった。
「来るぞ」
暗闇大使はそれを察知してそう言った。
「同志達は戻って来たか」
「ハッ」
後ろに控える戦闘員の一人が敬礼をして答える。
「つい今しがたバラロイド達が戻って来られました」
「そうか。ならばよい」
彼はそれを聞いてそう答えた。
「全ては整ったな」
そして二歩前に出た。
「あれの用意は出来ているな」
「何時でもいけます」
その戦闘員が答える。
「では行くとするか」
暗闇大使はそれを受けてさらに前に出た。
「さあ、ライダー達よ」
彼は歩きながら呟く。
「このわしに勝てることができるかな」
その声は笑っていた。血に濡れた声で笑っていた。

悪魔の兵器その十

ライダー達は大河内城跡の前に来た。そこには既に戦闘員達がいた。

「もういるのか」

「どうやらここが本拠地と見て間違いないな」

ライダー達を先頭にそこへ突っ込む。だが戦闘員達はそれでも動こうとしない。

「どういうことだ」

そう思った時だった。不意に戦闘員達が左右に分かれた。

「ムッ!?」

彼等は思わず立ち止まった。そこにあの男が姿を現わしてきた。

「フフフ、久し振りだなライダー達よ」

その男、暗闇大使はゆっくりと前に出て来た。

「まずはここまで来たことを褒めてやろう」

『戯れ言を」

だがライダー達はそれを受け流した。

「貴様が本心から俺達を褒めるとは思えん。ここで倒すつもりだろう」

「その言葉、半分は正解だが半分は間違っておるな」

「どういうことだ」

ライダー達に問われ彼はまず口の両端を耳まで拡げて笑った。

「まずわしは他の者の力は素直に認める、例え貴様等であろうとな。これは間違いだ」

彼は説き聞かすようにして言った。

「そしてもう一つ。これは正解だな」

彼は言葉を続けた。

「貴様等はここで倒す。わしの力をもってしてな」

「望むところ」

ライダー達はそれを受けて身構えた。
「ではその力見せてもらおうか」
「フフフ」
暗闇大使は笑った。その後ろには怪人達が控えていた。
「では見せてやろう。わしの力をな」
「来るか」
ライダー達は目を瞠った。
「出でよ」
彼は静かに言った。その時空が割れた。
「何っ！」
ライダー達は思わず空を見上げた。割れた部分は赤くなっていた。
「まさか」
「クククク」
大使はライダー達が驚く様を見ながらさらに笑った。
「そのまさかだ」
彼は言った。そしてその割れた場所から何かが出て来た。
「さあ見るがよい。我がバダン、そしてこの暗闇大使の力の結晶」
その顔は自信に満ちていた。
「サザンクロスをな」
巨大なサザエに似た怪物が姿を現わしてきた。無数の突起を持った貝であった。
いや、それは貝ではなかった。何か得体の知れない装甲であった。
「あれは」
ライダー達はその中央に何かを見ていた。そこには顔があった。
「フフフ」
大使は笑っていた。サザンクロスの顔も笑っていた。
「サザンクロスよ」
彼は上を向いてその化け物に言った。
「やれい」
サザンクロスの顔も笑った。そしてその無数の突起が何かに変化

した。
「ムッ」
それは大砲に変わった。禍々しく伸びライダー達にその砲口を向ける。
「受けるがよい、我が力」
暗闇大使は言った。するとその砲の全てに黒い光が集まってきた。そしてそこから黒い光が放たれる。それはライダー達に襲い掛かる。
「危ない！」
ライダー達は咄嗟に立花達を抱いて跳んだ。そしてその黒い光を避けた。
「ほう、今のをかわしたか」
大使は相変わらず余裕に満ちた笑いを浮かべていた。
「流石だな。しかし何時まで続くかな」
再びサザンクロスの砲口に黒い光が集まる。そしてまた放たれた。
「クッ！」
ライダー達は再び跳んだ。そしてその光を何とかかわした。
着地した彼等は立花達を下ろした。そして彼等に対して言った。
「ここは俺達に任せて下さい」
「おやっさん達は安全な場所に」
「しかし」
立花はその言葉に一瞬戸惑った。だがすぐに決めた。
「いや、わかった」
そして彼等に対して言った。
「では頼んだぞ。ここは御前達に任せた」
「はい」
ライダー達はそれに頷いた。
「勝って来い、いつもみたいにな」
「わかってますよ」
彼等は微笑んだ声を出した。これだけで充分であった。

「じゃあな」
「ええ」
立花達は後方へ退いていく。ライダー達は彼等を守るように身体を暗闇大使達に向けた。
「別れの挨拶は終わったな」
「あくまで余裕でいるつもりか」
ライダー達は彼に対して言った。
「無論だ。わしの勝利は決まっているのだからな」
「ほう」
「では受けるがいい。再び我が力をな」
また黒い光が放たれた。ライダー達はまたもやそれをかわした。
「何時までそうしてかわせるかな」
大使はそれを見ながら言った。
「次第に疲れてくる。そして貴様等はサザンクロスに対して手出しはできない」
「クッ・・・・・・」
そうであった。サザンクロスは遙か上空にある。そこまで飛び上がっても無理がある。かえって狙い撃ちにされる怖れがあった。
「俺が行けば」
ここでスカイライダーが言った。
「いや」
だが他のライダー達がそれを止めた。
「御前一人では無理だ。あいつを倒すのはな」
「しかし」
「よく聞け」
ここで一号が彼に対して言った。
「一人では、と言ったんだ」
「ということは」
「そうだ。あれをやるぞ」
「あれを」

それを聞いたライダー達の顔に緊張が走った。
「あれをやるんですか」
「そうだ」
一号は他のライダー達に顔を向けてそう答えた。

悪魔の兵器その十一

「それしかないだろう」
「わかりました」
ライダー達はその声に対して頷いた。これで決まりであった。
そこにまた黒い光が来た。ライダー達は上に跳んだ。
「今だ、やるぞ！」
「はい！」
ライダー達は頷いた。一号はスーパー1とゼクロスに対して言った。
「はじめてだがいけるか」
「はい」
「やってみせます」
二人はそれに頷いた。これで決まりであった。
ライダー達は互いに手を繋いだ。そして空中でリングを作った。
「ムッ」
暗闇大使はそれを見上げながら怪訝そうな顔をした。
「何をするつもりだ」
「行くぞ」
だがライダー達はその間にも攻撃の準備にかかっていた。その中央にスカイライダーが来た。
「よし」
ライダー達のベルトが光る。そしてその光がスカイライダーのベルトに集まっていく。
「ムムム」
その力が彼の全身にみなぎっていく。それと共にライダー達は飛んでいく。
「馬鹿め、隙だらけだ」
サザンクロスが砲撃を仕掛けてきた。黒い光がライダーを貫かん

とする。
だがその光は彼等の前で打ち消された。ライダー達の光によって打ち消されたのだ。
「何っ」
それを見た暗闇大使は思わず声をあげた。光を打ち消したライダー達はそのまま突き進んでいく。
「食らえ」
スカイライダーを中心とした彼等はサザンクロスに向かって行く。そして光の強さがさらに強まった。
「セイリングアターーーーーック！」
スカイライダーの身体に蓄えられた光が放たれた。そしてそれはサザンクロスに一直線に向かっていく。
「フン、そう来たか。だがな」
暗闇大使はそれを見てもまだ余裕であった。
「それでサザンクロスを倒せると思っているのか」
だがその言葉は彼等には通用しなかった。光はそのまま突き進んでいく。
そして光がサザンクロスを撃った。そしてそのままその厚い装甲を圧迫していく。
「何っ！？」
装甲は鈍い音を立てて壊れていく。そして遂にそれが破られた。サザンクロスの動きが止まった。光はそのままその中を進んでいく。
「ま、まさか・・・・・」
暗闇大使は思わず呆然としていた。光はその間にも中を進む。
やがて反対側の装甲が盛り上がってきた。そしてまた音を立ててきた。
その装甲も突き破られた。光はサザンクロスを撃ち抜いたのだ。
「やったか！？」
ライダー達は空中でそれを見守っていた。だがサザンクロスはま

だ空中にあった。
「クッ、これでも落ちないのか」
「何という奴だ」
彼等は歯噛みした。だがそれでもまだ諦めてはいなかった。
「もう一撃繰り出すか」
既に先程の攻撃でかなりのエネルギーを使っていた。しかし諦めるわけにはいかなかった。
「よし」
ライダー達は再びエネルギーを集めようとする。だがここでゼクロスが叫んだ。
「ここは俺だ！」
そして一人前に飛び出した。
「ゼクロス！」
「何をする気だ！」
他のライダー達はそれを止めようとする。だがゼクロスの動きはそれよりも速かった。
「ヘルダイバーーーーッ！」
彼は叫んだ。すると地上にヘルダイバーが姿を現わした。
マシンが跳んだ。ゼクロスはそれに空中で乗った。
「行くぞ！」
そしてそのままサザンクロスに向けて突っ込む。進みながらその身体を赤い光が覆った。
「何っ！」
「まさかっ！」
ライダー達だけではなかった。暗闇大使達バダンの者も目を瞠った。ゼクロスは赤い光となっていた。
そしてサザンクロスに突き進んだ。砲撃が仕掛けられるが当たりはしない。
当たった。その瞬間サザンクロスは爆発した。空中で四散する。
「ゼクロスッ！」

ライダー達は叫んだ。だが返答のかわりに爆発が起こるだけであった。
「おのれ・・・・・」
それを見上げる暗闇大使は苦渋に満ちた顔を浮かべた。
「まさかサザンクロスを破壊するとは・・・・・」
その時彼の口から一条の血が零れた。
「グフッ！」
大使は血を吐いた。そしてその場に崩れ落ちた。
「暗闇大使！」
怪人と戦闘員達がその場に駆け寄る。そして彼を助け起こした。
「大丈夫だ」
彼は同志達に対してそう言った。
「それよりもこの場は退くぞ。これ以上の戦闘は無意味だ」
「ハッ」
それはわかっていた。サザンクロスが破られた今戦意も潰えていたからだ。ライダー達の勝利は明らかであった。
「サザンクロスを失ったのは惜しいが」
暗闇大使は戦闘員達に左右から抱えられながら呟いた。
「ゼクロスを倒せたのはよしとしなければな」
そして戦場から去った。後にはライダー達だけが残っていた。
「あの化け物こそ倒すことはできたが」
「失ったものは大きいな」
「ああ」
だがライダー達はその場から去った。彼等にはそれを伝える義務があるからだ。
「どうだった」
立花達は松阪の駅で彼等を待っていた。
「良の奴がいないようだが」
「ええ」
彼等を代表して本郷が口を開いた。

「特攻して・・・・・。それで俺達は勝つことができましたが」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。何とか表情は変えないことに成功した。
「惜しい奴だったな」
「はい」
ライダー達も滝達もそれに頷いた。だがそれ以上のことはできなかった。その時だった。
「勝手に殺してもらっちゃ困るな」
彼等の後ろから声がした。
「その声は」
皆後ろを振り向いた。そこに彼がいた。
「おやっさん、先輩達、皆、遅れてすいません」
彼がマシンを引き摺るようにしてこちらにやって来ていた。全身傷だらけだが確かに立っていた。
「良・・・・・」
「無事だったのか！」
彼の姿を見て誰もが驚きの声をあげずにはいられなかった。村雨はそんな彼等に対して微笑んでみせた。
「あれ位じゃ死にはしませんよ。だってそうでしょう？」
「どうしてだ？」
立花がそれに合わせて問うてきた。彼はそれに答えた。
「ライダーだからですよ。ライダーはそう簡単には死なないんでしょう？だから生きてるんですよ」
「確かにな。その通りだ」
立花はその答えに対して笑った。
「無事で何よりだ。おう、今日もわしの奢りだ」
ここで彼は他の者に顔を向けた。
「ステーキでも焼肉でも何でも食え。松阪牛の食べ放題だ」
「本当ですか！？」
「ああ、良が帰って来たんだ。それ位は奮発してやる。いいな」

「はい！」
「喜んで！」
戦士達は同志の帰還を心から喜んでいた。だがそれは最後の戦いへ向かう前の盃でもあるのを忘れてはいなかった。

悪魔の兵器　　完

２００４・１２・１６

決戦その一

「サザンクロスが敗れたそうだな」
「ハッ」
暗黒の部屋の中で怪人達が人としての姿で跪いていた。そして前に蠢く何かに対して答えていた。
「ゼクロスの特攻を受けまして」
その中央にいるヤマアラシロイドがそう報告した。
「そうか。そして暗闇大使はどうしておるか」
「只今手術を受けられております。どうやらかなりのダメージであったようで」
「そうだろうな。本来ならば死んでもおかしくはないのだからな。サザンクロスはあの男の分身なのだからな」
「そうだったのですか」
これにはヤマアラシロイド以外の怪人達も驚いた顔をした。
「そうだ。サザンクロスは暗闇大使の脳波による完全なコントロールを受けていた。その動きもあの男の身体と連動していたのだ」
首領はそれに対しそう答えた。
「感覚も直結していた。だからダメージもそのまま受けるのだ」
「そうだったのですか。だからダメージを」
「そうだ。そしてその傷は如何程か」
「思わしくありませぬ。ですが御命に別状はないかと。手術の後ですぐ復帰できるものと思われます」
「それは何よりだ」
首領はそれを聞いて安心したような声を出した。
「やはりライダー達との戦いにおいてはあの男の力が必要だからな」
「ハッ」

皆その言葉に対して頭を垂れた。
「そしてゼクロスは今どうしているか」
彼はそこでゼクロスについて尋ねてきた。
「あの男がそう簡単に死んだとは思えぬのだが」
「その通りです」
ヤマアラシロイドがそう答えた。
「重傷を負いましたが生きているようです。あの特攻でも死ななかったようです」
「そうであろうな。ライダーはそう簡単に死んだりはせぬ。だからこそ油断してはならんのだ」
「ハッ」
「だがそうそう動けはしまい。かあんりのダメージを受けているのは事実であろうからな」
「仰せの通りでございます」
ヤマアラシロイドはそう返した。
「暫くは休ませておきたいが。そうも言っていられぬ状況だ。回復を急がせよ」
「わかりました。科学班にはそう厳命しておきます」
「頼むぞ。そして」
首領はここで言葉をかける相手を変えた。
「タイガーロイドよ」
「ハッ」
ヤマアラシロイドの横に控えていた三影がそれに応える。
「・・・・・・・・」
ヤマアラシロイドは横目でそれを見ていた。心中何か思うところがあったようだがそれは一切出さない。
「ここの守りは万全であろうな」
「無論です」
彼はそれに答えた。
「既に各所に戦闘員達を配しております。そしてその連携も整えま

した」
「そうか、ならば良い」
首領はそれを聞いて満足そうに言った。
「やはり貴様にここを任せたのは正解だったようだな」
「有り難き幸せ」
褒め言葉を受けてそう答えた。
「何時でもライダー達を迎え撃つ準備はできております」
「今すぐにでもか」
首領は問うた。
「今すぐにでも」
三影はすぐに返した。迷いはなかった。
「よし。全ては整ったということだ」
そして首領は他の怪人達にも声をかけた。
「バダンの誇る戦士達よ」
「ハッ」
彼等はそれを受けて跪いたまま姿勢を正した。
「行くがいい。最後の戦いの時が来たのだ」
「ライダー達との」
「そうだ。為すべきことはわかっているな」
「無論」
そしてそれがわからぬ筈もなかった。
「ではよい。さあ、行け。そしてライダー達を倒してくるがいい」
「わかりました」
彼等は一斉に席を立った。
「ではこれで」
「うむ」
首領は鷹揚に答えた。
怪人達は姿を消した。そして後には首領の気配だけが残っていた。
しかしそれも消えた。何も残りはしなかった。
その頃ライダー達も出撃しようとしていた。

「頼みます」
村雨は他のライダー達や立花達に対して見送りの言葉を述べていた。
「俺も行けたらよかったんですが」
「無理はするな」
彼に対して伊藤博士が言った。
「君はあのサザンクロスを倒した。それだけで充分だ」
「そうでしょうか」
「ああ。だから今度は我々に任せてくれ。いいな」
「・・・・・・はい」
見れば村雨は松葉杖をついている。その右足にはギプスをしている。
左手にも包帯を巻いている。頭にもだ。それが戦いの結果であることは言うまでもない。
「心配するな」
本郷も言った。
「俺達は負けはしない。絶対にな」
「そうですか」
「何時だってそうだった。そして今度もな。だから御前は心配しなくていい」
「わかりました」
彼はそれに頷くしかなかった。
「では健闘を祈ります。吉報を待っていますよ」
「おお」
「任せとけ」
ライダー達はそれを受けてそれぞれ頷いた。そしてエンジンに足をかけた。
「ではな」
ライダー達は発進した。爆音が轟きはじめ発進した。
それに立花達の乗る車が続く。そして彼等は戦場に向かって姿を

消した。
「行きましたね」
村雨の横にいる役がそれを見て呟いた。
「はい」
村雨はそれに応えた。
「こんな身体じゃなかったら俺も行けたのに」
「行きたいですか」
役はここで彼にこう尋ねてきた。
「勿論ですよ」
彼はここで本音を返した。
「俺だってライダーですから。わかるでしょう」
「ええ」
役はその言葉に対して頷いた。
「役さん」
村雨の声は少し強いものになった。

決戦その二

「役さんはカナダでの戦いの時のことを覚えていますか」
「トロントでの戦いでしたね。勿論」
役はそう答えた。
「あの時俺に言ってくれましたね。ライダーだって」
「はい」
忘れる筈もなかった。彼はあの時本心から村雨を認めたのだから。
「ではわかってくれている筈です。今の俺の考えが」
「わかっていますよ」
役は答えた。
「行きたいのでしょう、戦いに。ほかのライダーや立花さん達と共に」
「ええ」
「そしてバダンを倒したい。世界の平和を取り戻す為に」
「そうです、勿論です。怪我なんか関係ないですよ」
「それだけの怪我を負っていてもですか」
「ライダーはどれだけ傷ついても戦ってきた。そして勝ってきた。違いますか」
「その通りです」
「先輩達だってそうだった。そして俺も」
村雨の顔はさらに苦渋に満ちたものになっていった。役はその顔を黙って見ていた。
「村雨さん」
そして彼の名を呼んだ。
「はい」
村雨はそれを受けて俯きかけていた顔を上げた。
「今のままではライダー達は敗れます。バダンの力はあまりに強大です」

「ではやはり」
「はい、貴方の力が必要です。しかし今の状態の貴方だと戦力にはなりません」
「ではどうすれば」
彼は役の言葉に戸惑った。
「一つだけ方法があります。しかしそれは」
「それは・・・・・・！？」
役の言葉が止まったのを受けて問うた。
「可能性は極めて薄いものです。そして失敗すれば貴方の命はありません」
彼は村雨の心を試すようにして語り掛けてきた。
「それでもいいですか。命をかけても」
「はい」
迷うことはなかった。村雨は即答した。
「言いましたよね、俺はライダーだと」
「はい」
「ライダーになったからには命をかけます。可能性が僅かでもあればそれにかけます。それがライダーなのですから」
「その言葉、偽りはありませんね」
「ライダーの言葉に嘘はありません」
彼は強い声でそう返した。
「わかりました」
役はその言葉を受け取った。そして頷いた。
「では行きますか」
「はい」
二人は何処かへ向かった。そしてその場から立ち去ったのであった。
ライダー達は伊勢に入った。それはバダンからも確認されていた。
「遂に来ましたね」
ヤマアラシロイドは指令室のモニターからそれを見ていた。ライ

ダー達は今伊勢に入ったところであった。
「で、どうするつもりだ」
隣に立つ三影が彼に問うた。
「俺は貴様が指揮を執りたいというから任せたのだが」
「はい」
ヤマアラシロイドは何かを楽しむような顔でそれに頷いた。
「思う存分やらせてもらいますよ。貴方にはこの基地の防衛に専念してもらいます」
「そうか。美味しい場所は独り占めというわけか」
「そうなりますね」
彼はそれを否定しなかった。
「ですがそれは貴方も同じでしょう」
「どういう意味だ」
「ゼクロスとの勝負、それだけが貴方の望みなのですから。彼が出て来ないとなれば貴方もやる気は起こらないでしょう」
「ふん」
彼はそれに答えなかった。そのかわりにモニターに目を移した。
「その通りだがな。俺の望みはあいつを倒すことだけだ」
モニターにはライダー達が移っていた。しかしそこに村雨の姿はなかった。
「あいつがいないと出る意味がないからな」
「わかりました」
ヤマアラシロイドがそれを聞いて満足したように笑った。
「では彼が出て来るその時までここの守りをお願いしますよ」
「わかった」
「あと暗闇大使はどうされていますか」
彼はここで暗闇大使のことを問うてきた。
「手術は無事終わった後回復に努めておられるようですが」
「順調らしいぞ」
三影はそう答えた。

「暫くしたら復帰できるらしい。何の心配もいらないそうだ」
「それは何より。ゼクロスの方はそうはいかなかったようですが」
ややシニカルにそう言った。それは三影に向けられているのは言うまでもない。
だが三影はそれを無視した。かわりに彼に対してこう言った。
「行った方がいいのではないか」
「戦場にですか」
「そうだ。そろそろ戦闘がはじまるぞ」
「ええ、わかっていますよ」
別のモニターには戦闘員達が映っていた。彼等はライダー達に接近しようとしていた。
「それではそろそろ行きますか」
「そうした方がいいな」
三影はヤマアラシロイドを一瞥もすることなくそう言った。感情のこもっていない声であった。

決戦その三

「ここは俺に任せろ。安心して行って来い」
「わかりましたよ」
彼はすっと笑った。そして足を出口に向けた。
「ここは頼みましたよ、三影英介。いや」
ここで言葉を変えた。
「タイガーロイド。虹のゼクロスと御呼びした方がいいですかね」
「勝手にしろ」
だが彼はそれに答えようとしなかった。早く出て行けと言わんばかりの態度であった。
「わかりましたよ」
ヤマアラシロイドはまた笑った。そして出口をくぐった。
「では邪魔者は退散するとしましょう。潔くね」
「フン」
ヤマアラシロイドは最後に顔を三影に向けると姿を消した。彼はやはりそちらに顔を向けはしなかった。
「何がヤマアラシだ」
彼はそのかわりに吐き捨てるようにしてそう呟いた。
「狐が。精々その戦いを見せてもらうぞ」
そして後ろにある椅子に座った。そのまま指揮を執りはじめた。
ライダー達は伊勢に入り暫くして早速歓待を受けていた。
「来たな」
彼等は迫り来る戦闘員達を前にして不敵に笑った。
「おっと」
だがその前に姿を現わす男がいた。
「ここは私に任せてもらいますか」
「竜さん」
「ええ」

竜は彼等のほうを振り向いてにんまりと笑った。
「最近運動不足でしてね。ここはやらせてもらいますよ」
「しかし」
「大丈夫ですよ。戦闘員なんて相手じゃありませんから」
彼はそう言うと懐から拳銃を取り出した。
「これもありますからね」
「どうしてもここに」
「勿論ですよ」
深刻な口調であるライダー達に対してあくまで明るく返した。
「だから何も心配しないで。わかりましたね」
「・・・・・・はい」
彼等は頷くしかなかった。そして後ろを竜に任せ先に向かった。
佐久間もそこに残った。
「俺もここに」
「ケン」
風見がそれを止めようとするが彼はそれを振り払った。そしてそこに残った。
「先輩、後で何か食べましょう。それとも小樽でまた寿司でも食べますか」
「悪くないな」
風見は微笑んでそれに応えた。
「この戦いが終わったら行くか。二人でな」
「はい」
風見はそこで前に向き直った。そして二度と振り返りはしなかった。
暫く進むとまた戦闘員達が姿を現わした。今度はモグラ獣人とチョロが残った。
「アマゾン、俺らここで待ってるぜ」
「モグラ」
「俺も」

「チョロも」
四人はそれぞれ全く異なった表情で互いを見やった。
「アマゾンで何食う?また魚で一杯やろうな」
「仙台で何か食べ残したものあｒましたっけ?」
二人は深刻な素振りなぞかいまも見せることなく二人に逆に尋ねた。
「うん、そうしよう」
アマゾンは意を決してそれに同意した。
「そうだな。きりたんぽがいいな」
「おっと、きりたんぽは秋田ですよ」
「いいじゃないか。遠くに出て食べよう。ついでにわんこそばも食べないか」
「いいですね。そうしましょう」
「じゃあな、頼んだぞ」
「ええ」
「モグラ、魚食べよう」
「ああ」
そして二人はそこに残った。ライダー達はさらに進む。
またしても戦闘員達が姿を現わした。今度は三人の博士達が残った。
「おっと、わし等も」
「博士達だけじゃ数が多過ぎますさかいな」
谷とがんがんじいが立ち止まった。
「おやっさん、がんがんじい」
「浩、帰ったら何か食うか」
「大阪に行きまへんか?お好み焼きでも」
「お好み焼きか。そういえばがんがんじいの好物だったな」
「ええ。たんまりとおごりまっせ」
「そうか、じゃあ頼むよ」
「任せといて下さい。それじゃあ」

「ああ」
そして彼等も残った。ライダー達はさらに先に進んだ。
また戦闘員達が前から出て来た。今度ばかりは戦いは避けられそうにもなかった。
「行くぞ」
先頭を進む本郷が他のライダー達に対して言った。
「おお」
「はい」
「わかりました」
ライダー達はそれに頷いた。そして前に出ようとする。その時だった。
立花と滝が前に出た。そして戦闘員達の中に飛び込んだ。
「おやっさん、滝！」
本郷と一文字は彼等の姿を見て思わず叫んだ。
「危ないですよ、ここは俺達に任せて」
「そうですよ、無理をしちゃいけません」
風見と神も二人に対してそう言った。だが二人はそれに対してにかっと笑ってこう答えた。

決戦その四

「何言ってやがる、無理しているのは御前等だってそうだろ」
「そういうことだ、俺達にも無理をさせてくれ」
「しかし・・・・・・」
「いや」
それでも言おうとする結城に立花は顔を引き締めさせた。
「御前達にはバダンの本拠地に乗り込んでもらわなくちゃいかん。こんなところで無駄な体力を消耗してもらっちゃ困るんだ」
「そういうことだ、だからここは俺達に任せろ」
「わかりました」
最初に答えたのは城であった。
「皆、ここはおやっさんと滝さんに任せよう」
「しかし」
それでも他のライダー達、とりわけ結城は不安そうであったが皆頷いた。今の状況を最もよくわかっているのは他ならぬ彼等であるからだ。
「じゃあ行こう。おやっさん、滝」
本郷が彼等に対して言った。
「あとは頼みますよ。そしてアミーゴでコーヒーを入れて下さい」
一文字も続いた。立花はそれを聞いてにこやかな笑みを浮かべた。
「おう、任せとけ。ただ滝のコーヒーはまずいから気をつけろよ」
「ちょっとおやっさん、何言ってるんですか。俺は元々紅茶派じゃないですか」
「アメリカにいた癖にミルクティーなんて飲むな」
「そんなの人の勝手じゃないですか」
ライダー達は二人のやりとりを暖かい目で見た。そして前を振り向くとそのまま走り出した。
「・・・・・行って来い。そして帰って来い」

立花は消えていく彼等の背中を見てそう呟いた。そして戦闘員達に向き直った。
「行くぞ、滝」
「はい」
滝もであった。二人は迫り来る戦闘員達を前にして身構えた。
そして戦いをはじめた。後ろから聞こえるライダー達の走る音はもう聞こえなくなっていた。
ライダー達は海沿いの岩場に来た。村雨と役から聞いた情報ではここに入口があるという。
「あいつの情報が正しければ」
「そろそろ来るな」
ライダー達は辺りを警戒しつつ前に進んでいく。そして周囲を岩に囲まれた広い場所に出た。
「ここなら戦いに持って来いだな」
「ああ」
そう話をしていた。その時であった。
「その通り」
岩の上に一斉に影が現われた。
「来たか！」
ライダー達はそれを見てすぐに身構えた。
「よくぞ来られました、ライダー達よ」
彼等の正面に立つヤマアラシロイドが慇懃な声でそう言った。
「我がバダンの招待に応じてくれて心より感謝致します」
そして心にもないことを述べた。
「何が感謝だ」
それはライダー達にもよくわかっていた。
「それに貴様等に呼ばれてここに来たわけではない。貴様等を倒す為に来たのだ」
「おやおや」
ヤマアラシロイドはそれを聞きながらにこやかに笑った。

「何と余裕のない方達でしょう。折角の宴の前です。もう少し落ち着かれてはどうでしょうか」
「戯れ言を」
だがライダー達はその言葉をはねつけた。
「貴様とてそのようなことは望んではいないだろう」
「貴様等の考えはもうわかっている。さあ来い、決着をつけてやる」
「フフフ」
ヤマアラシロイドだけではなかった。他の者もそれを聞いて無気味に笑った。
「ここで貴方達を倒せば我がバダンの覇業は成ったも同じ」
「一人残らず倒してやろうぞ」
「それはこちらの台詞だ」
ライダー達は臆することなくそう返した。
「行くぞ」
「これが最後の戦いだ」
彼等はそれぞれ変身の構えに入った。腰からベルトが姿を現わした。
そして変身に入った。九つの光が輝きそこに九人のライダー達が姿を現わした。
「変身しましたね」
ヤマアラシロイドはそれを見てやはり笑っていた。
「では我々も変身しなくてはなりませんね」
そして他の者達に顔を向けた。
「同志達よ。準備はよろしいですか」
「無論」
「今すぐにでも」
彼等は答えた。それを受けてヤマアラシロイドはまた笑った。
「ではお見せしましょう。我等ももう一つの姿を」
そう言うと黒い光が彼等を包んだ。
「ムッ！」

ライダー達はそれを見て思わず目を見張った。世界が一瞬闇に包まれたかに見えた。

だがその光が去ると別の者達がそこに立っていた。何とゼクロスがそこにいたのだ。

「いや、違う」

彼等はすぐにそれを見破った。

「貴様達はゼクロスではないな」

「フフフ、確かに」

銀色のゼクロスがそれに応えた。その声はヤマアラシロイドのものであった。

決戦その五

「私達はゼクロスの力を移植されたもの。暗黒の力を以ってして」
「さっきの黒い光か」
「その通り」
紫のゼクロスがストロンガーに答える。タカロイドの声であった。
「私達は暗闇大使よりこの力を授けられたのよ」
「そして同時に残っていたゼクロスの力をもとに改造手術を受けたのだ」
バラロイドの声で紫のゼクロスが、そしてアメンバロイドの声で灰色のゼクロスが語る。
「では貴様等はゼクロスの力をそのまま持っているとでもいうのか」
「ええ」
エックスに黄色のゼクロス、ドクガロイドが返答した。
「何なら証拠を見せてやろうか」
「ここにあるぞ」
ジゴクロイドの声で黒いゼクロスが、カメレオロイドの声で緑のゼクロスが言う。
「証拠だと」
ブイスリーがその言葉にすぐに反応した。
「面白い、そんなものがあるのか」
二号はここであえて挑発するようにして言った。
「では見せてあげるわ」
白いゼクロスは女の声であった。バラロイドのものであった。
「これを見るがいい」
橙色のゼクロスがカニロイドの声で言うとその手に手裏剣が現われた。
「たっぷりとな」
青いゼクロスもそれに続き爆弾を取り出す。トカゲロイドの声で

語りながら。
「受けてみる？」
茶色のゼクロスもそれに続く。女の声、そうカマキロイドの声で。
「容赦はせぬぞ」
最後に金色のゼクロスが言った。クモロイドであった。
「望むところだ」
ライダー達はそれに臆することなく返した。その目の光は強く、輝いていた。
「ゼクロスと同じ姿か、面白い」
「もっともそれで能力まで同じとは限らないがな」
「何！？」
これには全てのゼクロス達が声の色を変えた。
「それはどういう意味だ」
「そのままだ」
これにスーパー1が言葉を返した。
「ゼクロスは村雨良が変身してはじめてゼクロスとなる、そう言ったのだ」
「では我々はゼクロスではないというのか」
「そう表現する以外にどう言えばいいのか俺にはわからんな」
エックスもここでそう言った。
「姿は同じでも中身が違えばその力も違うということだ」
「では我々がゼクロスより劣っているとでも言うのか」
「聞こえなかったようだな」
ストロンガーが言った。
「その通りだ。少なくとも貴様等は心でゼクロスに負けている」
「戯れ言を」
それを聞いたゼクロス達の声が怒りに満ちていく。
「裏切り者と我々を比べるだけでも許せぬというのに劣っているとさえ言うのだ」
「フン」

ブイスリーがその声を鼻で笑った。
「貴様等は他のどの者にもそれは負けている。何故なら貴様等の心は腐り果てているからだ」
「それ以上言うと容赦はせぬぞ」
「容赦!?何を今更」
スーパー1も続いた。
「これから戦うつもりなのだろう。そしてその心は貴様等の身体から発せられるドス黒い気ですぐにわかることだ」
「そう、御前達の気も心も醜い。アマゾンそれ感じる」
「醜いだと」
「そう。御前達の気邪念そのもの。権力や力のことだけ考えている。自分達のことしか考えていない」
「クッ・・・・・・」
これには反論できなかった。
「アマゾンの言う通りだな。これは何時になっても変わらん」
ライダーマンの言葉は彼がかってデストロンにいたことがある為重みがあった。
「自分達の欲望の為なら例えどのようなことでもする。それが貴様等だ」
「まだ言うか」
「ああ、何度でも言ってやる」
スカイライダーまで言った。
「貴様等のその心がこの世を脅かす限りな。そして我々は何度でも戦う」
「おのれ」
「どうした、それで終わりか」
二号が彼等を挑発するようにして言う。
「それならばそろそろはじめさせてもらおうか」
「こちらは何時でもいいぞ」
それに合わせて一号も口を開いた。

「さあ来い。ここで貴様等を完全に討ち滅ぼしてやる」
「それはこちらの台詞」
しかしそれでもゼクロス達は気負ってはいなかった。それどころか怒りによりその力を増大させているようにさえ見えた。
「今の言葉、地獄で後悔させてやろう」
「地獄か」
だがライダー達はその言葉を冷笑した。
「地獄とは貴様等の為にこそあるものだ。それを教えてやろう」
「来い！」
「面白い、ではどちらが地獄に相応しいか確かめようぞ！」
「ライダー達よ、覚悟しろ！」
ゼクロス達は一斉に跳んだ。そして空中で回転する。
「来るぞ」
「ああ」
ライダー達は互いに背中を合わせ円陣を組んでいる。
「覚悟はいいな」
「無論」
怖れている者は誰もいなかった。その彼等の周りにゼクロス達が同時に着地した。
「行くか」
「うむ！」
そしてライダー達は一斉に散った。そしてそれぞれの敵へ向かって言った。
ゼクロス達もそれを迎え撃つ。遂に最後の戦いがはじまった。

決戦その六

拳が唸り脚が舞う。ライダー達もゼクロス達もその力と技の全てを出して戦いを開始した。

戦いは五分と五分であった。だが数にやや勝るゼクロス達は特定の相手を持たない者を後方に置き他の者を援護させた。それで戦いを少しでも有利にしようとしていた。

「そう来るか」

ライダー達はその後方からの攻撃を受けて舌打ちした。

「まずいな、今はあいつ等にまで手が回らない」

「フフフ」

それがバダンの狙いであった。そしてそれにより互角の状況となっているこの戦いを少しでも有利にしようとしていた。

だがライダー達には考えている余裕もなかった。どちらにしろこの戦いは負けるわけにはいかなかったからだ。

「やるしかない、どの様な状況でも」

その通りであった。どれ程劣勢であっても勝たなければならなかったのだ。

それでも数は如何ともし難い。彼等はそれにより互角の状況に追い込まれて、それを覆す余力もなかった。

「クッ・・・・・・」

思わず歯噛みする。しかし焦ってはならない。彼等はそのジレンマに苦しささえ感じていた。その時であった。

「先輩達、遅れてすいません！」

その声と共に何者かが戦場に入って来た。それは赤い風であった。

「まさかっ！」

ゼクロス達はその風を見て思わず叫んだ。そこにいるのは彼等自身であった。

「ゼクロス、来たのか！」

ライダー達は彼の姿を認めてやはり叫んだ。
「ええ、何とか間に合いましたね」
「しかし大丈夫なのか」
「大丈夫!?何がですか!?」
他のライダー達の心配そうな言葉にもしれっとしたものであった。
「御前はあの戦いでのダメージが」
「それなら大丈夫ですよ」
彼はそれに対して笑ってそう答えた。
「役さんのおかげでね」
「役君の!?それは一体」
「フフフ、それは秘密ですよ」
だが彼はそれには笑って答えようとしなかった。
「それよりもこの連中を何とかしましょう。ここを突破しないと首領のところへは行けませんよ」
「あ、ああそうだったな」
彼等はその言葉で戦場に心を戻した。
「では行くぞ。あらためてな。御前は後方に回っている奴等を頼む」
「はい」
「二体だがいけるな。攻撃を止めるだけでいいからな」
そこにいるのはクモロイドとヤマアラシロイドが変身した金のゼクロスと銀のゼクロスであった。
「大丈夫ですよ。それどころか」
「それどころか!?」
「あの二体も俺が倒しますよ」
彼は不敵な声でそう答えた。
「馬鹿な。無茶をするな」
「心配御無用、無茶がライダーでしょう」
「しかし」
それでも彼等はゼクロスのことが心配でならなかった。それだけ彼のダメージは深刻な筈であるからだ。

「では行きましょう」
「いいのか」
「勿論ですよ。その為にここまで来たんですから」
「そうか。ならわかった」
もう彼等はそれを止めることはしなかった。
「では行くがいい。そして勝て！」
「はい！」
ゼクロスは頷くと自分自身に向かって言った。金色と銀色の姿をした二人の自分に。
「フン」
金のゼクロスはそれを見て鼻で笑った。
「聞いたか、同志よ」
そして隣にいる銀のゼクロスに対して言葉をかけた。
「ええ」
銀のゼクロスはそれに頷いた。
「どうやらきついお仕置きが必要ですね」
「うむ」
彼はそれに頷いた。そして身体を屈めた。
「どちらが先に行く？」
「それは決まっています」
彼はその問いに余裕を以って答えた。
「早い者勝ちです。それ以外にありますか？」
「フフフ、バダンの掟だな」
「その通り。獲物はより強い者が手に入れる、それだけです」
「ならばそうしよう。私としても異存はない」
「そうこなくては。では行きますか」
「うむ」
彼等はそれぞれ跳んだ。そしてゼクロスに向かって来た。
「来たな」
ゼクロスはそれを見ながら呟いた。

「こちらとて望むところ」
そしてナイフを取り出す。敵も取り出してきた。
「来い！必ず勝ってやる！」
そう叫ぶと切り込んだ。忽ち激しい戦いがはじまった。
ライダー達はそれぞれのゼクロスと戦いを続けていた。一号は青のゼクロスと、二号は黒のゼクロスと、ブイスリーは白のゼクロスと、ライダーマンは緑のゼクロスと、エックスは橙のゼクロスと、アマゾンは茶のゼクロスと、ストロンガーは黄のゼクロスと、スカイライダーは紫のゼクロスと、そしてスーパー1は灰のゼクロスとそれぞれ戦っていた。どれも互いに譲らぬ状況であった。

決戦その七

だが次第に形勢が明らかになってきた。ライダー達がゼクロス達を押してきていたのだ。

「ぬうう」

ゼクロス達は自分達が劣勢になってきたのに対して次第に焦りを覚えていた。だがそれはライダー達にとっては有り難いことであった。

そこに隙ができる。そしてライダー達にそれを見せることは死を意味していた。

「ムッ」

「今だ！」

ライダー達はすぐに動いた。ゼクロス達に攻撃を仕掛け、態勢を崩させると一斉に跳んだ。

「トォッ！」

空中で一回転する。そして止めの攻撃に移った。

「食らえ・・・・・」

十の光が天に輝く。そしてそこから蹴りに入った。

「ライダァーーーーー月面キィーーーーーーーック！」

「ライダァーーーーー卍キィーーーーーーーーック！」

「ブイスリースクリューーーーーキィーーーーーーーック！」

「ライダーーーーマンキィーーーーーーーーーック！」

「エックス必殺キィーーーーーーーーーック！」

「アマゾンスピンキィーーーーーーーーック！

「超電子ドリルキィーーーーーーーーーック！」

「ライダァーーーーーームーンサルトキィーーーーーーーーック！」

「スーーパーーーーライダァーーーーーーー閃光キィーーーーーーーーック！」

そしてゼクロスも跳んでいた。全身に赤い光を纏わせそこから回

転する。そこから蹴りを放つ。
「ゼクロスダブルキィーーーーーッ！」
まずは金のゼクロスに対して蹴りを放つ。その反動を利用して後ろに跳びそこからまた蹴りを放つ。今度は銀のゼクロスに対してだ。
銀のゼクロスも撃った。それからようやく着地した。
ゼクロス達は弾き飛ばされた。そして大きな音を立て大地に崩れる。
「グオオオオ・・・・・・」
呻きながら起き上がる。起き上がりながら徐々に人間の姿に戻っていく。
「ま、まだまだ・・・・・・」
それでもなお戦いを続けようとする。しかしそれができないことは彼等自身が最もよくわかっていた。
「止めておけ」
ここで何者かが姿を現わした。
「最早貴様等にこれ以上の戦いは無理だ。安らかに死ぬがいい」
彼は同志達に前に立ってそう言った。
「三影」
彼等はその男を見上げてその名を呼んだ。
「後はこの俺に任せるのだ。いいな」
「しかし」
「同志達よ」
だが彼はゼクロス達に対して強い声を返した。
「貴様等はよくやった。後は俺に任せるのだ。ゼクロス、そしてライダー達を倒すことをな」
「フ・・・・・・」
彼等を代表するようにヤマアラシロイドが笑った。
「最後の最後までずるい人です。いつもそうやって美味しいところをさらう。しかし」
「最早俺達はこれ以上は無理だ。貴様の言う通りな」

「忌々しいけれどね」
彼等は口々にそう言った。
「後は任せたぞ、三影」
「ライダー達、そしてゼクロスの首、見事挙げよ」
「地獄でバダンの覇業を見てやる故な」
「先に待っていますよ」
「フン、こんなところで死ぬのは不本意だがな」
「また貴様に出て来られるのもそうだがな」
「だが任せた、同志よ」
「仕方ないわね」
「ゼクロスの首」
彼等は立ち上がった。そして最後にこう言った。
「見事挙げてみよ！」
そう言うと前から倒れ伏した。そして爆発の中に消えていった。
「安らかに眠れ」
三影はその爆発を背で受けながらそう呟いた。それからゼクロスとライダー達に顔を向けた。
「さて、と。わかってるな」
「ああ」
ゼクロスはそれを受けて頷いた。
「多くは言わん。行くぞ」
「来い」
ゼクロスは身構えた。三影はそれを受けるかのようにサングラスをゆっくりと外した。
すると黒い光が全身を覆った。その光が消えた時そこには七色に輝くゼクロスがいた。
彼は無言で前に出た。そしてゼクロスに向かって来た。
「ウオオオオッ！」
叫びながら拳を繰り出す。そしてそれでゼクロスの顔を潰さんとする。

だがゼクロスはそれをかわした。そして逆に彼のその腕を掴んだ。
「甘いっ！」
しかし虹のゼクロスはそれよりも前にその腕を引いた。そして態勢を崩したゼクロスに対して体当たりを仕掛ける。
これでさらにバランスを崩したゼクロスにさらに攻撃を仕掛ける。畳み込む様にパンチを仕掛ける。
ゼクロスはそれを両手をクロスさせ、そこに赤い光を纏わせて防ぐ。ライダー達は思わずそれに加勢しようとする。だがゼクロスはそれを拒んだ。
「手出しは無用です！」
「しかし・・・・・・」
それでも彼等は今にも動かんとしていた。だがゼクロスはそれを拒む。
「こいつは俺一人でやります。だから安心して下さい」
「・・・・・わかった」
ライダー達もそれに頷いた。
「ではやってみろ。その男、御前一人で倒してみろ」
「はい」
ゼクロスは他のライダー達に言葉に応えた。
「見ていて下さい、先輩達」
彼は攻撃を受けながらその態勢を整えていた。
「これが俺の戦い方、仮面ライダーゼクロスの戦い方だ！」
そう叫ぶと跳んだ。そしてその両手に手裏剣を出した。
「食らえっ！」
手裏剣を投げる。それにも赤い光を宿らせている。

決戦その八

虹のゼクロスはそれをナイフで弾き返した。そして自らは爆弾を取り出す。

「これならどうだ」

そしてそれを投げる。ゼクロスはそれに対して空中で姿を消した。

「ムッ！？」

これには虹のゼクロスだけでなく他のライダー達も思わず目を見張った。ゼクロスは何処なに消えた。

「何処に行った！？」

虹のゼクロスは辺りを見回す。その時後ろから声がした。

「ここだ」

その声と共に背中に彼がいた。そして虹のゼクロスの腰を掴んだ。

「ムッ！？」

彼が気付いた時にはもう遅かった。ゼクロスは彼を頭から地面に叩きつけようとしていた。

「これでどうだっ！」

プロレスでいうバックドロップだ。これ以上はないという程綺麗な形で決まった。そう、そのまま決まると、であった。

虹のゼクロスの姿が消えた。そして今度はゼクロスが捜す番となった。しかし彼は焦らなかった。

「そう来るか」

彼はあくまで冷静であった。そして辺りを見回すことなくその場にしゃがみ込んだ。

「何っ！？」

「どういうつもりだ」

ライダー達はそれを見て思わず声をあげた。だがゼクロスはやはり冷静なままであった。

「どうするつもりだ」

彼等はそれを見てかえって不安になった。彼等の方が不安な程であった。

それでもゼクロスは冷静なままであった。そして落ち着いた様子で両肩から煙幕を出した。

「フフフ、そう来るか」

虹のゼクロスの声がした。

「考えているな。そうでなくては面白くない」

彼等はその煙の中に姿を消した。

「こちらの姿だけ見えていては不都合なのでな」

ゼクロスはそれに対して普段と全く変わらない声でそう返した。

「さあ三影よ、どうするのだ」

彼は煙の中で彼に問うた。

「決まっている」

「ほう」

その声は笑っていた。

「最初からな。貴様を倒す。それ以外に何があるというのだ」

「確かにな」

ゼクロスはその言葉に対して声で頷いた。

「ではこちらも仕掛けてやろう。貴様もそれが望みであろう」

「・・・・・・・・・」

しかしゼクロスはそれには答えなかった。そのかわりに攻撃が放たれた。

「ムッ！」

虹のゼクロスの声がした。何かが弾かれる音がした。

「この中で手裏剣を放ってくるか。しかも俺の位置を掴んで」

彼の声が再びした。

「俺の声から場所を探ったか」

「違う」

だがゼクロスはそれに対してこう言った。

「貴様の気は目立つ。まるで抜き身の刃のようだ」

「ほお」
「それでわからない筈がない。今貴様が何をしているのか俺には手にとるようにわかる」
「そうか」
虹のゼクロスはその言葉を聞き楽しそうに声をあげた。
「では俺がこれから何をするつもりなのかわかっているな」
「当然だ」
ゼクロスはそれに答えた。
「来い。もうすぐ煙も消える」
「ふむ。では煙が消えてから見せよう」
虹のゼクロスはあくまで楽しむ声であった。そして煙が消えた。
ゼクロスは今までと大して変わらない場所に立っていた。そして虹のゼクロスはその正面に立っていた。だが彼は一人ではなかった。
「フフフ」
彼は笑っていた。複数の声が聞こえてきた。
「さて、ゼクロスよ」
五人の虹のゼクロスが彼に問うてきた。
「これもわかっていたというのかな」
「そうだ」
だが彼の言葉は変わらなかった。
「言った筈だ、貴様の考えはわかるとな」
「フン」
虹のゼクロスはその言葉に鼻白んでみせた。
「結構なことだ。では貴様はこれに対してどうするつもりだ。五人の俺を前にして」
「どうするかか」
「そうだ。何も考えがないとは言わせぬぞ」
彼はそう挑発してきた。
「言っておくがこれは脅しではない」
「それはわかっている」

だが彼は身構えるだけでこれといった動きはしてこない。まうれ無防備である。
「待っているのか」
虹のゼクロスはそれを見てふと思った。だがそれは口には出さない。
「ゼクロス」
彼はこの時自分が焦りはじめていることに気付かなかった。
「来ないのならこちらから行くぞ」
「勝手にすればいい」
そしてその焦りはこの言葉で火が点いた。
「・・・・・そうか」
彼は冷静に返したつもりであった。だがそれが為に自分が今焦っていることにまで気がつかなかった。
「では容赦する必要はないな」
これは自分に落ち着けと言い聞かせているようであった。
「死ね」
彼は動いた。そしてゼクロスを取り囲んだ。
その五体のゼクロスが彼自身を取り囲む。だがそれでも彼は動くことはなかった。

決戦その九

三影はさらに焦った。その無意識下の焦りを消す為には最早動くしかなかった。そして彼は動いた。

無言のまま五体の虹のゼクロスが同時に動く。一斉にゼクロスに向かって来た。

ゼクロスはこの時地面を見ていた。今大地には太陽がある。光が大地を照らす。そしてそれと共に影も映し出す。そう、影であった。

彼は影を見ていたのだ。その五つの虹のゼクロスの影を見ていた。本来ならその影は五つの筈である。

だがそこにある影は一つであった。そう、一つしかなかったのだ。その影を見た。それからすぐに跳んだ。

「そこだっ！」

天高く跳んだ。そして空中で激しく回転する。

「ムッ！」

五体に虹のゼクロスは思わず天を見上げた。そして空中でいるゼクロスを見やった。

ゼクロスは激しく前転しながら急降下して来る。回転しながらその目は影を見ていた。

「行くぞ・・・・・・」

ゼクロスはその影を持つ男に向かっていた。そしてその回転をさらに速めた。

「ゼクロス回転キィーーーーーック！」

全身に赤い光を宿らせた。そして蹴りを放った。

その蹴りが影を持つ虹のゼクロスを撃った。足が胸にめり込む。

「グググ・・・・・・」

それが本体であった。影を持つ者が撃たれると他の虹のゼクロスは全て消え去った。

足はそのままめり込んでいく。だが虹のゼクロスはその足を掴んだ。
「舐めるな・・・・・・」
彼は言った。
「この三影英介を舐めるなよ！」
そしてこう叫んだ。渾身の力を込めてゼクロスの足を抜こうとする。
「何ッ！」
これにはゼクロスだけでなく他のライダー達も驚かずにいられなかった。虹のゼクロスはそのまま足を引き抜いた。
その足を掴んだまま振り回す。そして後ろに大きく投げた。
「ウオオオオオオオオオオーーーーーーーーーーッ！」
投げた。だがやはりダメージが大き過ぎた。その力は全力ではなくゼクロスは何なく受け身をとり着地することができた。膝を折り衝撃を殺す。
顔を上げ虹のゼクロスを見る。彼はまだ立っていた。
「さて」
胸には激しい傷跡があった。それでも彼は崩れることなく立っていた。
「まずは見事だと褒めておくか。あの技を破るとはな」
「見事か」
「そうだ。何故俺の実体がわかったのは知りたいのだが」
「影だ」
ゼクロスはここでこう答えた。
「影」
「そうだ。俺は貴様の姿を見ずに影を見ていたのだ。太陽に映る貴様の影をな」
「影があるのが俺の実体だとわかっていたな」
「分身は俺も使う。それを忘れていたな」
「フッ、確かに」

虹のゼクロスはそれを聞いて笑った。だがそれは澄んだ笑みであった。

「どうやら俺は所詮貴様のコピーに過ぎなかったようだな。少なくともこのゼクロスの身体は」

ここで彼の変身が解けた。そして三影の姿に戻った。

「誤ったか。タイガーロイドならば。いや」

しかしここで言葉を変えた。

「以前はそれでも負けた。結局俺は貴様に勝てない運命だったということだな」

変身を解いた三影の胸はやはり大きな傷を受けていた。そこから血がとめどなく流れている。だが彼はその傷を押さえようともしなかった。

「村雨、いやゼクロス」

彼はここで言った。

「どうやら貴様には時を司る者もついているな。神は貴様を選んだということだ。そしてライダー達をな」

「そうだ」

彼はそれに対してこう答えた。

「だが選ばれたのではない。俺達は自分の力でそれを掴んだのだ。平和を守る為にな」

「フッ、平和か」

三影はそれには鼻で笑った。

「貴様等のいう平和と俺の言う理想世界、どちらが正しいかはわかっている。人間とは所詮愚かな生物だからな」

「それはどうでしょうね」

だがここで別の者の声がした。

「その声は」

「来たか」

ゼクロスと三影はその声がした方に同時に振り向いた。ライダー達もである。

「三影英介、暫くぶりですね」
役は彼に対してそう言いながら前に出て来た。
「どうやら貴方は全く変わってはおられないようですね」
「戯れ言を」
しかし三影は役に対しても臆することがなかった。すぐにそう言い返した。
「俺は貴様のことはわかっている。そしてその考えもな」
「そうですか」
役も臆してはいなかった。それをさらりと受けた。
「それは何よりです。それにしても貴方は愚かな方です」
「？何故俺が愚かなのだ」
「御自身では気付いておられないようですが貴方は所詮御自身の選民思想や権力欲を理論武装しているだけなのです。人を一方的に悪と決め付けることによってね」
「俺が？馬鹿を言え。俺はそんな考えは持ってはいない」
「いえ、それを気付いておられないだけです」
役の言葉は口調こそ穏やかであったがその中身は辛辣なものが含まれていた。そして彼はそれを緩めることがなかった。
「だからこそ貴方は愚かなのです」
「俺を面と向かって愚かと言うとはな。見上げたものだ」
三影は役を睨み据えていた。

決戦その十

「だがその罪はあがらう覚悟はできているのだろうな」
「罪・・・・・。それも貴方は考えておられますね。人はその存在自体が罪なのだと」
「そうだ。何か間違いがあるか！？」
「確かに人には罪があります。そしてそれは生きている限り重ねられていくものです」
「そうした汚らわしい人間共を抹殺することこそ我がバダンの宿願の一つだ」
「しかしそれは人の一面だけを見ているに過ぎません」
役はそう反論した。
「それは何故か。自分だけを高みに立って他者を見下したいからです」
含まれている辛辣なものがさらに強くなった。
「そしてバダンに選ばれ、粛清する立場にあることを感謝する。それ等が選民思想、そして権力欲でなくて何と言うのですか。貴方はそうやってでしか自分を立たせることができない弱い者なのです」
「今度は弱いというか」
「ええ。少なくともあの方達よりは」
役はここでライダー達に顔を向けた。
「御覧なさい」
そこには立花達がやって来ていた。
「おい、無事だったか！」
「心配したぞ！」
滝もいた。博士達もがんがんじいも。竜もチョロもがんがんじいもモグラ獣人もいた。皆無事であったのだ。
「おやっさん」
「無事だったんですね」

彼等はそれぞれ細かい傷を少なからず受けていた。頭から血を流している者もいる。この戦いの激しさを何よりも物語るものであった。

それでも彼等はその傷を置きライダー達の方にやって来た。そして彼等を気遣うのであった。

「皆無事だったんだな。よくやった」

「勝ったんですな、みなはん」

そして温かい声をかける。その目は誰よりも優しいものであった。

「あの目を見なさい」

役は三影に対して言った。

「あれが人間の本当の力です。人にはああした一面もあるのです」

「あれの何処が力だ」

それでも三影は頑なにそれを見ようとはしなかった。

「甘い、単なる馴れ合いだろうが。あんなものが力だとは断じて認めん」

「貴方はそう考えるでしょうね。そしてそれを拒む」

「フン」

彼は首を逸らした。

「だからこそ敗れたのです。それを最後まで理解されないのですね」

「敗れたのは俺の力が足りなかっただけだ。他に何がある」

「その力、よく考えられればおわかり頂けたのですがね」

「そうして昔から貴様は人に干渉してきたのだな」

「干渉？とんでもない」

役はそれを口の端だけで笑い飛ばした。

「私は守護者なのですよ。人の世のね。それだけです」

「だからこそゼクロスに協力したのだな」

「ええ。そういうことです」

役はゼクロスに顔を向けた。

「そういうことだったのですよ。先程のお話は」

「そうだったのですか」

ゼクロスはここに来る前のことを思い出していた。その時役は彼にあるものを渡していたのだ。それは『王の石』と呼ばれる光輝く石であった。

その石をベルトに埋め込むと傷が忽ち回復した。そしてそこで役は彼に自分の正体を話したのだ。その石のことと共に。

「あの石は神の石なのです。私があの方々に授けられたものです」

「賢者の石だけではなく、か」

三影はそれを聞いてそう言った。

「貴様はもう一つ石を持っていたということだな」

「ええ、そういうことです」

役はその言葉に対してそう返した。

「全てはこの世を守る為にです」

「そして貴様はライダー達に協力したのか。かってあの男を排除した時のように」

「あのコルシカ生まれの小柄な皇帝ですね」

「あの男をあれ以上置いておいては危険だからか。そしてナチスもソ連も」

「そうですね。そういうこともありました」

「バダンもか。フン、そうして人間共を守ってどうするつもりだ。愚か者共をのさばらせておくつもりか」

「少なくとも貴方達よりは愚かではありませんよ。先程も申し上げたように」

「三影」

ここでゼクロスが口を開いた。

「何だ」

三影はそれを受けて彼に顔を向けた。

「貴様はもうわかっている筈だ、自分が敗れたことに」

「フン、貴様にか」

「いや、違う」

ゼクロスはそれに対して首を横に振った。

「信念においてだ。貴様は間違っていたのだ」
「間違っていた!?俺がか」
「そうだ。何故それを認めようとしない。それは貴様が弱いからではないのか」
「弱いだと。また戯れ言を」
「戯れ言ではないと言っているのだ」
しかしゼクロスの言葉はやはり辛辣なものであった。
「それは貴様自身が最もよくわかっている筈だが」
「フン」
やはり彼はそれを認めようとはしなかった。首を横に振りながら否定した。

決戦その十一

「そうして俺を馬鹿にしたいようだな」
「違う、それもわからないのか」
「わかる!?何をだ」
それでも彼は変わらなかった。
「バダンの真理がわからぬ貴様等に何がわかるというのだ」
そして逆にそう問うてきた。ゼクロスはそれに対しても冷静に返した。
「あくまでバダンこそが正しいというのか」
「無論」
そう言い切った。
「それ以外にどう言えというのだ」
「そうか」
ゼクロスはそれを聞いてそれ以上言うのを止めた。
「ではそれに殉じるのだな」
「当然だ。だがな、ゼクロスよ」
「何だ」
「最後に勝つのはバダンだ。それだけは覚えておけ。貴様等は必ず敗れるということをな」
「・・・・・・・・・」
ゼクロスはそれには答えなかった。三影はそれを見届けてニヤリと笑った。
「わかったか。では俺はそろそろ地獄へ行かせてもらおう。闇魔が心待ちにしているだろうからな」
「地獄か」
「そうだ、俺の行く道は・・・・・・そこしかなかろう」
その言葉の意味がゼクロスにはよくわからなかった。だが役にはわかったようだ。

「さらばだ。ゼクロス」
「何だ」
彼は最後に三影に顔を向けた。
「貴様には勝ちたかったがな。しかしいい勝負をさせてもらった。悔いはない」
「そうか」
ゼクロスはそれを聞いて首を縦に振った。
「では俺からは何も言うことはない。それではな」
「ああ。地獄で待っているぞ」
「わかった」
ゼクロスは頷いた。三影はそれを見て笑った。そして最後にこう言った。
「バダンに勝利を！」
その声と共に爆発して消えた。後には何も残りはしなかった。
こうして三影英介は死んだ。跡には何も残りはしなかった。
「三影・・・・・・」
ゼクロスは爆風を受け、それが消えたのを見届けて呟いた。何時になく力のない、それでいて澄んだ声であった。
「遂に倒しましたね」
「はい」
彼は役の言葉に応えた。
「手強い奴でした。そして切れる男でした」
「ええ」
「そして誰よりも俺を知っていた。恐ろしい男でしたよ」
「そうですか。今の気持ちはどうですか」
「何とも言えませんね」
彼はそれに対してこう言った。
「虚しさがあると言えばあります」
「そうでしょうね。しかし」
だが役はここで言葉を変えてきた。そしてこう言った。

「まだ終わりではありませんよ」
「はい」
そしてゼクロス自身もそれに頷いた。
「行きましょう。まだ暗闇大使、そして首領が残っています。彼等がある限りバダンは滅びはしません」
「おお、その通りだ」
ここで今まで戦いを見守っていたライダー達が二人のもとにやって来た。立花達もだ。
「まだ首領がいる。首領がいる限りバダンは滅びはしない」
「そうだ、遂に奴を追い詰めたんだ。一気に行くぞ」
「はい」
ゼクロスはそれに頷いた。
「では行きましょう、奴等の心臓部へ。そしてあの首領を倒しましょう」
「よし」
ライダー達は声を合わせる。そこに立花達がやって来た。
「行くか」
「おやっさん」
立花達も行くつもりであった。
「心配するな、足手まといにはならないからな」
「ええ、歓迎しますよ」
そしてライダー達もそれを笑顔で迎えた。
「おやっさん達の力があれば百人力ですよ」
「そうか、ならいいんだ」
これには立花も滝もその他の者も皆笑った。
「これが最後だからな。最後まで御前達の力になりたいんだ」
「任せてくれ、これでもフォロー位はできるからな」
「はい」
彼等はここで皆手を合わせた。ライダー達だけでなく立花達も彼等もその心はライダーであった。

「行くぞ」
立花が一番上に手を置いた。そしてこう掛け声をかけた。
「はい！」
そして皆がそれに応えた。これで合図が終わった。
彼等は最後の戦場に向かおうと足を踏み出した。その前に何者かが姿を現わした。
「ムッ」
ライダー達はそれを見てすぐに身構えた。それはまるでファラオの様なシルエットの持ち主であった。
「フフフフフ」
それは暗闇大使であった。彼はライダー達の前で不敵に笑った。

決戦その十二

「よくぞゼクロス達を倒した。見事であったと褒めておこう」
彼はライダー達を見据えながらこう言った。
「だが戦いはまだ終わりではない。それはわかっているだろう、ライダー諸君よ」
「無論だ」
ゼクロスがそれに答えた。
「貴様を、そして首領を倒さないことには戦いは終わらない。それはわかっているつもりだ」
「ならばよい。ではわしがここに来たわけはわかるな」
「ああ」
ライダー達はそれに答えながら左右に散った。大使の周りを戦闘員達が取り囲む。
「俺達を倒す為。それ以外に何があるというのだ」
「わかっていればいい」
彼はそれを受けてこう言った。
「これでわしも本当の力を見せることができる」
「本当の力!?まさかそれは」
「フフフ、そうだ。あれだ」
暗闇大使はゼクロスの言葉を受けて再び不敵に笑った。
「松阪でのサザンクロスはわし自身であった」
「やはりな」
ゼクロスは今の会話からそれを感じとっていた。
「そしてそれは一度は貴様等に敗れた。だがサザンクロスは滅んではおらぬ」
「どういうことだ」
「言っただろうサザンクロスはわし自身だと。そしてわしがいる限りサザンクロスは不滅だ。そう、わしがいる限りな」

「まさか」
「そう。今見せよう、サザンクロスの、そしてこの暗闇大使のもう一つの姿をな！」
彼の身体が黒い光に覆われた。そしてその中で姿が変わっていく。
「ムムム・・・・・・」
誰もがその変身に目を見張った。光が消えた時そこには赤い邪神がいた。
「フフフフフ」
暗闇大使は笑っていた。顔と上半身はフジツボだらけであり、その他の部分は暗闇大使の姿のままであった。彼はその姿のままライダー達を見据えた。
「それが貴様の正体だというのか」
「その通り」
暗闇大使はその禍々しい形の口でそう答えた。
「サザンクロス、わしの正体だ」
「やはりな。貴様もまた改造人間だったということか」
「そうだ。これはわかっていたことだろう」
「フン、当然だ」
ライダー達はそれに答えた。
「大幹部の正体は改造人間、これはもうわかっていたことだ」
「そして貴様はあの地獄大使の従兄弟、必ずその正体は怪人だとわかっていた」
「そうか。ならば話は早い」
彼、サザンクロスはそれを受けてニヤリと笑った。
「では来るがいい、ライダー達よ。この力見せてやろう」
「望むところだ」
ライダー達は彼を取り囲んだ。しかしそれでもサザンクロスは怯むところがなかった。今最後の要塞攻略がはじまろうとしていた。

決戦　完

2004・12・26

バダン最後の日その一

「さて、ライダー達よ」
サザンクロスはライダー達と対峙しつつ言った。
「来ないのか。まさかわしに臆したわけではあるまい」
「何ッ」
これにはストロンガーやアマゾンがまず反応した。だがそれをダブルライダーが止めた。
「待て、これは挑発だ」
「しかし」
「むざむざ相手の挑発に乗る必要はない。いいな」
「クッ・・・・・。わかりました」
彼等は渋々ながらもそれに従った。そして矛を収めた。
「フフフ、チームワークは変わってはおらんな」
サザンクロスはそれを見て満足そうに笑った。
「だがそれではわしに勝つことはできんぞ」
「それはどうかな」
しかしライダー達も怯んではいなかった。
「それを今から証明してみせようか」
そしてこう言った。サザンクロスはそれを受けてもやはり笑っていた。
「面白いことを言うな、やはり」
その周りにいる戦闘員達が前に出て来た。
「どのみち貴様等をここで止めなくてはならん。覚悟はできているな」
「それはこちらの台詞だ」
やはりライダー達は強気にこう返してきた。両者の間合いが詰め

られていく。
「行くぞ」
「来い」
互いにそう言い合った。遂にサザンクロスとライダー達との戦いの幕が切って落とされた。
まずは戦闘員達が前に出る。それには立花達が向かって行った。
「こいつ等はいつも通りわし等に任せろ！」
「御前達はサザンクロスをやれ！」
そして彼等は戦闘員達の前に立ちはだかった。ライダー達はそれを受けて頷いた。
「済まない！」
「おやっさん達、頼みます！」
「おう、任せとけ」
彼等はニヤリと笑ってこう言った。
「そのかわり、頼むぞ」
「はい」
ライダー達はそのまま前に進む。そこにはサザンクロスが仁王立ちしていた。
「来たか、ライダー達よ」
彼は自信に満ちた顔で悠然と立っていた。
「今こそ見せようぞ、復活したサザンクロスの力」
そう言いながら右手の鞭を振りかざしてきた。そしてそれを動かした。
「ムン！」
それでライダー達を撃たんとする。だが彼等はそれより前に動いていた。
「甘いっ！」
一斉に上に跳んでそれをかわした。それぞれサザンクロスを取り囲むようにして着地する。
「囲んできたか」

サザンクロスはそれを見渡した後でそう言った。
「さて、次はどうするつもりだ」
「それは決まっている」
ライダー達はすぐにそう答えた。
「行くぞ！」
「これがライダーの真の力だ！」
そして一斉に動いた。サザンクロスめがけて総攻撃を仕掛けてきたのだ。それでもサザンクロスの余裕は変わりはしなかった。
「面白い」
彼はそう呟いた。
「こうでなくては面白くとも何ともないわ」
「まだ言うか！」
まずはブイスリーがパンチを仕掛けてきた。サザンクロスはそれを左手の鍵爪で受けた。
「言える、わしのこの力を以ってしたならな」
その爪でブイスリーに反撃を加える。ブイスリーは後ろに跳び退きそれをかわす。入れ替わりにエックスが来た。
「ムン！」
ライドルでその脳天を砕かんとする。そしてそれはサザンクロスの脳天を直撃した。
「やったか！」
エックスは確かな手応えを感じ見た。だがサザンクロスは相変わらず余裕に満ちた顔で仁王立ちを続けていた。
「所詮その程度か！？」
彼はその返礼に鞭を放って来た。エックスはライドルでそれを払い難を避けた。
「ならば！」
今度はストロンガーが攻撃にかかった。拳で地面を撃つ。
「エレクトロサンダー！」
電流が地面を伝い襲い掛かる。そしてそれはサザンクロスを撃っ

た。
　激しい電流がその全身を包む。これは流石に効果があるかと思われた。
　しかしサザンクロスは立っていた。そして悠然とした物腰でストロンガーに対して言った。
「甘く見てもらっては困る。わしは戦闘員などとは違うぞ」
「クッ・・・・・・」
「さて、どうしたライダー達よ」
　彼は電流を打ち消すと周りに散るライダー達を見回して問うてきた。
「この程度か!?貴様等ライダーの力とはその程度ではないだろう」
　そう言って彼等を挑発にかかった。
「見せてみろ、貴様等の力を。このわしにな」
「見せろだと」
「そうだ、わしは今までの者とは違う。貴様等一人一人では相手にもならんわ」
「戯れ言を。まだ言うか」
「ほう、戯れ言か」
　サザンクロスはそれを受けてまた笑った。
「ではわしの言葉がまやかしなどではないということを見せてやろうぞ」
　彼はそう言うと両腕をクロスさせ力を溜めた。そして全身の穴という穴に黒い光を宿らせた。

「まさか・・・・・・」
それを見たライダー達は思わず呟いた。
「そう、そのまさかだ」
彼はそれに答えた。するとその黒い光が一斉に放たれた。
「ウワッ！」
無数の黒い光が蛇となってライダー達い襲い掛かる。それはのたうち回りながら飛び掛って来た。
「させんっ！」
しかしライダー達はその驚異的な反射神経でそれをかわした。だが細部には無数の傷を受けてしまっていた。
「ほう、急所はかわしたか」
サザンクロスは攻撃を終えライダー達の状況を見てこう言った。
「だがダメージは少なからず受けたようだな」
「クッ・・・・・・」
それは否定できなかった。ライダー達は所々から血を流していた。
「まさかあのサザンクロスの力をそのまま使っているというのか」
「その通り」
彼はニヤリと笑ってそう答えた。
「他の怪人達とは比べ物にならぬ。それはこれでわかっただろう」
「クッ、確かに」
ライダー達は苦渋の顔でそれを認めざるを得なかった。
「だが貴様を倒すということに変わりはない」
「ほう」
サザンクロスはそれを受けて目を細めた。
「ではどうするのだ？やってみせるがいい。そして見事わしを倒してみよ」
「言われずとも！」

「貴様を倒す！」
ライダー達は再び動きはじめた。サザンクロスの周りを走りだす。
サザンクロスは微動だにしなかった。ただ彼等が来るのを待っていた。
「ククク」
笑っていた。笑いながらライダー達の動きを見ているのだ。
鞭を振るってきた。それでライダー達を撃ちにかかる。
「トォッ！」
ライダー達はそれをかわす。しかしダメージのせいか動きが鈍かった。
「どうした、動きが遅くなっているぞ」
それはサザンクロスにもわかっていた。そしてそれを受けて挑発するように言う。
「おのれ・・・・・・」
それを受けて憤るライダーもいる。ブイスリーやストロンガーだ。
だがそれを他のライダー達が止める。これはダブルライダーであった。
「焦るな、焦ったら奴の思う壺だ」
「しかし・・・・・・」
「わかったるだろう、いいな」
「クッ、わかりました」
彼等はそして落ち着きを取り戻した。そして再び動きはじめた。
「それがチームワークというものか」
サザンクロスはライダー達のやりとりを見て興味深げにそう言った。
「中々面白いものだ。だがな」
その声も目もやはり笑っていた。
「それだけでは勝てはせぬ。わかっているな」
「それはどうかな」
だが一号がそれに反論した。

「何！？」
「仮面ライダーの本当の力は全員が揃った時に発揮されるということだ」
今度は二号がそう言った。
「そう、そうやって俺達は今まで死地を乗り越えてきた」
ブイスリーはサザンクロスから目を離さない。
「そして貴様等に勝ってきたのを忘れたとは言わせない」
ライダーマンがそれに続く。
「そして今も」
エックスがサザンクロスを見据えながら言う。
「勝つ！」
アマゾンが吠えた。
「この命ある限り」
ストロンガーの身体に超電子の力がみなぎっている。
「貴様等の野望が適うことはない！」
スカイライダーも駆けていた。
「今からそれを証明してやる！」
スーパー１の銀の拳が光った。
「行くぞサザンクロス！」
ゼクロスがその正面にやって来る。
「もう一度貴様を倒す！」
ライダー達が跳んだ。回転しながら彼等は光となる。そして空中で十の光が交差した。
「何ッ！」
サザンクロスはその光に目が眩んだ。だがすぐに態勢を立て直し身体中から黒い光を発する。
しかしそれは全く通用しなかった。光と化したライダー達はその黒い光をことごとく弾き返してしまったのだ。
「喰らえ・・・・・・」
ライダー達の声が木霊する。

「ライダァーーーーライトニングアタァーーーーーーック！」
一斉に体当たりを敢行する。サザンクロスに向けて一直線に突き進む。
「おのれ！」
避けようとするが避けられない。十に光がサザンクロスを直撃した。
「グフッ！」
今度はサザンクロスがダメージを受ける番であった。全身に激しいダメージを受け吹き飛ぶ。天に舞い上がった時全身から黒い光を放出した。だがそれは攻撃の光ではなかった。

バダン最後の日その三

黒い光を放ちながら暗闇大使の姿に戻っていく。そして大地に落ちていく。

「やったか！？」

着地し、態勢を戻したライダー達は暗闇大使を見た。大使は大きな地響きを立て落ちた。

しかしそれでも彼は生きていた。全身に激しいダメージを負いながらも立ち上がってきた。

「おのれ・・・・・・」

身体中から血を吹き出している。それでも生きていた。

「それが貴様等の力だというのか」

「そうだ」

ライダー達はそれに答えた。

「貴様が侮っていた力だ。どうだ」

「クッ・・・・・・」

彼はそれを聞いて歯噛みした。しかしそれはすぐに微笑みに変わった。

「見事なものだ。ダモンが敗れただけはある」

「ダモン・・・・・地獄大使のことか」

「そうだ。フッ、あ奴と同じく貴様等に敗れるとはな。これも因果か」

「因果ではない、宿命だ」

「宿命！？」

彼はライダー達に言われ目をしかめさせた。

「バダンが敗れるのは宿命だ。ならば貴様が倒されることも宿命なのだ」

「そう言うか。だがそれはどうかな」

「何！？」

「暗闇大使が滅びようとバダンは滅びぬということだ。首領がおられる限りはな」
そして後ろを振り向いた。それから言った。
「首領、あちらで覇業を見守っております。どうか志を果たして下さい」
そう言い終えると頭を垂れた。それからライダー達に向き直った。
「さらばだ、ライダー達よ。そしてダモン」
彼はまた従兄弟の名を呼んだ。
「再び貴様のところへ行く。共に地獄を席巻しようぞ！」
それが最後の言葉であった。彼は爆発の中に消えていった。
「死んだか」
ゼクロスはその爆風を見て呟いた。
「敵ながら見事な男だった」
「ああ」
他のライダー達もそれに同意した。
「それが敵というものだ。三影だってそうだっただろう」
「ええ」
「その敵に勝ったんだ。誇りを持て」
「わかりました」
彼は答えた。爆発が消えるとライダー達に向き直った。
「では行きましょう、首領の下へ」
「おう」
「わかった」
ライダー達は答えた。戦闘員達を倒し終えた立花達もだ。
「しかしわし等はこれまでだな」
だがここで立花がこう言った。
「わし等もかなり傷を負った。悪いが待たせてもらうぞ」
「わかりました」
心は同じといえどその身体は違う。無理はできなかった。
「夫婦岩のところで待っている。いいな」

「はい」
「じゃあ行って来い。帰ったら派手に宴会をやるからな」
「おやっさんの奢りで」
「当然だ。何でも頼め！」
「はい！」
ライダー達は大声で答えた。そして彼等に別れの挨拶をして駆けて行った。
「頼むぞ」
立花は彼等の背を見送って呟いた。それから他の者に対して言った。
「行こうか」
「はい」
皆それに頷いた。そして彼等は戦士達の帰る場所に向かうのであった。
「ここだな」
「ええ」
入口を見つけた。ゼクロスは他のライダー達の問いに頷いた。
「じゃあ行くぞ」
「おう」
彼等は頷いた。そして入口をこじ開け中へ入った。

バダン最後の日その四

内部は巨大な迷路となっていた。通路は狭く、暗かった。だがライダー達は順調にその中を進んでいった。彼等にはわかっていたのである。

首領が何処にいるか、彼等は直感でわかっていた。そして中を進んで行った。

遂に最深部に到達した。そこは暗闇に包まれていた。

「ここだな」

彼等はわかっていた。ここにあの男がいると。

「その通りだ、ライダー諸君」

それを証明するかのようにあの声が響いてきた。

「出たな！」

「フフフフフ」

首領は笑っていた。その声はこの暗闇の中から聞こえてきた。

「よくぞここまで来た」

「戯れ言を。何処にいるのだ」

「ほう、私の姿を見たいか」

首領はそれを聞いて楽しそうに声をあげた。

「私の姿は諸君等にはそれぞれ見せてきたが」

「馬鹿を言え。あれは全て貴様の分身だったのではないのか」

一号がそれを受けてそう問うた。

「ショッカー、そしてゲルショッカーの時もそうだったな」

二号はあの時の戦いを思い出していた。その時は一つ目の化け物であった。

「そして俺の前に姿を現わした時はドクロだったな」

「そういうこともあったかな」

首領はブイスリーの言葉を聞いてそううそぶいた。

「今となっては覚えていない話だ」

「だが貴様はその時は中にいなかったのではないのか」
ライダーマンはもうあの時のライダーマンではなかった。あくまで首領と戦う心ができていた。
「あのテープレコーダーか」
首領はそれについて言った。
「あれは私の仮の姿の一つ。声は出せなかったのでな」
「何!?」
「私の分身はあの心臓だったのだ。あの死神の姿もまた私だ。だがな」
彼は言葉を続けた。
「私は分身を操ることができるのだよ。ショッカーの時も姿もデストロンの時も姿も分身の一つ。あの死神の時はテープを通して言葉を送っていたのだ」
「そうだったのか・・・・・」
ライダー達はそれを聞いて長い間の謎を解いた。
「では呪博士は何だったのだ」
「あの時か」
エックスの問いにも答えてきた。
「呪博士もまた私の分身の一つだったのだ。彼はそれに全く気付いてはいなかったようだがな」
呪博士はこうした時に備えた首領の分身であったのだ。そして首領は彼を、彼自身をコントロールしていたのだ。
「それはガランダーの時も同じだ」
「やっぱり。では十面鬼も御前が」
「その通り」
首領はアマゾンの問いを肯定してみせた。
「あの男は面白いように私の言葉に乗ってくれたな。だが所詮はあの程度であった」
「クッ、ではアマゾンの皆は御前のせいで」
「それがどうしたというのだ?」

首領にとっては他の者の命などどうでもよいのだ。だからこそこう言えた。
「世界制覇の邪魔になる、それだけだ」
「おのれ」
「それはブラックサタンでも同じだったな」
ここでストロンガーが問うた。
「ご名答」
「やはりな」
「あのサタン虫は私が作り出したもの。そしてあの首領もまた私の分身であったのだ」
「では何故デルザーを怖れた!?あれもまた貴様の組織ではないか」
「私の分身はあくまで分身だということだ」
彼はそう答えた。
「私の真意を知りはしない。分身が不要になっただけだ」
「ではデルザーがあの時の貴様の真の組織だったのか」
「そういうわけでもない」
しかし首領はそれを否定した。
「どういうことだ」
「ブラックサタンもデルザーも互いに私の細胞から生まれ出たもの。だがブラックサタンは私の脳ではない。あくまで分身だっただけだ」
「では岩石の首領の中にいた貴様は」
「そう、あれは私の脳の一部だ」
首領は声に笑みをたたえてそう言った。
「恐竜に複数の脳があったのは知っているな」
「無論」
「だからあの姿だったのか」
岩石の首領の中にいたのは巨大な一つ目の頭脳であったのだ。一度見たら忘れられぬ無気味な姿であった。
「あれは私の脳の一部。デルザーの様な組織を操るにはそれしかなかったのでな」

デルザーは強力な改造魔人によって構成されている。その個々の力は他の組織とは比較にならないものであったのだ。それを陰から操るにはそれなりのものが必要だったのである。

「だがそれが敗れた。私は今度は諸君等に正面から当たろうと考えた」

「それがネオショッカーか」

スカイライダーが声をあげた。

「そうだ。かってのショッカーの様にせんとな。それは成功した」

「何を言うか」

しかしライダー達はそれに反論した。

「威勢がいいな」

だが首領は動じてはいなかった。平然とそう返した。

バダン最後の日その五

「だからこそ私も真の姿で乗り込んだのだ」
「あの怪獣が貴様の正体だったというのだな」
「そう、あれが私の実体だった。本来は暗黒星雲にいたのだがな」
「暗黒星雲」
「私の故郷だ。今となっては懐かしい」
「それでは貴様はそこから地球への侵略を目論んでいたのか、ショッカーの頃から」
「そうだ。だがネオショッカーも潰えた。諸君等の手によってな」
ライダー達はあの時のことを思い出していた。彼等はスカイライダーを中心として決死の覚悟で首領に立ち向かいそれに勝利したのであった。
「あの時は誰もが全てが終わったと思っただろう」
「・・・・・・・・・」
彼等はそれに答えなかった。その通りであったからだ。
「だが私の分身は故郷にも残っていたのだよ」
「テラーマクロと悪魔元帥か」
「そうだ」
スーパー1の問いに答えた。
「彼等もまた私の分身だったのだ。いざという時の為に残しておいてよかった」
「そして再び地球に」
「途中でテラーマクロと悪魔元帥が対立したのは予想外だったがな。所詮分身は分身ということか」
「クッ・・・・・・」
「だが実体をなくした私には仕方のないことだった」
「実体か」
「そうだ」

「では聞こう。今の貴様は何だ」
ライダー達はそれに気付いた。そして問うた。
「今俺達に話しかけている貴様は一体何だ!?実体がないのなら貴様は・・・・・・」
「知りたいか」
首領はライダー達の反応を楽しむ様に問うてきた。
「この場合は知りたくないと言ったら貴様も納得しないだろう」
「フフフ、わかっているではないか」
「ごたくはいい。早く今の姿を現わせ」
「よかろう」
首領はそれに答えた。
「ではライダー諸君、見るがいい。今の私の姿を」
何か得体の知れぬ影が動いた。
「これがこの世を支配する神の姿だ!」
影が姿を現わした。そう、それは影であった。
「な・・・・・・」
ライダー達はその姿を見て絶句した。その影は普通の影ではなかったのである。
身体は確かに黒い巨大な影であった。だがその頭はドクロであった。
しかも普通のドクロではない。額にもう一つ禍々しい目を持つドクロであった。
「フフフ、どうだライダー諸君、今の私の姿は。素晴らしいだろう」
「何と・・・・・・」
これにはライダー達も呆然としていた。実体ではないのは勘付いていた。しかしこの様な姿であるとは思いもしなかったからである。
「ネオショッカー崩壊の時私は実体を失った。だがこの魂までは死んではいなかったのだ」
「どういうことだ」
「そのままだ。今私が言ったままだ」

首領は嬉しそうに答えた。その黒いドクロの歯が無気味に動く。
「私は一度故郷に帰った。そしてテラーマクロと悪魔元帥を送り込んだのだ」
「それはさっき聞いた」
「まあ聞くがいい。諸君等とは長い付き合いだ。是非聞いてもらいたいのだ」
首領は彼等に対してそう言った。
「その間私は何もしなかったわけではない。そう、力を集めていたのだ」
「力を」
「そうだ。宇宙にある負の気。地球にもふんだんにあるだろう」
「憎しみや悲しみか。貴様が最も好きなものだな」
「フフフ、流石に察しがいいな」
「言うな、貴様はそれを取り込んだというのか」
ライダー達はその黒い姿に臆することなくそう問うた。首領を見上げ指差して問い詰める。
「宇宙にある負の力、美味であったぞ」
首領は答えるかわりにこう言った。やはり楽しむ様な声であった。
「その力を蓄えた私は地球に戻ったのだ。そしてかっての部下達をこの力で甦らせ再び部下とした」
「それがあの大幹部や改造魔人達か」
「手強かっただろう。諸君等の相手をさせ、我が世界征服の手足とするべくわざわざ呼び戻したのだからな」
「言うな。それがバダンだったというのか」
「それは言うまでもないことだと思うがな」
「クッ・・・・・・！」
ライダー達はそれを聞いて吐き捨てる様にして呟いた。
「何処までも諦めの悪い奴だ」
「私は諦めたりはしない。野望を実現させるまではな」
首領はこれに対してもこう答えた。

バダン最後の日その六

「それももうわかっていることだと思っていたがな」
「フン」
だがライダー達はそれに対して首を横に振った。
「そしてその負の力を集めたのが今の貴様だと言うのか」
「その通り」
首領は得意気にそう答えた。
「この影は全て負の力だ。どうだ、素晴らしいだろう」
「そうなってもまだ諦めないとはな」
だがライダー達はそれを認めようとはしなかった。
「だが首領よ、わかっているな」
そして彼を指差してこう言った。
「無論」
首領もそれに応える。
「貴様が、この世に悪がある限り俺達は、ライダーは戦う。そして貴様を倒す！」
「できるかな」
だが首領は鼻で笑ってこう返した。
「諸君等に今の私を倒すことが」
「出来る。いや」
彼等はここで言葉を変えた。
「必ずやる！行くぞ首領」
「ここで貴様を完全に倒す！」
「よかろう」
首領は笑いながらそれに応える。
「では来るがいいライダー諸君よ。今ここで諸君等を完全に滅ぼし我が野望の糧としてくれよう！」
「滅びるのは首領・・・・・・」

彼等はそう言いながら一斉に身構えた。
「貴様だ！」
そして跳んだ。こうして最後の戦いがはじまった。
ライダー達は跳び、それぞれ決しの攻撃を仕掛ける。だが首領は実体を持たない。その攻撃は全てすり抜けてしまう。
「おのれっ！」
首領はそれを見ながら笑っている。そして彼はゆっくりと構えた。
「今度はこちらの番だ」
全身からその黒い影を放ってきた。それでライダー達を貫かんとする。
「ヌッ！」
「ウォッ！」
彼等は左右に散った。そしてその黒い影をかわした。それはあの黒い光とはまた違っていた。
「これは一体・・・・・・」
「これこそが負の力だ」
首領はその言葉に対してこう答えた。
「宇宙にある負の気、これがそうなのだ」
「これが・・・・・・」
「そうだ。確かに私は実体を持たない。だがな」
首領は言葉を続ける。
「諸君等を攻撃することはできるのだ。この言葉の意味はわかるな」
「ヌウウ・・・・・・」
「さあ覚悟するがいいライダー諸君。そして我が生け贄となるのだ！」
首領はさらに攻撃を強めた。ライダー達はそれに対してその攻撃を避けるだけで手が一杯であった。
「どうすれば・・・・・・」
ライダー達は考えた。だがこちらの攻撃は通用しないのだ。打つ手がないと思われた。

しかし諦めるわけにはいかなかった。彼等がここで倒れては世界はどうなるのか。それは言うまでもないことであるからだ。

その間も攻撃は続く。やはりどうすることもできない。そう思われたその時であった。

「こうなったら・・・・・・」

ゼクロスが首領の前に出て来た。

「ゼクロス」

他のライダー達は彼を見据えてその名を呼んだ。

「ほう、貴様か」

首領も彼を見下ろしていた。その三つの目が無気味に動く。

「裏切りここまで来るとはな。やはりこうなったか」

「答えるつもりはない」

だがゼクロスはそれには答えない。

「行くぞ」

ただこれだけを言った。そして身構える。

「戯れ言を」

首領はそれを聞いてこう言った。

「何もできないというのがまだわからないようだな」

「それはどうかな」

しかしゼクロスは諦めてはいなかった。

「この世に存在するもので決して死なないもの、滅びないものは存在しない。それは首領、貴様もだ」

「ほお」

首領はそれを聞き面白そうに声をあげた。

「ではどうやって私を倒すつもりだ。攻撃が効かないというのに」

「それを今から見せよう」

ゼクロスはそう言うと構えた。そして全身に力を溜める。

その全身を赤い光が覆っていく。そして彼は跳んだ。

「喰らえ・・・・・・」

今赤い矢となった。そのまま首領に突き進む。

「ゼクロスキィーーーーーック！」
そして蹴りを放った。それは首領の黒い胸に向かう。
「フフフ」
しかし首領はそれを見ても微動だにしなかった。
「それがどうしたのだ。先程から言っておろう」
彼は絶対の自信があった。
「攻撃が通用しないということをな」
そうであった。彼はライダーの攻撃など全く恐れてはいなかったのだ。
それでもゼクロスは突き進む。今彼は赤い流星となっていた。
「効かないかどうかは」
飛びながら彼は言う。
「これでわかることだ！」
そして叫んだ。それと同時にその蹴りが首領の胸に突き刺さった。
「無駄だと言って・・・・・」
首領は言おうとする。だがその言葉が止まった。

バダン最後の日その七

「ムゥッ！」
何とその蹴りが胸に突き刺さったのだ。そして首領の胸に深くめり込む。
「ググ・・・・・・」
呻き声が漏れる。首領の動きが止まった。
ゼクロスはその反動で後ろに跳ぶ。そして着地した。
「やはりな。思った通りだ」
「どういうことだ！？」
他のライダー達は彼に問うた。
「はい、俺のこの赤い光のことは知っていますね」
「ああ」
彼等はゼクロスの説明を聞き頷いた。
「これは気なんです。俺の身体から発せられる気」
「気」
「そうです。これは実体じゃない。だから首領にダメージを与えることが出来たんです」
「そうだったのか」
ライダー達はそれを聞いて首領が苦しむのを理解した。
「そしてこれは俺だけじゃない。皆持っているんですよ」
「俺達も」
「そうです。それこそ」
ここで彼は仲間達の腰のベルトを指差した。
「そのベルトにある力です。その力を使えば首領を倒すことが出来ます」
「サザンクロスを破った時のようにか」
「はい。ですがそれは同時に行わなければなりません」
「同時に」

そう言いながら首領を見上げる。
「ええ。やりますか」
「無論」
彼等に反対する理由はなかった。
「方法があるのならそれに賭ける。例えその可能性が限り無くゼロに近くとも」
「それを必ず成功させる。それがライダーだ」
「はい」
ゼクロスは彼等の言葉に頷いた。
「ではやりましょう。そして今度こそあいつを」
「おう」
「わかった」
ライダー達はそれに頷いた。そして力を溜めはじめる。
その間に首領は態勢を整えていた。ライダー達を見下ろす。
「よくもやってくれたな」
その声は怒りに満ちたものとなっていた。
「最早容赦はせぬ。これで始末してやろう」
再び全身から闇を放つ。それはライダー達に襲い掛かる。
「来たな」
ライダー達はその闇を見ていた。しかし怯んではいなかった。
「行くぞ」
「ああ」
そして互いに顔を見合わせ頷き合う。その身体をそれぞれのベルトから発せられる光が包んでいた。今彼等はそれぞれの色の光に包まれていた。
「よし・・・・・」
一斉に跳んだ。そのままキックの態勢に入る。
「ライダァーーーーーーー・・・・・」
闇が迫る。しかし彼等はその闇さえも切り裂いた。
「何ッ！」

それを見た首領は思わず叫んだ。その間にもライダー達は矢となって彼に向かって来ていた。

「キィーーーーーーーーーッ！」

そしてその全身を蹴りが貫いた。額の第三の目にはゼクロスの蹴りがあった。

額が貫かれる。貫いたゼクロスはそのまま突き抜けて行く。

着地した。他のライダー達も同時に着地する。皆首領のその黒い身体を貫いていた。

「やったか！？」

彼等は振り向き首領を見やった。そこには漆黒の巨人がまだ立っていた。

「グオオオ・・・・・・」

しかしその闇は次第に弱くなっていた。額は貫かれ第三の目は完全に潰れていた。

「み、見事だライダー諸君。まさか実体を持たぬ私を倒すとは」

「言った筈だ、首領」

彼等は立ち上がり首領を見上げてこう言った。

「例えどの様な姿だろうと貴様を倒すと。俺達は貴様を倒しこの世に平和を取り戻す為に戦っているのだからな」

「フフフ、そうか」

首領はそれを聞き笑いながら言った。

バダン最後の日その八

「そうだったな。迂闊だったわ。実体を持たぬからといって油断していたわ」

彼は己に言い聞かすようにしてそう言葉を続ける。

「私の負けだ。私はまたしても諸君等に敗れたのだ」

「・・・・・・・・・」

ライダー達は何も語らない。首領の姿が次第に薄くなっているのを見守っているだけであった。

「だがな」

しかしここで首領の声の色が変わった。

「私は死なぬ。また諸君等の前に姿を現わすだろ。そして」

残された二つの眼がギラリ、と光った。

「今のこの姿が滅びようとも諸君等をこのまま生かして返すわけにはいかぬ。覚悟しろ！」

「ムッ！」

その瞬間首領の全身が闇となった。そして爆発を起こした。黒い闇の爆発であった。

「諸君等も道連れにしてやる。覚悟しろ！」

「クッ、逃げろ！」

「おう！」

その瞬間基地は爆発に包まれた。黒い闇に包まれてバダンは完全に崩壊した。

「おやっさん、あれは」

それを夫婦岩のところから見た滝はその黒い闇を指差して立花に言った。

「おう、わかっている」

立花はそれを見て答えた。

「やってくれたよ、あいつ等。遂にバダンを倒したんだ」

彼はそれを見て感慨深げにそう呟いた。
「遂にな。首領もとりあえずはこれで最後だ」
「ええ。しかし」
志度はそれを見ながら前に出て来た。
「彼等は無事でしょうか。あの爆発の中にいては」
「それは・・・・・・」
誰もがそれを受けて不安な顔になった。だがここで役が言った。
「大丈夫ですよ。心配いりません」
「何故ですか!?」
皆それを受けて役に顔を向けた。
「彼等はそう簡単には死んだりしませんよ。それは貴方達が最もよく御存知の筈です」
「しかし・・・・・・」
それはよくわかっているつもりであった。しかし今回ばかりは。
彼等は不安を隠せなかった。
「嘘だと思われるなら」
「はい」
まるで彼に誘われるようにして声をあげる。
「あれを御覧下さい、ほら」
役は前を指差した。皆それにつられ前に顔を向ける。
「おお・・・・・・」
皆そこを見て声を漏らした。そこに彼等がいたのだ。
「彼等は決して死にはしませんよ」
役は微笑んでそう言った。
「この世に正義がある限り。そして」
ライダー達はそれぞれのマシンに乗っていた。横一列に並んでこちらにやって来る。
「私達がいる限りね。ですから私達は彼等を安心して迎えればいいんですよ」
「ああ、その通りだ」

立花はそれを受けてこう言った。
「それが一番わかっている筈なんだがな。どうしても心配になっちます」
「俺もですよ。何でかなあ、いつも帰ってくるのに」
滝もであった。他の者も二人と同じ顔をしていた。
「それはですね」
役はそんな彼等に対して語った。
「皆ライダーが好きだからですよ。だから心配するのです。そう、それは」
彼は話を続ける。
「私達も心はライダーであるからでしょうね。だからこそ彼等が好きなんですよ」
しかしそれは誰も聞いてはいなかった。彼等は皆役を置いてライダー達の下へ向かっていた。
「おやおや」
役はそれを見て苦笑した。
「しょうがない人達ですね。人が折角話しているのに」
だがその顔は怒ってはいなかった。
「けれどこれでいいのでしょうね。私が言うまでもない」
怒るどころかその顔は微笑んでいた。そして彼も歩きはじめた。
ライダー達のところへ。
ライダー達は立花達の出迎えを受けていた。その顔も声も明るく、戦いに勝った男達のそれであった。

バダン最後の日　　完

2005・1・1

戦士達の旅立ちその一

戦士達の旅立ち　　バダンは遂に滅び首領も消え去った。世界には再び平和が戻ろうとしていた。だが戦士達に休息はないのだ。

「行くのか」

成田空港で立花達は戦士達を前にしていた。

「ええ」

彼等は答えた。そして立花達を見た。

「まだまだ世界には裏で企む奴等がいますから」

「それにあの首領のことです。また出て来るかも知れませんから」

「そうだな」

立花はそれを受けて頷いた。

「御前達らしいな。戦いが終わってもそうして次の戦場に向かう。そして新たな悪と戦うんだな」

「ええ」

ライダー達はその言葉に頷いた。

「それがライダーの宿命と言えばそれまでだが。辛いことだと思う」

「いえ」

だが彼等はその言葉には首を横に振った。

「それが俺達の使命ですから。今更何とも思わないですよ」

「そうですよ。だから気にしないで下さい。俺達はそれが当然だと思っていますから」

「そうか、そうだったな」

今度は逆に立花が頷いた。

「じゃあわしはこれ以上はあまり言うことはない。ただ御前達を見送るだけだ」

「はい」

「行って来い。そしてたまには帰って来いよ」
「わかってますよ」
彼等はそれには笑顔で答えた。
「おやっさんのコーヒーが飲みたくなったら何時でもね」
「おう、何時でも来い」
立花はそれを受けて笑顔でこう返した。
「とびきり上等のやつを御馳走してやるからな」
「楽しみにしてますよ。では」
「おう、行って来い」
まずは本郷が向かった。
「今度は何処だ」
「イランです」
彼は答えた。
「そこでルリ子さんと待ち合わせてるんです。あそこでテロリストの動きが活発化しているらしいですから」
「そうか。ルリ子のことを頼むぞ」
「はい、任せて下さい」
彼はそう言うと空港の奥に消えていった。次には一文字が発った。
「御前は何処だ」
「中国に行きます。西安の辺りで人を襲う怪物が出たと聞きましたんで」
「怪物がか」
「バダンの残党かも知れませんしね。調べて来ます」
「気をつけてな」
「後から俺も行くからな」
ここで滝も言った。
「楽しみにしているぜ。待っているからな」
「おう」
一文字も消えた。そして風見が足を進めた。
「俺はタンザニアに行きます」

「俺もです」
佐久間も言った。
「タンザニアには何があるんだ」
「あそこでカルト宗教の団体が蠢いているということなので。奴等を調べて対処する為に」
「そういえばあそこには得体の知れない化け物もいたな」
「ええ」
風見はそれに応えた。かってタンザニアにはムングワというネコ科の猛獣に似た怪物が夜な夜な人を襲っていたことがあるのだ。
「それの可能性もあります。ですから俺が行きます」
「よし、行って来い」
「はい」
風見も行った。結城も進みはじめた。
「俺は東南アジア、フィリピンに行きます」
「この前地震があったな」
「はい、それの救助に向かいます」
これもライダーの仕事の一つであった。
「俺達のこの力はそういった時の為にもありますから」
「その通りだ」
立花はそれを聞き頷いた。
「わかっているのならいい。思う存分やって来い。そして一人でも多くの人を救うんだ」
「はい」
結城もそれに返すようにして頷いた。

戦士達の旅立ちその二

「行って来ます」
「私もすぐに行きますよ」
竜が結城に対して言った。
「貴方も」
「はい。お一人じゃ何かと厳しいでしょう。人は多い方がいい。違いますか」
「確かに」
結城はそれを受けて微笑んだ。
「じゃあお待ちしていますよ。是非ともお願いします」
「はい、期待していて下さい。それでは」
「ええ」
結城も別れた。神も。
「御前が次に行くのは何処だ」
「キューバです」
彼は答えた。
「あの海で海難事故が相次いでいますから。原因を突き止めてそれを収めて来ます」
「海か。御前にはおあつらえ向きのところだな」
「ええ。それが何なのかはわかりませんがね」
彼は笑顔でそう答えた。
「何が出ようと恐れはしませんよ。それは安心して下さい」
「馬鹿野郎、しみったれたことを言うな」
立花はその言葉を笑い飛ばした。
「御前にはいつも心配させられてきたんだ。今更何を言ってやがる」
「あれっ、そうだったんですか」
「そうだよ。だから今更そんなことを言う必要はない。わかったな」
「はい」

「それに私も行くからな」
ここで志度が出て来た。
「博士」
「君一人じゃ何かと辛いだろう。それに」
「それに？」
「あの辺りの生態系にも興味があるんだ。科学者としてもお願いしたいのだが」
「ええ、いいですよ」
神はそれを快諾した。
「では行きましょう。確かに一人より二人の方が何かと都合がいいですし」
「うむ」
こうして神も去った。次はアマゾンであった。
「御前はやっぱりアマゾンか」
「違う」
だが彼は立花の問いに首を横に振った。
「アマゾン今度はアメリカに行く」
「アメリカ！？また意外だな」
「アメリカと言っても色々ある。アマゾン今度はロッキーに行く」
「ロッキーにか」
「うん。あそこで何かトカゲと人の合の子みたいなのが出ている。そして人襲っているらしい。アマゾンそれ本当なら許せない」
「そうだな」
それは立花も聞いていた。アメリカではチュチェカブラという謎の生物が蠢いているという噂があるのだ。
「それ調べる。そしてもしそれ本当ならアマゾンそいつやっつける」
「そうか、わかった。だが御前一人じゃないだろう」
「おう、俺らが行くよ」
ここでモグラ獣人が前に出た。
「アマゾン、行こうぜ」

「モグラ」
「俺ら達は何処でも一緒だろ。これからも」
「うん」
アマゾンはその言葉に頷いた。
「だからな。行こうぜ、一緒に」
「わかった。モグラ、頼む」
「こっちこそな」
二人は手を握り合った。そして彼等も発った。次は城であった。
「俺はロシアに行きます」
「ロシアの何処だ?」
「カフカスです」
「あそこか」
ロシアとイラン、トルコの国境である。山脈であり多くの民族がモザイク状に入り混じっている。ソ連の独裁者スターリンもベリアもカフカスの中の国グルジアの生まれである。彼等の行動や性格からもわかる通り過酷な歴史を歩んできている。
今も深刻な民族闘争が繰り広げられている。
「ええ、やることはわかっています」
「そうか。ならばいい」
彼はその紛争を止めるつもりなのだ。
「幸い俺は銃や爆弾では死にはしませんからね。丁度いいかと」
「だがあそこは辛いぞ」
「わかってますよ。けれど逃げるつもりもありません」
彼はそう言いながらニカッと笑ってみせた。
「あいつだって逃げなかったんですから」
「そうだったな」
立花はここであの女戦士のことを思い出した。
「しかし一人では辛いだろう」
「何、心配する必要はない」
ここで海堂博士が出て来た。

「私も行くからな」
「博士」
城と立花はそれを見て同時に声をあげた。

戦士達の旅立ちその三

「一人で行くつもりかい？幾ら何でもそれは格好つけ過ぎだよ」
「けれど」
「けれども何もないさ。君みたいな無茶する人間を放ってはおけない。それに」
「それに・・・・・・！？」
「私もライダーになりたいんだ。いいかね」
「ええ」
城はその言葉を受けて微笑んだ。
「ではお願いします。宜しく」
「ああ。これからもな」
そして城も新たな場所に向かった。今度は筑波が出た。
「俺はポーランドに行きます」
「わいも」
がんがんじいも名乗り出た。
「あそこで地震がありましたさかい。行って来ますわ」
「そうか」
立花と谷がそれを受けて頷いた。
「洋、張り切って行って来い」
「はい」
彼は谷に言われ快い返事を返した。
「がんがんじい」
「はいな」
「洋の足を引っ張るなよ。日本人の恥を晒すなよ」
「何で洋はんとわいでこんなに違うんかなあ」
がんがんじいはその言葉を受け思わずぼやいてしまった。
「洋、こいつを頼むぞ」
「え、ええ」

筑波も思わず苦笑していた。
「がんがんじい」
そしてそれを受けた形でがんがんじいに顔を向けた。
「はい」
彼の方はいささかふてくされていた。
「頼むよ。二人で頑張ろう」
「それでしたら」
その優しい声を受けて彼も機嫌を直した。そして二人は快く次に戦場に向かった。沖が次に出る。
「御前は何処に行くんだ」
「タヒチに行きます。今あそこも大変ですから」
彼は答えた。
「津波があったらしいな」
「ええ、それで。この腕が何かの役に立つでしょう」
彼はそう言いながら自らの腕を見た。
「人々の為に役立てるなら」
「そうだな。御前の腕は本来その為にあるからな」
谷はそれを見てこう言った。
「一也」
「はい」
「御前の本来の仕事をしてこい。そして多くの人を救ってくるんだ。いいな」
「わかりました」
彼はそれに答えた。
「それじゃあ俺も」
ここでチョロが出て来た。
「そうだな。一也だけじゃ何かと大変だろう。頼めるか」
「勿論ですよ、その為にここへ来たんですから」
彼はにこやかに笑ってそう答えた。
「俺一人じゃちっぽけなもんですけれどね」

「いや、それは違うよ」
だが沖はその言葉を否定した。
「確かに一人一人の力は小さい。けれどそれが集まって大きな力となるんだ」
「そうだ、一也の言う通りだ」
これには谷も賛同した。
「確かに俺達はちっぽけなものさ。けどな、それが集まって凄い力となるんだろうが」
「そういうものですか」
「そうだ。だからバダンも倒せたんじゃないのか。違うか」
「そう言われてみるとそうですね」
彼は戸惑った顔から明るい顔に変わっていった。
「じゃあ俺もその力の一部になってみせますよ。一也さん、それでいいですね」
「ああ、勿論」
「ではまた」
「おう、何時でも戻って来い」
沖も去った。こうして九人のライダー達は皆次の戦場へ向かって行った。
「行ったな、皆」
立花達は彼等が消えた道を見ながら感慨深げに呟いた。
「いえ、まだいますよ」
ここで声がした。
「おう、そうだったな。すまん」
彼等はそれを受けて声がした方を見た。そこに彼がいた。
「俺がいますから」
「御前はどうするんだ」
立花が問うた。
「そうですね」
村雨は考えながら言葉を出した。

戦士達の旅立ちその四

「俺も先輩達と一緒ですよ。バダンは倒しました。しかし」
「しかし」
「まだ俺の仕事は終わってはいません。いえ、永遠に終わらないかも知れませんね」
そう話す彼の顔は澄んだいいものであった。
「この世界にはまだまだ俺達の力を必要としている人達がいます。それは今までの戦いと今の先輩達を見てよくわかりました」
「そうか、わかったか」
「はい。そしてあの首領も何時復活するかわかりません。いえ」
彼の目が鋭いものになった。
「何時の日か復活するでしょうね。そして俺達の前に姿を現わすでしょう」
「死んだわけじゃないのか」
「確かにあの時死にました。けれどあの首領はおそらく」
彼は言葉を続ける。
「この世に悪の心がある限り何度でも甦るのでしょう。そしてまたこの世界を掌中に収めんとする筈です」
「だろうな。今までもそうだったからな」
「だからです。俺も行きます。そして世界を守りますよ。ライダーとして」
「ライダーとしてか」
立花はその言葉を受けてライダーという言葉を自分も口にした。
「ええ、ライダーとして」
村雨は答えた。
「これからも戦います。この世に生きる全ての人の為に」
「自分を捨てて」
役が問う。

「ええ、勿論です。それがライダーですから」
それにも答えた。その声には最早迷いはなかった。
「なら問題はありません。仮面ライダーゼクロス、いえ村雨良」
ここで彼は村雨を言い直した。
「これからの貴方の活躍を期待していますよ」
「有り難うございます」
「私は長野の戻りますがね。何かあったら遊びに来て下さい」
「はい」
「蕎麦と林檎ならふんだんにありますから」
「わかりました、楽しみにしています」
蕎麦と林檎を聞いた村雨の顔がほころんだ。そして笑顔で答えた。
「良君」
今度は伊藤が出て来た。
「立派になったな。本当に」
「いえ、それ程でも」
「あの時のことは覚えているな」
「勿論です」
彼等はバダンを二人で脱出した時のことを思い出していた。長いようで短い旅であった。
「全てはあの時からはじまりましたね」
「そうだ。何か遙か遠い昔のようだな」
「それでいてついこの間のことのようです。不思議ですね」
「ああ」
伊藤はそれに頷いた。
「本当にな。あの時はどうなるか本当にわからなかった」
「はい」
「だが必ず何とかなると思っていた。それは何故かわかるな」
「ええ、希望がありましたから」
「そうだ、希望だ」
伊藤はそれを聞いて満足したように頷いた。

「希望があった。私は常にそれと一緒にいた。だから君と一緒に行けたんだ」
「その希望とは」
「決まってるじゃないか」
伊藤はそう言ってにこりと笑った。
「君だよ」
そして村雨を指差してこう言った。
「俺が」
「そうだ、君自身がだ」
彼は村雨を見上げて微笑んでいた。
「君は希望だったんだ。バダンを倒しこの世に平和を取り戻す希望だ。そう、光だったんだ」
「光」
「そうだ。君はこの世を照らす光なんだ。仮面ライダーはね」
「大袈裟ですよ」
村雨は苦笑せずにいられなかった。
「俺一人じゃここまで出来ませんでしたから」
そしてこう語った。
「それは違うな」
しかし伊藤はその言葉を否定した。
「君達があればこそ、だ。だからこそバダンを滅ぼすことができたのだ」
「その通りだ」
立花もそれに同意した。
「御前達がいなければここまではとてもいけなかっただろう。世界はバダン、いやもうショッカーに征服されていただろうな」
「おやっさん」
立花ならではの言葉の重みがあった。多くの組織を向こうに回して戦ってきた男の言葉は重かった。

戦士達の旅立ちその五

「良、御前はわし等を導いてくれた光だ。御前達全員がな」
「そうだぞ、それは誇りに思ってくれ」
「はい」
「ライダーの誇りとしてな。世界を守る戦士としての誇りだ」
「この機械の身体にそれがある」
彼は自らの左手の平を見てそう呟いた。
「そう、その身体にだ。辛い宿命だと思ったこともあるだろう」
「ええ。それは認めます」
ライダー達は身体は人間のものではない。それに苦しんだ者もいた。
村雨も同じである。だが今彼はそれを苦しみとは思っていなかった。
「自らのこの運命を呪ったこともあります。しかし今は」
「違うのだな」
「はい、これは先輩達も同じだと思います」
彼はそれに答えた。
「今は誇りに思っています。この身体だからこそ戦ってこられたのですから」
「そうか」
伊藤はその言葉を温かい目で受けていた。
「君を改造したのは私だ。君には済まないことをしたと思っているのだが」
「いえ、博士が悩まれる必要はありません」
村雨はここでそう言った。
「それどころか今は博士に感謝しています」
「有り難う」
伊藤の目はその言葉でもう潤んでいた。

「君にそう言ってもらえるとは」
「ライダーだからこそ、ゼクロスだからこそバダンを滅ぼすことができましたから。そして人々を救う力を手に入れることができた。感謝してもし足りませんよ」
「済まない、本当に済まない」
彼は泣いていた。泣きながら村雨の両肩を持っていた。
「博士・・・・・・」
「バダンに協力し、君の身体を機械にした私を許してくれるなんて・・・・・・」
「許すも何も」
しかし村雨の声は温かいままであった。
「博士が、そして皆がいたからこそ俺は戦えたんです。許すだなんて」
「そうか、有り難う」
伊藤はそれ以上は言えなかった。ただ泣くだけであった。
「良さん」
今度は少女の声がした。
「ルミちゃん」
見ればルミが微笑んでいた。
「今度は何処へ行くんですか」
「そうだなあ」
彼は言われて考え込んだ。
「アイルランドに行って来る」
「アイルランドに」
「そう、それも北にね。あそこもまだ物騒だから」
言わずと知れた北アイルランド問題であった。まだ完全に解決はしていないのである。
「そう、気をつけて下さいね」
「ああ」
村雨は笑顔で答えた。

「ルミちゃんもな。今度会う時は何時になるかわからないけれど必ず会おう」
「ええ」
「そして・・・・・今度は」
「今度は？」
「笑顔で再会しよう。最初会った時みたいに無表情なやつじゃなくて」
「ええ、わかったわ」
ルミはそれを受けて微笑んだ。
「楽しみにしてますえ、良さんの笑顔」
「ああ、是非待っていてくれ。その時を」
村雨は言った。
「笑顔で」
そして微笑んだ。人間の、優しい微笑みであった。
「はい！」
ルミも笑顔で頷いた。そして村雨は彼等に別れを告げ背を向けて彼を必要とする場所に向かって行った。
「行ったか、皆」
立花は完全に消えた村雨の背をまだその目に見ながら呟いた。
「はい、行っちまいましたね」
隣にいる谷がそれに応える。二人の目も潤んでいた。
「次に会えるのは何時かわかりませんがここはあいつ等の活躍を温かく見守りましょう」
「ええ」
立花は彼に言葉に頷いた。
「御前達」
彼は窓に見える今まさに旅立とうとしている飛行機を見た。十機ある。
「行って来い、そして何時でも帰って来い。ずっと待ってるからな」
一機ずつ飛び立っていく。そして十機全てが飛び立った。瞬く間

に消えていく。
　戦士達は新たな戦場に向かう。戦いは終わることはない。だが彼等はそれでも戦い続ける、平和の為に、人々の為に。それは何故か。彼等が仮面ライダーであるからだ。

戦士達の旅立ち　　完

仮面ライダーＺＸ　～十人の光の戦士達～　　完

２００５・１・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4358f/

仮面ライダーＺＸ　　～十人の光の戦士達～

2011年4月28日01時26分発行